魔法少女リリカルなのはStrikerS　～とある新人の日常～

ラモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

【Ｎコード】
Ｎ０９４８Ｊ

【作者名】
ラモン

【あらすじ】
最強でも最弱でもない、それなりの強さの新人ハヤト＝ロックウェルが、それなりに活躍する魔法少女リリカルなのはＳｔＳ再構成小説です。
暇つぶしにでもどうぞ。
※ティアナルート、スバルルート共に完結。
連載を再開し、現在ギンガルート進行中……

番外編　『嗚呼、悲しきは独り身の辛さよ』（前書き）

※これは番外編です。
本編時系列とは関係ありませんし、本編の内容とも関係ありません。
第1部として投稿しておりますが本編を最新話として投稿するための処置で、別にこれから読み始めなければ駄目、という訳ではありません。

番外編　『嗚呼、悲しきは独り身の辛さよ』

「いやー、今日も寒いねぇ」

「男はー！！」

「外ぉーですー！！」

「いてぇっ！？」

通路を歩いていたら、いきなり何かを投げつけられた。

振り返ると、妙な踊りを踊ってる八神部隊長と、人間サイズのリインフォース曹長。

「う～～～」

へ○へ　　へ○へ

／　＼　バレンタイン！　＼／

2人して妙なポーズを取り出した。

●魔法少女リリカルなのは　～とある新人の日常～
番外編　『嗚呼、悲しきは独り身の辛さよ』

「どこの国の儀式ですかそれは！？」

「気にしたら負けや」

「負けです～」

「気になるわ！！」

とりあえずぶつけられた物を拾ったら、チョコレートだった。
ああ、そういや今日はもう２月１２日か。

「言われてみれば、確かにもうすぐバレンタインデーですねぇ」

「それがやな。
今年のバレンタイン、残念ながらミッドでは中止しようと思っとるんよ……」

「アンタどんだけ権力者ですか！？」

ミッド全体の行事を中止にさせるとか、管理局のトップだって難しいですよ！？

「そんな、自分に相手がいないからってやさぐれなくても……」

「失礼なっ！」

「まるで私とはやてちゃんが、幸せなカップルを心底羨ましがってるみたいにっ！！」

「……心底羨ましいんですね」

あれ？　なんだか涙出て来た。

「別に私達は、幸せなカップルだけを狙ってる訳じゃないですよ？」

「せや。カップル以外の人も参加できる、新しいバレンタインを提供しようと思っただけなんや」

「なるほど。確かに、みんな公平に楽しめるイベントになるのはいい事ですね」

訓練校時代の阿鼻叫喚の光景を思い出す。

チョコを貰った日には、暫く貰えなかった男連中から陰口の嵐だったもんなぁ。

「えーと、じゃあ具体的にどんなイベントになればいいと思ってる

んですか？」

「そうやなぁ……」

ちょっと考える仕草をする部隊長。

「まず、相手のいる幸せなカップルは……殺傷設定にしたなのはちゃんの全力全壊ローリングＳ．Ｌ．Ｂやな」

「いきなり死亡一択！？」

何でいきなりそんな物騒な選択肢しかないんだよ！
塵も残らずに消し飛ぶわ！！
つーかローリングって！　周りの人も巻き添え食らうじゃないか！！！

「やっぱりカップルが羨ましいんじゃないですか！　何でハッピーバレンタインに『死』一択なんですか！？」

「そんな日もあるもんや」

「ですです」

「ええい、何を悟ったように！　とにかくそれは却下！　他のアイデアは無いんですか！？」

「「えー」」

えーじゃないよ。つーかアンタら高町隊長を犯罪者にする気か！？

「じゃあ……殺傷設定にしたフェイトちゃんのライオットザンバー」

「変わってねぇえええっっ！！！」

「変わっとるわ！　なのはちゃんのＳ．Ｌ．Ｂと違って、ザンバーなら避けられる可能性もあるやろ！」

「一般人でそんこと出来る人なんてそうそう居る訳ねぇでしょう！！！」

つーか一般人どころか管理局員でも殆どいねーよ！！
シグナム副隊長ぐらいしか思い浮かばないよ！？

「おかしいですよ八神部隊長！　なんで折角のバレンタインに死に怯えなきゃいけないんですか！？」

「そういう運命の日って、必要だとリインは思うです」

「そや。リインはええ子に育ったなぁ」

「必要じゃねぇよ！！　何その怖すぎる日！？」

そんな日だったら一日中家に引き篭もるわ！！

「なんや、これでも嫌なんか？　じゃあ……シグナムとヴィータに襲われるってことでどや！」

「何故増やした！？　ある意味前の２つよりも凶悪だっつーの！！」

あの２人に襲われる位なら、銀行強盗とかに人質にされたほうが億倍マシだわ！！

「ハヤトはワガママです。それじゃあ、なのはさんもフェイトさんもシグナム達も来ないけど、恋人の居ない人達から一日中呪詛を吐きかけられる日でどうです？」

「陰湿になったし、明らかに恋人のいない人たちに肩入れされたイベントに！！　言ってて虚しくなりませんか貴女達！？」

「なんやなんや！　じゃあもうええわ！　恋人の居ない人達は一日中自室で『２４』全シーズン見る日でええよもう！」

「ですです！」

「いきなり不貞腐れないで下さいよ！」

頬を膨らませて廊下に寝転がった２人に叫ぶ。

何したいのこの人達!?　つーか仕事は!?

「……もうええわリイン。どうやらハヤト君には遠まわしに言ってもわからんみたいや」

「まあ、ハヤトに乙女心を読んで貰おうとしたリイン達が間違ってたです」

「ホンマやな。これだから童貞は」

「どどどどど童貞ちゃうわ!!」

いきなり酷いこと言われたし。
何なの今日のこの人達、滅茶苦茶疲れるんですけど。

「それじゃあ、私達の気持ちを伝えるですよ?」

「あんな、ハヤト君……」

な、何だ?　いきなり雰囲気が変わって……まさか!?
もうすぐバレンタインだから、私と付き合ってくださいって事なのか!?

「「ようするに幸せそうなカップルが憎くてしかたないんや（ですぅっ）!!!」」

「見てりゃーわかるわぁぁぁぁっ！！！」

ぬか喜びだよ！　すっげー恥ずかしいよ！
期待した俺の喜びを返せ！　慰謝料込みで！！

「相手の居ない私達かて、バレンタインデー限定の可愛くて楽しそうなチョコ売り場でワイワイいいたいんや！」

「誰に渡すとか渡さないとか、そういう話をしてキャッキャウフフしてみたいんですぅっ！！」

「いや……したいだけならすればいいじゃないですか。別に自分の為に買ったって、誰も文句言いませんよ？」

男が自分でやったらドン引きだけど、女性は最近自分用に買う人も増えてるって聞くし。

「そんな……じ、自分用に買うなんて虚しいやん」

「それに恥ずかしいですよ～。きゃっ／／／」

「アンタらがさっきまで垂れ流してた、ドロドロと暗い妄想に比べたらぜんっぜん虚しくないですよ」

あと今更そんな可愛い声だしても無駄ですよ。
さっきまでので、今の態度が全部嘘だってわかってますから。

「てゆーか部隊長、それ語りたいだけで俺に絡んできたんですか？」

「何や、私らと同じ彼女いない暦＝年齢のハヤト君なら、この作戦に同意してくれる思ったんやけどなぁ」

「失礼すぎるだろ！」

確かにその通りだけども！

「あ！　はやてちゃん、私達がハヤトにチョコをあげればいいですよ！！」

「おお！　その手があったなリイン！！」

「は？　俺っすか！？」

いきなり妙な提案に巻き込まれたよ。
まあ、チョコ貰えるならいいか？

「じゃあ今から買いにいこか！」

「です！」

「ほなハヤト君、バレンタインを楽しみにしててな～！」

「楽しみにしてるですよー！」

名前の通り、疾風の如く現れて去っていった部隊長。
リインフォース曹長も大分毒されてきたなぁ……マジ大丈夫なんだろうかこの部隊。

「でも、チョコ貰えるのは嬉しいかも」

人となりはともかくとして、部隊長も曹長も、かなり美少女だ。
経緯に目を瞑れば、２人の美少女からチョコを貰えるってことになる。
おお、ちょっとテンション上がってきた。

「早くバレンタインにならないかなー」

俺は２日後のことを思いつつ、スキップしながら自室に戻り、エリオに驚かれた。

そして２日後。

「……」

部屋でチョコを頬張る俺。
目の前には2つの豪華なチョコレート。
そして、『請求書　チョコレート代3万円（※日本円換算）』と書かれた一枚の紙。

「……何が悲しくてこんな豪華な本命風チョコを自腹で……」

あの2人、本当に売り場でワイワイしたかっただけなんだな。
期待した俺が馬鹿だったよ。

「……このチョコ、ちょっとしょっぱい」

「ハヤトさん、何して……あ、その、ごめんなさい」

エリオに見られて、凄く申し訳なさそうな顔で謝られた。
バレンタインがトラウマになった俺であった。
……くすん。

番外編　『嗚呼、悲しきは独り身の辛さよ』（後書き）

削除した後、「最初の方に割り込み投稿すれば、本編は最新話として投稿できんじゃね？」と思いつき、こんな形で再投稿しました。
どうも、ラモンです。

ミッドにバレンタインがあるのかわかりませんが、とりあえずあるという事でひとつ。
ヒロインズからのチョコ？
羨ましい……じゃなくて、ラブコメなんか書きたくない……でもなくて、ハヤトがいい思いしたら面白くないので貰わせませんよ。
スバルは自分用には沢山買いそうですけどね（笑）

番外編２　『絶対に笑ってはいけない機動六課　序盤戦』（前書き）

※注意
これは番外編です。
本編時系列とは関係ありませんし、本編の内容とも関係ありません。

今回は会話文のみで書いてあるので、ちょっと読みにくいかもしれません。
また、この話は１０割がネタとノリで構成されていますので、深く考えずに読んだほうが幸せになれると思います。

番外編２　『絶対に笑ってはいけない機動六課　序盤戦』

これは、ある日突然部隊長室に集められ、

「明日、新人フォワード５人にルーテシアちゃんを加えた６名で、『絶対に笑ってはいけない機動六課』やってもらうで！」

と宣言された俺達６人の戦いの記録。
その全容を記した記録である。

※絶対に笑ってはいけない機動六課、ルール。
参加者はハヤト、ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、ルーテシアの６人。
笑ったら八神はやて特製『ぶっ叩君２１号』でお尻を叩かれる。

あとはまあ、皆さんもよく知ってるガ○使と一緒です。
ちなみに、叩く要員はロングアーチ＋ヴァイス。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
番外編２　『絶対に笑ってはいけない機動六課　序盤戦』

なのは「じゃあ、今日は皆はやてちゃんが言ってた企画をやるから、頑張ってね」

ハヤト「できれば頑張りたくないです」

ティアナ「右に同じです」

なのは「にゃはは……ま、まあそんなに酷いことにはならないと思うから、ね？」

ハヤト「……まあ、隊長がそう言うなら」

なのは「うん。じゃあ、私は仕事があるから行くね」

スバル「え？　あの、あたし達はどうしたら……」

なのは「もう少ししたら、シャーリーが放送で指示を出してくれると思うから、
　それまでは皆ここで待機してて」

エリオ「あ、はい。わかりました」

なのは「……あ、そうそう」

全「？」

レイハ《貧乳は希少価値だ！　ステータスだ！》

シャーリー『ハヤト、ティアナ、スバル、アウトー』

ハヤト「貧乳ってｗｗｗ　アンタ胸ないじゃないですかレイハさんｗｗｗ」

ティアナ「ちょっと！　あたしは笑ってない！　笑ってないってばあああああっっ！！」

スバル「あはははは！ｗｗｗ」

バチーン！

エリオ「……危なかったね、キャロ、ルーテシア」

キャロ「うん。ちょっと笑いそうになっちゃった」

ルーテシア「……危ない危ない」

なのは「それじゃあ、皆頑張ってね」

レイハ《幸運を祈ります》

スバル「……行っちゃった」

ハヤト「いってぇ……くそ、俺笑ってねーっつーの」

ティアナ「あんたは笑ってたわよ、完璧に」

ハヤト「ふざけんな！　笑ってにゃ……笑ってなかったっつーの！」

全「……」

スバル「……プフッw」

『スバル、アウトー』

スバル「もおおおおおお！！　噛まないでよぉぉぉっっ！！」

ハヤト「すまん、口先だけならにゃんと……何とでも言うから許して」

ティアナ「……くっw」

『ティアナ、アウトー』

ティアナ「あんたマジでふざけてんじゃないわよ！　痛ぁっ！？」

ハヤト「謝ったのに怒られたでござるよエリオ殿」

エリオ「……そう、ですか」ふるふる

キャロ「ハヤトさん、わざとは駄目ですよ」

ルーテシア「……ずるい」

ハヤト「皆が俺を責める、誰か助けて」

スバル「……」

ハヤト「誰か助けて」

スバル「っ」

ハヤト「だ、れ、か、た、す、け、て♪」

スバル「ふはっｗｗ」

『スバル、アウトー』

スバル「何で繰り返すのさあああっｗｗｗ　いったぁいっ！！」

ハヤト「グッジョブ俺」

スバル「ハヤトの馬鹿！」

『はーい、それじゃあ皆事務仕事の時間だから事務室に行ってねー』

ティアナ「事務室……」

スバル「と、とりあえず行こうか？」

エリオ「あんまり行きたくないですけどね……」

～事務室～

ティアナ「事務仕事って言ってたけど、書類が無いじゃない」

ハヤト「誰かが持ってくるんじゃね？」

スバル「つまり、次の仕掛け人はその人ってことだよね……」

ハヤト「注意しないとな」

ガラッ

シグナム「皆のもの、揃っているでござるか」

ハヤト「ぶふっ！ｗｗ」

キャロ「……ふふっｗ」

『ハヤト君、キャロ、アウトー』

ハヤト「シグナム副隊長に『ござる』は似合いすぎだろｗｗｗｗ
いってぇっ！」

キャロ「ご、ござるってｗｗござるってｗｗｗ　いたぁっ！」

シグナム「静かにするでござるよ。それでは、これが書類でござる」

ティアナ「どうも……ってコレ」

スバル「……」フルフル

ハヤト「何故に巻物」

スバル「ぶっｗｗｗｗ」

『スバル、アウトー』

スバル「我慢してたのに！　我慢してたのにぃぃっ！　きゃうんっ
！！」

シグナム「それとエリオ、お前の分はこれでござるよ」

エリオ「え？　これって……遊戯○のカードなんですけど……」

ティアナ「……っ！」

ルーテシア「……ｗ」

シグナム「文句があるでござるか？」

エリオ「いえ、無いですけど……あ、バーサーカー○ウル……」

『ハヤト君、ティアナ、スバル、キャロ、ルーテシアちゃん、アウトー』

ハヤト「何でいちいち言うんだよｗｗｗ　痛ぇっ！」

ティアナ「しかもｗｗなんでバーサーカーソウ○ｗｗｗ　いったぁっ！！」

スバル「ドローしなくちゃｗｗｗ　いだっ！」

キャロ「昨日見たばっかりだからｗｗｗ　あうっ！」

ルーテシア「……不覚、っ！」

ハヤト「くそ、別に笑うとこでも無かったのに笑っちまった」

キャロ「昨日、皆で見たばっかりだったのが効きましたね」

ルーテシア「……見なければよかった」

ガラっ

八神「……」きょろきょろ

ティアナ「……？」

八神「……」

ルーテシア「？」

八神「そげぶ！」

『ハヤト君、アウトー』

ハヤト「……くっそ、やられた」

八神「……」じー

ハヤト「……どっか行ってくださいよ部隊長」

八神「……」じー

キャロ「ハヤトさん、狙われてますね」

ティアナ「こっちに被害がこないならいいわよ」

スバル「だね」

ルーテシア「……生贄」

八神「……ハヤト君、しりとりや、そば」

ハヤト「え？　ば、バイク」

八神「くるみ」

ハヤト「味噌」

八神「そげぶ！！（裏声）」

『ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、ルーテシアちゃん、アウト！』

ティアナ「何で味噌なのよ！　いったぁっ！？」

ハヤト「マジですまん」

ティアナ「他になにかあったでしょ！！」

ハヤト「ネタを振られたら応えないといけない気がして……」

ティアナ「応えんでいい！！」

スバル「次は気をつけてよ？　ホントにお願い」

エリオ「というか、裏声って……」

ルーテシア「……卑怯」

八神「……」じー

キャロ「ま、まだ居ますよ」

ハヤト「これ以上被害が広がる前に帰ってほしいんだが……」

八神「！」

ハヤト「？」

八神「そこに居たんやな！　逃がさへん！　逃がさへんで！！」

ガシャーン！

ティアナ「ちょっ！？」

ハヤト「ここ、３階だよな？」

八神「このっ！　このっ！　あ、ちょっ、５人がかりとか卑怯やで！！」

ティアナ「……っｗ」

キャロ「っ……ｗ」

八神「中々やな、だけどユニゾンすれば――ちょっ、ごめんごめんごめん！」

エリオ「な、何と戦ってるんでしょう」

『ティアナ、キャロ、アウトー』

ティアナ「エリオぉぉっ！！　痛っ！」

キャロ「エリオ君の馬鹿ぁっ！　ひゃうっ！！」

エリオ「ご、ごめんなさい！」

シグナム「えー、ここで突然だがお前達の書類には、
サインとしてとある文字を書いてもらうでござる」

ハヤト「ホントに唐突ですね」

ルーテシア「……多分、何かある」

シグナム「書いてもらう文字はコレでござるよ」

ニート侍

『ハヤト君、ルーテシアちゃん、アウトー』

ハヤト「それは無いｗｗｗそれは無いですってｗｗｗ　ふんもっふ

！！」

ルーテシア「悪意しか感じない……ぃっ！」

ティアナ「危なかった……」

スバル「ハヤトが先に笑ってなかったら、多分笑ってたよ……」

エリオ「というか、シグナムさんは何も思うところが無いんでしょうか」

シグナム「……む、呼び出しか。では皆書類を片付けておくでござるよ。

後でとりにくるでござるからな」

ガラッ

八神「シグナム！　じゃなかったニート侍！
スカリエッティが半裸で脱走したらしいで！！」

『全員、アウトー』　ばちこーん！

ハヤト「いつつ……何なんだよ半裸のスカリエッティって……」

ティアナ「しかもわざわざニート侍って言い直してたし……」

エリオ「い、言わないでくださいよ。
まだちょっと危ないんですから……」ふるふる

ハヤト「あ、悪い」

エリオ「いえ」

ハヤト「……」

エリオ「……」

ハヤト「……半裸のスカリエッティ」

ティアナ「……ニート侍」

エリオ「……っw」

ハヤト「ぶふっｗｗ」

ティアナ「……ふっw」

『ハヤト君、ティアナ、エリオ、アウトー』

エリオ「ハヤトさんにティアナさぁぁぁんっっ！　うぁっ！」

ハヤト「悪いｗｗ　ふぬぉあっ！」

ティアナ「ごｗｗめｗｗんｗｗ　あいたぁっ！！」

ルーテシア「……自爆」

キャロ「あ、八神部隊長とシグナムさん、居なくなってますよ」

スバル「ホントだ～。とりあえず、ひと段落したのかな？」

ハヤト「だといいんだが」

フェイト（外）『そ、そげぶ！』

『全員、アウトー』　べちーん！

ルーテシア「……油断」

ティアナ「まさかフェイトさんがくるなんて……」

ハヤト「予想の斜め上すぎるだろ……」

キャロ「フェイトさん、恥ずかしいならやらくていいのに」

スバル「照れてたのが余計に面白かったね」

エリオ「はい」

ガラッ！

八神「そげぶや！　そげぶを探すんや！！」

ガラッ、ピシャッ！

『全員、アウトー』

ハヤト「卑怯すぎるだろｗｗｗ　がぁっ！」

ティアナ「探すってｗｗ台詞を探せるわけないでしょｗｗｗ　あうっ！」

スバル「そげぶｗｗｗそげぶｗｗｗ　いきゃぁっ！」

キャロ「あははｗｗｗ　いっ！！」

ルーテシア「……我慢とか、無理。っ！！」

エリオ「ていうかそげぶって何ですかｗｗｗ　いった！！」

ハヤト「……くっ、部隊長には要注意だ。いつどんなネタがくるか予想できん」

ティアナ「いたたた……そうね、これ以上お尻が痛くなったら堪んないわ」

スバル「お尻が？」

ティアナ「お尻が」

スバル「お尻が？　……くっｗ」

『スバル、アウトー』

ハヤト「何自爆してんだよ」

スバル「あたた……つい」

ティアナ「人を笑わせようとして自爆してたら世話ないわね」

スバル「ごめーん」

エリオ「……ハヤトさん」

ハヤト「ん？」

エリオ「そげぶって、何ですか？」

ハヤト「ああ、とある小説の台詞でな――」

シグナム（外）「俺のバトルフェイズはまだ終了してないＺＥ！！」

シャ『全員、アウトー』　にょっろ～ん！

ルーテシア「……まさかのバーサーカーソ○ルネタ」

ハヤト「忘れた頃に前のネタを振るとか、シグナム副隊長マジ鬼畜」

エリオ「僕、カード持ってるから余計にきつかったですよ」

キャロ「昨日見たばっかりだから、余計に……」

スバル「あれはズルイよ……」

ティアナ「まさかシグナム副隊長があんなこと言うなんて、予想外すぎたわ」

ハヤト「ドロー！　モンスターカードのくだりは最高だったよな」

エリオ「お、思い出させないで下さいよ……」

ハヤト「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」

『エリオ、キャロ、ルーテシアちゃん、アウトー』

ルーテシア「……ハヤト、死んだらいいのに、いっ！」

キャロ「ハヤトさんなんか嫌いですぅぅっ！　痛いっ！」

エリオ「何で言うんですかぁぁっ！　いあっ！！」

ハヤト「計　算　ど　お　り」

ティアナ「何やってんのよ馬鹿」

スバル「小さい子を虐めたら駄目だよ」

ハヤト「マジすまんかった。とりあえず書類片付けちまおうぜ」

エリオ「あの、僕はどうしたら……」

ティアナ「とりあえず、種族ごとに仕分けしたらいいんじゃない？」

ハヤト「……属性ごとの方がよくね？」

ティアナ「そうかしら……」

ハヤト「……」

ティアナ「ふっｗ」

ハヤト「くっｗ」

『ハヤト君、ティアナ、アウトー』

ティアナ「何の話してんのよあんたはあああっ！　いったぁっ！！」

ハヤト「いや、今のは俺悪くねぇだろ、ぐふぅっ！！」

スバル「2人とも何してるの……」

ハヤト「いや、属性でわけるか種族でわけるかって話を……」

スバル「どっちでもいいよ……」

エリオ「あ、魔法カードはどうしたらいいでしょう？」

ハヤト「適当に分けておけ、この蟲野郎！！（遊○ボイス）」

スバル「……っｗｗｗ」

『スバル、アウトー』

スバル「ズルイよ！　ズルイよぉぉっっ！　いぅっっ！！」

ハヤト「俺とティアナがやられたんだ、仲間のお前も痛みを分かち合うべきだろう」

スバル「うぅぅ……」

エリオ「そ、そうなのかな」

ルーテシア「……ハヤトが言うから、違うと思う」

キャロ「私も、そう思うかな……」

ハヤト「何を仰る兎さん。仲間とは、辛さや悩みを分かち合う存在なのだよ」

スバル「こんな辛さはいらないよぉ……」

ティアナ「てゆーか、そろそろ足の引っ張り合いはやめない？」

ハヤト「確かに。これ以上はキツいな、まだ先は長いんだし」

スバル「そだね。もう笑わないようにしないと！」

ガラッ

なのは「いいぜ、てめえが何でも思い通りに出来るってんなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！！」

ガラッ　ピシャッ！

『ハヤト君、ティアナ、スバル、キャロ、ルーテシアちゃん、アウトー』

ハヤト「ちっくょおおおおおっっ！！　うぎぅっ！！」

ティアナ「何で原文そのままなんですかなのはさん！　ぅきゃんっ！」

スバル「あはははははは！ｗｗ　あはははははは！ｗｗ　いったぁぁっ！！」

ルーテシア「しかも声が女だから違和感がすごい……んっ！！」

キャロ「ずるいですよぉっｗｗｗ　きゃあっ！！」

エリオ「？」

ハヤト「いってぇ……くそ、元ネタ知らないエリオを羨ましいと思ったのは初めてだ」

ティアナ「ホントね。見なきゃ良かったわ……」

スバル「あはははは！ｗｗ　あはははは！ｗｗ」

『スバル、アウトー』

スバル「あはははは！ｗ　あはははは！ｗ　いたぁっ！？」

ハヤト「……どんだけツボってんだアイツ」

ティアナ「逆に冷静になれたから助かるわ」

キャロ「た、確かに……」

ルーテシア「……助かる」

ハヤト「くそ！　とりあえず書類仕事だ。仕事してる間はそっちに集中できる！
　エリオは皆から書類をちょっとづつ分けて貰え！」

エリオ「は、はい！」

～2時間後～

スバル「終わったぁ～！」

ハヤト「仕事中は、さすがの部隊長達も仕掛けてこなかったか」

ティアナ「その分後が怖いわよね……気を引き締めていかないと」

キャロ「ですね」

『みんなー。仕事終わったらお昼ご飯ですよー、食堂に集合ー！』

スバル「ご飯！」

ハヤト「そういや腹減ったな。もう昼だったか」

ティアナ「それじゃ、移動しましょうか」

エリオ「特になにも無いといいですね」

ガラッ

ザフィーラ「わんわんお！　わんわんお！」

『ハヤト君、アウトー』

ハヤト「何でザフィーラが居るんだよｗｗｗ　わっふぅっ！！」

ティアナ「ドアを開けたところにいるなんて……」

スバル「しかも何故犬……ザフィーラって狼でしょ？」

ザフィーラ「……聞くな」

エリオ「ザフィーラも、苦労してるんだね」

ザフィーラ「ああ。ではな」

ハヤト「それだけの為にきたのかよ！！」

キャロ「えと……と、とにかく食堂に行きましょうか」

ルーテシア「……お腹すいた」

～食堂～

ハヤト「くっそ、ザフィーラにしてやられた」

スバル「あたしもちょっと危なかった～」

スカリエッティ「おばちゃん、私はカレーライス、福神漬け大目にね」

『全員、アウトー』　ばちぃんっ！

ティアナ「何でいるのよ……」

ハヤト「しかも別に半裸じゃなかったし」

エリオ「……っ、半裸って言わないでくださいよ」

ハヤト「あぁすまん。ちょっと気になってたからさ」

ルーテシア「ドクター、白衣でカレーは危険……」

キャロ「はねちゃうもんね」

シャマル「はーい、じゃあ皆にご飯を配りまーす。はい、キャロ」

キャロ「わあ、おいしそうです」

シャマル「ハヤト君にはこれね」

ハヤト「あ、どうも……ぶふっｗｗｗ」

エリオ「これは……っふｗｗｗ」

ティアナ「食品サンプルｗｗｗ」

『ハヤト君、ティアナ、エリオ、アウトー』　べちーん！

ハヤト「食えねーじゃねぇかよおおおおおっっ！！」

シャマル「ティアナはこれね」

ティアナ「ありがとうござ……ぷふっｗ」

スバル「卵だけｗｗｗ」

『ティアナ、スバル、アウトー』

ティアナ「何で卵だけなのよもぉぉっ！　きゃんっ！！」

スバル「ゆで卵が１０個ｗｗｗ　いったい！！」

エリオ「僕とルーテシアのは普通だね」

ルーテシア「オムライス、おいしい……」

スバル「あれ？　シャマル先生、あたしのは何ですか？」

シャマル「スバルのはこれ」

スバル「これって……」

ハヤト「カレーだな」

エリオ「カレーですね」

ティアナ「別に何の変哲もないわよね」

ハヤト「ネタは俺とティアナだけか……」

ティアナ「ゆで卵だけとか飽きるわ……」

ハヤト「俺に1個くれよ。腹減ってんだ」

ティアナ「いいわよ、はい」

スバル「……」もぐもぐ

エリオ「おいしいね、キャロ、ルーテシア」

ルーテシア「おいしい」

キャロ「うん、おいしいね」

スバル「……あ、ねえハヤト」もぐもぐ

ハヤト「？　どうしたスバル」

スバル「ビーフシチューだったよ、コレ」もぐもぐ

『ハヤト君、ティアナ、エリオ、キャロ、ルーテシアちゃん、アウトー』

ハヤト「いちいち報告すんなｗｗｗ　んぬぉっ！」

ティアナ「馬鹿スバル馬鹿スバル馬鹿スバルぅっ！　いっ！！」

エリオ「しかも何で食べながら言うんですかｗｗｗ　くあっ！！」

キャロ「もうお尻いたいよぉ……ひぅっ！！」

ルーテシア「スバルも、死ねばいいのに……いぅっ！！」

スバル「ご、ごめん」もぐもぐ

スカリエッティ「だからおばちゃん！！
それはカレーじゃなくてビーフシチューだってば！！」

『全員、アウトー』

ハヤト「ネタかぶせてんじゃねぇよスカリエッティぃぃ！！ｗｗｗ
あがぁっ！！」

ティアナ「絶対！　次の取り調べでボコボコにしてやるぅぅぅっ！
いったぁっ！！」

スバル「ビーフシチューｗｗｗ　ビーフシチューｗｗｗ　ぃきゃあっ！！」

エリオ「どっちでもいいじゃないですかｗｗｗ　いたぁっ！！」

キャロ「も、もういやぁぁっ！！　きゃあんっ！！」

ルーテシア「ドクター……後でガリューでボコボコにする……ぅぁっ！！」

『はい、じゃあ前半戦はここまで。残りはご飯食べてからねー』

全「もういやだーーーー！！！」

番外編２　『絶対に笑ってはいけない機動六課　序盤戦』（後書き）

お気に入り登録が１００件を突破したので、嬉しくなって突発的に書きました。
どうも、ラモンです。

ガキ○は大好きで、毎年大晦日には欠かさず見ています。
突発ネタで何しようかと思った時に真っ先にこれが思いついて、録画したＤＶＤとかを見て、爆笑しながら書いてました。

本物の雰囲気が少しでも出せてたらいいなぁ。

※追記。
作者が驚くぐらいに好評だったので、全部書こうと思います。
本編の合間を縫ってちょくちょく更新していきますんで、よかった読んでくださいね。

番外編３　『絶対に笑ってはいけない機動六課　中盤戦』（前書き）

何か妙に好評だったので続けてみました。

番外編3　『絶対に笑ってはいけない機動六課　中盤戦』

シャーリー『さーて皆、お昼ご飯も終わったところで！
六課恒例“お昼の一発芸”タイム！！』

ハヤト「お昼の一発芸？」

ティアナ「そんなのあったかしら？」

エリオ「無かったと思うんですけど……あ、良く見たらステージとかありますね」

ハヤト「……誰が来ると思う？」

スバル「多分、部隊長じゃないかなぁ」

ルーテシア「ドクターの可能性も、ある」

『じゃあ最初はこの子！　お母さんは魔王！　ロリっ娘聖王ヴィヴィオー！！』

全「ヴィヴィオっ！？」

ヴィヴィオ「は～い♪」

ハヤト「……マジでヴィヴィオだよ。あいつ、一発芸なんて持ってたか？」

キャロ「見たことないですけど……」

ヴィヴィオ「ダジャレをいいまーす」

ハヤト「ダジャレときたか」

ティアナ「まあ、ヴィヴィオならそんなに警戒しなくてもいいかしらね」

ヴィヴィオ「布団が、ふっとんだ～っ！」

全「……」し～ん

ヴィヴィオ「？」

ティアナ「（これは……）」

スバル「（凄く……）」

ルーテシア「（寒すぎる）」

ヴィヴィオ「……ふぇ」（涙目）

ハヤト「あ、あはははは！　お、面白いなぁ！！！」

ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、ルーテシア「！？」

『ハヤト君、アウトー』

ハヤト「あはははは！　ヴィヴィオ！　面白い！　面白いぞぁがぐっ！？」

エリオ、キャロ「（お、お兄さんの鑑だ！）」

ルーテシア「（ハヤト、ちょっとかっこいい）」

ヴィヴィオ「えへへ～。ハヤト、面白かった？」

ハヤト「あ、ああ。もっと聞きたいとこだけど、俺らは仕事に行かなくちゃいけない。
　だから、それはまた今度、な？」

ヴィヴィオ「うん！」

ティアナ「（部隊長、兄馬鹿なハヤトの弱点を突いてくるなんて…
…卑怯すぎる）」

スバル「（ハヤト、偉いよ）」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
番外編３　『絶対に笑ってはいけない機動六課　中盤戦』

～事務室～

ハヤト「午後もま～た事務仕事かぁ」

スバル「またシグナム副隊長が来るのかな？」

ルーテシア「私達が慣れたから、多分違う」

エリオ「でも、六課の前線メンバーは全員出ましたよね？
となると誰が……あれ？　どうしたの、キャロ」

キャロ「え？　あ、うん。何か私の机の上に、こんなのが……」

ハヤト「ボタン？」

キャロ「……どうしましょう？」

ハヤト「押すしかなかろうもん」ポチッ

ティアナ「ちょっ！？」

『スバル、アウトー』

スバル「えぇぇぇっ！？　ちょ、待って待って待って……あいたぁぁっ！？」

ハヤト「……ほほう」ニヤリ

ティアナ「！　ハヤト、そのボタンを離しなさい！！」

ハヤト「これで俺はスバルに対して絶対的なアドバンテージを握った訳だな」

スバル「！？　は、ハヤト！　そんなの卑怯だよ！　極悪人！　卑怯者！！」

ハヤト「ほう？　俺様にそんな口を利いていいのかなぁ？」

スバル「あ……ちょ、ちょっと待って！！」

ハヤト「待ちません。ポチっとな」ポチッ

『ハヤト君、アウトー』

ハヤト「なん……だと……？」

ルーテシア「ランダムだった。自業自得」

キャロ「だね」

ティアナ「いい気味ね」

スバル「ばーかばーかｗｗｗ」

『スバル、アウトー』

スバル「えっ！？　あ、こ、これは違うよ！　違うってばあああっ！！」バチーン

ハヤト「……何してんのお前」

スバル「うぅぅ、ハヤトのせいだよ～」

ハヤト「知らんがな」

ティアナ「馬鹿2人で何してるのよ、全く。
　ほら、そのボタンはどこかに置いておきなさい」

ハヤト「へーい」

ガラッ

ギンガ「……」

スバル「あ、ギン姉だ」

エリオ「午後の担当は、ギンガさんなんですか？」

ギンガ「……どうも、ジョン＝ホセ＝ピエール＝バティストゥータです」

『全員、アウトー』

ハヤト「だｗｗれｗｗだｗｗよｗｗ　あばかむっ！！」

ティアナ「まさかギンガさんがｗｗｗ　意表を突かれったぁっ！？」

スバル「名前が長いｗｗ　あいっ！」

ジョン＝ホセ＝ピエール＝バティ（ｒｙ

「午後の分の書類は、皆の机の引き出しに入ってるから、各自で確認してね」

キャロ「あ、名前以外は普通なんですね……」

エリオ「よかった、かな？」

ハヤト「引き出し……ね、何か嫌な予感するわー」

ティアナ「確かに」

ハヤト「まあ、開けてみないと始まらないか」

ガラガラ

【まそっぷ】と書かれた紙

『ハヤト君、アウトー』

ハヤト「……なぜにまそっぷ」

ティアナ「ネタ解る人いるの？　これ」

スバル「てゆーか、ハヤトアウト多すぎじゃない？」

エリオ「狙われてるんでしょうね」

ルーテシア「ハヤト、笑いの沸点低すぎ」

ハヤト「まそっぷは仕方ないだろう！」

ティアナ「はいはい。じゃあ、次はあたしが開けるわね」

スバル「気をつけてね、ティア。何がくるかわからないし」

ガラガラ

【まそっぷ】と書かれた紙

『ハヤト君、アウトー』

ハヤト「俺のこと狙いすぎだろうが！！」

キャロ「まそっぷに凄く弱いですね、ハヤトさん」

ルーテシア「……覚えて、おく」

ハヤト「マジで勘弁しろルールー！！」

スバル「よし、次はあたしが行くよ」

ハヤト「（まそっぷがきても、もう大丈夫だ）」

ガラガラ

アギト&リィン「モス〇を、モ〇ラを呼んでください」

『ハヤト君、アウトー』

ハヤト「小美人ｗｗｗ　誰がわかるんだよこのネタｗｗｗｗ　おふんっ！？」

ルーテシア「アギト、何してるの？」

アギト「あたしもネタはわかんねーけど、はやてがこうしろって」

リィン「言われたですよー」

ハヤト「部隊長めぇぇぇっ！！　ぜってー俺だけ狙ってやがる！！」

エリオ「ネタがわからなくて、凄く助かった気がします」

キャロ「私も」

スバル「てゆーか、わかってるのがハヤトだけって……」

ティアナ「狙われてるのね。まあ被害がこっち来ないしいいか。
ほら、エリオにキャロ、アンタ達もさっさと開けちゃいなさい」

エリオ、キャロ「はーい」

ハヤト「待て！　俺の心の準備が！！」

ガラガラ

エリオ、キャロ「あれ？」

ティアナ「？　どうしたの？」

エリオ「何も……ないです」

キャロ「私も、何もないです」

『ハヤト君、スバル、ティアナ、アウトー』

ティアナ「ここまできて……ここまできてぇっ！」

スバル「まさかの肩透かしｗｗ」

ハヤト「畜生！ｗｗｗ」

ルーテシア「……私も、開ける」

ガラガラ

【スカリエッティのセミヌード写真】

『ルーテシアちゃん、アウトー』

ルーテシア「こんなので笑うなんて……屈辱……ぅぎっ！」

ハヤト「うわ……趣味悪ぃなオイ。スカリエッティのセミヌードとか」

スバル「あたし、気分悪くなってきた……」

ジョン＝ホセ＝ピエー（ｒｙ「はい、皆書類は見つけたね？　じゃあ、早めに終わらせようか」

全「はーい」

ガラッ

ウェンディ「はーい！　そこでウェンディ宅急便ッスよー！」

ハヤト、ティアナ「「うわ、馬鹿が来た」」

ウェンディ「ひどっ！？」

ルーテシア「事実。それでウェンディ……宅急便って、何？」

ウェンディ「ルーテシアお嬢も酷いッスよぉ～！」

ジョン＝ホセ＝（ｒｙ「ほらウェンディ、後で慰めてあげるから、今はハヤト君達に荷物を渡して？」

ウェンディ「うぅ……了解ッス」

ごそごそ

ウェンディ「お届け物はコレッスよ」

ハヤト「また、ボタン……だと？」

エリオ「……どうします？」

ハヤト「……」にやり

ティアナ「っ！？　しまった、スバル、エリオ！　そのボタンを隠して……」

ハヤト「ボタンがあれば押す。それが俺のジャスティス」ポチッ

『ウェンディ、アウトー』

ウェンディ「うえぇぇっ！？　な、何であたしが！？
あたしは関係ねーッスよ！！　あいたぁっ！？」

『全員、アウトー』ばちーん

ティアナ「まさか、ウェンディを巻き込むことで無理矢理笑わせてくるなんて」

ルーテシア「中々の策士……」

ハヤト「くそぅ……このやり場の無い怒りはウェンディにぶつけてやる」

ウェンディ「ちょ、ちょっと待つッスよ！！」

ハヤト「待てと言われて待つ馬鹿はいないのだよ」ポチッ

『ウェンディ、アウトー』

ウェンディ「うわあああああんっっ！！　あいたっ！？」

スバル「は、ハヤト、さすがに可哀想だよ」

ハヤト「くくく……もう一度……」

スバル「ハヤトの目からハイライトが消えてる！？」

キャロ「ハヤトさん！　正気に戻ってください！！」

ジョン（ｒｙ「こら、ハヤト君やめなさい」拳を握る

ハヤト「……はい」

ウェンディ「うぅ、痛いッス～。
もうこれ以上被害が及ぶ前に、帰らせてもらうッスよ
！！
ハヤトのばーか！！」

ガラッ　ピシャッ！

ハヤト「ふぅ。とりあえずはこれで終わりか？」

ティアナ「気を抜くんじゃないわよ。きっとこっちが気を抜いたあ
たりで何か――」

ガラッ

八神「よけろナッパぁぁぁぁぁっっ！！！」

ガラッ　ピシャッ！

ティアナ「やっぱりぃぃぃっ！ｗｗ　あうっ！」

『全員、アウトー』

スバル「しかもまさかのべ〇ータｗｗｗ　いったぁっ！？」

ハヤト「似てないｗｗ　壊滅的に似てないｗｗｗ　ぬぐふんっ！？」

キャロ「あははははｗｗｗ　きゃんっ！！」

エリオ「気円斬とかｗｗ　懐かしいですよｗｗｗ　痛ぁっ！！」

ルーテシア「大体、ナッパがいない……っっ！！」

アギト&リィン「あはははははｗｗｗ」

ハヤト「くっ……何のためらいもなく笑えるチビ妖精ズが、酷く憎い」

アギト「あたしらは参加してねーからなｗ　ざまぁｗｗｗ」

ハヤト「ギギギギ……ニクシミデヒトガコロセタラ……」

ジョ（ｒｙ「ほらほら、皆急がないと今日中に仕事終わらないよ」

リィン「ですです。間に合わなかったら、残業ですよー？」

スバル「えぇ～！？」

ハヤト「そういうことなら、仕事をやらざるを得ない」

ティアナ「ちゃっちゃと終わらせるわよ」

ガラッ

八神「クリリ○のことかぁぁぁぁっっっっ！！！」

ガラッ　ピシャッ！

『全員、アウトー』べちーん

～少年少女仕事中～

ハヤト「……これで、ラストか？」

ティアナ「そう、ね。これで終わり」

スバル「終業時間５分前……やったぁ！」

ハヤト「残業回避じゃあああっ！！！」

エリオ「あ、でも……仕事が終わったってことは……」

（ｒｙ「それじゃあ、これからまた『笑ってはいけない機動六課』、再開だよ！」

ルーテシア「……忘れてた」

キャロ「ですね」

ガラッ

バルディッシュ《粉砕！　玉砕！　大喝采！！（社長ボイス）》

レイジングハート《もうやめて！　相手のライフはとっくに０よ！（杏ボイス）》

フェイト「……なんでそんなにノリノリなの？　バルディッシュにレイジングハート」

ガラッ　ピシャッ！

『全員、アウトー』

スバル「しゃｗｗちょｗｗうｗｗ　いたぁっ！？」

ハヤト「せめて台詞に関連性を持たせろよｗｗｗ　ぅぉはぁっ！？」

ティアナ「何で声まで似せるのよｗｗ　きゃんっ！！」

ルーテシア「デバイスが、一番ノリノリ……いっ！？」

キャロ「映像データ渡したハヤトさんのせいですよぉっ！　ぃひゃんっ！」

エリオ「声真似がうますぎますよｗｗｗ　ぁぎっ！？」

（ｒｙ「はい。それじゃあこの後は集会があるから、みんな第１会議室に集合してね」

ティアナ「……集会？」

ハヤト「そんなんあったか？」

エリオ「無かったと思いますけど……」

（ｒｙ「ほらほら！　急いで移動！」

全「は、はい！」

～機動六課第１会議室～

ガラッ

ハヤト「さて、着いたわけだ……が……」

アコース「……」

ティアナ「査察官!?」

エリオ「な、何でいるんでしょうか」

ハヤト「……あの人も暇なんだろうよ」

キャロ「あ、あははは……」

アコース「……」クネクネッ

アコース「……っ」クネクネックネッ

スバル「（何の動きですか）」

アコース「……」クネックネッウネックネッ

ティアナ「……ふっ」

ハヤト「（ティアナ耐えろ！　ここまできて負けんな!!）」

ティアナ「……ふぅ」

『全員、セーフ』

アコース「……」トボトボ

ハヤト「ふぅ、終わったか」

アコース「ちくしょおおおおおおっっっ！！！」

『ハヤト君、アウトー』

ハヤト「そこで雄叫びすんな査察官んっもろんっ！？」

ティアナ「あ、危なかったぁ……」

エリオ「なんだか査察官、凄く落ち込んでますね」

ルーテシア「……あんな動き見せられた、私達の方が可哀想」

キャロ「ル、ルーちゃん」

ハヤト「いつつ……お、部隊長入ってきた」

八神『あーあー、マイクテストマイクテスト』

ハヤト「（ここでは仕掛け無し、か）」

スバル「（だけど油断できないよ）」

ティアナ「（いつ何が来るか……）」

八神『えー、今回の集会を始める前に一つ』

全「？」

八神『実は、局員の蝶野さんのハンカチが盗難にあいました。柄はこの色です。
　みんなのポケットの中身、ちょっと見せてなー？』

蝶野「……」

スバル「あ、あれホントに局員の人？」

キャロ「こ……怖い」

ルーテシア「……」ビクビク

ハヤト「犯人の奴見つかったら一巻の終わ……り……？」

ティアナ「？　どうしたのよハヤト」

ハヤト「この……ハンカチって、もしか……して……」

ティアナ「アンタまさか！」

ハヤト「いやいやいやいや！　俺、お前らとずっと一緒だったじゃんか！？」

スバル「でも、ハンカチあるし……」

ハヤト「誤解だ！　濡れ衣だ！」

蝶野「お前が犯人か」

ハヤト「え！？　いや、違っ！！」

蝶野「ちょっとこっち来い」

ハヤト「えええぇぇぇっ！？」

蝶野「早く来いや！」

ティアナ「ちょっ、早くいきなさいよ！」グイグイ

スバル「ガンバレ！　ハヤトなら大丈夫！」グイグイ

エリオ「骨は拾いますから！」グイグイ

キャロ、ルーテシア「……」ビクビク　グイグイ

ハヤト「ちょっ！　お前ら押すな！　こら！　オイ！！」グイグイ

蝶野「……なんで盗った」

ハヤト「盗ってないですって！　いつの間にかポケットに入ってただけで！」

蝶野「お前が盗ったんだろ」

ハヤト「違うって！　第一、コレがアンタのって証拠ないじゃんか！！」

蝶野「盗ったんだろ！？」

ハヤト「ち、違うって言ってんでしょうが！」

蝶野「いいから返せよ！！」

ハヤト「か、返すよ！　返せばいいんだろホラ！！」

蝶野「……何逆ギレしてんだお前」

ハヤト「は？　いや、逆ギレなんかしてないですって！」

蝶野「制裁が必要だな」

ハヤト「はああっ！？」

蝶野「一発で許してやるよ」

ハヤト「おかしいおかしいおかしいって！　俺無実だってマジでさぁっ！！」

蝶野「歯ぁ食いしばれ」

ハヤト「いや待って！　ホント待って！　違うから！
なぁ、お前らも弁護してくれよ！？」

ティアナ「こっち見んな」

スバル「こっち見んな」

エリオ「こっち見ないでください」

キャロ「こっち見ないでください～」（半泣き）

ルーテシア「こっち……見んな」

蝶野「いくぞ」

ハヤト「いやいやいや！　平和的にいこうよ！　暴力反対！　ハンカチ返したっしょ！？
　な！？　話し合おうって！　話し合いで世界は平和になるってマジで！！」

蝶野「黙らないと2発いくぞ」

ハヤト「ホントマジやめて！　お願いだからやめて！！」

蝶野「……っ！」バシッ！

ハヤト「モルスァ！！」

『ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、ルーテシアちゃん、アウト！』

ハヤト「……酷い目にあった」

ティアナ「大丈夫？　凄い腫れてるわよ？」

ハヤト「顎外れたかと思った……下手したらガジェットより強いぞあの人」

ルーテシア「……テラワロス」

キャロ「ルーちゃん、そういうのどこで覚えてくるの？」

ルーテシア「……3ちゃんねる」

エリオ「ハヤトさんの入れ知恵だね、完璧に」

スバル「ま、まぁまぁ。生きてて良かったじゃん？」

ハヤト「死んだら洒落にならんわボケェッ！！」

八神『それじゃあ、集会を始めるで～』

ティアナ「いよいよね……」

ルーテシア「気を抜いたら、駄目」

スバル「そだね」

八神『えー、まずは新入隊員の挨拶から』

バツンッ！（ブレーカーの落ちる音）

カッ！！（スポットライト）

？？「ウーノ！」

？？「ドゥーエ！」

？？「ト、トーレ……」

？？「クアットロ♪」

？？「……チンク」プルプル

？？「セイン！」

？？「セッテ」

？？「オットー」

？？「ノーヴェ！」

？？「ディエチ！！」

ウェンディ「ウェンディっす！！」

？？「ディード」

数の子「１２人合わせて！」

『数の子戦隊！　ナンバーズ！！！』

ドカーン！！（花火）

『ハヤト君、ティアナ、キャロ、ルーテシアちゃん、アウトー』

ハヤト「まんまじゃねぇかｗｗｗ　むぐるうなふっ！？」

キャロ「あははははは！ｗｗｗ　きゃあんっ！」

ルーテシア「ナンバーズ……あとでおしお、きっ！？」

ティアナ「てゆーか演出どれだけ凝ってるのよｗｗｗ　いたぁっ！！」

スバル、エリオ「か、かっこいい～」

ハヤト「……くっ、あの２人天然で助かりやがった」

ティアナ「何かムカツクわね」

八神『ご苦労さん、じゃあ帰ってええで～』

ウーノ「わかりました。じゃあ八神さん、バイト料はいつもの口座に」

八神『おっけーや。時給１２５０円で良かったかな？』

ウーノ「十分です」

『全員、アウトー』ばちーん

ティアナ「……新入隊員じゃなかったの？」

ルーテシア「バイト……」

ハヤト「しかもそれなりで時給いいし」

キャロ「あれ？　でも、今の一瞬でしたから秒数で数えるとそんなでもないんじゃ……」

『ハヤト、ティアナ、スバル、アウトー』

ハヤト「まさか天然と見せかけて人を狙うとは、キャロ、恐ろしい子っ！」

キャロ「え？　あ、そ、そんなつもりじゃ！？」

八神『それでは続いて、隊歌斉唱や』

キャロ「隊歌？」

エリオ「そんなのありましたっけ？」

ハヤト「俺は知らんが……ティアナ？」

ティアナ「しらないわよ。あ、始まるみたい」

【3位を目指す龍が如く♪
6日連続上履き紛失♪
アメリカの犬の自覚を持って♪
重量感をぶち壊せ♪

『よろしい、ならば戦争だ！！』

留年するなら金をくれ♪
鼻血が止まらぬ教官に刺激を受けて♪
ああ　機動六課局員♪
軽視と行列の申し子よ♪】

『全員、アウトー』

ハヤト「何故途中に少佐殿……」

スバル「鼻血の止まらないなのはさん……w」

ティアナ「アメリカってどこよ」

ルーテシア「ちくしょう」

八神『さて、突然ですがシスター・シャッハが転勤することになりました』

ハヤト「本気で唐突……ってか、シャッハさんて機動六課所属だっけ？」

八神『それでは、シスター・シャッハの挨拶です』

シャッハ『……ゴホン』

全「……」

シャッハ『萌え萌え～……キュン！』

『全員、セーフ』

ティアナ「……シャッハさん、何て痛々しい」

ハヤト「後でシャッハさんの好きなもの送ってあげよう」

シャッハ『うんたん♪　うんたん♪』

『全員、セーフ』

スバル「なんでだろ……涙出て来た」

エリオ「わ、笑ってあげたほうがいいんじゃ……」

シャッハ『うー☆　うー☆』

『全員、セーフ』

ハヤト「おい、もう俺見てらんねぇよ……」

ルーテシア「……可哀想」

スバル「だ、誰か笑ってあげなよ～」

シャッハ『……グスッ』トボトボ

キャロ「な、泣いちゃってましたよ？」

ルーテシア「……罪悪感が、キツイ」

八神『では最後に、カリム理事長からの挨拶です』

ティアナ「騎士カリム！？」

エリオ「な、なな何で！？」

カリム『……コホン』

ハヤト「おい、シャッハの二の舞になるんじゃ……」

ルーテシア「同情は、禁物」

カリム『違います！　私は変態じゃありません！
仮に変態だとしても、変態という名の淑女です！！』

『全員、アウトー』べちーん

エリオ「くｗｗまｗｗきｗｗちｗｗ」

ティアナ「誰よ！　騎士カリムにギャ○漫画日和見せたの！」

ハヤト「……すまん」

ルーテシア「ハヤト、後で蝶野さんにもう一発殴ってもらう」

ハヤト「勘弁してください」

カリム『パンツじゃないから恥ずかしくないもん！！』

『全員、アウトー』

ハヤト「別に笑うとこじゃねーのにｗｗ　余韻でｗｗ　いってぇぇっ！？」

ティアナ「意外と普通で逆にｗｗ　ぅぎっ！？」

スバル「大体見えないしｗｗｗ　あいたぁっ！！」

ルーテシア「パンツじゃなかったら、何……いたっ！！」

エリオ「ｗｗｗｗ　ったぁっ！」

キャロ「わ、私笑ってないですよぅ！　きゃぅんっ！」

八神『以上、理事長からの挨拶でしたー』

パチパチパチパチパチパチ

八神『え～、それではこれで集会は終わりです。解散！』

ティアナ「やっと終わったわね」

ハヤト「前に行ったときはどうなるかと……」

キャロ「で、でも、もう夕飯ですし、やっと終わりに……」

なのは「違うよ？　今からご飯を食べて、皆で寝て、明日の朝になったら終わり」

エリオ「明日の朝ですか！？」

なのは「そう」

スバル「そんなぁ……」

ハヤト「もう尻が限界なんですけど」

なのは「頑張ってみんな。応援してるから！」

ハヤト「じゃあ代わってください」

なのは「それは嫌」

ハヤト「ちくしょう！」

『はーい、それじゃあ皆食堂に行ってね。大人の事情で再開は夜からだよ～』

全「勘弁してください！！！」

番外編3　『絶対に笑ってはいけない機動六課　中盤戦』（後書き）

どうも、ラモンです。
感想で続きを希望される方がいらして、図に乗って続けました（笑）
これ、本編と同時進行で書いてたので、本編のシリアス具合を引きずってないかちょっとだけ心配だったりします。
一応ガキ〇流しながらだったんで、平気だとは思いますが……。

数の子は1人ずつだと処理が面倒なので、一気に消化。
数の子ファンの皆さんごめんなさい。感想なんかで、コイツだけはもう一回だして！　って子が居ればリクエストしてください。出来る限り応えます。

あ、ウェンディは贔屓したわけじゃないですよ？
作者が数の子で一番好きなのはトーレ姉さまです。

　　―　　∩
（　　。∀　。）彡　おっぱい！おっぱい！
　　∪彡

さて、あとは夜の部～ラストで終了です。
夕食部分は、書くと長くなっちゃうので泣く泣くカット。
最後までこのノリを貫けるように頑張ります……っていうか、こっちの方が書くのが楽ですw

本編もずっとこのノリでいけたらいいのになぁ。

蝶野さんがわからない人は、蝶野正洋でググると幸せになれますよ。ただ、これに出てくる蝶野はこの人とは外見が似てるだけの別人です（笑）

番外編４　『絶対に笑ってはいけない機動六課　終盤戦』（前書き）

いよいよ終わりです。
今までお付き合い頂き、真にありがとうございました。

番外編４　『絶対に笑ってはいけない機動六課　終盤戦』

ティアナ「え？　宿舎じゃなくて、隊舎の大部屋で寝るんですか？」

ハヤト「男女一緒に？」

ジョン＝ホセ＝ピエール＝バティストゥータ
「男女平等社会だからね」

ハヤト「まあいいッスけど……んじゃ、布団敷くとしますか」

スバル「ハヤト、変なことしたら酷いからね！」

ハヤト「しねーよ。ハラオウン隊長かシグナム副隊長なら大喜びでするが」

ルーテシア「ハヤト……手を出しても、いいよ？」

ハヤト「ヲイ」

～少年少女就寝準備中～

ハヤト「よし、そんじゃあ寝るとすっか」

シャーリー『ただいまから第１回、機動六課肝試し大会がはじまるよ～っ！』

ハヤト「！？」

『説明とかは第１会議室でやるから、皆第１会議室に――

レバ剣「パンツ赤いッス！！」

――全員、アウトー』

ティアナ「……ずるくない？」

スバル「てゆーか午後から全滅多いよ？　気をつけていこう」

『ごめんねー、ちょっとトラブルがあったのをお詫びしま～す』

エリオ「ちょっとって言うか……」

キャロ「凄く、かなり……」

ジョン＝ホセ＝ピエール＝バティ（ｒｙ

「はい、じゃあ皆さっさと第１会議室に移動だよ！」

ハヤト「え～……眠いッスよぉ」

ルーテシア「……眠い」

ジョン＝ホセ＝ピエー（ｒｙ
「いいから、さっさとする！」

全「りょ、了解！」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
番外編４　『絶対に笑ってはいけない機動六課　終盤戦』

～第１会議室～

シャーリー
「じゃあ、ルールを簡単に説明するね。まず皆には３グループに分かれてもらいます」

エリオ「定番ですね」

シャーリー
「そして、それぞれ部隊長室、隊長室、ロングアーチ執務室を目指してもらうよ。
それから各自、目的の部屋にある証を取ってきてもらいます。３つ揃ったらクリアね」

ハヤト「なるほど」

ティアナ「まあ、普通かしらね」

シャーリー「じゃあ、早速組み分けするよ！」

赤チーム：ハヤト、ルーテシア
青チーム：スバル、ティアナ
黄チーム：エリオ、キャロ

ハヤト「……狙ったような組み分けだな」

ティアナ「そう、ね」

シャーリー「それじゃあ早速、スタート！」

――赤チーム

ルーテシア「私達は、部隊長室……？」

ハヤト「ああ、さっさと終わらせて寝ようぜ。眠くて仕方ねぇ」

ルーテシア「うん」

ヴィータ（少女漫画風）「ごめ～ん、待ったぁ？☆」

ルーテシア、ハヤト「……」スッ（横を通り過ぎる）

ヴィータ「無視すんなやゴラァァァァァァッッ！！！」

ハヤト「ぶげうっ！？」

『ルーテシアちゃん、アウトー』

ルーテシア「まさかの御坂……いたっ！」

ハヤト「……」（返事が無い、ただの屍のようだ）

ヴィータ「ちくしょう！　はやての命令じゃなきゃ誰がこんなこと！！」

――青チーム

『ルーテシアちゃん、アウトー』

スバル「向こうはもう引っかかったみたいだね」

ティアナ「こっちも何が来るかわかんないんだから、気をつけなさい」

スバル「そだね」

シャマル（オンステージ）
「みんな抱きしめて！　宇宙の！　はちぇまれ！！」

ザフィーラ（人型）「ヤックデカルチャアアアアアアっっ！！」

『スバル、ティアナ、アウトー』

――黄チーム

『スバル、ティアナ、アウトー』

エリオ「な、何だか皆引っかかってるね」

キャロ「うん……それに、やっぱり夜は怖いよ」

エリオ「だ、大丈夫！　僕がついてるから！！」

キャロ「エリオ君……うん」

八神（物陰）「……やってられんわ」

リィン（物陰）「帰ってやけ酒です」

――再び赤チーム

ハヤト「腹部に余計なダメージを受けたが、何とか部隊長室に辿りついたか」

ルーテシア「説明台詞乙」

ハヤト「何を言うか、さて、証ってのはどれだ？」

ルーテシア「あの、箱」

ハヤト「いかにもって感じだな。どれどれ」カパッ

【まそっぷ】

『ハヤト君、アウトー』

ハヤト「もうまそっぷはやめろよ！ｗｗ　ふぐぃっ！？」

ルーテシア「ハヤト……」

ハヤト「いつつ……ルールー、証は？」

ルーテシア「取った」

ハヤト「よし、ならさっさと帰るぞ」

ルーテシア「まそっぷ」

『ハヤト君、アウトー』

ハヤト「ルールルーーーーーーーーーっっっっ！！！」

――青チーム

『ハヤト君、アウトー』

スバル「2連続だね」

ティアナ「何してんのかしら、あの馬鹿は」

スバル「……あ、ティア！　証ってコレかな？」

ティアナ「え？　……そうね、八神ってサインが入ってるし」

スバル「じゃあ早く帰ろうよ」

シャマル（オンステージ）
「～～～♪」（熱唱中）

ザフィーラ（人型）
「シャマルちゃあああああんっっっっ！！」

シャマル（オンステージ）「キラッ☆」

ザフィーラ（人型）「うぉ、うぉほぉーーーっ！！」

ティアナ「……っ」

スバル「は、早くっ。あたしもう限界……っ」

シャマル（オンステージ）「内臓をぶちまけろ！×１０」

ザフィーラ（人型）
「で、出たー！
シャマルさんの１秒間に１０回『内臓をぶちまけろ！』だーっ！！」

『スバル、ティアナ、アウトー』

～第１会議室～

ハヤト「……おう、スバル、ティアナ。証はどうした？」

ティアナ「ちゃんと持ってきたわよ。そっちは？」

ルーテシア「……ん」

スバル「あとはエリオとキャロだけかな？」

ハヤト「あいつら全然引っかかってないけど、何もなかったのか？」

ティアナ「さあ？　引っかかってないってことはそういうことなんじゃない？」

ルーテシア「あ……来た」

エリオ「遅れてすいません」

キャロ「ちゃんと、証を取ってきましたよ」

シャーリー「はいお疲れ様。じゃあ確認するね……うん、証を3つとも確認したよ！
それじゃあ、良い子はそろそろ寝る時間だね！　おやすみ！」

ハヤト「やっと寝れる」

ルーテシア「……眠い」

エリオ「あはは、２人とも凄く眠そうですね」

シャーリー「エリオ、アウトー」

エリオ「えぇっ!?　い、今のも駄目なんですか!?」

ティアナ「……何してんのよエリオ」

～六課隊舎大部屋～

ハヤト「んじゃ、電気消すぞー」

キャロ「は～い」

ティアナ「（……皆わかってんのかしら?）」

スバル「真っ暗だね」

ルーテシア「……真っ暗」

エリオ「……ふふっｗ」

ハヤト「……くっｗ」

『ハヤト君、スバル、エリオ、キャロ、ルーテシアちゃん、アウトー』

ティアナ「（こういう時の空気が一番危ないのよ）」

ハヤト「……」

スバル「……」

キャロ「……」

ブレイブハート『私は最初からクライマックスだぜ！』

マッハキャリバー『私の強さにお前が泣いた！』

クロスミラージュ『僕に釣られてみる？』

ケリュケイオン『答えは聞いてない！』

ブリッツキャリバー『降臨！　満を持して！』

ストラーダ『最初に言っておく！　特に言う事は無い！』

『全員、アウトー』

ハヤト「アイツら何してんのｗｗ」

スバル「しかも電王ってｗｗｗ」

エリオ「ストラーダだけ微妙に仲間はずれですしｗｗ」

キャロ「ていうか、放送もアリなんですか！？」

ルーテシア「……寝たいのに」

ラグナ『戦いは数だよ！　お兄ちゃん！！』

ヴァイス『あえて言おう！　カスであると！！』

『ハヤト君、スバル、ティアナ、アウトー』

ハヤト「……」

スバル「……」

ティアナ「……」

エリオ「……」

キャロ「……」

ルーテシア「……」

ぷぅ

ハヤト「！？」

スバル「っｗ」

ティアナ「……ぷっｗ」

エリオ「ちょっｗｗ」

キャロ「くすくす……」

ルーテシア「……ｗ」

『全員、アウトー』

ハヤト「ちょっ！　誰だ今のこの野郎！？」

スバル「あ、あたしじゃないよ！」

スカリエッティ「いやぁ、すまないね」

『全員、アウトー』

ハヤト「何でいんだよｗｗ　出てけっよぉがっ！？」

ルーテシア「ドクター……本当に、死んで……きゃうっ！」

スカリエッティ「そうか、では出て行くとしよう」

ハヤト「……たく」

スバル「……」

ティアナ「……」

エリオ「……」

キャロ「……」

ルーテシア「……」

八神『そげぶ（裏声）』

『全員、アウトー』

ティアナ「まさかの原点回帰ね」

ハヤト「さすが部隊長としか言いようがねぇ」

キャロ「も、もうヤですぅ……」

エリオ「……あ」

ハヤト「？　どうしたエリオ？」

エリオ「結局そげぶって何ですか？」

『スバル、ティアナ、アウトー』

ティアナ「もおおおおっ！！　今言わないでよぉっ！　うぁいたぁっ！？」

スバル「エリオの馬鹿ぁっ！　いったぁっ！」

エリオ「す、すいませんでした……」

ハヤト「エリオ、気をつけろ。マジで暗闇だと笑い易くなってるから」

エリオ「そうですね、気をつけます」

ルーテシア「……すやすや」

キャロ「あ、ルーちゃん寝てますよ」

ティアナ「この状況で寝れるなんて、大物ね」

ハヤト「俺も寝よう」

スバル「あたしも～」

ティアナ「っていうか、さっきからずっと寝たいんだけどね」

八神『カルメ……あ、間違った』

『ハヤト君、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、アウトー』

ハヤト「……」

スバル「……」

ティアナ「……」

エリオ「……」

キャロ「……」

ハヤト「……なあ、エリオ」

エリオ「はい？」

ハヤト「カルメってなんだろうな？」

エリオ「さあ、わからないですけど……」

ハヤト「そうか……」

エリオ「はい」

ハヤト「……カルメwww」

エリオ「……ふっw」

『ハヤト君、エリオ、アウトー』

エリオ「いたた……」

ハヤト「悪い……」

スバル「……」

キャロ「……」

エリオ「……カルメw」

ハヤト「ぶっw」

エリオ「……クッw」

『ハヤト君、エリオ、アウトー』

ハヤト「何してんだよ……」

エリオ「す、すいません、つい」

ハヤト「全く……」

エリオ「……」

キャロ「……」

スバル「……」

ティアナ「……」

ハヤト「……カルメｗｗｗ」

エリオ「っっｗｗｗ」

『ハヤト君、エリオ、アウトー』

ティアナ「いつまでやってんのよアンタ達！！」

『朝ですよー！』

ハヤト「くそ、殆ど寝れなかった……」

ティアナ「自爆してるからでしょうが」

ハヤト「何だよ、エリオだって悪い……っくｗ」

ティアナ「な、何よ……っｗｗ」

『ハヤト君、ティアナ、アウトー』

ティアナ「あたしを巻き込まないでよｗｗｗ　ったぁっ！」

ハヤト「す、すまんｗｗ　ぐおぅっ！？」

スバル「朝から何してるの2人とも……」

ハヤト「いや、なんか笑い易くなってて……ぶふっｗ」

スバル「何で笑う……っのｗｗ」

『ハヤト君、スバル、アウトー』

スバル「もおおおおっ！！」

ハヤト「マジごめん」

ティアナ「アンタ暫く口開くの禁止」

ルーテシア「……黙って」

ハヤト「……了解」

エリオ「そういえば、もうそろそろ終わりですよね？」

キャロ「そうだよね、どうやったら終わりなんだろう？」

ジョン＝ホセ＝ピ（ｒｙ

「おーい、皆おはよう～っ！」

スバル「あ、ギン姉だ」

ジョン＝ホセ（ｒｙ

「お疲れ様。これで『絶対に笑ってはいけない機動六課』は終了だよ」

エリオ「やったぁ！」

キャロ「よ、よかったぁ」

ジョン＝ホ（ｒｙ

「正確には、隊舎の正面入り口から出たら終わりかな」

スバル「長かった～」

ティアナ「二度と参加したくないわ」

ジョン（ｒｙ

「さて、最後に私からみんなに一言」コホン

ハヤト「……？」

スバル「ギン姉？」

ジョ（ｒｙ

「そげぶ」

『全員、アウトー』

ティアナ「……やってくれるじゃないの」

スバル「まあまあ、正面入り口から出たら解放されるよ。正直お尻が限界だよ～」

ハヤト「ほぅ、尻が限界とな？」

スバル「え？　うん、限界だね」

ハヤト「何が？」

スバル「お尻が……っｗ」

『全員、アウトー』

ティアナ「アンタマジで喋るんじゃないわよ！！」

ルーテシア「……死んで」

キャロ「フリードのご飯になってください！」

エリオ「ストラーダで斬りますよ！？」

スバル「馬鹿ハヤトぉっ！！」

ハヤト「……黙ってるのって辛くて」

ティアナ「だったら一人で自爆してなさいよ！　あたし達を巻き込むな！！」

ハヤト「ご、ごめんって」

スバル「はぁ……でも、こうやって振り返ってみると、何だか感慨深いよね」

エリオ「確かに、悪くない気分です」

キャロ「お尻は痛いですけどね」

ルーテシア「……貴重な、体験だった」

ハヤト「あんま体験したくない部類ではあるがな」

ティアナ「アンタは４割自爆じゃないの」

ハヤト「……まぁ、そうだけどさ」

エリオ「あ、入り口まで着きましたよ！」

ティアナ「ホントね。皆いい？　せーの、で出るわよ？」

ハヤト「オーケー」

スバル「だいじょぶだよ」

エリオ「オッケーです」

キャロ「わかりました」

ルーテシア「……平気」

ティアナ「じゃあ行くわよ……せーの！」

六課一同『やらせはせん！　やらせはせんぞぉぉぉぉっっ！！！』

『全員、アウトー』

全「ちくしょおおおおおおおおおおっっ！！！」

・スタッフロール

企画　製作……機動六課
監督　……八神はやて
演出　……ロングアーチ一同
出演　……機動六課一同、騎士カリム、シスター・シャッハ、アコース査察官
　　ギンガ＝ナカジマ、ナンバーズ、ジェイル＝スカリエッティ
　　ラグナ、デバイス一同、その他

・最終結果
・叩かれた回数
1位　ハヤト＝ロックウェル……序盤17回　中盤18回　終盤18回　計53回
2位　スバル＝ナカジマ　……序盤17回　中盤14回　終盤15回　計46回
3位　ティアナ＝ランスター……序盤17回　中盤13回　終盤14回　計44回
4位　エリオ＝モンディアル……序盤11回　中盤10回　終盤14回　計35回
5位　キャロ＝ル＝ルシエ　……序盤13回　中盤11回　終盤10回　計34回
5位　ルーテシア＝アルピーノ…序盤12回　中盤12回　終盤10回　計34回

八神「次は私以外の隊長陣でやってみよか？」

なのは「やめて」

フェイト「ホントやめて」

ハヤト「やりましょう」

スバル「是非やりましょう」

ティアナ「明日にでもやりましょう」

エリオ「むしろ今すぐやりましょう」

キャロ「用意します」

ルーテシア「……準備、万端」

八神「ふふふ……覚悟しとくんやな！」

ハヤト「何言ってんスか。部隊長も参加ですよ？　勿論強制で♪」

八神「……へ？」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・？

番外編４　『絶対に笑ってはいけない機動六課　終盤戦』（後書き）

どうも、ラモンです。
やっと終わりました。笑ってはいけない機動六課。

ハヤト
「しかし、今回はちょっと尻すぼみな感じだな」

ネタがねぇ。さすがにそろそろ切れてきた。
なるべく知名度があるのを選んでたからさぁ。それに、本物もラストらへんはこんな感じじゃなかった？

ハヤト
「う～ん……本物は映像があるからコレでも笑えるけどなぁ」

まあ、そこは読者様の想像力に任せよう。

ハヤト
「そうだな。しかし、ここんとこの連日更新、何かあるのか？」

いやね、感想で「スバティアのバレンタイン」ってリクがあったじゃない？

ハヤト
「ああ、あったな」

だから投票締め切り前に、読者の皆様に『このルートを選ぶとこんな感じになりますよ』というお知らせ的な感じでお試し小説を書いてみようかと。

バレンタインネタは番外編1でやったから、バレンタインネタかどうかは決めてないんだけど、

ティアナルート前提のハヤトとティアナの話。
スバルルート前提のハヤトとスバルの話。

この2つをそれぞれ短編で番外編5として纏めて更新しようと思ってさ。

ハヤト
「ああ、だからさっさと『笑っては～』を終わらせたかった訳ね」

そういうこと。
さあ、コレを投稿したら砂糖を吐きながら書くぞー☆

ハヤト
「おお。徹夜明けでテンションがおかしいw」

読者の皆様、遅くても2／14の午前0時までには番外編5を更新する予定です。
その話を見てからの投票したルート変更なども受け付けます。
まあ、あくまで『お試し』ですので、書いたとおりの中身になるかどうかは保証しかねますがw

それではまた、次の番外編で。
あ、後書き登場に立候補された作家様のキャラ達は、本編の後書きに登場予定です。
今まで立候補された作家様以外にも、こんな小説の後書きで『自分のキャラが弄られているところを見たい！』というドMで奇特な作

家様が居れば、立候補は常時受け付けておりますw

※2／15午前0時をもちまして、ルート選択投票を締め切らせて頂きます。

沢山のご応募ありがとうございました。

集計結果は本編21話後書きにて発表しようと思っております。

番外編5　『チョコレート？　いいえケフィアです』（前書き）

※注意！

ハヤトが色んな意味で終わってます。

ダメージを受ける準備と、カカオ９９％チョコなど、苦い物を準備してからお読みください。

また、この作品を読むことによって起きたいかなる事態においても、作者は責任を負いかねます……ごふぅっ（吐糖）

番外編5　『チョコレート？　いいえケフィアです』

ｓｉｄｅ：―

２月１４日。誰が決めたか聖バレンタイン・デイ。
男のプライドと女の思惑がぶつかり合う愛欲のワンダーランド。
菓子業界の思惑に乗せられている？
ぬかせ、ありとあらゆる祝祭日も記念日ももとをただせばどっかの誰かが適当に決めた日だ。
むしろ利用してやっていると理解せよ！
そんな、全管理世界の男性諸君が早起きして自分の価値をあげようと涙ぐましい努力をしているその朝に。

「くくくくく……これで、これで勝つる！」

ハヤト＝ロックウェルは一人で暗い笑いを漏らしていた。
目の前には2つの板チョコサイズのチョコレート。
先日とある方法で平行世界に行った時に、とある人物から貰った“惚れ薬入りチョコレート”である。

「平行世界に行ったと思えば、メカゴジ○&メカキング○ドラにリアルもぐら叩きされるわ、何か記憶は飛ぶわ、危うく三枚におろされかけるわ、平行世界の高町隊長に脅されるわ……さんざんな目に

あった。しかし！　だがしかし！！」

カッと目を見開き、チョコを天に掲げてハヤトが吼える。

「コレを手に入れる為と思えば、そんな不幸など屁でもない！！
俺は、コレでハーレム世界の神となる！！」

「ハヤトさん……うるさいですよぉ……」

「あ、ごめん」

ただいま午前６時。
休日で朝の眠りを満喫していたエリオに文句を言われ、小さくなって頭を下げるハヤト。
情けない事この上なかった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
番外編６　『チョコレート？　いいえケフィアです』

惚れ薬入りチョコレート×２。

食べた人間が、食べた後最初に見た『異性』を好きになる
という、ありきたりなブツ。
しかしありきたりであるが故に効果の確かさは疑うべくもないだろう。

ある意味危険な物体が2つ、ある意味でもなく普通に危険な男の手に握られている。
機動六課始まって以来。あのJ・S事件など比較にならない程の大惨事が起きる可能性があるのだが、それを知る者はハヤトのデバイスであるブレイブハート以外には、今は存在しない。

≪　マスターハヤト、それはスバルさんとティアナさんに渡すのではないのですか？　≫

「はぁ!?　だ、だだだ誰があの2人なんか！　大体俺は別にあいつらの事なんて……だな、その、友達としか思ってないわけで……」

≪　……マスターハヤトがそう仰るのであれば、私は何も言いませんが　≫

溜息を吐きたい気分でハヤトに答えるブレイブハート。
それだけ顔を赤くしていて、何が友達なのだろうか？

「ゴホン。さ、さて！　問題はこれを誰に食べさせるかだな」

気を取り直して思考に耽るハヤト。
今回、彼がターゲットとしている女性は１０人。
高町なのは、フェイト＝Ｔ＝ハラオウン、八神はやて、シグナム、シャマル、カリム＝グラシア、シャッハ＝ヌエラ、ウーノ、ドゥーエ、トーレである。

全員ハヤトの好みにどストライクであり、しかも都合よく今日はその全員が機動六課に集まる日なのだ。
どうやら、はやてがバレンタインデーということで祭りを開催するらしい。

なんとも都合のいい話だ。

チョコを見ながらブツブツと呟くハヤト。怪しさ爆発である。

「細かく砕いてもいいんだけど、さすがに欠片で効果があるかどうかわからんのに、そんな危険は犯せないか」

「となればやはり２人を厳選して……いやしかし、あの１０人から２人を選抜することなんて……」

頭を抱えて、部屋の中心でゴロゴロと転げまわるハヤト。
いい加減うるさくて起きてきたエリオが、「何してんのこの人」的な目で彼を見る。

「高町隊長、ハラオウン隊長、八神部隊長は……まあ、今回は見送ろう。
騎士カリムとシスター・シャッハも、今回は見送り……というか、よく考えたら不可能に近いか。
となると残るはシグナム副隊長とシャマル先生、ウーノさん、ドゥーエさん、トーレさん……5分の2なら、なんとか絞れるか……？」

「あの、ハヤトさん、さっきから何を――「ちょっと黙ってろエリオ、ヴットバスゾ」――あ、はい」

心配してくれたエリオにガンを飛ばす大人気なさ。
そんなハヤトは、頭の中で第1回惚れ薬チョコを食べさせる人オーディションを開催していた。

「えっと……ブレイブハート、大丈夫なの？　ハヤトさん」

≪　問題ありません。連続しての異世界訪問で、少しばかり精神が病んでいるだけですので　≫

「病んでたら問題じゃないの！？」

≪　暴走した場合や、万が一の対処法は既に確立してあります。
あなたが心配しているような事態にはなりません。エリオさん　≫

「いや、暴走する前に止めたほうがいいんじゃ……」

≪　今のマスターハヤトには、何を言っても無駄ですので　≫

いっそ清々しささえ感じるブレイブハートの物言いに、エリオはいまだブツブツと呟いているルームメイトに干渉するのを諦めた。

機動六課にきてから約１０ヶ月と少し。

こうなったルームメイトは、絶対に止められないと学習したエリオであった。

ただ、彼の抑止力となり得る人物２人にとりあえず連絡はとっておくべきだと判断して、一人端末を開いた。

それが、ある意味機動六課始まって以来の大惨事を招くとも知らずに……。

「よし！　今回はシグナム副隊長とトーレさんの２人で行こう！」

３０分にも及ぶ脳内オーディションの末、様々な要因――主にバストサイズ――によって決定した、今回の犠牲者……もとい標的……もとい、ターゲットの名前を叫びつつ、ハヤトが立ち上がる。

「そうと決まれば善は急げ！　さっそくこの惚れ薬入りチョコで……チョコ、で？」

意気込みと共に、中央の机に置いてあった2つのチョコを取ろうと手を伸ばし、そこに中身の無い包装紙しか残っていないのを確認して目を見開く。

おかしい。

確かここには惚れ薬入りチョコが2つあった筈なのだが、何故か今あるのはその包装紙が2つだけ。

それに包まれていた筈のチョコは影も形も無い。

「エ、エリオ？　お前ここにあったチョコ食べた？」

「？　いいえ？　ハヤトさんがブツブツ言いながら自分で食べてましたけど……」

「……え？」

「ですから、自分で2つとも食べてましたよ？」

≪　おいしそうに食べてらっしゃいましたよ。マスターハヤト　≫

「え？　俺、食べ……え？」

自分の犯した失態が飲み込めないのか、机の上を凝視して言葉に詰まるハヤト。

あれだけ悩んで標的を決めたというのに、いざ行動しようとした時の切り札消失。

その衝撃はいかばかりか。

だが、運命は彼に休息を許さない。

衝撃から立ち直れて居ないハヤトの耳に、部屋のドアが開かれる音と、聞き慣れた2人の人物の声が入ってくる。

「おはよーハヤト。何かあったの～？」

「ちょっとハヤト何してんのよ？　エリオが心配して通信してきたけど……」

「あ、スバルさんにティアナさん」

その声に、本能ではそっちを向いちゃいけないとわかっていた。
しかし悲しいかな、いまだに思考が上手く働いていなかったハヤトは、声のした方を見た。
見て、しまったのだ……。

「……あ」

「「？」」

スバルとティアナに視線を止め、小さく声を漏らしたハヤト。
2人が不思議そうに見つめかえしていると、不意にハヤトが立ち上がり、2人の前まで歩いてくる。
そして――

「スバル、ティアナ……好きだ、愛してる」

「「……え？」」

――爆弾を、投下した。

ｓｉｄｅ：―　了

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

待って。
待って待って待って待って！
ちょっと、何よコレ！？　え？　ハヤトが？　あたしを？　好き？

落ち着け、落ち着きなさいティアナ＝ランスター。
どうせアレよ。こっちが本気にしたら「なんちゃって～☆」とか言うつもりなのよ！
コイツの性格からしたら絶対にそう！

「な、なななな何のつもりかしら？　からかおうったって、そうはいかないわよ！？」

裏返りそうな声を必死におさえて、涼しい顔を作って聞いてやる。

「からかう？　そんなつもりは無いぞ、本気で好きだ。愛してる」
「ほらみなさ……ってふぇっ！？」
鼻で笑ってやろうとしたら、改めて告白された上に、手にキスされた。
ななな何事！？
「スバルのことも、勿論好きだし愛してるぞ」
「え、ちょ、ハヤト？　何かおかしいよ？　熱でもあるの？」
「俺は正気さ、信じられないか？」
「いや、そのそーゆー訳じゃないけど……でも、なんでそんないきなり……？」
「お前達が、いつもよりも魅力的だったから、かな？」
「ふえぇぇ……てぃ、てぃあぁぁ」
「お、落ち着きなしゃい！」
噛んじゃった。ってそんなことはどうでもいい！
何よこの状況！？　何であのハヤトが、こんな歯の浮くような台詞を、しかも微笑んで言ったりするのよ！？

絶対おかしい！　だだだって、昨日までは普通だったのよ？　いつもみたいにスバルにもあたしにも憎まれ口ばっかりで、それがいきなりコレって、絶対おかしいわよね！？

《　落ち着いてください、スバルさん、ティアナさん　》

「あああああたしは、おおお落ち着いてるわよ！？　何言ってるのブレイブハート！？」

「ティ、ティア、ティアっ！　どどどうしよう？　ハヤトが、ハヤトがあたしのこと好きって、好きって！！」

「う、うっさい！　落ち着きなさい！　普通にかんがえて、からかってるだけにきまってるでしょ！？」

「からかってるなんて酷いな、俺は……本気だぞ？」

そう言ってハヤトがあたしとスバルを抱きしめる。

も、もうホントになんなのよぉぉぉっ！？

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

ｓｉｄｅ：ブレイブハート

ティアナさんが落ち着かれるまでに、時間にして２０分少々を費やしました。
やはり、好意を寄せる相手からいきなり告白されるという事は、女性にとっては嬉しいものなのでしょうね。
普段は冷静沈着なティアナさんが、あれだけ取り乱されたのですから。

「……つまり、ハヤトがこの状態になったのは、その惚れ薬入りチョコを食べたせいなのね？」

《はい。マスターハヤトはシグナム副隊長と、トーレさんに食べさせようとしていましたが》

「……そう。まあ、それは後で問いただすとして、戻すにはどうしたらいいの？」

ティアナさんは暗い顔で呟いて、真っ赤になったスバルさんを抱きしめているマスターハヤトを振り返った。
普段からこれ位積極的にアプローチしていれば、シグナム副隊長やトーレさん達にも、もう少し意識して頂けると思うのですが……。
いえそれは今関係ありませんね。

《井上様から、解毒剤チョコの作り方は教えて頂いています。万が一間違えた時に、と》

「じゃあそれを食べさせれば、元に戻るのね？」

《　はい　》

「ティ、ティア！　どうしよう！？　ハヤトが、ハヤトが～～～っ！」

「いいから！　そのままそいつの気を引いてなさい！　今から解毒剤入りのチョコを作るから！」

「でも、でもでもハヤトがあたしのこと抱きしめて、耳元で好きだって言うんだよ！？」

「羨まし……じゃなくて五月蝿い！　いいからそのまま待機！　いいわね！？」

「うぅぅぅ～、わかったよぉ……」

スバルさんは、部屋に置かれたソファに座って、マスターハヤトに抱きしめられている。

まるで本当の恋人のようですが……マスターハヤトは、恋人が出来たらああいう事をしたいと思っているのでしょうか？

「あの、ティアナさん、ブレイブハート。僕って、ここに居なきゃいけませんか？」

「当然」

《　当然かと　》

マスターハヤトが出す甘ったるい空気に辟易したのでしょうか、エリオさんがげっそりしてきた顔で聞いてきました。
ですが、今エリオさんが居なくなってしまっては、この小説に年齢制限がかかってしまう内容になりかねません。
そのくらいにマスターハヤトの出す空気は甘く、スバルさんも満更ではない雰囲気です。

ティアナさんは今でこそ落ち着いていらっしゃいますが、おそらくマスターハヤトに言い寄られたら、拒否できずに流されてしまうと思いますし。
エリオさんには、是が非でもこの場に居てもらわねばなりません。

「……辛いんですけど」

《　ティアナさんが解毒剤チョコを作るまで、ご辛抱ください　》

「うぅぅ……せ、せめて他の誰かを……」

《　これ以上人を呼んでしまうと、正気に戻った際にマスターハヤトが自殺してしまう可能性がありますので、それはできかねます　》

そう告げると、肩を落として落ち込んでしまうエリオさん。
確かに、この雰囲気の中に1人取り残されるのは辛いでしょうね。
ですが、頑張って頂くしかありません。

「なるべく急ぐから、お願い。エリオ」

「ティアナさん……はい、わかりました」

《　解毒剤の材料はすぐ手に入る物ばかりでしたし、３０分もあれば出来上がりますよ　》

「……ブレイブハート。出来るだけ、急いでね？」

《　善処いたします　》

諦観の顔をしたエリオさんに安心させるような言葉をかけて、私とティアナさんは材料集めへと向かうのでした。

できるだけ急ぎましょう。

エリオさんが、耐え切れなくなってしまう前に。

ｓｉｄｅ：ブレイブハート　了

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

「スバルは可愛いなぁ……それに、いい匂いだ」

「ひゃあぁぁぁ……」

ソファに座ったハヤトの膝に乗せられて、後ろから抱きしめられる。
ちちち近いよ近いよ!?　ハヤトの息が耳にあたるし、肩に顎乗っけられてるし!!
「エリオがいなきゃ、このままベッドまで運んでくんだけどなぁ」
「べべべ、ベッド!?　ベッドで何するの!?」
「何ってお前、そんなん決まってるだろ？　……はむ」
「うひゃあっ!?」
耳たぶ噛まれた!?　噛まれたよティア!　っていないし!
「た、助けてエリオ!」
「……げふっ（吐糖）」
「砂糖吐いて倒れた!?」
何の病気それ!?
てゆーかどうしよう!　唯一の助け舟が!!
「何だ。エリオにはちっと早かったか？」

「そそそういう問題じゃないと思うよ！？　それと、医務室運ばなきゃ！」

「んー？　いいじゃん、今はスバルといちゃいちゃする方が大事だ」

「うえぇぇっ！？」

慌ててたら、凄くいい笑顔のハヤトに押し倒された。
ギシッてソファの音がして、天井が視界に入って、すぐにそこにハヤトの顔が入る。
あわわわわ……。

「まあ、とりあえずエリオも気絶してることだし……」

「ことだし……な、何かなハヤト？」

「決まってんだろ？　これから先は、１８歳未満お断りだ」

「Ｒ－１８指定！？」

そそそんな！　最初はやっぱりちゃんとベッドの上で……ってそうじゃなくて！
どうせなら２人っきりで……ってそうでもなくて！

「って何を発情してんのよアンタわあああああっっっっ！？」

「ごぶぅぅぅぅっ！？」

頭がぐるぐるしてきたところで、ティアの怒声と共にハヤトが吹っ飛んでいった。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

ｓｉｄｅ：ブレイブハート

間一髪でした。

ティアナさんと解毒剤入りチョコを作り、急いで戻ってきたのですが……エリオさんは間に合いませんでしたか。

ですが、１８歳未満閲覧禁止になる前に戻ってこれたのは不幸中の幸いですね。

≪　ではティアナさん、マスターハヤトに解毒剤を　≫

「ええ、早いトコ正気に戻してボコボコにしてやらないとね」

ボコボコですか……本来であればデバイスとして止めるべきなのでしょうが、さすがに今回はマスターハヤトの自業自得という気もしますね。

姉上も『マスターにキチンと責任を取らせるのもデバイスの仕事』と言っていましたし、ティアナさんを止めるのはやめておきましょうか。

「ホラ、さっさと食べなさいよ！
か、勘違いしないでよね、解毒剤がチョコと一緒じゃないと効果がないから、チョコで作っただけであって、別に特別な意味とかないんだからっ！」

ティアナさん、確かそれはマスターハヤトが言うところの“テンプレ”というモノですね。
それに作っている時、あれだけ楽しそうにしていては説得力に欠けますよ？

「ん？　チョコ？　ティアナが口移しで食べさせてくれるなら、食べてもいいけど？」

「〜〜〜っ！　い、いいから食べろ馬鹿っ！！」

「ははは、ティアナは恥ずかしがり屋さんだなぁ☆　残念だけど、まあいいか」

マスターハヤトがティアナさんから受け取ったチョコを口に運んで食べる。
井上様によれば、すぐに効果が切れるとの事でしたが……。

「うん、おいしい。ティアナは料理も上手いから将来いい嫁になる……な……」

どうやら効果があったようで、マスターハヤトの顔が段々と引き攣っていく。

ああ、正気に戻られても、効果があった時の記憶は残っているのでしょうね。その顔を見ればわかります。

マスターハヤトはティアナさんとスバルさんを一度ずつ見て、そのまま立ち上がり、背中に哀愁を漂わせてドアの方へと向かって行きます。どうされるのでしょうか？

「……ちょっと死んでくる」

≪　はやまらないでください、マスターハヤト　≫

被害の拡大を防ぐために、最低限の人しか呼ばなかったのですが、それでもマスターハヤトには死を選ばせる程に恥ずかしいことだったようです。

「頼む、死なせてくれ」

「駄目よ。アンタはあたしがボコボコにするんだから」

≪　それはそれでどうかと思うのですが、とりあえず、続きはエリオさんとスバルさんを医務室に運んでからにしては？　≫

「「は？」」

スバルさんは頭から煙を出しそうなほど顔を赤くして目を回していますし、エリオさんは先ほどから断続的に砂糖を吐き出しながら痙攣しています。

バイタルに異常はなさそうですが、とりあえず医務室に運んだほうが良いでしょう。

「……じゃあ、一旦２人を医務室に運んで、それからアンタの尋問ね。逃げたらコロスわよ？」

「……はい」

うなだれて返事をするマスターハヤト。

恥ずかしい思いをして、さらに希望の星であったチョコも失って……デバイスの私でも同情を禁じえません。

せめて、ティアナさんの尋問の際は精一杯の弁護をさせて頂きますね。

ですがマスターハヤト。

最初から素直になって、スバルさんとティアナさんに渡していれば、話は丸く収まったと思いますよ？

ｓｉｄｅ：ブレイブハート　了

番外編5　『チョコレート？　いいえケフィアです』（後書き）

何だコレ。
何だコレ。（大事な事なので2回言いました）

ヴィータ
「馬鹿みたいな話だな」

ですね。
何だコレ。

ヴィータ
「お前、こないだ糖分異常で病院行ったばっかで、感想でもアレだけ甘い甘い言われたってのに、すぐコレか。反省しろ」

すいません。
ホント色々反省してます。
自重しきれませんでした。だって加糖気味ってリクあったし……。

ヴィータ
「読者のせいにすんな。書くのはお前なんだから」

そうですよね。
ちょっと吊ってきます。

ヴィータ
「後でアイゼンの頑固な汚れにしてやるから待て。
つーか、本編の方の進み具合はどうなんだよ？　今日で投票終わりだぞ？」

うん、現時点で大体４割かな。
どっちになってもいいように２つ書いてるから、どうしてもちょっと遅くなっちゃってね。

ヴィータ
「早くしろよ。いつもこんな甘い話ばっかだと、読者に飽きられちまうぞ」

頑張ります。ホント頑張るんで、そんな言わないで……（泣）

ヴィータ
「全く。読者の皆、コイツも反省してるみたいだから、今回のも大目に見てやってくれ」

ｏｒｚ　＜全力で謝罪します。

ヴィータ
「反省してるなら、２／１６までには本編２１話をあげろよ」

頑張るよ。
さすがにここんとこ連続で投稿しすぎて疲れてるから、確実にとは言えないけどさ。

ヴィータ
「アホな話ばっか書くからだ」

ですよねー。

ヴィータ

「ったく……にしても、ハヤトの奴、惚れ薬チョコをはやてに食べさせようとか。マジで何考えてやがる」

男の子だもん、仕方ないっしょ。

ヴィータ
「明日から訓練メニュー１００倍だな」

哀れハヤト。
さて、そろそろ終わりにしようかね。

ヴィータ
「ん。投票も、もうすぐ終わりだし、特に連絡事項は無いよな？」

そーだね。あれかな、後書きに登場したい人の募集くらいかな？

ヴィータ
「本編更新しねーから中々登場させられないのに、まだ募集すんのか？」

一応ね、これからは本編メインで更新予定だし。
というわけで、出演立候補は感想、メッセージでどうぞ！

ヴィータ
「最後に、今回の話の経緯を知りたい奴は、絶賛連載中の秋風さんの小説、
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～蒼天を愛した混沌～
の第１話後書きを読んでくれ。シリーズ物の第３作目だが、凄くお

もしれーから、シリーズの最初から読め！」

作者も通して一気に読んだクチです。

ヴィータ

「それじゃあ、また次の話でな！」

※２／１６　追記

以前の番外編５『もしも彼女を選んだら』は、ルート選択投票用短編でしたので投票終了ということで削除しました。

番外編６　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その１』

歴史に“ＩＦ”は存在すれど、それはあくまで“ＩＦ”であり、現実ではない。
これは、そのＩＦが現実となったお話。
もしもハヤト＝ロックウェルが、幼い頃にとある科学者に攫われ、人と機械の交じり合った身体になったら。
そして、最強と呼ばれる力を手に入れたら。
時空管理局に敵対していたら……。

そんな、とりとめもない可能性のお話。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
番外編６　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その１』

・もしもハヤトがスカリエッティサイドで、戦闘機人で、最強主人公だったら
ＣＡＳＥ．１『スカリエッティラボでの一幕』

ｓｉｄｅ：―

「だーかーらー！　何で無理なんだよっ！！」

地下にあるスカリエッティのラボ。
そこにとある青年の声が響く。

「まーた兄ちゃんが叫んでるッスね」

「今度は何無茶言ってるんだろ」

「兄貴の事だし、どうせロケットパンチでもつけろって言ってんじゃねーのか？」

「「ありえる」」

そんな青年の声を食堂で昼食を食べながら聞いたナンバーズ達は、揃って溜息を漏らす。
彼女達が生まれた時から続く恒例行事とはいえ、あれが自分達の兄だと思うと恥ずかしいやら情けないやら。
全員で溜息を吐く中、比較的年長者であるウーノ、ドゥーエ、トーレの3人が立ち上がる。
立ち上がった3人を見て、口を開くのはクアットロ。

「お姉さま方、お兄様の所へ？」

「ええ。お兄様をお止めするのも、妹の役目でしょう？」

「本当、お兄様には困ったものね。今度じっくり調教しなくては駄目かしら」

「ぐだぐだ言っていないで行くぞ。兄上のことだ、どうせくだらない内容だろうがな」

「あぁ～ん。クアットロもお供します～！」

「じゃあ、あたしも付いて行くッスよ！」

「あたしもあたしもー！」

ウーノ達が歩き出すと、我も我もと次から次に他のナンバーズも立ち上がる。

何だかんだで、彼女達も兄が巻き起こす騒動が好きなのだろう。

◇◇◇◇◇

「何度も言うけれどね、確かに君達ナンバーズの身体は一部分が機械で出来ている。

だけど、全身が機械という訳ではないんだ。だから、合体機構なんて造れる訳がないだろう？」

「足りない部分は勇気でカバーしろよ！」

「何を非科学的な……身体を真っ二つにされて生きている人間がい

ると思うかい？
　体中の間接を真逆にまげて平気な人間がいると思うかい？」

「ぬぅ……それで世界最高の科学者とは笑わせる！　お前にプライドはないのか！？」

「君の馬鹿みたいな妄想を実現するくらいなら、プライドなんていらないね」

「なにをぉぉぉぉっ！？」

　スカリエッティ専用の研究室。
　そこで、２７，８歳程度の青年――ハヤトがスカリエッティに食って掛かっている。

　ちなみに先述の会話でわかるとおり、このハヤトは戦闘機人である。
　しかし、ナンバーズという括りではあるものの、ハヤトにはナンバーが無い。
　戦闘機人としての呼称は『プロト』。ナンバーズを造るにあたって、実験的に造られた試作機である。

　しかもこのハヤト、どうせ実験だし積めそうな機能は全部積もう。壊れるのが前提だし、と趣味丸出しで造った結果、何故か上手いこと起動してしまったという経緯を持つ。
　そういう経緯もあって、試作機にありがちなチート性能のあるプロトタイプとして現在ここに存在するのだ。
　ちなみにどのくらいチートかと言えば、全ての次元世界を一人で３日もあれば征服できる程度。

チートすぎだろ。
なのはやフェイト、はやてが可愛く見えるわ。

「大体だねプロト。君は合体などしなくても、この世に勝てる人間などいないだろう？
何故そんなに合体やら新機能にこだわるんだい？」

「男の浪漫だからだよ！」

「……私も男だが、全く理解できないね」

「ちぃぃっ！　この駄目科学者め！」

「そういう君は駄目戦闘機人だよ」

騒ぎ立てるハヤトと、こめかみを押さえて溜息を吐くスカリエッティ。
スカリエッティからすれば、試作機ながら最高の出来となったハヤトをこれ以上弄る愚は冒したくない。
だというのに、この試作機はことあるごとに「ロケットパンチをつけろ」だの「目からビームを出せるようにしろ」だのとくだらないことばかり提案してくる。

これから管理局相手に重大な事を起こそうとしているというのに、なんとも先が思いやられることだ。
スカリエッティは最近頭痛の増えた頭を振って、早く彼の妹達が助けに来てくれることを願った。

果たしてその願いは聞き届けられた。
ドアの開く音と共に、大勢の足音が響く。

「お兄様、またドクターに我侭を言っているのですか？」

「む、何だ全員揃って。俺はこの駄科学者と重大な話をだな――」

「どうせまた無駄な機能をつけろと迫ったのだろう？　私は情けないぞ兄よ」

「む……チンクまで酷いな」

ウーノとチンクに責められ、ハヤトの勢いが削がれる。
次いで口を開いたのは、無表情なセッテとオットー。

「兄様、今度は何をつけてもらおうとしたの？」

「俺も含めたナンバーズ全員で１３体合体できる機能だな。名前はハヤトＤＸ（デラックス）、どうだ、カッコいいだろ？」

「ネーミングセンスが見当たりません、お兄様」

「なぬっ！？　そんなことを言うなんて、お兄ちゃんは悲しいぞセッテ」

「事実ですお兄様。ネーミングセンスを勉強しなおしてきやがって

下さい」

「（、・ω・、）　＜お兄ちゃんなのに」

連続で妹達に責められてたたらを踏むハヤト。
しかし、そこでハヤトに味方が現れた。

「合体機能っすか！？　カッコいいっす！」

「名前はジェネシックセインにしようよ！」

「ふざけんな！　ノーヴェラガンだろうが！」

ナンバーズの3馬鹿……もとい、仲良し3人組のウェンディ、セイン、ノーヴェだ。
3人は目を輝かせて、ハヤトの言った合体機能が搭載された自分達に思いを馳せている。

……だから無理だって。
お前ら殆どは生身だろうが。

まあ、こんな感じで今日も今日とてスカリエッティ家は平和である。

CASE.2『対機動六課戦での一幕』

side―

「くっ……！」

「おのれ……」

フェイトとシグナムは、己の前に立つ男を睨みつける。
自惚れていたつもりはない。
だが、まさか自分達2人が組んで尚、傷一つ付けることができない相手がこの世界にいたという事実が、信じられない。

「えーと、そろそろ本気でやってくんない？」

「「っ！！」」

男の言葉に、2人の表情が厳しいモノに変わる。
彼女達は決して手を抜いたりはしていない。
全力、しかもリミッターも外したまさに全開状態での全力だ。

「残念だが、これが私達の全力だ」

「あ、そうなの？　悪い悪い、あんまり手ごたえないから様子見かなんかかと」

「貴様っ！」

「……ＩＳ『ライドインパルス』」

男の言葉に激昂したシグナムが斬りかかる。
だが、レヴァンティンは男に触れることなく、虚しく空気を切り裂いた。

「なっ――「遅いですぜピンクの姉さん」――っ！？」

驚愕した刹那、真後ろ、しかも息が掛かる程の距離から声が聞こえた。
全身が総毛立ち、シグナムは「殺られる」と確信する。
だが、襲ってきたのは刃物の感触でも、拳の感触でもなかった。

もにゅん

「ひゃあっ！？」

「ふむ、コレは中々……」

もにもに
むにゅむにゅ

「なっ……あぅ、んっ……ちょっ、やめっ……やめろっ！！」

「おっと」

いきなり胸を後ろから揉みまくられ、シグナムが真っ赤な顔をしたまま剣を振るう。
男は手を離して即座に距離を取る。
シグナムは左腕で胸を庇いつつ男を睨む。

「な、ななな何のつもりだ貴様っ！」

「ん～……９０、いや９２のＥと見た！」

「っ！？」

今度はサイズをピタリと的中させられ、目を白黒させる。
なんと言うか、さっきまでの緊張感が台無しな光景だった。

「貴様っ！　戦いの最中に、なんてはは、破廉恥な！！」

「まあまあ、そんな怒らないで。俺は賞賛しますよ、貴女の胸を。

そこまで形と大きさを両立させている胸は、ウチの妹を除いてはそうそうお目にかかれるもんじゃない」

「きき貴様ぁぁぁっっっ！！」

「ＩＳ『マインドジャック』」

恥じらいで真っ赤になったシグナムが斬りかかろうと瞬間、ハヤトが己に搭載された独自のＩＳを発動させる。

ＩＳ『マインドジャック』。

一言で言うなら、相手の精神状態を自分の好きなように操るスキルだ。

それによって、男はシグナムを強制的に眠らせる。

ちなみに、眠らせた際に前のめりに倒れるシグナムを抱きとめ、ちゃっかり胸を揉むのは忘れない。

この男、マジで最低である。

そしてシグナムをその場に横に寝かせてから、フェイトの方を振り返る。

「よし、じゃあ次はそっちの金髪の嬢ちゃんだ」

「ひっ！？」

手をワキワキと動かしながら、いやらしい笑みを浮かべる男に、フェイトが涙目になって小さく息を呑む。

フェイト＝Ｔ＝ハラオウン。当年とって１９歳。

いまだに男に身体を触られたことは勿論、キスだってしたことがない汚れを知らない乙女である。
自分がこれから、シグナムがされた事を自分もされるのだと思うと、涙と身体の震えが止まらない。

「ふふふふ……さあ、覚悟してもらおうか……」

「や、やぁ……こないで……」

イヤイヤと頭を振るフェイトに、ジリジリと近付いていく男――
もういいやハヤト。
その顔は完全にエロオヤジのそれであり、彼が最強でさえなければ即座に逮捕されて留置所行きになるだろう。

「し、シグナム、助けて！」

「……」

必死で助けを求めるも、シグナムは眠ってしまっているので助けは望めない。
なのはや他の皆は現在遠くで戦闘中。
まさに絶体絶命（貞操的な意味で）である。

「それでは！　いっただっきま～す！！」

「いやあああああっっっ！」

「「何をしているかあああああああああっっっっ！！！！！」」

「ぐべぅっ！？」

ハヤトが飛び掛かり、フェイトが恐怖のあまり目を閉じて叫びを上げた瞬間、爆発音と何かをぶん殴る音と共にハヤトが吹っ飛んでいく。

フェイトが恐る恐る目を開ければ、そこには肩で息をしているトーレとチンクの姿。

ハヤトはどこに行ったのかと視線を動かせば、遥か彼方で真っ黒焦げになってピクピク痙攣している。

「兄上！　セクハラはやめろと何度言えばわかるんだ！？」

「私達が恥ずかしいだろうが！」

「うぐはっ、ご、ごめっ……げぶっ、ごめんな……ごはっ、さい」

トーレとチンクにガスガスと蹴られながら謝罪するハヤト。

それを聞いてから、２人はフェイトとシグナムの方を向いて深々と頭を下げた。

「ウチの兄上が失礼なことをした。許して欲しい、このとおりだ」

「兄には後でキツイ灸を据えておく。だから、どうか許してもらえないだろうか？」

「え？　あ、えと……はい」

「許してくれるか。ありがたい」

「本当にすまなかったな。では、私達はこれで」

もう一度深く頭を下げて謝罪してから、２人はボロボロのハヤトを抱えて立ち去った。

それを見送ったフェイトが我に帰ったのは、それから数十分後のことだったと言う。

どっとはらい。

ＣＡＳＥ．３『ルーテシア達との一幕』

ｓｉｄｅ：―

「おーっす、元気かルールー、アギト、あとゼストのおっさん」

「む。ハヤトか」

ルーテシア達が湖の湖畔で身体を休めていた時、地面からハヤトの頭が生えた。

ＩＳ『ディープダイバー』で地面の中を移動してきたのだろう。

普通に歩けばいいのに。

「あれ？　おっさん一人？　ルールーとアギトは？」

「２人ならば向こうで顔を洗っている頃だ。少し待てば帰ってくる」

「ふーん。なら待たせて貰おうかね」

地面から身体全部を出して、ゼストの座る倒れた木の幹に腰掛ける。

ゼストはそんなハヤトから目の前で湯気を立てている料理に視線を移す。

今日の朝餉は彼が当番だったようだ。

「おっさんて料理できたのな」

「まあな。長いこと独り身ならば、自ずと出来るようになる」

「ウチは可愛い妹たちが作ってくれるからわからんねぇ。ああ、あいつらは将来いい嫁になるぞ～」

「……相も変わらず、お前は兄馬鹿だな」

「妹を愛でない兄がいるものかよ。特に俺は１２人だぞ？　シスターなプリンセスだぞ？」

「言っている意味がわからん」

呆れているような声ではあるが、ゼストの顔は笑っている。

ゼストはナンバーズやスカリエッティを信じてはいないが、このハヤトという青年には僅かながら好感を持っていた。

「あ……ハヤトだ」

「何だよハヤト、なにしにきやがった！」

そこに、顔を洗ってきたルーテシアとアギトが戻ってくる。

のっけからアギトが喧嘩腰なのは、まあハヤトとアギトが喧嘩友達だから、と思ってもらえばいい。

２人なりのコミュニケーションなのだ。

「ちょっとルーテシアに頼みたい事があってきたんだよ。

今度レリック確保する時に、ルーテシアの力を貸して欲しくってさ」

「……それは、スカリエッティの指示か？」

「んにゃ、俺の独断。俺ちょっと行けなくなってさ」

「なんでルールーがお前の手伝いなんかしなくちゃならねーんだよ！
お前は最強なんだろ？　なら自分でやった方がいいだろうが！」

「うっせー！　その日は新作ゲームの発売日だから、朝イチで並ばなきゃいけねーんだよ！
レリックとかに構ってる余裕なんぞあるかぁ！！」

ゲームに負けたレリックは涙目だ。
ゼストは呆れた顔をして溜息を吐き、アギトは「お前馬鹿だろ？」と驚いた顔をした。
というかそんな事を大声で言うなと言いたい。

「で、どうだルーテシア？　やってくれるか？」

「……私の分も、買ってきてくれるなら」

「なっ！？」

「ルールー！？」

予想外のルーテシアの返答に、ゼストとアギトの2人が驚愕する。
だが、すぐに思い出した。
ルーテシアはハヤトに出会って以来、無類のゲーム好きになってしまっていたのだと。

「勿論ルールーの分も買ってくるぞ。しかも限定版だ！」

「……わかった。頑張る」

「よーっし契約成立！　じゃあ後はゲームやろうぜー。今日は一日暇でさぁ」

「うん」

「まて、ゲームは朝食を摂ってからにしろ」

どこからともなくＢＳＰを２つ取り出したハヤトに、ゼストが厳しい声で注意する。

ルーテシアが「でも」と反論すれば、「行儀が悪いぞ」と嗜める。

まるでお父さんみたいだ。

「あー、そっか。ルールーは朝飯まだだったよな。じゃあ俺待ってるからゆっくり食べていいぞ」

「……残念」

「まぁまぁ。今日は一日時間あるし、のんびりとやろうぜ」

「そう、だね」

「あ、じゃあ飯の間ガリュー貸してくれよルールー。アイツ結構格ゲーうまくってさぁ」

「いや、お前ガリューにまでゲームやらせてんのかよ!?」

「やらせてるぞ。アイツ意外と上手くてな、丁度いい練習相手だ」

「妹達は弱くて練習にならないからなぁ」などと続けるハヤトに、アギトは開いた口が塞がらなかった。

ガリュー＝孤高の戦士というアギトの中にあったイメージが、ガラガラと音を立てて崩れていく。

そんなアギトを見て、ゼストは最早苦笑するしかできなかった。

「この身は既に滅んだ身なれど、こういった空気に身を置くのも……悪くない」

そう、小さく呟きながら。

ｓｉｄｅ：―　了

ハヤト

「えーっと、部隊長。何ですかコレ？」

八神
「『可能性の瞳』っちゅーロストロギアやな」

ハヤト
「ロストロギア？　勝手に使っていいんですか？」

八神
「まあ危険性皆無やから構わんやろ。
コレは、こうやって“あったかも知れない可能性”を覗き見るだけの装置やし」

ハヤト
「へぇ～。で、これが俺の可能性の一つだと？」

八神
「そやね。しかしハヤト君が最強になるとタチ悪いなぁ。
最強の力使ってセクハラし放題かい」

ハヤト
「うーん。そう考えるとこっちの方が良かった気が……」

シグナム
「ほぅ？」

フェイト
「へぇ？」

ハヤト

「!?　し、シグナム副隊長!?　それにハラオウン隊長も!?」

シグナム
「主に呼ばれてきてみれば……“可能性のお前”は、随分と面白いことをしているようだなぁ?」

ハヤト
「いや、アレは俺じゃないですよ!　俺じゃないですから!!」

フェイト
「でも、ハヤトもやってみたいと思ったんだよね?」

ハヤト
「そりゃまあ俺も男の子ですか……ら……ハっ!?」

フェイト
「ハヤト……少し、頭冷やそうか?」

ハヤト
「ハラオウン隊長!　それは貴女が言っちゃいけない気がします!!」

シグナム
「問答無用。主、訓練スペースを暫く借ります」

八神
「ええよー。どれくらい?」

シグナム
「そうですね……少し短いですが４時間ほど」

ハヤト
「４時間！？」

フェイト
「駄目だよシグナム、そんなんじゃ全然足りないよ。最低でも１２時間はないと」

ハヤト
「半日！？」

シグナム
「それもそうだな。主、よろしいですか？」

八神
「オッケーやで。存分に暴れておいでー」

シグナム＆フェイト
「了解」

ハヤト
「了解しないでぇぇぇっっっっ！！！！」ズルズルズルズル……

八神
「こら面白いロストロギアやな。どれどれ、次はどんなんが見れるんかな……？」

以下次回！

番外編６　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その１』（後書き）

いよいよ始まりました。
お気に入り登録２００件突破記念番外編『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ』
。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「ライトニング隊長陣に半殺しにされたハヤトです」

さて、普通なら番外編は俺達だけなんけど、今回はゲストを呼んでみたよ。
ＷＯＬＦＡＮＧ－ウルファング－　～狼男は不良青年～　の主人公、月臣輝刃さんです！

輝刃
「よう、邪魔するぜ」

ハヤト
「輝刃さんパネェっす！」

輝刃
「何だいきなり」

ハヤト
「え？　だって不良なんですよね？
カツアゲしたり、毎日血みどろの喧嘩をしたり……」

輝刃

「いつの時代だ。というか、俺は別にそういった不良じゃない。人よりちょっとスレている程度だ」

ハヤト
「そうなんですか。すいません」

輝刃
「構わないさ。
それで番外編だが……可能性の一つとは言え、これは酷いな」

ですよねー。
最強でスケベとかマジ手に負えない。
ちなみに設定として、このハヤトは機動六課の女性陣の胸を殆ど揉みます。
キャロとかも。

輝刃
「ロリペド野郎か」

屑野郎ですよ。

ハヤト
「俺のことじゃないのに酷い言い草だ！」

輝刃
「まあそれはいいとして、今回は随分と更新が早かったようだが……」

ええ。
なんせ今回のネタって、今の『とある新人の日常』とどっちを書く

かって思って考えてた案の一つとモロ被りだったんで。
最強、戦闘機人、スカリエッティ陣営って感じで。

ハヤト
「何でそっちを書かなかった！
そうすれば俺は今みたいに読者の皆から馬鹿にされないで済んだのに！
そしておっぱいを一杯揉めたのに！！」

最強オリ主モノが多かったから、同じようなネタだと目立たないかなぁって……。
まあ、今のお前がこんなに弱いのはその反動ですね。

輝刃
「ふむ。最強の反対で最弱、という考えにはならなかったのか？」

最弱モノも結構見ますからねぇ。
だからその中間、強くもないし弱くもない今のハヤトに落ち着いた訳ですよ。

ハヤト
「そーなのかー」

ルー○ア乙。
いや、俺東方あんまり詳しくないよ？

輝刃
「あまりネタを振られても困るんだが……」

ハヤト

「おっとすいません。いやぁ、ついついボケたくなっちゃって」

輝刃
「まあ構わないが。
それにしても、スカリエッティ陣営は随分と性格が変わっているな。
ハヤトも本編に比べて１０歳以上年をとっているし」

ハヤトがプロトタイプで長兄って設定でしたから。
そうなると、ウーノさんの外見年齢から考えて２７，８歳が妥当かなと。
性格に関しては……「ハヤトだから」としかｗ

輝刃
「あぁ……それは納得だ」

ハヤト
「納得しちゃうんだ！？」

輝刃
「今までの自分の行動を振り返ってみるといい」

ハヤト
「……（振り返り中）。オーケー、納得した」

さて、ハヤトも己の愚かしさを自覚したところでお時間です。
では最後に次回予告&番宣のお時間！

ハヤト
「まず次回予告から。

次回のネタは

『ハヤトがはやてと付き合ったら』と
『ハヤトが隊長3人とフラグを立てたら』の2本立てを予定！

ってうわ……これはまた甘ったるくなりそうな……」

輝刃
「では次に俺が出ている小説の宣伝を少しさせて貰おう。

突然だが皆に問う。皆は【狼男】を知っているだろうか？
『はぁ？そんなの、絵本やライトノベルなんかに出てくる空想の存在じゃん。』　皆口々にそう言うだろう……
でも、もしその【狼男】が身近な所に居たらどうする？
この物語は、そんな【狼男】と周りの人間達が織りなす奇妙極まりなくもどこかほんのりとした物語――――

リリカルなのはとは関係のない完全なオリジナル小説だが、もし気が向いたら読んで欲しい」

はい。それでは終了のお時間です。
輝刃さん、本日特別ゲストありがとうございました～！

ハヤト
「恒例のお土産ですが……今回はコレ！

（、・ω・、）　つ【ほねっこ】

どうぞ！」

輝刃
「……どういうつもりだ？（怒）」

ハヤト
「え？　いや人狼だから、こういうの好きかなって……」

輝刃
「屋上に行こうぜ……久しぶりに……キレちまったよ……」

ハヤト
「画太郎先生！？」

あーあ。馬鹿だねぇ。
ボケないで最初からこの【銘菓“らいかん”】を上げておけばよかったのに。

さて、ハヤトが屋上に連れていかれたところで今回は終わりです。
あ、あと作中のシグナムのバストサイズは作者の妄想で、実際のシグナムとは一切関係ありません。ご了承ください（笑）
それではまた、次の番外編で。

月光閃火さん。
出演が遅れて申し訳ありませんでした。
あと、輝刃さんがこんな扱いですいません！（汗）

番外編7　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その2』（前書き）

※糖分注意
対策を十分に取ってからお読みください。
あと、今回はちょいエロかもしれません。

番外編7　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その2』

歴史に“ＩＦ”は存在すれど、それはあくまで“ＩＦ”であり、現実ではない。
これは、そのＩＦが現実となったお話。

もしも、ハヤトが八神はやてと恋仲になったら。
もしも、なのはとフェイト、はやての3人がハヤトに好意を持ったら。

これは、そんなとりとめもない可能性のお話。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
番外編7　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その2』

・もしもハヤトとはやてが恋人だったら

○あるユニゾンデバイスの証言
※本人のプライバシー保護の為、映像と音声に加工を施してあります。

「そりゃあ、はやてちゃんだって女の子ですから、ハヤトと仲良くするのはいいと思うですよ？
でも、リ○○がいつも一緒だってことを忘れないで欲しいですぅ。
いくらなんでも、いきなり目の前で……その、１８歳未満お断りなことを始められるのは困るですよ。
え？　止めないのか……ですか？
そんなのとっくに試したです！
前に一度、ちゃんと飛び出して「やめるです！」って言ってみたですよ。

結果ですか？　スルーですよスルー。
○○ンの存在なんて完全に無視しておっぱじめやがったですよ！！
２人とも完全に別空間を作っちゃって……。

あそこまで完璧に無視されたのは久しぶりです。
本気で心が折れたですよ……（泣）

それ以来、２人が一緒に居る時は○ィ○のお家に隠れて耳栓してるです。
え？　耳栓が必要な理由ですか？
はやてちゃん、意外と声が大きいのですよ……」

○ある烈火の将の証言
※本人のプラシバシー（以下略

「主が幸せならば、私から言う事は何も無い……と、言いたいのだがな。
せめてＴＰＯは弁えて頂きたいものだ。
業務時間内に、わざわざ執務室に鍵をかけてまで逢引きなど……。
いくら注意しても主は聞き入れてくれないし、ハヤトの方を注意したところで主が怒るだけなのでな。
我々としてもほとほと手を焼いている状況だ。
以前緊急出動があった時に、乱れた服装で２人が現れた時はさすがに呆れてしまったぞ。
とはいえ、どちらも業務はキチンとこなしているから余計にタチが悪い。
まったく頭が痛い……」

○ある湖の騎士の証言
※本人（以下略

「羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい。
妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい。
憎らしい憎らしい憎らしい憎らしい憎らしい憎らしい。
私だって私だって私だって……（ここで映像は途切れている）」

○ある鉄槌の騎士の証言

※ほ（以下略

「あぁ？　はやてとハヤト？
付き合ってんだろ？　あたしがどう思うか？

んー、まぁはやてが幸せならなんでもいいや。
シャ○が黒くなるから、あんまシャ○の前でイチャイチャしないで欲しいけどな。
あたし？　あたしは別に気にしねーぞ、大人だしな。

まぁ、エリオやキャロみたいなガキの前では、さすがに控えた方がいいと思うけどよ。
シ○○ムが言っても無駄だったみたいだし、あたしが言っても無駄だろ」

○あるエースオブエースの証言
※（以下略

「はやてちゃんとハヤト君？
う～ん……仲が良くていいんじゃないかな？
ヴィヴィオが居るところでキスしたりするのは、教育上良くないからやめて欲しいかな。

え？　羨ましくないのかって？
別に平気だよ？
何でって……はやてちゃんが幸せなら、私は構わないもん。

2人とも仕事はちゃんとしてるし、その上で仲良くするなら別にいいんじゃないかな？」

○ある雷神の証言
※（以下略

「は、ははははやてとハヤト！？
べべ、別にいいんじゃないかな！？
ろ、廊下でキスしてても、その……シャワー室で（バキューン）をしてても！
ああああ慌ててなんかないよ！？
その現場を見ちゃって、はやてからキツく口止めなんてされてないよ！？

されてないってば！！
……え？　はやて！？　何でここに！？
ちが、違うよ！　喋ったりしてないよ！　やめ、やめ……アッー！！！

（ここから先は映像が乱れて確認できない）」

○あるヘリパイロットの証言
※別に保護しなくていいんで加工なし

「羨ましいんじゃボケぇぇっ！
朝から晩まで年中無休でいちゃつきやがって！！
アレは何だ！？　俺達彼女いない奴らに見せつけてんのか！！？
所構わず、時間さえあればイチャイチャイチャイチャしやがって
！！

あぁ！？　部隊長は別にいいよ！　ハヤトだハヤト！！
あんにゃろう、最近は口を開けば「はやてさんがはやてさんが」
って惚気話ばっかしやがる！！
しかも部隊長の圧力があるから嫉妬委員会も動けないときてやが
る！！

委員会さえ動けばアイツを暫く足腰立たなくしてやるってのに！！
それが無理でも、暫く嫌がらせしてやるってのに！！

くあああああああムカつくぅぅぅっ！！！

ん？　何で逃げてんだよ。
後ろ？　後ろに何が……って部隊長！？

違います！　今言ってたのは別に本心じゃなくてですね！
別に本気でハヤトに何かしようってわけじゃ「遠き地にて、闇に
沈め――」うわあああああ！！

（映像はここで途切れている）」

side：―

機動六課部隊長オフィス。
そこにあるソファーに座って、はやてとハヤトの2人が乱れた衣服を直している。
何をしていたのかは――まあ、ご想像にお任せしよう。

「ったく。俺は書類届けにきただけなのに……また文句言われるじゃないですか」

「えへへ、ゴメンなー？」

「まあ流されたのは俺ですから、はやてさんが悪いとは言いませんけどね」

「そうか？　ハヤト君は優しいなぁ。だから大好きや」

頬を赤くして笑うはやて。
ハヤトはその笑顔に少し見惚れてから、我に帰って慌てて視線を逸らす。
そんなハヤトを見て、はやてが面白い玩具を見つけた、という顔で笑う。

「何や？　ハヤト君は私が好きじゃないんか？」

「そ、そんなことある訳ないじゃないですか」

「ならちゃんと口で言ってくれな」

「……き、ですよ」

「んー？　聞こえんなぁ？」

「俺も好きですよ、はやてさん。これでいいッスか？」

「んふふ～♪　合格や♪」

その答えに満足したのか、幸せそうな笑みのまま正面から抱きつく。

ハヤトはそれを受け止めて、そのまま唇を重ねる。

……なんだろう、この腹の底から湧き出る言い知れぬ感情は。

「っと、そろそろ本気で戻らないと」

「えぇ～？　もうちょっとええやん。ハヤト君成分を補給させてぇな」

「いや、これ以上はマジで怒られますって。シグナム副隊長にもこの間怒られたばっかでしょ？」

「えーの！　部隊長の私がええ言うてるんやからえーの！

ハヤト君はシグナムと私と、どっちの言う事聞くんや？」

「……そりゃ、はやてさんですけど」

「ならもうちょっとこのまま！　部隊長命令や！」

「……はいはい」

溜息を吐いてはいるが、ハヤトの顔も満更では無さそうだ。

そのまま2人は抱き合ったまま暫く過ごして……ハヤトがはやてを座っていたソファーに押し倒す。

そうして2人の影が重なって――

――結局ハヤトが仕事に戻ったのは、それから更に2時間後だった。

ハヤトもげろ。

※おまけ　その頃のリィン（ｉｎリィンハウス）

「うわー、うわー……」

顔を赤くしながらも、しっかり全貌を見ていた。

◇◇◇◇◇

はやて
「……（真っ赤）
こ、これは無かったことにしよか！　うん！」

と、ここでオフィスのドアが開く。
入ってきたのはティアナとスバル。

ティアナ
「部隊長、呼ばれたので来ましたけど……」

はやて
「うひゃあっ！？」

スバル
「うひゃあ？」

はやて
「……ごほん！　な、何でもないよ？」

ティアナ
「はぁ。それであの、何の御用ですか？」

はやて
「えーとな。２人に面白いモン見せたろ思って呼んだんよ」

スバル

「面白いモノ？　それって、その丸いガラス玉ですか？」

はやて
「せや！　これは“可能性の瞳”っちゅーロストロギアでな……（説明中）……という訳や！」

スバル
「面白そうですね！」

ティアナ
「えと、それの機能はわかりましたけど……あたし達に何を見せたいんですか？」

はやて
「ありえたかも知れん“ハヤト君の可能性”や。どや？　見たいやろ？」

ティアナ&スバル
「「（可能性ってことは……あたしと結婚した未来が見れるかも！？）
　是非、是非見たいです！！」」

はやて
「ほんならいってみよー！」

ティアナ&スバル
「「おー！」」

◇◇◇◇◇

・もしもハヤトが、なのは、フェイト、はやての3人とフラグを立てていたら
ＣＡＳＥ．１『高町なのはのアプローチ』

「は、ハヤト君。今日お昼一緒にどうかな？」

「え？　あ、別にいいですけど。どうしたんスか？　いつも訓練の後は大体一緒じゃないですか」

「そ、それはそうなんだけど……えとその、今日は2人っきりで……じゃ、駄目かな？」

「は！？」

いきなりのお誘いにハヤトが目を丸くする。
一方なのはと言えば、顔を真っ赤にして俯いてしまう。
ちなみに今は個別訓練の最中なので、この場に2人以外の人間は居ない。

だからこそ、こんな大胆な誘い（なのは基準）を出来た訳なのだが。
惜しむべきは、余りにもタイミングが唐突すぎたことだろうか。

「いや、それは嬉しいですけど……ヴィヴィオはいいんですか？」

「う、うん。ヴィヴィオはフェイトちゃんが相手してくれるって言ってたし……」

「そうですか。ならまあ、いいですよ。
でも、食堂じゃ結局全員と一緒なんじゃ？」

「うん。だからね、今日は私がお弁当つくってきたの！」

「隊長って、料理できたんですね」

「あ～、酷いなぁ。私が料理できないって思ってたの？」

「そういう訳じゃ……ただその、ちょっと意外だなって」

訓練の手を止めて、２人だけの世界を作り出すハヤトとなのは。
その後ろで、フェイトが木の陰から見ているのだが……今の２人は気付かない。
挙句に隠れている木の幹の一部分を握りつぶしているのだが……気付かない。気付かないったら気付かない。

「そ、それじゃあ訓練が終わったらまたここに集合ね！」

「了解です。隊長の手作り弁当、楽しみにしてるッス」

「うん！」

ハヤトの答えに、なのはが幸せ一杯の笑みを浮かべた。
瞬間、フェイトの隠れていた木が真っ二つにへし折れたのだが…
…2人はそれでも気付かなかった。
ありえないだろ。

CASE．2『フェイト＝T＝ハラオウンの全力』

「どうしたらいいかな……」

フェイトは考えている。
自分の親友で、今は恋敵である、なのはとはやてに自分が勝る部分はどこなのか。
積極性では恐らく勝てない。

元々彼女は自分から何かをする、ということは苦手である。
更にそれが恋ともなれば、最早お手上げ状態だ。
彼女なりに、一生懸命シャーリー達に相談したり、その手の雑誌を読んだりしたのだが、イマイチピンとこない。

だから、まずは自分が恋敵に勝っている部分を見つけようと思った訳だ。

「料理は……はやてもなのはも凄く上手いから無理。家事も、出来なくは無いけど、はやてに比べたらどうしても……。ハヤトはゲームが好きみたいだけど……私、全然やったことないし……」

必死になって記憶を洗い出し、自分が恋焦がれる少年の好みを思い出していく。

そこで、ハヤトが好きで、かつ自分が他の2人よりも圧倒的に勝っている部分を発見した。

「これだ！」

手を握り締めて立ち上がり、そのままハヤトが今いるであろう場所――訓練スペースへと走り出した。

◇◇◇◇◇

「ハヤト！」

「？　あれ、ハラオウン隊長。どうしました？」

訓練を終え、ティアナ達と模擬戦の反省をしながら汗を拭いているハヤトに、全速力で走ってきたフェイトが声をかける。

呼ばれたハヤトは驚いた顔で振り返って、肩で息をしているフェ

イトの側に歩み寄った。
そんなフェイトを見つけたなのはも、何事かと近付いてくる。

「はぁ……はぁ……ハ、ハヤト……」

「ハラオウン隊長、一度落ち着いてください。
はい、これ飲んで」

「あ、ありがと……」

差し出されたスポーツドリンクを漢らしく一気に飲み干し、息を整えたフェイトはハヤトの肩を掴む。
そして、一回深呼吸をしてから意を決して――

「ハヤト」

「は、はい」

「私の胸、す、好きにしていいよ！」

痴女も裸足で逃げ出すような台詞を、訓練スペースに響き渡るぐらいの音量で叫んだ。
そして……訓練スペースの時が止まった。

「「「「「「……」」」」」」

ハヤト達フォワード陣＋なのはの６人は、全員が目を点にしてフェイトを見ている。
しかし見られているフェイトの方は、もう色々とテンパっていてハヤト以外は眼中に無い。
そしていつまでも黙っているハヤトに業を煮やしたのか、今度は睨みつけるようにハヤトの顔を見て、もう一度口を開く。

「ハ、ハヤトは大きい胸が好きなんでしょ！？」

「いや……はぁ、まあ好きですけど……え？　何？　どういうこと？」

「フェイトちゃん！　抜け駆けはズルイよ！！　ハヤト君、私の胸も好きにしていいよ！！」

「は！？　た、高町隊長まで何言ってんスか！？」

「なのはよりも、私の方がおっきいもん！　ハヤトは私の胸の方が好きだよね！？」

「大きさなんかより機能美なの！
ハヤト君はそれを知らないだけで、私がこれからじっくりねっとり教えてあげるの！」

対象であるハヤトを置き去りにギャーギャーと言い合いを始めるなのはとフェイト。

取り残された4人のフォワードは、それぞれが持っていた2人に対する憧れが、音を立てて崩れていくのを認識し、がっくりと肩を落としていた。
エリオとキャロに至っては少し涙ぐんでいた。
……マジで何してんですかフェイトさん。

CASE．3『八神はやての暴走』

『ハヤト＝ロックウェル、ハヤト＝ロックウェル。至急部隊長室まで来るように、繰り返す……』

「あ。ハヤト、呼ばれてるよ」

「……またか」

放送を聞きながら、モニタを叩いていた手を止め、ハヤトが深い溜息と共に立ち上がる。

「じゃあ俺、ちょっと行ってくるわ。
そんなかかんねーとは思うけど、もし遅くなった時は俺の分の書類も頼むな」

「はいはい。わかったからさっさと行きなさいよ」

「悪い、じゃあ頼むなー」

ティアナ達にそう言い残して、事務室を出て行く。
そして、少し急ぎ足で部隊長室へと向かうのだった。

◇◇◇◇◇

「部隊長、ハヤトです。入りますよ～？」

ノックをして、一声かけてから中に入る。
すると、そこには神妙な顔をしたシグナムとヴィータ、そして嬉しそうに笑うはやての3人が居た。
異様な空気に怯えつつ、はやてのデスクへと近付いていき、はやてに話しかける。

「えーと、何か用でしょうか？　俺、今事務仕事してたんスけど」

「ハヤト君」

「はい」

ハヤトの言葉を遮るようにはやてが口を開き、言葉を途中で止めてハヤトが頷く。

そんなハヤトを楽しそうに眺めつつ、はやてが続けた。

「今日の午後、私と一緒にデートせぇへん？」

「……いきなりなんですか？」

「何って、デートのお誘いやん」

眉を潜めるハヤトに、あっけらかんと答えるはやて。
横に控えているシグナムとヴィータは、ハヤトに複雑な感情のこもった視線を向けている。

「いや、まあそれはわかりますけど、唐突すぎません？
あと何で俺なんですか？」

「そんなん、私がハヤト君のこと大好きやからに決まってるやんか。
もう、女の子から告白させんといて～な」

頬に手を当てて可愛らしく頭を振るはやて。
だが悲しいかな、ハヤトもシグナムもヴィータも、気の毒そうな目ではやてを見るだけだった。
ここ最近、連日のように繰り返されたはやての呼び出しと告白。

一応本気だとはわかっているのだが、こう毎日仕事を中断して呼び出されては辟易するのが人情だろう。
最初こそ真っ赤になっていたハヤトであったが、今となっては半

分呆れている始末。

「はぁ……じゃあ、俺はこれで」

「ああ。手間をかけてすまなかったなロックウェル」

「いえ、副隊長達も大変スね」

「……言うな」

未だに幸せそうに笑いながら頭を振っているはやてを置いて、ハヤトは部隊長室を出て行く。

残ったシグナムヴィータは、この後一人盛大に落ち込むである主への対応を思って、頭痛がする頭を押さえた。

落ち込むくらいなら、最初からもうちょっと真剣にやればいいのに……と思いつつ。

◇◇◇◇◇

はやて

「あー……えっと」

ティアナ&スバル

「「……部隊長」」

はやて

「は、はい！」

ティアナ
「これって、別に“今のハヤト”とは関係ないんですよね？」

はやて
「そ、そうやね。あくまで“可能性”の話やし！」

スバル
「でも、それってつまりこれから先、これに映ったとおりのことが起きる“可能性”もある訳ですよね？」

はやて
「……えぇと」

ティアナ
「部隊長、あたしは……信じてますよ？」

スバル
「あたしもです。部隊長」

はやて
「ももも勿論やよ！？　安心して！　な！？」

ティアナ
「そうですよね。安心しました……ところで、ハヤトは今どこに？」

はやて
「た、多分まだ訓練スペースに居るんとちゃうかな！？
フェイトちゃんとシグナムが１２時間で借りて、まだ3時間しか

経ってへんし！」

スバル
「ティア……」

ティアナ
「ええ。ハヤトが妙な気を起こさないように、じっっっっっっっくり“お話”しないとね？」

スバル
「そうだね」

ティアナ
「それでは部隊長、あたし達も訓練スペースに行ってきます」

スバル
「失礼しますね」

はやて
「ちょい待ち！　ティアナ、その鉈どっから出したん！？
そんでスバルもその大量の文房具はどっから出した！？」

ティアナ&スバル
「“中の人”繋がりですから」

はやて
「中の人て何ーーーーっ！？」

ハヤト制裁、現在参加者４名。
残り制裁時間――９時間。

はやて
「え、偉い目にあったわ……私らの見たい内容が見れる訳やないんやな……。
次からは見せる相手はよく選別せな。
ティアナ達みたく恐ろしくなったら楽しむどころとちゃうでホンマ。

さて、次はどんなのかなぁ……？」

以下次回！

番外編7　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その2』（後書き）

完全オリジナルの本編を書くのが難航中。
どうも、ラモンです。
え？　吐糖しないのか？　もう吐くものも残ってないですよ（微笑）

さて、今回も番外編ながらゲストをお呼びしてます。
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～蒼天を愛した混沌～
の主人公。
井上直人さんと、そのパートナーであるユニゾンデバイスのマリカ
さんです！

直人
「久しぶりだな」

あれ？　直人さんだけですか？
マリカさんはどこに？

直人
「マリカなら、あっちでハヤトに説教と拷問をしてるぞ」

え！？

マリカ（鞭装備）
「がみがみがみがみ……聞いていますかハヤト！？」ぴしーん！

ハヤト

「ありがとうございます！」

うわー、何だか見ちゃいけないものを見た気分に……。
あ、でも今回は直人さん的には結構嫌な気分になったんじゃ？
“可能性”の話とはいえ、その、婚約者とハヤトがああいう雰囲気になった訳ですし。

直人
「そりゃあ、確かにムカついてはいるが……今はマリカのターンだ。
俺は作者さんとの対談が終わってから、じっくりと相手をさせてもらうよ（笑）」

こえぇ……。ハヤト生き残れんのか？

直人
「大丈夫だ。本編に差支えが無い程度に留めておくよ」

気にかけてもらって恐縮です。
まあ、アイツはギャグ補正あるんで大概のことは平気ですから、思いっきりどうぞ。

直人
「そうさせて貰おう」

マリカ
「反省が足りませんね……なら次はこのアイアンメイデンで……」

ハヤト
「我々の業界ではご褒美です！」

あぁ……なんでハヤトはあんな子になっちまったのか。
最初はちょっと馬鹿だけど根は真面目って設定だったのに。

直人
「話を書いていくうちにキャラの性格が変動するのは良くあることさ。
　漫画なんかでもあるだろう？」

そんなもんですかね？
まあ、ここまで壊れるのは番外編だけだしいいのかな。
本編では一応元のまま……だと思うから。

直人
「しかし、今回の話はこう……また読者にハヤトの敵が増えそうだな」

今まではティアナとスバルだけだったのに、今回は主役3人娘とですからねぇ。
嫉妬委員会がどんどん増えそうですなw

直人
「というか、あの委員会の委員長と副委員長は誰なんだ？」

委員長は空席で、副委員長はロゥ君ですね。

機動要塞『ロックウェル教本部』を提供してくれた功績を讃えて、作者自ら推薦しました。

直人
「そ、そうなのか……。
今回の話は彼らも随分とストレスを貯めただろうな」

そうですねぇ。
その内ハヤト刺されるんじゃなかろうか。

マリカ
「まさか全身を刺されても平気なんて……なら次は爪の間に竹串を入れますよ!?」

ハヤト
「ゴチになります!」

直人
「なあ、アイツはあれだけの拷問を受けてなぜ平然としてるんだ?
正直気持ち悪いんだが……」

ギャグ補正＋マリカさんが美人だからですかね。
同じことをスカリエッティにされたら、鞭の段階で泣き叫んでますよ。

直人

「筋金入りだな……」

後書きははっちゃけてきてますからねぇ。
本編ではさすがにここまで変態じゃないですよ？

直人
「そうだろうよ。でなきゃ本編が崩壊しかねん」

それよりも、俺はマリカさんがノリノリで拷問してる方が気になるんですが。
マリカさんて、あんなキャラじゃなかったですよね？

直人
「今までハヤトにセクハラを受けた数々の女性から、ハヤトを徹底的にヤれと言われてるそうだ。
あいつもかなり怒っていたし……そのせいじゃないかな」

優しいマリカさんを本気で怒らせるとか……ハヤト、恐ろしい子っ！
さて、それではそろそろ時間ですし、次回予告&番宣のお時間です。

直人
「なら今回は番宣を先にさせてもらおう。
俺が出ている作品は、

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～蒼天を愛した混沌～

これはシリーズモノの3作目にあたる作品だ。

俺こと井上直人と機動六課メンバー。
そして新しく加わった仲間達が、新たな敵に立ち向かう。

もし機会があれば、一作目の
魔法少女リリカルなのは～蒼天に舞う騎士～
から続けて読んでみてくれ」

はい。
では次に次回予告！
次回の『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ』は！
・ハヤトがユニゾンデバイスだったら
・ハヤトがロングアーチだったら
の２本立て！
さらに後書きでは
・ハヤトがはやてとお笑いコンビを組んだら
という“もしもネタ”でお笑いライブをやる予定です。
お楽しみにね！

直人
「され、それじゃ俺もそろそろあっちに加わるかな。
感想で撃った蒼天龍斬波もそろそろ飛んでくるだろうから、合わせてもう一度蒼天龍斬波をお見舞いしてやろう」

わっかりましたー。
後片付けはやっとくんで存分にやってください！

あ、あとそちらの後書きでお土産に貰った『ツンデレのデレがめちゃくちゃでかくなるドリンク』は、今後の番外編ネタとしてしっかり保存させて貰います！

直人
「ああ、有効に活用してくれ。それじゃ、行ってくる」

マリカ
「まだ平気ですか！
主！　ユニゾンして蒼天龍斬波を！」

直人
「わかっている。覚悟はいいなハヤト？」

ハヤト
「マリカさんだけならいつでもどこでも！！」

直人
「……遠慮はいらないようだな」

マリカ
「この駄犬！！」

ハヤト
「狗ですわんわんお！」

……もう、あいつ主人公にするのやめようかな？
読者の皆様はどう思います？
あと秋風さん、マリカさんがあんまり出てなくてすいません。

番外編8　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その3』（前書き）

※あまりに内容が気に入らなかった為、全面的に書き直しました。
ロングアーチ編は結局微妙なままでしたが、他の2編に関してはそこそこになったと思います。
ですが相変わらず馬鹿なネタなので、心を空っぽにして見てくださいね。
また、作中のタイトルは『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その3　リベンジ』となってますが誤植ではありません。
タイトルそのまま『リベンジ』のつもりで書きました。

番外編８　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その３』

歴史に“ＩＦ”は存在すれど、それはあくまで“ＩＦ”であり、現実ではない。
これは、そのＩＦが現実となったお話。

もしも、ハヤトが古代ベルカのユニゾンデバイスだったら。
もしも、ハヤトがロングアーチの一員だったら。
もしも、ハヤトがはやてとお笑いコンビを結成したら。

これは、そんなとりとめもない可能性のお話。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
番外編８　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その３　リベンジ』

・もしも、ハヤトがユニゾンデバイスだったら

※アニメ本編１６話Ｂパート後半あたりの場面を思い浮かべてください。

ｓｉｄｅ：―

宵闇の空を、壮年の男と３０ｃｍ程の大きさの少年が駆ける。
少年の名はハヤト。古代ベルカのユニゾンデバイス、その数少ないオリジナル。
そして男の名はゼスト＝グランガイツ。スカリエッティの協力者であり、ハヤトのロードでもある男だ。

２人は風を切り、時空管理局地上本部へと向かう。
狙うのは、地上本局を支配していると言われる男――レジアス＝ゲイズに会うこと。

『こちら管理局、貴方の飛行許可と、識別信号が確認できません。ただちに停止してください』

「この声……」

以前聞いたことのある声に、ハヤトが眉を顰めた。

『それ以上進めば、迎撃に移ります』

「はっ、知るかっつーの」

「！」

ハヤトがその警告を鼻で笑った瞬間、彼らの下方から１２個の魔力球が襲い掛かる。

ゼストとハヤトは、咄嗟に2手に分かれてそれを避けた。

「んにゃろぉっ！
セイクリッド・クラスターっ！！」

ハヤトの咆哮と共に、１２個の黄金の魔力弾が、飛び去った魔力球へとぶち当たる。
爆発と共に魔力球は消え、仕切りなおしとなる……筈だった。
しかし、ハヤトの予想は裏切られ、爆煙を裂いて１２個の鉄球が2人に迫る。

「実体弾！？」

「っ！」

ゼストが左手を構え、防御魔法を展開し実体弾を防ぐ。

「ギガントハンマァァァッッ！！」

その瞬間、再び下方から咆哮と共にヴィータがグラーフアイゼンを振りかぶって現れた。
刹那、爆音が辺りを揺らし、赤い魔力が暴れまわる。

『外れたです！　相殺と、防御で防がれました！』

「ダメージは通った。なら、次でぶっ潰す！」

ユニゾンしたリィンの言葉に、ギガントフォルムになったアイゼンを構えてヴィータが吼える。

そして、煙が晴れた先――標的であるゼストは、そこに立っていた。

先程とは違い、黄金の甲冑に身を包んだ状態で。

『「……」』

その余りの派手さに、思わずリィンとヴィータは目を丸くした。

それを見て、ゼストが僅かに眉を顰める。

「すまんなハヤト、助かった。

……だが、やはりお前とのユニゾンは気が進まん」

『いっててて……んだよおっさん、まーだこの俺様謹製騎士甲冑に慣れないのか？』

「戦場で、こんな目立つ格好をする馬鹿はいるまい」

『いるよ！　エースってのは目立つ格好をするもんだ！

こないだ見たアニメのエースだって、赤かったり、金色だったりしたからな！』

「……空想と現実をごちゃ混ぜにするな。馬鹿者」

自分の中で騒ぐ連れに、ゼストはやれやれと頭を振った。
ハヤトとのユニゾンは確かに爆発的な戦力アップが見込めるが、このユニゾンデバイスは何かと影響を受け易く、どこかで見てきた――恐らくはスカリエッティのアジトだろう――アニメの影響で碌でもない事を思いつく。
この黄金の騎士甲冑もそうだ。

以前見た何とかというアニメの敵役が着ていた鎧を元に、ゼストの了承無く勝手にデザインしたらしい。
初めてユニゾンしてこの甲冑を見た時、ゼストは驚きの余り思わずユニゾンを解除した程だ。

『なんでぇなんでぇ、おっさんは浪漫を理解しねーから困るぜ。いいじゃねぇか黄金の鎧！　おっさんの渋い顔とマッチしてカッコいいぜ？』

「格好を気にして戦っている訳ではない」

『へーへー。ま、その話は後回しだ、とりあえず今は目の前の厄介者を何とかしようぜ。
なーに。俺とおっさんがユニゾンしたら、勝てる奴なんざこの世にいねーさ』

「……全く、調子のいい奴だ」

『そいつが俺の取り得だかんな！
それに、さっき言っただろ！　おっさんは俺が、何が何でも守ってやるってな！』

「ふっ。そうだったな」

ハヤトの言葉に苦笑しつつ、ゼストは手にした槍型デバイスを構える。
目の前には、熟練の戦士の風格を持つ少女。
だが、不思議と負ける気もしなければ、フルドライブを使わざるを得ない状況になることも思いつかない。
なんだかんだで、自分が随分とハヤトの事を信頼しているのだと気付かされ、ゼストは小さく笑ってヴィータを見た。

「悪いが、最初から全力で行かせて貰うぞ。俺にはやらねばならん事があるのでな」

『歳なんだし無理すんなよおっさん。
ま、俺様がいる限りどんな敵だってラクショーだけどよ！』

「……ああ、頼りにしているぞ」

『応ともさ！』

その声が合図になったように、ゼストの身体から黄金の魔力が噴き出した。

side：―　了

◇◇◇◇◇

はやて
「な、なんや今までと違って随分と真面目な内容やなぁ。
　ハヤト君らしからぬっちゅーか……まぁ、金色の騎士甲冑はらしかったけど」

なのは
「はやてちゃん、フェイトちゃん達知らない……って、何見てるの？」

はやて
「おー、なのはちゃん。丁度ええところに」

なのは
「？」

はやて
「これは“可能性の瞳”っちゅーロストロギアでな……（説明中）
……という訳なんよ」

なのは
「はやてちゃん、駄目だよ？　勝手にロストロギア持ち出したりしちゃ」

はやて
「なんや、なのはちゃんはいけずやなぁ。
ええやんええやん、危険性は無いんやし、面白そうやし」

なのは
「……もぅ。今回だけだよ？」

はやて
「それでこそなのはちゃんや！　じゃあ、一緒に見よか！」

なのは
「ええ！？　わ、私これから仕事が……」

はやて
「そんなん後回しや！」

なのは
「駄目だよ！？」

はやて
「部隊長命令！　一緒に見よ！！」

なのは
「……はやてちゃぁん」

◇◇◇◇◇

・もしもハヤトがロングアーチだったら

ｓｉｄｅ：－

「しょ、書類が終わらねぇぇぇ……」

よれよれになった制服に身を包み、書類の山に沈みつつハヤトが弱々しい声を上げる。

彼のデスクの周りには、何人分なのか判らない書類がうず高く積まれ、さっきからユラユラと揺れている。ちょっとした衝撃で崩れてしまいそうだ。

「頑張ってハヤト君～～、もう、君とグリフィス君だけが頼りなの～～～」

そのハヤトのデスクの隣で、とても年頃の女性とは思えない格好――ボサボサの髪に、ずり落ちた眼鏡、崩れた化粧に、ハヤトと同じよれよれの制服――をしたシャーリーが縋るように声をかける。

彼女の机にも、同じぐらいの量が積まれ、頼りなくユラユラと左右に揺れていた。

辺りを見回せば、あちこちの床やソファ、個人用デスクに倒れ伏しているロングアーチ職員。

何故こんな惨状になっているのか、それには深いようで驚く程浅

い理由がある。
簡潔に言えば、シグナムが処理した事務仕事が、今になって「やり直し」を要求されて戻ってきたのだ。

2日前、突然本局の事務屋から、、

「字が達筆すぎて読めない。てゆーか何故筆で書く」

「今時紙媒体で、しかもかさ張る巻物でよこすな」

「せめて現代の字で書いてください。古代ベルカ文字とか舐めてんですか」

「シグナムさんハァハァ」

「シグナムさん、殴ってください」

など、一部おかしな苦情（？）と共に半年分近い書類が一気に返ってきた。
それを見て、さすがの八神はやても絶句。即座にロングアーチに救援を要請し、現在に至る。
最初こそ「ただ打ち直せば良いから楽勝」と思っていたハヤト以下ロングアーチの面々だったが、いざ始めてみると、これが想定外に面倒な作業だと思い知らされる。

まず、苦情にあったとおりシグナムの文字が達筆すぎて読めないのだ。
万葉集などの原典に書かれている文字を思い浮かべてもらいたい

が、あんな感じの文字が延々と書き綴られている。しかも全てが古代ベルカ文字。

ロングアーチは、まず達筆すぎる文字を読める文字に直し、それから古代ベルカ文字を翻訳する作業をしなければならず、1枚の書類を打ち直すのに、早くても30分はかかってしまうという状況に陥ってしまった。

シグナムに解読させれば楽だろうと思った人もいるだろう。

実際、ロングアーチもすぐにそこに思い至り、シグナムを呼び出したのだが……シグナムは、自信を持って提出した書類が殆ど突き返された事実に、涙目になって自室に引き篭もってしまった。

これによって解読する術を失ったロングアーチは、自力で全ての巻物を解読、翻訳しなければならなくなり、その結果がこの惨状という訳だ。

「本局の奴らめぇぇぇ……呪う、ぜってー呪ってやる」

「いいから手を動かすんだハヤト君」

今この場で何とか動けている数少ない一人であるグリフィスが、一人物騒なことを言い続けているハヤトに注意する。

勿論、その間も作業の手は止めない。

「ロウラン准陸尉、手伝い呼びましょうよ。俺らだけじゃもう限界ですって」

「……知らないのか？」

「何をスか？」

「部隊長は、この5分の1をお一人で処理している。
高町一尉とハラオウン執務官も同じ量を処理しているし、フォワード陣も手伝ってくれている」

「……なんてこったい」

期待していた救援が絶望的であることを知らされ、とうとうハヤトも自分のデスクに突っ伏した。

「せめてデバイスがあれば……まだ何とかなったかも知れないってのに」

「ロングアーチはデバイス無いからねぇ……」

「フィニーノ陸士、アンタデバイスマイスターでしょ？　ちょっと翻訳専用のデバイス造ってくださいよ」

「無理。そんなことしてる間に〆切になっちゃう」

「2人とも、頼むから手を動かしてくれ！」

「「はぁぁぁい」」

涙目になったグリフィスの悲鳴に、2人も泣きそうな声で返す。

デバイスがあれば、古代ベルカ文字を解読し、即座に翻訳してくれるので作業が随分楽になるのだが、生憎と全てのデバイスは使用中。
ロングアーチであるハヤト達はデバイスを持っていないので、自力でやるしかないらしい。
必死になって手を動かすハヤトの目に、一筋の涙が光った。

……てゆーか、これは別にロングアーチでなくても良かった気がする。

side：―　了

◇◇◇◇◇

はやて
「え、えーと……」

なのは
「なんだか、笑えない未来だね」

はやて
「だ、大丈夫や！　シグナムは時間かかるけど、ちゃんと毎回ＰＣでやってたで！？」

なのは
「本当？　私、こんな未来になるのは嫌だよ？」

はやて
「……今度、ちゃんとシグナムに確認しとくわ」

なのは
「それがいいね。
あ、はやてちゃん。また何か映ったよ！」

はやて
「ホンマや。てか、なのはちゃんも何だかんだ言うて、結局乗り気やん？」

なのは
「……い、いいの！」

◇◇◇◇◇

・もしもハヤトとはやてがお笑いコンビを組んだら

はやて
「はいどーもー！　夜天の主と馬鹿変人です。よろしくお願いします～」

ハヤト

「ちょっと待ってくださいよ！　馬鹿変人！？」

はやて
「ん？　馬鹿変人、やろ？ｗ」

ハヤト
「違いますよ！　部隊長酷すぎッス！」

はやて
「なんや、なら一体なんなん？」

ハヤト
「馬鹿凡人ですよ！」

はやて
「馬鹿はええんかい！」

ハヤト
「馬鹿凡人ですよ、全く失礼ですね」

はやて
「馬鹿は認めるんやなｗ　はいはいごめんやで。
では改めまして、“夜天の凡人”です。よろしくお願いしますー」

ハヤト
「はい。よろしくお願いします」

はやて
「いやでも私、管理局勤めてもう１０年になるんやけど」

ハヤト
「そーみたいですね」

はやて
「もうそろそろ、やめようかと思っとるんよ」

ハヤト
「いやいや、何をいきなり。頑張りましょうよ、折角二等陸佐まで昇進したんですし」

はやて
「それがな。夢が出来たんよ」

ハヤト
「夢？　機動六課が夢だったんじゃ？」

はやて
「それはもう叶ったからな。せやから、次はニュースキャスターになろう思ってん」

ハヤト
「それはまた急ですね」

はやて
「そんでな、いきなりなろうっちゅーても無理やから、練習しようと思うんよ」

ハヤト
「練習、大事ですからね」

はやて
「せやろ？　そんでハヤト君には、私がキャスターに向いてるかどうか、見てて欲しいんや」

ハヤト
「わかりました。あ、でも原稿は？　用意してるんですか？」

はやて
「ばっちりや！　ぬかりはないで」

ハヤト
「おお、さすが部隊長。それじゃ、聞かせてもらいます」

はやて
「そんならいくでー！」

暗転→照明点く

はやて
「今晩は、機動六課ニュースの時間です。
まず最初のニュース。

昨日未明からミッドチルダ市街に被害をもたらしたナンバーズですが、今日、次元世界標準時間の午前８時４０分、駆けつけた高町なのは一等空尉らによって、射殺されました」

ハヤト
「待って！？　射殺しちゃったの！？

管理局って非殺傷設定が基本じゃなかったっけ！？」

はやて
「住民に、怪我はありませんでした」

ハヤト
「いや、それで“怪我が無くてよかったね”とはいかないよ！？
射殺しちゃ駄目じゃんか――「次のニュースです」――って無視だよ……」

はやて
「ミッドチルダ北部に、ガリューが出没しました。
町の人々に向かって突然ライ○ーキックを打ち込む等の被害が出たため、かけつけたフェイト＝Ｔ＝ハラオウン執務官らによって、斬殺されました」

ハヤト
「今度は斬殺かよ！　どんだけ殺してんだ！！」

はやて
「ガリューに怪我はありませんでした」

ハヤト
「いやどゆこと！？　誰斬殺したのハラオウン隊長！
それ以前に斬殺しちゃ駄目だって知ってるでしょ！？
高町隊長もハラオウン隊長も勤続１０年ですよね！？」

はやて
「次は、可愛いワンちゃんのニュースです」

ハヤト
「こんだけ血なまぐさいニュースの後にワンちゃんと来たか！」

はやて
「本日、ハラオウン家に住んでいる使い魔のアルフが、赤と青、２匹の子供を無事出産しました」

ハヤト
「うわー、しかも内容が生々しい！
何故身内の出産話をニュースで聞かなきゃならんのだ！」

はやて
「リア充は本気で死んで欲しいですね。今度射殺しようと思います」

ハヤト
「完璧私怨！　しかもテレビで堂々と犯行予告してるし！？
おかしい、おかしい！」

はやて
「なんやねん、これからが面白いんやで？」

ハヤト
「いやいやいや！　そんな物騒なキャスターいねーッスから！
無理無理！　そんなんじゃキャスターになれないですよ！」

はやて
「駄目？」

ハヤト
「駄目ですよ常識で考えて！」

はやて
「駄目か～」

ハヤト
「諦めて昇進目指しましょうよ、ね？」

はやて
「いや！　私はいつか必ずニュースキャスターになる！」

ハヤト
「諦めてないし！　てか、なってどうするんですか？」

はやて
「決まってるやん。あの女――滝川クリス○ルを倒すんや！」

ハヤト
「倒すんかい！」

はやて
「そうや！　私の自慢の、この魔法でな！」

ハヤト
「犯罪者予備軍じゃねーか！　いい加減にしろ！」

はやて
「どうも、ありがとうございました～」

◇◇◇◇◇

なのは
「……凄く生き生きしてるね」

はやて
「いやー、やっぱ関西の血やなぁ」

なのは
「ハヤト君はミッドの人なのに……あ、ところではやてちゃん、フェイトちゃん達は？」

はやて
「ん？　ああ、多分訓練スペースやと思うよ。
多分まだハヤト君のこと、シグナムやティアナ、スバルと一緒におしおきしとるんとちゃうかなぁ」

なのは
「な、何でおしおきされてるのハヤト君」

はやて
「いやー、皆この“可能性の瞳”を見て、そこのハヤト君の行動にご立腹っちゅー訳や」

なのは
「それって、ハヤト君は別に悪くないんじゃ……」

はやて
「せやね」

なのは
「はぁ……私、ちょっと行って止めてくるね。
フェイトちゃんにお仕事の事で聞かなきゃいけないこともあるし」

はやて
「えー、止めてまうの？　面白そうやしほっとけばええやん」

なのは
「はやてちゃん？」

はやて
「あ、あはは。じょ、ジョーダンやないの。いややなぁ、そんな怖い顔して。
美人が台無しやで？」

なのは
「もう。それじゃ、私は行くけど……そのロストロギア、早めに返しておいてね？」

はやて
「了解や～」

なのは
「何か不安だなぁ……」

ハヤト制裁、現在参加者４名。仲裁人、高町なのは。

残り制裁時間――5時間。

以下次回！

はやて
「早めに返すって言うたけど、今すぐ返すとは言ってないからな～♪
さてさて、次はどんなんが映るんかな？
……てゆーか、このロストロギア、ハヤト君専門なんかな。ハヤト君の可能性しか映さんけど」

番外編8　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その3』（後書き）

何とか満足のいく出来になりました。
どうも、ラモンです。

シャマル
「出番と恋人が欲しい！　シャマルです」

またまたどうも、柚姉さん。

シャマル
「だからそっちで呼ばないで下さいってばぁ！」

すいません。
いやー……疲れた。

シャマル
「投稿して、ずーっと悩んだ挙句に一気に書きましたもんね」

ええ。あんな酷い内容のモノをさらし続けるのに耐え切れなくて。

シャマル
「ふぅん。じゃあ、軽く解説でもしてみてください」

あいあい。
まず最初のユニゾンデバイス編。
下手にギャグを入れようとするからおかしくなると気付き、ゼストとだけの絡みにして、シリアスの中にちょっとだけギャグを入れることに。

そしたら驚くほど簡単に書けた。

シャマル
「ゼストさんをギャグに使おうとしたのが間違いでしたねぇ」

全くもってその通り。
そんで、次のロングアーチ編だけど……。

シャマル
「こっちは、書き直してもあんまりパッとしませんね」

そうなんですよね。
ロングアーチって、コレっていう特徴が無くて。
シリアス2連続は微妙かなってことで、印象的に書類仕事ばっかりやってるっぽいから、それに絡めたネタで。

シャマル
「実際のシグナムは、こんな風に巻物なんかでは書類を提出しませんよ？」

皆さん知ってると思いますよ。
最後の漫才ネタは……。

シャマル
「今回は結構いいんじゃないですか？」

そう？　慌ててお笑い系のＤＶＤ借りてきた甲斐があったよ。
喋りのテンポとか、一生懸命研究したからね。

シャマル

「それでこんな時間まで起きてるんですね」

実際、執筆時間よりもＤＶＤ見てる時間の方が長かった気がする。

シャマル
「普通に見てたんじゃないですか！」

いいじゃん！
爆笑オンエア○トルとか、最高に好きなんだよ！

シャマル
「まあ、今回はネタにつながったみたいですから何も言いませんけどね」

そんなこと言う柚姉さんは、二度と本編に出してあげないモン。

シャマル
「あぁん！　そんなこと言わないで出してくださいよぅ！」

はいはい。『その日、機動六課』編では出る予定ですよ。
一応見せ場（？）もありますし。

シャマル
「や、やったぁ！」

よかったね（笑）
さて、次回は

・もしもハヤトが増殖したら
・もしもハヤトが女体化したら

このどちらかを書く予定です。
もし、2本とも書けそうだったら2本書きます。
あまり期待しないでお待ちください。

それと、最初に上げた駄文に感想をくれた方々、ありがとうございます。
そして予告もなしに削除してしまったこと、深くお詫び申し上げます。

それではまた、次の番外編で。

シャマル
「これを読んでる作者の皆さん！　貴方の作品では私を！　私を活躍させてください！
　活躍させてくれたら、手料理をご馳走しますから！！」

いや、だからそれじゃ誰もやらないって……。

番外編9　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その4』（前書き）

※番外編更新が遅くなって申し訳ないです。
とりあえず、今回で『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ』シリーズは終わりです。
それではどうぞ。

番外編9　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その4』

ｓｉｄｅ：―

「んー？　なんや、いきなり何も映らんようになってしもたなぁ」

はやてはそう言って“可能性の瞳”を軽く叩く。
しかし、先程まではっきりと様々な映像を映していた水晶は、何も映さず透明なままうんともすんとも言わない。

「む～……あっ」

焦れたはやてが何度も水晶を叩いていると、ふとした拍子に固定されていた台から水晶が外れ、そのままはやての執務机の上を転がっていく。
はやてが反応できないまま、水晶は机の端まで到達して床へと落ちていく。
そして――ゴトンと大きな音を立てて床と激突し、その表面にヒビが入った。

瞬間、眩い光が溢れ出す。

「な、なんや！？」

視界が白く染まる程の眩い閃光に、はやては思わず目を瞑る。
そして彼女が対応できないまま、部隊長室が白い光に包まれていった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
番外編９　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その４』

・もしも、ハヤトが増殖したら

部隊長室を白く染めていた光は、それほどの時間を待たずに集束、消えていった。

「うぅ……な、何が起きたんや？」

光の眩しさに霞んだ目を擦りながら、現状を把握しようと努めるはやて。
すると、そんな彼女に声をかける者がいた。

「大丈夫ですか、はやてさん？」

「ん？　その声はハヤト君か？　いつの間にこっち戻ってきたん？」

「は？　何言ってんですか。はやてさんが俺のこと呼んだんでしょうよ。

てかなんですかこの状況？　何で俺がこんなに沢山……」

「ハヤト君が一杯て、何訳のわからんこと言うて……え？」

ようやく戻ってきた視界で、声をかけてきた人物――ハヤトを見る。

そして、目に入ってきた光景に言葉を失う。

「お前誰だよ！」

「お前こそ誰だよ！？」

「美少女発見！」

「やめろ！　あたしに触るなボケナスがぁぁっ！！」

「ジャンピングニー！？」

「リインたんとキャロたんはどこだ！？　さっきまで俺とニャンニャンしてたのに！！」

「わんわんお！　わんわんお！」

《アレ!?　ブレイブハートどこ行った!?　ちょ、これじゃ戻れないじゃねぇかよぉぉっっ!!》

そこには、部隊長室一杯に詰まっているハヤト、ハヤト、ハヤト。まあ、ところどころ金髪の美少女や、やたらと喋る赤い宝石の嵌められた指輪、そして金色の体毛を持つ犬などがいたりするのだが、部屋の大半を埋めているのは同じ顔、同じ髪の色のハヤトだ。

「えーと、はやてさん。今度は何をしたんですか?」

「いや……私にも何が何やら……」

混沌としている部屋を眺めながら、隣で困った顔をしているハヤトに答える。

その瞬間、部屋の中を埋め尽くしていたハヤト達が、一斉にはやてのほうを見た。

《「「「「「「どういうことですか部隊長!!（わんわんお!）」」」」」》

「ひぃっ!?」

一度に大量のハヤトに詰め寄られ、はやてが思わず悲鳴を上げる。

そこで、最初にはやてに話しかけたハヤト（以下ハヤトA）が、彼女を庇うように前に立つ。

「落ち着け。まずは何でこんな大量に俺達がここに居るのかを考えよう。
はやてさんを問い詰めるのは、それからでも遅くない」
「む……それもそうか」
「つっても、原因なんて思い当たらないぜ？　俺、さっきまで部屋でボーっとしてただけだし」
「俺はリインたん&キャロたんとニャンニャンしてたんだ！」
「それよりこの美少女誰？　すっげ好みなんだが」
「アタシ？　アタシはハヤト＝ロックウェルだけど」
「「はあああっ！？」」
≪　えーと……一応言っとくと、俺もハヤト＝ロックウェルだ　≫
「わんわんお！　わんわんわんお！」
「えぇい落ち着かんか！　まず現状を整理するぞ！！」
わいわいがやがやと騒ぎ出すハヤト達を、ハヤトAが一喝する。
そして水を打ったように静かになるのを確認してから、全員を見回して口を開いた。

「とりあえず、ここにいる俺達は……そっちの犬やデバイス、女の子も含めて全員“ハヤト＝ロックウェル”ってことで間違いないんだな？」

ハヤトＡの言葉に、はやて以外の全員が頷く。

「そんで、全員がこんな状況になった原因には思い当たるモノはない、と」

ハヤトＡが確認すれば、再びはやて以外の全員が頷いた。
それを見て頷いてからハヤトＡがはやてに視線を向ける。

「はやてさんも、原因に思い当たるモノはないんですよね？」

「え？　えーと……あ、もしかして」

《「「「「「「思い当たる原因でも（わんわんお）！？」」」」」」》

「ひぃぃっ！？」

「だから落ち着け！」

再び全員が詰め寄り、はやてが顔を青くして悲鳴を上げ、それを

ハヤトAが庇う。

「はやてさん。それで、何か思い当たる事が？」

「あ……う、うん。その、それ、なんやけど……」

はやては恐る恐る、床に転がったひび割れた水晶を指差す。
それに全員の視線が集まり、そのまま全員が同時に口を開く。

《「「「「「「……何これ（わんお）？」」」」」」》

「ええとな、それは『可能性の瞳』っちゅーロストロギアで……（説明中）……って訳なんよ」

「なるほど。それで、そのロストロギアがこうやってひび割れている……コレが原因だと？」

「た、多分な」

頷くと、ハヤト達は一斉に顎に手を当てて考え出した。
ある種壮観な図ではあるが、同じ顔（女の子と犬、デバイスもいるが）の人間が同じ行動を取っているのは、はやてからすればちょっと不気味だ。
そんな風に思っていると、ハヤトAが顔を上げて口火を切る。

「俺も、このロストロギアの破損が原因だと思うが……他の意見は？」

「異議なし」

「多分そうだと思うぜ」

「十中八九そうだろうよ」

我も我もと声を上げていくハヤト達。

その声を聞いて、ハヤトAが顎に手を当ててうんうんと頷き、それからはやてに視線を向けた。

「はやてさん、このロストロギアって、直せます？」

「え？　なんやのいきなり」

「……まあ、推論なんですがね。

このロストロギアは、平行世界の“可能性”を映すわけですよね？　ですから、これが破損したことによって、ここに映っていた並行世界の存在である俺達が、こうしてここに召喚されたんじゃないか……って思いまして」

「な、なるほど」

「だから、このロストロギアを直すことが出来れば、俺達も元の世界に戻れるんじゃないかと」

そう言いながら、ハヤトAが床に転がるひび割れた水晶を手に取った。
ひび割れ自体は小さかったが、果たしてロストロギアを直せるかどうか。

「てか、これ直さないとはやてさんも困るんじゃ？　良くて減俸、下手したら降格じゃないですかね？」

「はっ！？　そ、そうやった！」

言われて初めて気付いたのか、はやてが顔を真っ青にする。
ロストロギアを持ち出した挙句に破損したとなれば、どんな処分が下るか分かったものではない。

「ど、どないしよハヤト君！？」

「いや、だから直せないんですかって聞いてるんですけど……」

「う〝……そやな。せやけど、ロストロギアを直せる人なんて……」

泣きそうな顔で俯いて、ふと何かを思い出したのか嬉しそうに顔を緩めるはやて。

「そや！　たしかそのロストロギアには、自己修復機能がついてる

って言っとったわ！」

「自己修復機能、ですか？」

「うん。粉々になっても1日で元に戻るぐらいらしいし、その位のヒビ割れやったらそんなにせんで元に戻るやろ。
これで私の給料も安心や」

「……壊したことに責任感じましょう、はやてさん」

ハヤトAが、嬉しそうに溜息を吐くはやてに突っ込む。
これで一件落着……となりそうだったが、そうは問屋が下ろさない。
そんなに時間を要せずに元の世界に戻れて、自分はこの世界とは関係が無く、何をしようと責任は取られない。
それを理解したハヤトが、何をしようと思うのかは……まあ、推して知るべしだろう。

「俺、ちょっとシグナム副隊長の胸揉んでくる」

「付き合おう」

「俺もだ」

「じゃあ、俺はハラオウン隊長のを」

「待て！　お前一人にそんな事させられるかよ！」

「ハヤト……へへっ、お前も相当の馬鹿だな」

「何言ってんだ。俺はお前だろ？」

「……違いない」

「こっちのキャロたんとリインたんともニャンニャンしてくるぞーーっ！」

「あたしも、こっちのエリオの味見してこようかな」

「わんわんお！」

「なっ！？　オイ、ちょっと待て俺達！！」

にわかに騒がしくなった自分たちを、慌ててハヤトAが諌めるが時既に遅し。

それぞれに思い思いの願望を垂れ流しながら、無数のハヤト達が我先にと部隊長室から出て行った。

残されたのは、呆然としているハヤトAとはやて。そして、ブレイブハートと同じ形をしたデバイスのハヤトだけである。

≪　……なぁおい。放っておいていいのか？　≫

「……え？」

≪　いやだって、あいつら凄いこと言ってなかった？　≫

「「！！」」

その言葉に、はやてとハヤトＡは、目を見開いてお互いの顔を見た。

「「「「きゃあああああああああああっっっっ！！！！！！！」」」」

二人が顔を見合わせるのと、機動六課のあちこちから女性局員達の悲鳴が上がるのは、ほぼ同時だった。

かくして、野獣は野に放たれたのであった。

◇◇◇◇◇

「ど、どどどないしよ！？　このままじゃウチの女性局員がハヤト君の毒牙に！！」

「……はやてさん、わかってたけど俺のことそーゆー目で見てたんスね」

≪　いいから、さっさと止めに行くぞ！　あ、俺は自分で動けないから持っててね　≫

「だけど、どこに行ったのか……隊舎って結構広いですし」

「せやな。せめて手がかりがあれば……」

≪　いや、シグナム副隊長とハラオウン隊長、エリキャロにリイン曹長のとこって言ってたじゃん　≫

「困ったな」

「困りましたね……」

≪　無視かよ！　≫

デバイスハヤトの発言を無視して考え込む2人。
その時、部隊長室の近くから女性の悲鳴が響いた。

「「！！」」

≪　今の声は……フィニーノ陸士か？　≫

それを聞いたハヤトAとはやてが血相を変えて部隊長室を飛び出し、声のしたほうへと駆け出す。
ちなみにデバイスハヤトは置き去りだ。

「あ、あそこ！」

「フィニーノ陸士！」

果たして悲鳴のした場所に居たのは、胸を両腕で隠してへたり込んでいるシャーリー。

「だ、大丈夫ですかフィニーノ陸士！？」

「ハヤト君か？　ハヤト君が来て何かしてったんか！？」

「ワケがわからないと思いますけど、これには深い理由が……」

「……ハ、ハヤト君の」

「え？」

「馬鹿ーーーーーっ！！！」

「へぶんっ！？」

心配して近寄ったハヤトAに、シャーリーの光の如き右ストレート一閃。

殴り飛ばされたハヤトAは宙を舞って、地面へと叩きつけられる。

「わかってたけど最低だよハヤト君！　いきなり人の胸を揉んで逃げるなんて！！」

「い、いや……それは俺であって俺じゃなくてですね。てゆーかわかってたって……」

「そんな言い訳通用すると思ってるの！？　見苦しい！！」

よろよろと立ち上がったハヤトAに対して青筋を立てて捲くし立てるシャーリー。

と、そこで今度は別の場所から悲鳴が聞こえてきた。

「！？」

「こ、今度は何や！？」

「この声って、キャロ？」

「と、とりあえず行ってみないと！」

「あ！　コラ逃げるなハヤト君！！」

シャーリーから逃げるように走り出すハヤトAと、それを追いかけるシャーリー。

程なく悲鳴の聞こえた場所にたどり着けば、そこにはスカートを押さえ、顔を真っ赤にして座り込んでいるキャロと、その隣で青い顔をしているエリオ。

「キャロ……と、エリオ？　どうした、何があった！？」

「ハヤト君が来て何かして行ったんか！？」

「うぅぅ～」

「な、何だか知らないお姉さんが来て、僕の……その、下をまさぐって行きました……」

「エリオどんまい。
それでキャロ、あのな、多分お前に変なことしたのは俺であって俺じゃなくて……」

「お兄ちゃん」

「はい？」

涙目でハヤトAを見上げるキャロ。

「責任、取ってください！」

「「「「うぉおぃ！？」」」」

そのままとんでもない事を言い出したキャロに、その場に居た全員が声を上げて驚く。

だが、キャロの瞳は真剣そのものだ。
てゆーか何をされた。

「キャキャ、キャロ！　落ち着け！　これには事情があってだな…」

「あんな事しておいて、責任は取らないって言うんですか！？
お兄ちゃん、分かってたけど最低です！」

「（´・ω・`）＜分かってたって……」

「（ヒソヒソ）ホンマ最低やな」

「（ヒソヒソ）ですよねー。分かってたけど、まさかここまで見境無しだなんて」

しょんぼりするハヤトAの側で、近所のおばちゃんみたいにヒソヒソ話をするはやてとシャーリー。いや、はやては事情分かってるだろ。
エリオはキャロの爆弾発言に真っ白になっている。

と、その時。
またしても悲鳴と、直後に凄まじい爆発音と破砕音が響き、六課隊舎が揺れた。

「ハヤトォォォォォォッッッ！！！！」

「ハーヤートーくーんーーーーっっっっ！！！」

「こ、今度はヴィータ副隊長にギンガ！？」

遠くからでもはっきりと聞こえる咆哮に、ハヤトＡの顔が青くなる。

部隊長室から無数のハヤト達が逃げ出してからまだ数分。

自分の与り知らぬところで次々と悪化してく状況に、ハヤトＡは眩暈を覚えた。

「どこいったぁぁぁぁっっ！？」

「出てきなさぁぁぁぁぃっっ！！！！」

爆砕音と共に、段々と2人の声が近づいてくる。

自分は全く悪くないというのに命の危険に晒されて、ハヤトＡは最早涙目だ。

「あー、これは事情説明云々以前に、逃げへんと命が危ないなぁ」

「ハヤト君、キミのこと忘れないよ」

「お兄ちゃん、今までお世話になりました」

「兄さん、どうか安らかに」

「諦め早くない！？　てゆーか俺のせいじゃないんだって！　お願いだから話聞いて！？」

泣きそうになりながら弁解するハヤトA。
いきなり並行世界に呼び出された末に、何故こんないらない気苦労を背負い込まなければならないのか。
理不尽すぎる自分の運命を、呪わずにはいられない。

だが、運命はハヤトAに自分の運命を呪う時間すら与えようとはしなかった。

「「見つけたぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！！」」

「うぃっ！？」

地獄の底から響くような声にハヤトAが振り返れば、そこには目のハイライトを消したヴィータとギンガ。
ヴィータの手にはギガント状態のアイゼンが握られ、ギンガの左手ではリボルバーナックルがヤバイ位にギュインギュイン音を立てて回転している。

「ハヤトォ……」

「待って！　お願い待って！
やったのは俺じゃないから！　誤解ですから！」

「逃がさないよ……」

「聞く気欠片も無し！？」

「「覚悟ぉぉっ！！」」

「くっ、明日への逃亡！！」

ハヤトAは命を繋ぎとめる為、踵を返して走り出した。

◇◇◇◇◇

一方その頃。

部隊長室に置いていかれたデバイスハヤトは、ロストロギア『可能性の瞳』を眺めていた。

《　つーか、デバイスって結構不便なんだな。自分じゃ動くことも出来ないし……ん？　》

デバイスハヤトが一人呟いていると、『可能性の瞳』が淡く輝きだした。

そして、彼が見ている前でヒビがみるみる塞がっていく。

《 おぉ、マジで自己修復機能あったのか。
ま、とりあえずコレで帰れるな……帰って人間に戻れたら、ブレイブハートのメンテしてやろう 》

溜息を吐き終わると同時にヒビ割れは完全に塞がり、それが合図になったかのようにデバイスハヤトの姿が消え去った。

◇◇◇◇◇

「「死ねぇぇぇぇぇっっ！！！」」

「死にたくないわぁぁぁぁぁっっ！！！」

ハヤトAとヴィータ、ギンガコンビの鬼ごっこは熾烈を極めていた。
殺傷設定と見紛う程の2人の攻撃を、ハヤトAが必死にかわしながら走る。
ハヤトAが避ける度に六課隊舎の壁や床が破壊され、はやてが悲鳴を上げるが、ハヤトAにそれを気にする余裕は無い。

だが、ハヤトAの体力も無限ではない。
ついに体力の限界を向かえ、足をもつれさせて倒れこんでしまう。

「しまっ！？」

「「もらったぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！！！」」

これを好機と、２人がそれぞれの獲物を振りかぶる。
さすがにこれはダメだとハヤトＡが目を瞑り、覚悟を決めた……
瞬間。

「「！？」」

ハヤトＡの姿がいきなり掻き消え、２人が放った渾身の一撃は六課隊舎の床を粉砕し、小さなクレーターを形作った。

「ど、どこ行ったあの野郎ぉ！！」

「シルエット！？　ハヤト君め、いつの間に……っ！！」

「おーい、２人ともー」

２人が辺りを見回しながら悔しげに呟いていると、ようやく追いついてきたはやてが２人に声をかける。
それでようやく彼女の存在に気付いたのか、ヴィータとギンガが振り返り、驚いた顔をした。

「はやて！　ハヤトはどこ行った！？」

「八神二佐！　ハヤト君はどこですか！？」

「いや、あんな2人とも。さっきのハヤト君は、ハヤト君であってハヤト君じゃないっちゅーか……」

「「？」」

折角立て直した六課隊舎をボロボロにされて泣きそうになりながらも、はやては2人に事情を説明し始めた。

こうして、ロストロギア『可能性の瞳』による一連の騒動は、一応の解決を迎えたのであった。

◇◇◇◇◇

――後日談。

はやては一連の騒動の責任として、半年の減俸＋六課隊舎修繕を自腹で支払うことになった。

ハヤトはシグナム、フェイト、ティアナ、スバルの訓練とは名ばかりのリンチによって、全治3週間の重傷。加害者4人は、なのは

から直々に“お話”をされたようである。
また、ハヤト達の被害にあった女性局員（一部男性職員）には、はやてから事情の説明があったが……ハヤトに対する冷たい（一部熱の篭った）視線は暫く止む事はなかったらしい。

「……俺、何も悪い事してねーのに」

病床のハヤトが涙を零しながらそう呟いたかどうかは、定かではない。
どっとはらい。

【ハヤトが増えたら・結論】
収集がつかなくなる。

番外編9　『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その4』（後書き）

さて、という訳で半ば強引に完結させました。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「本編で復活の兆しが見えたんで、後書きにも復活しました。主人公です」

いやー、あれだ。
かなり強引に終わらせたよ。

ハヤト
「強引すぎだよなぁ……っと、そういやゲスト来てるんだっけ？」

そうだったそうだった。
今回の番外編ゲストは、魔法少女リリカルなのはＲａｉｎｂｏｗＦｌｏｗｅｒ　～虹ノ花、此処に～から、カノン＝クリスタルさんです！

カノン
「ハヤト！　特訓よ！！」

ハヤト
「いきなり何！？」

カノン
「あのディレトとか言うアホの子に負けないように、あたしが鍛えなおしてあげるわ！！」

ハヤト
「いやいや、俺まだ怪我人だから！」

カノン
「そんだけ喋れれば平気でしょ！　ほら、行くわよ！！」

ハヤト
「あーーーれーーーー」（ズルズル）

あ、連れて行かれちゃった……。
えーと、じゃああれだ、ディレト呼ぼう。おーいディレトー。

ディレト
「えーと……３０×１０は……３００？」

チンク
「そうだ。出来るようになったじゃないか」

ディレト
「あ、と、当然ですわ！　私はチンクお姉様の妹ですもの！」

チンク
「姉も誇らしいぞ」（ちょっと涙目）

ディレト
「お、お姉様……」（涙目）

……なにホームドラマやってやがんだアイツら。
つか終わってないってことは、後でカノンさんに攻撃されるんじゃ

ね？
まあいいか。

カノン
「ほら！　そこでもっと速く動く！！」

ハヤト
「だから無理だって！　あ、ら、らめぇぇぇぇぇっっ！！」

あ、ハヤト吹っ飛んだ。
復活したてなのに、また暫く入院かな。

カノン
「どうしたの！？　まだ特訓は始まったばっかりよ！！」

ハヤト
「かゆ……うま……」

カノン
「そんなどこぞの研究員みたいな台詞はいいから、さっさと立つ！」

ハヤト
「ぐへぇ」

どうしよう。本編の話をする相方がいない……。
じゃあ一人語りでもしよう。
今回は最後ということで、他の番外編とはちょっと違う感じにしてみました。
まあ、かなり強引な展開でしたが……（汗）

とはいえ作者の貧弱な脳みそでは、これ以上のストーリーは思いつきませんでした。
寛容な心で許してやってください。

カノン
「ほらほら！　そんな速度じゃまたディレトにやられるわよ！」

ハヤト
「待って！　俺まだセットアップもしてないってのに！！」

カノン
「魔法自体は使えるでしょ！？」

ハヤト
「それとこれとは別でしょおぉぉぉっ！？」

ちなみに、一応今回の話で採用できなかった提供して頂いたネタのハヤトを出してみました。
・女だったら　・犬だったら　・ロリペドだったら　など等。
本当は全部書きたかったんですが、そうすると文章量が2万字近くなったので断念することに。
まあ、スケベなハヤトが増えたら、基本はセクハラしかしませんｗ

ちなみにキャロが何をされたかといえば、ロリペドＶｅｒ．のハヤトにスカート捲りをされました。
うん、変なこと想像した人は後楽園で作者と握手！

ディレト
「３０×１１は……３３０！」

チンク
「いいぞディレト、やれば出来るじゃないか！」

ディレト
「はい！」

とまあ、そんなワケで凄まじく強引な展開ではありましたが、一応シリーズを終わらせることが出来ました。
次はお気に入り登録３００件記念を書こうと思ってます。
もう４００件になったというのに、今更な気もしますけどねｗ

ちなみに、タイトルは『ゲームセンターＫ６』です。
知ってる人はこれだけで内容の予想はついたと思いますが……まあ、こっちはシリーズにするつもりは無いので、直ぐに終わると思います。
あ、『Ｋ６』は”Ｋ”　ｉｄｏｕ　”６”ｋａからとりました。
それでは、今回はこの辺で。

カノン
「あれ？　もう終わっちゃったの？」

あ、はい。
カノンさんもハヤトの鍛えなおしは終わりですか？

カノン
「まさか。まだまだやるわよ。今は休憩」

ハヤト
「た、助け……」

そうですか。本編もそろそろ終盤で決戦突入しますし、思いっきりやっちゃってください。

カノン
「任せておきなさいって！」

ハヤト
「う、裏切ったな作者！」

いやね、本編では特訓とかしてる暇ないし、こういうところで修行して強くなっとけって。
カノンさんに鍛えられたら、かなり強くなれると思うぞ。

ハヤト
「いやだ！　強くなる前に死ぬ！」

カノン
「大丈夫よ。死に掛けてから復活すれば、強さがグンと増すわ！」

ハヤト
「俺は戦闘民族じゃねぇぇぇ！！！」

それでは、また次の番外編で。

ディレト
「３１×３１は……９６１？」

チンク

「素晴らしい！　ブリリアント！」

……まだやってたのかお前らは。

番外編１０　『ゲームセンターＫ６　部隊長八神の挑戦』（前書き）

※本編が中々かけないので、気分転換がてらお気に入り登録３００件突破記念を。

えー、中身はタイトルで分かるとーり、例の番組のパクリ……じゃなくてオマージュです。

上手く書けたか心配ですが、楽しんでくれたら幸いです。

番外編１０　『ゲームセンターＫ６　部隊長八神の挑戦』

八神
「はい、そんな訳で始まりました『ゲームセンターＫ６』。
どうも～。部隊長の八神です。
今回挑戦するソフトはこちら、『高町名人の冒険島』！」

ナレーター（ザフィーラ）
【高町名人の冒険島。
魔導師を目指す少年少女達の憧れ、高町一等空尉を主人公とした横スクロールアクションゲームである。
アクションゲームにあるまじき、全５０ステージというボリュームながら、その完成度の高さから、いまだに根強い人気を誇っている。
発売して数日でミリオンセールスを記録した大ヒット作に、今回八神が挑む】

八神
「前回、前々回とブレステ2だったから挑戦失敗してたんだと思うんやよね。
そーゆー訳で、今回はブレステに戻しました！
ちゃっ、とやって帰ろうと思います。昼食いらんとちゃうんかな？」

ナレーター（ザ）
【ブレステだと舐めてかかる八神に、この女が釘を刺す】

APフェイト
「はやて、ちょっといいかな？」

八神
「何や、フェイトちゃん」

APフェイト
「今回、ブレステだから簡単だと思ってると思うんだけど」

八神
「思ってるよー。違うん？」

APフェイト
「実はね、そのソフト、発売して暫くは「クリア不可能」って言われたぐらい難しいんだよ」

八神
「マジか！？」

APフェイト
「今までゲームセンターK6始まってから、何十本って難関ゲームソフトに挑戦してきたよね？
でも、今回初めて、AD陣が事前にクリアできなかったぐらいに難しいソフトなの」

八神
「AD何してんねん！　ロケハンせんかぁ！」

APフェイト
「ロケハン失敗だよ」

八神
「うわー、そんなにかぁ……」

ＡＰフェイト
「そういう訳で、頑張ってね！」

八神
「どんな訳やねん！　まあ、それなりで頑張るわ～」

ナレーター（ザ）
【八神部隊長の真価が問われる戦い。
『高町名人の冒険島』、挑戦開始――】

八神
「それじゃ、ゲームセンターＫ６！　部隊長、オーン！！」

（シャキーン！！）

八神
「……漫画化の依頼、待ってます！」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
番外編１０　『ゲームセンターＫ６　部隊長八神の挑戦』

八神
「あー、何かこの音楽懐かしいなぁ」

ナレーター（ザ）
【懐かしい昔ながらのＢＧＭに和みながら進める八神】

八神
「お、そやそや。卵蹴ったら武器とか出てくるねんな」

ナレーター（ザ）
【高町名人の冒険島は、卵を蹴ることで初めて敵を倒すための武器、石斧を得る事が出来る。
他にも、卵を蹴ると様々なアイテムを入手することが出来るのだ】

八神
「小さい頃は良くやってたもんやで」

ナレーター（ザ）
【昔を思い出しながら、順調に面を進めていく八神だったが、少し難しくなった１－４でミスが目立つようになる】

八神
「ふんふ～ん♪　楽勝らくしょ……あ」

＼ピチューン／

八神
「ま、まぁ誰でもミスはするて。本番は次からや」

ナレーター（ザ）
【本番は次といいつつも、何度も同じミスをするのがこの女】

八神
「あ」

＼ピチューン／／ピチューン／／ピチューン／

＼ヤラレチャッタナノ／

八神
「あー……ガメオベラかぁ」

ナレーター（ザ）
【なんと、全く同じ場所で連続ミス。早くもゲームオーバーに、しかし……】

八神
「おぉ、コンティニューあるんかいな。いやー、助かるわぁ」

ナレーター（ザ）
【コンティニューがある事に安堵する八神。
しかし、そうなると気が緩むのも、部隊長八神の特徴である】

＼ヤラレチャッタナノ／／ヤラレチャッタナノ／／ヤラレチャッタナノ／

ナレーター（ザ）
【一向に進歩を見せず、１－４の序盤で連続ゲームオーバーになる八神。

果たして、クリアは出来るのだろうか……】

◇◇◇◇◇

八神
「う〜〜〜〜っっ」

ナレーター（ザ）
【挑戦開始から2時間。ステージ3－3、氷のステージで30分以上の足止めを食らってしまう。
一向に進まない状況に、スタッフの間に停滞ムードが流れる】

八神
「あ、ちょっ！　滑る滑る滑る！！　あーーーもう！
なのはちゃん、そこはもうちょい踏ん張れやぁ！！」

ナレーター（ザ）
【嫌なムードを断ち切る為に、ここであの男が助っ人に入る】

ADハヤト
「部隊長」

八神
「う〜〜……あれ？　ハヤト君？」

ADハヤト

「部隊長、１機やらしてもらってよかですか？」

八神
「……ダメです！」

＼ＨＡＨＡＨＡ／／ＨＡＨＡＨＡ／／ＨＡＨＡＨＡ／

八神
「こちとら仕事中やねんで」

ＡＤハヤト
「ｗｗ　じゃあ、基本は部隊長でやって頂いて、ここはダメだってなったら……」

八神
「ハヤト君にやってもらうって事でいいん？」

ＡＤハヤト
「そういうことで」

八神
「じゃあお願いします」

＼ＨＡＨＡＨＡ／／ＨＡＨＡＨＡ／／ＨＡＨＡＨＡ／

ナレーター（ザ）
【ここでゲームセンターＫ６のエース、ＡＤハヤトを投入する八神】

八神
「おぉ！？　なんやそのやり方！！」

ＡＤハヤト
「あー、慣れないと難しいですよ。コレ」

八神
「滑るのを逆に利用するか……さすがやなハヤト君」

ナレーター（ザ）
【素晴らしいプレイで、八神が停滞していた３－３、氷のステージをなんなくクリア】

ＡＤハヤト
「はい。出来ました」

八神
「むぅ、なんか気ぃ悪いなぁ。「お前には出来へんやろ」みたいな顔しおってからに」

ＡＤハヤト
「被害妄想ですってｗ」

八神
「まぁ、ありがとな～」

ナレーター（ザ）
【これで停滞していた場所を突破した八神。
この勢いを止めることなく、次のステージを攻略出来るのだろうか】

八神

「何で次のステージも氷やねん！」

◇◇◇◇◇

八神
「……なのはちゃんもなぁ。なんで冒険するのにレイジングハート置いてきたんや。
空戦魔導師のクセに石斧投げて攻撃ってなんやねん！」

ナレーター（ザ）
【挑戦開始から6時間。
ステージ6－2、苦手とする氷のステージでまたしても2時間以上の足止めをくらってしまう八神。
ついに主人公である高町名人に文句をつけ始めた】

八神
「だいたい、こんな場所で制服だけやったら危ないってわかるやろ。
それにデバイス無しかて簡単な魔法なら使えるやんか。何で使わへんねん……ってあ〝ーっ！　また滑った！！」

＼ピチューン／

＼ヤラレチャッタナノ／

八神
「この“ヤラレチャッタナノ”も、段々ムカついてきたわ」

ナレーター（ザ）
【疲労困憊の八神に、ここで嬉しいサプライズが】

ＡＤティアナ
「部隊長、これが届いてます」

八神
「あ、また死んだ……もー、何やねんティアナ！」

ＡＤティアナ
「す、すいません。でも、あの、コレ」

八神
「ファックス？　誰から……お！　なのはちゃんからや！」

ナレーター（ザ）
【主人公のモチーフとなった高町一等空尉からの励ましのお便り。
親友からの手紙に、八神の表情も柔らかくなる】

八神
「なになに……？
“久しぶりだねはやてちゃん。今回、『高町名人の冒険島』に挑戦するって聞いたよ。
アレは、ゲームセンターにあったのをそのまま移植したヤツだから難易度が凄く高いんだけど、はやてちゃんなら大丈夫！
ゲームは一日、１時間だよ！”……もう今日だけで１２時間ぐらいしてるがな！」

／ＨＡＨＡＨＡ／／ＨＡＨＡＨＡ／／ＨＡＨＡＨＡ／

八神
「まーでも、親友にこんだけ言われたら頑張らな！
よーし！　やったるでぇっ！！」

ＡＤティアナ
「頑張ってください！」

ナレーター（ザ）
【親友からの手紙がいい気分転換になったのか、この後躓いていた場所を何とか通過。
そのまま、実に２時間３２分ぶりにステージ６－２をクリア！】

八神
「やったでぇぇぇっ！」

＼パチパチパチ／／おぉー＼＼パチパチパチ／

八神
「なのはちゃん、クリアしたで！　ゲームは１日、１５時間くらいや！ｗ」

ナレーター（ザ）
【勢いそのままに６－３へと突入。しかし……】

八神
「もー！　また氷かいな！！　どんだけ冷えとんねんここは！」

＼ＨＡＨＡＨＡ／／ＨＡＨＡＨＡ／

八神
「あ、あ、あ～～～」

＼ピチューン／

＼ヤラレチャッタナノ／

八神
「ガメオベラか～～……あぁぁっ！？」

ナレーター（ザ）
【思わず声を上げた八神。いったい何が起きたのか！】

コンティニュー？

ＹＥＳ
↓
ＮＯ

ナレーター（ザ）
【何と、ここまで来てまさかのイージーミス。
コンティニュー画面でＮＯを選択してしまい、まさかの最初のステージから】

八神
「あ～～～～、やってもた」

＼あー／／ｏｈ・・・／

ナレーター（ザ）
【まさかのコンティニュー失敗に、意気消沈の八神。スタッフの間にも、絶望的な空気が流れる】

ＡＤスバル
「部隊長、ちょっといいですか？」

八神
「スバル？　どしたん？」

ナレーター（ザ）
【ここでＡＤスバルが八神に声をかける】

ＡＤスバル
「実はですね、時間がもう夜１０時を過ぎちゃいまして……」

八神
「え？　もうそんな時間？」

ＡＤスバル
「それで、コンティニューもミスしちゃいましたし、今からやり直すっていうのは部隊長も辛いと思うんですよ」

八神
「そやなぁ」

ＡＤスバル
「なので、今日はここまでにして、後日延長戦という形にしようと思いまして」

八神
「延長戦かぁ……」

ＡＤスバル
「でなければ、今回の挑戦はギブアップということで……」

八神
「それは嫌や。出来るとこまでやってみたいもん！」

ＡＤスバル
「じゃあ、次回までの宿題ってことで、練習してきてください」

八神
「うー。宿題かぁ、私仕事もあるねんけどなぁ」

ＡＤスバル
「それでは、お疲れ様でした！」

八神
「お疲れ様～。って、袋とかないん？　本体そのままとかｗｗｗ」

ナレーター（ザ）
【イージーミスにより、第４シーズン初めての延長戦。果たして、２日目でのクリアはあるのだろうか……】

◇◇◇◇◇

挑戦2日目

ADハヤト
「部隊長、お疲れさまッス」

八神
「お疲れー」

ADハヤト
「練習は、してきましたか？」

八神
「……ホントはねー。練習して来いって言われて、普通してきませんよ。
前日とかに、ちょっとやったりするらしいけどな。
でも、私はがっつりやってきました！w」

＼HAHAHA／＼HAHAHA／＼HAHAHA／

ADハヤト
「それとですね。今日は部隊長、時間がありません」

八神
「何で？」

ADハヤト
「このあと、レジアス中将との会談が入ってますんで」

八神

「あ～……。ははは、私も長い事管理局に居るけど、中将との会談の前に仕事入ったのなんて、初めてちゃうかなぁw」

＼ＨＡＨＡＨＡ／／ＨＡＨＡＨＡ／

ＡＤハヤト
「そーゆー訳で、会談までの６時間でクリアしてください」

八神
「６時間しか無いん!?
こないだ……えーと６－３やったっけ？　あそこまで行くのに１２時間ぐらいかかったんやで!?」

ＡＤハヤト
「大丈夫です、ステージは先日コンティニューミスした６－３まで進めてありますから」

八神
「あ、そーなんや。なんや、ハヤト君もそうならそうと言ってぇな。
それじゃ！　ゲームセンターＫ６、部隊長、オーン!!」

ナレーター（ザ）
【２日目突入。果たして八神はクリアすることが出来るのだろうか!?】

◇◇◇◇◇

八神
「ふふーん。練習してきたから、対策はばっちりや！」

ナレーター（ザ）
【ちゃんと練習をしてきた八神、見違えるようなプレイで６－３をノーミスでクリア。
そのプレイに驚いたＡＤハヤト、慌てて八神の横へとやってくる】

ＡＤハヤト
「凄いッスね部隊長。どのくらい練習してきたんですか？」

八神
「どのくらいって……沢山やん」

ＡＤハヤト
「そうですかｗｗｗ」

八神
「仕事でゲームやって、家でゲームやって、休憩時間もゲーム。
私の最近の人生ゲームばっかやで」

ナレーター（ザ）
【愚痴を零しつつも、ステージを進めていく八神。
しかし、８－３、タコが大量に出てくるステージで足止めされてしまう】

＼ピチューン／

八神

「あー、これ一回やられて石斧なくなるときっついなぁ」

ナレーター（ザ）
【間断なく出現するタコ。一度やられて石斧が無くなると、途端に難易度が跳ね上がる。
そして……】

／ピチューン／／ピチューン／

／ヤラレチャッタナノ／

八神
「うーん、ガメオベラかぁぁ……」

／ヤラレチャッタナノ／／ヤラレチャッタナノ／／ヤラレチャッタナノ／

ナレーター（ザ）
【タコ地獄の前に、ゲームオーバーを繰り返す部隊長、八神。
そのまま1時間ほど足止めされてしまう。と、ここでＡＤハヤトの携帯が鳴り出した】

ＡＤハヤト
「あ、電話ですね」

八神
「ハヤト君電話！　もー、仕事中に電話ー！」

ＡＤハヤト
「あはは、すんません」

八神
「こんなときに誰ー！？」

ＡＤハヤト
「構成のシャマルさんからです」

八神
「ちょっと代わってーな」

ＡＤハヤト
「あ、はい」

八神
「もしもし？」

構成シャマル
『もしもし……って、あれ？　はやてちゃん？』

八神
「仕事中やねんでシャマル。何の用やねん」

構成シャマル
『えーと、進み具合はどうかなーと思いまして』

八神
「進み具合……今、８－３でタコに邪魔されて１時間ぐらい足止めくらってるね」

構成シャマル

『なるほどー。つまり、案の定まだまだクリアには程遠いと……』

八神
「案の定まだまだクリアには程遠いと……やかましわ！」

／ＨＡＨＡＨＡ／／ＨＡＨＡＨＡ／／ＨＡＨＡＨＡ／

構成シャマル
『あはは。それじゃあ、頑張ってくださいね』

八神
「はーい……ほい、返すわハヤト君」

ＡＤハヤト
「あ、どうも」

八神
「……なぁ、何で待ち受け画面がシグナムなん？」

カメラマンシグナム
「なっ！？」

ナレーター（ザ）
【待ち受け画面を指摘する八神。その内容に漢らしいカメラマン、シグナムが驚きの声を上げる】

カメラマンシグナム
「ロ、ロックウェル！　どういうつもりだ！？
肖像権の侵害だぞ！！」

ADハヤト
「いや、休憩中とかに、シグナム副隊長のおっぱいを見て疲れを癒そうかと……」

カメラマンシグナム
「な、なななな……っ！？」

ADティアナ&スバル
「「すいません、はいちょっとカメラ止めてー」」

八神
「な、何や？」

ADティアナ&スバル
「「ハヤト、ちょっとこっち来い」」

ADハヤト
「え！？　いや、ちょっ、ま……引っ張るな！　服が伸び……アッー！！」

八神
「え～～と……？」

APフェイト
「はやて！　時間！　もう後4時間しかないよ！」

八神
「はっ！　そ、そうやった！！」

ナレーター（ザ）

【不謹慎な発言を咎められ、ここでＡＤハヤト退場。
あっけに取られていた八神であったが、ＡＰフェイトに急かされ、ゲームを再開。だが……】

＼ヤラレチャッタナノ／＼ヤラレチャッタナノ／＼ヤラレチャッタナノ／
＼ヤラレチャッタナノ／＼ヤラレチャッタナノ／＼ヤラレチャッタナノ／
＼ヤラレチャッタナノ／＼ヤラレチャッタナノ／＼ヤラレチャッタナノ／

ナレーター（ザ）
【その後もタコに行く手を阻まれ、一向に進む事が出来ない。
進展が見られないまま、ステージ８－３で２時間以上の足止め。
時間もジリジリと迫ってくる】

八神
「もー！　タコ鬱陶しいわぁぁっっ！！」

ナレーター（ザ）
【あまりの難易度に、思わずコントローラーを投げ出す八神。
そこで、今まで出番の無かったこの２人が動き出した】

ＡＤエリオ
「あの、部隊長」

ＡＤキャロ
「１機やらせてもらっていいですか？」

八神
「え～？　エリオにキャロ、出来るん？」

ＡＤエリオ
「ぜ、前回は不甲斐ないサポートですいませんでした……」

ＡＤキャロ
「でも！　今回は大丈夫です！　特訓してきました！！」

八神
「そうなんか？　うーん。なら、任してみよか」

ＡＤエリオ＆キャロ
「「はい！」」

ナレーター（ザ）
【ここで、新人ＡＤのエリオとキャロを投入。果たして……】

ＡＤエリオ
「まずは僕が……あっ！？」

＼ピチューン／

ＡＤエリオ
「……」

八神
「……！　ぜんっぜんやんけ！」

／ＨＡＨＡＨＡ＼

ＡＤエリオ
「す、すいません……」

ＡＤキャロ
「大丈夫です！　エリオ君の敵は私が……あぅ」

＼ピチューン／

八神
「もー！　２人とも何しにきてん！」

ＡＤエリオ＆キャロ
「「す、すいませんでした……」」

ナレーター（ザ）
【新人ＡＤ２人の不甲斐なさに憤慨する八神。しかし……】

ＡＤエリオ
「ぶ、部隊長！　クリアするまでやらせてもらっていいですか！？」

ＡＤキャロ
「お願いします！」

ナレーター（ザ）
【勿論このままでは終われないＡＤ２人、八神に継続プレイを直訴】

八神
「んー。まぁええよ。頑張ってな？」

ＡＤエリオ＆キャロ
「「はい！」」

ナレーター（ザ）
【リベンジに燃える２人の新人ＡＤ。果たしてその結果はいかに……】

◇◇◇◇◇

ナレーター（ザ）
【プレイ開始から４時間半。ＡＤ２人が奮闘するも、一向に８－３から進む事が出来ない】

＼ヤラレチャッタナノ／

ＡＤキャロ
「あうぅ」

ＡＤエリオ
「す、すいません」

八神
「えええよええよ。次、頑張ろな？」

ナレーター（ザ）

【1時間以上プレイするも、結局進める事が出来なかったADエリオ&キャロ、時間の関係もあり、ここで退場】

八神
「うーん、ホンマ難しいんやなぁ」

ナレーター（ザ）
【ここで2人と交代した八神。1時間ぶりにプレイ再開。
すると、2人のプレイを眺めていたことが幸いしたのか、今まで詰まっていたのが嘘のようにあっさりと8－3をクリア】

八神
「おー！　何か簡単に出来ましたｗｗ」

ナレーター（ザ）
【八神、ここで実に3時間ぶりにゲームを進展させる】

八神
「んー、あと12ステージで……残り時間どんくらいやっけ？」

APフェイト
「あと1時間半だね」

八神
「これ終わらんのとちゃう？」

APフェイト
「え～と……が、頑張って！」

八神

「そこは出来るって言うて！！」

＼ＨＡＨＡＨＡ／

ナレーター（ザ）
【先行きに不安を感じながら、ステージ８－４を始める八神。
果たして、残り１時間半で１２ステージをクリアする事が出来るのか！？】

◇◇◇◇◇

ＡＰフェイト
「……はやて」

八神
「あー、また死んだー……うー、何？　フェイトちゃん」

ナレーター（ザ）
【ステージ９－１序盤、またしてもタコ地獄によって足止めされている八神に、ＡＰフェイトが近寄る】

ＡＰフェイト
「残念なんだけど、時間が来ちゃったんだ」

八神
「マジで！？」

APフェイト
「マジだよ。ほら、時計」

八神
「どれどれ……うわー、マジやわー」

ナレーター（ザ）
【とうとうクリアできないまま、終了時間となってしまった】

APフェイト
「どうするはやて？　今日はもう無理だから、後日に延長にする？」

八神
「うーん……」

ナレーター（ザ）
【果たして、部隊長八神の決断は!?】

八神
「すっぱり、ギブアップで！　お手上げでーす!!」

／HAHAHA／／HAHAHA／／HAHAHA／

八神
「いやー、これはもう無理やと思うわ。だって、これから先もこれ

ぐらい難しくなってくるんやろ？」

ＡＰフェイト
「そうだね。難しくなるらしいよ」

八神
「無理そうやし、今回はギブアップします！」

ＡＰフェイト
「うん。わかったよ……お疲れ様」

八神
「ごめんなぁフェイトちゃん。おっと、でもゲームセンターＫ６、視聴者は裏切りません！
エンディングは、ＡＤハヤト君達が見せてくれると思います！
それでは、エンディング画面をどうぞ！！」

ナレーター（ザ）
【こちらが、ＡＤハヤトが出したエンディング画面である】

～ＥＤ映像～

（＊（　・ω・　）＊（　＜フェイトチャン　ヲ　タスケタノ！！
＜ナノハー！　マリガトー！

八神
「ハヤト君、ありがとな！」

ナレーター（ザ）
【部隊長八神の『高町名人の冒険島』への挑戦は失敗と終わった。
これで第４シーズン３連敗、次回の挑戦では、勝てるのだろうか
……】

番外編１０　『ゲームセンターＫ６　部隊長八神の挑戦』（後書き）

本編が中々書けない……文才の乏しさに悩んでます。
どうも、ラモンです。

はい。そんな訳で番外編を更新しました。
本編を期待してくれていた皆様はすいません。本編更新はもうちょっと先になりそうです。
全然文章が浮かんで来なくて……。
こういうくだらない内容ならいくらでも浮かんでくるのにねぇ。
文才が乏しいって、ホント嫌ですわ。

さて、話は変わりますがそろそろ本編も終わりが見えてきました。
残すところは『ゆりかご戦』『後日談』の辺りだけですね。
そろそろ次回作何しようかなぁ、なんて考えたりしてます。

え？　そんな事してる暇あったら、さっさと本編書けって？
ですよね……ｏｒｚ

ま、まぁそれはとりあえず置いといて。
次回作として考えてるのは……

？ＳＳＸ～Ｖｉｖｉｄあたりの完全オリジナルストーリー（とある新人の日常、の続編）
？空白期あたりで恋愛モノ（シグナムヒロイン）

？最強主人公の無印～A'ｓ（ヒロイン未定）

この３つですかね。
本編でゆりかご戦が始まったあたりで、どれにするかアンケートを取ると思います。

※注意！
コレは予告ですので、投票しても作者がニヤニヤする以外、あまり意味はありません。

ああ、連載する場合は、スバルルートと同時連載になりますので、スバルルートを待って下さってる皆様は安心して下さい。
基本的に、新連載＜スバルルートって感じの比重で連載していきますので。

……はぁ。というか、さっさと本編を進めたい。
スバルにどうやってティアナが告白したことを気付かせて、自分の恋心を諦めさせるか悩んで早２日。
ハヤトも何だかあっさり立ち直りすぎな気もしますし……問題は山積みだ！ｗ

ディレト
「適当に片付けてしまえば良いんじゃありませんの？」

それはホラ、俺のちっぽけなプライドが許せないんですよ。
一応こんなのでも「小説（笑）」を書いてる者として。

ディレト
「ふ～ん。何でもいいですけれど、番外編ばかり更新してては見捨てられてしまいますわよ？」

うぅ……わかってるよ！
そんな事言うと、本編で酷い扱いにするぞ！！

ディレト
「悪役でラスボスの私を、どうやって酷い扱いにすると？」

……出来ねぇじゃんｏｒｚ
ち、畜生！　お前なんて絶対に番外編には出してやらねーからな！
バーカ！　バーカ！！

ディレト
「ＩＳ“エクスプロード・アイ”」

ぎゃーーーっ！！

あ、あと最後にお知らせを。
そろそろ番外編も１０話を超えて結構かさばってきたので、一旦削除して、“とある新人の番外編”として投稿し直ししようと思ってます。
削除、投稿し直しの時期は、次回番外編１１を投稿した時を予定しています。
以上、お知らせでした。

１００話記念突破番外編　１　『機動六課局員共』（前書き）

※これは氏家ト全先生の漫画『生徒会役員共』のパロディです。
また、この小説（？）には以下の成分が含まれます

・キャラ崩壊
・キャラ大崩壊
・下ネタ
・本編の空気台無し

以上が大丈夫な方のみ、お進みください。

１００話記念突破番外編　１　『機動六課局員共』

◎特定法

フェイト
「事務室に来る途中で財布拾ったんだけど……」

ハヤト
「俺らのじゃないッスね」

フェイト
「そっか。じゃあ、ちょっと心苦しいけど、持ち主が特定出来そうなものがないか、調べさせて貰おうかな」

ハヤト
「それがいいですね」

◇◇◇◇◇調べ中◇◇◇◇◇

フェイト
「う～ん、何も無かったけど……多分持ち主は女の子だね」

ハヤト
「何でわかるんです？」

フェイト
「ゴムが入ってない」（キリッ）

ハヤト
「それじゃあ俺も女になっちゃうよ」

◎きてた
なのは
「じゃあ、そろそろ訓練を始め――――って、ヴィータちゃんが居ないね？」

ティアナ
「まだ来てないみたいですね」

ガラガラッ！

ヴィータ
「こんな身体でもきてるわっ！！」（要するに2日目）

ティアナ
「なんか理不尽に怒鳴られた気が……」

◎フラグ

シグナム
「来週は地上本部に出張か。最近は忙しくて少しばかり気が滅入るな」

ハヤト
「俺は好きッスけどね、出張。仕事サボれますし。
シグナム副隊長は、何か好きなイベントとかあるんですか？」

シグナム
「ふむ……」

ハヤト
「俺は地上本部が一般人向けにやるお祭りとかですけど……」

シグナム
「学校遅刻しまいと走っていると曲がり角で運命の人とごっつんこ」

シャマル
「『パンを咥えて』が抜けてるわよ？」

ハヤト
「ギャルゲーのイベントじゃねぇよ」

◎ギャップ

ヴァイス

「八神部隊長って、時々子供っぽい時ありますよねぇ」

ヴィータ
「まーな。普段大人っぽい奴が子供っぽい一面を見せると、愛らしく思われるよな」

ヴァイス
「あー、わかります」

ヴィータ
「なのに子供っぽい奴が大人っぽい態度をとると、何で小生意気に思われるんだ……なぁ？」

ヴァイス
「いや、別に思ってないッスよ。
……最近は」

ヴィータ
「アイゼン」《Ｊａｗｏｈｌ．》

ヴァイス
「ぎゃーーす！」

注：大体最後までこんな感じです。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
１００話記念番外編その１　『機動六課局員共』

◎正直な娘

ヴィヴィオ
「ごくごく……」

はやて
「ヴィヴィオは牛乳が好きなんやなぁ。牛乳は成長を促すモンやから、えぇ事やで」

ヴィヴィオ
「……じーっ」

はやて
「？」

ヴィヴィオ
「はやておねーちゃんは、牛乳嫌いなの？」

はやて
「よくも目線胸元に向けてくれたなオイコラ」

◎乙女の会話

ヴィータ
「どうだハヤト。六課には慣れたか？」

ハヤト
「ええまぁ、お陰さまで。
ただ、周りに女性が多いんで、時々会話についていけない時ありますね」

ヴィータ
「ふーん」

◇◇◇◇◇

なのは
「夏場になると、ちょっとブラ暑苦しいよね」

フェイト
「そうだねー」

ヴィータ
（……あたしもついていけねー）

◎満たされたい

シャマル
「あら？　何コレ……目安箱？」

エリオ
「あ、それなら部隊長が試しにって置いたみたいです。でも、あんまり利用されてないみたいで……」

シャマル
「それは困ったわねぇ」

エリオ
「シャマル先生も、何か不満があったら書いてくれませんか？」

シャマル
「うーん……」カキカキ

つ【欲求】

エリオ
「それはシュレッダーにＧＯ！」

◎セルフ恋人

シャーリー

「そういえば、グリフィス君って恋人とか居ないの？」

グリフィス
「恋人？　うーん、そういうのは今は居ないかな」

シャーリー
「じゃあ右手が恋人なんだね」

アルト
「左手かも知れないよ」

グリフィス
「無いよ」

ルキノ
「じゃ、じゃあまさか口っ！？」

グリフィス
「一番無いよ」

◎雨音

ハヤト
「俺、雨って結構好きだなぁ」

ティアナ
「自家発電の時の音を掻き消してくれるものね」

ハヤト
「……」

◇◇◇◇◇別の日◇◇◇◇◇

ハヤト
「俺、雨嫌いだわー」

スバル
「足音聞こえないから、おちおちソロ活動も出来ないもんね」

ハヤト
（どっちを選んでも運命は変わらなかった……）

◎疑心の合言葉

キャロ
「フェイトさんに習って、創作料理をしてみたの」

エリオ
「へぇ。何作ったの？」

キャロ
「クッキーにからしを入れてみました。ピリ甘だよ」

エリオ
「だ、大丈夫それ？」

キャロ
「まぁまぁ、騙されたと思って食べてみて？
幼馴染のヒロインが非処女だったぐらいの感覚で」

エリオ
「本当に大丈夫なのソレ！？」

◎義妹は就職活動中

ルーテシア
「ハヤト兄、今度管理局でやる面接の練習手伝ってー」

ハヤト
「あいよ。んじゃ、そこ座れ」

ルーテシア
「はーい」

ハヤト
「えー、では。貴女は管理局に入ったら何をしたいですか？」

ルーテシア
「あー……それは考えてなかったなぁ」

ハヤト
「とりあえず、ルールーがやってみたい事言ってみりゃいいんだよ」

ルーテシア
「既婚の上司との背徳恋愛？」

ハヤト
「真っ先に出るのがそれかぁ」

◎極楽へ飛ぶ

◇◇◇◇◇八神家大掃除中◇◇◇◇◇

はやて
「私なぁ、子供の頃から魔女っ子に憧れとったんよ」

シャマル
「あら、そうなんですか？」

はやて
「あの箒にまたがってるヤツやな」

シャマル
「あぁ、あれね」

はやて

「アレ気持ち良さそうやったなぁ」

シャマル
「わかるわー」

ザッフィー
「わかるな」

◎裏の世界

◇◇◇◇◇引き続き八神家大掃除中◇◇◇◇◇

はやて
「棚の裏を掃除すると、色々出てくるなぁ」

シグナム
「そうですね……む、これは無くしたと思っていた私の筆じゃないか」

ヴィータ
「あ、あたしの髪ゴムあった」

シャマル
「あーっ！　バ●●のリモコンあったー。やっと止められるわー」

はやて
「なんやー、シャマルはドジっ子やなぁ」

女性陣
『あはははは』

ザッフィー
（驚かなくてはいけないのに、平然としていられる自分が怖い……）

◎気の持ちよう

ロッサ
「さむい……うぅ、寒い……」

シャッハ
「いけませんよロッサ。寒い寒いと言うから、余計に寒くなるんです」

カリム
「エロス、エロス、エロス……Hな気分にならないわよ？」

シャッハ
「すみません。今の発言は取り消します」

ロッサ
「もっと自分の意見を大事に」

◎大人の領域

ピカッ！　ゴロゴロゴロゴロ……

ヴィヴィオ
「……」ぷるぷる

ハヤト
（びびってる……）

ピカッ！　ゴロゴロゴロ……

シャマル
「凄い……おっきい……」ドキドキ

ハヤト
（エロい……）

◎隊長のはからい

なのは
「じー……」

ハヤト
「？」

なのは
「じー……」

ハヤト
「……あ！　チャック開いてたなら言ってくださいよ、恥ずかしいなぁ」

なのは
「え？　ハヤト君なりの露出プレイだったんじゃ……」

ハヤト
「そんな馬鹿な」

◎大切な時期

リンディ
「～♪」

なのは
「リンディさん、何見てるんですか？」

リンディ
「エイミィが子供の写真を送ってきたの、今3歳なのよ」

クロノ
「か、母さん。そんな堂々と見ないでください」

なのは
「わ、カッコイイ男の子ですねぇ」

フェイト
「将来有望だよね」

リンディ
「何言ってるの？　むしろ今でしょう？」

クロノ
「……母さんとは、一度話し合いをする必要があるな」

◎副隊長が諭す日

ハヤト
「あ〝ー……ずっと座ってたから身体がギシギシ言ってる」

シグナム
「血行が悪くなっている証拠だな。小まめにストレッチをした方がいいぞ」

ハヤト
「そーゆーのって、日常的に続ける自信ないんですよねぇ」

シグナム
「では、もう一押ししてやろう……いいか良く聞け。
ストレッチを続ければ身体が柔軟になり、色んな体位が出来るようになるぞ！」

ハヤト
「いや……そんなどや顔されても……」

◎絶品空気

キャロ
「今日はいい天気ですね」

フェイト
「すっかり春だね。……んー、空気がおいしい」

キャロ
「すー……はい。ホントに空気がおしいですね」

フェイト
「女子寮の空気とどっちがおいしいかな？」

キャロ
「エリオ君に聞いてみましょう」

エリオ
Σ（゜Д゜；（会話に入れなくなった！）

◎ハラオウン家

リンディ
「昨日孫が遊びに来たのよ」

ヴィータ
「へー」

シャマル
「そうなんですかぁ」

リンディ
「子供は可愛いわね。また欲しくなっちゃったわ」

ヴィータ
「どんな子なんだ……ですか？」

リンディ
「素直でいい子よ？　「おっきくなったねー」って言ったら、下半身気にするくらい」

ヴィータ
（ネタ……？　いやしかしこの人の血筋なら……）

◎練習だよ

はやて
「ん〜〜〜！　デスクワークは身体がなまってしゃーないなぁ。
久しぶりで身体動かしたいわー」

ロッサ
「はやてはアウトドア派かい？」

はやて
「まぁ、運動は好きやね」

ロッサ
「へぇ。どんな運動をしてるんだい？」

はやて
「ピストン運動」

ロッサ
「全てがおかしいね」

◎着こなし術

ギンガ
「ハヤト君。制服が崩れてだらしないわよ？　ちゃんと正しなさい」

ハヤト
「えー、めんどくせーし別にいーじゃん」

ギンガ
「ダメです！　ちゃんとしなさい！」

スバル
「まってギン姉！　これはハヤトの個性なんだよ！」

ギンガ
「スバル、何言ってるの。そんな訳ないでしょ」

スバル
「それに……ちょっと乱れた制服ってエロいじゃない！？」

ギンガ
「そうだね……ごめん、ハヤト君」

ハヤト
「そこで折れないで。もっと頑張ろう？」

◎素敵な後ろ姿

フェイト
「あれ？　ヴィータ、髪下ろしてどうしたの？」

ヴィータ

「ん？　あぁ、髪留め一個失くしちまったんだよ。だから下ろしてんだ」

なのは
「あ、じゃあ私が結ってあげる」

ヴィータ
「おー。それじゃ頼むぜ」

◇◇◇◇◇髪結い中◇◇◇◇◇

ヴィータ
「どうだ？」（ポニテ）

フェイト
「うん。似合ってる似合ってる」

なのは
「うなじフェチには堪らないねっ！」

ヴィータ
「途中までは乙女の触れ合いだったのに……」

◎やばいお兄ちゃん

ヴィヴィオ
「おにーちゃんの携帯のアドレス、女の人いっぱいだね。
プレイボーイみたい！」

ハヤト
「別にそーゆー関係じゃねーって」

ヴィヴィオ
「じゃあどういう関係？」

ハヤト
「ん？　まぁ、時々遊んだりとか……」

アイナ
「遊びの関係ってことね……侮れないわ」（ドキドキ）

ハヤト
「いきなり出てきて何言ってんのアンタ」

◎おっぱいの美学

はやて
「フェイトちゃんはおっぱい大きくてええなぁ……」

フェイト
「もう、はやては気にしすぎだよ。それに、考え方ひとつだと思うよ？」

はやて
「考え方？」

フェイト
「例えば、はやての好きな人が巨乳好きだった場合、努力する余地はあるけど……。
私の好きになった人が貧乳好きだった場合、もうどうしようも無いんだよ？」

はやて
「知ったこっちゃないわ！」

◎ハイリスクが気持ちいい

ハヤト
「おはよーッス」

ティアナ
「おはよ」

ハヤト
「今日は休みだから、結構隊舎も閑散としてんなぁ」

ティアナ
「そうね。……ここで裸になってもバレないわね」

ハヤト
「いや、それは……」

ティアナ
「ふふっ。わかってるわよ。
露出プレイは、『誰かに見られるかも』ってギリギリ感が大事ってツッコミたいんでしょう？」

ハヤト
「一文字もあってねーし」

◎おっきいヴィータ

ヴィータ
「～～♪」

スバル
「あれ？　ヴィータ副隊長、何だか機嫌よさそうですね」

ヴィータ
「おうよ！　昨日測ったらちょっと大きくなってたんだよ」

スバル
「わあ、良かったですねぇ」

ヴィータ
「ああ。あたしはこの調子で、どんどんデカくなるぞ！」

スバル
「でも副隊長、ロリ巨乳はバランス悪いですよ？」

ヴィータ
「何か微妙に話が通じてなかった」

◎ぷんすかぷん

ヴィータ
「お」

シグナム
「む？」

ヴィータ
「誰だ、こんなにゴミ散らかしやがって全く。
こーゆーの見ると、胸が痛むよな」

シグナム
「成長期だからか？」

ヴィータ
「よしケンカだ」

◎熱いからだ

なのは
「さあ、今日も訓練頑張ろう！」

ハヤト
「でもこの時期は辛いッスね。寒い……」

なのは
「もう！　寒いって思うから寒いんだよ。暑いと思えば暑くなるなる！」

ハヤト
「そんなもんスか？」

なのは
「じゃあ証拠を見せてあげる。見ててね？　……（想像中）」

ハヤト
「……」

なのは
「……女騎士ＶＳ触手モンスター」ドキドキ

ハヤト
「何かヒートアップしてんぞこの人」

スバル
「……気の強い女スパイＶＳエロ専門の拷問官」ドキドキ

ティアナ
「……エリート執務官ＶＳ変態科学者」ドキドキ

ハヤト
「ってお前らもかい！」

◎シグナムを誉めよう

シグナム
「紫電……一閃！！」

キャロ
「わぁ、シグナム副隊長カッコイイです！」

ルーテシア
「カッコいー」

シグナム
「待て待てお前たち。私とて女だ、「カッコいい」はホメ言葉としてイマイチだぞ」

キャロ
「す、すみません。では改めて……」

ルーテシア
「エローい」

キャロ
「卑猥です～」

シグナム
「それほどでもない」

エリオ
「えっ、嬉しいんですか？」

◎うっぷ

◇◇◇◇◇フェイト運転中◇◇◇◇◇

フェイト
「……うっ」

エリオ
「フェイトさん、車酔いですか？」

フェイト
「ううん。大丈夫だよ」

エリオ
「でも、今気持ち悪そうにしてましたよ？」

フェイト

「本当に大丈夫。ただの想像妊娠だから」

エリオ
「適当なこと言わないでください」

◎正しい会話

ハヤト
「隊長、出来ました」

なのは
「え？」

ハヤト
「今日提出する書類ッス」

なのは
「もう、ハヤト君。話す時は主語をつけないとダメだよ？」

ハヤト
「すいません」

ティアナ
「異議あり！」

なのは
「？」

ティアナ
「あえて主語を抜かすことにより、「何をどうして欲しいんだ?」という言葉責めに発展させられます」

なのは
「た、確かに……異議を認めるよ」

ハヤト
「却下に決まってんだろ」

◎スキルアップ

ハヤト
「高町隊長って、結構なんでも出来ますよね」

なのは
「うん。お母さんが花嫁修業だ、って色々と教えてくれたの」

スバル
「も、もしかして夜の花嫁修業も?」

ハヤト
「……」

なのは
「異議あり」

スバル
「？」

なのは
「それはあえてしない方が、初々しさがあっていいと思うの」

スバル
「なるほど。じゃあ、男子の意見も交えて審議してみましょう」

ハヤト
「いやでーす」

◎もじゃもじゃ

◇◇◇◇◇六課隊長陣で飲み会◇◇◇◇◇

はやて
「あれー？　シグナムは飲まんの？」

シグナム
「私は運転がありますので」

はやて
「ええやんええやん。タクシーで帰ればええんやし、遠慮せんと飲んだらええ！」

フェイト
「そうだよ。ほら、何のお酒が飲みたいですか？」

シグナム
「それではわかめ酒を！」

はやて
「あちゃー、ごめんなぁ。昨日全部剃ってもーたんよ」

フェイト
「私はまだ生えてなくて……」

ヴィータ
「お前らちゃんとツッコめ――ぅええ！？」

◎キーアイテム

なのは
「クロノ君、お誕生日おめでとう。皆からプレゼントだよ」

フェイト
「私からは新しいネクタイ」

クロノ
「ありがとう、フェイト」

なのは

「私からは新しい財布。前に欲しいって言ってたよね？」

クロノ
「すまない。今のがボロボロになっていたから助かるよ」

はやて
「私からはブラジャーや！」

クロノ
「やったー。これでブラ外しの練習が出来るぞー。

ふざけんな」

◎ボディガード

ユーノ
「ふぅ。やっと仕事が終わった。
なのは、手伝わせちゃってごめんね？」

なのは
「いいよいいよ。丁度私も暇だったし」

ユーノ
「あ、もうこんな時間なんだ……。なのは、よかったら――」

なのは
「うん！　私が送ってあげるね！

最近物騒だもんねー。でも大丈夫！　絶対守ってあげるから！」

ユーノ
（この状況をツッコめない自分が情けない……）

◎終わりだよ

はやて
「長いようで短かった1年間。本日を持って、機動六課は任務を終えて解散となります」

ハヤト
「……」

はやて
「皆と一緒に働けて、戦えて。心強く、嬉しかったです。私は、ずっと――」

ハヤト
「部隊長……っ」

はやて
「ここに立つと視姦されてるみたいで堪らんなぁ、って思ってました」

ハヤト
「えーーーーっ!?」

FW&隊長陣（ヴィータ除く）
「わかるわかる」

ハヤト
「ええーーーーっ!?」

◎1日1回

ハヤト
「もう1年経って六課も解散かぁ……」

エリオ
「時間が経つのって早いですね」

スバル
「でも、数字で表すと凄い数だよ?」

キャロ
「そうですよね」

ティアナ
「なんてったって365回もイったことになるんだものね」

ハヤト
「何の話だよ!?」

エリオ
「いや、言わなくていいですけどね！」

１００話記念突破番外編　１　『機動六課局員共』（後書き）

……何してんだ私は。
どうも、ラモンです。

１００話突破記念がこんなんでいいのだろうか？
そう疑問に思わずにはいられない今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

さて、そんな訳でお送りした『機動六課局員共』でした。
キャラ崩壊とかいうレベルじゃないですよね。ホントすいません。
土下座でも何でもするんで、石投げないでください。

えと、それじゃあ続けて突破記念番外編２をどうぞ。
そっちはもっと怒られそうですが……（汗）

１００話突破記念番外編　２　『とあ魂　～鍋は人生の縮図である～』（前書き）

※これはアニメ『銀魂　シーズン１　２５話』のパロディです。
また、この小説（？）には以下の成分が含まれます

・キャラ崩壊
・キャラ大崩壊
・もう作者病院行った方がいんじゃね？
・むしろ病院が来い
・本編の空気台無しすぎワロタ

以上が大丈夫な方のみ、お進みください。

１００話突破記念番外編　２　『とあ魂　～鍋は人生の縮図である～』

ティアナ
「なんだかんだで、とある新人の日常も、１００話の大台に突入ね」

ハヤト
「ああ。一時はスバルルートなしで完結か？　なんて思ったりもしたけどな」

スバル
「前に比べると、執筆ペースは随分と落ちてるけどねー」

ティアナ
「そういえば、次の話が思いつかないーって騒いでたわよ？　作者の奴」

ハヤト
「まーそんな時はアレだ。寄せ集めの総集編でお茶を濁すんだよ」

スバル
「新作っぽい文章を２つ３つ入れとけば、読者全員騙せるからね」

ティアナ
「オイィィィィ！？」

ハヤト
「そんじゃま、定番の思い出話でもすっか」

スバル

「色んなことがあったよねぇ。ティアが鉈で大暴れしたり、ティアがドブに嵌ったり、ティアがポロリしたり、ティアがポロリしたり――」

ティアナ
「ちょっ！？　大嘘やめなさいよ！！　てゆーか何でポロリを2回も言ったわけ！？」

ハヤト
「どーでもいいからティアナ、これまでを振り返れよ」

ティアナ
「嫌よ。イイ女っていうのは、過去を振り返らないモノなの」

ハヤト
「おっ、ティアナの癖にいい事言うじゃん」

ティアナ
「ティアナの癖にって何よ！？　馬鹿にしてんのアンタら！！」

スバル
「まぁまぁティア、落ち着いて落ち着いて」

ハヤト
「ってところで大体5分の1くらいか？」

スバル
「まだまだ、10分の1くらいだよ。ナメちゃダメだよ総集編」

ティアナ

「てゆーかコレ、このままやってると怒られそうな気がしない？主に偉い人に」

スバル
「偉い人？　偉い人って誰？」

ティアナ
「いやその……今これを読んでるっていうか、読まされているっていうか……まぁそういう人とかよ」

ハヤト
「ったく面倒くせぇなぁ。仕方ねぇ、それじゃあ始めるぜ！」

スバル
「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～。１００話突破記念！」

ハヤト
「あんなこともこんな事もあったね、総集編スペシャル、スタートォッ！！」

……グツグツ。

ハヤト
「……」

ティアナ
「……」

スバル
「……」

ハヤト
「……ヲイ。総集編って言ったじゃん。振り返ろうって言ったじゃん！　誰か振り返れよ！」

ティアナ
「いや、誰かが鍋の火加減見てなきゃいけないでしょ？
あたし鍋見てるから、ハヤトとスバルで振り返ってちょうだい」

ハヤト
「鍋は俺が見るからティアナ、お前いけって！　お前司会とか向いてるって！　自信持てよ！」

ティアナ
「欠片も嬉しくないわよ、司会向いてるとか言われても。スバル、アンタ行きなさいよ」

スバル
「ヤだよ。だって余所見してる間に肉食べられちゃうもん」

ハヤト
「……」

ティアナ
「……」

ハヤト

「……ちょっ、ホントさぁいい加減にしろよお前。そんなさぁ、しょーもないことする訳ねーだろ」

ティアナ
「うん」

ハヤト
「ホントさぁ。こんなめでたい時にさぁ、悲しくなるようなこと言わないでくれない？」

ティアナ
「うん。うん」

ハヤト
「確かにミッドじゃすき焼きなんて滅多に食えないけどね。祝いの席の時くらいさぁ、奮発して皆で楽しくつつこうって時にさぁ。
お前ってヤツぁホントにもう……俺、情けなくてＳ．Ｌ．Ｂ撃ちたくなってきたわ」

ティアナ
「今のはスバルが悪いわよ。ホラ、謝りなさい」

スバル
「むー……何だよぉ、２人してぇ。悪かったよ、貧乏くさいこと言っｔ――」

ハヤト
「今だあああああっっっ！！」

ティアナ
「うらあああああああっっっっ！！！」

ガシャーーーンッ！！

――――キラキラキラキラ……（飛び散る鍋の具）

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
１００話突破記念番外編　２　『とあ魂　～鍋は人生の縮図である～』

……グツグツグツグツ。

ティアナ
「あーあ。もう、貴重なお肉が四散しちゃったじゃないの」

ハヤト
「おめーらが強く引っ張りすぎなんだよ。大体はしゃぎ過ぎなんだよ、すき焼き如きで」

スバル
「……くっ。ひ、酷いよ2人してあたしの事騙してー！

ティアとハヤトのせいで、あたしの乙女回路はドンドン薄汚くなっていくんだよ！？」

ハヤト
「そーやって人は大人になっていくんだよ。よかったなー、また一歩大人になれたじゃん。
大体ナカジマ家なら、「食卓は戦場だ」なんて常識の筈だろうが。忘れちまったのか？　餓えた心を！」

スバル
「ハヤトの言う事なんてもう信じないもん！　もう皆敵だよ！　誰も信じないもん！」

ハヤト
「いい心がけだ。もっと俺を嫌え！　そして憎め！
その肉しみのパワーを糧に、この腐った管理局で生き抜いていくんだよ！」

スバル
「腐ってんのはハヤトの頭の中だよ」

ハヤト&スバル
「「ギャーギャー！」」

ティアナ
（……マズイわね。やっぱりこうなったか。スバルとハヤトが居る状況ですき焼きをやるなんて、ライオンの居る檻の中にマ○コ・デラッ○スを投げ入れるようなモノ。このままじゃ、残りのお肉も口に入れる前に確実に四散する……っ！！

今はお肉を人より多く食す事よりも、まずは野獣共からどうにかしてお肉を保護する事を考えるべき……。でも、連中は頭に血が昇ってしまっている。下手に止めると逆効果……どうする……どうする……っ！！）

その時、ティアナに電流はしる……！

ティアナ
（そうよ。あの2人は馬鹿だけど変なところで場の空気を読める2人。そこを突けば、あるいは……。賭けに近いけど、お肉を守る為にはこれしか無い！！）

カチャッ（箸を置く音）

ハヤト&スバル
「「！」」

ティアナ
「あたし、もういいわ。ケンカしてまで食べたくないわよ、情けない。
実は昨日、部隊長に誘われて焼肉食べに行ったの。だから、別にどーでもいいって言うか、よくよく考えればいつでも食べられるって言うか。どうぞ、2人で好きに取り合ったらいいわ」

ハヤト
「む……」

スバル
「うー……」

ティアナ
（来い……！　来い……！！　乗って来い……！！！）

カチャッ

ハヤト
「しゃーねーな。まぁ、俺も別に肉食いたかった訳じゃないしぃ？　たまたま全員が給料日だからって鍋にしてみただけだしぃ？　こんなんなるなら止めるか。でも、マジいいのお前らぁ？」

カチャッ

スバル
「ふーんだ！　別にいーもんねー。あたしだって、別にお肉なんて食べたくないもんねー。
　ベジタリアンだもんねー！！」

ハヤト
「あーあ。やめだやめだ、すき焼きなんてなー」

スバル

「やってられないよもー！」　ごろり

ティアナ
（来た！　……でも、思った以上にフリが効き過ぎたみたいね。もうこのままお開きになりそうな勢いだわ。
しくじったわね……自分からあんな事を切り出しただけに、今更「やっぱり再開しましょう」何て言うのはあまりにも不自然！　第一アレよ……恥ずかしい！！）

ハヤト
（……ちっ、こりゃマズイな。事態の沈静化を図るためにあえてティアナの案に乗ったが、まさか食欲魔人のスバルまで乗ってくるとは。この状況で鍋の再開を切り出すのは至難の業……だが、この状況を放置すれば、確実に鍋はこのまま終了する。まだ始まってもいないのに、だ！　いかん！　それだけは何がなんでも断固として阻止しなければ！
誰でもいい！　誰でもいいから鍋の再開を切り出せ！
ぶっちゃけ俺は肉が食べたいんだ！　すっげー食べたいんだ！
めがっさ食べたいんだ！
察してくれティアナ！　お前が言うんだ！　頼む、３０円あげるから――っ！！）

ティアナ
（誰か察しなさいよ！　あたしはお肉が食べたいの！　ダイエットとかで我慢してて、本当はお肉なんて半年近くまともに食べてないのよ！　みんな本当は同じ筈よ！　心はひとつの筈！
だって、あたし達は“チーム”なんだから――っ！！）

ぐぅ～～～～っ

ハヤト&ティアナ
「「！！！！！」」

スバル
「……うー」

ハヤト
「あ、あれぇ？　スバルなに？　お前腹減ってんの？」

スバル
「減ってないもん。今のはケータイの着信音だもん」

ティアナ
「いやいや、今のが着信音な訳ないでしょ。間違いなくお腹の音だったわよ。
仕方ないわねぇ、もう。スバルったら、そんなにお腹空いてるの？」

スバル
「空いてないもん。満腹だもん」

ハヤト
「まあ、そんなにアレなら、やっぱり鍋再開するか？　俺はどっちでもいーけど、どうする？」

ティアナ
「スバル。無理しちゃだめよ？　ま、あたしもどっちでもいいけどね」

ハヤト
「そうだよな。折角目の前にあるんだしな、どっちでもいーけど」

ティアナ
「そーね、勿体無いと言えば勿体無いわよね。どっちでもいいけど」

スバル
「空いてるけどいーもん。アイス食べるからいーもん」

《《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ.　Ｓｅｔ　ｕｐ.》》

ハヤト&ティアナ
「「ばっきゃろぉぉぉぉぉぉっっっっ!!!!!」」

ハヤト
「育ち盛りがそんなもんばっかり食って、飯くわねーとどうなると思ってんだァァァアアアっ!?」

ティアナ
「お百姓さんや牛さんに申し訳ないと思わないのかァァァアアアアアッッ!!?」

スバル
「……ど、どしたの2人とも。セットアップまでして？」

ティアナ
「……ほら、あたしがよそってあげるから」ニコッ

スバル
「……いいの？」

ハヤト
「いいっつってんだろ。元々、俺ら皆で食べるためにこの店に来たんだろうが。
さっさと食えこの野郎。嫌がらせすんぞ」

スバル
「うん！　ありがとー、ティア」

ティアナ
「はい。どうぞ」つ【しらたき満杯の器】

スバル
「いただきまーす！　……もぐもぐ、もぐもぐ」

ハヤト
「……んんっ！　しゃーねー、それじゃ食うかぁ。まぁ？　俺は別にどーでもいーけど？　メンドくせーなヲイ。けど俺だけ食べないってのも雰囲気悪いしなぁ？　ティアナ、お前も食えよ」

ティアナ
「え？　あ、あぁそうね。あたしも別にお肉はいらないんだけど。ダイエット中だし。
でも残すのも勿体無いわよね。あたし、そこら辺の事は兄さんか

らキツク言われてたし」

ティアナ
（……ふぅ。何とか切り抜けたわね。けど、依然としてお肉に手が出しづらい状況なのは変わらない。
すき焼きを一度否定してしまった事によって、鍋に手をつけることさえ躊躇われてしまう空気が完成してしまっているわ……何か。何かこの状況を打破する切欠は無いの!?　考えろ、考えなさいあたし！）

ハヤト
（何か……何か無いか!?　全力で動け！　俺の濁った茶色の脳細胞!!）

ハヤト&ティアナ
（（何か……何か!!））

ガシャーーーンッ!!

ハヤト&ティアナ
「「!?」」

スカリエッティ
「……ふぅ。危ないところだったよ」

ガジェット?型
つ【ようやく撒いたか】

ティアナ
（つーか、いきなり何よアンタら！！）

ガジェット?型
つ【……おっと、これは失敬】

スカリエッティ
「不測の事態が起こってしまってね」

ハヤト
「……ああそうかよ」
（嘘をつけ嘘を！　今思いっきりこの部屋狙って入ってきただろが！）

スカリエッティ
「悪いけれど匿ってもらい卵、世話になるネギ、悪いとこんにゃく、感謝すき焼き」

ティアナ
（何言ってんのこのキ○○イ！？）

ガジェット?型
つ【諸君らは、我々に構わず食事を続けてくれて構わない】

ハヤト
（……やるじゃねーかスカト○エッティ）

スカリエッティ
（スカ○ロじゃないスカリエッティだ）

ハヤト
（それはさておき。みえみえの嘘だが、『窓をぶち破っての登場』というインパクトが全てを吹っ飛ばしやがった。仮に万が一、俺たちにツッコまれたとしても……。

「てへ☆　バレちゃった～」

で、全てを誤魔化しきるという最終奥義まで考えているに違いない！）

ティアナ
「……はぁ、しょうがないわね。見てるだけっての可哀想だし、アンタらも食べなさいよ」

ハヤト
（なっ、何ィィィィィッッ！？　何しとんじゃこのツンデレガンナーがぁっ！！　そんなんで人気取ろうなんて甘いんだよっ！！ミロにあんこと牛乳といちごオ・レを入れるぐらいに甘いわぁぁぁぁぁっ！！
　うぇ、自分で言ってて胸焼けしてきた――じゃなくてさぁぁっ！！）

ガジェット?型

つ【む？　そ、そうか。ならば少しだけご相伴に与るとしよう。かたじけない】

スカリエッティ
「申し訳ないね」

ティアナ
（よし！　言い争いによる、鍋に手を出し辛い雰囲気はこの変態博士の乱入でいくらか払拭されたわ。
……で、あれば！
この静寂の中で誰が一番に戦端を開き、お肉を箸で掴むか！　これが現状で一番の問題ね）

ハヤト
（あえて、『意地汚い』『食い意地が張っている』という汚名を被る覚悟を持ち、周囲を牽制しつつ、周囲の介入を許さずに先陣を切った者にこそ、鍋を支配する権限が与えられる！
つまりそれこそが――――――！！）

ハヤト&ティアナ
（（鍋将軍！！！））

ハヤト

（この勝負――）

ティアナ
（第1手を制した人間が――勝つ！）

スバル
「もぐもぐ……むぐむぐ……」

ティアナ
（現時点で最も鍋将軍に近いのは、奇しくもスバル。鍋そのものには手をつけていないけど、あたしがよそった分を食べ終わった後、最も自然に鍋に箸をつける権限を有している……！）

ハヤト
（だが、アイツを気にする必要は無い。あの幸せそうな顔は、恐らくあまり馴染みの無いしらたきの新食感に心を奪われている顔だ！
あの年頃の娘には、すき焼きなどで肉を食べるよりも、『しらたきみたいなカロリー少ない物を食べてる私カッコイイ！』と思い込んでいる馬鹿が多い！　そんな愚か者など、この戦場では恐るるに足りず！！）

ティアナ
（後は変態科学者と、縦長の鉄屑だけど……危険性は殆ど無いと見ていいわね。何せ、所詮この場ではこの1人と1体は『お客様』でしかない。意地汚くも先陣を切って箸を動かす可能性は無いと見ていい！　2度、3度とあたし達から薦められ、ようやく白菜などの野菜類に手をつける程度の筈だわ。
加えて変態は頭脳派、あまり食が太いとは思えないし、鉄屑に至

っては食べられるかどうかも不明！）

ハヤト
（――なんてティアナは思ってるだろうがソレは違う。ス○トロエッティは、こう見えて侮れん）

スカリエッティ
（だから○カトロエッティじゃなくてスカリエッティだと言っているだろう）

ハヤト
（コイツはＫＹ過ぎることで有名だ。場の空気など読まず、さっさと肉に箸をつけてしまう可能性が高い。
まぁ、あの鉄屑は無視して構わんだろう。あの４本のケーブルでは箸を掴む事さえ困難なはずだ）

ガジェット？型
つ【……ふっ】

ハヤト
（なっ、何ィィィィ！！？　４本のケーブルで箸持っちゃったよヲイ！！
……ぐっ、まあいいさ。少しばかり驚いたが、所詮は想定の範囲内。やはり、今この場で最も警戒すべきはティアナだな。同年代なスバルの思考をいち早く察知し、しらたきを多目によそうという狡猾さを鑑みるに……間違いなく――できるっ！！）

その時、ふたたびティアナに電流はしる――っ！！

ティアナ
（し、しまったぁぁあああ！！　何でスバルによそってあげた時に、ハヤトにもよそってあげなかったのよあたし！？　気配り上手なキャラを演じつつ、最後に自分の分を器によそる！　その後に鍋のレイアウトを変えたりするなどして、最も鍋に多く触れるという既成事実を作っておけば、鍋将軍の地位は間違いなくあたしのモノになっていたと言うのに！！！

――待って！！　スバルの食べるスピードから計算するに、多分もうすぐ食べ終わる筈。
その時、もう一度あたしがよそってあげるというのは……駄目だ！　そんな考えはまるで駄目……！
いいかげん気がつけっ……！　２度目のチャンスなんか、もう無いのよっ……！　何故なら、スバルの思考を少しでも知っていればわかる！　あの子は基本的に「自分の取り分は自分で」が基本！　他人のあたしにもう一度よそらせるなんて事、有り得ない！！
なら、多少強引でも、変だと思われてもやるしかない！！
変でいい、変でなきゃダメよ……。狂ってなきゃ、逸脱してなきゃ悪魔は殺せない……！
常軌を逸してこそ開かれるのよ！　勝ちへの道が……！）

ティアナ
「でも、アレよね？」

ハヤト＆スカリエッティ

「「？」」

ティアナ
「友情、努力、勝利とか言っても、最近の子供たちって友情の儚さも、勝利の虚しさも知ってるのよね。
努力だって結局は才能に勝てないし、つまるところ、天才しか必要ないのよ――ねっ！！」

ゴオォッ！！

肉に迫る箸……！　圧倒的……　絶対的なタイミング……っ！

ティアナ
「取った！　――――っっっっ！！！？？？」

しかし……箸は届かない……！　箸が掴んだのは、横にどけていた筈の米……っ！
まさに……　まさに晴天の霹靂……！！

ハヤト
「あっれー？　このコンロ、火ぃ弱くなってね？」

ティアナ
「馬鹿なっっ！！？」

ハヤト

「……ふっ」ニヤリ

絶対的な自信を持って動いてわずか1秒、あっさり殺された――。
この状況下では命同様に貴重なタイミング、それを瞬く間……
…わけのわからぬ内に出し抜かれた。

ハヤト
「鍋将軍は……この、俺だあああああああっっっっ！！！」

この少年の思考。
勝負の世界ではこういう考えが一番危ない。　まさに地獄に直結する道。
一番の強敵を封じ　ヤツはもう動けないなどという読みは　まさに泥沼。

嵌っている……
すでに泥中　首まで……

ハヤト
「――――何ィィィィィィッッ！？」

崩壊路……！
せせら嗤われる……　『肉を食べたい』という女の意地に……！

ハヤト
（箸を投げただとっ！？　馬鹿な！　あの一瞬で……っ！？）

ティアナ
（いけえええええっ！！　ファントムブレイザー・チョップスティックシフト！！！）
※チョップスティック＝箸

しかし……　しかし世界は余りに　余りに残酷……！
いつだって　いつだって『意地』は『技術』に取り残される……
……！！

ティアナ
「～～～～～っっっっっっっっ！！！！！！」

ハヤト
「――ハッハァァッッ！！」

肉に触れるハヤトの箸……！　遅かった……　ティアナの投げた箸はあまりにも……！
だが……

ハヤト
「――――！？」

唐突に現れる2対の箸

そう……
これこそハヤトが感じ続けてきた違和感　その源
ハヤトはその異変に実は心中の深いところでは気が付いていたのである
が……肉の独占を成功させたいという願いが　その事実からハヤトの目を背けさせていた

「願い」がハヤトを盲目にさせた……！

スカリエッティ
（長い逃亡生活を耐えてきたのは、今この瞬間の為なのだよ！）

ガジェット?型
つ【量産機の底力、見せてやらあああああっ！！】

ハヤト
（しまった！　ティアナに気を取られすぎていて、脇がガラ開きじゃねぇか！！
くっ……このスカ○ロマニアめがぁぁぁぁあああっっ！！）

スカリエッティ
（謂れの無い中傷はいい加減やめてくれないかな！？）

ガジェット
つ【いただきぃぃぃぃいいいっ！！】

スバル
「は――――――っくしょんっっっ！！！」

圧倒的　くしゃみっ……！！　ティアナとハヤトの……心からの叫びも耳には届かない
それほどのくしゃみ……鼻水と唾が……鍋へと降り注ぐ……！
どんでん返し……！　この土壇場で……！
まさに鍋殺し……！　鍋将軍を争う者達を喰い殺す悪魔的奇手っ……！

スバル
「ちーん……っ！　ごめんごめん、最近ちょっと風邪気味でさぁ」

ハヤト&ティアナ&スカリエッティ
「「「なっ、何ィィィィィィイイイッッ！？」」」

ハヤト
（手も箸も使わずに、たった一発のくしゃみだけで！？）

ティアナ
（第一手どころか、この勝負自体を決めたって言うの！？　あの犬っ子が！？）

スカリエッティ
（こんな先手の決め方が――）

ガジェット？型

つ【あっただとぉぉぉぉぉ！？】

まさに……魔手……！　必ず勝利するする一手……！

スバル
「あれー？　みんな食べないのー？」

ハヤト
（いや……悔しいが、こんな鍋はもう食べる気が微塵もしねぇ！
もうこの鍋はスバルしか食べられなくなった……！　無邪気……
無垢なる心が導いた勝利だとでもホザくつもりか！　運命の神様って奴はよォッ！？

――――！？　いや、この女っ！！）

ハヤトは見た……
悪魔的微笑みを浮かべ　自分達をせせら嗤うスバルの顔を……！

スバル
（ふふふふ……悪いけど、鍋将軍はあたしだよ！）

スカリエッティ
（こ、このタイプゼロ、まったく無垢なんかではないっ！！）

ハヤト

（ヒ、ヒロインの癖に鼻からしらたき出してやがる！！）

ティアナ
（スバル……そこまで自分を犠牲にして……恐ろしい子っ！）

ガジェット?型
つ【ガクガクブルブル】

スバル
（あははは！　今頃気付いたのかな、甘ちゃん諸君?
お腹を可愛く鳴らすところから始まり、年頃の女の子らしく振舞ってしらたきに夢中になる――その全てが計算ずくのあたしのお芝居、肉に意識が行き過ぎている欠食童子のみんなを油断させ、自分が鍋将軍になる為の布石だったってコトにね……！

ふふふ、そこで指を咥えて見ているといいよ。
みんなの愛する牛肉が、小娘に蹂躙させる様をねぇぇええ！！）

スバル
「じゃあ、いっただっきまーす♪」

開かれる口……　両手で掴まれた鍋……
まさか……　誰もがまさかと思った……　その瞬間……！

スバル
「んぐっ、んぐっ、んぐっ……」

一気飲み……！　大蛇の如き一気飲み……！
食べるのではなく　飲む……っ！　咀嚼もなにもなく　ただ飲む
……っ！

ティアナ
「なっ、何ィィィィィィッツ！？」

スカリエッティ
「一気飲みだとぉぉぉぉ！？」

ハヤト
「戦闘機人の胃袋は化物か！？」

スバル
「んぐっんぐっ……ごっくん。ぷはー……んー、冷めててイマイチだったかな。
やっぱりすき焼きはあったかい方がいいね♪」

ハヤト&ティアナ&スカリエッティ
「「「……」」」

ハヤト

「ってぇぇ！　ナメてんのかゴルァァァ！？　出せやぁぁぁ！！」

ティアナ
「今食べたの全部、吐き出しなさいよぉぉぉ！！　それ、８万円もする高級な肉なのよ！？」

スバル
「えー、そんなの無理だよー。もう食べちゃったしー」

ハヤト
「ふっざけんなよマジでぇぇぇぇ！　金は割り勘なんだぞ！？　なのに何で俺ら食えてないんだよ！！」

ティアナ
「今日のお勘定、全部スバル持ちだからね！！」

スバル
「そんなの困るよー、みんなで割り勘でしょー？」

ハヤト＆ティアナ
「「誰が払うかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」

店員Ａ

「てめーらもう帰れぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

スカリエッティ
「……拝啓、天国のドゥーエへ。辛いこともあったけど、私は元気です」

ガジェット？型
つ【１００話突破記念が、こんなんでいいのか？】

ちゃんちゃん。

１００話突破記念番外編　２　『とあ魂　～鍋は人生の縮図である～』（後書き）

え、あ、すいません謝ります。だから石はやめて！　お願いだから！
どうも、ラモンです。

そんな訳で色々と暴走しすぎた番外編その２でした。
……暫くギャグ書いてなかったせいで暴走しすぎた感が否めない。
感想で苦情が来たら速攻で消そうと思います。

銀魂面白いですよね。
私は単行本の途中までしか読めてないんですが。
じゃあ何でコレ書いたのかって？　だってなんかネタ的にナイスタイミングだったんですもん。
ヅラを誰にするかで凄く迷いました。けど、最終的にスカっちということになりました。　馬鹿だなホント……何してんだろ。
しかも最終的にカイジネタまで入っちゃってるし……。まぁ、でも話の大筋は元々の銀魂のままだからいいかな？

えー、そんな訳で１００話突破記念を２本纏めてお送りしました。
両方パロディネタでしたが、いかがだったでしょうか？
「パロディ載せんなｋｓが」とか「本編書けよデコ助野郎」という苦情がありましたら、遠慮なく言ってください。

ちなみに、とあ新本編の進行状況は４０～５０％という感じです。
あと２，３日以内には投稿出来ると思います。

それではまた、次の話で。

1周年特別番外編　『たまには、昔の話を』（前書き）

※今回、初めて他の作者さんのキャラクターとのコラボをしています。

ですが、ややキャラ崩壊が見込めますので、そういったのが嫌だという方は覚悟してからお読みください。

ちなみに、コラボした作品は……

・ＷＩＳＨ~ 王女が願う夢~　（アーチャーさん）
・魔法少女リリカルなのは~ヒヨリの日記。（夏菜さん）
・魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ ~Ｒｅｍｅｍｂｅｒ ｍｙ ｈｅａｒｔ~（アルフォンスさん）
・魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ ~運命を背負いし者~（雷天双壮さん）
・魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ 蒼の重騎士の再誕（アガギル・グレインさん）

以上の5作品です。

さて、覚悟は出来ましたか？　それでは……どうぞ。

1周年特別番外編　『たまには、昔の話を』

これから紡ぐ物語は、ハヤト達が機動六課に配属される前……訓練生として陸士訓練学校で日夜学んでいた時代の物語。
学生として楽しく過ごしている彼らの日常の、その一部をお送りしようと思う。
日常ではなく、冬休みのある一日を。
それでは……どうぞ。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
1周年特別番外編　『たまには、昔の話を』

「みんなで宿題をしよう。つーか手伝ってください」

陸士訓練校の冬休み終盤、ハヤトが突然そんな事を言い出した。
先日のテスト前も同じような事があった気が……、とティアナを筆頭とした真面目組が思っていると、ユウキとサリエルとが強く賛同を示し、あまりに必死な3人の様子に、スバルやゆずといった面々も、1人でやるよりは楽しいんじゃないか、と乗り気を示した。
そうなってしまえば、ティアナ、ヒヨリ、フィルといった真面目組も強く反対するわけにもいかず、急遽、勉強会が開かれることとなった。場所はサリエルとハヤトの部屋。

流石に訓練校の勉強室では、寒くて勉強にならないだろう、という配慮だったのだが……。

「あったけぇ……俺、このまま死んでも良い。つーか死ぬ」

「かゆ……うま……」

「いや、ハヤトもサリエルも流石にだらけ過ぎだろ、気持ちはわからなくもないけど」

サリエルの実家から送られてきた炬燵。これがいけなかった。炬燵から伝わる温もり、その、いっそ魔力と言っても過言ではない気持ちよさのせいで、先だって集まっていた面子の殆どが、勉強をする気が無くなっているのだ。

現在、四角い大きめの炬燵に入っているのは４人。

ハヤトの左側にはゆずが座り、右側にフィル、対面側にサリエルが座っている。

「ふにゅう……極楽じゃあ……」

とは、ハヤトの隣で温かさに頬を紅潮させているゆずの弁。

その表情は至福の絶頂という感じで、蕩けた表情はそれ以外表現できないだろう状況だ。

「足が伸ばせるってのもポイント高いよな。こんだけ大きい炬燵っ

て珍しいんだぞ？」

得意気な顔で、自慢げに送られてきた炬燵の素晴らしさを語るサリエル。

そんな現在、サリエルとハヤトの部屋で炬燵に入っているのは、比較的時間には正確なゆずと、５分前行動を基本としているフィルである。

「マジ炬燵の魔力パねぇ。これを送ってくれたマリーナさん超愛してる」

「にゅ～……わらわも、父上と母上に言って買うて貰おうかのぅ」

だらけきった顔で、全員が前に突っ伏して炬燵の恩恵を一身に受けている。

いい年をした少年３人と少女が一斉にだらけているのは、流石に凄い状況だ。そんな３人を見てフィルが苦笑するのと同時に、部屋の扉から軽いノックの音がする。

「ん、誰か来たみたいだな」

「フィル～、出てくれ～。俺はもう駄目だー」

「いや、ここハヤト達の部屋だろ？　ハヤトかサリエルが出なよ」

「無理無理。今出たら一瞬でピチュる。フィルなら出来るって、自

信持てって」

「それでも、それでもフィルなら、何とかしてくれるっ！」

「意味わかんないよ。……はぁ、仕方ないなぁ」

溜息を吐きつつも、何だかんだで炬燵から出て玄関に向かうフィル。面倒見が良いのも考えものだ。

炬燵で温まった熱を奪われる身体を温めようと、自分の両腕を擦りながらドアへと向かい、取っ手を掴んでドアを開ける。

「あれ？　何でフィルが出てくるのよ？」

「……それは、ちょっと酷くない？」

ドアから顔を出したフィルに声を返したのは、驚いた顔をしたヒヨリ。

彼女の後ろには、ヒヨリの他に遅れてきていたスバルとユウキ、2人の姿が見えた。

「あはは、ごめんごめん。だって、ここってハヤトとサリエルの部屋でしょ？

なのに何でフィルが出てくるのかなって」

ジト目で見つめてくるフィルに苦笑しながら、ヒヨリが尋ねる。

そんなヒヨリに、フィルは部屋の中を軽く指差し、溜息混じりで言葉を漏らした。

「2人とも、炬燵で蕩けてるよ。出たくないっていうから、俺が変わりに」

「なるほど。あの2人らしいね」

「な、なんでもいいけど早く入ろうよ～。寒くて死んじゃう！」

「全くだ！　こんな寒い中待たせるなんて、謝罪と賠償を要求するニダ！」

「はいはい。どうぞ、入って入って」

ワイワイと騒ぎだしたユウキとスバルに苦笑し、フィルは部屋の中へと4人を通す。

「やっほー、来たよ～」

「おっ邪魔しま～す」

「綺羅星！」

「綺羅星！」

「綺羅星！」

「綺羅星！」

フィルに先導される形で、ヒヨリ、スバル、ユウキの順に炬燵のある部屋へと入ってくる。その際、ユウキの挨拶にハヤト、サリエル、ゆずの3人が親指、人差し指、中指だけを立てた右手を逆さにして目に当て、どこぞのスタードライバーの幹部連中みたいな挨拶を交わしていたが……まぁ、フィルとヒヨリ、スバルは無視した。

それはさて置き。入ってきた4人は最初に視界に入れるのは、当然ながら大きめの炬燵。そして、そこには当たり前だが緩みきったハヤト達3人が居るわけで……。

「何よ、このだらけ具合は……宿題やる気ゼロじゃないの」

「まぁ、寒い日の炬燵って最高だもんね～」

「人の事呼び出しといてこれかい」

呆れている3人にまたまた苦笑しながら、フィルはさっさと自分の席へ戻る。

やはり外は寒く、ドアを開けて数分外気に触れただけで、炬燵が恋しくなってしまうのだ。

仕方ないね。

「あー、私も入る～」

「ちょ、ヒヨリ！　く、くっ付かないでよ！」

「まぁまぁ良いじゃないの、フィル。仲良くしましょうよ～」

そんなフィルの隣にヒヨリが滑り込む。

普通の炬燵ならばとうに定員オーバーだったろう。しかし、サリエルの実家から送られてきた炬燵は大きく、一辺に2人ほどは余裕で入る事ができるのだ。

それをいい事に、ヒヨリはフィルにぴったりくっ付いている。

その雰囲気は、まるで恋人同士のようだ。

「……」（ギリッ）

「リア充め」

「爆発しろ」

顔を真っ赤にしているフィルと、そんな彼の肩に頭を預けて悪戯っぽい笑みを浮かべるヒヨリを見て、残った男3人が揃って殺気を醸し出す。モテない男の僻みというヤツだ。

ハヤトとサリエルの2人は揃ってフィルを睨みつけていたが、ふとある事に気付いてしまう。

……果たして、自分の横には誰が座るのだろうか？　と。

「ユウキ、サリエルが隣に座りたいって」

「ユウキ、ハヤトが隣で温めて欲しいってさ」

一瞬の睨みあいの後、同時に口を開くハヤトとサリエル。
どうやら両者とも、男が隣に座るのは勘弁願いたいようだ。

「なにそれ酷っ!?　俺、邪魔者かよ!!」

「やるなサリエル」

「そっちこそな、ハヤト」

「って無視かい!!」

あんまりな扱いにユウキが声を上げるが、とうのハヤトとサリエルは完全にスルーして、互いの反応の素早さを称えあっている。無視されたユウキは更に声を上げるが、結局スルーされ、地面に「の」の字を書き始めてしまう。

「あ、ゆずちゃん。隣いいかな?」

「んむ?　わらわの隣かや?　よいぞ。ほれ、入るがいい」

「わーい、ありがとー」

ハヤトとサリエルが何とも微妙な戦いを繰り広げてる向こうで、

スバルはちゃっかりと自分達の座る場所を確保、蕩けていたゆずの隣に身体を滑り込ませた。
なんとも素晴らしい早業である。

「んー、じゃあホラユウキ。俺の隣いいぜ、入りなよ」

「ありがとうサリエル、心の友よ！」

そうしてユウキだけが残された状況を見て、流石に可哀想になったのかサリエルがそう言って少し横に詰めて彼が入れるスペースを作ってやる。
その優しさに泣きそうになりながら、ユウキはいそいそとサリエルの隣で炬燵へと潜り込む。
友情に罅が入ったような気がしないでもないが、とりあえずはこれで一件落着である。これで全員が着席、勉強会の準備が完了した訳だ。

しかし――。

「さて……俺達は今日、こうして宿題をするために集まった訳だが、残念なお知らせがひとつ」

神妙な顔つきで切り出したハヤトに、炬燵の温もりを享受している全員の視線が彼に集まる。全員が、まさかここまできて問題が出るとは思っていないのだろう。しかし、ハヤトが指摘した問題は本人達が自覚していないだけで、恐らくこの場にいる全員が抱えてし

まっている重大な問題なのだ。
重大すぎる問題。それは……。

「宿題する空気じゃなくね？」

「あー……うん。確かに」

「宿題するって空気じゃないよね～」

「てーかさぁ、この炬燵ってデカイから全員は入れるけど、流石にノート広げるスペースがないよな」

「頑張れば広げられなくもないけど……全員分は無理かな」

ハヤトの言葉に賛同するサリエル、スバル、ユウキの3人。
そんな4人に対し、宿題を自分の鞄から取り出していたフィルが提案し、その提案にヒヨリも賛成の意を示す。

「もうひとつテーブル出して、何人かはそっちでやればいいんじゃない？」

「そうね。そうしないと出来ないみたいだし」

だが2人の提案は、2人以外の全員によって一蹴されてしまう。

「わらわは無理じゃぞ！？　こんな寒い中で炬燵を失ってしまったら、死んでしまうじゃろ！」

「そーだそーだ！　こう寒くちゃ、出来る勉強も出来ねーっての！」

「同じく無理無理。炬燵を失うくらいなら、俺人間辞めるわ」

「てゆーか、今現在、炬燵から出るのがそもそも無理だよ～」

「フィルとヒヨリは俺達に死ねと仰るのか！？　そんなご無体な！」

次々と反対の意を示す5人に、フィルが頬を引き攣らせる。

そもそも、今日宿題をやろうと言い出したのはハヤトなのに……などと思っていると、フィルの隣に座ったヒヨリが、彼の腕に自分のそれを絡ませながらニヤリ、と笑みを浮かべて口を開く。

「ん～……そう言われれば、私もフィルの隣から動くのはちょっとなぁ」

「い、いや意味わかんないから、ヒヨリ」

「「「リア充マジ爆発しろ」」」

最後のノロケと僻みは置いておいて、つまり今、色々な面で既に宿題をするのが無理な状況になっているのだ。心情的なものはもちろん、物理的なスペースの余裕的にも、何よりも全員のオーガニック的な何か的にも、無理になってしまっている。

「あ、そだそだ」

さらにそんな彼らに追い討ちをかける物資が、スバルの鞄から登場する。

「これ、こないだ家に帰った時にお父さんから貰ってきたの。皆で食べてって言ってたよ」

スバルの鞄から取り出されたのは、炬燵のお供、オレンジな小憎らしいあんちくしょう……みかん。

これで、炬燵でみかんの最強コンボが揃ってしまった。最初の一個を口にしたが最後、もう勉強とかそういうものは、比較的真面目組であるフィルとヒヨリ以外の全員の頭から、どこかに飛んでいってしまった。

「こうやって温まってると、アイス食べたくなるよね～」

「あー分かる分かる。夏場にクーラーギンギンにして、キムチ鍋とかもいいよな」

「矛盾してるんだけど、その矛盾がいいって言うかさぁ」

「そうそう。何か贅沢してる感がいいんだよね」

「わらわはそういうのは好かぬ。やはり寒い時には温かい物、暑い時には冷たい物じゃろ」

フィルとヒヨリ以外の5人全員が、みかん片手にすっかり雑談モードである。

そんな5人を見ながら苦笑するフィルに向かって、ヒヨリがみかんを剥いて「あ～ん」と差し出し、それを見た男3人から嫉妬と羨望の視線がぶつけられる。

「それにしても、みかん美味すぎだろ……っと、また誰か来たな」

「あ、多分ティアだよ。ちょっと遅れてくるって言ってたし」

言われてみれば、確かにティアナだけがまだ来ていない。

それなら、恐らく来客は間違いなくスバルの言うとおりの人物なのだろう。

「よし、頑張ってくれフィル」

「頼りにしておるぞ、フィル」

「信じてるからな、フィル」

「頑張ってね、フィル！」

「応援してるぜ！　フィル！」

「お願いね、フィル♪」

「全員で俺に丸投げって、どういうことなの……」

ここぞとばかりにナイスなコンビネーションを発揮する5人に肩を落とし、それでも生来の人の良さから腰を上げるフィル。はっきり言って炬燵から出るのは億劫でたまらないが、誰かが迎えに行かなければならないので仕方が無い。

「いってらっしゃーい」なんて無責任すぎる声を背にフィルが玄関に向かうと、そこにはやはり想定どおりの人物が立っていた。

「あら、フィル。大変ね」

「……わかってくれて、嬉しいよ」

苦笑混じりの彼の顔を見て一瞬で事情を察したティアナが、同じく苦笑混じりで声をかけ、フィルはそんな彼女の労いに涙する。それから、フィルはティアナを先導して炬燵で皆がだれている部屋へと戻り、そしてティアナは部屋の惨状を見て溜息を漏らした。

「あんた達ね……宿題しなさいよ」

「「「げっ」」」

「何が「げっ」よ。ハヤト、ユウキ、サリエル。今日集まったのは、主にあんた達のためなんだからね。そこんとこ、分かってるの？」

まるでお母さんのように、腰に手を当てて小言を零すティアナ。

「い、いや……やるに決まってんだろ。な、なぁ？」

「こ……これからだよな」

「そ、そうだぜ。ちょうど、今から始めようと思ってた訳であるからして……」

子供のようないい訳をしながら、引き攣った笑いで互いの顔を見比べる3人。

ヒヨリとゆず、スバルの3人も同じようなものなので、全員目を泳がせて明後日の方向を見ていた。

「いい訳するなら、もうちょっと上手い事言いなさいよ……。それだけ目を泳がせてたら、やる気なんてありませんって言ってるようなモンでしょうが」

ジト目……というか、全く信用していない目で額を押さえながら

溜息を吐くティアナ。
どうみても宿題をやっている状況には見えない上に、やろうとした痕跡すら見れないのだから溜息のひとつも吐きたくなっても仕方ないだろう。

「あーはいはい！　そーですよ！　やってませんでしたよ！」

「そもそも、この状況で出来る訳ねーじゃんか！」

「炬燵にみかん、この時点で無理ですよーだ！」

ティアナに睨まれることを数秒、やけになった様な口調でハヤトとユウキ、サリエルが仰向けに体を投げ出しながら大声を出した。
それに便乗して、フィルを除く残りの全員も、表情が緩みきって諦めモードに突入する。
そんな現状を憂いて、フィルが仕方ないとばかりに切り出した。

「もう今日は無理かな～……やる気も起きないし、このままダラダラ過ごそうか」

そう、この中で宿題が終わっていないのはハヤト、サリエル、ユウキ、そしてスバルぐらいのもので、フィル達は既に殆ど終わっている。わざわざ今日やる必要も無い。
ハヤト達４人は夏休みの時のように、最終日で泣きを見るだろうが……まぁ自業自得だろう。
なら無理にやる必要はない。のんびりしたっていいじゃないか、

フィルはそう自分を納得させた。

「さすがはフィルじゃ！　話がわかるのぅ！」

「もう全然やる気しないもんね～」

「そうね。私も今日は、このままダラダラしたいなぁ」

「やる気売り切れた。たった今売り切れた」

「炬燵の魔力にお手上げ侍だぜ」

「やっぱすげぇぜフィル！　俺達に出来ない事を平然とやってのける！
そこに痺れる！　憧れるぅっ！！」

フィルの提案に、次々と賛成意見が上がる。
どうやら、全員が最早この状況で宿題するのは無理だと思っていたらしい。既に心の中では、この集まりは『今日はだらだら過ごしましょうの会』に変更されているのだろう。
そんな中、真面目なティアナだけが、ちょっと怒ったような表情を浮かべて声を上げるのだった。

「ちょっと、本気でやらないつもり？」

「ティアは固いなぁ。いいじゃん、今日はもうダラダラしようよ～」

「そうじゃそうじゃ、堅苦しい女子は嫌われてしまうんじゃぞ」

「何言ってんのよ、もう……」

「まぁ、そういうのが良いって人がいるかも知れないけどね～。誰とは言わないけど」

「……はぁぁ」

流石の委員長気質も、この状況では反論を封じる事ができず、深い深い溜息と共に、唯一の真面目仲間であるフィルへと視線を投げかけてくる。

しかし、既に諦めてしまったフィルは自分の定位置に戻り、わざとらしい声でそれに答えるのだった。

「もうだめだー、やる気しないー、炬燵の力の前に膝を屈した俺を蔑んでくれー」

そう、諦めてしまった今のフィルは、いつも皆を纏める真面目なフィルではないのだ。

炬燵の魔力の前に屈した、弱い一般市民なのだ。もうやる気なんてとっくに売り切れ、体中のどこを絞っても、一滴たりとも出てくるわけも無い。

「ま、まぁ……確かに宿題するような状況じゃないし、文句はないけど……」

「罵ってくれ～……この俺を、諦めてしまったダメ人間の俺を、力一杯～」

「ののしっ……!?　そ、そんなことしないわよ！　あーもう、調子狂うわね……」

「何だよ、ティアナはゆっくりしねーの？」

「なっ！　べ、別にゆっくりしたくないなんて、言ってないでしょ!?

ま、まぁ？　この状況であたしだけが勉強してるなんて、空気読めてないしね……」

そんなフィルを見て、さしものティアナも諦めた顔で開いている場所……ハヤトの隣へと腰を下ろして炬燵の中へと潜り込んでいく。

そして直ぐに彼女の顔は、炬燵の温もりによって幸せそうに蕩けていった。

「俺は今、人間がダメになっていく過程の目撃者になったのかもしれない」

「わかりやすいよなぁ」

「ティアは顔に出やすいからね～」

「単純なんだろ」

「ハヤトうっさい」

ティアナの蕩けた顔を見ながら、サリエルとユウキ、スバルが苦笑する。

やはり、炬燵の魔力に逆らえる人間など居ないという事なのだろう。こうして、急遽行われる事となった勉強会は、これまた急遽中止となったのだった。まぁ、苦労するのは宿題をやっていない面々だけなので、それ程問題ないのだろう。

「おーし、それじゃ……寝るぞ！」

怠惰という欲望に負けた人間筆頭のハヤトが、さらに欲望に忠実になって声を上げる。

そんなハヤトの後頭部を引っ叩きながら、ティアナが呆れた顔で文句を付けた。

「せめて起きて何かしなさいよ」

「えー、寝るのが一番だって、こういう場合」

「何を言っておるか。折角全員揃っておるのじゃ、何かするのが若者としての勤めじゃろう」

「……ゆずちゃん、ちょっとお婆ちゃん臭いよ？」

「なっ！？　だ、誰がお婆ちゃんじゃ！！」

「じゃあモンハンしよーぜモンハン！　丁度ＢＳＰ持ってきてるからさ！」

「いや、ユウキ。それ絶対確信犯だろ？」

「ワタシニポンゴワッカリマセーン☆」

「日本語って何だよ、ミッド語だろうが……」

大きな炬燵で、全員がだらけきった状態で緩んでいる。
これもまた、幸せな情景の一つだろう。全員が笑っていられるのが、その証拠だ。

「んー、とりあえず……そうだな、炬燵に入りながら勉強できる方法を考えよう」

「お、次に生かすわけだな、流石フィル。真面目な一級フラグ建築士！」

「リア充爆発しろー！」

「むしろ？げろーっ！」

「ハヤト、ユウキ、サリエル。後でオボエテロ」

「「「ひぎぃ」」」

フィルの殺気に震え上がる3人を尻目に、ゆずが「とりあえず蜜柑は厳禁じゃな」と提案する。
それで少しだけ真面目に考えたのか、ヒヨリとティアナもそれぞれの意見を出す。

「蜜柑がどうこうって前にね、8人も入ってる時点で色々と無理なのよ」

「せめてもうちょっと炬燵が横に長ければ、話は別だけど……」

「不可能を可能にする……それが俺たちじゃないか！」

「そうだ！　俺達は今までだって、色んなことを可能にしてきたじゃないか！」

「例えば夏休み、ラスト1日で俺とハヤト、ユウキの3人分の宿題を皆で片付けたり！」

「レポート60枚×3を提出半日前から始めて終わらせてみたり！」

何だかムダに熱血口調で次々と事例を挙げていく3人。
だが、3人のテンションとは裏腹に、残りの5人のテンションは急降下……というか、別の方向にボルテージがアップしていったりしている。
そして、そのボルテージが限界に達したのか、代表してヒヨリが口を開き、音節を短く区切ってハッキリと3人に対して言葉をかけた。

「良いこと、言ってるつもりかも、しれないけど。それ、全然、良いことじゃ、ないからね？」

その言葉を継ぐのはゆず。

何故だかハイライトの消えた目で、ゆっくりと3人を睨みつけながら喋る。

「そもそも、その宿題やらレポートは、殆ど主らは手を出しておらんかったじゃろうが」

更に続けるのはティアナ。

「あたしとゆず、ヒヨリ、フィルとスバルが必死になってやったんじゃない」

今度はフィル。

「しかも、その後は全然労いも反省も無しと来たか……」

最後を飾るのはスバル。

「やっていいことと、悪いことってあるよね……」

「えっと……」

「あの……」

「その……」

どうやら自分達が地雷を踏んだことをに気付いたのか、３人の顔を冷や汗が流れていく。

しかし、時既に遅し。

５人は背中に「ゴゴゴゴ」や「ドドドド」といった擬音を背負いながら、ゆっくりと３人に向かって手を伸ばす。そしてそれは３人が逃げる間もなく頭や腕を掴み上げ……。

「「「「「少し……頭、冷やそうか？」」」」」

「「「すいませんでしたぁぁぁぁあああっ！！！」」」

冬休み、まだ殆どの訓練生が実家に戻っている陸士訓練校の寮に、３人の悲鳴が響き渡った。

1周年特別番外編　『たまには、昔の話を』（後書き）

1周年特別編でした。
どうも、ラモンです。

どうだったでしょうか、訓練校時代……にする意味があったのかイマイチ疑問な特別編（笑）
まぁ、単純に思いついたネタが宿題と炬燵、という漠然としたイメージだったので、それを元に私の高校時代なんかを参考に書いてみました。

一応コラボした全作品のキャラが目立つようにしてみたんですが…
…コラボって難しいですね。『とあ新らじお』とは、また違った感じで書かなきゃいけませんし……。
もし気が向いたら、今度は台本形式で、訓練生時代の一幕をちょこちょこっと書いていきたいなーと思っています。
やっぱり1周年記念ですから、どうせなら2本くらいはやってみたいですし。

ちなみに、本来はコラボした作品のキャラ達はもっとカッコイイｏｒ可愛いですし、こんなお馬鹿キャラじゃないですよ？
今回は、うちのハヤトに影響されて皆がこんな感じに……悪いのはハヤトなんですっ！！（えー）

さて、いい訳はこれくらいにして、特別編その1（予定ですが）の後書きを終わりたいと思います。
最後に、今回コラボさせていただいた作品の作者さん方に感謝を。
それと扱いが微妙になっちゃって申し訳ありませんでした（汗）
何か文句や直して欲しい部分などありましたら、ご連絡ください。

直ぐに修正いたします。

それではまた、次の話で。

EXTRA　『何かこう、色々と』

○ハヤト×ヴィヴィオなんてこんなもん

ヴィヴィオ
「わー！　わー！　おにーちゃん、雪だよ雪っ！」

ハヤト
「そうだなぁ、ある程度積もるとは思ってたが、こんな雪国レベルまで積もるとは……。
　ミッドチルダ意外とパねぇ」

ヴィヴィオ
「おにーちゃん！　雪だるまつくろっ！　雪だるまっ！！」

ハヤト
「ヤだ。１人で作りなさい。何事も経験です」

ヴィヴィオ
「ブーブー！　いいもん、ヴィヴィオ１人で頑張るもんっ！」

ハヤト
「はいはい頑張れー」

～数１０分後～

ヴィヴィオ
「おにーちゃん見て見てっ！　雪だるまーっ！」

ハヤト
「……へったくそだなぁ」

ヴィヴィオ
「むきーっ！！　くらえーっ！」

ハヤト
「つめたっ！？　こら、この糞ガキッ！
人様に向かって雪だるまを投げるんじゃありません！」

ヴィヴィオ
「おにーちゃんが悪いんだもんっ！　べーっだ！」

ハヤト
「こんの……！　あっ！？　オイコラ逃げるな！」

ヴィヴィオ
「きゃーっ♪」

ハヤト
「待たんかいワレェェッ！！！」

～さらに数１０分後～

ハヤト

「ぜーはー……ガキンチョ捕獲！」

ヴィヴィオ
「つかまっちゃったー。じゃあ次はヴィヴィオが鬼～」

ハヤト
「上等！　俺を捕まえられるモンなら捕まえてみろ！！」

ティアナ
「……アンタら、本気で仲いいわよね」

○ハヤト×ギンガっぽい何か

ハヤト
「何で俺が、脳筋ギンガの買出しにつき合わされなきゃならんのだ……」

ギンガ
「こっちの台詞だよ。折角1人でゆっくり出来ると思ったのに……」

ハヤト
「あんだと！？」

ギンガ
「何よ！」

ハヤト
「迷惑してんのはこっち……お？」

ギンガ
「あ、雨降ってきちゃった」

ハヤト
「ったく仕方ねぇな……ホレ、傘」

ギンガ
「あれ？　折りたたみの傘、持ってきてたんだ」

ハヤト
「一応予報で雨降るかも、って言ってたからな。ほら、入れよ」

ギンガ
「え？　あ、う、うん……じゃ、じゃあ傘私が持つよ。荷物多いから大変でしょ？」

ハヤト
「いーよ、別に」

ギンガ
「だって……」

ハヤト
「女の子に、こーゆーの持たせられねーだろが」

ギンガ
「なっ！？　お……女の子って……」

ハヤト
「あん？　何だよ、女の子だろ？」

ギンガ
「……わ、私、幾つだと思ってるの？」

ハヤト
「ん？　あぁ……確かにもう女の子って歳じゃねーわな」

ギンガ
「……殴るよ？」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ＥＸＴＲＡ　『何かこう、色々と』

○ハヤトとティアナがイチャつくだけ

ティアナ
「ハヤト、そろそろ出るわよ？」

ハヤト
「……んー」

ティアナ
「ハヤト？　ちょっと、聞いてる？」

ハヤト
「……んー」

ティアナ
「あーもー、どんだけゲームに夢中なのよ」

ハヤト
「……んー」

ティアナ
「……ねぇってば」

ハヤト
「……んー」

ティアナ
「……」（でこちゅー）

ハヤト
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：っ！？」

ティアナ
「ホ、ホラ！　さっさと出るわよ！」

ハヤト
「え、ちょっ、ティア！？　お前今……」

ティアナ
「いいい、いいから出るわよ！」

○ハヤトとスバルがイチャつくだけ

キャロ
「にゃーんです！」

ハヤト
「お、キャロ。猫耳なんて何処で貰ったんだ？」

キャロ
「フェイトさんから貰いました」

ハヤト
「へー。そーゆーの、結構可愛いなぁ」

スバル
「……」（いそいそ）

ハヤト
「いやぁ、猫耳っていいよな～」

スバル（猫耳）
「ハ、ハヤト！」

ハヤト
「？　どうしたスバル……って猫耳！？」

スバル（猫耳）
「に……」

ハヤト
「に？」

スバル（猫耳）
「にゃ～ん……」

ハヤト
「……」

スバル（猫耳）
「……」

ハヤト
「……」

スバル（猫耳）
「……え、えと？」

ハヤト
「スバルをテイクアウトで」

スバル（猫耳）
「はにゃっ！？」

○ハヤト×ブレイブハートっぽい物体

ブレイブハート
≪　マスターハヤト。今日は私の定期メンテナンスの日ですよ　≫

ハヤト
「ちょっと待て。このステージ終わったら行くから」

ブレイブハート
≪　……１０分前も、同じ事を言っていましたよ？　≫

ハヤト
「大丈夫だ！　このステージが終わったら！　終わったら必ず！」

ブレイブハート
≪　わかりました。そのステージまで、ですからね？　≫

～１０分経過～

ブレイブハート
≪　マスターハヤト？　≫

ハヤト

「もうちょっと！　このステージが終わったら！！」

ブレイブハート
≪　……わかりました。そこまでですよ？　≫

ハヤト
「サンキュー！」

～何だかんだで1時間経過～

ハヤト
「ふぃ～。よーやく終わった～」

ブレイブハート
≪　ではマスターハヤト、私の定期メンテナンスに……　≫

ハヤト
「そうだな。えっとメンテの申請書は……」

ブレイブハート
≪　机の右下から2番目の引き出しですよ　≫

ハヤト
「お、あったあった。えっとそれから財布は……」

ブレイブハート
≪　この前出かけた時に、コートのポケットに入れていましたよ　≫

ハヤト
「あったあった。サンキュー」

ブレイブハート
≪　もう……マスターハヤトは、私が居ないと本当に駄目ですね　≫

ハヤト
「だなぁ。ブレイブハートが居ないと、生きてく自信ねぇわ」

ブレイブハート
≪　ふふっ。本当に、仕方のない人なんですから　≫

○ハヤト×ハヅキのようなそうでもないような

ハヅキ
「ハヤトーーーっ！！　お姉ちゃんとラブラブしようーーーっ！」

ハヤト
「あぁ、うん。いいよ」

ハヅキ
「は！？」

ハヤト
「？　どしたの、姉ちゃん。ラブラブすんでしょ？」

ハヅキ
「い、いいのか？」

ハヤト
「別に構わないけど？　俺も姉ちゃん大好きだし」

ハヅキ
「あわわわわわ……ほ、ほほ、本当か！？」

ハヤト
「うん。ホラ、姉ちゃん……おいで？」

ハヅキ
「ハ……ハ……ハヤトォォォッッッッ！！！」

ハヤト
「はいはい。姉ちゃん大好きですよー」

ハヅキ
「お姉ちゃんも大好きだぞぉぉぉっっ！！」

○ヴィヴィオをフォワード全員で弄ってみた

～4月1日～

ヴィヴィオ

「おにーちゃん大変大変！　ガジェットがいっぱい攻めてきたよ！？」

ハヤト
「はぁっ！？　ガジェットが！？」

ティアナ
「ヴィヴィオ、それ本当なの！？　一大事じゃない！」

ヴィヴィオ
「にゃはは、なんちゃって。嘘にきまってるよ～。おにーちゃん達みんな引っかかった～。
　いつも意地悪されてる仕返し……」

ハヤト
「スバル！　エリオ！　今すぐ隊長達に連絡だ！」

スバル＆エリオ
「「了解！」」

ティアナ
「キャロはあたしと一緒に部隊長に連絡するわよ！　くっ、ここに来るまでどの位の時間が……」

スバル
「なのはさんですか！？　ヴィヴィオから、ガジェットが大軍でやってくるって報告が！」

エリオ
「はい、多分ミッドへの攻撃が目的だと思います。

フェイトさんが先に出撃ですね、わかりました！」

キャロ
「えと、地上本部にも応援を頼むんですね？　わかりました！」

ヴィヴィオ
「え、あの……えっと？」

ハヤト
「地上本部への応援なら俺がやっておく！　ティアナ、お前はスバル達を連れて先にいけ！」

ティアナ
「わかったわ！　皆、準備はいい！？」

全員
『おう！！』

ハヤト
「死ぬなよ、お前ら！」

ヴィヴィオ
「あのっ、おにーちゃん！！」

ハヤト
「どうしたヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ
「あ、あのね。今のは嘘で……」

ハヤト
「はぁ？　あっはっは。おいおい冗談はよせって。
地上本部まで動いてるのに、今更嘘だったとか通じねーから。嘘だったらお前、酷い事になるぞ？」

ヴィヴィオ
「はわ、はわわ……」

ハヤト
「安心しろヴィヴィオ！　レジアス中将や最高評議会の皆さん、それとクロノ提督を始めとした本局の皆さんも、ガジェット迎撃の為に、全軍を率いてここまで来てくれるらしいぞ！
よかったなぁ！？　あははははははははっっっっ！！！！！」

ヴィヴィオ
「う……うわぁぁぁぁんっ！！」

ハヤト
「どうしたのかなぁヴィヴィオ？　ホラホラホラホラぁ……！」

ヴィヴィオ
「ごめなさいぃぃぃっ！！！」

ルーテシア
「……皆、楽しそう」

ギンガ
「てゆーか、トラウマになるよね、アレ」

ルーテシア
「……自業、自得？」

ギンガ
「そうかなぁ……？」

番外編11　『とあるデバイスとその主の、おかしな1日』（前書き）

※デバイスを擬人化しています。そういうのが嫌い、苦手な方は注意してください。

番外編１１　『とあるデバイスとその主の、おかしな１日』

本当に心の底から驚いた時、人は何も考えられなくなる。
そういう話は漫画とかでよく見た事がある。ただ、俺は何でか知らんが漠然と「俺だけは違う」と思い込んでいた。自分だけは、どんな事態でも冷静に対処できると思っていたんだ。
けれど、どうやらソレはただの思い込みだったらしい。

「……」

「どうかされたのですか？　顔色が優れないようですが」

現に今、俺は何も考えられない状態になっている。
漫画とかで言うところの、「頭が真っ白」みたいな状態だ。

「起床時刻から１０分ほどが過ぎています。
これ以上起床が遅れますと、本日の予定に支障が出てしまいますよ？」

「……」

その原因は、目の前に立ってこちらを見つめている、メイド服を装備した、リインフォース曹長と同じくらいの大きさをして、空中にふわふわと浮かぶ美女。
緩いウェーブのかかった青い髪に、やや垂れ目がちな赤い瞳。整

った顔つきと、全体的に細い身体に程よく膨らんだ胸。落ち着いた雰囲気は着ているメイド服と凄く合っていて、何と言うかこう……思わず見惚れてしまう程に美しいと感じる。

恐らくこの美女と街中ですれ違えば、その全員が漏れなく振り返るだろう。

まぁ、人間サイズならばの話だけれど。

「マスターハヤト？」

しかも、この美女は俺を『マスターハヤト』と呼ぶのだ。

俺の知っている限りで、そんな風に俺を呼ぶのは１人……というか１機というべきかは分からんが、とにかくまぁ１人だけしか居ない。

「え？　もしかしなくてもブレイブハート？」

「はい。私はブレイブハートですが」

「マジで？」

「マスターハヤトに対して、嘘を吐くメリットが思い当たりません」

喋り方とかは、確かにブレイブハートに似ている。

けれど、俺の知っているブレイブハートは銀色の指輪……というかデバイスで、間違いなくリインフォース曹長サイズの人間だった、

なんて記憶はこれっぽっちもありはしない。
だが目の前の美女は、自分の事をブレイブハートだと言う。

「……ちょっと待ってくれ。頭の中の整理するから」

「了解しました。待機しています、マスターハヤト」

俺の答えに頷いて、ブレイブハートはベッドの隅までふわふわと浮かびながら移動して、そこに畳んでいた毛布の上に、可愛らしくちょこんと座る。
とりあえず彼女をそのままにして、俺は何でこんな状況になっているのか思考を巡らせた。

原因として思い当たるのは、当然だがロストロギア関連ということ。
流石にどんな凄腕のデバイスマイスターでも、一晩でデバイスを――人形サイズとはいえ――人間にするなんて出来やしない。前々から周到に用意していたなら話は別だが、流石にそこまでしてブレイブハートを人間にする意味がわからん。

それに、丁度昨日はロストロギアの護送任務があった。
中身は知らされていなかったが、俺とティアナ、スバルの3人と高町隊長、ヴィータ副隊長の計5人でとある富豪がわざわざ買い取ったとかいうロストロギアを運んだのだ。
封印処理は終わってた筈だが、不完全だったか、それとも何かの弾みで封印処理が解けてしまったのかはわからないが、何かしらの原因でロストロギアが起動し、こうして1日を置いてブレイブハートに効果を発揮した……そう考えるのが妥当か。

「ブレイブハート。ちょっといいか？」

「なんでしょうか？」

「自分がそうなった時の状況、覚えている限り話してみてくれ」

「はい。昨夜の0時になった瞬間、突然の魔力反応と共に私の全機能が一時的に停止しました。

そして5時間後に再起動した際には、すでにこのような状態に。魔力反応と、あり得ない私の機能停止状況を鑑みるに、おそらくロストロギアなどによる現象ではないかと推測されます」

「だよなぁ……そういや、その服は？」

「再起動した際に着ていました」

「なるほど」

とりあえず状況の整理を終え、気持ちを落ち着けるように溜息を吐く。

原因の予測はついた。後は八神部隊長か高町隊長に報告、昨日のロストロギアの持ち主にでも連絡をつけてもらって、どんなロストロギアなのかを確認、対処方法とかを聞けば万事解決だろう。

「んー、やっぱこういうのは、部隊長に先に連絡した方がいいよな？」

「そうですね。その方がよろしいかと」

ブレイブハートに確認し、部隊長に連絡しようとした。
すると丁度それとタイミングを同じくして、部屋のドアが開いて、その向こうからエリオがタオルで髪を拭きながら入ってくる。
ああ、何で居ないのかと思ったら、シャワー浴びてたのか。
今日は早朝訓練も無いってのに早起きだねぇ。

「あ、ハヤトさん。おはようござ……」

「おお、おはようエリオ……って、どうした？」

しかしエリオは挨拶を途中でやめて、何か知らんが俺の方を見てなんとも言えない表情になる。
寝癖でもついてるのかと自分の髪を触ってみるが、どうやらそういう訳ではないようだ。理由がわからず首を傾げたところで、畳んだ毛布の上にちょこんと座っている人形サイズの美女、つまりはブレイブハートが居ることに気付いた。
なるほど、つまりエリオはそういう勘違いをした訳だな。

「エリオ、お前の思ってることは違ってだな……」

「い、いえ！　大丈夫ですハヤトさん！　僕、そういうのは気にしませんから！」

「いやだから違うくて……」

「フィ、フィギュアとかを集めてても、別に偏見とかそういうのありませんし！
それにハヤトさんがそういうのが好きだっていうのも、スバルさん達から聞いてましたし！」

「だから違……」

「安心してください！　スバルさん達に言ったりしませんから！」

勘違いしたままのエリオは、目を泳がせながらこっちの言葉を聞こうともしないで、あーだこーだと弁明してくる。あーなんだろ、何かちょっと泣けてきた。

「エリオ落ち着け。フィギュアとかじゃなくて、これは……」

「何騒いでるのよエリオ、ハヤトがまた何かやらかし……た……」

「どしたのエリオー？　ハヤト、もう起きて……」

「……あーもー」

どうやら神様とやらは俺のことが嫌いらしい。
軽いパニックを起こしているエリオの後ろから、今度はティアナとスバルの2人が顔を覗かせ、揃ってブレイブハートを見てから言葉を詰まらせる。

もうね、顔を見ればわかるんだ。こいつらもエリオと同じ誤解をしてるって。
長い付き合いだからじゃない、あの顔を見たら誰でも分かる。

「あのなティアナ、スバ……」

「ティティティア！　どど、どうしよう!?
いつかこうなると思ってたけど、ハヤトがついに2．5次元に目覚めちゃったよ!?」

「お、落ち着きなさいスバル！　ドイツ軍人はうろたえないっ！」

「あたし達は管理局員だよ!?」

先手を打って弁明しようとした俺だったが、それよりも更に先手を取られてしまった。
つーかスバル、いつかこうなると思ってたってどういう意味じゃゴルァ。

「だ、大丈夫だよハヤト！　ハヤトもお年頃だもんね！
そーゆーのに興味もっても仕方ないよねっ！　うん、大丈夫！
あたし達は分かってるから!」

「そうよハヤト。アンタがフィギュアを「自分の嫁」とか言っても気にしないわ。大丈夫！」

「それって大丈夫なんでしょうか?」

何だかよくわからん納得の仕方をして、ティアナとスバルがこっちに生温かい視線を送ってきやがる。ちくしょう、何だか涙出てきた。何でこいつら人の話聞かないの？

「でもねハヤト。３次元の女の子だって怖くないんだよ？」

「ええ、だからフィギュアだけに夢中になるなんてやめなさい？不毛だから」

「いやだからこれはフィギュアじゃなくて……」

「分かってるわ。「〇〇タンは俺の嫁」って言いたいんでしょう？けれどハヤト。残念だけどそれはフィギュア。喋ったり動いたりはしないの。だから――」

「違うっつってんじゃろがボケェェェッッッ！！！！」

こうして、俺のやたらと疲れる１日は、まず変な誤解をして暴走しているティアナとスバル、そしてその２人と同じぐらいに混乱して珍妙な言動をしているエリオの３人の頭を、どこからか取り出したハリセンでシバくところから始まったのだった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

番外編１１　『とあるデバイスとその主の、おかしな１日』

ｓｉｄｅ：ブレイブハート

色々とあった朝方から2時間３2分後。
私はマスターハヤトの左肩に乗ったまま、機動六課食堂へと向かっていた。
あの後、ティアナさん達が落ち着くまでに5分２６秒を要し、結局私が口を挟んで事情を説明することで事態を収束させることになったのだ。
誤解だと分かると、ティアナさん達は随分と恥ずかしそうにしていたと記憶している。
やはり、あれだけ誤解をして色々な発言をした後だったので、恥ずかしかったのだろう。

「やっぱ何か落ち着かねーなぁ……」

「そうですか？」

マスターハヤトは私を乗せている左肩が気になるのか、時々私が腰掛けている左肩をモゾモゾを動かしている。私は私で、普段は下から見上げてばかりいたマスターハヤトの顔が自分の近くにある、というのが何とも不思議な感覚で、先ほどからずっと全身を硬直させているのだけれど。

これが「緊張する」という現象なのだろうか？

「しかしまぁ、良かったよな。部隊長がすぐに対処してくれて」

「そうですね。確認作業などを含めても、今日中に原因と対処方法がわかるかと」

「ああ。ホント助かった」

ティアナさん達を落ち着かせてから部隊長に報告をしたところ、直ぐに先日マスターハヤトが護送作業をしたロストロギアの依頼主に確認を取り、その機能の詳細や対処方法などを確認してくれるとのことだった。

マスターハヤトは、私のことがあるから八神部隊長が迅速に動いてくれていると思っていらっしゃるようだが、実際にはロストロギアの封印が不完全な状態だと、暴走という事態を招く可能性があるから……という要因の方が強いだろう。

八神部隊長は優秀な方だし、そういった判断を誤ることは無い筈だ。

もちろん、わざわざマスターハヤトにソレを言う必要はないので言わないでおく。

「まぁ、俺は今日が休日になったってだけで十分だけどな」

「申し訳ありませんマスターハヤト。私が起動状態になれないばかりに……」

「いいっていいって、そんな気にすんなよ」

「ですが……」

こうなった後で確認したのだが、私は現在セットアップが出来ず、使える機能もほんの一部だけとなってしまっていた。なにぶんこういった事態は初めてなので、私も対処が出来ない。

そして、このような状態では出撃は愚か訓練すら出来ず、マスターハヤトは本日を休日として待機するようにと部隊長に指示を受けたのだ。

私のせいで、マスターハヤトの仕事を滞らせるのは、あまり気は進まない。

だが、マスターハヤトが構わないと言っていらっしゃるのだから、良いのだと思うことにしよう。

「そういや、フィニーノ陸士が後でメンテルームに来てって言ってたなぁ。

確かに後で何か不具合でも見つかったら大変だし、ちゃんと行っておかないとな」

「そうですね。私も、自分の現状を把握しておきたいですし」

「ん。それじゃあ飯食ったら行くとしますか」

「はい。了解です、マスターハヤト」

そのように結論付けたところで、私とマスターハヤトは食堂に辿り着いた。
時間が既に食事をする時間帯からズレているせいか、食堂内で食事をしている人は余り居ない。
そんな中で、私は見知った顔……シグナム二尉とヴィータ三尉、そしてシャマル医務官とリインフォース曹長の４人である。

「おー、ハヤトじゃねーか」

「どうもッス、ヴィータ副隊長。シグナム副隊長達とお食事ですか？」

「見りゃわかんだろー。んで？　そっちの肩に乗ってるのがブレイブハートか」

「はい。その通りですヴィータ三尉」

ヴィータ三尉に確認するように尋ねられ、私はマスターハヤトの肩から降りて机の上まで飛んでいき、そこで三尉達に向かった頭を下げた。

「話は主から聞いていたが、本当に人間になっているのだな……」

「リインと同じサイズですーっ！　お仲間ですねっ、ブレイブハート！」

「いえ、確かに姿はリインフォース曹長と似ていますが、私はユニ

ゾンデバイスになっている訳ではありませんので、厳密には仲間とはいえませんね」

「そうなのですか！？　でもでも、見た目は同じだからお仲間なのですよー」

「ですから曹長……」

「まぁまぁ。とりあえず見た目は同じなんだから、お仲間って事でいいんじゃないかしら？
リインちゃんも嬉しいみたいだし、戻るまでそういう事にしておいて、ね？　ブレイブハート」

「はぁ……？　言葉の意味は理解しかねますが、了解です」

シャマル医務官の言葉に、とりあえず頷いておく。
リインフォース曹長はそんな私の周りをクルクルと飛び回り、上機嫌な笑みを浮かべていらっしゃる。
私が同じ見た目になったことが、それほど嬉しいのでしょうか？

「ブレイブハート。同じ大きさの人として、リインの方が先輩なのです！
先輩として、リインを精一杯敬うのですよ！」

「わかりました。リインフォース曹長」

「違うのです！　リインの事は、リインフォース『先輩』と呼ぶのです！！」

「了解です、リインフォース先輩」

「えへへ～。ヴィータちゃん、リインも先輩になったのですよ～」

私に『先輩』と呼ばれた曹長は、とても嬉しそうにヴィータ三尉のところへと飛んでいき、彼女の周りをクルクル飛び回りながら鼻歌を歌う。

何故三尉が嬉しそうなのか、理由はわかりませんが、喜んでいただけたなら何よりです。

私は上機嫌の曹長を見つめてから、再び空を飛んでマスターハヤトの左肩に腰掛ける。

「あら、ブレイブハートはハヤト君の肩がお気に入りなのね」

「いえ。八神部隊長の肩にリインフォース先輩が乗っているのを見ましたので、私もそうした方が良いのかと思ったまでです。何かおかしかったでしょうか？　シャマル医務官」

「え？　別におかしくはないけど……えーと」

「やめておけシャマル。ブレイブハートに、その手のからかいは通用せんようだぞ」

「シ、シグナム！　私は別にそういうつもりじゃ……」

シグナム二尉の言葉に、シャマル医務官が両手を動かして慌てて

いる。
　どうやら先程の私に対する発言に関することのようだが、私にはどうして医務官が慌てているのか、その理由がわからずに首を傾げることしか出来なかった。

◇◇◇◇◇

「あー！　ハヤトおにーちゃんだーっ！！」

「はっ！？　この声はヴィヴィオ……」

「どーんっ！！」

「ぶばらべっ！？」

「きゃっ！？」

　食事を終え、隊員寮へと戻ろうとしていた道すがら、突然マスターハヤトの背後から聞き慣れた音声と共に、ヴィヴィオさんがマスターハヤトへと抱きついてきました。
　以前ならば事前にヴィヴィオさんの存在を感知し、マスターハヤトに警告することが出来たのだが、今の私はそういった機能も使用できないらしく、ヴィヴィオさんが抱きつくその瞬間まで彼女の存在を感知する事が出来なかった。
　その結果、マスターハヤトが倒れた瞬間に私はマスターハヤトの

肩から投げ出されてしまう。

「おっまえは、いい加減に飛びつくのをやめろっつってんだろが！」

「えへへ～。おにーちゃんつかまえたー」

「わぁい、おにーちゃん捕まっちゃったぞぉ☆　……とでも言うと思ったか？　あぁん！？」

「にゃーっ！？」

投げ出された私は空中に浮かんで体勢を整えられたが、マスターハヤトはヴィヴィオさんに押し倒される格好で地面に倒れてしまっていた。

ただ、マスターハヤトは言葉ほど怒っている訳ではなく、苦笑半分という感じでヴィヴィオさんの頬を抓っていた。ヴィヴィオさんも、頬を抓られながらも嬉しそうに笑っている。

「危ないから人に飛びつくなって、俺はいつもいつもいつもいつも言ってるだろうが。

俺だからいいけど、エリオやキャロだったら怪我してるとこだぞ？」

「大丈夫だよ。おにーちゃん以外には、どーんってしないから」

「そうかそうか、なら大丈夫……じゃねぇよ！　俺にもやるなってんだよ！！」

「じゃあヴィヴィオは、誰にどーんってしたらいいの!?」

「なにその逆ギレ!?」

「おにーちゃんのおに!　あくま!　きちく!　ちみもーりょー!」

「どこでそんな言葉覚えてきたんだお前は!?」

ヴィヴィオさんとマスターハヤトのやり取りは、いつ見ても微笑ましいものですね。

「マスターハヤト。廊下でいつまでも寝ていらっしゃっては、他の局員の皆さんに迷惑になってしまいます。一度、他の場所に移ってはいかがでしょうか?」

「おぉ、そうだったそうだった」

「んぅ?　あなた、だーれ?」

廊下でいつまでもこのままというのもマズイと思い、マスターハヤトに場所を移すように提案した。

しかし、マスターハヤトが起き上がるよりも早く、ヴィヴィオさんがマスターハヤトの上から飛び降りて、空中に浮かぶ私の方へとやってくる。

どうやら、マスターハヤトよりも私の方に興味を持ったようですね。

そういえば、私のことを知っているのは機動六課の前線メンバーとフィニーノ陸士など、一部の限られた人だけでした。

「私はブレイブハートですよ、ヴィヴィオさん。
諸事情がありまして、現在はこのような格好になっていますけれど」

「わぁ、ブレイブハートだったんだぁ。かわいいね～」

「可愛い……ですか？」

「うんっ！　とってもかわいいよ、ブレイブハート」

「……私には、その感覚はわかりません」

こちらを見つめて楽しそうに笑うヴィヴィオさんの言葉に、私の意識とは関係なく、顔の表面温度が上がっていくの感じる。これが『照れる』という感情なのだろうか？

「髪もふわふわで、おめめもおっきくて可愛い！」

「あの、ヴィヴィオさん。あまり髪を引っ張らないでください、少し痛いです」

「あ、ごめんねブレイブハート」

そう言いながらも、ヴィヴィオさんは私の身体を触ることを止めようとはしない。
頭頂部の髪を引っ張ったりはしないけれど、着ている服や胸部、臀部や腕などあちこちを触って、興味深そうに「ふぇ～」や「おー」と言った声を上げて表情を変えている。
私のことを触っているヴィヴィオさんはとても楽しそうなので、こちらとしてもやめろとは言えず、ただ黙ってされるがままでいる事しか出来ない。

「くぉらヴィヴィオ、いい加減にしろ。ブレイブハートは人形じゃねーんだぞ」

「やーん！」

暫くの間ヴィヴィオさんにされるがままになっていると、流石に見かねたのかマスターハヤトがヴィヴィオさんの手から私を取り上げ、自分の左肩に乗せてくださった。
ヴィヴィオさんには悪いのですが、私はマスターハヤトの肩に腰掛けるような格好で座りつつ、小さく安堵の溜息を漏らす。

「ぷー。おにーちゃんのけちんぼー！」

「ケチじゃないですー、普通ですー」

「けちんぼー！」

「ケチじゃないですー」

私を取り上げられたヴィヴィオさんは、頬を膨らませてマスターハヤトに詰め寄っていたものの、直ぐに気持ちを切り替えたのか再び満面の笑みになってマスターハヤトの腰に抱きつく。
そして、マスターハヤトを見上げながら、首を傾げて尋ねた。

「ねぇねぇおにーちゃん。今日は訓練しなくていいの？」

「ああ、今日はブレイブハートがちょっと起動できない状態だからな。
部隊長から、休んでていいって言われてんだよ」

「じゃあじゃあ、おにーちゃんは今、ヒマなんだよね？」

「暇ってお前な……残念だけど、俺はこれからメンテルームに行かなきゃいけないんだよ。
ブレイブハートがどっか変になってないか、見て貰わなきゃいけないからさ」

「えー」

「えー、じゃねぇの」

なおも「えー」と言いながらぴょんぴょんと飛び跳ねるヴィヴィオさんを見て、マスターハヤトは苦笑しながら溜息を吐いて、ヴィヴィオさんの頭を撫でる。
本当に、こうしていると普通の兄妹にしか見えませんね。

最近はヴィヴィオさんが以前よりもマスターハヤトに懐いているので、一部では2人が本当の兄妹だと思っている局員もいるとか…
…それはそれで、2人にとって好ましいことでしょうけれど。

「わかったわかった。そんなに言うなら遊んでやるよ。
ただし、メンテルームでブレイブハートをフィニーノ陸士に見て貰ってからな?」

「はーい! じゃあ、ヴィヴィオはお部屋に戻って、ゲームの準備してるね!」

「あいよー……ってもういねぇし。足はえぇなアイツ……」

マスターハヤトに手を振りながら、ヴィヴィオさんはスバルさん達もかくやという速度で走っていってしまった。マスターハヤトも言っていたが、本当に凄い速さだ。
もしかすると、私達の認識していない時に訓練でもいるのでしょうか? ……いえ、流石にそれはあり得ませんね。心配性な高町一尉やハラオウン執務官が、それを許すとは思えませんし。

「さて、と。それじゃあメンテルーム行くとするか、ブレイブハート」

「はい。ですがマスターハヤト、私だけでも行けますので、マスターハヤトはヴィヴィオさんの方に行ってくださっても問題はありませんよ?」

「馬鹿言ってんじゃねーよ。自分の大事なデバイスの事なんだ、俺が一緒に行かないでどうすんだ」

「……ありがとうございます。マスターハヤト」

「何でお礼言うんだよ。変なヤツだなお前は」

不思議そうな顔をするマスターハヤトに向かって、私はそれ以上言葉を続ける事は出来なかった。

ただ、胸部の辺りが何故か暖かいような、そんな感覚だけを感じる。やはりどこか調子が悪いようだ、メンテナンスルームに行った際に、フィニーノ陸士に相談してみよう。

◇◇◇◇◇

八神二佐から連絡が入ったのは、私とマスターハヤトがメンテナンスルームから戻ってきてから5時間後、既に空が暗くなった後のことだった。

連絡が入った時、マスターハヤトは私を肩に乗せたまま、マスターハヤトの自室でスバルさん、ティアナさん、キャロさん、エリオさんの4人と共にパーティーゲームと呼ばれる種類のゲームを行っていた。私の大きさではコントローラーを持てないので、私はマスターハヤトのプレイを見ているだけだったが。

『時間かかってごめんなぁ。んで、先方に確認したんやけど、ブレイブハートがそうなった原因は、やっぱり昨日のロストロギアが原因で間違いないみたいや』

そんな始まりと共に語られた八神二佐の報告から分かったことは以下の点。

ひとつは、そのロストロギアは無機物にのみ有効なモノで、私以外に同じ現象が起きていない以上、これ以上の被害は無いということ。

二つ目、問題となったロストロギアの封印処理は解けていなかったので、今回こういう現象が起きた原因は今のところ全く分からず、調査中であるということ。

そして最後に、このロストロギアは効果を発揮するのに多量の魔力エネルギーを必要とし、普通ならそれを充填してから使うのだが、今回は不十分なエネルギーでの起動となった為、早ければあと1時間たらずで……遅くとも本日深夜までに私の身体は元のデバイスに戻るだろう、という事だ。

「わかりました。すみません、お手数かけて」

『気にせんでええよ、今回のは原因不明なんやし、しゃーないやろ。でも、ブレイブハートに害があるようなロストロギアじゃなくてホントに良かったわ』

「はい。それでは、おやすみなさい」

『うん、おやすみや～。あ、皆でゲームやるんはええけど、明日寝坊したりせんように！』

「ぐっ……わ、わかってますよ？」

『わかっとるんならええよ～』

八神二佐の楽しげな笑いを残して、通信は途切れる。

「良かったわねハヤト。明日には元に戻ってるみたいだし」

「ああ、正直ホッとしてるよ。このままずっと起動出来ないとかだと、流石に困るしなぁ」

「でもさ、このままでもブレイブハート可愛いし、それはそれでいいんじゃない？」

「いや普通に困るから」

通信が終わった後、私が元に戻れると聞いた安心感からか、マスターハヤトは表情を崩してティアナさんやスバルさんと冗談を言い合って笑っている。

私自身も元に戻れると知って、僅かながら安心した。

このまま、マスターハヤトと共に戦うことも出来ないというのであれば、それは私のデバイスとしての存在意義に関わるからだ。

フィニーノ陸士に検査して貰った結果、今の私はデバイスとしての最低限の機能さえ使うことが出来ないらしく、使える機能とすれば魔法使用の補助程度で他は普通の人と変わらないらしい。

マスターハヤトのデバイスとして戦うことは愚か、仕事の手伝いさえろくに出来ないデバイスに、なんの価値があろうか。

「そんな事言ってぇ、ハヤトも実は嬉しかったんじゃない？
ブレイブハートがこんな可愛い女の子になったりするなんて、まんま漫画じゃん」

「普通の人サイズならな。リインフォース曹長と一緒のサイズじゃ、流石に喜べねぇよ。
朝のお前らみらいに、変な誤解されるだろうしな？」

「う〝……」

「い、いつまで根に持ってんのよアンタは！」

「うぅ、すいませんでした」

マスターハヤトがティアナさん達をからかい、今朝の騒ぎの時にいなかったキャロさんはニコニコと笑ってそんなティアナさん達を見つめている。
いつもならば、マスターハヤトの指から見上げていた光景。
そこに、こうして私が混ざっているという状況が、酷く不思議で、けれどそう思うことで胸部の辺りに暖かさを感じている自分を自覚していた。

「それになぁ、もし今のままなら、俺はブレイブハート以外のデバイスを使わなきゃいけない訳だろ？

ブレイブハート以外を使うなんて、俺は真っ平ゴメンだぜ？」

「マスターハヤト……」

苦笑しながら漏れたマスターハヤトのその言葉に、胸部に感じた暖かさが増していく。

フィニーノ陸士に相談した時、陸士はただ嬉しそうに笑うだけで何も教えてくれなかった。けれど特に否定することもなかったのだから、恐らくこれは良いことなのだろう。

そう考えていると、不意に私の身体が光りだした。

「うおっ、まぶしっ」

「ちょっと、どうしたのよブレイブハート！」

「だ、大丈夫！？」

「……はい。機能に問題はありません。

おそらくこれは、元に戻る前兆ではないかと思われます」

淡い光に包まれながら、私はなんとなくそう確信していた。

機能面には全く問題が見られない以上、そうである可能性は比較的高いだろうと思ったからだ。

そして私の予測は正しかったらしく、徐々に私の身体は四肢の先から消えていく。

「どうやら、ロストロギアの効力が切れたようですね」
「そっか、じゃあ元に戻るんだな。ブレイブハート」
「はい」
マスターハヤトと話している間にも、私の身体はゆっくりと消滅していく……というよりも、私の感覚としては『元に戻っている』という感じだった。
ああ、これはそれ程時間を置かずに人の形を保つことは出来なくなるだろう。
私はぼんやりとそんな事を思いながら、隣にあるマスターハヤトの顔を見た。
「ん？　どうした？」
「いえ……」
いつもは見上げていたマスターハヤトの顔が、今はこんなに近くにある。
いつもは触れることも出来なかったマスターハヤトに、こうして触れることが出来る。
そう思うと、少しだけ……本当に少しだけ、この状態でいられなくなる事が惜しいと思ってしまう。
もう少しだけの間、このままでいたいと思ってしまう。
それでも――

「これで、明日っからはまた一緒に頑張れるな。ブレイブハート」

「……はい。そうですね、マスターハヤト」

――それでも、この人と共に戦えなくなる事に比べれば、こんな私の思いなど取るに足らぬ些事以外の何でもない。私はマスターハヤトのデバイス、ブレイブハート。

主の為に造られ、主の為にこの身を捧ぐ。

それこそが、私の存在意義なのだから。

私にとって、それこそが何よりの喜びなのだから。

「もしこのままセットアップ出来るんなら、このままでもいいんだけどな。

やっぱ男として、美少女型のデバイスとかマジ憧れるし」

「アンタねぇ……」

「ハヤトさいてー」

「うっさいやい。エリオなら、エリオなら分かってくれるよな！？」

「え！？　え、えーと……あの、少しだけなら」

「エリオ君……？」

だから。

「マスターハヤト」

「ん？」

私はマスターハヤトの名前を呼んで、既に殆ど元に戻る為に消えかかっている自分の身体を動かす。

これは、以前にマスターハヤトが読んでいた漫画で見た、誓いを立てる時の行為。

「――んっ」

「っ！？」

「「あーーーーーっ！！？」」

私の唇を、マスターハヤトのそれに重ねる。

とはいっても、人形と同じくらいの大きさの私とマスターハヤトでは、顔の大きさが全然違うのだから『重ねる』という表現は些か不適切でしょうけど。

ほんの瞬き程度の間、私はマスターハヤトと唇を重ね、それから自分の顔を離す。

近くで見るマスターハヤトの顔は、まるで風邪でも引いた時のように赤くなっていて、それがとても楽しくて私は自分でも意識しな

いうちに笑っていた。

「ちょっ、なっ……ブ、ブレイブハート！？」

「マスターハヤト、また明日からよろしくお願いしますね」

「いや、おいコラ！　この状況で投げっぱなしにするつもりはお前は！？」

「申し訳ありません。どうやら、機能が一時的に全て停止してしまうようです。
それではマスターハヤト。また再起動した後で」

「待たんかいゴルァァァッッッ！！」

マスターハヤトの叫び声を聞きながら、私の意識が途切れていく。
ああ、再起動したらマスターハヤトになんて弁明しようか。
再起動前の記憶は何も無いと言うのが、一番良い弁明かもしれない。それとも、あえて最後だけ記録していないと言うのが良いだろうか？

デバイスがマスターに迷惑をかけるというのは、あまり誉められた事ではない。
でも――でも、恐らくもう二度と訪れない機会だったのだから。
もう二度と訪れない、私が『感情』というものを理解できる機会だったのだから。

――このくらいの悪戯は、許して貰えますよね？

side：ブレイブハート　了

番外編11　『とあるデバイスとその主の、おかしな1日』（後書き）

ブレイブハートの擬人化とかやらなきゃ良かった。
どうも、ラモンです。

久しぶりの番外編、どうだったでしょうか？
今回は裏ヒロインと噂になっている（？）ブレイブハートを主役に、折角だから擬人化させてみよう、と思って書いてみました。
まぁ、擬人化と言っても、リインと同じ人形サイズだったりしましたが。

しかしこの番外編、本当に書くのには苦労しました。
ブレイブハートって、私の中ではハヤトに対して愛情を持っている、ということになっていますが、その割合って『親愛』や『忠誠』が9割で、『愛情』は1割程度しかないんですよ。
あくまで彼女はデバイス。感情よりも『忠誠』など、合理的な思いの方が占める割合は上だと思いますから。
だから、その1割程度の愛情をどう魅せるか、それで物凄く悩みました。

まぁ原作設定を考えれば、デバイスが『愛』という感情を持ってるっていうのに違和感を覚える人も多いかも知れませんが、そこは作者の思い入れ補正ということで勘弁してください。

そして、何より苦労したのがブレイブハートのキャラをどうするか。
折角擬人化したんだし、ちょっとはっちゃけた感じにするか、それとも元々の「お姉さん」的なキャラにするか。
丸1日使って考えた結果、やっぱり元々のキャラのままで行くことにしました。

やっぱりブレイブハートは、あの性格だからこそ魅力的だと思いましたので。

そして何故人形サイズにしたのかと言うと、単純にリインとのやり取りが書きたかっただけです（笑）
あと、何か人形サイズのブレイブハートがハヤトにキスをする、というラストが一番最初に思いついたからだったりもします。
何というか、こういう身長差のある男女のシチュエーションでびっくりするぐらい萌えるんです、私。

長くなったので前後編にしようかと思ったんですが、今回は1つにまとめて終わらせました。あまり長くやると、ブレイブハートのキャラが変な風になる恐れが凄くありまして（汗）
何か最終的に、すっごい乙女なブレイブハートになっちゃいそうでした。

さて、番外編も投稿しましたし、本編の執筆に戻らねば。
最近暑いので、イマイチ集中できないのが困りモノですね。皆さんも体調管理などにはお気をつけて。

第1話　『試験』（前書き）

この小説は、ＳｔＳ本編にオリジナル主人公を加えての再構成になります。
基本的にストーリーは原作に沿って進み、時々オリジナルの話が入る、という形になると思われます。

物語の進行は、第一話以外は基本オリ主の1人称で進み、時々他キャラの視点が入る形です。
投稿自体が始めてなので、色々至らない点があると思いますが、温かい目で見てやってください。

更新速度は1週間に1話……ぐらいだといいなぁ。

第1話　『試験』

新暦７５年、４月。
ミッドチルダ臨海第８空港近隣。
そこに存在する、大分前に廃棄された都市街のビルの上に、彼らはいた。

パァン！　と小気味良い音を立てて左手に右手を打ちつけ、そのまま目まぐるしい速度でシャドーをする青髪の少女。
その後ろで、拳銃型のデバイスを弄くる、オレンジ色の髪の少女。
２人はそれぞれ思い思いのバリアジャケットに身を包み、これから始まる試験にむけてモチベーションを高めていた。

そして、そんな２人を見ながら手摺に身体を預けている少年。
こちらはまだバリアジャケットを展開していないのか、上下共にジャージのままだったりする。

「……スバル、あんまり暴れてると、本番でそのオンボロローラーいっちゃうわよ」

「空中分解して地面に激突ですねわかります」

「うぐっ……ティアもハヤトも嫌な事言わないでぇ。ちゃんと油さしてきたもん！」

眉尻を下げて抗議するスバルに、２人は揃って彼女と視線を合わせずに「どうだか」と呟く。

そんな2人に再び抗議しようと口を開くが、すぐに諦めたように溜息を吐いて、スバルは柔軟に移行した。

「ハヤト、あんたもそろそろ準備しなさい。試験始まっちゃうわよ？」

「うーい」

ティアナに咎められたハヤトは、やる気の無い返事を返しながらバリアジャケットを展開する。

一瞬光に包まれた後ハヤトは、黒いロングコートを羽織り、その中に『天上天下唯我独尊』という文字の書かれた詰襟のバリアジャケット姿になっていた。

「ねぇハヤト。いつも思ってたんだけど、その胸の文字ってどういう意味な訳？」

「これか？　んー……まあ“俺様サイコー”って感じらしいよ。母さんが言うには」

「……あんたにピッタリね」

呆れた顔でため息を吐いてから、ティアナは右手を弄くる。すると、空中に小さなモニタが表示され、そこに現在の時間が表示された。

カウントダウンが始まり、すぐに試験が開始する時刻になった。

ティアナがそれを認識するのと同時に、スバルの前方上空に銀髪の少女が映ったモニタが現れた。

「「「！」」」

3人の視線が自分に集まったのを確認してから、少女が腰に手を当てて口を開いた。

『おはようございます！　さて、魔導師試験の受験者さん3名。揃ってますか？』

「「はい！」」

「へ～い」

少女の質問に、3人は一列に並んで元気良く返事をする。いや、約一名やる気の無い返事だが、これは彼にしては結構元気が良い部類なのだ。

それを見て満足そうに頷いてから、少女が手に持ったバインダーに視線を移す。

『確認しますね。時空管理局陸士３８６部隊所属の、スバル＝ナカジマ二等陸士と』

「はい！」

『ティアナ＝ランスター二等陸士』

「はい！」

『そしてハヤト＝ロックウェル二等陸士』

「うぃっす」

『所有している魔導師ランクは陸戦Ｃランク。本日受験するのは、陸戦魔導師Ｂランクへの昇格試験で、間違いないですね？』

「はい！」

「間違いありません」

「間違いねーッス」

確認が終わると、少女はバインダーから3人に視線を戻す。

『はい！　本日の試験官を努めますのは、私、リインフォース？空曹長（ツヴァイ）です。よろしくですよー』

そう言って敬礼するリインフォースに、3人は「よろしくお願いします！」と敬礼を返すのだった。まあ、ハヤトは礼によって余りやる気の無い声で「よろしくお願いしまーす」と返したのだが。

現在、ハヤト達３人は試験に関する説明をリインフォースから受けていた。
３人の前には試験に必要な情報がモニターで表示され、それをリインフォースが説明していく。

『３人はここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊。
ああ！　勿論破壊しちゃ駄目なダミーターゲットもありますからね？』

「意地が悪いなぁ……作った奴が見てみたいごぷっ！？」

「黙ってなさい」

面倒臭そうに呟きを漏らしたハヤトの脇腹に、ティアナの鋭い肘

がめり込む。

『だ、大丈夫ですか～？』

「問題ありません。続けて下さい」

「いや……お前が、言うな……ゲホッ」

息も絶え絶えなハヤトを無視して、ティアナが続きを促す。
リインフォースは呻いているハヤトに心配そうな視線をやりつつも、とりあえず説明を続けた。

『えっと……妨害攻撃に気をつけて、すべてのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指してくださいです』

「攻撃まであるとか、マジで性格悪ぐおぁっ！？」

「だから、黙ってなさい」

蹲ったまま、懲りずに口を開いたハヤトの頭をティアナが踏みつけ、完全にうつぶせの状態にして更に踏み躙る。
リインフォースはそんな2人を見てオロオロしているが、スバルは慣れているのか「仕方ないなぁ」などと言いながら苦笑するばかりだ。

『……続けてもいいですか？』

「何度もすみません。大丈夫です」

「ふがふが（訳：いや、だからお前が言うなや）」

『はぁ。えーと……うん、一応説明は以上ですけど、質問はありますか～？』

聞かれ、スバルが困ったようにティアナを見る。

ティアナはスバルの方を一度だけ見て「ありません」と返し、それを見たスバルも同様に返した。

『それじゃあ、スタートまであと少し。ゴール地点で会いましょう、ですよ』

リインフォースがそういって、軽くウィンクをするとモニタが３人の前から消えた。

まあ、実際にはハヤトは未だに踏まれていて返事をしていないのだが、リインフォースは最早気にしないことにしたらしい。

「はぁ……ハヤト、試験に文句つけるなんて何考えてるのよ？」

モニターが消えたあと、ようやくハヤトの頭から足をどかしてティアナが溜息を吐く。

「うるせぇ。俺は事実を言ったまで――「あぁん？」――超ごめんなさい」

「もう、ティア！　ハヤト！　ふざけてる場合じゃないよ！　始まるみたい！」

スバルの言葉に2人が視線を上げれば、そこには宙に浮かんだ青い三つのカウントダウンライト。

それを見て、ティアナもハヤトも顔つきが真剣なものへと変わる。

「ったく、あんたのせいで緊張感が台無しだわ」

「そんな褒めるなって。照れるだろ」

「褒めてない！」

ライトが二つに減って、色が黄色へと変わる。

「スバル、ローラー壊すなよ。修理の申請書出すのは面倒だ」

「だから大丈夫だってば！　ハヤトしつこい！！」

ライトが一つになり、赤く染まる。

３人は全員スタートしやすい姿勢をとり、ティアナがタイミングを合わせるために口を開く。

「レディー……」

そして。
ライトがすべて消える。

「「ゴー！！」」

「俺走るの疲れるから嫌なんだが」

「黙れ！」

思い思いの言葉と共に、３人は弾かれるように走り出した。

ｓｉｄｅ：八神はやて

「なかなかやるやないの」

「うん。３人とも凄い」

私とフェイトちゃんは、モニタを見ながら呟いた。

今、ちょうど建物内のターゲットを全部破壊したスバルと、建物の上からターゲットを狙撃したティアナ、その後ろで周辺を警戒していたロックウェル君のペアが合流したところだ。

「さすがは３８６部隊のゴールデントリオ、だね」

「そうやな。３人で組んだら航空隊のエースにも引けを取らんっちゅー謳い文句に偽りなしや」

私らがそう言っている間にも、３人はこっちが目を見張るほどのコンビネーションでターゲットを次々撃墜していく。

う～ん……こら確かに空戦Ａぐらいなら余裕で倒せそうやな。

「このままなら、最後のアレも楽勝かな？」

「いやいや、アレは毎年多くの受験者を泣かせてきた曲者やで？いくらゴールデントリオかて、気は抜けん筈や」

私は不敵に笑って、モニタに例のモノを映す。

大型オートスフィア。この陸戦Ｂランク試験の最終関門。

中距離からの狙撃が主の、自動攻撃型のスフィア。今の３人やったら、攻撃も防御も難しい筈や。これをどうするか、見せて貰おうやないの。

「はやて、楽しそうだね」

「楽しいで～？　何たって、私の部隊に来るかも知れへん新人やもん」

気張りや、新人諸君。
この最終関門、どうやって切り抜けるか。君らの知恵と勇気、見せてもらおか。

ｓｉｄｅ：八神はやて　了

二重になった高速道路の下側で、３人は大量の弾幕と相対していた。
スバルは高速で動き回って得意のＳＡでターゲットを１個１個確

実に潰し、ティアナとハヤトは瓦礫に身を隠し、交互に顔を覗かせてターゲットを狙撃していく。

「弾切れ！」

「あいよ」

カートリッジをデバイスから吐き出させながらティアナが叫び、それに答えたハヤトが予め発生させておいた１０個の魔力スフィアをターゲットに向けて飛ばす。

「ったく、俺ぁ砲撃でぶっ飛ばす方が好きなんだがな」

「そんなことしたら、ここが崩壊しちゃうでしょ！？　死にたいわけ！？」

「冗談だっつの。交換終わったか？　なら交代な」

「あんたって奴は……」

文句を言いつつも、とりあえずハヤトと交代してターゲットを撃ち落す。

そして、やや遠くの方でスバルが最後の一つを撃墜したのを確認し、３人が合流する。

「……よし、全部クリア」

念を入れて周囲を確認してから、ティアナが呟く。

「この先は？」

「次は上。おそらく、上がったら一斉にに集中砲火が来るわ。オプティックハイド使って、ハヤトが誘導弾でターゲットを瞬殺、いい？」

「了解！」

「えー、お前らがクロスシフトでやってくれ――いえ何でもないです、頑張ります、はい」

文句を言おうとして、ティアナの夜叉の様な表情に冷や汗を流しながら土下座するハヤト。

「2人とも、漫才してる場合じゃないよ！　時間、時間！！」

「……そうね。馬鹿の相手をしてる場合じゃなかったわ」

「ス、スバルが正論で注意……だと……！？」

「ハヤト酷い！？」

ぎゃあぎゃあと騒ぎながらも、３人はそれぞれ自分の為すべき事への準備を始める。

試験も終盤、ここで気を抜くわけにはいかないと考えながら。

第2話　『スカウト』

試験が終わりました。
過程飛ばしすぎだって？　アニメ見ろアニメ。
あれと殆ど同じ展開だから。　囮役が俺とティアナに増えただけ
……って何コレ電波？

んで、スバルがティアナを背負って、俺は全力疾走でゴール。
スバルが調子に乗って車みたいな速度でローラー加速させた時は
あいつら死んだと思ったね。まあ、エースオブエースこと高町一等
空尉がフォローしてくれたらしく、無傷でゴールできたみたいだが。

そして今現在。
ティアナは試験官のリインフォース空曹長（人形サイズとか、マ
ジびっくりっすわ）に挫いた足首の治療され中。
スバルは恩人の高町一等空尉に会えた事で感極まって、高町一等
空尉の胸を借りて大泣き中。
俺、放置。

……泣いていい？

「ランスター二等陸士とロックウェル二等陸士は、なのはさんのこ
とご存知です？」

あ、リインフォース空曹長が話しかけてくれた。
あんたええ人や……小さいけど。

「知ってます。本局武装隊のエースオブエース」

「航空戦技教導隊の若手ナンバーワンにして、９歳の時点でＡＡＡの魔力を保有した天才。そのルックスから数多くのファンを持つ高町一等空尉。ですよね？」

「その通りです～♪」

ティアナの台詞を途中から継いで俺が喋る。

ちなみに、訓練学校に居た時の同期の奴らにも結構な数のファンが居た。

「何よ、アンタ詳しいじゃない？」

「……まあな。同期の、ほらリックっていたろ？」

「ええ。居たわね」

「あいつが高町一等空尉の熱烈なファンでよ……長期休暇の時にいきなり俺の部屋に来てさ、２日間徹夜で高町一等空尉について語られた」

「……ごめん」

そんな気の毒そうな顔すんな。

うぅ、思い出すだけでも涙が……ぐすん。

そういやスバルの使う『ディバインバスター』って、高町一等空尉の真似だって聞いたことあるな。

とかなんとかやっているうちに、どうやら迎えらしいヘリがこっちに向かって降りてきた。

やれやれ。あとは結果聞いてシャワーでも浴びてからさっさと帰って寝よ。

あ～……疲れた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第２話　『スカウト』

試験が終わったら帰って寝れる。そう思っていた時期が、俺にもありました。

現在俺達は、試験場近くの本局施設にて、これまた高町一等空尉並の有名人のフェイト＝Ｔ＝ハラオウン執務官と、八神はやて二等陸佐の御二方と向かい合って座っていたりする。

何の話かといえば、まあ端的に言えばスカウトらしい。

八神二佐が主体となって新設する『時空管理局本局遺失物管理部機動六課』。
陸戦魔導師が主軸となるフォワード陣に、俺とティアナ、スバルの3人をスカウトしたいという話だ。

ティアナとスバルは、突然のスカウトに目を白黒させている。
俺はといえば、そんな2人を見つつ、給料はどの位増えるかなと考えながらコーヒーを飲んでいる。

「スバルとハヤトは、高町教導官から直接魔法戦を襲われるし、執務官志望のティアナには、私でよければ色々アドバイスとかできると思うんだ」

「いえそんな、とんでもない。と言いますか、恐縮です、と言いますか」

わたわたしているティアナに、スバルも同じような顔で頷いている。
なるほど、確かにメリットは多いな。デメリットも多そうな気がするけど。
つーか執務官速攻で俺ら呼び捨てっすか。いやいいですけどね、上司だしなにより美人だし。

「あ……」

「「？」」

ティアナが呆けた声を出したので、何かと思って視線を動かせば、そこには高町空尉がバインダーを持って立っていた。サイドポニーが似合いすぎです。惚れてまうやろ。

どうやら試験の結果を教えにきてくれたしい。

「取り込み中、かな？」

「平気やよ」

「そっか」

確認をとってから、高町空尉が八神二佐の隣に腰を下ろす。

そして、俺達をじっと見つめて結果を口を開いた。

「とりあえず、試験の結果ね」

「「「はい」」」

3人揃って姿勢を正す。

「3人とも、技術はほぼ問題なし。でも、危険行為や報告不良は見過ごせるレベルを超えています」

あー、やっぱなぁ。
反則スレスレだから何とか誤魔化せると思っていたが、反則取られちまったか。
最後のスバルの暴走も、作戦だったとはいえ危険行為って言われると反論ができん。

「パートナーの安全や試験のルールを護れない魔導師に、他の人の安全を護るなんて、できないよね？」

「「「……はい」」」

耳が痛い。制限時間内にクリアする為とはいえ、さすがにアレはまずかったか。

「だから、残念ながら試験は不合格」

……まあ、仕方ない。
半年後にまた頑張ればいいさね。

「「……」」

スバルとティアナを見れば、目に見えて落ち込んでいる。
今日のために頑張ってきたんだし、しょうがないな。後で励まし

てやるとしよう。

「……なんだけど」

は？

「「え？」」

「3人の魔力値、能力を考えると、半年後まで今のままで居るほうが危険かも。
というのが、私と試験官の考え」

「です」

「だから、これ」

そういって高町空尉が机の上に置いたのは、3人分の封筒と書類。

「特別講習に参加する為の申請書と、私の推薦状。これを持って、本局の武装隊で3日間の特別講習を受ければ、4日目には再試験を受けられるから。
来週から、本局の厳しい先輩達にもまれて、安全とルールを確りと学んでこよう。そしたらBランクなんて、きっと楽勝だよ。ね？」

……ふむ。穿った見方をすれば、自分達の部隊に来て欲しい俺たちに恩を売るってとこだろうけど、ここは純粋な好意として受け取っておこう。

ティアナもスバルも嬉しそうだし、俺自身断る理由も無い。

「来週までは試験に集中したいやろし、私への返事はその後ってことにしとこか」

「「はい！　ありがとう御座います！！」」

「ありがとう御座います。八神二佐、高町空尉」

立ち上がって敬礼する2人にならって、俺も敬礼をお礼を言った。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

「ふぁ～、色々緊張したぁ」

「まぁね」

「あんだけスターに囲まれて、緊張しない奴いねぇだろ」

「あら、アンタも緊張なんてするのね」

「ティアナ、時々俺に酷いよな」

試験の結果と、なのはさんと同じ部隊への誘い。
この2つを聞いた私達は、部屋を後にして中庭に来ていた。

「試験は残念だったけど、まぁ、しゃーないよね」

「ま、良かったわよ。再試験に引っかかれて」

「俺は半年後でもいいんだけどな。武装隊とかキツそうじゃんか」

ハヤトはやれやれって言いたげに肩を竦める。
いつものことだけど、ハヤトって本当にやる気ないよね。
あ、でも今はそれよりも聞きたいことがあったんだ。

「ティア、ハヤト。新部隊の話……どうする？」

「あん？」

「アンタは行きたいんでしょ？　なのはさんはアンタの憧れなんだし、同じ部隊なんてラッキーじゃない」

「まあ、そうなんだけどさ」

でもあたしは、ティアやハヤトと別れるなら……って思ってる。
なんだかんだでここ1年ぐらいずっと一緒だったから、何か別れるのが酷く不安なんだ。

「あたしは……どうしようかな。遺失物管理部の機動課って言えば、普通はエキスパートとか、特殊能力持ちの生え抜き部隊でしょ？そんな所に行って、あたしがちゃんと働けるかどうか」

「阿呆」

「あたっ！？」

ティアがらしくない弱気なことを言ってたら、ハヤトがティアの額を思いっきり叩いた。
うわ、すごくいい音したよ。

「何すんのよ！！」

「なーにしおらしいこと言ってんだ、気持ち悪くて鳥肌立つっつーの。
お前はいつもみたいに偉そうな態度で『私の実力を見せてやるわ！』ぐらいのこと言ってろよ。どうせ、内心じゃそう思ってんだろ？」

そうだよね。ティアはいつも不貞腐れたこと言ってても、本当は

違うもんね。
今のだって、本当は背中を押して欲しかったんだよね？

「……ふん。まあ、確かにそうよね。せっかく経験積める機会があるのに断るなんて馬鹿らしいわ。それで？　アンタはどうすんのよ、ハヤト？」

「あん？　俺はお前らが行くなら行くさ。どうせ当面は俺ら3人で一人前扱いだろ？
なら、まとめて引き取ってもらった方がいいに決まってるさね。
ティアナが居ないと書類仕事面倒になるしな」

絶対最後のが本音だよね、ハヤト。
あたしと違って本当は書類仕事も得意なくせに、やる気無いんだから……全く。

「何かムカつくわね。何が悲しくて、あたしは何処に行ってもアンタらとセット扱いなのよ。
てか書類仕事ぐらい自分でやりなさいよ！！」

「ぐほぅっ！？」

おお。ティア、ナイスパンチ！

「まあいいわ。キチンとこなせば、私の夢への短縮コース。

馬鹿2人とセット扱いはムカつくけど、しばらくは面倒見てあげるわよ」

「ツンデレ乙」

「あんですって!?」

あははは。ティアもハヤトも相変わらずだ。
これからもよろしくね、2人とも。

side：スバル＝ナカジマ　了

「やーれやれ、今日は色々ありすぎて疲れた」

俺は自分の部屋に戻って、ベッドに倒れこんだ。
試験だけでも面倒だったってのに、そのうえ新設部隊へのスカウト、再試験の申請。あとスバルとティアナのフォロー。
ったく、柄にも無くいろいろしちまった。

「機動六課……ねぇ」

メリットはでかい。給料も増えるらしいし、俺の実力も伸ばすことができる。

ティアナやスバルにも凄くいい話だとは思う――けど、なぁ。

「八神二佐は何も言ってなかったけど……多分、何かあるよなこの部隊」

俺が知ってる限りでも、“夜天の主”八神はやて二等陸佐、“雷神”フェイト＝T＝ハラオウン執務官。

そして“エースオブエース”高町なのは一等空尉。

一部隊が保有するには過剰な戦力だ。こりゃ保有制限に引っかかるだろう。

わざわざ能力リミッターという戦力ダウンをしてまで、何でこの人員を集めた？

「八神二佐は地上の偉いさんに覚えが悪いから、顔見知りで部隊を作りたかった……てのはあるだろうな」

だとしても、ここまで過剰戦力を集める理由にしては弱い。

たとえ覚えが悪かったところで、あの人はそこそこの権力持ってるわけだし、その気になれば多少強引にでも引き抜きできるだろ。

なのに、あえて保有制限に引っかかるような戦力を集めたってことは、だ。

「これだけの戦力がないと、安心して対処できない事態があるって考えるのが妥当か？」

うわ、なにそれ怖い。

オーバーSランクが3人もいないと対処できないとか、どんなだよ。

俺らみたいな雑魚じゃ吹き飛ぶんじゃね？

「つーても、スバルとティアナは気付いてないだろうし、言ったところで入隊はやめないだろうなぁ」

確証がある訳でも無いし、あくまで俺の推測の域を出ない訳だしな。

仮に理解してくれたとしても、スバルは憧れの高町空尉と同じ部隊になれる訳だし、ティアナも執務官になるための最短コースを蹴る訳ないだろう。

「八神二佐に聞いても、簡単にゃ答えてくれないだろうし。俺が気にかけておくしか無いよなぁ」

あーあ、こういうのは俺のキャラじゃねぇのによ。

「どうか平穏無事に過ごせますように……と。」

俺はそう呟いてから、ゆっくりと目を閉じ、夢の世界へと旅立った。

とりあえずは明日から始まる、武装隊での扱きの日々を憂鬱に思いながら。

第3話　『休日』

さて、陸戦Ｂの試験に落ちて、機動六課へのスカウトを受けてから早５日。
昨日やった再試験、俺もスバルもティアナも見事に合格。今日は４日ぶりの休みな訳で。

「……幸せすぎる」

ただいまワタクシ、絶賛惰眠を貪っているところで御座います。
隊舎が一人部屋でよかった。誰かと同室だったら、無理矢理起こされてたかも知れねぇ。
いやぁ、ベッドの中って幸せだわぁ。
決めた。今日はこのまま一日寝ていよう。うん、名案だ、名案すぎる。さすが俺。

コンコン。

む、誰だ空気読まずに俺の睡眠を邪魔する馬鹿は。
無視だ無視。そのうち諦めるだろ。

『あれー？　ハヤトいないのかな？』

『どうせまた寝てるんじゃないの？』

どこかで聞き覚えのある声だが無視だ無視。
俺は今日一日寝てると決めたんだ。断固として起きないぞ。

コンコン。　コンコン。

しつこいなあの馬鹿コンビ。
俺は寝てるんですって。むしろ居ないという方向性で。

『ティア～、どうしよう？』

『ドア壊す訳には……いかないか』

『え？　壊しちゃ駄目なの？』

『……まあ、いいかしらね。どうせあたし達には関係ないし』

何言ってんのティアナさん！？
壊したら誰が怒られると思ってんだ！　俺だぞ俺！？

コンコン。　コンコン。　ゴンゴン！　ドゴッ！　ドゴッ！

段々と音が不味いことに……。
恐る恐るドアを見てみれば、そこにはやや変形が始まっているドアの姿が！

「ちょ、馬鹿！　ホント何してんのぉぉぉっっ！？」

馬鹿じゃないの！　俺が始末書書かなくちゃいけなくなるでしょ！？

思わずドアに駆け寄って、壊れる前にドアを開く。

そこには、拳を振りかぶってるスバルと、呆れた顔のティアナが、どっちも私服姿で立っていた。

「あ、おはよーハヤト」

「やっぱりまだ寝てたのね。呆れた」

「え、何！？　謝罪なし！？　ドア変形してるんだよ！？　俺あとで始末書だよ！？」

「寝てたあんたが悪い」

「ハヤトが寝てたせいだよ」

……やべぇ、ものすっごい殴りたいんですが。

「あーもういいや。で？　何の用だ。せっかくの休日に、くだらない用だったら説教な」

「合格のお祝いに、遊びにいこうよ！」

「合格祝い？」

「そう！」

なんて嬉しそうな顔してやがる。てかティアナも満更じゃない顔すんな。

正直面倒だから断りたいんだが……あれだ、断れる雰囲気じゃないです。

「一応聞くけどよ、拒否権は？」

「「無し」」

「ですよね」

はぁ……。せっかくの休日だってのによぉ。

逆らっても時間の無駄だし、出かける準備でもしますか。あ、お前ら覗くなよ。

「「誰が覗くか！！」」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第３話　『休日』

とまあ、そんなわけで俺達は陸戦Ｂランク合格祝いと称して、クラナガンの街へと繰り出した。
……うん。まあそれはいい、それはいいけどよ。

「なんで俺が荷物持ちなんだよ！！　しかもお前らの服ばっかじゃねぇか！！！」

「何でって、こんな美少女２人と出かけてるんだから、荷物持ちぐらいするのは当然の義務でしょ？」

「だよね～」

「美少女って自分で言うとか……マジ自意識過剰」

「「何か言った？」」

言ってないッス。マジすんません。
だから拳握んないで下さい。怖すぎです。

「あ、ティア。次はあそこのお店いこうよ！」

「ん？　ああ、あそこって確か、雑誌に載ってた店よね」

「うん！　可愛い服が一杯あるって書いてあったよ」

「へぇ」

まだ買う気か。

「勘弁してくれ。これ以上は俺の腕が壊れる」

「え～。ハヤトだらしなーい」

「全くね。男なら我慢しなさい。ほら、行くわよ」

「……俺の休日がぁ」

俺ガンバレ、超ガンバレ。

帰ったら泣いていいよね？

side：ティアナ＝ランスター

「疲れた～」

昼食を摂ろうと寄ったオープンカフェ。
そこで席に着いたハヤトの第一声はそれだった。両手には、あたし達の買った服の入った袋を沢山持っている。
うん、さすがに買いすぎたかも。

「あはは、ごめんねハヤト。ちょっと買いすぎた」

「腕がちぎれるかと思ったたっつーの。だから女の買い物に付き合うのは嫌なんだ」

「何よ。あんたも目の保養ができてよかったでしょ？」

「高町空尉やハラオウン執務官、八神二佐ならともかくお前らで？ハッ。出直してくるといいよ」

……ムカつく。けど、比較対象が比較対象だけに怒れないわね。
女のあたしから見ても、なのはさん達って綺麗だったもの。なにか秘訣でもあるのかしら？

「ティア、ハヤト。何でもいいから早く注文しようよ、お腹減っちゃった！」

「お前はいつも減ってんだろ……ったく。あ、おねーさん注文いいですか？」

ハヤトが店員を呼んで注文をする。
あたしは……最近、お腹周りが気になってきたから軽くサンドウィッチとコーヒーかな。

「俺もこいつと同じで。スバルはどうすんだ？」

「う～ん。とりあえず、ランチ系全部お願いします！」

「ぜ、全部ですか？」

「はい！」

あー、やっぱり初めての人は驚くわよね。スバルの大食いは。

「すいません。こいつ大食いなんで気にしないで下さい」

「は、はぁ。では、すこしお待ちください」

若干頬を引き攣ってたけど、きちんと営業スマイルで店の中に入っていくあたりは大したもんね。

「さて、と。午後はどうする？　服はもういいだろうから、小物でも冷やかしにいくか？」

「う～ん。あたしは別に欲しいの無いからいいかな。ティアは？」

「あたしも、今んとこ欲しいのは無いわね。あんたは何か希望とかないの？」

「質問が一周してきた件」

それからもあーだこーだと下らないことを話しながら、あたし達は午後の行動について話し合ったのだった。

途中で何回か馬鹿がセクハラ発言をして、あたしとスバルに殴り倒されたことも、追記しておこう。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

午後の予定なんかを話しつつ昼食を終えた後、俺たちはゲーセンに来ていた。

まあ、なんだかんだでスバルとティアナは買い物さえ出来ればよかったらしい。

それで話し合った結果、午後は俺の行きたい場所にってことで、ゲーセンに決定したわけだ。

わけだ……が。

「まさか、ティアナ如きに俺様の記録が塗り替えられるとは」

「ふふん」

俺はガンシューティング筐体の前でｏｒｚっていた。

ティアナに興味本位で最近出たばっかのガンシューティング――ハイスコアトップ１０を俺が牛耳っていたモノ――をやらせたら、あっという間にハイスコア１位を取られた。

俺が死ぬ気でパターン覚えて、やっととった１位だというのに……。

「ティアすごーい！　ハヤトがゲームで負けるのなんて初めて見たよ！！」

「こんなの訓練に比べたら全然簡単よ。敵の速度も遅いしね」

「謝れ！　パターン全記憶した俺に謝れ！！」

俺の魂の咆哮に、周りのゲーマーの何人かは賛同してくれたが、残りはティアナ側についてやがる。

くっ、女がそんなにいいか！？　男よりはいいですよね。

「まあまあハヤト。次来た時に超えればいいじゃん」

「よしスバル、お前ちょっと格ゲー付き合え。ボコす」

「えぇっ！？」

その後、とりあえずスバルや小学生相手に１５連勝して気晴らしした。

大人気ないとか最低だとか言う声が聞こえたが、無視してやった。

ざまぁ。

あれ？　何か視界が潤んでるな……そうか、雨だなきっと。

「あ、クラッシュキャッチャーだ！」

気晴らしが終わった後ゲーセンの中をぶらぶらしてる時にスバルに言われ、指差す方へ視線を向ければ、そこにはゲーセンにはお決まりの景品ゲーム。

クラッシュキャッチャーという名のこれは、アームがハンマーになっていて、それで景品の乗った台を横から叩き、台を上手くどかせば景品が台の下に空いていた穴に落ちて手に入るというゲームだ。

「ハヤト、前に得意だって言ってたよね？」

「……まあいいけどよ。どれ欲しいんだ？」

「あれ！　あのぬいぐるみ！！」

嬉しそうにスバルが指したのは、青い狸みたいなキャラクターの特大ぬいぐるみ。
ん、まあ楽な方だな。でかい分台が不安定っぽい。

「OK。1コイン2プレイか、じゃあティアナは何かあるか？　何かとってやるよ」

「え、あたし？　そうね……じゃあ、その隣のお願い」

隣ってーと……ああ、あの熊のぬいぐるみか。ティアナって意外と少女趣味なのな。
なんて思いながら、俺はコインを入れていく。

♪～　♪～

軽快な音楽と共にアームを動かして、台を叩きやすいイチへと誘導していく。
まずは狸の台へ……ここだ！

ガコンッ！

「っし。ほれ、スバル」

取り出し口から出て来たぬいぐるみを取って、スバルに渡す。

「うわぁ！　ありがと、ハヤト！！」

スバルはそれを受け取って、すっげぇ笑顔で抱きしめた。
うん。こういう顔見ると、こいつも“女の子”なんだなぁって思うわ。普段は男っぽくて、どっちかってーと男友達と一緒に居るみたいな感じなのに。
……何考えてんだ。

「さて、次はティアナのだな」

「無理しなくていいわよ。あんまり期待してないし」

とか言いつつ、ティアナの視線は熊を捕らえて放さない。
変なとこ意地っ張りなんだよなコイツ。

♪～　♪～

あ、くそ。狸の台が微妙に邪魔だな。
しゃーねぇ、別の角度から狙って……よっしゃ、いける！

ガコンッ！

「さすが俺……と。ほいよ、ティアナ」

「あ、ありがと」

ちょっと頬を染めて、ティアナもぬいぐるみを抱きしめる。
珍しく嬉しそうに頬を緩めてやがる。
こうやって見ると、こいつらって可愛いよな。つか、普通に美少女だ。

……いやいや、落ち着け俺。
俺の好みはこう……もっと年上のお姉さんタイプだろ！　具体的にはハラオウン執務官みたいな。
小娘に惑わされるな！　気をしっかりと持て！

「ん？　どしたのハヤト？」

「ちょっと、な」

「？　変なハヤト」

いきなりスバルに覗き込まれて、思わず視線を逸らす。あーくそ、絶対今顔赤い。

さて、何だかんだあったが、結構いい時間になった。
ゲーセンの外に出てみれば既に夕方。思ったよりも長く遊んじまったみたいだな。

「ふわー、楽しかったねぇ」

「そうね。ゲーセンなんて久しぶりだったけど、思ったより楽しめたわ。どっかの馬鹿の鼻も折ってやったしね」

「ぐ……つ、次は勝つ！！」

「できるならね」

ティアナに鼻で笑われた。ムカつくぞこの貧乳。

「誰が貧乳ですってぇっ！？」

右ストレートで殴られた。何故俺の心の声が！？

「ハヤト、全部声に出てたよ」

「なんと」

「で？　だ、れ、が、貧乳ですって？」

「お前だろ貧乳。違うとか言うなら謝れ、主に巨乳に対して」

「ふんっ！！」

「うわらばっ！？」

今度は右フックをレバーに、だと……っ！？
あまりの衝撃に膝を突く。こいつ、クロスレンジの方が強いんじゃねぇか？

「今のはハヤトが悪いよ」

「死ね」

「……いい右持ってんじゃねぇか、お前世界狙えるよ」

「反省してないみたいね、もう一発いく？」

「超ごめんなさい」

潔く土下座。プライド？　そんなもん一昨日生ゴミと一緒に捨てた。

「ったく。ほら、さっさと立ちなさい。そろそろ帰るわよ」

「そだね、これ以上遅くなると暗くなっちゃう」

「……だな。預けた荷物取りに行ってから帰るか」

そういって立ち上がり、服についた土を払う。
やれやれ。やたらと疲れたけど、まあ気晴らしには丁度よかったか。

「あ、ハヤト。これありがとね」

「うん？　ああ、別にいいさ。安いけど合格祝いってやつだ」

「ほんとに安いわね……まあでも、一応お礼言っておくわ」

いいってことよ。
本当ならもうちっと良いのあげたかったんだがな、金が無いからそれで我慢してくれ。

「新部隊に行ってもよろしくね、ハヤト、ティア」

「お前の世話はティアナの役目だろ」

「何であたしが！　お馬鹿はお馬鹿同士仲良くしてなさい！」

「ティア酷い～」

「ティアひどい～」

「スバルの真似すんな！　キモイ！！　死ね！！！」

……酷くね？

第４話　『新しい部隊、新しい仲間』

月日が経つのは早いもので。
大分先だと思っていた機動六課の稼働初日が来てしまった。

今俺は、入局して以来ずっと着ているよれたスーツを着て、八神二佐――いや八神部隊長の挨拶を聞いている。
半分寝ながら。
いやー昨日発売の新ソフトやりこんでたらうっかり徹夜しちまったぜ☆
あ、☆とかウザかったですよねすいません。

「（ちょっとハヤト、あんた大丈夫？　さっきからフラフラしてるけど）」

右隣に立つティアナが小声で話しかけながら脇腹を小突いてくる。
やめろくすぐったい。

「（大丈夫だ。ちょっと徹夜明けで眠いだけ）」

「（全然大丈夫じゃないじゃない！）」

「（小声で怒鳴るな。器用な奴だな……ふあぁ、ねむ）」

あーやばい、そろそろ意識が朦朧としてきた。

ティアナ肩貸してくれ。

「（ちょっ！？　あたしの肩によっかかって寝るな馬鹿！　重い！！）」

む、俺の方が背が高いからバランス悪いな。
じゃあスバルー、肩貸してー。

「（え？　いいけど、あたしもティアとそんなに身長変わらないよ？）」

そうだったな。ちっ、使えない奴らめ。

「（……後でコロス）」

「（ティア、あたしも手伝うよ）」

両隣から殺気をぶつけられた。おそろしい奴らだ。ちょっと事実を言っただけでこうだよ。
あ、ごめん足踏むのやめて、痛い痛い痛い。

「こらーそこの三人、仲が良いのはええけどもうちょっと静かにな？」

うわぁ、部隊長直々に怒られた。凹む。

●魔法少女リリカルなのは　～とある新人の日常～
第４話　『新しい部隊、新しい仲間』

部隊の稼動式も、部隊長に怒られた以外は滞りなく終わった。
終わった後スバルとティアナに男子トイレに連れ込まれてボコボコにされたが、まあ自業自得だと思っておこう。
ティアナが「スバル、顔は駄目よ。ボディーにしなさい」と言っていたのが印象的でした。あいつ実は不良じゃね？

そいでもって、気絶しかかった俺を引き摺ってスバルとティアナが向かったのは、訓練スペースへと続く通路。
ティアナが言うにはそこで俺達以外のフォワード陣と待ち合わせているらしい。
だったら俺のことボコす前にいかんかい、このド阿呆めが。

「……死ぬ？」

「申し訳ありませんティアナ様」

長いものには巻かれろ。

この言葉考えた奴天才すぎる。

「あ、ティア。あの子達かな？」

とかなんとかやってる間に、どうやら待ち合わせ場所についた模様。

スバルとティアナが手を離してくれたので、とりあえず自分で立ち上がる。うぇ、まだ気持ち悪い。

「あの、大丈夫ですか？」

「ん？」

鳩尾のあたりを摩っている俺を気遣ってくれたのは、ピンク色の髪をしたロリっ娘。

いい子だな。どこぞの2人にも見習ってほしいぜ。

「ああ、大丈夫。サンキューな可愛いお嬢ちゃん」

精一杯のキモヤカスマイルをロリっ娘に向ける。
すると、ロリっ娘は「可愛いなんて、そんな……」と顔を真っ赤にして俯いてしまった。
和むなこういう反応。周りにいなかったタイプだ。

「さて、と。君ら2人が、残りのフォワードってことでいいのか？」

「あ、はい！」

確認するように聞くと、今度は赤毛のショタが答えてくれた。
うんうん。素直な子供は好きだぜ。

「エリオ＝モンディアル三等陸士、１０歳であります！」

「キャロ＝ル＝ルシエ三等陸士、えぇと、私も１０歳であります。それで、こっちが白竜のフリード」

「きゅくる～」

2人とも綺麗な敬礼で自己紹介してくれた。チビ竜もついでに挨拶してくれた。
出来た子達だ。俺なんて未だにまともに敬礼できないのに。

「ん、エリオとキャロか。俺はハヤト＝ロックウェル、１７歳、現

在彼女募集中。んでこっちが――」

「ティアナ＝ランスター二等陸士。１６歳よ」

「スバル＝ナカジマ。１５歳だよ、よろしくねキャロ、エリオ、フリード！」

「「よろしくお願いします！」」

「きゅく～！」

ビシッと背を伸ばして、敬礼してくるエリオとキャロ。

どうにも堅苦しいが……まあ無理して矯正することもないか。そのうち砕けてくんだろ。

「とりあえずお互いの名前は分かったな。ティアナ、この後ってどうなってんの？」

「あんたね……八神部隊長が、フォワード陣はなのはさんの所に行くようにって言ってたじゃないの」

「マジで？　あー、悪い。眠かったんで全然聞いてなかったわ」

「あんたって奴は……」

ヤバイ、ティアナが拳握ってプルプルしだした。これは殴られるフラグ。

「よし。そうと決まればボケっとしてはいられんな。高町隊長を待たせる訳にもいかんし、スバル、案内を頼むぞ！」

「え？　う、うん。じゃあキャロとエリオも一緒に行こっか？」

「「はい！」」

俺は慌ててキモヤカスマイルを浮かべ、スバルの背中を押しながら高町隊長のところへと向かうのでした。

いや別にティアナが怖くて逃げた訳じゃないよ。

教導官を待たせるのが忍びなかっただけだよ、ホントダヨ？

ｓｉｄｅ：高町なのは

「えっと……」

私は思わず言葉に詰まってしまった。

はやてちゃんに言われて向かったフォワード陣との待ち合わせ場所。

そこには全員が遅れることなく並んでいた、いたんだけど……

「なんでハヤト君は、そんなにボロボロなのかな？」

ティアナの横に立っているハヤト君は、何故か一戦終えてきたかの様にボロボロだった。

「ちょっとそこでオレンジ色の凶悪犯罪者に襲われごぺっ！？」

「何でもありません。なのはさん」

「……え、いや何でもないって」

今、思いっきりティアナがハヤト君のこと殴ったように見えたんだけど？

「何でもありません」

「……そ、そう」

うぅぅ、何だかティアナが怖い。背後に黒いオーラが見えるよ、すずかちゃんが本気で怒った時みたい。こういう時は下手に逆らわない方がいいよね、うん。

「じゃ、じゃあ5人ともついて来てね」

「「「「はい！」」」」　「は……い……ガクッ」

うん、皆いい返事！　ハヤト君が力尽きたように聞こえたけど気のせいだよね、きっと気のせい！

「ところで、皆お互いの自己紹介は終わったかな？」

訓練場へと向かう通路を歩きながら、私は後ろを振り返ってみんなに尋ねた。

「お互いの名前や経験、スキルの確認はしました」

「あと部隊分けと、コールサインもです」

「それから趣味嗜好、女性陣には３サイズも嘘ですごめんなさいティアナさん、だから殴らないでああああああ」

……うん。ちゃんと確認してたみたいだね、偉い偉い。

でも、ハヤト君っていつもこんな風にふざけてるのかな？　３８６部隊から貰った資料だと、真面目な子って書いてあったんだけど――まあ、それはこれから訓練で見せて貰えばいいか。

「じゃあ、早速訓練に入りたいんだけど、いいかな？」

「「「「はい！」」」」　「寝不足なんで寝たいでｓ――「永遠に寝る？」――がんばります！」

不安だなぁ。

はやてちゃん、私達人選間違ってないよね？

ｓｉｄｅ：高町なのは　了

「ハヤトさんは」

「ん？」

訓練スペースに行く前に制服から訓練着へと着替えなきゃならんので、俺達は更衣室に来ている。

そんで、着替えていたらエリオに話しかけられた。

「ハヤトさんは、スバルさんやティアナさんとは、長いお付き合いなんですか？」

「そうだな。訓練校からだから……親以外じゃ、一番長いかも知んねぇ。でも、いきなり何で？」

「あ、いえその、随分と仲がいいみたいでしたから」

1年以上チーム組んでるわけだし、確かに仲はいいな。

「でも、エリオだってアレくらい仲いい奴、いるだろ？」

「いえ……僕は……」

あれ？　もしかして地雷踏んだ？
エリオが目に見えて沈んだ表情したんですど！？

「悪い、聞いちゃまずいことだったか？」

「そんなことは無いですけど……」

どうしよう。何だかどんどん雰囲気が暗くなってく。
こ、ここはあれだ！　話題転換だ！

「と、ところでエリオ！　お前って近代ベルカ式だっけ！？」

「え？　ええ、そうですけど」

「スバルもベルカ式なんだけどさ、クロスレンジでめっちゃ強いよな！　俺も、少しだけクロスレンジの格闘できるんだけどさ、よかった今度模擬戦しねぇ！？」

「……ホント、ですか？」

おお。あからさまな話題転換だったけど、なんか釣れた！
エリオもあれか、スバルと同じで模擬戦大好きっ子か！

「おうともよ！　俺はミッド式だからクロスレンジは得意じゃないけどさ、これでもスバルには模擬戦で勝ち越してるんだぜ！？」

本当は全然乗り気じゃないけどな！
でも拳で語り合うってものいいと思うんだ！　つかこの暗い雰囲気でいるよりは百倍マシだろ！

「じゃあ、今度お願いします！！」

「任せとけエリオ！」

なんだろう、凄く墓穴を掘った気がする。気がするけど……エリオが笑ったし、まぁいいか。
年下の子供に暗い顔させたままの方がよっぽど精神衛生上良くない。

「よし。とりあえず着替えちまおうぜ。遅くなると怖いお姉さんに怒られる」

「あはは……わかりました」

お互いに苦笑して、途中だった着替えの続きをする。

予定外のハプニングで時間を食っちまった。自業自得だけど、急がないとティアナに怒られる。

……よし、着替え完了。

「じゃあ行くとするか」

「はい！　ハヤトさん」

歩き出した俺の後ろを、エリオが小走りでついてくる。弟ってのはこんな感じなのかね。

そんな事を重いながら俺は意気揚々と更衣室の扉を開けた。

「ハヤト遅いよー」

「ん、悪い。エリオにカツアゲされてた」

「ええ！？」

「ハヤト大丈夫だった!?」

「ありえないこと言ってんじゃないわよ。逆でしょ逆」

ティアナ、ノリ悪いぞ。それに比べてキャロちゃんは純真で可愛いですなぁ。

「あれ、あたしは?」

「スバルは純真でなくて馬鹿」

「ひどっ!?」

「か、可愛いなんてそんな……」

キャロが頬に手を当てて真っ赤になる。

うんうん、愛い奴め。飴ちゃんいる?

「あ、はい頂きます」

「あたしには?」

「黙れ欠食児童」

「ティアー、ハヤトが酷いー」

「あああもう！　全員馬鹿言ってないでさっさと行くわよ！」

怖い怖い。キャロ、ああいうお姉さんになっちゃいけないよ？
モテなくなるから。

「あ・ん・た・はぁ～～～～～っっっっ！！！」

やべっ、からかいすぎた。
ここは三十六計発動！

「待ちなさい！」

「あ、ちょっ！？　待ってよティア、ハヤトー！！」

「え？　え？」

「とりあえず僕達も行こう！」

「う、うん」

ふはははは！　俺の逃げ足を甘く見るなよ皆の衆！！
ってティアナはやっ！？

第5話　『訓練　1』

姉ちゃん、大変です。

「――なのに、何でこんなことするのかな!?　ちょっと聞いてるロックウェル君!」

「はい。誠心誠意聞かせて貰っております。フィニーノ一等陸士」

俺は今、訓練スペースの端っこでメカニックのシャリオ＝フィニーノ一等陸士に怒られています。正座で。

スバル達他のフォワード陣と、高町隊長は困惑した顔でこっちを眺めている。

何この状況?

「……聞いてないね、ロックウェル君」

「いえ!　聞いております!」

「じゃあ、今私が何て言ってたか言ってみて?」

「――すいません、聞いてませんでした」

あぁ……フィニーノ陸士の顔がますます怖いことに。

笑ってるのに、雰囲気が笑ってねぇよ。背景に黒いオーラが見えるよ、なんか『ゴゴゴゴ』って効果音まで聞こえるよ。

「じゃあ、もう一回最初から説明してあげるね。こ、ん、ど、は、ちゃーんと聞いててね？」

「は、はい」

逆らうな俺。逆らったら負けだ。

「いい？　デバイスっていうのは繊細なの！　小まめにメンテナンスしてあげないと、すぐにどこかおかしくなったりしちゃう訳！」

「はい。それは知ってます」

「知ってるなら！　な！　ん！　で！　3年以上も定期メンテナンスしてなかったの！？」

「……えっと」

ゲームを買うために、メンテ料払うのが嫌だったとは言えない。言ったら何か色々終わる予感がする。主に俺の人生が。

「ハヤト、ゲーム買うからメンテナンスの代金払うの嫌って言ってたよね？」

「ちょっ！　スバルうううっっっっ！？」

「……へぇ」

「それに、メンテナンスなんてしなくても平気だって言ってたわよね？」

「ティアナまで！？　お前ら俺になんか恨みあんの！？」

「「うん」」

聖王は死んだ！　いや元々死んでるけども！

「なのはさん。訓練、もう少し待ってもらっていいですか？　私、ちょっとロックウェル君と“お話”しないといけなくなってしまいまして……」

「え、いや、さすがにそれは……」

ですよね高町隊長！　訓練はしないといけないですよね！？
もう貴女だけが頼りです！　お願い、俺をこの人から救い出して！！

「なのはさん。いいですよね？」

「……えと、だからねシャーリー」

「い　い　で　す　よ　ね？」

「……ごめん、ハヤト君」

「高町たいちょおぉおおおおおおおっっっっ！！！！」

ブルータスお前もかぁぁぁぁっっ！！！

……ブルータスって誰？

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第５話　『訓練・１』

酷い目にあった。

具体的には、徹夜で磨り減っていた精神が完全に磨耗するぐらいの酷い目に。

「……ロックウェルさん。大丈夫ですか？」

「ハヤトさん、平気ですか？」

ああ、チビっ子２人の言葉が心に染みる……。
ホントいい子達だ。ニヤニヤしてこっち見てる２人に見習って欲しい。
それと高町隊長。気の毒そうな顔するんだったら、最初から助けては貰えませんか？

「うー、えぇと……そ、それじゃあ気を取り直して、訓練を始めようか！」

あ、誤魔化した。
まあいいか。俺もそんな気にしてる訳でないしな。

……ところで高町隊長。

「訓練って、ここでやるんスか？」

「何も無いみたいですけど……」

俺とティアナが問いかけると、隊長は軽く笑ってから、フィニーノ陸士の方へ視線をやる。

「シャーリー」

「はーい！」

答えてから、フィニーノ陸士は空中に複数のモニタを出して、パネルを叩いていく。

おぉ、ただの怖いおねーさんかと思ったら、意外とデキる女らしい。

「機動六課自慢の訓練スペース。

なのはさん完全監修の、陸戦用空間シミュレーター……ステージ、セットアップ！」

楽しそうにそう言って、ちょいと大きめのパネルを触って……ってておおお！？

「街が出てきた……だと！？」

海の上に浮かんでた、でかいプレートが光った途端に巨大なビル郡が姿を現した。

「「「「わぁぁ……」」」」

他の４人もめっちゃ驚いている。当たり前だ、俺だって驚きだよ。

空間シミュレーターなら何度か使った経験はあるけど、こんだけ巨大なのは初めてだ。

「今日から皆には、ここで訓練してもらうから。頑張ろうね」

「「「「はい！」」」」

「リアルガンシューキタコレ！　キタコレ！　キタコレ！！」

「……大丈夫かなぁ」

高町隊長の疲れたような呟きは、残念ながら俺の耳には届いていなかった。

side：ヴィータ

「……あいつ、ホントに大丈夫か？」

あたしは、眼下ではしゃいでいる新人――ハヤト＝ロックウェルを見てこめかみを押さえた。

他の新人は真面目にお互いのできることとか、ポジションの確認とかしてんのに、アイツは訓練スペース見て「キタコレ！」と騒ぎ続けている。

あ、ティアナが殴って引き摺ってった。

「……はぁぁぁぁ」

溜息吐くのも、仕方ねぇよな。
はやても何であんなん拾ってきたんだ？

「どうしたヴィータ、溜息など吐いて」

「ん？　ああ、シグナム。いや、新人がちょっとな」

「新人がどうしたと言うのだ？」

不思議そうな顔のシグナムに「あれ」と言ってティアナに引き摺られているハヤトを指す。

「……何だ、あれは」

「あたしの溜息の原因」

お、立ち上がった。あいつ背ぇ高いな、１７０ぐらいか？

「さっきシャーリーにも怒られてた。３年ぐらいデバイスのメンテ

してなかったとかで」

「な……」

シグナムが言葉を失う。まあ当然だよな、あたしだって驚いたさ。
まるで料理を成功させたシャマルを見るような目でハヤトを直視するシグナムの肩を、同意の意味も込めて叩いた。
そんな事してる間に、今度はスバルがハヤトの首を締め上げてた。
……何したんだアイツ。

「ヴィータ」

「何も言うな。あたしも、多分同じこと思ってる」

はやて、人選間違ってるよ絶対。

「ま、まあ奴以外はマトモなのだろう？」

「そうだな。どいつもこいつも鍛え甲斐のありそうな奴らだ」

「何だ、お前は教導に参加せんのか？」

「全員まだまだヨチヨチ歩きのひよっ子だ。あたしが教えるには早ぇよ、それに――」

――それにあたしは、まず自分を鍛えなきゃなんねぇ。
もう2度と、なのはを危険な目にあわせねぇ為にも。

「……お前も難儀な性格をしているな」

「うっせ」

苦笑するシグナムを睨みつける。
あたしが何をしようとあたしの勝手だろ！！

「照れることもなかろう」

「照れてなんかねーよ！！」

『ハヤト君！　いい加減にしなさーい！！』

そんであの新人、今度はなのはに怒られてんのかよ！？

ｓｉｄｅ：ヴィータ　了

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

色々あったけど、あたし達は無事シミュレーターまで移動していた。

さっきなのはさんに怒られてたハヤトは、今はティアナと一緒になのはさんから受け取った周辺地図を見て、色々と話し合ったりしてる。

「俺ら後衛組が陣取るのは、このビルがいいか？」

「こっちの方がいいんじゃない？　そこだと、このあたりが死角になるじゃない」

「でもそっちだと、ここに比べて死角になりそうな箇所が多くないか？」

（こうやって真面目にしてれば、ハヤトも格好いいのになぁ）

あたしは、真面目な顔でティアと議論してるハヤトを見てそう思う。

背も高いし、顔も整っててカッコいい。いつも馬鹿なことしかしてないから分からなくなるけど、こうやって真面目な顔の時は、同年代の他の男の子なんかよりずっと大人びて見える。

「でもそっちだとスバル達が死角のカバーするの、難しいじゃない」

「死角が多くなれば同じことだろ？　なら、一箇所だけのこっちにして、死角にターゲットが行かないようにしたほうがいいんじゃね

？」

「……むぅ」

「今回は俺ら3人じゃなくて、初めて組むエリオとキャロも一緒なんだし、下手に前衛を動き回らせるのはどうかと思うけど？」

「……そうね。アンタの指定したビルにしましょう」

「オーケー。そいじゃ俺らの役割分担だけどよ……」

ティアとこうやって色々話できるくらい頭もいいし、基本的に女の子には優しいよね。

うん、よく考えると理想の男の子かも……って、何考えてるのあたし！！

「あの、スバルさん、大丈夫ですか？　顔が赤いですけど」

「ふぇっ！？　う、ううううん！　だだ、大丈夫だよ！？」

エリオ、いきなり話かけないでー！

思いっきりどもっちゃった。へ、変に思われてないよね？

「そうですか？　ならいいんですけど」

よかった。何とか誤魔化せたみたい。
ほっと胸を撫で下ろす。てゆーか、なんであたしこんな焦ってるんだろ。馬鹿みたい。

「と、まあこんなとこか？　どうよティアナ」

「いいんじゃない？　別にコレと言って文句もないし」

「よし。それじゃあこれで行くかね、おーいスバル！　エリオにキャロ！　ちっとこっち来い、説明するから！」

「「はい！」」

こっちの気も知らずに声をかけてくるハヤトに、何だか凄く腹が立った。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

ｓｉｄｅ：高町なのは

「皆、聞こえる？」

訓練の準備が終わったところで、訓練用の無線を通してフォワー

ドの皆に呼びかける。
全員が返事するのを確認して、私は続けた。

「準備はいいかな？　良ければ始めようと思うけど」

『『『『大丈夫です』』』』

「うん、いい返事。じゃあ、早速ターゲットを出していこうか。まずは軽く、８体から」

そう告げて、シャーリーを振り返る。

「じゃあ、お願いシャーリー」

「はい。動作レベルC、攻撃精度Dってとこですかね？」

「うん」

シャーリーの言葉に答えながらフォワードの方へ視線を戻す。
丁度、５人の前にターゲットを出す魔法陣が８個、浮かんだところみたい。

「私達の主な仕事は、捜索指定ロストロギアの保守管理。その目的の為に、これから戦うことになる相手が……これ」

魔方陣からターゲット――ガジェットのホログラフが出現する。
ホログラフって言っても、ちゃんと触れる優れものだけどね。

「自立行動型の魔道機械。これは、近付くと攻撃してくるタイプね」

『うへぇ、いかにも雑魚って感じのデザインだなオイ』

シャーリーの説明に、ハヤト君が苦笑しながらガジェットの感想を漏らす。
そんなこと言っていいのかな？

「デザインはともかく、攻撃は結構鋭いよ？　多分、まだ皆には手強い相手じゃないかな」

ハヤト君に釘を刺すと、ハヤト君は信じられないという顔で、『マジすか？』とガジェットを見る。
まあ、確かに見た目は弱そうだけどね。
でもそうやって見た目で判断すると、痛い目みちゃうよ？

「とりあえず、論より証拠。この魔道機械の手強さは、自分達で確かめてみて」

『『『『了解！』』』』

「では、第１回模擬戦訓練。ミッション目的、逃走するターゲットの捕獲、又は破壊。１５分以内」

私の言葉に、皆の顔が真剣になるのが分かる。

うん。いい顔だ。

「それじゃあ、ミッションスタート！！」

ｓｉｄｅ：高町なのは　了

第5話　『訓練　1』（後書き）

ハヤトがアホなことばかりするせいで、中々話が進まない……。
第5話にして初後書き、どうもラモンです。
一応次話でＤＶＤ1巻分が終わる予定だったりします。まあ、ハヤトが馬鹿やってるせいで伸びる可能性もありますが（笑）

後書きって何書いたらいいのかわからないので、主人公のスペックでも。

ハヤト＝ロックウェル（１７）
身長１７２ｃｍ　体重６７ｋｇ
外見はスカリエッティの髪型をしたクロノを想像して下さい
デバイスは支給品の杖型デバイス、カートリッジは無し
ティアナと同じセンターガードで砲撃が得意
基本、馬鹿

趣味はゲームで、休暇は1日部屋に閉じこもってゲームしてます
彼女いない暦＝年齢
家族構成は父、母、姉で、全員管理局員

感想などありましたら、どんどん送ってくださいね。

第6話　『訓練　2』

はー、あの敵――確かガジェットドローンとか言ったか？――ってマジに強いんだな。
エリオはともかく、スバルの攻撃余裕で避けるとか、下手な低ランク魔道師よっか強いと思うぞ。
攻撃精度が低いのが救いか。あれで攻撃バシバシ当ててきたらどうしようもない。

「スバル！　エリオと上手く連携しろ、個別で攻撃すんな！」

『ごめん、ハヤト！』

あの馬鹿、年上なんだから年下をフォローしながら動けっての。
エリオ置いていって、バラバラで攻撃したら何の為にチーム組んでるかわからんだろ。
っと、敵が出て来たか。

「ティアナ！　狙撃いくぞ！」

「分かってる！」

「キャロ、威力強化頼めるか？」

「大丈夫です！　ケリュケイオン！！」

《Ｂｏｏｓｔ　ｕｐ.　Ｂｕｒｒｅｔ　Ｐｏｗｅｒ》

キャロの補助魔法で、俺とティアナの射撃が本来の威力以上に増す。

補助系魔道師とは組んだこと無かったけど、これはいいな。

「いくぞティアナ！」

「オーケー！」

「「シュート！！」」

俺とティアナ、合計８個の射撃魔法がガジェットに襲い掛かる。

狙いは完璧、威力も申し分なし、これで終わりだろ……って！

「はぁ！？」

俺達の射撃は、ガジェットに当たる寸前で見えない何かに阻まれ消滅した。

何だあれ！？

「バリア！？」

「違います、多分、フィールド系！」

「防御したって言うよりは、魔力が消滅したのか？」

『そう。ガジェットドローンには、ちょっと厄介な性質があるの。攻撃魔力をかき消す、アンチマギリングフィールド。通称ＡＭＦ、普通の射撃は通じないよ？』

解説どうもです隊長。でも、そういう厄介なのは最初に言ってくれません！？

『それに――』

高町隊長の言葉が終わる前に、スバルがウィングロードを展開してガジェットを追いかける。

あの馬鹿！　せっかく解説してくれてるんだから、最後まで聞け！

「スバル！　馬鹿、危ない！！」

『ＡＭＦを全開にされると……』

ガジェットのＡＭＦが一瞬光ったかと思うと、今度はスバルのウィングロードが途中で途切れた。

あ、スバル吹っ飛んだ。まあ、頑丈だから平気だろ。

『飛翔や足場作り、移動系魔法の運用も困難になる』

厄介極まりねぇなＡＭＦ。

全開じゃなくても攻撃が通りにくいし、全開にされたら攻撃は愚か移動、下手すりゃ防御まで難しくなる。

造った奴の底意地の悪さが滲み出てやがるぜ。造った奴、絶対性格悪いだろ。

『対抗する方法はいくつかあるよ。どうすればいいか、すばやく考えて、すばやく動いてみて』

簡単に言ってくれますね隊長。

普通に射撃しても消される、移動して近付こうにも、ＡＭＦを全開にされたらそれも難しい。

くっそ、マジで低ランク魔道師相手の方が楽じゃねーか！

「ティアナ、アレなんとかできる方法、あるか？」

「いくつか思いつくのはあるわ。アンタは？」

「俺もあるな。キャロはどうだ？　手持ちの魔法と、フリードの技で何とかできそうか？」

「試してみたいのが、いくつか」

「そうか」

キャロの言葉に頷いて、俺はスバルとエリオに通信を繋ぐ。

『スバル、エリオ。ガジェットが逃げないように、先行して足止めできるか？』

『何かするの？』

『ちょっとな。頼めるか？　出来るなら数も減らしてくれると、より助かるけど』

『やってみます！』

『任せて！』

『いい返事だ。２人とも、頼んだぜ』

二人の返事を聞いてから通信を切る。

よし、時間も無いしさっさと動くとするか。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第６話　『訓練・２』

side：シャリオ＝フィニーノ

「皆よく走りますねー」

私はモニタに移るスバルちゃんやエリオ君を見て呟く。
2人とも、特にエリオ君は訓練校を出たばっかりだとは思えないよ。凄くいいデータがきてる。

「まだまだ危なっかしくて、ドキドキだけどね」

なのはさんはそう言って、厳しい言葉とは裏腹に楽しそうに微笑む。
長期の教導は初めてらしいから、嬉しいんだろうなぁ。

「データの方はどう？　シャーリー」

「いいのが取れてます。5機ともいい子に仕上げますよ」

この分なら、5人に凄く合った設定のデバイスが造れそう。
……ロックウェル君のは、定期的にメンテナンスしないと壊れるようにしようかな。
いやいやでもそれはメカニックとしてちょっと……でも、そうで

もしないと、ロックウェル君メンテしなさそうだし。

あぁ、でも壊れるのを前提でデバイスを造るなんて、私には出来ない！

だけどメンテナンスを3年もしなかったロックウェル君に定期的にメンテナンスさせるためにはそれしか……！

「シャーリー？」

「ちょっと黙ってて下さい、なのはさん！」

「は、はい！」

ああもう！　私がこんなに悩まなくちゃいけないのも、ロックウェル君がちゃんとメンテナンスをしないせいだ！

あとで食堂でランチを奢って貰おう。そして、その時にキチンと定期メンテナンスをするように言おう、そうしよう！

「……シャーリー、仕事はしてね？」

大丈夫ですなのはさん。きっちりデータは取ってます！

ｓｉｄｅ：シャリオ＝フィニーノ　了

「うおぉっ！？」

「な、何よいきなり大声だして。ビックリするじゃない！」

「いや……何かすげぇ悪寒が」

何だったんだ今の。凄まじく悪い予感しかしないんだが。

「そんなの放っておきなさい！　来るわよ！」

「いやいや、すっげ気になるんですが」

「いいから！」

「へいへい、わーったよ」

気にはなるけど、確かに今は訓練に集中しなきゃ駄目か。
気を取り直してこっちに迫ってくるガジェットへと意識を向ける。

「俺が足を止める、キャロ、その間に頼むぞ」

「はい！」

「んじゃ――いっけぇ！！」

スフィアを生成して、ガジェットにではなく、その進行方向の道路へと撃つ。
爆音が響き、道路の一部が抉れ、それを見て3体のガジェットが動きを止めた。

「キャロ！」

「フリード、ブラストフレア！」

「きゅく～っ！」

フリードの口に炎が集まる。
おお、ゲームでは良く見るけど、実際に見ると更にカッコいいなオイ！

「ファイア！」

炎が、止まっていたガジェット3体に狙い違わず命中する。
なるほど、確かに魔力は通らなくても物理的な攻撃や熱は通るか……って効いてないよガジェット。何あの頑丈さ？

「キャロ、どうす……」

「我が求めるは戒めるモノ、捕らえるモノ。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。
錬鉄召喚“アルケミックチェーン”！！！」

召喚魔法で鎖を召喚すんのか、器用なことするんだなキャロ。
魔方陣から鉄の鎖が伸びてガジェットを拘束する。だが1体だけそれを上手く逃れた。

「あれが俺の獲物か」

俺の足止めに引っかからなかった2体をティアナが仕留めるのを脇に見ながら、一人呟く。
多重弾核とか、いつの間にできるようになってたんだか、あの秀才は。

「キャロ、ご苦労さん。残りは俺がやる」

「はい。お任せします」

キャロに短く告げて、俺は逃げ出したラスト1体のガジェットを追いかけるために屋上を蹴った。

「エリオ！　今そっちに1体行ってる。狙撃するから脇道に逸れないようにしてくれ！」

『わかりました！』

「……魔力弾生成。最大数」

魔方陣を展開して、今俺が作れる最大数――１５個の魔力弾を作り出す。

本当は俺も多重弾核でも作れればいいんだが、生憎それだけの技量も魔力量も無い。くそ、こんなことならカートリッジを無理矢理にでも付けておくんだった。

「だからって、じゃあ諦めますとは言えねーな」

同じ射撃型のティアナだって、本来の実力以上のことをして結果を出してるんだ、ここで諦めたら男が廃る。

あいつみたいな多重弾核は無理。だったら、こっちは数で勝負してやる。

「１５個のうち１４個をコンマ数秒ずつずらして、同一箇所に精密射撃。

そうすりゃ、１４個が多重弾核の外殻の役目をして、ラスト１発が通る……筈」

理論上は可能だ。そんで、精密射撃はそれなりで得意……なら、出来ない道理はねぇだろ！

「弾道計算、射撃箇所精密計算、タイミング補正……よし」

計算は終わった。あとは自分を信じて撃つだけだ！

「エリオどけてろ！　ブレイズバレット１～１４……発射ぁっ！！」

号令と共に１４個の真紅の弾丸が、一斉にガジェットへと襲い掛かる。

弾道は問題無い、ガジェットが逸れられる脇道も無し、これで当たらなきゃ嘘だろ。

「ターゲットとの距離……５００、４００、３００、２００……１００……命中確認！」

後はタイミング勝負か。

５発、１０発……ここだ！

「ブレイズバレット１５、ファイア！！」

通ってください！　お願いだから！

ラスト１発、それを祈るような気持ちで撃ちだす。正直、これが

通らなかったらお手上げだ。
ターゲットとの距離……３００、２００、１００……。

「通れぇっ！！」

俺の咆哮と共に、ガジェットの中心部分――黄色のコアを貫いた。
中心を貫かれたガジェットは、小さく火花を散らして爆散する。

「よっしゃ！」

小さくガッツポーズをして、深く息を吐いてその場に腰を下ろす。
やれやれ、思った以上に疲れた。やっぱ慣れないことはするもんじゃねーな。

『凄いですハヤトさん！　僕、あんな精密射撃初めて見ました！！』

溜息を吐いてる俺の耳、興奮したエリオの言葉が届く。
そりゃ初めて見るだろうよ。俺だってあんなん成功したとこ見るのは初めてだ、だって誰もやらないし。

「サンキュ。んじゃエリオ、敵が残ってないか確認して、ティアナに報告しておいてくれるか？」

『あ、はい！』

本当は俺がやらなきゃならんのだが、ちょっと疲れて余裕が無い。
エリオにそう頼んで通信を切ってから仰向けに寝転がる。ゲーム徹夜明けにこの疲れはヤバイ。猛烈に眠い。

「あー……やべ、寝る……」

そうやって言ってる間にも、どんどん視界が狭くなって、意識も遠く……Ｚｚｚｚｚ

ｓｉｄｅ：高町なのは

「……何だかなぁ」

ビルの屋上で大の字になって寝ているハヤト君を見下ろして、溜息を一つ。
ティアナからミッション完了の報告が来て、一度集合して貰おうとしたのにハヤト君だけ来ないから、怪我でもしたのかと思って慌てて飛んできてみたらこれだよ。

「精密射撃を見た時は、やっぱり凄い子なんだって思ったんだけど……」

「むにゃむにゃ……もうたべられないよ」

気のせいだったみたい。
ていうか本当は起きてない、ハヤト君？
そんな寝言、本気で言う人初めて見たよ？

「ほら、ハヤト君起きて！」

屈んで肩を軽く揺する。
でも、ハヤト君は熟睡してるのか起きる気配さえない。

「……レイジングハート、どうしよう？」

≪　彼が起きるまで続けるのが妥当かと　≫

「だよね。ハヤト君！　起きなさ～い！」

「うぅん……あと、５時間３６分４７秒」

「何でそんなに具体的！？」

やっぱり起きてるでしょハヤト君！

「もう！　いい加減に起きないと怒るよ！？」

「うぅ……」

今度はちょっと強めに肩を揺する。

すると、寝返りをうってハヤト君は寒そうに身体を縮こまらせた。

ちょっと可愛いかも……じゃなくて！

「お～き～な～さ～い～！」

「いてぇ……」

こうなったら実力行使とほっぺたを抓ってみるが、痛がって眉を潜めるだけで起きる気配は無い。

≪　魔力弾で撃てばよろしいのでは？　≫

「それはちょっと……」

意外とえげつないんだね、レイジングハート。１０年来の付き合いだけど、初めて知ったよ。

≪　ですが、このままでは起きない可能性が大きいと思います　≫

「……だけど」

≪　非殺傷設定ですし、目覚ましには丁度良いかと　≫

……ちょっとくらいなら、いいかな？
うん、起きないハヤト君が悪いんだし、いいよね？

「アクセルシューター、威力は最小で」

≪　Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ａｘｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ．　≫

いい加減に……

「起きなさ～い！！！」

≪　Ｓｈｏｏｔ　≫

「ぎゃーす！？」

side：高町なのは　了

第6話　『訓練　2』（後書き）

戦闘シーンて難しい。どうも、ラモンです。
やっとＤＶＤ1巻分が終わった……。
この後1，2話ぐらいオリジナル話を入れたら、次はＤＶＤ2巻です。

今回ハヤトがやったＡＭＦ対策ですが、あくまで私の脳内理論なので、信憑性は欠片もございません。
多重弾核についても、カートリッジが無いと使えないかどうかは定かでは無いので、そこのところは大目に見てくださると嬉しいです。

第7話　『ファースト・アラート　1』（前書き）

今回の話には、『ｓｉｄｅ：一』という視点があります。
これは“第三者視点”を表し、誰かの主観視点ではない語り口となります。

第7話　『ファースト・アラート　1』

俺たちが機動六課の所属になってから2週間。
訓練漬けの毎日にも慣れ、自分達なりのリズムが出来てきた。
ただまあ……早朝訓練ってのは、早起きが壊滅的に苦手な俺には拷問な訳で。

「ハヤトさん、起きてください！」

「嫌だ」

「嫌ってそんな……で、でももう起きないと早朝訓練に間に合いませんよ！？」

「い～や～だ～」

「ハヤトさぁん……」

「嫌ったら嫌、サボる。俺は今だけ風邪をひく」

こうやって毎回毎回ゴネる。
同室のエリオには、毎日苦労かけてるとは思う。思うけど……眠いモンはどうしようもない。
だって暖かいベッドって至高じゃね？

「あの、もうすぐティアナさん達が来ちゃいますよ！？」

「知らぬ。俺は寝ると決めたんだ、男の友情に免じて寝させてくれ」

「ここで起こすほうが友情だと思います！」

ぬう、エリオめ。１週間でそこそこに言い返せるようになってきやがったな。

だがしかし！　それ位で俺の眠りに対する欲求をどうにか出来ると思わないことだ！！

「……だから、俺は、ねるｔ……Ｚｚｚｚ」

「本当に寝ちゃった！？」

ベッドが温い……幸せ。

そうして段々と意識が遠のいて――

「あ、なのはさんだ」

「おはよう御座います高町隊長殿！！！！！」

ワタクシ今起きる所でした！

少しばかり用意が遅れておりますが問題ありません！！！！

「……って、あれ？」

「ぷっ、くくくく……」

「ハヤト、最高……ぷふっ」

「ご、ごめんなさい。でも……ふふっ」

ベッドから飛び起きて敬礼したら、そこには高町隊長はおらず、笑いをこらえるティアナ、スバル、キャロの姿だけ。

「は、謀ったな！？」

「起きないアンタが……くっ……悪いんでしょ……ぷっ」

「笑うならいっそちゃんと笑えよ！　下手に我慢すんな！　余計ムカつくわ！！」

「「「「あはははははっっ！！！！」」」」

「全員で笑ってんじゃぬぇえええええええええええええええええっっ！！！！！」

とまあ、こんなやりとりが日常化する位には、キャロとエリオも馴染んできた。

ただ、最近俺の地位が日毎に低下していってる気がしてならないのだが、そこんとこどうよ？

「今更気付いたの？」

「多分、あたし達５人の中じゃ一番下だよ？」

「……すげぇショック」

「「そ、そんなことないですよ！？」」

ありがとうチビっ子ズ。

だけど覚えとけ？　そうやって必死に弁明すると、かえって怪しいんだぜ？

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第７話　『ファースト・アラート　１』

さて、ここで俺らの１週間のスケジュールを教えておこう。

え？　知りたくない？　いいから聞いておけ。

７日のうち４日が早朝から夜までぶっ通しで訓練をする日。

んで、その間に１日ずつ挟む形で午前だけ、午後だけが訓練の日がある。ちなみに、午前だけの場合は午後は休みだ。

まあ休みと行っても、２４時間勤務なのでどこかに遊びに行ったりはできず、もっぱら部屋でダラけるか、自主訓練をするかしか過ごし方がないんだけど。

そして今日は、俺があまり好きじゃない１日全部が訓練の日。

憂鬱だぁ……はぁ。

「こっちのモチベーション下げるようなこと言わないでくれる？」

「そうだよハヤト」

「ハヤトさん、頑張りましょう」

「ハヤトさん、大丈夫ですよね？」

「きゅくる～」

「お前ら黙れ」

俺は一人で憂鬱になることさえできんのか。

とまあ、そんなやり取りがあってから既に１時間後。

そろそろ早朝訓練も終わりに近付いてきた。

「は～い、それじゃあ皆整列！」

「「「「「はい！」」」」」

まだ終わるまで時間が残ってるのに、隊長が俺たちを呼ぶ。

……また何かやる気ですか？

昨日は隊長が全員と1対1で順番に模擬戦、一昨日はフォワードを4対1に分けて模擬戦。

今度は一体何を――つーか、何もしないで終わらせて下さい。もう俺のライフは0を通り越してマイナスです。

高町隊長は、バリアジャケット姿で俺たちの前方に浮かび、デバイスであるレイジングハートさんを構えている。

……ふむ。今日はオレンジか。よし、精神力がだいぶ回復したぞ。

いつも思うが、隊長は少しばかりガードが緩い気がする。まあ、あえて忠告なんて事はしないがな！

「じゃあ、本日の早朝訓練のラスト一本。皆、まだ頑張れる？」

「「「「「はい！」」」」」

眼福で精神力ポイントを回復した俺に隙は無かった。

「じゃあ、シュートイベーションをやるよ。レイジングハート！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ａｘｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ．》

レイジングハートさんの機械音声と共に、宙に浮かぶ高町隊長の足元に桃色の魔方陣が浮かび、１１個の魔力弾が出現して高速で動き出す。

「私の攻撃を5分間回避しきるか、攻撃を私にクリーンヒットさせたら終了。
ただし、誰か1人でも被弾したら最初からやり直しだよ」

「「「「「はい！」」」」」

それなんて無理ゲー？　って聞きたくなる内容ですね。
まあ、高町隊長は多分ハンデとして、あの１１個の魔力弾以外の攻撃はしないんだろうけど。
それにしたってキツイことに代わりはない。

「このボロボロの状態で、なのはさんの攻撃を5分間……回避する自信、ある？」

「ない！」

「同じくです」

「無理ゲー乙」

「じゃあ、何とか一発入れよう」

「はい！」

「きゅくる～！」

ティアナ、一発入れようって言い方不穏だから。一発当てようでいいじゃないか。

やっぱお前実は不良だったんじゃね？

「ハヤト、余計なこと考えてんじゃないわよ？」

「うぃっす」

人の思考読むとか怖すぎる、何この子。

「よおっし！　行くよ、エリオ！！」

「はい！　スバルさん！」

「準備はオッケーみたいだね、それじゃあレディー……ゴー！！」

さてさて、今回は俺あんまり仕事ないと思うけど、とりあえずは頑張ろうっと。

せめてティアナみたくシルエット使えりゃ、もうちょっと色々で

きんだけどなぁ……。
あーあ、凡人ってのは辛いね全く。

途中経過は省いて結果だけ言えば、高町隊長に一発入れました。
エリオ頑張った、マジ頑張った。
それで早朝訓練は無事終了……となれば良かったんだが、残念ながら無事とはいかなかった。

ティアナとスバル、そして俺のデバイスがとうとうイカれた。
2人のは自作で、しかも訓練校から使ってるってのもあって、かなりボロボロだったしなぁ。あ、俺のは多分3年メンテすっぽかしてたのが響いてる。自業自得ですね、分かります。
いや、勿論俺のだって古いからって理由もあるからね？　決してメンテすっぽかしただけが理由じゃないよ！？

「う～ん、皆訓練にも慣れてきたし……そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなぁ？」

「新……」

「デバイス？」

「俺のもッスか？」

「勿論だよ。ハヤト君のは支給品だけど、大分古いモデルだしね」

「経費は部隊持ちですよね？」

「え？　うん、そうだけど……どうしたの？」

「いえ、別に」

ひゃっほう。ただで新型が手に入ったぜ。

小躍りしたいのを抑えて、心の中で諸手を挙げて喜ぶ。

「じゃあ、細かいことは隊舎に戻りながら話そうか」

「「「「「はい！」」」」」

俺達は一つ頷いてから、高町隊長の後に続いて歩き出した。

まあ、俺は新デバイスの名前を何にするかを、早くも考えていたんだけどな。

ｓｉｄｅ：―

「じゃあ、一旦寮に戻ってシャワーを浴びてから、ロビーに集合しようか」

「「「「はい！」」」」

「いや、俺は今すぐ1人で行っても構いませんが！？」

「1人だと、シャーリーに色々言われるけど……それでもいい？」

「エリオ、シャワー浴びようぜ。髪の色が白になるまで念入りに洗ってやる」

「落ちませんよ！？」

なのはと、フォワード陣5人が賑やかに喋りながら隊舎の入り口まで歩いてくる。

すると丁度彼女らの前方から、黒いスポーツカーが近付いてきた。

「あれ？　あの車って……」

ティアナがそれに気付くのと、車が6人の前に停まるのはほぼ同時だった。

停止すると、車の窓と屋根が消え、オープンカーの様になった車には2人の搭乗者がいた。

「フェイトさん、八神部隊長！」

2人の姿を認めたキャロが驚いたように叫び、それに答えるフェ

イトとはやて。
　他のフォワード陣も口々に挨拶しながら、２人の乗った車へと近付いていく。

「すご～い！　これって、フェイト隊長の車だったんですか？」

「うん。地上での移動手段なんだ」

「みんな、訓練はどないや？」

「俺がいつも高町隊長をお世話しています」

「それはない、逆やろ」

　ハヤトのボケに対して、はやての素早いツッコミが入る。
　莫大な戦闘経験に裏打ちされた熟練のつっこみ。時に冷徹ですらあるそれは、的確にハヤトのボケに突っ込まれ、その笑いを増幅させていた。
　コレが数度目の邂逅となる、機動六課部隊長とコールナンバー“スターズ０５”は、まるで数年来の宿敵に会ったような表情で目を合わせ、意思を交わす。

（俺のボケに着いてこれますか！？　部隊長……！）

（ふん、君こそちゃんと着いてきぃや、ハヤト＝ロックウェル！って、このネタ使ってええの！？）

そして、口という剣を抜き放ち、言葉という刃を交わす、2人だけの戦いが始まった。

周りは誰もそれを邪魔できない……というか、ぶっちゃけ「何してんのこの2人？」という視線を向けている。俗に言う“温かい目”だ。

唯一フェイトだけは、いきなり始まった2人の口論（フェイトにはそう見える）をどうにかしなければ、とオロオロしている。

「いやいや、俺だって色々お世話できますよ？　掃除洗濯料理、何でもござれです」

「訓練と関係ないやん。私は訓練の話してるんやで？」

「高町隊長だって、俺みたいなイケメンが教え子に居たほうがやる気でますよ？」

「自分で言うたらしまいやな」

「またまた、八神部隊長だって俺みたいな感じの外見は好みでしょう？」

「せやな、確かに私もハヤト君ぐらいの身長と顔は好み……って何言わすねん！」

「貴女の本心です。聞こえてましたよ」

「私はサト○レとちゃうわ！　懐かしいなそのネタ！！」

「ふっ……そういえば、挨拶がまだでした。こんばんわ八神部隊長」

「ふふっ……まだ朝やで。おはよう、が正しいな。ハヤト＝ロックウェル二等陸士」

まるで騎士の果し合いにも似た壮絶な打ち合いが終わり、2人は互いに矛を納め――

「頼もしいセンターガードやな」

「光栄です、部隊長」

共に笑いあい、揃ってサムズアップをする。

どうやら、何かが共鳴したらしい。お笑い的な何かが。ただ、残念なことにそれを理解できる人間は、この場にハヤトとはやて以外は存在しなかった。

「……どういうこと？　なのは」

「さ、さあ……」

「アイツは……」

「あんな生き生きしてるハヤト、初めて見た」

「「……」」

「きゅくる～」

展開に取り残された6人と1匹は、互いに顔を見合わせながら首をかしげている。

そんな6人と1匹を見て、ハヤトとはやては「これだからお笑いを理解しない人は」と溜息を吐くのだった。

（……溜息を吐きたいのはこっちです）

その時、確かに6人と1匹は心が通い合ったと言う。

ｓｉｄｅ：―　了

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

「えっと、スバルさんのローラーブーツと、ティアさんの銃って、ご自分で組まれたんですよね？」

「うん、そうだよ」

キャロの質問に、あたしは身体を洗いながら答える。

「訓練校でも前の部隊でも、支給品って杖しかなかったのよ」
「あたしは魔法がベルカ式で、戦闘スタイルもあんなだし、ティアもカートリッジシステムを使いたいからって」
昔を思い出しながら、キャロに答えていく。
そう言えば、あたし達3人チームだと、ハヤトだけ支給品だったんだなぁ。
あんまり気にしたことも無かったけど。
「で、そうなると自分で作るしかないのよ。訓練校でオリジナルデバイス持ちなんて居なかったから、目立っちゃってね」
「もしかして、お二人が仲良くなったのって、それが切欠ですか？」
「うん。そうだよ～」
「腐れ縁と、あたしの苦悩の日々の始まりって言って頂戴」
溜息を吐きながら髪を洗うティア（器用だなぁ）に苦笑する。
キャロは、そんなあたし達を見て笑った後、「あれ？」と小さく疑問を口にした。
「あの、ハヤトさんとはどうやってお知り合いになったんですか？」

「え？」

「だって、スバルさんとティアさんはデバイスって切欠がありましたけど、ハヤトさんのは支給品の杖ですよね？
なら、どうやってお二人とお知り合いになったのかなぁって……」

「あーそっか。ハヤトはね、自分からあたし達に組まないかって持ちかけてきたの」

「自分から、ですか？」

「そうよ。あたしとスバルのところに来て、「オリジナルデバイスとか面白そうだな、ちょっと俺と組んでくれない？」ってね」

ハヤトらしいと言えば、ハヤトらしいよね。
理由が「面白いから」ってだけで、面倒なオリジナルデバイスを使うあたし達と組もうなんて、普通考えないよ。

「それで、その時の授業の成績が良かったから、次からも何となく組むようになって、今に至る訳よ」

何であたしの周りには問題児ばっかり集まるのかしら、と嘆くティア。
ハヤトはともかく、あたしは別にそんなに問題起こしてないと思うんだけどなぁ。

「でも、ハヤトさんって凄く成績優秀なんですよね？」

「成績だけは、ね。素行は最悪よ？　授業はサボる、寝る、途中退席なんて日常茶飯事だったもの」

「あはは、チーム組んでからはいつもティアが無理矢理椅子にバインドで縛り付けてたよね～」

いつの間にか、あたし達のクラスの名物になっていたのを思い出す。

「凄く仲良しだったんですね、３人とも」

「うん」

「キャロ、変なこと言わないで。あたしは苦労しっぱなしよ？」

口ではそんな風に言っているティアも、表情は嬉しそうだ。

全く素直じゃないんだから。

「それと、ハヤトさんって凄く素敵な人なんですね！」

「「どこが！？」」

目を輝かせるキャロに、ティアだけじゃなくあたしまで突っ込んじゃった。
どこをどう理解したらそういう結論になるんだろう……謎だ。
でも、当のキャロは「え？　違うんですか？」って顔をしている。
本気で思ってるんだ……。

「……はぁ、もういい。あたし、先に出てるから」

「あ、うん。じゃあキャロ、髪洗ってあげる～」

「はい！　お願いします！」

まあ、キャロにはキャロなりの考えがあるんだよね？
あたしは、「何であたしの周りはこういう子ばっかり……」というティアの声を、そう考えることで黙殺した。
ハヤトが素敵な人ってのは……そりゃ、否定はしないけどさ。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

一方その頃男性陣は。

「皆、遅いなぁ……あ、ハヤトさん切れ味落ちたので研いできます」

「女の入浴と買い物は長いもんだ。覚えとけエリオ……了解、っと。

あぶねぇなこの野郎」

「きゅくる～」

階段でまだ来ない女性陣を待ちながら、ひたすらにブレイクステーションポータブル、通称ＢＳＰをやっていた。

ちなみにエリオの分はハヤトが予備として持ち歩いていたのを貸している。

階段に座ってゲームに熱中するその後姿は、とても機動六課フォワード陣の一角を担う少年達には見えなかったと、とあるオレンジ髪のツインテール少女は後に語っていた。

第7話　『ファースト・アラート　1』（後書き）

新型インフル辛い。
どうも、ラモンです。

正月ボケやら新型インフルやらで更新が遅れました、すみません。
前回の後書きで、オリジナル話をやるって言いましたが、あまりいいネタが思いつかなかったので話を進めることに。
ファースト・アラート終わったら、たぶん今度こそオリジナル話を入れます！

さて、今回一番書きたかったのは“はやてとハヤトの漫才”でした。
こういう感じのテンポ良くボケ&ツッコミは好きなんです。自分のだと、そんなにテンポ良くいってる気がしないのが残念ですが。

完全に自己満足の産物なので、余計なモン入れるなって言われても仕方ないかなぁ、とは思っています。怒られたら反省しますが、後悔はしません！（笑）

それとエリオがゲームしてる件ですが、エリオとハヤトは同室で、ハヤトに半強制的にやらされてるウチにハマりました。
今では2人で結構遅くまで遊んでます。いえ、エリオにも子供らしい趣味を持たせてやろうと思って……。
その辺のエピソードも、折を見て書こうとは考えています。

さて、長くなりましたが、こんな感じでグダグダと本編も続きます。

よろしければ、最後まで見捨てずにお付き合いください。
それでは、また次の話で。

※感想、アドバイス、誤字指摘などお待ちしてます。

第8話　『ファースト・アラート　2』

新しいデバイス。
今まで使っていた、誰でも持っているような支給品のデバイスじゃない。
俺だけの為に造られた、俺だけの相棒。

近くで話しているフィニーノ陸士やリインフォース曹長の言葉も聞かず、俺は目の前に浮かんでいる、赤い宝石の嵌め込まれた指輪を見つめていた。
今まで、フォワード陣の中じゃ自分専用のデバイスを持ってなかったのは俺だけだったしなぁ。
ちょっと疎外感感じてたんだけど、これからは俺も専用機持ちだ。
嬉しくない訳が無い。

「ハヤト、何ニヤニヤしてんのよ」

「話聞いてないと、また怒られるよ？」

両隣から脇を突かれ、スバルとティアナに注意される。
おっと、さすがにちょっとトリップし過ぎたか。
反省して、意識を説明してくれているリインフォース曹長に戻す。

「この5機は、前線メンバーとメカニックが経験と技術の粋を集めて造った最新型です。
スバル、ティアナ、ハヤト、エリオ、キャロ。それぞれの個性に

合わせて、各自が自分の力を１００％発揮できるように造られた文句無しに最高の機体です」

話しながら、リインフォース曹長は俺達のデバイスを自分の周りに浮かべる。

「この子達は、まだ産まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが込められてて、一杯時間をかけてようやく完成したです。ただの道具と思わないで、大切に、でも性能の限界まで思いっきり全力で使ってあげて欲しいですよ」

「うん。きっと、この子達もそれを望んでるから」

……大切に限界まで、か。

そうだよな。俺だけのデバイスなんだし。

よし、今度はこまめにメンテに出して、自分でもちょくちょくメンテしよう。

「ごめんごめん、お待たせー」

俺が一人そう決意を固めていたら、途中で別れた高町隊長が遅れてデバイスルームに入ってきた。

「ナイスタイミングですよ、なのはさん。丁度今から機能説明をす

るところでしたから」

「そっか、間に合ってよかった」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～　第８話　『ファースト・アラート　２』

その後、フィニーノ陸士と高町隊長、リインフォース曹長の３人による簡単な新デバイスの機能説明が行われた。

俺達のデバイスには、何段階かに分けて出力リミッターがかけられているらしい。

で、各自が今の出力を扱いきれると判断されたら、順次解除していくという事だ。

そこから派生して、何だから知らんが隊長達にかけられてるリミッターの話になった。

隊長達にかけられたリミッターは俺達と同じくデバイスだけだと思っていたが、どうやら本人にもリミッターがかけられているらしい。

どのくらいなのかと聞いたら、八神部隊長は４ランク、高町隊長、ハラオウン隊長は２．５ランクダウンで、シグナム副隊長とヴィータ副隊長は２ランクダウンとのことだ。

それでこのリミッター、何でも聖王教会のお偉いさんや、ハラオ

ウン隊長のお兄さん等、ど偉い人じゃないと解除できずその申請自体も中々おりるものじゃないらしい。
リインフォース曹長が何か色々不満を言っていたが、それは当然じゃないでしょうか？

しかし、改めて聞くとやっぱ一部隊が保有していいレベルの戦力じゃないと思う。
八神部隊長、相当無理したんだろうなぁ……。何でそこまでして集めたのかってのは、やっぱり疑問だけど。
おっと、話が逸れた。

隊長の話では、午後の訓練をしながら微調整をするらしい。
ちっ、今日はこのまま訓練無しになる流れだと思ったが、見通しが甘かったか。

「あ、スバルの方はリボルバーナックルとのシンクロ設定も、上手くできてるからね」

「本当ですか！？」

「持ち運びが楽になるように、収納と瞬間装着の機能もつけといた」

「わあ、ありがとうございます！」

フィニーノ陸士の説明に、スバルが尻尾でも振りそうな勢いで喜ぶ。
まあ、リボルバーナックルってデカイうえに重いからなぁ。

「それとハヤト君」

「何でしょうか？」

「ハヤト君の方には、前に言ってたカートリッジ機能、付けておいたよ」

「マジっすか！？」

午後も訓練があると分かって下降気味だったテンションが、一気に天井を突き抜けた。

前々からカートリッジ機能が欲しいって言い続けた甲斐があった！

これで、俺も今まで以上に色々とやることが出来る。もうＡＭＦに弾が通らなくて涙することも、多分無くなる。

すげー嬉しい。

これまで、最初の訓練以外ＡＭＦで弾が通らずに援護とか足止め程度しか、対ガジェット訓練ではずっと足手まといっぽくて、軽く鬱になってきたとこだったんだ。

「それで、換わりにと言ったらなんだけど。ひとつ頼みがあるの」

一人で小躍りしていたら、遠慮がちにフィニーノ陸士が口を開く。

「何でしょう！？　今なら俺に出来ることなら何でもしますよ！

あ、ランチ奢りましょうか！？」

「違う違う、その子の名前を“ブレイブハート”にして欲しいんだ」

「へ？　いや構いませんけど、どうしてまた？」

≪　私がお願いしました　≫

「レイジングハートさんが？」

どういう事だろう？

名前は、まあ別に変な名前じゃないからいいけどさ。

≪　その機体は、私の兄弟機の様なものなんです　≫

「その子を造る時にね、同じポジションのなのはさんが使ってて、さらに同じ杖型でカートリッジ機能もあるから、レイジングハートさんのデータを使わせてもらったの。そしたら最終的に殆ど構造が同じになっちゃって……」

「それで、ついでだから名前も似た感じにしよう、と……ええ、全然いいですよ。よろしくな、ブレイブハート」

俺の呼びかけに、指輪が煌めいた。

「えー！　いいなハヤト、なのはさんとお揃いー！」

「ＨＡＨＡＨＡ、羨ましかろう。スバルよ、君はいい友人だったが、君の戦闘スタイルがいけないのだよ！！」

「ぶーぶー！」

「じゃあお前、今からセンターガードやるか？　それなら譲ってもいいが」

「……うぅぅ」

スバルが凹んだ。ざまぁ。

俺に文句つけるからそういう目にあうんだよ。

「……馬鹿が２人もいると疲れるわ」

「ま、まあまあティアさん」

「何だよ、ティアナだって羨ましいだろ？　隊長のレイジングハートさんとお揃いだぜ？」

「羨ましくないわよ、別に」

「つまらん奴だ」

「あの、あんまりお揃いお揃いって言わないで……恥ずかしいよ」

意外な台詞に驚いて隊長を見れば、頬を染めて困ったように笑ってました。
可愛すぎる。何でこの人これで恋人いないんだろう？

「すいません隊長。嬉しかったので、つい」

「う、うん。それはいいんだけどね……あ、ハヤト君。カートリッジ機能を使うのは初めてだよね？」

「はい。まあそうですね」

「じゃあ、最初のうちはあまり多用しないこと。慣れない人がいきなり使いすぎると、暴発しちゃうこともあるから」

「成程。了解です」

「ハヤトは調子に乗って暴発させそうだもんね」

「お前にだけは言われたくない。死んでも」

そんな馬鹿騒ぎをしていた瞬間だった。
突然、警報と共に赤いランプが明滅する。
デバイスルームのモニタを見れば、その全てに『ＡＬＥＲＴ』の文字。

「このアラートって――」

「一級警戒態勢！？」

「グリフィス君！」

高町隊長の呼びかけに、モニタの一つにロウラン陸尉が映る。

『はい。教会本部から出動要請です！』

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君？　こちらはやて』

『状況は？』

ロウラン陸尉の言葉に応えるように、その両隣のモニターに八神部隊長と、ハラオウン隊長が映った。

全員、顔が緊張している。まあ当然か。

俺達新人連中も、全員が八神部隊長の言葉に聞き入っている。

『教会の調査団が追っていたレリックらしき物が見つかった。場所は、エイリの山岳丘陵地区。目標は、山岳リニアレールで移動中』

『移動中って……』

「まさか！」

嫌な予感がする。それもかなり。

外れて欲しいと思いながら、八神隊長の言葉を待つ。

『そのまさかや、内部に侵入したガジェットのせいで、リニアレールのコントロールが奪われてる。
リニアレール車内のガジェットは、最低でも３０体。大型や飛行型の未確認のタイプが出てるかも知れへん』

当たっちゃったよオイ。
コントロールが奪われてるってことは、下手すりゃリニアレールが速度出しすぎて脱線するかもしれねぇ。
そんなとこ行くの？　行きたくねぇぇ……いやまあ、行くけどさ。

いきなりハードは初出動や、なのはちゃん、フェイトちゃん、いける？』

『私は、いつでも』

「私も！」

２人の返事に頷いてから、部隊長の視線が俺達に移る。

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ハヤト君。皆もええか？』

「「「「「はい！」」」」」

『よし。いいお返事や、シフトはＡ－３、グリフィス君は隊舎での指揮、リインは戦闘管制。なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮』

『わかった』

「うん」

『ほんなら、機動六課フォワード部隊……出動！』

『「「「「「「了解！」」」」」」』

こうして、俺達の長い一日が始まった。

第8話　『ファースト・アラート　2』（後書き）

どうも、ラモンです。
今回は短めだったので、早くｕｐすることができました。

さて、ようやくハヤト専用機『ブレイブハート』登場。
レイジングハートの兄弟機で、待機状態は指輪です。
その他の詳しい形状などは次話以降で書きますが、レイジングハートの兄弟機ってことで何となく予想できますかね？

今まで支給品で戦ってきたハヤトが、専用機貰って無双状態で大活躍！　……とはいきませんが、今までよりは多少活躍すると思います。
今回の話は、殆どブレイブハートの説明の為に書いたといっても過言ではないですね。
読んでるとつまらないかもしれませんが、必要な話でした。

それではまた、次の話で。

第9話　『ファースト・アラート　3』

「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習どおりで大丈夫だからね」

グランセニック陸曹が操縦するヘリに乗り込んで、現場へと向かう。

その中で、俺達の緊張を解そうとした高町隊長がそんな風に話しかけてきた。

「はい」

「頑張ります」

「出来る範囲で頑張ります」

まあ、俺達3人はそれ程緊張してる訳じゃない。

前にいた部隊でも何回か出撃したし、今回も相手が違うだけだろ。

問題はエリオとキャロだ。

エリオもキャロも、ちゃんとした出撃は本当にこれが初めてだろう。

俺らがフォローしてやんねぇとなぁ。

「エリオとキャロ、フリードも、しっかりですよ！」

「「は、はい！」」

リインフォース曹長、ガッツポーズは可愛いですけど、その励ましはこの真面目チビっ子ズには逆効果ですって。

「危ない時は、私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから。
おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう！」

「「「「「はい！」」」」」

そういう事なら安心だ。
隊長2人がフォローしてくれるなら、多少失敗しても問題ねぇだろ。
勿論、失敗する気はさらさら無いけどよ。

「きゅくる～」

「……ん？」

俺の前で、フリードが心配そうな顔で鳴いている。

「どうしたフリード」

「きゅく～」

「？」

フリードが動かした視線を追えば、そこにはエリオの隣で不安そうな顔をしているキャロ。

あー、やっぱ緊張してるか。

いくらフォロー入るって言っても、初出動なんだし緊張して当然だよな。

どれ、年長者らしく緊張をほぐしてやろうじゃないか。

俺は軽くティアナとスバルに目配せをしてから、キャロに近付いて声をかけた。

「キャロ、だいじょぶか～？」

「あ、はい。だ、大丈夫です」

口元引き攣らせて何言ってんだか。

こりゃかなり緊張してるみたいだ。

「そっか。あ、飴食う？」

「え？　あ、はい。いただきます」

「あー！　リインも欲しいですー！！」

「いいですよ。はいどうぞ」

「ありがとうですよ、ハヤト～！」

自分の身体と同じくらいの大きさの飴を持って、大喜びするリインフォース曹長。

……食えるんですか？

「ハヤトってさ、いつも飴持ち歩いてるの？」

「おうよ」

「おうよってアンタ、今から任務なのよ？」

「腹が減ってたら力が出ないだろ。それに、糖分が足りないと頭が回らないからな」

「アンタの脳味噌はいつでも回ってないじゃないの」

「なんだと！？　スバルよりは回ってる！　訂正して謝罪しろ！」

「酷っ！　酷いよハヤト～！！」

「うるっさい！！」

どうやら意思は伝わったみたいで、スバルとティアナが“いつも

のように”俺とじゃれる。
横目でちらっとキャロを見れば、さっきまで表情の固さが取れて、楽しそうに笑ってるのが見えた。
よしよし、どうやら緊張は解れてきたみたいだな。

「大体、ハヤトは訓練校じゃあたしよりも成績下だったじゃんか！」

「あぁん？　総合成績はな、科学と数学は俺の方が圧倒的に上だったと思ったが？」

「くっ……で、でも！　ティアよりは両方とも下だったよ！？」

「ぐぬっ……そ、それはお前もだろ！？」

「はいはい、低レベルな争いはそこまでにしなさい。聞いてるこっちが恥ずかしいわ」

「「おのれこの勝ち組め！」」

「ほらほら3人とも、そろそろ現場が近くなってきたから、そこまで」

「「「……はい」」」

高町隊長に怒られてしまった。
まあ、隊長もこっちの意図を読んでくれてるんだろう、顔が笑ってる。
キャロも声を出して笑ってるし。作戦成功だな。

ｓｉｄｅ：キャロ＝ル＝ルシエ

私は、自分の両手を見ながら昔を思い出していた。
自分の力は、人を傷つける、怖い力。
そう言われたことを思い出して、思わず両手を握る。

私の新しい居場所、そして新しく出来た仲間。
スバルさん、ティアさん、エリオ君、ハヤトさん……。

私は、この力で皆を守れるんだろうか？
もしかしたら、皆を傷つけちゃうんじゃないだろうか？
それが、凄く怖い。

さっき、ハヤトさん達がいつもと変わらずに仲良くじゃれていたのを見て、解けたはずの緊張がまた襲ってくる。
こんなんじゃ駄目だって思っても、身体が強張るのが止まらない。

『ガジェット反応、空から！？』

『現地航空観測隊、反応を多数確認！』

そんな時、通信でそんな声がヘリの中に響いた。

「空から？　もしかして、航空型のガジェット！？」

「多分ね」

「どうします？　なのはさん」

「私がフェイト隊長と出て、２人で空を抑える。ヴァイス君、いい？」

「うっす。なのはさん、お願いします！」

私達が混乱しているうちに、ヴァイスさんがメインハッチを開けて、なのはさんがそっちに向かっていく。

どうしよう、私、一人じゃ何も出来ないのに……なのはさんが居なくなるなんて……。

「じゃあ、ちょっと出てくるね。一応通信で現場の指揮はとるけど、現場の判断はティアナとハヤト君にお願いするね」

「はい」

「分かりました」

「それじゃ、皆も頑張ってズバッとやっつけちゃおう！」

「「「はい！」」」

「……はい！」

緊張のせいで返事が送れちゃった私を見て、なのはさんがちょっと微笑んだ。

「……大丈夫。離れていても、通信で繋がってる。一人じゃないから、ピンチの時は助け合える。

キャロの魔法は、皆を助けてあげられる、優しくて強い魔法なんだから」

「あ……」

その言葉で、胸の奥につかえていた、もやもやしたモノが消えていった。

私は、一人じゃない。

そう言ってくれたなのはさんの言葉が、凄く嬉しくて。

だから大丈夫。私は頑張れる！

「はい！」

「いい返事。それじゃあ、行ってくるね」

私の返事を聞いたなのはさんは、そう微笑んでから、メインハッチから身を躍らせた。

ｓｉｄｅ：キャロ＝ル＝ルシエ　了

えー……落ちながらセットアップですか隊長？
怖すぎるんですけど。
いや、それが普通なのか！？　いやいや……うーん……。

「任務は２つ、ガジェットを逃走させずに全機破壊すること。そして、レリックを安全に確保すること……ハヤト、聞いてますか？」

「へぇあ？　いやはい、聞いてましたよ？　ガジェットを全部ぶっ壊して、レリックってのを確保するんですよね？」

確か隊長が出撃前にそんな感じのこと言ってたよな？　間違ってないよな？

「むぅ、ちゃんと聞いてたですか。おしおきできると思ったですが、

残念です」

どうやら合っていたらしい。

つーかリインフォース曹長、人におしおき出来ないのを残念がらないで下さい。ドSですかアンタ。

「まあ、それは置いておいて続きです。

ライトニング分隊とスターズ分隊は、それぞれ前後に分かれて中央を目指します。レリックはここ、7両目の重要貨物室に置かれています」

そう言って、空中に浮かぶモニタに拡大した重要貨物室を映す。

ふむ、さすが重要貨物室。でかいな。

「スターズかライトニング、どちらか先に到達した方がレリックを確保するですよ」

「「「「「はい！」」」」」

リインフォース曹長は、そこで「それで……」と言葉を区切って、身体を白銀の光に包みながら華麗に一回転。バリアジャケット――じゃなくて、騎士甲冑姿へと変わった。

……ヒラヒラしてるのに甲冑っておかしいと思うんだ。

「私も現場に降りて管制をするですよ。それとハヤト！」

「は、はい！？」

あれ？　俺なんかした？　今はちゃんと話聞いてたよ？

「ハヤトは今回、ライトニングの2人と一緒に行動してくださいです。
そしてスターズの指揮はティアナが、ライトニングの指揮はハヤトが執るですよ」

「あ、そういう話ですか。了解です」

まあこういう場合、同じ部隊にセンターガード2人いても仕方ないしな。
指揮する経験も積ませておきたいって考えか。

「「ハヤトさん、よろしくお願いします！」」

「おう。任せとけ、バッチリ指揮してやるからな」

チビっ子ズとフリードの尊敬の視線が嬉しい。
守ってやらねぇとな。年長者としてはさ。

「あんまり気合入れすぎると失敗するわよ」

「お前こそ、猪なスバルを上手いこと指揮しろよ」

ティアナとそう言いあって、互いに笑って軽くハイタッチする。

こいつの指揮は、前の部隊で部隊長に褒められる位だったし、特に問題も無いだろ。

そうこうしている間に、どうやら無事に降下ポイントに到着したようで、走っているリニアレールが開けっ放しのメインハッチから見える。

「よーし新人共、隊長さん達が空を抑えてくれてるお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか！？」

「「「「「はい！」」」」」

グランセニック陸曹の声にそう返事をして、先に降下するスバルとティアナがメインハッチへと近付く。

……あれ？　お前らなんでセットアップしてないの？

「スターズ０３、スバル＝ナカジマ」

「スターズ０４、ティアナ＝ランスター」

「「行きます！」」

ってちょ、おま！！
なに高町隊長のマネして飛び降りながらセットアップしようとしてんの！？
まだちゃんと動くかどうかも分からんのに……って行っちまったよあああもう！

俺はメインハッチから身を乗り出して、２人がちゃんとセットアップできるかどうかを見守る。
２人は降下しながらも、ちゃんとセットアップしてリニアレールへと着地した。
ふぅ……ビックリさせるなよオイ。

「次！　ライトニングとハヤト！　気ぃつけてな！！」
「ってアレ！？　もう俺らの番！？」

俺まだセットアップしてないんだけど！
飛び降りながらやれってか！？

「ハヤトさん、行きましょう！」

「エリオ、お前も何でセットアップしてないの！？　馬鹿なの！？」
「え？　いや、降下しながらすればいいかなって……」
「何なのお前ら！？　全員自殺願望でもあんの？　安全にいこうよ

安全にさぁ！！」

「いいからさっさと行かんかい！！」

常識人の俺の叫びは、グランセニック陸曹の声にかき消された。
ちくしょう、言いたいことも言えない世の中なんて嫌いだ。

「……ん？」

「……」

キャロが随分と静かだと思ったら、なんか下を見て眉を寄せている。
よかった。お前はマトモな感性を持っていてくれたんだな……お兄さんは嬉しいよ。
でも、もう時間がないから飛び降りするしかないんだ。

「キャロ」

「え、あ、はい！？」

「俺さ、高いトコ駄目だから一緒に降りてくんね？　エリオも」

そう言って苦笑する。
すると、キャロは小さく笑って頷き、俺の右手を握る。左手はエ

リオが握った。

「さて、それじゃあ行きますか」

「「はい！」」

「スターズ０５、ハヤト＝ロックウェル」

「ライトニング０３、エリオ＝モンディアル」

「ライトニング０４、キャロ＝ル＝ルシエとフリードリヒ」

「きゅく～」

「「「行きます！」」」

自分を勇気付けるように力強く宣言して、俺達３人は空中に身を躍らせた。

……やっぱしなきゃよかったと思ったのは内緒だ。

「ブレイブハート！」

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「「「セットアップ！」」」

《Ｓｔａｎｄ ｂｙ ｒｅａｄｙ. ｓｅｔ ｕｐ.》

降下しながら、俺達はバリアジャケットを展開する。
それぞれの言葉にデバイスが答え、それぞれの魔力光が各自の身体を包んだ。
光が消えれば、そこにはバリアジャケット姿の俺達３人。
そのまま魔力で降下の勢いを殺し、リニアレールの上に着地する。

「……怖かったぁ」

あの頬を撫でる風と、猛スピードで近付いてくる景色は怖すぎる、二度とやりたくない。

「……ん？」

そこで、自分のバリアジャケットが前のとちょっと違うことに気付く。
前のはデバイス支給品ってのもあって、ジャケットも一般的な武装局員が着ているのと同じだった。まあ、自分でちょっと改造したりはしたけど。
しかし今俺が着ているのは、デザインこそ武装局員のそれと同じだが、色が高町隊長のジャケットと同じ白が基調でそこに青のライ

ンが入っている。
上に羽織っている服は白地に青のラインが入り、所々隊長のそれと似通っている。前は胸に踊っていた『天上天下唯我独尊』の文字は、今度は背中に場所を移してその存在を主張している。

そして俺のデバイス『ブレイブハート』は、高町隊長のレイジングハートさんと全く同じデザインだった。
兄弟機だからって似すぎだろ。
違うのはレイジングハートさんの配色が金と桃色が中心なのに対し、俺のブレイブハートは銀と赤が中心なところか。
フィニーノ陸士、これってもうレイジングハート2号じゃないっすか？

「デザインと性能は、各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ。ちょっと、癖はありますが、高性能です」

「ハヤトさんのブレイブハート、本当にレイジングハートさんにそっくりですね」

「うん。瓜二つ」

「お揃い過ぎる。今度ちょっとデザインを変えてもらおう」

さすがにこれは恥ずかしすぎる。
ペアルックだと思われても仕方ないレベルだぞ……っと。

「スバル達の方は、もう始まったみたいだな」

前方から聞こえてきた爆発音と衝撃に、戦いが始まったのを知覚する。
さて、気分を切り替えていこうか！

「いくぞ、エリオ、キャロ、フリード！」

「「はい！！」」

俺は2人と1匹に声をかけ、そのまま天井を魔力弾で撃ち抜いて中に入る。

「俺は中から進む、2人とフリードは天井からついてこい！　いざとなったら屋根を破って中に入れ、いいな！」

「「はい！」」

指示を飛ばしながら先に進む。
目の前の扉を蹴り開ければ、そこには3機のガジェット。最早訓練でお馴染みになった顔だ。

「どれ、お前の力を見せて貰おうか、ブレイブハート！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｖａｒｉａｂｌｅ　Ｂａｒｒｅｔ．》

一瞬でカートリッジもロードせずに多重弾核弾が３つ作り出される。
はっ、すげぇな最新型！
「シュート！」
３つの真紅の弾丸が、ＡＭＦを貫いてガジェットを破壊する。
さすがはレイジングハートさんの兄弟機、性能が半端ねぇ。
「お前すげぇな。俺一人じゃ多重弾核なんて出来ねえってのに」
《　マスターは元々出来る技量がおありでした。前のデバイスの処理能力が悪かったのかと　》
「お世辞も言えるとはね、さすがはレイジングハートさんの姉妹機だな」
《　はい。ですが姉とのシンクロ機能はありませんので、厳密には姉妹機とは言えないかと　》
「姉！？」
何で姉呼び！？

《　マイスターが、そう設定されました　》

フィニーノ陸士いいいいいっ！！！
アンタ人のデバイスに何してくれてんだあっ！？

「……まあいい、今は先に進むぞ。ブレイブハート」

《　了解です。マスターハヤト　》

深い溜息を吐いてから、気を取り直して走り出す。
軽くエリアサーチした限りじゃ、幸いなことに俺達の向かうルートにはそれ程ガジェットが居ないっぽい。
なら、面倒なガジェットはスバル達に任せて、こっちはさっさと目標を回収させてもらうか。

第9話　『ファースト・アラート　3』（後書き）

どうも、ラモンです。
3話目にしてようやく戦闘開始。
そしてハヤトのバリアジャケットとブレイブハート公開。

デザインは武装局員のとほぼ一緒で、色だけ違う感じに。
デザインが分からない人は、A's あたりを見て、クロノ君が着てるので確認してください。
そして、誰もが忘れていた『天上天下唯我独尊』。
最初に書いた時は作者も入れるの忘れてましたが、数少ないハヤトの個性なので慌てて追加（笑）

さて、次回でファースト・アラートは終了です。
もう殆ど書きあがってるので、間を空けないで投稿したいですね。

それでは、また次の話で。

第１０話　『ファースト・アラート　４』

進行を妨げるガジェットを駆逐しながら進み、目標の第７車両へと近付いていく。
途中で屋根の上を走るエリオ達を合流し、第８車両の屋根を通過しようとした瞬間。

《　危険です、下がって　》

「っ！？　エリオ、キャロ、下がれ！！」

「えっ？」

「きゃっ！？」

ブレイブハートの警告に、２人の襟を引っ張って無理矢理後ろへと飛ぶ。
すると、直前まで俺達がいた場所を、ガジェットの機械の豪腕が屋根を吹き飛ばして通過した。
あっぶねぇ……直撃してたらリニアレールから落ちて、崖下へダイブするとこだったな。

「一体どんな奴が……ってデカっ！？」

突き破られた屋根から見えたのは、第７車両への扉を護るように

鎮座した、球型の大型ガジェット。
でか過ぎだろ、俺よりも上背あるぞ！？

「新型かよ、厄介な！」

「でも、やるしかないですよ！」

「わーってる！　エリオ、キャロ、殴られるなよ！？」

「「はい！」」

羽を広げたフリードよりも更に太いガジェットのアームを見ながら、２人に注意する。
あんなので殴られたら、俺ならともかく子供２人は一発ＫＯされちまう。

「くるぞっ！！」

「「！」」

高速で迫る２本のアームを、全員でバラバラに飛んで避ける。
なんだアイツ、あんなデカイ癖にスピードあるとか、ゲームだったらクソゲー認定だぞ畜生！

「キャロ、フリードでブラストフレア！　お前は威力強化準備！」

「はい！　フリード、ブラストフレア！」

「きゅく～～～っ！！！」

フリードの口元にできた火の玉を、俺の魔力で包む。
即席の多重弾核だ、通ればそれなりで効くだろ。

「ファイア！」

「きゅっ！！」

吐き出された炎の弾丸が、ガジェットに迫る！
これで決まれば……っておいおいおいおい！！！

「う、打ち返した！？」

「何じゃそりゃあっ！！」

あろうことか、大型ガジェットはそのアームでフリードの火の玉を殴り飛ばしやがった。
何その硬さ！？　反則じゃねぇの！？

「くっそ、エリオ！　キャロに威力強化して貰ってストラーダで突

っ込め！」

「分かりました！　うおりゃあああああっ！！！」

咆哮と共に、ストラーダに雷を纏わせてエリオが切り掛かる。
威力強化さえしちまえば、あいつのストラーダは大概のモノは切れるから、これなら何とか……！

「でやあっ！！」

ガキィンッ！！

「って嘘ぉぉっ！？」

「くっ、硬っ……！！」

ある意味頼みの綱だったエリオの刃は、ＡＭＦも発生してないガジェットの装甲に止められた。
いやいや、無いから！　硬すぎだから！！
……ん？　待て、ＡＭＦが発生してない……って事は！？

「エリオ、離れろ！！」

「え？」

エリオに声を飛ばしたが、遅い。
ガジェットの３つあるオレンジのカメラが光を放つ。

「くそっ、多重弾核！！」

《 Ｙｅｓ． 》

援護する為にスフィアを展開しようとするが……ＡＭＦが発生した瞬間にその全てが掻き消える。

「ええっ！？」

驚いたキャロの声に振り向けば、威力強化していたキャロの魔方陣も消えている。
嘘だろ！？　あいつからここまで１０ｍ以上離れてんだぞ！？

「……そうか、本体がデカイんだから、その分ＡＭＦの出力が増えてもおかしくないってか」

ちっ、何で気付かなかった俺！
気付いてたら、もう少し対策の立てようも……いや、それを嘆くのは後だ。

今はまずエリオの援護を――

「くううううっ！！」

「エリオっ！？」

苦しげなエリオの声に、慌てて破れた天井から中を窺う。
そこにはストラーダでガジェットのアームを受け止めているエリオ。

「大丈夫か、エリオ！？」

「は、はい！　任せてください！！」

「……よし、じゃあちょっとだけ耐えててくれ！　対策を考えてすぐに援護する！！」

「分かりました！」

情けない話だが、ここで俺が行っても何にもならん。
なら、一旦エリオに任せて俺は打開策を考えるべきだろう。
エリオに指示を飛ばしてから、ちょっと距離をとって思考に専念する。

（どうする。ＡＭＦがある限り魔力行使は難しい……かといって、

エリオ一人であのデカブツを抑えるのは無理。
……ん？　そういやＡＭＦには有効範囲ってあったよな？　ならそこから抜ければ……いやいや、アイツのＡＭＦ有効範囲から抜けてて、かつアイツを狙える場所なんて空中しか……空中？　そうか！）

「キャロ！」

「ふぇっ！？　は、はい！」

「竜召喚だ！　空からアイツを狙うぞ！！」

「はい！　……ってえええええっ！？」

キャロ、何故そんな素っ頓狂な声を出す？

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第１０話　『ファースト・アラート　４』

１０ｍで駄目なら２０ｍ離れるし、それでも駄目ならもっと離れる。
こちとら射撃型、遠距離攻撃はお手のモンだ。

「という訳でキャロ。さっさと竜召喚しておくれ」

「ど、どういう訳ですか！？」

「かくかくしかじか」

「分かりません！」

よしよし、ツッコミのキレが良くなってきたな。
八神部隊長並のツッコミストになれる日も近いぞ。だが、それはツッコミ談義はまた今度。

「ＡＭＦの効果範囲から抜けて、かつアイツを狙うには上に行くしかねぇ。でも俺は飛行魔法使えないし、何より今この場所じゃ使えないだろ？　だから竜召喚だ」

「でも私、力の制御が出来なくて……」

「高町隊長から聞いてる。でもなキャロ、今エリオを助けつつアイツを倒すには、竜召喚して空中から攻撃するのがベストの選択肢だ。俺はセンターガード、ベストの選択肢があるなら、多少危険でもそれを選ぶ」

「でも……でも！」

「平気だよ、キャロ」

「え？」

怯えた顔をするキャロに、安心させるように笑いかける。

「お前なら出来る。他の誰が信じなくても、キャロ自身が信じられなくても、俺が信じてる。
高町隊長も大丈夫だって言ってたろ？　それに、失敗したって誰も怒りゃしねぇよ」

多分怒られるのは俺だからな。指示したのも、最初に戦術ミスったのも俺だし。
まあそんな事言ったら、キャロのことだし余計に緊張するだろうから、言わないけどな。

「……」

「踏ん切りつかないならアレだ、リーダー命令。さっさと竜召喚なさい」

「……それ、横暴だと思います」

お、笑った。どうやら踏ん切りついたみたいだな。

「できるな？」

「はい！　……あっ！？」

「ん？　っておいおい！！」

こっちで青春ドラマやってたら、エリオがアームに捕まって放り投げられそうになってた。あー、ありゃ完璧に気を失ってるな。

……あ、投げられた。

おー、さすがに軽いだけあってよく飛ぶなぁ……。しかし、気絶してもストラーダをしっかり握ってるあたり、ちゃんとしてるねぇ。

「じゃなくて！」

「ど、ど、どうしましょう！？」

「どうもこうも、追っかけるしかねぇだろ！！」

「は、はい！」

気を失ってるみたいだし、あのままじゃエリオの奴、確実にあの世直行コースだしな！

まあ、キャロが竜召喚すればきっと平気！　駄目だった時でも、最悪俺の体を盾にしてやれば2人は無事だろ！

「行くぞキャロ！」

「はい！」

途中でバラバラにならないように手を繋いでエリオの後を追いかけてリニアレールから飛び降りる。
1日2回の飛び降りとか、新記録ですよ姉ちゃん！
俺ってこんな無茶するキャラじゃないんだけどなぁ……スバル達のがうつったか？
とかいってる間に気を失ってるエリオ確保！　キャロと手を繋いでない左手の方で小脇に抱える。

「キャロ！」

右手の方を見れば、そこには力強く頷くキャロ。
信じてるからな、頼むぜ！

ｓｉｄｅ：キャロ＝ル＝ルシエ

護りたい。
私を信じてくれたハヤトさんを、優しくしてくれたエリオ君を。
私の居場所を、私の力で、護りたい！

「キャロ！」

ハヤトさんを見て、頷く。
きっとできる。ハヤトさんが信じてくれるならって、そう思える。

「きゅくる～」

「ごめんね、フリード。今まで不自由な思いをさせてて」

今度は、ちゃんと制御するから。
皆を護る為に、力を貸してね。

「いくよ……竜魂召喚！」

ケリュケイオンが光って、魔方陣が展開される。
ちゃんとできる。
根拠は無いけど、そう確信できる何かがあった。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ……竜魂召喚！」

私の声に答えるように、フリードの咆哮が響く。
魔力光が消えた時、そこには本来の姿になったフリードがいた。

「できた……！」

ちゃんとフリードが制御下にあるのが分かる。
できたんだ、私！

「ハヤトさん！　私……私、できました！」

ｓｉｄｅ：キャロ＝ル＝ルシエ　了

「ハヤトさん！　私……私、できました！」

嬉しそうにはしゃぐキャロに頷いてから、俺は自分の乗っているフリードに視線を送る。
まさかあのチビ竜の本来の姿が、こんなご立派な竜だったとは……。
これからは「チビ助」ってからかうことも出来ないなぁ。

「なんて、アホな考えてる場合じゃないな。エリオ、起きたよな？」

「はい」

「よし。それじゃあ反撃と洒落込むぜ！！」

「「了解です！」」

キャロがフリードを操って、大型ガジェットのいた車両に追いつく。

ガジェットは車両から出て屋根の上に鎮座していた。

野郎、ちょっと有利だからって調子こいてやがんな！？　今から目にモノ見せてやっからなこん畜生！

「フリード、砲撃準備！」

『グルルル！！』

「あ、あれ？　何でハヤトさんの言う事聞くの、フリード！？」

「人徳です」

「そ、そうなんですか……」

「ブレイブハート！　砲撃は何が登録されてる！？」

悲しいことに、俺って固有の砲撃魔法は無いんだよね。

前使ってたのもデバイスに元々登録されてたのを使ってただけだし。

≪　姉に登録されている魔法は、私にも登録されています。もちろん、使えるかどうかはマスターハヤト次第ですが　≫

……初耳ですよ。いや、今日貰ったばっかだから当然だけど。

「ってことは、もしかしてディバインバスターいける？」

≪　マスターハヤトの魔力量では1発だけですが、撃つことは可能です　≫

「上等！　フリードと同時に撃って、あのデカブツ吹っ飛ばすぞ！！」

≪　了解しました、マスターハヤト　≫

「キャロ、聞いてたよな？」

「はい！　フリード！！」

「ブレイブハート、砲撃準備！」

≪　Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　≫

フリードの頭の上に乗って、ブレイブハートを構える。
カートリッジが2発排出され、先端に赤い魔力が集まり、塊を作り出す。
フリードの口元には炎が集まり、巨大な炎の塊となった。

「ディバイン……」

「ブラストレイ……」

「バスター！！」「ファイア！！」

赤い魔力の砲撃と、炎の奔流が一つとなってガジェットを襲う。

うおぉ……ディバインバスター辛い……一気に魔力空になったぞ！？　高町隊長は毎回こんなのポンポン撃ってんのか。マジで化け物じゃね？

そして炎と魔力が通り過ぎた場所には――

「おいおいマジかよ」

「そんな……」

２つのアームとケーブルを失ってはいるが、本体には傷一つ無くピンピンしているデカブツがいた。

硬すぎ。何お前、そこは空気読んで「や～ら～れ～た～」って言うとこだろうが！

「あの装甲形状は砲撃じゃ抜き辛いですね。僕とストラーダがやります」

「……そうだな、悪い。頼むわエリオ、キャロはブーストな。援護は俺がやる」

「「はい！」」

魔力切れで崩れそうになる膝を奮い立たせて、援護の準備をする。
大概はフリードが避けてくれるだろうが、それでも準備しとくのとしないのとじゃ違うよな。

「我が請うは青銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を」

《Ｅｎｃｈａｎｔｅｄ　Ｆｉｅｌｄ　Ｉｎｖａｌｉｄ.》

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

《Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ.　Ｓｔｒｉｋｅ　Ｐｏｗｅｒ.》

キャロの両手に、桃色の光が宿る。
それを確認しながら、エリオと場所を交代した。

「突っ込む時は心配すんな、何が来ても全部撃ち落してやるから」

「はい。行きます、キャロ、ハヤトさん！」

「よっしゃ、行ってこい！！」

走り出すエリオの背中に、精一杯の声援を送る。

「てやあああああっっ！！」

「ツインブースト、スラッシャードストライク！！！」

エリオが飛び降り、キャロの魔力がそれを追いかけてストラーダの刃に吸い込まれる。

「っ！？」

「ブレイブハート、シュート！」

《Ｖａｒｉａｂｌｅ Ｂａｒｒｅｔ．》

途中でエリオ目掛けて撃ち出されたレーザーは、全て俺のなけなしの魔力弾が撃ち落す。

魔力が空のところから搾りだすのってかなりキツイ。

そしてエリオは無事リニアレールに着地し、カートリッジロードしてガジェットと対峙する。

「一閃必中！」

決め台詞と共にガジェットに突進し、その中心にストラーダを突き立てた。

「でりゃあああああっっっっ！！！！！」

そのまま刃を上へと振りぬき、ガジェットを両断。
振りぬいた格好のまま爆発を背負う。

「やった！　やりましたよハヤトさん！」

「ああ、やったな。ブツの方はスバル達が回収したみたいだし、これで終わりか？
じゃあ後はさっさと隊舎に戻って寝るだけ、と」

フリードの上で思い切り背伸びをして息を吐く。
やーれやれ、とりあえず終わったな。いやぁ疲れた。
キャロも終わったと安心したのか、後ろで小さく息を吐いて、エリオに手を振ったりしてる。
いいねえ、青春ですなぁ。

「キャロ、エリオ拾って先に帰ろうぜ。俺らの仕事は終わりだろうからさ」

そう言いながら振り返ると、キャロではなく、満面の笑みを浮か

べた八神部隊長（の映ったモニタ）と目が合った。
この笑顔は危険だ、悪いこと考えてる笑顔だ。
八神部隊長とはそんなに付き合いないけど、分かる。分かってしまう。

『帰る気マンマンのとこ悪いんやけど、ハヤト君とライトニングの2人はそのまま現場待機。
現地の部隊の人らに引継ぎとかお願いな？』

「……八神部隊長、俺のこと嫌いですか？」

『大好きやよ？　せやから仕事の引継ぎっちゅー面倒……げふんげふん、重要な仕事を任せるんやないの』

「面倒って言ったでしょ！？　今絶対面倒って言ったでしょ！？」

『言うてへんよ。変な疑りするのはあかんで？』

「畜生！　裏切ったな！　僕の気持ちを裏切ったんだ！」

『何で君がそれ知っとるん！？』

最後が締まらなかったが、俺達の初出動は、こうして無事に終了した。
余談として、この後疲れて眠ってしまったライトニング2人の代わりに、仕事の引継ぎとその際に起きた苦情の処理。
そして初出動のレポートなど、事後処理を全て俺が一人で終わらせたことをここに記す。

……八神部隊長、許すまじ。

第１０話　『ファースト・アラート　４』（後書き）

どうも、ラモンです。

ハヤト　は　ディバインバスター（真）　をおぼえた！
という訳で、キャロ覚醒イベントとファースト・アラート編終了です。

最初はハヤト固有の砲撃魔法を使わせるつもりだったんですが、一般局員レベルが固有技もってるってのは不自然かなと思ったので、兄弟機設定を使ってディバインバスターを使わせました。

一般局員で固有技もちなんて、そうそういないですよねきっと。
スバルやティアナ達は例外だと思ってるので、ハヤトは固有技無しでした。
これから先、覚えることがあるかもしれません。

次はオリジナル話を挟んで、ドラマＣＤ編に行きます。
おんせん！　おんせん！
それでは、また次の話で。

※感想、叱咤激励、誤字指摘などお待ちしてます。

第１１話　『休日　２』

初出動があった次の日。
本来なら訓練の予定だったのだが、デバイスの微調整やメンテナンスがあるらしく、急遽休日となった。
普通、こういったいきなりの休日はやる事が無い人間が多く、その大半が無意味に過ごすのだろう。

しかし。
だがしかし。
ここにその休日を満喫する奴らが５人。

「装備どうする？」

「あたしはナックルで行くよ」

「じゃあ、あたしはガンランスかしらね」

「僕はランスで」

「私は笛で行こうかな」

「きゅくる～」

俺達フォワードの新人メンバー＋フリードである。
全員で俺とエリオの部屋に集まり、円陣になってＢＳＰを起動している。

やっているのは、最近巷で話題のソフト『モンスターハンティング２ｎｄ　Ｆ』。

辺境保護部隊の隊員となって、様々な武器を使って多種多様なモンスター達を狩るというゲームだ。

狩ったモンスターから材料を剥ぎ取って、新しい装備を造ることができるというのが人気の秘訣らしい。

「じゃあ俺はデバイスで行くか。あーでも、モーションでかいしスタミナもなぁ……」

「これだけ前衛がいれば囮になるし、肉を食べてる暇くらいあるでしょ。デバイスにしなさいよ」

「そうか？　じゃあお言葉に甘えて」

ちなみに辺境保護部隊の隊員という設定なので、使える武器にはデバイスもある。

俺のメイン武器でもあり、攻撃力と射程に優れるのだが、スタミナ消費が他の武器に比べて激しく、攻撃モーションがやたらと大袈裟で、攻撃まで時間がかかるという難点もある。

１人プレイ用ではなく、大勢でやる時の援護役がよく使う武器という印象が強い。

「しかし、ランスとかがメインで使われてる世界で、デバイスが普通にあるってどうよ？」

「いいんじゃないの？　辺境保護部隊の隊員って設定なんだし」

「……それもそうか。でも、モンスターから剥ぎ取った素材で造られたデバイスとか、現実なら使いたくねぇな」

「あたしも同感～。なんか呪われてそうだよね」

「私は平気ですけど……」

ああ、そういやキャロは元々辺境保護部隊だっけか。
こういうのは日常茶飯事だったのか？

「いつもって訳じゃないですけど、似たようなことは何回か」

「意外と逞しいキャロであった」

「た、逞しくないです！」

逞しいと言ったら「女の子に逞しいなんて言っちゃだめです！」と怒られた。
どうやら気にしていたらしい。
ちなみに、キャロ以外のＢＳＰは全部自前だ。エリオも前は俺が貸したのを使っていたが、最近自分で最新型を買ったらしい。ちょっと羨ましい。
キャロは余り自分でやるつもりは無いらしいので、前にエリオに貸していた俺の予備ＢＳＰをレンタルしている。

「あ、出たわよ。ハヤト、閃光魔法お願い」

「じゃあ、あたしはマーカー用意しておくね」

「オーケー。あ、キャロ、スタミナ消費軽減の曲吹いておいてくれるか？」

「はい、わかりました」

抜群のチームワークを発揮する俺達。
下手すれば模擬戦の時よりもチームワークいいんじゃないか？

「エリオ、そっち行ったから足止めよろしくー」

「わかりました！」

とまあ、こんな感じで突然の休日を満喫する俺達であった……あ、やべスタミナ切れた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第１１話　『休日　２』

１２時になったので、昼飯を食いに全員で食堂に移動する。
途中で同じく昼食を摂りに来ていた高町隊長とハラオウン隊長も合流し、７人という大人数になった。
エリオとキャロは、久しぶりにハラオウン隊長と一緒に昼食が食べれるってことで、凄く嬉しそうに笑っている。
そしてスバルよ、憧れの高町隊長と一緒のお昼が嬉しいのは分かるが、そんなにはしゃぐな。５人の中でお前が一番はしゃいでるってどういうことだよ。

そして、食堂に着いたところで２手に別れる。
スバルとティアナ、キャロとハラオウン隊長が席を取って、俺、エリオ、高町隊長の３人が食事を取りに行く。

「おばちゃーん、パスタ激盛りで」

「あいよ！　いつも沢山食べるね！」

食堂のおばちゃんに注文して、用意が出来るまで暫し待機。
量が量だからちょっと時間かかるんだよなぁ。

「激盛り？」

「ああ、うちはスバルとエリオが食べるもんで、大盛り程度じゃ足らないんスよ」

同じく注文をし終わって、品物が来るのを待っている高町隊長が不思議そうに聞いてきたので解説。
パスタだと、大体大盛りが3人前、特盛りで5人前。激盛りは何と9人前という凄い量だ。

「そ、そんなに食べきれるの？」

「ええまあ。スバルとエリオが6人前ぐらい食べますんで」

「そんなに！？」

高町隊長が驚いた後、小声で「それであの体型なんて……」と呟いていたのは聞こえないフリ。
まあ実際、俺もあの2人のどこにあれだけの量が入るのかってのは疑問で仕方ないけど。
そうこうしているうちに俺の頼んだ激盛りパスタと、高町隊長の頼んだAランチ2つが出来上がる。

「……本当に、凄い量だね」

「ええ。食べてるとこ見たら、食欲無くしますよ？」

主に胸が一杯になるって意味で。
そうなんだ、と頬を引き攣らせる隊長に苦笑を返してから、やたらと重いパスタをエリオと協力して運んでいく。

ハラオウン隊長はエリオで慣れているのか、激盛りパスタを見ても驚かなかった。六課フォワード陣で驚いたのは、今のところ高町隊長とキャロだけである。

「じゃあ、いただきます」

「「「「「「「いただきます！」」」」」」」

高町隊長の音頭で全員が食べ始める。

この「いただきます」って最初は変だと思っていたけど、慣れると案外悪くない。

「そういえば、５人は午前中何してたの？」

「ハヤトさんの部屋で、皆でゲームをしてました」

「そうなんだ」

「楽しかった？　エリオ、キャロ」

「「はい！」」

「そっか。よかったね」

ハラオウン隊長とエリオ＆キャロは仲いいなぁ。

２人が隊長の保護児童ってのは前に聞いたけど、見た限りじゃ本

当の姉弟とか姉妹って感じだ。

「ハヤト君ってゲーム好きだよね。昔からなの？」

「んー……まあ、ガキの頃から好きではありましたね」

「訓練校の時なんて、新作買いに行く為だけに授業サボったりしてたもんね」

「そ、そんなことしたの！？」

「ええ。まあ、あの時は俺も若かったですからね……」

「何訳わかんないこと言ってんのよ」

カッコつけて黄昏てみたら、ティアナに辛辣なツッコミを受けた。
お前は俺にカッコつけることさえさせてくれんのか。

「何だよ、そん時は一緒に授業サボった癖に」

「うぐ……」

「ティアナも？　意外だなぁ」

「ち、違うんですのはさん！　ハヤト！　あんた余計なこと言ってんじゃないわよ！！」

「うおぉぉっ!?　ぱ、パスタが！　パスタが目にいいいいっっ！！！」

「あわわわ、ハヤト、大丈夫!?」

「目が！　目がああああああっっ！！！」

久しぶりにティアナから酷い仕打ちを受ける俺であった、まる。
食べ物を粗末にする国は滅ぶぜ……！

「ごちそうさまでしたっと」

自分用に取り分けたパスタを全て胃に納め、フォークを置いて一言。
隣ではスバルが猛烈な勢いでパスタを食べている。お前もう少し女の子らしくしようぜ、いやマジで。

「ハヤト君て、意外と小食なんだね」

「そうすか？　結構食べる方だと思うんですけど……スバルとエリオのせいでそう見えるだけじゃ？」

「ああ……そうかも」

激盛りの割り振りは、スバルとエリオが合わせて6人前、俺が1.5人前、ティアナが1人前でキャロが0.5人前だ。
普通に見れば俺も結構食べる方なのだが、なにせ1人で3人分食う奴らが2人も居ればなぁ……。

「あれで太らないってのが不思議よね……」

「そうだね」

「謎です」

「羨ましい……」

笑顔で黙々とパスタを口に運んでいくスバルを見ながら、ちょっと恨みのこもった視線を向ける女性陣。おかしい、何かこの机の周辺だけ、気温が下がった気がする。いや、絶対に下がった。
俺は恐ろしくて視線を背けることしかできなかった。
気付いてないスバルとエリオが羨ましい。誰か俺をこの殺伐とした空間から助け出してくれ。

「おー、なんや皆お揃いやなぁ」

「八神部隊長愛してる！　結婚して！！」

「私より高給取りになってから出直して来るんやな～」

救世主に求婚したらコンマ数秒で断られた。

「どないしたんハヤト君、そんな疲れた顔して」

「女性の嫉妬というモノの怖さに戦慄しておりました」

「？」

「実はかくかくしかじかで」

「まるまるうまうまっちゅー訳か。確かにスバルはよー食べるのに、あの体型は羨ましいわぁ」

通じた。部隊長すげぇ。

「まあ、スバルとエリオは前衛で動くんやから、ある意味当然かも知れんけどな」

「だとしてもあの量は普通じゃないっすよ？　経費とか大丈夫なんですか？」

「……まあ」

「大丈夫そうじゃねぇ！？　ちょ、スバルにエリオ、お前ら自重しろ！」

「「？」」

悲痛な顔で俯く部隊長に、さすがに危機感を覚える。
隊員の大食いが原因で部隊の資金が無くなるとか、洒落にならんから！！

「あははは、大丈夫やってハヤト君。さすがにその位でどうにかなる程、機動六課は貧乏とちゃうで？」

「……マジですか？　この２人、アホみたいに食べますけど」

「大丈夫大丈夫。ちょっと私の晩御飯が質素になるだけやから」

「大丈夫じゃねぇ！　大丈夫じゃねぇよそれ！！」

「気にせんで平気や、ハヤト君。貧乏には慣れてるからな……」

「泣かないでください部隊長！　今度なんか奢りますから！！　高級料理店でも何でも！！」

「約束やで？」

「嘘泣きだった！？」

やっぱ部隊長と漫才するのは楽しいわ。
なんて言うか、阿吽の呼吸っつーの？　こう言ったらどう返してくるかがお互いに分かってて、すげぇボケ甲斐もツッコミ甲斐もあ

る。

「……2人とも、相変わらずだね」

「仲、いいんだ」

「「あったぼーよ！」」

高町隊長とハラオウン隊長に返す言葉が見事にシンクロ。

部隊長、マジで結婚してください。多分幸せにします。

「多分じゃちょっとなぁ。あと、私と結婚したいならヴィータ達を倒してからやな」

「ちくしょう、部隊長なんて一生独身で居ればいいんだ！！」

「ハヤト君の給料３０％カット……っと」

「超ごめんなさい！」

権力者に逆らったら駄目だよね。

全員が昼食を食べ終わり、隊長達は仕事が残ってるとのことでそ

のまま食堂で別れた。
俺達5人は隊舎へと戻る通路を歩きながら、午後の予定について話し合う。

「さて、午後はどうする？」

「うーん……特にコレってのが無いのよね。外出許可貰っても、行きたい場所も無いし」

「あ、ティア。だったら付き合ってくれない？　新しいアイスクリーム屋さんが出来たって、雑誌に書いてあってさ～」

「アンタは本当、アイス好きよね……まあ、それもいいかしらね」

ティアナとスバルは街にお出かけ、と。

「エリオとキャロはどうする？」

「2人とも、良かったらあたし達と一緒に行かない？」

「え、いいんですか？」

「勿論！」

「じゃあ、私は一緒に行こうかな……」

「あ、それなら僕も」

「なんと」

エリオとキャロもお出かけ組に加わってしまった。
これでは、俺は一人きりでゲームをするハメになるじゃないか。
……あ、そういや新作のゲーム出てるって、前にネットで見たな。

「じゃあ、俺も一緒に行くわ」

「わ、珍しい。ハヤトが自分からついてくるなんて」

「新しいゲームでも出たんでしょ。それ以外でコイツが進んで外出するなんてありえないわよ」

何故分かった。お前エスパーかティアナ。
戦慄と共にティアナを見つめていると、「普段のアンタを見てれば分かるわよ」と鼻で笑われた。
その通り過ぎて、思わず「確かに」って納得しちまったよ。

「あはは。それじゃ、一旦部屋に戻って準備してから、隊舎の入り口に集合でいいかな？　ハヤト」

「ああ、それでいいぞ。財布とか取って来なきゃだし、さすがに制服で出かけるのもなぁ」

そう。今の今まで気にしなかったが、俺達は制服なのだ。
このまま街に行くのは、さすがに年頃の男女としてどうかと思う。

「それじゃあまた後でね～」

「おう。あんま遅くなるなよ」

手を振って女子組と別れ、エリオと共に部屋に向かう。
そういや、エリオとキャロの私服は見たことないな。隊舎に居る間は、寝巻きか制服か訓練着だけだし。

「……エリオ、お前私服持ってる？」

「も、持ってますよ！」

「ははは。ムキになるとこが怪しいぞ、大丈夫、持って無くても俺は気にしないから」

「持ってますってばぁ！！」

からかうと面白いエリオなのであった。
端から見ると、子供を虐めて喜んでる外道にしか見えないと気付いたのは、通りかかったフィニーノ陸士の絶対零度の視線を受けた時だった。死にたい。

その後、俺達は街へ行ってエリオやキャロが行ったことの無い場所を中心にあちこち回った。
ゲーセンや俺行きつけのゲーム量販店、スバル御用達のアイスクリーム店。ティアナおすすめの服屋（女子専用店だったので、俺とエリオは凄まじく気まずい思いをした）等など。
よく5時間程度で回れたもんだと、自分で感心する位色々な場所を回れた。

疲れたけど、エリオとキャロが楽しそうにしていたので良しとしよう。
帰るのが遅くなって、泣きそうな顔のハラオウン隊長に何故か俺だけお説教をくらったけど、良しとしよう。
その後、高町隊長にも何故か俺だけお説教を貰ったけど、良しとしよう。

……うん。泣いてない、泣いてないよ。俺強い子。

第11話　『休日　2』（後書き）

どうも、ラモンです。

何というグダグダ……。
とりあえず仲良くなった5人の様子を書きたくて、何となく書いてたらすげぇグダグダに……orz
完全オリジナル話って難しいですね。

あと、書いてて思ったんですがBSPとかモンスターハンティングって大丈夫なんだろうか？
怒られそうで怖いです。

第12話　『出張任務　1』

さて、俺達の訓練も実戦用のデバイスを手に入れたことで次の段階へと進んだ。
前はガジェットを使った模擬戦が中心だったのだが、これからは各個人のポジションに合った能力を伸ばすことになる。
それに伴って、2人の副隊長も教導に参加することになった。

なった、のだが……。

「何故俺の教導はシグナム副隊長なのでしょうか？」

ポジション全然違くね？

「確かに私はフロントで、お前はセンターだ。しかしポジションが違う私だからこそ、教えられることがある」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべてから、シグナム副隊長が愛機レヴァンティンを構える。
どういうことなの！？

「し、シグナム副隊長が教えられることって……」

「センターガードの仕事は、戦闘が始まって直ぐに中、遠距離を制

すること。
その際に、私やテスタロッサの様な高速型のフロントアタッカーに仕掛けられることもあるだろう」

「はあ、そうかも知れませんけど……えっと？」

「こちらの攻撃をかわしつつ、私に攻撃を当ててみせろ」

無理ゲーすぎますシグナム副隊長。
貴女とハラオウン隊長は、六課でも有数のスピードファイターじゃないですか！
それを俺に避けろと！？　しかも攻撃を当てろと！？

「私は不器用でな、口でアレコレ説明することはできん。だから、体で覚えて貰うぞ」

「謹んで遠慮したいです！」

「問答無用！」

「うおあぁっ！？」

「ほう、今のを避けるか」

いや、避けてませんよ！？　ホラ、訓練着の袖のところ！　切れてるじゃないですか！？
何でそんな嬉しそうな顔してるんですか！？

ねえ、何で！？

「なかなか見込みがありそうだ」

「無くていいです！　無くていいですからやめてぇぇぇっ！！」

「情けないぞロックウェル。男なら、覚悟を決めろ！！」

「いーやー！」

恐ろしい速度でシグナム副隊長の刃が迫る。
俺はそれを喰らって、喰らって、喰らって、時々思い出したように避ける。
ねえ、これ何て虐め？

「どうしたロックウェル！？　逃げてばかりいないで、少しは攻撃してきたらどうだ！」

「無茶言わないでくださいよシグナム副隊長！！」

避けるのだって満足に出来ないってのに、更に攻撃までしろとかどんだけ！？
うおぉっ！？　また掠ったし！！　いやむしろ斬れてるし！！

「怖い怖い怖い怖い！　やーめーてー！！」

「えぇいちょこまかと！　レヴァンティン、カートリッジロード！！」

《　Ｊａｗｏｈｌ．　》

「Ｊａｗｏｈｌ．　じゃねぇっしょレバさん！！」

「私の剣を、妙な名前で呼ぶな！！」

「ぬわーーーーーーーっ！」

剣が！　鞭みたいになった剣がぁぁっ！？

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第１２話　『出張任務　１』

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

疲れたぁ～。
なのはさんが鳴らす訓練終了の笛が聞こえた瞬間、あたしは緊張

を解いてその場に腰を下ろした。

「だらしねーなスバル。こんくれーでへばってちゃ、フロントアタッカーは務まらねぇぞ」

「あ、あはは……」

ヴィータ副隊長はそう言うけど、あたしだからこれ位で済んでるんだと思います。

エリオやキャロだったら、多分気絶しちゃってますよ～。

「ま、あたしの訓練についてこれるんだから大したもんか。ほれ、行くぞスバル」

「あ、はい！」

集合場所へ歩き出したヴィータ隊長の後を、慌てて追いかける。

歩幅が違うから、すぐに横に並ぶことができた。

そのまま、訓練の反省点なんかを聞きながら集合場所に向かう。

あたしとヴィータ副隊長が訓練をしていた場所は、集合場所から一番近かったのでそんなに時間をかけずに着いた。

「あれ、はやて？」

「八神部隊長？」

「おー、ヴィータにスバル。お疲れさん」
「ヴィータちゃんにスバル、お疲れ様ー」

集合場所に着くと、なのはさんとティアの他に、何でか分からないけど八神部隊長まで居た。
何かあったのかな？　でも、それにしてはあんまり慌ててる感じじゃ無いけど……。

「ねえティア、何で部隊長がいるの？」
「あたしが聞きたいわよ。なのはさんと訓練してたら、急に部隊長が来たんだから」
「そっか……」
「あ、はやて」

ティアと小声で話していたら、フェイトさんとエリオ、キャロが戻ってきた。
うわー、2人とも凄く疲れてる。フェイトさんの訓練も厳しいんだなぁ。

「どうしたの？　緊急出動？」

「ちゃうよ。ちょっと連絡があって、出かける用事もあったから私が直接伝えに来たんや」

「連絡って？」

「それは皆揃ってからや。それにしても、シグナムとハヤト君は遅いなぁ」

そういえばハヤトとシグナム副隊長、ちょっと遅いかも。
確か2人も、あたしと同じくらい近くで訓練してた筈なんだけど……。

「すまない。遅れたな……む、主。どうなさいました？」

「つーかーれーたー。あ、部隊長。お疲れ様です」

「おお、噂をすればナントカってやつやな」

あ、ハヤトも帰ってきた……ってうわ！　何か凄いボロボロ！

「ハヤト君どうしたの？　凄いボロボロだけど」

「ん？　シグナム副隊長とタイマンしてた」

「はぁ？　どういうことよ」

「副隊長が攻撃して、俺がそれを全力で避けて攻撃を当てる。ってのをずっとやってた」

「それは……大変だったわね」

ティアが可哀想な人を見る目で、ハヤトの肩を叩く。

うん、さすがにそれは同情するよ。

シグナム副隊長相手にそれは……あたしでも無理だよ。

「あれ？　でも、その割には平気そうだね。服はボロボロだけど」

「阿呆。空元気だよ空元気、下手に倒れると副隊長に「軟弱者！」って言われて、訓練が追加されるから必死に立ってるんだっつーの」

よく見てみろって言われてハヤトの膝を見ると、面白いぐらいにガクガク震えてた。

本気でやせ我慢してるんだ。

……シグナム副隊長の訓練だけは受けないように、なのはさんに後で言おうかな。

「さて！　それじゃあ全員揃ったところで、私からお知らせがあります」

「お知らせ？　『ドキッ！女性局員だらけの水着大会　ポロリもいるよ！』でもやるんですか？」

「ポロリがいるんかい。とと、今回は漫才やっとる時間が無いんやハヤト君、悪いけど先に連絡してしまわな」

「そうなんすか？　じゃあ黙っときます」

うわ、ハヤトがあんなに素直に他人の言う事聞くなんて珍しい。やっぱり、部隊長はハヤトにとって特別なのかな。一緒の時はいつも楽しそうだし。

むぅ……何か悔しい。

「さっき聖王教会から連絡があって、第９７管理外世界でロストロギアが発見されました」

「第９７管理外世界？　はやてちゃん、それってもしかして……」

「なのはちゃん正解。私らの故郷、海鳴市やで」

「はやて、それ本当？」

「うん。それで、機動六課に出動要請がさっき届いたんや」

「そうなんだ」

「じゃあ、久しぶりの里帰り、だね」

「だね」

なのはさん達が、凄く嬉しそうに笑う。
そっか、なのはさん達の故郷でもあるんだ。お父さんと、ハヤトのお母さんのご先祖様の故郷だってのは聞いてたけど。
えへへ……なのはさんと共通点があるって、嬉しいな。

「細かいことは、後で皆の端末にメールしておくから、各自で確認してな」

「はやて、日時は？」

「明後日か、早ければ明日やな。そっちも分かり次第すぐに連絡するから、皆そのつもりで」

『了解！』

楽しみだなぁ。
あたしとハヤトのご先祖様と、なのはさん達の故郷。どんなところなんだろ。

「あっと、そういえばスバル。この後陸士１０８部隊に行くんやけど、お父さんとお姉ちゃんに何か伝える事あるか？」

「えと、特に無いです」

ちょくちょくメールで連絡とってるしね。

「そか、なら私はそろそろ行くわ。皆、とりあえず準備だけはしといてな～」

「「「「「はい！」」」」」

何持っていこうかなー。

あ、この間買った、ハヤトが似合うって言ってくれた服持って行こう。

side：スバル＝ナカジマ　了

「「あはははは！！」」

午後の訓練が終わった後の食堂に、俺とスバルの笑い声が響く。

食事してる他の局員が何事かと俺達の方を見るが、そんなの気にしてらんねぇ。

「ハヤトさん？」

「くふっ……エリオ、お前おかしくねぇの、コレ？　ぶふっ……あはははは！」

俺は再びメールに目を通して爆笑する。
そこにはこう書かれていた。

※異世界出張任務資料

目的地：　第９７管理外世界　　現地惑星名称「地球」
　日時：　明後日１２：００から
　目的：　現地にて存在が確認されたロストロギアの確保、及び封印
　持ち物：　各自が所有するデバイス
　　現地活動可能な私服
　　お菓子　　（５００円まで）
　　お小遣い　（５０００円まで。それ以上を求める場合は各隊長と相談のこと）
　　なお、ＢＳＰ等のゲーム機器は持ち込み禁止

　　現地協力者の援助により、生活場所は確保済み

何だコレ、まるっきり子供の遠足のしおりじゃないか。
これで笑うなってのが無理だ。
つーかお菓子って何だお菓子って。

「ぶはははははは！　な、何だ、何だコレあはははははははっ！！」

「は、ハヤトさん。ここ食堂ですよ、静かにしなきゃ駄目ですよ！」

「だってお前、これ、これ……っくははははははっ！」

やっべ無理無理腹捩れる！
八神部隊長からって時点で、何かするとは思ったけどコレは予想の斜め上すぎる！

「ハヤト、笑いすぎ……くふっ」

「アンタも十分笑いすぎよスバル」

「くはは……っ、ティアナ、お前なんで平気なの？　コレだぜ！？あははははっ！」

「うっさい馬鹿！　任務の資料なんだから、きちんと見なさいよ！」

「でもティア……あははっ、あたしもう駄目！　あははははっ！！」

暫くの間、俺とスバルはひとしきり笑い続け、その間ティアナ達は凄まじく気まずい思いをした。
やっと笑いが収まった後、２人でティアナにしこたま怒られた。

「恥ずかしくて死ぬかと思ったわよ！　少しはＴＰＯってのを考えなさいよね！？」

「いやティアナ、悪いのは俺らじゃなくて部隊長だろ」

「そっ、そうだよ！　あんなの見せられたら、誰だって笑っちゃう

よ！」

「あたしとキャロ、エリオは笑わなかったけど？」

「「う……」」

それを言われると弱い。

俺とスバルは部隊長と笑いの波長が合ったから笑ったけど、ティアナからすれば変なメール程度の認識なんだよな。

ちくしょう、これだから笑いを理解しない人間は！

「恥ずかしかったです」

「私も……」

「ｏｈ・・・・」

チビっ子２人からも非難する目つきで睨まれる。

うおぉ、罪悪感が凄い。

さすがに小さい子供に睨まれるのは精神的にくるモノがあるな。

「「ごめんなさい」」

降参してスバルと揃って頭を下げて許してもらう。

うん、思い返せば確かにちょっと笑いすぎた。

俺達に慣れてるティアナでさえ、あれだけ恥ずかしがったんだ、エリオとキャロはさぞ恥ずかしかっただろう。
すまんこって。

「まあ、今回は確かに部隊長の悪ふざけってのもあるから、これくらいで許してあげるけど。次はないわよ」

「「はーい」」

「返事はキチンとする！」

「るっせーなぁ、お前は俺の母さんか！」

「誰が母さんよ！」

また怒られた。
マジでティアナ、俺の母さんに似てるんですけど。

第１２話　『出張任務　１』（後書き）

どうも、ラモンです。

ドラマＣＤ編に突入。
そのままだと、ちょっと色々つじつまが合わない部分があったので、原作６話もプラスして導入を作りました。
シグナム姐さんは原作だと教導に参加してないですけど、好きなので参加して頂きました。

射撃型って、対接近戦用の訓練て必要だと思うんです。
まあ、だからってシグナム姐さん相手は、さすがにどうかと思いますがね（笑）

それでは、また次の話で。

第１３話　『出張任務　２』

屋上ヘリポートに集合してヘリに乗り込む。
しかし、シャマル先生やリインフォース曹長は分かるんですが、何故貴女もいるんですか部隊長。

「私かて前線メンバーやもん」

「部隊長自らそうホイホイ動いていいんですか？」

「ええんや。だって私が機動六課の長、最高権力者やねんで？　私が白と言えば、黒も白くなるんや！」

「何と言う俺様理論。八神部隊長の前世は間違いなく独裁者」

この人に着いて行っていいのかと、一抹の不安を覚える俺であった。

「独裁者で結構、それこそ私が目指す理想像や！」

「なんと！　ならば俺がアンタを倒してその野望を止めてみせる！」

「ふはははは！　私を倒すためにはヴィータ、シグナム、ザフィーラ、シャマルの四天王を倒さなあかんで！？」

「無理ゲーすぎるでしょ。まさに外道」

「そか？　ハヤト君なら４人を倒して、私を助けてくれるやろ？」
「いつの間にか部隊長がヒロインになっている件」
「助け出された後に、後ろからブスリや！」
「黒すぎる！？」

やっぱ貴女はラスボスですよ。
あとその四天王で誰が最弱なのか、もの凄く興味があります。

「えっと……はやてちゃん、ハヤト君。もういい？」
「ええよ。手間取らせてごめんな」
「十分です。お時間取らせてすいませんでした」
「じゃあ、恒例のショートコントも終わったところで、出発しようか」
「「「「はい！」」」」

最早ショートコント扱いですかハラオウン隊長。
あまりに冷静な皆の反応に、芸人として寂しさを覚えながらヘリに乗り込む俺と部隊長であった。

「はい、リインちゃんのお洋服」

「わーい！　シャマルありがとですーっ！」

ヘリが飛び立ってすぐ、シャマル先生がリインフォース曹長に服を差し出した。

……でもそれ、服大きすぎません？

「リインフォース曹長、その服って……」

「はやてちゃんの、ちっちゃい頃のおさがりですっ」

いや、そこ質問の主題ちゃうねん。

「なんか、普通の人のサイズだなって……」

キャロナイスフォロー。

そう。差し出された服は、子供用ではあるものの普通のサイズなのだ。

リインフォース曹長は大きく見積もっても３０ｃｍ程度。どうやっても着れないと思うんだが……。

「う～ん……あはっ！そう言えば、フォワードのみんなには見せたこと無かったですね」

「「「「「へっ？」」」」」

「システムスイッチ。アウトフレーム・フルサイズッ！」

「「「「「おおっ！？」」」」」

そう言って前に見たように光に包まれるリインフォース曹長。
そして光が消えた時には、俺達の前に子供サイズまで大きくなったリインフォース曹長が！
……どういうことなの？

「っと。一応、この位のサイズにもなれるですよ？」

「でかっ！」

「いや、それでもまだちっちゃいけど……」

「普通の女の子のサイズですね」

「向こうの世界には、リインサイズの人間も、フワフワ飛んでる人間もいねーからな」

そこで、今まで黙ってたヴィータ副隊長が口を開いた。

だけど副隊長、そんな人間はミッドにもいないです。間違いなく。

「うーん。大体、エリオやキャロと同じくらいですかね？」

「ですね」

「リインさん、可愛いです」

「そうですか？」

「可愛いですよリインフォース曹長。その手の大きなお友達に大人気です！」

「そ、それはちょっと……遠慮したいですよ」

何故笑顔が引き攣るんですか曹長、褒め言葉ですよ？

そう言ったら、ティアナとスバルにすっげぇ冷たい目で見られた。

こっち見んな。俺にはそーゆー趣味は無い。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第１３話　『出張任務　２』

さて、そうこうしている内に第９７管理外世界に直結してる転送ポートに着いた。
地球ねぇ、ＰＴ事件に闇の書事件、立て続けに第一級ロスト・ロギアが関わった世界ってことで、管理局内でもそこそこに有名だったりする。

高町隊長達の故郷だって話で忘れてたけど、こうやってみると物騒すぎる世界じゃね？
これでロストロギア関連の事件３度目だよ？
ちゃんとした調査したほうがいいってマジで。

まあ、そんな冗談はおいといて。
八神部隊長はやる事があるとのことで一旦別れ、それに付き合う形でヴィータ副隊長、シグナム副隊長、シャマル先生とも別れた。
そのまま残りのメンバーで集団転送ポートに乗り、目的地へと転送される俺達。
転送の光が消え、目の前に広がったのは一面に広がる綺麗な青の湖に、緑輝く森。その先にはコテージらしき物も見える。
その光景に、俺達５人は揃って声を上げた。

「へぇ……」

「ここが、なのはさん達の、故郷……」

「そうだよ。ミッドと、殆ど変わらないでしょ？」

「空は青いし、太陽も一つだし。」

「山と水と。自然のにおいもそっくりです！」

キャロは野生児みたいな事言わない。
エリオなんかは感動のしすぎで「うわー」としか言ってない。

「と言うか、ここは具体的にはどこでしょう？なんか、湖畔のコテージって感じですが」

「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所としての使用を、快く許諾して頂けたですよ～っ」

「現地の方……ですか？」

資料にあった現地協力者の持ち物ですか。
どんな金持ちだ、嫌味な奴だったら言葉でボコボコにしてやる。
そんな風に思っていると、湖とは反対方向からエンジン音が聞こえてくる。こちら側に来ていることから、その現地の住人とやらなのだろう。
暫く待っていると、一台の普通車がやってくる。

「自動車？　こっちの世界にもあるんだ」

「そりゃあるだろ。ティアナ、お前この世界をなんだと思ってんだ？」

「え？　あ、あはは……」

笑って誤魔化すな。
そんなやり取りをしてる間に、普通車は俺達の近くに停まり、中から女性が出てきて高町隊長の方へ向かってくる。
金髪ショートでパンツスタイルの、凄まじい美人だ。
美人で金持ち……正直たまらん。

「なのはっ！　フェイトっ！」

「アリサちゃん」

「アリサ」

「なによも～。ご無沙汰だったじゃない？」

「にゃははっ。ごめんごめん」

「いろいろ忙しくって」

「アタシだって忙しいわよ？大学生なんだから」

「アリサさ～んっ。こんにちわですっ！」

「リイン！久しぶりっ！」

「は～いですぅ～っ」

どうやら女性――アリサさんは隊長達の知り合いらしく、和やか

な雰囲気で会話が弾んでいる。
ですが隊長。俺達にも構ってください、蚊帳の外でめっちゃ気まずいです。
しかしアリサさんはアレですね。全身からツッコミオーラが出てますよ、これはボケざるを得ない。
そんなことを思っていたら、ハラオウン隊長が俺達が蚊帳の外ってことに気付いてアリサさんを紹介してくれた。

「紹介するね。私となのは、はやての友達で、幼なじみ」

「アリサ・バニングスです。よろしくね」

「「「「宜しくお願いしますっ！」」」」

「バニングスさん、交際を前提に結婚してください」

とりあえずボケてみた。
さて、どうする……アリサ＝バニングス！？

「……結婚を前提に交際、でしょ。それと心の底からお断りするわ、あたし、初対面の相手にボケをかます人間は好きじゃないの。そんなのはやてだけで十分よ」

「……ふむ、八神部隊長には劣りますが、中々のツッコミストですな」

「ちょっと！？　それは聞き捨てならないわね。あたしがはやてに

劣るですって!?　いいわ、もう一度全力でボケてみなさい。バニングスの名に賭けて受けて立ってあげるから!!」

どうやら失言だったようだ。
何か凄い怒られた。だが、ボケろと言われてボケないのは俺の中に流れる熱きお笑いの血潮が許さない。
いいでしょうバニングスさん、このハヤト＝ロックウェル。全身全霊をかけてその挑戦をお受けする!!

「お受けしないでいいわよ」

「あたっ」

意気込んでいたら、ティアナに止められた。
バニングスさんも高町隊長とハラオウン隊長に止められている。

「何で邪魔すんのよ、なのは、フェイトっ!!　あたしが馬鹿にされたままでいいってワケ!?」

「ア、アリサ。落ち着いて、ね?」

「ハヤト君も別に悪気があった訳じゃないし、アリサちゃんを馬鹿にしたかった訳でもないから!」

「はーなーせー!」

……ティアナ、止めてくれてありがとう。
あの人には勝てる気が微塵もしないよ。
訓練してる筈の隊長2人がかりでやっと止められるって、どんだけですか。

その後、バニングスさんが落ち着いてから隊長達と任務の確認をして、スターズとライトニングに別れて街中にサーチャーを配置していくことになった。
途中で部隊長から、無事にこっちに到着し、シグナム副隊長とヴィータ副隊長は後で合流するとの連絡が入った。
部隊長がこっちに来たということでロングアーチの準備も万端になり、各自私服に着替えてから、任務開始と相成ったのである。

side：ティアナ＝ランスター

街中を、サーチャーを設置しながら歩く。
ハヤトも珍しく真面目に仕事してるし、スバルも苦手なサーチャー設置を一生懸命にやってる。
いつもこうだと、あたしも余計な心配とかしなくて助かるんだけど。

「ティアー、こっちは終わったよ～」

「俺も終わりっと」

「あたしもこれで終わりね。なのはさん、サーチャーはこれで全部ですか？」

「えーっと……うん、サーチャーの設置はこれで全部。リイン、大丈夫だよね？」

「はいです。サーチャーの設置、完了ですよー」

リイン曹長の言葉を聴いて、息を吐く。

不可視魔法って結構疲れるのよね。なのはさんやリイン曹長は平気そう……って当たり前か、あたしみないな凡人とは魔力量が全然違うものね。

「結構時間かかりましたねぇ、もう暗くなってきてますよ」

「あ、ホントだ」

辺りは日が傾いて、空が赤くなり始めている。

こっちに着いたのがお昼ぐらいだったから、確かに結構かかったわね。

『ロングアーチからスターズとライトニングへ』

すると、タイミングよくロングアーチの部隊長から通信が入った。

『さっき、協会本部から新情報が届きました。
ロストロギアの所有者が判明。運搬中に紛失したとのことで、事件性はないそうや。
本体の性質も、逃走のみで攻撃性は無し。ただし、大変に高価なものなので、できれば無傷で捕らえて欲しいとのこと。
まぁ、気ぃ抜かずにしっかりやろ』

「「「はいっ」」」

とりあえず、危険性が薄いっていうのが分かって安心したわね。
今すぐにどうこうって訳じゃないみたいだし、サーチャーの設置も終わったから、今日はこれまでかしら。

「じゃあ、ひと段落ついたし一旦待機所に戻ろうか」

「ですです。晩御飯の時間ですよ～」

「やた！　ご飯っ！！」

スバルが大喜びで声を上げる。
相変わらず食欲だけは人一倍よね。そのくせ太らないって言うんだから馬鹿にしてるわ……忌々しい。

「ライトニング。そっちはどう？」

『こちらライトニング。こっちも一段落付いたから待機所に戻るよ。ロングアーチ、何か買って帰ろうか？』

『こちらロングアーチ。ありがたいことに、夕食は民間協力者の皆さんが用意してくれるそうや』

『うん。了解。じゃあ、スターズのみんなを車で拾って帰るね』

「ありがと、フェイト隊長」

夕食まで用意してくれてるんだ……なんだか悪い気がしてきたわね。

とりあえず、向こうに着いたら少しは手伝わなきゃ。

「う～ん。でも手ぶらで帰るのも何かな～？」

なのはさんが呟いて、携帯を取り出しどこかに電話をかける。

どこに電話してるんだろ？　部隊の人になら、念話を送ればいいんだから恐らく現地の誰かだとは思うけど……。

「あ、お母さん？　なのはです」

「「「……へ？」」」

「にゃはは、うん。お仕事で近くまで来てて。……そうなの、うん。ほんとにすぐ近く。でね？　現場のみんなに――」

『ちょっ、高町隊長にお母さん！？』

慌てた感じの念話がハヤトから届く。

『な、何慌ててんのよ！　存在してて当たり前でしょ！？』

『でもでも、なのはさんのお母さんだよ！？』

『俺、てっきり隊長は魔力の塊から生まれたモンだとばかり……』

それなら、あの魔力量も納得できる……じゃなくて、失礼なこと言ってんじゃないわよ。

なのはさんだって人の子、親が居て当然でしょ？

３人でやりとりをしていると、なのはさんの電話が終わる。

「さて、ちょっと寄り道」

「はいです～っ！」

「隊長、今の電話って……？」

「私の実家だよ。うち、喫茶店なの」

「「「ええええ～っ！？」」」

「喫茶翠屋。お洒落でおいしいお店ですよ～」

「隊長が喫茶店の娘さん……？　嘘だっ！！！！」

ちょっとハヤト、何言ってんのよ！

いや、まぁ……あたしも、ちょっとだけそう思ったけどさ……。

「嘘って……酷いよハヤト君」

なのはさんが涙目になってた。……ちょっと可愛いと思ってしまったのは、内緒だ。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

隊長に付いて行った先には、たしかに洒落た喫茶店があった。

まさかガチで喫茶店の娘だと言うのか……あのエースオブエースが？

「お母さ～ん、ただいまーっ」

「なのは、おかえり～」

隊長が入り口を開けて、中にいた美人な店員さんに話しかける。
……ん？　あれ？　お母さん？

『お母さん若っ！？』

『あ、こらスバル！　念話で人が言おうとしたことを先に言うな！』

その後、お父さんとお姉さんも出て来た。
ちなみに全員若い。多分全員兄妹ですって言われても納得できるぞ……高町家は化け物ばかりか！？

「あ、この子達は、私の生徒なの」

「そう。お茶でも飲んで、ゆっくりしていってね？」

「……えと、あっ、スバル＝ナカジマです！」

「ティアナ＝ランスターです」

「ハヤト＝ロックウェルです。ところで、お姉さんと交際を前提に結婚していいですか？」

「あらあら、面白い子ね。美由希、どう？」

「うーん……顔は悪くないけど、年下は守備範囲外だから。ごめん

ね」

「そうですか」

真面目に断られた。

なんと言うボケ殺し。冗談だったのに、ちょっと切なくなってしまったではないか。

「残念だったねハヤト君。ところで、3人ともコーヒーとか紅茶とか、いけるかい？」

「あ、はい」

「どっちも好きですっ！」

落ち込んでいたら、隊長のお父さんが慰めてくれた。いい人だ……。

気を取り直して、隊長に続いて近くのテーブルに座り、お父さんが直々に淹れてくれた紅茶を飲む。

「わぁ、おいしい～！」

「ホント、今まで飲んでたのと全然違うわ……」

「これは女性を口説く時に使えそうだ」

「アンタは何でそーゆー方にしか感想がいかないのよ」

「それが俺だから？」

「あたしに聞くな！」

そんな感じで、ハラオウン隊長が迎えに来るまで翠屋で時間を潰す。

隊長のお父さんとお母さんが、えらく隊長のことを気にして色々と質問されたが、何せ隊長は優秀で本局での評判もいい一流の教導官、特に問題無く答えていった。

スバルが事実に尾ひれ背びれをつけていたのは……まあ、憧れ故と見逃そう。

「もう！　お父さんもお母さんも、心配しすぎ！　私、もう子供じゃないんだよ？」

「うふふ、ごめんなさいねなのは。でも、貴女ちょっとドジなところがあるから……」

「そうだなぁ」

「2人とも酷いよー」

『……なんか、なのはさんが普通の女の子に見える』

『う、うん』

ティアナとスバルが、両親と会話する隊長を見て、そんな感想を漏らす。

確かに、普段はどっちかっつーと大人っぽくて冷静って感じだから、こういう姿は新鮮だも知れん。

隊長の新しい一面にドキっとするね！

『そういや俺、まだ隊長には求婚してなかったな。後でしておこう』

『だ、駄目っ！』

念話で呟いたら、スバルに駄目だしされた。

『何だよスバル、別に俺が誰に求婚しようと構わんだろうが』

『駄目ったら駄目！』

『アンタがなのはさんと釣り合う訳ないでしょ。やめなさい』

『……お前ら酷いな』

残った紅茶がちょっとしょっぱくなった。

それから程なく、ハラオウン隊長が車で迎えに来てくれた。

ただ、定員オーバーだったので、俺はスバルとティアナの提案によりトランクに詰め込まれた。ハラオウン隊長はしきりに「法律違

反だよ」と気にしていたが、バレなければ違反にはなりませんとゴリ押し。

スバルにティアナ……そんなに俺を虐めたいのか。

俺はそのやりとりを思い出し、真っ暗なトランクの中で一人、そっと涙を拭いた。

第１３話　『出張任務　２』（後書き）

どうも、ラモンです。

ドラマＣＤシナリオ『到着＆高町家訪問』編をお届けしました。
内容を全部書くとかなりの話数になってしまうので、色々と削ったんですがそれでも長い……ｏｒｚ

銭湯編ではちょっとオリジナル展開も入れたいので、結構話数かかるかも……。
誰か内容を簡潔に、かつ面白く纏められる才能を下さい　ｏｒｚ

それではまた次の話で。

第１４話　『出張任務　３』（前書き）

今回はオリ主×原作キャラ要素や、ラブコメ要素が濃厚です。

ラブコメが嫌いな人や、オリ主と原作キャラのカップリングが憎くて生きるのが辛い、という人は注意してください。

あと、今回はちょっと長いです。

第１４話　『出張任務　３』

そこには、戦場があった。

「ちょっとスバル！あんたさっきからお肉食べ過ぎっ！」

「え～だってぇ～……ってあぁぁぁ！　ね、狙ってたお肉がぁぁぁ……」

「ふっ、甘いでぇスバル。バーベキューの網の上は常に戦場や！周囲を警戒し、尚かつ自分の領分をしっかり守る。それがバーベキューの基本中の基本やな」

「了解ですっ！　八神部隊長！」

「ヴィータ。お前も少し食べすぎだぞ？　……っ！　貴様っ！　私の焼いていた肉を全て取りおって！」

「ハッ、あめぇんだよシグナム。はやても言ってただろ？　『バーベキューの網の上は常に戦場』だってな」

そう。間違いなく戦場であった。

アホみたく食べるスバルとヴィータ副隊長、更に負けず嫌いのシグナム副隊長が同じテーブルに座ってしまったのが運の尽き。

そのテーブルでは、用意された材料が恐ろしいほどの速度で無くなっていく。

あそこの奴らはバケモンだ。食べてない、食い物を飲んでやがる

……っ。

「エリオ、こっちもう焼けてるよ」

「あ、ありがとうございます。フェイトさん」

「はい、フリード」

「きゅくる～」

それに比べ、俺のいるテーブルはとても平和だ。

高町隊長を筆頭に、部隊長を除いた幼馴染組みの皆さんと、エリオにキャロ、フリードに俺。

それと高町美由希さんと、エイミィ＝ハラオウンさん、そしてシャマル先生。それとハラオウン隊長の使い魔であるアルフさん。

エリオも食べる方だが、ヴィータ副隊長やスバルのように考えなしな訳ではないので、実に平和だ。しかも美人揃い、男としてこんなに嬉しいことがあるだろうか？　いやない。

「ねえ、ハヤト君」

「あ、はい。　なんですかシャマル先生？」

なんてことを考えていたら、隣に居たシャマル先生に話しかけられた。

意識を戻してそっちを見れば、先生は何かよく分からない物体が

乗った皿を、極上の笑顔で俺に差し出している。

「これ、私が作ったんだけど……食べてみない？」

「「「「「「シャマル（さん）の手作り！？」」」」」」

な、何だ？　俺とエリオ、キャロ以外の皆さんが全員で驚愕してる。

あれか、シャマル先生が男に手作りするなんて初めてで驚いているのか？　もしかしてシャマル先生シナリオのフラグ立った？

「ハヤト君」

「へ？　あ、部隊長。いきなりなんです？」

どこから湧いたのか、部隊長が俺の肩を叩く。その顔に、やたらと悪い笑みを浮かべながら。

「あれは、絶対に食べたらアカンよ」

「へ？」

「は、はやてちゃん！？」

「ええな。絶対やで！　絶対に食べたらアカンよ！？」

「……ああ、なるほど」

それはつまりフリですね。
そんなフリを貰ったら、応えるしかあるまいよ！　芸人として、男として！

「シャマル先生。それ、頂きます」

「「「「「「ハヤト（君）！？」」」」」」

「ハヤト君……。うん！　どうぞ召し上がれ！」

嬉しそうな笑顔のシャマル先生が、俺の前に謎の物体の皿を置く。
うわ、臭っ！？　なんかもう臭い！！
魚と肉を合わせて、バナナを突っ込んだみたいな臭いが！

「……ハヤト君」

「いただきます！」

シャマル先生に涙目で見つめられることに比べたら、これくらいなんでもねぇーーー！！！

「……あれ？」

「ハヤト！　よかった、目が覚めたんだね！？」

気付いたら、スバルに膝枕されてた。

周りを見れば、ティアナや高町隊長がものごっつ心配そうな顔で俺を覗き込んでいる。

何があったんだろう？　たしかシャマル先生が何かを俺に差し出して……駄目だ、記憶が飛んでやがる。

「シャマル……」

「わ、わざとじゃないんですよぅ！」

「記憶も飛んでいるようだし……ついに毒物の域になったか」

「シャマル、お前ハヤトに何か恨みでもあんのかよ……」

「ち、違うんですったらぁっ！！」

どこからか部隊長達のそんな話し声が聞こえたが、何があったんだろう？

晩飯の片付けも終わったところで（俺は何故か絶対安静と言われて、手伝いはできなかった）部隊長が口を開く。

「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか」

「「はいっ！」」

ティアナ、スバル、キャロが嬉しそうに頷く。
さすが女の子。風呂が好きですなぁ。
だが、ここで問題が起きた。バニングスさんが言うには、このコテージには風呂が無いらしい。
となれば、近場にある湖あたりで水浴びとなるのだが、さすがにちょっと肌寒いこの時期に、水浴びは無いだろう。

「そうすると……」

「やっぱり」

「あそこですかね？」

「あそこでしょう」

エイミィさん達がお互いに納得しあっているが、俺達フォワード新人５人はここらへんの地理なんぞ分かる訳も無く、全員が疑問符を浮かべている。

「さて。機動六課一同。着替えを準備して、銭湯準備っ！これより、市内のスーパー銭湯に向かいます」

「スーパー……」

「セントウ……？」

高町隊長の言葉に、一斉に首をかしげる俺達であった。

説明を聞けば、俗に言うスパリゾートというモノらしい。そこで風呂を済ませる訳か、ならカメラ持って行かなきゃ。

え？　嫌だなぁ。浪漫ですよ、浪漫。

「は～い。いらっしゃいませ～。海鳴スパラクーアへようこ――団体様ですかぁ～？」

「えっとぉ……大人１３人、子供４人です」

「エリオと、キャロと……」
「わたしとアルフですっ」
「あの、ヴィータ副隊長は……」
「あたしは大人だ」

スーパー銭湯のロビーで受付けを済ませる。
ヴィータ副隊長、子供料金で安く入れるんですから子供でいいじゃないですか。
あ、じゃあ俺子供で……。

「無理でしょ」
「無理だよ」

スバルとティアナに阻止された。
風呂は男湯と女湯に別れていて、エリオがその事にえらく安心していた。
……安心するな、俺の計画が頓挫してしまうじゃないか！
だが、安心するエリオにとっては絶望の、悔しがる俺には救いの一手がキャロの口から放たれる。

「広いお風呂だって。楽しみだね？エリオくんっ。」

「あ、うん。そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

「……えっ？エリオくんは？」

「えっ！？ぼ、僕は、その、一応、男の子だし……」

「うん……あ、でもほらっ。あれ見て？」

キャロが指差した先には、入浴施設の利用規定。

そして、そこに書かれている一つの文。

※女湯への男児入浴は、１１歳以下のお子様のみでお願いします

エリオは１０歳。この利用規定によれば、女湯への入浴は可能である。

キャロ、やるな……特に裏が無い分、断りにくい。

あたふたしているエリオに、ハラオウン隊長の追い討ちが入った。

「せっかくだし、一緒に入ろうよ？」

「フェイトさんっ！？」

退路は断たれた……つーかエリオ、俺の計画の為にも入れ。

俺は影からこっそりと、ハラオウン隊長とキャロを応援する。

「い、いいいや、あああああのですね。それはやっぱり、スバルさんとか隊長達とか、アリサさん達もいますしっ！」

「別にあたしはかまわないけど？」

「って言うか、前から頭洗ってあげようか～とか言ってるじゃない？」

「あたしらも良いわよ？　ね？」

「うんっ。」

「いいんじゃない？仲良く入れば。」

「そうだよ。エリオと一緒にお風呂は、久しぶりだし……。入りたいなぁ」

周囲に助けを求めるが、孤立無援。（俺含む）

さあエリオ！　観念して女湯へ行くんだ！　そして俺の計画を手伝え！！

「あ、あのっ。お気持ちは非常に……なんですが……ほ、ほらっ！　そうなるとハヤトさんが1人になっちゃいますし！」

「お前にはがっかりだよエリオ！！！」

「えええええっ！？」

「いいか!?　俺くらいの年になったら、女性の裸なんぞ見たくても見れないんだぞ!?　なのに、それを堂々と見る事が可能な機会をみすみす逃すというのか!!　見損なった!　心底見損なったよエリオ!!!!」

カッと目を見開いて説教を始める俺。

エリオ、お前男としてそれはどうよ?　別にやらしい意味で言ってる訳じゃない。子供の権利を利用できるうちは利用するしたたかさを持てと言っているんだ!!

「……正論ぽく言ってるけど、内容は最低だよ。ハヤト」

「最悪」

スバルとティアナうるせー。

俺はエリオの説得で忙しいんだ。

それに、部隊長はサムズアップしてるし、ハラオウン隊長も嬉しそうだからいいんだよ!

「で、でも……っ」

「うるせぇ!　つべこべ言わずに入らんかい!!　あ、あとコレ」

「え?　これって……カメラ、ですか?」

「そう、カメラ。女湯の撮影よろしく!!」

「アイゼン」

「レヴァンティン」

「クロスミラージュ」

「マッハキャリバー」

「バルディッシュ」

「レイジングハート」

轟音と共に、俺のカメラ（購入価格税込み3万2千円　※日本円換算）の破片が宙に舞った。

「お、俺のカメラに何をするだーーーーっっ!!?」

その後、エリオは俺と共に男湯に入ることになりました。
ただ、入る前に俺はキャロを除く女性陣からお説教された。男の浪漫は女性には分からないんだ！　と反論したら、シグナム副隊長に斬られそうになったので潔く土下座して事なきを得た。

脱衣場に着くと、時間がちょうど良かったのか俺とエリオしか人は居なかった。

こういう場所は初めてのエリオに、ロッカーの使い方なんかを教えながら服を脱いでいく。
まあ、詳しい描写をしても誰も喜ばないだろうからカット。

そうして腰にタオルを巻いたあたりで、ドアの開く声と共に聞いた事のある声と、おばさんの声が聞こえてきた。

「は～い。どうぞ」

「ありがとうございます」

「「……は？」」

予想外の声に、思わず振り返る。
そして俺達の視界に映ったのは、女湯の番台をやっているらしいおばさんと、ちょっと長めのタオルに身を包んだキャロの姿だった。
完全に思考停止状態の俺達に気付いたキャロが、嬉しそうに顔を綻ばせてこっちへ向かってくる。

「エリオ君っ、ハヤトさん！」

呼びかけられたことで、ようやく再起動。
俺はなんとか平静を取り戻す事ができたが、エリオはパニックに陥っている。

「キャ、キャキャキャキャロっ、キャロ！？」

「？」

「ふ、ふふっ、服、服っ！」

「うん。うん。女性用更衣室の方で脱いできたよ？エヘッ。だからほら、タオルを――」

「前を開くんじゃありません、はしたない」

慌てて使い物にならないエリオの代わりに、いきなり前を開こうとしたキャロの手を取って止める。

おいおい、さすがに恥じらいが無さすぎだろう。純粋すぎるのも考えものだ……。

俺は子供に興味ないから構わないが、思春期のエリオにはキツいだろう。

「あ、えへへ、ごめんなさい」

「それで？　こっちは男用だけど、何で入ってこれた？」

「女の子も、１１歳以下は男性用の方に入って良いみたいなんです。注意書きの方にも書いてありました」

「そう……か」

予想外すぎる。普通、そう書いてあっても1人で入ってこないだろ。

どうやら純粋っ子を見くびっていたらしい。

だが、事ここに及んでは恐らくキャロは女湯に戻ろうとはしないと思う。一応さりげなく促してみたが、当然のように拒否されてしまった。

結局キャロはそのまま男湯に入ることになり、エリオは顔を真っ赤にして泣きそうな顔になった。

許せエリオ。俺は無力だ……。

俺は内心でエリオに謝りつつ、2人を連れて男湯へと入っていくことしかできなかった。

面白くなってきたぜ。

side：スバル＝ナカジマ

「スバル、どうや？　こっちのお風呂は」

お湯に浸かっていると、部隊長がやって来てあたしの隣に入る。

「幸せですよ～。地球のお風呂は、エンターテイメントですねぇ」

「そかそか。気に入ってくれたみたいでなによりや」

部隊長は嬉しそうに笑って頷いた後、ちょっと真剣な顔になった。

「……ところでな。スバルは、ハヤト君と付き合ってるんか？」

「ふえぇっ！？」

いきなり変なことを聞かれて、思わず大声を出してしまう。

あ、あたしがハヤトと！？

「ないない！　無いですよそんなのっ！！」

「ほんまにぃ？　さっきハヤト君のこと膝枕してる時のスバル、めっちゃ嬉しそうな顔しとったで？」

「そそ、そんなこと無いです！」

無いよね？　無いよね！？

だってアレは、なんてゆーかいつもの癖とかそんなので、別に深い意味は無いしっ！

「えぇ～？　そうやって慌てて否定するところが怪しいなぁ～～」

「うぅぅ……違いますってばぁ」

部隊長が嬉しそうにあたしのほっぺたを突っついてくる。
絶対からかって楽しんでるよ……。

「まぁでも、スバルがそんなに違うって言うんやったら、私がハヤト君貰おうかな」

「えっ！？」

「何だかんだで顔は好みやし、性格かてそんなに悪くない。なにより私と気が合うし、条件としてはぴったりや。
ハヤト君も、私のこと嫌いじゃないみたいやし」

「だ、駄目ですっ！！」

反射的に言ってしまってからハッとする。
あわわ、部隊長の顔が「いい玩具見つけた」って感じになってるよ～。

「ん～？　何で駄目なのかなぁ、スバル～」

「えっと、えっと……」

「ほれほれ、お姉さんに言ってみぃ？」

「あ！　あたし、あっちのお風呂行ってきます！！」

「え？　あ、ちょっ、スバル！？」

「失礼します～っ！！」

タオルを身体に巻きながら、急いで近くの『露天』って書いてある扉を開けてそこに飛び込む。

部隊長、ハヤトなんか比べ物にならないくらいに意地悪だ～。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「私が、ハヤトと……ですか？」

「違うのか？」

「全然違いますよ。何であたしが、あんな馬鹿と……」

身体を洗っていると、隣に座ったヴィータ副隊長がいきなり「お前、ハヤトと付き合ってんのか？」と聞いてきた。

どうしてあたしがあんな馬鹿と……その、恋人なんかに。

「だってお前らいつも一緒にいるじゃねぇか。気付いたら大体隣同士だし、プライベートでも殆ど一緒だろ？」

「それは腐れ縁で、何となくそうなってるだけで……それに、それならスバルの方が一緒の時間は多いですよ？」

「あいつらは兄貴と妹って感じだろ。恋人って感じなら、お前の方だってはやてが言ってた」

部隊長……何でそんなに観察してるんですか。

というかヴィータ副隊長も、どうしてそんな興味津々なんです？

「部隊内の人間関係を把握しとく為だ。いざって時に、仲が悪くて任務失敗しました――じゃあ目もあてらんねぇからな」

「それはそうかも知れませんけど……」

だからって、何であたしとハヤトが恋人って結論に？

いくらなんでも発想が突飛すぎると思うんですが。

「あたしはそーゆーのよくわかんねーけど、はやてがそうだって言ったんだよ」

「八神部隊長……」

絶対わざとだ。
あたし達をからかって、楽しもうと思ってる。こういう所は、ホントあの馬鹿と似てるんだから困ったものだ。
階級が上だから、ハヤトみたく殴って止める訳にもいかないし。

「とにかく、あたしはハヤトの事は友達としか思ってません。部隊長にはそう伝えておいて下さい」

「ふーん。まあ、お前がそう言うならそうなんだろうな、分かった。変な事聞いて悪かったな」

「いえ」

短く答えて、お湯で身体についた泡を流してからお風呂に浸かる。
そして、肩まで沈んでから、ちょっとだけヴィータ副隊長の言葉を思い出した。

『お前とハヤトって、付き合ってんのか？』

「……そんな訳、ないじゃない」

あたしとアイツは、訓練校からの腐れ縁で、チームの一員で……友達。

「……それだけ、それだけよ」

小さく呟いた言葉は、お湯の流れる音に紛れて消えていった。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

「ふぃー。いやぁ、露天風呂ってのも中々乙なモンですなぁ」

エリオとキャロの初々しいチビっ子コンビを子供用露天風呂（１２歳以上は進入禁止）に押し込み、俺は１人で年齢制限のない露天風呂へと来ていた。

別に２人が嫌いだからそんなことをした訳じゃないぞ。

子供は子供同士、親睦を深めなきゃいけないと思っただけだ。２人はライトニングでコンビを組むしな。

決して、あれこれと強要してくるキャロから遠ざかりたかった訳ではない！　断じて！

「って、誰に言い訳してんだよ俺」

苦笑して、頭に乗せたタオルで顔を拭く。

いやぁ、キャロがあんなに押しが強いとは思わなかった。エリオは将来、確実に尻に敷かれるな。

「ふぅ。そろそろ上がるかぁ」

いい加減のぼせそうになってきたので、風呂から出ようした時。

「えっ、あれっ？　ハヤト！？」

「はぁっ！？　スバル！？」

湯気の向こうから、タオルを巻いたスバルが現れた。

……なんでさ。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

な、何で！？　何でハヤトがいるの！？

ここって女湯じゃ……。

「な、なんでお前がいんだよスバル！？」

「それはこっちの台詞だよっ！　ここ、女湯だよっ！？」

「はぁ？　ここは男湯だろ！？」

「えぇっ！？」

ど、どういうこと！？

ハヤトが嘘言ってる……？　ううん、ハヤトはどうでもいい時は嘘つくけど、こういう時はつかない筈だし……。

でも、ここには女湯から来たんだし……。あ、もしかして――

「ここって……混浴、だったり？」

「……らしいな」

ハヤトも同じ結論みたいで、あたしから目を逸らして溜息を吐いた。

「とりあえず、風呂入れよ。その格好は、さすがに俺の精神衛生上悪い」

「え……あぅ」

そういえば、あたし殆ど裸だった。

恥ずかしくて、慌ててお風呂に入って体を隠す。

「み、見た？」

「あー、まあ、ちょっとは」

「……えっち」

「事故だ事故」

「……」

「……」

どうしよう、会話がなくなっちゃった。

うぅ～、部隊長が変なこと聞くから、意識しちゃって喋れないよ～。

「……」

「……何か、喋れよ」

「ハヤトこそ」

「……」

「……」

そう言えば、ハヤトって誰か好きな子……いるのかな。

そんな話する機会なかったし、聞いたことも無かったけど……気になる、かも。

丁度いい機会だし、聞いてみようかな？

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

き、気まずい……。

スバルと背中合わせになって、互いに無言の時間のまま暫く経った。

つか、何で背中合わせてるんだ俺ら？　離れようぜ俺！　可及的速やかに！！

頭ではそう判断するが、何故か身体は言う事を聞かずに馬鹿みたいに固まったままだ。

あー、スバルって意外と肌すべすべなのな……ってそうじゃなくて！！

意外と着痩せするんだな……でもなくて！！

落ち着け、素数を数えるんだ。素数は１と自分の数でしか割ることのできない孤独な数字、俺に冷静さを与えてくれる。

２…４…６…８……って素数じゃねぇし！！

何スバル相手にこんな緊張してんだよ俺、マジで落ち着け。

「ねえ、ハヤト」

「ひゃいっ！？」

情けねぇぇぇぇ……なんだよ「ひゃいっ」って。

「ハヤトってさ、好きな子とか、いる？」

「……はあ？」

いきなり何だ？　何の話題だ？
あれか？　スバルフラグでも立ってたのか？　それなんてエロゲ？
ああもう！　頭が混乱しすぎてまともに思考ができん！

「いや……いねぇ、けどさ。いきなり何だよ？」

「えと、何となく聞いてみたくて」

「そうか」

何コレ？　ギャルゲとかだと告白フラグだけど……スバルが？
俺に？
いやいやいやいや、ねーって。フラグ立てた覚えが全然ねーもん。
あーでもあれか？　いつの間にかフラグが立ってたりしたのか？

って、俺がそんなギャルゲ主人公体質な訳ねぇじゃん。
多分部隊長あたりの入れ知恵だろ。きっとそうだ、そうに決まってる！

「……そういうお前はどうなんだよ。誰かいないのか？」

「い、いないよそんなの！！」

「はは……まあ、お前の彼氏になったら、食費とか大変そうだもんな」

「そんなことないもん。ハヤトの意地悪」

背中越しに、スバルの拗ねた声が聞こえてくる。

どうしよう。何かスバルが可愛く感じてしまうのですが……。

この状態はヤバイ。取り返しのつかない事態になりそう。

うん、大分冷静になってきたし、ここはそろそろ風呂から上がった方がいい気がする。

「お、俺そろそろ上がるわ」

「え？」

風呂を上がることを告げようと後ろを振り返った瞬間、目と鼻の先にスバルの顔があった。

……え、と。

いや、スバルもこっち振り向いただけなんだろうけど……。

だけどこの、距離は……。

「ハヤト……」

「ス……バル……」

濡れた髪と、風呂に入ってるせいか少し赤くなった頬。
今まで見たことの無い、なんつーか……色っぽいスバル。
やべぇ、理由はよく分からんけど、これはやべぇ。
思春期真っ盛りの健康な男子として、この状況は――色々と我慢できる気がまったくしない。

「えぇと……」

「……」

待て待てスバル！　何故そこで目を潤ませる!?

「ス、スバル？」

「……ハヤトはさ、あたしのこと、嫌い？」

どういうことなの？　ここで何でその質問？
え、何？　マジで告白なのか？

「嫌いな訳……ねぇだろ」

「ホント？」

「嘘言って、どうすんだよ」

答えてる間も、スバルから目が逸らせない。
スバルも俺の目をずっと見つめたまま、少しも逸らそうとしない。
多分、今の俺は茹で蛸みたいに真っ赤だろう。
さっきから、心臓がアホみたいに五月蝿くて仕方ない。

「……」

「……」

そのまま、スバルが自然に目を閉じる。
そして、スバルの濡れた唇が俺の唇の寄せられる。
触れ合うまで、あと3センチ……1センチ……1ミリまで迫った瞬間――。

「シャマル～！　今度はこっちのお風呂に入るですよーっ！」

「ほらほらリインちゃん。走ったら危ないわ……よ？」

「大丈夫で……すよ？」

「「……」」

唐突に女湯のドアから入ってきたシャマル先生&リインフォース曹長と、目が合った。

「「ごゆっくり（ですよ～）」」

「ちょっ、まっ！　誤解！　誤解です！！　まだ何もしてません！未遂です！」

「そ、そうですっ！　違いますよっ！！」

慌てて距離を取り、口を揃えて弁解する。

まだ触れてないから大丈夫だよな!?　未遂で通じるよな!?

先生、曹長！　何でそんないい笑顔でサムズアップしてんですか!?

「大丈夫よ。ちゃんと分かってるから」

「リインも分かってるですよ！」

「いやだから違うんですってばよ!?」

「時間は――2時間くらいでいいかしら?」

「何が!?　ねぇ何が!?　つーか違うって言ってるでしょうが！」

「スバル、初めては痛いらしいですから、ハヤトに優しくしてもら

うですよ？」

「リインフォース曹長！　アンタの外見でそんなこと言っちゃダメエエエエエ！！！」

「でも、２人ともいつの間にそんな関係に……先生びっくりだわ」

「「だから、違うって言ってるでしょう！！」」

２人で口を揃えて叫ぶ。

「うふふ。若いっていいわね～♪」

「ですです」

「アンタら何処のおばさんだ！？」

「あ、ハヤト君ひど～い。そんな酷いこと言われたら、先生思わずはやてちゃんにあることないこと言っちゃうかも？」

「マジでやめてくれぇぇぇっっ！！！」

俺の悲痛な叫びが風呂場に木霊した。どっとはらい。

畜生、雰囲気に流された自分が激しく憎い。

第１４話　『出張任務　３』（後書き）

スバルフラグが立った～！
ティアナフラグもちょっとだけ。
この小説のヒロインはスバルかティアナです。どっちのルートに行くかはまだ決めてませんが。

しかし今回の話、書いてる途中で恥ずかしくて死にそうになりました。
何でこんなの書こうと思ったんだろ……。
最初はノリノリで書き始めたんですけど、途中で正気に戻りまして……。あの時の自分は、精神がどうかしていたとしか思えない。
ここまで書いてて恥ずかしいとは、予想外でした。

もう2度とラブコメなんて書きません。きっと、多分。

ドラマＣＤの内容はもう少し続くんですけど……どうしようかな。
ここで終わってホテル・アグスタ編に行ってもいいような気もするし……悩みますね。

それではまた、次の話で。

第１５話　『出張任務　４』

長い、色んな意味で長い入浴が終わった。
辛くて切なくてやるせなくて、人生について色々と考えたくなるアンニュイな今日この頃。皆様いかがお過ごしでしょうか？　泣きたい事もあったけど、俺は元気です。

外に出て、夜風に当たりながら背を伸ばす。
あの事件で馬鹿みたいに火照った頬に、少し冷たい夜風か心地よかった。

「っ！」

夜風の冷たさを堪能していると、リュケイオンとクラールヴィントから警告音が鳴り響く。

「魔力反応……リインちゃん！」

「はいです！　エリアサーチ！！」

リインフォース曹長がエリアサーチで、魔力反応があった場所を探す。

「ロストロギア反応！　今回の目標ですよっ！」

「お仕事だね。みんな、頑張ってきて！」

「フェイト、エリオ、キャロ、気をつけて行ってこいよ？」

「「はいっ！」」

エイミィさんとアルフさんの言葉に、エリオ達が嬉しそうに頷いて返す。

アルフさんは来てくれないんだろうか？　話に聞いた限りじゃ、結構強いって聞いたんだけど。

ああ、現地協力者って戦闘に参加するのは無理なのか。まあ隊長ズ＆副隊長ズも居るから余裕でしょう。

「じゃあティアナ。シャマル先生とリイン、はやて隊長にオプティックハイド、よろしくね」

「了解です」

「空に上がって結界に閉じ込めるから、その中で捕まえてね」

「「「「「はいっ！」」」」」

「ほなら、スターズとライトニング、出動や！」

『了解！！』

スバルと話したかったけど、今は任務優先だ。
気持ちを切り替えて、頑張って行きましょう。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第１５話　『出張任務　４』

途中で高町隊長から説明があった。
今回もメインで戦うのは俺ら新人フォワードだけで、隊長、副隊長達はサポートに回るらしい。
出来ればやめて欲しかったなぁ。正直、今のスバルとはまともな連携を取れる自信が無い。
そのうえ今回の目標ロストロギアは貴重で高価。値段を聞いたら、俺の給料じゃ一生働いても買えないような額だった。失敗したらどうしよう。

「あー……マジで隊長達戦ってくれないのかぁ」

「何甘えてたこと言ってんのよ。これくらいの任務なら、あたし達だけで平気だってなのはさん達が判断したんだから、出来なきゃおかしいでしょ」

「ハイハイソーデスネー」

「ムカつく……」

ちなみにスバルはエリオと一緒に先行しているので、今のところ目を合わせたりする可能性は無い。

何かのはずみで戦闘中に目を合わせたりしないように気をつけないとな。俺は任務中だからって割り切って考えられるからいいけど、スバルはそういうの苦手だから。

『第一戦闘空間、河川敷グラウンドに固定』

『スターズF、ライトニングF、エンゲージっ！！』

ぐだぐだ考えている間に、目標ロストロギアが発見された場所にたどり着く。

河川敷グラウンドと呼ばれたそこには、確かにロストロギアと思しき物体が存在していた。

そう、存在はしていた――んだけど。

ポヨョ～ン、ポヨォ～ン、ボヨヨォ～ン

そこには、かなりの数のスライムが蠢いていた。

経験値低そうだなオイ。

「な、なにこれっ！？　ぷにょぷにょスライム？」

「ちょっと、可愛いですね……」

「それより数が問題よ。部隊長、これ、全部が本体ですか？」

『危険を感じると複数に分裂して、ダミー体を増殖するタイプみたいやな。せやけど、本体は一つや』

「本体を封印すると、ダミーも全部消えるですよ！」

なるほど、質量を持った残像ですね分かります。

しっかし厄介だな。無限に分裂できる可能性もあるから、なるべく早く本体を見つけないと……。

「放っておけば、増殖したダミーが街中に広がる恐れもある。私達空戦チームは広がったダミーを回収する。そちらはリインのサポートで、お前達がやってみせろ」

「素早く考えて、素早く動く！　練習どおりにやればいける筈だよ！」

「「「「「はい！」」」」」

シグナム副隊長にやれと言われたら、やらないと後が怖すぎる。

やれやれ、あんま気は進まないけど出来る限りやろう。訓練倍増とかされたら死ねる。

とりあえず前衛の指揮をティアナに任せ、俺はキャロと一緒に後方支援に徹することにした。

無数に分裂していくスライム相手に、一体一体潰していては効率が悪い上に、下手したらオリジナルを潰してしまいかねない。
ただ、ダミーは同じ行動パターンを取るみたいで、シャマル先生がその行動パターンを解析、とりあえずダミーと分かった物から集中して潰していくという作戦になった。

しかし、そこで大問題が発生する。
このスライム、見た目の通り物理攻撃全般が無効化されてしまうのだ。

「フリード！　焼き払え！」

「きゅくるー！」

「だ、だから何でハヤトさんの言う事聞くの、フリード……」

ならばとフリードの火炎で焼き払おうとしたが、これも効果なし。
ティアナから通常魔力弾も効果が無いって通信が来た。
ええい、あのスライムは化け物か！？

「さすがロストロギア、見た目は可愛いですけど、侮れません」

「可愛いは正義ですね分かります」

「？」

ネタが伝わらなかった、無念でござるよ。

『ハヤト！　ちょっと交代して、スバルとエリオと一緒にあいつらがこれ以上広がらないように見張ってて。その間に、あたしとキャロが本体を特定して封印するわ』

「……いや、でも」

『いいから！　さっさとする！』

「へ～い」

スバルがミスっても知らんぞ俺は。

渋々ながらもティアナとポジションを代わる。どうなっても俺は知らんぞ。

「っしゃ、エリオ！　スバル！　とりあえず同じような行動パターンの個体だけを優先して破壊するぞ！」

「はい！」

「う、ううううん！」

あー……やっぱスバルは駄目か。

戦闘中くらい切り替えしろよ。そういうのが苦手なのは知ってるけどさ。

こっちが呆れるくらいに赤くなるスバルを見て、俺はこっそり溜息を吐くのだった。

その後、本体を特定したティアナとキャロがオリジナルを封印。
さしたる被害も無く今回の出張任務は無事終了した。
とりあえず、今日はこのままこっちで一泊していくのかと思ったが、どうやら違うようですぐに帰るらしい。

「そう、もう帰っちゃうんだ……」

「一晩くらい泊まっていけばいいのに……って、いう訳にもいかないかぁ」

「うん、ごめんね？　今度は、休暇の時に遊びに来るから」

「あ、じゃあ俺！　俺残ります！！」

「ハヤト君。そのまま永遠に休暇にしてもええで？」

「……仕事って楽しいですね」

美人＜給料。
人って悲しいね、金の力には逆らえないんだもん。
隊長達がアリサさん達に挨拶しているので、俺はティアナ達と帰る準備をすることにした。

そしてそれから少し後、俺達は転送ポートによって機動六課のある、ミッドチルダへと帰還したのだった。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

これで、波乱に満ちた出張任務は無事完了したかな。
でも、凄い問題が残ってるんだよね……。
それは――

「……」

「……」

機動六課へ戻るヘリの中。
あたしとハヤトは、何故か隣同士で座っていた。どっちも喋れなくて、ずっと無言だけど。
恥ずかしくて、目もあわせられない。うぅ、あたし、どうしちゃったんだろ。

「ハヤト君、スバル、どうかしたの？　喧嘩でもした？」

「「っ！？」」

なのはさんに話しかけられ、ビクッとお互い電気に打たれたみたいに背を伸ばす。
わたわたと取り乱して、口からはまとまりの無い言葉ばかりが出てくる。

「い、いいいいいいや、何でもっ！　アレですから何でもないですよっ！？　なあ、スバル！！」

「う、ううううう、うん！　そうです、そうですよ！　アレですよアレ！　そう、えぇと……アレっていうかその……も、問題ありませんなのはしゃん！！」

「そ、そう？」

あたし達の勢いに気圧されたのか、なのはさんはぽかんとした表情のまま黙りこくってしまった。
駄目だ……いくらなんでも不自然すぎるよ。
いい加減落ち着かなくちゃ、落ち着けあたし。

「はぁ……」

姿勢を崩して、シートにもたれかかる。
そのまま、隣に座るハヤトの顔をちらっと覗き込む。

青い瞳。
ちょっと日に焼けた肌。

あたしよりも大きくてがっしりした、男の子の身体。

もう見慣れた筈なのに、あんなことがあったから変に意識しちゃう。

さっきだって、ハヤトを見ただけですごく恥ずかしくなっちゃったし……。

うぅ、何でこんなに緊張しちゃうんだろ。

「……何だよ」

視線に気付いて、ハヤトがあたしの方を振り返る。

慌てて視線を逸らす。

「ううん、何でもないよ」

「あっそ」

そんな短いやり取りで、また2人揃って押し黙ってしまう。

居心地が悪いとか、気まずいとかじゃないんだけど……何て言ったらいいのか分からない雰囲気。

こんなので、明日からまた、いつもみたいにできるのかな……。

「……なあ、スバル」

「何？」

「そう意識すんなよ」

あたしの考えを読んだみたいに、ハヤトが口を開く。
目は、明後日のほうを向いたままだけど。

「お前が気にしてる程、大した問題じゃないさ」

簡単に言うけど、そんな単純なことじゃないと思うよ？
そんな風に考えていると、ハヤトが照れてるような、困ってるような、そんな複雑な顔をしながらこっちを振り向いた。

「俺はさ、お前と居るのは元々好きなんだよ。それはお前も、だろ？
今回のでそれが少し照れ臭くなったって、気にする程のことじゃない。なら下手に意識しないで、いつも通りにしてりゃいいんじゃないか？
きっと、そのうち自然にいつも通りに出来ると思うぜ？」

そう言っていつも見たいに笑う。
――その笑顔に、心臓が高鳴った。

後で思い返してみると、これが決定打だったのかも知れない。
この時のハヤトの笑顔は、あたしにとって、それくらい衝撃的だった。
もちろん、その事に気付くのはずっと後のことだけど――それは、

置いておいて。

「……そう、かもね」

「ああ」

不思議と、自然に笑えた。

さっきまでの緊張とか、胸につかえてた気持ちとかが、一気に軽くなった気がする。

ハヤトと目を合わせて笑いあう。

今度は不思議と、恥ずかしくなったりはしなかった。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

ｓｉｄｅ：？

一人の男が、巨大なモニタを見ながら笑っていた。

男の隣には管理局の制服に似た服に身を包んだ女性が立っている。

「……ふふ、素晴らしい。素晴らしいね、この部隊は」

モニタに映し出されているのは、機動六課の面々。
映っているのは、リニアレールでの初出動の時と、つい先ほど届いた、第９７管理外世界での出張任務の時の映像だ。

「管理局のエースオブエース、夜天の主、そしてタイプゼロにプロジェクトＦの遺産……ね」

愉しそうに名前を挙げている男だが、その視線は先ほどから一人の少年を捉えて離さない。

「ドクター。その少年、ドクターが興味を持つような対象だとは思えませんが？」

「……ウーノ。ある集団を壊滅させるのに、最も効率的な手段は何だと思う？」

「は？」

女性――ウーノに話しかける間も、男の視線はモニタから外れることは無い。

「それはね、集団の中心となっている人物を消すことさ」

「あの少年がそうだと？」

「恐らく、ね。タイプゼロやプロジェクトFの遺産も興味深いが、この先あの部隊と戦うのなら、彼をどうにかするのが先かもしれないよ？」

「私には、そうとは思えませんが……」

ウーノの目には、少年はどう見ても中心となる人物には見えない。どこにでも居るような凡庸な少年にしか見えないのに、何故彼女の主たる男は、この少年をここまで気にするのか。

理解はできないが、彼の言う事に間違いは無いのだろうと自分を納得させる。

「とはいえ、今はまだ動くべき時ではないね。老人方の監視も、この間の一件で少し厳しくなったようだし」

「はい」

「ハヤト＝ロックウェル。いいね、実に興味深い」

モニタに大きく映し出された少年――ハヤトの映像を見ながら、男は笑みを深くした。

ｓｉｄｅ：？　了

第１５話　『出張任務　４』（後書き）

どうも、ラモンです。

スバルがどんどん乙女になっていく……ｏｒｚ
なぜだ、書き始めた時はどこぞの勇者王ばりに熱い漢になる予定だったのに。

それはさておき、出すのをすっかり忘れていた、とある科学の変態博士登場。
変態博士に狙われたハヤトの運命やいかに！？
とりあえず、書いててダメージを受けるような話はこれで一旦終了です。

あー……でも、次はティアナフラグが立ちそうなホテル・アグスタと「頭冷やそうか事件」があるんですよね。
えぇと、まあ、それなりで頑張ります。

それではまた、次の話で。

第１６話　『ホテル・アグスタ　１』

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

最初の出動の時も、それなりで上手くやれたけど、それだけで。
毎日の訓練も、そんなに強くなってる実感が無い。
でも、スバルやエリオ、キャロみたいな優秀すぎる仲間が居て。
あたしの周りには、天才と歴戦の勇者しかいない。

だから、どうしても疑問に思う。
何で自分がここにいるのか。あの人は何で、あたしを部下に選んだのか。

分からない。
分からないから、焦る。
でも、どうしたらいいかも分からなくて。

そんな風に悩んでいる時に、新しい任務が届いた。
オークション会場、ホテル・アグスタの警備任務。
オークションと言っても、勿論骨董品だけが取り引きされるだけならば、あたし達が出る幕じゃない。

本命は、取引許可が出ているロスト・ロギアなどに反応して出てくる可能性があるガジェット。
レリックが関わっている可能性は低いみたいだけど、ガジェットが出てくる可能性は高いらしい。

頑張ろう。

今度こそ、あたしの実力を示すんだ。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第１６話　『ホテル・アグスタ　１』

「ほな改めて。ここまでの流れと、今日の任務のおさらいや。
これまで謎やったガジェットドローンの制作者。及びレリックの収集者は現状ではこの男――違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進めてる」

八神部隊長の言葉と共に、モニタに白衣を着た男が映される。
うん、いかにもな悪役面だ。高笑いとか超似合いそう。
……科学者ってことは、改造人間とか造ってんのか？　バッタと人の遺伝子を掛け合わせたのとか。

「こっちの捜査は私が中心になって進めるけど、一応みんなも覚えておいてね」

「「「「「はい！」」」」」

覚えてはおきますが、あまり会いたくないですハラオウン隊長。

「で、今回の任務の会場はここ。ホテル・アグスタ」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

理由は、取り引きされるロストロギアに反応して、襲撃してくる可能性があるガジェットに対してって事らしい。

シグナム副隊長とヴィータ副隊長が、昨夜からずっと警備してくれているとの事だが、だったら俺らいらなくね？

隊長達が全員で出張ってるなら、新人なんて行く意味がないんじゃ？

「私達は内部の警備に回るから、皆は副隊長達の指示に従ってね」

「「「「「はい！」」」」」

なるほど、部隊長達が内部警備なら、外側は副隊長達だけじゃ手が足りないか。把握。

そうして最後の確認をしながら、俺達はホテル・アグスタへと向かった。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

オークション開始まであと数時間。
あたし達フォワードは、会場の外側に別れて待機していた。

『でも今日は、八神部隊長の守護騎士団全員集合かぁ～』

『そうね。……そういえば、あんたは結構詳しいわよね？　八神部隊長とか、副隊長達のこと』

『う～ん。父さんやギン姉から聞いたことくらいだけどね』

スバルが暇つぶしにって念話をしてきて、それに付き合ってると、八神部隊長の話になった。
そういえば、あんまり詳しいこと知らなかったわね。
スバルが言うには、八神部隊長の使うデバイスは魔導書型で、名前は「夜天の書」って名前みたい。
そして、副隊長２人にシャマル先生、ザフィーラ、リイン曹長の５人は部隊長が所有する特別固有戦力で、全員がそろえば無敵の部隊になる……ってことらしい。

『まあ、隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘次項だから、わたしも詳しくは知らないけど』

『レアスキル持ちの人はみんなそうよね』

『？　ティア、何か気になることあるの？』

『……別に、何もないわよ』

『そう、じゃあまた後でね』

そう言って念話が切れる。

だけど、あたしの心の奥底に、拭いきれない疑問が残る。

普通では考えられないほどの戦力を保有している機動六課。

部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないけれど、隊長は全員オーバーSランク、副隊長でもニアSランク。

他の隊員達だって、前線から管制官まで、全員未来のエリート達だ。

フェイトさんの秘蔵っ子で、あの年でBランクを取っているエリオと、レアな竜召喚士のキャロ。

危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性のかたまりで、優しい家族のバックアップもあるスバル

「やっぱり、うちの部隊で凡人はあたしだけか」

いや……違うか。

あたしは、いつもやる気のないチームメイト――ハヤトを思い浮かべる。

アイツはどうなんだろう？

こんな風に、不安になったりするのかな？

今度、相談してみようかな――ううん、駄目だ。聞いてもらったって、何の解決にもならない。

凡人なら凡人らしく、実力を証明してみせろ。
努力して、認めてもらえる位に努力して、証明するんだ。
兄さんの魔法は、役立たずなんかじゃないって。

「よーっすティアナ。何難しい顔してんだ？　あ、いつもか」

一人決意を固めていたら、どこからともなくハヤトが湧いて出た。
あたしの決意表明を台無しにするな馬鹿。

「……はぁぁぁ」

「どうしたどうした。溜息を吐くと幸せが逃げるぞ」

「アンタが来た時点で、幸せなんて全部裸足で逃げ出してるわよ」

「ティアナが酷い。俺泣きそう」

「うっさい」

まったく。こいつと居ると調子狂うわ。
まあ、少しだけ気が楽になったような気もするけどね。

『来ましたっ！ガジェットドローン陸戦？型、機影３０，３５……』

『陸戦？型、機影２，３，４！』

「「！」」

その時、シャーリーさん達から通信が入る。

……やっぱり来たみたいね。

あたしの思考が、日常から戦闘へと切り替わる。

『前線各員へ。状況は広域防御戦です。ロングアーチ１の総合管制と合わせて、私、シャマルが現場指揮を行ないます』

『スターズ０３、了解っ！』

『ライトニングＦ、了解！』

「スターズ０４、了解」

「スターズ０５、了解ッス」

シャマル先生の通信に答えながら、あたしは先生の待機している屋上近くへと魔力アンカーを射出する。

「俺も一緒に行く、頼むわ」

「ええ」

ハヤトがあたしの肩に捕まったのを確認して、そのまま屋上近くまで跳ぶ。

着地してから、屋上にいるシャマル先生に通信を繋ぐ。

「シャマル先生！　あたしも状況を見たいんです。前線のモニター、もらえませんか？」

「俺もお願いします」

『了解。クロスミラージュとブレイブハートに直結するわ』

クロスミラージュに前線のモニターが送られてきて、副隊長達の戦いが映し出された。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

モニタの中で、副隊長達が次々とガジェットをぶっ壊していく。

さすが、と言うしか表現のしようがない。

速度も展開力も、俺とは段違いだ。この調子なら、俺らの出番は無いっぽいか？　それならそれで、楽が出来るから大歓迎ですけどね！

「うわぁ、副隊長達とザフィーラ、すごーい！」

「コレで……能力リミッター付き？」

合流したスバルが感嘆の声を漏らし、ティアナは険しい顔でモニタを見ている。

……何だか、今日のティアナはおかしいな。あの日か？

「これなら、そんなかからずに終わ――『ケリュケイオンに反応っ！　誰かが召喚魔法を使ってます！』――はぁ！？」

『クラールヴィントにも反応。でも、この魔力反応は――』

『大きい、何コレ！？』

モニタが切り替わり、召喚魔法の魔力反応が示される。

確かにでかい。こりゃＡランクぐらいはあるか？

『スターズＦ、ライトニングＦと合流して、防衛ラインをお願い！』

「「「はいっ！」」」

シャマル先生の指示に従って、エリオとキャロが居る正面玄関前へと降りる。

合流してすぐ、同じ召喚士のキャロに確認した。

「キャロ、召喚士は他になにかしてきてるか？」

「今のところは何も……でも、きっと何かしてくると思います」

「オーケー。じゃあ、とりあえずここで待機。前衛はスバルとエリオ、センターはティアナで、俺とキャロはフルバックで行くぞ」

「了解っ！」

「分かりました」

「わかったわ」

「頑張ります！」

さて、とりあえず準備はしておくが、出来れば来て欲しくないな。

さっきから通信でちょくちょく入ってくる副隊長達の会話を聞けば、どうやら通常のガジェットよりも手強いらしい。

副隊長ですら持て余すのが、こっちに複数来るとなると、さすがにちょっとヤバイかも知れんし。

どうか来ませんように――。

「！？　遠隔召喚、来ます！」

「ってあああもう！　そのフラグは回収しなくていいっつーの！！！」

「え？　フラグって何ですか？」

「キャロ、そこはスルーするところだ」

「は、はぁ」

俺の叫びと共に、４つの召喚魔方陣が地面に浮かぶ。
そして、そこから現れるのは、いつぞやのデカブツ――陸戦？型１機と、訓練でよく見た？型が１０機。

「あれって、召喚魔方陣！？」

「召喚てこんなこともできるの！？」

「……優れた召喚士は、転送のエキスパートでもあるんです」

キャロ、解説ご苦労様。
でもスバルにエリオ。これ、ちゃんと訓練校で教わったはずだぞ。

「何でもいいわ、迎撃いくわよ！」

「「「おうっ！」」」

「……？」

意気込む3人とは別に、俺はティアナを見た。
やっぱり、今日のティアナはおかしい。なんつーか、妙に好戦的だ。
相手が召喚士なら、下手にこっちから仕掛けると、何されるかわからんねーってのに……。

「ちっ、しゃーねぇ。そこは俺がカバーするしかないか」

誰にも聞こえない様に舌打ちして、ブレイブハートを構えた。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

展開した？型に向けて弾丸を放つ。でも、訓練のダミーなんかとか比べ物にならない動きをするガジェットに、全て難なく回避されてしまう。
当たってもＡＭＦが強化されてるみたいで、てんで手ごたえが無い。

「くっ！」

自分の非力さに歯噛みする。
こんな奴ら、なのはさん達だった簡単に――

「ティアナ！！」

「！？」

後ろから飛んできた敵の攻撃を、ハヤトがアクセルシューターで弾いてくれた。

駄目だ、集中しなきゃ。

「何ボーっとしてやがる！　集中しろ！！」

「わかってる！！」

でも、このままじゃジリ貧だ。

守ってるだけじゃ勝てない……！

『防衛ライン、もう少し持ち堪えて！　ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから！』

「守ってばっかじゃ行き詰まりますっ！　ちゃんと、全機落とします！」

「おいティアナ、こっちは防衛戦だぞ。急いで全部落とす必要ねぇだろ、ちゃんと確実に――」

「大丈夫よ。あんなに毎朝毎晩、練習してきたんだから」
「いや、だけどな……」
なおも食いさがるハヤトを無視して、エリオに指示を出す。
「エリオ、センターに下がって！　私とスバルのツートップで行く！！」
「あ、はいっ！」
「スバル？　クロスシフトA、行くわよ！」
『おうっ！！』
「ちょ、待てティアナ！！」
ハヤトの呼びかけは聞こえないフリをして、あたしは前線に駆け出した。
大丈夫。あたしならできる。
スバルがウィングロードでガジェットを引き付けていく。
それを確認して、あたしはクロスミラージュのカートリッジをロードした。
数は、４発。

（証明するんだ……特別な才能や、凄い魔力が無くたって……）

あたしの周りに、無数の魔力弾が浮かび、そこに魔力が上乗せされていく。

（一流の隊長達がいる部隊でだって……どんな危険な戦いだって……っ！）

目を見開いて、ガジェット達に狙いを定める。

「あたしは、ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を打ち抜けるんだって！！」

クロスミラージュを構えて、引き金に指をかける。

『ティアナ！？　４発ロードなんて無茶だよっ！　それじゃティアナもクロスミラージュも……』

魔力が目に見える程に膨れ上がって、あたしの腕に電流のように絡みつく。

でも、いける！

「撃てます！」

《　Ｙｅｓ．　》

「クロスファイアー！」

両手を掲げて、引き金を――

「シュートッ！！」

引く！！

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

ティアナの誘導性魔力弾――クロスファイアーが、ガジェットに襲い掛かる。

それは着実にガジェットを捉えて破壊していったが、俺は直感的に悟った。

「……あの馬鹿！」

あれは、確実にティアナ操れる魔力の限界を超えている。
そんな状況でまだ撃ち続けてるってことは……絶対失敗する！
実際、既に精度が微妙に落ち始めてる。最初は中心を抉っていた魔力弾も、今は右上だったり左上だったり、段々的外れな場所に当たるようになっていた。

「エリオ、キャロ！　ちょっとだけここ頼む！！」

「「ハヤトさんっ！？」」

俺が駆け出すのと、ティアナの魔法弾が一発外れたのが、ほぼ同時だった。
その魔法弾が飛んでいく先には、回避ができない状態で空中を走るスバル。

「ブレイブハート！　ソニックムーブ！　そのあと俺の右手にありったけの防御魔法だ！！」

《　Ｙｅｓ　Ｍａｓｔｅｒ．　》

最早考えてなんかいられない。
全力で加速しながら地面を蹴って、展開されたウィングロードを足場にスバルの元へと駆け上がる。
そして、加速が切れた瞬間に、振り返りもせずに右拳を思い切り振り切る。

ガツンッ！！

もの凄い反動が、魔力弾を右拳が捉えたのを教えてくれた。
そのまま魔力弾を明後日の方向に殴り飛ばす。
殴り飛ばした弾は、そのままガジェットの残骸に当たって、残骸を完璧なゴミにした。

あんなのがスバルに当たってたら……想像するだけでゾッとする。
それと同時に、腹の底から怒りが湧いてくる。
誤射するのが判りきってたのに、あんな無茶するとか、何考えてやがる！！
俺は、ティアナを見下ろして、感情のままに口を開いた。

「何のつもりだ馬鹿野郎っっ！！！」

自分の口から出た怒声は、思っていた以上に大きかった。

「ち、違うのハヤト！　今のもコンビネーションのうちで――「黙ってろっ！！」――ひぅっ！？」

くだらねぇ事を言いやがるスバルを黙らせて、ティアナを睨みつける。
ティアナは、呆然とこっちを見ていた。恐らく自分の弾でスバルを撃ちそうになった事に、自分で驚いてやがんだろうな。
あんな無茶したら、当たり前だろうが！！

「ティアナ！！　何のつもりだって聞いてんだ！　答えろ！！！」

「あ……あたし……」

「ハヤト、今のはあたしが悪くって……」

「スバルは黙ってろって言ってんだろうが！！」

「でも――」

「……っ、ああそうかい！！　ならお前らは勝手にしろ！
俺はエリオとキャロの方に行く！　お前らはそこら辺で適当に遊んでやがれ！！
味方を撃つセンターも、自分を撃ち殺しかけた味方のミスを庇う、自殺願望のフロントもいらねぇっ！！」

これ以上馬鹿共に付き合ってられるか。
エリオとキャロの方に、増援でも来てたら大変だ。
俺は、項垂れる馬鹿2人の方を振り返ることなく、ウィングロードを走ってエリオ達の方へと向かおうとした。

「おい、どうした？　何があった？」

しかし、丁度戻ってきたヴィータ副隊長に呼び止められ、一旦足を止める。

「ヴィータ副隊長……いえ、馬鹿が無茶をしただけです」

「？　どういうことだ？」

「そこの馬鹿２人に聞いてください。俺は、エリオ達の援護に行かなきゃならんので」

「あ、おいハヤト！？」

ヴィータ副隊長の対応を馬鹿２人を押し付けて、俺は今度こそエリオ達の方へ駆け出す。

これ以上、あの２人の近くに居たくなかった。

「あぁくそっ！　右手痛ぇなぁっ！！！」

走りながら、収まらない怒りを誤魔化すように大声で怒鳴る。

多分、さっき魔力弾を殴り飛ばした時に、ヒビでも入ったんだろう。

痛みを堪えて、ブレイブハートを握り締める。

とりあえず今は、残りのガジェットを片付けることだけを考えよう。

余計なことを考えて、あの馬鹿の二の舞になるのだけは御免だ。

第１６話　『ホテル・アグスタ　１』（後書き）

ラブコメの次はどシリアスかよ！
どうも、ラモンです。

第１６話、別副題『ヴィータの出番をハヤトが奪ったぜ！』をお送りしました。
シリアスとか書きたくないです。
ずっとコメディを書いてたい……でも、ここを通過しないとティアナのフラグが立たないし……。

はやいとこ『ちょっと頭冷やそうか事件』を終わらせて、笑いが溢れる通常回に戻りたい……っ！
ラブコメの次にシリアスと、苦手が展開が続いて、もう作者のライフは０です。
頑張って続きを書きます。

それではまた、次の話で。

※感想、ここはこうした方がいいなどのアドバイス、お待ちしてます。

第17話　『ホテル・アグスタ　2』（前書き）

※注意

今回の話にはＳＥＫＫＹＯ成分が含まれております。
ＳＥＫＫＹＯが苦手な方、ＳＥＫＫＹＯアレルギーの方は注意してください。

第17話　『ホテル・アグスタ　2』

「おし、全機撃墜」

グラーフアイゼンを肩に担いで、ヴィータ副隊長が辺りを見回す。
俺もとりあえずエリアサーチをして、残存ガジェットがいないことを確認し、頷く。
あーくそ、マジ右手いてぇ。

『こちらもだ。召喚士は、追いきれなかったがな』

『だが、居ると分かれば対策も練れる』

「――だな」

シグナム副隊長と、実は喋れたザフィーラから通信が入り、それが任務終了の合図になった。
ヴィータ副隊長が緊張を解くのをみて、俺は息を吐く。
さすがに2人欠けた状態で、結構な数のガジェットを相手取るのはきつかった。まあ、あの状態のティアナ達に居られるよりは、何倍もマシだったろうけど。

「……そういや、ティアナはどうした？」

「俺は知りませんよ。ヴィータ副隊長が指示したんじゃ？」

「ティアさんなら、裏手の警備の方に」

「スバルさんも一緒です」

「そうか……それとハヤト。お前その右手、早いとこシャマルに治して貰え。痛ぇだろ？」

「バレバレっすか」

ちょっとおどけて肩を竦める。

ヴィータ副隊長はそんな俺を見て、「当たり前だろが」と苦笑した。

side：ティアナ＝ランスター

「ティア、向こう……終わったみたいだよ？」

スバルが話しかけてくる声が、酷く鬱陶しい。

八つ当たりだって分かってるけど、凄く、鬱陶しい。

「あたしは、ここの警備やってるから。アンタはあっち行きなさいよ」

「……あのね、ティア」

「いいから、行って」

「ティア、全然悪くないよ！　あたしが、もっとしっかり――」

「行けっつってんでしょ！？」

最悪だ。

スバルはあたしを思って言ってくれてるのに、八つ当たりしかできないなんて。

でも、今は誰にも関わって欲しくない。

「ご、ごめんね。また……後で、ね？　ティア」

スバルが走っていく足音が聞こえる。

悪いって思う気持ちはあるけど、今はホッとした気持ちのほうが強い。

ホント、最悪……。

「あたしは……」

思い出すのは、初めて見た、本気で怒ってるハヤトの顔。

それが頭にこびりついて離れない。思い出すだけで、涙が出てくる。

「あたしは……っ」

続けようとした言葉は、結局、口から出てこなかった。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第１７話　『ホテル・アグスタ　２』

「えっと。報告は以上かな？　現場検証は調査班がやってくれるけど、みんなも協力してあげてね？
しばらく待機してなにもないようなら、撤退だから」

「「「「はい」」」」

「……はい」

ティアナの返事が、少し遅れる。
さっきの顛末は、俺から高町隊長に報告しておいた。

ヴィータ副隊長もティアナ達から事情を聞いた後で報告はしたみたいだけど、その場にいなかったってことで、当事者の一人である俺も報告することになった訳だ。

制止を無視して無茶をした挙句、味方を誤射。
俺が間に合わなきゃ、スバルは最悪死んでた可能性だってある。
さすがに、お咎めなしって訳にはいかないだろう。

「それと、ティアナ……」

「っ！」

高町隊長に名前を呼ばれて、ティアナがビクッと身体を震わせる。

「ちょっと、私とお散歩しよっか？」

「……はい」

小さく返事をして、高町隊長に連れられて森の方へと歩いていく。
スバルは、そんな2人を心配そうに見つめている。
高町隊長が怒るってのは想像できないけど、どんな風に怒るんだ？　砲撃でもかますのか？
いや、いくらなんでもそれは無いだろ、おかしな想像すんな俺。

「それじゃあ、私達は調査のお手伝い。ティアナなら大丈夫だよ、

なのはも、ちょっと注意するだけだと思うから」

「あ、はい……」

ハラオウン隊長が、スバル達を安心させるように言う。
ちょっと注意って……それでアイツ、ちゃんと反省するかな？
反省しなかったら、また同じことしそうで怖いんだけど……まあ、
今は隊長に任せるしかないか。

「現場調査もお仕事の一つだし、勉強だよ。私は向こうにいるから、
判らないことがあったら遠慮なく聞いてね？」

「「「「はい」」」」

隊長に敬礼をして、それぞれの分隊ごとに指定された調査現場へ
と向かう。

「あの……ハヤト」

向かっていると、途中でスバルに呼び止められる。
振り返ると、スバルがバツの悪そうな顔でこっちを見ていた。

「何だ？」

「えと、さっきはありがと。右手……平気？」

「ああ。シャマル先生に治癒魔法かけてもらったからな。まだ少し痛いけど、明日には完治するってさ」

「そっか」

右手を軽く握ったり開いたりして、問題ないことをアピールする。しかし魔法って凄いね。手の甲の骨にヒビが入っていたのに、すぐに治っちまったよ。

「あとね、さっきのは本当にあたしが悪くて……」

「しつこい。殴るぞ」

「だ、だって……いたっ！？」

殴るって言ったのにまだ言うので、とりあえず宣言どおり頭を軽く殴る。

「ミスはミス。お前が庇ったって、それは変わらんだろ」

「それは、そうだけど……」

「大体、あれのどこをどう見れば、お前のせいになるんだよ。説明してみ？」

「だって、あたしが無茶させたからティアがミスしちゃったんだし……」

「はいダウト。お前はティアナの指示に従っただけ、むしろティアナがお前に無茶させたんだろ」

「あう……」

それ以上はちゃんとした説明もできないようで、俯いて黙り込む。

当然だな。全然スバルのせいじゃない訳だし。

「ちゃんとした理由もなく、ミスした相手を庇うな阿呆」

「でも、ティアが無茶した理由はハヤトも知ってるでしょ！？」

「理由があれば、仲間を撃っていいのか？」

「あれは！　ティアだって、わざと撃った訳じゃ……」

「そうだな。だけど、ああいう現場で自分の限界を間違った。それが問題……しかも事前にロングアーチに止められたのに、それを振り切って無茶をしてあの結果だ。俺じゃなくても、文句の一つくらい言いたくなるだろ」

センターガードは、部隊の中心で最も冷静に部隊全員を見て、その場の状況に適した作戦を立てて、それを実行しなきゃいけないポ

ジションだ。
そういう意味で、今日のティアナは0点……いや、マイナスか。
俺が部隊の責任者だったら、即刻クビにしたっておかしくないレベルの失態だよ。

「ティアナは、センターガードが絶対にやっちゃいけないことをしたんだ」

ただのミスショットなら、いくらスバルに当たりそうになったからって怒ったりはしない。
せいぜい、暫くそれをネタにアイツを弄るくらいだ。

「……でも、ティアはお兄さんの為に頑張ってるんだよ？」

「アイツの目標は知ってる。だから、強くなろうと必死になってるのも理解してるつもりだ」

「だったら！」

「なら隊長に説明してこいよ。『ティアナはお兄さんの為に頑張ってるんだから、味方を撃ってもいいんです』ってさ」

「そんな言い方……っ」

「お前が言ってるのは、つまりはそういうことだろ？」

責める様にそう言えば、スバルが言葉に詰まる。
そんな理屈を、認められる訳が無い。

「でも！　失敗しても、次頑張ればいいじゃんか！」

「次？　俺が間に合わなきゃ、お前の『次』は無かったかも知れないんだぞ？」

「！！」

言われてやっと気付いたのか、スバルが目を丸くする。
こいつは頭が良いくせに、どうしてこういう察しは悪いんだろうか。

「それが戦場ってモンだろ？　だからこそ隊長達は俺らを訓練してくれる訳だし、そのための訓練だ」

「……」

「そういったのを無視して、仲間の『次』を奪っちまうのも、お兄さんの為だから仕方ないって？」

だいぶ乱暴な理論だとは思うけど、スバルの意見を極論しちまえばこうなる。
そんなの、許されていい筈がない。

「もし、本気でお前とティアナがそう思ってるってんなら……お前ら2人だけで他の部隊行けよ。
俺はそんな奴らと、肩を並べて戦うなんて真っ平ゴメンだね」

「……っ！　もういいよ！　ハヤトの馬鹿っ！！」

そう怒鳴って俺に背を向けて走り出すスバル。
正論言われたからって逆ギレかよ。本当に変なトコ子供だなアイツは。
ちょっとキツく言い過ぎたかもしれないけど、理解させなきゃスバルの為にならんよなぁ。

ティアナは隊長が言ってくれてるだろうが、スバルは俺が言わなきゃ誰も言ってくれないだろうし。
あー、でもありゃ暫く臍曲げるよなぁ。絶対2，3日は口きかねーぞアイツ。

「ったく。何で俺がこんなキャラに似合わないことしなきゃならんのだ」

俺が他人に説教するとか、マジで笑い話にしかならないっつーの。
こういうのは、もっとこう……主人公っぽい奴がやるもんだろうに。

「……マジで二度とこんなキャラに合わないことしたくねー」

特大の溜息を吐いて、担当の区域へと向かう俺であった。
もう絶対、真面目キャラを気取ったりしないよ。
右手の骨にヒビ入るわ、気苦労は増えるわ、仲間には嫌われるわ、
いい事なんか一つもありゃしねぇ。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

林道を、なのはさんと2人で歩く。
怒られる……だろうな。あんな失敗しちゃったんだし。

「失敗、しちゃったみたいだね」

歩くのをやめて、なのはさんが振り返る。

「すいません。1発、逸れちゃって……」

「私は現場にいなかったし、もうハヤト君に怒られたみたいだから、
改めて叱ったりはしないけど」

「……はい」

言われて、ハヤトのことを思い出す。
あいつがあんなに怒ったのを見たのは、初めてだった。
それだけ、自分が馬鹿なことをしたって思い知らされる。

「ティアナは時々、少し一生懸命すぎるんだよね。それでちょっと、やんちゃしちゃうんだ」

その言葉で自分の未熟さを指摘されたみたいに感じて、あたしはうなだれる。
すると、なのはさんがこっちにきて、あたしの肩に手を置いた。
そして少しだけ厳しい目をして、口を開く。

「でもね？　ティアナは1人で戦ってる訳じゃないんだよ？　集団戦での私やティアナのポジションは、前後左右、全部が味方なんだから」

「……っ」

「その意味と、今回のミスの理由。ちゃんと考えて、同じ事を二度と繰り返さないって約束できる？」

「……はい」

しっかりと頷く。
言われなくても、2度とあんなミスはしない。
あたしはもっと強くなって、証明しなくちゃいけないんだから。

「なら、私からはそれだけ。約束したからね？」

「はい」

なのはさんの言葉は理解できる。言いたいことも、多分わかってる。

ただ、それでもあたしは強くなりたい。

兄さんの為にも、あたし自身の為にも。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

撤退準備が完了し、六課隊舎に戻れたのはもう日が大分傾いてからだった。

「皆お疲れ様。それじゃ、今日の午後の訓練はお休みね」

「明日に備えて、ご飯食べて、お風呂でも入って、ゆっくりしてね」

「「「「「はい！」」」」」

隊長達に敬礼をして、その場で解散。

全員で宿舎へと向かう。

「「「「「……」」」」」

しかし、俺も含めて誰一人喋ろうとしない。
スバルは案の定俺の事を無視してるし、ティアナは俺に話しかけ辛いってのがあるんだろう。
エリオとキャロは、全く喋らない俺達3人に遠慮して喋ろうとしない。

チビっ子ズに気まずい思いをさせて悪いとは思うんだが、こればっかりは俺にはどうしようもない。
スバルは一度臍曲げると長いからなー……。あ、アイスでも奢れば一発で機嫌直るか？

「……スバル、あたしこれからちょっと1人で練習してくるから」

なんて考えていたら、ティアナがそんなことを言い出した。
おいおい、休めって言われたばっかだろうが。

「自主練？　あたしも付き合うよ！」

「あ、じゃあ僕も」

「私も」

え、なにその連携。
お兄さんびっくりして乗り遅れちゃったよ。
いや、乗る気はさらさら無かったけどね。

「ゆっくりしてね、って言われたでしょ。アンタ達はゆっくりしてなさい？　それにスバルも。悪いけど、１人でやりたいから」

「う……うん……」

そう告げて、歩き出すティアナの背に声をかける。

「お前も、休めって言われたろ」

「……大丈夫よ。ちょっとだけだから」

「命令無視で怒られた後に、すぐにまた命令無視か？」

「！」

「ハヤト！！」

咎めるように尋ねれば、ティアナは身体を震わせ、スバルが鋭い声をあげる。
でも、俺は言葉を止めない。

「もし緊急出動がかかったらどうするんだ？　疲れた身体で現場に行って、“また”仲間を撃つつもりか？」

「っ！」

弾かれるようにティアナが振り返って、腕を振るった。
乾いた音がして、右頬に痛みが走る。

「……ってぇ」

「アンタに、何がわかんのよっ！」

ティアナは目に涙を溜めて、俺を睨んでる。
だけど、俺もここは譲れない。
どう考えたってオーバーワークだし、隊長の言ったことを無視してるしな。

「あたしはっ！　自分の失敗が許せないの！　だから、少しでも訓練して強くなりたいのっ！！」

「そのせいで、また失敗するかもしれないのにか？」

「それでも、あたしはやらなきゃならないのよ！！　あたしには、才能が無いんだからっ！！」

「才能を言い訳に使うなよ。そんなのは、大昔の負け犬が作った言葉だ」

「うるさいっ！　平凡でいることに満足して、努力もしてないアンタにあーだこーだ言われたくないわよっっ！！！」

「自分にできるかどうかも判断できずに、味方を撃つよりは何倍もマシだろ」

「そんなこともうしないっ！！」

俺の言葉に、子供みたいに叫びながら応えるティアナ。
言ってることが滅茶苦茶だ。
どう考えたって、今から訓練するメリットなんて無い。集中力も落ちてるだろうし、体力だってキツイだろ。
そんな状態でやったところで、何が身につくってんだ。

「何で邪魔するのよ！！」

「お前が間違ってるからだろ。お兄さんのことを言い訳に、自分のワガママを正当化しようとするな」

「……っ、馬鹿っ！！」

もう一度俺の右頬をひっぱたいて、背を向けて宿舎へと走って行くティアナ。
瞬間、今度は左頬に衝撃と痛みがはしる。

「ったたた……」

「ハヤトの馬鹿！　何でティアの気持ちをわかってあげないのさ！！　わからず屋！！」

人の顔をぶん殴った挙句に馬鹿よばわりして、スバルがティアナの後を追う。

あんにゃろ、やり逃げかよ。あーくそ、歯ぁ折れてないよな？

「……あの、ハヤトさん。大丈夫ですか？」

「ん？　ああへーきへーき。悪い、嫌なモン見せちゃったな」

心配そうに声をかけてくれたキャロの頭を、苦笑して撫でる。

エリオは何も言わないけど、同じく心配そうな顔で俺を見ていた。

「いえ……でも、ティアさん達と喧嘩しちゃって、平気なんですか？」

「平気、ではないかな。暫くは気まずいかも知れないけど、我慢してくれな？　そのうち戻ると思うからさ」

「あ……えと、はい」

「うん。悪いな2人とも」

小さい子に気を使わせるとか最低だな、俺。

エリオとキャロに謝りながら、俺は2人と一緒に宿舎に戻っていった。

あー、後でシャマル先生に湿布とか貰おう。明日の訓練に顔腫らして行く訳にも行かないし。

第17話　『ホテル・アグスタ　2』（後書き）

息抜きしたら、意外と書けた。
どうも、ラモンです。

よし、2人と仲直り……あれ？　してない？
ど、どういうこと！？
予定ではここで仲直り→3人で頭冷やそうかの予定だったのに……。

ノリって怖い。
あと、よく見るとスバルが可哀想すぎる。ハヤトに怒られて、ティアナにも邪険にされて……。
あ、でも自分はSなのでちょっと興ｆ……なんでもないです。

ティアナ編、あと2話くらいで終われれば良いかなと思ってます。
予定は未定ですけどね！

番外編に関してなのですが、割り込み投稿だと最新話を投稿しても、最新話として検索に反映されなくて色々困ると判明したので、一旦削除します。
→
第1部として割り込み投稿すれば、本編を最新話として投稿できると気付いたので、第1部として再投稿しました。
これから、番外編は本編の上に割り込み投稿します。

第１８話　『あたしの気持ち、アイツの思い』（前書き）

※今回の話は、注意事項が多いです。
・ティアナがキャラ崩壊してるかも。
・前回以上にＳＥＫＫＹＯ成分が多いです。
・作者の脳が崩壊してるため、文章が支離滅裂な可能性も。

以上に注意して、生暖かい目で見てやってください。

第１８話　『あたしの気持ち、アイツの思い』

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

自分の失敗が許せなくて。
少しでも強くなろうと思った。

でも、それはずっとチームを組んでたハヤトに否定されちゃって。
アイツはきっと解ってくれるって思ってたから、凄く悔しくて、辛くて。
だから、アイツに内緒で強くなって、見返してやろうって思った。
なのに……。

「……なーにやってんだか、お前は」

なんで、よりによってアンタに速攻で見つかるのよ。
あたしは溜息を吐いて、こっちに近付いてきているハヤトを見た。

「……何しに来たのよ？」

「んー、まあ、ちょっとお前に用があって」

「……おちょくりに来たんなら、帰って」

そう言って睨むと、はやとは肩を竦めてから咎めるような目であたしを見た。

「あんだけ言ったのに、命令無視か？」

「……っ」

「高町隊長に報告してもいいんだぞ？」

なのはさんに報告されるのは、まずい。

こんなことしてるって解ったら、きっと止められるし、自主練を禁止されるかも知れない。

「……それは、やめて」

「ふむ、自分が怒られることしてるって自覚はあんのか。なのに、そうやって自主練してる訳？」

「……別に、いいでしょ。アンタに迷惑はかけないわよ」

「迷惑？　もう十分にかけてると思わねー？」

「少なくとも、これからは迷惑なんてかけないから」

「今日あんなミスをした奴の言う事、信じられると思う？」

「あんなミス、もうしないって言ったでしょ！？」

ハヤトを怒鳴りつけながら、涙が滲んでくる。
なんでコイツに、ここまで言われなきゃいけないのよ。
あたしはただ、強くなろうとしてるだけなのに……！！

「しないかどうかなんて断言できないだろ。第一、そんな状態じゃ出動できるかどうかも怪しいだろうに」

「できるわよ！」

「そんなヘロヘロなのにか？」

「できるっつってんでしょ！！」

「……ホントは無理だってわかってんだろ、お前も」

「うるさいっっ！！！！！」

ハヤトの言葉を遮るくらいに大きな声で叫ぶ。

「……なあ、ティアナ」

「うるさい！！」

反射的に、ハヤトの頬めがけて右手を振るう。
でもそれは、届く前に受け止められてしまった。

「話くらい聞けよ」

「うるさい！　うるさいっ！！」

自分で感情を抑える事が出来なくて、夢中で今度は左手を振るうけど、それも受け止められる。

「聞けっての」

「嫌！　アンタの話なんて聞きたくない！！」

耳を塞ぎたかったけど、両手を掴まれてるから出来なくて。
必死に頭を振って、アイツの声が聞こえないようにした。

「もうこれ以上、あたしを否定するな！！」

「なにをそんなムキになってんだよ、お前」

「なってないっ！！」

「なってるだろが……なあ、おいって」

「聞きたくないっ！」

話なんて聞かずに、ただただ反射的に叫ぶ。
まるで子供だ。
だけど、コイツには……ハヤトだけには、あたしを否定して欲しくない。
それが何でなのかは、わかんないけど。

「いいから、聞けよ」

「聞きたくないって言ってんでしょっ！？」

「……あああもうっ！！」

「っ！」

いきなり抱きしめられて、息を呑む。
え……あれ？　なんであたし、ハヤトに……。

「少し落ち着け、な？」

「……」

ぽんぽんと軽く背中を叩かれて、子供をあやすみたいに頭を撫でられる。

普段なら、馬鹿にしてるのかって思うのに……悔しいけど、すごく落ち着いた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第１８話　『あたしの気持ち、アイツの思い』

「落ち着いたか？」

「……ん」

ハヤトから身体を離して頷く。
落ち着いたら、途端に恥ずかしくなってきた……何やってんのよあたしは。
あんな、子供みたいに泣いたりして。

「……話、聞けるな？」

「……ん」

少しだけ迷って、でも、頷いた。
ハヤトは「そうか」と言って、一呼吸置いて話しだす。

「なあ、ティアナ」

「……うん」

「俺はさ、別にお前が自主練することは否定しねーよ」

「……そう」

「だけど、今お前がやってる自主練は、意味が無いって思う訳だ」

言われて、肩が震える。

「ミスショットが悔しいのは解るさ。俺だって射撃型だからな。
それを気にして、次からはミスショットしないように練習しようって思う気持ちもわかる。
でもよ、こんなオーバーワークしてたら、自主練の意味自体が無いってくらい、お前もわかるだろ？」

「でも……」

「帰って来た時言ってたよな、才能が無いから努力しなきゃならないって。
それは道理だけどよ。これは……努力じゃねぇだろ」

ハヤトの言葉を、否定できない。

落ち着いて考えてみれば、確かにその通りだから。
それでも、やらなきゃいけないんだ。そうじゃないと――

「強くなりたいなら隊長に相談するとか、俺やスバルに相談するとか、他にも手段はあった筈だ。
なのにお前はそれをしないで1人でやろうとした。何でだ？」

「……」

「怖かったんだろ？」

「っ！？」

心臓が、跳ねた。
思わずハヤトから顔を逸らして俯く。
そんなあたしを見て、ハヤトが溜息を吐くのが聞こえた。

「こんなこと、ホントは言いたくねーんだけどさ。
スバルはお前にぞっこんだし、高町隊長に言ってもらうってのも……何か違うと思うし。
……だから、仲間として俺が言うわ」

聞きたくない。
でも、あたしの思いなんて気づきもしないで、ハヤトの言葉は続く。

「お前は、怖かったんだろ？
自分が凡人だから、才能がないから、俺達がお前から離れてくんじゃないかって」

「そんなこと、無い……」

「ティーダさんの為とか、才能がどうとか、そんなの全部言い訳で。
本当のところは――」

「やめて……」

「――『自分が、俺達に必要とされてる』ってことを、自分に証明したいからじゃないのか？」

「やめてよっ！！」

両手で耳を塞いで、その場に座り込む。
聞きたくない。
これ以上、ハヤトの口からあたしの――“ティアナ＝ランスター”の本音を聞かされたくない。

「……やっぱな」

溜息と一緒に、ばつの悪そうな声でハヤトが呟く。
表情は見えないけど、きっと呆れた顔をしてるに違いない。

「実力以上のことをしなきゃいけないと思って、アグスタで無茶をした」

成功すれば、あたしの実力が証明できると思ったから。

「それが失敗したから、疲れた身体で訓練をした」

そうしなきゃ、不安に押し潰されそうだったから。

「そんなの、言われなくてもわかってるわよ！」

自分の心と、ハヤトの言葉の両方を黙らせる為に叫ぶ。

わかってる。

今日やったことは全部、あたし自身の為。ただ、自分の為にやったことなんて思いたくなかったから、兄さんを言い訳に使っていただけなんだってことぐらい。

「だけど！　じゃあどうすればよかったのよ！？」

「……」

あたしには才能が無くて、努力したけど結果は見えなくて。

スバルやエリオ、キャロにハヤトも、どんどん実力が伸びていって、離されてる気がして。

「怖かったのよ！　アンタ達に捨てられて“また”1人ぼっちになるのが！」

「……そうか」

「努力しても全然強くなってる気がしなくて！　だから、無茶するしかなかった！！」

涙が溢れて、地面に零れた。

「教えてよ……あたしは、どうすればよかったのよ……」

もう、わけわかんない。
頭ん中がグチャグチャでまともに考えられないし、何を言ったらいいのかもわかんない。

「もう、やだ……アンタ達に迷惑しかかけられないなら、もう、六課にいたくない……」

「ばァか」

両手で顔を覆ってそう呟いた時、ハヤトがあたしの頭を軽く叩く。

「何を寝惚けたことばっか言ってんだおめーは。
なんでもかんでも1人で背負い込みすぎなんだよ。何で俺らに一言相談しねーんだ」

「言える訳、ないじゃない……」

そうだ。言える訳が無い。
そんなことしたら、きっと捨てられる。
「無能な奴はいらない」って言われてしまう。

「そうやって簡単に人に泣きつかないで自分で何とかしようってのは、お前のいいとこだけどさ。
もうちょっと俺らを頼ったっていいんじゃねぇか？」

ハヤトがあたしの頭に手を置いて、そのまま頭を撫でられる。

「お前が無茶したら、俺もスバルも、エリオ達だって心配するんだぞ？」

「だけど、あたしは……」

「俺だってお前だって、まだまだガキだ。
だから、なりふり構わず目の前のことに全力になる。迷惑だって

当然かけるし、力が足りないのだって当たり前だ。
それをいちいち気にしてたら、キリがねーだろうがよ」

「そんなの――」

そんなのは、実力があって周りから必要とされてる人の理屈だ。
あたしみたいに実力のない凡人が迷惑をかけたら、「いらない」って言われるに決まってる。
だから、少しでも早く強くなって、周りの人から必要とされなきゃいけないんだ。

「もっとさ、俺達を……仲間を頼れよ。
お前も俺達も、まだまだ半人前で、ガキで……1人で何でもかんでも出来る訳ねぇんだ」

「でも、あたしは――」

「不安なのが自分だけだなんて思うなよ。
誰だってそうなんだよ。スバルもエリオもキャロも、皆がそれぞれに不安で、それぞれに悩んでるんだよ。
悩みが違うだけで、みんな一緒なんだ」

言いながら、ハヤトが頭を撫でていた手を離す。

「だからそんなに難しく考えすぎるなよ。
一緒に少しずつ進んで、解決してきゃいいじゃねぇか」

そこで言葉を切って立ち上がり、ハヤトは「それにさ――」と続けた。

「俺にできない事はお前がやって、お前にできない事は俺がやる。それが――チームってもんじゃねぇの？」

隊長だって、多分同じ事言うぜ？　とハヤトが笑う。

そこで、今日なのはさんに言われたことが頭の中でフラッシュバックした。

『集団戦での私やティアナのポジションは、前後左右、全部が味方なんだから』

あたしの背中をハヤトが守って、ハヤトの背中をあたしが守って。

スバルが突撃するのをあたしとハヤトで守って、攻撃をスバルがやってくれて。

あの時、あたしは2人に『必要だ』なんて言っただろうか？

そんなこと、言ってない。

だって、言わなくても2人はわかってくれてると思ってたから。

あたしも、言われなくても2人に『必要とされてる』って、わかってたから。

それに……。

スバルが射撃を出来ないからって、ハヤトが格闘が出来ないからって、2人を『足手まとい』なんて思ったことがあった？
2人がミスをしたからって、邪魔だなんて思った？

……そんなことも、忘れてたんだ。

でも、ハヤトのお陰で思い出せた。
迷惑をかけて、かけられて。そうやって一緒に成長して。
『必要とされてる』って証明しなくても、あたしが『必要とされてる』って分かる場所。

それが、“チーム”なんだ。

「それによ。お前が居なくなったり、怪我したりしたら、俺の仕事が増えるだろうが。
あんま俺に余計な苦労かけさせんなって」

ポンポンと頭を軽く叩いて、ハヤトの手が離れた。

「部屋に戻ってスバルにも話してみろよ。きっと、俺と同じ事言うだろうぜ」

「……ううん、いい」

頭を振って、顔を上げる。
ちゃんと見たハヤトの顔は、笑っていた。

「何だ、聞くだけ無駄ってことか？」

「違うわよ。長所と短所を比べて卑屈になってるなんて、ナンセンスだってわかったの」

「つい今しがたまで、それでウジウジしてた奴の台詞じゃないな」

嫌味を言うハヤト。でも、顔は笑ったまま。
それに答えるあたしの顔も、多分笑ってる。

「もう平気よ。どっかのお節介な奴が、大事な事を思い出させてくれたから」

「ふ～ん……？　まあ、その顔なら大丈夫そうかな。ほれ」

差し出されたハヤトの手を握って立ち上がる。

「で？　どうするつもりなんだ？」

「まずは、明日にでもなのはさんに相談しに行くわ。強くなりたいって言うのは、本当だから」

「あっそ。じゃあ、今日はさっさと帰って寝れ。明日も早くから訓練だぞ」

「アンタこそ、遅刻しないでよね」

いつもの軽口。
それが、なんだか酷く心地いい。

「……それと、ありがと」

そう言って、自分でも意識しないでハヤトの頬に軽くキスをした。

「んなっ!?　なななななな……っ!!」

「これは、お礼。じゃあね、おやすみ」

頬を抑えて真っ赤になるハヤトに笑いかけて、宿舎に向かって走り出す。
まずはゆっくりと寝て、明日の訓練を頑張ろう。
それからスバルに謝って、エリオとキャロにも謝って、皆で頑張ろう。

走っている足は、疲れなんか感じさせないくらいに軽かった。

side：ティアナ＝ランスター　了

「……え？　何？　どういうことなの？」

一人取り残された俺は、頬を抑えて呆然とティアナが走っていったほうを見ていた。

えーと？　俺はティアナに話をしに来て、話が終わったらティアナにほっぺにチューされて……？

えぇー？

「フラグなん？　いやでもお礼って言ってたし……どういうことなのブレイブハート？」

《　私にはわかりかねます　》

「ですよね」

……うん。気にしないことにしよう。

気にしたら何か色々負けな気がする。

とりあえず、あの馬鹿も考え直してくれたみたいだし、それで良し！

異論は認めねぇっ！！

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

遅いな、ティア……。
リボルバーナックルのお手入れをしながらそんな風に思ってると、ドアが開いてティアが帰って来た。

「あ、おかえりティア……って、どうしたの！？」

「？　何がよ？」

「顔真っ赤！　それに目も赤いよ！？」

「え……？」

あたしに言われて初めて気付いたみたいに、ティアが自分のほっぺたを触る。
だってティアは１人で自主練してて……あ、もしかして！

「ハヤトに何かされたの！？」

「うえっ！？　ハ、ハヤト！？」

「やっぱり！　ハヤトめ～……ちょっと行って殴ってくる！！」

「ちょ、ちょっとスバル！！　違う！　誤解、誤解だから！！」

走っていこうとしたら、ティアに止められた。
なんでハヤトの事庇うんだろ？　もしかして何かで脅されてるとか？
きっとそうだ！　ハヤトってそういうこと平気でするし！！

「ティア、あたしはティアの味方だから。ハヤトなんかの事、庇わなくていいよ？」

「いや、その違うの……えと、これはあたしがやった結果というか、無意識の行動の結果というか……」

「？」

「と、とにかく！　ハヤトは関係ないから！！　じゃ、おやすみ！！」

え？　え？
ティアは一気に捲し立てて、そのまま着替えないでベッドに潜っちゃった。
ハヤトがティアに何かしたんじゃなくて、ティアがハヤトに……？
？　よくわかんないけど、多分ハヤトが悪いんだよね。
明日会ったら一回殴っておこう。うん。
まあ、ティアが元気になったから良かったかな？

とりあえず、あたしも寝ようっと。

side：スバル＝ナカジマ　了

第１８話　『あたしの気持ち、アイツの思い』（後書き）

難産すぎた……。
どうも、ラモンです。

投稿の間が空いちゃってすいません。
何十回と書き直ししてたら、時間がかかりました。
その割になんか文章が纏まってない……
ティアナもキャラ崩壊してるし……欝だ死のうｏｒｚ

まあ、それは置いておくとして。
ティアナの独白とかは、完全に作者の妄想です。実際にアニメ中でこんなこと思ってたのかどうかはわかりません。
今回の話は、ティアナの近くに自分と似たような人が居て、そいつが早めに止めてたら……という妄想の元に作り出されました。

先に断っておきますと、これでティアナ編はおしまいで『頭冷やそうか』事件は起きません。
こういうのも面白いと思ったんです。

決して、模擬戦パートを書くのが面倒だったとか、そういう訳じゃないですよ。
ホントデスヨ？

さて、次回からはようやくギャグに戻れますよ。
こんなに嬉しいことはないです。
それではまた、次の話で。

……というか、今回の話だけみたら、ヒロインティアナにしか見えない罠。

※沢山タイトル応募ありがとうございました。
今回は、プワゾンクロウさんの「君の気持ち、俺の思い」をちょっと弄ったタイトルにさせてもらいました。
また、今回選べなかった方達のタイトルも、何らかの形で使ってみようかと考えています。
そのうちまた協力を仰ぐ場合があるかと思うので、その時はまたご協力をよろしくお願いします。

第19話　『パートナーで、ライバルで』

ホテル・アグスタ警備任務の翌日早朝。
ティアナの『ほっぺにチュー』のせいで、しこたま寝不足である。
そりゃもう、訓練着に着替えながら寝れる位に。
俺は宿舎入り口前の階段に腰掛けて、大きな欠伸をした。

「ハヤトさん、大丈夫ですか？」

「ん～～～……あんま大丈夫じゃねぇ」

くそ、眠気のせいで頭が全然回らん。
それもこれも、ティアナが変なことしたせいだ畜生。
あーでも、ティアナの唇って柔らかかったなぁ……。

「……っ」

変なことを思い出して、一気に顔の温度が上昇する。
やばい、彼女いない歴＝年齢の俺に、あれは刺激が強すぎたらしい。

「？　ハヤトさん、どうしたんですか？　顔、赤いですよ？」

「ふぉうっ！？　い、いやいや何でもないですよ！？」

「はぁ……」

どうした俺、落ち着け俺。まだ慌てる時間じゃない。
くそっ、出張任務ん時のスバルとの一件といい今回といい、何で俺がスバルとティアナ相手にあんな雰囲気に!?　どうせならもっとこう……大人の女性とそういう雰囲気になりたいと思うんだよ、お姉さん好きの俺としては!!
例えばハラオウン隊長とか、シグナム副隊長とか、シャマル先生とかさぁ!

「はぁ。つーか、どんな顔して会えってんだ」

「……誰によ」

「そりゃティアナに……ってうおあぁぁっっ!?」

後ろから聞こえた声に振り向けば、俺を見下ろしているティアナ。
驚いて飛び上がり、慌てて距離を取る。

「い、いきなり人の後ろに立つな!　びっくりするだろうが!!」

「何よ。ちゃんと声かけたのに、アンタが気付かなかっただけでしょ」

「マジで?」

「マジよ」

確認の為にエリオを見たら、「そうですよ」と肯定されてしまった。

この俺に気配を悟らせないとは、腕を上げたなティアナ！

「何馬鹿な事言ってんのよ。1人で頭抱えて悶えてただけじゃない」

「それは昨夜お前にされたこと思い出して……あ」

「え……」

「いや、その……」

自分で言って恥ずかしくなる俺。馬鹿か。

ティアナも思い出したのか、顔を赤くして俯いてしまった。

ああもう！　なんか調子でねぇなちくしょう！！

「おはよー……って、ティア？　どうしたの？」

「おはようございます……あれ？　ハヤトさん、ティアさん、どうしたんですか？」

挙句にスバルとキャロまで来る始末。

……俺にどうしろってんだよバカヤロー。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第１９話　『パートナーで、ライバルで』

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「……はぁ」

シャワーを浴びながら、深い溜息を吐く。
何であんなことしたんだろ……思い出すだけで顔から火が出そうだ。

「昨夜の自分をぶん殴ってやりたいわね」

お陰でハヤトと目を合わせられない。
顔を見るだけで、頬が熱くなって鼓動が速くなる。

「何なのよ、もう」

別に、アレはお礼なんだから意識すること無いじゃない。
これじゃまるで、あたしがハヤトのこと――

「そんなわけないそんなわけない！」

慌てて頭を振ってその考えを捨てる。
あんな冴えない馬鹿相手に、そんな事になる訳無い。
馬鹿だし、ゲームオタクの引き篭もりだし、いつだって不真面目だし……。

でも、優しいし、顔だって悪くないわよね……。
いつもは不真面目だけど、やる時はやるし、そういう時の顔も結構カッコいい……って！！

「そうじゃないでしょ！！」

冷静になれあたし！
アレはただのお礼！　それ以上でもそれ以下でもない！！
変に意識するからこんなことばっかり考えちゃうのよ！！

「うぅぅぅぅ……」

わかってるのに、頭からあの映像が離れてくれない。

「ホント、何であたしがこんなことで悩まなきゃいけないのよ……」

ハヤトのお陰で悩みが一つ吹っ切れたのに、ハヤトのせいで悩みが増えるってどういうことよ。

実際には自業自得だし、言い訳だってのも……わかってるんだけど。

「……はぁ」

シャワーを止めて、溜息を漏らしてハヤトの事を考えた。

訓練校の時から、スバルとあたしの一番近いところに居てくれたし、いつもあたし達を気遣ってくれて、いつでも側で見ててくれて。

そして――誰よりあたしに似ていた。

だから、アイツに否定されて悔しくて、悲しくて。

無茶してでも、見返してやろうって思ったんだ。

何であんなにムキになったのか……なんて――

「――決まってる、わよね」

昨夜のはきっかけで、多分ずっと前からそうだったんだ。
今までは、アイツが側に居るのが当たり前で、それで気付かなかっただけ。
そうだ。あたしはアイツが――

「ハヤトのことが――」

side：ティアナ＝ランスター　了

姉ちゃん、事件です。

「……むぅ」

スバルが食べ物を食べません。
明日はきっとS．L．Bの雨が降ります。遺書を書いておくといいでしょう。

「す、スバルさんどうしたんでしょう？」

「わからん。だが、普通じゃないことは確かだ。気をつけろ、空から何が降ってくるかわからんぞ」

「いや、さすがにそれは酷いような……」

何を言うかエリオ。
あの身体組織の9割が胃袋で出来ているようなスバルが、食物を食わないんだぞ？
天変地異の前触れとしか、俺には思えん。

「きゅくる～」

「フリード、いざとなったら俺はお前を盾にするからな」

「きゅくっ！？」

「だ、駄目ですよ！？」

「ＨＡＨＡＨＡ。冗談だよ、２割程はな」

「８割本気じゃないですか！」

冗談だって言ってるだろう、本気にするなよキャロ。
ウィットに富んだジョークという奴だ。

「冗談にしてはタチが悪いですよぉ……」

「きゅく～……」

「あっはっは、悪い悪い」

キャロの頭をぽんぽんと撫でてから、スバルに視線を戻す。

「むぅぅ……」

早朝、午前の訓練が終わった後に、ティアナが昨夜の事を話してからずっとこうだ。

下を向いてうんうん唸って何かを考えている。

話しかけても完全に無視。コイツに対する最終兵器である食事ですら、効果を発揮しない。

正直、明日世界が終わるって言われても、今以上の衝撃は感じないだろうさ。

「しっかし、何がそんなに引っかかってるんだコイツ」

「ティアさんに相談してもらえなくて、ショックだったとか？」

「それは無いな。こいつは基本的にティアナの事を無条件で信じてるから、その位じゃへこたれねぇ」

「じゃあ、ハヤトさんに怒ってるとか……」

「はは、だったら即座に殴りかかってきてるって、こいつ馬鹿だしおごっ！？」

笑い飛ばそうとしたら殴られた。
正気に戻ったのかと思ったが、まだうんうん唸ってるところを見ると無意識に反応したらしい。
なんという動物的反応。スバルの前世は間違いなく野生動物。

「むー……」

「……はぁ。打つ手無しだなこりゃ」

「そうなんですか？」

「スバルは単純な分、こうなると長いんだ。訓練校の時も一度似たようなことがあって、そん時は1週間このままだった」

「「一週間！？」」

「ああ。その間、俺は毎日世界が終わるんじゃないかと戦々恐々して過ごしてたよ」

訓練校時代のことを思い出して、ちょっと黄昏てみる。
あの時は本当に酷かった。
クラスの奴らも本気で遺書とか書いてる奴まで居たもんなぁ……。

今回はちょっと重症っぽいが、まあ前と同じでくだらないことで悩んでるんだろう。
前の時に悩んだ理由が『アイスのトッピングは何が一番良いか』だった時は、マジで呆れたもんだ。
放っておくのが一番だ。

「そのうちケロっと直るから、あんま気にするな」

「は、はぁ……」

「それで、いいんでしょうか？」

「いーのいーの。ほれ、さっさと飯食っちまおうぜ～」

どうせ訓練中にボーっとしてても、怒られるの俺じゃないしね。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

なんだか、胸が凄くもやもやする。

ハヤトとティアが仲直りしたってのは嬉しいし、２人が前よりも仲良くなったみたいだから良い事の筈なのに、訓練が終わってからずっともやもやしてる。。

何なんだろ？

「むー……？」

首を捻って考えてみるけど、全然答えが浮かばない。

うーん……よし、ちょっと整理して考えてみよう。

・ハヤトがティアに酷いこと言った↓ティアが許してるからオッケー。
・ハヤトがティアのこと泣かせた↓ティアが許してるからオッケー。
・ハヤトがあたしに酷い事言った↓ちゃんと謝ってくれたからオッケー。
・あたしがハヤトを殴った↓謝ったし、許してくれたからオッケー。

……あれ？　何も問題ないよ？
じゃあ何でこんなにもやもやするのかなぁ？

うーん、うーん……。

「ちょっとスバル？　いつまで一人で唸ってるのよ」

「うーん……って、へ？　あれ？　ティア？」

呼ばれて顔を上げたら、ティアが変な顔して立っていた。
あれ？　ハヤト達は？

「何言ってんのよ、ここ、あたし達の部屋よ？」

「えぇ！？」

慌てて周りをみたら、確かにあたしとティアの部屋。
あれ？　さっきまで食堂にいたと思ったんだけど……。

そだ、時間！

「ってえぇぇっ！？　もう午後2時！？」

食堂に居たのが12時だから……もう2時間も経ってるの！？

「ハヤトが送ってきてくれたわよ。何ボーっとしてた訳？」

「えっと……ちょっと、考え事」

「考え事？」

「うん」

ティアなら、わかるかな？
何で、あたしの胸がこんなにもやもやしてるのか。
うん。ちょっと聞いてみよう。

「ね、ティア。聞いてもらいたいことがあるんだけど、いいかな？」

「何よ」

ティアは返事しながら、あたしの正面になるようにベッドに座った。

あたしは、床に座ってティアを見る。

「……なんかさ、凄く胸がもやもやするんだ」

「は？」

「ハヤトとティアが仲直りして、それで前よりも仲良くなって。それは凄く良い事なのに……なんかね、２人を見てたら胸がもやもやするの」

そうやって言葉にするだけで、また胸がもやもやしてきた。

右手で胸の辺りを押さえて、ティアに続きを話す。

「昨日の事が原因かなって思ったんだけど、さっき考えたら全然関係なくて。

だから、なんなのかなって……」

「……」

「ティアなら、わかるかな？」

「……アンタ」

ティアの方を見たら、凄く驚いた顔をしてた。

あれ？　あたし、何か変なこと言ったかな？

「ティア？」

「……ねえ、スバル」

「え？　あ、うん。何？」

ティアが真剣な顔であたしを見る。
どうしたのかな？
もしかして、あたし、凄い病気だったり！？

「アンタ、ハヤトの事好きなんじゃない？」

「……ぅえ？」

あたしが？　ハヤトを？
えっと……え？

「だから、あたしとハヤトが仲直りして、前より距離が近くなって……嫉妬、したんじゃないの？」

「そんな……こと……」

無いって言おうとしたのに、言葉が出てこない。
あれ？　おかしいな……前に部隊長に言われた時は、あんなに簡

単に言えたのに。

「……あたしは」

「？」

不意に、ティアのほっぺたが赤くなった。
あたしが不思議に思って見ていると、次の瞬間、ティアの口から凄い言葉が出て来た。

「あたしは、ハヤトの事……好きよ」

「え！？　えええっ！？　ティアが、ハヤトを！？」

ど、どどどどういうこと！？
何がどうしてどうなってそんなことに！？
えとえと……えぇぇっ！？

「……落ち着きなさいよ。スバル」

「むむ、無理だよ！　だってハヤトがティアでティアがあたしでっ！？」

「落ち着けっての！」

「あいたっ！？」

思いっきり、脳天に踵落としされた。

い、痛いよティア～。

「落ち着いた？」

「……えと、うん」

まだちょっとほっぺたの赤いティアナが、あたしを真っ直ぐ見つめてる。

頭の痛みとその視線で、少しだけ落ち着けた。

「あたしは、アンタがハヤトの事を好きでも構わないわよ」

「そんな、あたしは……」

「……違うの？」

「……わかんないよ。そんな、いきなりで」

頭ぐちゃぐちゃだし、そんなこと、考えた事無かったし……。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

side：ティアナ＝ランスター

「あたしはね、多分ずっと……前の部隊にいた時から、好きだったんだと思う」

「ティア……」

まだスバルは混乱してると思うけど、何か、言わずにはいられなかった。

「だけど、ずっと『友達だ』って言い訳して、目を逸らしてた」

「……」

「けどさ、昨夜アイツに本気で怒られて、本気で喧嘩して……それから一人で色々考えて。

それで気付いた。あたしは、アイツが――ハヤトが好きなんだって」

考えるきっかけは、キスしたことだったけど……それは言わないでおこう。

「スバルのことは親友だと思ってる。だから、もしアンタもハヤトが好きなら、正々堂々勝負したい」

「……あたし、は」

「ねえ、スバル。アンタの気持ち……教えて。嘘じゃない、本当の気持ちを」

「あたしはっ！」

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

「あたしはっ！」

どう続けようとしたのか、自分でもわかんない。
ただ、ティアの言葉に弾かれるようにそれだけ言葉を発した。
だけど言葉は出てこない。

だからあたしは、一度目を閉じて考える。

あたしは、ハヤトのことをどう思ってるんだろう？
好き……だとは思う。けど、今までそれは、友達としての好きだと思ってた。
でも、友達だったら、今日みたいに胸がもやもやしないと思う。

こういうことは初めてで、よくわかんないけど……多分。

訓練校から今までずっと一緒に居て、ティアと同じあたしの親友で。

毎日馬鹿やって、あたしの事をからかって……。

だけど、それが凄く楽しくて。

そうやって思い出していくと、楽しかった思い出の中心は、いつもハヤトだった。

「……あ」

なんだ。

あたしも、ハヤトの事……好きなんだ。

今まで考えたこともなかった位一緒にいたから、全然気付かなかった。

でも、きっとあたしもティアと同じで、ずっと前からハヤトの事が――。

「あたしも、ハヤトの事――好き、かな」

「……そっか」

「うん」

2人で見詰め合って、笑いあう。

気持ちに気付いたのはティアが先だったけど、これで条件は五分。

だったら、あとは真っ向勝負！

「……負けないわよ？」

「あたしだって、負けないもん！」

あたしとティアは、お互いに拳を突き出して、軽くぶつけた。
覚悟してよねハヤト。
気持ちの決まったあたしとティアは、凄く手強いんだから。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

第19話　『パートナーで、ライバルで』（後書き）

どうも、ラモンで……ごふぁ。

な、何という羞恥プレイ！
自分で書いた文章の恥ずかしさに、色んなメーターが臨界突破しました。
何回途中で砂糖を吐いたか……っ！！

えー……まあ、そんな訳で、ヒロイン2人がハヤトに対して「好き」という感情を認識しました。
ホントはもうちょい後にしようと思ったんですけど、まあ前回のほっぺにチューがあったんで、その勢いのまま書いてしまえ、と。

はやて
「思ったのはいいけど、ここまで恥ずかしいとは思わなかった、と」

ええ。
ティアナじゃないけど、書こうと思った自分を殴ってやりたいよ。

はやて
「まあまあ、ええやないの。こういう馬鹿甘い展開も、時には大事やって」

こういう展開苦手な作者としては、公開羞恥プレイです。
ああ、でもここぐらいでやっとかないと後で辛いしなぁ……。

はやて
「ところで、何で今回は私がここにおるん？」

他の作家さんの小説を読んで、後書きでキャラと喋るのが楽しそうだったから。

はやて
「偉い単純な理由やな」

単純で結構。男は度胸、何でも試してみるものさ。

はやて
「ウホッ、いい男！」

どうも。
さて、次回はもう１話だけオリジナル話を挟みまして、それからいよいよ“あの”幼女が登場です。

はやて
「いよっ！　ロリは正義！」

それではまた、次の話で。

はやて
「今回は番外編も更新したから、ついでに見てな～♪」

※２／１５午前０時をもちまして、ルート選択投票を締め切らせて

頂きます。
沢山のご応募ありがとうございました。
集計結果は本編２１話後書きにて発表しようと思っております。

第２０話　『“必ず殺す技”と書いて“必殺技”』

俺こと ハヤト＝ロックウェルには悩みがある。
これはちょっと真面目な話で、それなりに深刻なものだ。
この悩みが出来たのは、つい最近の事。訓練のまとめとして、チーム戦をしている時だった。

木の陰に隠れながら、空を飛ぶ隊長に狙いを定める。
しかし速い。スバルとエリオが２人がかりでも追いつくのがやっとか。
うーん、最近手加減できなくなったって言ってたけど、マジで今まで手を抜いてくれてたんだなぁ。

『ハヤト！　ボーっとしてないで足止め！』

「あ、おう悪い」

ティアナからの念話で我にかえる。いかんいかん、集中しなきゃ。

「アクセルシューター１０、フォトンバレット１０」

≪　Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　≫

ブレイブハートを構えて、誘導型と直射型とを入り混ぜて魔力弾を展開。
とりあえずは隊長を止めないとな。あれじゃ、落とすとかそういう以前の話だ。

「スバル、エリオ。隊長の足を止めるぞ、先行してフォトンバレットで動きを止めて、アクセルで固める。
フォトンは速いぞ、巻き込まれるなよ！？」

『『了解！』』

「っしゃ、シュート！！」

直線にしか飛ばせない直射型のフォトンバレットを、隊長を中心とした円のように飛ばす。
不意をついたし、包囲する感じで飛んでいくので、隊長といえど立ち止まらざるを得ない筈だ。

「！？」

狙い通り隊長は急停止。その周りをフォトンバレットが通り抜けていく。
その隙に、少しだけタイミングをずらして発射したアクセルシューターで、隊長の上下左右あらゆる角度から囲む。

「いっけぇっ！！」

３６０度全てからアクセルシューターが隊長に襲い掛かる。
それと同時に、スバルとエリオが隊長目掛けて突進し、ティアナが狙いを定め、キャロがフリードに攻撃準備をさせる。

「ディバイィィィィン……っ！！」

「一閃必中！！」

「クロスファイアー……！！」

「ブラストフレア！！」

俺も４人に続いて構え、そこでとある事を思う。
ディバインバスターはスバルと被る。それは何と言うか嫌だ。え？　模擬戦の最中に言うなって？
いや、そこは男としてこだわるべきでしょう！？

しかし。だがしかし。
俺は気付いた。気付いてしまった。

「……あ」

ここで、何となく予想はついたと思う。
何で今まで気付かなかったのか、自分の頭の悪さが嫌になってくるぜ。
俺ことハヤト＝ロックウェルの悩み、それは――

「俺だけ、必殺技がねぇ……」

そこ、ずっこけるな。
他の人はどうかは知らんが、俺にとっては死活問題レベルの悩みなんだ！

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第２０話　『“必ず殺す技”と書いて“必殺技”』

「というわけなんですが、何か良い案はありませんか？　高町隊長」

模擬戦のラストでボーっとしてた件で、居残りで隊長に怒られていた俺は、お説教が終わったあたりで「高町先生、必殺技が欲しいです……」と切り出した。

「えーと、いきなり『必殺技が欲しい』って言われても……」

「高町隊長のS．L．B！　ヴィータ副隊長のギガントシュラーク！　シグナム副隊長のシュランゲフォルム！
ああいった格好いい技を、技名を叫びながら使いたいんです！」

「お、落ち着いてハヤト君」

「だいたい！　スバルやティアナ、エリオやキャロにもあるのに、何故俺にはないんですか！？」

「そ、そんなの私に聞かれても……」

迂闊だった。
今まで意識することが無かったから気付かなかったけど、気付いたら俺だけ個性が無い！
このままじゃいざ現場で頑張っても、誰の印象にも残らない『武装局員A』で終わってしまう！
美少女を助けても、「あれ？　あの時の人の顔が思い出せないや」とかなる可能性が高い。

そんなのは嫌だ！　俺もフラグが欲しい！

「だから隊長！　俺に必殺技を！　今すぐ！　早急に！」

「ちょ、ちょっとハヤト君！　近い近い！！」

「隊長！！」

《《　Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ．　》》

「ぶげらばっ！？」

隊長に詰め寄ったら、アクセルシューターが飛んできて吹っ飛ばされた。

ば、馬鹿な！？　デバイスがマスターに攻撃だと！？

しかも起動もしてないのに！？

《　マスターに危害を加えることは許しません　》

《　マスターの暴走を止めるのもデバイスの役目と、姉上に教わりました。

暴力的な手段を取ってしまい申し訳ありませんでした、マスターハヤト　》

「……いや、取り乱した俺が悪いんだ。レイジングハートさん、ブレイブハート、止めてくれてありがとう」

《《　どういたしまして　》》

デバイスにお説教されて頭を下げて謝罪する男が一人。

俺である。

「にゃはは……でも、ハヤト君。どうしていきなり必殺技なんて言い出したの？」

「いや、単純に戦力アップでもと思いまして。ティアナも隊長特製の自主練とかしてるみたいですし」

「うん。確かにティアナに相談されて、メニューを作ったけど……そっちじゃ、駄目なのかな？」

「はい。やはり使える魔法の幅を増やしたほうが、色々と戦術も増えると思いまして。
決して、決して！　スバル達ばっかり必殺技があって羨ましいとか、俺もたまには戦闘で目立ちたいなーとか、そういうことじゃありませんから！」

「……羨ましいし、目立ちたいんだね」

ええ、かなり。
それこそ夢に見るくらい羨ましいし、目立ちたいです。
つーか最近は妬ましいくらいです。

「隊長、お願いです！」

「う～ん……そう言われても、今日は午後からも訓練があるから、オーバーワークになっちゃうし……」

「今度スバルいち押しのシュークリーム買ってきますから！！」

「……しょ、しょーがないなぁ、ハヤト君は」

買収完了。

俺は前に見た、新世界の神のような笑みを浮かべた。

《　マスターハヤト、その顔をすると最終的に部下に撃たれてしまいます　》

ｓｉｄｅ：高町なのは

「とは言ったものの、どうしたらいいかなぁ？」

ハヤト君に押し切られる形で、もう一度訓練シミュレーターを展開したのはいいものの、何をどうしたらいいかわからなくてそう呟く。

必殺技って言われても、私のＳ．Ｌ．Ｂは元々レイジングハートに登録されてたのだし……。

「そういえばハヤト君、ディバインバスターじゃ駄目なの？」

「駄目です。あれは隊長やスバルと被りますから」

「そ、そうなんだ……」

「ええ。男として他人と同じ魔法を必殺技と呼ぶなんて、プライドが許せません」

拳を握って熱く語るハヤト君。

なんだか私にはよくわからないけど、こだわりっていうモノらしい。

本当にどうしようかなぁ。魔法を創るなんて、今までやったこと無かったから勝手がわからないよ。

「そうだ、ハヤト君はどういう方向性で必殺技を創ろうとしてるの？」

「そうですねぇ……やっぱ得意な分野の方がいいでしょうし、砲撃か射撃系かなとは思ってます」

「あ、ちゃんと真面目に考えてたんだ」

てっきり「どんな相手でも倒せる魔法」とか言い出すかと。

「自分の得になることに関しては、いつでも全力投球ですよ俺は！」

「それ、自慢にならないよ？」

ハヤト君って、時々何考えるのかわからなくなるよ。

私は小さく溜息を吐いた。

≪　砲撃でしたらマスターも得意ですし、何か参考になる意見を出せるのでは？　≫

「レイジングハート……」

ていうか、何となく買収されちゃったけど、私別に乗り気じゃないんだよ？
何でレイジングハートの方がやる気出ちゃってるの？

≪　妹が強くなる為でしたら、協力するのは当然かと思います　≫

「そ、そうなんだ」

≪　ありがとうございます、姉上　≫

レイジングハートって、シスコンだったんだ。
なんだか最近、私の知らないレイジングハートが出てくる場面多くなってない？

「ブレイブハート、お前いつの間にレイジングハートさんを『姉上』なんて呼ぶようになったの？」

≪　先日のメンテナンスの時です。姉上に頼まれて、フィニーノ陸

士に登録して頂きました　≫

「あの人は、俺のデバイスに何を……」

頭を抱えて溜息を吐くハヤト君。

でもねハヤト君、ハヤト君はシャーリーのこと言えないと思うよ？

こうやって私を無理矢理自分の用事につき合わせてるんだし。いや、買収されたのは私だけど……だ、だって、おいしいシュークリームは好きだもん。女の子なら仕方ないよね？

「あー、まあいいや。それより今は俺の必殺技だ」

「じゃあ、砲撃魔法の方向で考えるってことでいいのかな？」

「そうですねぇ……でも、俺って集束苦手なんで、自分の魔力しか使えませんよ？」

「そうなの？　あ、だからいつも砲撃を撃つと一発で疲れちゃうんだ」

「集束苦手ですいません」

なるほど、何で疲れるのかなって思ったけど、集束で周りの魔力を使わないから消耗が激しかったんだ……。

これは後々の課題だね。ハヤト君は魔力量が少ないんだし、集束で威力の底上げができるようにしないと。とりあえず今は時間もないし、集束の練習は後回しにするけど。

「じゃあ、射撃魔法を主軸として、攻撃力を上げたり色々工夫してみよっか？」

「うぃっす！」

まあ、やるって言っちゃったし、やるからには全力全開で頑張るよ！

ｓｉｄｅ：高町なのは　了

射撃魔法を主軸に新しい魔法を創りだす。

言葉にすれば簡単だが、実際にはかなり面倒なことだったらしい。

「威力強化するには集束技術が足りないし……かといって数増やしてもただの弾幕になっちゃって意味ないしなぁ」

「だよねぇ……集束の練習してもいいんだけど、それだと今すぐどうこうって訳には……」

《　何か属性を付加させる、という方向では駄目なのでしょうか？　》

「属性付加ったって、俺はシグナム副隊長やハラオウン隊長みたい

な魔力変換資質がないですし、属性付加は才能ないとやるだけ無駄じゃないですか？」

「確かに。属性付加はある程度才能まかせの部分があるしね」

困ったものだと隊長と二人で首をひねって考える。

俺の技量不足が原因なので、今すぐにどうこうできる問題じゃないから余計に困る。

魔力不足とかなら、カートリッジとか色々補う手段はあるんだが……。

「威力の底上げもすぐには無理、数を増やしても意味が無い……となると、あとは弾速かな？」

「弾速、ですか？」

「そう。アクセルシューターじゃなくて、フォトンバレットみたいな直射型の弾速を限界まで上げて、相手が防御する前に当てるようにするの。

イメージとしては、フェイトちゃんのプラズマランサーみたいな感じかな？」

「なるほど……ん？」

そこでティンときた。

直射型は誘導性を犠牲にスピードと貫通力・命中時威力にリソースを振った射撃魔法だ。

だけど、相手が知覚する前に当てるから貫通力は削っても問題なし。

速度がプラスされるから、威力もある程度なら削ってもいい。そしてその分のリソースを限界まで速度に振って……そしてアレをこうしてこうすれば……。

イケる！　これはイケる！！

「隊長、ちょっと思いついたんで、ターゲット出してもらっていいですか？」

「え？　うん。いいけど……」

「それでは……」

隊長がターゲットを用意してくれたのを確認してから、隊長と少し距離をとってブレイブハートを構える。

「フォトンバレット、貫通力無し、威力５割減、その分のリソースを全部速度に回した構成で１個だけ」

≪　Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　≫

隊長に出してもらったターゲットにバリアは無いから、思いついたままの設定で魔力弾を形成。

ブレイブハートの先に、楕円形、真紅の魔力弾が浮かぶ。

そして俺は、その魔力弾にとある魔法を組み込んだ。

「ソニックムーブ１０回分をバレットに組み込め」

《　Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ．　》

「ソニックムーブ？　ハヤト君、一体なにを……」

「見てのお楽しみです。ブレイブハート、弾道計算、反動計算、プロテクト準備、誤差修正、それと対衝撃波用の減衰魔法の準備よろしく」

《　弾道計算完了、反動計算完了、プロテクト準備完了、誤差修正良し、減衰魔法準備良し、撃てます　》

理論上は速度だけに特化した魔法になるから、慎重に狙いを定める。

周りに被害を出さない為にも衝撃波は消さなきゃいけないから、衝撃波による攻撃は見込めないしな。

「あ、隊長も一応シールド張っといて下さい。危ないかもしれないんで」

「うん、わかったけど……何するの？」

一応減衰魔法は準備してるけど、どれくらいの衝撃波がくるかは

ちょっと予想できないからなぁ。
衝撃波で隊長が吹っ飛んで怪我でもしたら一大事だ。

隊長が心配そうな顔のまま、とりあえずシールドを展開する。それを横目に確認してから、空に浮かんだターゲットに狙いを定めた。
うまくいけば、かなり強力な必殺技になるぞ～……わくわく、わくわく。

「シュート！」

《　ｓｈｏｏｔ．　》

刹那、俺の声が消えるより先にターゲットが爆発。
少し遅れて、空気を切り裂く音と突風が俺を通り抜けていった。

ｓｉｄｅ：高町なのは

「……凄い」

ターゲットが爆発したのを見て、呟く。
撃った弾丸が全然見えなかった。フェイトちゃんのプラズマランサーやフォトンランサーでも、何とか目で追うくらいは出来たのに……。
音が遅れて聞こえてきたってことは、音速を超えたのかな？

確かに弾速を上げたら？　とは言ったけど、いくらなんでも上げすぎだよ。
私は、ターゲットがあった場所を見上げてはしゃいでいるハヤト君を見て苦笑する。

「ソニックムーブ、どうするのかと思ったらフォトンバレットそのものを加速させたんだ」

なんというか、発想が凄いなぁ。
ソニックムーブは移動用だって先入観があったから、思いつかなかったよ。
こういう部分はハヤト君の長所だよね。既成概念に捕らわれないって言うか、発想がぶっ飛んでるって言うか……。

「よっしゃあ！　コレはイケる！　俺の時代来たんじゃね！？」

「……もう、ハヤト君てば」

私と2つしか違わないのに、変なところで子供なんだから。
そんな事を思いながら、ハヤト君の方へ近付く。

「今の見ました隊長！？　いや～、俺って天才じゃないっすかね！？」

「にゃはは。確かに凄かったけど、天才は言いすぎじゃないかな～」

「あ、そーいうこと言うんスか？　じゃあちょっと模擬戦やりましょうよ、必殺技ができた俺に隙はねーッスよ！？」

《　無謀です、マスターハヤト　》

「ええい黙っとれブレイブハート！　今の俺に不可能は無い！」

《　……了解しました　》

ブレイブハートも大変だね。

模擬戦かぁ、午後も訓練あるのに……まあ、疲れが残らないように一発で撃墜しちゃえばいいかな？

そんな風に思っていた時だった。

「ならば私が相手をしてやろう」

「「え？」」

私の後ろから、シグナムさんの声がした。

「途中から見ていたが、中々興味深い技を覚えたようだなロックウェル」

「シ……シシシシグナム副隊長！？　何でここに！？」

「何、訓練が終わった筈なのに訓練スペースから魔力を感じてな、何をしているのかと見に来たのだが……肉眼で捉えられない程の弾速で飛ぶ魔力弾か。そそられるな」

あ、シグナムさんの顔がバトルマニアモードになっちゃった。

これは、もう私じゃ止められないかな。

「いやあのほら、俺、高町隊長とやるつもりなんで……ね？」

「問題ない」

「問題ないって……隊長？」

「私には、止められないよ」

「くっ！　だ、だけどホラ！　今のもまだ出来たばかりですから、問題点とか改善点とか色々検討しないと……」

「私と戦いながらやればよかろう」

「た、たいちょお……」

「場所はどこにしましょうか、シグナムさん？」

「……うそーん」

ごめんねハヤト君。
午後の訓練はお休みしていいから、頑張って。

「ここで良かろう。丁度シミュレーターも起動していることだしな。
では行くぞ、ロックウェル」

「……ああ、これが死刑を執行される直前の囚人の気持ちなんだ」

シグナムさんに引き摺られていくハヤト君の顔は、何かを悟ったように晴れ晴れとしていた。
えっと……シグナムさん、手加減はしてあげてくださいね？

「もちろんだ。シュランゲまでしか使わん」

「……隊長、俺が死んだら、家族に『最後は笑って逝った』と伝えてください」

「ふっ、大袈裟な奴だ」

シグナムさん、多分ハヤト君は本気です。
ていうか、私もちょっと心配……。ま、まあ、危なくなったら止めればいいよね？

≪　医務室に連絡をしておきますか？　≫

「……そうだね、お願い」

《了解しました》

あ、そういえばさっきの魔法、ハヤト君は何て名前にするんだろう？

ｓｉｄｅ：高町なのは　了

第２０話　『“必ず殺す技”と書いて“必殺技”』（後書き）

ギャグだと筆の進みが速くて困る。
どうも、ラモンです。
ついに！　ついにハヤトが主人公っぽく必殺技を編み出しました！

フェイト
「２０話でようやくなんだ？」

まあね。元々は必殺技なんて使わせる予定無かったし。
武装局員が使う普通の魔法だけで戦わせるつもりだったんだ。

フェイト
「それが何で急に必殺技を？」

まあ、シリアスで頑張ったご褒美かな。
キャラに合わないことさせたし、右手の骨にヒビ入れたりしたし。

フェイト
「ああ、ティアナとスバルにフラグを立てる為の」

そうそう。
書いてる本人が誰よりダメージを受けた出張任務～アグスタの流れね。

フェイト
「でもハヤトって、お姉さん好きの割に私達とのフラグは立たないんだね？」

メインヒロインはスバルとティアナのつもりで書いてるからね。
作者がフラグ乱立って好きじゃないから、ニコポナデポ系の能力も持ってないし。
まあ、ルートがどっちになるかは投票結果次第で、まだわからないけど。

フェイト
「そうなんだ。
あ、そういえば今回も後書きでキャラと喋る形式にしたんだね」

うむ。真似してみたら、意外と面白くてな。
ゲストとかお呼びしたいくらいだ。

フェイト
「来てくれる人居るのかな？」

それはわからんけど、来てくれたらハヤトが凹みそうだな。
少なくとも、俺が読んでる作品の中ではダントツで弱いし。

フェイト
「あはは……それと、何で今回は私なのかな？」

本編で出番の少ない人の救済。
他の候補はヴィータとか、シャマルとか、本来主役級なのにこっちだと出番の少ない人たちかな。

フェイト
「うぅ……私も、結構教導には参加してるのに」

なのは視点だとフェイトにも出番はあるだろうけど、あくまでフォ

ワードの一員であるハヤトがメインだし、アニメに沿っての進行だからね。
ハヤトの視点だと、フェイトはたまに教導に参加する上官で、しかもライトニングの2人しか担当してないからね。
メインがハヤト視点だから、あいつがわからない、知覚してない場面は描写できない訳さ。

フェイト
「あ、だから騎士カリムとはやての話とか、私とシャーリーの話とかはカットしてあるんだ」

YES。
あんまり場面があっちこっち動いちゃうと、俺が書くの面倒――じゃなくて、読者の方々が戸惑っちゃうでしょ？

フェイト
「今面倒って……」

次はいよいよ『機動六課のある休日』編スタートです。
それではまた、次の話で。

フェイト
「ごまかした……」

※2／15午前0時をもちまして、ルート選択投票を締め切らせて頂きます。
沢山のご応募ありがとうございました。

集計結果は本編２１話後書きにて発表しようと思っております。

※２／１２感想での指摘がもっともすぎたので、ちょっと色々改稿しました。

前のよりも、必殺技に関する記述を細かくしてみたので、わかりやすくなったかなぁ？

第２１話　『休日と尾行と時々幼女　１』

「はい。今朝の模擬戦と訓練も無事終了、お疲れ様！」

つ、疲れた……。

訓練とは名ばかりの模擬戦と、模擬戦とは名ばかりの実戦を終えた俺以下フォワード５人は、息も絶え絶えに地面に腰を降ろしている。

いつもキツイが、今日はそれが５割増だった気がするぜ。

何かやったっけなぁ？

アグスタからこっち２週間は、結構真面目だった気がするんだけど。

「今日はいつもより厳しくしたんだけど、疲れたかな？」

「ええと……はい。かなり」

「今日って、何かありましたっけ？」

確認しようと高町隊長に尋ねると、少しだけ悪戯っぽく笑って答えてくれた。

「実は今日の訓練が、第２段階クリアの見極めテストだったの。ごめんね、言ってなくて」

「「「「「えぇっ！？」」」」」

衝撃の事実に俺達は声を揃えて叫ぶ。
テストて！　だったら先に言ってくれなきゃ困りますよ！？
しかし、驚く俺達５人をよそに高町隊長は、ハラオウン隊長、ヴィータ副隊長、シグナム副隊長に視線をめぐらせ、口を開いた。

「どうだったかな？　フェイト隊長」

「うん、合格」

「「「はやっ！？」」」

ハラハラしていたところでの即答合格通知に、思わずスバル、ティアナと一緒に突っ込む。
合格は嬉しいんですけど、もう少し考えてもいいんじゃないでしょうか。
そんな風に思っていると俺の意思を読んだかのようなタイミングでヴィータ副隊長とシグナム副隊長が口を開く。

「ま、こんだけみっちりやってて問題あるようなら、大変だってこった」

「不合格だった時は、私が一からもう一度より厳しくしごいてやるつもりだったのだがな」

「「あ、あはは……」」

ヴィータ副隊長の厳しい言葉と、シグナム副隊長の空恐ろしい言葉に、エリオとキャロが苦笑いを漏らす。
てかシグナム副隊長、アレ以上のしごきとか……ブルブル。
思わず自分で自分を抱きしめて震え上がる。俺の教導の半分はシグナム副隊長だから、容易に想像できてしまった。

「あはは……まあそれは冗談だと思うけど。
私も、結構いい線いってると思うし。これにて第2段階終了！」

苦笑した高町隊長から告げられた第2段階終了通知。
それがじわじわと胸に染み入って、嬉しさが込み上げてきた。

「よっっしゃあぁぁっ！！」

疲れも忘れて立ち上がり、拳を天に突き上げる。
スバル達も同じなのか一緒になって立ち上がって、思い思いに歓声を上げた。

「デバイスリミッターも一段解除するから、後でシャーリーのところに行ってきてね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練すっからな」

「「「「「はい！」」」」」

いやぁ、ついに午後の訓練からはセカンドモードかぁ。
ティアナのはダガーモードって話だけど、俺のはどんなんかなー
……って、ん？

「明日？」

「ああ、訓練再開は明日からだ」

頭の後ろで腕を組んで、にしし と笑いながらヴィータ副隊長が言う。
今日はまだ早朝訓練が終わったばっかなんだけど……セカンドモードのリミッター解除って、そんなに時間かかるのか？

「今日は私達も隊舎で待機する予定だし」

「皆、最近はずっと訓練漬けだったしね」

「「「「「？」」」」」

隊長達が言っていることの意味がわからず、他の皆と顔を見合わせる。
そんな俺達を見て、シグナム副隊長がニヤリと笑った。

「まあ、つまりだな。第2段階終了の祝いとして、今日は全員一日休みだ」

「「「「「「！」」」」」」

一日休みとな！？

休み！　休日！　ホリデイ！

天下御免の休息日！　一日寝て過ごせる日！

「街にでも出かけて、遊んでくるといいよ」

「いいいいいいやっっっっっっほぉぉぉぉぉぉう！！！」

さっきの合格通知の時とは比べ物にならない程の声量で、俺は歓喜の雄叫びを上げるのだった。

「うるっせぇ！」

「ぎがんとっ！？」

その後ヴィータ副隊長に海までホームランされたが。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「ティア、まだー？」

部屋の外から、スバルの声が聞こえる。

「もう少し待って」

「わかったー。でも、早くしないとハヤト寝ちゃうよー？」

「わかってるわよ」

その声に応えながら、自分の全身を鏡に映す。

「……別に、変じゃないわよね？」

そう呟いてから、全身をくまなく慎重にチェックしていく。
いつもよりちょっとだけ胸元を開けたシャツに、なるべく身体のラインが目立つようなインナー。
スカートも短めにして、下にいつも履くズボンは無しで、変わりに黒のニーソックス。

「……なんか、恥ずかしいわね」

自分の姿を見て、何だか頬が熱くなってきた。
正直、あたしの趣味じゃない。
とりあえず雑誌とかを見て研究してみたけど、これってかなり露出が多いじゃないの。
まあ、別にスタイルに自信がない訳じゃないけどさ……。

「でもあの馬鹿はこういうのが好きみたいだし……」

前に似たような格好をしたアイドルの写真集を見ていたハヤトの顔を思い出す。
デレデレと鼻の下を伸ばしていやらしい目で見てたわよね……あ、何かムカついてきたかも。

「って違う違う。ムカついてる場合じゃないわよね」

久しぶりの全休の日。

折角アイツを……その、買い物にでも誘ってやろうとしてるんだから、今ここで腹を立てても仕方ない。
スバルも待たせてるし急がないとね。

「……でも、行く前に練習した方がいいわよね？」

誰にともなく呟いて、鏡に向かって腕を組んでから口を開く。

「か、買い物に行くから付き合いなさい。拒否なんて許さないわよ」

……なんで命令口調なのよ。
気を取り直してもう一回。

「えっと、その……ひ、久しぶりの休日なんだしちょっと付き合ってくれない？　いいでしょ？」

……うん。自然だ、文句の付け所も無く自然だ。
これならアイツも着いてくるわよね。こなかったら無理矢理引っ張り出すまでだけど。

「よし、行きますか！」

鏡から視線を移し、気合を入れてドアを開ける。
アイツのことだから多分部屋で寝てるだろうし、部屋に行けば会えるわよね。
頭の中で今後の行動を考えながら、足を踏み出した。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

「……は？　尾行？」

「そう！　どうせ暇でしょ？」

「いやそりゃ暇っちゃ暇ッスけど……尾行って何ですかマジで」

機動六課宿舎のロビー。
フィニーノ陸士に頼みがあるからと呼び出された俺は、陸士から頼まれた内容に目を丸くしていた。

「だから、エリオとキャロのデートをこっそり尾行して、経過を見てきて欲しいの！　ね、いいでしょ？」

「デバガメじゃねーッスか。自分でやってくださいよ」

人の恋路を邪魔する奴はなんとやら。
つーか人様のデートを尾行するとか、どんな新手の拷問やねん。

涙で視界が滲むわ。

「そりゃ私も自分でやれるならやりたいけどさ、ちょうど仕事が立て込んでて無理なのよ。だからお願い！」

そういって顔の前で手を合わせ、ウィンクしてくるフィニーノ陸士。

うん、可愛いですよ。普通の男だったらイチコロですね。

「だが断る」

「え～！」

「えーじゃないですよ。いいじゃないですか、エリオに任せれば。アイツだって男ですよ、下手なことはしませんて」

「くっ、ロックウェル君に正論を言われると酷く悔しい！」

そんなことを言われた俺は酷く悲しいです。

「……しょうがない、これは使いたく無かったけど。使うしかないようだね」

「は？　一体何を……っ！？　ま、まさかそれは！！」

フィニーノ陸士が懐から取り出した物を見て、俺は驚愕した。
その右手に持っているのは、最新型のＢＳＰ、しかも極少数しか生産されておらず、今やネットオークションで１０万単位で取引されている限定色のクリアシルバーだ。

「どどど、どこでそれを！？」

「ふふ～ん。私の友達がＳＡＮＹの社員でね、こういうのは時々回して貰えるんだよ。欲しい？」

「欲しいです欲しいです欲しいです！」

「じゃあ、どうすればいいかわかるよね？」

「誠心誠意、エリオとキャロを尾行させていただきます！！」

光の速さで土下座してフィニーノ陸士に忠誠を誓う。
それ程までに最新型ＢＳＰクリアシルバーは魅力的なのだ。倫理観など吹っ飛ばす程に。
許せ、エリオにキャロ。俺はお前達を売る……許しは請わないよ。

「よろしい。じゃあ、あとでブレイブハートにエリオとキャロに渡した予定表を送信しておくから、よろしくね」

「了解しましたフィニーノ陸士様！」

「ふふふ、よきにはからえ」
「ははーっ！」

ノリノリな俺達であった。
だけど、冷静に考えたら宿舎のロビーでやることじゃないよね。
さっきから通り過ぎていく局員の人から「何こいつら、関わらないでおこう」って視線がビシビシきてますよ。

「……ロックウェル君。恥ずかしいからそろそろやめよっか」
「ですね」

立ち上がって膝と手についた埃を払う。

「それで、尾行して報告すればいいだけですか？」
「うーん。できれば、写真なんかも撮ってきてくれるといいかな？フェイトさんに頼まれてるし」
「……保護者公認なんだ」

執務官としてどうなんでしょうかハラオウン隊長。
まあ、ＢＳＰクリアシルバーが手に入るなら、喜んでやりますがね。

「というわけで、はいコレ。私特製高感度カメラ」

「ういっす。報酬は帰ってきてからですか？」

「うん」

「了解しました」

報酬その他の確認をして、固く握手する俺とフィニーノ陸士。

このハヤト＝ロックウェル。見事尾行任務を果たしてみせましょう！

side：ティアナ＝ランスター

「あれ？」

スバルと一緒にハヤトの部屋に向かう途中、宿舎のロビーにハヤトが居た。

珍しいわね、アイツが休みの日に部屋から出るなんて。

「あ、ハヤトだ。おーい、ハヤトー！」

「ん？　おお、スバルにティアナか」

スバルもハヤトを見つけたみたいで、手を振って声をかける。
するとハヤトがこっちに視線を向けて、手を振り返した。

「何してるの～？」

「出かける準備。用事が出来たんでな」

「え？」

その言葉に、思わず声が出た。
出鼻を挫かれた感じだ。折角誘おうとしたのに、もう用事があるなんて。

「用事？　なになに？」

「フィニーノ陸士から頼まれて、エリオとキャロの尾行」

「「はぁ？」」

「何かさ、エリオに頼まれてデートプラン考えたのはいいんだけど、心配だから見てきて欲しいって」

そう言って手に持ったカメラを見せてくるハヤト。

シャーリーさん……何頼んでるんですか。
思わず額を押さえて嘆息する。ていうか、ハヤトも断りなさいよ。

「いやぁ、最新型の限定版ＢＳＰクリアシルバーくれるって言うからさぁ」

「……そうね、アンタはそういう奴よね」

ゲーム＞その他な思考は相変わらずよね。
ホント頭痛いわ。何でこんな奴のこと……ま、まあそれはいいとして。

（スバル、着いて行くわよね？）

（勿論！）

スバルと短くアイコンタクト。
折角ハヤトと出かけられる機会なんだし、この際尾行でも何でも付き合ってやろうじゃない。

「あたし達もついていくわ」

「は？　何で？」

「アンタだけだと心配だからよ。決まってるじゃない」

勿論口実。
まあ、コイツだけだと心配ってのは少しあるけどね。
絶対なにか失敗しそうだもの。

「どんだけ信用ねーんだよ俺」

「あはは、だってハヤトだもん」

「スバルが酷い件」

「そういう訳で、あたし達も一緒に行くわ。文句無いわね？」

「……まあ、お前らがいいならいいけどよ」

諦めた様に肩を落とすハヤト。
それを見て、小さくスバルと笑いあう。
ちょっと予定とは違ったけど、ハヤトと出かけられるんだから良いか。

「そういやティアナ、お前今日はちょっと服の雰囲気違うのな」

「え？　あ、そ、そうかしら？」

指摘されて、ドキッとした。

コイツが好きそうなのにしたんだけど、どうだろ……。

「……ふむ」

「な、何か言いなさいよ」

ハヤトはジッと見るだけで何も言わない。
うぅ、何か居心地悪いじゃないの。
少し恥ずかしくなって、熱くなった頬を隠すように俯く。
暫くあたしを見た後、残念そうな溜息と共にハヤトが口を開く。

「……ボリュームが足らんな」

「死ね」

その時のあたしの拳は、間違いなく光速を突破していた。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

第２１話　『休日と尾行と時々幼女　１』（後書き）

久しぶりの本編更新！
どうも、ラモンです。

ハヤト
「どうも、主人公です」

さて、今回はゲストを呼んであります。
お待たせするのもアレなんで早速呼びましょう。

ハヤト
「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～償いの槍～の主人公、ラディオン＝メイフィルス君と、そのデバイス『セラフィム』です！」

ラディ
「どうも～」

セラフィム
《　こっちでは初めましてですね。そしてさようならハヤトさん　》

ハヤト
「え？」

メカゴジ○＆メカキング○ドラ×５
『どうも、処刑人です』

ハヤト

（　。д。）

（つд⊂）ゴシゴシ

（；。д。）

（つд⊂）ゴシゴシ
｜　・　｜
（；。Д。）

セラフィム
≪　レッツプレイ♪　≫

ハヤト
「いやあああああああっ！！」

さて、向こうではセラフィムさんが盛り上がってますが、こちらはこちらでまったり行きましょう。
あ、リンディ茶です。どうぞ。

ラディ
「ありがとうございます。そういえば、本編のルートはどうなったんですか？」

ええ、それについてなんですがね。
何とルート選択投票、総数３６票も来たんですよ。

ラディ

「おお。結構多いですね」

ええ。予想では１０票くらいで「ははっ、少ねぇ～ｗ」というネタにしようとしたんですが……びっくりです。

ラディ
「それで結果は……あ、分岐まで内緒でしたっけ？」

そのつもりだったんですが、今回の話見ればもう公言したも同然なので発表しちゃおうかと思います。

ラディ
「あはは、確かに。今回の内容はもう発表してるも同然ですよね」

というわけでこちらカンペです。

ラディ
「あ、僕が言うんですか？　えっと……応募総数３６票中、

スバルルート　１４票
ティアナルート　２０票
ハーレム（無効）　２票

ということで、最初に書くルートはティアナさんのルートに決まりました～」

皆さんツンデレ好きみたいですね。
最初は互角だったんですが、ルート選択基準用の番外編５を投稿してから、一気に差が広がりましたｗ

ラディ
「スバルさんも最後の方で少し盛り返したんですけど、ティアナさんの勢いには及ばず、今回は残念な結果になってしまいました」

スバルルートに投票して頂いた皆様、申し訳ありません！
ですが、ティアナルートで完結後に必ずＩＦルートとして書きますので！

ラディ
「そういえば、今回からアニメでいうところの機動六課のとある休日編に突入ですね」

そうだね。今回は長くなりますよ。
アニメでも前、後編＋１話構成の話だし。

ラディ
「ついにキーポイントの２人の幼女も出ますしね」

そういうこと。
まあ、他にも折角のデートイベント（？）だからハヤトとティアナのアレコレを書いたりする予定ではいますがね。

ラディ
「ハヤトさんはいいですね、ちゃんとしたヒロインが居て」

ハヤト
「シグナム副隊長とフラグ立ってる君の方が、俺には羨ましいよ」

ラディ＆作者
「「生きてる！？」」

ハヤト
「ああ。何か次元の壁を飛び越えてやってきた蒼天・龍斬波が、運よく奴らに直撃してな……助かったぜ」

セラフィム
《　まだターミ○ーター軍団が残ってますが？　》

ターミ○ーター×１００
『どうも、処刑人その２です』

ハヤト
「＼（＾ｏ＾）／」

ラディ
「番外編であんな甘ったるい空気だした罰ですね」

だよねー。
リア充死ね。

ハヤト
「書いたのお前だろうがあああああっ！！！」

セラフィム
《　ようこそ、この素晴らしき惨殺空間へ　》

ハヤト
「七夜！？」

さて、ハヤトの処刑も確定したところで、今回はこれで終わりにし

ましょうか。

ラディ
「ですね。僕も処刑に参加しようと思いますし」

ラディ君。今回はゲストに来てくれてありがとう。
これお土産の『激甘饅頭詰め合わせ』です。

ラディ
「ありがとうございます！」

セラフィム
≪　お礼に、ハヤトさんは念入りに処刑させて頂きますね♪　≫

セラフィムさん、よろしくお願いします。

ハヤト
「お礼じゃねぇぇぇぇっ！！」

さて、それではまた、次の話で。
こんな感じのグダグダ後書きに登場してみたい！　という奇特な主人公さん達、お待ちしてます。

第２２話　『休日と尾行と時々幼女　２』（前書き）

デート描写って難しい……。
今回はちょっと詰め込み気味です。

第22話　『休日と尾行と時々幼女　2』

「まずは、レールウェイでサード・アヴェニューまで移動。市街地を散歩」

「ウィンドウショッピングや会話等を楽しみ、食事はなるべく雰囲気が良く、会話の弾みそうな場所で」

「その後は映画を見て、夕方は海岸線の夕焼けを眺める……」

「……」

「……」

「……」

フィニーノ陸士から送られてきた、エリオとキャロのデートプラン。

それを読み上げた俺達3人の間に重い沈黙が落ちる。

何だろう、この「雑誌に載っていた記事を丸々写しました！」的なデートプランは……。

「なぁ、凄まじく不安になったのは俺だけか？」

「……」

「……」

目を逸らすなお前ら。
つーかそんな顔してたら同意したも同然だろうが。

「ま、まあとりあえず移動しましょ。エリオ達ならもうすぐ出かけると思うし……レールウェイに乗り遅れて、２人を見失ったりしたら困るしね」

「誤魔化しやがった……だがまあ、確かにその通りか。不安でしょうがないが行くか」

「お、おー……」

先行きに言い様の無い不安を感じつつ、俺達は動き出した。
とりあえず、エリオ達が居るであろう宿舎入り口を目指して。

……駄目そうな時はマジでフォローしてやろう。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第２２話　『休日と尾行と時々幼女　２』

ｓｉｄｅ：高町なのは

「「行ってきます！」」

「はい。気をつけてね？」

元気良く手を振るエリオとキャロに、笑って手を振り返す。

「あんまり遅くならないうちに帰るんだよ？　夜の街は危ないからね？」

「「はいっ！」」

隣で心配そうな顔で繰り返すフェイトちゃんに、ちょっとだけ苦笑。

心配性だなぁ。エリオもキャロも、もう子供じゃないのに。

街に向かって歩いていく2人に、凄い勢いで手を振るフェイトちゃん。私も、2人に軽く手を振る。

そして、2人が見えなくなったあたりで今度はハヤト君とスバル、ティアナが出て来た。

「あ、3人もおでか……け……？」

振り返った私は、思わず目を丸くした。

何で3人ともサングラスかけてるの？

「ああ、高町隊長にハラオウン隊長。ええ、お出かけです」

「そ、そうなんだ。えと、そのサングラスは？」

「秘密です」

「秘密って……」

相変わらず、ハヤト君は時々訳のわからないこと言うなぁ。

「詳しいことはハラオウン隊長に聞いてください」

「フェイトちゃん？」

「うん、なのはの説得はやっておくから。頑張ってね、ハヤト！」

「任せてください、ハラオウン隊長！」

「え、ちょっ……」

展開についていけない私をよそに、ハヤト君とフェイトちゃんがいい笑顔でお互いにサムズアップしてる。

フェ、フェイトちゃんがハヤト君に毒されちゃった！？

「えぇと、なのはさん。大丈夫ですよ？　そんなに大したことじゃない……と思うんで」

「ほ、ホント？　ティアナ」

「はい」

しっかりと頷くティアナに、ちょっとだけ安心する。
でも、３人ともなんでサングラスしてるの？
出かけるのにはいらないと思うんだけど……。

「決まってるじゃないですか高町隊長！　正装だからですよ！」

「せ、正装？」

「そうだよなのは。これは今からハヤトが行うことの正装なんだよ！」

「フェイトちゃんまで！？」

な、何だか今日のフェイトちゃん変だよ！？
何でそんなにハヤト君と同じノリなの！？

「それではハラオウン隊長！　自分達は任務がありますので！」

「うん！　いい結果を期待してるからね！」

「大船に乗ったつもりで待っていてください！！　行くぞ、ティアナ！　スバル！」

「……はいはい」

「わかった～」

異常にやる気に満ちているハヤト君と、溜息混じりにその後を付いていくティアナとスバル。

えーと……うん。気にしたら負けだよね。

とりあえずフェイトちゃんに事情を聞いて、後はティアナに任せよう。

ティアナが居れば、酷い事にはならないと思うし。

……別に、考えるのが面倒になった訳じゃないよ？

ｓｉｄｅ：高町なのは　了

レールウェイの切符売り場、その中でもひときわ太い柱の影に３人で隠れ、エリオとキャロの様子を窺う。

さすがに切符の買い方とかは平気だろう。キャロがちょっと心配だけど、エリオがフォローできるレベルだし。

とりあえず２人が仲良く切符を買っている姿を激写。

その後2人が無事に切符を買ったのを見届けてから、俺達も切符売り場へと向かう。

「行くぞスターズ０３、スターズ０４」

「え、何でコールサインなの？」

「尾行任務中だからだ」

「……ホント馬鹿じゃないの」

こめかみを押さえているティアナの言葉は無視。

文句言いながら、お前だってサングラスかけてノリノリじゃねぇか。

「う……」

「っと、こんな事してる場合じゃねぇ。切符買わなきゃ」

発車の時間が迫ってきたので、急いで切符を買って搭乗口へと向かう。

もちろん、途中でエリオとキャロの姿を激写するのも欠かさない。

さてさて、無事に乗り込んだレールウェイ車内。
エリオ達が座る座席の裏に3人で座り、2人の会話に耳を傾ける。

「そういえば、キャロの竜ってフリード以外にもう1騎いるんだよね？」

「うん。ヴォルテールって言って、黒くてすっごく大きな竜。
フリードは私が卵から育てたんだけど、ヴォルテールはアルザスの土地に憑いてる古い守護竜なの」

すると、エリオ達のそんな会話が聞こえてきて思わず小声で突っ込んでしまう。

「（エリオ、そうじゃないだろう！）」

「（いや、でも会話は続いてるみたいだし、いいんじゃない？）」

何もわかってないスバルが不思議そうな顔で聞いてくる。
これだから年齢＝彼氏いない歴は！

「（こういう時、男はもうちょっと小粋なトークをするべきなんだよ！
それが世界の理ってやつだ！）」

「（じゃあ、アンタはどんなトークする気よ？）」

「（……お、もうすぐサード・アベニューだな。降りる準備だ）」

「「（思いつかないんかい！）」」

よく考えたら、俺も年齢＝彼女いない暦、デート経験無しでした。泣きそうになりながらエリオ達の後を追いつつレールウェイから降りる。

「お？」

搭乗口のあたりで、人込みに押されたキャロにエリオが手を差し出す。

ふむ、中々の判断だエリオ。さすが将来のイケメンはやる事が違うな。妬ましいぞ。

キャロも嬉しそうにその手を取って、２人仲良く頬を染めて歩き出した。

……１人で来ないでよかった。１人だったら死んでたぞコレ。

何だよあの甘い雰囲気は、糖分の異常摂取で俺を殺す気か。

とりあえず激写激写。

「いいなぁエリオとキャロ。凄く仲良さそうで」

「あれで付き合ってないってのが驚きだよな」

「あの2人は奥手そうだし、誰かがけしかけないと駄目なんじゃない？」

「誰かって誰よ？　キャロに手ぇ出したらロリコンだぞ？」

「う～ん……せめて同じ歳の子が居ればいいんだけど」

3人でエリキャロの将来について語り合いながら後を追う。
人通りが多いから、背の低い2人を見失わないように注意しなきゃな。

「つーか、俺らはあいつらよりも自分の心配するべきでね？
この歳で3人そろって年齢＝彼氏彼女いない暦とか……ねーよ」

「「……はぁ」」

人込みの中を歩きながらそう呟く。
するとスバルとティアナに、揃って溜息を吐かれた。なんぞ？

「……まあ、わかってたけどね」

「そうね」

「いや、お前らだけで納得すんなよ」

「いいのよ。アンタがわかんなくて当然の事だから」

「そうそう」

何だか酷い疎外感を味わった。

まあいい。とりあえず今はエリオとキャロの尾行に全ての精力を注ぐとしよう。

そんな風に思いながら、俺はスバルとティアナを連れて、エリオ達の後を追うのだった。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

エリオとキャロを尾行しながら、サード・アベニューを歩く。

最初にあのデートプランを見た時はどうなるかと思ったけど、２人は特に問題なくデートを楽しんでるみたいだった。

一方その２人を尾行してるあたし達はと言えば……。

「ふわ～、やっぱりここのアイスは見た目から素敵だぁ……」

「何個重ねだよ……あ、俺はそこの“ハニー”と“抹茶ミルク”で」

「ホント、スバルはアイス好きよねぇ」

「好き好き大好き～」

こっちはこっちで普通に楽しんでいた。
尾行はちゃんとしてるし、ハヤトは時々2人の写真を撮ってるけど、後は見失わない程度にウィンドウショッピングをしたりゲーセンで遊んだり。
ちゃんとデートっぽくなって、少し嬉しい。
欲を言えば、2人っきりが良かったけど……。

アイスを持って移動してると、2人が通りの真ん中にあるベンチに腰掛けたのを確認。
2人が見える位置に腰を降ろして、あたし達も休憩する。

「……ふむ、中々いい雰囲気だな。とりあえず激写、と」

「ねえハヤト、その写真ってどうするの？」

「フィニーノ陸士に渡すけど……まあ、多分ハラオウン隊長の手元にいくんだろうな」

「フェイトさん……」

親馬鹿ってのは知ってたけど、そこまでだったんだ。
ちょっと引いてしまったのは内緒。

「あ、ねえハヤト。そっちどう？　おいしい？」

「そうだな。とくにこっちの“ハニー”はいいぞ」

「へぇ～、ねぇねぇ、ちょっと頂戴？」

「自分のだけで我慢しろよ。どんだけ食うんだお前は」

「えー、いいじゃんいいじゃん、頂戴よ～」

「……はぁ」

ハヤトが溜息を吐きながら、スプーンでアイスをすくってスバルに差し出す。

ちょっと、それって間接キスじゃないの？

咎めるような視線でスバルを見れば、ちょっとだけ勝ち誇った顔をされた。

……後で覚えてなさい。

「ほれ、あーん」

「あーん……ん～、おいし～♪」

スプーンに乗ったアイスを食べて、幸せそうに笑うスバル。

……べ、別に悔しくなんかないわよ？

ハヤトが気にしないのは、つまりスバルの事を友達としてしか認識してないって事なんだから。

「ティアナも食う？」

「へ？　あ、あたし？」

「そう。お前ハニーとか好きだったろ？」

「いや、まあ、その……そうだけど」

「ほれやるよ。あーんしろあーん」

そうやって言いながら、あたしの方にハニーアイスの乗ったスプーンを差し出してくる。

こ、これは……。

友達だと思ってた頃は何も思わずにやってたけど、意識したら凄い恥ずかしいじゃない！

「な、なな、何してんのよ！」

「いや、別にいつもやってんだろ」

「そ……それはそうだけど……」

ええい、ここで躊躇してどうするのティアナ＝ランスター！

スバルだけにいい思いさせていいの！？　いいわけない！

……よし。覚悟は決まった。

いざ！

「あ、あ～ん……」

「ん？」

「え……」

覚悟を決めて口を開いたあたしと、さっきまで差し出してしたスプーンを口に入れたハヤトの目が合う。

「悪い、食べねーと思った。ほれ、もっかいやるから」

「……い、いいわよ別に」

「そう言うなって。ほれ、あ～ん」

「……ふん。アンタがどうしてもって言うからだからね！　か、勘違いしないでよ！」

「へーへー、いいから食えって。溶ける」

「わ、わかってるわよ。あ～ん……んっ」

ニヤけそうになる頬を必死におさえて、アイスを食べる。

はちみつの甘い味が広がって、次いでハヤトと間接キスをしたっ

て事実に頬が熱くなる。
ふふ。何かいいな、こういうの。

……でも、こういうことが普通にできるってことは、あたしもハヤトに『友達』としか認識されてないのよね。
そんな事を思って、小さく溜息を吐く。
そりゃ、ハヤトとは今までそういう付き合いしてきたんだし、当然と言えば当然なんだけど……少し、寂しいかも。

「ん、エリオ達が動き出したか。よし、尾行再開だ」

「え～、あたしまだ食べ終わってないよぉ」

「食べながら行けばいいでしょ？　ほら行くわよ」

「ティアナの言う通りだ。ほらほらさっさとしろ、見失ったら困るだろが」

「は～い」

まあ、そんなに焦る事無いわよね。
機動六課が解散するまでまだ1年近くある。
解散するまでには、絶対あたしの事しか見えなくさせてやるんだから。

決意を新たに、あたしはハヤトの後を追った。

side：ティアナ＝ランスター　了

さて、困った。
非常に困った。

「……あいつらどこよ？」

「さあ？」

「完全に見失ったわね」

エリオとキャロがどっか行きました。
公園で昼食を食べて、その後サード・アベニューに戻ってきたまでは尾行できたんだが、いきなり人通りが増えたせいで2人が人込みに紛れてしまい、気付いた時には見失ってしまった。
シット！　これじゃ任務失敗になってしまうじゃないか！

「くそ～……このままじゃコレ以降の2人の行動を尾行できねーじゃねーか」

「もういいんじゃない？　十分に写真とか撮ったでしょ？」

「お家に帰るまでが尾行任務です！」

つーかちゃんと最後までやらんと俺のＢＳＰが！
しかし、現状ではどうにもならんのも事実。
人通りはますます増えるばかりで、この中からあの２人を見つけるのは至難の業だ。

くっそぉ。何で平日なのにこんな人居るんだよサード・アベニュー！
サーチャーでも仕掛けておけばよかった。

「とにかく手分けして探すぞ！　３０分後にここに集合！
見つけた場合はデバイスで連絡！　いいな！？」

「え～」

「何でそこまでやる気になるのか、甚だ疑問なんだけど」

「うるっさい！　いいからやるの！　いいな！？」

「「……はぁ」」

溜息と共にスバルとティアナが頷くのを確認して、俺は人込みの中へと向かう。

「あーもー、何でこんなに人多いんだよ！　平日なんだから仕事し

てろっての！」

人の合間を縫って走りながら、そんな風に愚痴を零す。
ちびっ子のデートを尾行してる奴に言われたくないとか、そーゆー冷淡なツッコミは断固として拒否させてもらおう。
このままじゃ俺のＢＳＰが！　ＢＳＰが！

ゴリッ

「……あん？」

そんな俺の耳に、聞きなれない音が届く。
コンクリートに何か鉄製の物を擦り付けるような、そんな音。
その音に思わず足を止める。

「ブレイブハート。今の聞こえたか？」

≪　はい。今しがた通り過ぎた路地裏からの音です　≫

少なくとも、エリオとキャロには関係ないとは思う。
だけど、何故かやたらとその音が気になった。
平日の平和な街に、その音が余りにも不似合いだと感じた。

「とりあえず行ってみるか……ブレイブハート。いつでもセットア

ップする準備だけしといてくれ」

《　了解です　》

嫌な予感に押されるように路地裏へと足を進める。
果たしてそこには――

「……幼女？」

ボロイ布に身を包み、鎖で巻かれたデカいケースを引き摺った小さい女の子が居た。
歳は大体５～６歳ぐらいだろうか？
女の子の後ろに開いたマンホールが見えることから、恐らく下水を通ってここに来たんだろうが……。

「あ……」

思考していると、女の子と目が合った。
女の子は一瞬怯えるような目をした後、それでも決心したように声を絞り出す。

「たす……け……」

「っ！」

しかし、言葉を言い切らないうちに気を失い、前のめりに倒れる。
慌てて女の子の側に近寄って、その小さい身体を抱き止めた。
とりあえず軽く外傷を確認――うん、軽い擦り傷以外に目立ったのは無いな。

「何だってこんな幼女が……それに、このケースは」

女の子が引き摺っていたケースを見る。
確かコレは前にも――そう、初出動の時にも見た。

「レリック……だよな多分。あーくそ、何だって折角の休日に！」

見つけた以上は急いで対処しなければならない。
それがレリックならば尚更だ。

「ブレイブハート。全体通信」

《　了解しました　》

舌打ちしたい気分で、俺は機動六課全体へと通信を飛ばす。

「こちらスターズ０５。緊急事態につき、現場の報告をします。サード・アベニューＦ－２３路地裏にてレリックらしきケースを発見、ケースを持っていた５、６歳の少女を１人保護。少女は現在意識不明。目立った外傷は無し、指示をお願いします」

ったく、休日はこれでお終いか……。

通信の向こうから聞こえてくる、高町隊長とハラオウン隊長の言葉に耳を傾けながら嘆息する。

「あーくそ、厄介ごとに自分から首突っ込むとか……馬鹿か俺は」

俺は少女を地面に寝かせ、羽織っていた上着をかけながら誰にも聞こえないように呟く。

たまの休みぐらい、ゆっくりさせて欲しいもんだぜ畜生。

レリックが入ってると思しきケースを見ながら、俺はもう一度深くため息を吐くのだった。

第２２話　『休日と尾行と時々幼女　２』（後書き）

聖王教会本部のあるベルカ自治領。
今や焼け野原となったその場所に、２人の青年と万を超える兵士が居た。

「……いよいよ、最後ですね。ハヤトさん」

青年の一人が、無表情に教会本部を見つめながら呟く。
それに対してもう一人の青年――ハヤトは楽しそうに口の端を歪めて答えた。

「ああ。あとは騎士カリムと本部を落とせば、我が“ロックウェル教”が聖王教会になりかわることができる」

「ええ……」

ハヤトの言葉に頷いてから、青年――ロゥ＝アイアスは彼らの後ろに控える万を超える兵士を振りかえる。

「……皆が求めるモノは何か！？」

『笑顔を！　笑顔を！』

天を揺るがす様な咆哮が響く。

「ならばその為に我らが今、しなければならないのは何か！？」

『戦争を！　戦争を！　一心不乱の大戦争を！！』

兵士の怒号に頷いてから、ロゥが更に口を開く。

「いいだろう。ならば戦争だ」

『うおぉぉぉぉぉっ！！！！』

彼らは“ロックウェル教”。

ほんの半年前に発足し、瞬く間にその勢力を広げた新興宗教。

そして今や、聖王教会相手に戦争を仕掛ける程の集団へとなりあがった。

「伝令！」

兵士達の士気をあげていたロゥの元に、甲冑を着込んだ兵士が駆け寄る。

「何だ？」

「前方に敵部隊が展開！　前線指揮官は八神はやて“中将”です！」

「！」

伝令の言った内容に、ロゥが弾かれるように前を見た。

その視線の先には、こちらの兵に勝るとも劣らない数が展開し、その軍勢の先には彼らの良く知る３人の女性が立っている。

「ハヤトさん……」

「ああ。ついに出てきたな
エースオブエースに、金色の雷、そして……夜天の王」

管理局が誇る3大エースの登場。
しかし、ロゥの顔にもハヤトの顔にも焦りは無い。
あるのは歓喜。そして狂喜。

「さあ、八神部隊長、高町隊長、ハラオウン隊長」

遠くに立つ3人の女性を見据えて、ハヤトが凶暴に笑った。

Ｌｅｔ's ｐｌａｙ ｔｈｅ ｆｕｎｎｙ ｆｕｎｎｙ Ｗａｒ.
「　楽しい楽しい戦争を始めましょう　」

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ ～ｔｈｅ Ｆｕｎｎｙ ｗａｒ～

２００１０年2月公開予定！

ハヤト
「……何コレ？」
ロゥ

「今度、我がロックウェル教主催で行う映画フェスティバルで上映する映画ですよ？」

ハヤト
「いやいやいや！　何この管理局と教会に喧嘩売ってる内容！？」

いやー。ヘル○ング読みながら書いてたら楽しくなってつい。
今回もお前がスバティア相手にデレデレする話で、何となくムカついてたしさぁ。

ハヤト
「書いたのお前じゃん！　俺悪くねーじゃん！」

ロゥ
「あ、自己紹介が遅れました。
俺は『魔法少女リリカルなのは　一刃を持たぬ者―』の主人公、
ロゥ＝アイアスです！」

いやーどうもどうも。
そういえば、そっちのハヤトは元気？

そっか。まあ馬車馬のように働かせて平気だからね。

ロゥ
「ええ。よく働いてくれてます」

ロゥ
「助かります。ロックウェル教も、今が一番大事な時期ですから」

ああ、大人クロノに捕まりそうになったら見捨てていいよ？

本編にそれほど支障ないからさ。

ロゥ
「そうですね。ハヤト様（笑）には、いい人身御供になってもらいますよ」

ハヤト
「俺の知らないところで俺が大ピンチ！？」

いいんだよ。
お前は前回で多くの読者を敵に回したんだ。その挙句に今回も2人とイチャイチャと……マジで死ね。

ハヤト
「だから書いたのお前じゃんか！！」

ロゥ
「そうですよ。こちとらフラグのひとつも無いってのに」

ハヤト
「俺に言うなよ！」

ロゥ
「……さすがは教祖様。ナイスツッコミです」

ハヤト
「聞いてねぇし！？」

っと、嘘予告でもう時間が押し迫ってきてしまった。
ロゥ君。悪いけど今回はこの辺で。

そのうちまた呼ぶからさ。

ロゥ
「あ、そうですか？　まあ俺もロックウェル教の運営が忙しいんで、そろそろ戻らないとですね」

ハヤト
「俺の存在はもう無視ですか！？　ねえ構って！？　お願い構って！？」

ウザい。
お前はティアナとイチャついてろボケ。

ロゥ
「全くですね。これだから教祖様は……」

ハヤト
「ちくしょう！　泣くぞ！？　本気で泣くぞ！？」

それじゃあロゥ君、今日はゲスト出演ありがとう。
これ、お土産の『ハヤトコントローラー』。そっちのハヤトなら完璧に操作することができるよ☆

ロゥ
「おお！　サンキューです！
　これでロックウェル教の運営が大分楽になりますよ！」

喜んでくれてなによより。
それじゃあ今回はこの辺で。

ロゥ
「それではまた、次の話で！」

ハヤト
「何かわからんがもう1人の俺逃げてぇぇぇぇっ！！」

※今回ついでに主人公紹介も投稿しました。
一応ハヤトのイメージ画像描いたので、よければ見てやってください。
下手ですけど（笑）

第２３話　『紫の幼女と新たな敵と　１』

ｓｉｄｅ：――

『レリック反応の元に辿りついたドローンの反応が、全て消失しました』

モニタに映るウーノの言葉に、スカリエッティは嬉しそうな笑みを浮かべる。

「やったのは局の魔道師か……それとも“当たり”を引いたかな？」

『確定はできませんが、どうやら後者のようです』

「素晴らしい。早速追跡をかけるとしよう」

ウーノに指示とも提案とも言えない言葉を投げかけ、「最も――」と言葉を続けながら、スカリエッティが近くの生体ポットへと足を向ける。

その生体ポットには、真紅のロングヘアーの女性が裸で浮かんでいた。

スカリエッティは愛おしそうにその女性を見つめ、手元のコンソールを叩く。

「この子が完成すれば、“ゆりかご”無しでも我々の目的は達成されるだろうけれどね」

『ドクター。“ゆりかご”も、計画遂行には必要なパーツです。お忘れなく』

「ああ。わかっているよウーノ」

たしなめるようなウーノの言葉に、少しだけ苦笑を浮かべる。
だが、視線はコンソールから動かない。
困ったものだとウーノが溜息を吐いた時、部屋の入り口から赤みがかったオレンジのショートヘアーの少女が入ってきた。

「ねえドクター。“当たり”が出たんだって？」

「おやノーヴェ、耳が速いね」

少女――ノーヴェに視線を向け、驚いた顔をしてみせるスカリエッティ。
そんなスカリエッティに対し、ノーヴェは厳しい視線を向けた。

「それなら、あたしも出たいんだけど」

『駄目よノーヴェ。貴女の武装は、まだ調整中なんだから』

「今回のが“当たり”なら、自分の目で見てみたい」

ノーヴェの言葉に、スカリエッティは軽く笑って答える。

「焦らずとも、アレはいずれ必ず私達の手元に来る。今回は大人しく待っていてくれないかな？」

「……ドクターがそう言うなら」

不満たらたらという表情ではあるが素直に引き下がり、ノーヴェが部屋から出て行く。

そんなノーヴェを見送ってから、スカリエッティが口を開いた。

「それでは、ドローンの出撃は時機を見てからにしよう。ナンバーズからは……クアットロ、セイン、ディエチを向かわせるとしようか」

『わかりました。後詰めとしてトーレも出撃させてよろしいでしょうか？』

「構わないよ。では、後の指揮はウーノに任せよう」

『お任せください』

恭しく一礼して、ウーノとの通信が切れる。

「さて……愛すべき友人にも、加勢を頼んでおくとしよう。手駒は多いほうがいいからね」

コンソールを叩きつつ、誰にとも無くスカリエッティは呟いた。
しかしその目には、目の前にあるモノしか映っていない。

『Ｎｏ．？？　ディレト』と刻印された、生体ポットしか……。

ｓｉｄｅ：―　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第２３話　『紫の幼女と新たな敵と　１』

「うん、バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし……心配ないわ」

「そうスか。いやぁ、応急処置とか殆どしたことなくて、ちょっと不安だったんですよ」

シャマル先生の診断を聞いて、ホッと胸を撫で下ろす。

ボロ布に包まれた幼女を保護して数十分。

ティアナ達と合流し、シャマル先生や高町隊長がこっちに到着するのを、ケースに封印処理を施したり幼女に応急処置をしながら待ち、ついさっき無事合流した。

「ごめんね皆、お休みの最中だったのに」

「いえ」

「平気です」

「……ハラオウン隊長、すいません。俺の不徳のせいで、任務を途中で中断することに」

「緊急事態じゃ仕方ないよハヤト。それに、前半はちゃんとやってくれたんだよね？」

任務失敗にうなだれていると、ハラオウン隊長がちょっと背伸びして頭を撫でて慰めてくれた。

おお、嬉しい。できればその豊かな胸にダイヴさせて欲しいけど――っ！？

「な、何だ！？」

「「～♪」」

「？　どうしたのハヤト？」

「いえ……何か今もの凄い悪寒が」

背中に悪寒というか殺気を感じて振り返る。

しかし、そこには口笛を吹くティアナとスバル、心配そうに幼女を見ているエリオとキャロ。そしてシャマル先生と幼女しかいない。

……なんぞ？

「気のせいらしいッスわ。すんません」

「ううん。それと……カメラは？」

「こちらに」

ハラオウン隊長に耳元で囁かれ、いい匂いで幸せになりながらカメラをそっと渡す。

そしたら、極上の笑顔で「ありがとう、ハヤト！」と喜んで頂けた。

すいません。ガチで結婚してください。

「えっと……フェイトちゃん、ハヤト君、もういい？」

「うん！　全然いいよなのは！　早くこの子を連れて戻ろう！　今すぐ戻ろう！　さあ戻ろう！」

「ちょ、フェイトちゃん！？」

テンションが有頂天のハラオウン隊長に若干引き気味の高町隊長。
いやー、こんなに喜んでくれると俺も頑張った甲斐がありました。
あとは戻ってＢＳＰを手に入れれば、俺もハラオウン隊長もフィニーノ陸士もハッピーエンドですな。

「そ、それじゃあ、ケースとこの子はヘリで搬送するから、みんなは現場調査をお願いね」

「「「「「はい！」」」」」

あーあ、休日終わりかぁ。
溜息を吐いて下水へと向かう。
くそぅ……何が悲しくてくっせぇ下水に行かなきゃならんのだ。

俺が幼女見つけたからですねわかります。
……俺の馬鹿。
自己嫌悪して落ち込んでいたら、フィニーノ陸士が焦った声で通信を繋いできた。

『ガジェット来ました！　地下水路に数機ずつの構成で総数１６…
…２０！
海上方面、１２機単位が５グループ！』

思ったよりも多いな……。
海上方面も多方面から来てるみたいだから、隊長達はそちらの制圧に向かうだろう。
ヘリの護衛もしなきゃならんだろうが下水の制圧もあるから人手が回せん。
ちっ、人手不足だな。

『ロングアーチへ。こちらスターズ０２』

色々と考えているところに、ヴィータ副隊長の声が聞こえる。

『海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた。今現場に向かってる、それともう一人……』

『１０８部隊、ギンガ＝ナカジマです』

「「「！」」」

聞こえてきた覚えのある声に、俺とスバル、ティアナが反応する。

『別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係がありそうなんです。
参加しても、よろしいでしょうか？』

『うん。お願いや』

どうやらそれなりで人員は増えるようだ。
部隊長が隊長達に場所の割り振りをしていく。
どうやら、ギンガは俺達下水組のほうと合流するらしい。

アイツが来るなら、まあ下水は何とかなるだろ。
スバルとギンガのコンビがいりゃ、攻撃力的には倍以上だからな。
空の方も、高町隊長、ハラオウン隊長にヴィータ副隊長、リイン曹長も出るなら早めに終わるだろう。そしたら、多分こっちにフォローしに来てくれる筈だ。

「人手不足は一応解消、か」

欲を言えば、ヘリの護衛に隊長のどちらかが残って欲しいところではあるな。
シャマル先生の力を疑うわけじゃないけど、隊長達の方がより安心だ。
後で一応部隊長に進言しておくか……？　いや、さすがに考えすぎか。

そう結論付けつつ通信を聞いて、下水の入り口であるマンホールの場所に来る。
途端にテンションが下がった。
俺ヘリの護衛するからヘリに乗せてくんねーかなぁ。下水とか行きたくねーよ。

「さて、皆。短い休みは堪能したわね？」

「お仕事モードに切り替えて、しっかり切り替えていこー！」

「「はい！」」

「……下水行きたくねーです」

「うるさい馬鹿」

「あふん！」

泣き言を漏らしたら叩かれた。

ティアナは手が早すぎると思う今日この頃。皆様いかがお過ごしでしょうか？

「馬鹿言ってないでさっさと行くわよ！」

「へいへい」

諦めて下水に行くとしましょう。

そうさ、帰ったらＢＳＰクリアシルバーが俺を待っている！

おお、そう考えたら何かやる気出て来た！

「よし、いくぜお前ら！」

「いきなり元気になった……」

「どうせロクな切欠じゃないわ。気にするだけ無駄よ」

「そだね。それじゃ――」

《《《《《 Ｓｔａｎｄ ｂｙ ｒｅａｄｙ 》》》》》

「「「「「セットアップ！！」」」」」

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「ギンガさん、お久しぶりです」

下水の通路を走りながら、ギンガさんに通信を繋げる。

『うん、ティアナ。現場リーダーは貴女でしょ？　従うから、指示をくれるかな』

「はい！」

返事をしながら頭の中に地図を浮かべる。

確かこの先で合流しやすい地点は……

「ひとまず、南西のＦ―９４区画を目指してください。途中で合流しましょう！」

『Ｆ―９４……了解！』

「ギンガさんって、スバルさんのお姉さんですよね？」

通信の合間に、後ろを走るエリオがスバルに尋ねる。

そういえば、前に軽く話した事あったわよね。

「うん。あたしのＳＡの先生で、歳も階級も２つ上」

「そうなんですか」

「優秀なんだが真面目すぎて融通がきかねーのが玉に瑕だがな」

「ハヤト！　ギン姉のこと悪く言うと後で酷いよ！」

「はいはい悪かった悪かった。相変わらずお姉ちゃんっ子だなお前は」

「当たり前だよ！　ハヤトだってお姉ちゃんいるんだからわかるでしょ！？」

「姉ちゃんの話はするな！」

後ろの方で走りながら器用に喧嘩するスバルとハヤト。
ああもう、緊急時だってのに何してんのよあんたら！

「「だってハヤト（こいつ）が！！」」

「うるさい！　今から色々やるんだから静かにしてなさい！」

「「……は～い」」

「ギンガさん、すいません。えっと、デバイスでロングアーチと独立回線を開きます。準備いいですか？」

『うん、大丈夫』

ギンガさんの返事を聞いてから、クロスミラージュを経由してギンガさんのデバイス――ブリッツキャリバーを、あたし達が使っているロングアーチとの独立回線に繋げる。
それを確認して、ギンガさんが追っていた別件の詳細を報告し始めた。

『私が呼ばれた事故現場にあったのは、ガジェットの残骸と、壊れた生体ポットなんです。
丁度、5，6歳の子供が入るくらいの。
近くには、何か重い物を引き摺ったような後があって、それを辿っていこうとした最中、連絡を受けた次第です』

多分さっきの子ね、ギンガさんの居る位置はここからずっと離れてるし……やっぱり、結構な距離を歩いてきたんだ。

『それと、この生体ポット、少し前の事件で似たような物を見た事があるんです』

『私も……な』

ギンガさんの声と、八神部隊長の声に暗いものが混じる。
ギンガさんが前に関わった事件って確か――

『人造魔道師計画。その素体培養機』

「「「「「！」」」」」

人造魔道師。
その単語に、一瞬全員が言葉を失った。
まさか、あの小さい子が？

『これはあくまで推測ですが、あの子は人造魔道師の素材として、造りだされた子ではないかと』

「人造魔道師って……」

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に、投薬とか、機械部品の埋め込みで、後天的に強力な魔力や能力を持たせる」

「言ってみりゃ、人間の手で天才を生み出そうって計画だな」

キャロの言葉を拾って、スバルとハヤトが解説する。

あまり気持ちのいい内容じゃないから、説明している2人の顔は暗い。

「倫理的な問題は勿論、今の技術じゃどうやったってあちこちに無理がでるし、コスト的にも割に合わんからよっぽど頭がおかしいか、金持ちでもなきゃ手を出さん筈なんだが……」

ハヤトがそこまで続けた瞬間、キャロのケリュケイオンから警告が来た。

《　動体反応確認。ガジェットドローンです　》

「来ます！　小型ガジェット、6機！」

「「「「！！」」」」

その言葉に、足を止めてフォーメーションを組む。

さあ、どっからでも来なさい。

たかだか6機、今のあたし達の敵じゃないわ！

side：ティアナ＝ランスター　了

わらわら湧いてくるガジェットを撃ち抜きながら、レリックの推定位置へと走る。

途中で聞こえてきた通信では、上は随分と敵が増えたらしいが……まあ、部隊長がリミッター解除して出るらしいから問題なかろうて。

「っと！」

近くを通り過ぎた敵の攻撃に、冷や汗をかく。

いかんいかん、戦闘中に考え事出来る程俺は強くないからな。集中しなきゃいかん。

気を取り直して俺を撃ってくれやがったガジェットに、強力な一撃をお見舞いしようとブレイブハートを構える。

いよいよ来たぜ！　俺の必殺技をお披露目する時が！！

「ブレイブハート！

弾道計算、反動計算、プロテクト準備、誤差修正、対衝撃波減衰魔法準備！」

≪　了解。弾道計算……完了、反動計算……完了、プロテクト準備

……完了、誤差修正……よし。
対衝撃波減衰魔法準備……完了、撃てます　≫

「よっしゃあ！　いくぜ俺の必殺わ――「クロスファイアーシュート！」――ざぁっ！？」

いよいよ撃とうとした瞬間、俺の狙っていたガジェットがオレンジの弾丸に貫かれて爆散する。
そ、そんな……俺の見せ場が……。
あまりの仕打ちに愕然となって膝を突く。下水のせいでズボンが濡れるが、そんなのを気にする余裕がない。

頭が真っ白だ。

自然と涙が溢れてくる。

こんな絶望感を味わったのは、買ったばかりのゲームを踏んづけて割ってしまった時以来かもしれぬ。

「……は、ははっ」

乾いた笑いが、口から漏れる。

「ちょっとハヤト、何ボーっとしてんのよ」

声をかけてきた邪魔者の方へ、ギギギギと古ぼけた機械のように首を向けた。
そして、小さく息を吸って――

「――ティアナてめぇこのやろおおおおおおっっっっ！！！」

「きゃっ！？」

勢いよく立ち上がり、ティアナの肩を思いっきり掴んで力の限り揺する。

「お前、お前……っ！！
俺の、俺の久方ぶりの見せ場をっ、見せ場をよくもおおおおおおおおおっっっっ！！！」

「な、何よ何よ、何なのよ！？」

「ハヤト何してんの！？」

「ぬっ！？　離せスバル！　こいつは、こいつは俺の……俺のぉっ！！」

スバルに羽交い絞めにされながら、血涙を流しそうな勢いでティアナを睨む。
お前、俺があれを披露してチビっ子ズから「ハヤトさん凄いです！」って言われるのを、どんだけ楽しみしてたと思っていらっしゃ

りやがりますかコンチクショウ！？

「はぁ？　いきなり止まって動かないから、てっきり怪我でもしたのかと思ってカバーしてやったのに、何よその言い草！」

「うっせぇ！！　お前に浪漫を邪魔された俺の気持ちがわかるか！？いいやわかるまいよ！！わかってたら、あんな酷いこと出来るわけがねぇっ！！！！！！！」

「ハ、ハヤト暴れないでぇぇっ！」

「だったら離せスバル！　俺はコイツに説教しなきゃ腹の虫が収まらん！！」

ええい、力が強いなスバルは！力の限り暴れてるのに、上背がある俺が拘束を解く事ができないとは。

くっ、コイツのスペックを読み違えていたか！　しかし、しかし！！

どれほどの性能差であろうと！今の俺は、阿修羅をも凌駕する存在だ！！

「はーーーなーーーせーーー！！！」

「うわわわっ！？　あたしが力負け！？

エ、エリオ！　キャロ！　手伝って！！」

「「え？　あ、は、はいっ！」」

今度はエリオとキャロが俺の両足を抑えに来る。
くっ、チビっ子ズを使うとは卑怯な！？
子供相手に暴力を振るうわけには……っ！！

そうだ、まずはスバルの拘束を解いて、それからチビっ子をゆっくり離せばいい！
そう決めた瞬間だった。

ボゴォン！　がごっ！！

「こ　。っ！？」

爆音が響き、同時に何か硬いものが頭に直撃して、俺の意識は途切れた。
遠のく意識の中で、スバルが「ギン姉！」と言っているのが聞こえたが……ギンガ、てめー後で覚えとけ。
俺はギンガがいるであろう方向へ中指を立てながら、前のめりに倒れた。

……下水臭いです。

第２３話　『紫の幼女と新たな敵と　１』（後書き）

２回も投稿失敗して、そろそろ心が折れそう。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「必殺技披露の機会がなくなった悲劇の主人公です」

さて、今回もゲストがいらっしゃいます！
現在第３作目の『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～蒼天を愛した混沌～』が投稿中。秋風さん執筆の『蒼天』シリーズの主人公、井上直人さんでーす！

直人
「どうも、井上直人だ」

ハヤト
「やーどうもどうも」

直人
「ようハヤト、向こうの感想では随分と舐めたマネをしてくれたなぁ？」

ハヤト
「ひぃっ！？
（（（（（；゜Д゜）））））ガクガクブルブル」

直人
「まあいい、とりあえず今回の話の話題をするとしよう」

ハヤト
「ほっ」

直人
「オリジナルの新キャラが出てきたな」

Ｎｏ．？？　ディレトですね。

直人
「Ｎｏ．１３はギンガじゃなかったか？」

原作ではそうなんですけどね。
こっちだと、一応ギンガはＮｏ．１４ということにしようかと思ってます。
１３ってのは外国じゃ不吉な数字ですし、オリジナル敵キャラにはもってこいなものですから。

直人
「なるほどな。
名前の由来は何なんだ？」

えっとですね、ネットで調べたところ１３ってイタリア語で『トレディチ』と読むらしいんです。
で、そのままだとかっこ悪いんで、ちょっと弄って『ディレト』と。

直人
「まあ、ナンバーズは全員そんな感じだからなぁ」

ハヤト

「でも、作者はこの名前考え付くのに３０分必要だったんスよ。
馬鹿ですねぇｗｗｗ」

うるせぇ。
二度と必殺技使えなくすんぞ。

ハヤト
「ごめん、ごめんね……」

直人
「まあまあ。
そういえば、結局今回は必殺技が披露できなかったな」

前回、前々回の感想で「ハヤトに制裁を！」って意見が多かったので。
おしおきの意味も込めて、必殺技披露の機会を見送りにしましたｗざまぁｗｗ

ハヤト
「畜生！　ちくしょおぉぉぉぉっ！」

若本ヴォイスで叫ぶな、うるさい。

直人
「なに、作者もそこまで鬼ではないだろうし、次回では使わせてやるんだろう？」

……ええ、まあ。

ハヤト

「確約して!?　お願いだから確約して!?」

……ワカッタヨー。

直人
「よかったな。確約してくれたぞ」

ハヤト
「あれで!?　めっちゃ片言だったよ!?」

直人
「いいじゃないか。どうせ俺には関係ないしな」

ハヤト
「それが本音か!」

おっと、そろそろ時間になってしまいました。
直人さん、なのは達が小さくなって大変な時に、わざわざすいませんでした。
これ、お土産です。
（　。Д。）つ『高級銘菓“はーれむ”』

直人
「……なんだか、含みのあるような名前だな?」

イイエー。
ハーレムが羨ましいなんてオモッテナイデスヨー?

ハヤト
「ハーレム野郎め!」（小石を投げる）

直人
「……蒼天・龍斬波ぁっ！！」

ハヤト・作者
「ぎゃあああああっ！！」

直人
「ふっ、悪は滅んだ。それではな」

あ、ありがとう……ございました。
それではまた、次の話……で……げふっ。

ハヤト
「あれ？　何か飛んできてねぇ……？」

直人
「ああ。もう来たのか。
アレは、あっちの感想で飛ばした蒼天・龍斬波だな」

え？

ハヤト
「え？」

直人
「何、死にはしないさ。じゃあ達者でな。
今度こっちに来る時までには、少しはティアナと進展しておけよ」

ハヤト

「待って！　アレ消してって！」

直人
「じゃあなー」

ああ、帰ってしまった……。
仕方ない！　ハヤトバリヤー！！

ハヤト
「はぁっ！？　ちょ、オイ！！」

ハヤト・作者
「ぎゃあああああっ！！！」

第２４話　『紫の幼女と新たな敵と　２』

ｓｉｄｅ：―

ハヤト達が下水に突入する少し前。
彼らがいる場所から１ｋｍ程離れたビルの上にある電波塔に、その少女は立っていた。
目を閉じて、長い紫の髪を風に踊らせるその姿は、何かを感じているようにも見える。

『ヘリに確保されたケースとマテリアルは、妹達が回収します。
お嬢様は、地下の方を』

不意に、少女の顔の横手にモニタが浮かぶ。
そしてそこに映るウーノの声に、少女は目を開く。

「ん……」

『騎士ゼストとアギト様は？』

「別行動」

『お一人、ですか？』

心配そうな問いに、軽く首を振る。

「一人じゃ、ないよ」

そう告げて、右手を軽く前に出す。

すると、右手を覆っているグローブに着けられた紫の宝玉が煌めき、虚空に漆黒の“穴”が現れた。

少女はその穴に愛おしそうに頬を寄せ、小さく呟く。

「私には……“ガリュー”がいるから」

『失礼しました。協力が必要でしたら、お申し付け下さい。最優先で実行します』

「うん」

少女が頷くと、モニタが消える。

それを横目に見ながら、少女――ルーテシア＝アルピーノは虚空に浮かぶ穴に語りかけた。

「行こうか。ガリュー」

その声に答えるように、穴が小さく紫の光を発した。

「探し物を……見つけに」

少女の足元に紫の魔方陣が輝いた刹那、少女の姿は消えていた。

ｓｉｄｅ：―　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第２４話　『紫の幼女と新たな敵と　２』

「死んどけやボケどもがぁぁぁぁっっっっ！！」

レリックのある推定位置へと走りながら、怒声と共に行く手を遮るガジェットを容赦なく撃ち抜く。

必殺技披露をティアナに邪魔され、文句を言うところをギンガに邪魔され、挙句にギンガのせいで全身が下水臭い。

その怒りを、ガジェットに向けて撃ちだした弾丸に乗せる。

ええ、八つ当たりですが何か！？

「ブレイブハート！　ロードカートリッジ！！」

《　Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　》

「ヴァリアブル、シューーーートォォっっっっ！！！」

細長い？型ガジェットが、俺の弾丸に貫かれて爆発していく。

ＡＭＦ？　そんなの怒りが有頂天状態の俺には無意味！！

「……ハヤト君、凄いね」

「あたし達が出る幕ないよ、ティア」

「……理由がアレじゃなきゃ、素直に感心できるんだけど」

後ろのギンガ、スバル、ティアナの声は無視。

つーかギンガにティアナ、お前らは任務終わったら小一時間説教だからな？

「うぅ……ごめんってば」

「あたしは悪くないでしょ！　事前に言わなかったアンタが悪いんじゃない！」

「やっかましゃあああああっっっっ！！」

《Ｖａｒｉａｂｌｅ Ｂａｒｒｅｔ.》

怒号と共にラスト1機を落とす。
よし、これでとりあえずは全滅か。
くそっ。思ったより疲れた……。

「ぜぇ……ぜぇ……」

「お、おつかれハヤト」

「ぜぇ……おう、スバルか……」

「えと、とりあえず今ので出て来たガジェットは全部らしいよ？」

「……そうか。なら、さっさとレリック回収して帰るぞ。そんでスーパー説教タイムだ」

息を整えながら走り出す。
ギンガとティアナが露骨に嫌な顔をしたが、華麗にスルー。
俺の必殺技披露を邪魔した罪も、俺を下水塗れにした罪も海よりも深く重いのだ。
むしろ小一時間の説教で許してやろうとしている俺に、むせび泣いて感謝して欲しい。

「「理不尽すぎるわよ！」」

「やかましい、このオレンジツーテール&脳筋巨乳め！！」

「「なんですって！？」」

「やんのかゴルァッ！？」

「もう！　３人ともいい加減にしてよ！！」

とまあ、こんな感じでワイワイと騒ぎながらレリックの推定位置へと走っていく俺達であった。

余談だが、途中でギンガとティアナのコンビに3回ほどぶん殴られた。

説教する時間を1時間ぐらい延ばそうと思う。

◇◇◇◇◇◇◇

「よし、じゃあ手分けして探すとすっか」

下水通路を抜けた先。

レリックのある推定位置へと着いた俺は、その広い空間を見渡してそう言った。

元は下水が合流する地点だったのだろう。ちょっとした建物ぐら

いの広さがある。
ここからケース1個を見つけるってのは、少しばかり骨だろうなぁ。

「何があるかわからないから、みんな用心して」

「「「「「了解！」」」」」

ティアナの言葉に頷きあってから、バラバラになってレリックの入ったケースを探す。
暗いのは暗いんだが、あちこちにある柱に備え付けられている電灯が照らしてくれてるお陰で、全く見えないって程じゃない。

「……とはいえ結構広いし、それなりで時間かかるだろ」

やれやれと溜息を吐く。
さっさと帰って、着替えてスーパー説教タイムに突入したいんだが。

しかし見つけない事には始まらないので、地道に下を見ながらうろうろと辺りを歩く。
てか、良く考えたら探索系の魔法で探せば一発じゃね？

≪　レリックが魔力に反応する可能性もありますので、危険です　≫

「ですよね」

面倒だよなレリックってヤツぁ。
もういっそ暴走させたほうが見つけやすくて――いやいや、そしたら俺の仕事が増える。
本気で面倒だ。

よし、あとはティアナ達に任せて俺は休んでよう！
瓦礫がぶつかった頭も心配だしね！

「あ、ありました！」

「なんでやねん」

サボる決意をした途端に、俺の後ろでキャロが嬉しそうに声を上げた。
俺はサボることすら出来んのか！

「ハヤトさん、見つけましたよ！」

「……うん。良くやった、偉いぞキャロ」

「えへへ」

とは言ってもキャロに罪は無い。

それにそんな嬉しそうな顔で笑ってたら、文句言ってる俺が悪者みたいじゃないか。
……いえ、悪いのは１００％俺なんですがね。

「よし、じゃあ後は封印処理して持って帰るだけだな」

「ですね」

ガッ　ガッ

「……？」

そう言って息を吐いた時、妙な音が響いた。
まるで何かが地面を蹴っているような……そんな音。
辺りを見回すが、俺達以外の人影は無いし俺達は誰も走ったり跳んだりしていない。

なら……何が？

ガンッ！　ガンッ！

「っ！？」

一際大きな音が2回聞こえた瞬間、俺の視界――キャロを挟んだ反対側の空中が人型に“歪む”。
そう、丁度ゲームのステルス迷彩なんかで空間が歪むような、あんな感じに。

ヴン……

そして俺が反応するよりも早く、その前に漆黒の魔力弾が4つ形成される。
射線上にいるのは――まずいっ！！

「キャロッッ！！」

「え……きゃあぁぁっ！」

咄嗟に大声を張り上げたが遅く、魔力弾はキャロの近くに着弾。
直撃でなかっただけマシだが、爆風によって体重の軽いキャロは吹き飛ばされてしまう。
急いで駆け出し、落ちてくるキャロを受け止める。

「大丈夫か？」

「は、はい。でも、レリックのケースが……」

さっきの爆風で手放してしまったのか、ケースは少し離れた場所に転がっていた。
回収するか――？　いや、先に攻撃してきた方を何とかしなきゃ駄目か。
そう考えてケースから目を離し、こちらに向かってきている人型に対処しようと身構えた。

「でやあああああっっ！！」

裂帛の気合と共に、エリオが横合いから人型に斬りかかる。
空中でストラーダを一閃。
そのまま距離を取って俺とキャロの前に着地した。

「くっ……！」

瞬間、エリオの頬から鮮血が飛ぶ。

「エリオ君っ！」

「大丈夫！」

駆け寄ったキャロを庇うように手を広げるエリオ。
俺もその隣に並び、地面に降りた人型を見ながら構えた。

「「「……」」」

一瞬の睨みあい。

すると、降りた人型のステルス迷彩らしき歪みが消えていく。

どうやら隠れてコソコソってのはやめたらしい。それとも、エリオの一撃が決まって迷彩効果を発揮する何かが傷つけられたのか……。

どっちにしても、しっかりと顔を拝んでやろう。

ステルス迷彩での不意打ち、戦略的に正しいとはいえやられた方としては腹が立つんでな。

そして、歪みの全てが消えて人型の正体が明らかになる。

「……え？」

その姿を見て、思わず気の抜けた声を出してしまった。

何故なら。

ステルスの解けた人型は……なんと言うか、某蹴り技を主体に悪の組織と戦う昆虫と人間の遺伝子が混ざったヒーロー、そのバッタモン臭い格好だったからだ。

全身が黒いので、悪役バージョンと言った方が解り易いかもしれんが。

「おいバッタモン、お前どこで改造された？　最初がシで始まる組

織か？」

「……」

思わずそう問いかけてしまった俺は悪くないと思う。
だが、バッタモン（仮）は身じろぎ一つせず、紫に光る４つの瞳でこちらを見据えている。
やっべ。凄く強そうなんですけど。

何と言うか、オーラっつーか雰囲気？　が半端ねぇ。
シグナム副隊長と相対しているような、ピリピリとした空気が肌を振るわせる。
ちっと、気合入れねぇと駄目か？

そんな風に互いに警戒――まぁバッタモン（仮）の方はどうだかわからんが――しながら睨みあう。
スバルとギンガも、いつでも動けるように構えている。

「あっ！」

「？」

後ろから聞こえたキャロの驚いたような声と、駆け出す足音。
前に気を配りつつ後ろの様子を窺えば、そこにはレリックのケースを持った紫のロングヘアーの少女。
歳はエリオ達と同じ位か？

ちっ、バッタモンに気を配りすぎたか！
全然気付かなかった。
焦る俺の思考を、少女の取った行動が更に焦らせる。

「邪魔……」

駆け寄ったキャロに向けて左手を差し出し、小さく呟きながら魔力を放出。
Ａランクレベルの魔力が洪水のようにキャロを襲う。
咄嗟にシールドを張ったみたいだが、一瞬では構成も甘く、強度も脆い。
あっさりとシールドは破壊されて、キャロがまた吹き飛ばされる。

「きゃあっ！」

「キャロッ！？　……うあぁっ！！」

「くそっ！」

吹っ飛ばされたキャロがエリオにぶつかり、２人で吹っ飛ばされる。
手を伸ばして止めようとしたが、伸ばした手は空を切り、２人はそのまま近くの柱にぶち当たった。

「エリオ！　キャロ！」

柱のへこみ具合から、相当の衝撃だったのがわかる。
キャロはエリオがクッションになったから大丈夫だろうけど、エリオはかなりキツイだろ。直ぐに様子を見たいところなんだが、今はこっちの幼女とバッタモンから気を逸らす訳には……っ。

「やあああああっっ！！」

「はあああああっっ！！」

苦々しい状況に歯軋りした時、ギンガとスバルの2人がバッタモンに仕掛けた。
スバルがとび蹴りでバッタモンの気を逸らし、そこにギンガが拳を叩き込む。
拳は防がれたが、そのままバッタモンを吹っ飛ばすことに成功。
俺とバッタモンの間にギンガとスバルが割り込む形に持ち込んだ。

よし、これで俺は幼女の方に集中できるな。
そう思って視線を戻せば、幼女は俺に背を向けてさっさと歩き出していた。
なんというマイペース振り。正直ちょっと感動した。

「またんかコラそこのツルペタ幼女！」

思わず声をかけると、幼女は立ち止まって不機嫌そうな顔をこっ

ちに向けた。
あ、ツルペタは気にしてたか？

「それはガキの玩具じゃねぇんだ！　あぶねぇからさっさとこっちによこせ！
悪い事ばっかしてっと永久にツルペタのまんまだぞ！」

「ハヤト、真面目にやってよ！」

スバルに怒られた。
こんな時でもボケてしまう自分が大好きです。
やったぜ俺、さすがだ俺。

「……」

だが、幼女は再び背を向けて歩き出そうとする。
……まあ、予想通りだけどな。
ダガーモードの魔力刃を幼女の首筋に押し付けた状態で構えたティアナが何もない空間から現れたのを見て、口の端を歪める。さすがティアナ、やることにソツがねぇ。

「ごめんね、乱暴で。でもね、これ本当に危ない物なのよ？」

「はやく渡した方がいいぞロリっ子。そのおねーさんは、怒ると火を噴いて暴れるからな」

「あたしを何だと思ってんのよ！？」

怖いオレンジツーテールだと思ってます。
なんて馬鹿馬鹿しいやりとりをしながらも、視線は幼女から離さず、もちろん警戒は解かない。
しかし幼女に渡す気配は無い。
レリックの入ったケースを抱えて、俯いている。

「渡す気が無いんなら、ちょっと痛い思いすることになるぞ？」

気は進まないが、レリックの危険性を考えたら手段を選んでる場合じゃない。
特にこの幼女はさっき攻撃してきたってのもあるし、あのバッタモンとも協力体制っぽい。
犯罪者では無いと思うが、善良な一市民って訳でも無さそうだしな。

「ほれ、さっさと――」

《　魔力反応アリ、注意してください！　》

「スターレンゲホイル！！」

「「っ！？」」

ブレイブハートが警告してくるのと同時に、目が眩むような閃光と凄まじい爆音が辺りを包む。
思わず目を瞑って耳を塞ぐ。
閃光弾!?　まだ仲間が居たのかよ！

「くっそ……」

光と爆音が収まったあたりで、目を開く。
まだ耳は少し聞こえ辛いが、目はちゃんと見える。
幼女の方へと視線を向ければ、こっちを一瞥してから背を向けて歩き出そうとしている。

「このっ……」

「くっ！」

まだ聞こえ辛い耳を押さえながら、ティアナと俺がデバイスを幼女に向ける。
だが、俺は失念していた。

「っ！？　きゃあああああっっっっ！！」

「うおぁっ！？」

さっきの閃光弾は、当然スバルとギンガにも有効だった。
だから、ギンガ達も今はロクに動けない――つまり、バッタモンが完全にフリーになっていた。
幼女の隣に居たティアナをバッタモンが蹴り飛ばし、玉突き事故みたいな形で俺にぶつかる。

「っのヤロ……！」

「！！」

直ぐに体勢を立て直して幼女目掛けて魔力弾を撃つ。
しかし、それはシグナム副隊長もびっくりの速度で動いたバッタモンに防がれ、奴の肩パーツを砕いただけだった。
硬いなオイ！　結構本気で撃ったんだぞ！？

幼女を背に庇いながらこっちを向いたバッタモンを見て、思わず舌打ちする。
ヤな状況だ。
レリックは幼女の手にあって、戦況はまた振り出し。
さらに向こうには援軍がいるし――

「ったくもー。あたし達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ、ルールーもガリューも」

そこまで考えたところで、俺達の左上の方。天井付近から、そん

な言葉と共に降りてくる小さな影。
幼女の近くまで来たその影は――小さかった。

大きさはリインフォース曹長と同じくらい。
ユニゾンデバイス!?　リインフォース曹長以外にも居たのかよ。
ふよふよと空中に浮かんでいる、意外な敵の援軍に呆気にとられる。

「アギト……」

「ホントに心配したんだからな」

警戒してるこっちの事は構わずに、幼女――ルールーって言うのか?――と、偽リインフォース曹長――アギトが言葉を交わす。うん、舐められてるね。

「ま、もう大丈夫だぞルールー。何しろこのあたし!　烈火のぉ、剣精!
アギト様が、来たからな!!」

空中に胡坐をかいたアギトの周りに小さな花火が舞う。
おーすげぇ。すげぇけど……凄く、隙だらけです。
これって攻撃していいんだろうか?

エリオとキャロのところに全員で集まりながら、思わずそう思った。

ていうか別にいいよね？

「ブレイブハート、バインド準備」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，》

さすがに避けられるかバッタモンに邪魔されるだろうけど、とりあえずバインドの準備をする。

だって凄く隙だらけなんだもん。

「オラオラぁ！　お前らまとめて、かかってこいやぁぁっ！」

「じゃあ遠慮なく」

《Ｒｉｎｇ　ｂｉｎｄ．》

アギトが威勢よく啖呵をきったところで、アギト、ルールー、バッタモンをリングバインドで拘束。

バッタモンは逃げるかと思ったが、普通に拘束された。

……ぇぇと。

「いや、本気で捕まんなよ」

そのツッコミは、我ながら的確だったと思う。

第２４話　『紫の幼女と新たな敵と　２』（後書き）

はいどうも、ラモンです。

ハヤト
「ボケとツッコミのマジシャン、ハヤト＝ロックウェルです」

さて、今回のゲストは、
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～の主人公。
シオン＝Ｃ＝メザーランスさんです！

シオン
「どうも」

本日は起こし頂き、ありがとうございます。

シオン
「いえいえ、こちらこそお招き頂いてありがとうございます」

立ち話もなんですしこっちへどうぞ。
今日は紅茶を用意してありますんで。

ハヤト
「お、珍しいな。お客様をもてなすなんて」

たまにはね。
ほれ、お前も座れ。

ハヤト
「へーい」

シオン
「今回、やっとルーテシアちゃんが出てきましたね」

ええ。まぁハヤトはロリっ子ロリっ子言ってますがｗ

ハヤト
「Ｄカップ以下は胸じゃありません」

お前、今全世界の女性の半数以上を敵に回したぞ。
つかＣカップでも十分大きいと思わね？

ハヤト
「はっ！　Ｄが基本！　Ｃとかマジ貧乳！」

メガシオン
「……ほほぅ」

ティーダ
「よく言ったなハヤト＝ロックウェル」

ハヤト&作者
「！？」

シオン
「おや、遅かったですね２人とも」

ティーダ
「悪い。黒い着物で「なん……だと……」って言ってる変な奴らと戦ってたら遅くなった」

ハヤト
「それ死神！　てかアンタ死んでるんじゃないの！？」

ティーダ
「貴様に引導を渡す為に、黄泉の国から戻ってきた！！」

メガシオン
「俺はちょっとヤボ用を済ませてきただけだ」

あ、えーと突然だったんで紹介が遅れました。
メガシオンさんは、眼鏡をかけたシオンさんで、まあ別人格だと思っていただければ。
ティーダさんは、言わずと知れたティアナのお兄さん。
こちらの作品でも既に亡くなっていますが、後書きなんかではたまに出てきますねw

ハヤト
「え、えぇと……それでお2人は何用で俺の後ろに立ってらっしゃるんでしょうか？」

メガシオン
「先日、こちらの感想で俺とシオンを女扱いしたことと」

ティーダ
「ここ最近の、お前のティアナに対する行動に対して、色々と説教をする為だ」

ハヤト
「えぇ！？　最初のはわかるけど、ティーダさんのはどういうこと！？
　俺別になにもしてないよ！？」

ティーダ
「何をいうかこの泥棒猫め！　こっちにこい！　じっくり説教してやる！！」

ハヤト
「えぇぇぇぇ！？」ズルズルズル……

おー、連れてかれた連れてかれた。
あっちは時間かかりそうですし、こちらはこちらで話し合いをしましょうか。

シオン
「そうですね。なら、ちょっと質問なのですが、ハヤト君はギンガさんとは相性が悪いんですか？
　作中で『脳筋巨乳』と言っているあたり、胸の大きさ的には問題ないようですし、同い年とは言えスバルのお姉さんですから、お姉さんキャラでもあると思いますが」

うーん、どちらかと言うと性格的な面ですかねぇ。
真面目で頑固っぽいギンガと、不真面目で馬鹿なハヤトは相性悪いんですよ。
ハヤトは基本、ボケ殺しされるのは嫌いなんで。

シオン
「なるほど。本当にハヤト君は女性の敵なんですねぇ……」

おぉ、黒いオーラが。

メガシオン
「がみがみがみがみがみ」

ティーダ
「がみがみがみがみがみ」

ハヤト
「（´・ω・`）」

あっちはあっちでスーパー説教タイムだし。

シオン
「……2人とも、口ではなくて身体に刻んであげてはどうですか？」

ハヤト
「ちょっ！　えぇぇっ！？」

ティーダ
「それはいい……クロスファイアーシュート！」

メガシオン
「伏竜七星破！」

ハヤト

「うぎゃあああああっっ！？」

おお、避けてる避けてる。
よく避けるなアイツ。

シオン
「さすがはギャグキャラ、と言ったところでしょうか。
この間のメテオスフォームも避けていたようですし」

おっと、じっくり見たいとこですが時間が迫ってまいりました。
このままだと事態が収拾つかなくなるんで、ヤっちゃってください。

シオン
「おや、もうそんな時間ですか。
わかりました……『メテオスフォーム』！！！」

ハヤト
「美人からの攻撃！　我々の業界ではご褒美です！」

メガシオン&ティーダ
「何で俺達までぇぇぇぇっっ！！」

吹っ飛んだ吹っ飛んだ。
では、今日はこの辺で終わりですかね。
シオンさん、ご出演ありがとうございました。
これ、お土産です

（，・ω・、）　つ『銘菓“いせりあくぃーん”』

シオン

「ありがとうございます。何だかラスボスっぽいお菓子ですね
それではまた、機会があったら呼んでください。ハヤト君」

それでは読者の皆様、また次の話で。
次回の後書きゲストは、『魔法少年の物語』主人公ソラ＝フォード君を予定しています！

アシェーリトさん、こんな感じでよかったでしょうか？
なるべくリクエストに添ってみました！

第２５話　『紫の幼女と新たな敵と　３』（前書き）

※注意！

ハヤトが果てしなくウザいです。

これを読んで気分が悪くなっても作者は一切の責任を負いません（笑）

第２５話　『紫の幼女と新たな敵と　３』

「予想ＧＵＹデス」

「ハヤト、それネタ古いわよ」

あんまり簡単に拘束できたんで、ちょっと現実逃避してしまった。
まあいい、とりあえず拘束できたんだし、レリックを回収しよう。
俺はレリックの入ったケースを抱える格好でバインドされてるロリっ子、ルールーのところへ近付く。

ところでルールーって本名なのか？
随分と呼び辛そうで、変わったお名前ですなぁ。

「というわけでルールーちゃん。レリック没収ね」

「あ……」

抱えていたケースを没収すると、少しだけ悲しそうに眉を寄せた。
ふむ、無表情なのに時々感情をだす……クーデレか。

「てめぇ！　ルールーにそれ返せよ馬鹿野郎！」

「いや、コレ危険だし。それに攻撃してきた奴に渡すとかなくね？」

「うっせぇ！　いいから返せよボケナス！　冴えねぇアホ面しやがって！！」

あらこれカチンときたねコレ私。
いいだろう、なら戦争だ。
ムカつくことをやらせて、俺の右に出る奴はいないぞ。

俺はレリックをティアナに向かって放り投げ――「危ないじゃない！」と怒られたが無視――て、それからアギトの方へと顔を向ける。
まあ、いきなり怒るのもアレだしまずは話し合おうじゃないか。

「な、何だよ。キモイ顔近づけんなボケ！」

「……（怒）」

決めた。ぜってぇ容赦しねぇ、泣かす。
別にキモイとかアホとか言われたのが原因じゃないよ？
このまま育ったら、アギトがロクでもないユニゾンデバイスになるから、それを止めるためだよ？

よし、自分に言い訳完了。
一度目を瞑って息を吸い、ニヤリと笑って口を開く。
くらえ！　俺の（ある意味）最終奥義！

「アギトだっけ？

余裕ぶっこいてたら捕まっちまったわけだけど、今どんな気持ち？
ねえねえどんな気持ち？
ねぇ、今どんな気持ちなの？」

ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべながら嫌味を言う。
アギトは最初こそ呆気にとられた顔をしていたが、すぐにムカついた顔になって大声で噛み付いてくる。
だが、それこそこっちの計画通りよ！

「てっめぇ！　ふざけんな！　こっちの不意をついて拘束出来ただけのくせに！！」

「人の前で調子にのって遊んでるのが悪いんじゃないですかー？ｗ
ねぇねぇ教えてよー、今どんな気持ちなのー？ｗ」

「くあああああっっ！　馬鹿みてぇな顔してるくせに何様のつもりだてめぇ！」

「その馬鹿みてーな顔してる奴に捕まったんですよね？ｗ
馬鹿に捕まった心境を教えてくれませんか？ｗ
俺馬鹿なんでわかりませんしー？　ねぇねぇ、今どんな気持ちなのー？ｗ」

「あああああああああああああああ！！！！」

バインドされたまま空中でジタバタと暴れるアギト。
よし、これはかなりムカついてるな。

しかしどんだけムカついても、バインドされてるから足をジタバタする以外には何も出来ない。

超ざまぁ（嘲笑）

「“お前らまとめてかかってこいや”でしたっけ？ｗ
大言壮語した割にはあっさり捕まりましたね？ｗ
そこら辺も踏まえて今、どんな気持ち？　ねぇねぇどんな気持ち？ｗ」

「ブッコロス！！！」

「バインドされてたらできませんよｗｗｗｗ」

「「……」」

隣から、ルールーとバッタモンの冷たすぎる視線がザクザク突き刺さるが、アギトを小馬鹿にできる喜びの方が数倍上なので全く平気だ。
アギトも段々と涙目になってきた。
よし、あと一押しで本気で泣くな。容赦しねぇ、マジ泣かす。

「バインド解きやがれ！　そしたら直ぐに消し炭にしてやらあっっ！」

「そんな風に言われて解くわけないねーですよｗ
俺のこと馬鹿って言う割に、アギトさんも頭良くないんですねｗ

てゆーかそれより先にさっさと教えてくれません？　今どんな気持ちですかぁ？ｗ」

「う〝う〝う〝……！！」

歯を食いしばったアギトの目から、ポロポロと涙が零れだす。

よ　し　泣　い　た　！

奥義が決まった事が嬉しくて思わずガッツポーズ。
だがここで手は緩めない。キチンと追撃して、完膚なきまでに再起不能にしてやる！

≪　マスターハヤト　≫

「後にしろブレイブハート！　俺は今忙しい！」

≪　ですがマスターハヤト、このままでは――　≫

「後にしろって！」

五月蝿いブレイブハートに怒鳴って、とどめを刺そうと口を開いた瞬間――

「「「「「「「「「「あ」」」」」」」」」」

「あ〝」

《　――魔力切れです　》

アギトとルールー、バッタモンを拘束していた真紅のバインドが、音もなく消えていった。

やっべ……さっきのガジェット戦で調子乗りすぎたか？

バインドって使ってる限り常時魔力を消費するから、じわじわ削れてたのか。

「……」

「……」

涙を目に溜めたアギトと、冷や汗をかき始めた俺の視線が交わる。

どう考えてもピンチだよね。

よし、ここは伝家の宝刀を使う時と見た！

「……ごめーんね☆」

片目を瞑って舌をちょっとだけ出し、可能な限り可愛い声で謝る。

これで許して貰える――

「ふざけんなあああああああっっっっ！！！」

「――訳無いですよねぇぇぇっっっっ！？」

火炎弾の雨が降り注ぐ中を、ティアナ達の方へ向けて駆けていく。
当たったら、魔力切れの俺即死亡だよ！
魔力残量の確認って大事だね☆

「「「「馬鹿あああああっっ！！」」」」

気絶しているキャロ以外の４人の声が、広い空間に響いた。
すいません、ちょっと真面目に反省します。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第２５話　『紫の幼女と新たな敵と　３』

ｓｉｄｅ：ギンガ＝ナカジマ

「ブッッッッッッコロス！！！」

赤い髪のユニゾンデバイス――アギトが薙ぎ払うように炎を撃つ。
私達はそれを後ろに跳んでかわし、ハヤト君は全力疾走して私達に続く。
もう！　あそこで遊ばなきゃ、もっとスムーズにいってたのに！！

「ちょ！　お前ら誰か一人くらい俺のこと庇うとかしろよ！！
今俺シールドとか張れないんだから、当たったら燃えちゃうよ！？」

「自業自得でしょ！　アンタが遊んでるから、魔力切れでバインドが解けたんじゃない！！」

「そのとおりですごめんなさい！」

爆音と土煙が舞う中を器用に走りぬけて、私達と同じ場所に辿りつく。
ほんとにもう。こんな時でもふざけるのは相変わらずね。
久しぶりだっていうのに全然変わってないんだから。

呆れて溜息を吐こうとした瞬間、土煙に影が映る。
ガリューって言うあの人型！？

「っ！！」

ガリューが土煙から飛び出すのと同時にローラーで走り出す。
飛び出したガリューが右手から伸ばした刃に、左手のナックルを

全力でぶつける。
　一瞬の拮抗の後、ぶつかった魔力同士が爆発して、互いに元の位置に戻った。

「んにゃろおっっ！！」

「！！」

　すると、今度はアギトが４つの火球を作る。

「こっちだギンガ！」

「うん！」

　ハヤト君の声に答えて、近くの柱の影に入る。その直後、真横の水路で４つの爆発。
　水が跳ね上がって雨みたいに上から降ってくる。

「きったねーなこのチビ助！」

「うるっせぇ！　隠れてねーで出てきやがれアホ面ヤロォ！！」

「誰が行くかばーーーーーーーか！！」

「んなっ！？　馬鹿って言ったなこんのぉぉっっっ！！」

「馬鹿だから馬鹿って言ったんですー！」

「子供みたいな口喧嘩してんじゃないわよ！」

き、緊張感ないなぁ。

同い年とは思えないハヤト君の物言いに、隠れながら苦笑してしまう。

まあ、とりあえず敵の気を逸らしてくれてる（？）んだからいいけど……。

「ティア、どうする？」

ハヤト君がアギトと口喧嘩をしている横で、スバルが小さく尋ねた。

「任務はあくまでケースの確保よ。撤退しながら引きつける」

「こっちに向かってるヴィータ副隊長とリイン曹長に上手く合流できれば、あの子達も止められるかも。だよね？」

「そう！」

……ちょっと見ない間に、スバルも随分頼もしくなったみたい。

前だったら、後先考えずに突っ込んでいったのにね。

そんな風に思った時、頭に声が響いた。

『よし。中々いいぞスバルにティアナ』

「「！　ヴィータ副隊長！？」」

『私も一緒です。２人とも、状況を良く読んだ、ナイス判断ですよ！』

聞こえてきたのは、ヴィータさんとリイン曹長の声。

通信じゃなくて念話ってことは、もうすぐそこまで来てるんだ。

「ヴィータ副隊長、リイン曹長、今どちらに？」

「ルールー！　何か近付いてきてる！！」

エリオ君がそう聞き返すのと、アギトが焦った声を上げるのは殆ど同時だった。

「魔力反応……でけぇっ！？」

「うおりゃあああああああっっっっ！！」

裂帛の気合と共に、近くの天井が突き破られる。

大量の瓦礫が降ってきて、また土煙が上がった。
そして一拍置いて、その煙の中から、まずリイン曹長が飛び出す。
視線の先にはアギトとルールーって呼ばれた子。

「捕らえよ、凍てつく足枷！　フリーレンフェッセルン！！」

2人の周りに風が巻き起こって、一瞬で氷の中に閉じ込める。
ガリューがそっちに意識を逸らした瞬間、今度はヴィータさんが飛び出した。

「ぶっ飛べえええええっっっっ！」

ギガントフォームのグラーフアイゼンを叩きつける。
ガリューは何とかガードしたけれど、ヴィータさんのパワーに押し負けて吹き飛ばされた。
……すご、私達からしたら結構手強い相手だったのに。

「おう、待たせたな」

「皆無事で良かったです～」

「あ、あはは……」

私達が苦戦した相手をいとも容易く倒してしまった2人を見て、もう苦笑するしかなかった。

side：ギンガ＝ナカジマ　了

「……ちっ」

バッタモンが吹っ飛んだ場所を見たヴィータ副隊長が、小さく舌打ちする。

何だ？　やりすぎてミンチにしちゃったのか？

ヴィータ副隊長ならやりかねん。

「こっちもです！」

「リインフォース曹長も！？」

馬鹿な！　拘束魔法でどうやってミンチに！？

「逃げられた……ですね」

ああ、そういう意味でしたか。

安心しました。身内から犯罪者が出なくて。
ホッと胸を撫で下ろしながら、リインフォース曹長の方へと向かう。

拘束魔法が解けた場所には、下へと逃げたであろう大穴が開いていた。
あの一瞬で掘ったのか……器用だなルールーとアギトは。

「っ！！」

直後、いきなり辺りが揺れだした。
地震？　何でいきなり！

「……大型召喚の気配があります。多分、それが原因で」

マジで！？　地震起こすような物騒なの呼んだのか、あのロリっ子は！
ええい、召喚士ってのは厄介な存在だよ全く！

「ひとまず脱出だ！　スバル！」

「はい！　ウィング、ロード！！」

ヴィータ副隊長の指示で、スバルが副隊長達の通ってきた場所―

―外へと向けてウィングロードを螺旋状に展開。
とりあえず生き埋めになるのだけは免れた。

「スバルとギンガが先頭で行け！　あたしは最後に飛んでいく！」

「「はい！」」

ナカジマ姉妹が頷いて駆け出す。
俺はラストかな。
途中でこけて迷惑かける訳にもいかんし、最悪ヴィータ副隊長に抱えて行ってもらおう。

そう思ってティアナ達を見れば、何やら悪巧みをしているようだ。
……そうだな、アギトにまだキチンとお返しも済んでないし、俺も混ぜて貰おうじゃないか。

「ティアナ、キャロ、何するんだ？」

「ちょっとね。考えがあるの」

「へぇ、そいじゃちょっとお兄さんも混ぜくれませんかね？」

「……いいけど、邪魔しないでよ？」

「任せとけ！」

ドン、と胸を叩いて返事する。
待ってろアギト……今度こそ完璧に泣かして凹まして悔しがらせてやらぁ。
俺は、怒らせたらしつこいぞ？

ｓｉｄｅ：―

ハヤト達が地上へ向けて走っている頃、地上ではハヤト達の居る真上の辺りに、巨大なカブトムシが鎮座していた。
恐らくはこのカブトムシが、地下に地震を起こした原因なのだろう。
バチバチと断続的に雷を放出している。

「だめだよルールー！　これはマズイって！！」

その地雷王を見下ろす位置、近くの細い建物の上にいるルーテシアをアギトが必死に止めている。
彼女がやっている事は、下手をすれば殺人を犯すことになってしまう。
それはアギトの望むところではないのだろう。少し強い語気で、彼女に語りかけている。

「埋まった中からどうやってケースを探す？

あいつらだって、局員とはいえ潰れて死んじゃうかもなんだぞ！？
まあ、あの馬鹿は死んでもいいけどさ」

“あの馬鹿”が誰を指すのかは想像に難くないが、まあそれは置いておいて。
一生懸命に理由を語って、何とか地雷王での地下崩落を止めさせようとするアギト。
だが、ルーテシアは表情を動かさずにじっと地雷王を見つめて呟く。

「あのレベルなら、多分これくらいじゃ死なない。ケースは、クアットロとセインに頼んで探して貰えばいい」

その言葉に、アギトがさっきまでとは違った意味で血相を変えた。

「よくねーよルールー！　あの変態医師とかナンバーズ連中と関わっちゃ駄目だって！
ゼストの旦那も言ってたろ？
あいつら口ばっか上手いけど、実際のところあたし達の事なんてせいぜい実験動物くらいにしか――」

アギトがそこまで言ったところで、何かが陥没するような音がアギトの耳に入る。
そちらに視線を遣れば、地雷王の居る場所が地雷王を中心に円形に窪み、地雷王が発していた電撃が消えている。

「……あぁ、やっちまった」

そう呟いて項垂れるアギト。

だが、彼女も恐らくはハヤト達が死んでいるとは思っていないのだろう。

その口調は存外に軽いものだった。

そんなアギトを横目に、ルーテシアは左手側に立っているガリューを見た。

「ガリュー……怪我、大丈夫？」

【……】

尋ねられたガリューは、左胸――エリオに斬られた箇所から血を流しつつも頷いた。

先ほどまで流れていなかったのは、恐らく無理矢理血を止めていたのだろう。

「戻っていいよ。アギトが居てくれるから」

【……】

返事の代わりに頭を下げ、ガリューの身体が紫に輝いてその場か

ら消える。
そして、ルーテシアは地雷王の方に視線を移す。

「地雷王も……っ！」

戻っていいよ、と続ける前に異変が起きた。
地雷王の真下に、桃色の魔方陣が浮かび上がったのだ。
そしてそこから何本もの鎖が飛び出し、地雷王に巻き付いて拘束する。

「何だ？」

「召喚……？」

自分がやるものと似たような召喚に、ルーテシアが眉を潜める。
確かに死なないとは思ったが、まさかもう脱出しているとは予想していなかった。
動揺するアギトとルーテシア目掛けて、２本のウィングロードとヴィータが迫る。

「っ！」

動き出そうとした瞬間、自分達の真正面にあるビルの屋上に居るティアナに気付く。

だが、ルーテシア達が何かをするよりも早く、ティアナが引き金を引いた。

「ちぃっ！」

「……」

撃ち出された魔力弾を回避しながら、アギトが火炎弾を、ルーテシアが虚空より生み出したダガーを撃ちだす。

しかしそれは牽制以上の意味を成さず、ティアナには避けられ、ヴィータ達の勢いを止めることすら叶わない。

それを見ながら、ルーテシアは近くの高架の手摺部分に着地、アギトはその近くに飛んできた。

だが、それが罠だった。

彼女が着地するのとほぼ同時に、高速で移動したエリオがルーテシアの胸元にストラーダを突きつけ、アギトの周りには氷で出来た無数のダガーが浮かぶ。

この間、実に数十秒。

数の差と、実戦経験の差が如実に表れた結果といえるだろう。

「ここまでです」

ルーテシアの横にやってきたリインがそう告げ、ルーテシアとアギトをしっかりとバインドする。

それを追うように、ティアナやスバル、ギンガやハヤトといった面々も彼女達の方へと集まってきた。

完全に囲まれたことを認識すると、ルーテシアは小さく俯き、アギトはもがくのをやめて地面に座り込んだ。

その近くに降り立ったヴィータが溜息を漏らしながら彼女らを見据える。

「子供を虐めてるみてーで、いい気分はしねーが。

市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他諸々で逮捕する」

その言葉で、ルーテシア、アギト対機動六課フォワード陣＋αの戦いは一応の終息を見た。

ヴィータの言葉を聞いたハヤトが「ヴィータ副隊長も子供じゃないッスか」と余計なことを口にして、アイゼンの頑固な汚れになったのは……まあ、余談だろう。

ｓｉｄｅ：―

第２５話　『紫の幼女と新たな敵と　３』（後書き）

本編とストーリーがほぼ同じだと、構成が楽で助かります。
そして今回の合言葉は

「こ　れ　は　ウ　ザ　イ　！」

どうも、ラモンです。
さて、今回のゲストは灰色の野良猫さん執筆
『魔法少年の物語』の主人公！　ソラ君でーす！！

ソラ
「初めまして。ソラ＝フォードって言います」

アイリイン
「リインフォース・アインスだ」

あれ？　うちの駄目主人公はどこ行ったんだ？
何かソラ君が来たあたりから姿が見えないんだけど……。
おーい、ハヤトー？

ソラ
「……嫌われてしまったんでしょうか」

いやいや、それは無いよ。
ハヤトは年下には無条件で甘いから。
多分、龍のカラドボルクにビビってそこら辺に隠れてるんでしょ。
そのうち出てくるよ。

ソラ
「そういうモノなんでしょうか？」

そういうモノです。

ソラ
「うゅ？　そうなんですか」

アイリイン
「それにしても今回のハヤトは……何と言うか、アレだな」

ウザい？

アイリイン
「言い辛いが……まあ、そういう事だ」

まあね。

『機動六課のとある休日編』って、今回の「ねえ、どんな気持ち？」のくだりが書きたくて、あんなノリにした訳だし。

ソラ
「あれがやりたかっただけなんですか！？」

うん。

しかもあれって一番最初に浮かんだ場面なの。

アギトを捕まえて、ハヤトが「ねえ、どんな気持ち？」ってやってる場面。

正直、ウザいと思ってもらえれば大成功だね。

俺自身書いてて「こいつウゼー」って何回言ったかわかんないもん。

アイリイン
「なんと言うか……」

ソラ
「凄い、ですね」

ああ、一応ここで断っておくとバインドが常時魔力消費するってのは作者の妄想です。
公式ではどうだかわかりません。

ソラ
「アニメでも、ルーテシアさん達の事、最終的には拘束具で縛ってたみたいですし、それで思いついたんですか？」

そうだね。
後は、そうしないと魔力切れおこしてバインド消えるって出来ないから。
ハヤトが活躍して終わりなんて、この作品としてはあるまじき展開だからね！

アイリイン
「……彼は主人公ではないのか？」

あいつは2．5枚目ぐらいが目安で書いてるんで。
活躍ポイントが＋2されたら、即座に－5されるよ。

ソラ
「結局マイナスになるんですね。駄目ですよ、ハヤトさんが可哀想です」

う、さすがソラ君。
あんな馬鹿の事も庇ってあげるとは、優しい男の子の代表だね！
そりゃアリサ達も好きになっちゃうね！

ソラ
「え！？　あ、あぅ……」

あはは、照れてる照れてる。
大丈夫大丈夫、ソラ君なら皆を幸せに出来るって。
もっと自信持ってオーケーだよ！

ソラ
「あ、ありがとうございます」

？？？
「……おぉぉ」

アイリイン
「ん？　今、何か聞こえたような？」

え？　何か聞こえたソラ君？

ソラ
「いいえ、ボクには何も……」

？？？
「……おおおおお」

ソラ

「！」

聞こえたね。
どこからだろ？

アイリイン
「カラドボルクの辺りからのような……」

？？？
「おぉぉぉぉ」

！　カラドボルクの左後ろ足からだ！
ソラ君、カラドボルクに足ちょっと上げるように言って！

ソラ
「はい！　カラドボルク、足をどかして！」

カラドボルク
『……』

３人
「！？」

ハヤト（薄）
「し、死ぬかと思った」

３人
「（ペラッペラだーーーーっ！？）」

ハヤト（薄）

「うぅぅ……いきなり潰されるとは思わなかった」

ソラ
「ご、ごめんなさい！」

ああ、いいよいいよソラ君。
こいつは基本的にこういうキャラだからさ。

ハヤト（薄）
「何でお前が言うんだよ！！」

そう怒るなって。
あとで空気入れるヤツで戻してやるから。

アイリイン
「そ、それで戻るのか？」

戻るね。だってギャグキャラだし。

アイリイン
「そうか……興味深い」

ハヤト（薄）
「俺も興味深いです、特に君の胸が！」

アイリイン
「な……っ！？／／／　ブラッディダガー！！」

ハヤト（薄）
「今の俺には効かぬわぁぁっ！！」

アイリイン
「馬鹿な！？　あえて風に身を任せ、ブラッディダガーが起こした風圧を利用してかわすだと！？」

ハヤト（薄）
「これぞギャグキャラ補正！」

ソラ
「す、凄いですハヤトさん！」

アイリイン
「！？　だ、駄目です創造主ソラ！
こんな馬鹿にそんな憧れるような視線を向けては！」

そうだよソラ君。
君はその純真なままでいておくれ！
じゃないとアリサ達に俺が殺されてしまう！！

ソラ
「うー？　そうなんですか？」

アイリイン
「そうです！」

ハヤト（薄）
「ソラたん可愛いなぁ……はぁはぁ」

アイリイン
「！？　か、帰りましょう創造主ソラ！

これ以上のコイツとの接触は、創造主ソラの為になりません！」

そ、そうだね。
今回はゲスト出演ありがとう！
これお土産！

（，・ω・、）　つ【薔薇乙女御用達のゴスロリ各種セット】

ソラ
「わぁ、ありがとうございます！」

アイリイン
「創造主ソラ！　急いで帰りましょう！
このままではコイツに毒されてしまいます！」

ソラ
「うー？」

そ、それじゃあまた次の話で！
アイリインさん！　急いでソラ君連れて帰って！
この変態は俺が抑えておくから！

アイリイン
「承知！」

ハヤト（薄）
「ぬぅっ！？　離せ作者！
俺は今からソラたんに色々着せ替えたり、アイリインたんの胸にダイヴしたりするんだーっ！」

やらせるか馬鹿！
あ、それと次回ゲストは
『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ&ａｍｐ;Ｐｈａｎｔｏｍ』より
神藤昶さんを予定しております！

第２６話　『紫の幼女と新たな敵と　４』（前書き）

今回は、最後にちょっとアンケートのお知らせがあります。

第２６話　『紫の幼女と新たな敵と　４』

ｓｉｄｅ：―

ハヤト達がルーテシアを拘束した頃。
廃棄都市区画の中でも一際高いビルの屋上に、２人の人影があった。

１人は眼鏡をかけてケープを羽織った、髪を二つ結びにしている女性。
もう片方はマントの様な物に身を包み、自分の身長ほどもある巨大な何かを持ち、首の後ろで髪を一つに纏めている少女だ。
特徴的なのは、２人とも同じようなボディスーツを着ていることだろうか。
それぞれの首の少し下、胸の上あたりには、それぞれ『？』と『？』の刻印が入ったプレートが光っている。

「ディエチちゃ～ん。ちゃんと見えてるぅ？」

眼鏡をかけた女性が、マントを羽織る少女――ディエチに語りかける。
ディエチは空を見上げながらそれに返す。

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる。……よく見える」

ディエチが見つめる視線の先。
そこには、ハヤト達が保護した少女を乗せたヘリが飛んでいる。
肉眼では確認ができない程に距離が開いている筈なのに、ディエチの目は確実にそれを捉えていた。

「でもいいのかクアットロ？　撃っちゃってさ。
ケースは平気だろうけど、“マテリアル”の方は破壊しちゃう事になる」

穏やかではない内容を、さも何でもないことのように話すディエチ。
それを聞くクアットロも同じように、軽い笑いさえ漏らしながら答える。

「ふふ、ドクターとウーノ姉さま曰く。
あの“マテリアル”が当たりなら……本当に『聖王の器』なら、砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよ？」

「ふぅん」

気のない返事をしながら、ディエチは持っていた巨大な物を包む布を取る。
すると、小柄な彼女に扱えるとは思えない程の巨大な砲身が姿を見せた。

「さぁて、それじゃさっそく――『クアットロ』――ん？」

それを屋上入り口の上から見下ろしながら、クアットロが砲撃を指示しようとした時、彼女の目の前にウーノが映るモニタが開いた。

「どうしました？　ウーノ姉さま」

『ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「あぁ～。そういえば、例のチビ騎士に捕まってましたねぇ」

惚けるような、しかしどこか楽しそうな声でそれに答えるクアットロ。

それを見たウーノは、少し疲れた顔をしつつも話を続ける。

『今はセインが様子を窺っているけど……』

「フォローしますぅ？」

そう言ったクアットロの目には、惚けた口調とは裏腹に鋭い光があった。

『お願い』

「了解で～す」

ウーノの短い返答と共にモニタが消える。
クアットロは眼鏡の位置を直しながら、様子を窺っているという自分の妹――セインへと念話を飛ばした。

「……セインちゃん？」

クアットロとディエチが居るビルから数ｋｍ離れた高架の上。
そこではハヤト達によって捕らえられたルーテシアとアギトが、拘束具で拘束し直され、ハヤト達から質問を受けていた。
逃げられないように、レリックのケースを持ったエリオと戦闘能力が高くないキャロをハヤトが背に庇い、それ以外の５人で彼女達を囲んでいる。

「それで、目的は何だ？　何でレリックを狙った？」

「……」

ヴィータが強い口調で尋ねるが、ルーテシアは答えない。
ただ瞑目して、沈黙を守っている。
彼女を囲んでいるスバルやティアナも口を開いて尋ねるのだが、
彼女に答える気配は無い。

『ハァ～イ。ルーお嬢様』

『……クアットロ』

そんなルーテシアの頭に、唐突にクアットロからの念話が届く。
そこで初めて彼女は目を開き、少し驚いた表情になったのだが、
ヴィータ達は気付かない。
唯一ハヤトだけが、少し気になったように眉を潜めたが、直ぐに
何でもないと判断して気にしなかった。

『何やらピンチのようで。お邪魔でなければクアットロがお手伝い
致します♪』

心底楽しそうな声でクアットロが提案する。
対してルーテシアは再び瞑目し、『お願い』とだけ答えた。

『はい～。ではお嬢様？　クアットロが言うとおりの言葉を、その

赤い騎士に』

『うん』

自分を見つめているヴィータを見つめ返し、ルーテシアはクアットロの言葉を待つ。

◇◇◇◇◇

同時刻、なのはとフェイトはヘリを目指して全速力で移動していた。

あからさまな陽動に、敵の狙いがヘリに乗る少女と、レリックである可能性が高いと判断したからだ。

そして、風を切って空を飛ぶ2人の視界に無事な姿のヘリが映る。

「見えた！」

「よかった、ヘリは無事！」

ヘリの無事な姿になのは達が胸を撫で下ろした瞬間、いきなり大きな魔力反応が現れた。

魔力反応の元は、ディエチとクアットロの居たビル。

否、ディエチが構えたあの巨大な大砲からだ。

『砲撃のチャージ確認！　物理破壊型、推定Ｓランク！』

悲鳴のようなロングアーチからの通信に、なのはとフェイトの顔に緊張が走った。

◇◇◇◇◇

「ＩＳ（インヒューレントスキル）・ヘヴィバレル、発動」

構えた砲身の先に橙色の巨大な魔力の塊を浮かべ、ヘリに狙いを定めながらディエチが呟く。

それを、先ほどまで座っていた屋上入り口から降り、ディエチ後ろに立って眺めつつ、クアットロは楽しそうにルーテシアへの伝言を口にする。

『「逮捕は、いいけど」』

「『大事なヘリは、放っておいていいの？』」

「！？」

ルーテシア越しに放たれた言葉に、ルーテシアを囲んでいた全員が驚愕する。
彼女達も、先ほどの通信を聞いていた。
そして今のルーテシアの言葉。

ルーテシアがクアットロの言葉をそのまま復唱していたとは知らないヴィータ達は、目の前の少女がヘリを撃つように命じたのだと錯覚する。
そして、発射へのカウントダウンを続けるディエチを見守るクアットロから、ルーテシアに更に言葉が届く。
ルーテシアはそれに何の疑問も持たず、ヴィータに対して、彼女を言葉を一字一句違わず告げる。

「『貴女は、また』」

『「守れないかもね」』

「……発射！」

クアットロが言い終わり、ヴィータが目を見開いたのと同時に、ディエチの構えた砲身から“ソレ”は放たれた。
殺傷設定の砲撃魔法。
純粋に人を殺すことだけを目的とした砲撃が、ヘリに向かって空を奔る。

なのはとフェイトは、まだヘリとの距離がある。
ヴィータ達は遥か遠方で間に合わない。

そして、放たれた砲撃が轟音と共に爆発した。

ｓｉｄｅ：―　了

『砲撃……ヘリに、直撃……』

『そんな筈ない！　確認して！』

『ジャミングが酷い……精査できません！』

ロングアーチの声が響く。
ヴィータ副隊長も俺達も、全員が呆然としてしまった。
陽動だとは思った、だけどまさか撃墜するなんて予想外にも程があるだろ。

「そんな……」

「ヴァイス陸曹と、シャマル先生が……」

「……っ！！　てめぇっ！！」

エリオとティアナが呟いた瞬間、ヴィータ副隊長がルールーに掴みかかる。
それで、俺も我に帰った。
慌てて副隊長を後ろから羽交い絞めにする。

「駄目ですよ副隊長！　何してんですか！」

「離せハヤト！」

暴れるヴィータ副隊長を必死で抑える。
くっそ、すげーパワーだなオイ！

「こんな小さい子に何する気ですか！？　落ち着いてくださいよ！」

「うるっせぇ！」

俺を振り払った副隊長が、もう一度ルールーに掴みかかった。

「仲間がいんのか！？　どこに居る！？　言え！！」

ルールーを揺さぶりながら、大声を出す。

駄目だ、ヴィータ副隊長は冷静になれてない。
普通に考えたら言う訳ないってわかるだろうに。

「だから駄目ですって副隊ちょ――「エリオ君！　足元に何か！」
――！？」

もう一度副隊長をルールーから引き剥がそうとした瞬間、隣にいたギンガの鋭い声に後ろを振り向く。
瞬間、地面を“透過”して人影が飛び出してきた。

「うわっ！？」

「いただきっ！」

そいつはエリオからケースを奪い、そのまま円い軌跡を描いて、逆側の地面へと“沈んだ”。
そう、掘るのでも、壊すのでもなく、まるで水に入るかのように沈んだのだ。
ティアナがその場所を撃つが、弾丸は当たることなく地面を少し削っただけだった。

「くそっ！」

「っ！」

人影を追って、ヴィータ副隊長とティアナがルールーから離れる。
……おかしい。
今のは多分ルールーの仲間だろう。なら、なんで彼女を連れて行かなかった？
一瞬だったとはいえこっちは不意を突かれた訳だし、連れて逃げるのも不可能じゃなかった筈だ。
なのに連れて行かなかった……見捨てたのか？
それともまだ他に誰かが来るのか……。

というかあいつの能力は何だ？
移動系の魔法か？　それともレアスキル？
少なくとも、俺の知る限りじゃあんな魔法は……。

そこまで思考した時、再びあいつが地面から姿を見せる。
しかも今度はルールーの目の前に。

「しまった！？」

「！！」

俺が叫ぶのと、そいつがルールーを抱きかかえるのが同時。
そのまま俺が駆け出すよりも早く、揃って地面へと沈んでいく。

「こいつっ！」

ヴィータ副隊長が気付いて慌てて取り押さえようと飛び掛る。
俺も走り出すが、どちらも間に合わない。
副隊長は地面に滑り込む形になり、俺の伸ばした手も届かなかった。

「……下かっ！」

「ぶっとべぇっ！！」

「ハヤト！　危ない！」

「んなっ！？」

高架の下へ行こうと振り返った瞬間、アギトとスバルの声が俺の耳に届いた。
意識を向けるより先に、背後から爆音と衝撃。
後ろを見れば、シールドを張ったスバルと、アギトを縛っていた拘束具を手に持ったリインフォース曹長の姿。

どうやらアギトが今の一瞬で逃げ出し、追いかけようとした俺に向かって攻撃してきたようだ。
そして、それをスバルが庇ってくれた訳か。

「悪い、助かった」

「いいよ。それより早くさっきの子を！」

「ああ」

「駄目です」

スバルの言葉に頷いて、もう一度追いかけようとした俺を、リインフォース曹長が止める。

「反応……ロストです」

「……そう、ですか」

「……くそぉっ！」

曹長の言葉に、副隊長が地面を叩く。

俺も、俯いて拳を握り締める。

くそっ！　まんまとしてやられた。

ヘリの事で動揺してたところに、いきなり見た事のない魔法を使う奴が乱入したってので冷静に対処できなかった。

あの新手の能力が何であれ、このタイミングならルールーを助けない訳が無いだろう！

「ロングアーチ、ヘリは無事か？　あいつら、落ちてねぇよな！？」

せめてヘリだけは無事であって欲しいという俺達の気持ちを、副隊長が代わりに問いかけた。
果たして、その答えは――。

side：―

結果だけを先に言うならば、ヘリは無事だった。
ギリギリのタイミングだったが、なのはとレイジングハートの限定解除が完了。
速度を増したなのはが間一髪でヘリを防衛。

しかし、主犯と思われる2人――クアットロとディエチの捕獲は失敗。
ルーテシア達にも逃げられ、何一つ手がかりとなりそうなモノは無い。
代わりにこちらはなのはとはやて、2人のリミッター解除権限を使わされるという、ある意味最悪の結果になった。

「……逃がしたか」

ロングアーチから対象反応のロストという報告を聞き、はやてが眉を顰める。
そして、はやてと通信を繋いでいたヴィータも、苦々しい表情でそれに続けた。

「ああ、こっちは最悪だ。
召喚士一味には逃げられ、ケースは持っていかれちまった。逃走経路も攫めねぇ……」

「あ、あのヴィータ副隊長……」

報告しているヴィータに向けてスバルが声をかけるが、言葉を続ける前にグラーフアイゼンを向けられて押し黙る。
そのままヴィータは報告を続けるが、今度はハヤトが声をかけた。

「副隊長、ちょっといいですかね？」

「……なんだ！？　報告中だぞ！」

「いやその、言うのすっかり忘れてたんスけど……」

「レリックには、あたし達でちょっと工夫してまして……」

「？」

苦笑いしながらそう言うハヤトとティアナに、ヴィータは不思議そうに首をかしげた。

◇◇◇◇◇

「……っ」

スカリエッティがアジトとしている地下施設。
その通路で、アギトとセイン、そして他の少女達が、奪ってきたケースを前に小刻みに身体を震わせている。
ケースの中には、目的であったレリックは無く、代わりに文字の書かれた一枚の紙キレが入っていた。

そこにはハヤトの文字で、

【レリックがそう簡単に手に入ると思ったの？
ＢＡ　ＫＡ　ＮＡ　ＮＯ　？
あ、あとアギトはいつかもっかい泣かす】

と、ご丁寧に舌を出しているイラストまでが描かれていた。
完全に喧嘩を売っている。

「あんのやろぉぉぉぉっっっっ！！」

「……ここまでムカつかされたのは、初めてかしらねぇ？」

「ムカつく」

「貴様らがちゃんと確認していれば……！」

「あたしのせいじゃないよ！」

ルーテシアを除く５人――アギト、クアットロ、ディエチ、セイン、そして紫色のショートヘアーの女性が声を荒げる。

そんな中で、ルーテシアだけはケースに刻印された『？』という数字を見て、悲しそうに眉尻を下げたのだった。

◇◇◇◇◇

「ケースはシルエットではなく、間違いなく本物でした」

「ティアナのシルエットは衝撃に弱いんで、下手に増やしても奪われた時点でバレますからね」

高架の上では、ハヤトとティアナを筆頭に、ＦＷの５人がヴィータとリインに解説をしていた。

「なので、ケースを開封してレリック本体に直接厳重封印をかけて」

「中身は……」

そう言って、スバルがキャロが被っていた大き目の帽子を取る。

そこには、一輪の花が咲いているヘアバンドがあった。

「こんな感じで」

ティアナが言葉と共に指を鳴らすと、ヘアバンドがレリックへと姿を変える。

「敵との直接接触が少ないキャロに持ってて貰おうって」

「帽子の中ってのも、隠すのには都合よかったですしね。結構いい考えでしょ？」

「何でアンタが偉そうにしてんのよ、アンタは何か書いた紙入れただけじゃない」

「あ、馬鹿言うなよ！」

自信満々に解説するハヤトの頭をティアナが叩く。

そんな2人を見ながら、ヴィータは頬を引き攣らせ、リインは「なるほどぉ！」と声を上げる。

「……ま、まぁレリックが守れたならいいか」

逃げられたという苦い思いはあるものの、第一目標であったレリ

ックを無事確保できたことに、ヴィータは小さく笑うのだった。

こうして、ハヤト達の長い休日は終わりを迎えた。
レリックを狙う新たな敵、その幻影を色濃くハヤト達に植え付けて――。

side：― 了

第２６話　『紫の幼女と新たな敵と　４』（後書き）

ハヤト
「読者の皆さんおはこんばんちわ！
いよいよ始まりましたハヤトークの時間です！」

昶
「こっちのを丸パクリかい！」

ハヤト
「おお！？　ナイスツッコミ！
今回のゲストはこの方！　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ&ａｍｐ;Ｐｈａｎｔｏｍの主人公、神藤昶さんです！」

昶
「いや、こっちでやってるアキトーク丸パクリに対する謝罪は無しかい！？」

ハヤト
「無いよ！　あれだよ、バラエティ番組でよくあるオマージュってヤツだよ！」

昶
「くっ、こっちも元々がオマージュなだけに言い返せない……。
まあいい、そういえば作者さんはどこだ？　会うのを楽しみにしてたんだが」

ハヤト

「作者？　ああ、作者ならあっちで凹んでるよ。
今回の話が上手く纏められなくて、自分の文才の無さに絶望したそうだ」

昶
「そ、そうなのか」

ハヤト
「なので、今回は進行役として八神部隊長に起こし頂いたぜ！」

八神
「どうもー♪」

昶
「はやて先輩！？」

八神
「おー、平行世界の私の後輩さんやな？
ふむふむ、中々ええ男やないの」

ハヤト
「そんな！　部隊長には俺が居るじゃないですか！
昶なんてどんどんフラグばっか乱立させる、ハーレム野郎ですよ！？」

昶
「おいコラ、ゲストになんてこと言うんだお前は！」

ハヤト
「うっせーこの野郎め！

千華ちゃんだけでも羨ましいってのに、他にもどんどんフラグ立てやがって！
モテない男の恨みを思い知れ！！」

昶
「ちょっ、おい！　石投げるな！」

八神
「ほらほらハヤト君、そこらへんにしとき？
ディアボリックエミッションで沈めるで？」

ハヤト
「イエッサー！！！」

昶
「……なんていうか、こっちのはやて先輩もぶっ飛んでるなぁ」

八神
「そうなんか？　まあ平行世界とはいえ、私は私やからな」

ハヤト
「えー、それでは気を取り直して。
いよいよ本編でもナンバーズが出てきたね」

八神
「そやね。しかし、私ら隊長陣の活躍は丸々カットなんやなぁ」

ハヤト
「作者曰く、そんなに書いてたら文章量多くなって大変なんじゃ！、だそうッスよ」

八神
「駄目駄目やな」

昶
「2人とも、自分の出演作品の作者なのに容赦ないな……」

ハヤト&八神
「事実だから仕方ないね」

昶
「作者、ちょっと同情するぜ」

ハヤト
「そういえば昶、アルトリアさんは一緒じゃないのか？」

昶
「ああ。今回は留守番だけど……連れてきた方がよかったか？」

ハヤト
「んー……まあいっか、アルトリアさん胸無いｓ「エクスカリバァアァァァッッッ！！！」ぎゃあああ！？」

昶
「！？　アルトリア！？」

八神
「？　誰も居らんで？」

昶

「え、だって今のエクスカリバーって……」

八神
「後書き空間は何でもアリやからな。気にしたら負けやで昶君、わかっとるやろ？」

昶
「そうでした」

八神
「さて、何だかんだで時間も迫ってきたな。
最後にお知らせや。

お気に入り登録が２００件突破した記念に、『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ』っちゅー番外編をやる予定です。
そこで、読者の皆さんの考えた“もしも”のネタを大募集！
時期は２／２８日の午後１２時まで！

思いついたら感想かメッセージでドシドシ応募してや！」

ハヤト
「多い時は、さすがに全部書いたりはできないけど、出来る限り書くようにするから応募よろしく！」

昶
「ゲストほっぽりだして告知しだしたよこの２人！？」

ハヤト
「昶も何か告知いっとく？」

昶
「あ、ああそれじゃ俺が主人公をやっている『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ&ａｍｐ;Ｐｈａｎｔｏｍ』の番宣を。

再び立ち上がった機動六課。その調査任務の途中でティアナ達フォワード陣はある青年と出会った。彼と出会い、再び彼女達の運命の歯車が動きだす……

作者は二階堂、現在第2部の途中で、今は異種闘技大会編を更新中だ。
よかったら見に来てくれよな」

ハヤト
「よし、それじゃコレお土産の【仙豆】だ。大食いのアルトリアさんに食べさせるといい」

昶
「いや、アルトリアはグルメだからなぁ……あんまりこういうのは好きじゃないと思うぞ？」

ハヤト
「腹膨れるからいいじゃん」

八神
「別にお土産ネタが思いつかなかった訳やないよ！？」

ハヤト
「部隊長！　それ墓穴です！」

昶
「はぁ……まあいいや、それじゃまたな。そのうちまた遊びに来るよ」

ハヤト
「おう。それまでにフラグ増やしてたらぶん殴る」

昶
「出来るモンならやってみな」

八神
「拳で語る男の友情……ハヤト×昶、いや逆か？」

ハヤト＆昶
「キモイ想像すんな！」

八神
「おっと、忘れるとこやった。
次回の後書きゲストは、

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～

から、ハヤト君の相方！　私達と同じ芸人魂を持った男！　ナナシを予定しとるで！　お楽しみにな！」

文才が……文才が欲しい。
今回は場面がコロコロ変わって見づらかったですよねスミマセン。
次にこういう場面を書く時は、もうちょっと上手く書けるように精進します。

そして二階堂さん、こんな感じでよかったでしょうか？
昶君の影が薄くてすいませんｏｒｚ

さて、もう一度だけお知らせを。

お気に入り登録が２００件突破した記念に
『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ』という番外編を更新する予定です。
なので、感想やメッセージで皆さんの考えた“もしも”ネタを大募集します！
例えば
【もしもハヤトが女の子だったら】とか、
【もしもハヤトが正統派主人公だったら】などですね。
期限は２／２８日の午後１２時まで。

なるべく投稿されたネタ全てを書くつもりですが、多い場合はいくつかを抜粋という形になりますが、その場合はご了承ください。
それでは、また次の話で。

第27話　『幼女との邂逅』

折角の休日が台無しになった、ルールー達との遭遇の翌日。
昨日の報告書を纏めて提出するようにと指示を受けて、今日の教導は中止。

昨日の出来事の多さを思えば、どう考えても1日作業になるよね。
どうやら隊長は俺を退屈のあまりショック死させたいらしい。
憂鬱な気分で最近あんまり着ていない制服に袖を通し、ティアナ達と合流して事務室へと向かう。

「書類仕事ヤだなぁ」

「全くだ。よしティアナ、お前俺の分もやってくれ。俺は部屋で寝る」

「殺すわよ？」

「駄目ですよハヤトさん。仕事はちゃんとやらなきゃ」

「そうですよ。なのはさんに言いつけちゃいますよ？」

「勘弁してくれ」

事務室へと続く廊下を、愚痴ったり突っ込まれたりしながら歩く。
最近はエリオとキャロも言うようになったなぁ。
これはそのうち、キチンと俺の偉大さを調……教育してやらな

くてはいけないな。
そう考えながら歩いていると、不意にティアナが声を上げた。

「あれ？　なのはさんから通信だ」

「なのはさんから？」

「うん。なんだろ、こんな早くに……」

言いながら、ティアナが隊長からの通信を開く。

『あ、皆おはよう』

「「「「おはようございます」」」」

「えっと、何か用事ですか？」

『うん。ちょっと、私の部屋まで来てもらえるかな？』

「なのはさんの部屋に？」

『そう、ちょっとお願いしたい事があるんだ』

「はぁ……あの、お願いって」

『あっ！　ごめん、それはこっちに来てから言うから、急いで来てね！』

「あ、なのはさ……」

ティアナが言い終わる前に、隊長との通信が切れる。
珍しいな、隊長が用事言わないで通信切るなんて。しかも最後、何か焦ってたような気もするし……。
そんな風に思いながら、一度全員で顔を見合わせる。

「用事って、何でしょう？」

「さあ、予想つかんな。まあ、行ってみりゃわかんだろ」

「そうね。急いでって言ってたし、早く行きましょ」

「そうだね～」

頷きあってから、事務室に向けていた足を高町隊長の部屋へと向ける。
まあ、事務仕事しなくて済むんならなんでもいいや。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第２７話　『幼女との邂逅』

「高町隊長、来ましたよ～」

隊長の部屋の前でドア越しに声をかける。
そう言えば、隊長の部屋来るのって始めてかも知れん。
女子寮って入りにくいんだよね、入るといつも「何なのコイツ」的な目で見られるから。

『あ、うん。入って～』

「「「「「失礼します」」」」」

断ってからドアを開けて中に入る。
すると、そこには困った顔の高町隊長と、隊長のスカートの裾を握り締めて涙目になっている少女。
あれ？　あの子って確か――。

「その子、昨日俺が保護した子ですよね？」

「うん、そうだよ。名前はヴィヴィオ。ほらヴィヴィオ、挨拶しよう？」

「……ヴィヴィオ、です」

おずおずと俺達の方を見て、小さく自己紹介する少女――ヴィヴィオ。
てか、何でここに居るんだ？　まだ病院だと思ったのに。

「隊長、何でこの子ここにいるんスか？　確か聖王教会の病院にいるんじゃ？」

「そうなんだけどね。今朝、様子を見に行ってから離れてくれなくて」

苦笑しながら答える隊長。
どうやら随分と懐かれてしまったらしい。
まあ、確かにこんだけ懐かれたら、無理に引き剥がしてっていう気にはならないなぁ。

『それと、この子の身辺警護もしなきゃいけないから』

『……ああ、なるほど』

言葉ではなく、念話でそう付け加えられ、ヴィヴィオの境遇を思い出す。
人造魔道師――昨日の時点では推測だったが、どうやら当たりだったみたいだな。
更にあいつ等がヘリを狙ったってことは、レリックだけじゃなくこの子自身も狙われてる可能性もある。

だから懐かれたついでに戦力的にチートなウチの部隊で保護しよう、と。
それがこの先ずっとなのか、安全の保障がある別の施設が見つかるかまでなのかはわからないけど、確かに合理的だ。

「えと、それでなのはさん。あたし達にお願いって何ですか？」

「あ、うん」

スバルに聞かれて、ヴィヴィオから視線を上げ、俺達を見る高町隊長。
お願いの内容、何となく想像はつくけどなぁ。

「私、今から少し出かけなきゃいけないんだ。
だから、私が戻るまでヴィヴィオの相手をしてあげて欲しいんだけど……」

「え……」

隊長の言葉を聞いて、ヴィヴィオがこの世の終わりみたいな顔をする。
あー……これは泣くな。
そう思った瞬間、案の定ヴィヴィオは火がついたように泣き出す。

「やぁだあああっっ！　いっちゃやだぁぁぁぁっっ！！」

「ああ、ごめんね。お願いだから泣かないで～」

わんわん泣き喚くヴィヴィオに、ほとほと困り顔の高町隊長。
ふむ、エースオブエースも泣く子には勝てないか。
とはいえ、このままダラダラしてる訳にもいかないな。隊長も用事があるらしいし。

しゃーねぇ。ひとまず泣き止んでもらうとしよう。
俺はポケットから飴を取り出して、ヴィヴィオに向けて差し出しながら声をかける。

「おーい、そこなロリっ子。飴あげるからちょっと泣き止め～」

「ふぇ……」

現金なもんで、飴を差し出すと途端に泣き止んだ。
そのまま手に持った飴を動かすと、ヴィヴィオの視線もそれを追うように動く。
うん、やっぱ子供にはお菓子が有効だな。

「ほれほれ、こっち来い。来ないと飴はあげないぞー」

「うー……」

隊長と飴を交互に見て、切なそうな顔になるヴィヴィオ。
ふむ、あと一押しって所か？

「こっちに来たら、もう一個追加しちゃうぞ。ホレ、来い来い」

「……うん」

暫く悩んだ後、小さく頷き、隊長から手を離して俺の方へとてこてこ歩いてくる。
釣れたクマー。楽勝楽勝っと。

「ほい、捕獲～」

「わっ！？」

近くに来たところで脇に手を入れて捕まえ、持ち上げる。
ヴィヴィオはジタバタと暴れて俺の手を振りほどこうとするが、所詮は子供。
鍛えてる俺に純粋な力で勝てる筈も無く、その手足は虚しく空を切るだけだ。

「うー！　うー！」

「暴れんなー。暴れる子はこうだぞー」

「きゃあああっ！？」

ジタバタ暴れるヴィヴィオを持ち上げたまま、その場でヴィヴィオと一緒にグルグルと回る。

最初こそ驚いて悲鳴をあげていたヴィヴィオだが、暫くすると楽しそうに笑い出した。

ふっ、容易い。所詮は子供よ。

「はい終了」

「え～！　もっと、もっと～！」

３０回ぐらい回ったところで、回るのを止めてヴィヴィオを降ろす。

そうすると、既にヴィヴィオは隊長が出かけてしまう事は忘れたようで、今度は俺にしがみついて「もっともっと」とせがんでくる。

よしよし、これなら言う事聞くだろう。

俺はヴィヴィオに視線を合わせ、なるだけ優しく声をかける。

「じゃあヴィヴィオ。なのはさんが帰ってくるまで、いい子で待ってられるか？」

「いい子にしてたら、またグルグルしてくれる？」

「おう。好きなだけしてやるし、一杯遊んでやるぞ」

「じゃあ、待ってる！」

そう言って花の咲いたような笑顔で笑う。
うん。やっぱ子供は素直が一番だ。

「ありがとねヴィヴィオ。ちょっと、お出かけしてくるだけだから」

「うん！　行ってらっしゃい！」

「はい、行ってきます」

さっきまで行かないでと泣いていたのはどこへやら。
満面の笑みで隊長に手を振るヴィヴィオ。子供は扱いやすいから好きです。
隊長はヴィヴィオに手を振り替えして、ティアナ達に事務仕事などの指示を出し、部屋を出て行った。

ｓｉｄｅ：―

「う～」

事務室でモニタを弄りながら、処理しなければならない書類の多

さに辟易したスバルが唸る。
モニタに映る資料を延々と処理していくのだが、その速度はお世辞にも早いとは言えない。
まあ、肉体労働系専門のスバルに事務仕事を期待すること事態が間違いなのだが。

「はい終わり」

「はやっ！？」

隣で作業していたティアナの声に、スバルが思わず声を出す。
元々自分より量が多かった筈なのに、少ない自分が半分も終わっていないのに終わってしまうとは、さすがに予想外だったのだろう。
対するティアナは、椅子に背を預けながらスバルのモニタを見て、少し眉を寄せる。

「まだ半分も終わってないじゃない。ほら、手伝ってあげるから少しわけなさい？」

「ごめ～ん。書類仕事苦手～」

ティアナにデータを送りつつ、そんな愚痴を漏らす。

「まあ、今日はライトニングとハヤトの分もあるからね。
それでも、保育士もどきよりは気楽だわ」

「え～？　私は結構楽しかったけどなぁ」

「ま、ハヤトが相手してるなら平気でしょ。昔から子供には妙に好かれる奴だし」

「だね」

2人でモニタを叩きながら、取りとめも無い会話をしていく。

すると、途中で思いついたように「あ、そういえば」とスバルが言葉を発した。

「ハヤトってやっぱり、子供の相手ができる女の子の方が好きかなぁ？」

「はぁ！？　いきなり何言ってんのよ」

唐突過ぎる話題にティアナが目を丸くしてスバルの見た。

だが、スバルの方はそんなティアナなど気にしていない様子で、口に人差し指を当てながら言葉を続ける。

「だって、ハヤトは子供好きだし、やっぱりその……将来け、けけ、結婚とかしたらさ……」

「な……何言ってんのよ……」

自分で言っていて恥ずかしくなってきたのか、スバルの頬が赤くなる。

ティアナも自分とハヤトが結婚するという未来を想像したのだろう、モニタを叩く手を止めて真っ赤になった。

そのまま2人で顔を見合わせて、来るべき（？）ハヤトとの結婚生活に想像を巡らせる。

書類仕事はどうした。

「あたしは、子供は男の子と女の子の2人がいいなぁ」

「……そうね。そのくらいの方がバランスいいわね。女の子が2人でもいいけど」

「それでねそれでね、あたしとハヤトは、2人一緒に同じ災害救助チームで働くの！　きっと楽しいだろうなぁ～」

「ちょっと待ちなさい。ハヤトはあたしが執務官になった時に執務官補佐してもらうんだから、その案は却下よ」

「え～」

「え～じゃないわよ。大体、アイツと……その、けけ、結婚するのはあたしなんだからねっ！」

「そんなこと無いよ、あたしだよ！」

顔を赤くして、時折口喧嘩、時折両手を頬に当てて幸せそうに笑いあいながら女の子トークを続ける2人。

だが、2人は失念していた。

自分達が今居るのは事務室であり、そこは別に彼女達の貸切ではないということに。

そしてそこには、何人かの女性、男性両職員がせっせと事務仕事をしていることに。

さらに、女の子トークに夢中になっている2人は気付かない。

とある男性職員が、持っていたボールペンをへし折った事に。

とある女性職員が、涙を堪えながら走り去っていった事に。

後に、その場に居た男性職員達から派生して『嫉妬委員会』なる組織が立ち上げられる事を。

2人は愚か、自分の与り知らぬ場所で多くの恨みを買う事になるハヤト本人も、今この時は気付いていなかった。

……というか一番の問題は、ハヤト自身はまだ彼女達の気持ちに気付いておらず、スバルとティアナも、ハヤトに対して気持ちを伝えていないという状況なのに、既に将来のことを考えいることなのだが。

まあ、それは余計なお世話と言うものだろうか？

ｓｉｄｅ：―　了

ｓｉｄｅ：高町なのは

「ヴィヴィオ、いい子にしてるかなぁ？」

「エリオとキャロも一緒にいるんでしょう？　なら、きっと平気だよ」

「それはそうなんだけど、ハヤト君が一緒なのが……ちょっと」

「それは……うん、心配だね」

聖王教会から帰ってきて、はやてちゃんと別れ、フェイトちゃんと一緒に部屋に戻る。

ハヤト君があんなに子供の扱いが上手いなんて意外だったけど、今考えると任せて大丈夫だったのかなぁ？

別に変なことはしないだろうけど……しないよね？

ちょっと不安になりながら部屋に辿りつき、ドアを開ける。

そしてヴィヴィオの相手をしてくれたハヤト君達にお礼を言おうと口を開いて――

「あ、ちょっヴィヴィオてめぇコラ！　そのハメ技は無しって言っただろうが！！」

「あはは～。ハヤト弱い～」

「ふっざけんなコンチクショウ！　泣かす！　ボッコボコにして泣かすってぬわぁぁっ！？」

「「あ、パーフェクト」」

「なんでやねぇぇぇん！！」

そのままずっこけた。

隣ではフェイトちゃんも同じくずっこけてる。

そんな私達の視線の先では、子供相手に完全敗北して、コントローラーを投げ捨てて泣き崩れるハヤト君と、両手を挙げて喜んでいるヴィヴィオ。

そしてハヤト君を必死にフォローしているエリオとキャロが居た。

……何この状況？

「ヴィヴィオ、もう一勝負だ！　次は、次こそは勝つ！！」

「え～、ハヤト弱いから嫌～」

「弱い！？　このミッドチルダの格ゲー王と呼ばれた俺が弱い！？」

「ま、まぁ確かにさっきからもう１００連敗ぐらいしてますしね……」

「……ショックだ、ちょっと吊ってくる。ってアレ？

高町隊長にハラオウン隊長。何ずっこけてんスか？」

ずっこけてる私達の存在に気付いたハヤト君が、不思議そうな顔

で聞いてきた。
何してるって、それはこっちの台詞なんだけど。

「なのはさんにフェイトさん」

「おかえりなさい」

「おかえりなさ～い！」

ヴィヴィオが笑いながら私の近くに走りよってくる。
気を取り直して、立ち上がってヴィヴィオを抱っこしてあげる。

「いい子にしてた？　ヴィヴィオ」

「うん！　ハヤトが一杯遊んでくれた！」

「そっか、よかったね」

私が行こうとした時にはあれだけ泣いてたのに、今は全然平気そうだ。
ハヤト君のお陰……なのかな？　あんまり認めたくない気もするけど。
でも、一日中相手をしてくれたのは事実なんだし、ちゃんとお礼は言わないとね。

「ハヤト君、それにエリオにキャロ、今日はありがとうね」
「3人ともご苦労様」
「いえ」
「ヴィヴィオ、とってもいい子でしたよ」
フェイトちゃんと一緒にお礼を言うと、エリオとキャロは照れ臭そうに笑って答えてくれた。
「はあ。まあそれはいいんでヴィヴィオ貸してください。決着をつけます」
そんな中で、ハヤト君だけは目に闘志を宿してヴィヴィオを見ている。
うん。そのやる気の半分でも、いつもの教導の時に出して欲しいな。
ハヤト君の言葉に、ヴィヴィオは私に抱きついたまま、顔だけを後ろに向けてつまらなそうに口を尖らせた。
「ハヤト弱いから遊ぶの飽きた～。もっと強くなって出直してくるといいよ？」
「げっはあぁぁぁっっ！！？」

ヴィヴィオの言葉に、血を吐きながら弧を描いて吹っ飛んでいくハヤト君。
私とフェイトちゃんの部屋、汚さないで欲しいんだけど。
……っていうか、ヴィヴィオの性格、私が出かける前とちょっと変わっちゃってない？

「やっぱり、人選間違えたかなぁ」

「なのは……その、どんまい？」

肩を叩くフェイトちゃんの手が、何だか随分と重かった。

第27話　『幼女との邂逅』（後書き）

これから暫くは日常回の予定ですよ。
どうも、ラモンです。

さて、今日のゲストは魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～から、ナンバーズサイドの主人公……なのかな？　とにかく主人公級の活躍を見せる、ナナシのご登場……なんですが。

ハヤト
「いやね、だから大は小を兼ねるって言うだろ？」

ナナシ
「甘い！　甘いでハヤト！
小さい胸には“慎ましきエロス”っちゅーもんがあるんや！」

ハヤト
「慎ましきエロスだぁ？
エロスに慎ましいも糞もあるか！　エロスはオープンだからこそのエロスだろう！」

ナナシ
「若いなぁ……慎ましきエロスっちゅーんはアレや。
髪を上げた時に少しだけ見えるうなじ、屈んだ時にちょっと見える胸の谷間。
そう言う“大人の嗜み”的なエロスを指すんや」

ハヤト
「いや、胸の谷間って普通にオープンエロスじゃね？」

……とまあ、さっきからエロ談義に花を咲かせてる始末で。
そのうちこっちに気付くだろうから、これからの事とか喋ってようかな。

前述しましたが、これから暫くは日常回の予定です。
ＤＶＤで言う所の５巻の部分ですね。
ヴィヴィオとハヤトの交流、それと感想で何度か気になると言われたハヤトのお姉ちゃんの登場など、それなりで色々なイベント発生を予定しております。

それと、番外編アンケートでのネタ提供ありがとうございました。
全部書きたいところですが、そうなるとさすがに凄い話数になってしますので、纏められそうなネタは纏めて一つの話にしようかと思います。
最初の番外編の更新は、遅くとも３／６夜までを予定しております。

最初のネタは――

ナナシ
「おいコラ！　自分らが健康的エロスの話をしてる最中に、何どんどん進めとんねん！」

ハヤト
「そうだぞ作者！　俺はともかく、ゲストをないがしろにするとか

駄目だろ！　怒られるぞ！？」

おお、戻ってきた戻ってきた。
って健康的エロス？　さっきは慎ましきエロスの話じゃなかったか？

ナナシ
「過去には捕らわれん、それが自分らの生き方や！」

カッコいいこと言うなぁ。
内容がエロスに関してじゃなかったら、尚カッコよかったのに。

ナナシ
「気にしたら負けやで。それが関西人の心意気や！」

いや俺東北の人なんで。
えっと、じゃあナナシさん。さっきの俺の台詞の続き、お願いできます？
これカンペです。

ナナシ
「お？　任しとき！
次回更新予定の『もしもＳｔｒｉｋｅｒｓ』最初のネタは！

“もしもハヤトがスカリエッティサイドで、戦闘機人で、最強系主人公だったら”

これで決まりや！」

ハヤト
「うえ……あの変態のところ？　俺、貞操の危機じゃね？」

ナナシ
「せやなぁ。アレはさすがに自分もビビったわ……まさか同志のケツ狙うとは……」

ハヤト
「でもまあ、ウーノさん達とフラグ立つならナンバーズサイドもいいかも」

ナナシ
「なんやて!?　うちの娘をお前になんぞやれるかい！」

ハヤト
「お父さん！　娘さんたち（ウーノさん、ドゥーエさん、トーレさん）を僕にください！」

ナナシ
「お前にお義父さんと呼ばれる筋合いはないわあああああっ！！」

ハヤト
「げふっ！？　な、殴られても、許して貰えるまで何度でも言います！」

あー、2人とも。
それ以上ボケられると収拾つかないんで、それくらいで終わってくれる？

ナナシ&ハヤト
「はーい」

妙に素直だな……。
まあいいか、そういえばナナシさん、ナンバーズの皆とのフラグはどんな感じですか？

ナナシ
「フラグて。そんなん自分に分かるわけないやん」

ハヤト
「またまたぁ。ウーノさんはあの変態博士にご執心だから仕方ないとして、残りのナンバーズの皆とニャンニャンするおつもりなんでしょう？
お代官様も人が悪いｗ」

ナナシ
「いやいや、どっちかっちゅーとアイツらは妹みたいな感じやねんなぁ。
それがそのうち愛しい気持ちになるんかはわからんけど、今んとこは断言でけへんて」

ハヤト
「お、大人だ……」

ナナシ
「大人やもん。ハヤトこそどうなんや？　スバルとティアナ、今回の話じゃ未来予想図まで完璧やん？」

ハヤト
「つーても俺もアイツらは友達って感じしかしないですしねぇ。
あとは作者の力量次第っしょ」

頑張るよー。

ナナシ
「そや、ちょっと気になっとったんやけど。
作者さん、ウチの感想でオリキャラ送るって言っとった割に全然送ってこないやん。どないしたん？」

いやぁ、最初は送るきマンマンだったんですけどね。
選抜って話で、しかも俺の送ったキャラが既に１人選抜された以上、これ以上送ってもなぁと思い直しまして。
決して思いつかなかった訳じゃないですよ！　ホントですよ！？

ナナシ
「……思いつかんかったんやな」

ハヤト
「こいつ馬鹿ですから」

お、おっと！そろそろ時間ですかね。
ナナシさん、最後に登場作品『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～』の番宣をどうぞ！

ナナシ
「誤魔化したな。まあええわ、そんならお言葉に甘えて。

戦いを終えた青年は過去の世界へ行くために我が里の秘術を使い、少年は兄として接してくれた青年についていった。しかし、二人が流れ着いた場所は過去の世界ではなく、全く違う別世界だった。

作者は恵慈、『リリカルなのは』と『烈火の炎』のクロスオーバ

ー作品で、主人公はあの紅麗や！
烈火の炎ファンには垂涎の作品やで！」

ハヤト
「ほどよいシリアスとギャグのバランスが秀逸な作品だ！　皆で読もうぜ！」

ナナシ
「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～で、自分と握手！」

ヒーローショーかなんかですか。
さて、時間がやってまいりました。
次回ゲストは『魔法少女リリカルなのは　時の支配者』の主人公、永久　桜君を予定しております。
また、番外編にもゲストとして『ＷＯＬＦＡＮＧ－ウルファング－～狼男は不良青年～』の主人公、月臣輝刃君をお呼びする予定です！

ハヤト
「あんまり期待しないで待っててくれよな！」

ナナシさん、本日はゲスト出演どうもです。
これお土産です。

Σ（゜・ω・、）　つ【危ない水着】

何コレ！？
俺こんなの用意してないよ！？

ハヤト
「あ、俺がすり替えておいた。トーレさんに着せておくれ！」

うん、死ね。氏ねじゃなくて死ね。
すいませんナナシさん、これが本当のお土産です。

（´・ω・`）　つ【チンク用コスプレセット】

存分に着せ替えてやってください。

ハヤト
「ついでに危ない水着も……」

ホント黙って。お願い。

ナナシ
「おお、ええもんもろたわ！　ほな、また機会があったらまたな！」

ハヤト
「またな同志よ！　次はまた、エロ談義で盛り上がろうぜ！」

ナナシ
「まかしとき！！」

それではまた、次の話で。

恵慈さん、出演許可ありがとうございました。
ナナシ、こんな感じでよかったですかね？
なんかただのエロ野郎になっちゃった気が（汗）

それと、“もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ”のネタ募集は２／２８午前０時を以って終了しました。
沢山のネタ提供ありがとうございました！

第２８話　『弟と妹と』（前書き）

今回、最後にちょっと読者の皆様に質問があります。
アンケートとかじゃないので、軽く見てみてください。

第２８話　『弟と妹と』

ヴィヴィオが機動六課に来て１週間。
相変わらず人見知りが激しいヴィヴィオだが、それでも前線メンバーには大分慣れてきたと思う。
ただ、最初の印象が良かったせいかどうかはわからんが、俺と高町隊長、ハラオウン隊長の３人は凄く懐かれていた。

まあ、子供に懐かれること事態は悪い気分じゃない。
悪い気分じゃない……んだが。

「ハヤト！　あそぼーっ！」

「ふぐんっ！？」

人を見つけるなり、プロ顔負けのタックルをかますのは勘弁して欲しい。
今とか腰骨がゴキンッ！　って変な音出したぞ。

「ふぬぉぉぉ……」

「？　ハヤトどうしたの？」

「こ、こんのロリっ子……」

痛む腰を摩りながら、ヴィヴィオの頭を右手で掴み、そのままジワジワを力を込めていく。
俗に言う“アイアンクロー”だ。

「い、痛い痛い痛いっ！」

「人様に突撃すんなって何度言えばわかるんじゃお前は！」

「やーっ！　はなしてーっ！」

「ならごめんなさいと言え！　てゆーか俺にいちいち体当たりすんな！」

「やーっ！　やーっ！」

「何小さい子虐めてんのよアンタは」

「おぅふ」

ヴィヴィオに体当たりされたところを、今度はティアナに叩かれる。
何故だ、俺は被害者の筈なのに……っ！
腰の痛みに蹲っていると、お返しとばかりにヴィヴィオが俺の頭をペチペチ叩いてきた。
まったく痛くはないが、酷く屈辱的だ。

「痛かったぞー、ハヤトの馬鹿ー」

「……俺の方がもっと痛いっちゅーねん」

「むー」

人が動けないのをいい事に頭をたたき続けるヴィヴィオ。
こんにゃろう、随分といい性格になってきたじゃねぇか。
痛みが治まってきたから、今度はこめかみを両拳でグリグリしてやろうと思っていたら、ヴィヴィオに高町隊長の声がかけられた。

「こらヴィヴィオ。そういうことしちゃ駄目でしょ」

「あ……なのはママ」

「駄目だよヴィヴィオ。弱いもの虐めしちゃ」

「うー、だってハヤトが先にやってきたのに……」

「それでも、弱いもの虐めはダ～メ」

「……はーい」

高町隊長。怒ってくれるのはいいんですが、俺っていつの間にヴィヴィオより『弱い』ってことに？
ちょっと訂正してくださいよ。俺は格ゲー以外ならゲームで負けてねーですよ！
パズルゲーなんて圧勝ですよ！

「ハヤト、どんまい」

「まあ、ある意味当然よね」

「「ハヤトさん……」」

肩に置かれたスバルの手と、エリキャロの生暖かい視線がキツイ。
あれ、ちょっと涙出て来たよ？

……うん。とりあえず気を取り直そう。
今のヴィヴィオの発言で、少し気になった部分があると思う。
そう、「なのはママ」という部分だ。

何故ヴィヴィオが親じゃない高町隊長を「ママ」と呼ぶのか。
それにはちょっとした訳があるのだ――って、俺さっきから誰に向かって語ってるんだ？

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第２８話　『弟と妹と』

ヴィヴィオには親が居ない。

人造魔導師――しかもどこかから移送されてきたということは、親に値する人間がいないのは、ある意味当然なのかも知れない。
親が居ない以上、誰かが親代わりをしなければいけない訳で。

そこで、高町隊長が『保護責任者』として、ヴィヴィオの親代わりになったらしい。
ついでにハラオウン隊長も後見人として高町隊長をサポートする、ということだ。

それをヴィヴィオに知らせて以来、アイツは高町隊長とハラオウン隊長のことを「なのはママ」「フェイトママ」と呼ぶようになった。
まあ、親代わりなんだからママと呼んだところで問題は無かろう。
2人は呼ばれ始めた頃はくすぐったそうに笑っていたが、最近は本当の親みたいに接している。
何だかんだで、2人とも世話好きだからなぁ。

◇◇◇◇◇

「しかし、ハラオウン隊長は結構手馴れてるよな、子供の世話するの」

「フェイトさん、まだ小さい甥っ子さんと姪っ子さんがいますし」

「使い魔さんも育ててますし」

昼休み、食堂で隊長達と昼飯を食いながらヴィヴィオの世話をしている高町隊長とハラオウン隊長を見て呟くと、エリオとキャロが教えてくれた。
甥っ子さんと姪っ子さん……ああ、クロノ＝ハラオウン提督のお子さんか。

「ああ！　更にアンタら2人の小さい頃も知ってる訳だしね」

「「……あぅ」」

ティアナの指摘に、エリオとキャロが真っ赤になる。
そういえば2人もハラオウン隊長の保護児童だっけな。

「え、えぇと、ハヤトさんも慣れてますよね。子供と遊ぶの」

「誤魔化したな」

「うっ……」

顔を赤くしたまま話題を逸らしたエリオにとりあえずツッコミを入れておく。

「んー。まあ、何か昔から子供には好かれるんだよなぁ」

「だよね～。前に遊園地行った時とか、迷子にずっと懐かれてたし」

「ホントにアレには参ったわよ。迷子センターに届けても届けても、次から次に迷子が寄ってくるんだもの」

その時を思い出してげんなりしているティアナ。

アレは本気で俺も困った。

どこから湧いて来るんだって思うほど、次から次へと迷子が俺のところにやってきて「ママ（パパ）はどこ～？」だもんなぁ。

姉ちゃんに話したら「何かフェロモンでも出ているのではないか？」とか言われるし。

何のフェロモンだよ。

子供に好かれるフェロモンよりか、年上のお姉さま方に好かれるフェロモンが欲しいわ！

「でも、それにしたってハヤトはヴィヴィオと仲いいわよね」

「うんうん。ハヤト、お兄ちゃんみたいだよ」

「やめてくれ、ガラじゃねぇよ」

「あ～、ハヤト照れてる～」

「うっせ」

ニヤニヤしながら脇腹を突いてくるスバルにでこピンをかます。

俺が兄ちゃんってガラかよ。

「おにいちゃん？」

「うおぁっ！？」

いきなり隣から声をかけられて、思わず声を上げて立ち上がる。
隣には、いつの間にやら不思議そうな顔をして首を傾げるヴィヴィオ。
全然気付かなかった、やるなヴィヴィオ！

「ハヤト、ヴィヴィオのおにいちゃん？」

「違う違う。確かに金髪は一緒だけどな」

聞いてくるヴィヴィオに、苦笑してそう答えた。
今自分で言って気付いたけど、俺とヴィヴィオって金髪はお揃いなんだよな。
まあ、そんなこと言ったらハラオウン隊長ともお揃いな訳だが。

「えー。おにいちゃんじゃないのぉ？」

「何だ？　ヴィヴィオは俺が兄ちゃんの方がいいのか？」

「うん！」

「なんと」

何気なく聞いたら、屈託の無い笑顔で答えられて言葉に詰まる。
俺の脳内では「兄ちゃんの方がいいのか？」→「全然」→「ウボァ」という流れだったのに。
そんないい笑顔で見られたら、なんと言うか……アレだ。照れるじゃないか。

「ハヤトどうしたの？　顔赤いよ？」

「いや……その……」

「ヴィヴィオ、ハヤトは照れてるだけだよ～」

「スバルてめコラ！　余計なこと言うなよ！！」

「きゃ～、ハヤトが怒った～♪」

「……ふっ、馬鹿だな。怒るわけないだろう、スバル」

「え……ハ、ハヤト？」

極上の笑み（自称）を浮かべ、スバルの頭に右手を置く。
何だか赤くなってるスバルに一瞬微笑みかけて――

「普通にキレたわ」

そのまま右手に力を入れる。
本日2度目のアイアンクローだ。

「あだだだだっ!?　痛い、痛いよハヤトっ!?」

「俺のこの手が真っ赤に燃えるぅぅぅっっ!!」

「割れる割れる、わーれーるーっ!?」

ギリギリと全身全霊で力を込めていく。
さっきヴィヴィオにやった時の力とは比べるのも馬鹿馬鹿しいほどの全力。
これを耐えられるのは、シグナム副隊長ぐらいのモンだろうよ！

「ご、ごめんっ！　ごめんハヤト！　謝るからっ、謝るから許して!!」

「……ふん。仕方ない、今回だけは許してやろう」

「うぅぅぅ……痛かったぁ……」

手を離すと、涙目で頭を押さえるスバル。
調子に乗るからそういう目にあうんだ、バカめ。

「ハヤト、ヴィヴィオのおにいちゃんになるの、ヤなの？」
「いやそういう訳じゃ……うぉい！？　何故泣くか！？」
「う〜〜〜……」

俺の見てる前でポロポロと涙を零し始めるヴィヴィオ。
何で！？　どうして！？

「「「ハヤト……」」」
「「ハヤトさん……」」
「ハヤト君……」

そして何で全員で俺を責めるの！？
俺悪くないでしょ！？　ねえ、なんで！？

あと高町隊長とハラオウン隊長！
そんな「てめぇ何とかしねーとブッコロスぞ」って目はやめてください！
くっ！　生き残る為には……っ。

「ヴィ、ヴィヴィオの兄ちゃんになれて嬉しいなぁっ！」

「ふぇ……」

「ほ、ほらほら！　兄ちゃんて呼んでみ！？」

「……ホント？　おにいちゃんて呼んでいいの？」

「いいぞ！　全然いいぞ！？」

むしろ呼んでくれ！　でないと俺の命が危険で危ない！
俺は両手を広げてヴィヴィオの受け入れ体勢をとって宣言する。
もう食堂だからとか、恥ずかしいからとか、そんなん関係あるかい！
自分の命が一番大事じゃボケ！！

俺がそんな風に殺伐とした考えをしていると、ヴィヴィオは泣くのをやめて嬉しそうに笑う。
そして、またもプロ顔負けのタックルを俺の腹部に決めながら抱きついてきた。

「ぐへぇっ！？　だ、だからタックルはやめろと……」

「えへへ、ハヤトおにいちゃん～♪」

「よかったね、ヴィヴィオ。お兄ちゃんができて」

「うん！」

俺に抱きつくヴィヴィオに高町隊長が話しかける。
隊長、腹部に深刻なダメージを受けた俺は無視ですかそうですか。
別にいいですけどね！　慣れてますし！

『ハヤト君、ありがとね。ヴィヴィオ、凄く嬉しそう』

いじけようとしたら、隊長が念話でこっそり話しかけてきた。
隊長の方を見れば、申し訳無さそうな顔で苦笑している。
やっぱり隊長は優しかった。さすが嫁にしたい人ランキング第１位（俺の脳内限定）だぜ！

『いいッスよ。別に悪い気もしないですし』

『そっか。ヴィヴィオのこと、これからもよろしくね？』

『うぃっす。まあ、出来る範囲で善処しますわ』

『ふふ。うん、お願い』

念話で隊長とそんな会話をして笑いあう。
何か無理矢理兄ちゃんにさせられた気がしないでもないが……まあいいか。
深く考えてはいけないと俺の本能が訴えてるし。

「えへへへ……ヴィヴィオのおにいちゃん～」
「グリグリすんな、くすぐってぇ」
「えへへ～」
嬉しいのはわかるんだが、髪がわさわさしてくすぐったいのでヴィヴィオを膝の上に乗せてやる。
ヴィヴィオはよっぽど嬉しいみたいで、俺の膝の上で鼻歌なんぞを歌い始めた。
「おにいちゃん～、おにいちゃん～、ヴィヴィオのおにいちゃん～♪」
「やめろ恥ずかしい」
「ぷきゅ」
ただ、内容が恥ずかしすぎるのですぐに唇をつまんでやめさせる。
食堂だからねココ。
ほら、周りの職員さん方からの「いい兄妹ね」的な生温い視線が……うぉぉ、耐えられん。
「……は、ハヤトさん！」
「うぉぉ……って、何だキャロいきなり」

「わ、私もお兄ちゃんって呼んでいいですか！？」
「はぁ？」

いきなりのキャロの発言に目を丸くする。
すると、驚いてる俺のかわりにヴィヴィオが反論した。

「だめー。ハヤトおにいちゃんはヴィヴィオのー！」
「ヴィヴィオもなんでやねん」
「ヴィ、ヴィヴィオに許可してもらう必要ないです！」

なにこの色気もなければ嬉しくも無い争奪戦。
いきなり俺の膝の上とテーブルの向かい側で睨みあいをはじめたヴィヴィオとキャロを見て、そこはかとなく悲しくなる。
どうせなら美女のおねーさまに争奪戦して欲しいわ。

「ハヤト、モテモテだね」
「ホントね。よかったじゃない？」
「お前らは何故に睨みますか。俺被害者、オーケー？」
「「ふん」」

ティアナとスバルは何か据わった目でこっち見てるし。
隊長2人はそんな俺らをみて「あらあらうふふ」って感じで笑ってるし……ホント何。
もう駄目、俺の手には負えん。エリオ助けて。

「ぼ、僕も兄さんって呼んじゃ駄目ですか？」

「エリオ。俺はお前だけは信じていた」

最後の砦にまで裏切られて俺泣きそう。
そうしてカオスになっていく俺の周辺。

睨み合っているヴィヴィオとキャロ。
もじもじこっち見ているエリオ。こっち見んな。
そんで俺を睨んでいるティアナとスバル。お前らもこっち見んな。
そして微笑ましい光景を見る目で笑う隊長2人。貴女達は助けてください。
周りの他職員は、暖かい家族の一幕を見ているような笑顔でこちらを観察している。お前ら後で覚えてろ。

「……エリオもキャロも好きに呼べ。
お兄ちゃんでも師匠でもキングオブハー〇でも〇方不敗でも」

事態の収拾を諦め、溜息と一緒に言葉を吐く。

「えー！　ハヤトおにいちゃん裏切り者ーっ！」

「いたたたた！　もみあげ引っ張るな！」

「だっ駄目！　ハヤトお兄ちゃんを虐めちゃ駄目だよヴィヴィオ！」

「に、兄さん平気！？」

「早速呼ぶのねお前らいだだだだだっ！？」

その後、ヴィヴィオが落ち着くまでに数分の時間を要した。
もみあげを思い切り引っ張ってくれたヴィヴィオには、制裁としてピーマンを無理矢理食わせた。
涙目になっていたが、いいお仕置きになっただろう。

まあ、そんなこんなでこの日、俺に2人の妹（仮）と1人の弟（仮）ができました。
俺が兄ちゃん、という共通項で繋がったせいか、エリキャロとヴィヴィオの3人はやたらと仲良くなったみたいだ。
仲良くなるのはいいことだよね。エリキャロは歳も近いし、いい友達になれるだろう。

たださ、話す話題が「お兄ちゃん（兄さん）の性格改善」ってのはどうよ？
お兄さんはとても悲しいですよ。

◇◇◇◇◇

《メール受信》

「んぉ？　何だこんな時間に」

夜。さてこれからベッドに飛び込んで寝ようという時に、ブレイブハートにメールが届いた。

半分寝惚けた頭でメールを開き、中身に目を通す。

そして、その内容と差出人を見て一気に目が覚め、思わず飛び起きる。

「……マジかよ」

メールを見つめて呆然と呟く。

そこには一行の短い文章と、差出人の名前があった。

※会いに来い。来なければ暴れる。

ハヅキ＝ロックウェル

「しまった……先週、一回も姉ちゃんにメールしてなかった」

俺はメールを見て自分の犯した失態に気付き、頭を抱えて呻いた。
無視する訳にもいかねーし……明日、高町隊長と部隊長に相談して近いうちに休みを貰おう。
そう決めると、憂鬱になった気分を誤魔化すように布団を被る。

姉ちゃん――ハヅキ＝ロックウェルに会った時の言い訳と対処方法を考えながら。
……うぅ、会いたくねぇよぅ。

第２８話　『弟と妹と』（後書き）

０から話を作るのって難しいですね。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「いきなり弟と妹ができました。ハヤトです」

ちょっと唐突過ぎたかなぁ？
まあそれは後にするとして、今回のゲストは～堕天使の代行者～より、主人公の仙堂　朋陽さんです！

朋陽
「よぅ、邪魔するぜ」

ハヤト
「どうもどうも」

朋陽
「しっかし、今回は随分と展開が急だなァ？
　いきなり弟と妹とか、普通はありえなくねぇかァ？」

ですよね。
いえね、エリキャロって前々から個人的にはハヤトの弟分、妹分って感じで書いてたつもりなんですが、その割にはいつも言葉遣いが余所余所しいっていうか、固かったじゃないですか。

ハヤト
「たしかに。大概敬語だったもんな」

朋陽
「そんで、今回その余所余所しさを取り除く為に、強引に兄さん呼びさせたって訳かァ？
　おいおい、そんなでいいのかよ」

勿論それだけじゃなくて、ヴィヴィオの友達を早い段階で作ってあげたかったってのもありますね。
ｖｉｖｉｄでは友達いますけど、六課時代は殆どアイナさんとザッフィーだけだったですし。

朋陽
「はァん。少しは考えてンだなァ」

ハヤト
「でもさ、いきなりキャロがあんなこと言い出すのは違和感ないか？」

それは作者も思ったんだけど、ヴィヴィオに対する対抗心とかそんな感じだと思ってくれれば。
私の方が長く一緒に居るんだから、ヴィヴィオが「お兄ちゃん」って呼ぶなら私も呼んでいい筈だ！　って感じで。

ハヤト
「完全に読者任せじゃんか！
　しかも後書き読まないと真意が読めないっていう最低な感じだし！」

朋陽
「だなァ。後書きで解説しないと理由がわからないってのは、あん

まり誉められたモンじゃねぇだろ」

申し訳ない。
何回か書き直したんですが、これが一番しっくりきた形で纏まったんで、そのまま載せました。
文章力不足って嫌ですね。

朋陽
「精進するんだなァ。
んで、何だ。次回はハヤトの姉ちゃんが登場すんのか？」

その予定ですね。
ここ暫くの日常編は、ＤＶＤ５巻の時間軸をちょっと混ぜたり前後させたりして書く予定なんで、ティアナが本局に行く時に合わせてハヤトのお姉ちゃんを出すつもりです。
本来の時間軸なら、この時点で「なのはママ」「フェイトママ」呼びはしてないですよ。

ハヤト
「そういやそうだな。
ティアナが本局行ってる間に、高町隊長がスバルと一緒にヴィヴィオのところに行って……って流れだったよな」

朋陽
「大丈夫かよ。下手にオリジナルすると、後々キツくなるぜ？」

そこらへんは大丈夫。
お姉ちゃん登場と、今回の話以外は大体同じ流れになる予定ですから。

ハヤト
「それなら安心だ。
お前は文才ないくせしてオリジナルに走りたがるからなぁ」

『再構成でも、オリジナル入れなきゃ面白くない』ってのが自論ですから。
文才無いなりに頑張るよ。

朋陽
「そうかい。せいぜい気張りなァ」

ういっす。
さて、今回はちょっと短めですけど終わりの時間です。
最後に番宣どうぞ！

朋陽
「ん、そうかァ？
じゃあ番宣させてもらうとすっかァ。
俺の出てる作品は

～堕天使の代行者～

とある街に、1人の少年が暮らしていた。少年は世界の全てを否定していた。
その少年の下に、堕天使が現れて、頼みごとをする。
それが全ての始まりだった。

リリカルなのはだけじゃなく、色んな作品とコラボしてる作品だァ。
作者はヨッシィ～♪♪♪

今はちっとテスト期間っつーことで休んでるが、もうすぐ復活予定だ。よかったら読んでやってくれよな」

はい。
それでは今回はこのへんで。
朋陽さん、ゲスト出演ありがとうございましたー。
これはお土産です。

（´・ω・`）　つ【銘菓“じゃっくぽっと”】

朋陽
「なんつーか、双子の決め台詞みてぇな名前だなァ。
まァいいや。ありがたく貰ってくぜ」

それではまた、次の話で！

えーと、それで前書きに書いた質問なんですが……。
話の掲載に関してなんですが、番外編がシリーズで続く場合、

・番外編だけを先にシリーズの最後までやる
・今みたいに、本編と番外編を問わず、書きあがった方を掲載する

どちらが読みやすいでしょう？
書いてて、番外編と本編交互に投稿すると読みづらいかなぁって思いまして。

もう一つの質問は完全に作者の興味でして、

・皆さんの想像するハヤトの“中の人”は誰ですか？

という質問です。
一応作者的に想像している人はいるんですが、皆さんは誰でアテレコしてるのかって気になっちゃってw

どちらの質問も、別に答えなくても大丈夫です。
あくまで作者の興味と、掲載順に関する皆さんの感想を聞いてみたいだけなので。
皆様の質問の答えによって、掲載順を変にしたり、ハヤトのイメージをその中の人に近い感じにしたり、なんてことは起きませんので軽い気持ちで答えてみてくださいね。

第２９話　『お姉ちゃん　１』

「なんでこんなことに……」

俺は憂鬱な気分を吐き出すように呟いて、後ろを振り返る。
後ろには『ハヤト君のお姉ちゃん見学ツアー御一行』と書かれたプラカードを持った八神部隊長。そして、シグナム副隊長とヴィータ副隊長を除いた機動六課の前線メンバー。あと何故かヴィヴィオまでいる。
なにしてんですかアンタら。

「いややなぁ。休日が偶然、ぐ～ぜん重なっただけやん？
そんで、休日にみんなで出かけようとしたら、またしても偶然、ホントに偶然、行く方向が一緒ってだけやで？」

「そのプラカードを持って言いますか。大した脳味噌ですね部隊長」

「そんな誉めんといて、照れるやないの」

「誉めてねーッス」

ホントになんでこんなことになったのか。
まあ、切欠は間違いなく部隊長なのは確かだがな。
休みの申請しに行った時にニヤニヤしてたのはコレが目当てか畜生。

「ご、ごめんねハヤト君。はやてちゃんがどうしてもって……」

「ハヤトおにいちゃんのおねーちゃん！　見たい！」

落ち込んでいたら、高町隊長が申し訳無さそうな顔で謝ってきた。
さすが高町隊長、機動六課最後の良心！
その最後の良心の娘であるヴィヴィオは、テンションが上がりきっているのか、さっきから同じ事しか言わない。

「アンタのお姉さんて、話は聞いた事あるけど見たことなかったから丁度いいわ」

「そうだよね。挨拶しないとね！」

「何でだよ！」

ティアナとスバルは何故か意気込んでるし。
ウチの姉ちゃんに何の挨拶をするつもりだよ。アホか。

「お兄ちゃん、迷惑でしたか？」

「兄さん、ごめんね」

「お前らは本当にいい子だなぁ……あそこの１５歳と１６歳にも見習わせたいよ」

俺を気遣ってくれたエリキャロに感動して、しみじみと涙を流す。
ハラオウン隊長の教育は素晴らしいですね。尊敬します。

「はぁ……別についてきてもいいですけど、絶対面白くないですよ？」

「かまへんよ。ハヤト君が唯々諾々と従うお姉ちゃんがどんな人か興味あるだけやし！」

「マジで後悔しても知りませんからね……」

ただでさえ憂鬱な気分が更に憂鬱になり、ずっしりと重くなった足を動かす。
行き先はミッドチルダの住宅区。
俺の姉――ハヅキ＝ロックウェルの自宅がある地域である。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第２９話　『お姉ちゃん　１』

ｓｉｄｅ：ハヅキ＝ロックウェル

私は愛しい弟――ハヤトの為に料理をつくっている。
弟から私に会いに来るという内容のメールで指定されていた日時は、今日の１２時。
それを見てからすぐ、今日と明日の２日間、無理矢理休みを取ったんだ。姉弟水入らずでしっぽりと仲を深めようじゃないか。

お昼は食べてこないと書いてあったし、随分とお腹を空かせて来るのだろう。
私に会いたくて走ってくるかも知れないな。
メールにも“お姉ちゃんに会いたくて仕方ない”と書いてあったし。
ふふ……アイツは甘えん坊だからなぁ。

機動六課とか言うわけの解らん部署にいってから……半年振りぐらいか。
アイツも寂しい思いをしていただろうからな、今日は思いっきりお姉ちゃんに甘えさせてやろうじゃないか。
ああ、駄目だぞハヤト。そんなに抱きついたりしたら。
お前はもうお姉ちゃんより大きいんだから、そんなにギューっとしたら苦しいだろう？
ふふふ、本当にお前は甘えたさんだな。

「……おっと」

姉弟の感動の再会を想像していたら、危うく料理を焦がしてしまうところだった。

ハヤトの為にも、腕によりをかけて料理をつくってやらねばな！

「しかし、機動六課とかいう部署には女が多いと聞いているが……」

自分で呟いて、とある可能性に思い至る。

ハヤトが私の見知らぬ女を連れてきて「俺、彼女と付き合ってるんだ」などと言われたら……いや！　お姉ちゃん子のハヤトが私以外の女に見向きをすることなど……。

だが、拘束されて無理矢理なんてことも有り得る。

そして既成事実を元に結婚を迫られてしまえば、優しいハヤトは――

「駄目だハヤト！　お姉ちゃんが今すぐ助けてやるからな！！」

ピンポーン

『姉ちゃ～ん。会いに来たよー』

「っ！！」

最悪の未来予想図が浮かんだところで、インターフォンの音と、マイク越しのハヤトの声。

私は料理の火を消す事も忘れて玄関へと急ぎ、蹴破るような勢いでドアを開ける。

「ハヤトっ！！」

「うおぉっ！？　いきなりドア開けるなよ姉ちゃん。危ないだろ！」

「ハヤト、大丈夫か！？　誰かに汚されてはいないか！？　まだ清い身体か！？」

「いきなり何の質問だよ姉ちゃん！？」

「答えろハヤト！　機動六課とか言うわけのわからん部署の女共に変なことはされてないな！？」

ハヤトの肩を掴んで思い切り揺さぶる。

こんなことをするのは心が張り裂けそうになる。

だが、それよりも愛しい弟がどこの馬の骨とも知れぬ女に捕まる方が何万倍も問題だ！

「どうなんだハヤト！？」

「さ、されてねぇ！　されてねーから離してくれ！　吐く！　何か色々吐いちゃうから！」

「本当だな！？」

「ホント！　ホントだから！！」

「そうか……よかったぁぁぁ」

ハヤトが清いままだった事実に心の底から安堵し、揺さぶっていた手を背中に回してハヤトを力の限り抱きしめる。

「ちょっ!?　姉ちゃん離せって!　恥ずかしいだろ!?」

「何を恥ずかしがることがある。ここは私の家の玄関だぞ？私とお前以外に誰もいないじゃないか」

「いる!　いるから!　俺ら以外に人がいるから!」

「んっ、そんなに暴れるな。くすぐったいじゃないか」

「お願い姉ちゃん!　俺の背後、姉ちゃんの正面を見てください!人が一杯居ますから!」

「正面……？」

その言葉に、少しだけ顔をずらしてハヤトの後ろを見る。

「わけのわからん部隊て……私が必死に作った部隊やのに……」

「あはは……」

「ど、どうも……」

「「「「はじめまして」」」」

「はじめまして～」

そこには、何人もの女が私とハヤトを見ていた。
誰だ？　ま、まさか！？
私は慌ててハヤトに視線を戻して尋ねる。

「ハヤト！　奴らは誰だ！？　まさかお前の婚約者か！？」

「多すぎだろ！　どこのハーレム野郎だ俺は！
違うよ！　職場の上司と同僚だよ！」

「上司と同僚……？」

もう一度女達を見る。
なるほど、ハヤトがそう言うならばそうなのだろう。だが、全員地味目ではあるが、中々の美人揃いではないか。
しかも中には3人ほど子供もいるし……はっ！

「ハヤト！　あの子供達は、まさかお前の子じゃあるまいな！？」

「年齢計算あわねぇだろうが！！　落ち着いてくれよ姉ちゃん！
頼むから！！」

「……そ、そうか、すまなかった。
愛しいお前がどこの馬の骨とも知れぬ輩に汚されたかもと思うと、いてもたってもいられなくて」

「はぁ……いや、いつものことだからいーけどさ」

疲れた顔で溜息を吐くハヤト。
そんなに疲れるほど急いで私に会いにきてくれたのか。
お姉ちゃんは嬉しいぞ！

「まあ外野はいい！　ほらハヤト！　お姉ちゃんの豊満な胸に飛び込んで来い！
久しぶりに気の済むまで甘えさせてやるぞ！」

「誤解を招く物言いはやめてくれ……」

私が両手を広げると、ハヤトはもう一度深い溜息を吐いた。

ｓｉｄｅ：ハヅキ＝ロックウェル　了

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

ハヤトのお姉さんが落ち着くのを待ってから、お姉さんの自宅に

お邪魔する。
そして、リビングでお姉さんと互いに自己紹介をすることに。
ハヤトはキッチンの方で紅茶を淹れてくるらしい。アイツ、紅茶とか淹れられたんだ……。

「先程は失礼した。私はハヤトの姉でハヅキ＝ロックウェル。２４歳だ。
所属は地上本部陸士１０１部隊、魔導師ランクは陸戦ＡＡＡ、階級は一等陸尉」

「「ＡＡＡ！？」」

あたしとスバルの声がハモる。
ハヤトが陸戦Ｂだから、お姉さんもそんなに高くないと思ってたら、何よそれ！？
ニアＳランクとか反則じゃない！

「ん？　ああ、ハヤトと私の魔力ランクに差があって驚いたのか？
これはロックウェル家の特色でな。
魔力を持って生まれた場合、男は素質に乏しく、女は素質に恵まれて生まれてくるんだ」

「は、はぁ……」

「そう、なんですか」

「だが、ハヤトは私の弟だからな。本当は私など足元にも及ばない

程に優秀なのだろう。
今は私に遠慮して本気をだしていないだけでな……ふふ、本当にアイツはお姉ちゃん子だよ」

「いや、それは無いですって」

嬉しそうに笑うハヅキさんに、部隊長が反射的につっこんだ。
その刹那、ピシュン、と風を切る音がしたかと思うと、部隊長の首元にどこからか取り出された果物ナイフが当たっていた。
い、いつの間に!?　全然見えなかったんだけど!

「八神二佐、私の愛しい弟に才能がないと仰いますか?」

「い、いいいい、いいえ!　そんなことはありませんでした!
弟さんはとても優秀でございますです!」

「そうでしょうね。さすがは八神二佐、弟の才能を見抜いていらっしゃる」

冷や汗をダラダラと掻いた部隊長の言葉に満足したのか、ハヅキさんは頷きながらナイフをしまう。
こ、怖っ……ハヤトの悪口は言わないでおいたほうが身のためね。
てゆーかハヅキさんてブラコンだったんだ。しかも重度の。
ハヤトが憂鬱そうにしてた理由、ちょっとわかったかも。

「そういえば、そちらの2人はティアナ＝ランスターさんと、スバ

ル＝ナカジマさんか？」

「え？　あ、はい！」

「なな、何でしょうか！？」

不意に話題を振られ、慌てて返事をする。

何？　あたし達はまだハヤトの話題は出してないわよ！？

「いや、メールでハヤトからよく聞いていたものでな。

２人とも優秀で、いい相方が出来たと喜んでいたよ」

「え……」

「ホントですか！？」

「ああ。ハヤトがあそこまで誉める人間は、私の知る限りでは始めてかも知れんな」

「「そ、そうなんですか……」」

ハヅキさんの口から聞かされた自分達の評価に、思わず顔が赤くなる。

なによ、いつもあたし達のこと馬鹿にするくせに、意外と評価してくれてるんじゃない。

ちょっと幸せな気分になるあたしであった。我ながら現金だと思うが、嬉しいんだから仕方ない。

「それと、そちらの小さい3人はエリオ君にキャロちゃん、ヴィヴィオちゃんかな？」

「「は、はい！」」

「そうだよ～」

問いかけられて、エリオとキャロは姿勢をビシッと伸ばす。
ヴィヴィオはなのはさんの横で首を傾げてハヅキさんを見ている。
そんな3人を見て、ハヅキさんは優しく微笑んだ。

「先日のメールに弟と妹が出来たと書いてあったのだが、君達がそうだったか。
どうだ？　ハヤトは優しくしてくれているか？　まあ私の弟だ、目下の者に対する接し方は心得ているだろうがな」

「は、はい！　兄さんはとっても良くしてくれてます」

「ハヤトおにいちゃん、ヴィヴィオと沢山遊んでくれるよ」

「お兄ちゃん、凄く優しいです」

「そうかそうか」

ちょっと興奮気味に離す3人を、ハヅキさんは嬉しそうに笑って

見ている。
こうしてると、凄く美人よね。
さっきまでは凛とした雰囲気があって、どっちかと言えば『カッコいい』って感じだったけど、笑ったりすると凄く綺麗で可愛い。

（それにしても……）

あたしはそんなハヅキさんの顔から、胸元へと視線を移す。
そこにあるのは、服を破らんばかりに押し上げている巨大な2つの塊。
フェイトさんやシグナム副隊長も大きいけど、更に大きいって何なのよ！　理不尽だわ！

「えと、ハヤト君は私らのこと、何か言うてました？」

「ええ。八神二佐はお笑いを理解してらっしゃる素晴らしい方と。高町一尉は厳しい中にも優しさのある、良い教導官だと聞いています」

「あ、そんな、私は別に……」

「私の価値はお笑いだけかい」

ハヤトの評価に、なのはさんが頬を染め、部隊長が憤慨する。
あれ？　でも今のだとフェイトさんが触れられてないような……。

「それとハラオウン執務官は、素晴らしい胸の持ち主だと絶賛していました」

「「「はぁっ!?」」」

ハヅキさんの口からでたとんでもない言葉に、あたしとスバル、フェイトさんの声がハモった。

「ななな、何ですかそれ!?」

「ん？　何か不適切な言葉が？　ハヤトに誉められるということは誇るべきことだと思うのですが？」

いえ、それは間違いなく貴女（ブラコン）の基準です。

普通はそんなこと言われたら怒りますよ、ハヅキさん。

顔を真っ赤にしているフェイトさんを不思議そうに見つめるハヅキさんに、あたしは心の中でツッコミを入れた。

ていうかハヤト、フェイトさんの評価が胸だけって……巨乳がそんなに好きか！

「姉ちゃん紅茶淹れてきた……って、何があった」

そこでようやく戻ってきたハヤトが、真っ赤になっているフェイトさんを見えて驚いた声を出した。

アンタ、狙ったようなタイミングで戻ってきたわね……。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

姉ちゃんの家に来てから大体５時間。
紅茶を淹れて戻ってきてから暫くは変な雰囲気だったが、その後は特に問題もなく穏やかな時間が過ぎていった。
エリオ、キャロ、ヴィヴィオの年少組は随分と姉ちゃんを気に入ったみたいで、１時間もする頃には「お姉ちゃん」と呼んでいた。
まあ、姉ちゃんが呼ばせたんだけど。
スバル達も、最初こそブラコンすぎる姉ちゃんの扱いに困ってたみたいだけど、慣れてくると３人で楽しそうに喋ったりしていた。
そして、そろそろ日も傾き始めたから帰ろう、という事になったのだが……。

「ハヤト。今日は泊まっていくのではないのか？」

「いや、休み取ったの今日だけだし。明日からまた仕事だし、何より代えの服が無いし」

「何故だ！？　お姉ちゃんに会いたかったのではないのか！？」

「いやいや、姉ちゃんが来なきゃ暴れるってメールしたから来たんだよ？」

帰ろうとすると、まるで世界の終わりみたいな顔をされた。
あげくに、帰ろうとする俺のことを抱きしめて離そうとしない。

「ハヤト！　お姉ちゃんを捨てていってしまうのか！？
お姉ちゃんはお前に会える今日という日を、心の底から楽しみにしていたのに！
はっ！？　わかったぞ、誰か悪い女に誑かされているんだな！？
誰だ！　お姉ちゃんにその悪女の名前を教えろ！
お姉ちゃんが塵も残さず消滅させてやるぞ！」

「物騒すぎるだろ！？」

暴走を始めた姉ちゃんを必死に抑える。
普段は仕事も出来るし、かなり冷静で部下からの人望も厚い人なのに、何で俺に関する時だけこんななんだ！
ブラコンにも程があるだろうが！！

「ハヤト君、今日お泊りしてってもええよ？」

「いや部隊ちょ――「本当ですか八神二佐！？」――ああ、食いついちゃった……」

苦笑している部隊長の提案に、姉ちゃんが目を輝かせる。

「駄目だから。

明日も教導が――「明日は午後からだし、午前中に帰ってくれば平気だよ。ハヤト君」――高町たいちょぉ……」

高町隊長のまさかの裏切り。
隊長の言葉に、姉ちゃんの目の輝きがますます増していく。
これはもう観念するしかないのか……？
俺がそんな風に諦めかけた時だった。気を良くした姉ちゃんが、続けて凄い事を言い出した。

「八神二佐達も、よければ泊まっていきませんか？」

「「「「「「「「「は？」」」」」」」」」

「ハヅキおねえちゃん、いいの～？」

「私は構わないぞヴィヴィオ。ああ、ですが二佐達にはお仕事があるでしょうか？」

唐突すぎる姉ちゃんの提案に、ヴィヴィオ以外の皆が驚きの声をあげる。
いや、姉ちゃん……さすがに無理だろ。

「えぇと、私となのはちゃん、フェイトちゃんは仕事があるから駄目ですけど……フォワードの皆はかまへんよ？」

「許可しちゃうんだ！？」

「どや？　ティアナ達は泊まってくか？」

「俺は無視！？」

「なのはさん、いいんですか？」

「う～ん。まあ、はやてちゃんが許可してるんだし、皆がいいなら、私は構わないよ」

「ティアナも乗り気！？」

これはどういうことだ！

俺が関与していないところで、どんどん事態が悪化していく。

スバルと年少組は……駄目だ！　目が期待で輝いてやがる！　あれじゃ戦力にならねぇ！

「なら決まりやな。

フォワード陣は今日、ハヅキさんのお家にお世話になって、明日の午前中に帰ってくること」

「いやいや部隊長！　こいつらの代えの服とかどーすんですか！」

「ハヤトの服ならば、お姉ちゃんがちゃんと用意してあるぞ」

「何で！？」

俺、姉ちゃんの家に住んでたことないんだけど!?
買ったの!?

「他の皆の服も、まあハヤトや私の服で代用すればいいだろう」

「そうですか。じゃあ、お願いします。皆もそれでええか？」

「「「「はい！」」」」

俺が困惑しているうちに、俺とフォワード陣が姉ちゃんの家に泊まることが決定してしまった。
ここで嫌って言えば、どう考えても空気読めてない奴になるし…
…観念するか。
がっくりと肩を落として俯く俺。
だから姉ちゃんと絡むのは嫌なんだ、碌なことが起きた試しがねぇ。

「え～？　ヴィヴィオは～？」

「ヴィヴィオはまた今度ね？　今日はなのはママと一緒に帰ろう？」

「ぶー」

許可が下りなかったヴィヴィオは頬を膨らませているが、まあ、仕方ないだろう。
ヴィヴィオは現在機動六課で保護してる状態だ。

いくら陸戦ＡＡＡの姉ちゃんがいるとはいえ、万が一を考えれば六課隊舎で隊長達と一緒に居るのが最善だしな。
隊長が一緒に居れない以上、隊舎に帰るのは当然と言える。

「ヴィヴィオ。また今度泊まりにくるといい。
私はお姉ちゃんだからな、ヴィヴィオが来てくれるならいつでも仕事を休むぞ」

「ハヅキおねえちゃん、ホント？」

「ああ。だから、今日はなのはママと一緒にお帰り？」

「うー……うん」

腰を降ろしてヴィヴィオを抱きしめながら、姉ちゃんが優しく言い聞かせる。
ヴィヴィオが頷くと、「いい子だ」と頭を撫でて笑う。
とてもいいお姉ちゃん像だ。俺にもこれぐらいだったら、自慢の姉ちゃんって言えるのに……。

「ほな帰ろか。ハヅキさん、今日は突然お邪魔して申し訳ありませんでした」

「いいえ。愛しい弟の近況を教えて頂いて、私としては僥倖でした」

「そう言ってもらえて助かります。ほんなら、ティアナ達をよろしくお願いします」

「ええ。明日の午前中までには必ず帰しますのでご安心を」

頭を下げあってから帰っていく部隊長達を玄関で見送る俺と姉ちゃん、そしてティアナ達。

ああ、出来れば俺も今すぐ帰りたい……。

玄関を開けて去っていく部隊長達を見送りながら、俺は切にそう願った。

第２９話　『お姉ちゃん　１』（後書き）

お姉ちゃん遂に登場！　そして、今回はゲストをお呼びしてません。
どうも、ラモンです。

ハヅキ
「ハヅキ＝ロックウェルだ」

あれ、ハヤトは？
どっかいったの？

ハヅキ
「それはこっちが聞きたいぞ。我が愛しの弟はどこに行った？」

うーん……今回はお休みか？
まあいいか。どうせだし、ハヅキの紹介しようか。

ハヅキ
「ふん。ハヤトがいないなら、私としてはこんな場所に興味はないのだが……まあいい」

はいはいどうも。
それじゃ載せるよ。

・名前……ハヅキ＝ロックウェル
・歳　……２４歳
・性別……女
・所属……地上本部陸士１０１部隊

・階級……一等陸尉
・身長……１６８ｃｍ
・体重……５９ｋｇ
・３サイズ……９５／５６／９０
・性格……謹厳実直、ブラコン（病的）
・術式……ミッド式
・髪の色…金
・目の色…緑っぽい青（信号機の青）
・魔力色…真紅
・魔力ランク……？
・魔道師ランク……陸戦ＡＡＡ
・所持資格……バイク免許／普通自動車運転免許／指揮官免許

・趣味……弟のことを考える、弟の写真を眺める
・特技……弟の長所を１０００個以上言える、料理
・好きな物……弟、弟、弟
・苦手……特に無し
・嫌いな物……弟に言い寄る女全般

外見イメージは、鋼の錬金術師のオリヴィエ＝ミラ＝アームストロング

……こうやって書いてみると、趣味、特技、好きな物、嫌いな物、全部弟絡みだなぁ。

ハヅキ
「当然だ。ハヤトは私の愛しい弟で、私の宝物だからな！」

そうですか。

ハヤトもそこまで愛されたら幸せでしょうよ。

ハヅキ
「当然だろう。私以上にハヤトの事を愛している奴などいるまい。
さて、これで話は終わりか？　なら私はハヤトを探しに行かせて
もらうぞ」

は～い。いってらっしゃい。

ハヅキ
「ではな！」タッタッタッタッ……

……はぁ、疲れた。
あの人の相手はマジで疲れる。

ハヤト
「俺の苦労、わかってくれたか？」

おお、どこに行ってた？

ハヤト
「姉ちゃんがきそうだったから、隠れてた」

そうか。まぁ、あそこまでブラコンだと疲れるわな。
ああいうキャラにしておいてナンだけど、ごめん。

ハヤト
「いやまあ、いいよ。別に俺も姉ちゃん嫌いじゃないし」

そう言ってくれるか。
それで、次回はどうしようか？

ハヤト
「は？　この話の流れだと姉ちゃんの家に泊まった俺らの話じゃねーの？」

流れはそうなんだけどねー。
勢いで泊まらせちゃったから、話を全然考えてなかったり。

ハヤト
「おいおいどーすんだよ」

読者の皆さんから要望が無い限り、お泊り編は無しで行こうかと。

ハヤト
「この後書き、見てる人いるのか？」

見てくれてるよ！
いつもアンケートとか答えてくれてるじゃん！

ハヤト
「そうだなぁ。まあ、お泊り編みたいって人は、感想の後に一言“お泊り編希望！”とでも付け加えてくださいな。
誰か一人でも居れば、作者が頑張って書くんで」

希望が無かった場合は、お泊り編は無しの方向性となります。
気が向いたら、結局書くと思いますけどね（笑）

ハヤト
「しかし、今回はゲスト無しなんだな」

出演希望してくれる人はいるんだけど、今回はハヅキの紹介に使いたかったからね。
次回からはまたゲストをお呼びするよ。

あ、それでちょっと確認しておきたいことが。
次回以降のゲスト出演予定の人は、

永久　桜（魔法少女リリカルなのは時の支配者）

ヒスイ＝リヴァイアス（魔法少女リリカルなのはＲａｉｎｂｏｗＦｌｏｗｅｒ　～虹ノ花、此処に～）

ジョーカー（リリカルヒーローズ　～金色の閃光と毒の爪～）

阿部隆浩&阿部晶彦（なのはＳＳ・ｆｒｅｅｄｏｍ）

とまあ、この方々なのですが「立候補したのに列挙されてない！」って作者様がいらっしゃいましたらお知らせ下さい。
一応希望された時にメモって置いてはいるのですが、メモしそびれた場合がありますので。
お手数かもしれませんが、一応確認をよろしくお願いします。

ハヤト

「それじゃ、また次の話で。
まあ、お泊り編になるか、違う話になるかはわからないけどな」

第３０話　『お姉ちゃん　２』

さて、紆余曲折あって姉ちゃんの家にティアナ達４人と一緒に泊まることになったのだが。

「これは家族で遊園地に行った時の写真だな。
ハヤトはこの時ヒーローショーが目当てだったらしくてな、ヒーローショーが休みだと知ると泣きじゃくって、可愛らしい泣き顔を見せてくれたものだよ」

「わ～、ハヤトちっちゃ～い！」

「お兄ちゃん、可愛いです」

何この羞恥プレイ。
姉ちゃんはどこからか取り出してきたアルバムをリビングの机の上で開いて、ティアナ達に昔話をしている。
やめて姉ちゃん！　俺の精神がガリガリ削られてるからやめて！！
このままじゃ再起不能になるから！！

「こっちは訓練校に入学する直前だな。
ふふ、凛々しい制服姿だろう？　この写真だけでご飯１０杯はいけるな」

「いや……それは、ハヅキさんだけだと」

やめてくれ！　頼むからやめてくれ！
もう俺のライフは０よ！

「に、兄さん……大丈夫？」

「エリオ！　お前最高！　お前みたいな弟分がいて俺は幸せだよ！
！」

「そ、そんな……大袈裟だよ」

俺を唯一気遣ってくれたエリオを抱きしめる。
女共は当てにならん！　弟分が居るって最高！
今度好きなゲームを買ってやろう！！

「あぁっ！？　ハヤト、何故エリオを抱きしめている！？
お姉ちゃんも抱きしめてくれ！！」

「やべっ、見つかった！」

「エリオずるいぞ！　どうやってハヤトに抱き着いて貰ったんだ！？
私は今日一度も抱きしめてもらっていないのに！！」

「え、いや、僕は別に……」

そうやってエリオに詰め寄る姉ちゃんから黒いオーラが立ち昇る。

いかん、姉ちゃんがジェラシー全開になったら、いくら俺でも止められんぞ。
そうなるとエリオが危ない。主に生命的な意味で。
仕方ない、ここは恥ずかしいのを我慢して……。

「わかった。姉ちゃんも抱きしめてあげるから、おいで」

「ハヤト……ようやくデレてくれたんだな！
お前の絶妙なツンデレに、お姉ちゃんはメロメロだ！」

「ツンデレじゃねぇよ……」

単純に恥ずかしいんだよ。
お願い、そこんとこわかって姉ちゃん。
俺は、抱き着いてきた姉ちゃんを抱きしめつつ、諦観の息を漏らした。

「さあ思う存分お姉ちゃんを抱きしめてくれ！　それはもう背骨がへし折れる位に！！」

「死んじゃう、いくら姉ちゃんでも死んじゃうから」

「お前に殺されるなら、お姉ちゃんは本望だ！！」

「もう、嫌だ……（泣）」

「姉ちゃん、もういい？」

「駄目だ！　もっと！　もっとキツく抱きしめてくれなくちゃ駄目だ！」

「いや、もう何だかんだで３０分近くこのまんまなんだけど……」

姉ちゃんの暴走を抑える為に抱きしめて早３０分が経過した。
正直つらい。
何がって、さっきまでアルバム見て人の過去を肴にワイワイやっていたティアナ達が、今は全員そろって生温かい目でこっちを見てることが。
何この公開処刑。いっそ一思いに殺せ。

ていうかそろそろ冗談抜きで精神的に死ねる。
ここは交換条件を出して離れてもらおう、そうしよう。

「姉ちゃん、恥ずかしいから離れてくれ。代わりに言う事一つ聞くから」

「ならばこのまま抱っこを継続だ」

「それ以外で」

「むぅ……わがままだなハヤトは。だが、そんなところも愛おしいぞ！」

「はいはいありがとう。それで何にする？」

「そうだな……なら、明日帰るまで、昔みたいにお姉ちゃんと呼んでくれ！」

何だ、その程度ならば問題ない。
どれ早速……ってティアナ達は興味津々の目でこっちを見るな。
うわ、なんだか恥ずかしくなってきたじゃねぇか……だけど、このまま抱き着かれてるよりはマシなのか？
えぇい、ままよ！

「……お、お姉……ちゃん」

「ぶはっ！！」

「うおぉぉっ！？」

呼んでみたら姉ちゃんが鼻血を噴出しながら吹っ飛んだ。
え！？　ちょっ、何コレ！？

「ハ、ハヅキさん!?」
「どうしたんですか!?」
「姉ちゃん!?」
慌てて駆け寄ると、姉ちゃんは滝のように鼻血を流しながらポロポロ涙を零していた。
何それ気持ち悪っ!?
ティアナが慌てて姉ちゃんを膝枕して話しかける。
「大丈夫ですかハヅキさん!?」
「な、なん、何という破壊力!
私は今至高の快楽に襲われている!　言葉に出来ん!　何だこれは!?
名前を呼ばれただけでコレだと言うのか!?」
「意味わかんねーっ!　と、とりあえずキャロ!　治癒魔法!　治癒魔法を早く!!」
「は、はいっ!!」
失血死しかねない量だったので、とりあえずキャロに頼んで治癒魔法をかけてもらう。
そして鼻血が止まったところで鼻にティッシュを詰めて、頭に冷

えピタを貼り付ける。
服とか床が血まみれじゃねぇか。
ここに管理局来たら確実に事件だと思われるぞコレ。

落ち着いた姉ちゃんはヨロヨロと立ち上がり、俺を恐ろしいモノを見る目で見てきた。

「恐ろしい、いくら久しぶりとはいえ萌え死にしかけるとは……。
さすが我が愛しの弟だ……。
まさに天にも昇る気持ちになってしまったではないか、この萌え萌えハヤトめ」

萌え萌えハヤトって何ですか。俺はただのハヤトですよ。
姉ちゃん、鼻血と一緒に脳味噌も出ちまったか？

「すまないハヤト、自分から言い出したことだが、もうお姉ちゃんはやめてくれ。
これ以上は本当に死んでしまう……。
その変わり、ティアナとスバルを“愛しい俺の”を付けて呼んでやってくれ。この2人にも、愛しいお前の素晴らしさを教えてやりたい。
あと、呼べなかったら抱きしめさせてください」

「「「はあああっ！？」」」

まさかの二次災害。

てか姉ちゃん、何故にティアナとスバル？
しかも“愛しい俺の”とか付けるとかマジあり得ないんですけど。
そんなのティアナ達だって嫌に決まって――

「ま、まぁ、この状態のハヅキさんに負担をかけるわけにはいかないしね。
べ、別に呼んでも構わないわよ？」

「そ、そうだね。しょうがないよね」

「何で乗り気やねん！」

反対すると思っていた2人は顔を赤くしてこっちに期待した視線送ってるし。
なんなのホント。馬鹿なの？　死ぬの？

だが……俺の横には、いつでも抱きつく準備をしている姉ちゃん。
はァん、俺が絶対にできそうに無い事を言って、それを理由に抱き着くつもりか。
そうはいかねーってばよ。
何、一度呼ぶだけ。それに深い意味なんぞねぇんだから楽勝に決まってる。

そう自分に言い聞かせて口を開く。

「い、愛しい俺の……ティアナ。それと、愛しい俺のスバ……ル」

ごめん、俺が甘かった。
軽く死ねる程に恥ずかしい。

「「愛しいッ！？」」
「うぼぁっっ！？」

そしたら、今度は2人も意味不明な声と共に鼻血を出して吹っ飛びやがった。
何なのソレ流行ってんの！？

「あわわわわ……」
「うわわわわ……」

「メディック！　メディーック！！」

「は、はいぃぃぃっ」

ボタボタと鼻血を垂らしてる2人に、キャロを呼んで治癒魔法をかける。
お前らも姉ちゃんもなんなの！？　鼻血で失血死するのが流行なの！？
普通にこえぇよ！　キャロとかちょっと半泣きじゃねぇか！！

「ちぃっ！」

そんで姉ちゃんは舌打ちしてるし！
俺に抱き着く気マンマンでしたね！？
てゆーか鼻血塗れで抱き着こうとすんなよ！　俺の服まで汚れんだろうが！

「ああもう！　姉ちゃんもティアナもスバルも着替えてこい！
こっちの掃除は俺がやっとくから！！」

「「「ふぁい」」」

３人は頷いて、鼻にティッシュを詰めるという情けない格好で姉ちゃんの部屋の方へと消えていった。
年頃の女の子がする格好じゃねぇよ。
何で俺の周りはこう……変な奴ばっかなんだ。

「類は友を呼ぶ、だと思います。お兄ちゃん」

「キャロ、お前酷いな」

妹分の辛辣な言葉に、心が折れそうになった俺である。

◇◇◇◇◇

姉ちゃん達が帰ってくるまで、床に飛び散った鼻血の掃除をする。
何で折角の休日にこんな事してるんだ俺は。
やっぱり来なけりゃよかった。

「はぁぁぁぁ……」

「兄さん、その、気を落とさないで」

「お兄ちゃん、元気出してください」

「お前らはホントいい子だな。俺は嬉しいよ」

一緒に掃除をしてくれているエリキャロの優しさに涙する。
俺はいい弟と妹を持った。
姉ちゃんの気持ちがちょっとだけわかった気がするよ。

「それにしても、ハヅキお姉さんて、いつもあんな感じなんですか？」

「そうだなぁ。俺に関する時だけはいつもあんなかな。それ以外じゃすげー優秀な人なんだぞ」

「へぇ」

「１０１部隊でも『女帝』なんて呼ばれてるくらい厳しい人なんだ……俺が絡まなきゃ」

「あ、あはは……」

キャロとエリオに苦笑いされながら、姉ちゃんの評判を語っていく。

基本的に人にも自分にも厳しくて、かつ誉めるべき時は手放して誉めるってんで人気は高いんだよなぁ。

ＡＡＡって魔力ランクを鼻にかけることもないし、何より部下の面倒見がいい。

本当ならもっと上に行っててもいい人なんだけど、「現場がいい」って断り続けてどんどん部下に階級を抜かされてるらしい。まあ、そのせいで一部の上官は姉ちゃんに頭が上がらないらしいけど。

「ホント、俺には出来すぎた姉ちゃんだよ」

「ふふ。お兄ちゃんは、ハヅキお姉さんのこと好きなんですね」

「ん？　そりゃそうだろ。俺の姉ちゃんだもの、何されたって嫌いにはならねぇよ。

キャロだって、ハラオウン隊長に何されても嫌いにはなれないだろ？」

「勿論です」

誇らしげに笑うキャロ。

うんうん、愛されてますねハラオウン隊長。
帰ったら報告してあげよう。きっと泣いて喜ぶだろう。
今気付いたけど、ハラオウン隊長と姉ちゃんて同じ種類の人間だよね。程度の違いはあるけどさ。

……くぅ

「「「あ……」」」

そこで、小さくて可愛い音がキャロのお腹から響いた。
あー、そういやもう7時か。いつもなら晩飯食ってる時間だもんなぁ。
とはいえキャロも年頃の女の子、腹の虫が鳴ったのを聞かれたのは恥ずかしいだろう。
俺はエリオとアイコンタクトをして、お互いに無視することを決めて口を開く。

「な、何か腹減ったなエリオ？」

「そ、そうだね兄さん。ちょっとお腹すいたね」

「じゃあ俺が何か作ってやるよ。どうせだし、今日の晩飯は俺が用意するからさ」

「あ、それなら僕も手伝うよ」

「どうせならちゃんとツッコミしてください！　逆に恥ずかしいで

すぅっ！！」

２人でキャロに怒られた。
その後、エリオと協力してなんとかキャロに機嫌を直してもらい、３人で晩飯の用意をすることに。
さて、何を作ろうかねぇ。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

ハヅキさんの部屋で、血まみれになった服を脱いで、ハヅキさんから借りた服に着替える。
不覚だったわ。まさかハヤトに“愛しい俺の”を付けて名前を呼ばれただけで、鼻血を吹くことになるなんて。
でも、あれは反則だと思う。

「服はキツくないか？」

「あ、はい。大丈夫です」

「むしろ胸の辺りが余って……」

言うなスバル、悲しくなるじゃない。
実際、ハヅキさんの服はどれも身体にピッタリ張り付く感じの服ばっかりで、しかも胸の辺りだけがかなり伸びてたりしていて、あ

たしやスバルが着ると微妙にダブついてしまう。
く、屈辱的だわ。

ハヅキさんは、そんなあたし達をYシャツ一枚を羽織っただけの格好で見ている。
Yシャツ一枚だけになると、ますます胸が目立つわね。あんなに大きいくせに、下着無しでも全然垂れてないし。
……悔しくなんか、ないんだから。

「えぇと、ハヅキさん。他の服は……」

「私の服でティアナ達が着れそうなモノは、あまり無いぞ？」

「あ！　ならハヤトの服を――「却下だ」――そうですか」

スバルの提案は光の速さで却下された。
少し残念……なんかじゃないわよ！？
別にアイツの服なんか着れなくてもいいんだからねっ！？

「全く。いくら私の愛しいハヤトに恋しているとはいえ、私相手にハヤトの物を借りようなどと命知らずな」

「いえそんな……って、えぇぇっ！？」

「な、なななぬを、じゃなくて何を！？」

「うん？　何を慌てている？」

「だ、だってハヅキさん、今……あたし達がハヤトにこ、ここ恋してるって!?」

不思議そうな顔をしているハヅキさんを、あたしとスバルは揃って赤い顔をして見つめる。

な、何でバレたの!?

別にバレるような事は何も言ってないし、やってないわよね!?

「ああ、私の“弟に近寄る女レーダー”に反応したのでな」

「「レーダー!?」」

ちょっ、ハヅキさんて人間よね!?

レーダーって何よレーダーって!!

「本来なら、是が非でも妨害するところなのだが……アイツが気に入っている君達2人ならば、まぁ、大目に見てやらんこともない。ハヤトもそろそろ彼女が欲しい年頃だろうしな」

「えっと……」

「その、いいんですか?」

カラカラと笑うハヅキさんに、恐る恐る問いかける。

今日一日のハヅキさんが取った行動からすれば、ちょっと信じられない。
てっきり「弟に近付く悪い虫は駆除しなければな」とか言って、ボコボコにされるかと……。

「私は弟を愛しているが、縛り付ける気はないからな。
ハヤトが嫌がっているならともかく、嫌がってもいないのに君達を妨害する意味もないだろう」

笑ったままそう告げるハヅキさんを見て、敵わないなぁ、と思う。
あたしがもしハヤトと恋人同士になったら、こんな風に思えない。
これが、姉弟と他人の“愛”の違いなのかな……ちょっと、悔しいかも。
あたしはハヅキさんを見て、そんな自分の気持ちを誤魔化すように苦笑した。

『姉ちゃ～ん、ティアナ、スバル、飯出来たぞ～』

「なにぃぃぃっ!?　ティアナ、スバル！　服はそこいら辺の物を適当に着てこい！
私はハヤトが私の為だけに作ってくれた料理を堪能せねばならん!!!
あ！　だからと言ってハヤトの服は着るんじゃないぞ!?」

そうしていると、ドアの向こうからハヤトの声が聞こえてくる。
途端にハヅキさんは喜色満面になって、あたしたちに吐き捨てる

ように言ってから、Ｙシャツ一枚を羽織ったままで部屋を飛び出していく。

……なんで、この姉弟はこうギャップが激しいのかしら。

ちょっと尊敬した途端にこれだもの……はぁ。

「ティア～。服、適当にって言われたけど……どうする？」

「どうって……大きめの服を借りて着ましょ。あんまり身体のラインが目立たないのを選んでね」

「そう、だね。あんまり惨めな思いはしたくないし……」

なんだか、酷くテンションが下がったあたし達であった。

くっ……なんで服を借りるだけでこんな思いしなきゃいけないのよ！

『ハヤトハヤトハヤトハヤト～～～っ！　お姉ちゃんの為に愛情を込めて手料理をつくってくれたんだなぁっ！

お姉ちゃんは嬉しさのあまり死んでしまいそうだ！

あぁ、ハヤトハヤトハヤトハヤト～～～っ！！

もう辛抱たまらんもじゃーーーーっ！！！』

『うぉぉぉぉっ！？　ね、姉ちゃんなんでそんな格好な訳！？

ちゃんと着替えてからにしてくれよ！　エリオとキャロの教育に悪いだろうが！！』

『ハ～～～ヤ～～～ト～～～～ッッ！！！』

『聞いてねぇぇぇぇっっっっ！！？』

『兄さーーーんっっ！！』

『お、お兄ちゃんが大変なことにっ！？』

ドアの外からは、物凄く酷い声が聞こえてくる。

ホントにあの姉弟は……。

あたしは深い溜息を吐いてから、なるべく大きめのサイズの服を選ぶ。

とりあえず、ハヤトを助けてあげなくちゃ。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

第３０話　『お姉ちゃん　２』（後書き）

お泊りで晩飯が終わったら……わかるな？
どうも、ラモンです。

ハヤト
「姉ちゃんと同僚が鼻血を吹きまくって困る。ハヤトです」

さて、今回は再びゲスト登場です。

魔法少女リリカルなのはＲａｉｎｂｏｗ　Ｆｌｏｗｅｒ　～虹ノ花、
此処に～

の主人公、ヒスイ＝リヴァイアス君と、その妹分のローズライト＝
モルディオちゃん！
どうぞー。

ヒスイ
「どうも」

ローズ
「お邪魔するわよ」

２人はＴＯＶのキャラの人たちと関係が深いんだよね。

ヒスイ
「ああ。俺は凛々の明星のメンバーだし、ローズはリタ姐さんのと
ころに引き取られてるしな」

ハヤト
「リタさんってあれだろ？　バーストしてタイダルウェイブ連発で無双ができる……」

ローズ
「よく知ってるわね。ママはメテオスォームの方が好きみたいだけど」

ハヤト
「作者の持ちキャラだったからな」

闘技場ではバースト→タイダル＆メテオ無双でブイブイ言わせたもんよ。
帰ったらお母さんにお世話になりましたと伝えてください。

ローズ
「いや、意味わかんないんだけど……まあいいわ、ママに伝えておく」

ヒスイ
「ところで今回……なんていうか、ティアナさんとスバルさんが凄いことになってるな」

ローズ
「あとハヤトのお姉さんのハヅキさんもね」

ハヤト
「いや、姉ちゃんはアレ位いつものことだから」

ヒスイ＆ローズ

「「いつも！？」」

ハヤト
「俺が関わった時の姉ちゃんは、あれで暴走率８０％ぐらいだな」

まあ、結構暴走してるな。
その分ちょっとだけカッコいい部分も見せたけど。

ヒスイ
「ああ、ティアナさん達と着替えしてた時の」

ローズ
「信じられなかったわよね。てっきり私も２人に戦いを挑むものと思ってたわ」

ハヅキは基本的に出来た人なんだよ。
暴走すると酷いだけで。

ハヤト
「酷いってレベルじゃねぇよ！」

ヒスイ
「いいお姉ちゃんじゃないか」

ローズ
「そうだよね」

ハヤト
「ならお前らも姉ちゃんに構われてこい！」

ヒスイ&ローズ
「「それは御免被る」」

ハヤト
「こんのぉぉぉぉっ！！」

ヒスイ
「それよりも、だ。
　ハヤト、お前随分とティアナとスバルに愛されてるじゃねぇか」

ハヤト
「いや、まぁ……それは俺の知るところじゃねぇけど」

ヒスイ
「くそ……俺なんて、俺なんてフラグのひとつもねぇってのに！！！！」

ハヤト
「えーと、ヒスイさん、何で魔力とＴＰ溜めてんの？」

ヒスイ
「ダ○スレーザァァァァァァッッッ！！！！」

ハヤト
「ＴＯＶ闘技場バージョンだとぉぉぉぉっっ！！？」

お、消し飛んだ。
ってヒスイ君、なんでエターナルソード構えてんの？
てかローズちゃんも何の準備して……

ヒスイ
【万象を成し得る根源たる力。
太古より刻まれしこの記憶、我が呼び声に答え、今ここに蘇れ！】

ローズ
【天光満つるところに我はあり、黄泉の門開くところに汝あり。
出でよ、神の雷……】

ヒスイ
【エターナル・カタストロフィ！】

ローズ
【これで終わりよ！　インディグネイション！】

ハヤト
「うぼぁぁぁぁぁっっっ！！！」

なんと言う追い討ち。
ヒスイ君はわかるとして、何でローズちゃんも？

ローズ
「兄貴が攻撃したから、あたしもやっとこうかなって」

なんとなくかよ！
さすがに酷いだろ。
アレは暫く再起不能……ってうわぁ。

ハヅキ
「ハヤト！？　どうしたんだ、そんなにボロボロになって！？
だ、誰にやられた！　お姉ちゃんがブチ殺してやるぞ！！

おお、そこの2人！　ハヤトをこんな風にした奴を知らないか！？」

ヒスイ
「えーと、さっきちょんまげに無精髭、あとへんな着物を羽織ったおっさんが……」

ローズ
「たしか名前はレイヴンだったような……」

ハヅキ
「そうか！　ありがとう君達！
待っていろ犯人め……生まれてきたことを後悔させてやる！！！！」

……うわぁ、エゲつねぇ。
レイヴンが可哀想すぎる。ありゃ確実に殺されるぞ。

ヒスイ
「おっさんだから平気だろ」

ローズ
「だよねー」

まあ、確かにレイヴンなら平気か。
さてそろそろお時間です。
最後に次回予告と番宣いきましょか。

ヒスイ
「じゃあ最初に番宣を。

俺とローズの出ている作品は、

魔法少女リリカルなのはＲａｉｎｂｏｗ　Ｆｌｏｗｅｒ　～虹ノ花、此処に～

機動六課が設立され、ＪＳ事件が片づいて数週間後、各々が仕事なり訓練なりに時間を費やしていた。
そんなある日の訓練中、訓練所の中心に、突然の収束型魔力砲撃。
その直弾点に、一人の少年が倒れていた。
彼は機動六課に入りら多種多様な仕事、出来事を熟していく中で、自分を見つめ、見つけてゆく。
ここから、もう一つの物語が始まった。
魔法少女リリカルなのはＲａｉｎｂｏｗ　Ｆｌｏｗｅｒ～虹ノ花、此処に～、始まります。

元々はテイルズオブシリーズとのクロス物だけど、次回からは別の作品ともクロスする予定だ」

ローズ
「あたしと兄貴の活躍、絶対に見なさいよ！」

さて、次回予告！
ご飯を食べた皆はお風呂に入る。
そこで起きるドキドキワクワクハプニングとは！？
次回、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第３１話　『お姉ちゃん　３』　お楽しみに！

ヒスイ
「よっし、それじゃあ帰ろうかな」

ローズ
「オッケー」

2人ともゲスト出演ありがと。
これお土産ね。

（´・ω・、）　つ【銘菓“セクシータイフーン”】

ヒスイ
「おいおい、これってエステリーゼ様の……」

深くは追求しないほうが利口だゼ。

ヒスイ
「そ、そうか……」

ローズ
「それじゃねー。そのうちまた来るかもー」

あいあい。
次回のゲストは
“魔法少女リリカルなのは時の支配者”より
主人公の永久　桜君を予定しています。

それではまた、次の話で！

沫乃憂谷さん、こんな感じでよかったでしょうか？
修正するところとかあったら教えてください。すぐに修正するので。

※感想で途中の展開がある同人誌と似てると指摘がありました。パクリではないのですが、証明する手段もないですから、途中を修正しました。
これで似てない感じになったかな？
まだ似てるって言う方がいたら言ってください。
今度は最初から書き直しますので。

第３１話　『お姉ちゃん　３』（前書き）

今回はちょっと短めです。

第３１話　『お姉ちゃん　３』

Ｙシャツ一枚で降りてきた姉ちゃんを着替えさせ、全員が揃ったところで晩飯を食べる。
久しぶりだからどんなもんかと思ったが、エリオとキャロの手伝いもあって、結構まともなモンが作れた。

「ハヤトって料理できたんだ」

「ま、一人で生活しても困らない程度にはな」

「へぇ、結構おいしいじゃない」

「そりゃどうも。エリオとキャロも手伝ってくれたんだから、２人にも感謝しろよ」

「そんな……私は、ちょっと野菜を切るのを手伝っただけですし」

「僕も、そんなに大したことは……」

俺の言葉に、顔を赤くする２人。
謙虚でいい子だ。とりあえず頭を撫でてやる。

「うふふ……おいしいなぁ。
ハヤトが私の為に用意してくれた料理はおいしいなぁ」

姉ちゃんはニコニコと笑いながら猛然と俺の料理を食べている。
下手したらスバルやエリオよりも食べてるんじゃないか？
恐るべし姉ちゃん。
まあ、喜んでくれてるみたいだからいいだろ。
てか今の姉ちゃんには関わりたくない。絶対にロクでもないことになる。

「ハヤトはいいお嫁さんになるぞぉ……」

「いや、俺は嫁貰う側だから」

「「誰を貰うの？」」

俺の言葉に、ティアナとスバルが声を揃えて聞いてきた。
うるせぇ！　候補なんていねぇよ！　彼女がいねぇんだもん！！
……くすん。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第３１話　『お姉ちゃん　３』

夕飯を食べ終えて、少しリビングで休んでから風呂に入ることに

なった。
順番は姉ちゃんとキャロとエリオが最初で、次がティアナとスバル、一旦風呂を入れ替えて（ティアナとスバルの希望）から、ラストに俺という感じに。
エリオは恥ずかしがって断固拒否していたのだが、姉ちゃんに無理矢理引き摺られていった。

助けを求められたが、残念ながら精神ポイントがギリギリの俺に弟分を助ける余裕は無かった。
許せ、エリオ。
そんな経緯で、今は姉ちゃんとエリキャロが入浴中。
俺とティアナ、スバルの3人はリビングで寛いでＴＶを見ている。

「あ、あたしこの芸人好き～」

「マジかよ。こいつそんな面白くなくね？」

「そうよね、なんていうか勢いだけって感じ」

「え～？　そうかなぁ」

テレビにはゴールデンタイムのお笑い番組が映っている。
3人であーだこーだ言いながら、ソファに並んで座ってそれを見る。
ゲームがあればよかったんだが、さすがに姉ちゃんの家には置いてなかった。
姉ちゃん、ゲームとか苦手だもんなぁ。

「お、髭公爵じゃん。俺こいつら好きなんだよね」

「あたしはあんまり好きじゃないかなぁ。ハヤト、趣味変じゃない？」

「いやいや、お前の方がおかしいって」

「ならティアに判定してもらおうよ。ティア、どっちが変？」

「どっちでもいいわよ。てか、たかだかテレビで喧嘩しないでよ、子供じゃあるまいし」

何を言うかティアナ。
お笑い談義とは崇高なものなんだぞ。

「知らないわよ」

「ティアさん、スバルさん、お風呂あきましたよ」

「長くなってすまなかったな。早く入るといい」

「あ、はい」

「わかりました～」

３人でＴＶを見ながらわいわいやっていると、姉ちゃんとキャロ、

そして茹蛸みたいになったエリオがやってきた。
そして、今度は入れ替わりにティアナとスバルが風呂へと向かう。

「ハヤト！　お風呂上りのお姉ちゃんはどうだ!?
グッとくるか？　思わず押し倒したくなっちゃうか？」

「なりません。ちゃんと髪とか乾かしなよ？　風邪ひくからさ」

「お姉ちゃんを心配してくれるのか！　嬉しいぞ！！」

「はいはい」

抱き着いてきた姉ちゃんは流しておく。
さすがに今日は色々ありすぎて疲れた。
これ以上姉ちゃんに構ってたら精神が磨耗して明日の訓練が出来なくなってしまう。

「エリオ君なんて知らない」

「キャ、キャロぉ……」

「ふ～ん、だ」

「ん？　どうしたキャロ、エリオ？」

適当に姉ちゃんの相手をしていたら、隣に座ったエリオとキャロ

が喧嘩をしていた。
いや、喧嘩ってよりもキャロが拗ねてて、エリオが取り繕ってるって感じか？

「エリオ君、ハヅキお姉さんの胸ばっかり見てました」

「ご、誤解だよキャロ！　僕は別に……」

ああ、成る程。
姉ちゃんの胸を見てたエリオに、キャロはヤキモチ焼いてる訳だ。
まあ姉ちゃんの胸は圧巻だからなぁ、男なら誰でも見ちゃうだろ。
俺も身内でさえなかったらって思う時があるくらいだし。

「キャロ、大目に見てやれって。エリオだって年頃の男なんだし、仕方ねーだろ？」

「……お兄ちゃんもエリオ君もエッチです」

「に、兄さん！　それってフォローになってないよ！」

「あるぇー？」

フォローしたつもりが、逆効果になってしまったようだ。
乙女心って難しいね。

side：―

「……おせー」

小さく溜息を吐いて、ハヤトが呟く。
スバルとティアナが風呂に入ってから既に1時間が経過していた。
いくら女性の入浴が長いとはいえ、ちょっと長すぎはしないだろうか？

「エリオもキャロも寝ちまったし……どーすっかねぇ」

時計を見れば、今は11時近く。
エリオとキャロは、既にハヅキの寝室で寝ている。
ハヅキ自身も一緒に寝てしまったので、現在リビングにはハヤト一人だけ。
この時間になると、面白い番組もやっていないので結構暇である。

「あいつら、俺のこと忘れてんじゃねーだろな」

自分で呟いてあり得ないことではないと思ったのか、ハヤトが眉を寄せて風呂場の方へ向かおうと席を立つ。
その時、リビングの入り口から驚いた顔のハヅキが声をかけた。

「ハヤト、まだ風呂に入っていなかったのか？」

「姉ちゃん。寝たんじゃなかったの？」

「ん？　ああ、ちょっと目が覚めてな。それよりも、何故風呂に入っていない？」

「いや、だってティアナ達が上がってないっぽいから……」

そう言ったハヤトに対して、ハヅキは何を言ってるんだ？　と不思議そうな顔をした。

「2人ならもう上がっているぞ？」

「え、マジ！？」

「ああ。恐らくお前に言うのを忘れてしまったのだろうな」

「あいつらぁ……明日説教してやる」

「まぁまぁ、それくらい見逃してやれ。
それよりも、早く風呂に入ったほうがいいのではないか？　もう時間も遅いぞ」

「む、それもそうか。姉ちゃん、教えてくれてありがと」

礼を言って風呂場へ向かうハヤト。
そのハヤトの背中を、ハヅキは少しだけ意地悪な笑みを浮かべて見送る。
ハヅキのそんな笑みなど知らぬハヤトは、鼻歌を歌いながら風呂場へと向かう。

「風呂風呂～っと」

そして、風呂場の扉をノックも無しに開ける。
だが、この時ハヤトはもう少し慎重になるべきだった。
そうすれば、扉の向こうから声がしたことに気付けたし、物音がしていることに気付けただろう。

しかしそれはあくまで仮定の話。
現実のハヤトはそれらに気付かず、そのまま風呂場の扉を開けた。

「「え……」」

「え……？」

そして、目の前の光景に絶句する。
扉を開けたハヤトの視線の先には、ショーツだけを着て髪を乾かしているティアナと、ブラを着けようとしているスバル。
つまり2人とも、ほとんど裸である。
風呂上りの少し上気した肌がとても色っぽい。

「……」

絶句したハヤトの脳が、恐ろしい程の速度で考えを巡らせる。
次に出る言葉によっては、自分がどんな目にあうかを理解しているからこその思考速度。
この場合彼が取るべき正しい行動は、即座に扉を閉め、リビングへと逃げ戻ることだった。

「……えと、2人とも意外と着痩せするのネ？」

だが悲しいかな、動揺した頭では正しい答えを導き出せる筈も無く。
口をついて出て来た言葉は、死亡フラグを確立させるものだった。

「「きゃあああああああっっっっ！？」」

「ないすぱんちっ！？」

絹を裂くような悲鳴と共に、2人の拳がハヤトの顔に突き刺さる。
殴り飛ばされ、錐揉みになって宙を飛びながらハヤトは意識を失った。

「死ね！　死ね！　このスケベ！！」

「馬鹿！　エロエロハヤト！！」

ハヤトが向かっていった風呂場の方から、ティアナとスバルの声と何かを蹴る音が聞こえてくる。
まあ、何かというかハヤトなのだが。

「……妨害はしないと言ったが、意地悪をしないとは言っていないからな」

そんな声と音をリビングで聞きながら、ハヅキは小さく笑うのだった。

ｓｉｄｅ：―　了

何故か昨夜風呂に入ろうとしたあたりからの記憶が無い。
そんでやたらと顔が痛い。
さっき鏡を見たら、頬が殴られた時みたいに腫れていた。
一体俺に何があった？

「ティアナ、お前知らね？」

「知らないわよ！　馬鹿！　スケベ！」

「え、何その濡れ衣」

「うっさい！　死ね！」

ティアナが酷すぎる。

てゅーか俺、結局風呂入ったのか？

気付いたらリビングのソファで寝てた訳なんだが……。

「なあ、スバル。俺に一体何があった？」

「知らないよ！　ハヤトのエッチ！！」

「お前もか。マジで何があったんだよ。俺、全然覚えてねぇんだが……」

「い、言える訳ないじゃんか！　馬鹿！」

ティアナとスバルはさっきからこの調子で、何を聞いても顔を赤くするばかり。

姉ちゃんに聞いてみても、ニヤニヤしながら「私にはわからんな」と言われるだけ。

エリキャロも知らないみたいだし……ホント何なんだ。

色々と釈然としないんだが、そろそろ帰る時間だし、後回しにし

よう。
さすがに教導に遅れる訳にもいかないしな。

「じゃあ姉ちゃん、俺らそろそろ帰るよ」

「ああ。気をつけてな」

「「「「お世話になりました」」」」

「気にするな。私も楽しませてもらったよ」

玄関で見送ってくれる姉ちゃんに挨拶をする。
昨日みたいに引き止められると思ったが、意外にもすんなり見送ってくれた。
何か逆に不気味だな……いや、別に引き止めて欲しいって訳じゃねーけどさ。

「近いうちに、今度は一人で遊びにくるよ」

「それは嬉しいが、暫くは無理なんだ」

「え……なんでさ？」

姉ちゃんの口から出た言葉に首を傾げる。
てっきり「本当か！？　なら明日にでも休みを取るぞ！」とか言うと思ったのに。

「明後日から3，４ヶ月ほど、第２４管理世界への出張任務が入ってしまってな。
暫くはメールのやりとりしか出来ないだろう」

「嘘！？　そんなの聞いてないぞ！？」

「言っていなかったからな」

いや、そんな子供みたいな言葉が聞きたいんじゃなくて。

「何で言ってくれなかったんだよ。そしたら俺だって色々用意したのに……」

「お前が会いに来てくれた、それだけで十分だ」

そう言って姉ちゃんは笑う。
まあ、姉ちゃんならそう言うと思ったけどさ。

「はぁ……姉ちゃんがいいならいいけどよ」

「うむ。ほら、そろそろ出ないと間に合わないぞ」

「ああ。それじゃ、俺らは帰るよ。姉ちゃん、気をつけてな」

「お前もな。それとティアナ、スバル」

「「はい？」」

「ハヤトのこと、頼むぞ」

「「……はい！」」

姉ちゃん、なんで2人に俺のことを頼む？
そんなティアナとスバルも嬉しそうな顔で頷くな。いつの間にそんな仲良くなってんだよ3人とも。

「明日から、ハヤトの行動記録を逐一私に送ってくれ。アドレスはコレだ」

「任せてください、ハヅキさん」

「いや、何やってんのォォォォっっ！？」

ティアナとスバルに、アドレスの書かれた紙を渡そうとした姉ちゃんの手から、その紙をひったくる。
姉ちゃん何頼んでんの！？　そんでティアナ達も何頷いてんの！？
俺のプライベートを尊重しようぜ！！

「何をするハヤト。
お前が時々メールを忘れるから、同僚のティアナとスバルに報告

を頼んだだけだろう？」

「そうだよ。ハヤトがメール忘れなきゃ、ハヅキさんだってこんなこと頼まなかったよ？」

「え！？　何！？　俺が悪いの！？
おかしいだろ！　何で俺のプライベートを逐一報告されなきゃならねーんだ！！」

「それがお姉ちゃんの愛だからだ」

「そんな愛は全力でお断りします！！」

「まあ、もうアドレス交換はしてあるけどね」

「今すぐ消せ！！！！！」

ｓｉｄｅ：－

スカリエッティが根城としている地下に存在するラボ。
そこで、スカリエッティが狂ったように笑っていた。

「くははははは！！　ついに！　ついに完成だ！

私の最高傑作！　“ゆりかご”に劣らぬ究極の兵器が！！」

笑いを響かせるスカリエッティの側では、ウーノがパネルを操作している。

２人の目の前には、調整用のベッドに寝かされた真紅のロングヘアーの女性――ディレト。

その胸の上に浮かぶのは、高純度に圧縮されたレリックの塊。

「ドクター。それでは、ディレトを起動します」

「くはは……ああ、頼むよウーノ」

「はい」

ウーノはスカリエッティの言葉に頷いて、パネルに浮かんでいた『起動実行』という文字をタッチした。

その瞬間、ディレトの胸の上に浮かんでいたレリックが、彼女の胸に溶けるように消えていく。

そして、完全にレリックが消えるのを２人が確認する。

「さあ、目覚めるんだ！　私の最高傑作、ディレトよ！！」

大仰な格好で叫ぶスカリエッティ。

その言葉に応えるように、仰向けに寝ていたディレトの閉じられた瞳が、小さく開いた。

side: 「

第３１話　『お姉ちゃん　３』（後書き）

はい、という訳でハヅキ退場。
どうも、ラモンです。

ハヅキ
「本編中の出番はこれで終わりか。ハヅキだ」

さて、今回のゲストは

“魔法少女リリカルなのは時の支配者”より、

主人公の永久（とわ）　桜君（さくら）です！

桜
「初めまして」

ハヅキ
「うむ。ハヤト程ではないが愛くるしい少年だな」

桜
「ありがとうございます。
　えーと、ハヤトさんは？」

今回から後書きはハヅキの担当になりました。
ハヤトと違って、これ以降本編での出番は無い予定なので。

桜
「そうだったんですか。

ハヤトさんとお話できると思って、楽しみにしていたんですが」

ハヅキ
「私としても、ハヤトがいなくてはやる気が千分の一以下になるのだがな。
まぁ、出番の為なら仕方あるまい」

桜
「なんというメタ発言……」

後書きだからイインダヨー。

ハヅキ
「うむ。それにしても、今回は短かったな」

桜
「そうですね。ちょっと展開が急だった気もしますし」

本当はお風呂のくだりでもうひと悶着あったんだけど、前回でちょっとはっちゃけすぎたからね。
今回は大人しめで纏めてみた。
書きたかったのは、ハヅキが本編から離脱ってことだったし。

桜
「それですよね。なんでハヅキさんは戦線離脱なんですか？
戦力としては最高レベルだと思うんですが」

オリキャラの介入はハヤトだけで十分だからね。
あんまりオリキャラを戦場に出しすぎると、後で収拾つかなくなると思って。

ハヅキ
「うむ。完全オリジナル展開ならともかく、原作沿い再構成ならば仕方あるまい。
　実際、オリキャラを介入させすぎて収拾がつかなくなった小説をいくつも見てきているからな」

それでも面白い作品は一杯あるけどね。
作者の技量では纏めきれると思えなくて……。

桜
「なるほど……確かにハヅキさんが介入したら、一人でナンバーズ全員と戦えそうですし」

ハヅキ
「ハヤトの為ならば、あのエースオブエースだって落としてみせよう」

お姉ちゃんパワーはチートなのです。
桜君もチートだけど、下手したらそれすら凌駕するほどに。

桜
「肉親の情ですか、確かに厄介ですね」

ブラコンですから。

ハヅキ
「それで？　今回で私の出番が終わりなのはわかるが、次回からはどうなるんだ？」

うーん、アニメでいうところの１４、１５話を合わせた感じの内容を２話ぐらい掲載して、それから後はシリアス展開が続く『その日、機動六課』編に突入かなぁ。

桜
「いよいよ中盤の見せ場ですね。ハヤトさんも活躍するんですか？」

それなりに。
でも、一番目立つのは敵役の『ディレト』だよ。

ハヅキ
「何！？　私のハヤトより目立つというのか！！」

まあ、お披露目だからね。
読者の皆様に印象付ける為にも、ある意味一番活躍させるよ。

ハヅキ
「許せん！　今すぐ行って私がボコボコにしてやる！！」

桜
「あ、ハヅキさん！　……あの、行っちゃいましたけど」

大丈夫でしょ。
だってあの人スカっちのアジト知らないもん。

桜
「そういえばそうでした。
　えーと、それじゃあこれで解散ですか？」

だね。ＭＣもいなくなっちゃったし。

それでは桜君、番宣をどうぞー。

桜

「それでは。
僕の出演している作品は『魔法少女リリカルなのは時の支配者』です。

ある時僕は死んだ。理不尽な死に方だった。
そしてリリカルなのはの世界に転生した。
だが死んだことに後悔はない。みんなを守るために生きていこう。

オリジナル主人公である僕、永久　桜の転生最強主人公モノですね。
もしよければ読んでみてください」

さて、それでは次回予告……といきたいんですが、まだ構想が纏まってないので次回予告は無し！
予定としては『もしもＳｔｒｉｋｅｒＳ　その３』を更新する予定です。
本編が先にできたら本編更新を優先しますけど。

桜

「ちゃんと纏めましょうよ……」

文才無くてサーセン。
それでは桜君、今日はゲスト出演ありがとう！
これ、お土産ね。

（・ω・、）　つ【銘菓“ＤＩＯ”】

桜
「なんか、変な仮面被って「俺は人間をやめるぞＪ○Ｊ○ーーっ！」
って言いそうですね」
伏字の意味ねぇー！？
あ、次回ゲストは
リリカルヒーローズ　～金色の閃光と毒の爪～
より、小憎らしく愛らしい敵役、ジョーカーを予定しています。
それではまた、次の話で。
雷花さん、こんな感じでよかったでしょうか？

第３２話　『平穏な日々　１』

嫌な事……ってか、俺的に嬉しくない事ってのは続くものらしい。
どうやら聖王様は俺が嫌いなようだ。

「さて、今日の朝練の前に、ひとつ連絡事項です」

整列した俺達フォワード５人の前には、隊長陣の４人と、フィニーノ陸士。
そして初対面の眼鏡美人のお姉さんと――

「陸士１０８部隊のギンガ＝ナカジマ陸曹が、今日から暫く六課に出向になります」

脳筋巨乳女こと、ギンガが立っていた。
しかも俺の聞き間違いじゃないなら、暫く六課にいるらしい。
……うっげぇぇぇ、テンション下がるわー。

「陸士１０８部隊、ギンガ＝ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします」

「「「「よろしくお願いします」」」」

「……しま～す」

一人テンションを下げている間に皆が挨拶をしていたので、俺もとりあえず挨拶しておく。
まあいい。ギンガのことは後回しだ。
俺は気を取り直して、初対面の眼鏡美人のお姉さんを見る。俺好みの綺麗なお姉さんだ、惜しむらくはおっぱいがやや小さめだということだろうか。
すると、それと同時にハラオウン隊長がお姉さんの紹介をしてくれた。

「もう一人、１０年前から家の隊長陣のデバイスを見てきてくださっている、本局技術部の精密技術官」

「マリエル＝アテンザです。気軽に声をかけてね」

「アテンザ技術官！　デートしてください！」

「お前は黙っていろ」

「シュランゲっ！？」

気軽に声をかけてって言われたから、気軽に声をかけたらシグナム副隊長のレバ剣で簀巻きにされた。
理不尽でござるよ薫殿。

「はい、皆集合～！」

朝練のメニューを終わらせて、訓練スペース中央に集まる。
うーむ、何回やっても集束が上手くいかねーなぁ……才能無いんだろうか。

「それじゃあ折角だし、ギンガも入れたチーム戦、やってみようか」

今日の訓練を思い返して溜息を吐いているところに、高町隊長がそう切り出した。
あー、また“アレ”やるのか。
ギンガは初めてだろうから驚くだろうなぁ。

「フォワードチーム６人対、前線隊長４人チーム！」

「……え？」

案の定、隊長の口からでたメニューにギンガが目を丸くする。

まあ、俺らも最初は驚いたからな。

「いや、あのねギン姉。これ、時々やるの」

「隊長達、かなり本気で潰しにきますので」

「まずは地形や幻術を駆使して逃げ回って」

「どんな手を使っても、決まった攻撃を入れられたら、撃墜になります」

目を丸くして固まっているギンガに、ティアナ達が説明していく。
実際、かなりキツイ訓練だとは思うがな。
ちなみに今のところの戦績は０勝１４敗。
俺はいつも一番最初に落とされることに定評がある。俺が弱いんじゃないよ！？　シグナム副隊長とヴィータ副隊長が２人がかりで来るから、抵抗しても意味無いだけだからね！

「ギンガはスバルと同じく、デバイス攻撃ね。
左ナックルか蹴り、どれかが当たれば撃墜判定」

「……はい！」

「うん。それじゃあ、やってみようか！」

「「「「「はい！」」」」」

「俺、そこの木陰で休んでていいスか？」

「私の剣の錆びになりたいのなら、構わんぞ」

剣を突きつけられた。

いいじゃねースか、どうせ最初に落とされて暇になるんだし。

そう思ったが、それをシグナム副隊長に言う程俺は命知らずでは無かった。

ｓｉｄｅ：－

「いつものことだけど、なのはさんをどう捌くかが鍵ね」

「だな。今回はギンガがいるし、フォーメーション変えていくか？」

「そうねぇ……」

フォワードの６人は、訓練スペースの一角で作戦会議をしている。

とはいえ、実際に作戦を立案しているのはハヤトとティアナの２人だけで、残りの４人は思い思いに身体を解しているというのが現状なのだが。

「ギンガとスバルのツートップにして、エリオをフリーにして俺らのカバーに回すか」

「でも、それだったら3トップの方が攻撃力が増すんじゃない？」

「それだと、また俺が落とされて援護不足になんねぇ？」

「う……」

「……相変わらずこういう時は別人なんだ、ハヤト君は」

普段のおちゃらけた雰囲気とは真逆の真剣な表情でティアナと話し合っているハヤトを見て、ギンガが苦笑する。

「うん。ハヤト、カッコいいよねぇ」

「……え？」

少し熱の篭もった妹の声に、ギンガが驚いて隣を見る。
そこには、少し頬を赤くしてハヤトを見つめているスバル。

「スバル、貴女……」

「え？　何？　ギン姉」

「う、ううん。なんでもない」

まだ恋をした事が無いとはいえ、ギンガも女の子。
他人――まあ妹だが――の色恋沙汰には敏感なのだ。

（まさかあのスバルが、しかもハヤト君になんて……）

ギンガはハヤトとスバルを交互に見て、胸中で少し驚く。
スバルに色恋はまだまだ早いと思っていたのに、ということだろうか。

「いつの間にか、大きくなっちゃったんだ」

「？」

一人呟いて苦笑すれば、スバルが不思議そうな顔で首をかしげる。
そんな妹に「なんでもないよ」と笑いかけた。

「おーい、作戦教えるから全員集合ー」

その時、丁度ハヤトの声が聞こえてくる。
まあ、妹の恋を応援するかどうかは、この模擬戦が終わってから考えよう。どうせ、暫くは一緒にいるんだし。
ギンガはそう結論付けて、ハヤトとティアナの元へと向かうのだった。

side：―　了

「はーい、じゃあ、今日はここまで」

「全員、防護服解除！」

「「「「「「はい……」」」」」」

高町隊長とヴィータ副隊長の言葉に、６人揃って肩で息をしながら答える。

模擬戦の結果は俺達の負け。記念すべき１５敗目だ。

くっそ、今回はギンガもいるし、いけると思ったんだがなぁ。

「ふむ。惜しいところまで行ったな」

「あともうちょっとだった」

撃墜判定を受けて先に待機していたハラオウン隊長とシグナム副隊長がやってくる。

てゆーか、隊長陣は化け物ですか。

俺ら息も絶え絶えなのに、汗一つかいてないとか……。

「あ～、最後のシフトが上手くいってれば、逆転できたのに」

「ぅあ～。くーやーしーいー」

俺の隣で、ティアナとスバルが悔しがっている。
確かに今回はほんと紙一重だったからなぁ……隊長達が本気じゃないとはいえ。

「フォロー足らなかったね。ごめんね～」

「そんな！」

「ギンガさんは全然！」

向こうでは、ギンガとエリキャロがお互いにフォローし合っていた。
さすがはお姉ちゃん属性持ち。もう懐かれたか。

「悔しい気持ちのまま、反省レポートまとめとけよ～」

「中々エグいことを仰る。ヴィータ副隊長は間違いなくドS」

「……ハヤト、おめーは他の奴らの倍のレポートだな」

「ひぎぃ」

余計なことを言ってしまったようだ。
その後平謝りして、何とかレポートは通常の枚数で許してもらえた。
これからは少し自重して生きていこうと思う。まあ、直ぐに忘れるだろうけどネ！

◇◇◇◇◇

「凄いね、いつも朝からこんなにキツイの？」

クールダウンして身体を解していると、ギンガが話しかけてきた。
俺は背伸びしながらそれに答える。

「まあ、隊長戦はさすがに時々だが、訓練自体は毎日こんなモンだぁな。
出動があっても平気な程度には限界ギリギリまで」

「ハヤトはいつも適当にサボったりしてるけどね～」

「あ、馬鹿言うなよスバル！」

余計なことを言ったスバルの口を塞ぐが、時すでに遅し。

「もう、やっぱりサボってるんだ。

前に会った時も言ったでしょ？　ちゃんとしなきゃ駄目だって。
そんなんじゃ、いざって時に困るんだよ？」

案の定、ギンガがお姉さんモード全開でお説教してきた。
だから嫌なんだよギンガは！
お姉ちゃんキャラは、ウチの姉ちゃんだけで十分だ！！

「あーあーあー何にも聞こえませんなぁ」

両手で耳を塞いでお説教をシャットアウト。
すると、ギンガの野郎は俺の手を無理矢理耳から引き剥がして説教を続行しようとする。

「きーきーなーさーいー！」

「きーきーまーせーんー！」

手を引き剥がそうとするギンガと、是が非でも耳を塞ぎたい俺。
クールダウンもそこそこに、お互いに全力の１７歳２人。
周りで身体を解しているティアナ達が、苦笑半分、呆れ半分でこっちを見ている。

「何でそうやって私の話を聞こうとしないの！？」

「お前の説教が長いからだよ！！」

「ハヤト君がお説教されるようなことするからでしょ！？」

「誰でも少しくらいサボるっちゅーねん！　お前はイチイチ真面目すぎんだよ！
そんなだから彼氏の1人もできねーんだ！　この脳筋巨乳が！！」

「なっ！？　なんてこと言うの！！」

「脳筋に脳筋言うて何が悪いんじゃ！！」

「……もう怒った！！
今日という今日は許さないんだから！　ブリッツキャリバー！」

「そりゃこっちの台詞だ脳筋巨乳！　ブレイブハート！！」

お互いにデバイスを起動して構える俺とギンガ。
いいだろう、今日こそ脳筋ギンガに俺様の有能さを教えてやらぁ！！

「ちょ、ちょっとハヤト！　ギンガさんも何してるんですか！？」

「ギン姉！　駄目だよ！！」

「止めないでティアナ、スバル！
ハヤト君のことを真人間に戻してあげなきゃいけないの！　それが私の使命なの！」

「何の使命ですかギンガさん！　落ち着いてください！！」

暴れるギンガを、スバルとティアナが2人がかりで押さえる。
だが、そこは脳筋巨乳。2人を引き摺ってこっちにジワジワ向かってきてやがる。怪物め！

「に、兄さん！　駄目だよ！　フェイトさん達もいるのに」

「お兄ちゃん駄目ですよ！」

「えぇい止めるなエリオ、キャロ！
もうあの脳筋の説教は聞き飽きてんだよ！　2度と説教できねぇ身体にしてやる！」

「な、何する気なの兄さん！？」

「ぶっ潰す！」

「「だ、駄目だ（です）ってば！！」」

俺にはエリオとキャロがしがみついてくる。
何故止める！？　折角あの脳筋をぶっ潰すチャンスだっていうのに！！

「潰しちゃ駄目なんだよ兄さん！」

「ギンガさんは仲間ですよ！？」

「確かに仲間だが、それ以前に奴とは初めて会った時からなんやかんやで因縁の宿敵だ！！」

「な、なんやかんやって何ですかぁっ！」

「なんやかんやは……なんやかんやだ！！」

「「言い切った！？」」

くっ、中々エリオとキャロが手を離してくれない。
ここは最終奥義！

「あーっ！　エリオがギンガの巨乳に見惚れてるーっ！」

「エ、エリオ君っ！？」

「うえぇっ！？　ち、違うよっ！　そんなことしてないよ！？」

狙い通り、キャロの注意がエリオに向き、エリオはわたわたと両手を動かした。
コレで俺を拘束するものはいない！

「覚悟しろ脳筋巨乳！」

「ま、また脳筋って言った！　本気で怒ったんだからぁっ！！」

「「きゃああっ！？」」

ギンガが押さえてるスバルとティアナを弾き飛ばす。
なんつー力だ！　それでこそ我が宿敵よ！！
俺はブレイブハートを構え、再びギンガの真正面に立つ。

「ふん。いつかお前とは決着をつけなくちゃいけねーと常々思ってたんだ」

「私もだよ。今日こそ真人間に戻してあげるんだから」

「よく吼えたギンガァッ！」

「ハヤト君、覚悟ぉぉっ！！」

「何してんだ」

「うるさいぞ馬鹿者め」

「「あいたっ！？」」

いよいよ殺し合いを始めようとしたところで、俺とギンガの頭に拳骨が落ちた。
だ、誰だ！？　俺の心の平穏を守る戦いを邪魔する輩は！？

「……何をしているんだお前達は」

「シグナム副隊長！？」

俺を殴った相手は、呆れ顔のシグナム副隊長。
何故ここに。あっちで隊長達と話をしてたんじゃ？

「あれだけ騒いでいて気付かない方がおかしいだろう」

「あー、確かに」

言われて隊長達の方を見れば、全員こっちを苦笑して見ている。
うわ、恥ずかし。
ヴィータ副隊長はギンガの横で説教をしていた。脳筋ざまぁ。

「ロックウェルもギンガも元気が有り余っているようだな。私とヴィータが特別に追加訓練をしてやる。ついてこい」

「「えぇぇっ！？」」

「そんだけ暴れる元気があるんだ。今日の訓練はまだ生温かったんだろ？」

「「そんなことないです！！」」

「問答無用だ」

「「いやあああああっっ！！」」

シグナム副隊長とヴィータ副隊長に引き摺られ、訓練スペースの奥へと連れて行かれる俺とギンガ。

その後、再び解放されたのは1時間後だった。

正直死ぬかと思った。暫くギンガと喧嘩はしないでおこう。

「うぅ……ハヤト君のせいだよ」

「お前のせいだろが脳筋」

「まだ言うの！？」

「言うわボケ！！」

「「いい加減にしろ！」」

……やっぱ無理かも。

ｓｉｄｅ：ギンガ＝ナカジマ

「ハヤト、だいじょぶ～？」

「大丈夫に見えるかボケー」

「見えないけどさぁ」

「自業自得じゃないの。何を偉そうに」

「うっせー……あ、駄目だ死ぬ」

ボロボロになったハヤト君の側に、スバルとティアナが心配そうな顔で立っている。

スバルは多分ハヤト君のこと好きなんだと思うけど……もしかして、ティアナもだったり？

「あ〝ー……ハラオウン隊長が膝枕ならぬ胸枕してくれたら復活できるかも」

「「……スケベ」」

「うご！？　踏むな！　踏むな馬鹿共！！」

「……うーん」

わかんないなぁ。

よく考えたら、私もまだ恋人って出来たことないし……。

スバルは妹だから何となくわかっちゃったけど、ティアナまではわからないや。

「まあ、ハヤト君がそんなにモテる訳もないか」

だってハヤト君だもんね。
スバルはハヤト君のどこが好きになったんだろ？
姉妹だけど全然わかんない。趣味悪いなぁ……。

「あ、ティアナ白、スバルは水色」

「「っ！？　ば、馬鹿ーーーっっ！！」」

「俺のせいじゃねぇだろっ！」

私は、またセクハラ発言をしてスバルとティアナに追い掛け回されているハヤト君を見て溜息を吐いた。
お父さんに報告するのは……まだまだ先でいいか。

ｓｉｄｅ：ギンガ＝ナカジマ　了

第３２話　『平穏な日々　１』（後書き）

ギンガ合流完了。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「最近ボコボコになってばかりの気がする主人公です」

さぁて、今回のゲストは

リリカルヒーローズ　～金色の閃光と毒の爪～より、

悪役だけどちょっとヌケてるニクい奴！
敵なのに何故か人気がある、ジョーカーです！

ジョーカー
「のほほほほ♪　お邪魔しますよ～」

ハヤト
「うおっ！？　でけぇっ！？」

何故最初から巨大化してらっしゃる！？

ジョーカー
「こちらの方が面白いでしょう？」

ハヤト
「面白くねぇ！　ちょっ、危なっ！？
踏む！　俺のこと踏むから小さくなって！！」

ジョーカー
「えぇ～？　仕方ありませんネ～」（縮小）

ふぅ、やっと普通の大きさになった。
困りますよジョーカーさん。せめて事前に俺には言ってもらわないと。

ジョーカー
「これは失礼。次はそうさせて貰いますよ～」

ハヤト
「てかさ、何で主人公のジャンガを差し置いてジョーカー？」

ジョーカー
「ジャンガちゃんは記憶喪失ですしねぇ。
そ・れ・に♪　私の方が人気がありますから♪」

ハヤト
「そうかぁ？　普通にムカつくって感想が多かったと思うんだが……」

俺はジョーカー好きだぞ。
初代しか知らないけど、初代ジョーカーは最高の萌えキャラだったもん。

ジョーカー
「のほほ♪　わかる人にはわかるんですネー♪」

ハヤト

「はぁ……まあいいや。何かもう疲れたし」

おや？　なんだか今日のハヤトは歯ごたえがないな。
どうした？

ハヤト
「ギンガが来たせいで疲れてんだよ。
お姉ちゃんキャラはマジで姉ちゃんだけでいいっての」

お前、何でギンガ苦手なの？
巨乳だし、結構面倒見もいいしで最高じゃん？

ジョーカー
「そうですよネェ？　中々魅力的な女性だと思うのですが？」

ハヤト
「それ以上に糞真面目で疲れるんだよ。
ちょっとネクタイするの忘れたぐらいであーだこーだと……」

あー、お節介すぎる世話女房タイプか。

ジョーカー
「確かにそれは困りますネ。余り口出しをされるのは私も好きではありませんし」

ハヤト
「ホントさ、勘弁してほしいよ」

はいはいどんまい。

ジョーカー
「しかし、ギンガさんはハヤト君相手だと、随分と子供っぽくなるんですネ～」

同い年って設定を生かしたくて、子供っぽさ5割増で書いてみた。
ギンガファンの人たちはすいません。
でも、こういうギンガもいいと思いませんか？

ハヤト
「必死だな」

ジョーカー
「必死ですネェ」

う、うるさい！
いんだよ！　今回は「ハヤトの喧嘩友達のギンガ」ってのがテーマなんだから！

ハヤト
「あっそ。んで？　次回もギンガなのか？」

いや、次回はヴィヴィオメインかな。
そんで日常編が終わって『その日、機動六課』編に突入だ。

ジョーカー
「いよいよ中盤のクライマックスですか。ワクワクしますネ♪」

ハヤト
「俺はいい加減活躍してーよ」

するする。
その日～編ではめっちゃ活躍する。

ハヤト
「マジか！？　超嬉しいんですけど！」

ジョーカー
「おんや～？　ハヤト君、本当に活躍できると思ってるんですか～？」

ハヤト
「お前はホンッと嫌な奴だな！？」

ジョーカー
「それが私の心情ですから♪」

ハヤト
「きーーーーーっ！」

さて、そろそろお時間です。
そいではジョーカーさん、番宣どうぞ。

ジョーカー
「おや、もうそんな時間ですか？
それでは。私が出演している舞台の題目は『リリカルヒーローズ～金色の閃光と毒の爪～』

死んだはずの外道が一人。だが、別世界へと飛ばされ、彼は生き延びた。
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳとクロノアヒーローズ

のクロスオーバー小説です。

今のところはそうでもありませんが、後半はちょ～っとカゲキな表現が出る予定ですよ～。

刺激に弱いお子様は、見ない方が良いかもしれませんネ♪」

ハヤト

「番宣で「見ない方がいい」とか言うなよ！

読者の皆様！　面白いからちゃんと見ようぜ！」

はぃ。

それでは今回はここまで！

ジョーカーさん、これはお土産ですよ。

（´・ω・`）　つ【銘菓“くろのあ”】

ジョーカー

「のああっ!?　そ、それはやめてください！

なんだかとてもムカムカします！」

え～？　あげるから持ってかえってくださいよ～。

ジョーカー

「か、帰らせて貰います！　とあーーーっ!!」

あ、帰っちゃった。

うーん、悪戯が過ぎたか？

さて、次回ゲストは『なのはＳＳ・ｆｒｅｅｄｏｍ』より、阿部隆浩、阿部晶彦の阿部兄弟を予定してます！

それではまた、次の話で。

プワゾンクロウさん、ジョーカーこんな感じでよかったでしょうか？
何か訂正などありましたら、ご連絡ください。

第３３話　『平穏な日々　２』

「くあー、疲れた。腰いてぇ～」

クールダウンで身体を解しながら腰を摩る。
最近やたらと腰痛が酷いんだよねぇ。間接も時々痛くなるし。

「爺臭いこと言ってんじゃないわよ」

「いやいや、１７歳になると普通に歳だって」

「……ハヤト君。それ、同い年の私に対する嫌味？」

ギンガが被害妄想で文句をつけてきた。
そういう風に思うのは、自分でそう思ってるからですー。
俺のせいにしないでくださーい。

「……い、今だけは我慢してあげる。私は大人だからね」

「ハイハイソーデスネー。ギンガサンハ大人デスネー」

「……っ！　……っ！！」

「ギ、ギン姉落ち着いて！」

殴りかかろうとするギンガを必死に押さえるスバル。
俺はそんな2人を無視してクールダウンを続ける。

「ハヤトおにいちゃ～ん！」

「……ん？」

そうしていると、訓練スペースの向こうからヴィヴィオが走ってきた。
あ、あれは既にタックルする気マンマンですね。
察した俺は腰を落として受け止める準備を整える。そう何回もあのタックルを直撃されたらたまんねーからな。

「よっしゃ来いヴィヴィオ！　完璧に受け止めてやらぁっ！」

「わ～い」

俺の言葉を聞いたヴィヴィオはそのまま加速、金色の弾丸となって俺に飛び込んできた。
それを受け止め、勢いを殺す為に後方へジャンプ。
くっ、勢いは殆ど殺したってのに、骨がミシミシ言ってやがる！
恐るべしヴィヴィオ！！

「ぐぅぅぅっっ！」

気を失いそうな衝撃に歯を食いしばって耐え、地面を削りながら何とか停止する。

「ヴィ、ヴィヴィオ……今日も元気だな」

「うん！」

脂汗を流しながら笑いかける。

こいつ、回を重ねるごとにどんどんタックルの威力が増してやがる。

そのうちタックルでガジェット倒せるようになるんじゃねぇか？

「ヴィヴィオ～」

「なのはママ！」

俺にタックルをかまして満足したのか、高町隊長が呼ぶと大喜びして俺から離れて駆けていくヴィヴィオ。

そして、俺にしたのとは全然違うとても軽く抱き着いた。

擬音で表すなら、俺は「ドゴッ」で高町隊長は「ぽすっ」って感じだな。

……なんだろう、そこはかとなく差別を感じる。

「あ～ん。ん～♪」

「ちゃんと噛んで食えよ」

「うん」

「エリオとキャロもだぞ」

「「はーい」」

隊舎に戻ってシャワーを浴び、そのまま朝飯を食う。
何故だか知らんが、飯を食べる時に子供連中は俺と同じテーブルに座りたがる。
お陰で毎回毎回子供の面倒を見ながら飯を食わなくてはならない俺。気分はすっかり引率の保護者だ。

「ハヤト君、いいお兄さんだね」

「……うっせぇ」

「誉めたのに」

「黙れ。黙らないとお前の恥ずかしい秘密を一つ残らずネットに流す」

ニヤニヤしながら話しかけてきた、後ろのテーブルに座っているギンガを黙らせる。

何でそんな秘密を知ってるかって？　宿敵の弱点を調べておくのは戦いの基本です。

「ったく……ほらヴィヴィオ、ケチャップついてる」

「あ、ごめんなさ～い」

「ほれこっち向け。仕方ねぇなもう……」

「む～……」

ヴィヴィオの顎を持って、口周りについていたケチャップをナプキンで拭いてやる。

エリオやキャロよりも小さいだけあって、ヴィヴィオは毎回食べ物をこぼしたりするんだよなぁ。

世話をするのも大変だ。

「お、お兄ちゃん！　私もこぼしちゃいました！」

「……いや、そんな一生懸命口を突き出されても。キャロ、もう10歳だろ？　自分でやりなさい」

「うぅ……お兄ちゃん、意地悪です」

「兄さん、僕も……」

「野郎は知らん」

「えぇ～」

そして、これが俺の頭を悩ませている原因の一つ。

ヴィヴィオに対抗してんのか知らないが、飯を食うたびにわざと口の周りに何かつけたりするのはやめて欲しい。

あっちもこっちもやってたら、俺が飯を食えないだろうが。

「む、ヴィヴィオにキャロ、ピーマンとニンジンを残すんじゃねぇ」

「「！」」

俺に言われて、2人がビクッと身体を震わせた。

2人の前に置かれた皿には、綺麗にピーマンとニンジンだけが避けてある。

これも毎度のことで、何度も食えって言ってるんだが、一向に2人は進んで食べるようにならない。

「う～、苦いのきら～い」

「私も、ニンジンはちょっと……」

「食べないなら、アイアンクローを使わざるを得ない」

「「たっ、食べます！」」

「よろしい」

右手をアイアンクローの形にして呟くと、慌ててピーマンとニンジンを食べ始める2人。

ふふふ、俺様のアイアンクローはピーマンやニンジンよりも怖いと見える。

結局こうやって食べることになるんだから、いい加減自主的に食べて欲しいもんです。

俺は嫌そうな顔でピーマンとニンジンを食べている2人を見て、うんうんと頷く。

「食べましたぁ……」

「うぇ～……にがい～」

「ん。よく食べたな、偉いぞ。ほれ口直し」

ちゃんと食べ終わったヴィヴィオとキャロに、ポケットから出し

た飴（はちみつ味）を渡す。
2人はそれを受け取って、嬉しそうに口に含んで笑った。
子供ってのは現金なもんですね。

◇◇◇◇◇

朝食が終わると、スバルとギンガは定期健診でアテンザ技術官と一緒に出かけていった。
隊長達はそれぞれ仕事に、エリオとキャロは自主練をしに訓練スペースへ。
俺は、訓練も仕事も無いし、さっさと部屋で眠ろうとしたのだが……。

「どうしてこうなった」

「何よ、たまにはあたしの自主練に付き合ってくれてもいいじゃない」

俺の目の前には、訓練着姿でデバイスを構えているティアナ。
部屋に向かっている途中で「ちょっと付き合いなさい」と拉致（誤字にあらず）されたのだ。

「部屋でのんびりゲームやったり寝たりしたいんだが」

「アンタ集束苦手でしょ？　あたしが少し教えてあげるわよ」

「お前もそんな得意じゃねーだろ！　何その上から目線！？」

「アンタよりはマシだもの」

「そうですね」

くっ、言い返せない自分がとても悔しい。

まあいいけどさ。エリオ達も自主練しに行っちまって、１人でゲームもどうかと思ってたし。

ヴィヴィオ？　あいつの相手を俺１人でやるのはキツイ。体力的な意味で。

「ほら、さっさと準備しなさい。時間は無限じゃないのよ？」

「へいへい」

適当に返事をしながらブレイブハートを起動。

ティアナはアレだな、きっと教官になったらシグナム副隊長ばりの鬼教官になると思うぞ。

少なくとも俺は教わりたくないです。

「ぐだぐだ言ってないで、さっさとする！」

マジ怖い。

side：―

「うぉぉ、つっかれたぁ～」

「お疲れ」

自主練のメニューを終え、そんな声を上げて木陰に腰を降ろしたハヤトにタオルを渡しながら、ティアナがその隣に座る。

その時少しだけハヤトとティアナの肩が触れ、ティアナが頬を染めた。

だが、ハヤトはそれに気付くこともなく、タオルで汗を拭きながら待機状態に戻したブレイブハートに尋ねる。

「ブレイブハート、今何時よ？」

≪　もうすぐ12時です。訓練時間は3時間32分でした　≫

「うおぉ、そんなに訓練してたのか。マジ偉いぞ俺、さすが俺」

「何言ってんの、コレくらい普通よ」

満足そうに頷くハヤトの肩を、ティアナが軽く小突く。

「あ～……すっげ眠い」

「何よ、そんなに疲れたの？」

「いやー、昨日ちっと積みゲー崩してたら寝るの遅くなっちまってよ。

どうせ今日は朝練以外ないと思ってたからさぁ……ふあぁ」

言いながら大きな欠伸をするハヤト。

ティアナはそんなハヤトに「ああ、アンタはそういう奴だったわね」と溜息を吐く。

何度言っても、このゲームオタクのゲーム＞その他という価値観は変わらないのだから、呆れるしかない。

「んー……腹も減ってるけど、眠気の方が酷いなぁ……」

どうやら相当眠いらしく、そうやって喋っている間にもハヤトの目が段々閉じていく。

それを見たティアナが眉を顰めて声を上げる。

「ちょっと、寝るなら部屋戻ってからにしてよ？　ここで寝たら放置していくからね」

「わーってるよ。でもアレだ、眠気にはエースオブエースも勝てないって昔の偉い人も言ってたし……」

「誰が言ったのよ……」

訳のわからないことを言いながら、木に身体を預けて本格的に寝ようとするハヤト。

それを起こそうとして、ふとティアナの脳裏にある考えが閃いた。

「ティアナ悪い、俺寝るわ……ブレイブハート、3時ぐらいになったら起こしてくれ……」

《　風邪をひいてしまいます。部屋にお戻りください　》

「面倒……つーか、無理……も、眠気が限界……」

ハヤトはすでに9割方夢の中にいるようで、首がこくりこくりと船をこいでいる。

その様子を見て、ティアナは意を決したように一度頷いてから、座っている自分の腿を軽く叩いた。

「ハヤト……その、使う？」

「……んー、使うー」

そうすると、ハヤトは殆ど瞑った目でティアナの膝を見てから、何の抵抗もなくそこに頭を乗せる。

ティアナはそれを見て一度驚いた顔をしてから、嬉しそうに目を細め、ハヤトの金色の髪を愛おしそうに梳く。
ハヤトは少しだけくすぐったそうに呻いたが、すぐに寝息を立て始めて完全な眠りへ落ちていった。

「ね、ブレイブハート。ハヤトの事はあたしが起こすから、休んでていいわよ？」

《……それは構いませんが、ティアナさんはよろしいのですか？　マスターハヤトは3時に起こせと仰いましたし、身体を冷やしてしまいますのでは？》

「だ、大丈夫だから。ね？」

《ティアナさんが問題ないのであれば、私が言うことはありません》

「ありがと、ブレイブハート」

《いえ。それでは暫くスリープモードに移行します。何かあればお申し付け下さい》

「うん。わかった」

他意はないだろうが、妙に気が利いているデバイスに苦笑する。
そしてティアナは周囲に人の気配が無いのを確認してから、幸せそうに頬を染めてハヤトの髪を撫で続けるのだった。

余談ではあるが、この後2人と模擬戦をしようと呼びに来たエターナルロリータの称号を持つとある鉄槌の騎士と、ニート侍の異名を持つとある烈火の将がこの光景を遠目に見て、気まずそうに顔を赤くして去って行ったり、遠距離からの覗きに定評のある、とあるヘリパイロットが2人を遠距離で見て血涙を流したりしていたらしい。

ｓｉｄｅ：―　了

○おまけ　～とある日のヴィヴィオとハヤトと愉快な仲間達～

ｓｉｄｅ：―

「フェイトママ！」

「んぐっ！？　な、何ヴィヴィオ？」

食事中にいきなり大声で声をかけられたフェイトが、食べていたパスタを慌てて飲み込んでそれに応えた。
フェイトと一緒に食事をしていたなのはも、驚いた顔をしてヴィヴィオを見ている。
そんな2人の母親を怒りに燃える目で見ながら、ヴィヴィオが口

を開く。

「フェイトママは“しつむかん”なんだよね？」

「え？　うん、そうだけど……」

「しつむかんって、悪い人を見つけたりするんだよね？」

「う、うん」

「じゃあ、ヴィヴィオのプリンを食べた犯人を見つけて欲しいの！」

『プリン？』

その言葉に、そこにいた全員が口を揃える。

ヴィヴィオはそれに頷いてから、事情を説明し始めた。

曰く、食後の楽しみに取っておいたプリンが、ちょっと目を離した隙に無くなっていたらしい。

「ハヤトじゃないの？」

話を聞き終わったフェイトが、さも当たり前という顔でそう告げた。

「はやっ！？」

「フェイトちゃん、さすがにハヤト君でもそれは無いよ～」

「そうですよフェイトさん、だってハヤトはヴィヴィオのお兄ちゃんなんですから」

「そ、それもそうだよね。ごめんハヤト……」

日頃の行いから、つい犯人扱いしてしまったフェイトが苦笑しながらハヤトに謝罪する。

だが、ハヤトはそんなフェイトの台詞に対して、目を泳がせ、冷や汗を大量に流しながら推理小説の犯人が並べ立てるような台詞で答えた。

「ははは、ハラオウン隊長は想像力が豊かな方ですね。

でもそれは仮定にすぎません、大体証拠はあるんですか？」

（……あ、コイツ犯人だ）

そんなハヤトを見て、その場に居た全員の心がひとつになったという。

ちなみにその後、ハヤトはヴィヴィオから暫く無視され続けたらしい。

どっとはらい。

ｓｉｄｅ：－　了

side：―

「がはぁっ！！」

叫び声と共に、スカリエッテのラボに併設された訓練用施設の壁にトーレが叩きつけられる。
円形に凹んだ壁が、その衝撃の凄まじさを物語っていた。

「ああ、ごめんあそばせトーレお姉様。
まだ加減が上手く出来ませんの。お怪我はございませんこと？」

「……ああ、問題ない」

よろよろと立ち上がるトーレを心配そうな顔で見て、赤いロングヘアーの少女が気遣わしげに声をかける。
やっとの事で立ち上がり、肩で激しく息をするトーレとは対照的

に、少女は息一つ乱さず、汗一つ掻いていない。
施設を見渡せば、彼女の周りにはチンクとウェンディが座り込み、ぜえぜえと息を乱していた。

「よかったですわ。いよいよ催しが近付いて参りましたのに、お姉様が参加できなくては興醒めですものね」

「ああ、そうだな」

「しっかしディレトは本当に強いッスねぇ。私ら前衛用のメンバー全員相手に圧勝して、しかも汗も掻いてないんスから」

「それはドクターが私(わたくし)をそのように造ったのですから当然ですわよ、ウェンディお姉様。何せ私(わたくし)は、1人で管理局を制圧できるようにと造られた個体ですもの」

ウェンディの言葉に、赤い髪を?き上げて誇らしげに答えるディレト。

「だが、気に掛かるのは私達の配置だな。何故ドクターは、ディレトにあんな少年の相手をさせたいのか…」

「ああ、確かハヤト＝ロックウェルとかいう名前の」

「そうだ。ディレトのスペックを考えれば、あんな雑魚ではなく、エースオブエースやフェイトお嬢様、最低でも夜天の書のプログラム達に当てるべきだと思うのだが」

「“敵の戦意を効果的に削ぐ為の布石”とか言ってたッスけど」

スカリエッティの発言の意図が掴めず、ウェンディとトーレ、チンクが首を捻る。

「私（わたくし）は構いませんわ。ドクターの仰る事に、間違いは無いでしょうから」

「む、確かにそうだな。私達は、ただ命令されたことを実行すればいい」

「そうッスね。折角武装も完成したし、あたしも頑張るッスよ～！」

来るべき日に思いを馳せ、トーレ、チンク、ウェンディはそれぞれに決意を固めるのだった。

そんな姉達を見つめながら、ディレトは一人呟く。

「早く手加減を覚えなくてはいけませんわね。
殺すだけなら簡単ですけれど、ドクターは“決して殺さず、1週間程度で再び戦える程度の怪我を”と仰っていましたし。
今のままでは、ついつい加減を誤って殺してしまうかもしれませんものね」

言葉と共に浮かんだ笑みは、まるでそうなる事を楽しみにしているかのような笑みだった。

ｓｉｄｅ：―　了

第３３話　『平穏な日々　２』（後書き）

あ……ありのまま、今起こったことを話すぜ！
『俺はヴィヴィオがメインになる話を書こうと思ったら、いつの間にかティアナとスカ陣営の話も書いていた』
な……何を言ってるのかわからねーと（以下略

どうも、ラモンです。

ハヤト
「前置きなげーよ！　どうも、主人公です」

いやー、不思議なことってあるもんですねぇ。
さて、それでは今回のゲストを――

隆浩
「超級！」

晶彦
「覇王！」

隆浩＆晶彦
「「電・影・だぁぁぁぁぁぁんっっ！！」」

ハヤト
「うわらごぼべぇぇぇっ！？」

隆浩
「ついでに喰らえ！　おいらの持ってきた質量兵器全弾発射ぁぁぁ

ぁっっ！！」

晶彦
「ハドロン砲、ファイヤァァァァッッ！！」

ハヤト
「ガガーリンッ！！」

……えー。
と言うわけで『なのはＳＳ・ｆｒｅｅｄｏｍ』より、主人公の阿部隆浩さんと、その弟の阿部明彦君です。

隆浩
「いやーすっきりした！
ども！　おいらが阿部隆浩だ！」

晶彦
「阿部晶彦で～す」

いやね、うん。ゲストに来てくれたことは素直に嬉しいんですが、いきなり何故攻撃したの？

隆浩
「え？　今回無駄に糖分撒き散らしやがった制裁？」

晶彦
「嫉妬委員会の人に頼まれてたんだよねぇ」

隆浩
「そうそう。決しておいら達の私怨じゃないよ？」

オーケー把握。
イチャついてたのが許せなかったからということですね。

晶彦
「そういえば、ついにディレトが台詞喋ったね」

隆浩
「そうだなぁ。お嬢様言葉とか意外だったわ」

晶彦
「髪型も縦ロールじゃ無いっぽいしね」

え？　作者の俺は完全に無視？
ねえ無視なの？

隆浩
「お嬢様言葉なのに縦ロールじゃないとか、邪道すぎね？」

あ、うん。そうですね、髪型は一考しておきます。
ってそうじゃなくて！　俺のこと無視しないで！　作者ですから！

晶彦
「それとヴィヴィオのプリン食べるとか、ハヤトさんは兄貴分の風上にも置けないね」

隆浩
「全くだ。おいらの見事な兄貴っぷりを見習ってほしいぜ」

晶彦
「だよね～」

くっ！　このままでは俺が圧倒的に不利！
こうなったあの人を呼ぶしか！

ハヅキさん！　ハヅキさ～～～～ん！！

ハヅキ
「呼んだか？」

あ、ハヅキさん！　あの2人がハヤトのこと消し炭にしてました！

ハヅキ
「何いぃっっ！？」

隆浩
「いえ、やったのはそこの作者です」

晶彦
「僕達見てました」

ハヅキ
「作者ぁ！　貴様、私のハヤトを傷つけただけではなく、その罪を他人に擦り付けるとは！
　貴様の罪を数えろぉぉぉっっ！！」

えぇぇぇぇっ！？
何でそんな簡単に信じちゃうの！？

ハヅキ
「覚悟しろ！」

逃げさせてもらいます！

ハヅキ
「待てぇぇぇっっ！！！」

隆浩
「行っちまったな」

晶彦
「行っちゃったね」

隆浩
「どうするよ？　おいら達しか居なくなっちまったけど」

晶彦
「このコーナー乗っ取る？」

シャ○
「そうはさせません！」

隆浩
「だ、誰だ！？」

シャ○

「ある時はフォークを片手に力ちゃんに結婚を迫るお姉さん！
ある時はバルキリー〇カートを使って内臓をぶちまけるお姉さん！
しかしてその実態は！
必殺料理で相手をコロリ！　最強料理お姉さん！　シャ〇です！」

晶彦
「あ、兄ちゃん。作者さんのカンペあったよ。
“帰る時は番宣と次回ゲストの紹介をしてから、お土産を持って行ってくださいね”だって」

隆浩
「ん？　そっか。それじゃあ番宣しとくかな。
おいらと晶彦が出ている作品は“なのはＳＳ・ｆｒｅｅｄｏｍ”
ＪＳ事件が終わって間もなく二人の兄弟が派遣された。
リリカルなのはＳｔＳの再構成ものだな。
時間があれば読んでみてくれ、ってゆーか嫁！　じゃなくて読め！」

晶彦
「それと、次回ゲストは
“魔法少女リリカルなのは　ＯＧ－ＡＳＴＲＡＹｓ”から
ロウ＝ギュール
アヅマ＝コウタ
８（ハチ）
ロアの４人……人？　まあいっか、４人を予定しています！」

シャ〇

「あ、あれ!?　こんなに頑張ったのに無視ですか!?
リアクションしてくださいよぅ!!」

隆浩
「んー、お土産ってコレか?
何々……【銘菓“らんぺるーじ”】?　絶対遵守の力使えるようになりそうだな」

晶彦
「それじゃ、お土産も貰ったし帰ろうか」

隆浩
「だな。そのうち時間が出来たらまた来ようぜ」

晶彦
「そうだねぇ」

シャ○
「無視しないくださいったらぁぁぁぁっっ!!!」

※補足
今回で日常編は終わりです。
次回からは『その日、機動六課』編が始まる予定ですよ。

ＴＯＵＤＡさん、こんな感じでよかったでしょうか？
何かありましたらメッセージなり感想なりで言ってください。適時修正しますので。

第３４話　『予兆』

９月１１日、ＰＭ１９：１４。
機動六課隊舎ロビーに、機動六課の前線メンバーが集められた。

「という訳で、明日はいよいよ公開意見陳述会や」

整列した俺達の前に立つ八神部隊長がそう切り出す。

「明日１４時からの開会に備えて、現場の警備はもう始まってる。
なのは隊長とヴィータ副隊長、リイン曹長とフォワード５名はこれから出発、ナイトシフトで警備開始」

「みんな、ちゃんと仮眠とった？」

「「「「「はい！」」」」」

まあ、仮眠って言っても結構ガッツリ寝たけどね。ティアナとスバルに叩き起こされるぐらいに。
お陰で今は絶好調。徹夜でゲームだって出来るぜ！

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝に集合入りする。
それまでの間、よろしくな」

「「「「はい！」」」」

「……あれ、そういえばギンガは？」

今更だが、並んでいる俺達のところにギンガが居ないことに気付いて部隊長に聞いてみる。

あいつ、一応フォワード面子に入ってたと思うんだけど……クビか！　クビなのか！！　ざまぁ。

「ギンガは一足先に現場に行ってもらってるよ。向こうで合流やな」

「……ちっ。そうですか」

「何で舌打ちやねん。まあええわ。ほな、皆よろしく頼むな」

「「「「はい！」」」」

部隊長に敬礼し、俺達は現場に向かうヘリに乗り込むため、屋上のヘリポートへと向かった。

公開意見陳述会ねぇ……。

何事もなく終わって欲しいな。いやホント。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第３４話　『予兆』

屋上に着くと、ヘリの側でヴィヴィオとトライトンさんが居て、ヴィヴィオの側に高町隊長が腰を降ろしていた。
どうしたんだ？　ヴィヴィオはもう寝てる時間だと思ったんだけど……。

「トライトンさん、何かありました？」

「ああ、ハヤト君」

寮母のアイナ＝トライトンさんにこっそり聞けば、トライトンさんが困ったように笑って答えてくれた。

「ヴィヴィオがね、ママのお見送りをするんだって聞かなくて」

「ああ」

その説明を聞いて納得する。
ヴィヴィオが来てから、隊長は夜勤出動したことなかったもんなぁ。不安になるのも仕方ないか。

「ヴィヴィオのこと、お願いしますね。トライトンさん」

「ええ。ハヤト君達も気をつけてね」

「はい」

小さな声でトライトンさんに告げて、俺は高町隊長とヴィヴィオに視線を戻す。

隊長はヴィヴィオの頬に手を当ててあやしている。こうやって見ると、もう完全に親子だよなぁ。隊長も母親役が板についてきた感じがするし。

「なのはママ、今日は外でお泊りだけど、明日の夜にはちゃんと帰ってくるから」

「……ぜったい？」

「うん、絶対に絶対。いい子にしてたら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作ってあげるからね」

「……うん」

「ママと約束、ね？」

「うんっ」

小指を絡めながら、そう言葉を交わす隊長とヴィヴィオ。

実の親子のようにほんわかとした雰囲気の2人を見て、屋上にい

た皆が笑う。出動前に、丁度いい感じで緊張が解れたな。
ヴィヴィオ、狙ったわけじゃないだろうけど偉いぞ。

俺はトライトンさんの隣で、ヴィヴィオをこっそり心の中で賞賛する。

その後、高町隊長とヴィータ副隊長、そしてリイン曹長と俺達フォワード5人はヘリに乗り込んで地上本部へと向かった。

◇◇◇◇◇

「それにしても、ヴィヴィオ、本当に懐いちゃってますね～」

「全く」

地上本部へ向かうヘリの中で、スバルとティアナが口を開いた。
ちなみに俺は何故かヴィータ副隊長の隣。ま、別にいんだけどさ。
それは置いといて、スバルとティアナの言葉に高町隊長は少し戸惑った顔をする。

「そうだね。結構、厳しく接してるつもりなんだけどなぁ……」

「きっとわかるんですよ。なのはさんが優しい、って」

「そうかなぁ……」

ヴィヴィオの気持ちを代弁するようなキャロの言葉を聞いて、隊長は照れ笑いを浮かべた。
そんな隊長に、リイン曹長が近付いて提案する。

「もういっそ、本当になのはさんの子供にしちゃうとか！」

……え？　ヴィヴィオって隊長の養子になったんじゃないの？
驚いて隊長を見ると、隊長は小さく頭を振って「受け入れて貰える家庭探しは、まだまだ続けるよ」と言葉を続ける。

「いい受け入れ先が見つかって、ヴィヴィオが納得してくれれば……」

「納得……しない気が」

「私もそう思います……」

「「うん、うん」」

「えぇ～」

エリオとキャロの言葉にスバルとティアナが頷き、隊長が困った声を上げた。
いや隊長、むしろ何故納得すると思ったんですか。
あれだけ懐かれてるんですから、普通納得するって思いませんて。

「そりゃあ、ずっと一緒にいられたら嬉しいけど……。
本当にいいところが見つかったらちゃんと説得するよ？　……いい子だもん。幸せになって欲しい」

「今でも十分幸せな気がするんスけど……」

「そ、そうかな？」

「少なくとも、俺はそうだと思いますよ」

高収入で子煩悩で美人の母親が2人、これで不幸とか言ったらヴィヴィオを虐めるぞ俺は。
俺よりも全然いい環境じゃねぇか。何よ、若くて美人（しかも片方は巨乳）の母親て！　羨ましくて涙が出るわ！！

……まあ、隊長とヴィヴィオの話だし、俺があーだこーだ言うのもおかしいけどさ。

「ま、まぁ……そんな家庭が見つかるまでは、私が責任持って育てていくよ。
それは、絶対に絶対」

「そのまま高町隊長が親になると思う人挙手～」

高町隊長以外のヘリに乗っていた人全員が手を挙げた。
これが世界の意思ですよ高町隊長。

「うぅ……何か、私が変みたいになってるよ」

「“みたい”じゃなくて、高町隊長が変なんだと思います」

「えぇ～～っ！？」

隊長の悲鳴と共に、ヘリの中は笑いで満たされた。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：ディレト

「ああ、退屈ですわ。退屈ですわ」

大きさだけは一丁前の建物を見下ろして、一人そう呟く。

すると、モニタに映ったウーノお姉様が溜息混じりに口を開いた。

『いい加減になさいディレト。

配置まで時間はあると言ったのに、貴女が「本部を見てみたい」と飛び出したのでしょう？』

「それは、そうですけれど……」

まさかこんなに無能な有象無象だらけで面白くないなんて思いませんでしたもの。

少しは私(わたくし)の心を躍らせてくださるような、そんな方がいらっしゃると思いましたのに。

今のところ楽しめそうなのは、さっきやってきたエースオブエースと夜天の書のプログラムだけ。タイプゼロの2体も大して面白くなさそうでしたし、他は論外。

ああ、なんてつまらないんでしょう。

『退屈なら帰ってきなさい。下手にその辺りをうろついて見つかったりでもしたら面倒だわ』

「あら、その時は殺してしまえばいいのではなくて？」

『そしたら騒ぎになるでしょう？　少しは考えなさい』

「騒ぎになったところで、この程度の戦力でしたら、私(わたくし)だけで何とでもなりますわよ」

『そうでしょうけど、それではドクターの計画通りにならないでしょう。我侭も大概にしなさい』

「……わかりましたわ」

もぅ、ウーノお姉様はドクターにこだわりすぎですわ。
最終的に壊滅させるのですから、ちょっと予定が早まってもいいと思うのですけれど。
まあ、お姉様の言う事に逆らって後から怒られるのも嫌ですし、ここは大人しく従っておきますけれど。

「お姉様、帰る前に適当な局員の方にちょっかいを出しても良いですかしら？」

『ディレト』

「う……だ、だって、少し身体を動かしたいんですもの」

『……はぁ。少し待っていなさい、問題の無さそうなのを選んであげるから』

「！　ありがとうございます、ウーノお姉様！」

優しいお姉様にお礼を言って、軽く準備運動をしておく。
嬉しいですわね。このまま帰ってしまったら、不完全燃焼でどうにかなってしまいそうでしたもの。

私（わたくし）の退屈しのぎの玩具、早く見つからないかしら。

ｓｉｄｅ：ディレト　了

◇◇◇◇◇

9月12日、AM2：35。

管理局地上本部に着いた俺達は、それぞれ2人1組になって地上本部の外周警備をしている。

組は俺とティアナ、スバルとギンガ、エリオとキャロだ。脳筋姉妹の方には高町隊長が、エリキャロの方にはヴィータ副隊長とリイン曹長がサポートとしてついてくれている。

俺とティアナに誰もついていないのは……まあ、信頼されてるんだろう。

「ほい、警備部隊の人から。差し入れだってさ」

「あ、うん。ありがと」

ごっついおっさんから貰ったお茶の入った水筒をティアナに投げる。

気温そのものはそんなに低くないとはいえ、さすがに夜は少し肌寒い。湯気をあげているお茶を飲み干すと、ジンワリと身体が温まっていく。

「いやー、微妙に寒い時にこーいう差し入れは助かるな」

「そうね。日が当たってないってだけで、結構冷えるもの」
「後はこれを淹れてくれたのが美人で巨乳のおねーさんだったら、マジ言う事ないんだが」
「……」
「ひでででで」
頬を思いっきり抓られた。何しやがるこの野郎。
「今は警備中なのよ？　馬鹿な事言ってないでしゃっきりしなさい」
「ってて……へいへい、わーってるよ」
なんでぇ、急に不機嫌になりやがって。
紙コップに入ったお茶を飲みながら、近くの壁に寄りかかりながら、周囲に気を配る。
まだ陳述会まで時間があるせいもあって、怪しいモノは見当たらない。
「このまま、何もなきゃいーんだが」
「楽観的な考えはやめたほうがいいわ。相手の狙いが判らない以上、何があってもおかしくはないもの」

「ん。気は抜かねーよ」

答えながら、空になった紙コップを近くのゴミ箱に投げる。
狙い違わずゴミ箱に吸い込まれていく紙コップ。うん、さすが射撃型。狙いは外さねーぜ。

「なに得意気になってるのよ」

「いや、こーゆーのって嬉しくねぇ？」

「嬉しくない」

なんでぇ、変に大人ぶりやがって。自分は入れられないからって妬むなよ。

「入れられるわよ、失礼ね」

「へぇ？　じゃあ入れてみろよ」

「楽勝よ。見てなさい」

そう言ってティアナが紙コップを投げる。
しかしそれはゴミ箱には入らずに、ゴミ箱の横の地面に軽い音を立てて落ちた。

「……」

「……楽勝、ねぇ？」

「う、うるさい！」

からかってやると、ティアナは顔を赤くして紙コップを拾いに行き、そのまま乱暴にゴミ箱へ捨て直した。

俺はそれを壁に寄りかかったままニヤニヤと眺めながら考える。

ティアナはああ言ったけど、さすがにこんだけ厳重な警備の中で襲ってくる奴はいないだろう。

確かにこないだのルールーやアギトは厄介だったけど、今回は状況が違う。来るかもしれないとわかっていれば、いくらでも対処はできる。

何より、今回はうちの隊長陣が揃い踏み。むしろどうやったら負けるのかって話だ。

「ま、なんにせよ、終わるまでは気を抜かないで警備するとしましょうかね」

顔を真っ赤にして戻ってくるティアナをどう諫めようか考えながら、俺は小さく呟いた。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「……退屈しのぎにもなりませんでしたわねぇ」

地上本部から数十キロ離れた森の奥。
そこで空に上った月を眺めながら、憂鬱そうにディレトが溜息を吐く。
その右脚は、血に塗れて地面に倒れている局員の青年の背に乗せられていた。

「ああ、これでは余計に不完全燃焼になってしまいますわ」

「……貴、様……何者、だ」

いきなり自分を攫って、半死半生の状態にしたディレトを、青年が息も絶え絶えになりながら睨みつける。
だが、ディレトは青年の視線を軽く受け流しながら、路傍の石を見るような目を彼に向けた。

「玩具如きに教えるほど安い名は持ち合わせておりませんの。

玩具は玩具らしく、黙って私(わたくし)に遊ばれるままになっていなさいな」

「こんな、ことをして……俺の仲間に、バレないと思ってる、のか……」

「あらあら、安い脅しですわね。

ええ、思っていますわよ。貴方が警備を交代し、これから8時間は何も予定がないことは確認済みですわ。それに、いくらでも誤魔化す手段はありますもの」

「な……んだ、と」

無邪気な笑みを浮かべるディレトを見上げる青年の目が、困惑に見開かれる。

「意味が判らない、という顔ですわね。わからなくて結構ですわ。どうせ死ぬのですから、余計な事は考えずにいたほうが幸せだと思いませんこと?」

「ふざ、け……るな!」

青年が最後の力を振り絞って、デバイスをディレトに向けて魔力弾を放つ。

だが、それはディレトに届く前に一瞬で霧散し、名残である風だけがディレトの赤い髪を揺らし、彼女の髪を僅かに乱す。

「あらあら」

風のせいで乱れた髪を左手で直しながら、ディレトの視線が青年を捉えた。

「玩具のクセに足掻きますわねぇ……っ！！」

「ぎ……っ！！」

酷薄な笑みを浮かべた後、ディレトが右脚でデバイス諸共青年の右手を踏み潰す。

骨が砕ける音と、デバイスが砕ける音が響き、青年が苦痛に声を漏らし、その声を聞いたディレトが楽しそうに笑って口を開く。

「さっさと殺してお姉様のところに帰ろうと思っていましたけれど、気が変わりましたわ。

もう少しだけ、貴方で退屈を潰させてもらうとしましょう。ふふ……今、死んでおいた方が幸せでしたわよ？　貴方」

「が……っっ！？」

言葉と共に、ディレトの右手が青年の顎を掴み、そのまま顎を外す。

「これでもう大声を出したり出来ませんわねぇ。最も、騒いだところでこんな森の奥では、誰にも聞こえないでしょうけど。
さあ、せいぜい死なずに私（わたくし）の退屈を紛らわせてくださいな」

恍惚とした表情のまま、ディレトの手が青年へと近付いていく。
それを見つめる青年の喉から、声にならない悲鳴が溢れた。

――――長い長い1日は、まだ、始まったばかり。

ｓｉｄｅ：：―　了

第３４話　『予兆』（後書き）

お嬢様言葉の一人称ってどう書いたらいいかわかりません。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「今回は何か影が薄い。主人公です」

さーて、今回のゲストは！

“魔法少女リリカルなのは　ＯＧ－ＡＳＴＲＡＹｓ”より

宇宙一のジャンク屋ロウ＝ギュールさんとと、その相棒の高性能（？）ＡＩの８（ハチ）さん。
そして、下町育ちの江戸っ子高校生アヅマ＝コウタさんと、異世界の戦士の“魂”、ロアさんの４人です！

ロウ
「よっしゃあ！　出番だぜ！」

コウタ
「待ちくたびれたぜ全く！」

８
『（ビポ）２人とも騒ぐな、五月蝿いぞ』

ロア
「すまないな、こんなに大人数で押しかけてしまって」

いえいえ。ようこそいらっしゃいました。
先日は名前を間違えるという不手際をしてしまって申し訳なかったです。

コウタ
「いいってことよ！　江戸っ子はいちいち細かい事をグチグチ言ったりしねぇってな！」

ロウ
「いや、お前は間違えられてねぇじゃん」

アヅマ
「細かいこと気にすんなって！」

8
『（ピッ）細かいのか？』

ロア
「まあ、コウタからすれば細かいんだろう」

ハヤト
「えーと、それじゃあ話題を変えて、いよいよ突入しました『その日、機動六課』編！」

今回は結構長くなる予定でいます。
下手したら、前の『機動六課のある休日』編よりも多くなるかも。

ロウ
「中盤の山場だしな。あと敵のオリキャラも居る訳だし」

コウタ
「ディレトだっけ？　随分とおっかねぇ性格してやがんなぁ」

子供の持つ『無邪気さ故の残酷さ』がディレトのテーマです。

8
『（ピポッ）ふむ。しかし、いくら何でも局員が1人死んでしまったら騒ぎになるんじゃないのか？』

ロア
「そうだな。交代の時間になっても現れず、姿も見えないとなれば、さすがにマズイと思うんだが」

そこいら辺は次回以降でネタバラシです。
一応、無い知恵を絞って色々考えました。コ○ンとか読んで。

ハヤト
「俺、アイツと戦うの？」

うん。

ハヤト
「嫌すぎるんですけど」

ロウ
「オレも同意するぜ。アレはちょっと相手したくねぇよな」

8
『（ピッ）完全に快楽殺人者だったな。相手をしたらどうなることやら』

ロア
「私も昔、似たような類を相手にしたことがあるが……厄介だったな」

コウタ
「だな。あーいう手合いの相手は御免被るぜ」

ハヤト
「アンタら4人揃って俺を不安がらせるなよ！　誰か1人くらい励ませよ！」

4人
『「「「（ピッ）無理」」」』

ハヤト
「ちくしょう」

ロア
「大丈夫だ。ハヤトは主人公なのだから、死にはしないだろう」

8
『（ピポ）ディレト自身も“生かさず殺さず”と言っていたしな』

ハヤト
「フルボッコされそうなこと自体が嫌なんですけど」

ロウ
「なら、オレが鍛えてやるぜ！」

コウタ
「それじゃあ俺も一緒に鍛えてやるか」

ハヤト
「え？　ちょっ……」

ロウ
「そうと決まれば善は急げ！　早速あっちで修行開始だ！」

コウタ
「ついてこいハヤト！　ディレトなんかに負けないくらい強くしてやるぜ！」

ハヤト
「ちょ、まっ……あーれー……」

8
『（ピッ）連れて行かれたが……いいのか？』

いいと思いますよ。
設定上、ディレトより強くってのは無理でしょうけど。

ロア
「それなんだが、ディレトのスペックはどの程度なんだ？」

ん～。あんまり言うとネタバレ入るんで細かくはまだ言えませんけど、純粋な強さだけだったら、なのは、フェイト、はやての3人娘（リミッター無し）相手でも圧勝できますね。

8
『（ピー）それはまた……とんでもないな』
ハヤトが普通な分、ディレトにチート成分が入っているんでめっちゃ強いです。
正直、何でこんな強くしたんだろうって後悔してます。
8
『（ビポ）というか、それは勝ち目があるのか？』
ロア
「それだけを聞くと、勝ち目がゼロに思えるんだが」
ええ。ちゃんと弱点……というか、つけいる隙とかも考えてあります。
完全無欠の最強ってあんまり好きじゃないんで。
ロア
「なるほど。ならば安心だな」
8
『（ピッ）問題は、ハヤトがその隙につけいることが出来るかどうかだ』
それは物語が進んでからのお楽しみです。
さて、そろそろいい時間ですし、番宣といきましょうか。
ロア
「そうか。それでは私から宣伝をさせてもらうとしよう。

私とコウタ。そしてロウと8が主役を務めている作品は“魔法少女リリカルなのは　ＯＧ－ＡＳＴＲＡＹｓ”

ある日、突然異世界へと飛ばされた2人の男
宇宙一のジャンク屋、ロウ・ギュール
下町育ちの江戸っ子高校生、アヅマ・コウタ
そこで彼らは、2人の少女に出会う

「王道から逸れた」、「Ｉｆ」の物語」

8

『（ピッ）時間軸は無印時代。現在、なのはとフェイト、2人の初めての出会いが終わったところだな』

コウタ
「俺の活躍、見てくれよな！」

ロウ
「オレのジャンク屋魂も見逃すな！！」

あれ、2人ともどうしたんですか？
ハヤトは？

ロウ
「ん？　ああ、何かちょっと扱いたら白目剥いて倒れやがってよ」

コウタ
「全く根性ねーぜ」

白目剥いてって……うわ！？　何か顔色が凄いことに！

てゆーか口から緑色の泡吹いてるんですけどー！！

コウタ
「気にすんなって。そいつギャグキャラだろ？　ならすぐ復活するさ」

ロウ
「そうそう」

それもそうでしたね。

8
『（ビー）それでいいのか？』

ロア
「ハヤト、哀れだな……」

まあまあ2人ともお気になさらず。
アレくらいなら、1時間もあれば復活しますから。
それじゃあ最後にお土産です。これどうぞ。

（・ω・、）　つ【銘菓“すぱろぼ”】

ロウ
「そのまんまだな」

コウタ
「もうちょい捻れよ」

ロア

「確かに私達の共通点と言えばソレだが……」

8

『（ピー）まあ、下手にどちらかのネタだけになるよりはマシだが』

う……い、いいんですよ！

だって他に共通点見つからなかったし！

コウタ

「ま、とりあえず貰っておくぜ」

ロウ

「それじゃ、またなー」

8

『（ピピッ）お邪魔したな』

ロア

「ハヤトに、頑張れと伝えておいてくれ」

ありがとうございました。

また機会があったら来てくださいねー。

さて、次回ゲストは“魔法少女リリカルなのは　～伝説を継ぐ者～”より、レナード＝レイ＝マグナスさんをご招待する予定です。

それでは、また次の話で。

監督提督さん、こんな感じでよかったでしょうか？
何か訂正などありましたら、感想なりメッセージでお願いします。
適時修正しますので。

第３５話　『序曲』（前書き）

※今回、本編と共に『主人公紹介』を『オリジナルキャラ紹介』としてディレトの紹介をしておきました。
もし気になったら、チェックしてみてくださいね。
まだ殆ど未記入なままですが（汗）

第３５話　『序曲』

ｓｉｄｅ：―

９月１２日　ＡＭ１２：００。
公開意見陳述会が始まるまで、残り３時間弱。
開始時刻が近付くにつれ、緊張感を増していく警備。
そんな警備が敷かれた一角、地上本部の裏を警備している局員の所に、同じ制服を着た青年が近寄って、その肩を叩く。

「おい、交代だぞ」

「ん？　ああ、もうそんな時間か」

「何かあったか？」

「いや何も。平和なもんさ」

「それは何よりだ。じゃ、あっちで休んでこいよ」

「そうさせてもらおう。後は頼むぜ」

「ああ、任せろ」

局員は青年に軽く手を振ってから、休憩所へと歩いていった。
それを見送った後、青年は深々と溜息を吐きながら口を開き、周

りに聞こえないように言葉を漏らす。

「無能ね。適当に演じたというのに、違和感に気付かないなんて」

侮蔑するような響きをもって漏れた言葉は、青年の外見には似合わない女性のそれであった。

だが、その言葉を聞いていない周囲は異変に気付かない。

そう。気付かないのだ。

その青年が、８時間以上前にディレトによって命を絶たれた青年であるという事に。

「全く、ウーノがいきなり連絡をよこすから何かと思えば、まさかディレトのフォローだなんて。

ホント、ウーノはあの子に甘くて困るわ」

青年――ＩＳ“ライアーズ・マスク”で己が姿を変えたナンバーズの次女、ドゥーエは呆れ半分でそう呟いた。

ｓｉｄｅ：―　了

「隊長達、デバイス無しで大丈夫かねぇ？」

公開陳述会が始まるまであと少し。
マスコミやらなんやらが増えて、だんだんと騒がしくなってきた正面入り口の辺りを見回して呟く。

「大丈夫よ。本部は強力なシールドで守られてるんだし」

「そりゃそうか。でもよ、警備しろって言っといて、中にデバイス持ち込み禁止ってどうよ？」

「それだけ守りに自信があるってことでしょ」

「内部に敵がいたらどーすんだよ」

「そこは、ちゃんと事前に監査とかしてるに決まってるじゃない」

「……それもそうか」

地上本部の馬鹿でかい建物を見上げ、隣のティアナとダラダラ喋る。
交代ありとはいえ、８時間以上警備をしているのに何か起こる気配は欠片も無し。
気を抜くつもりはさらさら無いが、暇な事この上ない。

「ふあぁ……ねむ……」

「さっき仮眠とったばっかでしょうが」

「あの程度じゃ足りん。俺は1日28時間寝ないと寝不足で死んじゃいますのん」

「24時間オーバーしてるじゃないの。あとキモイ」

ティアナが酷すぎる。

ちくしょう、そんな酷い事ばっか言うと俺はあっちの綺麗な金髪ロングのオネーサンと組むぞ！

そこの金髪ロングのオネーサン！　俺とお茶しませんか!?

「子供に興味ないの。ごめんなさいね」

ジーザス。世知辛い世の中だぜ。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第３５話　『序曲』

９月１２日　ＰＭ１７：３６。

公開陳述会が始まって４時間と少し。すでに日も傾いてきた。
俺達フォワード５人とギンガ、ヴィータ副隊長、リイン曹長は、北エントランス入り口に集まって互いに報告をしていた。

「とりあえずどこにも異常は無し、か。まあ気ぃ抜かずに最後までやれよ」

「そろそろ陳述会も終わりですから、ここからは皆で一緒に警備をするですよ！」

「「「「「「はい！」」」」」」

どうやらここからは総勢８人で警備になるようだ。
よし、サボれるな。

「……ハヤト君。今『よし、サボれるな』って思ったでしょ」

「お、おおおお思ってねぇよ！　言いがかりはよしておくんなまし！」

「それだけ動揺してたら認めてるようなものでしょ、もう」

ギンガは腰に手を当てて、呆れたように溜息を吐く。
何を偉そうに。別にいいじゃねーか、今まで真面目に警備してた

んだし、人数増えたんだから少しぐらいサボってもお前以外誰も文句言わねーよ!!

「いや、文句言うから」

「何考えてんのよ」

「兄さん、さすがに今日はダメだよ」

「お兄ちゃん、サボったら怒りますよ？」

「ぶん殴るぞお前」

「ハヤトはダメダメです～」

非難轟々でした。くっ、仕方ない。観念して警備任務をするとしよう。

一人悲壮な覚悟を決めた時、ヴィータ副隊長がギンガに指示を出す。

「ギンガとハヤト。お前らちょっと北エントランスに行って、現状報告してきてくれ」

「あ、はい。了解です」

「俺もですか？」

「ああ。中ならそんなに危険はねーと思うけど、一応コンビで動いた方がいいだろ」

ふむ。確かに何かあった時、1人よりは2人の方が戦力バランスがいいか。

「ギンガと一緒ってのが凄まじく嫌ですけど、了解です」

「それどういう意味かな、ハヤト君？」

「んじゃ、行ってきます」

「あ！　コラ待ちなさいハヤト君！！」

俺はギンガを無視して副隊長の指示に頷いてから、北エントランスへと向かう。後ろからギンガが文句を言いながらついてきたけれど、相手になんてしないでどんどん進む。

そうやって無視していたら、最終的にぶん殴られた。

今度肉体言語で徹底的に話し合おうと思う。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「ナンバーズ。Ｎｏ．？トーレからＮｏ．？？ディードまで、全機配置完了」

スカリエッティのラボ。

その司令室とも呼べる場所で、鍵盤の様なコンソールを叩きつつ、ウーノは全ての準備が整ったことをスカリエッティに告げる。

彼女らの前の巨大なモニタには、ゼストとルーテシア、そして地上本部が映し出されている。

『お嬢とゼスト殿も、所定の位置につかれた』

『攻撃準備も全て万全。あとはＧＯサインを待つだけですぅ～』

「ええ」

トーレとクアットロからの通信に、ウーノが微笑みながら答える。

その時、ウーノの後ろに座していたスカリエッティが小さく笑い声を上げた。

「楽しそうですね。ドクター」

「ああ、楽しいさ。自分の作品が一つの歴史に終止符をうつのだからね。

研究者として、技術者として、心が沸き立つじゃないか。そうだ

ろ？　ウーノ」

心底楽しそうに笑うスカリエッティに、ウーノは微笑みを返す。

「我々のスポンサー氏にとくと見せ付けてやろう。
自分達が欲してやまなかった『究極の兵器』の力が、どの程度のものなのかをね」

椅子から立ち上がり、スカリエッティが手を振り上げる。
そして、歪んだ笑みを浮かべて始まりを告げた。

「さあ！　始めようか！！　崩壊の序曲を！！！」

「……はい」

スカリエッティの哄笑を聞きながら、ウーノが両手をコンソールに落とす。
その指がコンソールの上を滑るように動き、それに合わせて荘厳なパイプオルガンの音色が響き渡った。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

「な、何だ！？」

北エントランスで報告をしていた時、突然の警報と共に建物が揺れる。

一瞬たたらを踏んでから外に視線をやれば、上の方から瓦礫が降ってきたのが見えた。

くっそ、マジで襲ってくるとか馬鹿じゃねぇの！

「ギンガ！　スバル達と連絡頼む！」

「うん！」

ギンガに連絡役を任せて、状況把握の為に詰所の局員に尋ねる。

「状況は！？」

「わからん！　だが、ついさっきから何処にも通信が繋がらないんだ！」

「……通信はアウトか。敵の戦力とかはわかりますか？」

「そちらも不明だ！！　本部！　聞こえるか本部！！」

何もわからん、か。
俺は通信機に向かって怒鳴る局員に礼を言ってから、ギンガに視線を戻す。

「通信は？」

「駄目。全然繋がらない」

「本局の方も通信はダウン。それと敵戦力も不明……だが」

「恐らく、スカリエッティ一味」

「ああ」

高町隊長から聞かされていたとはいえ、まさか本当に来るなんてな。
マジで何考えてやがる、スカリエッティって奴は。天才とナントカは紙一重ってか！

「とりあえず外に出てスバル達と合流するぞ」

「そうだね」

頷きあって、入り口に向かって走る。

だが、その目の前でいきなりシャッターが閉じられた。

「「！？」」

辺りを見回せば、あちこちで明かりが落ち、シャッターが次々と閉じられていく。

くそ、閉じ込められたか！

《　マスターハヤト、ＡＭＦ濃度が急激に上昇しています　》

「ＡＭＦ……あのポンコツが来てるってことか」

《　濃度から推測するに、かなりの数が表で待機していると思われます　》

「気分の沈む情報ありがとよ。ギンガ！　隊長から緊急時のルートは聞いてるな！？」

「大丈夫！」

「シャッターを壊すのも面倒だ。そっちのルートを使って合流するぞ！！」

怒鳴りながら走り出し、ブレイブハートを起動。バリアジャケットを纏う。

すぐにギンガも俺に追いつき、そのまま併走。

「そのローラーいいよなぁ」
「何言ってるのこんな時に！」
「走るのって疲れるんだもんよ。あ、背負っていってくれない？」
「ふざけないで！　今は緊急時なんだから！」
「緊急時だから、こーやって少し場の空気を和ませてんじゃねーか」
「もう！」

ギンガと喋りながら、ルートを確認していく。
ここからだと結構遠回りになるな……途中にガジェットが居る可能性もあるし、早いとこ合流しよう。
ありえないと思ってた襲撃があったんだ、これから先、何があってもおかしくねーからな。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：ディレト

『ディレト、聞こえる？』

「聞こえますわ。ウーノお姉様」

お姉様からの通信に答え、右手に掴んでいた玩具の頭を離す。
玩具は水っぽい音と共に地面に落ち、そのまま沈黙した。

『目標が見つかったわ。タイプゼロ・ファーストと一緒にチンクのいる場所へ向かっているわよ」

「あら、チンクお姉様のところに？」

『ええ。だから予定と違ってしまうけど、チンクと協力して頂戴ね』

「わかりましたわ」

経験豊富なチンクお姉様と一緒に戦えるなら、私（わたくし）も随分と楽になりますわね。
と、そこでふと気になったことがあったのでお姉様に尋ねる。

「お姉様、タイプゼロ・ファーストはどうしたら？　殺してしまって構いませんの？」

『それは――『君の好きにしたらいい』――！』

「『ドクター！』」

私の問いに答えてくださったのは、お姉様ではなくてドクターだった。
そういえば、お姉様とドクターは同じ場所にいるのだし、ドクターにも聞こえていて当然ですわよね。

『まあ、興味がないといえば嘘になるが……残骸からでもデータは取れるからね。
ある程度原型を留めていれば、殺してしまっても構わないよ』

「心得ましたわ。原型を留める程度に、ですわね？」

『頼んだよディレト。君なら容易いだろう？』

「勿論でしてよドクター」

相手が何であれ、私（わたくし）に敗北などありえませんわ。
それでは、嬲るのはハヤト様だけにして、タイプゼロには早々に退場して頂くとしましょう。

『他に聞いておきたい事はあるかい？』

「いいえ。お手間を取らせてしまって申し訳ありませんでした、ドクター」

『構わないよ。それでは頼むよディレト、私の最高の最高傑作にし

て至高の究極兵器』

「心得ておりましてよ」

『気をつけてね。寄り道をしては駄目よ?』

「もう、それくらいわかっていますわよウーノお姉様!」

そう答えてから、お姉様との通信を切る。

もう、お姉様ったら。いくら私(わたくし)が製造されて間もないからといって、子ども扱いしすぎですわ。

……確かに先程は、ちょっと我侭を言ってしまいましたけど。

「そこで何を……、おい、その局員はどうした!?」

「奴らの仲間か!」

「両手を挙げてこっちを向け!!」

「……全く、ハエのようにワラワラと」

通信をきったのと同時に現れた局員に、思わずため息が出る。

全く、雑魚程群れるというのは本当ですわね。

「IS起動、“エクスプロード・アイ”」

私(わたくし)はこの身に搭載されたＩＳを起動、後ろを振り返りながらやってきた有象無象を“見る”。
その刹那、爆炎が有象無象ごと辺りを焼き払い、飛び散った血が頬を汚す。
炎が消えた後に残ったのは、肉の焼け焦げた臭いと人間“だった”モノの欠片。

「全く、汚れてしまったじゃありませんの」

頬を汚した血を手で拭い、向けていた視線を戻す。
チンクお姉様に会うというのに、気分が台無しですわ。

「おっと、こんなことをしている場合じゃありませんわね。早くチンクお姉様と合流しなくては」

遅れてしまったら、チンクお姉様に怒られてしまいますもの。
踵を返し、私(わたくし)は駆け出す。
目標(ハヤト様)と遊ぶ時に思いを馳せながら。

「ああ、楽しみですわ。楽しみですわ。
ドクターのお気に入りのあの方は、どんな悲鳴を聞かせてくれるのでしょう」

私（わたくし）は走りながら、歌うように呟いた。

ｓｉｄｅ：ディレト　了

◇◇◇◇◇

「はあああああっっ！！」

ギンガが裂帛の気合と共にガジェットを蹴り飛ばす。
衝撃でバラバラになり爆散するガジェットを横目に、俺はブレイブハートを構える。

「ギンガ！　大物は俺はやる！　下がってろ！！」

「オーケー！」

ギンガが下がるのを確認して、ブレイブハートをデカブツに向けて構える。

「ロードカートリッジ！」

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．》

「弾道計算、反動計算、プロテクト準備、誤差修正、対衝撃波用減衰魔法準備！」

《省略計算完了。プロテクト、誤差修正良し。減衰魔法良し、いけます》

「いくぞ！！“インビジブル・シューター”、ファイア！！」

不可視の速度で魔力弾が飛び、ＡＭＦなんぞモノともせずに？型の巨体を貫く。

？型はバチバチと火花を散らし、そのまま爆発。

「っし、これでラストだな」

「うん……それにしても、こんなところにまでガジェットがいるなんて」

「多分こないだのロリっ子が協力してるんだろ。遠隔召喚で、中に直接送り込んだんだろうさ」

「……そっか」

一度集まって足を止め、息を整える。

出て来たガジェットの総数は？型が６機と？型が１機。

合流地点まではまだ距離があるってのに、先が思いやられるぜ。

「通信は……ちっ、まだ駄目か」

スバル達と通信を試してみるが、相変わらずノイズばかりで役に立たない。

何やってんだ地上本部技術者！　さっさと復旧しろよ！！

イラついて舌打ちすると、ギンガに肩を叩かれた。

「急いで合流すれば大丈夫だよ、ハヤト君」

「……ああ、そうだな。悪い」

「ううん」

通信用のモニタを消して、再び足を動かす。

スバル達も、多分今頃俺らと同じように合流地点を目指している筈だ。

ヴィータ副隊長も多分一緒だし、それほど危険はないだろう。危険なのは、むしろ俺達の方だな。

そうそう負ける気はしねーが、数で押されたらさすがにキツイ。

さっさと合流しないと、体力が削られるばっかりだ。

体力馬鹿のギンガと違って、俺は貧弱な坊やだからな。

「……ハヤト君、今、失礼なこと考えたでしょ？」

人の思考を読むな。エスパーかお前は。

「後でお説教だからね！」

「へーへー！　いいから急ぐぞ！」

「もう！」

2人で言い合いながら先を急ぐ。

確かこの通路の先は開けた空間になっていたはずだ。何もないといいんだが……。

そう考えているうちに、開けた場所へとたどり着く。

さて、誰もいないといいんだけど――

「――そうは問屋が卸さないよなぁ」

「……だね」

俺達が辿りついた先。

広い空間となっているその場所に、2人の少女が立っていた。

1人は右目に眼帯をした、エリオやキャロ位の少女。

もう1人は、燃えるような赤いロングヘアーを風に揺らす、俺やギンガと同じぐらいの少女。

纏っているのは、ヴィヴィオを保護した時に襲ってきた奴ら――戦闘機人と同じボディスーツ。

あの時のデータには映っていなかったが、格好から察するに多分こいつらも戦闘機人なんだろう。俺は、違っていて欲しいという願いを込めて、ギンガに念話を飛ばす。

『ギンガ、あいつらって……』

『うん。“戦闘機人”だよ』

『……だよな』

ちっ、厄介な。

ガジェットならまだしも、こんな時に戦闘機人――それも2人かよ。

（戦闘能力はわからんけど、弱いってことはねーよな。ギンガとはあんまコンビの練習してねーし、戦力的には俺らの方が不利か。くそっ、せめて通信できりゃあ何とかなるってのに！）

舌打ちしたいのを堪えてデバイスを構える。隣ではギンガも同じ

くデバイスを構え、２人を睨みつけている。
そして、いつでも戦いが始められるように気を張り詰めた。

そんな俺達を値踏みするように眺めてから、赤髪の少女が眼帯ロリに目を向けて口を開く。

「チンクお姉様、休んでいてくださって結構ですわよ？」

口を開き、声を漏らす。
ただそれだけ、別に攻撃をしてきた訳でも、殺気をぶつけられた訳でもない。
なのに。

それなのに――。

俺の背筋を怖気が走った。

第３５話　『序曲』（後書き）

戦闘描写って難しい。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「初の必殺技披露が雑魚敵かよ！　どうも、主人公です」

さーて、本編もいよいよ盛り上がってきた今回のゲストは！
“魔法少女リリカルなのは　～伝説を継ぐ者～”の主人公！　レナード＝レイ＝マグナス君です、どうぞ～！！

レナード
「やー、どーもどーも」

ハヤト
「チートは死ね！」

レナード
「いきなり何！？」

ハヤト
「いや、次回からチート敵役と戦うハメになった俺の心の叫び」

レナード
「オレに言わないでくれる！？」

ハヤト
「うるせえこのＳＳＳオーバーとかいうチート野郎め！

下痢が止まらなくなる呪いをかけてやる！！」

地味な嫌がらせを……。

やめなさい。人様の主人公に迷惑をかけるな。

ハヤト

「俺はいつも感想でボコボコにされてるのに！？」

お前はいいんだよ。そういうキャラなんだから。

大体、お前そんなことしたら殺されるぞ？

ハヤト

「すいませんでしたごめんなさい。土下座でもなんでもするんで許して」

レナード

「い、いやそんなに気にしてないからいいよ」

ハヤト

「寛大な心遣い、痛み入ります」

レナード

「いきなり下手になったなぁ」

ハヤト

「長いものには巻かれろ！　が座右の銘ですから」

誇るな。

レナード

「えーと、それで今回だけど……ディレトのＩＳが判明したな」

ＩＳ“エクスプロード・アイ”ね。
まあ、細かい原理なんかはそのうち書くけど、大体どんな感じかはわかったかな？

レナード
「あれだろ？“見た相手を燃やす”感じのＩＳ」

そうそう。まあそんな感じで合ってるね。
正確には“見た空間を爆発させる”って感じだけど。

ハヤト
「すいません。そんなん俺死ぬんすけど？」

レナード
「オレだったら、遠距離から竜破斬（ドラグ・スレイブ）で吹っ飛ばせるけど、場所が場所だしなぁ」

ハヤト
「ちなみに、場所はアニメ原作でギンガがチンクと戦ってた場所ですよ」

あそこって何処なんだろうねぇ？
何回見直しても何の為の場所かわからんかった。

レナード
「確かに。管理局内部にしては、何も無いスペースだったよな」

ハヤト

「休憩所とかロビーとかって雰囲気でも無かったし……スタッフもきっと考えていなかったに違いない」

そういう発言はやめい。
アニメファンに怒られるだろうが。

ハヤト
「うぅ……俺、次回からあんなのと戦うのか……レナード君、代わって？」

レナード
「嫌だよ。オレだってこっちの本編が忙しいんだし」

ハヤト
「嫌だよー嫌だよー。戦いたくねーよー」

レナード
「ギンガさんも居るんだし、何とかなるんじゃ？」

その程度で何とかなるチート具合にはしておりません！
もう2人揃ってフルボッコにされる予定ですよ！

ハヤト
「本人目の前にして言うなぁぁぁぁ！！」

レナード
「でも、そういえばギンガはどうするんだ？　誘拐されるの？」

内緒ですよ。ネタバレよくない。
フルボッコにされるのは間違いないけどね。

レナード
「そっかぁ。ま、ガンバレよハヤト。あ、俺の竜破斬（ドラグ・スレイブ）教えようか？」

ハヤト
「教えられても使えねーよ畜生！！」

レナード
「……なんか、ゴメン」

ハヤト
「謝るなよ！？　余計に惨めだろうが！！」

さて、そんなこんなでお時間です。
レナード君、番宣いっときましょうか。

レナード
「オーケー。オレが出ている小説は“魔法少女リリカルなのは　～伝説を継ぐ者～”

生ける伝説と呼ばれ、様々な魔法を生み出した『レイ＝マグナス』。
闇に堕ちた彼を、ある者が第３管理世界「ヴァイゼン」へ飛ばす。
そして時は経ち、彼の孫。レナード＝レイ＝マグナスはとある少女達と出会う。

時期はＡ'ｓとＳｔＳの中間、俗に言う“空白期”の話だな。
スレイヤーズの設定が多々あるから、スレイヤーズを知っていると一層楽しめるぞ！」

ハヤト
「スレイヤーズを知らなくても、十分に楽しめるから読んでみよう！」

はい。
それじゃあ最後に定番のお土産です。
今回はこちら

（，・ω・、）　つ【銘菓“さーぺんとのなーが”】

レナード
「うおぉぉい!?　なにこの悪趣味な人形焼!?」

ハヤト
「うお、ナイスバデーのボンテージ姉ちゃんの人形焼か」

レナード
「うわー……食べる気しねー」

食べないと将来禿げる呪いを添付しておきました。
それじゃ強制転送で、また来てくださいねー☆

レナード
「え!?　ちょっ、おま――」

ハヤト
「……良かったのか？」

ははは。実際そんな呪いかけてないから平気平気。
さて、これで本編後書きの出演予定は全部消化したかな。後は番外

編後書きゲストが1組だけ、と。

ハヤト
「まあ、暫くは本編もシリアスが続くから、丁度いいタイミングだったな」

そうだねぇ。
あ、でも一応出演希望は受け付けてますよ。本編登場も番外編後書き登場も大分後になりそうですがw

ハヤト
「番外編、早く終わらせろよ」

うん、中身が上手くまとまったらね……。
それでは、また次の話で！

たい焼きヘッドさん、こんな感じで弄らせてもらいました！
何か訂正などありましたら、感想、メッセージでどうぞ。
適時修正いたします。

第３６話　『悪夢　１』（前書き）

※今回は、人によっては残酷、というか“痛い”描写がいくつかあります。
そういうのが苦手という方はお気をつけください。

第３６話　『悪夢　１』

ｓｉｄｅ：―

ハヤトとギンガの背筋を、悪寒が走る。
赤髪の少女は別に何かをした訳ではない。
ただ、ハヤトとギンガを見ただけ。
ただ、言葉を漏らしただけ。
それだけの事に、２人の本能が警鐘を鳴らす。
しかし少女は欠片ほどの敵意も見せず、ハヤト達に向かって微笑んだ。

「初めましてハヤト＝ロックウェル様、タイプゼロ・ファースト。
私（わたくし）、ドクタースカリエッティが造りしナンバーズの末妹、ディレトと申します」

ドレスの裾を摘むような動作と共に、少女――ディレトが優雅に一礼する。
そんなディレトを、眼帯の少女――チンクが眺めて「やれやれ」と呟きながら溜息を吐いた。
そして――ディレトが顔を上げ、微笑みながら口を開く。

「それでは、早速ですが“お別れ”ですわ、タイプゼロ・ファースト」

「……っ！！」

ディレトの言葉に、反射的にギンガがシールドを張った。
だが、ディレトはそんなシールドなど意に介さずに、その視線でギンガを“射抜く”。

「IS“エクスプロード・アイ”」

呪詛の様に言葉が紡がれたのと同時に、ギンガが張ったシールドの『内側』で爆発が起きる。

「きゃあああっっ！？」

「なっ！？」

シールドを通り越しほぼゼロ距離で起きた爆発に、反応することもできず吹き飛ばされるギンガ。その爆発の熱と衝撃は、少し離れているハヤトまで届いた。
熱に気をとられたハヤトの隣を、ディレトが凄まじい速度で通り過ぎ、宙を舞うギンガへと迫る。

「追い討ち、ですわ」

「ぐぁっ！！」

宙に跳んだ勢いと、ディレトの体重を乗せた踵が空気を裂き、ギンガの鳩尾に吸い込まれた。

少し離れているハヤトの耳にまで届く、鈍い打撃音と骨の折れる音、そしてギンガの悲鳴。

ハヤトが止めようと動くが、遅い。

「それでは、ごきげんよう」

無感動に呟かれた言葉と共にディレトの金色の目がギンガを捉え、同時に再び彼女の体が爆炎に包まれた。爆音が空気を震わせ、血が飛び散り、辺りの床や壁を汚す。

煙に巻かれて地面に落ちていくギンガを冷たく見やり、ディレトは最初にいた場所へと舞い戻る。

「ギンガ！！」

地面に叩きつけられる直前、ハヤトがギンガの体を受け止めた。

「……っ」

受け止めたギンガの怪我の酷さに息を呑む。
バリアジャケットはあちこち破け、露出した肌は焼け爛れて所々骨やケーブルが覗き、口からは血を吐いている。
一目で重症とわかる惨状に、ハヤトが最悪の事態を想像して顔を青くした。

「……ぅ、ぁ」

「……はぁ」

だが、微かに呼吸をしているのがわかり、安心したように息を吐く。

「あら？　まだ生きてらしたの？　旧型のクセに頑丈さだけは一人前ですのね」

遠目でどうやって確認したのか、つまらなそうに言葉を漏らすディレト。
ハヤトはそんなディレトと壁に寄りかかったままのチンクを睨みつけ、出来るだけ衝撃を与えないようにギンガを降ろし、彼女を背に庇うようにして構えた。

ｓｉｄｅ：―　了

「……ブリッツキャリバー」

≪　――（ザザッ）はい　≫

「ギンガは？」

≪　すぐにでも処置をしなければ、危険な状態です　≫

「どれくらいもつ？」

≪　私が生命維持に専念して、１時間弱かと　≫

「わかった。お前は生命維持に専念してくれ。こっちはなんとかする」

≪　了解しました　≫

ギンガを背に庇い、ディレトとか言う奴と眼帯ロリの２人と正面から睨み合う。

とはいえどうする？

正直、戦闘機人を2人も相手に1時間以内に決着――しかも俺が勝つ方法なんざ思いつかない。
選択肢としては逃げる一択なんだが、逃げ切れる自信もない。

『スバル！　ティアナ！　ヴィータ副隊長！！　……糞っ！』

相変わらず通信は通じねーし！　マジで仕事しろよ地上本部のボケ共が！！
こちとら絶体絶命だってのに！！

「アレで殺しきれると思いましたのに。その頑丈さは想定外でしたわねぇ。
ドクターからは『ある程度原型を留めておけばいい』と言われただけですし、ひと思いに首でも引きちぎってしまえばよかったかしら？」

「てめぇ！――《　マスターハヤト、落ち着いてください　》――……っ！！」

激昂しそうになった瞬間、ブレイブハートの声で頭が冷える。
落ち着け。今俺がキレてどうすんだ。キレたらギンガを助けるどころじゃなくなるだろうが。
今必要なのは冷静な思考と判断力。頭を冷やせ。
深呼吸を1回、2回……よし、落ち着いた。

「……悪い」

《　いえ。デバイスとして当然のことをしたまでです　》

ブレイブハートに礼を言ってから、これからの行動を考える。
まずはあいつ等の注意をギンガから逸らすのが先決だ。今、下手に追撃でもされたら、いくらギンガでもアウトだ。
俺に注意を集中させて、タイミングを見て撤退。

出来る可能性は限りなく低いが……やるしかねぇわな。
通信が繋がらない以上、俺がやらなきゃギンガは助からない。

「いくぞ、ブレイブハート」

《　はい　》

ブレイブハートを構えなおし、ディレトと眼帯ロリに視線を戻す。
向こうは構えもせずに悠然と立ち、楽しそうに微笑んでさえいる。
どうやら、俺は警戒する価値もないらしい。

「チンクお姉様、タイプゼロはどうしましょう？」

「放っておけ。あの傷では長くはもたないだろう。
ドクターの指示は、あくまで『ハヤト＝ロックウェルを痛めつけること』だ。他の事にあまり気を取られるな」

「そうですわね。さすがお姉様」

……あの眼帯ロリはチンクって言うのか。

つーか今さらっと嫌なこと言ったよな。目的が“俺を痛めつける”って……俺、スカリエッティに何かしたか？

まあいい。あいつ等の目的が俺ってんなら、わざわざギンガから注意を逸らす必要は無くなったな。

「それではハヤト様？　せいぜい足掻いて、私（わたくし）を楽しませてくださいな。

ああ、安心なさいませ。そこのタイプゼロと違って、貴方は殺さないように、十分に手加減して差し上げますわ」

「……有難いね。涙が出るぜ」

ため息と共にブレイブハートを構え、ディレトに狙いを定めてアクセルシューターを放った。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「ギン姉！　ハヤト！　……駄目だよティア、繋がんない！」

「こっちも繋がらない。　全く、何してるのよ地上本部は！！」

イラついて、壁を叩きながら怒鳴る。

さっき――合流地点に向かう途中で戦闘機人に襲撃されてから、胸騒ぎが止まらない。

何度試しても繋がらない通信が、余計に胸騒ぎを加速させる。

「とにかく、急いでなのはさん達と合流するわよ！」

「う、うん！」

「「はい！」」

スバル達に怒鳴るように言って、合流地点に向けて走り出す。

胸騒ぎは、どんどん酷くなっていく。

（大丈夫。ギンガさんも一緒だし、ハヤトだって弱くない。

きっともう合流地点に着いて、いつもみたいに笑って嫌味を言ってるわよ）

止まらない胸騒ぎを黙らせるように自分に言い聞かせながら、あたしは走る速度を上げた。

side：ティアナ＝ランスター　了

◇◇◇◇◇

side：―

ハヤトの撃った３０発のアクセルシューターが、一斉にディレト目掛けて襲い掛かる。
だが、ディレトはそれを避けようともせずに、つまらそうに見つめて右手を振るう。
すると彼女の周囲に橙の魔力弾が浮かぶ。その数は、ハヤトが撃ったシューターの倍――６０発以上。

「ブレイクシューター、ファイア」

言葉と共に、橙の弾が荒れ狂う。
真紅の弾丸を撃ち落し、驚愕に目を見開くハヤト目掛けて猛スピードで迫る。

「くっ！　シールド！！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．》

ハヤトは舌打ちをしながら、背に庇うギンガもカバー出来るようなシールドを張って弾丸を受け止めた。
演習で受けるなのは以上の衝撃をシールドに受け、歯を食いしばってそれに耐える。その間も、視線はディレトとチンクを捉えて離さない。
全ての弾丸を受け止めきり、薄く立ち込める煙越しにディレトにブレイブハートの先端を向けた――瞬間。

「どちらを見ていますの？」

「――っ！」

耳元で、ディレトの声がハヤトの鼓膜を揺らす。
そちらを見るよりも先に拳が腹に突き刺さり、ハヤトの体は宙を舞って壁に叩きつけられた。

「かっ……はっ！」

衝撃で肺の中の空気が一気に飛び出し、苦しげな声を上げるハヤト。
飛びそうになる意識を必死で手繰り寄せ、不可思議な現象を思考する。

（何された!?　目は離してなかったし、今もあいつはあそこにいるだろ!?）

視線の先には、悠然と立ったままのディレト。
そこで、ハヤトの脳裏に自身のパートナーである少女が使う魔法が思い浮かぶ。

「……シルエットか!?」

「惜しいですわ。残念賞を差し上げましょう」

「なっ……がぁっ!!」

そんな言葉と共に左頬を殴り飛ばされ、再び吹っ飛んで壁に叩きつけられた。
ミシミシと悲鳴を上げる体を無理矢理動かして、即座に体勢を整え、立ち上がる。するとさっきまでハヤトが立っていた場所――ギンガのすぐ側から、ディレトの声が発せられた。

「ＩＳ“シルバーカーテン”、解除」

言葉に呼応して、ハヤトが見ていたディレトの姿が消え、何もなかった空間からディレトが姿を現す。

（ヴィヴィオを保護した時に、敵の航空戦力が使ってた幻影系の固有技能か！）

それを見て、以前見たデータを思い出し、相手の使った能力に当たりをつけるハヤト。

ハヤトは消して頭の回転が遅い訳ではない。それに気付くのはほんの一瞬で済むことだった。

「ほらほら、考え事をしている暇はありませんわよ？」

「っ！？　ソニック！」

≪　Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ．　≫

だが、その一瞬はディレトが彼との距離を詰めるには十分すぎる隙だった。

ディレトがハヤトに肉薄し、攻撃を仕掛けようと右手を振り上げる。

ハヤトは咄嗟にソニックムーブを起動して、その場を離脱し距離をとろうと地面を蹴る。

「ＩＳ“ライドインパルス”」

「なっ！？」

だが、手首と足首、そして腿に橙色の小さな羽根を生やしたディレトがハヤトを上回る速度で動き、高速で動くハヤトに追いついてその頭を右手で掴む。

「ほぉら、歯を食いしばりなさい！」

そして嬉しそうな声を上げながら、ハヤトの頭を地面に叩きつける。

コンクリートを砕く勢いで頭を叩きつけられ、今度は堪える事もできずに意識が一瞬飛ぶ。

ディレトはそんなハヤトを一顧だにせず、無造作に壁に向かって投げつけた。

「がっ……ぁ！！」

先程までとは比べ物にならない勢いで壁にぶつかり、その衝撃で壁がハヤトを中心に円形に窪み、亀裂が走る。

骨が軋み、無意識に苦悶の声が口から漏れて、飛んでいた意識が無理矢理覚醒させられた。

「……ぐ、ぅぁ」

呻き声をあげながら、磔の様な状態の壁から地面へとずり落ちる。

ブレイブハートを支えに立ち上がろうともがくが、脳が揺れたせいで足が震え、立ち上がることが出来ない。
そんなハヤトを見下ろしながら、つまらなそうに溜息を吐きながらディレトが近づく。

「ほらぁ、もっと足掻いてくださいませハヤト様。
このままじゃ私（わたくし）、退屈で退屈で思わず手が滑ってタイプゼロを殺してしまいますわよ？」

「んの、やろぉっっ！！」

近づいてきたディレト目掛けて、ありったけの魔力を込めた右拳を振るう。
それは寸分違わず彼女の頬に迫り――

「いけませんわね。女性の顔を殴ろうとするなんて」

――寸前で受け止められた。

「わりぃな……俺はフェミニストじゃ、ないんでね」

「駄目ですわよ。そんなことじゃあ、女性にモテませんよ……わっ！！」

「ぎっ……！！」

掴んだハヤトの右拳を、握りつぶす。
ベキベキと骨の砕ける音がして、骨が肉を破り、鮮血が噴き出した。

「これに懲りたら、少しは女性に対して優しくなさるんですわね」

ハヤトの手を離して、その手についた血を舐めとりながらディレトが呟く。
だが、右手を握り潰されたハヤトは悶絶していて、彼女の言葉に返す余裕は無い。

「……仕方ありませんわね。ハヤト様が落ち着くまでに、タイプゼロを完全に稼動停止させてしまいましょう」

「！！」

まるでコンビニにでも行くような軽い口調で言われた言葉は、激痛に耐えるハヤトの耳を揺らす。
その言葉に弾かれるように顔を上げ、踵を返し、自分に背を向けているディレトの背中にブレイブハートを向けた。

「フォトン、バレットッッ！！！」

《Ｐｈｏｔｏｎ　ｂｕｌｌｅｔ．》

一切の加減無し、全力の魔力弾を撃ちだす。

「おおおおおおおおおおおおっっっっ！！！」

一発目が当たるのも待たず、ただひたすらに連射、連射、連射。
片手で支えられたブレイブハートは、衝撃で銃口がぶれて、弾はディレトだけでなく地面にも当たって土煙を巻き上げる。

「……っっ！！」

そして、真紅の雨が止まった。

「くっ！　打ち止めかよ、畜生！」

両膝をついた状態で荒く息を吐きながら、左手で掴んだブレイブハートを支えに、何とか倒れることだけは回避する。
だが、既に満身創痍なのは傍目から見ても明らかだ。

（くそ！　もう魔力が殆ど残ってねぇ。
まだもう1人残ってるってのに、これじゃギンガを連れて逃げる

なんてとても……）

「……びっくりしましたわ」

「！！」

ハヤトが巻き上げた煙の向こう側から聞こえた声に、ハヤトの表情に驚愕が走る。

「後ろからなんて、卑怯ですわよ？　――――まぁ」

その声に、項垂れた顔を上げた瞬間、煙が切り裂かれた。

「私（わたくし）には、通じませんけれど……ね」

煙の向こうから現れたディレトには、傷一つ――いや、埃一つ付いていない。

それどころか、髪すら乱れていないではないか。

「な……」

その事実に、呆然としたハヤトの口から言葉が漏れた。

side:―　了

ありえねぇ。
ありえねぇ、ありえねぇ、ありえねぇ！

今のは、俺の魔力の殆どをつぎ込んだ全力だった。
加減なんて一切しちゃいねぇ。
確かに何発かは外れたが、当たった分だけでも十分戦闘不能には出来る威力だぞ！？
なのに……なのになんで全く効いてねえんだよ！？

「何をボーっとしてますの？」

「！」

声と共に右腕を掴まれ、ギンガの方目掛けて放り投げられる。
地面に3回ぐらい叩きつけられ、ゴロゴロと転がってギンガの隣に戻ってきた。
ほんの数分しか経ってないってのに、既に俺もギンガに負けず劣らずにボロボロだ。ギンガと違って本気で手加減してるのか、命にかかわる程の傷は負っていないのが幸いか。

「ぐ……っ！」

くっそ、体中がギシギシ言ってやがる。
だけどあいつと距離が離れたのは助かった。これで、少しだけ光明が見えたぞ。

「ブレイブハート、モード2」

《Ｆｏｒｍ　ｃｈａｎｇｅ．　Ｆｏｒｍ”　Ｂｕｓｔｅｒ”．》

ブレイブハートを支えにして、悲鳴を上げる体を無理矢理動かして立ち上がる。
そして、砲撃戦用の“バスターモード”へとブレイブハートの形状を変化させ、構えた。右手は使い物にならんから、左脇に挟む形で固定する。
普通に撃って効かないなら、高威力で一気に決めれば……！

「ロードカートリッジ！」

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．》

薬莢が3つ吐き出され、ブレイブハートの先端に真紅の魔力が集まっていく。
後はディレトをバインドで固定して……って。

「なん……だと……」

視線を動かせば、ディレトは俺を投げ飛ばした場所で動く様子も見せずに髪を弄っている。

そして俺の視線に気付いたのか、俺の目を見るとにっこりと微笑んだ。

「ああ。避けませんから、バインドする必要はありませんわよ？」

「……そうかい！！」

舐めてるんだろうが、それならそれで好都合。

一発で決めてやる！！

「ディバイン……バスタァァァッッッ！！！！」

慣れない体勢で撃ったから多少狙いは逸れたが、それでも俺の砲撃は真っ直ぐにディレト目掛けて飛んでいく。

ディレトは本当に避ける気配を見せない。

もらった、これなら――！！

「ＩＳ“キャンセラー”……起動」

その声は、ディバインバスターの爆音にかき消されることなく、何故か俺の耳に確りと届いた。

刹那、ディレトの目前まで迫っていた砲撃が、根元から一瞬で“掻き消えた”。

途中でシールドに防がれて届かなかったとか、相殺されたとか、そんなんじゃない。

まるで最初から何も起きていないように、完全に消えたのだ。

「あ……え……？」

「万策尽きたようですわね」

あまりの事に事態が飲み込めず呆然としていた俺に、ディレトが肉薄して右足を振り上げた。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．》

咄嗟にブレイブハートがシールドを張ってくれるが、ディレトの蹴りはシールドを簡単に叩き割り、そして俺のわき腹にめり込みながら――

ベキンッッ

ブレイブハートを、へし折った。

第３６話　『悪夢　１』（後書き）

バトル描写は難しすぎる。
どうも、ラモンです。

えー、暫くハヤトは後書きに登場しません。
なのでゲスト招待も暫くはお休みします。どシリアスな本編の空気をあまり壊したくないと思ったもので。すいません。

どシリアスな『その日、機動六課』編が終わったら、またボチボチ招待して行きたいと思います。
主演希望をして頂いた作者様方、申し訳ありませんがもう暫くお待ちくださいませ。

それと今回、ちょっと痛い表現をしたのですが、これくらいだったら『残酷な描写あり』にしなくてもいいですかねぇ？
一応残酷描写かな？　と思ってタグつけたんですけど……。
どの程度からが残酷描写なのかがわかりません。

あとバトルシーンの書き方がわかりません。
色々小説読んだけど、よけいにこんがらがって困りましたｗ

それと、ギンガファンの皆様。ギンガが噛ませ犬になってしまってすいません。
他にいい人材がいなかったんです……平にご容赦を。

最後にちょっと質問です。

ディレトのオリジナルＩＳ、“エクスプロード・アイ”と“キャンセラー”の細かい解説についてですが。

・作中で語られるまでネタバレ無し

か、

・いいからさっさと喋っちゃえＹＯ

のどっちが希望でしょうか？

希望が多かった方でいこうと思ってます。

もし、さっさと解説が多かった場合、次回の後書きで解説大会を行いますんで。

それではまた、次の話で。

※蛇足。

今回のタイトルで某種運命を連想しちゃった人は、罰として腹筋３００回しておいてくださいｗ

第37話　『悪夢　2』（前書き）

※今回の話も、人によっては“痛い”と思う表現や、気分を悪くする表現が含まれています。
そういったのが苦手な方は気をつけてください。

第３７話　『悪夢　２』

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

合流地点に向かって走る、走る、走る。
さっきから酷くなるだけの胸騒ぎを振り切るように全力で、ただ前だけを見て走る。
ハヤトもギンガさんも、もう合流地点にいると信じて走る。

「ティア、ハヤトとギン姉……大丈夫だよね」

「当たり前でしょ。いいから急ぎなさい」

「う、うん……」

何度目になるかわらかないスバルの質問に、素っ気無く返す。
悪いとは思うんだけど、正直あたしもそんなに余裕が無い。
さっきから胸騒ぎが酷くて、下手したら直ぐにハヤトを探しに行きたくなるのを、必死で抑えているんだから。

（大丈夫。きっと、大丈夫）

我ながら、笑っちゃうくらい効果の無い気休めを自分に言い聞かせる。

そうでもしなきゃ、デバイスをスバルに預けてハヤトを探しに行きたくなってしまうから。

「……急ぐわよ、皆！」

「うん！」

「「はい！」」

頭を振ってそんな考えを頭から追い出し、スバル達に声をかける。

合流地点まであと少し。

きっと、そこにハヤトとギンガさんが待っていると願いながら。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第３７話　『悪夢　２』

蹴り飛ばされて地面と2，3回キスをしながら転がり、壁にぶつかって止まる。

直ぐに立ち上がろうとして、足に全く力が入らず膝をつく。

「う〝……おえ〝ぇ〝っ！！」

逆流してきた胃の中身を、ビシャビシャと音を立てて吐き出す。
口内のどこかでも切ったのか、それには血が混じっていた。

（本来なら、内臓の損傷を疑う場面なんだけどな……っ）

それは無いと、こんな状況でも冷静な自分が言う。
アイツ――ディレトは俺を甚振って遊んでいる。少しでも長く苦痛を与えて、俺が足掻く様を楽しんでいる。
だから奴は絶対に致命傷にならないよう、ギリギリで手加減してやがる。
こっちは全力だってのに、だ。

「げほっ……う〝ぇ〝……」

胃の中身を殆ど吐き出し、咳き込む。
胃酸特有のツンとした臭いがして、また吐き出しそうになるのを必死で堪えた。

「……ブレイブ、ハート……状態は？」

喉元まで昇ってきていた胃酸を無理矢理飲み込み、左手に握った、柄の折れたブレイブハートに尋ねる。

《（ザザッ）本体損傷率４３．７％、まダ（ザッ）戦えマす》

「……そうか」

口元を拭って、壁に左手をつけながら立ち上がる。
しかし、またすぐに膝をつきそうになって、慌てて背を壁に預けて支えた。
息を整えて自分の体の状態を簡単にチェックする。

右手は……駄目だ、使い物になんねぇ。
骨と内臓は……問題なし、か。アレだけやられてんのになぁ、手加減してもらってるお陰か畜生が。
魔力は殆ど空。あと砲撃が2，3発撃てりゃいい方だな。

「ったく、このままぶっ倒れていいなら、迷い無くそうするんだけどよ……」

正直な話、このまま倒れて気を失えればどんだけ楽だろう。
あいつ等だって、目的は『俺を痛めつける』とか言ってたから、気を失っちまえばそこで終わる筈だ。
大体にしてキャラじゃねーんだよ。あんな強い奴と真正面からやりあって、ボロボロになってそんでも立ち上がるとか、まるっきり

ゲームの主人公じゃねぇか。
モブキャラその1の俺なんかがやるべき役割じゃないっての。

「ホント、キャラじゃねぇ」

苦笑しながら呟いて、もう一度だけブレイブハートを構える。
多分、次倒れたらアウト。もう立てないだろうな。
それまでにティアナ達と連絡がつけば、まだ望みはある。連絡がつかなきゃ……ギンガが死ぬ。
どうしたもんかと思ったその時――

『――ヤト、ハヤト！　ギンガさん！』

ノイズ混じりの、聞きなれたオレンジ頭の声が聞こえた。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

『うっせーよ馬ァ鹿。耳元で、騒ぐな』

「ハヤト!?　大丈夫なの!?」

なのはさん達と合流して預かっていたデバイスを返してから試した通信は、ようやくハヤトに繋がった。
ホッとして声を上げたあたしに、ノイズ混じりのハヤトの声が答える。

『大丈夫……じゃねぇな。戦闘機人2名と交戦中、ギンガが重症で、俺も結構ヤバイ』

「!!」

その報告に、思わず息を呑む。
ここに居なかった時点である程度のことは覚悟してたけど、ハヤトの報告は予想していたよりも遥かに悪かった。
スバルは顔を真っ青にして呆然としてる。まさか、ギンガさんが重症なんて……。

「ギンガさんはどんな感じなの?」

『今はブリッツキャリバーが生命維持に専念してる。けど、あんま長くはもたない。場所はE－45――っ!!（ブツッ）』

「?　ハヤト?　ちょっと、どうしたの!?」

話の途中で、唐突に通信が途切れた。
驚いて何度も話しかけるけど、全然反応が無い。
まさか――。

「グリフィス!?　どうしたの？　通信が……」

あたしが最悪の想像をした時、フェイトさんが声を上げた。
それに続いて、ノイズ混じりのグリフィスさんからの通信があたし達の耳に入る。

『こちらロングアーチ。現在、ガジェットとアンノウンの襲撃を受けています!
（ザザッ）何とか持ちこたえていますが……もう!』

「「「「「「!!」」」」」」

予想外の言葉に全員が息を呑んだ。
地上本部だけじゃなくて、六課まで!?
ハヤトの危機と、六課襲撃。いきなりすぎる事態に動揺するあたし達に、なのはさんが指示を飛ばす。

「分散しよう。スターズはハヤト君とギンガの救援と、襲撃戦力の排除。
ライトニングは六課に戻る。いい？」

「「「「はい！」」」」

その言葉に頷いて、あたしとスバルはハヤトから聞いた場所に向けて駆け出す。

――嫌な胸騒ぎは、酷さを増していく。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「人が話ししてる時は、邪魔すんなって教わらなかったか？」

ハヤトの瞳が、右手を振り切った格好になったディレトを見据える。

振り切られた右手の指には長い爪状の刃が伸び、それをハヤトの血が濡らしていた。

「あら、ごめんあそばせ。私（わたくし）と遊んでいる時に、他の方とお喋りをしているものですから、嫉妬してしまいましたの」

「嫉妬で人の顔に傷つけんなよ。いい男が台無しじゃねーか」

皮肉げに言い返すハヤトの左頬と額は裂け、そこから流れた血がハヤトの左目を塞ぐ。

そんな彼を眺めながら、爪を濡らす血を舐めて恍惚とした表情でディレトが頬を染める。

「ああ、いいですわ。そんな様でまだ強がりを言うなんて。やはり殿方はそうでなくては」

「そうかい……」

「その強がりがどこまでもつか……試させて頂きましょうかっ！」

「！」

ディレトが弾けるように走り出して距離を詰める。

頭の中では反応できていたが、ダメージを受けたハヤトの体はそれに追いつかない。

自身の頭の中で描いたのは後ろに跳ぶことだったのだが、体が取

った行動は少しだけ上体を逸らすだけ。瞬間、胸に焼けるような熱が走り、バリアジャケットが裂け、ハヤトの胸に４本の赤い線が走った。

「く……っ」

《ＡｘｅＬ　ｓＨＯｏｔｅＲ》

「“キャンセラー”！」

反撃の為に真紅の弾丸を撃ち出すが、それは砲撃の時のようにディレトに届く前に消え去り、名残となる風だけが彼女の髪を揺らす。

舌打ちするハヤトを笑いを貼り付けた顔で見つつ、ディレトは振り切った刃を彼の右肩に突き刺す。

「ぐぁっ！！」

「うふふふ……ドクターが貴方に拘る理由が少しだけわかったかもしれませんわね。

この苦痛を、恐怖を、絶望を！　精神力だけでねじ伏せ、現状を打破しようと考えられる！

ハヤト様、貴方は素晴らしい“玩具”でしてよ！！」

興奮して喋るディレト。その姿は、まるで欲しがっていた玩具を買って貰えた子供に似ていた。

「さあさあ！　もっとその醜く美しい姿を見せてくださいな！！」

「が……ぁっっ！！」

言いながら、ハヤトの右肩に食い込んだ爪で肉を抉っていく。

だが、それは彼が狙っていることでもあった。

（連絡は取れた。ならあとはこうやって時間を稼いでいれば、そんなにしないで隊長たちがこっちに来る。そうすりゃ、逆転の目は必ずある！）

少ない勝算に賭け、己が身を犠牲にして時間を稼ぐハヤト。

そんな時、今まで壁に寄りかかり、黙して語ろうとしなかったチンクが口を開いた。

「ディレト、あまりやりすぎるな。

ドクターは“短い期間で完治する程度に”と言っていただろう？」

「あら？　でもどうせ右手は潰してしまいましたし、右腕は使い物になりませんからいいじゃありませんの」

「ディレト。あまり我侭を言って姉を困らせるな」

「う……わ、わかりましたわよ」

強い調子で姉に言われ、しゅんとしてハヤトに突き刺していた爪を引き抜く。
そして、呻くハヤトを再び蹴り飛ばしてからチンクの側まで歩み寄った。

「それでお姉様、この後はどうしますの？」

「ちょっと待て……今、ディード達から連絡がきた。
“器”の確保に成功したそうだ。Sランク魔導師も動き出しているようだし、我々もタイプゼロ・ファーストを回収してから退くとしよう」

「はぁい。もう、折角面白くなってきましたのに」

口を尖らせ、詰まらなさそうに呟きながらギンガへと近寄る。
そして、苦しげに浅く息をしている彼女をその黄金の瞳で見つめ、口を開く。

「IS起動、“エクスプロード――「ディバイン、バスターーーーッッ！！」――っ！？」

それを掻き消すかのように、真紅の砲撃が彼女目掛けて飛来した。
ディレトは驚いた顔をして砲撃を見る。そして――

「シールド！」

その砲撃を、無力化せずに『シールドで防いだ』。

橙色のシールドに真紅の砲撃がぶつかり、風圧で吹き飛んだ瓦礫がディレトの頬に当たって傷をつける。

「……っ！」

砲撃を防ぎきったディレトが、初めて見せる怒りの瞳で砲撃を放った者――ハヤトを睨む。

その視線の先では、最早立つ力も残っていないのか、壁に上体を預けたままブレイブハートを構えているハヤト。

しかし、今の砲撃が最後の力を振り絞った攻撃だったのか、ディレトの見ている前でハヤトのバリアジャケットが消え、構えていた左手が力なく地面に落ちる。

「……はぁ」

それを見て一度大きく息を吐き、ディレトは余裕の表情を取り戻して口を開く。

「わかりませんわね。バリアジャケットを保てない程に消耗し、ダメージのせいで碌に動くことも出来ない。

そこまでして、何故ハヤト様はこの旧型を庇いますの？」

言いながら、倒れているギンガの髪を無造作に掴み、引き上げる。
意識の無いギンガの口から小さく声が漏れ、まだ彼女が生きていることを告げている。

「……そんなん、仲間だからに、決まってんだろ」

「解せませんわ。ここは戦場ですのよ？　人が死ぬのは当たり前じゃありませんの。
そこまでしてこの旧型を庇うなんて、愚かしいですわ」

「うっせぇ……お前にゃ、関係……ねぇだろ」

バリアジャケットを失い、何の防御力も持たない普通の服のまま、言うことを聞かない足を殴りつけて立ち上がる。
だが、力の入らない足はガクガクと震え、ちょっとした衝撃でまた倒れてしまいそうだ。
何とか立ち上がり、ぼやける視界でディレトを見て、全体にヒビが入り、火花を散らしているブレイブハートを構え、魔力弾を展開した。

「悪ぃけど、もう少しだけ付き合ってもらうぜ」

「……勇ましいですわね。ですけどハヤト様、ひとついい事を教えて差し上げましょう」

言葉が終わるより先にディレトが動く。
瞬きをする間にハヤトとの距離を詰め、その耳元で囁くように言葉を続けた。

「弱者に、弱者は救えなくてよ」

囁きと共にハヤトを衝撃が襲う。
何をされたのかも理解できないまま、ハヤトの意識が刈り取られた。

「……か……はっ……」

「ギン姉！　ハヤト！！」

意識を失う直前、ハヤトはスバルの声を聞いた……ような気がした。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

「ギン姉……、ハヤト……！」

祈るような気持ちで呟きながら、急ぐ。
全速力で走っている筈なのに、進むのが凄く遅く感じる。

『スバル！　先行しすぎ！』

「ごめん！　でも、大丈夫だから！」

ティアの言葉に答えるけど、実際は殆ど聞いてない。
ギン姉が重症だって、ハヤトは言ってた。そして、ハヤトも結構危ないって。

「そんな事ない。きっと、いつものハヤトの冗談なんだ」

そうだよ。あのギン姉とハヤトがそう簡単にやられる訳がないもん。

きっと2人でグルになって、あたし達を驚かそうとしてるんだ。

きっと、向こうに着いたら戦闘機人を捕まえて、いつもみたいに意地悪に笑って「おっせーよバーカ」って言ってくれる。

「そうだよね……ハヤト、ギン姉」

そうあって欲しいという願いを込めて、もう一度2人のことを呼ぶ。

E－45に近づくにつれて強くなっていく胸騒ぎを振り切るように、少しでも速く走る。

そして――

「ギン姉！　ハヤト！！」

2人に聞こえるような大声で名前を呼びながら、E－45に飛び込んだ。

side：スバル＝ナカジマ　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

飛び込んできたスバルの目が最初に捉えたのは、血に塗れて倒れているギンガ。
次いで彼女の目に映ったのは――ボロボロの制服姿で、ディレトに頭を掴まれ、力なく両手をぶら下げているハヤト。

「あ……あぁ……」

目の前の光景が信じられないのか、スバルが目を見開いて声を漏らす。
そんな彼女を見て、ディレトが口を開く。

「あら？　随分と遅かった……いえ、ギリギリ間に合ったのかしら？」

左手にハヤトの頭を掴んだまま、スバルに体を向けて感心したような顔になる。
だが、スバルはそんなディレトのことなど視界に入っていない。

スバルが捉えているのは、ボロボロになった自分の姉と、想い人。

「ハヤト様、何か目的があるとは思いましたが……なるほど、貴女を待っていらしたのね」

「……っ！」

ディレトの口から漏れたハヤトの名前に、スバルの体が震えた。

「……お前が、やったのか？」

「え？　何か言いまして？」

「お前が、やったのか？」

もう一度、今度ははっきりと漏れた言葉。

それを聞いたディレトは、誇らしげに胸を張って高らかに声を上げる。

「ええ。私（わたくし）がハヤト様と、そこのタイプゼロ・ファーストを使って遊ばせて頂きましたわ。

ファーストはさして楽しめませんでしたが、ハヤト様は随分と足掻いて、楽しませてくださいましたわよ？」

「……っっ！！！」

その答えを聞いて、スバルの中で何かが切れた。

「お前ぇぇぇぇぇぇぇっっっっ！！！」

怒りの咆哮と共にスバルの瞳が青から金色へと変わり、爆発するかのように青い魔力が噴き出す。

それは、ディレトを一瞬とはいえ圧倒する程の魔力の奔流。

「あらあらまあまあ！
最初に見た時はゴミだと思っていましたが、とんだ隠し玉じゃありませんの！」

しかし気圧されたのは一瞬。

ディレトはすぐに嬉しそうな顔になり、目を輝かせて叫んだ。

「感謝しますわハヤト様！　貴方が引き止めてくれなければ、セカンドの相手をする前に帰ってしまうところでしたもの！」

嬉しそうな叫びながら、左手に掴んだハヤトを抱きしめるディレト。

「離せ……」

怒りを押し殺した声と共に、右手のリボルバーナックルから薬莢が４つ吐き出され、火花を上げながら回転を始める。

「その手を……」

体を前傾にし、走り出す構えを取る。
そして――

「離せえええええええっっっっ！！！」

雄叫びと共に地面を爆発させ、弾丸のような速度で走り出す。
それを嬉しそうに眺めつつ、ディレトは自分の周りに魔力弾を展開する。

「ブレイクシューター！！」

ハヤトと戦っていた時とは比べ物にならない数の魔力弾が、スバルの視界を覆うようにして襲い掛かる。

「うあああああああっっっっ！！！！」

体を削る魔力弾など気にせず、ただひたすらに直進し続ける。
弾丸の雨を抜け、ディレトの目前へと躍り出て、振り上げたナックルを振り下ろそうとした。

「あら？　ハヤト様を殴るのかしら？」

「――っっ！？」

その瞬間、ディレトが抱きしめていたハヤトを離し、スバル目掛けて突き出した。
反射的に拳を止め、その場で急停止するスバル。そして、その隙をディレトは見逃さない。

「ほら、お返ししますわよ！」

「！」

スバル目掛けてハヤトを投げつけ、受け止めたスバルの体勢が崩れた瞬間に、彼女の後ろの空間を“見る”。

「ＩＳ“エクスプロード・アイ”」

「きゃああっっ！？」

ディレトの言葉に呼応して空間が爆発、スバルが防御も出来ずに吹き飛ばされる。
それを見ながら、間髪入れずに追撃しようと動くディレトに、チンクの声が飛んだ。

「ディレト！　そっちは放っておけ！
エースオブエースがこっちに来ているようだ、いい加減に退くぞ！」

「っ」

その声に足を止め、眉を潜めてチンクを振り返る。

「そんなぁ！　これからが面白いところですのに！」

「いい加減にしろ！」

「うぅ……もう！　ＩＳ“エクスプロード・アイ”解除！」

不満そうな顔のまま、ディレトはチンクの側まで跳ぶ。

「また機会はある、今日は十分に遊んだだろう？」

不満げな妹に苦笑しながら、そう言って宥める。
ディレトはそんなチンクに「そうですけれど……」と返そうとして、途中でやめて溜息を吐いた。

「わかりましたわ。元々タイプゼロ・セカンドの乱入は予定外でしたし、今回はこれで我慢しますわよ」

「いい子だ。聞き分けの良い子は、姉は好きだぞ」

誉められて気を良くしたのか、嬉しそうに微笑んでからチンクの手を握る。
そこで、思い出したように遠くで倒れているギンガを見た。

「ファーストはどうしましょう？　回収しますの？」

「放っておけ。ドクターからは無理に回収しろとは言われていないしな」

「了解ですわ。それでは……ＩＳ“ディープ・ダイバー”起動」

ディレトが呟くと、２人の体がまるで水に沈むように地面へと沈んでいく。
そして、そのまま傷一つ付けずに地面の中へと消えていった。

「う……」

その少し後、スバルが目を覚ます。
損傷が酷いらしく、思うように動かない体を何とか動かして上体を起こしてあたりを見る。
程なく、近くに倒れているハヤトを見つけ、足を引きずるようにして近づいていく。

「ハヤト！　ハヤト！！」

うつ伏せに倒れているハヤトの側に屈みこんで、体を揺する。
災害救助の訓練で、重傷者に対する対処はある程度知っていたが、今のスバルの頭からは完全に抜け落ちている。
ただひたすらに、好きな人の安否を心配する少女の姿がそこにあった。

「ハヤト！　ねえ、返事してよぉっ！！」

スバルの悲痛な叫びが、瓦礫だらけになった空間に木霊した。

ｓｉｄｅ：―　了

第37話　『悪夢　2』（後書き）

ディレトがどんどん人でなしになっていくような……。
どうも、ラモンです。

これで一応『その日、機動六課』編は終わりですかね。
ライトニングの方は……アニメで補完しておいてください。
そっちまで書く余裕がありませんでした（笑）

今回、スバルを暴走させるかどうか凄く悩みました。
スバルルートだったら、迷い無く暴走なんですが、なにぶんティアナルートでしたので。
ティアナが暴走する方も考えたんですが、ティアナを先行させる方法が思いつかくてボツになりました。
そのせいで、ラストでスバルがヒロインっぽくなってしまった……。
ローラーとか卑怯だよ！！

今回ディレトの弱点（？）のヒントが出しました。
まあ読めばわかると思いますが、弱点なのかどうかわからない弱点です。
さて、ここをどうやって突けばいいのかなぁ……（遠い目）
とにかくこれで戦闘シーンの連続は終わりです。どシリアス自体は暫く続きますが、次からは少しだけ楽になる……といいなぁ。

ちなみにハヤト、文章上ではフルボッコですが、実際は右手以外はそんなに酷い怪我じゃありません。
打撲と擦過傷、あとは切られた傷ぐらいですので、治癒魔法込みで1週間もしないで回復できます。右肩も骨とかには異常ないんで。
何というご都合主義！

ご都合主義が嫌いな人はごめんなさい！　でも、最終決戦で主人公リタイアしてるのってダメだと思うんで勘弁してくださいね。

次回からは心理描写をメインに書く回が続きそう……うぅ、難しいなぁ。

何でこんな展開にしたんだろう……。

まあ、頑張ります。

それと次回から後書きゲストを復活させます。

次回のゲストは！

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～

より、主人公のリオス＝コーネルドさんです！

お楽しみ（？）に！

まあ、相手はハヤトじゃないですけどね（ニゴリ）

それではまた、次の話で。

感想、批評、誤字指摘などお待ちしてます。

第３８話　『折れた心、蠢く闇　１』

目の前で、ディレトが嗤う。
楽しくて仕方なさそうに、面白くて仕方なさそうに。
その嗤い声は、まるで新しい玩具を買って貰った子供の声に似ていて、酷く耳障りだ。

嗤いながら、爪状の刃を装備した右手をボロボロになったギンガに向け、振りかぶる。
それを止める為に走り出すが、ディレトとの距離は全く縮まらず、むしろどんどん開いていく。
そして、そんな俺を見ながらディレトの口が歪み、そこから言葉が漏れる。

『弱者に、弱者は救えなくてよ』

呪詛のような声でそう言って、ディレトの手が振り下ろされる。
届かない距離だと理解しているが、それでも俺はそれを止めようと精一杯に手を伸ばして――

ゴンッ！！

「ぐぁっ！？」

一瞬の浮遊感の後、顔が何かに思い切りぶつかった。
痛みに目を開けば視界一杯に白い床。ディレトの姿なんてどこにも無い。

「……、あー……」

そこで、ようやく思い出す。
ここ病院だっけ。

「ギンガやスバルと一緒に保護、されて……。そんで、病室に押し込められたんだっけ、な……」

右腕以外は打撲だけで脳波にも異常は無かったけど、念の為に検査入院、だったか。
そんで、俺も結構ボロボロだったのに、ギンガの無事がわかるまで動かないとか騒いでたら、鎮静剤打たれてそのまま寝ちまったんだっけ……。

「……ははっ、なっさけねぇ」

逆エビみたいな格好のままで、夢を思い出して笑う。
ホント情けねぇ。
ギンガをあんなザマにされて、必死で守ろうとして、でも戦いにすらならなかった。

「つーか……敵としてすら、見てくれてなかったもんな……あははっ」

必死に抵抗している間、ディレトは一度も俺を“敵”と呼ばなかった。
アイツはずっと俺のことを“玩具”って呼んでいた。つまり俺の必死の抵抗は、アイツからすれば、捕まえた虫が抵抗するような、その程度のことだったんだ。

「そりゃ、あんなこと言われもするわ……」

頭の中に、夢の中でも言われたディレトの言葉が蘇る。
弱者に弱者は救えない。
その通りだ。アイツに言われなくたって、そんな事痛いほど理解してる。

「……ふ」

だってのに、何故か涙が出てきた。

何泣いてんだよ俺。あんな事言われるのなんて、慣れてるじゃねーか。
事実なんだし仕方ねぇだろうよ。
俺は凡人で才能も無い、“普通”の魔導師なんだから。
むしろ手加減されてたとはいえ、あんな規格外相手にあれだけ時間稼げりゃ上等だろうよ。

「……ふぎっ、っぐ……えっ」

頭の中の俺がそう言うけど、涙は止まらない。
必死に歯を食い縛って、泣き声を噛み殺す。

「……ふ、げほっ！　ごほっ！」

鼻水が気道に入って、咳き込む。
その拍子に、逆エビ反りになってた足もベッドから落ちて、床にぶつかった。

「へへ……っ、何、泣いてっ、んだよ……。バッカじゃ、ねーの……ぅぐっ」

笑い飛ばそうとしても、涙はとめどなく流れて頬を濡らす。
俺は、せめて誰にも見られないように、聞こえないようにと、頭

を抱えて蹲った。

「……っひ、うえぇ……っ」

俺は弱い。弱いから、一人じゃ何も出来ない。
アイツも倒せなかったし、ギンガを俺の手で助け出せなかった。

わかっている。
そんな事、わかっているんだ。
なのに――

「……クショウ、チクショウ……ッ」

それなのに――

「……何で俺は、こんなに弱ぇんだよ……ッッ！！」

突きつけられた現実が、悔しくて、情けなくて、堪らなかった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第３８話　『折れた心、蠢く闇　１』

side:―

地上本部、そして六課隊舎が襲撃されてから半日。
危険な状態だった隊員達も峠を越し、事態は一時的な終息を見た。
そんな中、スバルはギンガが眠っている集中治療室で、様々な機器をつけられた姉の側に居た。

「……ギン姉」

危険な状態は脱したとはいえ、意識が戻らないうちは安心できない。
ギンガの右手を自分の両手で包むようにして握り、祈るような気持ちで名前を呼ぶ。
その時、病室のドアが開いて、ドアの向こうからティアナが顔を出した。

「ティア」

「……なんて顔してるのよ、もう」

顔を上げたスバルを見て苦笑しながら、彼女の隣に立ち、眠って

いるギンガを見る。

「ギンガさん、どう？」

「一応峠は越えたみたい。けど、意識が戻るまでは安心できないって、マリエルさんが」

「そう……」

悲痛な顔で答えるスバルに頷きを返し、持っていた袋から買ってきたマフィンを取り出して、彼女に手渡す。

「ほら、差し入れ。どうせ何も食べてなかったでしょ？」

「あ……うん。ありがと」

それを受け取ろうと伸ばしたスバルの左腕から、機械のモーター音に似た音がする。その音と、動いた左腕を見て、ティアナが口を開いた。

「腕、もう動かせるの？」

「うん。神経ケーブルがいっちゃってたから、まだ少し変だけどね。マリエルさんの話だと、数日で元通りになるみたい」

「そっか」

頷くティアナに、受け取ったマフィンを一口食べてからスバルが言葉を漏らす。

「ティア、ごめんね」

「何に対してのごめんよ？　先行しすぎたこと？　大怪我して、皆に心配かけたこと？」

「えと……色々」

「……謝るくらいなら、さっさと傷を治して、仕事手伝いなさい？　ハヤトも居ないし、シャーリーさん達も入院してるしで、結構大変なんだから」

沈痛な表情で謝ってきたパートナーの額を軽く叩いて、努めて明るく返す。

そんなティアナの言葉に、スバルは苦笑して頷いて見せた。

「そういえば、チビッ子達はどうしたの？　確か、エリオはアンタと同じ病室だったでしょ？」

そこで話は終わりと、ティアナが話題を変える。

スバルもそれを察したのか、特に不思議がることもなく口を開い

た。

「2人とも、ハヤトの様子見てくるって。あたしは、起きて直ぐにこっちに来たんだけど」

「なるほど。道理でアンタの病室に行っても、誰も居ない訳よね」

「あ、ごめんね。ティアが来るなんて思わなくて」

「いいわよ。それじゃあ、アタシも一応ハヤトの様子、見てくるわ。スバルはどうする？」

「あたしは……ここにいるよ。ギン姉についててあげたいし」

その返事に「そっか」と頷いて、ティアナはドアに向かって歩き出す。

そしてドアを開くと、振り返ってスバルに声をかけた。

「アンタも少しは休みなさい。

ギンガさんが起きた時に、アンタが倒れてたら心配しちゃうでしょ？」

「……うん。ありがと」

「お礼はいいから、ちゃんと休みなさい。いいわね？」

スバルの返事に笑って答え、ティアナは部屋を出て、ドアを閉めた。

◇◇◇◇◇

ハヤトの部屋の前で、エリオとキャロは戸惑っていた。彼の様子を見るために中に入ろうとノックをしたら、返ってきたのは「今は、駄目」という拒絶の言葉。

まさか断られるとは思っていなかった2人は思わず顔を見合わせて、ドア越しにハヤトに話しかける。

「兄さん、何かあったの？」

「何もねぇって、心配すんな」

「じゃあ、何で入っちゃ駄目なんですか？」

「ちょっと今、寝起きで色々酷くてな。人に見せられる顔じゃねーの」

聞こえてくる声は、いつものハヤトの声。

しかし、エリオもキャロも、その声がどうしようもなく自分たちを拒んでいると気付いてしまう。

「お兄ちゃん、私達、そんなの気にしませんから」
「うん。だから、入ってもいいでしょ？」
「だーめ。こんな顔見られたら、恥ずかしくてお婿に行けなくなっちまう」
どれだけ言い募っても、返ってくるのは拒絶だけ。
その拒絶に、2人の脳裏で拒絶された過去がフラッシュバックした。
エリオの脳裏には、自分を“紛い物”と言った局員の顔が。
キャロの脳裏には、自分の力を“忌むべき物”と言った人たちの顔が。
「兄さん！　お願いだから入れてよ！」
「お兄ちゃん！」
だから、ここが病院だと言うことも忘れてドアの前で大声で叫んだ。
そしてハヤトの真意を確かめようと、彼の拒絶を無視してドアを開けようとした――瞬間。
「やめろっっ！！！」

「「っ！」」

今まで2人が聞いたことも無いような、ハヤトの怒声が響く。
その声に、エリオとキャロは身体を強張らせ、小さく息を呑んだ。

「……悪い。でも、暫く1人にしてくれ……頼む、から」

「兄さん……」

「お兄ちゃん……」

謝罪と共に聞こえてきたのは、いつものハヤトからは考えられない程に弱々しい声。
聞こえてきた声に、2人はそれ以上言葉を発することが出来なかった。

「頼むよ。エリオ、キャロ」

「……エリオ、くん」

「……うん」

小さい声で告げるハヤトの言葉に、今の自分達にはどうしようもないのだと理解し、キャロが泣きそうになりながらエリオの服の裾

を引っ張る。
エリオもそれに頷き、泣きそうな顔のまま、ドアの向こうのハヤトに声をかけた。

「兄、さん……じゃあ、僕達、部屋に戻るね。また、後で来るから……」

「……ああ」

「お兄ちゃん、何かあったら、言ってくださいね？」

「……ああ」

目に涙を溜めて、それでも気丈に声をかけた2人。
それでも、返ってきたハヤトの答えは冷たく、短いものだった。
エリオとキャロは、泣き出しそうになるのを一生懸命に堪えてドアに背を向け、2人で寄り添うようにエリオの病室に向かって歩き出そうとした。

その時、2人が向かおうとした先から、見知った人物が歩いてきた。

「エリオ、キャロ？　どうしたのよ？」

「「ティア、さん……」」

泣きそうな顔をした2人を見て、歩いてきた人物――ティアナが、驚いた顔で声を上げた。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：ディレト

調整用の寝台から身体を起こして、2，3回手を握ったり開いたりする。

うん。昨夜のお姉様たちのデータのお陰で、更にいい感じになりましたわね。

「どうだいディレト？　動作データが蓄積されて、更にスムーズに動けるようになったと思うのだけれど？」

「ええ。勿論ですわドクター。

だって、お姉様達の動作データですもの。よく馴染んで当然ですわよ」

「ふふふ……そうだろう、そうだろうともさ。これで、君はまた『究極の兵器』へと近づいた。誰も成し得なかった、あのアルハザードの遺物さえ超える、史上最高の兵器へとね！！」

私（わたくし）の返事に、ドクターが嬉しそうに顔を歪めて笑う。

そんなドクターを見ながら、調整用の寝台から降りて、ウーノお姉様からボディスーツを受け取って装着する。そこで、ふと気になったことをドクターに尋ねてみた。

「そういえばドクター？　気になっていたのですけれど、何故ハヤト様を殺してはいけなかったんですの？

別に、あそこで殺してしまっても問題は無かったでしょうに」

「彼の事かい？　何、彼の命は、最も有効な戦局で使おうと思ってね」

「有効な、戦局？」

「そうさ」

ドクターは頷いて、手元のパネルを操作してハヤト様を始めとした、機動六課の構成員の顔写真をモニタに映した。

？　何をしているのかしら？

「私の開催する祭りで、おそらく最も障害になるのは彼女達だ。

そして……ドゥーエからの報告によれば、その中で中心となって

いる人物は４人」

説明と共に、夜天の主、エースオブエース、雷神、そしてハヤト様の顔写真が拡大される。

「それは理解していますわ。ですから、何故その中心となっているハヤト様を殺してはいけなかったんですの？」

「まあまあ、結論を急いではいけないよディレト」

「むぅ……ドクターのお話は回りくどすぎですわ。それでは、聞いている人が飽きてしまいますわよ？」

「ディレト、口を慎みなさい」

「はっはっは。構わないさウーノ。まあ簡単に説明するとだね……」

ドクターがまたパネルを操作して、今度はモニタに４本の柱と、それに支えられている鉄板を映し出した。

「彼女達４人がこの柱、そして機動六課がこの鉄板だとしよう」

「……」

「そして、前回の戦いでこの柱のひとつ、つまりハヤト君を排除したとしても――」

パネルの叩く音と共に、４本あった柱の一つが崩れ落ちた。
でも、鉄板は全く傾きもせずに3本になった柱の上に鎮座している。

「こんな風に、残りの3本が支えてしまう。
さあディレト。この鉄板を落とすためには、どうしたらいいかな？」

「馬鹿にしないで頂きたいですわね。そんなの、残りの柱もひとつ残らず崩してしまえば良いのですわよ」

「その通り。だが、崩そうにも、残りの3人は手強い。
ディレトを当てれば間違いなく勝てるだろうが、ディレトには他にやって欲しいことがあるからね」

「うぅ、さっぱりわかりませんわ」

全然わからず、首を捻っている私（わたくし）に構わず、ドクターは熱の篭った声で話を続ける。

「彼女達の心には、今回ハヤト君を痛めつけたことで“ディレト＝Bランク程度の魔導師ならば、簡単に死に至らしめることの出来る存在”という認識が植えつけられただろう。
そしてもしも戦いの最中に、ディレトが再びハヤト君と対峙しているところを見せたら……彼女達はどうするだろうね？」

「隙が出来る……ということですか？」

「その通りだよ、ウーノ」

「？」

「ハヤト＝ロックウェルは、エースオブエース、夜天の主、雷神の3人に隙を作る為の道具、ということよ」

「えぇと……つまり、ハヤト様を殺すのは次のお祭りの時、ということですの？」

「……まあ、そういうことね」

なんとなく理解できたところを口にすると、ウーノお姉様が苦笑しながら頭を撫でてくださった。

……なんでしょう、何となく馬鹿にされてる気がしますわ。

「それだけではないよ。

戦いの最中に、圧倒的な力で彼（ハヤト君）を蹂躙するディレトの姿を管理局の連中全員に見せつけてやるのさ。

彼らはディレトに恐怖し、そして悉く戦意を失っていくだろうね」

「示威行為、というわけですか」

「少数で多数を相手にする時の基本だよ」

結局理解できない話になってしまって、つまらなくて口を尖らせる。

「あぁ、ごめんよディレト。そう機嫌を悪くしないでくれ」

「そうよディレト。これを機に、もう少し色々と勉強しなくては駄目」

「うー……お姉様もドクターも意地悪ですわ！」

口を尖らせてそっぽを向くと、ドクターが笑いながら私（わたくし）に銀色の指輪を差し出した。

ふん、そんな玩具で誤魔化されたりしませんわよ。

「そうへそを曲げずに受け取って貰えないかな。

完成が遅れてしまったが、これは君の“固有武装”なんだから」

「！！　本当ですの！？」

思ってもみなかったドクターの言葉に逸らしていた視線を思い切り戻して、銀の指輪を見る。

「これはねディレト。

セッテのブーメランブレード、ノーヴェのガンナックルにジェッ

トエッジ、ディエチのイノーメスカノンとウェンディのライディングボード、そしてディードのツインブレイズの6形態に形状変化する、君だけの固有武装だよ」

「6形態に形状変化……って、指輪ですけれど？」

説明してくださっているドクターから指輪を受け取って、それを指に嵌めながら尋ねる。

どうやっても、質量的に無理な気がするんですけれど……。

「その固有武装には、管理局員の使うデバイスの技術を流用していてね。

起動すれば、基本形態であるツインブレイズになるよ」

「デバイスの技術を流用、ということは……起動の仕方は、デバイスと同じですの？」

「ああ。君の魔力に反応して、起動するように造ってある」

ドクターの説明を聞きながら、指輪に魔力を通す。

すると、指輪に嵌められた紫の宝石が光り、そこから機械音声が流れた。

《Ｐｌｅａｓｅ　ｒｅｇｉｓｔｅｒ　ｎａｍｅ．（名称登録をしてください）》

「名前？　ドクター。これ、まだ名前が決まってないんですの？」

「ああ、君の固有武装なのだし、君に決めて貰おうと思ってね。好きに名づけるといい」

「そうですの？　それじゃあ……」

そこで言葉を切って、少し考える。

暫く使うことになる道具ですし、少しは思い入れのある名前にしましょうか。

そうですわね……ああ、丁度いい名前を思いつきましたわ。

「ハヤト様のデバイスの名前を少し借りて“イービルハート”にしますわ。

さあ、イービルハート！　起動なさい！！」

≪Ｈａｓ　ｃｅｒｔｉｆｉｅｄ．　Ｓｔａｒｔ　ｔｈｅ　Ｅｖｉｌ　ｈｅａｒｔ．

（認証しました。イービルハート、起動します）≫

起動の言葉と共に、銀の光を放ちながらイービルハートがその姿を変えていった。

side：ディレト　了

第３８話　『折れた心、蠢く闇　１』（後書き）

心理描写って、戦闘描写よりも難しいですね。
どうも、ラモンです。

ディレト
「イービルハートが手に入ってご機嫌の、ディレトですわ！」

ハヤトがお休みの間の代役とはいえ、何故お前を呼んだのか……。

ディレト
「あら？　私、こう見えて意外と尽くす女ですのよ？」

はいはい。
さて、じゃあ２話ぶりにゲストをお呼びしましょう。
今回のゲストは“魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～”の主人公、リオス＝コーネルド君です！

キランッ！
ドガシャアアアッ！！

うおぉぉっ！？

ディレト
「あら、着地失敗ですわね」

リオス
「ゲホッ、ゲホッ！
あの野郎！　いきなり転移魔法なんて使いやがって！」

あー、えっと、どうもリオス君。

リオス
「え？　おぉっ！？　ここは一体！？」

いや、“とある新人の日常”の後書きですよ。
そんで、リオス君は今回のゲストだったでしょ？

リオス
「そ、そういえばそうでした」

ディレト
「今回は私がお相手させて頂きますわね。リオス様」

リオス
「！？　な、何でディレトがここに！！？」

ディレト
「ハヤト様は現在激しく落ち込み中ですので、私がピンチヒッター、というヤツですわね」

リオス
「チェンジチェンジ！　怖いですよ！！」

大丈夫大丈夫。
このディレトは綺麗なディレトだから。

リオス
「ほ、本当ですか？」

ディレト
「大丈夫ですわよ。殺したりなんてしませんわ」

リオス
「不安だなぁ……ま、まあいいか」

さて、じゃあ本編の話だけど、いやー今回は難産でした。
何回書き直ししたか分からんね。

リオス
「そんなにですか？」

うん。まず、ハヤトをどう行動させるかで悩んだね。
『空元気で皆を励ます』か、『落ち込ませるか』の2択でさ、前者の方がハヤトっぽくはあるんだけど、後者の方が17歳の少年っぽいよなぁ……って感じで。

ディレト
「それで、結局後者にしましたのね」

そうね。
ハヤトっぽさよりも、少年っぽさを優先しました。
冒頭のくだりから考えても、こっちの方がしっくりくると思ったし。

リオス
「うーん……でも、エリオとキャロは可哀想ですね」

ディレト
「そうですわねぇ。ハヤト様に完全に拒絶されてしまいましたもの

ね。
　あの泣き顔にはゾクゾクしましたわ」

リオス
「（やっぱ怖いんだけど）……え、えーと！　他には何かあったんですか？」

あとは後半のディレトのくだりかな。
こっちは『ハヤトを殺さなかった理由』を説明するか、『ディレトの弱点』の説明をするかで悩んだ。
んで、ディレトの弱点は次回以降ハヤトに気付かせてやろうと思って、今回はハヤトを殺さなかった理由をチョイスしたのさ。

ディレト
「まあ、随分とこじつけでしたけれどね」

リオス
「うーん……確かに」

う、うるさい！
こういう理屈を考えるのは難しいんだよ！！

ディレト
「言い訳をしない！」

ごめんなさい。

リオス
「あはは……あ、後半で思ったんだけど、ディレトって意外とアホの子？」

うん。個人的には結構なアホの子。
セイン、ウェンディと並ぶね。

リオス
「それは……結構凄いね」

ディレト
「だ、れ、が、アホの子ですってぇっ！？」

リオス
「！？　い、いや僕は言ってないですよ！？」

俺も言ってないよ！？

ディレト
「問答無用！　イービルハート！！」

≪　Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　≫

ディレト
「ブレイクシューター！！」

リオス
「うわあああああっ！？」

よ、よし。ディレトの攻撃がリオス君のほうに行った！
そろそろ時間だし……リオス君！　最後に番宣どうぞ！！

リオス

「そ、それどころじゃないですよぉぉぉっっ！！」

ディレト
「あはははははは！　ほぉら！　逃げ惑いなさい！！」

番宣しなくていいの？

リオス
「うわっ！？　ちょっと掠った！！
く、くそぅっ！！　えーと、僕の出ている作品は、

“魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～”！

闇の書事件から１０年。管理局のエースであるなのは、フェイト、はやての3人は、部隊？機動六課？を創設する。
一方、六課への入隊を前に研修として任務に訪れていたスバル＝ナカジマとティアナ＝ランスターの二人は、記憶喪失の青年を保護するが……。

Ｓｔｒｉｋｅｒｓをベースにした二次創作ストーリーです！！
うわあああっっ！？」

番宣も無事（？）終了したし、最後にお土産かな。
おーいリオスくーん！　これお土産ね！！

（´・ω・、）つ【銘菓“シャ○印のきびだんご”】

リオス
「何その地雷！？」

はい、じゃあリオス君と一緒に転送しておくねー。
強制転送！

リオス
「え！？　ちょっ、これで終わ――」ピシュンッ

ディレト
「あぁ！？　ちょっと！　何しますの！？」

えーっと、それじゃあ次回のゲストは、

“魔法少女リリカルなのは　～転生した主人公は最強の設定を使う～”

より、氷上京谷さんを予定しています！

ディレト
「ちょっと！　無視しないでくださる！？」

ああもう五月蠅い！
この問題解けたら相手してやるから！！

（、、・ω・´）つ【72×33】

ディレト
「こんなの簡単ですわよ！
えーと……えーと……えーと……」

さて、この隙に今回は終わりです。
最後にお知らせですが、次回更新はちょっと遅くなるかもしれませ

ん。
次回の内容に合わせて本編１８話の内容に、少し手を加えたいと思っていますので。
ですが、なるべく早く更新したいなー、とは思っています。

それではまた、次の話で。

ディレト
「ふえ～ん！　ウーノおねえさまぁぁぁっっ！！」

わからんかったんかい。
あ、それと次回はティアナのスーパーヒロインタイムの予定です！
ティアナが好きな皆さんは、楽しみに待っててくださいね！

神崎さん、こんな感じでよかったでしょうか？
何か弄りすぎたような気も……（汗）
文句などありましたら、感想、メッセージでお願いします。適時修正しますんで。

第３９話　『折れた心、蠢く闇　２』（前書き）

※投稿が遅くなって申し訳ないです！
その分、面白い出来になってる……といいなぁ、なんて思ってます。
今回こちらの更新に合わせて、台詞などの辻褄合わせを兼ねて１８話の内容を少しだけ書き直し、書き足しをしました。
もし、本文中の台詞で気になるところがあったりした時は、改稿版１８話をご覧ください。

第３９話　『折れた心、蠢く闇　２』

ｓｉｄｅ：―

「……何してんだよ、俺」

照明をつけていない、暗い部屋。
そのベッドの上に体を放り出し、ハヤトは溜息と共に呟いた。

「あいつらが不安がってる事ぐらい、わかってるだろうが」

自身を責めるように呟いて、両腕を交差させて顔を覆う。
そうしながら、ここに搬送される途中のヘリの中で聞いた事を思い出す。

機動六課壊滅と、ヴィヴィオの誘拐。
エリオとキャロはその現場に遭遇して、エリオはヴィヴィオを助けようとして負傷してしまったらしい。
ヴィヴィオを助けられなかった事。
六課が壊滅するのを目の前で見てしまった事。

それが、エリオとキャロ。幼い２人をどれだけ不安にするか、簡単に想像できる。
現に、さっき自分に話しかけてきた声は、不安で震えていたではないか。

「……わかってんだよ。んな事は」

ハヤトも、それは十二分に理解している。

でも、ハヤトは2人を拒絶した。

受け止めてやる自信が無かった。

2人をココに入れて、話を聞いたら……余計に傷つけてしまうと思った。

自分の中で渦巻く、戸惑う感情に振り回されて、それをそのままエリオとキャロの2人にぶつけてしまいそうで――それが怖かった。

「ホント、駄目な兄貴だ」

小さく呟いた筈の言葉は、ハヤトが思っていたよりも病室の中に響く。

そしてソレは、まるで矢のような鋭さを持って自分を責めるハヤトの胸に返ってきた。

「……くそっ」

自分の言葉に責められながら、ハヤトが小さく毒づく。

その時、ハヤトの呟きを掻き消すように病室のドアがノックされる。

「ハヤト」

ノックと共にドアの向こうから聞こえてきたのは、エリオとキャロの２人とは違う声だった。

――時間は、少しだけ遡る。

「エリオ、キャロ？　どうしたのよ？」

「「ティア、さん……」」

ハヤトの病室の前まで歩いてきたティアナは、そのドアの前で泣きそうになっているエリオとキャロを見つけ、驚いた顔をして慌てて駆け寄る。

そして、２人の側に屈んで事情を聞こうと口を開いた。

「どうしたの？　何かあった？」

「……え、と」

「その……」

だが、エリオもキャロも言い辛そうに言葉を濁して、ハヤトの病室のドアに視線を向ける。

それで、ここでは話しづらいのだと気付き、ティアナは2人を連れてロビーへと戻った。

ロビーに着くと、備え付けのソファに2人を座らせ、近くの自販機でホットコーヒーを買って2人に手渡す。

「ありがとう、ございます」

「別にいいわよ。それで、どうしたの？」

2人の表情が落ち着いたのを見て、ティアナがもう一度尋ねた。

その言葉に、2人は一度体を強張らせ、表情を曇らせる。

ティアナはそれを特に言及することはせず、エリオとキャロを安心させるように微笑んで、優しく語りかける。

「大丈夫だから、言ってみなさい？」

「……その、兄さんの部屋に入ろうとしたら、駄目だって」

「暫く、1人にして欲しいって……」

「ハヤトが？」

「「……はい」」

信じられない、という表情になって呟いたティアナに2人は沈んだ表情のまま頷いた。

しかし、ティアナにはハヤトが2人を拒絶した事もそうだが、何より2人にこんな表情をさせたという事が信じられない。

ティアナの知る限り、ハヤトは何だかんだ言いながらも、エリオやキャロの事を本当の弟、妹の様に大事にしていた。それとなく2人の体調や行動を気にしていたり、模擬戦の時はちょっと無茶をしてでもフォローしたり。

そんな風に接していたハヤトが、自分の行動がエリオとキャロを傷つけるかどうかを考えないだろうか？

（……あ）

そこで、ティアナはふとハヤトの態度に思い当たるモノがあった。

もしかしたら、あの時の自分と同じなのではないか、と。

ホテル・アグスタでの警備任務で失敗したあの日――1人きりに

なりたくて仕方なかった。
自主練したかったというのもあったが、それ以上に、誰かに干渉して欲しくなかったのだ。
ハヤトも、そんな心情になっているんじゃないか。ティアナはそう考える。
それならば、ハヤトがらしくない事をしたという事も納得がいく。

（……でも、聞かなきゃわからないわよね）

全ては推測で、2人の話を聞いて自分が勝手に判断しただけだ。
あの時、せめてハヤトに声をかけておけば良かったと、今更のように後悔する。

（でも、もしそうなら……）

確かめたくて、今すぐにでもハヤトの病室に行きたくなる。
だが、目の前で落ち込んでいる2人を放っておくことも出来なくてティアナが困り果てていた時、タイミングよく彼女の視界に、フェイトがこちらに向けて歩いてきているのが見えた。

「フェイトさん！」

「あ、ティアナ。それにエリオにキャロも」

「2人のこと、お願いします！」

「え？　な、何？　どういうこと？」

フェイトの近くに駆け寄って手短にそれだけ話すと、困惑するフェイトの声を無視して足早にハヤトの病室を目指す。

彼女に任せた方が、自分が下手にフォローするよりもずっと良いだろうと考えたからだ。

だがそれ以上に、少しでも早くハヤトの近くに行ってやりたかった。

自分もあの時、１人にして欲しいと思いながら……誰かに、側に居て欲しいと思っていたから。

そんな風に考えつつ、ティアナはハヤトの部屋を足早に目指す。

――そして、時は現在へと追いつく。

ｓｉｄｅ：：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：：ティアナ＝ランスター

「ハヤト」

病室のドアをノックして、中にいるハヤトに声をかける。
そのまま暫く待つけど、返事は無い。

「……ハヤト、居るんでしょ？」

もう一度。今度は少しだけ声を強めて声をかける。

「……何だよ、ティアナ」

今度は、返事があった。
ただ、聞こえてきたのはいつものハヤトのそれとは全く違う、沈んだ低い声。
その声を聞いて、ああ、やっぱりあたしの考えは間違ってなかったんだって思う。

「差し入れ、買ってきたの。入ってもいい？」

直ぐにでもドアを開けて中に入りたい気持ちを抑えて、答えがわかりきってる質問をする。
あたしも、あの時は誰にも構って欲しくなかった事を知っているから。人に干渉されるのが、どれだけ苦痛なのかを知っているから。

「……駄目だ」

案の定、返ってきたのは拒絶の言葉。
あの時のあたしを見てるみたいだと、小さく笑う。

「どうして？　何か困る事、あるの？」

「……酷い顔なんだよ」

「気にしないわよ、そんなの」

「俺が、気にすんだよ」

「何でよ？　アンタ、そんなの気にする奴じゃなかったでしょ？」

「……とにかく、嫌なんだよ」

子供みたいな言い訳しかしないハヤト。
いつもなら、もっと理路整然と屁理屈を並べる癖に。

「あたしは気にしないって――「しつこいっ！」――！」

もう一度口を開いたあたしに、ハヤトがイラついた声で怒鳴った。

「ハヤト……」

「……頼むよ。今日だけ、今日だけでいいんだ。1人にしてくれ」

弱々しい、哀願するようなハヤトの声。

初めて聞いたそんな声に、少しだけ驚く。

「明日には、いつもの俺に戻ってるから」

ハヤトの事だから、明日になれば本当に気持ちの整理をしちゃうんだろう。

あたし達になんて頼らずに、たった1人で。

思い返せば、一度だってハヤトはあたし達に悩みを話してくれた事がない。

ハヤトだって普通の男の子なんだし、こうやって悩む事だってあった筈だ。でも、そんな話を相談された事も無いし、これだけ参ってるこいつの姿を見たのだって初めて。

多分、いつも今みたいに1人で悩んで、そして1人で解決してきたんだろう。

――いつもいつも、自分だけで。

「だから……今日だけは、放っておいてくれよ」

――あたしには、偉そうに「仲間を頼れ」って言った癖に。

それが、凄く悔しくて。凄くムカついた。

「入るからね」

だから。

ハヤトの言葉なんて聞かないで、ノブに手をかける。

「やめろ……」

「知らない」

「やめろっっ！！」

ハヤトの怒声を無視してドアを開ける。

鍵がかかってると思ったけど、ノブを回して軽く押しただけで、すんなりとドアは開いた。

それが――なんだか、アイツが助けを求めてる合図に思えて。

あたしは、ドアを開けて中に入った。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

ｓｉｄｅ：―

ハヤトの病室は、カーテンは閉め切られて照明も点いておらず、昼間だというのに暗かった。
だが、ティアナの目が最初に捉えたのは、部屋の暗さなどではなく。
開けられたドアから入る光に照らし出されたベッドの上で、体を起こし、自分を睨みつけているハヤトの姿。

「……入んなって、言っただろ」

ボサボサの髪をして、右手に巻かれた包帯は半ば解け、左頬と額に貼られていたガーゼは完全に剥がれてまだ治りきっていない生々しい傷跡を覗かせている。
そんな格好のまま、まるで何かから必死に自分を守るように縮こまっていた。

「こんなに暗くして、何やってんのよ」

ティアナはそんなハヤトを見て、呆れたように言いながら病室の明かりを点けた。
そうすると、ハヤトはより一層体を小さく丸める。その姿は、まるで何か失敗をしてしまった子供のようで。

「出てけよ」

「ホント何してたのよ、ガーゼ取れちゃってるじゃない」

「出てけって、言ってるだろがっ！！」

「きゃっ！」

自分の言葉に耳を貸さずベッドの側まで近づこうとしたティアナに、近くにあったコップを投げつける。
陶器のコップは壁にぶつかり、鋭い音を立てて砕け、ティアナが小さく声を上げた。
それを見て、ハヤトが「あ……」と声を漏らし、バツが悪そうに目を逸らす。

「もう、危ないじゃない」

しかしティアナはそれに怒るでもなく、苦笑して破片を片付け始めた。
そんな彼女に、目を逸らしたまま「悪い」と謝り、ハヤトは言葉を続ける。

「だから、駄目なんだよ。何か、感情的になりやすくて……」

「そう」

破片を拾うティアナに、目を逸らしたまま呻くように呟くハヤト。
それを聞きながら素っ気無く返事をして、片付け終わった破片を近くのゴミ箱に捨てる。
しかし、聞いてもなお部屋から出て行こうとはしない。それどころか、ベッドの方にやってきて、近くにあった椅子に腰を下ろした。

「……何で、そこ座んだよ。出てけって言ってんだろうが」

「嫌よ。アンタの話なんて、聞いてあげない」

「んだよそれは……」

目を逸らしたまま、ハヤトが吐き捨てるように言葉を漏らす。
ハヤトの言葉に目を瞑って溜息を吐いてから、ティアナは真剣な表情になって彼を見る。

「……出てけって」

すると、ハヤトは居心地が悪そうに体を動かし、ベッドの端まで

移動する。
だがそれほど大きくは無いベッドの上を多少移動したところで、ティアナの視界から外れる訳も無い。
そんなハヤトを溜息を吐きながら見て、告げる。

「エリオとキャロ、泣きそうになってたわよ」

「！」

その言葉に逸らしていた視線を上げて、恐る恐るという感じで口を開く。

「あいつら、エリオとキャロ……どうした？」

「ロビーに連れてって、フェイトさんが来たから任せてきたわ。あたしが何か言うよりも、きっと上手くフォローしてくれてるわよ」

「……そう、か」

目に見えて安心したように表情を緩め、溜息を漏らす。
その後一度躊躇ってから、ハヤトがまた口を開く。

「ギンガとスバルは、大丈夫か？」

「ええ。スバルは腕の神経ケーブルいっちゃってたけど、それ以外は特に酷くなかったみたい。
ギンガさんも、とりあえず峠は越えたわ。意識が戻るまで安心は出来ないらしいけどね」

「……やっぱ、ギンガは大丈夫じゃねぇのか」

ギンガの容態を聞き、再び落ち込むハヤト。
そんなハヤトに、ティアナが声をかける。

「アンタのせいじゃないわよ。
むしろ、アンタが頑張ってくれたから、ギンガさんも助かったんでしょ」

「……違ぇよ」

「え？」

ティアナの言葉を、ハヤトは辛そうに眉を寄せて否定する。

「アイツが助かったのは、運だ。
俺はお前達が合流する前に、無様に気絶してたんだぞ？　どうしたら俺のお陰になるってんだよ。
もし、敵がその気だったら……お前らが来る前に、２人揃って殺されて終わりだ」

言ってから、イラつきをぶつける様に左手でベッドを殴りつける。
ティアナはそれを否定しようとして、否定する材料が自分にはない事に気付く。彼女がハヤト達の居た場所に辿りついた時、既に敵の姿は無く、ティアナとなのはが見たのはボロボロになったハヤト、スバル、ギンガの3人だけだったからだ。
だから、ハヤトが違うというのであれば、ティアナにはそれ以上何かを言うことは出来ない。

「でも、アンタはギンガさん守ろうとして頑張ったんでしょ？」

「頑張ったって、結果が伴わなきゃ意味が無いんだよ。
第一、俺はギンガの事を守れてなんかいねぇ。ただ単に、あの戦闘機人――ディレトに、遊ばれてただけだ」

「そんな事――「分かったような口利いてんなよ！」――っ！？」

なおも口を開こうとしたティアナの言葉を遮るように怒鳴りながら、ハヤトが弾かれるようにベッドの上を移動して彼女の側まで近寄り、襟を掴み上げた。そして、額を付き合わせるような近さで怒鳴り続ける。

「“敵”としても見られずに、ただひたすらに玩具として扱われて！！　こっちは全力なのにだ！
何をしても通じなくて！　目の前でギンガが死に掛けてるのに、連れて逃げることすらできなかった！！
目の前だぞ！？　目の前で仲間が死に掛けてたってのに、一方的

に敵にボコボコにされてただけ！！」

悔しさに歪んだ顔で、ティアナを睨みつけてくるハヤト。

「全部！　全部俺が弱いからだ！！」

右手は上手く動かないのか、左手だけでティアナの制服の襟を掴み上げながら、叫ぶ。

喉元が絞めつけられて、ティアナが苦しそうな顔をするが、今のハヤトにそれを気にする余裕などない。

ただひたすらに、自身の感情を口から吐き出す。

「俺が強けりゃ、ギンガを連れて逃げることも出来たかも知れねぇ！もっと早く事を片付けて、さっさと治療を受けさせてやる事が出来たかも知れねぇ！

そもそも、アイツがあんな事になるのを防げたかも知れねぇ！！」

昂ぶった感情の赴くままに、ティアナに言葉をぶつけていく。

「あの場に居なかったお前が、分かった風な口利いてんなよ！！」

「ハヤ……けほっ」

「！！　……あ」

怒声の合間に、ティアナが彼の名前を呼ぼうとして、小さく咳き込む。
それで我に返ったのか、顔を青くして小さく声を漏らし、掴み上げていた襟を放す。そうすると、掴み上げられて少し浮いていたティアナの身体が椅子に落ちる。

「けほっ、けほっ……」

「……ごめん」

謝りながら唇を噛み締め、ハヤトがまたティアナから離れようとする。
そのハヤトの手を、ティアナの手が掴んだ。
驚いたハヤトが彼女の顔を見れば、ティアナは咳き込みながらも、ハヤトの事を見つめていた。

「離せよ。次は、怪我するかもしれないだろ」

「けほっ……構わない、わよ」

「構わない訳、ねーだろが」

「構わないって、言ってるでしょ」

彼の顔を真正面から見つめて、告げる。

「アンタが、自分の弱さを話してくれるなら。怪我したって構わない」

「何言って……」

「アンタはいつだって、あたし達の事を考えてくれて、理解してくれて。
そしてあたし達の辛さを受け止めてくれようとしてる」

ハヤトの手を離して、代わりに両手を彼の頬に添えた。

「だけど、それじゃあアンタの辛さは、誰が受け止めるのよ」

真っ直ぐに見つめられて、ハヤトが視線を逸らそうとした。
だが、ハヤトの頬に添えられた彼女の両手が、それを許さない。

「今まで、あたしは気付けなかった。
アンタに守って貰ってるのに、支えて貰ってるのに気付いてなかった」

「守ってなんか、いねぇよ。現にさっきも、エリオやキャロや、お前の事を傷つけて――」

「ハヤトも、あたし達と同じなのに。
いつもあたし達を支えてくれてたアンタだって、泣きたかったり、辛かったりして当然なのに」

ハヤトの否定を、ティアナの言葉が遮る。

「そんな当たり前の事に、アンタがこんな風になるまで気付けなかった。
だから――」

そこで言葉を切って椅子から立ち上がり、ハヤトの頭を抱きしめた。

「――今度はあたしがアンタを支えてあげる。
ハヤトがしてくれたみたいに、あんたの辛さを受け止めてあげるから。
だから話して。アンタの気持ち……全部」

「……いらねぇよ、そんなの。余計なお世話だ」

「余計なお世話なら、ハヤトがいつもしてた事じゃない。訓練校の時も……あたしが無茶した時も」

言葉で拒絶しながらも、ハヤトはティアナを突き放そうとはしな

い。――下手な事をして、彼女を傷つけてしまうのが怖いから。
ティアナは、抱きしめたハヤトの頭を撫で、言葉を続ける。

「ハヤトは、いつもそうやって1人で解決してきたんでしょ？
あたし達に心配かけないように、ずっと1人だけで。だから、あたし達はそれに気付けないで、それが当然だと思って支えて貰うだけだった」

「……推測で、語るなよ」

「でも、遅くなったけどやっと気付けた。
ハヤトだって、辛くて、泣きたい時があるんだって、気付けたから……」

彼を抱きしめる腕に、少しだけ力を込める。

「だから、次はあたしの番。
アンタがしてくれたみたいに、今度はあたしがハヤトの事を支えてあげられるようになるから」

「……」

「ねえ、話して？　ちゃんと、全部受け止めてあげるから。
辛いなら、あたしに当たって構わないから。怪我させられてもいいから……アンタの気持ちを、全部聞かせて欲しいの」

言ってから、ティアナの瞳が不安に揺れる。
自分が言いたかった事は全部言えた。だけど、ハヤトに通じたのかどうかが、怖い。
拒絶されたら、突き放されたらどうしよう……と。

「……」

「ハヤ、ト？」

その時、ティアナの腰にハヤトの腕が回されて、そのまま抱きしめられる。

「お前……馬鹿だよ」

「……うん」

受け入れて貰えたと理解したティアナは、頬を染めて、ハヤトの髪に顔を埋めた。

「馬鹿でいいわよ。アンタの為になら、馬鹿になっても構わない」

「……本当、馬鹿だよ」

言葉と共に、彼女を抱きしめる腕の力が少しだけ強くなる。

そのまま、ハヤトの口から震える声が漏れた。

「今まで、別に才能なんて無くても良いって思ってた。
生まれつき、姉ちゃんと絶対的な才能の差があるって知ってたから、そういうもんなんだと思って羨ましいと思ったことも無かった。
俺は、その他大勢の中の一人で良かったんだ。それでも、大切なモンは守れると思ってたから」

「うん」

「でも、それじゃあ駄目なんだって思い知らされた。弱い奴には、出来ない事があるんだって」

そこまで言った時に、ハヤトの腕がより一層強くティアナを抱きしめる。

「『弱者に、弱者は救えない』。
その通りだよな……。弱い奴は自分を守るだけで精一杯で、他人を守る事なんて出来ねぇ」

「……うん」

「頭では、ちゃんと理解してるつもりだった。
なのに……なのに、悔しいんだ。どうしようもなく、悔しいんだ」

「そう」

呟くハヤトの目から、涙が零れてティアナの制服を濡らす。

「……ふっ、くっ」

「泣いていいわよ。あたしからは、見えてないから」

声を噛み殺そうとするハヤトの背中を撫でて、優しく告げる。
その言葉を聞いたハヤトの口から、泣き声が漏れ始めた。最初は小さく、そして……段々と大きく。
ティアナは、ハヤトを抱きしめながら、彼の背中を撫で続ける。
そうしているティアナの顔は、少しだけ辛そうで、でも、その何倍も幸せそうだった。

ｓｉｄｅ：―　了

第３９話　『折れた心、蠢く闇　２』（後書き）

シリアスとかもう嫌じゃーーーーっっ！
どうも、ラモンです。

ディレト
「今回は出番が全くありませんでしたわね。ディレトですわ」

ようアホの子。
感想で随分弄られたなｗ

ディレト
「あ、アホじゃないですわ！　失礼な！」

京谷
「じゃあ問題だ。３８×５６は？」

ディレト
「ええ！？　えーと、えーと……」

おや、京谷さんいらっしゃいませー。
予定よりも早かったですね。

京谷
「まあ、結構急いできたからな」

そうなんですか。
えーと、じゃあ順番がいつもと逆になりましたがご紹介を。今回のゲストは、

“魔法少女リリカルなのは　～転生した主人公は最強の設定を使う～”より

主人公の氷上京谷さんにお越し頂きました。

／わー／／どんどんどん／／ぱふぱふぱふ／

京谷

「な、何か凄い歓迎っぷりだな」

ええまあ。本編が糞重かったんで、その反動で後書きは派手にしようと。

京谷

「あー……確かに重かったなぁ。どシリアスだったし」

最後にちょっとだけ甘い空気にしたけど、そんなの吹き飛ばす位に重かった……。

だからシリアスは嫌なんだよ！

京谷

「いや、だったら書かなきゃいいじゃん」

それを言ったら元も子もないですがな。

あれ？　そういやさっきからディレトが静かだな……ってヲイ！？

ディレト

「えーと、えーと……」（頭から煙）

京谷

「掛け算でオーバーヒートかよ!?　どんだけアホの子だこいつ!?」

と、とりあえず水!　水!

バシャアッ

ディレト
「えーと、えーと……」（クールダウン）

京谷
「……こんなのがラスボスかよ。大丈夫なのか?」

本編はここまでアホの子じゃないから平気ですよ。
セインやウェンディレベルですし。

京谷
「ふーん。ま、俺が出れば余裕だけどな」

そりゃ京谷さんはチートオブチートですからねぇw
ディレトでも余裕で倒せますよ。

京谷
「まあな。アヴァロンで防いで、エクスカリバーでふっ飛ばせば終わりだろ」

それが通じなくても、他にいくらでも手はありますしね。
ホンマ京谷さんのスペックは次元世界に響き渡るでぇ!

京谷

「はっはっは！　もっと褒め称えたまえ！！」

ディレト
「わかりましたわ！　答えは９６ですわね！！」

いきなり割って入ってくんなよ。しかも間違えてるし。
掛け算なのに、何故お前は足す。

ディレト
「何ですって！？」

京谷
「うーん。本当にアホの子なんだなぁ」

ディレト
「失礼な……って、ゲストの方ですの？　いつの間にこちらに」

京谷
「気付いてなかったのかよ。結構前に来てたぞ」

ディレト
「そ、そうなんですの？　あ！？　もしかして問題を出したのって……」

京谷
「俺だな」

ディレト
「きーっ！　わ、私に恥をかかせるなんて！　許せませんわ！」

京谷
「おお、今時「きーっ！」とか言って怒る奴がいるなんてな」

ディレト
「ま、また馬鹿にしましたわね！？」

いや、してないから。京谷さん単純に驚いただけだから。

ディレト
「問答無用ですわ！　そこの貴方！　私と勝負なさい！！」

京谷
「構わねーぞ。じゃ、俺アヴァロン出しとくから、後は適当に攻撃してくれ」

ディレト
「いい度胸ですわ！　ボコボコにして差し上げますわ！！
ブレイクシューター！！」

おー。アヴァロンで全部防がれてる。
さすがチート防具。

京谷
「便利だよなこれ。どんな攻撃も届かないとか、マジチートｗ」

ですよねｗ
おっと、そろそろお時間のようです。
最後に番宣どうぞ！

京谷

「お、もうそんな時間か。
何かあんま身のある話しなかった気もするけど、ま、いっか。
それじゃ番宣いくぜ！

俺が主人公の小説は“魔法少女リリカルなのは　～転生した主人公は最強の設定を使う～”。

えっ？何コレ？何で俺浮いてるの？　しかも目の前には死神がいるし。
手違いで死んでしまった俺は、死神の力で転生をし、新たな人生をやり直すことにした。
その転生先はリリカルなのはの世界さ！
死神から貰ったこのチート能力で、いろいろと引っ掻き回してやるぜ！！

チートな主人公の俺が活躍する、愉快痛快冒険活劇だ！」

冒険活劇……なのかな？
まあそれは置いといても、京谷さんをはじめ魅力的なオリジナルキャラの方々、そして魔改造されていく原作キャラ等など、とても面白い大御所作品です。
読んでる方も多いと思いますが、まだ読んでいない方は今すぐ読みに行きましょう！

京谷
「ん。じゃあこんなもんかな？」

そうですね。

ディレト
「ＩＳ“ヘヴィバレル”！！　ってまた届きませんの！？」

まだやってたんかい。
まあいい、放っておくとしよう。

それでは京谷さん、こちらがお土産です。

（・ω・、）つ【銘菓“　ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ　”】

京谷
「おい！　何か既に嫌な感じの名前なんだが！？」

大丈夫ですよ。
食べるとちょっと女性運が（ある意味）悪くなるだけですから☆

京谷
「……具体的には？」

ヒロイン全員がヤンデレになって、「中に誰もいませんよ」的な展開になるぐらいですかね。

京谷
「断固として拒否させて頂こう！」

あ、そうですか。
それではこちら、【日本全国銘菓詰め合わせ】でも。

京谷
「いきなり普通だな……何かあるのか？」

何もないですよー。
それでは、また機会があったら今度はナイト・オブ・ラウンズの皆さんと一緒に遊びに来てください。
その時にはハヤトも復活してるでしょうから。

京谷
「おう。それじゃ、失礼させてもらうぜ。ハヤトによろしくな」

気をつけて帰ってくださいねー　（´・ω・`）ノシ

ディレト
「あ、ちょ、ちょっとお待ちなさい！　勝ち逃げなんて許しませんわよ！！」

勝ち逃げも何も、勝負になってなかったがな。

ディレト
「きーーーーっっ！！」

哀れな。
おっと、次回のゲストですが……。
“リリカルヒーローズ　～金色の閃光と毒の爪～”から、主人公のジャンガをお呼びする予定です！　お楽しみに！
それではまた、次の話で。

……あれ？
【銘菓“　ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ．”】が無い？
京谷さん、間違えてもって帰っちゃったのかな？

ｋｙｏさん、こんな感じで良かったでしょうか？
何か訂正などあれば、ご一報ください。適時修正しますので。

※活動報告にて励ましのメッセージ、ありがとうございました。
　この場を借りてお礼を申し上げます。

第４０話　『芽生える心、伝わる心』

「……もう、いいの？」

「ああ」

「無理してない？」

「してねぇって」

どのぐらい泣いていただろうか。
段々と落ち着いてきたので、ティアナから体を離す。
うん、あれだ。落ち着いてくると、凄まじく恥ずかしい。

「目、赤くなってる」

「うっせ、見んな」

人の顔を見て面白そうに言ってくるティアナの視界を、左手で塞ぐ。
何と言うか、気恥ずかしくてティアナの方を見れない。
自然と赤くなる顔を隠すように、視線を逸らす。

「……ティアナ」

「ん？　何？」

「なんだ、その……サンキューな」

目を逸らしたまま、小さく告げる。

あーくそ。めっちゃ恥ずかしい。

「いいわよ。珍しいモノ、見せてもらったし」

「ぐぬ……だ、誰にも言うんじゃねぇぞ」

「ん～、どうしようかしらね？」

こ、この野郎……。

目を逸らしてるからどんな顔してるかは分からないが、楽しそうな声から考えるに絶対笑ってやがる。

何かを言い返そうとしたが、何となく気持ち的に言い返しづらく、結局何も言い返せずに黙り込む。

「ふふっ、冗談よ。誰にも言ったりしないから安心しなさい」

「……そうかい」

くっ、ティアナにからかわれるとは……不覚。

悔しいが、今日のところは退いてやろう。その分、明日これでも

かってぐらいに弄ってやるからな。

「そう言えば、ガーゼと包帯取れちゃってるわね。ちょっと待ってて、新しいの貰ってくるから」

「は？　いやいいよ。医務官の人呼ぶから」

「いいから。待ってなさい」

「いやおい、ちょっ……」

妙な話になったが、ティアナは俺の話を聞かずに立ち上がる。
慌ててティアナの方を見たら、着ている制服の胸元辺りが濡れてるのが見えた。
あー……結構泣いたしなぁ。

「ちょっと待ちんさい」

「ん、何？」

立ち上がって出て行こうとしたティアナの手を掴んで、止める。

「胸元、濡れてる」

「え？　あ、ホントだ」

「……悪い、汚しちまったな」

「いいわよこれくらい」

「良い訳ないだろが。えーと……」

言いながら、近くの棚に置いてあった俺の制服――ボロボロになったヤツの代わりに、って置いていったものだ――を、ティアナの手を握っていた左手を離して、掴む。

そして、それをティアナに差し出して渡す。

「ほら。俺の制服貸すから、着てけよ」

「いいの？」

「俺が泣いてた証拠を、人目に晒したくねーんだよ。サイズが合わないだろうけど、頼むから着てってくれ」

「……うん。ありがと」

俺から受け取った制服を、頬を染めて抱きしめるティアナ。

何でそんな行動すんだよ。たかが制服だろうが。

ただ、その顔が何だか凄く可愛く見えて――。

悔しいが、めっちゃときめいた。

「……痛っ」

「我慢しなさい、男の子でしょ」

「関係ねーだろ」

俺の病室を出てから２０分ぐらいで、マジで代えのガーゼと包帯を貰ってきたティアナ。

そんで、断り辛くて困ってる俺のガーゼと包帯を無理矢理代えだした。

一応断ったのだが、押し切られてしまった。

「ほら、ガーゼは終わり。右手の包帯代えるから、見せなさい？」

「だからいいって、自分で出来るっつーの」

「見せなさい」

「いや、だから……「見せなさい」……ぐぬ」

結局また押し切られてしまった。
何だかなぁ。

「ほら、ちゃんと見せて」

「へーへー」

半分投げやりに、言われるまま右手を見せる。
すると、ティアナは慣れた手つきで解けかかった包帯を解いて、新しい包帯を巻き始めた。

「右手、大丈夫なの？」

「医務官の人の話じゃ、全治2週間だとよ。暫くは使い物にならんらしい」

「そっか。じゃ、アンタの好きなゲームも暫く出来ないわね」

「舐めんな。左手一本だって出来るっちゅーねん」

「威張るな」

「いだだだだだっっ！？」

胸を張って威張ったら、思いっきり包帯を締め上げられた。

「な、何しやがる！？」

「アンタが馬鹿な事言ってるからでしょ。もう」

「言ってねーだろ」

「言ってるじゃないの……はい、おしまい」

「お、おう」

包帯を巻き終えて、ティアナが笑いながらこっちを見る。
それを見てまた頬が熱くなり、慌てて顔を逸らした。
ちっ、これじゃまるで俺がコイツに惚れちまったたみたいじゃねぇか。アホらしい。

落ち着け、気の迷いだ。
単純に、アイツに泣くトコを見られて変に意識してるだけだって。
そう自分に言い聞かせ、頬の熱が治まったあたりで再びティアナを見る。

「？」

「っ！！」

だが、目があった途端に顔が赤くなる。
くそっ！　マジなんだってんだ!!

「ちょっと、どうしたのよハヤト？」

「な、なんでもねーよ！」

「何でもないワケないじゃない。顔真っ赤よ？」

「だから、なんでもねーってば！」

心配そうな顔で覗き込んでくるティアナから、必死に顔を逸らす。
だけど、ティアナの奴は俺の顔を覗き込もうと一生懸命にこっちに乗り出してきて――。

「やめろって……っ！？」

「っ！」

それを止めようと顔を上げたら、目の前にティアナの顔があった。
普通なら俺の方が背が高いから目は合わないんだが、今はベッドの上に座っているのでドンピシャだ。
元々熱くなっていた頬が更に熱くなり、一瞬思考が完全に止まる。
それはティアナも同じみたいで、茹蛸みたいに真っ赤になって固まってやがった。

何このデジャヴ？

「……」

「……」

そのまま見つめ合うこと数秒。

不意に、ティアナが何かを決意したような顔をして口を開く。

「ハヤト。ちょっと真面目な話、していい？」

「は？　あ、あぁ、いーけど」

「あのね……」

「ちょ、ちょっと待て。その前に、離れろ」

「あ、うん」

ティアナが頷きながら離れてくれて、胸を撫で下ろす。

あのままだったら、テンパってスバルの時みたいに変なことしそうだったぜ。

同じ間違いは繰り返さない。それがハヤトクォリティ！

「えと、続けていい？」

「ん、オーケー」

「あのね、ハヤト」

「うん」

「あたし、アンタが好き」

「そうか……って、はい？」

何か凄い事を言われた気がして、思わず聞き返す。

つーか今、ぜってー凄い事言ったよな？　そんなサラっと言う事じゃない台詞言ったよな？

「ハヤトの事が、好きなの」

「……ごめん、ワンモア」

「だから！　アンタのことが好きだっつってんでしょ！　何度も言わせるな馬鹿！！」

「ぶるぁっ!?」

ティアナが言っていることが信じられなくて、思わず2回聞き返したらぶん殴られた。
すっげぇ痛い……つーことは、夢ってワケでもないよな?
え? 何、どういうこと?

ティアナが? 好き? 俺の事を?

「……マジ?」

「マジよ」

呆然と尋ねれば、真っ赤になったまま頷くティアナ。
どうやらマジらしい。どっきりとかじゃ無しに? カメラとか無いの?

「ホントは、今言う気なんて無かったんだけど……ごめん、我慢できなかった」

我慢できないって何さ!?
いや、えっと、マジでちょっと待て! 待ってください!

「な、何でいきなり告白だよ!?」

「アンタの顔、近くで見ちゃって……凄く、ドキドキしたから」

「理由になってねーし！」

パニックになりながら叫ぶ。

いきなりすぎるだろ！　そんな空気でも無かったし！

大体お前、今までそんな素振りしたこと無かったじゃねぇか！！

「あたし、嫌いな奴は勿論だけど、何とも思ってない奴にこんなことしないわよ。

信じられないって言うなら、信じられるまで何度でも言ってあげる。

あたしは、アンタが……ハヤトが好き。大好き」

真っ直ぐ見つめられて、改めて告げられる。

それで、ようやくティアナに言われたことの内容が脳に浸透してきた。

瞬間、頬がアホみたいに熱くなって、頭ん中をティアナの言葉がグルグル回って響く。

「うぁ……いや、俺、その……」

口を開いたけど、緊張してるせいか上手く回らない。

さっきまで全然平気だったのに、喉がカラカラだ。

「……うん」

「そんなこと考えた事もないっつーか、いきなりすぎるっつーか……」

わたわたと手を振り、しどろもどろになって話す。

いやだってしょうがないだろ？　何の脈絡も無しに告白だぞ！？

しかも、今まで友達だと思ってた奴から！

これで混乱しない奴が居たら連れて来いってんだ！！

「返事は……その、今じゃなくていいから」

「へぇあ？」

そうしてると、ティアナが赤い顔で俯いて呟いた。

予想外な言葉だったので、思わず意味分からん声を上げてしまった俺は悪くないだろう。

「もし今オーケーしてもらっても、何かアンタが弱ってるところにつけ込んだみたいで、嫌だし」

「いや、ちょっと待て。俺まだ状況が飲み込めてないんだが……」

「そりゃ、アンタと付き合えたら嬉しいけど……その、ちゃんとあ

たしの事、見て欲しいし」

「だからな、俺はまだ状況が……」

だが、混乱している俺などそっちのけで、ティアナは1人でヒートアップしていく。

すいません、落ち着いてくださいお願いですから。

俺、マジで置いてけぼりです。テンション的な意味で。

「と、とにかく！　あたしの気持ちは伝えたからね！」

「え？　あ、はい……伝えられました」

「じゃあ、あたしは帰るから、今日はゆっくり休みなさい！」

「は、はい！　休みますです！」

結局最後まで俺を置いてけぼりにして、ティアナはそう断言して病室を出て行く。

後に残されたのは、ベッドの上に座って耳まで赤くしている俺だけ。

「……どうしろってんだよぉ」

頭を抱えて呻く。

ティアナの野郎、人の悩みを聞きに来たとか言っといて、何で悩み増やして帰ってくんだ！？
嫌がらせかこんちくしょおぉぉぉっっ！！

「うおぉぉぉぉ……」

ベッドの上に寝転がって、頭を抱えたままゴロゴロとベッドの上を転がる。
さっきまでとは違う意味で、思考に余裕が無くなった俺であった。
ちなみに、このせいで夜は一睡も出来なかった。
畜生。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

時空管理局本局技術部、デバイス調整ルーム。
そこで、ブレイブハートの修理を行っていた技術部の局員２人は、困った顔をして溜息を吐いた。

「どういう意味なんだ？　これ」

「わからん。さっぱりだ」

「明日、アテンザ技官を呼ぶか？」

「そうしよう。俺達じゃ手に負えない」

話し合う2人の前にある修理用のポッドに浮かんでいるのは、宝石部分に小さなヒビが入っているブレイブハート。

その前の電子モニタには、短い一文だけが浮かんでいた。

“Please release the protection of『Blustersystem』.”

そんな、短い一文が。

「ブラスターシステムのプロテクトを解除しろって言われてもなぁ……。

なあ、お前はブラスターシステムってのが何だかわかるか？」

「いや。恐らく、このブラックボックス部分だとは思うが……」

局員Bが手元のパネルを叩く。

すると、彼の前のモニタにブレイブハートの設計図が浮かび、そ

の中心に存在する記されていない部品が映る。

「まあ、俺達はやれるだけのことをやればいいさ。
あとは明日、アテンザ技官を呼んで、彼女に任せればいい」

「だな。しかし、デバイスが自分から要求してくるなんて珍しい。
しかも、要求を通すまでは全システムにプロテクトをかけるときたもんだ」

「さすがは、アテンザ技官が携わってるだけはある」

「……分解して調べてみるか？」

「やめとけ。殺されるぞ」

ハヤトの与り知らぬ場所で、さりげなく解体の危機に瀕したブレイブハートであった。
この局員、シリアスの空気をぶち壊しにしやがった。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

夜。

「うぅぅぅ……」

隊舎のベッドの上で何回も寝返りをうって、枕に顔を押し付ける。

「言っちゃった、言っちゃった……」

ほとんど勢いだったけど、ハヤトに「好き」って言っちゃった。
恥ずかしくて、さっきから全然眠れない。
明日も早いんだから、さっさと寝なくちゃいけないのに……。

「ど、どうしよぅ……」

シャワーを浴びても、こうやって寝ようとしてみても、全然頬の熱が引かない。
それどころか、逆に時間が経つにつれて熱が増していく。
そのせいで眠れずに、こうやって寝返りばかり繰り返してる。

「あたしの馬鹿、なんであんな後先考えずに勢いなんかで……」

いつかはそんな日が来ると思ってたし、するなら自分からとも思ってたけど、あんな勢い任せの告白なんて想定外だ。
ちゃんとムードとか作って、もっといい雰囲気の時に言うつもりだったのに。

「うぅぅぅ、あたしの馬鹿……」

枕に顔を押し当てて、何度目になるかわからない台詞を呟く。
ホント何してんのよあたし……。

そうして、後悔に悶えているうちに、眠れない夜はどんどん更けていった。
明日、絶対寝不足だ……どうしよう。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

第４０話　『芽生える心、伝わる心』（後書き）

ほぎゃあああああ、やっちまったぁぁぁぁぁっっ！！
どうも、ラモンです。

ハヅキ
「ハヤトがいろんな意味で一杯一杯なので、私が代わりに来た。ハヅキだ」

やっちまったぁぁぁぁぁっっ！！
やっちまったよぉぉぉぉぉっっ！！

ハヅキ
「落ち着け」（右ストレート）

げぶふっ！？（ドサッ）

ハヅキ
「よし。静かになったな。
それではゲストの紹介だ。作品からのゲストとしては2度目になるか。

“リリカルヒーローズ　～金色の閃光と毒の爪～”より、主人公のジャンガだ」

ジャンガ
「……おぉぉおおおおおっっ！？」

ハヅキ

「む、飛んできたか。レオンハルト、ホールディングネット」

《Ｙｅｓ　ｓｉｒ．》

ジャンガ
「ぶおうっ!?」

ハヅキ
「ナイスキャッチ。いい仕事だレオンハルト」

《Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．》

いてて……。
あ、どうもジャンガさん。

ジャンガ
「あのヤロウ、人のことバズーカでフッ飛ばしやがって！
って、あぁん？　なんだ、ハヅキ嬢ちゃんにラモン坊やじゃねェか」

ええまあ、ここ後書きですんで。

ジャンガ
「あぁ、そうか。んで？　今回はどんな話だったんだ？」

ハヅキ
「まあ簡単に言えば、ハヤトにティアナが告白したという話だ」

ほぎゃあああああ！
はずかてぃいいいいいい！！！

ハヅキ
「やかましい」（右フック）

レバッ！？（ドサッ）

ハヅキ
「ふぅ。そこまで恥ずかしいのなら、書かなければよかっただろうに」

ジャンガ
「いい右フックだな、ハヅキ嬢ちゃん。
んで、なんだ。つまりガキ同士が乳繰り合ってるのでも書いたってのか？」

ハヅキ
「まあ、それに近い描写ではあるな。
もう少し肯定的な言い方をするなら、甘酸っぱい青春の一ページ……というヤツだな」

ジャンガ
「ハッ！　ガキ同士の恋人ごっこなんざ興味ネェな。
それよりもディレト嬢ちゃんはいねぇのか？　もう少し悪役について指南してやろうと思ったんだが」

ハヅキ
「ディレトなら、感想で色々と問題を出されたのが原因でオーバーヒートだ。
ハヤトは本編でいっぱいいっぱいでな、今回は休みになった」

ジャンガ
「あぁん？　なら、ちっとばかりハヤト坊やに追い討ちしてやらなくちゃなァ」

ハヅキ
「何をするつもりだ？」

ジャンガ
「決まってンだろ。目の前でハヤト坊やが嫌がりそうなことをしてやんのさ……キキキ」

ハヅキ
「……それは、聞き捨てならんな」

ジャンガ
「ん～？　なんだ、ハヅキ嬢ちゃんが前菜で相手してくれンのか？」

ハヅキ
「……ハヤトに害を為すというのであれば、な」

ジャンガ
「キキキッ！　いいねェ、ハヤト坊やよりも、ハヅキ嬢ちゃんの方がイイ声聞かせてくれそうだ！」

ハヅキ
「レオンハルト、セットアップ！」

《　Ｓｅｔ　ｕｐ.　》

◇◇◇◇◇

う、うぅ……酷い目にあった。
後書きはどうなった……？

ハヅキ
「ブレイジングインフェルノ！！」

ジャンガ
「甘いぜ嬢ちゃん！　そんな大振りじゃ、当たるモンも当たらねぇぜ！？」

……何故、ハヅキとジャンガがガチバトル？
どうしてこうなった？
えーと、どうしよう？　また本編を話す相方が居なくなっちゃった。
ハヤト！　ハヤトー！

ハヤト
「うおぉおぉおぉ……」（ゴロゴロ）

ダメか。じゃあディレトー！

ディレト
「ぷしゅ～～～」（オーバーヒート）

こっちもダメか。
てか、ディレトは誰か直してやれよ。
うーん。じゃあ他に誰か……。

シャ○
「はい！　私！　私がやります！」

うーん……。

シャ○
「私！　私やりますってばぁ！」

誰も居ないか。
んじゃ、とりあえずまた一人語りでも……。

ハヅキ
「何を言っている？」

ジャンガ
「俺達も参加するに決まってンだろ？」

うおぉ！？
２人ともガチバトルしてたんじゃねーの！？

ハヅキ
「決着が中々つかないのでな。時間もある訳ではないからやめた」

ジャンガ
「俺ァもう少しやってもいいんだけどよ」

ハヅキ
「まあ、終わったら存分に相手をしてやるさ」

ふーん。ま、相方がいるならその方がいいからいいや。

ハヅキ
「ならばいい。しかし、なぜ今回告白させたんだ？」

んー、まぁ、タイミング的にここしか無かったからかな。
あとはブレイブハート復活、ハヤトがエリキャロと仲直り、そして最終決戦にまっしぐらだしね。

あと、その最終決戦でハヤトにどうしても言わせたい台詞があってさ。
その為にどうしても今回、ここでティアナに告白して貰わなきゃいけなかった訳さね。

ハヅキ
「成る程。それで？　この先はどうするつもりだ？」

ジャンガ
「ハヤト坊やが酷い目に合うってんだろ？　わかりきってるゼ」

いや、酷い目に合うのは決定事項じゃないだろ。
あーでも、何だかんだで問題は山積みなんだよなぁ。特にスバル。

ジャンガ
「スバル嬢ちゃんはフられるの確定してんだし、気にするこたぁねェだろ？
　今書いてるのはティアナ嬢ちゃんルートなんだしよ」

それはそうなんだけどさ！
スバルの恋心をどう処理するかが難しいんじゃないか！

ジャンガ
「自分で書いといてなに言ってんだお前？」

ハヅキ
「なら、最初から2人ともルートにすれば良かっただろうが」

ハーレムはヤなんだよ！
大体、ハヤトがハーレムなんて作る甲斐性があるわけねぇだろ！！

ジャンガ
「まァ、そりゃ確かだな。ハヤト坊やには、ティアナ嬢ちゃんだって勿体ネェぜ」

ハヅキ
「……ほぅ？」

ジャンガ&作者
「「！？」」

ハヅキ
「いい度胸だお前達。私の愛しい弟たるハヤトを馬鹿にするとは……」

やっべ！　作者能力『絶対守護領域』発動！！

ジャンガ
「キキキキッ！！　いいぜハヅキ嬢ちゃん！
それじゃあ第2ラウンドといこうか！！」

ハヅキ

「いい度胸だジャンガァァッッッ！！！」

あぁ……またガチバトルが始まっちまった……。
しょうがない。今回はここでお開きとしよう。

それと、次回の後書きゲストは

“魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～亡霊の弾丸～”から、

主人公のアウル＝アパレシオンさんをお呼びする予定です。
それではまた、次の話で。

シャ○
「……くすん。泣いてないもん、シャ○強い子だもん」

※副題募集に、沢山の応募ありがとうございました。
　どれもいい副題でしたのでどれにするか悩みましたが、今回は黒仮面さんが考えてくれた『芽生える心、伝わる心』に決定しました。
　ちなみに、他にもいくつか気に入った副題があり、それはこの話以降で使えたら使ってみたいなーと思っとります！

第４１話　『小さな恋の始まりと終わり』（前書き）

※更新が遅くなってすいません。
しかも、時間がかかった割に変な感じですｏｒｚ
それでもよければ、読んでやってください。

それと、後書きでアンケートのお知らせがあります。

第４１話　『小さな恋の始まりと終わり』

「……ぐぬぬ」

ベッドの上に寝転がり、頭を抱えて呻く。
頭の中に、さっきからずっとティアナの言葉が響いて消えない。
そのせいで寝る事も出来やしねぇ。

『あたしは、アンタが……ハヤトが好き。大好き』

「！？」

ティアナの言葉がまた頭の中に響いて、顔が赤くなる。

「……唐突すぎるにも程があんだろ、クソ」

赤くなった顔を、左手で覆う。
そりゃ、ティアナの事は可愛いと思うし、嫌ってる訳じゃない。
むしろどっちかって言えば、好きだ。
でもそれは、あくまで『友人』としてであって、『男と女』のソレとは違う……と思う。
ずっと親友だと思ってきたし、アイツも同じだと思ってた。
だってのに、いきなり『好き』ときたもんだ。

「つか、良く考えたら人生初告白じゃねぇか」

予想してなかった、不意打ちの人生初告白。
しかも相手は、ずっと友達だと思ってたティアナ。

「どーしろってんだよ」

溜息を吐いてぼやく。
正直、頭の中が混乱してて上手い事考えが纏まらない。
そんだけ俺には衝撃的で、予想してなかった事だった。

「あーもう！　とりあえずいい！　今日はもう寝る！
考えるのは明日退院してからだ！！」

吹っ切るように頭を振って、毛布を被る。
けど、一度気になると無駄に考えちまうのが俺の悪い癖な訳で……。

（……断ったら、多分泣くよなぁ。いや、まだ断るって決めた訳じゃないけど。
いやいや、だからって付き合うって決めた訳でもないけどよぉ……）

結局、朝までグダグダといろんな事を考えてしまって、寝不足になっちまった。
ちくしょう、ティアナの奴、マジで覚えてろ……。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第４１話　『小さな恋の始まりと終わり』

「ぐへぇ」

一睡もできないまま朝になり、妙な声を漏らしながら体を起こす。
時刻は午前９時、予定では一度最終的な検査をして、退院の手続きをする時間だ。

「あー、退院する前にエリキャロに謝りに行かなきゃなぁ。
ギンガの様子も見ておきたいし、スバルの様子も見といた方がいいだろうし」

やる事が多すぎる、憂鬱だ。
だがまあ、愚痴ったところで仕方ないので、さっさとベッドから降りて病院着から制服へと着替える。

と、そこで制服の上着が無い事に気付いた。

「あれ？　上着……あぁ、ティアナに貸したんだっけな」

そんな事を呟くと、俺の制服を抱きしめて真っ赤になってるティアナを思い出して頬が熱くなる。

……自分の台詞で勝手に思い出して照れるとか、アホか。

マジで落ち着け。どう考えても意識しすぎだろ――。

「って、意識すんなって方が無理だろ！！」

一人で考えて、一人でツッコミを入れる。

端から見れば頭がおかしくなったと思われても仕方ない光景だ。

少なくとも俺だったらそう思う。

「とにかく今は、まず検査を受けることが最優先。いいな、俺」

自分に言い聞かせてながら着替えを終わらせ、病室を出る。

あー……指定されてた場所ってどこだっけ？

◇◇◇◇◇

「右手以外は問題無し。退院して構わないけど、2週間は日常生活以外じゃ右手を余り使わないように。
訓練なんてもっての外だからね」

「え、訓練ダメなんスか？」

「右手に後遺症が出てもいいなら、構わないよ？」

「……大人しくしてます」

「そうしておきなさい」

苦笑する美人の医務官（巨乳）に頭を下げ、診察室を出る。
とりあえずあとは受付で退院の手続きをすれば、無事退院だ。
暫く右手は使うなって話だけど、スカリエッティが動き出したらそうも言ってられないよなぁ。
ま、そん時はそん時か。

「さて、と」

ひとつ息を吐いて、近くの案内板の前に移動する。
とりあえず、先にギンガの様子を見に行こう。それからスバルとエリオの病室に行って、昨日の事をエリオとキャロに謝ってスバルの様子を見るとするか。

「ギンガは……ＩＣＵだったよな」

案内板で、ＩＣＵの位置を確認する。今俺がいるのが3階で、ＩＣＵは5階のようだ。

確認を終えた俺は、そこに向かうために歩き出した。

そして、5階に向かう階段の途中にあるロビーに差し掛かった時。

「あ……ハヤト」

「ん？　って、ティアナ！？」

不意に名前を呼ばれてそちらを見れば、ロビーにある売店で何かを買っているティアナが居た。

意外そうな顔をしながら俺を見て、手には売店で買った物が入ってる袋を持っている。

多分、スバル達のほうに見舞いにでも行くところだったんだろう。

「よ、よぉ」

「う、うん……」

近づいてそう挨拶したものの、それ以上どうしていいか分からなくて言葉に詰まる。

ティアナの顔は赤い。多分、俺も似たようなモンだろう。

くそ、マジで調子狂うな。

「どこ、行くの？」

「え？　あ、あぁ。ギンガの様子、見てこようと思ってな。お前は？」

「あたしは、アンタの顔、見に行こうかなって……」

「そ、そうか」

「うん……」

それだけ言い合って、会話が止まる。

く、空気が重い……！　つーか、何で俺はこんな緊張してんだよ!?

「あー……それじゃ俺、ギンガのとこ行ってくるから」

何だか顔を合わせてられなくて、目を逸らして逃げるようにそこを離れようとした。

だが、それはティアナに服の裾を摘まれて阻止されてしまった。

「な、何だよ？」

「え？　え……と、ごめん。なんでもない」

いきなりそんな事をされて、驚いて振り返って聞けば、真っ赤な顔のまま謝られた。

ああもう！！　何で今日はそんなしおらしいんだよ！　扱いに困るだろうが！！

そう怒鳴りたいのを堪えて、どうしたもんかと考える。

「えーとさ、とりあえず、何でもないなら離してくんね？」

「あ、うん……」

口で「うん」と言っておきながら、ティアナは俺の服を摘んだ手を離そうとしない。

そんで、困ったようにオロオロしつつ、俺を上目遣いで見上げてくる。ホント何なの！？

「あの、さ。あたしも、一緒に行っていい？」

「……は？　あー……まぁ、別に構わないけど」

「ありがと。じゃ、行こう？」

戸惑いながら答えると、嬉しそうに笑ったティアナに手を引かれる。

何だろう、今日のティアナはやたらと女の子女の子してて、扱いづらい。
困ったものです。
そんな事を思いながら、ティアナに手を引かれるままにギンガのＩＣＵへと向かう俺であった。

ｓｉｄｅ：―

ティアナと手を繋いでいる事に恥ずかしさを覚えながら、ハヤトは彼女に連れられるままＩＣＵへと辿りつく。
そして、ＩＣＵのドアの前で手を離してからドアを開けて中に入り、ガラスで区切られている幾つかの病室から、ギンガを探す。するとほどなく、ベッドに寝かされているギンガを見つけることが出来た。

「……っ」

その姿を見て、照れ臭さから熱くなっていたハヤトの頭が一気に冷えていく。
拳を握って唇を噛みしめ、ガラス越しにギンガを見つめる。
目を逸らすな。

ギンガがこんな風になったのは、俺が弱かったせい。
目の前にあるこの光景は……俺の弱さの証拠だ。
ここから目を逸らすな。ちゃんと見て、ありのままを受け止めろ。

そう、自分に言い聞かせながら。

「ハヤト、大丈夫？」

「……あぁ」

ティアナが心配そうな顔をして、ハヤトの顔を覗き込む。
ハヤトはその声に答えるが、彼女の方は見ない。
そして、辛そうな目でガラスの向こうで眠っているギンガを見据えつつ、口を開いた。

「俺は、強くなろうと思う」

「え？」

「もう二度と、こんな光景を見ないように。
俺が、皆を守ってやれるぐらいに……強くなろうって、そう思ってる」

「……ハヤト」

驚いたようにティアナが声を上げるが、ハヤトはそれを無視して話を続ける。

「俺にゃ才能が無い。魔力だって、一般局員に毛が生えた程度しか無い。

そんな俺が、俺よりも強いお前らを守ろうなんて、身の程知らずの、過ぎた願いだとは思うさ」

けど。

それでも――

「――強く、なってやる」

噛み締めるようにそう呟くハヤトの目に、ティアナは以前の……認めて貰おうと必死になっていた自分を見た。

だから、少しだけ怒りを込めて、包帯が巻かれた彼の右手を叩く。

「いってぇ！？」

「なに深刻な顔してんのよ。アンタらしくもない」

「てて……何すんだよ」

「アンタ1人で皆を守るなんて、無理に決まってるでしょ？」

ティアナの言葉に、ハヤトが眉を潜めて彼女を睨む。
しかし、ティアナは気にした風もなく笑って、叩いたハヤトの右手を両手で優しく握って続ける。

「1人で全部出来る人なんて、居ないわよ。
アンタがどれだけ強くなって、どれだけ戦ったって、手が回らない時だってあるんだから」

「……」

「だから、あたし達が居るんじゃない」

「！」

「アンタが出来ない事はあたしがやって、あたしが出来ない事はアンタがやる……でしょ？」

以前にハヤトがティアナに向かって言った言葉。
それをそのまま言い返されたハヤトが、驚きに目を見開く。

「確か、前にアンタが偉そうにあたしに言った事よね？」

「……ははっ。そうだったな」

苦笑したハヤトの視線から、先程までの切羽詰った光が消えた。
それを感じたティアナは嬉しそうに頷いてから、握った手を自分の胸元まで持っていく。

「アンタの至らない部分は、あたしがフォローしてあげるわよ」

「……あぁ。頼むわ」

「任せておきなさい」

少しだけ痛む右手を動かして、ハヤトがティアナの手を握り返す。
そうして笑いあう2人の距離は、昨日よりも少しだけ、本当に少しだけ、縮まっている様にも見えた。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

「ギン姉、大丈夫かな」

検査が終わってから直ぐに、ギン姉のいるＩＣＵへと急ぐ。
医務官の人は、とりあえず差し迫って危険な状態じゃないって言ってたけど、まだ目が覚めてないのは事実なんだし、何かあった時の為に側にいてあげたい。
ハヤトのことも、勿論気になるけど……ティアが行ってくれたみたいだし、平気だよね。
きっと今頃、エリオとキャロのところに行って、皆で騒いでる筈だ。それに加われないのは、ちょっと寂しいけど。

「……っとと、ボーっとしてる場合じゃなかった！」

何となく止まってしまった足を、慌てて動かす。
気にならないって言ったら嘘になるけど、今はギン姉の方が大事だから。
そう思って、ＩＣＵへと急ぐ。

階段を上って、そのまま早足でＩＣＵのドアを目指す。
そして、ドアを開けてギン姉の病室目指して通路を曲がろうとして……そこで足が止まった。

「ハヤトに……ティア？」

曲がり角の向こうに見えたのは、手を握りあっているハヤトとティア。
ティアはほっぺたを赤くして、何だかとっても嬉しそうだ。ハヤ

トは背を向けているから、どんな顔をしてるのか分からないけど、多分嫌がってはいないと思う。
嫌がってたら、ハヤトの性格からしてすぐに振り払う筈だもん。

「あわわ……」

思わず、曲がり角に隠れて様子を伺う。
な、何で隠れてるんだろ。別に普通に声を掛ければよかったのに。
でもでも、何だか声かけ辛い雰囲気だし……。

そのまま壁に隠れて、2人の会話に耳を傾ける。
うぅ……何だか悪い事してるみたいだよ。まあ、盗み聞きしてるんだから、悪い事してはいるんだけど。

『ったく、昨日といい今といい、ティアナには変なとこ見られてばっかだな』

『アンタもあたしの見たんだし、おあいこでしょ」

『……そういうモンなのか？』

み、見たって何を!?
変なとこってどこ!?

おかしな想像をして、顔が真っ赤になる。
そそ、そんな訳ないよ！　ティアに限ってそんな事、するわけ無

いもん！！
ぶんぶんと頭を振って、２人の会話により一層聞き耳を立てる。

『そういうモンよ。それに、あたしにだけ、アンタの弱い部分を見せてくれるのは……その、嬉しいし』

『……っ！　い、いきなり何言ってんだお前は！』

『別に変な事は言ってないでしょ？　だって、昨日も言った通り、あたしは……ハヤトが……す、好きなんだから』

『はぁっ！？』

えぇぇぇっ！？
思わず出そうになった声を、口を押さえて何とか抑える。
気付かれないようにこっそり見れば、ティアの顔が真っ赤になっている。ハヤトも、顔は見えないけど耳が真っ赤だ。
ど、どういうこと！？　ティアってば何時の間に告白なんてしてたの！？

『い、今言う事じゃないだろ！』

『言う事よ。あたしにとっては、大事な事なんだし。それに――』

ティアがハヤトの手を握ったまま、ちょっとだけ真剣な顔になる。

『昨日も言ったでしょ？　アンタが辛い時は、あたしが受け止めてあげるって』

「――え」

その言葉に、思わず声が漏れた。

辛い時？　ハヤトが？

ティアの口から出た言葉が、信じられなかった。

だって、あたしの知ってるハヤトは悩みなんかとは無縁で、いつだって笑ってて。

あたしが落ち込んだりしてる時は、いつの間にか隣に来て、励ましてくれて。

どんな時も、あたしにとって一番頼りになる人だったから。

だからハヤトにも辛い時があるなんて、考えもしなかった。ううん、考えないようにしてただけかも知れない。

けど――と思う。

ティアは、それに気付いたんだ。多分、昨日。

そして、ハヤトの辛さを受け止めてあげたんだ。

「……そっか」

壁に寄りかかって天井を見上げ、聞こえないように溜息を吐く。

「かなわないかなぁ……」

自分でも驚く程素直に、そう思えた。

今なら、確かにハヤトが辛かったんだってことは理解できる。

でも、それはさっきのティアの言葉を聞いたからで、きっと自分じゃ気付けなかっただろう。

ハヤトの事は気になってたけど、あたしにとっては、ハヤトよりもギン姉が大事だったから。

それが悪い事だなんて思わないし、お姉ちゃんの事を心配するのは当然だと思う。

でも、ハヤトが辛い時に、気付いてあげられなかった。

ハヤトの事を、支えてあげられなかった。

「告白するのも、ティアに先越されちゃったし」

さっきの反応を見る限り、ハヤトもそんなに悪い気はしてないみたい。

ハヤトは、今まであたし達をそういう目で見た事はないだろうから、多分今はまだティアの告白に戸惑ってるだけなんだと思う。だから、まだあたしにもチャンスはあると思う。

だけど、あの光景を見たら。ティアの言葉を聞いたら。

ハヤトが辛い時に、側にいてあげたのがティアだって知ったら。

「……言えないよね」

自嘲気味に呟いて、あたしはＩＣＵのドアを出た。
そして、少し廊下を歩いて、非常階段の扉を開けて踊り場に出る。
そのまま手摺りに体を預けて、空を見上げる。

「……あーあ、悔しいなぁ」

呟いた言葉は小さくて。
目に映る空は、吸い込まれそうなほど青くて……少しだけ、滲んでいた。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

第４１話　『小さな恋の始まりと終わり』（後書き）

なんだろう。書いててここまで辛かったのは初めてかもしれない。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「後半重っ！？　どうも、主人公です」

恋愛話って難しいね。特にこういう失恋の話って難しすぎる。
全然文章浮かんでこなかったよ。

ハヤト
「まぁな……つか、さすがにスバル可哀想じゃね？」

うーん……だよね。次回以降で、少しだけ見せ場を作る予定ではあるんだけど……。
まぁ、いつまでも暗くても仕方ない。早速ゲストをお呼びしましょう！
今回のゲストは

“魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～亡霊の弾丸～”の主人公！

アウル＝アパレシオンさんです！
どうぞ～。

アウル
「どうも。アウル＝アパレシオンです」

ハヤト
「どもども」

ディレト
「どうも、ですわ」

……え！？
何でディレト居るの！？

ディレト
「本編で出番が無くて暇だからですわ！」

ハヤト
「そんな理由で出てきたの！？」

アウル
「まあまあ、賑やかでいいじゃないですか」

ハヤト
「おぉう。こんな状況にも冷静に対処するとは……これが大人の男か！」

ハヤトには一生かかっても無理だな。
お前は多分永遠に子供っぽいままだろうよ。

ディレト
「ですわね」

アウル
「それは……そうかも知れないですね」

ハヤト
「満場一致!?　ひ、酷ぇっ！」

ディレト
「女性を泣かせる輩は敵ですわ」

アウル
「まぁ、厳密に言えばハヤトさんは何もしてないんですけど……今回はさすがに、ね」

ですよねー。
ハヤトさいてー。

ハヤト
「お、俺は悪くないだろ!?　悪くないよな!?」

そうだけどね。
いやー、でも失恋話ってヤだね。こっちまでテンション下がるもん。

ハヤト
「書いてる間中、無駄にテンション上がる曲とか垂れ流しだったもんな」

ディレト
「内容と合ってない曲を流していたせいで、逆に筆が遅くなりましたわよね」

う、うるさいうるさいうるさい！

ハヤト
「釘宮ボイスじゃないと萌えないぞ、それ」

アウル
「そういう問題なのかな？」

ディレト
「多分違うと思いますわ」

アウル
「ははは……そ、それは置いておくとして。
これでスバルは失恋が確定、ということですかね？」

一応そのつもりで書きました。
ホントはもっとドロドロした感じになりそうだったんですが、スバルの性格からすると、結構あっさり失恋を受け入れそうかなー……なんて思ったもので。
作者は男なんで、こういう時の女の子の気持ちはわからんとですよ。

アウル
「それを想像して書くのが仕事でしょう？」

ご尤もです。
ただ、このままじゃスバルが見せ場もなくて可哀想なんで、次回以降でカッコイイことさせますよ！
多分！　おそらく！　きっと！

アウル
「どんどん確信が無くなっていく……」

ハヤト
「アウルさん。コイツにそんなのを期待するだけ無駄ですぜ」

ディレト
「才能がありませんものね」

お前ら酷すぎ。
あ、折角アウルさんもいるんだし、ついでにお知らせをして貰おうかな。

アウル
「お知らせ？」

はい。
前回の番外編１０の後書きで、アンケート予告したら、予告だって分かり辛かったみたいで、何人かアンケートに投票してくれた読者様がいるんですよ。
なので、それを無効票にするのもアレなんで、このまま本格アンケートしちゃえと思いまして。

アウル
「アバウトだなぁ」

アバウトです。
ではではアウルさん。アンケートの告知をお願いします！
（´・ω・`）つ【カンペ】

アウル
「唐突ですね……まあ、やるからにはキチンとやらせて貰います。
えーと何々？

前回の後書きで語りましたが、そろそろこの“とある新人の日常”も終わりが見えてきました。
それで、次回作に関するアンケートを取ろうと思います。
前回の後書きの後で、感想にて投票して頂いた方の票は、一応集計してありますが、投票し直しをしても構いません。

それでは選択肢を。

？ＳＳＸ～Ｖｉｖｉｄあたりの年代を舞台とした、オリジナルストーリー（この作品の続編）
？シグナムをヒロインとした、恋愛モノ
？最強主人公での、無印から始まる再構成モノ（ヒロイン未定）
？次回作なんぞいいから、さっさとスバルルートを書かかんかいワレ！　いてこますぞ！

以上の４つです……って、４つ目は何かおかしくないですかね？
え？　おかしくないんですか？
そ、そうですか。えーとでは続きを。

投票終了日は、ゆりかご戦が始まるまで。
具体的な日時は決まっていませんが、始まった話の冒頭と後書きで、投票終了を告知させて頂きます。

投票は感想、またはメッセージでお願いします。
１人１票までとさせて頂きます。

……こんなところですか？」

はい。ありがとうございました。
そんな訳で、皆さん奮ってご投票くださいね！

ハヤト
「次回作とか以前に、お前コレ書き終われるの？」

終わらせるよ！
何が何でも終わらせるよ！

ディレト
「この更新速度では、信憑性がありませんわね」

ぐっ……それを言われると弱いが、ちゃんと終わらせるよ。
それと次回作ですが、スバルルートと同時投稿、という形になると思いますので、投稿速度はそれなりで遅くなると思います。
ですが、スバルルートを優先して書き終える予定ではいるので、スバルルートをお待ちの方もご安心ください。

ハヤト
「大丈夫かよ……っと、そろそろお開きの時間か。
アウルさんの台詞が殆ど告知になっちまった気もするけど……」

ディレト
「申し訳ありませんわアウル様。お詫びに、今度私がそちらにお邪魔させて頂きますわね」

迷惑だからやめなさい。

それではアウルさん、今日はお越し頂いた上に告知を手伝って頂き、ありがとうございました。

アウル
「いや、こちらも貴重な経験をさせて貰いましたよ」

そう言って頂けると幸いです。
それでは、最後に番宣をどうぞ！

アウル
「わかりました。それでは――
私が主人公を勤めている作品は、

“魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～亡霊の弾丸～”

語られる事の無い真実。それは、どんな時代であろうと存在する。
ある一人の陸戦魔導士もまた、歴史の闇に消え失せた真実の一部であった。今から語ろう。その一人の魔導士の、『生きた証』を……。

オリジナル主人公での、リリカルなのはＳｔＳの再構成小説ですよ」

ディレト
「シリアスな空気が絶品の良作ですわ。皆様、是非お読みになってくださいませね」

はい、オーケーでーす！
あ、それからアウルさん、これお土産です。

（´・ω・`）つ【銘菓“たすらむ”】

アウル
「名前が不吉だ！！　というか何故そのチョイス！？」

え、と……その、頼まれまして。

アウル
「誰にですか！？」

えーと、えーと……きょ、強制転送☆

アウル
「ちょっとま――！？」

ふぅ。危なかった。
タスラムさんに、言ったら制裁って言われてたから焦ったぜ。

ハヤト
「……お前」

ディレト
「情けないですわ」

うるさーい！
そ、それではまた、次の話で！

ハヤト
「強引に終わらせすぎだろ。
あ、それと次回のゲストは“魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋ

ｅｒＳ　～氷翼の天使～”から、
前回の出演時に弄りが足りなかったので、再びリオス＝コーネルド君にお越しいただきますよ！」

ディレト
「お楽しみに！　ですわ」

※ＥＸＡＭさん、アウルさんの出番が少なくてすいません。
何か訂正などありましたらご連絡ください。適時修正しますので。

第４２話　『翼、ふたたび　１』

ギンガの様子をガラス越しに見て――さすがに、肉親以外は中に入れて貰えなかった――から、近くにいた医務官を捕まえて容態を聞く。

曰く、まだ意識こそ戻らないものの容態は安定しており、今日明日どうにかなる危険性は極めて低いらしい。

傷の方もアテンザ技官が頑張ってくれたお陰で、殆ど回復しているようだ。

意識さえ戻れば、後はそれほど騒がなくてもいいとのことだ。

「そうですか。ありがとうございます」

「いえ。それでは」

「はい」

捕まえた医務官に礼を言って、頭を下げる。

病室に入る許可はもらえない以上、いつまでもここでボーっとしてても仕方ないだろう。

元々、様子を見るだけにするつもりだったしな。

「もう、いいの？」

「ああ。ギンガの容態も聞けたし、ここで見てたってギンガが目ぇ覚ます訳じゃ無いしよ」

「そっか」

問いかけてきたティアナに肩を竦めながら返し、ＩＣＵの入り口へと向かう為に踵を返す。

そのまま歩き出そうとして、ふと足を止めて振り返り、ベッドに眠るギンガに向けて短く呟いた。

「いつまでも寝てんじゃねーぞ、脳筋」

ガラス越し、しかも寝ているギンガには、その呟きは届かない筈だ。

でも、俺には何だか妙な確信があった。

自分の言葉が、あそこで寝続けている戦友に届いているのだという、妙な確信が。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第４２話　『翼、ふたたび　１』

さてさて、ギンガへの見舞い（？）も終わったところで、次にすべきことがある。

それは、昨日邪険にしてしまった弟分と妹分への謝罪だ。
昨日は余裕が無かったとはいえ、あの2人には悪い事したよなぁ……なんか嫌われてて、顔合わせた途端に「失せろ」とか言われたらどうしよう。お兄ちゃん泣いちゃう。

「……何の心配よ」

「これでも不安なんだよ結構。エリオとキャロに嫌われるのは、さすがに辛い」

「その時は、自業自得だと思って誠心誠意謝るのね」

「……優しさが欲しい」

滂沱の涙を流しながら、病室目指して歩く俺。
そういえば、スバルはどうしてんだろ？　ギンガの病室に居ると思ってたんだが……。
あのお姉ちゃん子が、ギンガの事を放っておくなんて思えないんだがなぁ。
つーかティアナの奴なんでこんな平然としてんだ？　俺とか未だに結構頭ん中で色々考えてんのに……。

「ちょっと、どこまで行く気よ？」

「ん？　おぉ！？」

不意に呼び止められて、思考をやめる。
目を動かせば、視界に入ってくるのはエリオとスバルの居る病室
――つまり目的地。
何だかんだと考えているうちに着いていたらしい。思わず声を上げてしまった。

「何時の間に……空間移動でもしたのか？」

「普通に歩いてきたのよ」

「そういう冷淡なツッコミは断固として拒否する」

冷たすぎる反応を拒絶しながら、病室のドアをノックする。

『……はい』

返ってきたのは、元気の無いエリオの声。
その声に罪悪感を覚えながらも、なるべくいつもの調子で明るい声を出しながらドアを開けた。

「いよぅ、元気してっかお前らー」

「に、兄さん！？」

「お兄ちゃん！？」

ドアを開けて中に入ってきた俺を、驚いた顔をしたエリオとキャロが迎えた。
エリオは頭と右腕に包帯を巻いていたが、悪くない顔色でベッドに座ってこっちを見ている。
キャロは特に怪我はしなかったのだろう。見る限りでは包帯もガーゼも無く、エリオの側に椅子を置いて座っていた。
スバルの姿は無い。スバル用に用意されたであろうベッドはもぬけの殻で、大分前から居なくなっているようだ。

それだけ確認すると、俺は2人の近くまで歩み寄る。
昨日、俺に言われた事を思い出したのか、エリオもキャロも、近づいてくる俺を見て不安そうに体を強張らせる。
そんな2人の様子に、罪悪感と申し訳なさを覚えながら、頭を下げた。

「昨日は、悪い」

「「え……？」」

「ちょっとムシャクシャしてたからって、お前らに八つ当たりしちまった。ホント、ごめん」

謝りながら、腰を綺麗に90度に曲げて頭を下げる。
エリオとキャロの顔はこっちからは見えないが、それでも2人が驚いて息を呑んだ音は聞こえる。
だけど、俺は2人に構わないまま、とりあえず言葉を続けた。

「お前らが嫌いであんな事言ったんじゃないんだ。大人気ないことしちまって、本当に悪いと思ってる」

そうして、どのくらい頭を下げていただろうか。
息を呑んでいたエリオとキャロの2人が、ようやく口を開いた。

「お兄ちゃん……」

最初に口を開いたのは、キャロ。
俺は下げていた頭を上げ、彼女の目を見る。

「側に、行ってもいいですか？」

不安げに。
普段の柔らかい声色ではなく、緊張した、少し硬い声。
そんな、怯えるような声でキャロが発した言葉。

そうさせてしまったのは俺で、そのことに胸が痛む。
だが、今はその後悔を胸の奥にしまい込み、口元を綻ばせる。

「ああ。おいで」

答えながら、両手を広げる。
すると、キャロは座っていた椅子から立ち上がって、一歩ずつ俺へと近づいてくる。
そして俺に手を伸ばせば届くぐらいの距離で、足を止めた。

「どうした？」

不思議に思って聞くが、キャロは戸惑うような視線を向けるばかり。
その視線の意味と、何故そんな視線をするのか、その理由は容易に想像することができた。

「あ……」

だから、俺は残っている距離を自分から縮め、キャロの頭を撫でてやる。
撫でられたキャロは一度だけ体を強張らせ、しかしすぐに涙を滲ませて抱きついてきた。
それを抱き返して、出来る限り優しくその頭を撫で続ける。そのままエリオに目をやって、声を出す。

「エリオも、ゴメンな」

「兄、さん……」

まだ呆然としているのか、エリオの反応は鈍い。
本当ならすぐにでもエリオの近くに行ってやりたいんだが、キャロがしがみ付いたまま離してくれないので、今は無理。
さてどうしたもんかと頭を悩ませていると、ようやく我に返ったのか、エリオの目にも涙が溜まっていく。
内心ちょっと焦りながら、それは顔に出さずに苦笑して口を開いた。

「男が、泣くんじゃねーよ」

「……兄さんっ！」

感極まったように、エリオが座っていたベッドから飛び降りて、キャロとは逆の場所に抱きついてきた。
その頭を撫でてやろうとして、右手はあんまり動かせないことに気付く。
仕方ないので、エリオは抱きつくだけで我慢して貰おう。ま、そこは男だし我慢できるよな。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「……さて、準備はどうかな？　ウーノ」

薄暗い自身のラボでパネルを叩きながら、スカリエッティは傍らで作業をしているウーノに尋ねた。

「８割がたは終了しました。セインとディレトのお陰で、設置も滞りなく終了しています」

「結構」

尋ねられたウーノはパネルを叩く手を止めず、顔だけをスカリエッティに向けて問いに答える。

その答えに、楽しくて仕方が無いという顔で頷くスカリエッティの前には、ミッドチルダ全域の地図が映り、そのあちこちに赤い光点が示されていた。

それが何を意味するのか、それは彼等にしかわからない事なのだろう。

だが、スカリエッティもウーノも、敢えてそれを語ろうとはしない。彼等の間では分かりきっている内容なのだから、当然と言えば当然なのだが。

「“聖王の器”の方はどうだい？」

「調整は万全。あとはレリックさえ埋め込めば、いつでも“器とし

て”の役割は果たす事が出来ます」

「“戦略の一部”としての役割は、どうだい？」

「そちらも問題なく」

「なるほど。さすがウーノ、そつが無い」

「恐縮です」

楽しそうなスカリエッティと、微笑を浮かべて作業をこなすウーノ。

「では、セインとディレトが設置を完了次第、宣戦布告といこう」

「了解しました。ドクター」

了承の言葉を返すウーノではあったが、その顔はやや不服そうでもある。

その表情を見て取ったスカリエッティは、意外そうな顔で彼女に尋ねた。

「何かあるのかい？」

「……いえ」

「嘘を言うものではないよ。大事な祭りの前に、そんな顔をしていてはつまらないだろう？」

スカリエッティの言葉にウーノは逡巡し、その後に躊躇いながら「それでは」と口を開いた。

「ドクターは、少しあの少年に固執しすぎではないのでしょうか？確かに、あの少年――ハヤト＝ロックウェルがディレトの……引いては我々の力を管理局に見せ付ける為に、強さ、そして障害となり得る機動六課の面々へと与える衝撃の大きさ、全ての面で適しているのはわかっているつもりです」

「だが、それは他の人間でも構わない。そういう事かな？」

「はい」

頷くウーノに、スカリエッティは笑いながら饒舌に説明を始める。

「確かにウーノ言うとおり、敵の士気低下を狙うだけならば、彼以外でも構わないだろうね。

いや、むしろ他の一般局員を狙った方が効果的だとも言える」

自分の言葉を肯定され、ウーノは戸惑いながらも頷いた。

そんな彼女を見てからスカリエッティは「だが」と続ける。

「私が彼に固執するのは、それだけが理由じゃないんだよ」

「と、言いますと？」

「彼は……ハヤト＝ロックウェルは、確かに戦闘能力は高くないだろう。

ガジェットを上手く使えば、それこそウーノ、君でさえ彼に勝つ事ができると思うよ」

「……」

それはさすがに過小評価が過ぎるのではと思ったが、ウーノは口を開かない。

「しかし、私から見て、彼はあの機動六課において最も厄介な存在だよ」

「何故です？　戦闘能力が低い以上、あの少年に拘る理由は無いように思えますが？」

「私が彼を厄介だと思うのは、戦闘能力ではなく、彼が“人の中心にいる事実”なのだよ」

「人の中心に居る、事実？」

スカリエッティは座っていた椅子から立ち上がり、パネルを叩い

て、ハヤトが戦っている場面を映し出す。
リニアレール、第97管理外世界、ホテル・アグスタ、その他の小さな任務での戦い。
それらを眺めながら、楽しげに言葉を漏らす。

「これらの映像を見て分かるとおり、彼はさして戦闘で活躍をしている訳ではない。
確かにいくつか見るべきモノはあるが、それとて他のメンバーに比べればさしたる活躍とは言えないだろう」

「……はい」

「にもかかわらず、彼はあの機動六課において、中核を担える場所に居る。
周りに居る人間は、自分よりも遥かに才能がある人間達であるにも関わらず、だ」

「それが、危険だと？」

ウーノが発した疑問に、スカリエッティは更に愉快そうに口を端を曲げた。

「私の中にある知識によれば、彼のような人間は時として、信じられない現象を起こす事がある。
そう……“奇跡”と呼ばれるような事をね。
それ故に、彼のような“才能が無くとも人の中心に居る人間”は、後の世でこう呼ばれるのさ――」

まるで恋焦がれている人を見つめるような目で映像のハヤトを追いつつ、楽しそうに呟く。

「――“英雄”とね」

「……だから、“英雄の芽”を早めに、そして確実に潰しておくという訳ですか？」

「我ながら非科学的だとは思うがね」

常のスカリエッティらしからぬ、非科学的な根拠に首を傾げるウーノ。

それに肩を竦めて、「勿論、それだけではないよ」と続けるスカリエッティ。

「自分達の中心に居た人間が惨たらしく殺された時、彼女達がどんな顔をするのか。

……考えただけでも、楽しくて仕方ないだろう？

想像するだけで、笑いが止まらなくなるよ……くくくっ、あははははっ！！！」

映像の中で戦い続けるハヤトを眺めながら呟き、それから笑い始めた。

心の底から楽しげなその哄笑を聞きつつ、ウーノは小さく溜息を吐くのだった。
この男は、何にもまして自身の楽しみを優先する。そして、そのせいで色々とずれてしまった細かい部分を補佐する事が、自分の役目だと思いながら。

◇◇◇◇◇

「セインお姉様ー！　こっちは終わりましたわー！！」
「ちょっ、こらディレト！　大きな声出したら駄目だってば！」
「あ……も、申し訳ありません。セインお姉様」

物陰から元気良く手を振りながら飛び出してきたディレトに、セインが慌てて口に指を当てて注意する。
まぁ、注意しているセインも大声なのはご愛嬌だろう。

「で、では改めまして。こちらの設置は全部終わりましたわ」
「ん。偉いぞー、ディレト」
「えへへ」

セインに頭を撫でられ、ディレトは嬉しそうに目を細めて笑う。
やっていることが犯罪行為でさえなければ、それは微笑ましい姉妹の光景であっただろう。

「ディレト、後何個だったっけ？」

「え？　えーと……。１、２、３……１２個ですわ」

「うぇ～、まだそんなにあるのかぁ」

ディレトが数えながら告げた数字に、辟易した声で肩を落とす。
気持ちは同じなのか、数えていたディレトも似たような表情で溜息を吐いた。
とはいえ、姉であるウーノからの指令なのだから、断ったら後が怖い。

「頑張りましょう、セインお姉様。ウーノお姉様のお説教に比べたら、まだマシですわよ」

「……だねぇ」

深い溜息を吐いてから、セインとディレトはＩＳ“ディープダイバー”を発動して地面へと潜っていく。
後に残されたのは、無骨で無機質な金属の箱だけ。
それが何の為すために設置された物なのかは……今はまだ、スカ

リエッティとナンバーズしか知らない。
今は、まだ……。

side：―　了

◇◇◇◇◇

キャロとエリオが泣き止むのに、それ程時間は必要なかった。
こういう所は、本当に子供らしくないと思う。
ま、キャロは泣き止んでも俺の制服の裾を掴んでいるあたり、やっぱりまだ子供だなと思うがな。

「エリオ、具合はどうだ？」

「あ、うん。骨とかには異常が無いから退院していいって」

「そうか、そりゃよかった」

裾を握ったままのキャロの手を握り返しながら、ベッドに戻ったエリオの状態を尋ねる。
返ってきたのは、思っていたよりも悪くない答え。

「俺も今日退院なんだ。これで隊舎の部屋が寂しくならなくて済むな」

「え？　でも、兄さんあんなにボロボロだったのに……」

……エリオ、お前人が気にしてる事言うなっつの。
まあいい。昨日酷い事行った罰だと思って、甘んじて受け止めよう。

「右手以外は、内臓も骨も筋肉も無事だったからな」

肩を竦めてエリオの疑問に答える。
実際、そう言う風に美人の医務官（巨乳）に言われたしな。
すると、裾を掴んでいたキャロが心配そうに俺を見上げる。

「お兄ちゃん、右手……酷いんですか？」

「まぁそれなりにな。骨は大体くっついたみたいなんだが、筋肉の方が結構やられてたらしい。
２週間で完治するって話なんだが、それまでは日常生活以外での右手の使用はご法度だとさ」

言いながら包帯の巻かれた右手を上げてみせる。
握るとまだ痛みがあるし、なによりロクに力が入らない。

「ま、戦闘になっても邪魔になるような事はないから、安心していいぞ」

「そんな事、気にしません！」

「そうだよ兄さん。兄さんが戦えない分は、僕達が戦うから！」

……何とも、耳が痛いことを言ってくれるぜ。

一人で何とかしようとしてた自分が、どれだけ馬鹿だったのかを自覚させられる。

弟分と妹分の方がよっぽど物事の分別がついてんじゃねぇか。

そう思いながらスバルのベッドに腰掛けているティアナを見れば、同じ事を思っているのかニヤニヤとこっちを見ていた。

あとで嫌がらせをしてやろうと思う。

「……そうだな。頼りにさせてもらうぜ、エリオ、キャロ」

「「はい！」」

「きゅくる～！」

「はいはい。お前も頼りにしてるよ、フリード」

自分の存在を主張してくるフリードに、苦笑する俺達であった。

第４２話　『翼、ふたたび　１』（後書き）

はい、という訳でエリキャロと仲直り＆スカっちがハヤトを狙う真の理由が判明しました。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「今回出番が少なくて寂しいのぅ。どうも、主人公です」

さて、今回の後書きゲストは！
前回来ていただいた時の弄り方が足りなかったと思い、再びこちらから要請して来ていただいた、
“魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～”の主人公！　リオス＝コーネルド君です！！

リオス
「――ぁぁぁぁあああああ！！」

あ、今回も魔方陣で飛ばされてきたんだった。
ハヤト！　受け止めろ！！

ハヤト
「ヤだよ！　何で野郎を受け止めなきゃいけないんだ！」

いいからやれ！

ハヤト
「ちっ！　ブレイブハート！　ホールディングネット！！」

《　ｈｏｌｄｉｎｇ　ｎｅｔ　》

リオス
「あああああああ……うわぁっ！？」（ぼいーん）

ナイスキャッチブレイブハート。
さすがだね。

《　それほどでも　》

リオス
「うぅぅ、酷い目にあいました」

ハヤト
「前回と違って、今回は受け止めたからマシだって！　気にすんな！」

リオス
「き、気にしますよ……」

ＨＡＨＡＨＡ。
まぁ、それはさておき。二度目まして、リオス君。

リオス
「あ、はい。二度目まして」

ハヤト
「俺も二度目ましてか。そっちの後書きであったしな」

リオス

「ですね」

あ、ディレトは呼んでないから安心して。
アイツ今頃そっちのお土産で貰った特製アイスの問題解いてると思うよ。

リオス
「ま、まだ解けてなかったんですか！？」

様子見てみる？
あ、ポチっとな。

ディレト
『こ、こんなのわかりませんわ！！』

チンク
『がんばれがんばれできるできる絶対できるがんばれもっとやれるぞ！！
やれる気持ちの問題だ！　がんばれがんばれそこだ！　そこだ！
諦めるな！　絶対にがんばれ積極的にポジティブにがんばれがんばれ！！
ハヤトだって頑張っているんだぞ！』

ディレト
『な、何故にシューゾーですの……』

チンク
『む？　ハヤトに「応援ならコレだ！」と教えて貰ったのだが……』

ディレト

『騙されてますわよ』

ブツッ

とまあ、こんな状況だ。

ハヤト
「チンク、アレをマジにやるとは」

リオス
「あ、あはははは……（苦笑）」

ま、あっちは放っておこう。
さてさて、いよいよスカっちがハヤトを狙う理由も判明したね。

リオス
「ハヤトさんを害した時のティアナ達の傷ついたところが見たい、って感じですかね？」

だね。
もう少しすると、アイツが管理局に喧嘩売った理由も判明するよ。

リオス
「いったい何が目的でディレトさんを造ったのか……気になりますね」

ハヤト
「いや、多分作者あんま深い事考えてないと思うぞ。
何時だって行き当たりばったりな奴だし」

そんな事ないよ！
少しは伏線とかも考えてるよ！

ハヤト
「ホントに？」

すいません嘘でした。

リオス
「認めるの早くないですか！？」

誤魔化すのも面倒で。

リオス
「理由が意外と浅い！」

ハヤト
「コイツの存在自体が軽いからな」

酷っ！？　お前酷すぎるだろ！！

ハヤト
「事実だから仕方ない」

リオス
「じ、自分が主役のストーリーを書いてる人なんですけど？」

ハヤト
「いいのいいの。俺が居なくなったら、困るのこいつなんだし」

くっ。事実だから言い返せない！
もういい！　この話は終わり！　リオス君、アンケートの告知お願い！
これカンペ！！

リオス
「え、えぇっ！？　そんな唐突な！」

ハヤト
「よろしくー」

リオス
「ま、丸投げですか！？　……うぅ。
えーと……？

ただいま、『次回作に何を書くか』というアンケートを実施しております。
選択肢は４つ。

？ＳＳＸ～Ｖｉｖｉｄあたりの年代を舞台とした、オリジナルストーリー（この作品の続編）
？シグナムをヒロインとした、恋愛モノ
？最強主人公での、無印から始まる再構成モノ（ヒロイン未定）
？次回作なんぞいいから、さっさとスバルルートを書かかんかいワレ！　いてこますぞ！

投票〆切は、本編でゆりかご戦が始まるまで。

具体的な日時は決まっていませんが、始まった話の冒頭と後書きで、投票終了を告知させて頂きます。

投票は感想、またはメッセージでお願いします。
1人1票までとさせて頂きます。

次回作ですが、スバルルートと同時投稿、という形になると思いますので、投稿速度はそれなりで遅くなると思います。
ですが、スバルルートを優先して書き終える予定ではいるので、スバルルートをお待ちの方もご安心ください。

……こんな感じでよかったでしょうか？」

十分だよ。ありがとー！

ハヤト
「さてさて、何に決まるのかねぇ」

何に決まっても、全力で書くだけさ。
さて、ではそろそろお時間なんでリオス君、番宣どうぞ！！

リオス
「あ、はい。
僕の出ている作品は、“魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～”です。

闇の書事件から１０年。
管理局のエースであるなのは、フェイト、はやての3人は、部隊？機動六課？を創設する。

一方、六課への入隊を前に研修として任務に訪れていたスバル＝ナカジマとティアナ＝ランスターの二人は、記憶喪失の青年を保護するが……。

アニメ本編のストーリーをベースに、僕というオリジナル主人公を加えた二次創作です」

ハヤト
「現在はホテル・アグスタの前半部分まで進んで、ティアナの馬鹿がミスしたトコだ」

これからどうなるのか、楽しみだね。
さて、そいじゃあリオス君。今回はありがとう！
これはお土産ですよ。

（・ω・、）つ【等身大ディレト抱き枕　※Ｒ－１５仕様】

リオス
「い、いりませんよ、こういうのは！？」

ハヤト
「いいからいいから」（ぐいぐい）

リオス
「ちょっ！？　お、押し付けないでください！！」

それじゃあ強制転送☆

リオス
「待って――――」ピシュン

ハヤト
「ちゃんと使ってくれよー！」

お疲れ様でしたー！
さて、次回はブレイブハート復活&久しぶりにあの人の登場があるかも？
それではまた、次の話で！

ハヤト
「いい加減ティアナとの関係に決着つけさせろ」

それはもうちょっと後のお楽しみ。

神崎さん、こんな感じになりました！
何か修正点などありましたら、感想かメッセージでお願いします。
適時修正しますので。

第４３話　『翼、ふたたび　２』

時空管理局本局。

無事退院の手続きを終えた俺は、他の３人と一緒にそこに来ていた。

あぁ、勿論理由があって来てるんだぞ？

この間の襲撃で、六課隊舎は全壊しちまった。つまり、俺達が生活するスペースが無くなっちまった訳だ。

かといって、隊舎が無いからといってスカリエッティが動くのを待ってくれる訳じゃない。

で、八神部隊長はあっちこっちに頼み込んで新しい隊舎を確保してくれたらしい。

ここまで聞いた人は、本局に隊舎を確保したのか？　と思っただろう。

甘い。

子供だったあの夜、酒と間違えて飲んだみりんの様に甘い！

『あの』八神部隊長が、そんな規模の小さいことをする訳が無いだろ。

なんと、部隊長は昔自分が乗っていた次元航行艦を丸ごと貰ってきたらしい。

……本局太っ腹すぎるだろ。次元航行艦て、確か俺の給料じゃ一生かかっても買えないぐらいの値段だった筈だが。

まぁ、そういう経緯があって、俺達はその次元航行艦――アースラが収容されている本局へと来ている訳だ。

あー説明疲れた。ん？　つーか誰に説明してんだ俺は？

「……ちょっと、何一人でブツブツ言ってんのよ？」

「ん？　俺独り言言ってた？」

「言ってたわよ。さっきからずっと」

「えーと……少し電波が」

「病院にもう一回行って、脳の精密検査して貰ってきなさい」

「酷くね？」

「に、兄さん。脳に何かあったら大変だよ？」

「そうですよ、病院に戻りましょう？　お兄ちゃん」

ティアナは呆れ半分に、エリオとキャロは至極真面目に心配してきた。

……何？　お前ら俺の脳がそんなにヤバイと思ってる訳？

「当然」

「えと……その、少しだけ」

「僕も、ちょっとだけ」

「……お前ら、実は俺のこと嫌いだろ？」

余りにも酷い扱いに涙する俺であった。

ただ、こーいったやりとりが酷く久しぶりな気がして、少しだけ楽しかったりするんだがな。

変な感じだったのなんて、２日ぐらいだったってのに。

あ、そういやスバルには結局会えなかったなぁ。

エリオとキャロは、ギンガのとこに行ったって言ってたけど、会わなかったし……入れ違いになったか？

まあいいや。明日にでもまた病院に行って顔を見てやるとしよう。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第４３話　『翼、ふたたび　２』

「はー……これが、アースラか」

「わぁ……」

「凄い……」

次元航行部隊の巡洋艦が停泊しているドッグに着いた俺達は、初めて見る本物の次元航行艦に思わず声を上げた。
資料映像なんかで見た事はあるんだが、やっぱ本物は迫力が違うなぁ。

「まだ整備中だから、終わるまでは乗り込んだり出来ないけどね」

「そうなのか？　別にもう平気そうな気がするんだが」

「見た目は大丈夫っぽいけど、元々廃艦が決定してた老朽艦らしから、細かいところでガタが来てたらしいわよ」

「ああ……なるほど」

ティアナの言葉に、この艦――アースラがどういった艦なのかを思い出す。
高町隊長、ハラオウン隊長、八神部隊長。
この３人と共に、アースラは様々な事件を解決してきた。それはつまり、１０年近く稼動していたって事だ。
普通の巡洋艦の寿命が３～４年程度なのだから、これは破格の年数だろう。

それを鑑みれば、確かに細かいところがボロボロになっていても当然か。

「ん？　でも、それじゃ俺達はどこで寝泊りすんだ？」
「八神部隊長が、本局にあたし達が寝泊りする場所を確保してくれてるわ。安心しなさい」
「そうなのか。それは安心」
自腹でどっかに泊まらなきゃいけないのかとヒヤヒヤしたぜ。
今月金無いからなぁ。新しいソフト買いまくったせいで。
「じゃあ、部屋に案内してあげるから、着いてきなさい」
「おうよ」
ドッグに背を向けて歩き出すティアナ。
その後ろを、エリオとキャロの手を引いて追いかける。
「俺らの部屋って個室か？　さすがに雑魚寝は嫌すぎるんだが」
「……アンタ、あたし達が贅沢言える立場じゃないって分かってる？」
「だって、なぁ？　さすがに全員一緒ってのは……」
そこで言葉を切ってエリオとキャロを見る。

さすがに2人も嫌だろうと思ったら、期待に目を輝かしてやがった。

「お兄ちゃんと一緒なら、私はいいです！」

「ぼ、僕も！」

「……そうだな。お前らはそうだろうな」

軽く溜息を吐いて2人に答え、ティアナの返答を待つ。

「安心しなさい。2人部屋の個室よ」

「そうか。よかったよかった」

その答えに胸を撫で下ろす。
いくらなんでも、今ティアナと一緒に寝る度胸は無い。
まぁ、勿論そんな事は顔に出さないし、言葉にも出さんが。

「それじゃあサクサクと案内して貰おうか。ホレ、急げ急げ」

「偉そうにすんな」

「あでっ」

ティアナを急かしたら、頭を叩かれた。
コイツにしては珍しい手加減した攻撃に、少しだけ驚く。
何だ!?　何か裏があるのか!?

はっ！　わかったぞ！
後で俺の事を闇討ちするつもりなんだな!?　そうはいかんぞ!!

「……エリオ、キャロ。やっぱりコイツ病院に戻すわよ」

「です、ね」

「お兄ちゃん。病院、怖くないですからね？」

え？　あれ？　何で俺が可哀想な子みたいな目で見られてんの？
俺は3人からの哀れんだ視線を受けながら、ただ戸惑うことしか出来なかった。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「ブレイブハート、どうしても納得してくれないの？」

≪　はい　≫

時空管理局本局、メンテナンスルーム。
ブレイブハートの収容された調整槽の前で、マリエル＝アテンザは困った顔で腕を組んだ。
その理由は、彼女の目の前にあるモニタに映し出された、ブレイブハートからの要求である。

“Ｐｌｅａｓｅ　ｒｅｌｅａｓｅ　ｔｈｅ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　ｏｆ　『Ｂｌｕｓｔｅｒ　ｓｙｓｔｅｍ』”

ブラスターシステムにかかっているプロテクトの解除を要求する、その一文。
しかし、今のところマリエルはその要求に応えるつもりは無い。

「ブラスターシステムは、凄く危険なんだよ？」

≪　理解しています　≫

「ブレイブハートも危険だし、ロックウェル君だって……」

≪　ですが、必要です　≫

「……はぁ」

先ほどから何度も繰り返したやり取りに、マリエルは溜息を吐くしかない。
ブラスターシステムは、あのエースオブエースと呼ばれるなのはでさえ、切り札中の切り札として普段は封印してある程に危険なシステムだ。
今のハヤトでは到底操りきれるとは思えないし、下手をすれば反動で再起不能になってしまうかもしれない。

レイジングハートの姉妹機だからこそ、同じシステムが搭載されてしまったのだが、それほど危険なシステム故に今までプロテクトを施して、ハヤトの体がそれに耐えられるとなのはが判断した時に初めて、そのプロテクトを解除するつもりだった。
それだけ危険なシステムだと理解してなお、ブレイブハートはそのプロテクトを解除しろと言っているのだ。
マリエルでなくとも、戸惑って当然だと言えるだろう。

《　解除されるまで、一切の修理は受け付けません　》

「……はぁぁぁ」

きっぱりと言い放つブレイブハートに、マリエルは今までで一番深い溜息を吐く。
朝イチで本局技術スタッフから「ブレイブハートの修理が出来ない」と呼び出され、対処しようと急いで来たのだが、これではラチが開かない。
無理矢理シャットダウンさせようにも、ブレイブハートもその可能性は考えてあったのか、ブレイブハートに何かをする際に必要と

なる回線が全てブロックされしまっている。
　これでは、ブレイブハートが回線を開放しない限り、こちらからは何をすることも出来ない。

「理由は？」

≪　？　≫

「理由くらい、聞かせて頂戴ブレイブハート。でなきゃ、あんな危険なシステムのプロテクトを解除するのなんて、許可出来る訳ないよ」

≪　理由を説明すれば、プロテクトを解除して頂けますか？　≫

「それは……理由しだい、かな」

≪　……了解しました　≫

　少しの沈黙の後、ポツリと呟くようにブレイブハートが返答する。
　彼女も、これ以上の問答は不毛だと判断したのだろう。

≪　ナンバーズ？？、ディレトと呼ばれる個体に勝利する為です　≫

「ディレトって言うと、ロックウェル君とギンガをあんな風にした……？」

≪　はい　≫

「でも、次また彼女と戦うって決まった訳じゃないでしょう？」

マリエルの疑問は至極当然のモノだった。

確かにあの時、ディレトはハヤトの前に現れた。しかし、次もまた同じ状況になるとは考え難い。

「……こういう言い方はどうかと思うんだけど。

ロックウェル君は、そんなに強くないでしょう？　スカリエッティが、そんなに執着するとは思えないよ」

≪　ですがあの時、あの戦闘機人の狙いはマスターハヤトでした。それが続かないという保障もありません　≫

「それは、そうだけど……」

≪　もしそうなった時、今のままの私ではマスターハヤトを守りきれません。

私はエースオブエースのデバイス、レイジングハートの姉妹機。あの様な無様な姿を、２度も晒すつもりはありません　≫

デバイスに感情は無い。

しかし、ブレイブハートの言葉には、拭いようの無い悔しさが滲んでいた。

「でも、ブラスターモードのせいで、ロックウェル君が余計に危険

になるかも知れないよ？」

《　それは、私がこの身の全てを賭けて制御します　》

「……」

きっぱりと言ってのけるブレイブハートに、マリエルは最早説得が不可能な事を悟った。

だから――

「ロックウェル君にブラスターシステムの話をして、ロックウェル君が了承すること。それが条件」

説得を諦め、妥協案を提案する。

マリエルからすれば、譲歩に譲歩を重ねた案。技師として、これ以上は譲れないというラインだ。

これをブレイブハートが了承しなければ、それこそ多少無茶な事をする事も辞さないと考えながら、マリエルはブレイブハートを見据えた。

「これ以上は、譲れないよ」

《　構いません　》

マリエルの提案に、ブレイブハートは即答した。

ブレイブハートもそこがマリエルの最大妥協点だと分かったのだろう。
同時に、あらゆる回線にかかっていたブロックが解除される。それを見て、ブレイブハートが修理を了承したのだと理解したマリエルは、この頑固なデバイスに溜息を吐きながらも、修理を始めるためにパネルを叩き始めたのだった。

◇◇◇◇◇

薄暗い通路を、2人の少女が意気揚々と歩いている。
1人はエメラルドグリーンの髪を短く揃えた少女――セイン。
もう1人は、真紅のロングヘアーを揺らす少女――ディレト。
2人はウーノから言い付けられていた任務を終え、たった今自分達のアジトへと帰還したところだ。

「つっかれたー」

「ですわね～」

背を伸ばしながら、2人は揃って廊下を歩く。
それは彼女達のやってきた事からすれば、酷く非常識な光景なのだが、今ここにそれを咎める者はいない。
故に、2人は誰に咎められる事無く、目的地であるスカリエッティの居るドアの前に辿りついた。

「たっだいま～」

「ただいまですわ～」

高らかに声を上げながら、ドアを開けて中に入る。

開いたドアの先に居たのは、満足そうな笑みを浮かべるスカリエッティと、その傍らでパネルを叩くウーノとクアットロ。

そして――。

台の上で仰向けに拘束され、目に涙を溜めたまま気を失っているヴィヴィオ。

「ドクター、“器”の準備をしていたんですの？」

そんなヴィヴィオを無感動に見つめ、ディレトがスカリエッティに尋ねた。

「ああ。後は定着するのを待つだけさ」

「定着って、どのくらいかかるの？」

ディレトに代わり、今度はセインが尋ねる。

その質問には、スカリエッティに代わってウーノとクアットロの2人が返答した。

「定着に1週間。その後様子見で3日前後、というところかしらね」

「でもぉ、その間に管理局に邪魔されるかも知れないじゃない？だ・か・らぁ、セインちゃんとディレトちゃんに“アレ”を設置してきて貰ったのよぉ」

「時間稼ぎ兼、脅しという訳ね」

「「へぇ～」」

本当に理解しているのか、なんとなくという感じで頷くセインとディレト。

頭脳労働派の3人はそんな肉体労働派の2人には構わず、目の前のパネルに集中した。

程なく、そのパネルに作業完了を知らせる文字が躍る。

「レリック、予定通り“器”との同期を始めました」

「うふふ。後は定着するまで、このまま様子見……ですねぇ」

ウーノとクアットロの言葉に、スカリエッティは口の端を動かしたまま頷いた。

それから、一度だけヴィヴィオに視線を動かし、その後白衣を翻

して歩き出す。

「さぁ……それでは、行くとしようか」

歩き出した彼の後ろに、ウーノとクアットロが楽しそうな微笑みを浮かべて続く。

少し遅れて、セインとディレトも後ろに続いた。

「宣戦布告、ですね」

「楽しみですねぇ、ドクター」

「よくわかんないけど、楽しそうだねディレト」

「楽しくなると良いですわね、セインお姉様」

4人を引き連れ、スカリエッティは悠然と歩を進める。

「ふふふ……。楽しくなるさ、私が考案し、君達が全力でサポートしてくれたのだからね。

きっと、素晴らしい……今まで経験したことが無い程素晴らしい祭りになるさ」

その顔に、狂おしいほどの愉悦を浮かべて――。

side：―　了

第４３話　『翼、ふたたび　２』（後書き）

最終決戦まであと僅か、でも消化したいイベントは多数。困った困った。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「全治２週間なのに、１週間ちょっとじゃ間に合わなくね？
　どうも、主人公です」

えー、今回の後書きゲストなんですが……。
諸事情があって呼んでおりません。

ハヤト
「諸事情？」

うむ。
現実が忙しくなってきて、立候補してくれた作者様の作品を読んでいる暇が無くなってしまったのだよ。
あの糞上司……てめぇの仕事までこっちに回してきやがって。

ハヤト
「現実の話をココで言うな」

おお、ごめんごめん。
で、読む暇が無いのに無理に後書きに出して、性格とか口調がぜんぜん違う感じになるのは失礼だなーと思ってね。
ならいっそ、とりあえず現実が落ち着くまで、後書きゲストは無しにしようと。

ハヤト
「なるほどなー」

ま、そーゆーワケで暫くはお前と作者だけだ。
さて、では今回の話だな。

ハヤト
「アースラ引越しと、ブレイブハート強化フラグ、それとスカっち陣営だな」

次回でセインとディレトが何してたのかバラすよ。
そんで、いよいよ宣戦布告な訳だ。

ハヤト
「宣戦布告するとか馬鹿じゃね？
管理局だって無能ばっかじゃねーんだし、決戦始まる前に捕まるじゃん」

そこら辺も次回ちゃんと明らかになるから安心なさい。
さて、今回は短いけどこの辺で。
最後にちょっと確認をば。
現在立候補して頂いている後書き出演者で把握出来ているのは、

魔法少女リリカルなのは～神様の力を得た少年～から、迅君とエレナさん。

だけなのですが、もし把握漏れしてる人がいらっしゃったら感想で言って下さい。
とはいえ、暫くは執筆で精一杯っぽいので、ご登場して頂くのは結

構先になってしまいそうですが……（汗）

それではまた、次の話で。

※ただいま、『次回作に何を書くか』というアンケートを実施しております。
選択肢は４つ。

？ＳＳＸ～Ｖｉｖｉｄあたりの年代を舞台とした、オリジナルストーリー（この作品の続編）
？シグナムをヒロインとした、恋愛モノ
？最強主人公での、無印から始まる再構成モノ（ヒロイン未定）
？次回作なんぞいいから、さっさとスバルルートを書かかんかいワレ！　いてこますぞ！

投票〆切は、本編でゆりかご戦が始まるまで。
具体的な日時は決まっていませんが、始まった話の冒頭と後書きで、投票終了を告知させて頂きます。

投票は感想、またはメッセージでお願いします。
１人１票までとさせて頂きます。

次回作ですが、スバルルートと同時投稿、という形になると思いますので、投稿速度はそれなりで遅くなると思います。
ですが、スバルルートを優先して書き終える予定ではいるので、ス

バルルートをお待ちの方もご安心ください。

第４４話　『宣戦布告』

俺が退院してから3日が経った。
平穏無事……というのも何だか変な感じがするけど、まぁとりあえずスカリエッティの襲撃も無く、とりあえずは無事にこの3日間が過ぎていった。
唯一引っかかることがあるとすれば、この3日間、結局スバルと会えてないって事だな。
仕事とかの合間を縫って、ちょくちょく病院には行ったんだが、何時行ってもどこにも居やしねぇ。何してんだアイツは。
病人なら大人しく病室で寝てろっちゅーねん。

まぁ、その落ち着きの無いスバルも今日で退院。今は本局の技術部で、アテンザ技官に最終調整をしてもらってるらしい。
そういえば、ブレイブハートはどんな感じだろうか？
ここんとこ仕事仕事で、ゲームをしてる暇すらない。ちょっとした暇が出来ても、スバルとギンガの様子を見に行ったり、エリオやキャロの仕事を手伝ったりで、様子を見に行けてないんだよなぁ……。
ティアナにも返事しなきゃならないだろうし……やる事多すぎ。

「はぁ……」

「人の隣で溜息吐かないでよ。こっちまで気が滅入るじゃないの」

思わず溜息を漏らせば、隣の椅子に座るティアナが嫌そうな顔で文句を言ってきた。

溜息の理由の一部はお前なんですがね、とは言わない。大人だからネ！

ちなみに、今俺がいるのはアースラのブリーフィングルーム。
この3日間で整備が終わり、ようやく乗り込むことが出来るようになったのだ。
今ここには俺とティアナの他に、高町隊長、ハラオウン隊長、キャロ、そんでグランセニック陸曹に代わってヘリのパイロットをやる事になった、アルト＝クラエッタ二等陸士が居る。

……皆仕事しなくていいのか？　いや、俺も人のこと言えないけど。
エリオはシグナム副隊長と訓練をしている。あいつなりに色々と思うところがあったんだろう。
しかしまぁ、シグナム副隊長に訓練を頼むとは……自殺願望でもあるのかエリオは？　もしくはドMか？
お兄ちゃんは弟分の将来が心配です。性癖的な意味で。

「お、皆お揃いやな」

とかなんとか考えているうちに、ブリーフィングルームのドアが開いて、八神部隊長とロウラン准陸尉が入ってきた。
部隊長もサボり……じゃなくて休憩ですか？

「ハヤト君と一緒にせんといてー」

「いや、俺だって仕事してましたよ！？　今はちょっと休んでるだけで！！」

「はいはい。そーゆーことにしといたるわ」

「扱いが適当すぎる！！」

耐えられない存在の軽さに思わず泣きそうになる。

だが、部隊長は俺を無視してロウラン准陸尉を連れてブリーフィングルームの上座へと座る。つられるように、クラエッタ陸士達もそれぞれが席に着いた。

「さて、と。丁度今、機動六課の今後の方針が決まったところや」

全員が席に着いたのを確認してから、部隊長はそう口火を切った。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第４４話　『宣戦布告』

ロウラン准陸尉が教えてくれた現在の状況。

うすうす分かってはいたが、地上本部は襲撃事件の犯人――まぁ

スカリエッティなんだが――の捜査を自分達でやることを強硬に主張し、本局の介入を拒んでいるらしい。
それは本局所属である機動六課も同じで、捜査情報は一切公開されていないとの事だ。
何を意地になってるんだか。今はそれどころでもないだろうに。

「せやけどな。私達が追うんはテロ事件でも、その主犯格のジェイル＝スカリエッティでもない。
あくまで私らが追ってるんは、ロストロギア・レリックや」

そんな言葉と共に、部隊長の右肩の上あたりの空中に、レリックの映ったモニタが開く。

「その捜査線上に、スカリエッティとその一味がおるだけ。そーゆー方向や」

……なんというか、殆ど屁理屈だな。
しかも実際その通りなあたりが性質が悪い。さすが部隊長。

「そんで、その過程で誘拐されたなのは隊長とフェイト隊長の保護児童、ヴィヴィオを救出する。
そういう線で動いていく方針や。両隊長、意見があれば」

「理想的な状況だけど……はやてちゃん、また無茶してない？」

「大丈夫？」

部隊長の言葉に、両隊長が少しだけ心配そうな顔をした。
確かに、それは少しだけ心配だな。部隊長、なんかあくどいことしてそうだしな。
具体的には脅迫とか裏金とか……裏金は無いか。部隊長貧乏っぽいし。

「後見人の皆さんの黙認と協力は、ちゃんと固めてあるよ。大丈夫。何より、こんな時の為の機動六課や。ここで動けな、部隊を興した意味が無いしな」

「了解」

「なら、方針に異存はありません」

そう言って、両隊長が力強く頷く。
俺達も、つられるように各々頷いて部隊長を見た。

「ん。ほんなら捜査出動は本日中の予定や。万全の態勢で、出動命令を待っててな」

それに部隊長が頷き返し、席を立とうとした瞬間だった。

『それは困るね。君達には少なくともあと1週間、動かずにいて貰わないと』

「「「「「「「「「「！！？」」」」」」」」」」

部隊長の右上、さっきまでレリックが映っていたモニタから、聞き慣れない声が響いた。

ｓｉｄｅ：―

ブリーフィングルームに居る全ての人間の視線が、モニタに集まる。

そこに映っているのは、白衣を羽織り、紫色の髪を揺らす男――ジェイル＝スカリエッティ。

『おっと失礼。自己紹介をするのを忘れてしまったね。

初めまして、機動六課の諸君。私はジェイル＝スカリエッティ……とはいえ、そちらは私の事を良く知っているようだし、今更自己紹介というのもおかしな話だったかな？』

まるで親しい人間と話している様に、悠然と笑うスカリエッティ。

だが、それに答える人間は居ない。全員が、驚きと怒りが入り混じった視線をモニタに向けるだけ。

その視線を受けたスカリエッティは、しかし全く気にする事も無

く肩を竦めて悠然と笑う。

『黙ったままではなく、何か言って貰えると嬉しいのだがね？』

その言葉に、漸くはやてが反応を返した。

「どうやって、アースラの回線に割り込んだんや？」

厳しい視線をモニタに向けながら、呻くように言葉を漏らす。
はやての疑問は最もで、このアースラは老朽艦とはいえ、内部で使われている機材などは一級品だ。それに今現在、アースラのメインＣＰＵは本局のソレと繋がっている。おいそれとハッキング出来るような代物ではないのだ。

『何。この程度のハッキング、私にしてみれば容易いモノさ』

しかし、モニタに映るスカリエッティは涼しい顔でそう嘯く。
そんなスカリエッティに、今度はフェイトが厳しい視線と共に言葉をぶつけた。

「……犯罪者が、何の用だ？」

常の口調とは違う、事務的で硬い口調。
機動六課の隊長としての自分ではなく、執務官としての自分で、モニタに映る犯罪者を睨みつけている。

『おや？　用なら先程言わなかったかね？』

「……このっ！」

馬鹿にしたような表情と口調で答えたスカリエッティに、フェイトはモニタを睨みつけながら立ち上がった。
今にもモニタに向かって攻撃しそうなフェイトを、なのはが手で制する。

「フェイトちゃん、今は抑えて」

「なのは、でも……っ！」

言い返そうとして、白くなるほどに握り締められているなのはの手が視界に入り、言葉を止める。
そう。なのはとてスカリエッティを許せない気持ちは同じなのだ。しかし、スカリエッティが何の意味も無くこうして通信を繋ぐなどありえない。
その目的をはっきりさせるまでは、下手なことをするのは得策ではない。

「……わかった」

それに気付いたフェイトは、頭を冷やして席に座りなおす。

『ふむ。さすがはエースオブエース、と言ったところかな？
自分が娘の様に可愛がっていた人間を攫われたというのに、随分と冷静だね』

「……1週間、動くなと言っていましたけれど、私達がそれに大人しく従うとでも？」

挑発するようなスカリエッティの言葉には答えず、なのはが短く尋ねた。

それに興が削がれたのか、少しだけ不満そうに眉を潜めてスカリエッティが鼻を鳴らした。

『つまらないね。もう少し激昂するなり取り乱すなりしてくれると思ったんだが……』

「もう一度聞きます。私達が、貴方の要求に従うとでも？」

スカリエッティの言葉を遮るように、なのはが再び尋ねる。

すると少しだけ間を空けてから、気を取り直したように再び皮肉げな笑みを浮かべてスカリエッティが口を開く。

『勿論、思っていないさ。だから少しだけ卑怯な手を使わせて貰ったよ』

言葉と共に、モニタの映像が切り替わる。
映し出されたのは、やや小さめな箱型の何か。それは、セインとディレトが仕掛けていたモノ。
だが、それと知らぬハヤト達は皆が皆、それが何なのか分からずに不審な目を向けた。

『この箱の中には、私が開発した、人を数秒で死に至らしめるウィルスが凝縮されている。効果範囲は半径１０ｋｍ四方。致死率は１００％……感染してしまえば助かる術は無い。
これを、ミッドチルダの市街のありとあらゆる場所、施設に仕掛けさせて貰った』

「な……っ！」

「そんな……！？」

語られた事実に、なのはとフェイトが言葉を失う。
それはつまり、ミッドチルダ全域が人質にあるという事。しかも、相手はジェイル＝スカリエッティ。
生物兵器と、広域指名手配の犯罪者。
最悪の組み合わせに、その場に居る誰もが顔を青くした。

「な、なら今すぐ見つけて撤去しないと！」

『おっと。無理に撤去などしようと思わないことだ。
コレは箱そのものも私の謹製でね、私以外の人間が解体しようとすれば、即座に中身をばら撒くようになっている』

「あ……」

慌てて席を立とうとしたアルトだったが、スカリエッティに否定され、言葉を失って腰を降ろす。

『市民を避難させるのも不可能だろうね。ミッドチルダの人口は数千万を超える。
たった1週間で、その全員を速やかに避難させるなど、不可能に近い。
しかも、生物兵器が設置されているとなれば、市民はパニックになってしまうだろうしね』

「……そんな」

続けて、避難も難しいと知らされ、アルトは完全に俯いてしまった。
代わりに、今度ははやてが口を開く。

「1週間後、何をする気や」

『祭りさ。管理局という巨大な組織を相手にした、史上類を見ない程に大きな、ね』

「……祭り、やて？」

それは、事実上の宣戦布告。

スカリエッティは、管理局を相手取り、先日の襲撃など比べ物にならない程の事を起こす。そう告げているのだ。

それを認識し、誰もが言葉を失い、誰もがただ呆然とモニタを見つめた。

「……アンタの目的は、いったい何なんや？」

その中で、はやてが言葉を搾り出す。

モニタの映像を再び自身の映像に戻し、スカリエッティは口の端を歪めたままそれに答える。

『目的？　ふふふ……。目的、目的ね』

少しだけ言葉を選ぶように呟いて、続ける。

『極論してしまうなら、私の目的は、“私自身が楽しむ事”になるのだろうね』

「楽しむ……事？」

予想だにしていなかった返答に、はやてが訝しげに眉を潜め、呟く。

「ふざけるなっ！　そんな理由であんな……っ！！」

『ふざけてなどいないさ。それとも何かな？　犯罪者には、すべからく何か崇高な目的があるとでも？』

「そんな事を言っているんじゃない！！」

激昂するフェイトに、涼しい顔で返すスカリエッティ。

そのまま、右手の指を2本立てて見せる。

『私が心躍る瞬間は2つ。

1つは、真理を追い求めている時。そしてもう1つは――

何かが、目の前で壊れる時さ』

「な……」

『“自称”次元世界の管理者である君達が、私が創造した作品達に敗北する。
そうなった時、残された次元世界はどうなるだろうね？』

「……！！」

スカリエッティが口にした“仮定”。
その仮定が持つ意味を、その場に居る誰もが即座に理解した。
管理者たるモノが居なくなる、それは――

『今は管理局の介入によって止まっている戦争、飢餓、暴動。
勿論、現在幽閉されている犯罪者とその仲間達も、黙ってはいないだろうね』

それは――次元世界の崩壊に等しい。

『私の手によって、全ての世界が壊れていく。
その様を見るのは、どれだけ楽しいのだろうね？　くくくっ、あははははっっっっ！！！』

「「「「「「……」」」」」」

モニタの向こうで狂喜するスカリエッティと、語られた事実に呆然とするしかできないはやて達。

だが――。

「んなこと、出来る訳ねーだろバーーカ」

スカリエッティの笑い声だけが聞こえていたブリーフィングルームに、別の声が響く。

『くく……ほぅ？　何故そう思うのかな？
理由を聞かせて貰いたいものだね、ハヤト＝ロックウェル君？』

それは、今まで黙して語らなかったハヤトの声。
スカリエッティは笑う事を止め、楽しそうな、興味深そうな視線を彼に向ける。

「決まってんだろ。俺らが止めるからだよ」

『なるほど。しかし、この前の地上本部襲撃を、君達は止められなかったのでは無かったかな？』

「はっ、この前とは状況からして違うだろうが。
その程度も考えらんねーとか、お前ホントは馬鹿だろ？」

『確かに状況は違うかも知れないね。
しかし、また同じ状況になる可能性は高い。そうは思わないかね？』

「全然思わねーよ」

愉悦に歪むスカリエッティの目を、ハヤトは真正面から見据える。

「古今東西どんなゲームでも、そうやって余裕かましてる悪役は負けるって、相場が決まってんだ」

『ゲームと現実は決してイコールではない。その程度、君とてわかっているだろう？
事実、この前は私達が勝ったのだしね』

「自信過剰は命取りだって言ってんだよ。それぐらい理解しろや馬鹿科学者。
それにな、1度負けたからって終わりじゃねぇ。次に勝てばいいだけだ。でしょう？　八神部隊長」

ハヤトの言葉は、筋が通っていない子供のソレだ。
しかし、ソレはスカリエッティの狂気に飲まれていたはやて達の心を動かすには、十分すぎた。

「……ああ、その通りや」

しっかりと、いつもの不敵な笑みを浮かべて頷くはやて。
それを見てから、ハヤトは口の端を持ち上げて、スカリエッティに見せ付けるように右手の中指を突き上げた。

「つーわけだ。1週間待ってやっから、負けた時の言い訳と、ヴィヴィオを返す準備でもしとくんだな」

『……くくっ。なるほどなるほど。
よろしい！　結構だ！！　ならば1週間後に決着をつけようじゃないか機動六課諸君！』

「上等。けど忘れんな、俺らはやられた事は万倍にして返すし、取られたモンは何が何でも取り返す。
もう2度と、てめーには負けてやらねぇ。
正義(俺ら)が勝って、悪(おまえら)が負ける。そんで最後は大団円(ハッピーエンド)ってな」

『そうなるかどうか、楽しみにしているよ』

その言葉を最後に、モニタからスカリエッティの姿が消えた。
それは、スカリエッティが時空管理局全てに同じ内容の通信を繋ぐ、ほんの数時間前の出来事であった。

◇◇◇◇◇

「ドクター、お疲れ様でした」

「ああ」

モニタの前で満足そうに頷くスカリエッティに、ウーノが声をかける。

「しかしドクター。どうして管理局に先んじて、機動六課にだけ宣戦布告を？」

「彼女達とその協力者が最も真相（私達）に近かった、というのが一つ。もう一つは――自分達の置かれた状況を理解した時、彼がどういう反応をするのかを見たかったのさ」

そう言って、さっきのハヤトの映像をモニタに映す。

「やはり彼は厄介な存在だよ」

言葉ではそう言いつつも、スカリエッティは楽しそうに先程の光景を思い出す。

ハヤトが口を開くまで、確実にあの場はスカリエッティが支配していた。

その証拠に、はやてもなのはもフェイトも、あそこに居た全員が

スカリエッティの狂気に飲まれ、言葉を発することすら出来ていなかった。

「だが、彼はそれをあっという間に覆した」

あの時、ハヤトの言葉は、狂気に飲まれていたはやて達の心を動かした。

別に確信のある言葉でもない、ただ自身の考えを口にしただけで、だ。

「1週間後が待ち遠しいね。
アレだけ影響力のある彼が死んだ時、彼女達がどう壊れてくれるのか。今から楽しみで仕方ないよ」

「そうですね。ついに、ドクターの望みが叶うのですから」

「ああ！　これほど時間が経つのを遅く感じるのは初めてだ！」

言葉の後、薄暗い研究室にスカリエッティの哄笑が響き渡る。

ウーノは楽しそうに笑い続ける彼を、微笑みながら見つめていた。

第４４話　『宣戦布告』（後書き）

ようやく書けた……つ、疲れたー。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「今回主人公っぽかったよね！　どうも、主人公です」

投稿の間があいてすいませんでした。
色々と辻褄が合うようにしようとしたら、やたらと時間がかかっちゃいました。

ハヤト
「後書きにゲストも呼べないんだから、せめて投稿ぐらい早くしろよ」

うぅ……。
アレだね。言わせたい台詞を中心に物語を考えるのはやめた方がいいね。
途中の文で辻褄合わせるのがめっちゃ難しい。

ハヤト
「言わせたい台詞？」

お前の「正義が勝って～」と、スカっちの「私が心躍る～」の２つ。
これはもうずっと前から言わせようと思ってたんだよ。

ハヤト
「ほほう」

だけど、普通に考えてスカっちが六課にだけ通信するってのも、何だかおかしい話だろ?そこの辻褄合わせどうしようか、ずっと考えてた訳よ。

ハヤト
「そんで結局、今回の話になった、と」

そゆこと。
これ以上の辻褄合わせは作者の力量では無理でした。

さて、次回からは決戦準備＋その他諸々の決着編です。

ハヤト
「決着編?」

お前とティアナ、スバルの関係。
ブラスターモードを使うか否か。
まぁ今のとこ考えてるのはこの2つだね。

ハヤト
「やること多くね?　1週間なのに」

……なんとかするよ。
それではまた、次の話で。

※ただいま、『次回作に何を書くか』というアンケートを実施しております。

選択肢は４つ。

?ＳＳＸ～Ｖｉｖｉｄあたりの年代を舞台とした、オリジナルストーリー（この作品の続編）
?シグナムをヒロインとした、恋愛モノ
?最強主人公での、無印から始まる再構成モノ（ヒロイン未定）
?次回作なんぞいいから、さっさとスバルルートを書かかんかいワレ！　いてこますぞ！

投票〆切は、本編でゆりかご戦が始まるまで。
具体的な日時は決まっていませんが、始まった話の冒頭と後書きで、投票終了を告知させて頂きます。

投票は感想、またはメッセージでお願いします。
１人１票までとさせて頂きます。

次回作ですが、スバルルートと同時投稿、という形になると思いますので、投稿速度はそれなりで遅くなると思います。
ですが、スバルルートを優先して書き終える予定ではいるので、スバルルートをお待ちの方もご安心ください。

第４５話　『Ｂｒａｖｅ　Ｈｅａｒｔ』（前書き）

※今回は短めです。

第45話　『Ｂｒａｖｅ　Ｈｅａｒｔ』

スカリエッティの馬鹿が俺達に宣戦布告をしてきた数時間後。
あの変態科学者は、時空管理局本局と、再建中の地上本部に向けて改めて宣戦布告と脅しをしてきた。
曰く、１週間後に本格的に戦いを挑む。
それまでの間、自分達に何かをしようとすれば、ミッド市街に仕掛けた生物兵器をばら撒く。
生物兵器の箱は無理に処理、回収しようとしたら暴発する。

何度聞いてもムカつく内容だな。さすが悪役。
１週間後に捕まえたら、毎日嫌味を言いに面会しに行ってやろう。
首を洗って待ってやがれ変態科学者め。

「しかし、敵が分かってるのに動けないってのは……何ともむず痒い感じですね」

「仕方ないわよ。ミッドにいる人たち全員が人質みたいなものなんだし」

「そうだね。あの脅しが本当かどうかはわからないけど、万が一ってこともあるし……」

本局の廊下を歩きながら、隣を歩くティアナと高町隊長に愚痴を零す。

目指しているのは本局のデバイスメンテナンスルーム。
ブレイブハートの事で話があるからと、アテンザ技官に高町隊長ともども呼び出されたのだ。
俺が呼ばれるのは分かるんだが、なんで高町隊長も呼ばれたんだろうか？　レイジングハートさんは、特に修理が必要だったって記憶は無いんだがな。

「ん？　そういえばティアナは何でついてきてんだ？」

「スバルを迎えに行くのよ。さっき通信であたしも呼ばれたじゃない」

「……あー、そうだったそうだった」

言われて記憶を辿れば、確かにそんなこと話してたな。
ブレイブハートの方が気になってて、あんまりちゃんと聞いてなかったわ。

「でもよー、スバルならアイス用意しとけば匂い辿って来れそうじゃね？」

「……違うって言い切れないのが怖いわね」

「あ、あはは……」

高町隊長の乾いた笑いが、通路に響く。

なんというか、緊張感が足りない俺達であった。

「足りてないのはアンタだけよ」

「ぎゃふん」

●魔法少女リリカルなのは　～とある新人の日常～
第４５話　『Ｂｒａｖｅ　Ｈｅａｒｔ』

「ブラスターシステム？」

アテンザ技官の口から放たれた言葉を復唱して、俺は首を傾げる。

「そう。ブラスターシステム」

「はぁ」

真剣な顔で頷くアテンザ技官に、気の無い返事を返す俺。
だってそんなシステム聞いたこともねーし、その名前をいきなり言われたって、そんな返事しか返せないのは当然だろ？

え？　俺の勉強が足りない？　アニメ見ろって？
何の話やねん。

「ハヤト君、ちゃんと聞いてね？」

「あ、はい。すいません」

怒られてしまった。電波のせいだ畜生。
ちなみに今この場――デバイスのメンテナンスルームにいるのは俺と高町隊長、アテンザ技官の３人。
ティアナとスバルは既に退出している。というか、スバルの奴が人の顔を見るなり気まずそうな顔で出て行ったので、ティアナが追いかけた次第だ。
人の顔見て逃げ出すとか何だよちくせう、結構傷ついたぞ。

「それじゃ先に説明するよ？　凄く大事なことだから、ちゃんと聞いててね？」

「うっす」

そんな事は置いといて、姿勢を正して技官の話に耳を傾ける。技官の隣に立つ高町隊長も、いつになく真剣な表情だ。どうやら「ブラスターシステム」ってのは、結構重要なシステムらしい。
そーゆーのがあるなら先に言っといて欲しいものだ。

「まずブラスターシステムの概要の説明ね。
簡単にいえば魔力の瞬間発揮値を上昇させるシステムなの。
もともと、強化魔法っていうのは魔力付与により自己能力を限界に近づけることだから、魔力運用の上級者なら自己強化はあまり意味がないの。ここまではわかるよね？」

「なんとなくですけど、はい」

「このシステムは、術者の限界を超えて強化をかけ続けることを可能にするシステムなの。
そうする事で、理論上は術者の限界を超えた強化が可能になって、凄い力が使用できるようになる……って事なんだけど」

「超便利じゃないですか」

限界以上の力が使えるとかすげーじゃん。何でもっと早く教えてくれなかったんだ？
あれか、俺が強くなりすぎて困るとかそーゆーことか。

「だけど」

「んぉ？」

テンション上げていた俺に、幾分硬い高町隊長の声が届く。

「強力な強化魔法をずっと使い続ける訳だから、当然魔力消費は激

しいよ。
　私でもカートリッジ無しだとそんなに長い間使えないから……ハヤト君ならカートリッジ無しだと、もって5分くらいかな？」

「短っ！？」

「それに限界を超えた力を出し続けるわけだから、魔力運用がまだ未熟なハヤト君だと暴走する可能性も高い。
　限界を超えた力を出し続ける訳だから術者の負担だってもの凄いし、もしかしたらそれが原因で再起不能になっちゃうかも知れない、そんなシステムなの。
　だからね、今までずっとプロテクトをかけてたんだ」

「……」

　なにそれ怖い。
　物騒すぎるでしょ、使ったら再起不能になる可能性があるシステムとか。
　なんでそんなの積んでるんだよブレイブハート！　あ、レイジングハートさんに積んであるからか。さすが姉妹機。

「とりあえず、ここまではわかったかな？」

「ブラスターシステムってのは、便利な分副作用がやばいって事は」

「うん。それがわかってれば十分だね」

「で、そのシステムがどうかしたんですか？」

そんなのを積んでるよって事を教えてくれたんだろうか？
でも、だったら別に今じゃなくてもいいよな。使わせたくないなら、プロテクトそのままかけときゃ良いんだし。
つーことは、ブラスターシステムを使えるようにしたのか？　何で？

「ブレイブハートがね、システムのプロテクトを外して欲しいって」

「ブレイブハートが？」

調整槽に手を置いたアテンザ技官の言葉に、調整槽に浮かんでいるブレイブハートを見る。
そこには、すっかり元通りになったブレイブハートが、赤い宝石を光らせ、浮かんでいた。

「そうなのか？　ブレイブハート」

《　はい　》

話しかければ、今まで黙っていたブレイブハートからのしっかりとした返答。
……そうか、お前がね。

「どうしても必要だって言って聞かなくて。
だから、ハヤト君にちゃんとシステムのメリット、デメリットを説明して、その上でハヤト君が了承したら外すってことにしたんだけど……どうする？」

「危険なシステムだし、今すぐ決めなくても――「外してください」――えぇっ！？」

高町隊長の言葉を遮って即答する。

「ちょっと待ってハヤト君！　さっきの説明聞いてたよね！？」

「ええ、聞いてましたけど？」

「危ないんだよ！？」

「みたいですね」

わたわたと焦ってる高町隊長に、頷いて返す。
ブラスターシステムの危険性は十二分に理解したつもりだ。何せ、下手したら再起不能になるかも知れないんだし。
でも――。

「大丈夫なんだよな？　ブレイブハート」

《　はい　》

「なら、俺はお前を信じるよ」

《　はい　》

調整槽の中にいるブレイブハートに笑いかける。
コイツは、この数ヶ月一番俺の身近に居た奴だ。だから、こいつが大丈夫って言うなら、大丈夫なんだろう。
何となくだけど、そう思う。

「だけど、ハヤト君……」

「隊長が心配してくれるのは涙が出るくらい嬉しいんですけどね。でも、俺自身も必要だと思うんですよ。ブラスターシステム」

1週間後、あの変態科学者が喧嘩を売ってくる。
多分……いや、確実に全戦力をぶつけてくる筈だ。ガジェットは当然として、戦闘機人連中だって出てくる。
そん時に切れる手札は、一枚でも多いほうがいいに決まってる。
魔力温存とか言ってる場合でも無いと思うしな。

「……」

「危険だってのは百も承知です。でも……お願いします」

《　私からも、お願いします　》

心配そうな目でこっちを見ている高町隊長とアテンザ技官に、頭を下げる。
それくらい、俺にとっては大事なことだから。

《「もう2度と、負けたくないんです」》

だから。

頭を上げて、2人の目を見て告げる。
俺の――いや、違うな。

“俺達”の覚悟を。

「……しょうがないなぁ。2人とも」

果たして。
返ってきたのは、溜息の混じった隊長の声だった。

side：高町なのは

「ホントにわかってるのかなぁ、ハヤト君」

パネルを叩いているマリーさんの隣で、言葉を漏らす。
視線の先では、ハヤト君が調整槽の中のブレイブハートと雑談をしているところ。

「つかよ、勢いで言ったけどマジで大丈夫なんだよな？」

≪　マスターハヤトの努力次第です　≫

「……そこは嘘でも大丈夫って言うところだぜ？」

≪　憶測でモノを言うのは得策ではないと判断しました　≫

「うぅ、デバイスが酷い……」

≪　２人で頑張りましょう。マスターハヤト　≫

「……はぁぁ」

聞こえてきた言葉に、深い溜息を吐く。
ブラスターシステムは本当に危ないのに……不安だなぁ。

「大丈夫ですよ、なのはさん」

「え？」

不意に、隣のマリーさんから声をかけられた。
視線をマリーさんに移せば、彼女の視線はパネルに向けられたままだったけど、その表情は優しく微笑んでいた。

「ブレイブハートも、ハヤト君も……2人とも凄く良い子で、強い子です。
それに、ハヤト君はなのはさんの教え子じゃないですか」

「マリーさん……」

そう言われて、もう一度ハヤト君とブレイブハートを見る。
私の視線に気付かない2人は、まだあれこれブラスターモードについて話し合ってるみたいだった。
その賑やかな話し声がこっちまで聞こえきて、思わず笑ってしまう。

「そう、ですね。そうですよね」

笑いながら、胸の中にあった不安が無くなっていくのを感じる。

ハヤト君は私の自慢の教え子で、ブレイブハートはレイジングハートの姉妹機。

今私に出来るのは、心配する事じゃなくて、信じてあげる事。

「だよね、レイジングハート」

《そうですね。マスター》

レイジングハートに聞けば、力強い返事が返ってくる。

なら、私は私に出来ることをしなきゃね。

「ハヤト君」

「あ、はいなんスか？」

決心を固めてから、ハヤト君に声をかける。

今私がハヤト君にしてあげられること、それは――。

「プロテクトの解除が終わったら、ブレイブハートと一緒に訓練だよ」

「は？」

少しでも、ハヤト君を……ううん、皆を強くしてあげる事。
ブラスターモードみたいな、危険なシステムを使わなくても良いように。

「1週間後に向けて、みっちり鍛えてあげるから！」

「あの、隊長？　俺、右手を使うなって医務官に言われてるんですけど？」

「うん。だけど、右手を使わなくても色々出来ることはあるよね。
魔力操作の練習、精密射撃の練習。
それに、ブラスターモードの事も色々教えなきゃだし、みっちりいくよ！」

「……すいません持病の癪が」

「聞こえないなー」

「ブレイブハート！　助けて！」

《　私はまだ調整中ですので　》

「裏切り者ぉぉぉっっ！！」

心配は心配だけど、今は信じよう。
私の前で笑う、誰よりも勇敢な心（ブレイブハート）を持った、教え子の事を。

side：高町なのは　了

スカリエッティの指定した日まで、あと6日――。

第４５話　『Ｂｒａｖｅ　Ｈｅａｒｔ』（後書き）

ＧＷになれば、執筆時間が増える。
そう思っていた時期が、俺にもありました。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「最近主人公っぽい場面が増えて嬉しいなぁ。どうも、主人公です」

いやー、ＧＷ大変だわ。
実家戻らなきゃだし、実家戻ったら戻ったで親戚の子供の相手を押し付けられるし。最悪だネ！

ハヤト
「俺に愚痴られてもなぁ」

そうですね。
さて、そんなこんなで更新遅くなった上に短くて申し訳ないです。
次回は文章量、更新速度ともに上げて行ければいいなーと思ってますので、期待せずにまったりお待ちくださいませ。

ハヤト
「今回はブラスターシステムの話だったワケだが、次回は何よ？」

ふふふ……。
今回はいつもと趣向を変えて、次回予告をしてみようと思うのだよ！

ハヤト
「また無謀な事を……」

というわけで、次回予告、どうぞ！！

◇◇◇◇◇

諦めようって思った。
でも、何もしないで諦めるなんて出来なくて。

だったら、勇気を出してみよう。
その先に、どんな結末があったって構わない。
このままぎこちない関係で居るよりは、全然マシだと思うから。

だから――。

「あたしは、ハヤトの事が大好きです」

次回、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第４６話、『小さな恋の行方』。

この言葉に、あたしの想いの全てを込めて。

◇◇◇◇◇

ハヤト
「はっず！？　めちゃくちゃ恥ずっ！？」

言うなよ！！　余計恥ずかしいだろ！？
勘弁しろよ！

ハヤト
「じゃあやるなよ馬鹿！」

うるさいうるさいうるさーい！
そ、それではまた、次の話で！！　あ、タイトルは変わるかも知れませんので、そこはご了承ください！！

ハヤト
「恥ずかしー」

しつこいよ！！

第４６話　『小さな恋のゆくえ』（前書き）

※更新の間が開いて申し訳ありません。
今回は、結構重めの話となっております。
ちょっとだけ気合を入れて読んでくださいね。

第４６話　『小さな恋のゆくえ』

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

ハヤト。
あたしが初めて好きになった人。
訓練校から、あたしとティアの２人とずっと一緒で、いつでも側に居てくれて。
多分、お父さん以外で一番あたしの近くに居た男の子。

だから――恋をした。

ずっと隣に居て欲しかった。ずっと一緒に居たかった。
ずっと支えていて欲しかった。

けど、あたしは忘れてたんだ。
ハヤトは普通の男の子で、辛かったり苦しかったり、支えて欲しかったりするんだって。
そんな当たり前の事を、あたしは忘れてた。
支えて貰うのが当たり前で、ハヤトにいつも寄りかかってた。

それはきっと、あたしにとってのハヤトは『男の子』なのと同じくらい、『お兄ちゃん』だったからだと思う。
ギン姉と同い年で、ずっと近くにいた頼りになる男の子。
だからあたしはハヤトに守ってもらっていることに、違和感が無

かった。
「いつかは隣に並びたい」と思うことはあっても、あたしがハヤトを守ってあげるなんて、思ったことも無かった。
そうやって考えれば、あたしの『好き』は、『憧れ』や『親愛』なんかがごちゃ混ぜになった、そんな『好き』だったのかも知れない。

でも――。
でも、ティアは違ったんだ。
あたしと違って、最初からずっとハヤトを『男の子』として、ただ純粋に『好き』だった。
だから、ハヤトが落ち込んでた時に、ちゃんと励ましてあげられた。それは、あたしじゃ出来なかった事。
「隣に並ぶ」だけしか目標にしてなかったあたしには、出来なかった事。

「ホント、敵わないよね」

アースラの通路の壁に寄りかかって、溜息を吐く。

ううん。敵わないなんてレベルじゃないや。
最初から、あたしとティアじゃスタート地点が違ってたんだもん。
あたしが色々な気持ちが混じった『好き』だったのに、ティアは最初から純粋な『好き』だった。
勝負になんて、元々なってなかったんだ。

「……でも」

ただ諦めるなんて、嫌だ。

あたしの『好き』はティアの『好き』とは違うけど、それでもこの気持ちは――嘘じゃないから。

ティアには、勝てないと思う。

ハヤトに一番近い場所に居て、ハヤトを一番『好き』な、あたしの自慢の親友には。

だけど、このまま一人で結論を出して諦めても、あたしはきっと2人を応援できない。

モヤモヤした気持ちを抱えたまま、2人の側に居るのが苦痛になって、最後にはきっと逃げ出してしまう。

そんなのは……嫌だ。

2人とも、あたしが大好きな人だから。

だから、あたしは――。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第４６話　『小さな恋のゆくえ』

最近、自分の単純さを思い知らされる時がある。
今、俺たち機動六課……いや、ミッドチルダは大変な状況で。

高町隊長もハラオウン隊長も、怪我が治りきっていないフィニーノ陸士達でさえ、心身を削って職務を行っている。
それは勿論俺も同じ。だけど今までとは、気持ちの面で大きな違いがあった。
ある意味では、これまでよりも真剣に。
ある意味では、これまでよりも不謹慎に。

例えば、高町隊長の特訓の後。
例えば、書類仕事を片付けている時。
例えば、ブリーフィングルームで隊長から指示を受けている時。

そういう時に、俺の目は自然とティアナと追っていた。
その時、俺の心臓は馬鹿みたいに高鳴って。
何でそんな状態になるのか。思い当たる理由はある……っつーか、他に無い。

きっかけは、1週間前。
病室で唐突に告げられた、ティアナの気持ち。

『あたしは、アンタが……ハヤトが好き。大好き』

1週間経った今でも、まるで耳元で囁かれているように思い出せ

る告白。
それを機に、否応無くティアナを意識し始めて。
そうすると嫌でも気付いてしまう。
俺と目が合う回数。
俺の部屋の近くで、偶然会う頻度。
それが、常よりも多いという事に。
そういった事が重なる度に、自分がティアナを意識している事を思い知らされる。
自分の中にあるティアナへの想いに、気付かされる。
ただ――。
その想いが本物なのか、迷う。
男女の『好意』なのか。それとも、親愛の延長線上なのか。
それが、自分で判別出来ない。
だから1週間も経ったのに、未だにティアナに返事を出来ないでいる。
情けないとは思う。
思うけど、アイツの真剣な顔を見たら、日和見な答えじゃいけないとも思う訳で。
「どうしたもんかねぇ……ホント」
アースラの中にあるロビー（なんであるんだ）のソファに腰掛け、

天井を仰いで溜息を吐く。
答えを返せない後ろめたさと、自分の中にある判別できない思い。
その2つが、ティアナに答えを返すことを躊躇わせる。
自分の想いをはっきりさせるまで、答えるべきじゃないと思わせる。

けど、その方法もきっかけも無いまま1週間が過ぎて。
現在途方に暮れている俺であった。

「……あーくそ。知恵熱出そうだ」

まとまらない思考に煮詰まった頭を冷まそうと、一旦考えるの止める。
すると、見計らった様なタイミングで、ブレイブハートから通信を告げる音が鳴った。

「？」

誰からだろうと思いながら、通信を繋ぐ。
すると、開いた通信用モニタに、バリアジャケット姿のスバルが映った。

『あ、ハヤト』

「おう。どうした？」

『えぇと、今から時間あるかな？』

唐突に問われ、頭の中でスケジュール帳をめくる。
仕事は終わらせて、高町隊長の特訓も今日の分は終了してる。
強いて用事を挙げるとしたら夕食ぐらいだが、とりあえず取立てて急ぎの用事は思いつかない。

「ん、空いてるぞ」

『そか、よかった。じゃあ、ちょっと訓練スペースまで来てくれないかな？』

これまた唐突な呼び出しに「何故」と聞き返そうとして、やめた。
スバルがどうでもいい用事で俺を呼び出す訳無いし、今までに無く真剣な顔をしているスバルに、それ以上何かを聞くのは無粋だと感じたからだ。

「あいよ、訓練スペースな」

『うん。待ってるから』

「へいへい」

モニタのスバルに返事をしてから通信を切る。

そして、腰掛けてたソファから立ち上がり、背もたれに掛けていた上着を取って羽織って訓練スペースへと歩き出す。
さっき通信用モニタで見た、真剣な表情のスバルに少しだけ違和感を感じながら。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

「……よし」

アースラの中にある第１訓練スペース。
今は自分１人しか居ないその場所で、あたしはバリアジャケット姿で意気込んでいた。
勿論、これからここでハヤトと模擬戦をするつもりで着ている訳じゃ無い。
ただ単に、自分に気合を入れるために着ているだけ。

それくらい、これからあたしがやろうとしてる事には、勇気が必要だから。

無駄だって分かってる事をする。
結果なんてわかりきってるけど、自分自身にケジメをつける為に。
大好きな２人と、いつまでも笑って一緒にいる為に。

だからあたしは、自分が一番勇気を出せるこの格好で、ここに居る。

「……頑張れ、あたし」

両手でガッツポーズをして、自分に気合を入れるように呟く。
それと殆ど同時に、後ろの方からドアの開く音がして、あたしの良く知った声がした。

「うおーい、スバル～」

「あ、ハヤト」

振り向いたあたしの目に、制服を着て、包帯を巻いた右手をこっちに向けて振っているハヤトの姿が映る。
いつもと変わらない、あたしが大好きな人。(ハヤト)

そんなハヤトを見たら、決心が鈍る。
今のまま、自分の気持ちを隠したままでもいいんじゃないかって思ってしまう。
自分の気持ちを曖昧にして、2人の友達でいればいいんじゃないかって、思ってしまう。

「何だよバリアジャケットなんか着て。
言っとくけど、俺は模擬戦できねーからな？　ドクターストップされてんだから」

「……ううん、違うよ。模擬戦じゃないから」

「？　じゃあ何でバリアジャケットなんて着てんだ？」

「ハヤトには関係ないからいいの」

「ふ～ん」

けどそれじゃダメだ。
そんなのは、あたしらしくない。
こうやってウジウジ悩んでるだけなんて、あたしじゃない。

そんなの――2人の親友である、あたしじゃないから。

「まぁいいや。んで？　何でこんなとこに呼び出したんだ？」

だから。

「ねえ、ハヤト――」

「ん？」

ハヤトの名前を呟くと、途端に怖くなって言葉に詰まる。
大好きな、ハヤトとティアとの関係を自分で崩すのが怖くて、言葉が出ない。

「……っ」

そんな自分のほっぺたを叩いて、気合を入れなおす。
ここで躊躇ったらダメだ。そう思って、萎み始めた勇気をもう一度奮い立たせる。

「――――ハヤト」

それからもう一度しっかりとハヤトを見て、大事に大事に名前を呼ぶ。
あたしの大好きな人の名前を。
あたしが、世界で一番大好きな人の名前を。

そして――。

「あたしは、貴方（ハヤト）の事が大好きです」

はっきりとそう告げた。

その言葉に、あたしのありったけの想いを込めて。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

「……は？」

ハヤトの口から漏れたのは、そんな短い言葉。

「じょ――」

冗談だろ？

そう言おうと口を開いて、言葉を飲み込む。

「……」

スバルは口を閉じ、常に無い不安げな瞳でハヤトを見つめている。
訓練校からずっと一緒に居たハヤトは、スバルが冗談でそんな事を言う少女ではないと知っている。
それに、こんな表情をしている彼女の言葉を「冗談」で片付けるのは、失礼だと思った。
だから代わりに小さく尋ねる。

「本気、なのか？」

呟くハヤトに、真っ直ぐ彼を見つめたまま、スバルは頷く。

「もちろん、本気だよ」

「……そう、か」

スバルの返事を聞いて、溜息を漏らすハヤト。
ただ言葉とは裏腹に、ハヤトがスバルに向ける視線は少しだけ戸惑っていて、スバルの言葉が本当かどうかを問うていた。
その視線に気付いたスバルは何度も頷いて、吐息と共にもう一度想いを告げる。

「――あたしは、ハヤトの事が大好き……です」

その顔を耳まで赤くして、不安に揺れる瞳を自分に向ける、青い髪の女の子。
どこまでも真っ直ぐで、不器用で。だからこそはっきりとわかる彼女の想い。

「……っ」

だからこそ。

（あぁ、そうか）

ハヤトは、自分の中にあった不確かな想いが確立されていくのを感じた。
それはまるでパズルのピースが嵌るような、そんな感覚。

（俺は、ティアナの事が――）

スバルは自分に純粋な想いを告げてくれた。
だからこそ、分かった。

ティアナに想いを告げられた時と、今、スバルに想いを告げられた時。

心が揺れたのは、どちらだったのか。
それが『親愛』と『好意』の違いだと気付いた。

だから――。

「悪い――」

時間はかかったけど、ようやく踏ん切りがついたから。

「――俺は、お前の想いに応えられない」

ハヤトはスバルの目を見つめて、はっきりと答えた。
ずっと共に戦ってきた、辛い時も、苦しい時も共有してきた彼女にだけは、何一つとして偽ってはいけないから。
そして、自分の胸の中で橙色の髪を靡かせる少女は――彼女ではないのだから。

何より。

こんな情けない自分を「好き」と言ってくれた彼女（スバル）だから。
ずっと友人だった、彼女だから。
誤魔化したり、はぐらかしたりしてはいけないと、そう思ったか

ら。

躊躇わず、偽らずにはっきりと断る事。
それが――今、ハヤトがスバルの為にしてやれる全てだから。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

「悪い――」

ああ、やっぱり。

「――俺は、お前の想いに応えられない」

予想してた答えに、それでも胸が痛かった。
けど。

「……えへへ、そっか」

それはハヤトに気付かせたくないから。
滲みそうになる涙を一生懸命に堪えて、いつものあたしらしく笑

う。
精一杯、空元気を出して。
「うん。すっきりした」
空元気だけど、これは本当のこと。
さっきまで胸の中にあったモヤモヤした感じは、今はもう感じない。
今日までずっとつかえてた物が、取れた気がする。
「スバル――」
「ハヤトはさ」
何かを言おうとしたハヤトを遮って、聞いてみる。
「ハヤトは、ティアが好きなんだよね？」
「！」
そうするとハヤトは少しだけ驚いた顔をした後、真っ直ぐあたしを見て答えてくれた。

「そうだな。俺は――」

「ダメ」

あたしに向かって、ティアへの気持ちを言おうとしたハヤトの口を、人差し指で押さえる。

それは、あたしに言うことじゃない。それに、あたしだって……今は聞きたくない。

「そこから先はあたしに言うんじゃなくて、ティアに言ってあげてね？」

「……ああ」

あたしの言葉に、少しだけバツが悪そうな顔をしてからハヤトが頷く。

いつもは細かいトコまで気がつくのに、こういう時は変に鈍いんだから。

それが、いい所でもあるんだけどさ。

「じゃあ、あたしの話はこれでおしまい」

パンッと手を合わせて、ハヤトに告げる。

あたしが言いたかった事は全部言えたし、答えも聞けた。

だから、コレで全部おしまい。

「ありがとハヤト。時間とらせちゃってゴメンね」

「謝んなよ。お前のお陰で、俺も色々と気付けた。むしろ礼を言いたいぐらいだ」

「そうなの？」

「そうなの」

「そうなんだ」

「そうなんですよ」

「……」

「……」

「「ぷっ」」

2人で少し見詰め合ってから、同時に吹き出す。

うん。やっぱり告白してよかった。

きっとあのままだったら、こうやって笑いあうなんて出来なかったと思う。

「それじゃ、俺は戻るわ」

「うん」

「お前は、どうする？」

「……あたしは、もう少し後で戻るから。先に行ってて」

聞いてきたハヤトに手を振りながら、笑って答えた。

そうすると、「そうか」って呟いてから後ろを向いて、ドアの方へ歩いていく。

「ぁ……」

歩いていくハヤトの背中が、何だか凄く遠くに感じて。

「ハヤト！」

思わず、呼び止めてしまった。

「……ん？」

そんなあたしに、ハヤトは振り返る。

あたしはハヤトの顔を見て、少し躊躇ってから口を開く。

「あたし達、これからも友達だよね？」

「は？」

突然のあたしの質問に、ハヤトが面食らった顔になる。

でも、すぐにいつもの笑顔を浮かべて――。

「何当たり前のこと言ってンだよ。お前は今も昔も、俺の自慢の親友じゃねーか」

凄く嬉しくて、少しだけ切ない答えをくれた。

「……うん。うん！」

「それじゃ、また後でな」

それだけ言って、ハヤトが今度こそドアを開けて出て行った。

残されたのは、バリアジャケットを着たあたしだけ。

「……」

一人になった訓練スペースは、何だかさっきよりも凄く広く感じて。

そして――さっきよりも、凄く寂しく感じた。

ちゃんと告白して、ちゃんと振られて。

凄くすっきりしたけど、やっぱり胸は切なくて。

「っ！」

ぼやけた視界を、手で擦って我慢しようとする。

でも、さっきは我慢出来た筈の涙は、全然止まってくれなくて。

「……ひぐっ」

一度泣き声を出してしまったら、もう駄目だった。

次から次へと涙がこぼれて、立ってられない。

「……うぇっ、ひっく」

ハヤトの前ではやせ我慢してたけど。

やっぱりつらいよ。悲しいよ。寂しいよ……。

好きだって言って欲しかった。
抱きしめて欲しかった。
隣に居て欲しかった。

けど、もうあたしの想いは終わっちゃったから。
諦めなきゃ、いけないから。

だから。
だから、今だけは泣かせて欲しい。
明日になったら、ちゃんと諦めるから。
明日になったら、ハヤトの自慢の親友に戻るから。

だから、今だけは――。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

第４６話　『小さな恋のゆくえ』（後書き）

えー……というワケで、スバル失恋のお話でした。
どうも、ラモンです。

今回は今までで一番の難産でした。
私は、基本的にメモ帳に書いて、書き直したりする場合は例えば今回の場合ですと「４６」「４６ａ」「４６ｂ」ってな具合にちょくちょく分けて保存するんですが、今回はそれが「４６ｈ」まで行きました。
過去最高記録ですｗ

今回の話を書く上で、「スバルらしく、でも女の子らしく」を心がけて書こうと決めていたんですが、これが存外に難しかった。
正直二度としたくないですね。
しかも今回は書いててスバルごめんって気分になってテンションが下がる下がる。
途中で本気でハーレムでよくね？　とか思いましたよ。
スバルごめんね。スバルルートでは目一杯幸せにしてあげるからね。

さてさて、残す大きなイベントはティアナへの返事。ディレトの弱点解析。
そして「ゆりかご戦」の３つ。
そろそろ終わりが見えてきましたが、この調子だとまだまだかかりそうです。
次回更新こそ、３日ぐらいで出来るといいなぁ。

さすがに疲れたので、今回のあとがきはこれで。
次回更新は早めに出来る気がちょっとだけするので、全く期待しな

いで待っていてください。
あれ？　前回の後書きでも似たような事言った気が……まあいいか。
それではまた、次の話で。

※次回作のアンケート投票は、５／２３の午後１２時をもって終了とさせていただきます。
沢山の応募、ありがとうございました。

第47話　『ティアナとハヤト』（前書き）

※糖分過剰注意報。
作者はもうダメなようです（精神的に）。

第47話　『ティアナとハヤト』

side：ティアナ＝ランスター

アイツに告白して、1週間。
自分が、こんなにも独占欲の強い人間だったなんて思わなかった。
1日会わないだけで、こんなにも落ち着かない。
声が1日聞こえないだけで、こんなにも胸が騒ぐ。
他の女の子と喋ってるだけで……アイツの側に、駆け寄りたくなる。
こんなにも、ハヤトを求めてる。
こんなにも、ハヤトを独り占めしたいと思ってる。

「……馬鹿みたい」

アースラの通路を歩く足を止めて、溜息と一緒に呟く。
本当に馬鹿みたいだ。告白はしたけど、返事はまだ貰ってない。
だから、ハヤトはあたしの物なんかじゃないのに、こんな事ばっかり思ってるなんて。

「……はぁ」

もう一度溜息を吐いてから、止まっていた足を動かす。
大体、ハヤトもハヤトよ。1週間も返事しないなんて、乙女の一大決心を何だと思ってるのかしら。
そりゃあ確かに「返事は今じゃなくていい」って言ったわよ？
だからって普通1週間も待たせる!?　あのヘタレ！　これだから彼女いない暦＝年齢の奴は!!

「っと」

「きゃっ」

そんな風に頭の中で愚痴を言いながら歩いていたら、通路の角を曲がってきた誰かとぶつかってしまった。

「す、すいません!」

「あーいや、こっちこそボーっとしてて……ってティアナ!?」

「え？　あ、ハヤト!?」

謝りながら視線を上げた先には、のんきそうな顔をしたハヤトが、驚いた顔をしてこっちを見ていた。
……どーゆータイミングよ。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

どーゆータイミングだよ。
俺は、目の前でこっちを見上げてるティアナを見て、そう思わざるを得なかった。
スバルに告白されて、自分の想いに気づいて。
返事をしなきゃと思っていた矢先の、唐突な邂逅。
タイミングよすぎるだろ。誰の策略だ。

「……仕事は、終わったのか？」

色々と頭の中で考えながら、そんな当たり障りの無い事を聞いておく。
タイミングや勢い的な意味で考えれば、返事をするなら今だろう。
でも、さすがに廊下でバッタリ会ってってのは、さすがにムードが無さ過ぎる気が……。

「あ、うん。今日はもう終わりよ」

「そっか」

いやいやムードとかよりも、こういうのは勢いと気持ちだろ。
あー、でもここだと人も通るだろうから、いざって時に邪魔が入る可能性大だなぁ。
そうなると場所を変えた方がいいか。しかしどこに……？

「ねえ、ハヤト？」

ええい、とりあえずここじゃ駄目だ！
まずは移動する！　どこに行くのかは移動しながら考えろ！！

「ティアナ、お前これから暇？」

「へ？　ええ、特にすることは無いけど……」

「よし。じゃあちょっと付き合え」

「え、付き合うって何処に――ってちょっと！？」

ティアナの質問を聞き流しながら、手を握って歩き出す。
とりあえず、誰かに見つかる前に人気の無い場所に移動しよう。
部隊長にでも見つかったら色々と厄介だ。

「ハヤト！　何処に行くのよ！？　そ、それに手！」

「いいからいいから」

「良くないわよ！」

文句を言うティアナを軽くスルー。
今は移動が最優先事項だってばよ！

「なんなのよ、もうっ！」

叫ぶな馬鹿！　見つかるだろが！

◇◇◇◇◇

「……ねぇ、ちょっと。どこまで行く気よ？」

「あ～～～……と」

１０分ぐらい歩いただろうか。
考えなしに連れ出したものの、計画性も目的地も無いからアース

ラの通路を人を避けてあちこちウロウロするばかり。
勢いで握ったティアナの手は柔らかくて、さっきから頬はオーバーヒート気味だ。
だけど手を離すのは嫌だから、殆ど意地みたいに手は握ったまま。

「こんなトコ、誰かに見られたら……」

「嫌か？」

「嫌じゃ……ない、けど」

振り返って尋ねれば、顔を真っ赤にして俯いて手を少しだけ握り返してくる。
そんなティアナが可愛すぎて、暴走しそうになる本能を理性でボッコボコにしておく。
落ち着け。まだ慌てるような時間じゃない。

「でも、どこに行くのかぐらい教えてくれてもいいじゃない」

「人が絶対に来ないトコ」

「え……えぇっ！？」

何を勘違いしたのか、ティアナが煙が出るくらい顔を赤くする。
ん？　別に勘違いじゃないのか？　人に見られたら困る訳だし…
…いや、こいつの顔は絶対違うこと想像してやがんな。

耳年増め。

「あのな、お前が想像してんのとはちが――「ブリーフィングルーム」――は？」

訂正しようとした俺の言葉を遮って、ティアナがボソッと呟いた。

「ブリーフィングルームなら、今日はもう誰も来ないと思う……わよ？」

「……そ、そうか」

「うん……」

それだけ言って、更に顔を赤くさせるティアナ。

何なのその反応!?　オーケーなの!?　何か色々とオーケーなの!?

思春期の男の子的に期待しちゃうよ!?　期待しちゃいますよ!?

「えーと、あー……」

「連れてって、くれるんでしょ？」

俺の手を握る力を少しだけ強くして、ティアナがこっちを上目遣

いで見てくる。
そうだな。ここでやらなくてどうする。
チャンスはいくらでも転がってるなんて、都合のいいことを何時までも言ってられる保障は無い。
こんなチャンスはこれっきりだと思え。
俺の気持ちも、タイミングも、シチュエーションも――ティアナの気持ちも。
全部が全部ここまで揃ってるチャンスは、後にも先にもこれっきりだ。
「ブリーフィングルーム、だな？」
「……うん」
確認するように聞き返せば、顔を真っ赤にしたまま頷く。
そんな彼女の手を引いて、俺はブリーフィングルームを目指す。
あーくそ。落ち着け俺の心臓！　正念場はこれからだぞ！！
◇◇◇◇◇
ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

ハヤトに手を引かれて、ブリーフィングルームに入る。
さっきあたしに確認してから、ハヤトはずっと喋らない。あたしの手を引いて、ずっと前を向いたままだ。
それがちょっとだけ寂しくて……でも、それ以上に助かったって思う。
だって、自分でも分かるくらいにあたしの顔は赤くて、そのくせハヤトに手を握られたせいで頬はにやけてて。
そして——心臓はずっとドキドキしていて。

「……」

「……と、着いたな」

「へ？」

恥ずかしがっているうちに、どうやら目的地に着いたみたい。
ハヤトが握っていた手を解いて、あたしに先に入るように促してきた。
促されるまま、ブリーフィングルームのドアを開けて中の電気を点けて中に入る。

「……」

「……っ」

少し後にハヤトが入ってくる足音と、ドアの閉まる音がして体が震えた。

こ、これはアレよね？　期待してもいいのよね？

『絶対に人が来ない場所』って言ったし、そういうことなのよね？

ちゃんと可愛いの着けてたっけ！？　って流石にソレは飛躍のしすぎよあたし！

あぁもう、どうしよう。凄くドキドキしてきた。

「「……」」

恥ずかしくてハヤトが見れなくて、背中を向けたまま黙る。

ハヤトも、あたしに何も言わないで黙ってる。けど、どんな顔してるのかは見えない……って、背中向けてるんだから当たり前よね。

でもこのままお互い黙ってても、進展はないわよね。

恥ずかしいけど、ここはあたしから。

そう思って口を開いて――

「ねぇ……」

「えぇと……」

――――被った。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

話し始める切っ掛けを失い、俺とティアナは互いに沈黙する。
あーくそ、完璧に出鼻を挫かれた。
頭をガシガシと掻いて、気を取り直そうと深呼吸をひとつ。
すー、はー。
……よし。落ち着いた。
「……その、先に話すか？」
少しだけ間を置いて、そう聞いてみる。
顔を赤くしたまま、ティアナがその問いに思い切り頭を振った。
「い、いい！　ハヤトが先に言って！！」
「……ん」
自分に背を向けているティアナに苦笑しつつ、一度目を閉じて大きく息を吸った。
そして、息を吐き出しながら目を開ける。
「……」

目の前にいるのは、俺に背を向けたティアナ。
その背中を見ていると、拒絶されたらという考えが浮かんで言葉が詰まる。
ティアナもスバルもすげぇな。こんな怖いことを、したってのか。

「……さっきな」

だったら俺に出来ない訳がねぇ。
勇気を出せよハヤト＝ロックウェル。お前はティアナとスバルが惚れてくれた男だ。
告白のひとつやふたつ、出来て当然だろうが！

「さっき、スバルに告白された」

「！」

短く告げると、ティアナの背が震えた。
その後ちょっとだけ沈黙があってから、小さい声で聞いてくる。

「……そう、なんだ。返事は？」

「したよ」

「何て、答えたの？」

聞いてくる声は、少しだけ震えていた。
当たり前か。自分の告白の答えを1週間保留された後だもんな。
不安になって当然、むしろならなきゃおかしい。

「断った」

だから、俺が不安を取り除いてやらなきゃ。

「……なんで？　スバルは、いい子じゃない」

「そうだな。スバルはいい奴だ」

だけど、スバルじゃ駄目なんだ。
俺が求めてるのは、スバルじゃないから。
俺が好きなのは、スバルじゃないから。

「ティアナ」

「……何？」

「お前に、聞いて欲しい事があるんだ」

「聞いて欲しい、こと？」

言いながら、少し歩いてティアナの前に移動する。そうするとティアナは視線を上げて俺を見た。
その目は不安と期待に揺れていて。
その唇は何かを言いたげに震えていた。

そんなティアナを見て、緊張が増す。
手に汗が浮かんできて、喉がカラカラになる。
でも、それを無理に抑えこんで言葉を続けた。それが、俺の役目だから。

「1週間も待たせちまった、あの時の返事だ」

「――っ！」

俺の言葉に、ティアナが口を結ぶ。
その顔を見て、怖くて言葉に詰まる。だけどここで止めたら、ただのヘタレだ。

「お前が俺に愛想を尽かしてないんだったら、聞いて欲しい」

「……うん」

頷いてくれた事に安堵しながら、続ける。
ここで首を横に振られてたら再起不能になるとこだったぜ。

あの時のティアナも、さっきのスバルも、こんな気持ちだったんだろうな。

――ホントすげぇよ。スバルも、ティアナも。

「俺は――」

だから。

上手く動かない口を無理矢理動かして。
震えそうになる足に、精一杯力を入れて。
逃げそうになる心をぶん殴って。

「俺は、お前が……ティアナ＝ランスターが――」

いつも隣に居た、口うるさくて、暴力的で、頑固で、泣き虫な――誰よりもいい女に。

「――好きだ」

俺の気持ちを、告げた。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「――好きだ」

ハヤトの口から聞こえた言葉が、耳に入ってくる。
それは直ぐにあたしの頭の中に響いて。
言われたあたしの心臓は、さっきまでの速さなんてぶっちぎりの速さで動いて。
どんな状況でも冷静でいる自信のあった頭は、殆どグチャグチャで。
だけど。

「あたしも――」

口は、反射的に動いて言葉を紡ぐ。

「あたしも、ハヤトが好き。ハヤトに愛して欲しい」

1週間も待たせた馬鹿の顔を見て、出来る限りの笑顔で告げる。
真っ直ぐにあたしを見てくれてるその目を、手放さないように。

「嬉しい」

ハヤトの手を取って、胸の前で握り締める。
本当に嬉しくて、胸が一杯になる。
何でかわからないけど、涙がポロポロ零れてく。
零れる涙を手で拭いながら、ハヤトの瞳を見つめて、笑う。

「あたしの事、見てくれて。声を聞いてくれて。凄く、嬉しい」

誰よりも一緒に居たい奴。
そいつが、あたしの事を見てくれた。
あたしの事を――好きって言ってくれた。

嬉しさが抑えきれなくて、ハヤトに抱きつく。
そして、ハヤトの胸に顔を押し付けて、あたしの恋人に釘を刺す。

「浮気なんてしたら……酷いからね。あたし、結構独占欲強いんだから」

「……肝に銘じとくよ。お前を怒らせるのは、怖いからな」

笑いを堪えてるような声で答えながら、あたしの事をハヤトが抱きしめてくれた。

それが本当に嬉しくて。

あたしは、ハヤトの体に回した腕で、もっと強くハヤトの事を抱きしめた。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

ｓｉｄｅ：―

「……ね、ハヤト」

どのくらい2人で抱き合っていただろうか。

ティアナが頬を染めてハヤトを見上げた。そのまま、潤んだ瞳でハヤトを見つめる。

「何だ？　やって欲しい事があるなら、ちゃんと言わないと分からねーぞ？」

見つめられたハヤトは、少しだけ意地の悪い笑みを浮かべた。

そのまま、涙の跡が残っている彼女の頬を、左手で撫でる。

「……わかってるでしょ」

「さて、ね」

頬を赤くして、口を尖らせるティアナ。

そんな彼女を見て、ハヤトは楽しそうに意地の悪い笑みを深くする。

すると、ティアナは拗ねた顔でハヤトの体に回していた右手を握って見せた。

「ぶん殴るわよ」

「こんだけひっついてたら、殴れないじゃんか」

「……馬鹿」

握っていた右手を開いて、ハヤトの胸に当てる。

その格好のまま、彼に向かって呟いた。

「ちょっと、頭下げて」

「何で？」

「何でって……」

ティアナが何をしたいのか分かっているハヤトは、ニヤニヤと笑いながら聞き返す。

すると、ティアナは言葉を詰まらせて、赤い頬を更に赤くさせて呟く。

「……じゃないと、届かないじゃない」

「よくできました」

可愛らしく呟かれた彼女の言葉に、満足したように微笑むハヤト。

その少し後に、ティアナがちょっとだけ背伸びをして、ハヤトが少しだけ頭を下げる。

そして――2人の影が、重なった。

ｓｉｄｅ：―　了

第47話　『ティアナとハヤト』（後書き）

えー、すいません。
何かもう色々と限界なので（主に羞恥心が）、今回は後書き短めってことで。
うん、あれです。
恥ずかしい。
とんでもなく恥ずかしい。
恥ずかしさで死ねます。

えー、ちなみに次回か次々回で決戦準備編は終わりの予定です。
それと私の方もそこそこ余裕が出来てきたので、次回、次々回のどっちかから後書きゲストを再開しようと思っとります。
まあ予定は未定なので、断定ではないですけどね。

それではまた、次の話で。

あぁ恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい。
もう二度と書きたくねぇ！！！！！！

※次回作のアンケート投票は、５／２３の午後１２時をもって終了とさせていただきます。
沢山の応募、ありがとうございました。

第４８話　『作戦会議』（前書き）

※今回は、独自解釈、独自設定が多少含まれます。
おかしくても怒らないでくださいね。

第４８話　『作戦会議』

どうも、ハヤトです。
先日彼女が出来てリア充に進化しました。
つってもまぁ、何かがそんな凄く変化した訳でも無いけどな。

せいぜい、俺がアイツを呼ぶ時に「ティア」って呼ぶようになったぐらいか。
え？　自慢すんなって？　いいじゃん別に。
はいはい羨ましがるなって。自慢するのはやめてやるからさ（上から目線）。

さてさて。
スカリエッティの指定した日まで、あと2日。
本日俺を含めた機動六課前線メンバーは、スカリエッティと不愉快な仲間たちとの戦いに向けた対策会議を行う為に、全員がブリーフィングルームに集まっている。

「それじゃあ対策会議、始めよか」

俺達全員を見回してから、上座に座る部隊長が口を開いた。

まず最初にやったのは、敵の戦力分析。
今現在、わかっている敵戦力はガジェットと戦闘機人。
んで、そのウチ最も危険視されているのは、俺とギンガの２人が戦った相手――ディレト。

「そしてこれが、ブレイブハートが戦闘中に取ってくれた、彼女のデータや」

部隊長の言葉と共に、モニタに様々な数値と、ディレトの映像が映る。

「魔力値は最低でもＳＳランク。ＩＳも、確認されただけで５つ…
…厄介だね」

「うん。私でも、勝てるかどうか分からない」

それを見ながら、高町隊長とハラオウン隊長が眉を潜めた。
……確かに。戦った俺の意見も同じだ。

ディレトの戦闘能力、高いとは思ってたけどここまでとはな。

チートすぎるだろ。ＳＳランクっつったら、部隊長並みだぞ？
しかもＩＳを５つ以上持ってやがる。
スカリエッティの馬鹿は何考えてあんな化け物作ったんだ。馬鹿の考えることは分からん。

「とりあえず、分かっている事から解説や。
“シルバーカーテン”……これは、幻影を作り出す能力っぽいな。フェイクシルエットのバージョンアップ版っちゅーとこやろか。
そんで“ライドインパルス”……こっちは、自己ブースト系や。自分を加速させるのが、主な目的やろな。
次が“ディープダイバー”……これはヴィヴィオを保護した時に、召喚士の子を連れてった戦闘機人も使ってたヤツやな。物質透過が出来るようになる、っちゅー感じや。んで、残りの２つが厄介なんやけど――」

そこで一旦言葉を切って、映像を変える。
次に映し出されたのは、ギンガに重傷を負わせた爆発と、俺の砲撃を消した時の映像。

「まず、こっちの爆発を起こすＩＳ“エクスプロード・アイ”の解説やけど……シャーリー、お願い出来るか？」

「はい」

部隊長に話を振られて、フィニーノ陸士が立ち上がる。

「このＩＳは、簡単に言えば空間の中から指定した座標に魔力を集中、圧縮して爆発を起こす能力です。
シールドが無意味だったのは、指定した座標がシールドの内側だったからでしょう」

「ってことは、防御不可能ってことですか！？」

「ううん。ちゃんと対策はあるよ」

驚いた顔で叫ぶスバルに、フィニーノ陸士はゆっくりと頭を横に振る。

「指定した座標ってことは、常に動き続ければ爆発の直撃は避けられる。
それと空間の中から正確な座標を一瞬で割り出すには、凄く高度な計算が必要になるから、連発も出来ないと思う。それに、フィールド系防御で全身を守れば、座標に関係なく防御できるでしょ？」

「あ……そうか」

「とはいえ、凄く厄介な能力だってことに変わりは無いけどね。
ブレイブハートが取ってくれたデータから判断するに、射程が彼女の視界全部って感じみたいだし」

つまり、ディレトが見ることが出来れば数キロ先からでも攻撃可能って事か。

本当に面倒な……スカリエッティの野郎、真面目にやりすぎだろ。
もうちょっと手ぇ抜けよ。

「それともう一つのＩＳ“キャンセラー”ですが……こっちは、データ不足で詳細が分かりません」

なので憶測になりますけど、と前置きをしてからフィニーノ陸士が言葉を続ける。
それと同時に、画面がサーモグラフィーみたいなモノに切り替わり、俺の砲撃が赤く表示される。
……元々赤いからあんま意味ないな。

「これは魔力を表すモノなんですけど……これを、見てください」

映像が変わると、真紅の砲撃を囲むように、青い魔力が一瞬で広がっていくのが見える。
それが俺の砲撃を包んで、一瞬の後に赤も青も消え去った。
……よし、全然わからない！

「これは恐らく、消そうとする対象の魔力と真逆の魔力を発生させて、魔力を対消滅させてるんだと思います」

「そんなこと可能なんですか？
魔力って、人それぞれで波長とか魔力の質なんかが違って、千差万別だって聞いてますけど」

ティアの言葉に、俺とスバルも頷く。
訓練校で習ったことだ。魔力は個人差があって、誰一人として同じ魔力は無い。
だから、対消滅させるには一瞬で相手の魔力を解析して、それと真逆の魔力を一瞬で生成させなきゃいけない。そんなの殆ど不可能に近い……つーか、出来たら人間じゃねぇって。
ん？　戦闘機人って半分メカだから出来ても変じゃないのか？
でもスバルってお馬鹿……いやアレはスバルだからか。

「ハヤト、今失礼なこと考えてたでしょ？」

「……カンガエテナイヨー」

心を読まれてしまった。
スバルめ、変な能力持ってんじゃねぇよ。

「理論上は可能だよ。
それに、この映像を見る限りそうとしか考えられないし」

「頑張って解析しましょうフィニーノ陸士！　俺は休みますけど！」

「「「黙れ」」」

「ハンマーと剣と銃弾がっ！？」

解析を頑張って貰おうと励ましたら、ボコボコにされてしまった。
ウチのツッコミ要員は皆手が早すぎる気がします部隊長。

「ハヤト君、今は真面目な場やで」

「裏切られた……」

「さて、ボケ担当はほっとくとして。
シャーリー。今現在、この“キャンセラー”に対抗する方法は無いって事でええんかな？」

「……はい」

場を和ませようとしたのに、完全に放置プレイを受けてしまった。
皆酷すぎる。興奮するじゃないか。

「私から言えることは、この子と1対1での戦闘だけは絶対に避けてっていう事だけです」

「せやな。厄介すぎるＩＳが2つもあって、魔力も桁違いに高い。
他にどんな隠し玉があるかわからんし……最低でも2人以上で相手したいとこや」

「今のところ対策としては、もし1対1になったら相手をしないで全力で逃げる。
特にＦＷの皆はそうして貰わないと、だね」

「うん」

隊長達が頷き合って確認する。

まぁ、実際それしか対抗手段は無いだろうな。ディレトの相手なんて、正直2度としたくないし。

正直な話、俺らＦＷが5人がかりで行っても勝てる気が欠片もしねぇっての。

「せめて弱点でもあればいいんだけど……」

「そう都合よくはいかないよね」

『……はぁ』

ブリーフィングルームに全員の重苦しい溜息が響く。

と、そこでふとモニタに映し出された映像に、気になる部分を見つけた。

「フィニーノ陸士、ちょっと今のところ巻き戻してもらっていいスか？」

「え？　うん」

俺の言葉に、陸士が映像を少しだけ巻き戻す。

そして再び再生された映像は、丁度俺が2度目の砲撃をして――
ディレトがそれを『防いだ』時のものだ。

「これが、どうかした？」

「部隊長。ディレトは何でこの時、俺の砲撃を『防いだ』んですかね？」

「不意打ちだったから、じゃないんかな？」

「それも考えましたけど、だとしても最初に防いだら後は消せばいいじゃないですか。
防いでる間は動けないわけですし、わざわざ自分の魔力を消費する必要もないと思いますし」

ディレトは俺で遊んでいたが、それでも戦術的にはちゃんとしていたと思う。
そんな奴がこんな無意味な防御をするだろうか？

「とはいえ、確証は無いですけどね」

肩を竦めながら、そう付け加えておく。
ディレトぐらいの強さの相手に、適当な推測を基にして戦うのは危険だ。
下手したら、それが命取りになるかもしれないしな。

「うーん……確かに映像を見ると、そう言う風にも取れるけど」
「やっぱり、ちゃんとしたデータが無いとなんとも言えないね」
「ですよねー」

難しい顔でそう言う高町隊長とハラオウン隊長に、椅子の背もたれに体重を預けながら答える。
あくまで俺の仮説は映像を見て直感的にそう思っただけで、証拠なんて無い。信憑性としてはいま一つだろう。
まぁ、可能性のひとつとして頭の片隅にでも置いといて貰えればいいさ。

「それじゃあとりあえずこの子の話はここまで。
次は明後日、スカリエッティが行動を起こした時の割り振りなんやけどな――」

ここで一度ディレトの話題は終わり、話は明後日の持ち場の割り振りへと移っていった。
とはいえ、こちらも相手の出方次第でいくらでも変わってしまうから、ハラオウン隊長がスカリエッティ逮捕に向かうって事以外は大した事は決まらなかった。
スカリエッティめ。喧嘩売るならある程度こっちに情報公開しとけってんだ。卑怯くせぇ。
……あ、悪役なんだから卑怯でもいいのか。

◇◇◇◇◇

そんなこんなで一応の作戦会議が終わる。
俺以外の皆は仕事があるって事で、既にブリーフィングルームから出て行った。俺はと言うと、一人でブリーフィングルームに残り、ディレトと俺の戦闘映像を見返している所だ。
別にサボってる訳じゃないぞ。ディレトの弱点を探してるんだ。

「……言い訳くせー」

自分で言ってて余りの説得力の無さに泣いた。

「しっかしまぁ、腐っても天才って事か」

映像を止めて溜息を吐く。
さっきから何十回とディレトとの戦闘映像を見ているが、一向に弱点らしい弱点が見えてこない。
代わりに分かるのは、ディレトが如何に強いかってことだけ。

「くっそ、あんま時間も無いってのに」

決戦は2日後。右手は完治しないし、ブラスターシステムだってどれだけ使えるか分かったモンじゃねぇ。
だから、せめて最も厄介な奴の弱点ぐらい見つけておきたい。
俺が戦うかどうかは置いておいて、だ。

「……ふむ」

こうやって映像で見てると、粗は結構見つかるんだよな。
例えば、ディレトの攻撃は射撃にしても近接にしても、一直線の攻撃しかない。
真っ直ぐ突っ込んできて殴る。直線の射撃で牽制や攻撃をしてくる。
つっても、それらが殆ど目視できるかどうかって速度だから、弱点にはなり得ない。それは実際戦ってみた俺が一番良く分かってる。
シグナム副隊長で速い攻撃には慣れてる筈なのに、反応すら出来なかったもんな。

「うーむ、困ったもんだ」

対抗策が思いつかなくて途方に暮れてみる。
隊長達ですら、タイマンだったら危ないって判断した相手だ。無策で戦いたくは無い。
……まぁ、俺相手にスカリエッティがもう一度あの最強の手札を切るとは思えないけどな。

とはいえスカリエッティ陣営との決着をつけるなら、アイツを倒すってのは絶対条件に近い。
戦力的に足手まといになりそうな俺だから、こーゆー所で役に立っておかないとな。
弱点とか見つけたら、高町隊長やハラオウン隊長が「凄い！　抱いて！」ってなるかもしれないし……ぐへへ。

「ああ、大丈夫ですって2人とも。
そんな取り合わなくても俺のブレイブハートはいつでもブラスターモードですから……」

「何を締まりの無い顔してんのよ」

「ぉフッ！？」

妄想に花を咲かせていたら、思い切り頭をしばかれた。

「だ、誰だ！？」

「あたしよ」

頭を押さえて振り返れば、そこには鉄のハリセンを持ったティアが仁王立ちしていた。
……って鉄のハリセン！？

「何してんのお前!?　そんなので殴ったら危ないでしょ!?」

「ハヤトがだらしない顔してるのが悪いんじゃない」

「これは元々です!」

締まりの無い顔で悪かったな畜生!

「つか、お前仕事は?」

「もう終わったわよ。解散してから2時間も経ったんだから」

「マジで!?」

慌てて時計を確認すれば、確かにもう2時間も経っている。

やっべ、どんだけ集中してたんだ俺。自分で自分にびっくりですよ。

「ずっとここに居たの?」

「まぁな。何か弱点でも見つけられればと思ってさ。残念ながら収穫は無しだけどよ」

苦笑しながら椅子から立ち上がり、体を伸ばす。

おー、体がポキポキ言ってやがる。本当に2時間もじっとしてたんだなぁ。
我ながら凄まじい集中力だ。さすが俺。

「ん？　そーいやティア、お前なんでこっちに来たんだ？」

ふと気になったので、伸びをしながら何となく聞いてみる。
俺達の部屋のある場所はブリーフィングルームとは真逆の場所だ。
用事でもない限りはこっちに来ることなんてないだろう。
何かあったのか？

「ふぇっ！？　え、えぇとそれはその……」

すると、途端にティアが顔を真っ赤にして口篭る。

「？　何だよ、俺に言えない用事だったのか？　なら出て行くけど」

「ちがっ、違うわよ！」

「？？？」

はっきりしないティアの態度に首を傾げていると、顔を赤くしたまま俺の側に歩いてくる。
そして。

「……その、ハヤトの事探してたの」

「ぬぐぉっ！？」

目を潤ませた上目遣いと共に、破壊力抜群の言葉を囁いてきた。

うん、アレだ。ちょっと昇天しかけた。

昔死んじまったインコのポチ公と再会してしまったよ。

「ほ、ほぼ逝きかけました」

「え？」

「なんでもない。妄言だ、忘れてくれ」

「う、うん」

上目遣いでこっちを見てるティアから微妙に視線を逸らしつつ、とりあえず深呼吸して気持ちを落ち着ける。

すーはー……すーはー……うん、それ無理。

落ち着ける訳ないだろ！　何この可愛い生き物！？　これ本当にティアですか！？

「あーえーそのー……」

「……何よ」

しどろもどろになってると、ティアは少しだけ口を尖らせながら俺の服の裾を摘んできた。

何なの何なの!?　ホント何なのこの子!?

俺のこと萌え殺す気なの!?　スカリエッティの刺客か何かな訳!?

普通に可愛すぎるんですけど!!!!!!

「ティ、ティア。昼飯は食ったか!?」

このままだと我慢できそうにないので、慌てて話題を逸らす。

しかし、ティアは可愛く口を尖らせたまま、小さく頭を振って答える。

「ううん、まだ食べてない。ハヤトと一緒に食べたかったから」

「ぐぶへぇぇっ!?」

そう言ってからニコリと微笑むティア。

もうホント勘弁してください。これ以上は本気で死んでしまいます。

「ハ、ハヤト大丈夫?　何かさっきから変だけど……」

「大丈夫です。いや、やっぱある意味大丈夫じゃないかも知れません。ティアさんパねぇッス」

「？　何言ってるのよ」

ホント何言ってんだろうね俺は！

落ち着け俺。ちょっと舞い上がりすぎだ。

さっきまでディレトの弱点を探そうとしてたクールな俺に戻れ。

「落ち着け俺。ハヤトのHはクールのHだ！」

「クールだったらCじゃない？」

「そうだな」

うん、ようやく落ち着いてきた。

とりあえずもう一度大きく深呼吸をしてから、気持ちを切り替える。

２時間も考え事して腹が減ったし、ティアも俺と一緒に食べる為に来てくれたみたいだし、とりあえず一旦弱点探しは中断して昼食に行こう。

このまま人目がない場所にいると、俺の理性が危険で危なくてデンジャーだ。

「じゃあ、一緒に昼飯食いに行くとすっか」

「うん」

ティアを促して歩き出そうとすると、ティアが俺のほうに手を差し出してきた。

「握手？」

「……馬鹿。違うわよ」

ちょっとだけ呆れた顔をしてから、俺の手にティアの手が重なる。

あぁ、そーゆー事ね。

「部隊長に見つかったら冷やかされんじゃね？」

そう言いながら、ティアの手を軽く握る。

「いいわよ。その時は、見せつけてやるわ」

すると、ティアは不敵に笑ってそう言いながら、俺の手を握り返してきた。

どうやら正解だったらしい。

一人納得しながら、俺はティアの手を引いて歩き出す。

「恋する乙女ってのは逞しいですなぁ」

「そーよ。ハヤトも覚悟しときなさい」

「……へーい」

どうやら俺は、尻に敷かれることになりそうだ。

そんな未来に頬を緩めながら。

第４８話　『作戦会議』（後書き）

作者はもう色々と駄目なようだ。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「リア充です」

リア充爆発しろ。
そして死ね。

ハヤト
「ふはははは！　モテない奴が吼えておるわ！
存分に吼えるがいい！　痛くもかゆくもないからなぁ！！」

くっ、俺一人ではただの僻みにしか聞こえないか。
ならば！！
せんせぇーーーっっ！！！　先生！　お願いします！！！

迅
「死ねぇぇぇっっ！」

ハヤト
「えぇぇぇっっ！？　何でこの人居るの！？」

エレナ
「ゲストだから、ですね」

そう言うこと。じゃあ迅さん、リア充になって調子に乗ってる馬鹿

に粛清をお願いします。
エレナさんはこっちでディレトとお話してやってください。

迅
「任せとけ。全力全壊でいかせてもらうぜ！！」

ハヤト
「字がおかしい！　おかしいって！！」

迅
「ゲート・オブ・バビロン！！！」

ハヤト
「いいいいいいやぁぁぁぁぁっっ！！！！！」

◇◇◇◇◇

エレナ
「こうやって顔を合わせるのは初めてですね。ディレトさん」

ディレト
「ですわね、エレナ様」

エレナ
「いよいよ決戦のようですけど、ディレトさんは準備は万端ですか？」

ディレト

「ええ。私は完璧ですわよ。イービルハートにも随分馴染みましたし」

エレナ
「一応敵陣営ですから応援するのも変ですけど、頑張ってくださいね？」

ディレト
「任せておけ、ですわ！」

いや、何を微妙に物騒な会話をしてますか。
まぁ時期的に間違いな会話じゃないけどさ。

ディレト
「ぶーぶー。だって最近出番が無くて退屈なんですもの」

エレナ
「そうですよ。仲間はずれは可哀想です」

迅
「そうだな。ま、俺が介入すりゃ一発だけどな」

作者&ディレト&エレナ
「「「！？」」」

い、何時の間に！　てゆーかハヤトは！？

迅
「あっちで磔にしといた」

ディレト
「あ、宝具で磔にされてますわ」

エレナ
「しかも十の字じゃなくて卍形に……」

器用ですね。

迅
「まぁ嫉妬委員会の奴らから頼まれてた分もあるからな」

チート主人公に頼むとは、嫉妬委員会……恐ろしい子！

エレナ
「というか、メンバーは一体どうなってるんでしょうか？」

ディレト
「謎ですわね。たしか会長がヴァイスさんだと聞いてますけど……」

あれは何してんだか。
さて、話題を今回の話に戻そう。

迅
「ディレトの能力解説と、弱点解析だったな」

エレナ
「あんまり詳しくは解析出来てないみたいでしたけど……大丈夫なんですか？」

戦争前なんてあんなモンだと思いますよ。

第一、戦闘機人と六課が戦った回数も時間もかなり少ないですし。
普通に考えて、戦う前に全部の情報分かってるとかありえませんよね。

迅
「ま、確かにそうだな。
つっても、俺だったら解析とか無しで余裕で勝てるけどね」

ディレト
「迅様はチートじゃないですの。当然といえば当然ですわよ」

迅
「ふふん。エクスカリバー連発で消し飛ばしてやるぜ」

エレナ
「ツインバスターライフルで消し飛ばすのもアリですね」

ディレト
「……」（ガクガクブルブル）

よしよしディレト。大丈夫だからそんな怯えるな。
ここでは俺の作者権限の方が優勢だから。

ディレト
「ちょっと安心しましたわ」

迅
「そげぶ！」

ば、馬鹿な！？　俺の作者権限が無くなっただと！？

迅
「さすが上条さんの能力、パねぇな」

ディレト
「ひ、ひぃぃぃっっ！」（逃走）

あ、逃げちゃった。
迅さん虐めすぎですよ。

エレナ
「ラモンさんもノッてませんでしたか？」

聞こえませんなぁ。
さて、久しぶりのゲスト招待はここで終わりです。
最後に番宣どうぞ～。

迅
「お、じゃあ俺が――」

エレナ
「私が番宣を。私が出演しているのは、魔法少女リリカルなのは～神様の力を得た少年～です。

ある日神様に名簿をコーヒーで汚されて死んでしまった少年、神矢迅。
少年は創造の女神アテナの力によってリリカルなのはの世界に転生する。
見た目は５歳、中身は１９歳！チート（無敵）の力を得た迅はリリカルなのはの世界を渡り歩く！

今はネギま！編を終わらせて、いよいよＳｔｒｉｋｅｒＳ編に突入します。
チートな迅と、可憐な私の活躍を活目してご覧くださいね！」

迅
「さりげなく自分を売り込むな」

はいオッケーです！
そいでは、最後にお土産をどうぞ。

（´・ω・`）つ『銘菓“桃太郎印のきび団子”』

迅
「……誰を飼いならせと？」

エレナ
「しかもドラ○もんですか。微妙なチョイスを……」

いいんだよ！
特にネタ思いつかなかったんだし！

迅
「はいはい。じゃあ帰るわ」（転移）

エレナ
「お邪魔しました～」（転移）

お疲れ様でしたー。
さて、次回は決戦前日でも書こうと思います。

そうするとゆりかご戦が５０話からで、キリがよくなるのでｗ

それではまた、次の話で。

秋風先生、迅君とエレナさんはこんな感じでよかったでしょうか？
何かありましたらご連絡ください。適時修正しますので。

※次回作のアンケート投票は、５／２３の午後１２時をもって終了とさせていただきます。
沢山の応募、ありがとうございました。

第４９話　『決戦前日』（前書き）

第４９話　『決戦前日』

ｓｉｄｅ：―

いよいよ、スカリエッティが指定した日の前日となった。
この日ぐらいは休んでおいた方がいいと考え、はやては六課の全員に一日の休暇を出す。
勿論、自分も休みにすることは忘れない小狸である。

休みを貰った六課の面々は、それぞれが思い思いの方法で休暇を過ごす。
大半の人間は自室で休んだり、アースラから降りて街で遊んだり、恋人が居る者はデートと洒落込んでいる。
まぁ、なのはやフェイトなど一部の人間は、休暇を仕事や訓練に費やしているのだが……ワーカホリックは困ったものだ。

そして珍しい事に、本当に珍しい事に、ハヤトもその中の一部であった。

◇◇◇◇◇

「シュートッッ！！」

≪　Ｓｈｏｏｔ　≫

ターゲットが爆発し、数瞬遅れて聞こえる風切り音。
消えていくターゲットのホログラフィを見ながら、ハヤトが口を開いた。

「……何秒だ？」

《　１６秒０２です　》

「ちっ。大分縮まったけど、まだまだ遅ぇな」

構えたブレイブハートを下ろし、舌打ちと共に眉を顰めて呟く。
その呟きに、ブレイブハートは宝玉をチカチカと明滅させながら答える。

《　やはり、弾道計算と反動計算に時間をとられてしまいますね　》

「つっても、それやらなきゃ当たらないし、反動制御もできないだろ？」

《　ええ。せめて相手が真正面にいれば、弾道計算をしなくていいのですが……　》

「ガジェットならともかく、戦闘機人が棒立ちしてくれるとも思えないよな」

《　同感です　》

「やれやれ……」

愚痴を言いながらも、ハヤトは再びブレイブハートを構える。
同時に、彼の前にターゲットが現れ、不規則な起動でめまぐるしく移動を始めた。

「文句言ってもしょうがねぇか。ブレイブハート、もう一度だ」

《　了解です　》

動くターゲットを見つめながら呟いたハヤトの言葉と共に、ブレイブハートの先端に真紅の魔力弾が浮かぶ。
それは、ハヤトが自身で編み出した固有魔法――インビジブル・シューターだった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第４９話　『決戦前日』

「……何やってるんだか。あの馬鹿」

ティアナは溜息と言葉を漏らしながら、ガラスの向こうで動き回るターゲットを撃墜しているハヤトを見つめている。
そうしていると、ターゲットを撃墜し終えたハヤトがブレイブハートと何かを話し始めた。
声こそ聞こえないが、真剣な表情から明日に関することだというのは伺える。

「らしくないことしちゃって」

基本的にものぐさなハヤトは、何かに必死になるということが無い。
だが、今ティアナの視線の先に居る彼はひたすらにターゲットを追いかけ、目に見えぬ速度の弾丸でそれを落とし、外せば盛大に舌打ちして悔しがる。
常では決して見せないその姿に、ティアナは少しだけ苦笑した。

「折角、デートに行こうって思ってたのに……もう」

悪戯をした子供を見つめる様な目でハヤトを見ながら、腰に手を当てて2度目の溜息を吐いた。
ただ、言葉こそ否定的であったが、その表情は優しかった。

「ま、アンタの気が済むまでやりなさい。無茶しないように、ここで見ててあげるから」

聞こえてはいないと分かっているが、それでもティアナは視線の先で汗を流すハヤトに言う。
それから壁に体を預け、愛おしそうにハヤトの事を眺めるのだった。

◇◇◇◇◇

ハヤトが訓練スペースで汗を流している頃、スバルはギンガの病室で椅子に腰掛けていた。
ここ暫く仕事が忙しかったせいで見舞いにこれなかったのと、明日に向けて気持ちの整理をする意味合いもあるのだろう。

「ギン姉。いよいよ、明日なんだ」

心電図の音と、呼吸器の音しか聞こえない病室で、スバルがポツリと呟く。
勿論、意識が戻っていないギンガはその呟きには答えない。
それはスバルも承知しているので、ギンガの手を取り、自分に言い聞かせるように言葉を続ける。

「あたし、ギン姉の分も頑張るね。マッハキャリバーと一緒に」

首から提げたマッハキャリバーを握り締めて、宣言する。
マッハキャリバーは言葉を発しなかったが、彼女の言葉に応えるように一度だけ小さく煌いた。

「だから、ギン姉も早く起きて。ハヤトもティアも、皆待ってるから」

ギンガにそう声をかけてから、スバルは近くの棚に置いてあるブリッツキャリバーへと視線を動かす。

「ブリッツキャリバー。ギン姉のこと、よろしくね？」

《 お任せください 》

その言葉に答え、ブリッツキャリバーが「ですが」と続ける。

《 スバルも気をつけてください。あの戦闘機人たちは、強敵ですから 》

「うん。大丈夫」

しっかりと頷いてから、スバルは椅子を立って病室のドアへと向

かう。
そしてドアを少し開けてから、もう一度だけギンガを振り返って、呼吸器や点滴が繋げられている彼女を見る。そのまま暫く彼女を見つめてから、大きく頷いて視線を前に戻してドアから出て行く。
その顔は、決意と覚悟で引き締まっていた。

◇◇◇◇◇

「はああっっ！！」

「せいっっ！」

ハヤトが訓練している場所から、それなりに遠く離れた訓練スペース。
そこに、２人の裂帛の声と魔力同士が擦れあう甲高い音が響く。

「うあっ！？」

一際高い音が響いた後、赤毛の少年――エリオが悲鳴を上げてたたらを踏む。
そのエリオに、桃色のポニーテイルの女性――シグナムが一足で間合いを詰め、愛剣であるレヴァンティンを横に薙ぐ。

「くっ！」

まるで空気を裂くかのようなその鋭い剣閃を、エリオはストラーダを盾にして咄嗟に防ぐ。

だが、歴戦の兵であるシグナムの一撃は、その程度で防げる程に甘くは無い。防いだエリオはストラーダごと吹き飛ばされ、何度か地面を転がった後、態勢を立て直してストラーダを構える。

「まだやるか？」

「勿論です！」

レヴァンティンの切っ先を向けるシグナムに、エリオは毅然と答えた。

シグナムはそんな少年に少しだけ笑いかけ、それから視線を訓練スペースの入り口で2人を見ていた少女に移して口を開く。

「お前も参加するか？　ル＝ルシエ」

「え！？　い、いいんですか！？」

「そこで心配そうな顔をされては私もやり辛い。何、明日に響かない程度に加減はするぞ」

苦笑するシグナムの言葉に、キャロの顔が明るくなる。
彼女に一も二もなく頷いてから、バリアジャケットを展開してエリオの側へと駆け寄り、ストラーダを構えるエリオと一緒に並ぶ。
フリードも同じくである。

「やるからには全力で来い。いいな」

「「はい！」」

「きゅくる～！」

再び切っ先を構えなおし、２人に向けてそう言葉を放つシグナム。
そのシグナムに対して、エリオとキャロは元気良く頷きながら返事を返すのだった。

◇◇◇◇◇

「イービルハート、モードＲＢ（ライディングボード）」

≪　Ｙｅｓ．　≫

ディレトの言葉に呼応して、イービルハートがツインブレイズからウェンディの固有武装、ライディングボードへと瞬時に形状を変

える。
それを確認しながら、ディレトは現在発動しているＩＳ“ライドインパルス”を解除し、ＩＳ“エリアルレイヴ”に切り替えようとした。
その瞬間、ディレトの電子頭脳に《　ＩＳ切り替え不可　》というノイズが走る。

（――ちっ、ＩＳ切り替え待機時間がまだ残っていましたか）

ＩＳ切り替えが出来ずに、舌打ちしたディレトの足が止まる。

「せいぃっっ！！」

「！」

その隙を見逃さずに、トーレが風を切ってディレトに迫りながら右拳を突き出す。
ディレトはそれを目の端に見ながら、僅かに上体を後ろに逸らすことで皮一枚を掠らせて拳を避けて見せた。
しかし、トーレとてそれなりに修羅場を潜ってきた猛者だ。当然ながらその程度で攻撃が終わる訳は無く、拳を突き出した勢いを殺さずに体を捻り、上体を逸らしたディレトの顔面目掛けて回転蹴りを放つ。

「っ！！」

その蹴りをライディングボードを盾に防ぎながら、ディレトは自分から地面を蹴って横へと跳んだ。

「ＩＳ、“エリアルレイヴ”！！」

空中で態勢を整え、盾にしていたボードの砲門をトーレへと向けて、切り替えの終わったＩＳを発動する。

発動したＩＳに従って、空中を飛ぶディレトの周囲に百を越えるであろう橙色の弾丸が発生し、それらが洪水の様にトーレへと襲い掛かった。

「くぅっ！？」

百を越える弾幕は、トーレからすれば壁が迫ってくるような感覚さえ覚える程だ。

まるで逃げ場の無い弾幕に、それでもトーレは咄嗟に逃走通路を探す。

だが、どれだけ探そうともそんなものは見当たらない。当然だ。壁が迫ってくるというのに、逃げ場などある訳が無い。

「トーレ姉！」

「！」

そんなトーレの足元からセインが顔を出し、彼女の手を取って再び地面へと沈む。
刹那、彼女が居た場所が橙色の光に飲み込まれた。

「……モードＢＢ（ブーメランブレード）」

《　ＹＥＳ．　》

だが、ディレトは即座にそれに対応。
イービルハートをブーメランブレードへと形状変化させ、誰も居ない筈の真後ろへと投擲する。
ブーメランブレードが風を切り裂いて飛んでいく。

ディレトが投擲した数瞬後、その飛んでいく先にトーレと、彼女を抱えたセインが地面から浮上してきた。

「なっ！？」

「んげっ！？」

思わず二人が驚愕の声を上げ、飛来するブレードに目を剥いた。
ブレードは、まるで彼女がそこに出現すると事前に分かっていたかのように、正確に２人の居場所へと迫る。
殆ど不意打ちに近い形で飛んできたブレードに、トーレとセイン

は防御する間も無く吹き飛ばされた。

「ぐぁぁっ！」

「うぁっ！？」

吹き飛ばされた2人はそのままブレードで壁に叩きつけられ、壁が網目状にひび割れる。

「……これで、全員ですわね。イービルハート、モードリリース」

《All right.》

2人を叩きつけた2つのブレードを掴み取り、銀の指輪へと戻す。それからディレトはトーレとセインの元へと歩み寄って、手を差し出した。

「大丈夫ですか、トーレお姉様、セインお姉様？」

「つっ……問題ない」

「あいたたた……あたしも平気だよ、ディレト」

ディレトの手を取って、セインとトーレが立ち上がる。
そんな彼女達に、チンクを始めとしたほかのナンバーズ達がぞろぞろを集まってきた。
全員が全員、少なくないダメージを受けている。先程まで行っていた、ナンバーズＶＳディレトの模擬戦でのダメージだ。

「しっかし、さすがに全員で行って負けると凹むッスねぇ～」

「ディレト！　お前もう一回あたしと勝負しろ！　今度はタイマンだ！！」

「やめておいた方がいいわよノーヴェちゃ～ん。全員で勝てなかったディレトちゃんに、一人で勝てる訳ないじゃないのぉ」

拳を握ってディレトに迫るノーヴェを、クアットロが呆れた顔で諌める。
それにチンクやディエチは苦笑し、セッテやディードは無表情なままで、しかし少しだけ悔しさを滲ませた視線でディレトを見ていた。

「明日の前に、あまり無理をしても仕方あるまい。
今日はここまでにして、明日管理局の魔導師相手に存分に戦えば良いだろう、ノーヴェ？」

「む……チンク姉が、そう言うなら」

「あははっ！　相変わらずノーヴェはチンク姉大好きッスね～」

「う、うっせぇぞウェンディ！！」

「お～。これが噂に聞く『ツンデレ』ってヤツだね」

「ツンデレのノーヴェちゃん、可愛いわねぇ」

面白がってからかうクアットロとセイン、ウェンディの3人をノーヴェが顔を真っ赤にして追いかける。

そんな姉達を見ながら、ディレトはイービルハートを見つめていた。

（武装が増えたのは良いですけど、武装系ＩＳの切り替えに待機時間が必要になるのは、面倒ですわね）

戦術の幅は広がったが、その分難点も増えた。

勿論、その程度で遅れを取るつもりなど、彼女には微塵も無いのだが――。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

「……はぁ」

ターゲットの撃墜を確認して、いい加減辛くなってきた息を整える。

「くそ。やっぱ、右手が使えないと狙いが定まんねぇな……」

握るだけで痛む右手に眉を潜めて呟く。

さっきから左手でブレイブハートを握って、右手は殆ど使わずにターゲットを狙ってるのだが、どうしても照準がブレてしまって命中率が下がる。

こりゃ、明日は場合によっちゃ右手を使わなきゃ駄目だなぁ。

「っと、さっきのは何秒だった？　ブレイブハート」

《　１１秒３２。十分に実戦で使う事が可能な範囲かと　》

「……だな。んじゃまぁ、明日に備えて終わるとしようかね」

《　了解です　》

ブレイブハートを待機状態に戻し、後始末を開始。

訓練ルームの設定を弄ってここに来る前に戻し、全体の電源をオフにする。

「ん。これで終わりだな」

《　はい。お疲れ様でした　》

「お前もな、ブレイブハート」

右手のブレイブハートと互いを労ってから、近くに置いといたタオルで汗を拭う。

時計を見れば、もう夕方だ。珍しく真面目に訓練しちまったぜ。

ん？　これ死亡フラグじゃね？

「ははは、まさかそんな……」

《　どうなさいましたか？　》

「何でもない、何でもない」

死亡フラグとか縁起でもねぇ。

１７歳にしてようやく人生初彼女出来たのに、×××もしないで死んでたまるかってんだ！

是が非でも生き残ってやる！

「さて、とりあえず腹も減ったし飯でも食うかー」

その前にシャワーかなぁ。汗でベタベタして超気持ちわりーし。
何て、今後の予定を色々頭の中で組み立てながら訓練ルームから出る。

「……ん？」

すると、ルームを出て直ぐのところにあるソファで寝ているティアを見つけた。
私服で何してるんだ？　こんな色気のねぇ場所で。
んー……わからん。わからんがとりあえず。

「起きろー。風邪ひくぞー。
明日変態軍団と戦うのに風邪ひくとか馬鹿だぞー」

「んぅ……」

肩を揺すって起こそうと試みたが、結構深く寝てるみたいで起きる気配が無い。

「おーきーろー」

「んにゅ……ぅるさぃ」

駄目だこりゃ。起きる気ねぇよ。
でもここに放ってく訳にもなぁ？

「……」

無理だな。絶対誰か悪戯するって。
しかし俺も腹減ったから食堂行きたいし、でもココに放置も出来ないし……。

「よし」

そう一つ頷いて、ティアの脇と膝の所に手を入れて抱き上げる。
所謂横抱き。俗に“お姫様抱っこ”と呼ばれるヤツだ。

「ん、意外と軽いな」

しかもこうやって触ってると意外と柔らか……げふんげふん。
何でもないよ。ちょっと前屈みになんてなってないよ。
邪念退散。喝。

「さて、と。ティアの部屋はどこだっけなぁ？」

ティアの事を抱えたまま、乗員用の居住区へと足を向ける。
頭の中で部屋の場所を思い出しながら、なるべく人目を避けて通路を歩く。こんなとこ人に見せられねーよ。
部隊長に見つかったらぜってー冷やかされるし。

「……ん、あれ？」

そうして歩いてると、ティアが目を少し開いた。
お、起きたか？

「おっはー」

「……？　ハヤト？」

「おう、愛しのハヤト君ですよ」

まだ半分夢の中なのか、ティアはぼんやりした口調で俺の名前を呼ぶ。

「……ハヤト」

「っっ！！？？」

目が覚めて降ろせと言われるかと思ったら、首に抱きついてきた。

うおぉぉぉ！？　な、何だぁ！？

「ちょっ、えっ、ティア！？」

「大丈夫だからね」

「は？」

「アンタの事は、あたしが守ってあげるから」

「……ティア」

俺の首に顔を埋めて、囁くように言うティア。
多分まだ寝惚けてるんだろう。もしかしたら、夢か何かだと思ってるのかも知れない。
でも――。

「ああ、しっかり守ってくれよ」

その言葉は、しっかりと俺の胸に届いた。

「任せときなさいょ……ん……」

やっぱり寝惚けていたらしく、最後に小さく答えて再び寝息を立

てるティア。
その寝言に、一人で緊張していた自分が馬鹿馬鹿しくなってきた。

そうだよなぁ。
ティアもスバルも、エリオもキャロも居てくれるし、何より明日は隊長達だって一緒なんだ。
よく考えれば緊張するのも馬鹿らしい話だよな。何らしくもなく緊張してたんだか。

「ありがとよ、ティア」

「……」

抱えているティアの耳元で、小さく礼を言いながらティアの部屋を目指す。

「やれやれ。ティアには敵いませんなぁ」

最後に一言、そう呟いて。

余談だが、この後部隊長に見つかって散々からかわれた。
ちくしょう……。

第４９話　『決戦前日』（後書き）

甘い雰囲気は今回で終わり、次回からはシリアス一直線ですよ！
どうも、ラモンです。

ハヤト
「どうも、主人公です」

さて、今日はゲストは無しです。

ハヤト
「ゲスト無し？　何で？」

実は今ちょっと考えてることがあってね。
ゲスト出演は次からそっちでやってみようかと。

ハヤト
「ほほう。それは中々楽しそうだ」

なんで、とりあえず今回はゲスト見送りで。
さて、本編の話題に戻るとしよう。

ハヤト
「つーても、あんまり語ること無くね？」

まぁな。今回は殆ど穴埋めみたいな感じだし。

ハヤト
「あ、でも今回、高町隊長達の話は無いのか？」

無いな。
これのメインはＦＷ面子だし、決戦前日の隊長クラスなんて書類仕事やら準備やらの話題ばっかになりそうだったし。
そんなの読んでもつまらないでしょ？

どうしてもって人は、アニメを見て各自で脳内補完してください！

ハヤト
「投げっぱなしかい！」

投げっぱなしだよ！
何か悪いか！

ハヤト
「逆ギレか！！」

逆ギレだよ。
さて、いよいよ次回からシリアス多めのゆりかご戦！
ハヤトは生き残ることが出来るのか！？

ハヤト
「いきなり不吉な事言ってんじゃねぇっ！！」

っと、その前に番外編やら今考えてる新しい事を更新するかもです。
その時はそちらもよろしくお願いしますね。

それでは、また次の話で。

※次回作のアンケート投票は、５／２３の午後１２時をもって終了とさせていただきます。
沢山の応募、ありがとうございました。

第５０話　『ゆりかご』

９月２３日。午前１０時ちょい過ぎ。
遂にスカリエッティが指定した日がやってきた。
俺達六課の前線メンバーは、いつでも出動できる様にアースラのブリーフィングルームに集合している。
余計なことはせずに、細かい確認なんかをしながら『その時』を待つ。

……コンディションは悪くない。
右手もさっき痛み止めを打って貰ったから、動かすのに問題は無い。
ふふふ、どっからでもかかってこいスカリエッティと愉快（笑）な仲間たち。
ボッコボコにしてやんよ！

「何ひとりでシャドーやってるの、ハヤト？」

「……準備運動？」

「いや、あたしに聞かれても……」

何時の間にやら手が無意識に動いてたらしい。
スバルに尋ねられて、恥ずかしいので誤魔化しておく。

「ふふ、やる気があるのはいいけど、始まる前に疲れないようにね。

ハヤト君？」

「うぃっす」

高町隊長にも笑われてしまった、恥ずかしい。

そう思いながら苦笑した時――

「！？」

戦いの始まりを告げるブザーが、艦内に響き渡った。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第５０話　『ゆりかご』

ｓｉｄｅ：―

「「ＩＳ“ヘヴィバレル”！！」」

少女２人の声と共に、二つの橙色が空を裂く。

そしてあちこちに配置されていた管理局員を飲み込み、地面を抉り飛ばしながら巨大な爆発を起こす。
砲撃の主は、赤毛と栗毛の少女――ディレトとディエチ。
2人の隣にはクアットロとセインが立ち、爆発でパニックになっている局員をせせら笑っていた。

「ふふ。こうなったら後は簡単ね。セインちゃん、ディレトちゃん、よろしく～☆」

「あいよー」

「了解ですわ～」

クアットロの指示に頷きながら、ディレトとセインが地面へと沈んでいく。
それを見届けてから、クアットロは目の前にパネルを浮かばせ、楽器を奏でるようにパネルを叩き、自分の横に小さなモニタを浮かべた。

「これで1号機の制圧は完了、と。
トーレお姉様ぁ、そっちの首尾はいかがですぅ？」

パネルから視線は逸らさず、モニタに映るトーレに尋ねる。
それに対してモニタのトーレは、近くにいた局員に蹴りを見舞いながら余裕を持って答えた。

『問題ない。先程チンクとウェンディの方も制圧が完了したと連絡があった』

「それはなにより。こちらも直ぐ終わりますので、後は手筈通りにぃ」

『了解した』

短い答えと共にトーレが通信を切る。

それと同時に、セインとディレトが向かった方から、爆発音と爆炎が巻き起こった。

「あらあら、随分と早いのねぇ。さっすがディレトちゃんにセインちゃん」

「……クア姉。私達は行かなくていいの？」

「セインちゃんとディレトちゃんだけでもお釣りがくるわよぉ。休めるときに休んでおくのが、戦争で生き残る秘訣よ？」

「そんなもの？」

「そんなものよぉ」

とめどなく聞こえる爆音と絶叫、それらを聞きながら心地良さそうに嗤うクアットロ。

その視線の先で、彼女達の破壊目標になっていた地上本部の兵器――アインヘリアルが崩れていく。
時間にして僅か１０分にも満たない、戦いとも呼べない戦い。
そこには、圧倒的な力の差があった。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

『アインヘリアル１号機、２号機の戦闘機人、撤収していきます！』

モニタに映る映像と一緒に、フィニーノ陸士の通信がブリーフィングルームに響く。
俺達ＦＷと高町隊長、ハラオウン隊長、クラエッタ陸士は椅子から立ち上がり、それを食い入るように見つめる。

「……前の時よりも、動きが早い」

「うん。しかも、嫌な感じに拡散してる。
私達が突っ込んで行けないように……ってことかな」

映像を見ながら、両隊長が難しい顔で呟いている。
確かにモニタに映る光点は、それぞれが数人ずつのグループに分かれて別々の場所へと移動しているようだ。
こっちの戦力を警戒して、分散させて叩こうって考えなのか……それとも、よっぽど自分達の戦力に自信があるのか。
今のところ注意すべきはディレトと、ミッド中に仕掛けられた生物兵器。

相手の分散は無視して、戦力を集中してスカリエッティを押さえるのが妥当だろう。
生物兵器さえ押さえちまえば、後は各個撃破で何とかなる筈だ。
ディレトに関しても、隊長達が全員で行けば……おそらく勝てると思う。おそらく、だが。

「しっかし予想以上だな。地上部隊だっていただろうに、全滅かよ」

「戦闘機人はデータの蓄積を共有できるから、多分そのせいだと思う」

「……ってことは、あたし達と戦った奴らもあの時より強くなってるって事よね」

モニタを見つめて買ってきた缶コーヒーを飲みながら、スバル、ティアの2人と意見を交わす。
戦闘機人に関してはスバルが一番良く知ってるから、そのスバルが言う以上そうなんだろう。
厄介な。こっちの手の内もある程度バレてるって事かよ。インビジブル・シューターに対策取られたらヤバイんですけど。

勘弁しろよスカリエッティ。変なとこが優秀で困る。

「ま、全員で行きゃどうとでもなんだろ」

「だね。なのはさんも居るし、フェイトさんだって居るもん」

「てゆーか、それだとあたし達居る意味ないんじゃない？」

「俺はサボれて嬉しいけどね」

「「サボるな！」」

言うくらい別に構わないだろうに、と、ティアとスバルから裏拳でぶん殴られながらそう思う。

どーせ、実際には戦わなきゃいけないんだし、俺だって本気でサボろうと思ってる訳じゃねーっつーの。

『アコース査察官から直通連絡！』

そんな風に馬鹿をやってると、通信と共にモニタに緑ロングヘアーのイケメンが映る。

なんか「まっがーれ→」とか言いそうだ。

『はやて。こちらヴェロッサ、スカリエッティのアジトを発見した』

『ほんまか！？』

『今、シャッハが迎撃に出てきたガジェットを叩き潰してる。
教会騎士団からも戦力を呼び寄せてるけど、そっちからも制圧戦力を送れるかい？』

『そら勿論やけど……』

制圧戦力ね。逮捕権限を持ってるってことで、向かうのは十中八九執務官のハラオウン隊長だろう。
サポート役で誰かつくのかも知れないが、俺達ＦＷでないのは確かだ。だって空飛べないもん。
となると……。

『撤収した戦闘機人の一部が、廃棄区画から地上本部へ接近中！
それに……あの騎士も、別ルートで接近してます！』

顎に手を当てて考えていると、フィニーノ陸士の焦った声と共に、廃棄区画の道路を走る戦闘機人と、空を飛ぶ渋いオッサンの映像がモニタに映る。
たしかあのオッサンて、前回のデータにあったオーバーＳの……。
ちっ、ここに来て面倒な。
これでオッサンの方にも戦力割かなきゃいけなくなっちまった。

『え、何コレ！？　全周波に無理矢理割り込んで――！』

考えていると、再び陸士の焦った声。
今度は何だとモニタを見れば、前に一度見たことのある、どデカイ虫が映っていた。
ああもう！　今度は何する気だあのマッドサイエンティスト！
刻々と変化していく現状に戸惑う頭でスカリエッティに毒を吐きつつ、俺はモニタを睨みつける。
虫は地面に取り付いて、頭から伸びた角の先端で放電しているようだ。
近くの木が揺れていることから、前の時と同じように地震を起こしているらしい。

「あの虫、何してやがんだ？」

「わからないけど……ただ地震を起こしてるってワケじゃないわよね」

「だろうよ」

目的の見えない相手の行動に、俺達は互いの顔を見合わせた。
ただ地震を起こしているだけなら、その映像をわざわざ全周波に割り込ませる意味がわからない。
きっと何か意味がある。
地震を起こしたってことは、あの下に何かあるのか？
いや、だったらあの壁抜けできるＩＳで事前に持ってくればいい。

「マジで何する気なんだか」

俺が眉を潜めてそう呟いた瞬間。

『さぁ、いよいよ復活の時だ――』

聞いた事のある――いや、一度聞いたら忘れられないクソッタレな声が、ブリーフィングルームの空気を揺らした。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「さぁ、いよいよ復活の時だ」

両手を天に掲げながら恍惚とした笑いを張り付かせ、紫銀の髪を持つ男が呟く。

彼の視線の先には、山肌や地面に取りつき、地震を起こしている

地雷王が映っているモニタがいくつも浮かんでいる。

「私のスポンサー諸氏」

男の言葉に連動するかの如く、地雷王の取り付いた山肌の一つが割け始めた。

「そして、こんな世界を創り出した管理局の諸君」

一箇所が割け始めると、それを合図として地雷王が取り付く全ての山肌が罅割れ、割けていく。

「偽善の平和を謳う聖王教会の諸君」

割けた山肌は、こびり付いた泥が乾いて零れ落ちていくかのように剥がれ、地面へと落ちていく。

剥がれた山肌の下から現れたのは、青い無機質な金属の装甲。

「これが！　これこそが！　君たちが忌避しながらも求めていた絶対の力！！」

刹那。罅割れた大地を揺り動かして、『それ』は浮上した。

幾層にも積み重なった大地を押し上げ、自身の上に存在する大地の重さなど歯牙にもかけず、驚くべき速度で上昇し、空へと舞い上がる。

「旧暦の時代、一度は世界を席捲し、そして世界を破壊した古代ベルカの悪魔の叡智」

高度が増していくにつれ、残っていた大地も転がり落ち、その全貌が顕になっていく。

青と黄を基調とし、まるで次元航行艦の如き――否、次元航行艦よりも更に一回りは巨大な戦艦。

聖王に纏わる話を聞いたことのある者ならば、誰もが一度は聞いたことのあるその外見を持つ『それ』の名は――。

「“聖王の揺り籠”だ！！！」

男――スカリエッティの言葉と共に、古代ベルカの負の遺産が、大空へと羽ばたいた。

◇◇◇◇◇

「……何、あれ」

乾いた声を漏らしたのは、誰だったか。

ブリーフィングルームに居るなのは達の目に映るのは、青と黄を基調とした巨大な戦艦――“聖王の揺り籠”。

ミッドチルダで育った人間は勿論、ここではない世界で育ったなのはでさえ名前だけは知っている、御伽噺に出てくる存在。

そんな夢物語の存在でしかなかったモノが、今、彼女達の目に映っていた。

「……はは……はははっ」

ハヤトは、自分の頬が引き攣っていくのを感じた。

彼らはスカリエッティ個人とその保有戦力を相手にするのだと考えていた。

それでだけでもどうするかと思っていたところに、さらなる事態の悪化。

最早、彼らの置かれた状況は最悪と言ってもいい物になっている。

『見えるかい？』

慄するなのは達の耳に、愉悦に浸るスカリエッティの声が届く。

『待ち望んだ主を得て、古代の技術と叡智の結晶は今その力を発揮する！』

「……主？」

聞きなれぬ単語に皆が首を傾げたが、その単語の意味を、なのは達は直ぐに理解させられた。

「嘘！？」

「そんな……」

スバルとティアナが息を呑む。

なのはとフェイトは目を見開いてモニタに見入り、エリオとキャロは椅子から立ち上がってモニタの近くに駆け寄った。

そしてハヤトは、モニタを食い入る様に見つめながら、呆然と呟く。

「……あれって」

彼女達の目が捉えているのは、大仰な椅子に座らされ、両手を拘束されているヴィヴィオ。

項垂れていて顔は見えないけれど、彼女達が少女の事を見間違う訳が無い。

ヴィヴィオが座る椅子からはケーブルが何本も伸び、その両脇には球体が浮かんでいる。
それらが何を意味するのかは分からないが、少なくともヴィヴィオに害を及ぼすモノだということは想像するに難くない。
だが、なのは達にはそれを考える暇すら与えられなかった。

「何で……」

『っ！！』

なのはが小さく言葉を漏らした時、ヴィヴィオが座る椅子の両脇に浮かぶ球体の間に電撃が奔り、少女は弾かれるように顔を上げて、小さな声を漏らしながら閉じていた目を見開く。
すると、椅子の後ろから伸びているケーブルが紫に光り、何かがそこを通っていく。

『ぅあ……っ！！』

全員の耳が、ヴィヴィオの苦しげな呻きを捉える。

『いたいよ……怖いよぉ……っ、ママ、おにぃちゃん……っっ！！』

「……っ！！！」

体を捩りながら、悲痛な声を漏らすヴィヴィオ。
その悲鳴に、誰もが拳を握り締めて体を震わせている。

『うあぁぁぁっ！　痛いよぉぉっっ……！！』

「ヴィヴィオ……っ」

なのはも、まるでそれ以外の行動を忘れてしまったようにモニタを見つめ、ヴィヴィオの名前を小さく呟きながら、レイジングハートを握り締めていた。
そこでヴィヴィオの映像は止まり、今度は下卑た笑みを浮かべるスカリエッティが映し出された。

『さぁ！　ここからが祭りの始まりだ！！　止められるものなら止めてみるがいい！
くははははっっ！！
あははははははははははっっ！！！』

両腕を広げ、スカリエッティは笑う。
どこまでも楽しそうに、どこまでも嬉しそうに。
どこまでも――狂っているように。

ｓｉｄｅ：―　了

ｓｉｄｅ：高町なのは

ガゴンッッ！！！

「！」

スカリエッティの哄笑を裂いて突然響いた、何かを殴りつける音。
それが耳に届いた時、私は凍っていたような体を動かした。
音がした方向に視線を向けると、そこにはブリーフィングルームの机に拳を叩きつけているハヤト君の姿があった。

「スカリエッティ……ッッ！！！」

今まで聞いた事も無い、低くて響くような、憎悪の籠った声。

「……ハヤト、君？」

恐る恐る声をかけるけど、ハヤト君は反応しないで厳しい視線をモニタに向けている。
もし、視線で人が殺せるのだとしたら、きっとハヤト君はスカリエッティを殺していただろう。

そう思わせる程に、モニタを射抜くハヤト君の視線は鋭くて、怖かった。

「ハヤト、落ち着きなさい」

今まで見たことの無い、怒りを露にしているハヤト君。
そのハヤト君に、ティアナが小さく声をかけた。

「けどよっ！！」

「今、ここで怒ってても仕方ないでしょ？」

「……っ！！」

子供を諭すみたいに呟いたティアナに、ハヤト君は机にぶつけていた左手を握り締め、下を向いて大きく深呼吸をしてから、私の方を見て頭を下げる。

「……すいません。取り乱しました」

もう一度見えたハヤト君の顔は苦笑していて、私が見慣れたいつものハヤト君だった。
ちょっと、意外だったな。ハヤト君が、ヴィヴィオの事であんなに怒ってくれるなんて。

「ううん。気持ちは、わかるから」

そんな事を思いながら、首を振る。

私だって、スカリエッティの事は許せない。多分これは、皆一緒。

むしろハヤト君には感謝してるくらいだ。ハヤト君が怒ってなかったら、私が怒ってたかもしれなかった。

「ハヤトのお陰で、頭が冷えたしね」

「そうだよ。お手柄だね、ハヤト」

「……誉められてんのか、俺？」

私の言葉に続いてフォローするフェイトちゃんとスバルに、ハヤト君は複雑な顔で首を捻った。

いつもの調子に戻ったハヤト君に、皆の緊張が解けていくのがわかる。

……今になって思うけど、ハヤト君みたいな人は部隊にとって凄く重要なんだなぁ。

ハヤト君が笑うだけで、まだ響いているスカリエッティの声が気にならなくなる。

こういうことが出来る人なんて、そうそう居ないよ。

まぁ、本人に言ったら調子に乗っちゃいそうだから、いわないけ

どね。

『皆、今の映像は見てたな？』

言葉と共に、モニタの映像は消えて、はやてちゃんからの通信が繋がる。

私達は笑うのを止め、表情を引き締めてモニタに視線を向け、頷いた。

『ええ顔や。なのはちゃん、フェイトちゃん、それにＦＷの皆にアルト。全員、すぐに動けるな？』

「もちろん！」

「当然だよ」

「「「「「はい！」」」」」

はやてちゃんの言葉に、全員で頷く。

『そんなら、今から３０分後に機動六課出動や。細かい割り振りとかを伝えるから、なのはちゃんとフェイトちゃんは直ぐに私のとこまで来てくれる？』

「「了解」」

『ＦＷ陣とアルトは、それぞれ準備してから待機所で待機。
ちゃんとトイレは済ませておくんやで？』

「「「「「了解！」」」」」

『ほな、また後で』

はやてちゃんからの通信が終わると、私達は一斉に動き出す。

「そっちはティアナとハヤト君に任せていいかな？」

「大丈夫です」

「了解ッス」

「じゃあ、１５分後に待機所で」

ティアナとハヤト君に指示を出して、ＦＷの皆とアルトが走っていくのを見送ってから、フェイトちゃんと一緒にはやてちゃんの居る艦橋ブリッジを目指す。
迷いは無い。焦りも無い。
あるのは、誓いにも似た覚悟だけ。

「待っててねヴィヴィオ。今、ママが行くから……！」

私はフェイトちゃんと共にブリッジへと急ぎながら、噛み締めるように呟いた。

ｓｉｄｅ：高町なのは　了

第５０話　『ゆりかご』（後書き）

はい、というわけで最終決戦開幕と相成りました。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「今回は出番少ないなぁ。主人公です」

ついに始まりました最終決戦。
ディレトはどう動くのか、そしてハヤトとの決戦はあるのか？

ハヤト
「てかさ、最終決戦てどういう風にすんの？
俺視点メインでＦＷ陣の戦いだけ書くの？」

どうするかちょっと悩み中。
全員分を書きたい気もするんだが、それだと文章量も凄いことになるし、何より俺の文才でそこまで描写できるのか不安だ。
でも、すっげー書きたい展開の為には、全員分の戦いを書かないといけないんだよねぇ。

ハヤト
「まぁどっちでもいいけどよ。
無駄にラジオなんて始めたんだから、絶対にこっちの更新速度遅くしたりするなよ？」

それは勿論だ。
とりあえず大体の展開は出来てるから、あとは描写をどうするかだけだし、そんなにつっかからずに行けると思うぞ。

ハヤト
「信用なんねー」

俺も微妙に信用ならねぇ。
でも頑張る！
という訳で、逃げ出さないように自分を椅子に縛り付けて頑張りますw

それではまた、次の話で。

第５１話　『出撃』

ｓｉｄｅ：―

『聖王の器と揺り籠は、安定状態に入ったわ』

各地で移動を続けるナンバーズの横に浮かぶモニタ。
そこに映るウーノが淡々と現状を告げた。

『クアットロとディエチは、揺り籠内に来て私と交代』

「はぁ～い」

「了解」

森林地帯を飛ぶクアットロとディエチ。

『トーレとセッテ、セインはラボでドクターの警護を』

「心得た」

海上を飛翔するトーレ、セッテ、セイン。

『ノーヴェは、チンクとディード、ウェンディと一緒に』

「もう向かってる」

廃棄都市の道路を走るノーヴェ。

視線の先には、ライディングボードに乗ったウェンディとチンク、そしてツインブレイズを持って飛ぶディードの姿がある。

『ディレト、貴女はもう暫くそこで待機。

恐らく標的はノーヴェ達のほうに行く筈だわ。いいわね？』

「了解ですわ」

そのノーヴェ達を遠くに見ることが出来る、廃棄都市の中でも一際高い廃ビルの屋上。

ＩＳ“シルバーカーテン”で己の姿を隠しつつ、そこでディレトはウーノからの通信を切る。

「ふふっ。“揺り籠”が所定の位置に着くまであと3時間３２分。

さぁ、急いて急いていらっしゃいな機動六課――いいえ、ハヤト様。貴方が死ぬ瞬間こそ、このお祭りの大事な部分（メインイベント）なのですから」

自身の体を抱きしめて、恍惚に身を震わせるディレト。

その瞳は、見える筈も無いハヤトの姿を確かに映していた。

side：―　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第５１話　『出撃』

『第１グループ降下ポイントまで、後３分です』

待機所に、リリエ陸士の通信が響く。
今ここにいるのは、俺を始めとしたＦＷ陣と高町隊長、ヴィータ副隊長の７人。
出撃前の最終ミーティングってやつだ。

「今回の出動は、今までで一番ハードになると思う」

いつになく真剣な顔で、隊長が切り出す。

「それに、あたしもなのはもお前らがピンチでも助けに行けねぇ」

その言葉にヴィータ副隊長が続ける。
そう。揺り籠、スカリエッティ、そして戦闘機人。
地上本部も本局も、両方が動いてこの事態の収拾にあたるのだが、高ＡＭＦ下での戦闘に慣れている部隊は少ない。
だから俺達は３つのグループに分かれて現場に向かうことになった。

高町隊長、ヴィータ副隊長、八神部隊長は揺り籠へ。
ハラオウン隊長はスカリエッティのアジトへ。
そして俺達ＦＷは対戦闘機人。

完全にバラバラになって戦う事になる訳だ。
今までは隊長のフォローを期待できたが、今回に限ってはソレは無い。
つまり、俺らが自分で頑張らなきゃいけない……んだよなぁ。

「だけど、ちょっと目を瞑って、今までの訓練を思い出してみて？」

高町隊長に言われるまま、目を瞑って今までの訓練を思い出してみる。

「何度もやった基礎訓練」

朝から晩までやってたなぁ。特に早朝のは、朝が弱い俺にはきつかった。

「嫌って程磨いた、それぞれの得意技」

……俺って何か得意技あったっけ？

何か、その時ってシグナム副隊長にしごかれてた記憶しかないんだが。

「痛い思いをした防御練習」

やったやった。俺は防御練習っつーか生き残りをかけたサバイバル訓練ぽかったが。

……あ、駄目ですシグナム副隊長、それは駄目、斬れます。

「全身筋肉痛になっても繰り返したフォーメーション。」

ホント無理です。俺の上半身と下半身がＡパーツとＢパーツに分離しちゃいますから。

「Ｖガ〇ダ〇には、こういう使い方もあるんだ！」って言いながら、下半身飛ばせるようになっちゃいますから！

「いつもボロボロになるまでやった、私達との模擬戦」

「まだいけるだろ」って？　いやホント無理ですからやめて下さい副隊長。
俺のライフは０ですから！　０ですってホントに！！
無理です勘弁して下さいやめて許してこっちこないでいやぁぁぁぁ……っ！！

「剣が、剣がぁっ！！　逃げてぇぇっっっっ！！！」

「やかましい」

「あうちっ！？」

トラウマを呼び起こされて思わず叫んだら、ヴィータ副隊長にグラーフアイゼンで頭を殴られた。
ここの副隊長は全員暴力的すぎると思います。

「ば、馬鹿になったらどうすんですか！？」

「今以上に馬鹿にはなんねーよ」

「ひでぇ……」

「あ、あはは。……私が言うのも何だけど、皆、キツかったよね？」

「生命の危機を感じるほどに」

「いや、それはハヤトだけだから」

スバルにつっこまれた。ティアとエリオ、キャロも頷いてやがる。

……泣くぞこんちくしょう。

「それでも、ここまで5人ともよくついて来た」

「5人とも誰より強くなった……とは、ちょっと言えないけど。

だけど、どんな相手が来ても、どんな状況でも絶対に負けないように教えてきた」

俺達の目を見て、隊長と副隊長が笑う。

「守るべきものを守れる力。救うべきものを救える力。

絶望的な状況に立ち向かっていける力。ここまで頑張ってきた皆は、それがしっかり身に付いてる」

言われて、自分の中でその言葉が自信に変わっていく。

それはティア達も一緒だったみたいで、全員が自信に溢れた顔をしている。

「夢見て憧れて、必死に積み重ねてきた時間」

言葉を続けながら、隊長が拳を握って前に出す。

「どんなに辛くてもやめなかった努力の時間は、絶対に自分を裏切らない。
それだけ、忘れないで」

最後にそう締め括って、笑う。
それは、いつもの優しくて強い、エースオブエースの笑顔だった。

「キツイ状況を、ビシッとこなして見せてこそのストライカーだからな」

「「「「「……はいっ！」」」」」

不敵に笑うヴィータ副隊長に、俺たちもニヤリと笑い返して確りと返事をする。

「じゃあ、機動六課フォワード隊、出動！」

「行ってこい！！」

「「「「「了解！」」」」」

隊長達に今までで一番の敬礼を返して、俺たちは踵を返して走り

出す。
が、俺はちょっと足を止めて隊長を振り返った。

「高町隊長」

「？　どうしたの、ハヤト君」

「ヴィヴィオのこと、頼みます」

「え……」

お願いするのは、金髪で殺人タックル持ちの、可愛い妹分の事。
本当なら俺が行ってやりたいとこだが、俺には俺のやるべき事がある。
だから、高町隊長に頼む。
俺達の自慢の上司。管理局のエースオブエースに。

「ハヤトく……」

「あと、ハラオウン隊長に伝言もお願いします。
『ぼてくり回してやるんで、スカリエッティ捕まえたら俺のとこに連れてきて下さい』って」

「……ふふっ、了解。ヴィヴィオも伝言も、任せておいて」

「うっす。じゃあ俺は行きますんで」

「気をつけてね」
「怪我すんじゃねーぞ」
「りょーかいです」

隊長と副隊長に軽く手を振って、俺はもう一度前を向き、先に行ったティア達の後を追った。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

揺り籠が飛び立った大地、そこの地下深くに残ったスカリエッティのラボ。
そこにクアットロ、ディエチの２人と交代したウーノが帰ってくる。

「ああ、お帰りウーノ」
「はい」

己の創造主であるスカリエッティに一礼を返し、ウーノは手に持ったバインダーを眺めながら報告した。

「トーレ、セイン、セッテも戻りました。迎撃準備完了です。クアットロとディエチは揺り籠に、他の妹たちはそれぞれのミッションポイントと、地上本部へ。
ディレトは、所定の位置で待機させてあります」

「結構。管理局……いや、機動六課の動きはどうだい？」

その質問に、ウーノは薄く笑いながら答える。

「先程、エースオブエースと夜天の主、その守護騎士の一人が揺り籠へ向かったのが確認されました。
雷神はこちらに向かっているようです。……ここまでは、ドクターの読み通りですね」

「“彼”は？」

「はっきりとは確認できていませんが、揺り籠にも、こちらにも向かっていないようですし、恐らくはチンク達の方に行くかと」

「……なるほど」

スカリエッティは報告を聞くと、一度頷き、手元のパネルを叩い

てモニタに映像を映した。
モニタに映ったのは、飛行可能なガジェット?型に乗ったルーテシアとガリュー。そして、2人を先導する形で飛行しているオットーである。

「ルーテシアにもお願いをした。上手く動いて貰うとしよう」

「騎士ゼストも動かれているようですが……予想外の動きをされては」

「問題ないさ。所詮は消えかけの蝋燭のような存在だ、放っておけば勝手に死ぬだろう。
それに、もし邪魔をするようなことがあったとしても、ディレトの相手を出来るとは到底思えないしね」

酷薄に笑いながら、肩を竦めて見せる。
言葉こそゼストの話をしているが、スカリエッティの興味は既に彼には無い。
今彼の興味を引いているのは、“揺り籠”と“ディレト”の2つ。

「くくっ……。私と揺り籠に主力の全てを割いた今、地上本部への道を守るのは、未熟な魔導師が5人。
チンク、ノーヴェ、ウェンディ、ディード、オットー、そして……ディレト。
私の最高傑作を相手に、どれだけ押さえる事が出来るやら」

額を押さえ、忍び笑いを漏らしながら呟く。

「揺り籠とドクターを餌に敵の主力を引き付け、手薄になった地上本部に向けて最高のカードを切る。
……見事な作戦ですね」

「誰でも考え付くことさ。
最も、気付いたところで彼女達に今と違う手段は取れなかっただろうがね」

“聖王の揺り籠”も、スカリエッティ本人も、管理局からすれば危険度の高すぎる代物だ。
だから、例えスカリエッティの狙いが読めたとしても、確かに今と違う配置には出来なかっただろう。
それほど彼の考えた作戦は完璧で、隙が無かった。

「そして自分達の判断ミスのツケを、彼女達は支払うことになるだろう」

言葉が切れると同時に、モニタの映像が変わる。
そこに映ったのは――

「――彼の“命”という代価でね」

ハヤト＝ロックウェルであった。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

クラエッタ陸士の操縦するヘリに乗り込み、バリアジャケットを展開した。

そして、深呼吸をしてから椅子に座る。

「あの、お兄ちゃん」

「んー？」

すると隣に座っていたキャロが、俺の背中の方を覗き込みながら声をかけてくる。

「この文字って、どういう意味なんですか？」

「文字？　……ああ、これな」

言ってから立ち上がり、キャロによく見えるように背中を向けた。
背中に踊るのは、『天上天下唯我独尊』の文字。
訓練校時代からずっと俺と共にある、思い出深い文字だ。

「これは……まぁ、正確な意味は知らんが、『自分が最高』ってことらしい」

「自分が最高、ですか？」

「おうよ。昔さ、姉ちゃんと自分の才能の差が悔しくて、大喧嘩した時があったんだ。
そんでその時母さんに、顔の形が変わるまでぶん殴られてから言われたんだよ。

『他の誰が信じなくても、せめて自分だけは自分が最高だと信じてやれ。
自分のことも信じられぬ矮小な人間が、何かを成し遂げられる筈がないだろう』

ってな。んで、その言葉を忘れないようにって事で、母さんが俺のバリアジャケットに無理矢理書いたのが最初だったな」

あ、何か思い出したらちょっとブルーになってきた。
今は別に平気だけど、最初は恥ずかしくて仕方なかったんだよなコレ。訓練校時代は結構馬鹿にされたし。
でも消すと母さんが怖すぎるから、消せないまま慣れちまって今

に至る訳だ。

「そんな意味あったんだ……初めて聞いたよ」

「あれ？　言った事なかったっけ？」

「初耳よ」

不思議そうな顔をするティアとスバル。

そういや話したこと無かった気がするな。個人的に恥ずかしい出来事だったし。

「ま、そんな感じの意味だ。わかったか、キャロ？」

「自分を信じる……ってことですか？」

「そーゆーこった。よかったらキャロのバリアジャケットにも書いてやるか？」

「え！？　えぇと……」

どうやら書かれるのは嫌らしい。お兄ちゃんは切なかとです。

出動前にちょっとブルーになる俺であった。

「兄さん、僕のバリアジャケットに書いてもらっても……いいかな

？」

「御断り申す！」

「何で！？」

「……なんてな、冗談だ。どれ、貸してみ？」

そう言ってエリオのバリアジャケットの上着を受け取る。

どれ、俺様の超絶美麗な文字を書いてやろうとするか……って。

「書くものないじゃん！」

「そ、そういえば！」

「……何してんのよ。ハヤトはともかくエリオまで」

兄弟で楽しくコントをしていたら、ティアにものごっつ冷たいツッコミを貰った。

スバルとキャロも、ちょっと呆れた顔でこっちを見ている。

くっ、へこたれるもんか！　俺強い子！

「こうなったら俺の血をインク代わりに！」

「に、兄さん！　血文字は流石に嫌だよ！？」

「だがそうでもしなきゃ書けないだろ！」

《　バリアジャケットなのですから、私からストラーダにデータを送信するのでは駄目なのですか？　》

「「あ、」」

エリオの上着を持ってギャーギャー騒いでいたら、ブレイブハートに最もな事を言われた。

「「ハヤト……」」

「エリオ君……」

「な、何だよ！　そんな目で見るな！　見るなよぅ！」

「キャロやめて！　そんな目で見ないで、お願いだから！」

女性陣からの冷たすぎる視線に悶える俺とエリオであった。

更にこの後、操縦士のクラエッタ陸士も合流して冷たい視線が一組増えた。死にたい。

あ、文字はちゃんとデータを送信して、エリオの背中にも『天上天下唯我独尊』の文字が躍ることになった。

エリオは経緯のせいかちょっと複雑そうな顔をしていたが、凄く喜んでくれた。

うむ、俺もデータを送った甲斐があるってもんだな。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：：―

「～♪」

ディレトは屋上の手摺りに腰掛け、のんびりと鼻歌を歌っていた。
足をぶらぶらと揺らし、退屈そうな顔をして、自分の顔の前に浮かべたモニタを楽しそうに見つめている。

「せいぜいデカブツ相手に必死になっていればいいですわ。
その間に、貴方達の大事な大事な本拠地は落とさせていただきますもの」

言葉と共にモニタに触れ、地上本部を映し出す。
モニタに映るのは、局員が殆ど居ない地上本部。

「まぁ、その前に……私（わたくし）には楽しみがありますけれど」

地上本部からハヤトへと映像を換え、その映像を愛おしそうに撫でる。
その表情はうっとりとしていて、まるで恋人の写真を眺めているようでさえあった。

「ああ待ち遠しいですわ。待ち遠しいですわ。待ち遠しいですわ」

待ち合わせをした恋人を待っている様に、忙(せわ)しなく体を動かして、ディレトは空を眺める。
そして、目を閉じて夢想する。
夢想するのは、創造主から『殺せ』と命令された、あの少年。

ボロボロになって、右手を潰されて。
それでもなお、毅然と立って自分に抗おうとした、あの少年。

強くなどなかったが、それでも誰より自分を興奮させた。
姉妹よりも誰よりも、自分の心を掴んで話さない——あの少年。(ハヤト＝ロックウェル)

彼をどうやって甚振るか。
彼をどうやって泣き叫ばせるか。
彼をどうやって苦しませるか。

それだけを。
ただそれだけを、少女は夢想する。

「まずは骨を折って、爪を剥いで、歯を残らずへし折って、眼球をくり抜いて、それから手足を全て切り落として、鼻を削いで、耳も

削いで、舌を焼き潰して……嗚呼、想像するだけで達してしまいそうですわ」

頬を上気させ、涎さえ垂らしながらディレトは体を捩らせる。
その瞳はどこまでも純粋で、どこまでも残酷で、どこまでも無邪気で。
だからこそ――

「急いて急いていらっしゃいな。私（わたくし）だけの玩具さん」

――どこまでも、狂気に満ちていた。

ｓｉｄｅ：：―　了

第５１話　『出撃』（後書き）

オリジナル要素が少ないと楽でいいね！
どうも、ラモンです。

ハヤト
「これ死亡フラグビンビンじゃね？　どうも、主人公です」

いやー、ストーリーを０から考えなくていいって楽だね。
筆が進む進む。

ハヤト
「今回はちょっとギャグっぽかったな」

まぁ、決戦前の最後のギャグ回って感じかね。
次回からはバトルオンリーっぽくなりそうだし。

ハヤト
「てかさぁ、俺の相手ってディレトで決定なわけ？」

決定だよ。
主人公ＶＳラスボス。基本じゃん？

ハヤト
「勝てる気しＮＥＥＥＥＥ！！！」

俺もそう思う。
けど、何とかするよ。

ハヤト
「頑張ってくれ。んで、そういえば次回作アンケートの結果が出たんだって？」

おうよ。
ただ、結果発表は最終回まで取っておこうと思う。
今発表しちゃうと、人によってはネタバレになるかもしれないし。

ハヤト
「なるのか？」

深読みしちゃう人は、ってことだよ。
どうせ最終回間近だし、最終回まで保留しとくの。

ハヤト
「さいで。あ、それと気になったのがさ、久しぶりに出たな俺の『天上天下唯我独尊』の文字」

うむ。読者の皆さんもすっかり忘れていただろうな。
感想で微妙に突っ込まれたりしたがw

ハヤト
「ああいう裏話あったのか」

あったんだよ。
ここで使おうと思って、ずっと取っておいたんだ。

ハヤト
「……実はもっと早く出す予定だったのを忘れてただけじゃ？」

ソンナコトナイヨー。
最初カラココノ予定ダッタヨー。

ハヤト
「忘れてやがったな……」

さて！　次回からはバトル一直線です！
そこそこに頑張るので、ティアナルート最終回まで見捨てずにお付き合い下さい！
それではまた、次の話で！

※感想、批評、アドバイスお待ちしております。
厳しい意見などもドンと来いですので、よろしくお願いします。

第５２話　『決戦　１』

ｓｉｄｅ：―

空を悠然と飛ぶ揺り籠。
その周辺は、まさに激戦区と呼ぶに相応しい様相を呈していた。
絶え間無く襲い来る飛行型ガジェット。
間断無く揺り籠の砲門から撃ち出される、紫色の砲撃。

航空魔導師隊を率いるはやては、その攻撃の激しさに内心舌打ちしながらも、それをおくびにも出さずに指示を飛ばし、飛んでいるガジェットを撃ち落す。
それでも、敵の数は全く減らずに、むしろ増えているようにさえ見える。
敵も味方も入り乱れている為、はやてお得意の範囲殲滅魔法も使えない。

（やっぱり、外からやなくて中から何とかせなあかんか……）

アースラよりも巨大な揺り籠を見上げ、はやては苦々しげな顔で考える。
巨大すぎる揺り籠には、いかにはやての魔法を使ったとしても、決定的な打撃とはならないだろう。
止める為には、内部に突入して動力を何とかしなければいけない。

『２４番射出口より、小型機多数！』

『南側の射出口からも……こちらは市街地降下型です！』

「！」

思考を遮るように、散らばっている航空魔導師達からの報告がはやてに届く。

はやては揺り籠攻略の考えを一旦頭の隅に置き、思考を前線指揮官のそれへと切り替える。

「皆、落ち着いて！　拡散されたら手が回れへん。叩ける小型機は空で叩く、潰せる砲門は今のうちに潰す！　ミッド地上の航空魔導師隊、勇気と力の見せ所やで！」

『はい！！』

はやての叱咤に、彼女の指揮下にある航空魔導師隊は力強く答え、獲物を構えた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第５２話　『決戦　１』

「せぇいっ！！」

裂帛の声と共に、グラーフアイゼンによって1機のガジェットが空中で叩き潰され、スクラップに成り果てる。

ヴィータは返す刀――まぁ刀ではなくハンマーだが――で、背後から迫ってきていたもう1機のガジェットに、アイゼンの鉄槌を見舞い、こちらも叩き潰して鉄屑へと変貌させた。

「中に入る突入口を探せ！　突入部隊、位置報告！！」

ガジェットが密集している場所を目指して空を駆けながら、突入部隊に指示を出すヴィータ。

そこから1ｋｍ程後方では、なのはが密集したガジェットを一発の砲撃で消し飛ばしている。

「第7密集点撃破！　次ぃっ！！」

機械音、そしてスチームと共に熱を吐き出すレイジングハートを振るい、空駆ける揺り籠を見据えるなのは。

その身に纏うバリアジャケットは、常のものとは少しだけデザインが変わっていた。より動きやすいように洗練されたそのバリアジャケットは、レイジングハートのリミットを解除したエクシードモード専用の物である。

最初から全力全開。手加減をするつもりも、出し惜しみをするつもりも、なのはには無かった。

「邪魔！」

進路を塞ぐように密集を始めた小型機群を、桃色の魔力弾を叩きつけて撃ち落す。

歯牙にもかけずに５０機以上の敵を落とすその姿は、まさに一騎当千。エースオブエースの名に相応しいものだった。

獅子奮迅の働きを見せるなのはと、最前線を飛び回るヴィータ。

圧倒的物量差と、巨大な揺り籠の威容に気圧されていた局員達は、彼女らの姿を見て奮い立つ。

だが、そんな彼らを嘲笑うかのように紫色の砲撃が空を裂き、何人もの魔導師が撃墜されていく。

その映像を見て浮き足立つ彼等の耳に、はやての鋭い声が響いた。

「防御陣形！　隊列、乱したらあかんよ！！」

「は、はいっ！！」

自分達よりも若い少女の声に、局員達は我を取り戻して、自分達のデバイスを構える。

乱れた隊列を持ち直し始めた局員を見て、はやては安堵の溜息を吐く。

（……でも、このままじゃジリ貧や。はよ突入口見つけな！）

焦る思考を押さえつけ、はやては状況確認に努める。

その視線の先で揺り籠は、抵抗など無意味だとでも言いたげに悠然と飛翔を続けていた。

“揺り籠”阻止限界点到達まで――あと２時間５８分。

◇◇◇◇◇

「烈風、一陣！！」

掛け声と共に、両手に持ったトンファー型のデバイスが、薬莢を１つずつ吐き出す。

リロードが終わった瞬間、薄紫の髪をおかっぱに揃えた女性――シャッハ＝ヌエラが獲物を回転させながら跳ぶ。

「切り裂け！　ヴィンデルシャフト！！」

飛び込むのは、縦に長い楕円型のガジェット?型の群集点。

その中心に飛び込みながらデバイスを振るい、文字通りガジェットを『切り裂いて』いく。
破壊したガジェットの爆風を背に、密集したガジェットの間をすり抜けるように疾走するシャッハ。
彼女が通った場所に存在したガジェットは全て切り裂かれ、数瞬を置いて爆発していった。

「はあああああっっ！！」

密集したガジェットとシャッハが踊る少し先の通路。
最も巨大な？型が無数のアームを伸ばし、絶え間なく弾幕を張るその場所を、金色の光りが目に留まらぬ速度で駆ける。
常人ならば避けるどころか防ぐことも難しい攻撃の嵐など意に介さず、その僅かな隙間を縫って金色――フェイトは手に持ったバルディッシュのカートリッジをリロードする。

「せえええいっっ！！」

剣のような形態のザンバーフォーム。
その刃をそれなりに広い通路の天井を抉るほどに伸ばして、天井ごと？型の群れを切り裂く。
刃の届かなかい場所に居たガジェットも、フェイトの刃が抉った天井が崩れ、その瓦礫の下敷きとなって破壊される。

全てのガジェットを殲滅し、フェイトとシャッハの2人は顔を見合わせて微笑んだ。

そんな彼女達の下へ、淡い緑の光を纏い、体が透けている2匹の黒い犬が、音も無く走り寄ってきた。

この犬は、ここを突き止めた査察官ヴェロッサ＝アコースのレアスキル、無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）で生み出されたものであり、今はスカリエッティの居場所まで2人を案内する役目を担っている。

『別働隊、通路確認。危険物の順次封印を行います』

フェイトと共に突入した部隊から、通信での報告が届く。

「了解。各突入ルートは、アコース査察官の指示通りに」

『はい！』

報告に指示を返してから、フェイトは隣に立つシャッハに笑いかけた。

「ありがとうございます、シスター・シャッハ。御二人の調査のお陰で、迷わず進めます」

「探査はロッサの専門です。この子達が、頑張ってくれました」

答えながら、一度猟犬の方へ視線を下げるシャッハ。
そして、フェイトに視線を戻して力強く告げる。

「このまま奥へ。スカリエッティの居場所まで！」

「はい！」

そんな彼女に頷きを返し、フェイトは走り出す。
目指すのは、彼女が長年追い続けた男――スカリエッティの居る、
このアジトの最深部。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

「どわあああああっっ！？」

左右に思いっきり揺れる機体に悲鳴を上げながら、俺は何とか転
ばないように足を踏ん張る。
俺たちが乗っているヘリの後ろには、飛行型のガジェットが２機、
ぴったりとくっついてきていた。
現在クラエッタ陸士が、何とか振り切ろうと粉骨砕身してくれて

いる。
俺らが迎撃すりゃいいんだが、クラエッタ陸士が「任せて！」って言ってやらせてくれない。
まぁ、これから戦闘機人と戦うんだ。魔力は温存しとくに限るが……。
痛っ！　何か頭にぶつかった……ってフリードかよ！
お前飛べるクセに何で機体の揺れに影響されてんだコラ！！
「きゅくぅ……」
「“つい気分で”だとぅ！？　舐めとんのか！」
「きゅ～」
「な、何で言ってる事分かるんですかお兄ちゃ……きゃあっ！？」
「……っと」
再びヘリが思い切り揺れ、その拍子にキャロがバランスを崩す。
それを右手で抱きとめ、左手で近くの手摺りに捕まる。
「つっ……」
「あ、大丈夫ですか、お兄ちゃん！？」

抱きとめた右手が少し痛んで、つい声を漏らしてしまった。
しまったと思うよりも先に、キャロが心配そうな顔で俺を見上げてくる。
失敗失敗。

「へーきへーき。クラエッタ陸士、もーちょいお上品な運転頼みますよ！」

『帰りはそうしてあげる！　でも今はもうちょっと揺れるから、しっかり捕まってて！』

「あいあいさー」

クラエッタ陸士の軽口に笑って、俺はキャロをしっかりと右手で抱きしめて固定し、捕まった左手でバランスを取る。
まぁキャロは一番小さいからなぁ。ちゃんとフォローしてやらにゃ。
エリオ？　エリオはいいよ。だって男だもん。

「きゃっ！？」

「あわわっ！？」

「うわっ！？」

「ちょっ！？　お前ら3人してこっちくんな……ふんぬっ！！！」

再びヘリが揺れ、示し合わせたようにティア、スバル、エリオがこっちによろけてくる。
キャロが挟まれそうだったので、慌てて背を向け、足腰に力を入れて何とか受け止めてやる。
ぐおっ！？　こ、腰が……っ。

「ご、ごめん！　大丈夫ハヤト！？」

「腰から凄い音した。これはもう駄目かもわからんね」

「そ、そんな……兄さん！！」

「騒ぐなエリオ……ふっ、立派になったお前の姿を見れて、俺はもう満足だよ……」

「ニイサーンっ！！」

「この大変な時にコントしない」

「「あてっ」」

ついボケたらエリオがノッってきた。こいつ、最近俺の弟分としての自覚が出てきたようだ。
しかし最終的にティアに2人揃って殴られた。
とか何とかしているうちに、クラエッタ陸士が操縦する俺らのヘリは、無事にガジェット2機を振り切ることが出来た。

『よし！　振り切った！』

「うわぁ……アルト、すごーい！」

小さい窓からそれを確認したスバルが、感嘆の声を上げる。
俺も窓から振り切ったのを確認し、キャロを固定していた右手を離す。

「大丈夫だったか、キャロ？」

「は、はいっ！」

安否を尋ねたら、真っ赤になって猛烈な勢いで頷くキャロ。
初々しいのぅ。やば、不覚にもちょっとドキッとしちゃったじゃないの。
ま、妹分を愛でるのは後にしよう。
何せもうすぐ――

『もうすぐ降下ポイントに着くよ。皆、準備はいい？』

「「「「おうっ！」」」」

「台詞とられた……」

台詞が無くなったことに打ちひしがれる間も無く、俺たちが乗っている場所のハッチが開く。
いつまでもコントしてる場合でもないか。
気合入れていくとしよう。

俺は一度自分の頬を叩いて、気持ちを任務時のそれに切り替える。
それからブレイブハートにモニタを開いて貰い、作戦の最後の詰めを行う事にした。

「確認するぞ。俺らはこれからミッド中央部、市街地方面の敵戦力迎撃ラインに参加する」

「そこに展開した地上部隊と協力して、向こうの厄介な戦力……召喚士や、戦闘機人を最初に叩いて動きを止めるのが、あたし達の仕事」

「他の隊の魔導師達は、ＡＭＦや、戦闘機人との戦闘経験が殆どない。
だから、あたし達が最初にぶつかって、向こうの戦力をとにかく削る！」

モニタを弄りながら、俺とティア、スバルの3人でエリオとキャロに軽く説明していく。
正直、スバルが参加してくるとは思わなかったな。こういうのは、俺とティアに任せっきりだと思ってたが……ま、良い傾向だわな。

「そんで、削ったら後は後ろで控えてる部隊の人にお任せ……とま

あ、こんな感じだな。
ただ、ガジェットも戦闘機人も、この防衛ラインを突破されたら、街中を通って地上本部までは一直線だ」

「市民の安全と平和を守る管理局員としては、絶対に止めないとだね」

「そうだな。まぁ、あんまり気張って失敗したら笑いモンだ。いつも通り、訓練したことを訓練したとおりにやりゃ、なんとでもならぁな」

そう締め括ってモニタを消す。
すると、エリオがちょっと嬉しそうに目を輝かせながら、小さく呟いた。

「でも……」

「ん？」

「何だかちょっとだけ、エースな気分だね」

「おいおい、何言ってんだエリオ」

エリオの言葉を、少しだけ訂正しておく。

「俺らは“あの”エースオブエースに選ばれて、今まで教導しても

らってきた。
一般局員じゃそうそう手に入らない、専用のデバイスも造ってもらえた。
何より……俺達はエースオブエースからここを『任された』んだ」

俺を見上げているエリオの頭に手を置いて、グシャグシャと髪をかき回す。

「少なくとも今この瞬間だけは、俺もお前も、ティアもスバルもキャロも、皆『エース』だよ。
もうちょっと自惚れていこうぜ？」

ニヤッと笑って、撫でていた左手でエリオの背中を軽く叩く。
……ん？　何だよ女子連中、鳩がスターライトブレイカー喰らったみたいな顔して。

「……ハ、ハヤトがマトモなこと言ってる！？」

「ど、どうしましょうティアさん！？」

「大丈夫よ。不吉な前兆とかじゃないから……きっと」

「お前ら酷いですね！？」

いいこと言ったのに尊敬されない俺可哀想。マジ可哀想。

「いじけるぞ畜生。
あぁそうそう。ディレトが出てきた時は――」

「無理に相手をせず、足止めに徹する。
最悪、地上部隊のところまで下がって、大人数で相手をする。絶対に1対1にはならないこと」

「そーゆーこった」

正直、ディレトが相手じゃ勝ち目は薄い。
勝てない訳じゃないとは思うが、それこそ奇跡みたいな確率だ。
そんな無茶、頼まれてもしたくねぇわな。

「他に聞きたいことは……ないな？　うっし。そんじゃ作戦確認はここまでだ」

話を切り上げ、降下するためにハッチに並ぶ。
降りる前に、隣に並ぶ皆の顔を見る。ん、全員緊張が取れて良い顔してるな。
さっきああ言っておいてなんだが、やっぱり緊張するもんだなぁ。
あーやべ、何か意識したら余計に緊張してきた。

「ほら、行くわよ！」

「おぅふっ！」

緊張で、背中に嫌な汗をかき始めた瞬間、ティアに背中を思いっきり叩かれる。

痛ぇ……ちょっと涙でたぞ。

「もう大丈夫？」

「……ちょっと手加減しろよな」

「はいはい、ごめんね」

涙目で隣を見れば、そこにはにやっと笑っているティア。どうやらお見通しだったらしい。

ああもう、ホントに敵わねぇなオイ。惚れ直したじゃねぇか。

「っしゃ！　それじゃまぁ、いっちょ行くとしますか！！」

「「「「おう！！」」」」

自分と皆に気合を入れ、俺はハッチから身を躍らせる。
さて、頑張るとしますかね。いつもの俺らしく、出来る事を出来る範囲でな。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

『チンク、ノーヴェ、ディード、ウェンディ。例の５人が、今そっちに向かってる』

廃棄都市区画の道路を駆けるノーヴェの耳に、オットーからの報告が入る。

「確かな情報か？」

『ああ』

確認の言葉を返したのは、チンク。
ウェンディのボードに彼女と一緒に乗りながら、通信用モニタを開く。

『ただ、前の時とは状況が違う。今度は正面から戦う気で来てる』

「な～に。望むところッスよ」

オットーの言葉に、チンクの前でボードを操っているウェンディが快活に答えた。

チンクもそれを否定することなく、ただ神妙な面持ちで頷いて見せる。

「我らの目的は、揺り籠浮上までに中央本部を制圧することと、敵の士気を削ぐ事。後者はディレトに任せるとして、それ以外のことはなるべく迅速にせねばなるまい。不確定要素は早めに叩いて殲滅しておくぞ」

「当然！」

「任せるッス！」

「……」

ノーヴェとウェンディは拳を握って戦意を露にし、ディードも言葉こそ発しないものの、ツインブレイズを握り締めて表情を引き締めている。

『ディレトもさっき動き始めた。もうすぐそっちに合流する』

「了解した。あとは手筈どおりに」

『わかってる』

オットーとの通信を切り、チンクは妹達に指示を飛ばす。

「奴らと戦闘になったら、敵の龍召喚士はルーテシアお嬢様に任せ、その他の連中はハヤト＝ロックウェルと切り離す。そしてハヤト＝ロックウェルはディレトに任せ、後はディレトに一任する。いいな？」

「大丈夫ッスよチンク姉」

「あのムカつく野郎以外は、あたしらでぶちのめせばいいんだろ？」

「……」

「……まぁ、理解しているならいい」

理解しているのか怪しい妹達に、溜息が出そうになるのを堪えるチンクであった。

だが、直ぐに気持ちを持ち直して真剣な眼差しで前方を睨みつける。

衝突の時まで、あと僅か――。

side：― 了

第５２話　『決戦　１』（後書き）

一日おきに更新できるとかなんか嬉しいですね。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「決戦はじまったお！　どうも、主人公です」

次回からいよいよＶＳ戦闘機人、そしてなのは、フェイト達の戦いも始まります。
ハヤトは生き残ることができるのか！

……戦わなければ、生き残れない。

ハヤト
「いや、何を某ミラーワールドで戦う奴らみたいなこと言ってんの？」

ちょっと言ってみたかった。
次回からはどシリアスな戦闘シーンばかりになりそうだしさ。
それと最近思ったんだが。

ハヤト
「何よ？」

こっちがどシリアスで、もう一個の『リリカル☆マジカル☆とあ新らじお』は最初から最後までギャグじゃん？

ハヤト

「そうだな」

ぶっちゃけテンションの差がキツイ。

ハヤト
「自分で始めておいて何言ってんの！？」

ふ。どうせ次回からここの後書きも、無くなるかシリアスな感じになっちゃうから余計にテンション差が凄いことに……こっち書くのやめようかな。

ハヤト
「うぉい！？」

ま、それは冗談だけどな。
それではまた、次の話で！

第53話　『決戦　2』

交戦予想ポイントまであと少し。
廃棄都市の高架をひたすらに走りながら、俺はモニタを出して確認する。
……つっても、戦闘機人らしき熱源はさっきいきなりモニタに映らなくなって、あんまり意味ないんだけどな。

「……！　フリード！！」

「あ、おいキャロ！？」

モニタを確認していると、俺の後ろのあたりをエリオと一緒にフリードに乗って着いてきていたキャロが、突然速度を上げて前に出る。
何か見つけたのかと視線を動かせば、目の前の廃ビルの屋上に、特徴的な紫のロングヘアーが見えた。
召喚士――ルールー……じゃなくて確かルーテシア＝アルピーノ。
そしてその隣に立つ、某ライダーの偽者……じゃなくて、ガリュー。

なるほど、向こうから出てきてくれたって訳ね。
なら、ご期待に答えてやろうじゃない。

「予定変更、だな」

走っていた足を止め、同じように足を止めたティアとスバルを振り返る。

「そうね。あの子を先に捕まえる、いいわねスバル？」

「うん！」

スバルは頷いて、キャロ達の後を追いかけるためにウィングロードを展開しようと拳を振り上げた。

「ウィング――」

瞬間。

廃ビルの屋上……その更に先から緑色の閃光が俺たち目掛けて迫ってきた。

side：―

「「「っ！」」」

迫り来る緑の閃光を、ハヤトは左に、スバルとティアナの2人は右に跳ぶことで回避した。

その後、スバルとティアナは近くの廃ビルの屋上に着地。急いで態勢を立て直す為に立ち上がる。

だが――

「おらぁぁぁっっ！！」

「ふっ！」

「「！？」」

間髪入れず、着地した2人にノーヴェの蹴りとディードの魔力刃が襲い掛かった。

スバルはノーヴェの蹴りをガードし、ディードの魔力刃は、クロスミラージュのダガーモードを起動したティアナが受ける。

しかし所詮は態勢が整っていない状態での防御。

「きゃあっ！」

「うわぁっ！！」

いとも容易く防御ごと吹っ飛ばされ、そこから１００m程先にある別の廃ビルへと突っ込む。
その２人を視線で追うノーヴェとディードの後ろから、ライディングボードを構えたウェンディと、無数の小さな刃を構えたチンクが飛び出した。

「エリアルキャノン！」

「ランブルデトネイター！」

赤い砲撃と、無数の刃とが混ざった攻撃が、ティアナとスバルが吹き飛ばされた先のビルに吸い込まれ、土煙を巻き上げる巨大な爆発を起こす。その爆発を確認し、チンク、ノーヴェ、ウェンディ、ディードの４人は一度互いの顔を見合わせ、頷きあう。
そして一斉に地面を蹴り、ティアナとスバルが吹き飛ばされたビルへと身を躍らせるのだった。

◇◇◇◇◇

「お兄ちゃん達が！」

「合流を……」

爆発をフリードの上から見たエリオとキャロが、慌てて急旋回して戻ろうとした。
だが、それを妨害するかのように、2人が乗るフリードに黒い影――ガリューが迫る。

「っ！　ホイールプロテクション！！」

その影に反応したキャロが、右手を掲げて防御魔法を発動する。
右手に装着されたケリュケイオンから桃色の翼が生え、ガリューを巻き込むように桃色の竜巻が巻き起こった。
その竜巻に妨害され、動きが鈍くなったガリューの横を猛スピードでフリードが駆け抜ける。
だが、駆け抜けた先にはガジェット?型の上に乗ったルーテシアが2人に向けて右手を構えていた。

「合流は……させない」

小さな呟きと共に、構えた右手から紫色の魔力が迸り、フリードへと迫っていく。

「エリオ君、捕まって！」

「うん！」

キャロはフリードの手綱を取ることで、その攻撃を大きく旋回して避ける。
ルーテシアは避けられた事は気に留めず、ガジェット?型を操り二人に背を向けて動き出した。

「あっ……」

「キャロ、見失うとマズイ。とにかく追いかけよう！」

「でも、お兄ちゃん達が……」

「兄さん達なら大丈夫だよ。だから！」

「う、うん！」

合流したほうがいいのかと迷うキャロに、エリオが鋭い声を飛ばす。
それに頷いて、キャロはフリードに空を走らせる。
その心に、一抹の不安を残しながら。

◇◇◇◇◇

「平気か！　ティア、スバル！」

2人が吹き飛ばされた廃ビルを見ながら、ハヤトが焦った声で通信を繋ぐ。

『……ったた。うん、あたしは平気！』

『げほっ。あたしも平気よ』

「そうか。そりゃ何よりだ」

特にダメージを受けてないような2人の返事に、ハヤトは胸を撫で下ろす。

「エリオとキャロは召喚士の方を追いかけてるっぽい。とりあえず一旦俺らだけでも合流するぞ、この状況でバラバラはマズイ」

『うん！』

『了解』

ティアナとスバルはまだしも、ハヤトは1人きりだ。

敵が何人居るか分からない状況で、個人戦に近い状態はあまり好

ましくない。

「じゃあ俺が今からそっち行く――」

そう言いながら足を踏み出そうとした瞬間、ティアナとスバルの居る廃ビルが青い結界で覆われた。

「結界!?」

「……残念ですけど、合流はさせられませんわね」

「――っ!!!」

驚愕するハヤトの耳元で、そんな小さな呟きが響く。

いきなり聞こえた声にぎょっとして、ハヤトは振り返りながらその場を飛び退く。

「あら酷い。女の子に話しかけられたのに、そんな風に慌てて飛び退くなんて」

「……ぅげ」

そして、振り返った先に見えた姿に、嫌そうに顔を顰める。

ハヤトの前に立つのは、紅く長い髪を風に靡かせ、金色の瞳で彼

を見据える少女――ディレト。
楽しそうにクスクスと忍び笑いを漏らしながら、ブレイブハートを構えるハヤトと相対していた。

「人の顔を見て、そんな風に嫌な顔をしないで頂きたいですわね。失礼ですわよ？」

「出来れば、お前には会いたくなかったんだよ。こっちとしては」

軽口をディレトに返しながら、ハヤトは脳内で冷静に状況を整理していく。

（ティアとスバルは結界の中。エリオとキャロとはすぐに合流は無理。
戦力的にはあの時と一緒……いや、あの時よりはマシか？　まぁどっちにしろピンチではあるがよ。
後ろの部隊まで逃げようにも、背中なんぞ見せたら……想像するまでもねぇな）

舌打ちして思考を打ち切り、ハヤトは一度瞑目する。
現状は限りなく最悪に近い。
自分ひとりではディレトに勝つ可能性は限りなく低い。可能性を上げるとするなら、他の４人と合流しなくてはいけないが、今すぐにすることは不可能だ。
考えつく最善手は、自分ひとりでディレトに勝つ事だが……。

（ま、考えるまでもねぇか）

溜息を吐きたい気分で目を開き、ハヤトはディレトに尋ねた。

「お前はさ、俺倒した後はどうする予定なんだ？　地上本部に向かうのか？」

「そうですわよ。まぁ、その前に貴方のお仲間で遊んでから、ということになりますけれど」

「あっそ」

予想通りの返答に素っ気無く返し、ハヤトは今度こそ大きく溜息を吐く。

そして、何かを決意した顔で、ティアナ達へと通信を繋いで語りかけた。

『ティア、スバル、エリオ、キャロ。ちょっと問題が起きた』

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

side：ティアナ＝ランスター

『ティア、スバル、エリオ、キャロ。ちょっと問題が起きた』

『問題？』

合流しようとした矢先に結界内に閉じ込められ、それと同時に途切れたハヤトとの通信。

またいきなり聞こえてきたその声は、さっきよりも少し低く、緊張しているみたいだった。

『……何があったのよ？』

敵が近くにいるかも知れないから、声に出さず、念話だけで尋ねる。

『こっちにディレトが出た』

「はあ！？」

いきなりすぎるその報告に、あたしは声を出さないようにって事

も忘れて、思わず叫んでいた。
ディレトって……あのディレトよね？　この前ハヤトがボロボロにやられた……。

「ちょっと、大丈夫なの！？」

『今はな。楽しく談笑中だ』

「談笑中って……」

何をしてんのよ、ってかそれは置いといて！
あんな相手、ハヤト1人じゃどうしようもない。急いでここから出なきゃ！！

『兄さん、今すぐ戻るから！』

『少しだけ待っててください！！』

焦ってるのはライトニングの2人も同じみたいで、通信越しに焦った声が聞こえてくる。
あたしも隣のスバルとお互いに頷いて、何とか結界を突破しようと動き出す。

『まぁ待て』

そんなあたし達を、ハヤトが声で制してくる。
何をそんなに落ち着いてるのよ！

『多分、敵の狙いは戦力を分断してからの個別撃破だろ。
ならきっと、ティアとスバルの方にも敵が居るって考えていいだろ』

「！」

そういわれて、今更その可能性に気付いた。
……やば、ちょっと頭に血が上ってたみたいね。

『エリオとキャロも、多分こっちに戻ろうとしたら、ルーテシアが攻撃してくるだろうしな』

『でも、それじゃあ兄さんが！』

「そうだよ！　ハヤト１人じゃ……」

悲鳴にも似たエリオとスバルの声。あたしの気持ちも一緒だ。
ハヤト１人じゃ、なのはさん達並に強いあの戦闘機人は荷が重過ぎる。
けど、あたし達の方に敵がいるとしたら、それを無視することは出来ない。下手に背中を見せたら、その瞬間に落とされてしまうだろうから。

『……２０分だ』

どうしようと考えるあたしの耳に、ハヤトの声が届く。

「どういうことよ？」

『２０分の間、俺がディレトを抑える。
だから、お前らはその間にそれぞれの相手を何とかして、こっちを助けに来い』

「そんなの……」

『それが、今選べる最善手だ』

こっちの言葉を遮って、きっぱりとハヤトが告げる。
頭では、ハヤトの言葉が正しいっていうのは分かってる。この状況で急いで合流しようと各自の対応をおざなりにするより、それぞれの戦いに集中した方が良いに決まってる。
でも――。

「ばーっかじゃねぇの？」

「ディレト相手に、２０分も時間稼ぎが出来るわけねーッスよ」

「「！！」」

躊躇するあたしの耳に、聞き慣れない２つの声。
振り返ったあたしとスバルの視線の先には、３人の戦闘機人が居た。
赤いポニーテールの子と、スバルと同じナックルとローラーを着けた子、そしてエリオと同じぐらいの眼帯を着けた子。
やっぱり、こっちにも来てたって訳ね。忌々しい。

「それに、お前達にもここで消えて貰う。
その後で、そちらのタイプゼロ・セカンドは回収させて貰うぞ」

眼帯をつけた小さい子――確か、チンクって名前だった気がする――が、ナイフを構えながら口を開いた。
向こうに行かせる気は欠片も無しって訳、か。
ハヤトが危ないって言うのに！！

『どーしたよ？　いきなり黙って』

「こっちにも敵が来たのよ。ハヤトの予想は大当たりってこと。
それと、念話も聞かれてるみたいね」

『そうかい。んじゃ、通信はこれまで。
いいな？　２０分だ。２０分で全員自分の担当を終わらせて、俺

の事を助けに来い』

最後に偉そうな言葉が聞こえてハヤトとの通信が途切れる。

……全く、自分の置かれた状況が分かってんのかしら？　まぁ、本当のところは、エリオやキャロに余計な心配をさせないように、わざとあんな風に言ったんだとは思うけど。

「はっ、あんなカッコつけの馬鹿、ディレト相手じゃ2分も耐えられねーだろうよ」

「そッスねぇ。んで、あんたらもアタシらにここでヤられてお終い、と」

「あまり気を緩めるなノーヴェ、ウェンディ。

いかに戦力を分断したとはいえ、この2人も油断していい相手ではない。戦場において、油断とは敗北を呼ぶものだ」

「……わかってるよ。チンク姉」

「ちぇ～、チンク姉は慎重ッスねぇ。5人でやっと1人前の奴らがたった2人ッスよ？」

「ウェンディ」

「わーかったッスよ。気は抜かないッス」

とにかく。ハヤトがああ言った以上、きっと20分は何が何でも

耐えると信じるしかない。
あたし達に出来ることは、1分1秒でも早く目の前の敵を打倒して、あいつのところに向かう事。

「スバル」

「うん」

隣で構えるスバルに視線をやって、頷きあう。

「10分……ううん、5分で行くわよ」

「とーぜん！」

そしてあたし達は地面を蹴って駆け出した。
待ってなさいよハヤト。あたし達が行った時にやられてたら、承知しないんだから。

side：ティアナ＝ランスター　了

◇◇◇◇◇

side：エリオ＝モンディアル

『いいな？　２０分だ。２０分で全員自分の担当を終わらせて、俺の事を助けに来い』

それを最後に、兄さんとの通信が切れる。
兄さんのところに現れたっていう、前に兄さんをボロボロにした戦闘機人――ディレト。
ああ言ってたけど、大丈夫かな。

「……エリオ君」

背中からキャロの不安げな声が聞こえた。
その声に、僕はハッとする。
今、ここには兄さんもティアさんもスバルさんも、フェイトさんもなのはさんも居ない。

いつも僕とキャロを守ってくれた人達は、今は居ないんだ。
それどころか、兄さんは僕達よりも危険な相手と、戦おうとしている。

『俺の事を助けに来い』

最後に聞いた兄さんの言葉。
いつも僕達を守ってくれていた兄さんが、僕とキャロに助けを求めてた。
その事実が、僕の胸を熱くする。

「キャロ、急ごう」

「え？」

「早くあの子の事を止めて、兄さんのところに行かなきゃ」

「……でも」

不安そうなキャロを振り返って、その手を握る。

「大丈夫だよ。だって、僕達は『エース』なんだから！」

兄さんが、言ってくれた。
今この瞬間だけは、僕達がエースなんだって。

「だから、きっと出来るよ」

キャロの事を見つめて、そう告げる。
そうすると、キャロは一度目を瞑ってから確りと頷き、目を開い

て僕を見返した。

「あの子の事情を聞いて、止める。
そして……2人でお兄ちゃんを助けに行こう。エリオ君！」

「うん！」

2人で頷き合って、前を見る。
いつでも僕達を守ってくれてた兄さんを、今度は僕達が守るんだ！

ｓｉｄｅ：エリオ＝モンディアル　了

◇◇◇◇◇

「……お話は、終わりまして？」

通信を切ったタイミングで、ディレトが話しかけてくる。
どうやら、本当に通信は聞かれてたらしい。

「今度は邪魔しなかったんだな」

ディレトを見据え、口の端を持ち上げてながら軽口を叩く。

「末期(まつご)の会話ですもの。邪魔するのは無粋でしょう？」

「末期、ね」

どうやら、今度は殺す気で来るらしい。しかも、さっき俺を殺したらティア達も、みたいな事も言ってたな。

ホント。マジで勘弁して欲しいんですが、何この殺したがり？

「それにしても、私相手(わたくし)に２０分とは、随分見縊られたものですわね」

「別に見縊った訳じゃねぇさ」

殺したがりなだけならまだしも、それを出来るだけの実力がある。さっきティア達には通信でああ言ったけど、正直来て欲しくなんて無いよな。こんな奴の相手させたくないし。

つーか物騒すぎて寒気がするわ。

んで、まぁ。そうなると、必然的にあいつらがこっちに来る前に俺だけでどうにかしなきゃいけない訳で。

あーもう馬鹿じゃねーの。何カッコつけちゃってんだよ俺。

「ブレイブハート、モード『エクシード』」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｅｘｃｅｅｄ　Ｍｏｄｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ．》

薬莢をひとつ吐き出して、ブレイブハートの形状が変わる。

先が丸くなっている杖の様な形状から、槍に酷似した形状――エクシードモードへ。

それに伴って、俺のバリアジャケットも武装局員のそれから少しだけ変化した。

同時に、自分の魔力が爆発的に膨れ上がったのも分かる。

……まぁ、リミッター外した限界ギリギリの状態なんだから、当然っちゃ当然なんだが。

「あら」

そんな俺を見て、ディレトが少しだけ目を見開いた。どうやら少しは驚いてもらえたらしい。

嬉しくもなんともねーけどな。

「２０分ぐらいなら、お前相手でも持ちこたえる算段がついてるってだけでな」

「ふぅん。確かにあの時より、少しはマシのようですわね。でも――」

言葉を切って、ディレトが嗤う。
あの時と同じような、玩具を壊すのが楽しみでしょうがない、そんな子供のように。

「所詮、雑魚は雑魚。私（わたくし）からすれば、蟻がバッタになった程度でしかなくてよ？」

「バッタね。そんじゃま、バッタの意地を見せるとしましょうか」

「楽しみにしてますわ」

……ったく、こんな主人公みたいな会話とか俺のキャラじゃねぇよ。
しかも微妙に死亡フラグくせーし。ああくそ、ホントキャラじゃねぇ。
キャラじゃねぇけど――

「――たまには、悪くねぇわな」

苦笑しながら呟いて、ブレイブハートの切っ先をディレトに向ける。

「さて、そろそろ遊びましょうか」

対するディレトも、両手を上げて軽くステップを踏み始める。
そろそろこの馬鹿話している時間も終わりだ。

「遊び、ね。多分、楽しくはないと思うけど？」

「いいんですのよ。ハヤト様が足掻けば足掻くほど、私（わたくし）は楽しいんですもの」

喋りながら、俺は心を落ち着かせる。

「ああそうかい。それじゃ、せいぜい楽しんでくれ」

頭は冷えている。恐怖も無い。
手には敵と戦う武器がある。身を守る鎧があって、戦う為の術がある。
命を賭けて戦うだけの目的も、意志も、覚悟もある。

「ええ。楽しませて頂きますわ」

相手がどれだけ強くても、決して折れないだけのモノが、自分の中にある。
だから――

「はっ！　それじゃあ戦闘開始（オープンコンバット）といきますか！！」

さあ、どっからでもかかって来ればいい。
てめぇが思ってる以上に、今の俺は手強いぜ？

第５３話　『決戦　２』（後書き）

連続更新記録は3日でストップ。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「死亡フラグ臭しかしねぇ。どうも、主人公です」

てなわけで、いよいよ個人戦開始。
次回からはそれぞれの戦いをクローズアップして書きたいと思ってます。

ハヤト
「ティアとスバル、エリオとキャロか？」

なのはとヴィータ、フェイトも書きたいなぁ。
ま、お前の戦いは全員のクローズアップに割り込ませるけどね。

ハヤト
「何故俺がおまけ臭いんだよ！」

だってハヤトだもん！

ハヤト
「ぎゃふん」

さて、それじゃあ今回は短いですがここまで。
それではまた、次の話で。

第５４話　『死闘　１』

ｓｉｄｅ：―

ミッドチルダ廃棄都市区画。
そのあちこちで、真紅と橙の魔力の銃弾が交差する。
それは常人の目には追えぬ速度の攻防だが、互いの弾丸を互いの弾丸が撃ち落す火花、そして絶える事無く大気を震わせる炸裂音が、その攻防の凄まじさを物語る。
まるでエース同士の戦いにさえ見える、その攻防。

「アクセル！」

《Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ．》

「ブレイクシューター！！」

交錯する真紅と橙。
ディレトは初めに立っていた位置から、１ミリたりとも動いていない。
対するハヤトは、彼女の周りをビルからビルへ、ディレトを中心とした円を描くように動き回っていく。
一見すれば、それはハヤトがディレトをその場から動かしていないかのように見えるだろう。

――だが。

「――――っく！」

攻めは、ハヤトではなく……

「ブレイクシュート、オールレンジシフト。ファイア！」

紅く長い髪の魔女――ディレト。
圧倒的な魔力量にモノを言わせて、空を橙色に染め上げる程に大量の魔力の弾丸を放つ。
ただただ力任せのその攻撃は、しかし恐ろしい暴力となってハヤトに襲い掛かっていた。

狙いもつけていない、ただ全方位に向けて間断なく射出される橙の魔弾。
それはどれだけ吐き出されようと衰える事無く、更に激しく、鋭く押し寄せる。
防戦を強いられているのは、ハヤトであった。

「……んのっ！！」

橙色の暴力の隙間を縫って、真紅の弾丸が飛ぶ。
だが悲しいかな――

「“キャンセラー”」

その弾丸は、届かない。
全方位に向けて連続射撃をしながらの、ＩＳ“キャンセラー”起動。
容易に近づけない上に、届く攻撃は全て無効化されていく。
その様はさながら、完全無欠の固定砲台のようでさえあった。

「ほらほら！　もっと急がないと当たってしまいますわよ！？」

「ああそうかいっ！！」

ハヤトとディレト。
２人の戦い（ダンス）は、まだ前奏（イントロ）が始まったばかり――。

ｓｉｄｅ：―　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第５４話　『死闘　１』

side：ティアナ＝ランスター

焦る。

「オラァッッ！！」

「くっ！」

ノーヴェって呼ばれてる子の蹴りを避ける。

スバルは少し離れたところで、眼帯の子と赤毛ポニーテールの子を相手にしていた。

――焦る。

「……っのぉ！！」

蹴り抜いて無防備になったノーヴェに照準を合わせ、右手の引き金を引く。

けど、それは超反応したその子に防がれてしまう。

スバルで分かってたけど、凄い反応速度ね。あのタイミングで防がれるなんて。

――――焦る。

「はっ！　幻術馬鹿がアタシ相手に接近戦たぁ、いい度胸じゃねぇか！！」

うるっさいわね。あたしだって、本当ならしたくないわよ。
でも、この戦闘機人達は凄く戦い方が上手い。
あたしとスバルを連携させない様に、あたし達が苦手で、自分達が得意な距離を保って戦ってる。

――――――焦る。

「ウェンディ。前に出すぎるな！
セカンドの得意な距離はクロスレンジだ。無理に合わせる必要はない！」

中心になってるのは、眼帯をしたチンクって言う名前の子。
あの子が司令塔になって、他の2人を上手く動かしてる。
他の2人が『姉』って言ってるから、きっと結構初期から稼動している個体なんだと思う。
だから、他の2人に比べて戦術を分かってる。

「なるべく引き離せ。連携をさせるな、相手の苦手な距離で戦うこ

とを心がけろ！」

「わかってる！」

「りょーかいッスよ～！」

――――――――焦る。

さっきからずっと、こっちは防戦一方だ。

少しでも早く、ハヤトの事を助けに行きたいのに。

「くたばれっ！！」

「……っ！！」

こうしている間にも、時間は刻々と経過していく。

その1分で、この1秒で、ハヤトが危なくなってるかも知れない。

そんな思いが――あたしを焦らせる。

「こ、のぉっ！！」

隙を突いたつもりで振るったダガーモードのクロスミラージュも、

簡単に防がれた。

手間取っている時間は無いのに。
ハヤトのところに、すぐにでも行かなきゃいけないのに！

焦りのせいで、うまく思考が回らない。
そのでいで注意力も散漫になっていたのかもしれない。
だから――。

「……殺った」

「――っっ！？」

「ティアっ！！」

柱の影から唐突に飛び出してきた敵に、反応できなかった。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：キャロ＝ル＝ルシエ

「シューティング・レイ！」

私の数少ない攻撃魔法。
それを、目の前でガジェットに乗ってる召喚士の子に向けて放つ。
だけどそれはその子が作り出した沢山の紫色のダガーに相殺されて、逆にダガーが私目掛けて飛んでくる。

「フリード！」

フリードを操って、飛んできたダガーを回避。
態勢を立て直してから、もう一度あの子の前に戻る。

「貴女はどうして……何でこんなことするの！？」

そして、問いかける。
話し合うことは大事だって、フェイトさんから聞いてたから。
この子が何でスカリエッティと一緒にいるのかを、聞かなくちゃ。

「どうしてこんな所で戦うのか、目的があるなら教えて！
悪い事じゃないなら、私達も手伝えるかもしれないから！」

私の声が届くように、なるべく大きな声で話しかける。
でも、あの子から返事の変わりに返ってきたのは、さっきのダガ

ー。
慌ててフリードを動かして、目に見えていたダガーを回避した。
けど――

「あ……っ！？」

回避した先には、同じくらいの数のダガーがこっちに向かってきていた。

（避けられない！　バリアも……間に合わない！）

そんな絶妙なタイミング。
私はダメージを覚悟して、すぐに来るだろう痛みに目を瞑って身体を強張らせた。
でも――

「キャロッ！！」

聞こえてきたエリオ君の声と、ストラーダの噴射音に目を開く。
そうすると、私の目の前をストラーダを持ったエリオ君が凄いスピードで下から上に向かった通り過ぎていった。そして、私に向かってきていたダガーを一振りで打ち払い、私の側――フリードの首の付け根の辺りに着地する。

「ありがとう、エリオ君」

「うん」

エリオ君にお礼を言ってから、もう一度召喚士の子に視線を向ける。

「……」

「「え……」」

その顔は、凄く悲しそうで。

私もエリオ君も、一瞬言葉を失った。

ｓｉｄｅ：キャロ＝ル＝ルシエ　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

ハヤトとディレト。
２人の戦いが始まって、５分が経とうとしていた。
真紅と橙の戦いは、相変わらず戦闘機ＶＳ不落の固定砲台という様相を呈している。
ハヤトはディレトの周りをビルからビルへ跳び回り、彼女の攻撃の隙間を縫って攻撃を繰り返し、ディレトも変わらず一歩も動かずにＩＳ“キャンセラー”を発動したまま、全方位への全力射撃を繰り返していた。

「っぶねぇな畜生！」

舌打ちと共にハヤトが言葉を吐き出す。
だが、表情と口調こそ苦々しいものであったが……その実、ハヤトは胸のうちでほくそ笑んでいた。
その理由は、彼に向けて全力射撃を続けているディレトの表情だ。

「――っ」

この撃ち合いが始まって５分程度。射撃同士で戦っているのなら、決して長いとはいえない戦闘時間だ。
だが、既に彼女の眉は寄せられ、口はつまらなさそうにとがり始めている。
――明らかに、飽き始めていた。

（予想通り、だな）

ハヤトは表情には出さずに、心中で呟きながら廃ビルの屋上に足を着き、即座に地面を蹴って跳ぶ。

彼の予想……それは『ディレトの弱点』についてである。

ハヤトの知る限り最高ランクである八神はやて、ＳＳランクである彼女を超える魔力量。そして、反則的とも言えるＩＳのオンパレード。更には戦闘機人なのだから、身体能力とて常人からはかけ離れている。

一見すると、弱点などないように思える。

事実、ハヤトも彼女の弱点を探そうとして、結局見つからずに断念した。

それぐらいに、ディレトの戦闘能力――こと肉体的な面に関しては隙が無い。

――では、精神は？

２日前の作戦会議から考えていたハヤトが辿りついた結論は、そこだった。

とはいえ、そこに辿りついたのはついさっき。彼の前にディレトが現れ、会話をしていた時である。

その時と地上本部襲撃の時。

ディレトが必ずと言っていいほど口にしていた『遊び』『楽しむ』という単語。

そして、彼女は常に楽しそうで、まるで無邪気な子供のように笑

っていた。

（ディレトは、精神的にはまだ子供なんだろう）

だからこそ、ハヤトはディレトをそう分析した。
強大な力を持っている、ヴィヴィオに近い精神年齢の子供。
ならば、そこに付け入る隙があるのではないか。それが、ハヤトの結論だった。

（遠距離になりゃ、特に考えずに遠距離戦をやるとは思ったが……大当たりだな）

自分の考えが正しいのかどうかを確かめる為に、戦闘が始まると同時にハヤトは遠距離戦を挑んだ。
案の定、彼女は全方位射撃という反則技で応戦。
そして現状――殆ど作業に近い射撃戦に到っている。

（短期決戦を望むなら、俺みたいな射撃型に射撃戦で応戦するのはナンセンスだ。
射撃型と戦うならどれだけ実力差があっても、基本はクロスレンジでの戦闘で応戦するのが常識）

でも、ディレトはそれを選ばない。
舐められている、というよりは反射的に応戦しているだけなのだ

ろう。
　自分の狙いに乗ってきたディレトに、ハヤトは自分の予想――彼女の精神年齢は子供である――が正しいと確信した。
　そこで彼は、即座に次の作戦を実行に移す。

（ディレトは基本的に楽しい事を求めてる。子供が楽しい遊びを求めるように。
　一歩も動かずにただ全方位射撃を続けるなんて行為を、子供がやったところで楽しいか？）

　答えは、否。
　言ってみれば彼女がやっているのは、ただの作業だ。
　最初こそ必死に逃げ回るハヤトを見て楽しめるだろうが、そんなのは直ぐに単純作業の連続からやってくる『飽き』に塗り潰されてしまうだろう。
　事実、今ハヤトの視線に映るディレトは飽き始めている。
　きっとそれほど時間を要せずに、彼女の我慢は限界を突破するだろう。そういうところも、きっと子供だから。

（飽きはじめた子供が、同じ作業をいつまで続けられる？　1分か？　2分か？
　……すぐにやめるに決まってんだろうよ）

　ハヤトが心の中でニヤリと笑った、その時。

「あああもう！　こんなのつまりませんわ！！」

イラつきを吐き出しながら、ディレトが全方位射撃をやめた。
ハヤトはそれを見て、「やっぱりな」と口の端を歪め、足を止めて廃ビルの屋上へと着地する。

「全っ然、面白くもなんともありませんわ！」

我侭を言う子供の様に、地団駄を踏んで声を荒げるディレト。

「……だよな。つまんねぇよな？
子供にしてみりゃ、単純作業なんて拷問だもんなぁ？　けけけっ」

悪戯小僧の様な笑いを漏らしながら、ハヤトはディレトの脳内を想像する。

（遠距離戦＝つまらない。この3分弱で、あいつの頭の中にはそれが刻み付けられただろう。
ガキの思考回路は単純だ。つまらないと思い込ませちまえば、その選択肢を選ぶことは無い。
そんで、遠距離戦がつまらないとわかりゃあ、次に取る行動は――）

「ＩＳ“ライドインパルス”！！！」

「ほんと、想像通りすぎて笑える……な、っと！」

両手首と両足首に橙色の羽を生やし、ディレトがハヤト目掛けて地面を蹴る。

殆ど残像しか見えない程の速度で迫る彼女のを拳を、ハヤトは横に跳ぶことで何とか避けてみせた。

基本的にディレトの攻撃は直線――それに気付いていたからこそ反応できたものの、視認すら出来ない速度。

それに冷や汗を流しながら、ハヤトは即座に魔力弾を撃ち出す。

――ずっと引っかかっていた事の真偽を、確かめる為に。

（今はＩＳ“ライドインパルス”を発動してる。もしＩＳの同時起動が不可能なら――）

「……！」

果たして彼の予想通りの事が、目の前で展開した。

ディレトは、自分目掛けて迫る真紅の弾丸をプロテクションで『防御』した。

“キャンセラー”で消せば、動きを止めずにハヤトを追撃出来たにも関わらず、だ。

（……ビンゴ）

それを見て、ハヤトは遥か彼方にあった勝機が少しだけ近づいたのを感じ、頬を緩める。
億に一つだった可能性が、万に一つまで近づいてきたのだ。笑うな、という方が無理だろう。

「っ！！」

橙色の盾を展開するディレトの顔は、つい5分前の楽しそうな表情とは程遠いイラついた表情になっていた。
そして、ハヤトの射撃が終わると同時に、ディレトが地面を蹴ってハヤトに迫る。

「……ふっ！」

「っと！」

地面を蹴った勢いそのまま、ハヤト目掛けて拳と足を振るう。
だが、まるで癇癪を起こした子供のようにがむしゃらに振るわれる拳も足も、ハヤトには届かない。
それ自体の速度は凄まじいが、大振りでモーションが丸見えな攻撃など、歴戦の将であるシグナムの剣を毎日の様に避け続けていたハヤトからすれば、なんのことはない。

（もっとイラつけもっとイラつけ。
そうでもなきゃ、避ける自信なんて欠片もないからな）

振るわれる拳と、うねりを上げて迫る蹴り。
その２つを背筋に寒いモノを覚えながら避けつつ、ハヤトはディレトを観察する。
視認するのが難しい速度の攻撃の中から、いつか出来るであろう一瞬の隙を見逃さないように。

（どれだけ速度が凄くても――）

突進と共に突き出された右拳を、頬に掠らせて避ける。

（どんだけ一発の威力があっても――）

勢いを殺さずに繰り出された後ろ回し蹴りを、脇腹に掠らせて避ける。

（癇癪起こしたガキの攻撃なんて、避けるのは難しくない）

撃ち出された魔力弾を、自分の魔力弾で撃ち落す。
ディレトの目が一瞬見開かれて、その後子供の様に頬を膨らませてハヤトを睨む。

その視線を受けて、ハヤトは考えた。

（そうやって怒れば怒るほど、攻撃は雑になって隙も出来やすくなる――）

さっきから、ディレトの表情はどんどん険しくなっていく。
それに比例するかのように、彼女の攻撃は勢いと大雑把さを増していく。
そして――

「いい加減、当たってくださいましっ！！　玩具のクセに！！」

「――――っ！」

待ち望んだ瞬間が訪れる。
今までで一番の大振りで振るわれた拳。
それを避けた瞬間、ディレトは自分の勢いに振り回されてバランスを崩す。
神経を磨り減らして待ち望んだ、その一瞬。

「そこ、だっ！」

それを逃す程、ハヤトは愚鈍ではない。

「ブレイブハート！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．》

「――っ！？」

吐き出される薬莢と、ブレイブハートの切っ先に集まる真紅の光。

「ディバイン、バスターーーーッッ！！！」

溢れた真紅の光が、バランスを崩したディレトを飲み込む。
そしてそのまま廃ビルを貫き、彼女の身体を地面に叩きつけた。

戦いが始まって最初の直撃。
それを為したのは、『最強』ではなく――。

「――人を舐めてっから、そーゆー目にあうんだよ」

ブレイブハートを肩に担ぎ、弾んだ息を整えている……そんな『凡人』だった。

◇◇◇◇◇

全身が、痛い。
ディレトは、穴の向こうに見える空を仰ぎながら、思考する。

Q：何故痛い？
A：攻撃を受けたから。

「攻撃を？　私（わたくし）が？」

Q：誰に？
A：玩具（ハヤト）に。

「……あはっ」

嬉しげな声が、ディレトから漏れた。
さっきまで彼女の思考を支配していた苛立ちは、この痛みによって既に霧散している。

「……あははっ」

変わりに彼女の思考を埋めるのは、歓喜。
自分に弄ばれるだけだと思っていた玩具からの、思わぬ反撃。
姉達でさえ攻撃をマトモに当てる事が出来なかった自分に、初めてマトモな攻撃を当てた。

玩具だと思っていた、彼がだ。

「……あははははっ」

嬉しくて、堪らなかった。
喉の奥から漏れる笑いは、止まらない。止めようとも思えない。

「……あははははっ！」

精神の幼い彼女は“そう”なのだと“認識してしまった”。
それは、言ってしまえば『過大評価』や『勘違い』なのだろう。

だが、しかし。

今まで自分に直撃させるだけの実力を持った誰かと戦った事の無い彼女がそう誤解するには、ハヤトの為した事は十分過ぎた。

生まれて、まだ1ヶ月も経っていない彼女が誤認するには、十分過ぎた。

「あはははははははははははははははははははっっっっ！！！！！」

狂ったような哄笑が、廃ビルの中に響く。
それは数十秒は止む事無く、彼女が肺の空気を使いきり、思わず咳き込むまで続いた。
ひとしきり咳き込んだ後、ディレトは息を整えて、まるで確認するように呟く。

「貴方が、私(わたくし)の“敵”なのですね」

言葉と共に、ディレトの身体がバネの様に跳ね起きる。
既にハヤトの砲撃による痛みは無い。
初めて出会えた“敵”の存在による歓喜が、まるでモルヒネの様に彼女から痛みを取り去った。

「初めて会った、愛しい愛しい私(わたくし)だけの“敵”」

視線は、ハヤトの砲撃で空いた穴の向こうに映る空だけを映している。
だが、彼女の目には、その向こうに居るだろうハヤトが見えていた。

「……“敵”。私(わたくし)が、全ての力を使って殺すべき、“敵”」

呪文の様に、ディレトが呟く。
その声に反応して、彼女の指に嵌められていた銀の指輪の宝玉が紫色に光る。

「殺して差し上げますわ。愛しい愛しい『私の敵(ハヤト様)』。
欠片の油断も無く、切片の慢心も無く、爪先程の傲慢も無く、有象無象の区別無く。
完膚なきまでに、爪の先から毛先までのありとあらゆるモノを、殺して、潰して、消滅して差し上げますわ」

光りは瞬時にディレトの身体を包み、その輝きを増していく。

「あぁ。これが愛しいという気持ちなのですね。
これが恋焦がれるという気持ちなのですね」

言葉と共に紫の光が消え、そこには漆黒のバリアジャケットを着たディレトが居た。
なのはのバリアジャケットを、そのまま黒に塗り潰したデザインのバリアジャケット。
両手には、紫の刃を持つツインブレイズ。
腰まで届く紅い髪は、首の辺りで纏められ、風に揺れる。

「愛しいですわ。恋しいですわ。私の、私だけのハヤト様(敵)」

2本の光刃を振るい、恋焦がれる乙女のように彼の名前を口にする。
刹那。廃棄都市区画の空気は、凍てついた。

「失礼をしてしまいましたわ。敵を相手に、手を抜いていたなんて」

辺りを舞う土埃が凍りつき、雪の結晶となったかのように錯覚す

る程の――瓦礫の中の、氷点下。

「もう失礼は致しませんわ。本気で、全力で、全身全霊、殺して差し上げましょう」

キリキリと鋭く、身を切るようなソレは――。

「手加減なんてしませんわ。遊びだなんて思いませんわ。楽しもうともしませんわ。
ここからは、私（わたくし）と貴方の、殺し愛（コロシアイ）い」

最強たる為に造られ、生まれた少女の。
ただ一人の敵を殺す為だけに向けられた――純粋な、どこまでも透明な殺意。

「さあ！！！　存分に！　どちらかが死して骸を曝すまで！
一切合財遠慮無く！　ずっとずっと“愛し合（コロシアイ）い”ましょう！　ハヤト様！！！」

かくして。
ハヤトの一撃は狂った少女を覚醒させ、２人の戦い（ダンス）は次の楽章へと進む。
決戦が始まって、まだ7分弱。
戦いの狂想曲は、ようやく前奏（プレリュード）が終わったばかり――。

ｓｉｄｅ：―　了

第５４話　『死闘　１』（後書き）

会社で暇な時に小説を書いていたら怒られました。
どうも、ラモンです。
今回ハヤトはラストバトルが忙しいので、後書きはお休み。
後書き自体もちゃちゃっと終わらせようと思います。

今回書きたかったのは、ディレト覚醒と、スバティア組、エリキャロ組の戦闘模様でした。
戦闘描写って難しいですねぇ。
書いて読み直していると、何かもうちょっと上手く書けるんじゃないかっていつも思います。まぁ、結局それ以上上手く書けないんで、そのまま投稿するんですがｗ

次回はなのヴィー組、フェイトの様子＋ハヤトＶＳディレトを予定しています。
……皆あっちこっちで戦いすぎだよ！　書き辛いよ！
あとどうやったらハヤトがディレトに勝てるのか想像できないよ！！
もうＤＥＡＤＥＮＤでタイガー道場ならぬ冥王道場でよくね！？

……すいません。取り乱しました。
えー、まぁ戦闘描写はダメダメですが、次回も頑張ります。
それではまた、次の話で。

第５５話　『死闘　２』

背筋が、凍った。

「……っ！！！」

まるで吹雪が吹き荒れる中に放り込まれたように、怖気が背中を走る。

ブレイブハートを持った左手の震えが、止まらない。

「ぁ……はっ……」

呼吸の仕方を忘れたみたいに、息が詰まる。

心臓が、いきなり動く速度を上げる。

何だ？

何が起きてる？

ディレトは頭に血が昇ってて、マトモな思考は出来てない。

ディバインバスターを一発直撃させたんだし、ダメージが０ってこたねぇだろ。

さっきのはかなり全力に近い一撃だった。頑丈が取り柄のスバルだって、あれなら落とせる。

……だから、少なくとも現状では俺の方が僅かに有利な筈なんだ。

けど、この寒気は何だ？
止まらない震えは何だ？
息が苦しいのは何でだ？

ヤバイ。

何がってのは分からんが、とにかくヤバイ。
本能の鳴らす警鐘に逆らわず、俺はここから離れようと脚に力を入れる。

「ブレ――」

言葉は、最後まで呟くことが出来なかった。

「あっはははははははは！！」

「なっ！？」

俺が砲撃で空けた穴。
そこから、哄笑と共に紅い何か――ディレトが飛び出してくる。
反射的に後ろに跳ぼうとした俺の視界で、紅い髪と、紫の刃が２本煌く。

避けなきゃと思った瞬間、左肩と右脇腹に熱が走った。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第５５話　『死闘　２』

ｓｉｄｅ：高町なのは

ヴィータちゃんと一緒に揺り籠内部に突入して、どのくらい経っただろう。
突入部隊のメンバーが揃うまでに、敵を少しでも減らす役目。
それを私とヴィータちゃんの２人で担当しているんだけど、さっきから敵の殆どはヴィータちゃんが片付けてて、私は手を出していない。
おかげで私は魔力も体力も全然余裕だけど……。

「はぁ……はぁ……」

「ヴィータちゃん、飛ばしすぎだよ」

変わりに、ヴィータちゃんは酷く消耗している。
何度注意しても、「後衛の魔力を温存させるのが前衛の仕事」っ

て言って聞いてくれない。
ヴィータちゃんが私のことを思ってやってくれてるのはわかるんだけど、ヴィータちゃんが潰れちゃっても駄目なんだよ？

「いーんだよ。はっ、ベルカの騎士舐めんなってーの」

「そういう訳じゃないけど……」

アイゼンを肩に担いで、悪戯っ子みたいに笑いながら鼻を鳴らすヴィータちゃん。

（意地っ張りなんだか……）

そう思いながら苦笑するのと同時に、私とヴィータちゃんの目の前に通信用のモニタが開いた。

『突入部隊。スターズ分隊へ』

「はい」

『駆動炉と玉座の間、詳細ルートが判明しました』

言葉と一緒に、モニタが揺り籠の見取り図に変わって、私達の現在位置と駆動炉、玉座の間の位置が示される。

……これって！？

「真逆方向……！」

「……突入隊のメンバーは、まだ揃わねぇか？」

『各地から緊急招兵していますが、あと４０分は……』

「「……」」

それじゃあ遅すぎる。

その報告に、私は眉を潜め、ヴィータちゃんは考えるように下を向く。

でも、ヴィータちゃんは直ぐに顔を上げて小さく呟いた。

「仕方ねぇ。スターズ１とスターズ２、別行動でいく」

「っ！」

『了解しました。急いで応援を揃えます』

私が何かを言う前に、通信は切れてしまう。

これじゃ、どうやっても２手に分かれるしかなくなっちゃうのに。

「ヴィータちゃん！？」

「駆動炉と、玉座の間のヴィヴィオ。
かたっぽを押さえれば止まるかも知れねーし、かたっぽ止めただけじゃ止まらんねーかも知れねーんだ。
こうしてる間にも、外は危なくなってる……時間がねーんだよ」

「でも、ヴィータちゃんはここに来るまでの消耗が――「それに」――え？」

言い募ろうとした私の言葉を、笑いながら振り向いたヴィータちゃんが遮る。

「お前は、ハヤトにヴィヴィオをお願いされてたじゃねーか。
あの馬鹿が、珍しく真面目な顔してお願いしてたんだ。駆動炉はアタシに任せて、さっさとヴィヴィオを助けて来い」

「でも……っ」

「破壊と粉砕は、アタシとアイゼンの得意分野。なのはだって知ってんだろ？
鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼンに、砕けねぇモノなんてありゃしねーよ」

それで最後と言葉を切って、ヴィータちゃんは私に背を向ける。

「一瞬でぶっ潰してから、お前の援護に行ってやるよ。

さっさとこのデカブツの上昇を止めて、それから外のはやてと合流だ」

背を向けたままひらひらと手を振ってヴィータちゃんは歩き出す。
その背中が、なんだか凄く遠くに行っちゃうように見えて、思わず声をかけた。

「絶対、絶対すぐに合流だよ！？」

「ったりめーだ！」

返ってきたいつも通りの声に少しだけ安心して、私もヴィータちゃんに背を向けて走り出す。
目指すのは――ヴィヴィオの居る、玉座の間。

ｓｉｄｅ：高町なのは　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

地下深くにある通路。
そこに所狭しと並べられた、ナンバー刻印の入った生体ポッドと、無数のガジェット。
フェイトとシャッハの2人はそれらを眺め、眉を潜める。

「これは……人体実験の、素体？」

「だと思います。人の命を弄び、ただの実験材料として扱う。あの男がしてきたのは、こういう研究なんです」

拳を握り締めながら、フェイトが呟く。
自分やエリオ、容易に受け入れられぬ境遇を持った人間を、面白半分に作り出す。
それを嬉々として行ってきたスカリエッティに対する怒り。
表面上は冷静なフェイトの胸のうちには、その怒りが渦巻いていた。

「……1秒でも早く、止めねばなりませんね」

「ええ」

シャッハの言葉にフェイトが頷き、更に先を目指そうと足を踏み出した。
が、彼女達が動き出した瞬間、大きな揺れが2人を襲う。
たたらを踏みながらも、フェイトは辺りを見回して、この揺れの原因を探る。

「！」

原因は直ぐに見つかった。

２人の真上、天井を横に走るパイプの上に、？型ガジェットがその巨体を鎮座させていたのだ。

恐らく、ソレがパイプの上に落ちてきた時に揺れが起きたのだろう。

？型の乗ったパイプはその重量に耐え切れず、少しずつヒビ割れを起こしていく。それほどの時間を要さずに、へし折れ、２人のところに？型の巨体を落下させる。

それを悟ったフェイトがその場から飛び退き、シャッハもそれに続こうとする。

だが、彼女が跳ぼうとした絶妙のタイミングで地面から青髪の少女――セインが顔を出し、彼女の足を掴む。

「シスターー……っ！！」

フェイトが即座に彼女を助けに行こうとするが、その彼女に向かって２本の刃が飛来する。

「はあああああっっ！！」

フェイトが2本の刃を防ぎ、シャッハがセインごと地面を打ち抜くのと、?型の鎮座するパイプが崩れるのは、ほぼ同じタイミングだった。
シャッハが打ち貫いた場所に?型が瓦礫と共に落下し、彼女の空けた穴へとすっぽり嵌りむ。

『シスター！』

安否を確かめようと、慌てて念話でシャッハに語りかける。
返答は、すぐに戻ってきた。

『フェイト執務官。こちらは無事です、大丈夫。
戦闘機人を1機補足しました。この子を確保次第、そちらに合流します』

『……了解しました』

シャッハとの念話を終え、フェイトは目の前の2つの人影に注意を移す。
通路の先から歩いてきた2体の戦闘機人――トーレとセッテ。
その姿を確認したフェイトは、ザンバーフォームのバルディッシュを構え、彼女達を睨みつけた。

「フェイトお嬢様」

「っ」

フェイトの前まで歩いてきたトーレが彼女を呼ぶ。
すると、その呼ばれ方が不快だとばかりにフェイトの顔が歪んだ。
だがトーレはそれを気にせず、彼女に向かって語りかける。

「こちらにいらしたのは、帰還ですか？　それとも……反逆ですか？」

「……どっちも違う」

己の気持ちを抑えるかのように、フェイトはバルディッシュを一度振り切る。
そして、2人を見据えてはっきりと言葉を返した。

「犯罪者の逮捕。それだけだ」

◇◇◇◇◇

それは、人間がひと瞬きするかしないか。そんな一瞬の出来事。
ディレトという、人の形をした獣。
その牙が、ハヤトの左肩と右脇腹に喰らいついた。

（……何て速さだよ）

痛みを感じるよりも先に、思考することが出来たのは僥倖だったろう。

ハヤトは自分の左肩と右脇腹に突き刺さる、紫色の二つの刃を見る。

右脇腹に刺さった刃には流れ出した血が伝い、刃の根元から地面に垂れていく。

（どうする？　ここで刃を捻られたら、内臓をやられて致命傷だ。防ぐには、先手必勝でディレトに魔力弾を――否、それよりも刃を捻るほうが速い。

よくて相打ち。下手すりゃ俺が一方的にやられて終わり。それじゃ駄目なんだよ）

光のような速度で、ハヤトの頭を思考が駆け巡る。

「つ・か・ま・え・た・♪」

その思考を遮って、楽しげな少女の声がハヤトの鼓膜を揺らす。

今まで下を向いていたディレトが、言葉と共に顔を上げる。

「っ！！」

まるで仮面でも被っているかのような、歪な笑顔。
背筋を走る怖気に、ハヤトの本能が『逃げろ』と警鐘を鳴らす。
しかし、その方法が思いつかない。

「それじゃあ、さようなら」

「――って、そんな訳にいくかっつーの！」

殆ど反射的に、ハヤトの身体が動く。
思考した結果ではなく、生物としての生存本能が彼の身体を動かした。
地面につけていた右足を振り上げ、前蹴りの要領でディレトの鳩尾目掛けて蹴りを繰り出す。
反射的に動いたにしては、その蹴りは計算された軌道で、彼女の鳩尾へと吸い込まれていく。突き刺さった2つの刃、それと平行になるように。
自身の身体を、これ以上傷つけずに刃が引き抜かれるように。

「ぎっ！」

「ぐっ！？」

密着に近い状態から繰り出された蹴り。

それはさしものディレトとて避ける事は出来ず、その前蹴りをもろに喰らって息を吐き出しながら吹っ飛んでいく。
彼の身体とディレトの身体が離れる際に、ハヤトに突き刺さっていた刃が彼の身体から抜ける。彼の本能が狙っていた通り、突き刺さった時の軌道そのままに、彼の身体を傷つける事無く。
ハヤトは痛みに顔を顰めながらも、少し離れた場所に着地する。

「くっ……」

中空にハヤトの血が舞い、水音を立てて地面を濡らす。
空いている右手で、止血代わりに脇腹の傷を力の限り押さえる。
その指の間から止め処なく血が溢れ、白を基調としたハヤトのバリアジャケットを赤く染めていく。

「ブレイブハート、止血」

《　はい　》

返答と共にブレイブハートが簡単な止血魔法でもって、溢れる血を止める。
勿論傷が治った訳ではなく、傷口を無理矢理くっつけて血を止めただけなのだが。

《　左肩も脇腹も、どちらも骨、内臓に傷は到っていません　》

「わかった」

答えながらも、ハヤトの視線はディレトを捉えて離さない。
彼の頭の中にさっきまで考えていた、『自分が僅かに有利』などという考えは既にない。
あるのは、今すぐにここから逃げたくなりそうな恐怖と、ただひたすらに感じる死の予感。

「……いってぇ」

左肩と右脇腹から伝わる痛みに、知らずハヤトは呟いた。
そんな彼の視線の先で、蹴り飛ばされたディレトが身体を起こす。

「フフフ……まさか蹴り飛ばされるなんて、思ってませんでしたわ」

「そう、かい」

「次は逃しませんわよ？」

「丁重にお断りしたいね」

軽口を叩く間も、ハヤトの本能が鳴らす警鐘は大きさを増していく。
それなりで離れているディレトが持っている2つの剣が、自分の喉に突きつけられているような感覚。

自分に漂う濃密な死の気配に身震いし、それを振り切るようにハヤトは頭を振った。

「つーかよ、何だその格好？　コスプレなら、別の場所でやってくれ」

「ああ、これは私（わたくし）の固有武装ですの。名前はイービルハート……お揃いですわね、ハヤト様？」

「嬉しくねぇ……なぁっ！！」

吐き捨てるように言いながら、ハヤトは先手必勝とばかりに魔力弾を撃ち出す。

「あら、酷い」

襲い掛かる真紅の弾丸。

しかしディレトは涼しい顔で、その場から一歩も動く事無くその全てを切り落とす。

目の前にいたハヤトでさえ、切り落とした時の炸裂音しか聞こえない程の速度。

「ふふ。加減なんて、しなくていいですのよ？」

「……冗談」

乾いた笑いが喉から漏れる。
少なくとも、端からハヤトは加減などしていない。
今の一撃で決める……それでなくともダメージを与えるつもりで撃ったのだ。
それを苦もなく、目で追えぬ程の速度で切り落とされては、笑うしかないだろう。

「なら――！」

遠距離で切り落とされるなら、一気に間合いを詰めて零距離で叩き込む。
一瞬でそう判断し、いざ踏み込もうと体重を前方向にかけた――瞬間。

「――――虫が、止まりましてよ？」

目と鼻の先に、ディレトの顔があった。

「ひっ！？」

突然の事態と、首筋に添えられた冷たい魔力の刃の感触。
その２つに悲鳴を上げ、ハヤトは後ろに飛び退こうと仰け反る。

「――んっ」

「っ！！？？」

そのハヤトの唇に、ディレトのソレが押し付けられた。
思わぬ口づけは一瞬。
すぐにハヤトが飛び退き、口を右手で拭いながらディレトを睨む。

「何の、つもりだ！？」

「あらあら真っ赤になって。存外に初心ですのね」

口付けた自分の唇を人差し指で愛おしそうに撫で、コロコロと少女の様に笑うディレト。
その笑いは、先ほどまでの子供のような笑いではなく、妖艶な響きを孕んで辺りに響いた。

「愛する殿方に口付けをするのが、そんなにおかしい事ですの？」

「……訳わかんねぇこと、言ってんじゃねぇ」

口元を拭い、忌々しげに答えるハヤト。
だが、その実彼の思考は混乱と恐怖に埋め尽くされていた。

（何が起きた？　何があった？
速いのは知ってる。でも、認識できない程の速度じゃなかっただろ！？
幻術？　違う、あいつの姿は増えてもいないし、減ってもいない。
認識できなかった？　だとしたらどんだけ速ぇんだよ！！）

自分の認識していたよりも、遥かに上を行くディレトの速さ。
ずっと見ていたのに、初動さえ感じることの出来ないその速度に、ハヤトは驚愕する。
さっきまでは、頭に血が昇っていたこともあったが、それでもディレトの初動は感じることが出来た。だからこそ、彼女の攻撃を避けるという選択肢があったのだ。
だというのに、それが潰された……つまり、避けるという選択肢が選べなくなったのだ。

ＩＳの同時使用が不可能という事実で近づいた勝機が、遥か彼方に去っていくのを感じ、ハヤトは膝を折りそうになる。
瞬間、彼の耳に聞きなれた相棒の叱責が響いた。

《　呆けている暇はありません。マスターハヤト　》

「っ！」

《　まだ、こちらにもカードは残っています　》

「ブレイブ、ハート」

崩れそうな膝に力を入れて、自身を奮い立たせる。

《　切れるカードがあるのに、諦めるのですか？　》

「……それ、は」

《　貴方は、切れるカードが無くとも、相手を欺いてゲームに勝つ人でしょう？
　まだ切れるカードがあるのに諦めるのは、貴方らしくありません　》

ブレイブハートの言葉に、折れかけたハヤトの心が持ち直す。
そうだ。自分にはまだ、切れるカードがある。
絶望するのは――それを切ってからでも遅くは無い。

「……俺らしくない、か」

《　はい　》

「言うようになったよな、お前も」

《　姉上に、色々と教わりましたので　》

自分の知らないところで、変に成長した相棒に苦笑する。

「それじゃあいっちょ、カードを切るとするか」

《All right. My master.》

ブレイブハートが、カートリッジをロードする。
その数、実に6発。

「何かするんですの？」

「あぁ、するけど……待ってるつもりか？」

「ハヤト様の全力を、私の全力で叩き潰す。それが、殺し愛（アイシアウ）うということでしょう？」

「……どんな認識だよ」

《Mode:Blaster1. Ignition!!!》

苦々しくハヤトが呟くのと、彼の身体から真紅の魔力が迸るのは、同時だった。
ブラスターモード。ハヤトが切れる、最高にして最強の切り札（ジョーカー）。
出来れば切りたくなかった手札ではあるが、そんな事を言っていい相手では無いことは、ハヤトも理解していた。

（これでも、届くかどうか微妙だしな）

自分を包む魔力と、軋みを上げる肉体を知覚しながらが、ハヤトはそう考える。

「それが、ハヤト様の隠し玉ですのね」

「そういう、事だ」

喋るだけで、強化されすぎた腹筋が軋む。

初めて使ったハヤトは、予想以上の扱い辛さと、これを平然と扱うなのはに憧憬を禁じ得なかった。

「……ブレイブ、ハート……ッ！！　カウントダウン、開、始っ！！」

《Ｙｅｓ．　Ｏｐｅｎ　Ｃｏｍｂａｔ．》

軋む身体と、それによって倍増された左肩と右脇腹の痛み。

それらに歯を食い縛って耐え、ハヤトは一歩を踏み出した。

「もう、良いのかしら？」

「……あぁ、もう、良い……ぞ」

ギシギシと軋む身体に顔を顰めつつも、ハヤトは左手に持ったブレイブハートの切っ先をディレトに突きつける。
それは、ハヤトが抗おうとする意志。
飽く迄も戦い続けるという、確固たる決意。

「それでは……全力で殺し愛(アイシアイ)いましょうか、ハヤト様！！」

抗おうとするハヤトを見て、歪な笑みを深くするディレト。
そして歓喜の声と共に、まるで消え去ったかと錯覚するような速度で動き出す。

「悪ぃが……俺はもう、売約済みなんだよっっ！！！」

それに咆哮を以って返しながら、ハヤトもまた初動さえ感じさせない速度で地面を蹴り飛ばした。
刹那、中空に橙と真紅。２つの華が咲く。
戦い(ダンス)は終焉へと向けて加速していく。早く、速く、狂おしい程に。

ゆりかご阻止限界点まであと２時間４６分。
ハヤトとディレトが戦いだしてから――約１０分が経とうとして

いた。

side：了

第５５話　『死闘　２』（後書き）

地球の皆、オラに戦闘描写が上手く書けるコツを分けてくれ！
どうも、ラモンです。

ハヅキ
「ハヤトが怪我を！？　待ってろ、今お姉ちゃんが行くぞ！！」

行くな。めちゃくちゃになる。
はい、まぁそんな訳でハヤト怪我をするの巻＋ヴィーなの、フェイトのお話でした。
ディレト強いね。どうやって勝たせよう。

ハヅキ
「私が行って叩き潰す」

だから無いって。
いきなりアンタが脈絡も無しに出てきたらヤバイだろ。

ハヅキ
「しかしハヤトが！　ハヤトが！！」

自分の弟を信じてやれよ……。
ブラスターシステムも発動したから、何とかなるって。
……きっと。

ハヅキ
「きっととは何だ！？　絶対じゃないのか！？」

あーもう、うっさい！
さて、次回はハヤトＶＳディレトの描写はお休みで、スバティア、エリキャロの戦闘を書く予定です。
まぁ予定なんで、結局ハヤディレも書くかも知れませんがｗ
そんな訳で適当に楽しみにお待ちくださいね。
それではまた、次の話で。

……はぁ、ホントにどうやって勝たせよう？

第５６話　『死闘　３』

ｓｉｄｅ：―

「……殺（と）った」

「――っっ！？」

「ティアっ！！」

ティアナの死角になっていた柱。
そこから、両手に自身の固有武装である『ツインブレイズ』を持ったディードが、刃を振り被りながら飛び出す。
焦りと苛立ちで思考が一杯になっていたティアナは、その襲撃に対する反応が遅れた。
それでも何とか、交差するように襲い掛かる刃を避けようと身を捩る。

「いいから死んでろっ！」

「くっ！！」

身を捩るティアナ目掛けて、彼女と相対していたノーヴェが唸りを上げて迫る。
そちらはダガーモードのクロスミラージュで受け、逸らす。

だがその攻撃で、避けきれる筈だったディードの攻撃範囲に、ティアナの身体が残ってしまった。

「きゃあああああっっ！！」

凄まじい衝撃と激痛。
その２つを感じながら、ティアナは吹き飛ばされた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第５６話　『死闘　３』

「ティア！」

「よそ見をしている暇は無いぞ、タイプゼロ！」

「その通りッスよっ！！！」

「……っ！」

吹き飛ばされたティアナに注意を奪われた一瞬。
その一瞬を、チンクとウェンディは見逃す筈も無い。

2人はタイミングを合わせ、スバル目掛けて赤い魔力弾と無数のダガーを飛ばす。
それはスバルの目前で互いにぶつかり、大きな爆発をなってスバルを吹き飛ばした。

「うあああっ！！」

意識を逸らした事で、不意打ちに近い形でその爆発をモロに受けてしまったスバル。
咄嗟にシールドを張ったものの、爆発の炎と衝撃、それによって飛び散った破片の全てを防御する事は出来ず、顔や腕などに少なくない傷を負ってしまう。
その痛みに顔を顰めながらも、スバルは中空で態勢を立て直す。

「……っつ」

爆発の勢いを殺しながら、片手をついて着地した。
そんな彼女の前では、チンクとウェンディ、そして2人と合流したノーヴェとディードが油断無く構えている。
スバルは意識を前に向けたまま、視線だけを動かしてティアナの姿を探す。

（あ……）

そして、自分の直ぐ近くに倒れていたティアナを見つけ、安堵の息を漏らした。
チンク達が狙ったかどうかは分からないが、2人は殆ど同じ場所に吹き飛ばされていたらしい。

「ティア、大丈夫？」

「……あんまり、大丈夫とは言えないわね」

スバルの言葉に、ティアナは右足首を押さえながら答える。
押さえた右足首からは血が流れ、地面に血溜りを作っていた。

「アンタこそ、大丈夫？」

「……あたしも、あんまり大丈夫じゃない、かな」

ティアナとは違い、立ってはいるもののスバルのダメージも決して軽いものではない。
爆発と、それによって飛来した破片などで、全身に裂傷と軽い火傷を負っている。
今すぐ戦闘不能になるという訳ではないが、見過ごせる程ダメージが軽い訳でもない。

（戦闘機人が4機、あたしは足をやられて、スバルのダメージも軽くない）

足の痛みに顔を顰めながら、ティアナは頭で状況を確認する。
そんな彼女達に追い討ちをするかのように、どこからとも無く飛来した１０機近くのガジェットが２人を囲む。

（しかもガジェットまで……）

状況は、限りなく最悪に近い。
数は向こうの方が多く、更にはこちらは揃って怪我をしている。
自分に到っては移動さえ満足に出来ない。

（これは……駄目、かな）

ティアナの脳裏に、そんな諦めの言葉が浮かぶ。
スバルも似たような事を考えたのか、少しだけ辛そうな顔をしていた。

「ディード、アンタも来てたッスか」

「オットーの指示。幻術使いとタイプゼロは、確実に始末したいらしいから」

「確かにな。男の方はディレトが始末するだろうし、あとの２人はお嬢様が何とかしてくださるだろう」

「なんでもいーよチンク姉。とりあえず、さっさとあいつ等やっちまおうぜ」

そんな2人には構わず、チンク達はそれぞれの獲物を構える。
対するティアナとスバルは不安な顔のままそれぞれのデバイスを構えた。
しかし、2人の表情は諦めの混じっていたまま。

（……ハヤト）

ティアナは目を閉じて、恋人の事を思う。

（こんなことなら、最後にキスくらいしておけばよかったな）

諦めてしまった彼女は、俯いてそう思う。
何故だか溢れそうになった涙を堪え、クロスミラージュを持った左手で目元を擦った。
その時――。

『俺の事を助けに来い』

彼女の頭に、ハヤトの言葉が蘇る。

最後に聞いた彼の言葉。１人で何でもしようとするハヤトが、初めて自分達に助けを求めてきた言葉。

（そう、だった）

ティアナの目に、覇気が戻っていく。

（あたしは、こんなところでやれる訳にはいかないんだ。ハヤトを――あの馬鹿を、助けに行かなきゃいけないんだから！）

クロスミラージュを握り締め、視線を上げる。
目の前には、４人の戦闘機人と無数のガジェット。
確かに状況は限りなく最悪に近い。けれど――。

（まだ、勝てない訳じゃない！）

ティアナは決意と共に、戦闘機人たちを睨みつける。
その目に、さっきまでの諦めは――欠片も残っていなかった。

◇◇◇◇◇

キャロとルーテシア、エリオとガリュー。
２つの戦いは一進一退……いや、ルーテシアとガリューが優勢だった。
両者の実力にそれ程の差は無い。
では、何故エリオとキャロは劣勢に立たされているのか。それは――

「何のために戦ってるのか、それだけでも教えて！」
「でないと、僕達は本当に君達のことを……っ！」

２人ともルーテシアとガリューを止める事ではなく、彼女が戦う理由を聞く事に重点を置いて戦っているからだろう。
だから、エリオもキャロも本気で戦えず、その結果２人は劣勢に立たされている。

「……ドクターの、お願いだから」

そんな２人に対して、ルーテシアは少しだけ眉を潜めてそう返す。
そして言葉と共に左手を上げ、自分の周りに浮かぶ小さな召喚蟲をキャロ目掛けて撃ち出した。

銃弾の如く降り注ぐソレを、キャロはウィングシューターで迎え撃つ。
空中で紫と桃色が交差し、爆発を起こす。
空中に広がった爆煙にの中に、ガジェットとフリードがそれぞれ突っ込んでいく。
煙を突っ切って再び煙から姿を現したその背中には、キャロとルーテシアの姿は無い。

「……」

「……」

2人は爆発の起きた場所の近くにある廃ビルの屋上で、向かい合っていた。
暫し見つめあった後、ルーテシアが呟くように口を開く。

「ドクターが私の探し物、レリックの11番を探す手伝いをしてくれる。
だから、私は代わりにドクターのお願いを聞いてあげる」

それは、ルーテシアの切なる願いだった。
ルーテシアは物心ついた時から、自分の事を『不幸』だと断定してきた。
母が居ない自分は、生きている誰よりも不幸だと。

「ゼストも、もうすぐ居なくなっちゃう。アギトもきっと、どこかに行っちゃう……。
でも、11番のレリックが見つかれば、あの人が私のお母さんになってくれる。
そうしたら私は――もう『不幸』じゃなくなるから。だから私は、ドクターのお願いを聞くの」

だから彼女は誰よりも幸せになりたいと望んでいた。
すこしでも早く、そうなりたいと願っていた。
お母さんが居て、友達が居る……そんな当たり前の幸せが欲しいと、心から願っていた。

「違う……それ、違うよ!!」

キャロは、ルーテシアの願いに首を振る。
彼女は知っている。幸せというのは、そうやって掴むものではないと。
誰かを不幸にして掴める幸せなど無いのだと。
キャロにはルーテシアの境遇はわからない。けれど、彼女はルーテシアの瞳を知っている。

かつて、自分がまだフェイトと出会う前――“忌み子”と呼ばれていたあの時の瞳。
ルーテシアの瞳はそのときの自分と同じものだ、と。

「幸せって、そうやってなるものじゃないよ！！」

だから、必死に声を出す。
かつての自分と同じ、悲しい瞳をした少女に言い聞かせるように。
けれど――

「……貴女には、わからない」

僅かな間を置いて返ってきた答えは、驟雨の如く降り注ぐ攻撃だった。

「っ！！」

キャロは咄嗟にそれをシールドで防ぐ。
降り注ぐ攻撃はシールドにぶつかり、火花と煙を巻き上げる。
煙が去った後には、埃塗れになったキャロ。

「幸せになりたいなら、自分がどんなに不幸で悲しくても、人を傷つけたり、不幸にしちゃ駄目だよ……。
そんなことしたら、欲しい物も幸せも、両方見つからなくなっちゃうよ！」

攻撃されてなお、キャロは言葉を紡ぐ。

「……貴女と話すの、嫌い」

対するルーテシアは不快そうに眉を潜め、そう答えた。
瞬間、キャロの背後に現れたのは刃を伸ばした己が手を振り上げるガリュー。
ルーテシアに意識を向けていたせいで反応さえ出来ないキャロに、無常にもガリューの刃が振り下ろされた。

「はぁあああああっっ！！！！」

だが、その刃は裂帛の気合と共に突っ込んできたエリオのストラーダによって跳ね上げられた。
しかしすぐに態勢を立て直し、キャロの側に降り立ったエリオ目掛けて魔力を放出する。
爆発と、舞い上がる瓦礫の破片。

「……」

それで仕留めたと思ったのか、ルーテシアが背を向けた。
その背に、キャロの声が届く。

「待って！」

「！」

仕留め切れなかった事に少しだけ驚き、振り返る。
煙が晴れたそこには、桃色の結界に守られたキャロとエリオの姿があった。

「まだ、貴女の話を聞かせてもらってないよ！」

「……話す事なんて、ない」

鬱陶しそうに眉を寄せるルーテシア。
けれど、キャロは言葉を止めない。

「私、アルザスの龍召喚士、機動六課のライトニング分隊所属。キャロ＝ル＝ルシエ！」

「同じく、エリオ＝モンディアルと、飛龍フリードリヒ！」

「？」

唐突に名乗られたルーテシアは、少しだけ不思議そうに目を瞬かせた。

「話を聞かせて！　レリック探しも、貴女のお母さん探しも、私達機動六課の皆が手伝うから！」

自分に向けて、ただひたすらに言葉を紡ぐキャロ。
どれだけ攻撃されても、拒絶されても、それでも自分を助けようとしてくれる人。

「貴女の名前は！？」

ルーテシアは、戸惑う。
何故この子はこんなにも私に構うのか。
何故この子はこんなに必死なのか。
何故この子は……こんなにも、優しい目をしているのか。

自分の胸の奥底から湧き上がる感情に、ルーテシアは戸惑っていた。

◇◇◇◇◇

地面を蹴る度に、脚の筋肉が悲鳴を上げる。
腕を振るう度に、腕の骨が軋みを上げる。
少しでも身体を動かせば、気が遠くなりそうな激痛がハヤトを襲

う。しかしそれでも――ハヤトは止まらない。

「アクセル……ッ、シューター！！」

痛みに顔を歪めながら、それでも必死に後ろに跳びながら魔力弾を放つ。

ブラスターシステムによって底上げされた、一発一発が必殺の威力を持つ魔弾。

それを切り払い、打ち払い、シールドで受け止めながら、紅い髪の魔女が彼に迫る。

「あはっ！」

今度もまた、その繰り返し。

ディレトは自身に迫る弾丸の全てを、両の手に持ったツインブレイズで切り落とす。

常人ならば目で追う事さえ叶わぬ速度の弾丸を、さも涼しげな顔で。

「あははっ！」

射撃の反動で一瞬の硬直を見せるハヤトに向けて、ツインブレイズを持った手を向ける。

そして彼女は――殺すように、笑った。

瞬間、聞こえてきた地面を蹴る音。

「――っ！？」

魔力によるブーストで強化された視力を持ってしても、初動どころか動きの過程さえ見えないその動き。

一瞬でハヤトとの間合いを詰め、右手のブレイドを袈裟懸けに、左手のブレイドを横薙ぎに、両の刃を交差させるように同時に振るい、繰り出す。

彼はその斬撃を、ハヤトは直感と予測に頼り切って何とか身を捩って避ける。

「ふふっ、そうこなくては――」

掠らせずに自身の攻撃を避けて見せたハヤトに、覚えずディレートは呟いた。

対するハヤトは忌々しげに舌打ちして、少しでも距離を取ろうと弾幕をばら撒きながら後ろへ跳ぶ。

弾幕を張りながら、しかしハヤトはそれが意味を為さないと分かっていた。

移動する彼女を撃ち落すのは難しい。

１００ｍはあろうかという距離を瞬きする間に詰めるその速度は、ハヤトが彼女の進路の見出して迎撃するよりも先に、彼女が肉薄して攻撃する事を可能とする。

進路を見出すのが不可能な以上、少しでも彼女の動きを阻害する

為には弾幕をばら撒くしかないのだが、それも雀の涙ほどしか効果を見せていない。

「――楽しくありませんわねっ！！」

歓喜の声を上げながら、ディレトが弾幕の雨の中に突っ込んでいく。

最短距離を最高速度で。弾を避ける事さえせずに、ただひたすらにハヤト目掛けて。

降り注ぐ魔力の雨が自身の身体を傷つけるが、そんなことなど意に介さず、笑い続けながら空を駆ける。

「馬鹿かっっつーの！！」

そんな彼女を戦慄と共に見ながら、ハヤトは迎撃しようとブレイブハートを持った左手を迫るディレトに向けた。

しかし――それは、遅すぎる。

「なっ！？」

「あははははっ！！」

向けた左手を、ディレトの右手が掴み、捻り上げた。

ハヤトがその痛みに顔を顰めた瞬間、ディレトは捻り上げた左手

を、そのまま上へと全力で押し上げる。捻り上げられたことで曲がって衝撃を逃がす事が出来なくなった関節は、加えられた力の前に、簡単に限界を迎えて鈍い音と共にへし折れる。
折れた骨は筋肉と皮膚を破り、肘と肩口から飛び出してその姿を晒す。

「が――ぁっ！！」

しかし、それで彼女の攻撃は止まらない。
がら空きになったハヤトの胸に流れるような動作で左手を添え、そこに魔力を集中させていく。
指の隙間から橙の光が漏れ、ハヤトがさっき撃った砲撃など比にならぬ程の魔力が溢れた。

《　！？　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！！　》

痛みで反応できないハヤトに代わり、ブレイブハートが咄嗟に身体にシールドを張り巡らそうとする。
しかしそれが完全に為されるよりも早く、橙色の光がハヤトの胸元で荒れ狂う。
殺傷設定のその奔流は、シールドの上からでも衝撃によってハヤトの胸骨に罅を入れ、肋骨を3本折り、内臓に多大なダメージを与えた。
シールドがギリギリで胸元を覆っていたからこそ致命傷には到らなかったが、それでもそれは深刻なダメージだった。

「ご……は……っ」

血を吐き出しながら、ハヤトが魔力の奔流に押し流されて空中に放り出される。

そのまま魔力と共にビルを2つ突き抜けて、その先にあった高架へと叩きつけられ、何度も地面をへこませながらバウンドして転がっていく。ディレトはそのハヤトを追いかけて空を駆け、転がる彼へと視線を向けた。

「IS“ツインブレイズ”解除」

言葉と共に二振りの刃は消え、2秒ほど間を置いて彼女の瞳が怪しく光る。

そして――

「IS“エクスプロード・アイ”……起動（トリガー・オン）」

ハヤトが転がる先に不可視の魔力が集まり、爆ぜた。

爆発による衝撃で、バウンドしていたハヤトの身体が今度は逆側――今までバウンドしてきた方向へと吹き飛ばされる。それを見たディレトは嬉しそうに口の端を歪め、ハヤトの身体が吹き飛んでくる先へと着地する。

そして、右手の薬指に嵌めた銀の指輪に向けて言葉を放った。

「イービルハート、モード“GN（ガンナックルジェットエッジ）&JE”」

《All right.》

光と共に彼女の右手と両足に、スバルと似たようなデザインのナックルとローラーが装着される。

そのままディレトは、腰を屈め、まるで走り出す前のような態勢にを取る。そして――

《「――Action!!」》

一際鋭い声と共にジェットエッジが炎を吐き出し、トップスピードで走り出す。

ディレトが拳を振り上げ、トドメとばかりに回転しながら宙を舞うハヤト目掛けてガンナックルを嵌めた右腕を突き出した。

それはハヤトの身体を突き抜けて、彼の命を刈り取る筈だった。

――だが。

「……ぎ、ぐっ!!」

「!?」

その拳を、今まで衝撃にされるがままだったハヤトが魔力を纏わせた右足を上げてガードして見せた。
しかしそれでも、所詮は攻撃力と防御力に差がありすぎる攻防。
ディレトの拳はハヤトの命を断つことこそ出来なかったが、代わりに彼の右足の骨を粉々に砕く。

「舐め――」

2人の身体が衝撃で再び離れようとした瞬間、ハヤトが右手を伸ばしてディレトの頭頂部の髪を掴む。

「――んなぁっっ!!」

そのまま、最後の抵抗とばかりにディレトに対して頭突きを見舞う。
ゴッ、と鈍い音が響き、次の瞬間2人の身体はそれぞれ逆方向へと吹き飛んでいく。

「ぐ、ガ……っ!!」

「……くっ」

ハヤトの身体はそのまま地面へと叩きつけられ、ディレトは空中で態勢を整えて着地する。

それはたった数秒の間に起きた、一瞬の攻防。
人間が数回瞬きをするかしないか。その程度の一瞬で、ハヤトの身体は深刻すぎるダメージを受けた。
だというのに、彼がディレトに与えたダメージは微々たるモノ。
少しばかりの外傷と、頭突きによって裂けた額だけ。

決してハヤトが弱いわけではない。
ブラスターシステムによる強化によって、少なくとも今の彼は陸戦ＡＡ並みの強さを持っている。
だが、ディレトは規格外すぎた。

純粋に、どこまでも純粋にありとあらゆるモノを破壊し、蹂躙する為だけの存在。
その存在と戦って、実力的には一局員とそれほど変わらぬ彼がこうして生きているだけで、賞賛に値するだろう。
ハヤトとて、それは痛いほどに理解している。だからこそ――

（……く、そっ。こりゃ、本気でヤベェ……な）

――地面に叩きつけられ、激痛に苛まれながら、ハヤトは思考する。
このまま寝ていられたらどれだけ楽だろう。
意識を失ってしまえば、もしかしたら死んだと思ってディレトが居なくなるかも知れない。
そうすれば――化け物（ディレト）から逃げられる。

彼がそう考えてしまうことを、誰が非難できただろう。
自分が持つ最高のカードを切って、これ以上は無い戦いをして――それでも、届かない。
ハヤトの心が言い知れぬ恐怖に怯えたとして、誰がそれを悪と断罪できるのか。

（――けど、よぉ）

恐怖に震える心を押し潰し、激痛に歯を食いしばって耐え、動かぬ左手からブレイブハートを右手に持ち替え、それを杖の代わりに立ち上がる。
マトモに動くのは左脚と、痛み止めが切れて痛み始めた右腕のみ。
さっきのように戦うことは勿論、普通に動く事さえ難しい。

（――けどよぉ）

死が隣に来ているのを感じながら、知らず、笑いが漏れた。

（けどよぉっ！）

右手の痛みに構わずブレイブハートを握り締め、痛みに霞む視界でディレトを睨む。

（俺は、２０分もたすって言ったんだ。やらなきゃカッコつかねぇよなぁ！）

口の中に溢れた血を、地面に叩きつけられて折れた歯と共に吐き出す。

頭突きを当てた額は割れ、そこから流れた血が彼の左目を塞ぐ。

それでもハヤトは、その緑がかった青い瞳で敵を見る。

「ブレイブハート……げほっ、ブラスター、２ッッ（セカンド）！！」

≪Ａｌｌ ｒｉｇｈｔ. Ｂｌｕｓｔｅｒ ｓｅｃｏｎｄ.≫

薬莢が５つ吐き出され、ハヤトの身体から更に魔力が噴き出す。

更に強くなった負荷によって、深刻なダメージを受けた身体が軋み、悲鳴を上げていく。

だが、ハヤトは表情を変えずにディレトを睨みつける。

視線の先で、ディレトはハヤトに頭突きを喰らった額を擦り、流れた血を見て面白そうに眺めていた。

立っているので精一杯な彼とは逆に、その姿からはダメージらしいダメージを受けているようには感じられない。

「……本気で、化物、かよっ……げほっ！」

身体の中を荒れ狂う魔力が、ダメージを受けた内臓を掻き回す。
その痛みに、ハヤトの意識が朦朧となった。

「！　……――――、――――！」

魔力が更に跳ね上がったハヤトに気付き、ディレトが嬉しそうに口を開く。
だが、朦朧としたハヤトの耳に、その言葉は届かなかった。

「こりゃ、本格的にやべぇなぁ……」

霞む視界と朦朧とする意識の中、ハヤトは小さく毒づいた。
その彼の脳裏に、オレンジ色の髪の少女――ティアナの笑顔がよぎる。

（……ったく、何でこんな時に、思い出してんだか）

まるで走馬灯のようだと、ハヤトは苦笑する。
この状況では冗談にならない程に縁起でもない事なのだが、それでも、ハヤトは笑う。

「ホント、縁起でもねぇ。縁起でもねぇけど……」

覚えず呟いて、腰を落とす。
目の前では、ディレトが拳を構えて同じように腰を落としていた。
そして――

「童貞のまま、死んでなんざいられねぇんだよぉっっ！！！！」

睨み合う両者はその声を合図にして、地面を蹴った。

第５６話　『死闘　３』（後書き）

思ったとおりに話を書けない……。
どうも、ラモンです。

今回は時間がかかったわりに、ダラダラと長くなっちゃった臭がプンプン……。
頭の中にある展開を、上手く文章で表すことが出来ない……ｏｒｚ
文章を書く難しさを痛感しましたねぇ。

はい。そんな訳でハヤト君瀕死の巻でした。
あれ？　前回の後書きでハヤディレは書かないって言ったのに……。
ま、いっか☆
とりあえずハヤティア要素をちょっとだけ入れておきました。え？
真剣勝負中にいらないって？　……まぁそう言わずにｗ

今回一番苦労したのは、エリキャロＶＳルーテシアでした。
基本原作通りなんで書かなくてもと思ったんですが、この後の展開の為にどうしても書かなきゃいけないというジレンマ。
ちなみにヴィータ、なのは、フェイトの描写も書かなきゃいけないときてます。
畜生！　誰か俺の代わりに書いてくれ！！

ハヅキ
「無責任すぎるだろう」

あ、どうも。本編ではもう後日談まで出番の無いハヅキさん。

ハヅキ
「うむ。しかしディレトはアレだな。
　１００度殺しても殺し足りないなァ……フフフ」

落ち着いてください。
まぁ、普通に考えたらこんなもんですよ。
彼我の戦力差はもの凄いですし。

ハヅキ
「奴は後でヤキを入れておこう。
　それはそれとして、ティアナとスバルもそれなりにピンチだな」

そーですね。個人的に、あの3人がティアナに負けたのって、戦術がダメだったからだと思ってるんで。
だから、スバルを加えた代わりに指揮能力が高いチンクを入れて、バランスを取った訳ですよ。

ハヅキ
「ふむ。私が行けば5秒で終わるのだが……」

物語を破綻させないでください。
えー、次回はなのは、ヴィータ、フェイト＋ハヤディレの予定です。
予定は未定なんで、また変わるかも知れませんがw
次回はもうちょっと上手くストーリーを展開させたいと思います。

それではまた、次の話で。

ハヅキ
「ディレトか？　ちょっと顔を貸せ。今すぐだ」
……本編に影響出さないでくださいよ？

第57話　『死闘　4』（前書き）

※つ、つかれた……

第５７話　『死闘　４』

ｓｉｄｅ：―

――ブヅン、と。

筋肉が切れる音が空気を揺らす。

「ぁぎっ――がぁっ！？」

感じた事の無い痛みに、ハヤトの動きが一瞬止まる。
そこを狙って、炎を吐きながら風を切ってディレトの回し蹴りが、骨の覗く左肩へと叩き込まれた。
骨の砕ける音と共にハヤトは地面に向けて斜めに叩きつけられ、コンクリートを凹ませ、一度バウンドしてから転がる。

「ぐ……ぉ……」

叩きつけられた衝撃で脳が揺らされ、意識が飛びそうになる。
しかしディレトはそれを良しとせずに、転がった彼の鳩尾目掛け回し蹴りの勢いそのまま、更に加速させた右足を蹴りこむ。
蹴り足が肉にめり込むくぐもった音が響いて、７０ｋｇ近くあるハヤトの身体が紙切れのように宙を舞った。
――その、瞬間。

「ディバイン……バスターーーーーーッッッ！！！」

「！」

血反吐を吐きながら宙を舞うハヤトが右手に握ったブレイブハートをディレトに向け、真紅の砲撃を放つ。

不意を突かれたディレトは、しかしそれでも余裕を持ってシールドを展開し、その砲撃を受けて止めた。

なのはのディバインバスターにも劣らぬ威力のソレは、ディレトの身体をシールドごと吹っ飛ばす。しかし彼女は涼しい顔で空中で態勢を整え、何事も無かったかのように着地して見せた。

「がっ……ぐっ……っ！！」

対するハヤトは碌な受身も取れずに地面にぶつかり、そのままゴロゴロと転がって、瓦礫に突っ込んで停止した。

その拍子に、腰のホルダーに入れておいたカートリッジが入ったマガジンが外れ、カシャンと軽い音を立てて彼の目の前に落ちる。

そのマガジンに視線を向けたハヤトの耳に、ブレイブハートの音声が届いた。

《　マガジンが空になってしまいました、マスターハヤト　》

「……わか、った……げほっ」

ギシギシと軋む身体に鞭打って、動く右手でマガジンを握り、口元に咥える。

「まだ立ちますの？」

「まだまだ、これはら……だっふーの」

マガジンを咥えたまま、ブレイブハートを杖にヨロヨロと立ち上がってディレトを睨む。

同時に空になったマガジンがブレイブハートから外れて地面に落ちる。

ハヤトは咥えたマガジンを、マガジンの差込口に向けて勢いよく差し込んだ。

ガチン、と金具の嵌る音がして、同時に3個の薬莢がリロードされて空を飛ぶ。

リロードされたカートリッジから過剰ともいえる魔力が迸るが、ブラスターシステムはその全てを貪り喰らい、ブースト用の魔力に変換してハヤトの身体を更に強化する。

「グ……ゥァっ！！」

再び筋肉が切れる音がして、右足の腿の部分が鮮血に染まる。

断裂した筋肉が内出血を起こし、皮膚を裂いてバリアジャケット

を染めたのだ。

「あと、何分……っだ、ブレイブハート」

《　維持限界まで、あと3分42秒です　》

維持限界――ハヤトの体が壊れないギリギリの時間。
だが、たった3分強でディレトを倒せるのか？

「……っ」

頭をよぎる嫌な考えを意識の奥底に閉じ込め、ハヤトは再び地面を蹴る。
その瞬間、ブレイブハートに小さな罅が一つ入った。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第５７話　『死闘　４』

「うおおおおおおおっっ！！！」

揺り籠の駆動炉前通路。
そこに、咆哮と鉄を叩き潰す音が響く。
装甲をひしゃげて吹き飛び、壁に叩きつけられて沈黙したのは今まで見た事の無い型のガジェット。
両手が刃のように鋭く、４つの足を持つそれは――ガジェット？型。
かつて、なのはに半死半生の傷を負わせた機体である。

「はぁっ……はぁっ……」

荒い息を吐くヴィータの周りには、その？型ガジェットの残骸が無数に散らばっていた。
稼動している機体は一つとして存在しない。
？型は、ガジェットの中でも戦闘に特化された機体だ。
それを１人でここまで破壊しつくしたヴィータは、流石と言うべきだろうか。

「……げほっ」

だが、無傷という訳ではない。
全身のいたる所に裂傷を負い、胸には一際大きな傷が開いて血が溢れている。手に握ったグラーフアイゼンも、一目でかなりの損傷だという事が見て取れる程だ。
普通なら倒れてもおかしくない傷を負い、しかしそれでも彼女は足を踏み出す。

目指す先にあるのは、駆動炉。
ヴィータはグラーフアイゼンを構え、一歩ずつ足を踏み出していく。
そして――。

「これが……駆動炉」

通路の行き着いた先、一際大きな空間の中にそれは鎮座していた。
妖しい紫の輝きを灯す巨大なプリズム。
ゆっくりと回転しながら動き続けるそれこそ、聖王の揺り籠を動かす心臓部。

「これをぶっ潰しゃあ、このデカブツも……止まる、よな」

荒い呼吸を繰り返しながら、ヴィータは傷だらけのアイゼンを握りしめる。

「アイゼン、リミットブレイク……やれるよな？」

《Ｊａｗｏｈｌ．》

ヴィータの問いに答えたアイゼンから、薬莢が3発吐き出される。

《Ｚｅｒｓｔ?ｒｕｎｇｓｆｏｒｍ.》

光と共に、鉄槌の先がより破壊に特化した形状へと変わっていく。
ハンマーの片方にはドリルが付加され、逆側には加速のための噴射口が、そして穂先そのものはヴィータの身体ほどに巨大なものへと。

「っ！」

巨大なハンマーを手に持ち、ヴィータは飛び上がって魔方陣を展開する。
今の自分に出来る、最大最強の一撃を打ち込む為に。

「ツェアシュテールングスッッ！！！」

アイゼンを振り上げ、カートリッジを更にロードする。
同時にドリルが音を立てて回転を始め、噴射口からは炎が迸り、爆発的な加速をその巨大な穂先に与えた。
ヴィータはその加速に任せて、プリズム目掛けて鉄槌を振り下ろす。

ドリルがプリズムに触れた瞬間、激しい火花と魔力光が飛び散る。
ぶつかった瞬間に、再び薬莢が２つ吐き出され、破壊の鉄槌は更にその威力を増していく。

「ハンマァァアアアアッッッ！！！！！」

渾身の咆哮が轟き、爆音と共に煙が上がる。

「はぁ、はぁ……」

振り下ろした格好のまま、煙の先を見つめるヴィータ。
手応えはあった。破壊まではいかなくとも、少なくとも少しはダメージを与えた筈。
彼女の頭にはそんな思考があった。しかし――

「……な！？」

煙が晴れた先に見えたのは、罅一つ入らずに輝き続けるプリズムの姿。
まるでヴィータの攻撃など無意味だと言わんばかりに、ゆっくりと優雅に回転を続けていた。
そして、ヴィータがもう一度アイゼンを構えるよりも早く、駆動炉に警報ランプとブザーが鳴り渡る。

『危険な魔力反応を検知しました』

繰り返される警告と共に、ヴィータを囲むように無数のキューブが発生し、辺りを埋め尽くしていく。

『防衛モードに入ります。
これより駆動炉に接近するものは、無条件で攻撃されます』

「……上等だよ」

防衛用のキューブに囲まれ、それでもヴィータは笑って呟いた。
刹那、辺りを埋め尽くすキューブの群れから、無数の閃光が彼女目掛けて奔った――。

◇◇◇◇◇

玉座の間の正面通路。
そこを、なのはが飛翔して駆け抜ける。

「……くっ」

飛びながら、レイジングハートを持つ左手を押さえる。
正面通路の入り口を守っていたディエチとの砲撃戦で使ったブラスターシステムの反動が、彼女の身体を蝕む。
けれど、彼女は止まらない。

《Ｍａｓｔｅｒ．》

「平気。ブラスター１は、このまま維持。急ぐよ、レイジングハート！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．》

レイジングハートの声に気丈に答え、なのはが飛翔する速度を上げる。
その彼女の手から、スフィアが３つ後ろに流れていった。

《あの扉です》

「うん」

暫く飛び続けた彼女の先に、閉じられた扉が映る。
なのはは一切スピードを緩める事無く、レイジングハートを構えて扉を砲撃で吹き飛ばす。
吹き飛んだ扉と、もうもうと立ちこめる煙の中に飛び込み、煙を突き抜ける。

その先に――

「いらっしゃ～い。お待ちしてましたぁ」

レイジングハートの切っ先を向けられても、涼しい顔をしたクアットロ。

そして、椅子に縛り付けられ、俯いたままのヴィヴィオ。

ぴくりとも動かないヴィヴィオを見て、なのはは奥歯を噛み締めクアットロを睨みつける。

「わざわざこんなところまで、無駄足ご苦労様ぁ」

その視線を涼やかに受け流し、クアットロは嘲笑を浮かべた。

「……大規模騒乱罪で、貴女を逮捕します」

怒りを押し殺し、静かな声で告げる。

しかしそれでもクアットロは嘲笑を崩さない。

「大事な娘を前にしても、表情ひとつ変えずにお・し・ご・とですかぁ？

いいですねぇ、その悪魔じみた正義感。思わず憧れちゃいますわぁ」

嘲笑う声で喋りながら、ヴィヴィオの座る玉座にしなだれかかり、彼女の頬にクアットロの手が伸びる。
それは許せないとばかりに、なのはがクアットロ目掛けても桃色の光を奔らせた。
クアットロを襲う桃色の砲撃は、しかし彼女を仕留めることはできなかった。

「！」

空気を裂いたその砲撃が当たる瞬間、クアットロの身体は幻の様に消え、砲撃は何も無い空間を通過した。

『で・もぉ……これでも、まだ平静でいられますぅ？』

驚くなのはの耳に、通信を通して聞こえてくる声。
視線を上げれば、中空に映るモニタ越しにクアットロが癇に障る笑みを浮かべ、なのはを見下ろしていた。
なのはが何かを言おうと口を開けた瞬間、今度は別の声が彼女の鼓膜を震わせる。

「ぅ……ぁあああああっっ！！！！」

「ヴィヴィオ！？」

ヴィヴィオが座る玉座。
そこから、少女の悲痛な叫びが玉座の間に響く。
少女が座る玉座の両側に浮かぶ2つの球が放電を初め、自分の中で暴れる魔力にヴィヴィオが声を漏らす。

なのはが慌てて駆け寄ろうと走り出したのと同時に、ヴィヴィオから極彩色の光が溢れ出し、物理的な力となって駆け寄ろうとしたなのはを押し返す。
それはヴィヴィオから溢れた魔力の奔流。
抗おうとしたなのはの体が、少しずつ後ろに押され始め、最終的に弾き飛ばされる。

『そうそう、ついでに一ついい事教えてあげる』

弾き飛ばされ、倒れるなのはに向けて嘲り混じりの声で告げてきた。

『私達ナンバーズでいっちばん強いディレトちゃん。あの子がどこに居るか、わかります?』

「どこ、って」

『揺り籠とドクターのアジト。貴女達の主力はこの2つに割り振られた。
さ・て、一番実力的に手薄なのはどこかしらぁ?』

「……っ！　まさか！？」

なのはの頭に、想定していた中でも最悪の事態が駆け巡る。
それを裏付けるように、モニタのクアットロが酷薄な笑みを浮かべた。

『そのと～り！　貴女の大事な大事な教え子ちゃん達のト・コ・ロ・ですよぉ♪』

両手を合わせ、子供を誉めると

『し・か・もぉ……ディレトちゃんの相手をしてるのは、いっちばぁん出来の悪いボウヤなの』

「ハヤト君が！？」

『あら酷い。“出来が悪いボウヤ”って言っただけなのに、名指しするなんて』

「ふざけないでっ！」

身体を起こし、歯が砕けそうなほどに噛み締めてクアットロを睨む。

『ふふ、いい顔になったわねぇ。エースオブエース？
澄ましてたさっきまでの顔なんかより、ずっと魅力的♪』

「……っ。あの子に、何をしたの！？」

『気になるぅ？　それじゃあ、特別に見せてあげちゃおうかしら。
大サービスで、貴女だけじゃなく……あのボウヤに関係している全員に、ねぇ？』

ケラケラと耳障りな笑い声と共に、玉座の間に無数のモニタが開いた。

◇◇◇◇◇

「……くっ！」

飛来したブーメランブレードをザンバーの刃で弾き、同時に突撃してきたトーレの拳を、紙一重で避ける。
その後フェイトは2人に向け、牽制の為に雷を帯びた魔力弾を撃ちだした。
それぞれが爆発と共に飛び出し、トーレとセッテがフェイトを挟んで着地した。フェイトはその中央で、自分の周りに魔力弾を展開しながら呼吸を整える。

（ＡＭＦが重い……早くこの2人を倒して、先に進まなきゃいけないのに）

呼吸を繰り返しながら、苦々しい表情でフェイトは考える。

この2人は強い。少なくとも加減したままでは勝てるかどうか分からない程に。

だが――

（ソニックもライオットも、まだ使えない。アレを使ったら、もう後が無くなる。

スカリエッティまで辿りつけなかったら最悪だし、逮捕できても、他の皆の救援や援護に回れなくなる。

何より、アレはあの戦闘機人――ディレトが出てきた時にとっておかないと……）

彼女がそこまで考えた時、不意にフェイトの目の前にモニタが開く。

「「「！」」」

そのモニタはトーレとセッテも予期していなかったのか、3人の注意がそのモニタに向く。

そこに映っていたのは――

『いやぁ、御機嫌よう。フェイト＝テスタロッサ執務官殿』

「スカリエッティ！！」

誰あろう、フェイトが追い続けた犯罪者――ジェイル＝スカリエッティ。

紫銀の髪を揺らし、楽しげな笑みを張り付かせたその男は、口の両端を持ち上げて言葉を続ける。

『私達が起こした祭り、楽しんでくれているかね？』

「何が……何が祭りだ！　今も地上を混乱させている重犯罪者が！！」

憤るフェイトの言葉に、心外だと言わんばかりの表情でスカリエッティは肩を竦める。

『重犯罪？　人造魔導師や戦闘機人計画の事かい？
それとも――私がその根幹を設計し、君の母君、プレシア＝テスタロッサが完成させた『プロジェクトF』のことかい？』

「その、全てだ！」

『いつの世でも、革新的な人間は虐げられるものだね』

やれやれと首を振りながら、スカリエッティはそれでも笑みを消さない。
それが、フェイトを苛立たせる。

「お前はそんな傲慢で、人の命や運命を弄んで……」

『貴重な実験材料を粗雑に扱った事はないさ。なにせ実験材料の確保には金も手間もかかる。
キチンと吟味を重ねて、有益な実験動物にしてあげたのさ。彼も――ね』

「彼……？」

いぶかしむフェイトを見て、スカリエッティがくつくつと低く笑う。

『そう、君の子供達が“兄”と慕っているあの少年――ハヤト＝ロックウェルさ』

「ハヤトに……何をした！？」

『何をした、か。大したことはしていないよ。
彼には私の最高傑作――ナンバーズ？？、ディレトのデモンストレーションの相手をして貰っている。勿論、１人でね』

「！？」

その言葉に、フェイトの全身が粟立った。
ディレトの情報は、彼女もよく知っている。リミッター無しの自分達と同等、いやそれ以上の存在だと。
少なくとも、ハヤト1人でどうにかなる相手では無い。事実、彼は以前ディレトと相対し、完膚なきまでにやられたのだから。

『彼は君たちの部隊で最も弱い。けれど、今揺り籠の周辺で戦っている脆弱な一般局員よりは強い。
……ふふふ、デモンストレーションには丁度いいと思わないかい？』

「貴様ぁぁっ！！」

激昂したフェイトが、怒りを魔力に替えて爆発させる。
バチバチと火花を上げ、ザンバーの刃が雷を帯びていく。

「来るぞ、セッテ！」

「はいっ！」

動くと予感したトーレとセッテが構える。
そして、彼女が動くのと同時に、スカリエッティが再び指を鳴らした。

地面を踏み切って跳び上がるフェイト、その彼女を、地面から伸びた紅い魔力の糸が追いかけ、フェイトの足と火花の散るザンバーの刃を絡め取る。

「っ！」

中空でいきなり動きを止められたフェイトが、驚きの声を漏らした。

そして彼女たちがいる通路の奥から、ゆっくりとした靴音と、耳障りな哄笑が響く。

カツン、カツンと響くその音に、トーレ、セッテ、フェイトの視線がその音の主を探ろうとそちらを見る。

「普段は温厚かつ冷静でも、怒りと悲しみには、直ぐに我を見失う」

現れたのは、ついさっきまでモニタ越しに話をしていたスカリエッティ。

彼はトーレのすぐ側までやってくると、紅い魔力の糸に捉えられたフェイトを見上げ、禍々しいデザインのグローブを嵌めた右手を握り締める。

すると、捉えられていたザンバーの刃が軋みを上げ、パリンと高い音を立てて砕け散った。

「なっ！？」

高密度の刃を一瞬で破壊された事に、フェイトが驚き、注意をスカリエッティから刃に逸らした。
瞬間。スカリエッティは今度は右手を彼女の方に向け、赤い魔力弾を形成する。

「しまっ――」

フェイトも直ぐに自らの犯した失態に気付くが、遅い。
心の間隙を突かれたフェイトは、防御する事無く被弾して、地面に堕ちる。
再びスカリエッティが右手を振るえば、今度は紅い糸が檻となって彼女を閉じ込めた。

「ぐっ……！」

「君も共に見ようじゃないか。彼の命が壊れる、最高のショーをね！」

閉じ込められたフェイトを哄笑と共に見ながら、指を鳴らす。
その音に呼応して、モニタに映像が映る。
それは――

「……っっ！！！！！」

血塗れのハヤトが、殴り飛ばされ、襤褸切れの様に宙を舞う瞬間だった。

◇◇◇◇◇

その映像は、戦いが続く全ての場所に映し出された。

「お、オイ……」

「何だよ、あの映像？」

揺り篭の周辺の空を埋め尽くすように。

「……なっ！？」

そこで、声を枯らして航空魔導師隊に指示を飛ばしていた、はやての周りに。

「ハヤト君！？」

玉座の間で、ヴィヴィオから溢れる光の奔流に耐えるなのはの前に。

「そんな……っ」

紅い檻に閉じ込められた、フェイトの前に。

「……な、んだよ、コレッ！？」

防衛用のキューブを全て叩き壊し、満身創痍で立つヴィータの側に。

「兄さん！？」

「お兄ちゃん！？」

「……？」

対峙するエリオ、キャロ、ルーテシアを囲むように。

「嘘……！？」

チンク達と睨みあうスバルの横に。

そして――

「……ハヤ、ト？」

彼の恋人――ティアナに見せ付けるように。

side: |

第57話　『死闘　4』（後書き）

なのはとヴィータ主役らしい場面多すぎワロタw……ワロタ……。
どうも、ラモンです。

えー、今回はなのは、ヴィータ、フェイトの戦いを書いた訳ですが……。
今回大変すぎました。
なにが大変だったかと言えば、なのはとヴィータの場面。
あんたら書かなきゃいけない描写多すぎ！　全部書いたら1人1話使っちまうっつーの！！！
なので、どこを削ってどこを描写するか、大いに悩みました。

何十回にも及ぶ脳内会議の結果、可哀想ですがディエチの出番は丸々カット。
あとガジェット？型さんの活躍も丸々カットと相成りました。
期待してた読者様達ごめんなさい。
でも、アニメ本編のをそのままダラダラ書くのもアレかなと思ったんで。
気になる方は、アニメをレンタルなりして見て下さいね！（丸投げ）

ひとつ気がかりなのが、スカっちと陰険眼鏡がちゃんと糞野郎に書けたかどうかですねぇ。
台詞とかにちょこっとアレンジしたものの、一応本編のままなんで。
個人的に外道さを当社比2割増でお送りしました。
ま、糞野郎っぽさは次回以降が本領発揮ですけれど。

次回はそろそろクライマックスに向けて、一番盛り上がるところを書こうと思います。

多分、ハヤトの主人公らしさが最大級に高まる……かなぁ？
今まで蓄積した主人公ポイントを全消費する勢いで、上手く書けたらいいなと祈ってますｗ

次回も頑張りますが、そんなに期待せずにお待ちくださいね。
それではまた、次の話で。

第５８話　『死闘　５』

激痛と衝撃、浮遊感、そしてまた激痛と衝撃。
何度目か分からないそれを受けて、肺の中の空気が全て押し出される。
視界がチカチカと明滅して、同時に吹っ飛びそうになる意識を全力で手繰り寄せれば、感じるのは硬いアスファルトの感触と、俺の血の匂い、口の中に広がった血の味、ディレトの放った魔力弾のオレンジ色の光、それが着弾する音。

――オーケー、まだ五感は生きてる。

なら、止まってる暇はねぇ。
動く左足と右腕で何とか身体を起こし、即座に態勢を整える。まぁ、実際にはもぞもぞとみっともなく動いてた、ってのが正しいけれど、そこは表現の違いってことで勘弁してもらおう。
そして何とか立ち上がり、もう一度ディレトと対峙する。
睨む俺に対して、ディレトは呆れたような笑いを漏らしながら言葉をかけてきた。

「今ので２５回目。次はどんな手品を見せてくださるのかしら？」

「見ての……お楽しみ、だ……」

手品、手品ね。
手を変え品を変え、思いつく限りありとあらゆる攻撃方法を試してみた。

けれど、そのどれもがアイツには通用しない。
これだから高ランクは嫌だ。こっちが必死に考えた策を、力ずくでねじ伏せていきやがる。

「でも、そろそろ気付いているのではなくて？　自分では私（わたくし）には勝てないって」

「勝手に……決め付けてんじゃ……ねェよっっ！！」

吼えながら、地面を蹴ってアクセルシューターをばら撒く。
クロスレンジが苦手な射撃型の俺には、格闘戦なんて選択肢はねぇ。足が止まる砲撃も、アイツ相手じゃ使えねぇ。
通用しないってのは、痛いほど痛感してる。
けど、俺に出来るのはこれしかない。だから、何度でも何度でも繰り返す。

５０発で駄目なら１００発撃ち込めばいい。１００発で駄目なら、１０００発撃ち込めばいい。ぶっ飛ばされたら、また立ち上がって動けばいい。
諦めるな、思考を止めるな、絶望するな。
勝機は必ずある。それが例え気の遠くなるほど小さな確立でも、ゼロじゃないならそれだけで十分だ。

「“キャンセラー”」

「……っ！！　がぁっ！！？」

一瞬で俺の弾幕が消され、その直後に視界が上下に回転する。
下からのアッパーで、思いっきり殴り飛ばされたらしい。口の中で歯と歯がぶつかり合い、奥歯が1本折れた。
そのまま俺は空中を何回か回転してから地面に叩きつけられ、更に魔力弾でめった撃ちにされる。咄嗟にシールドを張ったお陰で被弾は少なかったが、それでも当たった分のダメージは大分酷い。
投げ出された地面で、俺の全身を骨の折れた痛みと、筋肉が切れる痛み、その他諸々が混ざった激痛が焼く。

だけど――――まだ動ける。

それを理解した俺は、右手に持ったブレイブハートを杖として身体を支え、左足で地面を踏みしめた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第５８話　『死闘　５』

ｓｉｄｅ：―

「……っ」

はやては、知らず唇を噛み締めていた。
それは彼女の目に映る映像そのものへの怒りと、この映像が戦況に齎す影響に対する焦り。
彼女が危惧した影響は、すぐに現れた。

「なんだよ、これ……」

「こんなの……相手に出来る訳ねぇじゃねーか」

彼女の後ろから、震える声が聞こえる。
圧倒的なまでのディレトの強さを見せ付けられ、一般局員の間に動揺が広がりだしたのだ。
元々揺り籠という化け物を相手にしていた局員達が絶望するのに、それほどの時間はいらなかった。
あちこちで戦線が崩れ、ガジェットの群れに蹂躙されていく。

「！　戦線維持！　皆、あと少し踏ん張って！！」

『は、はい……』

このままではいけないと、はやてがすぐに声を張る。
だが、彼女の声に返す一般局員達の声は暗い。

（……ハヤト君）

それに焦りながら、はやてはモニタに映るハヤトに視線を送る。
そこには、再び吹き飛ばされたハヤトが映っていた。

◇◇◇◇◇

「……」

その映像を、チンクは静かにダガーを構えて見ていた。
ここまでは事前に言われていた通りの展開だ。
自分達はタイプゼロと幻術使いの相手をし、例の少年の映るモニタが現れたら攻撃を中止、成り行きを見る。
その後、戦意を失った2人を撃破、タイプゼロを回収。

彼女たちがスカリエッティから聞いていた作戦は以上だ。
チンク自身としては、そんな事をせずとも勝利する自信はあったのだが、創造主たるスカリエッティの命令には逆らえない。
だからチンク達は言われた通りに攻撃をやめ、自分達の存在など忘れたかのようにモニタに見入る2人を見ている。

「……」

スバルは呆然とモニタを見つめ、両手をだらんと下げている。
そこに映る映像を、認めたくないかのように。

「……ぁ」

ティアナはへたり込み、口元を手で覆っていた。
目には涙が浮かび、身体は小刻みに震え、顔色は蒼白だ。

（……ドクターも、酷なことをなさる）

2人の姿に、チンクの胸が少し痛んだ。
今スカリエッティ達がしているのは、死体に鞭を打つような行為。
任務の一環と納得はしているが、ここまで2人の少女を傷つける必要があるのか、とも考えてしまう。

「チンク姉」

「なんだ、ノーヴェ？」

「あたしら、最低な事してるのかな」

「……ドクターの命令だ。我らはただ、それに従うのみ」

「……そう、だよな」

チンクの側ではノーヴェもウェンディも、普段は無表情なディードでさえ、眉潜めて俯いている。
元々感情豊かだったノーヴェとウェンディはともかく、あまり感情の動きを見せなかったディードの表情に少し驚きながらも、チンクはそう言い聞かせる。
けれど――胸の痛みは、終ぞ止まる事は無かった。

◇◇◇◇◇

「スカリエッティ……ッッ！！！」

ギシリ、と歯を砕けそうな程に噛み締めたフェイトがスカリエッティを睨む。
彼女の目の前には、ハヤトがボロボロにされている映像が映るモニタ。

「ふむ、存外に彼も粘るものだね。それとも、ディレトはまだ遊んでいるのかな？
私の予想では、既に死んでいるものと思っていたんだが」

だが、スカリエッティはそんな彼女の視線など意に介さず、画面

を見ながら呟く。
画面の向こうのハヤトは、１００にも及ぶ真紅の魔力弾を撃ち出し、それが通じずに吹き飛ばされる。
その度に立ち上がり、再び立ち向かっていく。
それが滑稽に映ったのだろうか、通路にスカリエッティのクツクツという笑いが響く。

「何がおかしい！？」

「ん？　あぁこれは失敬。彼が私の想像よりも頑張っていたのでつい、ね」

「貴様……『ぐぁぁぁっ！！』……ハヤトッ！？」

喰いかかろうとしたフェイトの耳に、ハヤトの苦悶の声が届く。
視線をモニタに戻せば、ハヤトが橙色の砲撃に飲み込まれ、吹き飛んでいく光景が見えた。
だが、今度は地面に叩きつけられることなく、何とか空中で態勢を整えて着地する――が、ダメージはあったのだろう、着地と同時に膝をつき、荒い呼吸を繰り返していた。

「ハヤト、逃げてっ！！」

フェイトは思わずそう叫ぶ。
誰の目から見ても、このままでは彼が殺されるのは確実だ。

そんな結果を見るくらいなら、あの戦闘機人を突破させた方がいい。
元々情に弱いフェイトがそう考えてしまうのも、無理は無いだろう。
だが――

「ムダだよ。フェイト＝テスタロッサ」

スカリエッティの冷徹な言葉が、彼女の望みを断ち切った。

◇◇◇◇◇

「無駄……って、どういうこと！？」

虹色の奔流に耐えながら、なのはがモニタに映るクアットロに怒鳴る。
そんな彼女を見下し、馬鹿にするような笑いを浮かべて答えた。

『こちらからの声は、あっちに届いてないの。音声は向こうからだけの完全な一方通行。
貴女がいくら「逃げて～」なんて言ったところで、届くわけな・い・の♪』

「……なんで、ハヤト君なの！！」

『さっき言った通りですよぉ？　理由は、あのボウヤが貴女達の中で一番弱いから。

ボウヤと戦わせれば、ディレトちゃんの強さがより引き立つでしょお？　まぁ、前に私達に対して舐めた真似をしてくれた意趣返しっていうのもありますけどぉ？

それにしてもぉ……ホント、弱いですねぇ？　エースオブエースの教え子は。あんなので恥ずかしくないのかしらぁ？　……あっははははは！！』

エクスプロード・アイの爆発に巻き込まれたハヤトを見て、クアットロが高らかに笑う。

なのははその笑い声を聞きながら、ギリッと歯を噛み締めた。

どう見ても、このままではハヤトは遠からず殺されてしまうだろう。出来ることなら、今すぐ助けに行きたい。

けれど、ヴィヴィオを見捨てるなど、なのはには到底出来ることではない。彼女にとって、ヴィヴィオはそれ位大事な存在になっているのだ。

ハヤトとヴィヴィオ、教え子と娘。

その2人を天秤にかけなくてはいけない状況に、なのははどうしたらいいか分からなくなる。

そして、それこそスカリエッティとクアットロの目論見通りであった。

『ほ・らぁ、どうするの？　死に掛けの部下を取るか、愛しい娘を

取るか。
世の中は二者択一。どっちかを見捨てなさぁい？』

「……っ」

クアットロの言葉が、なのはの心を抉る。
板挟みになり悩むなのはを見ながら、クアットロはヴィヴィオだけに聞こえるように回線を開いた。

『陛下ぁ、いつまでも泣いてないでくださいな。
陛下のママとお兄ちゃんが、助けて～って言ってますよ？』

「……ままと……おにい、ちゃん？」

虹色の光に包まれたヴィヴィオが、ゆっくりと目を開く。
その目に映ったのは、なのはと――モニタに映る、血塗れのハヤト。

「なのは、まま……はやと……おにいちゃん」

『ママなんかじゃありませんよ、陛下。
そこにいるのは、陛下のママを攫って、お兄ちゃんを虐めさせている悪い悪魔』

「え……？」

クアットロの言葉に、ヴィヴィオが目を見開く。
母親と慕っていた人が、本当の自分の母を攫って、優しい兄を傷つけている。
普段のヴィヴィオならまず信じなかっただろう。
クアットロも、そこには当然気付いている。だからこそ、彼女はヴィヴィオに対してある事をしていた。

――薬による催眠暗示。

それによって、ヴィヴィオはスカリエッティとクアットロの言う事を、全て“正しい事”と認識させる。
言いなりにしてしまえば、後はどうとでも始末がつけられるから。

『その悪魔を頑張ってやっつけて、ママとお兄ちゃんを助けてあげましょう？
陛下の身体には、その為の力があるんですよ……心のままに、思いのままにその力を解放しなさいな』

「あ……あぁ……」

溢れ出していた虹色の光が、今度は逆にヴィヴィオに集中し始める。
その中心で、ヴィヴィオは自分の中の何かどす黒い感情が渦巻いていくのを感じた。
そして――

『ほぉらぁ、さっさとやりなさい？　愚かな傀儡のへ・い・か♪』

「あ……あああああああああああっっっっ！！！！」

その言葉が、最後の引き金を引いた。

◇◇◇◇◇

全ての戦場で、全ての場所で。

ハヤトがディレトに一方的にやられる姿は、ミッドチルダの全てに絶望を撒き散らした。

市街地では、管理局員が抵抗すら出来ない姿にパニックが起き、人々が逃げ惑っている。

戦場ではディレトの強さを見せ付けられた局員が、一人、また一人と戦意を喪失していった。

戦況はスカリエッティが計算したとおり、管理局が敗北するシナリオへと動き出し始めている。

「ぅ……げはっ！！」

地面に倒れ伏し、溢れた血を咳と共に吐き出すハヤト。
身体は既にボロボロだ。

口と鼻からは血が溢れ、バリアジャケットは破け、焼け焦げ、原型など留めていない。
体中に開いた傷から流れた血が、白を基調としたバリアジャケットを真紅に染め、吸いきれなかった血が服の先から地面に落ちて跳ねる。
日の光に輝いていた金髪も、煤け、血に汚れ、赤黒く変色し始めていた。

血が流れすぎたせいで視界は霞み、意識は何度も飛びかける。
生きているのが不思議、そう表現するしかない程に、今の彼はボロボロだった。

「……が……ぁ……っ」

それでも――。

「……ぎ…ぅ」

それでも、ハヤトは立ち上がる。
折れていない左足で地面を踏みしめ、右手に持ったブレイブハートを杖にして。
そして、霞む視界で敵を睨む。

「……理解できませんわ」

そんな彼を、まるで異物でも見るかのような目でディレトが見て小さく声を漏らす。

「どうして立ち上がりますの？　とうの昔に理解してるでしょう？　ハヤト様の拳は何日、何年、何世紀かけたところで私（わたくし）には届かないと。

それなのに、どうして立ちあがろうとするんですの？」

「決めつけるなって……言った、だろうがっ！！」

吼えながら弾を作りだす。しかし、今度はそれを撃ちだす暇さえ与えられずに蹴り飛ばされた。

前蹴りの要領で突き出されたディレトの足が、ハヤトの肋骨を砕いて彼の身体を吹き飛ばす。

蹴り飛ばされた身体は抵抗すらせずに、瓦礫の山に突っ込んで煙を巻き上げた。

◇◇◇◇◇

「……あああああああっっ！！！」

「「「「！」」」」

その映像を見た瞬間、今まで俯き、身体を震わせていたティアナがチンク達目掛けて突っ込んできた。
動くと思っていなかったチンク達は、その攻撃に一瞬反応が遅れてしまう。
だが――

「あああああああっっ！！！」

「っ！」

繰り出されたのは、感情に任せた大振りな攻撃。
ダガーモードの魔力刃を、４人はバックステップで難なく回避し、再び距離を取る。
しかし、ティアナは止まらない。

「うあああああああっっ！！」

ただひたすらに叫びながら、刃を振り回す。
まるで、癇癪を起こした子供の様に。

「……っの野郎ぉ！！」

「きゃあっ！！」

何度目かの刃をかわした後、ノーヴェがカウンター気味に彼女を蹴り飛ばす。

大振りした後のティアナは防御すら出来ず、蹴り飛ばされて元いた場所の瓦礫へと突っ込む。

もうもうと上がる煙を見て、スバルがティアナの名を叫びながらそこへ駆け寄った。

「「「「……」」」」

また向かってきてもいいように、チンク達はその光景を見ながら構えた。

しかし、煙が晴れた先に見えた光景と聞こえてきた声に、息を呑む。

「……どい、てよ」

聞こえてきたのは、弱々しい、泣き声。

「あたしは、アイツの……ハヤトのとこに……行かなきゃいけないんだから……」

見えたのは、涙を流しながら彼女達を睨むティアナの姿。

「お願いだから……どいてよぉ……っ！」

その悲痛な願いは、チンク達の心を深く抉っていった。

◇◇◇◇◇

「……また、ですのね」

蹴り飛ばした後、ヨロヨロと再び立ち上がったハヤトを見て、ディレトが溜息を吐いた。

「立ちあがったところで、貴方に待つのは痛い目にあうことだけ。貴方の体が、それを証明していますでしょう？

痛いでしょう？　苦しいでしょう？　なのに、何故立ち上がりますの？
貴方の相手は――ナンバーズ最強である、この私なんですのよ？」

ディレトは、本気で不思議に思っていた。
普通、ここまでされたら立ち上がる意志など失われている筈だ。
実力差を見せ付けられ、死に直結するような傷を幾つも負わされ。
しかし、それでもなお、少年は立ち上がる。

その姿に、ディレトは疑問と――恐怖を覚えた。

だから尋ねる。
何故立ち上がるのか。何故戦うのか。

「……ンなもん、決まってる……だろう、が」

答えるハヤトは、口から血を流しながら、それでも皮肉気に笑って見せる。

「皆、戦ってるからだよ」

「……皆？」

首を傾げるディレトに、ハヤトは折れた右足を引き摺りながら一歩ずつ歩き出す。

「揺り籠の被害を、食い止める、為に……部隊長と、管理局の仲間が、戦ってる」

一歩。

「揺り籠を、止める為、に……ヴィータ副隊長が……戦ってる」

また、一歩。

「俺の妹を助ける為に、高町隊長が……戦ってる」

瓦礫に躓いて、バランスを崩して倒れる。

「スカリエッティ、を、逮捕する為に……ハラオウン隊長、が戦ってる」

言う事を聞かない身体を無理矢理操って、身体を起こす。

「召喚士のガキを止める、為に……俺の、弟と、妹が……戦って、る」

ブレイブハートで身体を支え、歩き出す態勢をとる。

「お前の姉妹を止めるために、親友と――惚れた女が、戦ってる」

そして、再び一歩。

近くの瓦礫に身体を預け、ブレイブハートの切っ先をディレトに向けた。

「でも、ハヤト様のお仲間は、全員やられているかも知れませんわよ？」

「ありえねえ、な」

ディレトの言葉を、ハヤトは一言で切って捨てる。

「俺の仲間が……本気で戦って、勝てない相手なんて、いる、もんかよ……」

「それは、傲慢というモノではなくて？」

「傲慢じゃ、ねぇ……事実、だ」

息をする度に、折れた肋骨と胸骨が痛む。
その痛みに顔を歪めながら、ハヤトはディレトに向けて背中を見せた。

「？」

そこに踊るのは、ボロボロになったジャケットの中で、唯の一文字すら欠けることない『天上天下唯我独尊』の文字。

「この文字が、読めるか？」

「……さぁ？　生憎とミッドチルダの文字以外は知識にございませんの」

肩を竦めるディレトを振り返り、血に塗れた唇でニヤリと笑う。

「これ、はな……『俺が最高』って意味さ」

言葉を呟き、ブレイブハートの切っ先をディレトに向ける。
骨が、筋肉が、その負荷に耐え切れずミシミシと軋みを上げるが、ハヤトは気にしない。
そして確りと、誰の耳にも届くような声で口を開く。

「いいか？　確かに俺は弱ぇ。けど、俺は自分が最高だって信じてる！
俺の仲間は、誰にも負けないって信じてる！
信じてるからこそ、どんだけやられたって必死で足掻くんだよ！」

ハヤトは自身の姿がミッドチルダ全域に放送されているなど、知りもしない。
だからこそ、彼は自身の気持ちを吐き出す。
普段は秘して語ることの無い、彼の奥底にある信頼を。

「俺の自慢の上司が！　弟と妹が！　親友が！　惚れた女が！！
自分達の戦いに勝つって信じてる！！」

その言葉は、絶望に沈んだ機動六課の心を、掬い上げる。

「無様だろう？　滑稽だろう？　笑いたきゃ気の済むまで笑えばいいさ」

鼻血を流しながら、それでも彼は笑う。
骨の折れた左手から伝わる痛みを、右足から響く痛みを、笑い飛ばす。

「けどなぁっ！！！」

決意の声と共に薬莢が５つ宙に舞い、ハヤトの体から真紅の魔力が溢れ出す。

「俺は！！　お前を倒す事が自分に出来ると思ってる！！」

負荷に耐え切れず、右手の皮膚が裂け、鮮血が宙を舞う。

「お前を倒せば、後は最高の仲間が何とかしてくれるって、信じてる！！」

血が止まりかけていた傷が再び開き、更に血を流し始める。

「どんだけ笑われたって！　どんだけ惨めだって！
てめぇに勝つまでは何度でも這い上がって、足掻いて足掻いて、足掻き続けてやらぁ！！」

《Ｂｌｕｓｔｅｒ　Ｓｙｓｔｅｍ　Ｔｈｉｒｄ．　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ！！！！》

溢れた魔力と、響くブレイブハートの音声は、彼がブラスターモードを最終段階へと引き上げた合図。
その身の全てを犠牲にして、敵を倒すと決めた証。

「さあ！　どっからでもかかってこいよ！！
凡人の足掻きって奴を、見せ付けてやるからよぉっ！！！」

ディレトを睨みつけ、ハヤトが吼える。
この場の誰よりもボロボロで、この場の誰よりも弱くて、この場の誰よりも満身創痍な彼は――

「追い詰められた鼠はこえぇんだ！
せいぜい喉笛噛み千切られないように、気をつけなァッ！！！」

それでも、この場の誰よりも誇り高く叫んだ。
この時、破滅に向けて動いていたシナリオが……その方向を、少しだけ変えた。

第５８話　『死闘　５』（後書き）

クアットロの台詞を書いてる時、意外とノリノリな自分が居る……。
どうも、ラモンです。

はい。という訳でハヤト、主人公ポイント全消費の見せ場の巻でした。
台詞は殆ど勢いで書いたんで、何か変な部分ありそうですねぇ。
後で見直して、恥ずかしくなったら書き直すかもしれません。

そして最近、自分がスカっち&クアットロ側……つまりドS側だと気付きました。
この２人の台詞を書いてる時が一番ノリノリってどういうことなの……。
まぁいいですけどね、事実ですからｗ

次回から、いよいよ『死闘』最終幕です。
それぞれの戦いがどうなるのか、ハヤト自身の戦いの結末は？
上手く書けるか自信が微妙なとこですが、頑張って書こうと思います。

それではまた、次の話で。

※感想で、某そげぶと台詞が被ってるっぽいというのがあったので、ちょっと台詞を手直ししました。

第５８．５話　『姉、２人』（前書き）

※何となく書いてみましたー。

第５８．５話　『姉、２人』

ｓｉｄｅ：ギンガ＝ナカジマ

誰かの声が、聞こえた気がした。
その声に呼ばれるように、ゆっくりと重い瞼を開く。
見えたのは、知らない白い天井。

「……ここって」

《　目が覚めましたか　》

「え……？」

聞こえた声に、視線を動かす。
そこでようやく、自分がベッドに寝ている状態だと気付く。
動かした視線の先に見えたのは、近くの机に載せられた私の相棒
――ブリッツキャリバー。
どうして私、こんなところで寝てるんだろう？
私は確か――

「あ……」

思い出した。

地上本部が襲撃された時に、地下で戦闘機人と戦って――。

「私、どれくらい寝ていたの？」

《　９日と１０時間３７分です　》

「そんなに――『皆、戦ってるからだよ』――え？」

不意に、離れた場所から聞きなれた声がした。
ブリッツキャリバーに向けていた視線を動かすと、病室に備え付けられたモニタに移る、ボロボロのハヤト君が見えた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第５８．５話　『姉、２人』

「……私が寝てる間に、何があったの？」

ハヤト君の姿を見ながら、ブリッツキャリバーに尋ねる。
何となくわかってはいるけれど、ちゃんと確認しないと。

《　スカリエッティとその固有戦力が、ミッドチルダ市街に侵攻してきました。
　他に、揺り籠と呼ばれる戦艦も稼動し、それらを止める為に機動六課の皆さんが戦っています　》

「ハヤト君は……」

《　貴女を倒した戦闘機人――ナンバーズ??、ディレトと戦っています　》

「そんな……っつ！！」

慌てて身体を起こして、感じた痛みに顔を顰める。

《　生命の危機は回避しましたが、まだ完治には到っていません。無理はしないで　》

ブリッツキャリバーが私を制止するけど、聞いてられない。
だって、あの戦闘機人の強さはよく分かってる。
不意打ちに近い形だったけど、私が反応さえ出来なかった。あの子は――凄く、強い。

「ハヤト君だけじゃ……とてもじゃないけど、無理だよ」

事実、モニタに映るハヤト君はボロボロだ。

生きてるのが、不思議なくらい。

《　貴女の状態を考えるに、行っても状況を変えられるとは思えません　》

「それでも、行かなきゃ」

《　何故ですか？　》

まるで私を試すように問いかけてくるブリッツキャリバーを手にとって、ベッドから立ち上がる。

「仲間が戦ってるのに、見てるだけなんて出来ないよ」

からだに繋げられていたケーブルを引き千切る。
針が抜ける時に痛みが走るけど、そんなの気にしない。

「合流したばっかりだけど――」

しっかりと足で地面を踏みしめて、立ち上がる。

「私だって、六課の一員なんだから」

≪　……わかりました。行きましょう　≫

「うん、行こう！」

ブリッツキャリバーを握り締めて、病室のドアから出る。
そこで、ふと気付いた。

「あ……どうやって現場に行こう？」

ここは皆のいる現場からは離れた病院だ。
どんなに全速力で走っても、着くころには戦いが終わってしまう。
ヘリか何かがないと……。

「足ならば私が貸してやるぞ。ギンガ＝ナカジマ陸曹」

どうしようかと困っていた私の耳に、女性の声が聞こえてきた。

「え……？」

振り返った私の前に立っていたのは、腰まで届く長い金髪を揺らし、切れ長の瞳で楽しげに此方を見ている女性だった。

ｓｉｄｅ：ギンガ＝ナカジマ　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「ふむ。ここしか繋がっていないとはいえ、随分遠い場所に着いてしまったな。
……足がいるか」

ギンガが目を覚ます少し前。
彼女が眠る病院の転送ポートに、一人の女性――ハヅキ＝ロックウェルが現れた。
ハヅキはポート近くの通信機から誰かに向けて通信を繋いだ。

『私だ……ってハヅキさん！？』

通信機のモニタに映ったのは、まだ若いが大佐の位に就く青年。
最初は慇懃な態度だったが、ハヅキの顔を見るなり居住まいを正して背筋を伸ばした。

「久しぶりだウィルソン。随分と面倒な状況になっているようじゃないか？」

『ハ、ハヅキさん。確か２４管理世界へ出張任務だったんじゃ！？』

「知り合いから直通回線の通信で救援要請が入ってな。短く纏めて現状を説明しろ」

『は、はい！』

遥かに高い位に就いている筈の青年は、ハヅキの命令に敬礼を返しながら言われた通りに状況の説明を始めた。

“揺り籠”と呼ばれるロストロギアが動いている事、市街地方面に戦闘機人を始めとした戦力が向かっている事など。

ハヅキはそれらの報告を、腕組みをし、目を閉じて聞き終えてから口を開いた。

「スカリエッティとやらは中々に用意周到なようだ。

キャリーが直通回線で連絡をしてこなければ、危うく間に合わないところだった」

『と、いうと……』

「私も揺り籠とやらに向かう。ウィルソン、ヘリを１機回せ」

『いやそんな、ハヅキさんが自ら出なくても――「ウィルソン」――は、はい？』

青年の言葉を遮ったハヅキは、そのまま通信機の横の壁を全力で

殴りつけた。
メキリ、と大きな音を立てて壁が凹み、青年が顔を青くする。
それから彼女は、いっそ清々しいほど可憐な笑みを浮かべて口を開く。

「私は、“回せ”と、言ったぞ？」

『は、はいぃっ！！』

「いい返事だ。私は今ミッド中央区の病院だ、屋上ヘリポートで待っている。急げよ？」

『了解です！！！』

顔面を蒼白にして、ウィルソンが敬礼して通信を切る。
それを見て、ハヅキは制服の裾を翻して颯爽と歩き出す。
目指すのは屋上にあるヘリポート。
転送ポートを抜け、近道の為にＩＣＵを通り抜けようとした時、彼女の耳に声が聞こえた。

『仲間が戦ってるのに、見てるだけなんて出来ないよ』

「……む？」

その声に足を止め、ハヅキは辺りを見回す。
目を留めたのは『１０７』と書かれたネームプレートのかけられ

た扉。

「ふむ」

小さく頷いてから、聞こえてきた声に耳を傾ける。

『合流したばっかりだけど、私だって、六課の一員なんだから』

（六課というと……ハヤトの居る部署だな。
合流したばかりというと……先日のメールに書いてあったギンガ＝ナカジマ陸曹か）

聞こえてくる言葉の内容から、声の主を推理する。

『うん、行こう！』

そうしている内に、決意の籠った声が聞こえてＩＣＵのドアが開く。

出てきたのは、病院着のギンガ。

彼女は勢いよく飛び出してきたものの、何歩か歩き出してから止まって呟いた。

「あ……どうやって現場に行こう？」

（……やれやれ）

出てきた時の切羽詰った表情から一転、可愛らしく首を傾げる彼女に苦笑して、ハヅキは声をかけた。

「足ならば私が貸してやるぞ。ギンガ＝ナカジマ陸曹」

ｓｉｄｅ：―　了

第５８．５話　『姉、２人』（後書き）

ギンガの登場が唐突過ぎたかなーと思って、とりあえず書きました。
そして最強姉、ハヅキ登場。
彼女の相手は……まぁ何となく予想つくと思いますが、例のアイツです。

ハヅキは一等陸尉ですが、元部下が昇進しまくってるお陰で、大将レベルの権力を持ってる……という設定ですｗ
だから、大佐如きを脅してヘリを用意させるぐらい余裕だったりします。
え？　何でそんな設定かって？
だってチートお姉ちゃんですもの！ｗ

それではまた、次の話で。

第５９話　『決着　１』

ｓｉｄｅ：―

「……へっ」

短い笑いを漏らして、ヴィータは手に持った罅だらけのグラーフアイゼンを握り締める。
ボロボロの身体で、けれど彼女は確りと目の前に浮かぶ紫のプリズム――揺り籠の駆動炉を見た。

「あの馬鹿が、あんだけ頑張ってんのに……上司のあたしが、こんなとこでモタモタしてらんねーよな」

小さな声で呟きながら、アイゼンを肩に担ぐ。

「やるぞ……アイゼンッッ！」

《　Ｊａｗｏｈｌ　！！　》

答えと共に、カートリッジが吐き出されていく。
そして、ヴィータは再び全力でアイゼンを振り被った。
この一撃で……全てを決する為に。

「ぶち……抜けぇぇぇえええええええっっっっ！！！！！！！！！」

咆哮と共に、巨大な鉄槌がプリズム目掛けて振り下ろされた。

◇◇◇◇◇

「――」

ボロボロになって、血塗れになって。
それでも吼えた少年の姿に、ルーテシアは心を奪われた。

「なんで……あの人は、あんな事が言えるの？」

知らずに呟いた言葉。
ルーテシアからすれば、彼の――ハヤトの言葉は理解の外だった。
妄信的とも言っていい程に仲間を信頼して、自分の命を賭ける。
自分の為だけに生きてきたルーテシアからすれば、何故そこまで他人を信頼できるのかが、わからなかった。

アギトもゼストも、ルーテシアにとっては大事な人だ。

けれど、彼女はハヤトと同じ状況になった時、2人の事をあそこまで信頼できるだろうか？　おそらく、出来ないだろう。
だからこそ――ルーテシアはその疑問を呟いた。

「「そんなの、決まってるよ」」

それに答えたのは――キャロと、エリオ。

「お兄ちゃんは――誰よりも、私達を信頼してくれてる」

「君の事を、僕達がきっと何とかするって、信じてくれてるんだ」

モニタの向こうで戦う少年を、2人は誇らしげに見る。
自分達を自慢の弟、妹だと言ってくれた――兄のことを。

「……」

そんな2人が、何故かルーテシアには酷く眩しかった。

「君も、信じてくれないかな？」

俯いたルーテシアに、エリオが声をかける。

その声に彼女は視線を上げ、２人を見た。

「私達もお兄ちゃんも、絶対に貴女の力になるから」

視線を上げた彼女の目をしっかりと見て、キャロが優しく微笑んだ。

その微笑みに、ルーテシアの心に浮かんだ感情が訴える。

彼女達を、信じてみてもいいんじゃないかと。自分の願いを、託してみてもいいんじゃないかと。

「貴女の、名前は？」

もう一度キャロが尋ねた。

果たして、それに対するルーテシアの答えは――

「……ルーテシア。ルーテシア＝アルピーノ」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第５９話　『決着　１』

「くくく……ははは……あっはははははは！！！！」

地下の通路に、狂笑が響いた。
笑い声の主はスカリエッティ。視線の先にあるのは――ブレイブハートを構えたハヤトの姿。

「やはり彼はいい！　最高だ！
まさかあのザマで、あのような啖呵を切ってくれるとはね！！！」

心底楽しそうな声でスカリエッティが笑う。
トーレとセッテはハヤトの姿に一瞬眉を潜めるものの、直ぐにフェイトへと視線を戻して武器を構えた。
視線の先のフェイトは、先ほどまで怒鳴っていた様子など微塵も感じさせず、静かに俯いている。
それが、トーレにとっては不気味に思えた。

（いきなり静かになった、か。絶望したのか、それとも……）

トーレがそう考えた瞬間、金色の一閃が奔った。
戦闘機人として強化されているトーレとセッテの2人の目でさえ、光が走ったようにしか見えない一閃。
それから少し遅れ、フェイトを囲んでいた赤い魔力の糸の檻が小さな音を立てて砕け散った。

《Ｒｉｏｔ Ｂｌａｄｅ.》

その手に握られているのは、小さく圧縮された金色の刃。
バルディッシュのフルドライブに当たる、フォースモード――ライオット。

「それが、君の切り札かい？」

小さな音に気付き、モニタを見て笑い声を上げていたスカリエッティが振り返る。
彼の視線の先ではフェイトが荒く息を吐き、彼を睨みつけていた。

「なるほど、ＡＭＦの影響下では随分と消耗が激しそうだ」

「はぁ……はぁ……」

ＡＭＦ影響下において、ザンバーよりも遥かに高密度の魔力刃を構成するライオットは、ただ存在させるだけでフェイトの魔力を削っていく。
だからこそフェイトは今までライオットを封印し、使わずにいたのだ。

「いいのかい？　ここで切り札を使ってしまって。
私を逮捕できたとしても、揺り籠も、私の作品も止めることは出来なくなってしまうよ？」

そう言いながら、スカリエッティが口の端を上げる。

「プロジェクトF……君の母君が完成させてくれた技術には、面白い使い方があってね。
私のコピーは、既に13人の戦闘機人達全員の胎内に仕込んである。
どれか一つでも生き残れば、直ぐに復活し、一月もすれば……私と同じ記憶を持って現れる」

「……馬鹿げてる」

忌々しげに呟くフェイトに、スカリエッティは肩を竦めて見せるだけ。

「旧暦の時代、王の間では常識だった技術さ。
つまり君が私を本当の意味で止めたいのなら、私と、13人の戦闘機人全てを捕まえなければ意味が無い。
そう……あそこで戦う、ディレトも含めてね」

嘲るような口調で告げながら、ディレトとハヤトの映るモニタを指差す。

その先では、真紅と橙の2つの魔力がぶつかり合っている。

「頑張っているようだが、彼ではディレトは止められまい。
そして、消耗しきっている君も、彼女は止められない。さて……
最終的に勝つのは、誰かな？」

「……」

「エースオブエースも、夜天の主も、消耗しきった状態ではディレトに勝つなど夢のまた夢……。
わかるかい？　フェイト＝テスタロッサ。君の努力は、全て無駄なのだよ！！」

片手を上げ、再びフェイトに向けて赤い魔力の糸を飛ばすスカリエッティ。
だが、その糸は彼女に届く前に全てが切り裂かれ、宙へと消えていく。

「……あの子は、勝つ」

予想外なフェイトの行動に目を見開くスカリエッティ。
そのスカリエッティを見据え、フェイトは小さく告げた。

「だから私は、お前と……そこの2人を、逮捕すればいい」

「酷く根拠に欠ける言葉だ。あの映像を見て、何故そんなことが言えるんだい？
どう見ても、彼が死ぬという結末以外は考えられないと思うのだが？」

やや焦りの混じった声で、それでも表情は涼やかさを崩さずにスカリエッティが尋ねる。

「……私は、ハヤトに信頼される程、一緒に居た事は無かった」

答えるフェイトの言葉と共に、彼女の身体が金色の魔力光に包まれる。
バリアジャケットの一部が消え、より早く動き易さを重視した軽装へと姿を変えていく。

「けど……あの子は、そんな私を『自慢の上司』って言ってくれた」

バルディッシュのリボルバーカートリッジが回転し、リロードと共に彼女の魔力が爆発的に上昇する。

「私がお前の事を逮捕すると、信じてくれた」

ライオットブレードが2つに分かれ、2本の剣へと変化し、彼女

は両手でそれを握り締め、スカリエッティをその目で射抜く。

「だから」

光の中で、刃を構えたフェイトが力強く言葉を紡いだ。

「私は――その信頼に答えるだけだ！」

光を振り払うフェイトの姿――その名は真・ソニックフォーム。
両手に握るは、ライオットザンバー。
彼女の……フェイトの持つ、正真正銘、最後の切り札だった。

◇◇◇◇◇

（アイツに勝つにはどうしたらいい？　何をしたらディレトを倒せる！？）

血を噴出し、軋む骨と筋肉の激痛に苛まれながら、ハヤトは思考する。

砲撃では駄目、射撃も駄目。肉弾戦は論外だ。

（インビジブル・シューターなら確実だ……が）

音速で奔る弾丸は、例え非殺傷設定でも相手を一撃で昏倒させる事が出来る。

だが、現在最速で撃てたとしても約１２秒。

ディレト相手にそんな時間はとても捻出できない。だから、勝つためにはどうにかしてその時間を稼がなければいけない。

けれど、その方法が分からない。

「アクセル……シューターーーッッ！！！！」

「“キャンセラー”！」

撃ち込んだ魔力弾は、ただの一言で全て消されてしまう。

「もう……いっちょおぉぉぉおおおっっ！！！」

その直後を狙い、もう一度彼女を囲むように魔力弾を全力で撃ちこむ。

（フィニーノ陸士達の解析じゃ、あれは魔力を対消滅させるＩＳ。

そんな芸当を、そう何度も連続して出来るわけがねぇ）

祈るかの様にそう考えて、弾丸の行方を見守るハヤト。

しかし――

「“キャンセラー”」

「っ！？」

その祈りは、届かない。

彼女に迫った弾丸は、届く直前で再び消え去る。

驚愕にハヤトの身体が一瞬止まり、迫るディレトへの反応がコンマ数秒遅れてしまう。

しかし――

「ＩＳ“ブレイクライ……ッ！？」

追撃しようとしたディレトの動きが、ぎこちなくギチリと止まった。

それを、ハヤトは見逃さない。

「ディバイン……」

考えるよりも早く、ハヤトは魔力を集束させ、霞む視界で照準を合わせる。

「バスタァァアアアアッッッ！！！！」

咆哮と共に撃ち出された砲撃は、天を切り裂いてディレトに迫っていく。

ディレトは舌打ちし、咄嗟にシールドを張ってその砲撃を防ぐ。

なのはが撃つ砲撃に見劣りしないその威力に、さしものディレトも防御しながら少しだけ眉を潜めた。

しかし、ハヤトの砲撃はそれでもディレトの防御を貫くことは出来ず、彼女は砲撃を受け止めきって空中で態勢を立て直し、地面に降りる。

その……瞬間。

「そこだぁあああああっ！！」

《ＢＩＮＧＯ！！！》

「！？」

降り立ったディレトの視界が、翳る。

視線を上げた彼女に見えたのは、ブレイブハートを握った右拳を振り上げ、自分に向けて飛び込んでくるハヤト。

「おっっっらぁぁぁあああああっっ！！！！」

渾身の力をこめて、ブーストされた魔力を拳に集め、咆哮と共に拳を振り下ろす。

それは、この戦いが始まってから2度目の――ハヤトがディレトに当てた攻撃になった。

振り下ろされた拳はディレトの左頬を捉え、鈍い音と共に彼女を殴り飛ばす。

同時にハヤトの右拳からも鈍い音が聞こえてきた。

骨の強度を遥かに上回る衝撃が、右拳の骨を砕いたのだ。

「ぐ……ぅ……！」

殴り飛ばされたディレトは真横に吹っ飛び、高架の壁を砕いてそのすぐ横にあったビルに突っ込み、ハヤトは砕けた右手からブレイブハートを取り落とし、呻き声を上げながら膝をつく。

隙を突いた形で入れられた2度目の直撃。

だが、それを為すために更にブーストをかけられた彼の身体は、最早指先を動かすだけでも激痛を訴えてくる。

「今、の、なら……少し、は……効いた、ろ」

息も絶え絶えに呟きながら、ハヤトが笑う。

手ごたえはあった。タイミングも、威力も十分すぎる。

これでダメージが無ければ詰みだと考えながら、ハヤトはディレトが突っ込んだビルを見た。

「やったと、思う、か？」

《……いいえ》

荒い呼吸を繰り返して尋ねるハヤトに、ブレイブハートは暗い声で答えた。

確かに今のでダメージは与えただろうが、倒す程には到っていない。ブレイブハートはそう考える。

今の攻撃で倒せるのなら、最初の砲撃を当てた時点で倒せていた筈だ。

「なら……どうする？」

《ひとつ、考えはあります。ですが……》

「です、が？　なんだ、よ……ぐぅっ……！」

油断無くビルを見つめながら、ハヤトは問いかけつつ殆ど動かない右手でブレイブハートを握る。

握る手に力は無く、殆ど丸めた手にブレイブハートが引っかかっているという状態ではあるが。

≪　殆ど賭けになってしまいます。しかも、分の悪い賭けです　≫

「……賭け、か」

ブレイブハートの言葉を繰り返し、ハヤトは立ち上がろうとする。
だが、右手に力が入らない為、ブレイブハートを杖代わりに使って体重を支える事が出来ず、よろめいて前のめりに倒れてしまった。

「この、状況だ。賭けでも、やらないよりゃ、やった方が、マシだろ」

≪　賭けに負ければ、そこで敗北ですよ？　≫

「どの道……このままやってりゃ、負け、だろ……っ！」

立ち上がるために右手を握り、立ち上がる。
激痛が右手から伝わるが、ハヤトはそれを無視した。
すでに体中のあちこちから激痛が伝わりすぎて、痛覚が麻痺し始めていたのだ。

「それに、よ……」

ビルから視線は逸らさず、ハヤトが笑う。

「賭けってのは、ハイリスク・ハイリターンだから、面白ぇんじゃねーか」

《……マスターハヤトは、ギャンブルをしない方がいいですね》

彼の口から漏れた楽しげな声に、ブレイブハートは場に似合わない呆れた声で返した。

それに小さく苦笑し、ハヤトが口を開く。

「違いねぇ、な……それで？　考えってのは、何だ？」

《それは――》

side：―　了

◇◇◇◇◇

side：ディレト

左頬が熱い。体が熱い。頭が熱い。脳が熱い。

その全ての熱が私（わたくし）の全てを支配していく。

止まらない。全身の震えが、全身から押し寄せる感情の昂りが、この衝動が抑えられない。

恐怖を押し殺し、自分の信じるモノを守る為に、今あの方(ハヤト様)は私に戦いを挑んでいる。

力も無いのに、ハヤト様は決して勝つ可能性を諦めない。私(わたくし)相手にも、絶対に心を折る事は無い。ただただ愚直に真直ぐに、私を倒さんと戦い続けている。

そして、ハヤト様は見事にこの私(わたくし)にダメージと呼べるモノを与えた。

グラグラと揺れる視界。

思うように動かない身体。

知識では知っていた“脳震盪”。こんな感じでしたのね。

お姉様達との模擬戦では、決して感じることの出来なかった“痛み”と“ダメージ”。

――これだ。

これこそが私(わたくし)が求めてやまなかった“戦い”だ。

互いの全てをぶつけ合って、互いの命を賭けて、ただただ殺し合う。

強い弱いなど関係ない。そこに必要なのは“覚悟”と“決意”。

『追い詰められた鼠はこえぇんだ！

せいぜい喉笛噛み千切られないように、気をつけなァッ！！！』

脳裏に蘇る、ハヤト様の言葉。

ボロボロになって、骨を折られて、血塗れになって……それでも諦めない、あの方の姿。

ハヤト様の姿、心、言葉。そのどれもが私の心を虜にして止まない。

少しでも油断をすれば、忽ち達してしまいそうな程の圧倒的な愉悦。脳を支配する悦楽と快楽、まともな思考を今自分が出来ているのかすら分からない程の恍惚感と幸福感。

感じた事の無い感情の奔流に、視界がチカチカするような錯覚さえ覚える。

このまま放っておいても、ハヤト様は恐らく死ぬ筈。

出血量が出血量ですし、この状況でお仲間が助けに来るとも思えませんし。

だから、本当ならこのままハヤト様を放って地上本部に向かうのが、正しい選択なのでしょうね。

ドクターもお姉様方も、恐らく同じ事を言うと思いますわ。

でも――。

でも、ハヤト様に完全に心奪われた私は止まらない、止まれない。

私は一個の生物として、完全にハヤト様に惚れてしまいましたもの。

愛してしまったんですもの。

だからこそ、この“戦い”は最後まで続けますわ。ハヤト様が死ぬか、私が死ぬか、そのどちらかでしか決着はつけられない、つけたくない。

「さあ、ハヤト様。私に貴方の全てを見せてくださいまし。

もっと“痛み”を“悦び”を与えてくださいまし。私の心を満たしてくださいまし！」

揺れる視界など、最早気にしていられない。
こんなところでじっとしていたら、この溢れる感情で狂ってしまう。
この身を包む蕩けてしまいそうな身体の昂ぶりを沈められるのは、あの方だけ。
壁に空いた穴の向こうから、私(わたくし)を睨みつけている……ハヤト様だけ。

「あはははは！　あはははははははは……げほっ！　げぇっ！」

身体を巡る悦びに、堪らず私(わたくし)は笑い出す。
殴られた時に歯でも折れたらしく、口の中に溢れた血が気道に入って噎せ返った。
けれど、その血さえ愛おしい。

おそらく私(わたくし)は、頭がおかしくなってしまったのでしょうね。
最初はあの方を、適度に痛めつけてから殺せばいいと思っていたのに、今は少しでも長くハヤト様と殺し合(アイシアイ)いたいと思っている。
ドクターやウーノお姉様、クアットロお姉様に知られたら、怒られてしまいますわね。
でも、熱に浮かされた私(わたくし)は止まらない。止まりたくない。

「全部全部、貴方が悪いんですのよハヤト様。
貴方がこんなにも私(わたくし)を惹きつけるから、こんなにも私(わたくし)を魅了する

からいけませんのよ」

殴られた頬から伝わる熱も、痛みも、全てが愛おしい。

「だから、きっちりと責任を持って受け入れてくださいな！
私（わたくし）の全力を！　私（わたくし）の本気を！　そのボロボロの身体で、何もかも全て！！！！！」

イービルハートを待機状態に戻して、握り潰す。
これからの戦いに、こんな不純物などいらない。ハヤト様との戦いに、こんなモノはいらない。
こんなモノがあったら、あの人の全てを感じられない。この身体の昂ぶりをぶつけられない。

「あはははははははははっっっっ！！
あひゃはははははははははっっっっ！！！」

笑い声を上げる自分を、冷静に見つめる自分が居る。
自分の中の何かが、崩れていくような感覚。
あぁ……本当に私（わたくし）は狂ってしまったのでしょうね。
けれど構いませんわ。あの人と戦えるのでしたら、正気など捨て値で売り払って差し上げましょう。

だから。
だから――っ！

「貴方の命を、私にぶつけてくださいな！
惨めったらしく足掻いて、足掻いて！　出来るものなら見事私の
喉笛を噛み千切ってくださいな！！」

言葉と共に、私は飛ばされてきた穴から飛び出した。

ｓｉｄｅ：ディレト　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「あらぁ……予想外ねぇ」

空中に浮かぶモニタの中で、ディレトが殴り飛ばされた映像を見
て、クアットロは意外そうに呟いた。
そして手元のパネルを幾度か叩き、何かを操作する。

「ディレトちゃんなら平気だと思うけどぉ……」

操作されたパネルには、ガジェットを動かす為のプログラムが組まれている。
その目標地点は――まさに今、ハヤトとディレトが戦っている地点。

「あの子はまだ子供だし……妹のフォローをするのは、姉の役目よねぇ？」

言葉とは裏腹に、彼女の顔に浮かぶのは残酷な笑み。

「そ・れ・にぃ……あの糞餓鬼は、ここで始末しないと厄介みたいだしねぇ」

パネルを操作しながらクアットロは少しだけ笑みを崩し、忌々しげにモニタ越しのハヤトを見た。
彼の大演説によって、六課の面々や揺り籠の周りで戦っている局員達の士気は右肩上がりだ。
スカリエッティが言っていたハヤトの危険性。それを見せ付けられた結果となり、クアットロはそれ故に彼を忌々しげに見る。

「貴方はここで、確実に……殺させていただきますわ。
忌々しい、顔も見たくない、糞餓鬼さん」

言葉と共に、クアットロが実行キーを叩く。
それに呼応して、ハヤトとディレトの戦場の近くに存在するガジェットの何機かが動き出した。

「うふふ……これで、あの糞餓鬼もお終いねぇ」

動き出したガジェットをモニタ越しに見ながら、クアットロはその顔に浮かべた笑みを深くする。
その笑みはどこまでも昏く、邪悪だった。

ｓｉｄｅ：―　了

第５９話　『決着　１』（後書き）

日本、カメルーン戦勝利おめでとう。
どうも、ラモンです。

いや別にサッカーにそれほど興味は無いんですけどね。
丁度ニュースでやってたもので。
それはともかく、機動六課逆襲編スタートです。

今回一番苦労したのは、ルーテシアのくだりですね。
あの子のゼストとアギトに対する依存度が、どの程度かよく分からなかったんで。
決して低くはないと思いますけど、ある程度割り切った付き合いだったんじゃないかなぁ、と思うんですよね。
アニメ中でも、ゼストが死んでアギトが居なくなる事前提で話してましたし。
元々死に掛けていたゼストの旦那はともかく、アギトがルーテシアから離れるなんて、アギトの態度を知ってれば考えられないと思うんですよね。
それを想像しちゃうってことは、ルーテシアは２人の事を信頼してるけど、どこかに壁があったのかなぁ、と妄想しながら書きました。
異論はあるでしょうけど、まぁそんな解釈の人間もいるってことでひとつｗ

さて、次回はなのは、はやて＋管理局員の皆、スバティアの逆襲編です。
アニメ本編とは少しだけ違った展開を予定しているので、欠片も期待せずにお茶でも飲みながらのんびりとお待ちください（オイ

……あぁ、ここらで番外編挟みてぇ。
でも本編の流れ断ち切るのものなぁ……ラジオで我慢するか。

それではまた、次の話で。

第６０話　『決着　２』

ｓｉｄｅ：―

揺り籠の周りの戦況は、激しさを増していた。
一時は崩れかけていた戦線が立ち直り、より強固な防波堤となってガジェットの群れを食い止めている。
その切欠は――ハヤトの言葉。

「１番隊！　第３密集点を潰せ！」

「あんな若造だけに良いカッコさせんじゃねぇぞ！！」

「「「了解！！」」」

「５番分隊！　ガジェット如きに遅れをとるなよ！」

「少しでも多く――いいや、全部落とせ！」

「「「「おおおおおおっっ！！！！」」」」

各部隊の隊長達が、自分の部下に檄を飛ばす。
それに答える部下達の目に、一瞬前に見せていた怯えは無い。

「誰か指揮変わって！　私も揺り籠の中に入る！」

「なら、私が！」

「うん。お願いします！」

鋭い声を飛ばしたはやてに、近くにいた壮年の男性が答える。

そして、そのまま揺り籠に向けて飛んで行こうとする彼女の耳に、アルトの声が聞こえた。

『待ってください、八神部隊長！』

「アルト！？」

『もう少しだけ、時間をください。大事なお届け物……もうすぐお届けします！』

はやての居る空域に向けて飛ぶアルトが操るヘリ。

その彼女の隣には、新たな祝福の風――リインフォース？の姿があった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第６０話　『決着　２』

ハヤトがディレトを殴り飛ばしたのと同時に、ヴィヴィオから放出されていた魔力の奔流が終わった。
なのはは踏ん張っていた足から力を抜いて、娘が座っていた玉座を見る。

「え……？」

そして、言葉を失った。
なぜならそこに居たのは、彼女の記憶にある幼い少女ではなかったのだから。

「……」

そこに居たのは、自分と同じぐらいの年の女性。
流れるような金髪をサイドポニーに纏め、碧と赤のオッドアイはなのはを射抜き、全身をなのはとよく似た色違いの黒いバリアジャケットで包んでいる。
金髪やオッドアイなど、ところどころにヴィヴィオの面影はあった。
しかしそれでもなのはには、自分の娘と目の前の女性が結びつかなかい。

その一番の原因は、女性――ヴィヴィオがなのはに向ける視線。
記憶にあった彼女を慕う視線ではなく、今向けられているのは“

敵意”の視線。

クアットロによって暗示が為されていると知らない彼女は、その視線に戸惑う。

自分はこの子を助ける為にここに居るのに、何故？　と。

「ヴィヴィ、オ？」

だから彼女は恐る恐る、確かめるに口を開く。

自分の娘の名を、愛しい子の名を。

「気安く、私の名前を呼ぶなっっ！！！！」

だが、返ってきたのは拒絶の言葉。

憎しみの籠った鋭い声が、玉座の間に響く。

「私の本当のママを返せっ！　ハヤトおにいちゃんを虐めるなっっ！！！！」

「！？」

突然浴びせられた、覚えの無い罵声。

それにぎょっとして、なのはの思考が一瞬止まってしまう。

思考が止まると言う事は、反応が止まると言う事。

「ぁぁあああああぁぁあぁぁあああっっ！！！」

「っ！　しま……っ！？」

獣の如き咆哮と共に、自分に向け疾走するヴィヴィオ。
振り上げた拳には虹色の魔力が集まり、莫大な破壊力を持った凶器と化している。
それが、なのは目掛けて振り下ろされる。だが、一瞬とはいえ思考を止めたなのはには、それを避ける事は不可能。

「このぉぉぉっ！！」

「きゃあっ！」

結果として、ヴィヴィオの拳はなのはを捉え、彼女の身体を吹き飛ばす。
しかしなのはとて伊達や酔狂でエースオブエースと呼ばれている訳ではない。
すぐに思考を戻し、空中で態勢を整えて衝撃を緩和する魔法を展開しながら近くの地面へと着地した。

「貴女が！」

「くぅっ！？」

着地したなのは目掛け、ヴィヴィオが追撃を行わんと肉薄する。
咄嗟になのはもそれに反応し、バックステップで風を裂いて迫ってきた彼女の足を避ける。

「ヴィヴィオの本当のママをどこかに隠して！」

流れるような動作で突き出された拳を、レイジングハートを使って捌く。
そしてそのまま全力で後ろに飛び、ヴィヴィオと距離をとった。

「ハヤトおにいちゃんを虐めさせてるんだっ！！！」

距離をとったなのはを睨みつけ、ヴィヴィオは足を止めて怒鳴る。
それは薬による催眠効果と、クアットロの言葉で形作られた偽りだ。
けれど、今のヴィヴィオにとっては、唯一の真実でもあった。

「違う、違うよヴィヴィオ！　私だよ？　なのはママだよ！？」

「五月蠅いっっ！！　貴女なんか、ママじゃない！！」

「っ！！」

だからヴィヴィオは頭を振って拒絶する。
それが今の彼女にとっての真実だから。
目の前に居る人間は――彼女にとっての“敵”だから。

「ヴィヴィオのママを……ハヤトおにいちゃんを……返してぇっ！！！！」

叫びと共に、ヴィヴィオの身体から再び虹色の魔力が迸る。
吹き飛ばされそうになるのを堪えるなのはの耳に、耳障りなクアットロの声が響く。

『んふふ。その子を止める事が出来たら、揺り籠も止められるかもしれませんねぇ？
勿論、止められたら……ですけどぉ？』

「くっ……レイジングハート！」

《 W・A・S・ フルドライビング 》

「ブラスター、リミット2！！」

虹色と桃色。2つの魔力の柱が天を衝く。
それをモニタ越しに見ながら、クアットロは満足そうな笑みを浮かべる。
そして、口を歪め、嘲笑の混じる声で呟いた。

『さぁ……親子で存分に殺し合いなさい？』

ｓｉｄｅ：：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：：ティアナ＝ランスター

『さあ！　どっからでもかかってこいよ！！
凡人の足掻きって奴を、見せ付けてやるからよぉっ！！！』

アイツの声に、あたしは顔を上げた。
ボロボロで、バリアジャケットなんて殆ど真っ赤で。
生きてるのが不思議なぐらい、見てるのが辛くなるくらい、全身に怪我をしていて。

けど、それでもハヤトは立っていた。
立って、敵を見据えて、笑って吼えていた。

「……」

涙で滲んだ視界越しに、モニタに映ったハヤトを見る。

『追い詰められた鼠はこえぇんだ！
せいぜい喉笛噛み千切られないように、気をつけなァッ！！！』

「……何、カッコつけてるのよ……馬鹿ぁ……」

今すぐ、逃げて欲しい。
みっともなくても、皆から軽蔑されても、それでも逃げて、生きて欲しい。
けど――あそこまで覚悟を決めたハヤトが逃げる訳無い、っていうのも分かってる。
どうしたらいいのかもわからなくて、ただモニタを見つめるしか出来ない。

「ティア……立って」

そんな時、隣からスバルの声が聞こえてきた。
モニタから視線を動かして、スバルを見る。

「泣いてる暇なんて、無いよ」

スバルはそう言いながら、真っ直ぐ前を見て構えている。
そっちにいるのは、４人の戦闘機人。

「ハヤトがあんなに頑張ってるのに、こんな所でボーっとしてられない。
……そうでしょ？」

「……」

呟きながらスバルが小さく笑う。

「助けに、行こうよ」

スバル……。

「あたしの親友を……ティアの好きな人を。一緒に、ね？」

そう言って、こっちに手を差し出してくる。
……そうだった。泣いてる暇なんて、絶望してる暇なんて、無かった。
アイツが――あたしの惚れた男が戦ってるのに、あたしが諦めてどうすんのよ。

「そうね。一緒に……アイツの所に、行きましょ」

答えて、差し出された手を握り返して立ち上がる。
目の前に立つ戦闘機人達にクロスミラージュの銃口を向けて、引き金に指をかける。
もちろん、そのまま突っ込んでいくような事は……もう、しない。

「ティア、どうする？」

「考えなら……あるわ。ちょっと耳貸しなさい？」

「うん。へへ、それでこそティアだ」

戦闘機人達がモニタから目を離さないのを確認しながら、あたしはスバルの耳元に口を寄せた。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

ｓｉｄｅ：―

チンク達が構える先で、ティアナとスバルが構えた。

「……来るぞ」

それを見ながら、チンクは妹達に声をかけ、自身もダガーを構えた。

表情は曇っていて、明らかに気乗りしないという顔だ。

けれど、彼女達は戦うことしか知らない。だから……例え自分達に理が無いと判っていても、戦うしかない。

「チンク姉……」

「気持ちを切り替えろノーヴェ。我らはただ、為すべき事を為すだけだ」

「……うん」

気まずそうに声をかけてきたノーヴェに、厳しい声で言い聞かせる。

確かに彼女達には同情するし、自分達の非道さも重々理解している。

けれど――

（だからと言って、妹たちをやらせる訳にはいかない……）

――彼女は“姉”なのだ。

如何に自分たちが“悪”だと理解していても、譲れないモノがあ

る。
だからこそ、チンクは自分の感情を押し殺す。

「作戦はさっきと同じ。ノーヴェとディードは幻術使いを。
ウェンディは姉と一緒にタイプゼロの相手をする。いいな？」

「了解ッス」

「わかった」

「わかりました」

妹たちが彼女の言葉に返事をした瞬間、ティアナとスバルが動いた。

（どうくる？　突っ込んでくるか？　それとも逃げ回るか？
突っ込んでくるなら迎撃を優先し、逃げ回るならば各個撃破すればいい）

チンクの脳裏に、彼女たちが取るであろう行動が瞬時に駆け巡る。
同時に、それに対する対処の方法も瞬時に浮かぶ。
だが――

「何っ！？」

ティアナとスバルの取った行動は、チンクの予想を裏切るものだった。
スバルが拳を振り上げ『地面に向けて』振り下ろした。
振り下ろされた彼女の拳は地面を砕き、もうもうと土埃を巻き上げる。

「――っ！」

けれど、呆気に取られていたのは一度瞬く間だけ。
直ぐに彼女は己の視界を、温感センサーのソレへと切り替える。
視界がサーモグラフィへと変化し、土煙の向こうで動く2人の温度が見えた。
2人は土煙の向こうから自分達の方へと走り出そうとしていた。

（右側が幻術使い、左側がタイプゼロ……）

サーモグラフィでくっきりと映る姿で、2人の位置関係を把握する。
そして、直ぐに妹たちへと指示を飛ばした。

「ノーヴェ、ディード！　そちらにタイプゼロが向かっている！
ウェンディ。こちらには幻術使いが来るぞ！」

彼女が叫ぶのと同時に、土煙の中から2人が飛び出してくる。
同時にチンクは視界を温感センサーから通常のモノに戻し、飛び出した2人の姿を見た。
彼女の判断したとおり、自分とウェンディ側にはティアナが、ノーヴェとディードの側にはスバルが飛び込んできている。

（距離を合わせ、不意をついて一気に押し込む気か……悪くない作戦だ）

自分達目掛けて飛び込んでくるティアナを見ながら、チンクはダガーを投擲する構えを取る。

（――だが。それも、不意をつければの話！）

そのままダガーを投げ、ウェンディは魔力弾を撃ちだした。
彼女達の隣では、ノーヴェがガンナックルから魔力弾を撃ち出し、スバルを迎撃する。

（不意打ちでさえなければ――対処できる！）

そう考えながら、チンクは勝利を確信した。
――自分に向かってきているティアナが、ウィングロードを展開するまでは。

「な……にっ!?」

チンクの瞳が、驚愕で見開かれる。
視線の先では彼女の投擲したダガーが爆発し、ウェンディの射出した弾丸が襲い掛かっている。
それと同時に「パリン」と薄氷を割ったような音がした。
果たしてダガーの爆発した煙の中から飛び出してきたのは――

「うっりゃあああああっっ!!!!!」

先ほどまでは自分に近寄る事も出来なかった、スバルだった。

(幻影――私に位置を入れ替えたと思い込ませ、油断させたのか!?)

全てはブラフ。だが気付いた時には、既に遅い。
再びダガーを構えるよりも先に、スバルの拳が彼女の顎を捉えた。
振り切られた拳は彼女の小さな身体を吹き飛ばし、同時に脳を揺らして彼女の意識を飛ばした。

「チンク姉っ!?」

司令塔である姉が倒されたのを見て、ノーヴェとウェンディ、ディードが動揺する。
スバルもティアナも、ソレを見逃さない。
動揺して動きの止まったウェンディを、スバルが全力で蹴り飛ばす。
ウェンディは防御も受け身も出来ず壁に叩きつけられ、こちらもまた意識を断たれた。

「このっ……！」

「ふっ！」

ウェンディが蹴り飛ばされたのを見たノーヴェとディードは、直ぐに自分達に向けて飛び込んでくるスバル――否、ティアナへと意識を戻すが、やはりこちらも……遅い。
彼女たちが意識を戻した時、既に2人の喉元にはオレンジ色の刃が突きつけられ、薄く血を滲ませる。
その状態で、ティアナは小さく呟いた。

「貴女達を保護します。武装を……解除しなさい」

◇◇◇◇◇

チンク達が一瞬の隙を突かれて制圧された時、オットーはそこから離れた廃ビルの屋上で、２つの映像を見ていた。
そこに映っているのは、空を飛ぶヘリから撃ち出されたエメラルドグリーンの弾丸が、地上に展開していたガジェット群を正確無比に射抜く映像と、紫の髪を靡かせながら地上を疾走し、ガジェットを殴り潰していく一人の女性。

「……まさか、もう動けるなんて」

その映像を見るオットーの顔に、僅かな驚きが浮かぶ。
直接見たわけではないが、ディレトの負わせた傷は決して軽くなかった筈。少なくともこの決戦には間に合わない――オットーはそう読んでいた。
けれど、モニタに映る彼女はガジェットを拳を蹴りで粉砕していく。
その動きは、とても彼女が怪我をしているとは思わせない動きだった。

「このままだと、少しまずいかな」

最悪、この場を放棄することをオットーが考えた――瞬間。

「！」

突然オットーの足元が淡い光を放つ。
そして、彼女が動くよりも先に地面から緑と白の魔力の棘が突き出し、オットーを囲んでいたガジェットが1機残らず貫かれていった。同時に、オットーの身体を緑色の糸が縛りつける。

「な――「貴女が地上戦の司令塔で、各地の結界担当」――っ！？」

驚くオットーの耳に、凛とした声が響く。
ガジェットが爆発した煙の晴れた先にオットーが見たのは、六課を襲撃した時に、自らの手で落とした2人。

「上手く隠れてたけど……クラールヴィントのセンサーからは、逃れられないわ」

そう言って、左手に嵌めた2つの指輪を見せる女性――シャマル。
その言葉に続いて、彼女の隣に居た青い狼――ザフィーラが言葉を放つ。

「大規模騒乱罪、及び先日の六課襲撃の容疑で――」

「ぐ……ぅっ！！」

ザフィーラの言葉が最後まで続く前に、オットーがシャマルの拘束を引き千切って駆け出す。
だが――

「でぇぇぁあああああっっ！！！！！」

咆哮一閃。ザフィーラの放つ白い魔力の棘がオットーを囲み、緑のバインドが再び彼女を縛り付ける。
最早逃げることは不可能な、完全に“詰み”の状態。
彼女を完璧に捕らえたことを確信したシャマルが、最後にゆっくりと口を開いた。

「――逮捕します」

その言葉が告げられると同時に、ティアナとスバルの居るビル…及び各地に張られていた結界が姿を消した。

◇◇◇◇◇

「……まぁ。どの子も使えないこと」

溜息と共に、クアットロが呟いた。
彼女の視線の先では、フェイトによって撃破されたスカリエッティとトーレ、セッテ。エリオ、キャロと共にハヤトの戦場へと向かうルーテシア。シャマルとザフィーラによって拘束されたオットー。
そして――ティアナ達に保護されたチンク達が映っていた。

「やっぱり、感情なんて余計なモノがあるからダメなのよねぇ」

頬に手を当て、やれやれと頭を振る。

「次に造る妹たちは、余計な事を考えられないようにしておかないと」

言いながら、頬に当てていた手で眼鏡を取り、後ろへと投げ捨てる。

「ま、私が居れば……何とでもなりますけど、ね」

結んでいた髪を下ろして、クアットロはパネルを叩き、ミッド市街の地図を映し出す。
そのあちこちに、彼女たちが事前に仕掛けた生物兵器を示す赤い点が明滅している。

「いざとなれば、これを発動してもいい訳ですし？」

喋りながらクアットロは生物兵器の発動準備を進めていく。
スカリエッティはどうだったか分からないが、クアットロは最初からコレを使うつもりで居た。
脅しではなく、使ってこその兵器――それが彼女の信条故に。

「まぁ、どのみち私達に負けは無い……」

愛おしそうに自分の下腹部を撫でながら、呟く。

「そうですよね？　ドクター」

言葉と共にパネルを叩き、２つのモニタを自分の目の前に出す。
そこに映るのは――

『……ぅ、あ』

玉座の間の壁に身体をめり込ませ、磔にされているなのはと――

『……』

言葉も無く膝を突き、力尽きた様に体を弛緩させているハヤト。

「管理局のエースも、目障りな屑も、もうすぐ潰れるみたいですしねぇ？」

その映像を見ながら、クアットロは満足げな笑みを浮かべる。

確かに、妹たちの大半は破れ、拘束されている。だが、最大戦力であるディレトはまだ負けておらず、管理局の希望とも言えるなのはと、戦意高揚の役目を果たしているハヤトの２人は、こうして敗北寸前。

更に言うならば、自分達はミッドチルダ全域の市民の命を握っている。

「まぁだまだ……お楽しみはこれから。あっはははははは！！！！」

スカリエッティを髣髴とさせるクアットロの哄笑は、彼女しか居ないその場所に、いつまでも響いていた。

ｓｉｄｅ：－　了

第６０話　『決着　２』（後書き）

うーん、結構唐突な登場とか展開多いなぁ……。
どうも、ラモンです。

えー、まぁそんな訳で決着編第２弾をお届けしました。
ルーテシアに関しては、もうあのまま説得されたって事にしました。
細かい経緯書いてると、何か展開がダレそうだったので。
フェイトの方も同じ理由でカットしました。こっちはアニメと展開が全く一緒だから、というのが一番大きな理由ですが。
戦闘描写も無くあっさり捕まったスカっち哀れｗ　ざまぁｗｗｗ

今回メインで書きたかったのは、スバティアＶＳチンクと愉快な妹達。
そして史上最強の親子喧嘩と、クソ眼鏡覚醒。
以上の３本でした。

スバティアＶＳチンク連合が、今回一番大変でした。
勝ち手段は最初からコレで決めてたんですが、いざ書いてみるとめっちゃめんどくて何度も手直ししました。
チンク達の葛藤みたいなのを書きつつ、どうやって決着に持っていくのかとか凄く悩みました。結果として、あんまり納得いってない出来にｗ
ちなみに、フェイクシルエットがあんな使い方できるの？　という質問は一切受け付けておりませんｗ
あれは私の「幻影作り出せるんだから、それを自分に被せるくらい余裕で出来んだろ」という独自解釈で出来た作戦です。

そして地上最強の親子喧嘩。

まぁこっちはまだ始まったばっかりなので特にコメントはなしですね。
クソ眼鏡覚醒も……まぁ原作通りなので特にコメントなしで。
アイツの事とかコメントしたくないよ！ｗ

あと、唐突にギンガ出しましたけど、やっぱり目覚めるシーンとかあった方がいいでしょうかね？
何度か幕間的な感じで書こうと思ってたんですが、書く機会が無くて……。
もし「書けやゴルァ！」という意見が多ければ、『５８．５話』あたりとして投稿しようと思っとります。

えー、次回は親子喧嘩＆ハヤディレ最終章を予定しています
そろそろ全体的なまとめに入りたいですね。キレイに纏められるといいなぁ……。

それではまた、次の話で。

第６１話　『決着　３』（前書き）

※今回は独自解釈……というより、独自設定に近い魔法の使い方があります。

　多分色々と穴がありますが、生ぬるい目で見逃して頂けると、作者が狂喜乱舞すると思いますので、よろしくお願いします。

第６１話　『決着　３』

ｓｉｄｅ：―

ビルから飛び出したディレトは、ハヤトに殴り飛ばされた場所へと舞い戻る。
その顔に、狂気を張り付かせて。

「あはははは！　あはははははっっ！！」

「……何、笑ってん、だか」

最早言葉も無く、ただ笑い続けるディレト。
彼女に対するハヤトは、ブレイブハートを『持っていなかった』。
空の両手をだらりと下げて、近くの瓦礫に身体を預けて立ち、荒く呼吸を繰り返している。

「あはははははははははっっ！！！」

「……っ！！」

だが、ディレトそれを気にも留めず、獣の様に全身のバネを使ってハヤト目掛けて飛び掛る。
ハヤトは倒れるように突き出された拳を避け、紙一重で頬を掠ら

せた。
彼の顔を捉える事の無かった拳は、代わりに彼が体重を預けていた瓦礫を粉砕、破片があたりに飛び散らせる。

「問答、無用……か、よっ！？」

そのまま身体を低くし、舌打ちしながら全力で地面を蹴って跳ぶ。
空中でディレトを目で捉え、３つの魔力弾を生成し、彼女目掛けて撃つ。
デバイスの補助無しで撃たれたその弾丸は、本来の威力、速度とは程遠い。けれど、ディレトはその魔力弾を避けようともせず――むしろ自分から“当たりに行った”。

「！？」

「あひゃはは！　痛いイタイ痛いイたい！！！」

当たった顔面から血を流し、それでも嗤いながらディレトはハヤトを目指す。
そしてそのスピードを全て破壊力へと変換し、振り上げた脚にその全てを乗せてハヤトの胴体へと叩きつけた。

「ご……が、ぁっ！？」

肋骨が粉砕される音がして、ハヤトは再び血を吐き出しながら吹き飛ばされる。
だが――

「……まずは、一手」

その口元には、笑みが浮かんでいた。

ｓｉｄｅ：―　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第６１話　『決着　３』

ｓｉｄｅ：ブレイブハート

《　……ッ　》

私の身体が、ミシミシと軋みを上げていく。
時々『パキッ』という乾いた音と共に、私の身体に罅が入るのを

知覚できる。
当然だ。本来術者とデバイスとで分ける負荷の全てを、私一人に集めているのだから。
だが――

《　魔力調整……カん了　》

それがどうした。
そんな事は最初から織り込み済みの作戦だ。
否、作戦と呼ぶのさえ憚られる……これは、ただの“賭け”でしかない。

《　カウんトだうン……スターと……　》

私もマスターハヤトも、どちらも既に限界は超えている。
この賭けに負ければ、待っているのはマスターハヤトの“死”だ。
……ならば、問題など無い。

ブラスターシステムを解放することを、アテンザ技官に要求したあの日。
あの瞬間に、私は誓ったのだ。何があってもマスターハヤトを守ってみせると。
その為ならば、この身を犠牲にすることさえ厭わない。

《　９０……８９……８８……　》

私の身体にはしる亀裂は、数を増していく。
この状態でコレを放ってしまえば、もしかしたら私は壊れてしまうかも知れない。
いや、恐らく確実に私は崩壊するだろう。

《　８７……８６……８５……　》

――それが、どうした。

《　８４……８３……８２……　》

こうしている間も、マスターハヤトは命を削って戦っている。
私の提案した分の悪すぎる賭けを成功させる為に、戦ってくれている。
こんな賭けしか思いつくことの出来なかった、無能な私の為に。
ならば。

《　８１……８０……　》

それに応えずして、何が相棒（デバイス）か。

《　７９……７８……　》

応えて見せようではないか。
私の全てを賭して。私の全てに替えて。
だから――。

《　７７……７６……　》

――この賭けに、勝たせて欲しい。
私は、ただのデバイスだ。
人の手で造られ、人の手で偽りの心を与えられた存在でしかない。
そんな私の身勝手な願いだけれど……誰でもいいから、どうか叶えて欲しい。

必要ならば、私自身を引き換えにする事だって構いやしない。
だから――お願いだから、勝たせてください。

《　７５……７４……　》

掛け替えの無い、たった一人きりのマスター（私の主）を。

ｓｉｄｅ：ブレイブハート　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

（……おかしいですわね）

狂った頭で、それでもディレトはその違和感に気付いた。
ハヤトはさっきからその手にブレイブハートを持ってはいない。
壊れたのか、それとも持っていられない程に彼が消耗しているのか、それは分からない。
デバイスの無い魔導師の戦力など、たかが知れている。
魔力行使そのものは出来るが、デバイスという演算機無しでは精密な射撃も、細かな魔力制御も難しい。
そんな状況下で、彼が自分（ディレト）に勝てる確率など億に一つに等しいだろう。

（けれど、あの目は……）

それでも彼の目は諦めていない。
積極的に戦っているように見せかけながら、彼はどこかを目指して“逃げ続けて”いる。
そうやって逃げ回りながら『何か』を目指して『何か』を狙っている。
それが何かは定かではない。定かではないが――。

（問題など、ありませんわ）

ディレトはそんな事を歯牙にもかけない。

（どんな罠が待っていようと、ハヤト様が何を狙っていようと、全て受け止め、食い散らして差し上げましょう）

自分にはそれだけの力があるのだから。
それは傲慢でも油断でも慢心でもない、純然たる事実。
ディレトは煮えたぎる程の愉悦に脳を焼かれながら、狂った笑いを上げた。

「あっははははははははははっっ！！！」

狂った頭脳の中に残る、一握りの理性。

故に彼女の頭脳は、いっそ正気であった時よりも冴えていた。
けれど、それさえも彼女にとってはどうでもいい。

「あひゃひゃひゃひゃひゃはははっははははっっ！！」

ハヤトの撃った弾が彼女の頭に当たって爆ぜる。
その痛みさえ愛おしく、忽ち達してしまいそうな快楽となって彼女を襲う。
流れる血が目に入る事も厭わず、その美しい顔を醜く歪め、ディレトは嗤った。

「……っ！」

そんな彼女に寒気を感じながら、ハヤトは地面を蹴りながら『その場所』を見る。
視線の先にあるのは、遮蔽物の無い一際高い廃ビルの屋上。

（あと……４３秒！）

後ろから迫ってきた橙の魔力弾を倒れるように避け、廃ビルの屋上目掛けて足が砕けても構わないとばかりに、最後のひと踏みに全ての力を込めて跳ぶ。
その努力は報われ、そのひと踏みで生み出されたジャンプは彼のからだを『その場所』へと押し上げた。

「が……っぐ……！」

そのひと踏みで、唯一無事だった左脚の骨も砕ける。
碌な着地姿勢もとれず、彼はその屋上に顔から突っ込んだ。

「……っ！」

転んだ勢いを利用し、近くの瓦礫に身体がぶつかるように身体を動かす。
果たしてその試みは成功、ハヤトの体勢は丁度瓦礫に背を預けるようなモノになった。
彼がぶつかった瓦礫には蜘蛛の巣状の罅が入り、叩きつけられた衝撃の凄さを物語っている。

「これ、で……二手」

まさに狙った通り、指定された場所ドンピシャに辿り着けた事に満足し、ハヤトは痛みを堪えて笑みを浮かべた。

「あと…２３秒」

「ひゃひゃひゃひゃひゃひゃっっ！！！」

ハヤトが呟いたのと同時に、ビルの下から哄笑と共にディレトが飛び上がってくる。
そして屋上に降り立ち、血塗れの顔でニタニタと嗤いながら、ゆっくり一歩ずつ彼に近づいていく。

「あひゃ……ふひひ……」

既に正気など微塵も感じさせぬ笑み。

「……あと3歩……2歩……」

「くひゃひゃ……」

そして、最後の1歩をディレトが踏み込んだ――その時。

寄りかかった瓦礫から跳ね起き、膝立ちになって右手を突き出す。
突き出された右手には、真紅の魔力が集まり、渦巻いていた。
殆ど目の前まで来たディレト目掛け、ハヤトは咆哮と共にそれを解放した。

「……それで、詰みだ」

「い……っけぇぇぇえええええええっっっっ！！！」

吐き出された真紅の砲撃。
それは、デバイスという補助が無いというにも関わらず、ブレイブハートを持っていた時とまるで変わらぬ砲撃。
しかし……。

「けひ……“キャンセラー”！！！」

ハヤトが、己の身に残る魔力の全てを注ぎ込んだその砲撃は、届かなかった。
目の前で溢れた真紅の奔流を、ディレトは瞬きひとつせずに掻き消す。

「……はっ」

それを見たハヤトから、そんな小さな声が漏れる。
同時に、彼の身体から溢れていた真紅の魔力が……消えた。
文字通り命を削る一撃。しかしそれさえも、ディレトという圧倒的な力の前には届かなかった。

「あはっ……」

力尽き、膝を突いた体勢で浅い呼吸を繰り返すハヤト
その身体からは、先ほどまでの魔力の片鱗も、戦う意志も感じられない。
だから、ディレトは確信した。
この戦いは、これで終わりなのだと。

「ＩＳ“エクスプロード・アイ”起動」

金の瞳を煌かせながら、ディレトは最後の言葉を彼と交わそうと口を開く。

「私を誘い出して、近距離からの全力砲撃。
その程度で、私(わたくし)をどうにか出来ると思いまして？」

「……ケ」

「？」

その言葉に対して、ハヤトはボソボソと小さな声で答えた。
聞こえ辛かったその声に、ディレトは小さく首を傾げる。

「何て、言いましたの？」

そして彼女が尋ねた――その時。

「俺は囮だよ。マヌケ」

≪Ｈｅ ｉｓ ａ ｄｅｃｏｙ. Ｂｌｏｃｋｈｅａｄ.≫

「!?」

項垂れていたハヤトの声と、念話で聞こえたブレイブハートの声。
突然聞こえたその声に、ディレトがギョッとして動きを止めた。
その瞬間、ハヤトはニヤリと笑って自分の前に真紅のシールドを発生させ、全身のバネを使って思い切り後ろに跳ぶ。

「な――」

その行動に、ディレトが驚き口を開く。
しかし、彼女は言葉を発することが出来なかった。

「――ぐ、ぎゃっ!?」

空気の壁を突き破り、衝撃波と暴風を引き連れて飛来した真紅の弾丸。
ソレは正確無比にディレトを捉え、彼女の意識を刈り取りながら撥ね飛ばした。

◇◇◇◇◇

≪　Ｍｉｓｓｉｏｎ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ．．．　≫

自身の放った音速を超える弾丸――インビジブル・シューターの命中を確認したブレイブハートは、小さく呟く。
彼女は今、ハヤトの屋上から２００ｍほど離れた廃ビルの屋上に放り出されていた。
ブレイブハートが自分を固定していた瓦礫は、インビジブル・シューターを射出した際の衝撃波によって吹き飛んでいる。

≪　賭けに、勝てた……（ザッ）ようですね……　≫

彼女が考えた賭け。
それは、実に単純明快なモノだった。

そもそも、何故インビジブル・シューターが撃てなかったのか。
それは、射出までの時間が致命的に遅いからである。
１１秒強という時間は、ディレトのような高速戦闘を主体とする敵に対しては、永遠に等しい時間だ。
では、何故そこまで時間がかかるのか。

原因のひとつは、膨大なまでの弾道計算を始めとした数々の計算。
相手の軌道を見極め動く、音速を超えた弾丸が飛ぶ時に発生する衝撃波や、術者に返ってくる反動。
それらの計算は、どれだけ急ごうと１０秒近い時間がかかってしまう。

もうひとつの原因は、術者や敵を守る為に必要な魔法の準備。
術者を襲ってくる反動から守る魔法、標的である敵を衝撃波で殺さないように必要な減衰魔法。
勿論、それらは既に用意されてはいる。だが、その規模は周りの状況によって微細に変化し、変化に応じて細々と調整しなくてはいけないのだ。
それにかかる時間は、僅かとはいえ確実に時間を喰う。

それを実戦で撃つ為にはどうしたらいいか。

答えは単純だった。
時間を喰う要素があるのなら、その全てを排除してやればいい。
あらかじめ撃つ場所を決める事で弾道計算という要素を消し、術者自身を囮とすることで術者への反動という要素を消し、非殺傷設定以外の全ての制限を外すことで、残る計算の全てを排除する。

こうすることで、射出までの計算は僅か1秒以下まで縮めることが出来た。

だが、問題はまだ残っている。

インビジブル・シューターはその性質上、真っ直ぐにしか飛ばない。

だから、いかに音速を超えていようと事前に撃つ事が分かってしまえば、避けることは不可能ではない。

仮に外してしまえば、その時点で敗北は決定。だから、射出する直前まで魔力を感知させないようにしなくてはならない。

それらを踏まえて、ブレイブハートが考えたついた“賭け”。

ハヤト自身を囮として、予め彼女が指定した場所へとディレトを誘い出す。

そして、誘い出したところでブレイブハートがインビジブル・シューターを生成。それを感知させない為に、ハヤトがディバインバスターをディレトに撃って、魔力感知を誤魔化す。

最後にタイミングを合わせ、ハヤトが対衝撃シールドを張り、ブレイブハートはインビジブル・シューターを撃つ。

言葉にすればたったこれだけの事だが、実際は殆ど運に頼った賭けだった。

最初の問題は、ハヤトもブレイブハートもボロボロだという事。

誘い出す際、ブラスターシステムの負荷を一時的にブレイブハートが肩代わりするが、それに彼女が耐え切れる可能性は無い。

さらに言えば誘い出す前にハヤトがディレトに倒される可能性も

高い。

次の問題は、タイミングがズレる可能性があるという事だ。

デバイスであるブレイブハートは問題ないが、ハヤトは人間。秒数を数えているうちに、どうしてもタイミングがズレてしまう可能性が高かった。

対衝撃シールドを張るのがコンマ1秒でも遅れてしまえば、ハヤトはインビジブル・シューターの衝撃波によって挽肉になるだろう。

そしてその他にも、問題点を挙げればキリが無い。

けれど――結果として彼等は勝った。

確率としては殆ど0に近い勝率しかなかった賭けに、勝ったのだ。

≪　さすが（ザッ）マスター、ハヤ（ザッ）トです……　≫

だが、その賭けの代償は大きかった。

≪　反動の大きさを（ザッ）計算、シ損ねマし、タ……　≫

ブラスターシステムの負荷、それをハヤトの分まで肩代わりし、ただでさえボロボロになっていたブレイブハート。

その身体に、一切減衰されていない1トンを超える衝撃は――致命傷だった。

《　私ハ、ここ（ザッ）まで、ノ……（ザザッ）よう、デす　》

硝子の割れるような音がして、ブレイブハートの本体に罅が入る。
その罅割れは連鎖するように次々と彼女の身体を走り――。

《　申し訳、ありま……　》

カシャン、と。
一際儚い音を立て、彼女の身体は砕け散った。

◇◇◇◇◇

「……はぁっ！　はぁっ！！」

真紅の弾丸が引き連れた暴風と衝撃波を耐え切ったハヤトは、全ての力を使い切ったとばかりに倒れこむ。
そして、身体を仰向けにして大きく荒い呼吸を繰り返す。

「さす、がに……ぜえっ！　勝っただ、ろ……っ！！」

上下が逆転した視界で、吹き飛ばされたディレトを見る。
その視線の先には、瓦礫の山に埋もれ、両手両足がおかしな方向に曲がったディレト。
呼吸はあるようなので生きてはいるようだが、どう見ても戦える姿ではない。

――ハヤトの、勝利であった。

「ははっ……」

それを確信した瞬間、ハヤトの口から笑い声が漏れる。

「はは……あっははははっは……あははははは！！！」

そしてハヤトは、痛みさえ忘れて大声で勝ち鬨を上げた。

「どうだ！！！　勝ったぞこんちくしょぉおおおおっっっっ！！！！」

高らかに上がったその勝ち鬨の声は、廃ビル群の中に木霊して響

く。

「最強に！　凡人が勝ってやったぞ！　ざまぁみろってんだ！！！
あっはははははは！！！！！」

しかし――勝利を確信し高らかに笑う彼に、迫る影がある。

「――がぁっ！？」

【……】

突然降り注いだ弾丸が、ハヤトの身体を打ち据える。
その攻撃はハヤトをディレトから少し横にある瓦礫へと吹き飛ばす。

「……なっ」

瓦礫に埋もれた彼の前に現れたのは、３機のガジェット？型と、１０機以上の？型。
それらがハヤトを取り囲むように展開している。
万が一として、少し前にクアットロが動かしたガジェット達だ。

（や、べぇ……もう、余力が残ってねぇ）

元々ボロボロだったところに、トドメともいえる攻撃を受けたハヤトには、最早指一本動かす力も残っていない。
そんな彼目掛けて、？型が一斉にその太いアームを振るう。

（戦力隠してるなんて予想出来ただろうに……糞、ミスったな）

酷くゆっくり迫ってくるアームを、ハヤトは諦め混じりに眺める。

「……わりぃ、ティア」

迫るアームは、そのままハヤトの身体を打ち据え、自分にとどめを刺す。
ハヤトはそんな未来を想像して目を瞑り、小さく恋人に向けて謝った。

――だが。

「「「うおおおおおおおおっっっっ！！！」」」

目を瞑ったハヤトの耳に、声が届いた。

「――え？」

「はあああああああっ！！」

「うっりゃあああああああっっ！！」

開いた目に見えたのは――青と水色のウィングロードと、その上を走るスバルとギンガ。

「だぁぁあああああっっ！！！」

そして、ストラーダに雷を纏わせて振り上げ、飛び込んでくるエリオ。

「「「どけぇぇぇえええええっっ！！！」」」

裂帛の咆哮と共に、３人の攻撃が？型の巨体を切り裂き、殴り飛ばし、蹴り潰す。

一拍を置いて爆発が起き、ハヤトを庇うようにスバル、ギンガ、エリオの3人が立つ。
だが、？型がやられたとてガジェット達は止まらない。
ハヤト達を取り囲む？型達が、彼らを撃ち貫こうと射撃準備に取り掛かる。
けれどそれは、次いで聞こえてきた2つの声に遮られた。

「フリード！」

『ガァァアアアッッ！！！』

聞こえてきたのは、キャロとフリードの声。
そして――。

「クロスファイアーーー！！　シューーーートッッ！！！」

誰よりもハヤトが待ちわびた少女――ティアナの、声。

「……はっ」

唐突に現れた増援に、小さく笑うハヤト。

そんな彼の前で、ティアナの弾丸とフリードの火炎弾が残った？型の群れを殲滅していく。
そして、２人はその爆発を背に、ハヤトの側へと降り立った。

「「「「「……」」」」」

ティアナ達はハヤトを庇うように立ちながら、ガジェットの討ち漏らしが無いかを確認する。
暫く辺りを確認して、ガジェットの反応が無いことを確認し――全員が一斉にハヤトの元へと駆け寄った。

「ハヤト！」

「ハヤト君！」

スバルとギンガの２人が、ハヤトを瓦礫の中から助け出す。
２人に抱えられたハヤトの元にティアナが駆け寄り、２人からハヤトを受け取って抱きしめる。

「……ゴメン、遅れちゃった」

ボロボロのハヤトを抱きしめ、ティアナが小さく彼に謝罪する。
その言葉に、返ってきたのは――

「んにゃ、ナイスタイミングだったぞ」

――嬉しそうな、彼の言葉だった。

◇◇◇◇◇

「……ったく。あの子も結局使えない屑でしたか」

ハヤトがティアナ達と合流した映像を見て、クアットロが口汚くディレトを罵る。

自分が思い描いていたシナリオが、悉く覆されていく光景に、彼女は苛立っていた。

「あぁもう！　どいつもこいつもホントに使えない。

もういいわ、この際あの一帯に仕掛けた生物兵器、全部起動しちゃいましょう。

どうせ揺り籠さえ上がってしまえば、ミッドチルダなんて何の価値もないのですし」

イラついた顔のまま、クアットロが乱暴にパネルを叩こうとする。
その時――。

「それは困る。あそこには、私の愛しい弟と、未来の義妹候補がいるのだからな」

「――っっ！！？？」

彼女の背後から、凛とした声が響く。
クアットロが驚愕に顔を染め、勢いよく後ろを振り返った。

「まったく、貴様のような小悪党は、都合が悪くなると投げやりになるから性質が悪い」

彼女がいる最深部の制御室。
声はそこに通じる唯一の入り口の先から聞こえてくる。
その声以外の音がしない制御室に、カツン、カツン、と足音が響く。

「……だ、誰っ！？」

「貴様ごときに教えるほど、安い名ではないよ」

「なんですって！！」

本能的に感じた恐怖に怯え、クアットロは思わず声を荒げた。
果たして、通路の先から現れたのは――。

「貴様の罪を考えるに、例え億回殺したとて私の気は晴れんのだが」

真紅の軍服に全身を包み――。

「まぁ、それでも私は慈悲深い」

流れる豪奢な金髪を揺らし、尊大に歩く女性。
それは、地上本部に置いて最強の名を欲しいままにする、鬼札（ジョーカー）。

「だから、九割殺しで勘弁してやろう」

――ハヅキ＝ロックウェルだった。

side: | 了

1966

第６１話　『決着　３』（後書き）

ブレイブハートの作戦の説明考えてて知恵熱出た。
どうも、ラモンです。

はい、という訳でハヤトＶＳディレト決着編でした。
５８．５話の感想でハヅキＶＳディレトと予想した読者の皆！
どうだ！　裏切ってやったぞ！！！ｗｗ

え？　予想できてた？
……そうですかｏｒｚ

ま、それはともかく決着です。
ブレイブハートについては……かなり悩みました。
ただ、あれだけの実力差の相手に、何の代償も無しに勝てる訳ないと考えました。それで、ハヤトを死なすのは流石に……って考え、こんな感じになりました。
彼女の部分を書きながら一人泣いたのは秘密です（笑）

ブレハファンの為に言っておきますと、彼女はこれで退場ではなく、見せ場はまだ残ってはいます。

ちなみに彼女が立てた作戦は、全部作者の脳内設定＋妄想です。
多分あんまり整合性はありません。
元々賭けって言うぐらいですし、作戦らしい作戦じゃありませんしね。
一応他にもいくつか策は考えましたが、一番コレが実現可能そうだったので採用しました。他のは殆どギャグ漫画レベルだったのでｗ

残るのは史上最強の親子喧嘩編、メガ姉粛清編、エターナルロリータ駆動炉粉砕編、皆で仲良く脱出編など、揺り篭に関することだけですね。
この『決着』編も、あと2，3話で終われそうです。
長かったなぁ……。

次回は多分メガ姉粛清編＋駆動炉粉砕編になると思います。
あまり期待せずにお待ちください。

それではまた、次の話で。

最後にちょっとお知らせを。
今週は仕事が忙しいので、真に勝手ながら“リリカル☆マジカル☆とあ新らじお”の今週分はお休みさせて頂きます。
土曜日の更新は出来るように頑張りたいですが……確約はできません。
とあ新本編は多少書き溜めてあるので、ちゃんと更新できるとは思います。そちらの方はご安心ください。

第６２話　『決着　４』

ｓｉｄｅ：―

「いつの間に揺り籠の中に……それに、どうやってここを……っ！？」

突然現れた、見知らぬ来訪者。
その存在に驚愕しながら、クアットロが尋ねる。
ハヅキは腕組みをして尊大に立ちながら、右目にかかる髪をかき上げて答えた。

「ふむ。では順番に答えてやるとしよう。
ここに突入したのはつい数分前。ヘリで真上から突入した。ここに来れたのは……勘だな」

「勘！？」

「ハヤトが昔、『ゲームで親玉が居る場所って、大概一番上か一番下だよな』と言ってたのでな。
一番上から入って、あとは勘を頼りに床をぶち抜いて適当に散策していたら、それらしい扉を見つけた訳だ」

「そ、そんな理由で……」

滅茶苦茶な理由で自分の居場所を探り当てられたと知り、クアットロは眩暈さえ覚えた。
エリアサーチなどならまだしも、ただの勘とゲームの知識で見つけられたというのは、彼女にしてみれば知りたくも無い事実だったのだろう。

「さすが私の愛しい弟だ。言う事に間違いが無いな！　はっはっはっは！」

何故か自慢げにうんうんと頷き、カラカラと大声で笑う。
クアットロはそんな彼女を見て呆気にとられていたが、直ぐに気を取り直し、後ろ手でパネルを叩く。
すると、制御室の空間を埋め尽くさんばかりに防衛システムが現れ、ハヅキを取り囲む。
それは駆動炉でヴィータを襲ったのと全く同じキューブの群れ。
ただ、数はそちらの比ではない。
ハヅキを囲むキューブの数は１００を超え、ハヅキの視界からクアットロを隠すほどに空間を埋め尽くしている。

「ふ……ふふふ。ここまで来れた事は、誉めてあげますけどぉ。
重度のＡＭＦ影響下で、たかだか魔導師一人で何が出来るって言うのかしら？」

この空間における自分の絶対的有利を確信し、再び厭らしい笑みを浮かべて嗤うクアットロ。
けれど――。

「ＡＭＦ？　なんだ、そんなものが効いていたのか？
まったく感じなかったから、気付かなかったぞ」
「――は？」
不思議そうに目を瞬かせるハヅキの返答に、言葉を失った。
（ＡＭＦが効かない？　あのエースオブエースだって、影響を受けるレベルなのよ！？）
ハヅキの言葉に動揺しながらも、クアットロはパネルを操作する。
間を置かず、キューブに光が集まり、ハヅキ目掛けて隙間無く射撃が開始された。
爆音が制御室に轟き、もうもうと煙が立ち込めた。
「は、あははっ！　な、何よ！　結局強がりだったんじゃない！！
馬鹿馬鹿しい！」
立ち込める煙に勝利を確信し、クアットロが再び高笑いを響かせる。
けれど――。

「ファングシューター……」

その笑いは、小さく響いた声で途切れる。

瞬間、ハヅキの周囲を埋め尽くしていたキューブの隙間から真紅の光が漏れ始め、そして――。

「喰い荒らせ」

指の鳴る音と共に、紅の牙が荒れ狂った。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第６２話　『決着　４』

「……あ、あぁ……」

紅の牙が荒れ狂った後。

制御室に残ったのは、腰を抜かしてへたり込むクアットロと鳴らした右手を掲げ、悠然と彼女を見下ろすハヅキ。

先ほどまでこの空間を埋めていたキューブは、ひとつ残らず消え去っている。

「次は何だ？」

「ひぃっ……」

右目にかかる髪をかき上げ、ハヅキは口の端を持ち上げた。
それはまるで猛獣が獲物を見つめる表情に似ていて、クアットロは小さな悲鳴を漏らす。

「どうした？　何もせんのか？」

カツン、とハヅキが一歩を踏み出す。
同時にクアットロはへたり込んだまま、這うようにして後ずさる。
だが直ぐに壁へと辿り着いてしまい、怯える瞳でハヅキを見つめ、カチカチと歯を鳴らす。

「何を怯える？　まだやれる事はあるだろう？
ほら、ミッドチルダに仕掛けた生物兵器とやらを盾に私を脅してみろ。
何か卑怯な手を使って私を嵌めて見せろ。貴様は悪役だろう？
ならばもっと足掻け。
その全てを粉砕し、蹂躙し、踏み躙り、貴様に“絶望”というモノが何なのか教育してやる」

カツン、カツン、と甲高い音を鳴らし、ハヅキが一歩ずつ歩を進めていく。
その歩みはゆっくりとしたモノだったが、クアットロはその足音が死刑執行人の足音に聞こえた。

「ち、近寄らないでっ！」

咄嗟にパネルを動かし、クアットロが大声でハヅキを静止する。

「そこから一歩でも近寄ったら、お望み通りミッドチルダ全域に仕掛けた生物兵器を起動するわよ！？」

「……そう、それでいい」

クアットロの必死な声に、それでもハヅキは悠然とした態度を崩さない。
それどころか、愉快そうにクツクツと低い笑いを漏らす。

「だがなクアットロ。貴様が生物兵器を起動させるのに必要な時間は何秒だ？
どれだけ早くとも2秒前後だろう？」

「！？」

これで動きを止められると思っていたクアットロは、意外すぎる彼女の反応に目を見開いた。

「私が貴様に牙を突き立てるのに必要な時間はコンマ以下。さて、普通に考えれば勝つのはどっちかな、策士殿？」

「つ、強がり言ってんじゃないわよっっ！」

「強がりかどうか、試してみればいい」

「～～～～～っっ！！！！！」

そう言いながらハヅキが一歩を踏み出した瞬間、クアットロがパネルを叩こうと手を動かそうとして――。

「あぎゃっ！？」

動かす前に、手を弾かれた。

弾の軌跡すら見えなかったその早業に、クアットロの目が驚愕に見開かれる。

彼女の視線の先には、右手を銃の形にしたハヅキが嗤っている。

「だから言っただろう？　私の方が速い、と」

「あ……あぁ……」

クアットロは初めて感じた絶望に、小さく声を漏らして首を振った。

「さて、次の手品は何だ？」

そう呟いて、ハヅキは遂に前進を始める。
カツン、カツンと足音を響かせて、クアットロとの距離を詰めていく

「うあああっ……ガ、ガジェット！！」

クアットロの上げた恐怖の叫びに、彼女が護衛にと制御室の壁にステルス機能を発動させて貼り付けていたガジェット？型の群れが、壁から離れてハヅキとクアットロの間に降り立つ。
だが――

「意志無き鉄屑如きが、私の進路を塞ぐんじゃあない」

ハヅキの短い呟きと共に、２０機を超える？型は一瞬で切り刻まれた。
その爆風に髪を靡かせ、ハヅキは悠然と歩を進める。
彼女の右手には、真紅の刃が煌いていた。

「あ……あぁぁあああっ！」

殆ど半狂乱になって、クアットロが叫ぶ。
恐慌に陥った彼女は無我夢中でさっきまで弄っていたのとは別のパネルを叩き、制御室に仕掛けたトラップを作動させた。
すると、歩を進めるハヅキの前方の床からキューブが射出したモノと同質の攻撃が撃ち出される。

「私の歩みを止めたければ、この兆倍を用意しろ」

その攻撃を、ハヅキは軽く右手を振るだけで全て切り裂く。
そしてそのまま足を進め、攻撃してきた床のトラップを踏み潰す。
瞬間、再びガジェットの群れが何処からか現れ、彼女の進路を塞ぐ。その数は、先ほどの？型の数倍。
まさに通路を埋め尽くし、隙間さえ無い状態だった。

「全く、数だけは多いな」

だが、ハヅキは歩みを止めようとはせず、一番近くに居たガジェットへと魔力刃を突き刺した。
そして――

「邪魔をするなと言っただろう、鉄屑」

吐き捨てるような言葉と共に魔力刃を砲撃へと変え、通路を埋め尽くしたガジェットの群れを、爆発さえ許さずに消し飛ばして見せた。

「ひいいいいっっ！！！？？」

その砲撃はクアットロの真横を通り、彼女が背にしている壁を貫いていく。

直ぐ横を通り抜けた真紅の砲撃に、クアットロは堪らず甲高い悲鳴を上げた。

「……ふん。どうやら、トラップは終わりらしいな」

それ以上何も起きないのを歩きながら確認し、ハヅキはつまらなさそうに鼻を鳴らした。

「な、何なのよアンタはぁっ！？」

信じられぬ光景の連続に、クアットロは涙を流しながら叫ぶ。

少なくとも、ここに配置したキューブの攻撃力は、ヴィータを襲ったモノの数倍はあったし、ガジェットとてクアットロが自分の護

衛用にカスタムした数ランク上の性能のモノだった。
けれど、目の前の女はそれをまるで歯牙にもかけず、悠然と歩き続けている。
はっきり言って、クアットロにとってハヅキは異常すぎた。

「決まっている。時空管理局局員だ」

彼女の叫びに短く答え、ハヅキは歩みを進めていく。

「まぁ、少しばかり強いかも知れんがな」

冗談めかして答え、肩を竦めながらも彼女の歩みは止まらない。
別に走るわけでもなく、急ぐわけでもなく、一歩ずつのゆっくりとした歩み。しかし確実に、着実に2人の距離は縮まっていく。
その緩慢な動作がクアットロの恐怖を呼び、彼女を愚行へと走らせる。

「こ、このぉぉおっっ!!!」

最終手段とばかりに、クアットロが自分の腕につけられたガンナックルから弾を撃つ。

「危ないじゃないか。当たったら痛いだろう?」

けれどそれも、そんな言葉と共に紅のシールドに阻まれ、届かない。

「策士気取りが自ら手を下すとは。実に無様、実に滑稽だな」

侮蔑の言葉を吐きながら、残り少ない距離を詰めていく。
そして、ついにハヅキがクアットロの前に立った。

「ひっ、ひぃぃ……っ」

ハヅキの視線に射抜かれたクアットロは、自分の体を抱きしめ、歯を鳴らして悲鳴を漏らす。
顔中のありとあらゆる場所から体液を流し、ぐしゃぐしゃになった顔でハヅキを見上げていた。

「……粛清の前にひとつ、お前に教えてやろう」

涙と鼻水、涎を垂れ流すクアットロを冷たく見下ろし、ハヅキは告げる。

「我ら管理局員には“平和”という追い求めるモノがある。
守らねばならぬ“正義”という尊厳がある」

ハヅキの身体から、真紅の魔力が立ち昇る。
その魔力はなのはのソレよりも遥かに大きく、ＡＭＦ影響下だというのに些かの衰えさえ見せない。
遠目に見れば、まるで巨大な火柱が立っているように見えただろう。

「貴様が如何に悪知恵を働かせようと、策を張り巡らせようと。
我らの魂にその２つが宿る限り、管理局に敗北の２文字は有り得ない。
私の誇りである愛しい弟、ハヤトがそうであったようにな」

立ち昇った真紅が、彼女の右手で渦を巻く。
それは段々と集束していき、遂には拳ほどの大きさまで小さくなった。

「貴様に追い求めるモノはあるか？　守るべき尊厳はあるか？
――無いだろうな。だからこそ貴様はそんなにも醜悪で、そんなにも無様だ」

魔力を集束した右手を高々と振り上げ、ハヅキは言う。

「尊厳も、守るべきモノも、追い求めるモノも無い。
ただ自身の快楽を満たす為だけに、獣の様に動き続ける――」

「た……たすけっ……」

叩きつけられる殺意に、クアットロはガタガタと震え、失禁さえしていた。
そんな彼女を見て、ハヅキは一度目を閉じ息を吸う。
そして――

「――そんな貴様の体内に流れる血にもっ！
醜く蠢く肉片にもっっ！！　それらを司る魂にもっっっ！！！
その全てに、一片の価値さえ有りはしないっっっっ！！！！」

カッと目を見開き、吼える。
空気をビリビリと震わす咆哮に、クアットロは体を竦め、息を呑む。
瞬間、ハヅキのバリアジャケットの右肩に嵌め込まれた金色の宝玉が光り、男性の声がする。

《Ｊｕｄｇｍｅｎｔ．》

その問いに、ハヅキは嗤って答えた。

「決まっているだろう、レオンハルト」

そのままハヅキは拳を振り下ろし――

「酌量の余地無く、有罪（Ｇｕｉｌｔｙ）だ」

《Ｙｅｓ　ＢＯＳＳ．》

――無慈悲な言葉と共に断罪の砲撃を解き放った。

◇◇◇◇◇

「だあああああっっっっ！！！」

血に塗れた身体に残る全ての力を振り絞って、アイゼンに乗せて駆動炉目掛けて振り下ろす。
ボロボロになったヴィータとアイゼンにとって、まさに最期の一撃。

「うおおおおおおおっっっっ！！！！」

ただただ、駆動炉を砕く為に振り下ろされたその一撃。
その一撃は、凄まじい火花と共に駆動炉に罅割れの音を奏でさせた。
けれど、それでもプリズムは砕けない。
そして……ついにヴィータとアイゼンの限界が訪れる。

「……くぅぅっ！」

一際大きな爆発と共に、ヴィータの小さな身体が弾き飛ばされる。
手に持ったアイゼンの先端についていた、象徴とも言えるドリルはへし折れ、彼女が弾き飛ばされるのと同時に本体が砕け散り、赤い欠片となって宙に舞う。
弾かれたヴィータは力尽きたように体勢を崩し、地面目掛けて頭から落ちていく。

「……ぁ……」

その目には、未だ妖しい輝きを放つプリズムがある。

「……駄目だ……砕けなかった……」

落ちながら、その目から悔しさの涙を流す少女。
それは自分の役目を果たせなかった悔しさの涙。

「はやて……皆……ゴメン……ッ」

小さく呟き、ヴィータが目を瞑る。
そして彼女の身体は、そのまま地面に叩きつけらる……筈だった。

「謝ることなんて、何もあらへん」

「え……」

その少女の身体を、白銀の光が受け止める。
聞こえてきた優しい声に、ヴィータが目を開け、小さく声を漏らす。

「はやて……」

彼女を受け止めたのは、ヴィータが敬愛する主――八神はやて。
茶色だった髪は白く染まり、背中には3対の漆黒の羽根。
その姿は、彼女がリインフォース?と共にユニゾンした姿だった。
はやては抱きとめたヴィータのボロボロの身体を優しく抱きしめ、
それから駆動炉を見て、呟く。

「鉄槌の騎士ヴィータと、グラーフアイゼンがこんなになるまで頑張って――」

彼女の視線の先にあるのは、プリズムの表面に突き刺さったグラーフアイゼンのドリル。
そして、彼女の言葉に応えるかのように突き刺さった部分に亀裂が走る。

「それでも壊せへんモンなんて――」

亀裂は、どんどん広がっていく。
ひとつの罅が新たな罅を呼び、プリズムはあっという間に罅だらけになる。
遂に亀裂はプリズムの全てを走り終え、最期に――

「この世に、あるわけ無いやんか」

その言葉と共に爆発し、砕け散った。

◇◇◇◇◇

「……む？」

大きな振動を感じ、ハヅキは足を止める。

彼女の前に倒れる半死半生のクアットロ、その目の前にモニタが表れ『駆動炉全壊』という表示を示した。

「ふむ」

それを見て満足そうに頷き、ハヅキはクアットロを片手で肩に担ぐ。

そのまま少し瞑目し、揺り籠の中にある魔力を探る。

「3時の方角で2つの魔力が戦っているな……む、5時の方角から大きな魔力が3時の方角に向けて移動中か。
……なるほど、では3時の方角に向かって合流するのが上策と言ったところか」

大まかな指標を決め、ハヅキは3時の方角目指して歩き出す。

《　そちらには壁しかありませんけど？　》

壁に向けてズンズンと歩を進めるハヅキに、彼女のデバイスであるレオンハルトが尋ねる。
ハヅキはその問いに答えるより先に、拳でもって壁を粉砕した。
そして壊れた壁を悠然と潜りながらレオンハルトに言葉を返す。

「真っ直ぐ行った方が早いだろう？」

《　いえ……まぁ、そうですけどね　》

「ならば問題など無いな」

漫才のようなやり取りを交わしつつ、ハヅキは壁を、天井を破壊しながらどんどん進む。

その足取りは、人一人を抱えているというのに随分と軽いものだった。

「早く終わらせてハヤトに会おう。お姉ちゃんの活躍を聞いたら惚れ直すだろうなぁ。

『さすがお姉ちゃんだ！』って言ってくれるかも知れん。あぁ、駄目だぞハヤト、私達は実の姉弟なんだか……ふふふふ」

恍惚とした表情で頬を染め、鼻歌さえ歌うハヅキの進軍は止まらない。

途中で動きの止まったガジェットが進路を塞ぐが、それらはハヅキも認識しないうちに叩き潰され、殴り壊され、蹴り抜かれ、１秒とかからずに鉄屑にされていく。

「だが、まずはハヤトの武勇伝を聞いてからだな。

アイツならば楽勝だとは思うが、相手は中々強いとナカジマ陸曹も言っていたし……途中で見た映像でも、とてもピンチだったようだしな。全くハヤトは遠慮が過ぎる。

手加減をし過ぎるから、余計な痛手を負ってしまうんだ。帰ったら優しく注意してやらないとな」

最早軽い足取りというレベルですらなく、スキップさえしながらハヅキは目の前の壁を蹴り砕く。

破片がクアットロの頭に直撃するのもお構いなしである。

「それから私の活躍を話してハヤトに誉めて貰って、それからはハヤトの看病だな。
ふふふ……大丈夫だぞハヤト。お姉ちゃんがじっくりたっぷり看病してやるからな……じゅるり」

言っている事はアホ丸出しなのに、彼女の身体は神掛かり的な動きでありとあらゆる障害を排除していく。
壁を打ち壊し、天井を蹴り砕き、飛んできた破片をクアットロでガードする。
破片がぶつかるたびにクアットロが小さな呻き声を上げるが、ハヅキは全く気にしない。

《……そういう話は、任務が終わってからにしてくれませんか。ボス》

そんな彼女の代わりにクアットロに防御用のシールドを展開しながら、レオンハルトは小さく溜息を吐く。
けれど、彼の言葉もハヅキの耳には届いていない。それを理解するレオンハルトはもう一度、今度は大きめの溜息を吐いた。
昔はあんなに可愛かったのに、と年寄り臭い事を考えながら。

ｓｉｄｅ：―　了

1991

第６２話　『決着　４』（後書き）

会社行く前に投稿だ！
どうも、ラモンです。

はい、そんな訳で眼鏡粛清編＋駆動炉粉砕編でした。
ハヅキに関しては、私が最強を書くとこうなります、という感じ全開で書かせていただきました。
ただ、書いててふと思ったことが。

……ハヅキの方が主人公っぽくね？

きっと気のせいですけどね！
ちなみにハヅキの撃った砲撃の名前は『ファングバスター』という名前です。

そろそろ今回あたりから、ギャグ要素を復活させていきたいと思います。
だってこの小説、ジャンルは「コメディー」ですから！
最近シリアス続きで、作者自身忘れかけてましたけどｗ

そんな訳で、シリアスもコメディーも両方こなせるハヅキ姐さんに頑張ってもらいました。ヴィータのあのシナリオでギャグは無理だったので。
うん。久しぶりにギャグ書いたけど……やっぱりいいもんですね！ｗ

さてさて、いよいよ次回は親子喧嘩編、そして書ければ皆で脱出編

です。
期待せずにまったりとお待ちください。

それではまた、次の話で。

第６３話　『決着　５』（前書き）

※最後にちょっとしたアンケート（？）があります。

第６３話　『決着　５』

ｓｉｄｅ：―

「……あっ」

不意に。
ヴィヴィオは自分の意識が何かから解放されたことに気付いた。
けれど解放されたのは意識だけで、身体は自分の言う事を聞いてはくれない。

「なのは、ママ……？」

「ヴィヴィオ！？」

喘ぐように、眼前で自分の魔力を受け止めている女性――なのはを呼ぶ。
その声になのはが驚きの声を上げ、ヴィヴィオの所へと駆け寄る。

「駄目！　ママ、逃げて！」

瞬間、ヴィヴィオが鋭く叫ぶ。
その声になのはが驚き、再びレイジングハートを構えた途端、ヴ

ィヴィオの魔力を乗せた拳が彼女を襲った。
襲ってきた拳を咄嗟にシールドで受け、衝撃で吹き飛ばされるなのは。

「……駄目、なの」

拳を振りぬいた格好で、小さく身体を震わせ、ヴィヴィオが呟く。
その言葉を呟いた途端に、ヴィヴィオの足元に灰色の空間が広がる。それは瞬く間に玉座の間に広がり、その空間を灰色に染め上げていく。

「ヴィヴィオ……もう、帰れないの」

言葉を続ける彼女の頬を、涙が伝う。
その涙を見て、なのはが口を開く。だが、そこの口から言葉が放たれる事は無かった。
なのはが何かを言う前に、玉座の間に――いや、揺り籠全体に警報のアラームと、緊急放送が鳴り響く。

『駆動炉破損　管理者不在　聖王陛下、戦意喪失。
これより、自動防衛モードに入ります』

「……っ！？」

◇◇◇◇◇

「自動防衛モード？」

その放送を、はやては玉座の間に続く通路を高速で飛行しながら聞いた。

どんな意味なのかと考えるよりも先に、その答えは聞こえてくる。

『艦載機、全機出動。艦内の異物を、すべて排除してください』

その放送に呼応して、通路の奥から無数のガジェットが現れる。

それを見て、はやては表情を引き締め、杖を振るう。

「行くよ、リイン！」

『撃ち抜いて……進みます！』

夜天の主従の言葉と共に、白銀の光が通路に踊り狂った。

玉座の間に、桃色と虹色の光が奔り、轟音と共にぶつかり合う。
その衝突は１度ではなく、２度、３度と繰り返されながら、更に加速していく。

「くっ！！」

「うぅっ！！」

何度目かの衝突で、２つの光が一度距離を取る。
だが、それも一瞬の事。直後になのはとヴィヴィオは中空で距離を詰め、互いの魔力をぶつけ合う。

「「……っ！！！」」

ぶつかり合う２つの魔力は、衝撃と火花を飛び散らせる。
凄まじい衝撃の中、なのはが涙を流すヴィヴィオへと叫ぶ。

「ヴィヴィオ！　今、助けるから！」

けれど、ヴィヴィオは涙を流しながら首を振る。

「駄目なの！　止められない……っ！！」

「駄目じゃ、ないっ！！」

そんなヴィヴィオの言葉を、大声で否定し返す。

なのはの声に呼応してレイジングハートから薬莢が吐き出され、宙に舞う。

途端に彼女の砲撃が威力を増し、拮抗していた虹色の魔力を吹き飛ばす。

「――あぁっ！」

「！？」

だが、ヴィヴィオは止まらずになのはの後ろへと回り込む。

その気配を察したなのはが、咄嗟に身体を捩じらせて、振るわれた虹色の拳の一撃を避ける。

けれど拳の連撃は止まず、続く拳をなのははシールドで受け止めた。

「くっ……うぅっ！」

「っ！　っっ！！」

拳は重く、鋭くなのはに襲い掛かる。
受け止めるシールドは決してもろい物ではなかったが、それさえ3撃目で砕かれ、なのはは床に叩きつけられた。

「もう……来ないで……」

床に叩きつけられたなのはを追い、ヴィヴィオも地面へと降り立つ。
そして頬を濡らす涙を拭おうともせず、拒絶の言葉を告げる。
対するなのはは、ダメージに震える膝に力を入れ、レイジングハートを支えに立ち上がり、彼女を見る。

「分かったの……私は、もうずっと昔の人のコピーで。
なのは……なのはさんも、フェイトさんも、本当のママじゃ、ないんだよね」

訥々と、まるで自分に言い聞かせるようにヴィヴィオが語る。

「この舟を飛ばす為の、ただの鍵で……玉座を護る為の、生きてる兵器」

「違うよ……」

涙を流す娘の言葉を、否定する。
けれど、ヴィヴィオの口から漏れる否定は止まらない。

「本当のママなんて……元からいないの。
護ってくれて、魔法のデータ収集をさせてくれる人を、探してただけ」

「違うよ！」

「違わないよっ！！」

なのはの否定の声を、さらに大きな否定の声でヴィヴィオが遮る。

「優しいのも、痛いのも……全部偽者の、紛い物（つくりもの）！
私は、この世界にいちゃいけない子なんだよっ！！」

「……そんなことない」

ヴィヴィオの声に、なのはは少し間を空けてから、小さく首を振る。
そして、泣いている我が子に向けて、優しく言葉を紡いだ。

「生まれ方は違っても、今のヴィヴィオは……そうやって泣いてる

ヴィヴィオは、偽者でも作り物でもない。
甘えんぼで、すぐ泣いちゃうのも。転んでも一人じゃ起きれないのも。ピーマン嫌いなのも。
私が寂しい時に、いい子ってしてくれるのも……」

言葉を伝えるなのはの目から涙が溢れ、頬を伝う。

「全部、私が大好きなヴィヴィオだよ」

「そんなの、嘘だっ！」

けれど、ヴィヴィオはその言葉を拒絶する。
なのははその拒絶に首を振り、言葉を続けていく。

「嘘じゃない……ヴィヴィオの事、待ってる人だっているんだよ？」

「そんなの、居るわけないよっ！！」

「居るよ。ヴィヴィオのお兄ちゃんが……ハヤト君が」

「っ！」

刹那、ヴィヴィオの脳裏に金髪の少年が浮かぶ。
『兄』と呼ぶと、少し照れ臭そうに笑って頭を撫でてくれた人。
泣いていると、いつでも側に来てくれて、護ってくれた人。

自分を受け入れてくれた、強くて優しい人。（ヴィヴィオ）（おにいちゃん）

「ハヤト君ね、ここに来る前私に『ヴィヴィオを頼む』って言ったんだよ？」

「……ハヤトおにいちゃん、が？」

「そうだよ」

弱々しく聞き返したヴィヴィオに、なのはが笑って頷きを返す。

「ハヤト君ね、ヴィヴィオのこと凄く心配してた」

「嘘、だよ」

「さっきだって、ヴィヴィオの事を『俺の妹』って呼んでた」

「！」

その言葉に、ヴィヴィオは虹色の光に包まれていた時に聞こえた言葉を思い出す。

『俺の妹を助ける為に……高町隊長が、戦ってる』

あの時、ハヤトは確かにヴィヴィオの事を『妹』と呼んだ。
他人でしかない自分を、紛い物の自分を、そう呼んでくれた。

「……ハヤト、おにいちゃん」

胸の前で手を握り、噛み締めるように彼を呼ぶ。
そうすると、何故だかハヤトが自分を呼んでいるような気がして、心が揺れる。
そんなヴィヴィオに手を差し出して、なのはが呼びかける。

「ヴィヴィオ、帰ろう？」

「……でも」

けれど、ヴィヴィオは躊躇する。
自分が造られた人間だと理解してしまったから。
部品でしかないと気付いてしまったから。

「私は、ヴィヴィオの本当のママじゃないけど……本当のママになれるように、努力するから」

言いながら、なのはが一歩前に進む。
その歩みに怯えるように、ヴィヴィオは一歩後ろに下がる。

「ハヤト君も、六課の皆も……きっと待ってるから」

また一歩、足を進める。
つられるように、ヴィヴィオもまた一歩下がる。
そんな彼女を見て、なのはが眉尻を下げた。

「だから――いちゃいけない子だなんて、言わないで」

悲痛な声で、懇願するように呟く。

「一緒に、お兄ちゃんのところに帰ろう？」

「……ぁ」

優しく告げられた言葉が、ヴィヴィオの罅割れた心を埋めていく。
そして――

「ヴィヴィオのホントの気持ち、ママに教えて？」

その言葉に、心の奥底に閉じ込めた気持ちが、溢れた。

「私は……なのはママの事も、ハヤトお兄ちゃんの事も、大好き」

思い通りに動かぬ身体で、声を絞り出す。

「ずっと、一緒にいたいよ！！」

涙で滲む視界の向こうに居る、愛しい母に、助けを求める。

「ママ……助けて……っ！！」

「……助けるよ」

その声に力強く頷き、魔方陣を展開する。

溢れる魔力に反応して、ヴィヴィオの身体は彼女の意志とは関係なしに戦いの構えを取った。

けれど、なのはの決意は揺るがない。

ヴィヴィオを——娘を助けると決めたから。

助けてと請われたから。

だから——。

「いつだって……どんな時だって！！」

彼女は疾走(はし)る。
全速力で、持てる力の全てを使って。
ヴィヴィオの身体もそれに反応し、全く同じタイミングで駆け、
なのは目掛けて拳を突き出す。

「ぐ……ぅっ！」

「っっ！！」

その拳を、なのはは避ける事無く右手で受け止めた。

《Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ．》

驚きに目を開くヴィヴィオ。
その耳にレイジングハートの音声が聞こえ、同時に彼女の身体を
無数の魔力の糸が縛りつける。
ヴィヴィオをバインドで拘束したことを確認し、なのはが空中に
飛びレイジングハートの切っ先を構えた。狙うのは、桃色の魔力に
縛られた、ヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ」

呼びかけるなのはの前と周辺４箇所に、魔力が集束していく。
それは彼女が使う最強にして最高の砲撃、スターライトブレイカー。
ヴィヴィオが無意識に使ってしまう、最硬の防御――『聖王の鎧』を貫く事のできる、唯一の魔法。

「ちょっとだけ、痛いの我慢できる？」

撃とうとしている攻撃を前に怯えるヴィヴィオに向けて、彼女は優しく尋ねる。
尋ねられたヴィヴィオは、彼女の目を見て、安心したように小さく頷いた。

「……いい子」

頷くヴィヴィオに笑いかけてから、なのはは表情を引き締める。

「防御を抜いて、魔力ダメージでノックダウン。いけるよね？」

《Ｃｌｅａｒ　ｔｏ　ｇｏ．》

相棒から返ってきた力強い返答を聞き、なのはがレイジングハートを振り上げる。

「全力、全開！！」

狙いを定め、限界まで魔力を引き上げる。
桃色の魔力の塊が一際輝きを増し、凶悪な程に膨れ上がっていく。
バインドに縛られたヴィヴィオはそれを見て、襲い来るだろう衝撃に目を瞑る。

「スターライト……」

そして、なのはは振り上げたレイジングハートを振り下ろし――

「ブレイカーーーーーーッッッ！！！！！」

――玉座の間に五条の閃光が迸る。
それらは寸分違わずヴィヴィオへと到来し、聖王の鎧さえ撃ち抜いて炸裂する。
その衝撃に苦しそうな悲鳴を上げるヴィヴィオの胸から、赤いレリックの結晶が浮かび上がった

「ブレイク……シューーーートッッ！！」

更に魔力を集め、レリックを砕こうと持てる魔力の全てを砲撃に込めて撃ち出す。
反動の凄まじさにレイジングハートの本体に罅が入り、なのはの手から血が溢れる。
けれど、なのはは歯を食いしばって、砲撃の行方を見つめた。

「あ……あぁあぁぁあぁあああっっっっ！！！！」

浮かぶレリックに罅が入り、ヴィヴィオの悲鳴と共に砕け散る。
そして、全ての終結を告げるように、玉座の間に桃色の光が爆発した。

◇◇◇◇◇

「……！」

ハヅキは壁を蹴り砕いた瞬間、巨大な魔力の奔流を感じて足を止めた。
感じた方角は、今自分が目指している場所――玉座の間。

「ふむ、これは少々急いだ方がいいかも知れんな」

一人そう呟いてから、再びハヅキは前進を始めた。
その足取りは今までよりも少しだけ速く、真剣みを帯びている。
先までは半分遊んでいるような表情を浮かべていた顔も、今は真剣なモノへと変わっていた。

「あれだけの魔力の放出、術者とて無事ではいまい。
敵戦力はもう残っていないかも知れんが、戦える人間が一緒にいたほうが安全だろうな」

壁を殴り壊しながら、ハヅキは急ぐ。
少しでも早く、この魔力を放った人間と合流する為に。

◇◇◇◇◇

桃色の爆発が収まった後、その魔力の殆どを使い果たしたなのは、床に手をついて荒い呼吸を繰り返す。
けれど、呼吸を整えるよりも先にゆっくりと立ち上がり、爆発の中心地――ヴィヴィオの居る場所を目指して歩き出した。

「ヴィヴィオ……」

娘の名を呼びながら、軋む身体に鞭打って歩く。
そんな彼女の声に、大きく開いたクレーターの中から声が返ってきた。

「来ないで……」

「！」

聞こえた言葉に、なのはが足を止める。
拒絶かと思った彼女は、しかしその視線の先に見えたヴィヴィオの姿に、その言葉の真意を悟った。
彼女の視線の先――クレーターの中心で、ヴィヴィオは懸命に立とうとしている。
魔力ダメージの痛みを我慢しながら、それでも彼女は誰にも頼らず、一人だけで立とうとしていた。

「一人で……立てるよ」

小さくか細いその声は、しっかりとなのはの耳に届く。

「強くなるって……約束したから」

よろける身体を、近くの瓦礫にしがみついて支え、自分の母を見つめながら――ヴィヴィオが笑う。
その微笑を見たなのはの目から涙が溢れ、頬を伝っていく。

「私は、なのはママの子供で、ハヤトおにいちゃんの妹だから」

「……っ！」

しっかりと、微笑みながらヴィヴィオが言う。
それを聞いて、耐え切れなくなったなのはがヴィヴィオへと駆け寄り、彼女の身体を抱きしめる。
ヴィヴィオもなのはを抱き返し、暫しの間2人は互いの温もりを確かめあう。

◇◇◇◇◇

「……それじゃ、帰ろっか」

「うん！」

暫く抱きしめあってから、なのはが短く告げ、ヴィヴィオを抱き上げる。
そして2人がクレーターから出てきたのと時を同じくして、揺り

籠に再び警告音が鳴り響いた。

『聖王陛下、反応ロスト　システムダウン』

「なのはちゃん！」

警告音声を遮るように、通路の奥からはやてが玉座の前へと飛び込んでくる。

更に、なのはの後ろ……玉座手前の床が蹴り砕かれ、爆音と共にハヅキが下から飛び上がってきた。

「はやてちゃんに……ハヅキさん！？」

「ど、どうしてここに！？」

「む？」

クアットロを肩に担ぎ、真紅の軍服に身を包んだハヅキに、はやてとなのはが驚いて声を掛ける。

その声になのはの方を向き、ハヅキは何事も無いかのように3人に笑いかけた。

「おお。高町一尉に八神二佐、それにヴィヴィオ。大丈夫ですか？」

「へ？　えぇまぁ……ってそーやなくて！」

まるで偶然会ったように軽やかに語りかけてくるハヅキに、一度普通に返事をしてから気を取り直してツッコむはやて。
しかしハヅキはそれを無視して、なのはに向けて質問する。

「こちらで魔力がぶつかり合うのを感じたのですが、アレは高町一尉ですか？」

「あ、はい……それで、その、ハヅキさんはどうしてここに？それとその肩に担いでる人って……」

「最下層に居た戦闘機人です。とりあえず捕獲しておきました」

「「……」」

「ハヅキおねえちゃん、凄いね！」

「はっはっは！　それほどでもあるぞ！」

ハヅキの言葉に呆れる2人と、目を輝かせるヴィヴィオ。
少し前までココで激闘が行われていたとは思えない程、今この空間は微妙な空気に包まれていた。
だが、それは玉座の間に響いた音声と、次で起きた現象によって引き裂かれる。

『艦内復旧のため、全ての魔力リンクをキャンセルします』

「「「！」」」

魔法を発動していたなのはとはやて、ハヅキの3人はいきなり身体が重くなるような感覚に襲われ、強制的に魔法が解除されてしまう。はやてに至っては、リインとのユニゾンまで解除されている。

『艦内の乗員は、休眠モードに入って下さい』

「……ふむ。魔力が結合できんな」

聞こえてくる警告音声を余所に、ハヅキは右手を開いたり閉じたりしてから呟く。

その手には、一瞬赤い光が宿るものの、すぐに分解されて中空へと散ってしまう。

なのはとはやても、同じように魔法行使を試みるが、どちらも結果は同じ失敗である。

「リイン、通信は？」

外を連絡を試みようと、はやてがリインに尋ねる。

だが、リインは首を振って、それが不可能だと伝えてきた。

「……しゃあない、歩いて脱出や」

「でも、なのはさんが……」

はやての言葉に、リインが心配そうに呟いてなのはを見る。

その視線の先には、荒く呼吸を繰り返すなのは。彼女は気丈に「大丈夫」と笑って見せるが、贔屓目に見ても大丈夫そうには到底見えない。

どうするかとはやてが逡巡する。

だが、揺り籠のシステムはそれを許さない。

『これより、破損内壁の応急処置を開始します。破損内壁・及び非常隔壁から離れて下さい』

そんな放送が響いたかと思うと、壊れた壁や床に紫の魔力が張り巡らされ、破損した箇所を塞いでいく。

それはつまり、このままでは全員が閉じ込められるということ。

「全員、出口へ走れっ！！」

咄嗟にハヅキが鋭く声をあげ、全員が弾かれるようにはやての入ってきた入り口へと走る。

けれどその入り口も、同じように魔力が張り巡らされ、扉が閉じ

てしまった。

「そんな……！」

「他の出口は……」

「無理です、魔力が使えないんじゃ突破できません」

退くことも進むことも出来なくなり、なのは達の表情に焦りが浮かぶ。

このままでは、全員が揺り籠ごと軌道上に終結した時空管理局の艦隊によって吹き飛ばされてしまうだろう。

それだけは避けなければならない。

「……」

なのは達が脱出の方法を模索している中、ハヅキは静かに瞑目する。

そして、小さく溜息を吐いてからはやて達に声をかけた。

「八神二佐。高町一尉。外に出れれば、後は何とかなりますね？」

「え？」

「ハヅキさん？」

「確認します。外に出れれば、空中に放り出されても何とかなりますね？」

「は、はい。大丈夫だと思います」

強い調子で確認され、ちょっと気圧されながら2人が頷く。

ハヅキはその返事に「それでは」と言葉を返し、はやての側に歩み寄って、肩に担いだクアットロを彼女に渡した。

「え？　あの、ハヅキさん？」

「私が、砲撃で壁に穴を開けます。そうしたら、穴が塞がる前に全員で脱出しましょう」

「砲撃って、この状況下でどうやって！？」

「奥の手を切ります。ただ、これを使うと私は魔力切れになってしまうので、外に出たら回収してくださいね」

「え、ちょっ……！」

呼び止めるはやてを振り返らず、ハヅキが手近な壁に向かって歩き、その数歩手前で歩みを止めた。

そして、一度大きく呼吸をしてから腰を落とし、拳を構える。

「レオンハルト、稀少技能（レアスキル）“超速魔力結合”発動。ファングバスター・アルティメイト、撃つぞ」

≪　Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　ＢＯＳＳ．　≫

言葉と共に、ハヅキの身体から微弱な魔力が漏れ出す。
それらは瞬時に分解されつつも、少しずつ集まり、彼女の前に魔力の塊を作っていく。
急速に自分から魔力が失われ、気が遠くなりそうになりながらも、ハヅキは目の前の集束した魔力に全神経を集中させる。

「す、凄い……」

「魔力結合が解除されるよりも先に新しい魔力を結合して、無理矢理砲撃用の魔力を集束してるんか！」

ほんの数秒の間に、ハヅキの前にある魔力の塊はサッカーボール程の大きさまで膨れ上がった。
瞬間、ハヅキはその魔力の塊目掛けて全力で右拳を突き出し、ソレを貫きながら叫ぶ。

「威風、撃滅！　ファングバスター・アルティメイト！！！！！」

≪　Ｆｉｒｅ！！！！　≫

咆哮と共に、迸る直径１０メートル程の真紅の砲撃。
それは、魔力リンクを解除されながらも揺り籠の壁を貫き、船体に巨大な風穴をこじ開けていく。
そして――

「貫けぇぇぇぇえええええええっっっっ！！！！！！！」

遂には外部装甲さえも貫き、外へと繋がる巨大な通路を作り出した。

「「「……」」」

「ハヅキお姉ちゃん、凄い！　凄～い！」

規格外の砲撃を見せられ、なのは、はやて、リインは頬を引き攣らせ、ヴィヴィオはより一層目を輝かせる。
そのハヅキは、今の砲撃で魔力の殆どを使い切ったのか膝をつき、荒い呼吸を繰り返していた。
しかしすぐに立ち上がると、すぐにいつも通りの得意げな笑みを浮かべて彼女達を振り返る。

「さあ、凱旋といこう」

「「「あ……はい」」」

「は～い♪」

呆然と返事するなのは達と、なのはに抱かれたまま嬉しそうに返事をするヴィヴィオ。

彼女達は微妙な雰囲気のまま、ハヅキの空けた穴から外を目指して走り出す。

穴の先には、青々とした空が広がっていた。

ｓｉｄｅ：―　了

2022

第６３話　『決着　５』（後書き）

詰め込みすぎな感があるなぁ……。
どうも、ラモンです。

はい。そんな訳で親子喧嘩編、脱出編完了です。
とりあえず次回で『揺り篭決戦』編は完全終了となります。
あ、ちなみにハヅキ砲撃撃つ時の理論は、完全に妄想ですので、深く考えずにお読みください。
理屈を簡単に説明すると、右足が沈む前に左足を踏み出せば水の上を歩ける！というのと同じ理屈です。普通は出来ません。

えー、それとここで簡単な補足説明というか、言い訳っぽいのを。
何故ヴィヴィオにとってハヤトが特別っぽかったのか。
私が思うに、アニメの台詞を聞く限り、ヴィヴィオはなのはとフェイトの事を、刷り込みで『本当の親』だと思い込んでたっぽいんですよね。
なのであの２人は、ヴィヴィオにとって『他人』だった時期が無く、最初から肉親に近い位置にいたんだと思いました。
だからこそ、ヴィヴィオはなのはが本当の親じゃないと知って、『他人』である自分を受け入れて貰えない、と思ったんじゃないかと考えました。

それに対して、ハヤトは元々『他人』で、そこから『お兄ちゃん』になりました。
つまり『他人』である自分を受け入れてくれた人、ということですね。

だからヴィヴィオにとって、ハヤトという存在は特別になった……てな感じです。
本当は本編で語りたかったんですけど、何か無粋に感じたので後書きで補足説明的な言い訳をさせてもらいましたw

そしてハヅキのレアスキル“超速魔力結合”の補足説明も簡単に。
これは、読んで字の如く、魔力を超スピードで結合させる能力です。
これを使うと、例えばS．L．Bレベルの砲撃も、チャージ無しで連射したり出来るようになります。
ただし、その分制御が難しく、ハヅキも簡単には使わないようにしている……という背景までは考えてました。
まぁ、あくまで妄想の産物ですので、寛大な心で許してください。
いやホント許してください（土下座）

次回は、ハヤトとブレイブハートのお話をちょっと書いて、揺り篭決戦編の最後を締めたいと思います。
その後は、後日談を何話か書いてから、最終回となります。
……ちゃんと締められるといいなぁ。

それではまた、次の話で。

※ちょっとしたアンケート（？）

他の先生の小説なんかでちょくちょく見かけて、そろそろ終わり際だし、ということで読者の皆様に聞いてみたいことが。

この「とあ新」がアニメだったとして、ＯＰ、ＥＤ、挿入歌といわれてイメージする曲はなんでしょう？

１話～４１話までを第一期、４２話～最終回までを第二期として、それぞれ読者様がＯＰ，ＥＤ，挿入歌と言われてイメージする曲を教えて欲しいです。

私の完全な興味本位ですので、無理にお答えいただかなくて大丈夫です。

それと、お答えいただいても特に副賞はございませんｗｗ

2025

第６４話　『ぶれいぶはーと』

ｓｉｄｅ：―

揺り籠の外壁を内側から貫いた、真紅の砲撃。
それをもって、揺り籠を巡る戦いは終結を迎えた。
その報せは、ミッドチルダに展開する全ての部隊に伝えられ、各地から局員達の歓声が上がる。

「……終わった、みたい、だな」

「そうね」

歓声を通信越しに聞きながら、ティアナはハヤトに向けて簡単な治癒魔法をかけていた。
少し離れた場所では、キャロが座り込んだギンガと、その隣でバインドされているディレトに治癒魔法をかけている。
勿論２人とも回復は専門ではないので、かけている魔法は基礎的なモノ。人間の身体の自然治癒力をやや活性化させる魔法と、止血効果のある魔法。
ギンガはそれでも何とかなるが、正直ハヤトには気休めですらない。
止血しても、既に失われた血は戻ってこない。そしてハヤトの胸骨、肋骨、内臓へのダメージは自然治癒力が少し活性化された程度でどうにかなる程生易しいモノではなかった。
ボロボロだった身体を、精神力だけで動かしていたハヤト。彼の

身体は、既に限界を遥かに超えて致死の領域へと達している。

「……あぁ、くそ。血ぃ足りねぇ……痛ぇ……」

「我慢して。もうすぐシャマル先生が来てくれるから」

「……ん」

答えるハヤトの息は浅い。

彼は今ティアナのＢＪの上着を背に、高架の上で寝かされている。

そんな彼の下には、ティアナのＢＪが吸いきれなかった血が水溜りとなって広がっていた。

血が流れすぎて意識も朦朧としているのだろう、開いた彼の目は焦点があっておらず、弱々しげに瞼が震えている。ティアナと喋っていなければ、今すぐにでも呼吸をやめてしまいそうだ。

「ブレイブ、ハート……は……？」

「今エリオとスバルが迎えに行ってるわ。だから、戻ってくるまでちゃんと起きてなさい」

「……だ、な……」

ティアナの言葉にハヤトがにへっ、と笑う。

彼女の言葉どおり、今この場にエリオとスバルは居ない。

こうやって応急処置が始まる前にハヤトに頼まれ、作戦上別の場

所に放置してしまった彼の相棒を迎えに行っているのだ。

「……」

「ハヤト」

「……ん？　あぁ、悪い……」

目を瞑り言葉を発しなくなったハヤトの頬を軽く叩きながら、ティアナが声をかける。

その声に小さく答え、ハヤトが目を開けて霞んだ声で答えた。

「寝たら、許さないからね」

「……わか、ってる」

不安からか少し強い口調で言うティアナ。

だが、帰ってくるハヤトの声は小さい。それは、命の灯火が消えかかっている合図。

それを理解しているティアナは、表情にこそ出さないが内心は泣き出したかった。

自分の目の前で、恋人が死の淵に立っているというのに、自分は気休め程度の応急処置しか出来ない。その事実が悔しくて、ティアナの目から涙が零れ、ハヤトの頬に落ちる。

「なんだ、泣いてンのか……？」

目の前にティアナの顔があるのに、ハヤトは見えていないような口ぶりで話す。

既にハヤトの目は失血で霞み、何も見えていないらしい。

「泣くなよ、ティア」

「泣いてなんか、ないわよ……っ！」

見えていない瞳で、それでもハヤトはティアナの顔をしっかりと見て、笑う。

唇を噛み締めティアナが彼に答えた、丁度その時。

「ハヤト！」

「兄さん！」

ブレイブハートを探しに行っていたスバルとエリオが、２人の近くへと駆け寄ってきた。

第６４話　『ぶれいぶはーと』

「……それ、ブレイブハート？」

ティアナは２人を振り返り、スバルが手に乗せていた指輪を見る。
そこにあるのは、赤い宝玉が殆ど砕け散り、本体も殆ど罅割れてしまっている指輪。
スバルの手の上に乗ったそれは、今にも砕けてしまいそうな程に果敢ない。

「うん……、見つけた時は、もう」

「でも、それじゃ……」

「ブレイブ、ハート……？」

《　……は……イ　》

「「！」」

ティアナとスバルの声に、ハヤトが小さく声を漏らし、ブレイブハートが罅割れた声で答えた。
そして、ハヤトの右手がブレイブハートを求めるかのように、ゆるゆると動く。

スバルはそれを見て、慌てて彼の右手にブレイブハートを優しく乗せた。

「サンキュ」

「ううん、いいけど……ハヤト、ブレイブハート……」

「スバル」

ブレイブハートの惨状を伝えようとしたスバルを、ティアナが制する。

言われたスバルは少しだけ躊躇ったものの、結局なにも言わずに引き下がった。

「よう、ブレイブハート……調子は、どうだ？」

≪　アマり、良くハ――（ザザッ）――ありマセンね　≫

「そ、か」

ボロボロの主従は、それでもいつもの調子で会話する。

まるで、お互いの傷も損傷も、何でも無い事のように。

「俺は、何とか助かると思うけど、よ……お前、は、どうだ？」

≪　損シょう率ガ、９９％に達しテいま――（ザッ）――ス。復旧は、望メなイデしょう　≫

「諦めたら、そこで、ゲーム終了……だぞ」

≪　根性論で何トカ――（ザッ）――なるノは、ゲームだケ――（ザザッ）――でスよ　≫

言葉を交わす間にも、ブレイブハートに走る罅は増えていく。
彼女に残された時間はもう、あと数分も残っていないだろう。
それはブレイブハート本人はもちろん、ハヤトも気付いている。
けれど、２人の声に悲しみの色は無い。

「ったく。折角、あの化け物に勝った……てのに。
お前が壊れちまったら、素直に……喜べねぇじゃ、ねーか」

≪　申し訳、ありマセん　≫

ポツポツと続く２人の他愛ない会話が続く。その会話を、誰も遮ろうとはしない。
スバルもギンガも、エリオもキャロも……ティアナも、誰も。

それは、ブレイブハートに残された時間が少ない事を全員が悟っているから。
だから――邪魔をしてはいけないと思った。
筋違いだと分かってはいても、思わずティアナが嫉妬してしまう程に強い絆で結ばれたこの主従の、別れの会話を。

《　マスターハヤト　》

「……何、だ？」

指輪に走る罅割れが、いよいよ砕ける寸前まで広がった時。

ブレイブハートが今までにない程に優しげな声色で、ハヤトに話しかけた。

ハヤトは、空を見上げたままそれに答える。

《　私は、デバイスです　》

「あぁ……そう、だな」

《　デバイスとは、マスターと共に在り、共に戦い、護るモノです　》

「……あぁ」

彼女の言葉を噛み締めるように、頷く。

《　ですから、このような最期を迎えられた事を、私は誇りに思います　》

「……思うな。主人残して、先にぶっ壊れるバカデバイスが」

ブレイブハートが語る言葉に、ハヤトが眉を潜めた。
言葉こそ乱暴だが、その声は震え、空を見上げている眦には涙が溜まっている。

《　酷い言い草ですね　》

「事実、だろうが。マスターと共に在るってんなら、俺が死んでから、ぶっ壊れろよ」

《　マスターハヤト。私はデバイス、部品の集合体に過ぎません。私がここで朽ちようと、貴方にはまた新しいデバイスが支給されます。
……私よりも、性能は劣るかもしれませんが　》

「……ホントに、お前はバカデバイスだ」

骨の砕けた右手。動かすことなど殆ど出来ず、出来てもただの苦痛でしかないその右手を握る。
そこにある彼女を、抱きしめるように。

「性能なんざ、関係ねぇ。新しかろうと、古かろうと、関係ねぇ。俺の――ハヤト＝ロックウェルのデバイスは、お前しかいねぇんだよ」

《　……マスターハヤト　》

「何とかしてみせろよブレイブハート。
金がかかるってんなら、借金してでも金を用意する。
技術者が必要なら、次元世界中の技術者をかき集めてやる。非合法な手段だって構わねぇ。
お前が助かる可能性があるなら、何でもしてやるから。だから――」

言葉を紡ぎながら、ハヤトは泣いていた。
身体はもう碌に動かないから、手に握ったブレイブハートを見る事は出来ない。
だから彼は、空を見上げて涙を流しながら、懇願する。

「――逝かないでくれよ。相棒」

静かに、弱々しく。
ハヤトが告げる相棒への懇願は、空に響いた。

《　……その言葉だけで、私には十分すぎます　》

返ってきたのは――満足そうな、嬉しそうな、彼女の声。

その言葉は、既に手の打ち様が無いことを、明確に示していて。
ハヤトは勿論、その場に居て、２人の会話を聞いた誰もが……言葉を発せなくなった。

≪　ティアナさん　≫

「……何？　ブレイブハート」

そんな中で、ブレイブハートがハヤトへと回復魔法をかけ続けるティアナに声をかける。
ティアナは回復魔法が途切れぬように意識を割いて、彼女の方を見た。
視線の先は、ハヤトの右手。握る力が無くなって開かれたそこに乗る、赤い宝石の嵌った指輪。

≪　貴女とクロスミラージュに、受け取って欲しいモノが、あります　≫

「受け取って、欲しいモノ？」

≪　私が、存在したという“証”――マスターハヤトと共に編み出した、魔法を　≫

言葉と共に、砕けた赤い宝石が明滅し、少し後にクロスミラージュのオレンジ色の宝石が光る。
僅か一瞬のやり取りではあったが、その一瞬で彼女が生きた証…

…インビジブル・シューターはクロスミラージュへとデータで送信され、クロスミラージュの一部となる。

《　……確かに受け取った。ブレイブハート　》

《　はい　》

確りと、それを受け取った事を告げるクロスミラージュ。
瞬間。ピシリ、と一際大きな音が鳴る。
それは指輪に走った、特大の罅が奏でた音。

ブレイブハートの終わりを告げる、音。

《　どうやら、限界、の、ようです　》

宝石から聞こえる声も、最早随分とか細く、頼りない。

《　マスター、ハヤト　》

「……なんだ。相棒」

右手から聞こえてくる相棒の声に、ハヤトは泣きながら、それでも声だけは普段どおりに答える。

≪　貴方は不真面目で、私にゲームデータを入力したりする、非常識な、マスターでした　≫

「……」

≪　けれど……貴方と過ごした、この数ヶ月間、私は幸せ、だったのだと思います　≫

「……そう、かよ」

ハヤトが返す言葉は、短い。
涙は止め処なく溢れ、声を紡ぐ唇は震えている。
少しでも気を抜いてしまえば、嗚咽が漏れてしまうだろう。

≪　何度も貴方のミスをフォローして、私は、大変でしたよ？　≫

「そんなに何度もは、ミスしてねぇと思うんだが、なぁ」

だけど、それでもハヤトはいつもの声色を崩さない。
相棒が最期に聞く自分の声が、情けないモノであってはならないから。

≪　書類仕事も、サボっちゃ駄目ですよ？　≫

「うっせ。お前は、俺の母さんか」

≪　それも、悪くありませんね　≫

「……勘弁してくれ」

最期の会話は、まるで日常の会話のような軽さで。

≪　貴方は本当に、手のかかるマスターでした　≫

「手のかかるマスターで、悪かったな」

≪　悪いとは、言ってないでしょう？　≫

「そう、聞こえたけどな」

≪　貴方は非常識で、手のかかる人で、意地っ張りで。
……でも、それでも　≫

ブレイブハートの声は、小さく笑っているようで。

≪　それでも、私にとって最高のマスターでした　≫

「……お前も、俺にとって最高のデバイスだったよ。相棒」

でも、言葉を返すハヤトの声は少し震えていた。

《　……ねぇ、マスターハヤト　》

「？」

話していくうちに、ブレイブハートの言葉は少しずつ、本当に少しずつ変わっていく。
機械的な話し方から、年頃の少女のようなモノへと。

《　ティアナさんを、泣かせたりしたら、駄目ですよ？　》

「……当たり前だろ。お前と違って、俺は誠実さが売りなんだよ」

《　なら、絶対に助かってくださいね　》

「当たり前だっつの。助かって、お前よりも性能の良いデバイスを使ってやるよ。
そんで、お前が羨ましがるくらいに……大切にしてやる」

《　私に、羨ましがるという、感情は、無いんですけど　》

「ったく。本当に、弄り甲斐のねぇ……」

喋っている間に、遂に彼女の身体の崩壊が始まる。
かろうじて指輪の形を保っていたブレイブハートの本体が、少し

ずつ欠け落ちるかのように崩れていく。
その光景に、ハヤトを除く誰もが息を呑んだ。

≪　もうすぐ、お別れ、ですね　≫

「……みたいだな」

けれど、主従2人は悲しみを感じさせない声で話している。
ハヤトの頬は涙に濡れているが、それでも声だけは……いつも調子で。

≪　私達デバイスには、感情が、ありません　≫

「そう、か」

≪　でも……理解出来ない訳では、無いんです　≫

「……何が、言いたいんだ？」

崩壊は続き、ハヤトの手に残っているブレイブハートは、砕けた宝石の欠片になってしまう。
その欠片にも罅は走り、少しずつではあるが砕け落ちていく。

≪　本当に、鈍いですね　≫

欠片が砕け散る最期の一瞬。

《　さようなら、ハヤト　》

苦笑しているような声で、ブレイブハートは初めて彼をそう呼んだ。

そして、最期の別れを、彼に告げる。

《　――私が愛した、最初で最期の人　》

その言葉が終わると同時に、最後の欠片が砕け散った。

◇◇◇◇◇

「……」

砕けたブレイブハートと、空を仰いで涙を流すハヤト。
ティアナはその彼の顔を見ながら、何も言わなかった――否、言えなかった。
何を言ったとしても、今の彼には届かないだろうから。
だから、彼女はハヤトに回復魔法をかける事に専念した。

「……この、馬鹿が」

ハヤトが小さく言葉を零す。
それでも、ティアナは何かを言おうとはしない。
自分が口を挟んでいい事ではないというのもあるが、それ以上にハヤトの状態が悪化してきているのだ。

（このままじゃ……）

流れ出る血は量こそ減ったが、それでも流れ続けている。
少しでも早く本格的な治療をしなくては、彼の命は尽きてしまうだろう。
シャマルへの通信は先程済ませている。恐らく、急いで此方に向かって来てくれている筈だ。

「……ティア」

「喋っちゃ駄目。傷に響くわ」

「……んだよ。辛い時は話せって、言ったくせに」

「それでも、今は駄目。ちゃんと治療が終わったら、聞いてあげるから」

ティアナの表情に、焦燥が浮かぶ。

このままでは、ブレイブハートだけでなく……彼も、喪われてしまう。

そんなのは、嫌だ。

「お願いだから……頑張って、ハヤト」

「……わかってる、よ」

答えるハヤトの声は、更に弱々しくなっていく。

「ハヤト！　シャマル先生がくるまで頑張って！」

「兄さん！」

「……わかってる……」

スバルとエリオがハヤトの手を握り、声を掛ける。
けれど、ハヤトからの答えは無い。
聞こえてくるのは、浅い呼吸と、うわ言のように何かを呟く彼の声。

「……意識混濁、これ以上は……っ」

「ハヤト！」

「兄さん！」

ティアナが泣きそうな声で呟き、スバルとエリオは彼の死という未来を拒絶するように、必死に彼の名を呼ぶ。
その声に、少し離れた場所にいるキャロとギンガの2人も、不安そうな顔でハヤトの方を見た。

「……ハヤト、寝ちゃ駄目よ」

ティアナは回復魔法を発動させながら、ハヤトの頬に触れた。
血の失われた頬は冷たく、唇は青くなり、瞼は閉じようとしている。

「ねぇ、ハヤト」

「……」

必死に呼びかけるも、彼からの返答は無い。
呼吸は更に浅く、弱くなり、今にも途切れてしまいそうだ。
ティアナの心に、不安という影が圧し掛かる。

「ハヤト、ねぇってば」

彼の頬を温めるように、両手で彼を顔を包む。

「目を閉じないで、あたしを見てよ。あたしの事、泣かせないんでしょ？
絶対助かって、ブレイブハートの事、羨ましがらせるんでしょ？」

ハヤトは、答えない。
既に呼吸をしているのかどうかさえ怪しい程、彼の呼吸は弱くなっている。

「ねぇ、お願いだからぁ……」

ポロポロと、ティアナの瞳から零れた涙が彼の顔を濡らす。
そうして誰の頭にも最悪の事態がよぎった、まさにその時。

『お待たせ、ティアナ！』

通信越しのシャマルの声とヘリの音が、廃棄都市区画に響いた。

ｓｉｄｅ：―　了

第６４話　『ぶれいぶはーと』（後書き）

重い話はこれで全部終了。
どうも、ラモンです。

ブレイブハートは、助けないって決めてました。
私はご都合主義は嫌いじゃないですけど、でも、あまりにもご都合主義ばかりというのも好きではないのです。

ディレトを倒した時点で、ハヤトもブレイブハートも、どちらもボロボロ。
特にハヤトは、普通に死んでてもおかしくありません。
そのハヤトを助けるには、どうしてもご都合主義を使わなきゃいけない訳で。
彼もブレイブハートも、どっちも助かるっていうのは……何というか、対ディレト戦で書いた事を全部無駄にしちゃうような気がしました。

ハヤトは凡人です。
その凡人が、ディレトという強大すぎる敵を倒すためには、何かしらの代償が必要だと常々考えてました。
その代償は何か、と考えて考えて……やっぱりハヤトの相棒で、一緒に戦った彼女しかいないな、と。

今回の展開に不満がある読者様もいると思います。
ハッピーエンド目指すなら、皆揃って助かって初めてハッピーエンドだろ！　って言われたら、反論のしようはないです。
でも、書き直すつもりは無いです。

私なりに、今までの展開全てのまとめとして書いたつもりでしたので。

……って、長々とシリアスな事書いちゃいましたね。
まぁ、今回でシリアスは全部終わりだからってことで、勘弁してくださいw
次回からは『後日談』編。
全編ギャグ満載でお送りします。久しぶりのとあ新らしい世界観をお楽しみいただけると幸いです。

それではまた、次の話で。

最後にちょっと質問なんですが。
ハヤト×ティアナでノクターン向けの小説書くとしたら、需要ってありますか？

第６５話　『後日談　１』

ｓｉｄｅ：―

ハヤトの意識が、暗闇の底から浮上する。
彼は浮上する意識に任せたまま、重い瞼をゆっくりと開けた。
開いた視界に映ったのは、見慣れぬ広い天井。
ハヤトはその天井を数秒見つめて、思いついた言葉を呟く。

「……知らない天ｚ「ハヤト、起きたの？」最後まで言わせてくれよ」

言葉を遮った声は、彼の右横から。
そちらを向こうとして、体中を走る痛みに声を漏らし、眉を顰める。
すると、天井を映していたハヤトの視線を、彼の顔を覗きこむティアナの顔が遮った。

「大丈夫？　どこも、痛くない？」

「……強いて言うなら、体中が痛ぇな」

「そっか」

眉を顰めて苦笑するハヤトに、ティアナは安心したように微笑みを返す。

「ここ、病院か？」

「うん。前に入院したのと、同じ病院」

「……そう、か。俺、どんくらい寝てた？」

「1週間と2日。いくらハヤトでも、寝すぎよ」

「ティアがひでぇ」

軽くお互いに言いあって、笑う。

少し笑いあってから、ティアナは彼の右頬に手を当て、愛おしそうに撫でる。

「本当に、心配したのよ？

もう……目を覚まさないんじゃないか、って」

そうやって言う彼女の目には薄い隈があり、笑う顔は少しやつれていた。

そんな彼女に、ハヤトは頬に当てられる彼女の手に頬をすり寄せ、

「悪い」と呟く。

「心配、させたよな？」

「当たり前よ、馬鹿……」

彼を覗き込むティアナの目から涙が零れ、ハヤトの頬を濡らす。
その雫は止まる事無く、彼女の口からは小さな嗚咽が漏れ始めた。

「……泣くなって、頼むから」

「ひぐっ……無理に、決まってる……っ、でしょぉ……」

しゃくり上げるティアナを見て、ハヤトは右手を動かし、彼女の涙を拭う。
けれど、彼女の涙は止まらない。
それを見てハヤトは困ったように笑い、彼女の頬に当てていた右手で、彼女の顔を自分の顔へと引き寄せる。

「ん……」

「……っ」

口付けは、ほんの一瞬。
２人の顔が離れ、ハヤトの視界に驚いた顔で頬を染めるティアナが映る。

「……ひひ。泣き止んだな」
「～～～っっ、馬鹿……」
悪戯っ子の様に笑うハヤトと、真っ赤な顔のティアナ。
そのまま2人は見つめあい、もう一度だけ唇を重ねた。

ｓｉｄｅ：－　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第６５話　『後日談　１』

そんな感じで、ティアと恋人らしい甘い時間を過ごした後。
ティアが高町隊長達に連絡を取り、そんなに時間を置かずに隊長達全員がやってきた。
うおぉい、仕事はどうしたんですか皆さん！？
……まぁそれはいいとしよう。
それより問題は今現在の俺の状況だ。

「……何だコレ？」

「「～～♪」」

「う～～」

今現在、俺の左腕には姉ちゃんが、首にはヴィヴィオが抱きついている。

そんで右腕にはティアが抱きついて、姉ちゃんとヴィヴィオを睨んで唸ってる。

隊長達は、ティアに怯えて病室の隅っこで震えてこっちを見ているだけ。

……うん。もう一度言うぞ。

「何だコレ？」

「私に聞かれても困るんやけど」

「部隊長ヘルプ！」

「……ハヤト君、君の尊い犠牲は忘れへんで」

「あぁん、いけず！」

とまあ、馬鹿な事は置いといて、隊長から聞いた事の顛末を整理しよう。

まず、俺がどうやって助かったか。

シャマル先生から聞く限り、あの時の俺は随分と危険な状態だったらしい。

全身の彼方此方を骨折して、出血も凄く、内臓もかなりのダメージを負っていた。

シャマル先生が全力で回復魔法を使ったとしても、正直助かる確率は2割前後。

あのままでは、俺の生存は絶望的だったようだ。

そんな俺に救いの手を差し伸べたのは――意外な事に、ジェイル＝スカリエッティだった。

ハラオウン隊長の通信越しに俺の状態を聞いた奴は、自分から俺の治療を言い出してきたらしい。

本人曰く。

『彼は私の計算を覆した初めての人間だからね。

こんなところで死んで貰っては困る。色々と調べてみたいしね』

とのことだ。

背筋が寒くなる台詞が混じってるけど、それはとりあえず置いとこう。

んで、アイツはシャマル先生に具体的な治療案を示し、先生がそれを許可して俺の治療が始まった。

スカリエッティが妙な事を俺にしないよう、シャマル先生など本職の人達の監視下で、だが。

奴の治療は、本職の医者でさえ舌を巻くほどに的確で、迅速だったらしい。

具体的なことは……聞いたけど門外漢の俺には全くわからんかった。

ま、とりあえずその結果として俺は助かり、それどころか全快までの時間も随分と短くなった。

本来はあの傷だと、完治までにリハビリも含めて1年。

その後、1年以上の完全休養を必要とする怪我だったと聞く。

けれどスカリエッティの治療のお陰で、完治までに3ヶ月、完全休養期間は3ヶ月まで短くなったらしい。

命の恩人、という訳だ。

ぼてくり回すのは勘弁して、男として再起不能にするぐらいにしてやろう。

スカリエッティ、一応感謝しといてやるぜ。

「ま、腐っても天才っちゅー事やな」

「その割に、体中痛いんスけど」

「当たり前よ。今回は助かったけど、本当は死んでいてもおかしくなかったんだから」

部隊長に文句を言ってみると、シャマル先生が苦笑いしながら俺の額を突っついてきた。

超ときめいた。シャマル先生結婚してください。

「ごめんね。ティアナとやりあうつもりはないから」

「……」

「いだだだだだだだだだっ！！！！！」

「ああ！　何をするティアナ！？」

「～♪」

シャマル先生にやんわりと断られ、ティアに右腕を締め上げられ悶絶し、姉ちゃんがティアに文句を言う。

その間もヴィヴィオは俺の首に両腕を回して、嬉しそうに笑っている。

……すげぇカオスだ。

「いつつ……悪かったよティア。そんな怒るなって」

「ふん」

閑話休題。

次に、そのスカリエッティ達の処遇について。

スカリエッティ本人は、無期懲役（未決だが）で軌道拘置所に入ることになったらしい。

ナンバーズと呼ばれる戦闘機人達は、大多数が『正しい教育を選択できなかった』として、管理局が指定した更生施設にて再教育を

受けることになったらしい。
ただ、ウーノ、トーレ、クアットロ、セッテの４人は、更生施設へ行くことを拒否。
スカリエッティと共に軌道拘置所に入ることになったとのことだ。
しかも、その更生プログラムの担当は……姉ちゃんと、ギンガの２人らしい。

２人とも自分から立候補して、戦闘機人達をキチンと教育すると張り切っている。
うむ、今の内に彼女らにはお悔やみを申し上げておこう。なーむー。

そういえば、クアットロとかいう戦闘機人は、姉ちゃんに対して凄まじいトラウマが出来たらしい。
姉ちゃんの写真を見せるだけで怯えるから、ある意味尋問が楽になったよとハラオウン隊長が姉ちゃんに感謝していた。
……何したの姉ちゃん。

それはともかくとして……最後にディレトの処遇について。
彼女の処遇は『封印処理』。
ディレトの力は余りにも危険で、かつ人を殺しすぎた……というのが理由。
仮に暴走した場合、管理局に甚大な被害が出る可能性がある為、ディレトはその機能を全てシャットダウン。その後、封印処理を施して、しかるべき施設で保管されるとの事。
実質死刑みたいなモンだな。

これに関しては、スバルやギンガなどから多少反対意見はあった

ものの、とりあって貰えなかったらしい。
まぁ、実際相対した身としては、妥当な判断だと思う。
ディレトが暴走したら、冗談抜きで洒落にならない被害が出るだろう。
封印処理ってのは、ちょっと可哀想な気もするが……それでも、アイツは危険すぎる。

「……とまあ、アレからの事はこれで全部やな」

「はぁ。結構色々あったんスねぇ」

「そうやで。私も事後処理やなんやで大変やってんで？」

「その割に俺の病室でのんびりしてらっしゃるようですが？
部隊長も高町隊長達も」

よく考えたら、六課首脳陣全員集合してるよ。
八神部隊長に高町隊長、ハラオウン隊長、シグナム副隊長にヴィータ副隊長にシャマル先生。
そんでＦＷ陣全員とフィニーノ陸士。
……大丈夫か機動六課、人手足りてるのか機動六課。

「それは大丈夫や。グリフィス君が一生懸命働いてくれてるから！」

「アンタ部隊長失格だよ！　何仕事押し付けてんスか！？」

「大丈夫。グリフィス君も泣いて喜んでたで！」

「その涙は嘆きの涙だよ！　喜びの涙じゃないよ！
あぁもうロウラン准陸尉が可哀想すぎる！！　っつつ」

叫びすぎて傷に響いた。痛すぎる。

「だ、大丈夫かハヤト！？　いいいい今医務官を呼ぶからな！
だから死ぬなぁぁぁあああっっ！！！」

「いや、大丈夫だから。ちょっと痛んだだけだから……ってああ、
出てっちゃったよ」

相変わらず俺の事になると暴走するなぁ、姉ちゃんは。

「ハヅキおねえちゃん、あわてんぼだね」

「そうだなぁ。そんでヴィヴィオ、出来ればそろそろどいてくんね？
流石に身体の上に乗っかられてると重いんだが」

「むー、ヴィヴィオ重くないもん！」

「ぐへぇ」

ベッドに横になってる俺の上に乗っているヴィヴィオが、ピョン

ピョン跳ねる。
超いてぇ、死んでまうやろーー！

「あ、だ、駄目だよヴィヴィオ」

「ホラ、ヴィヴィオ。こっちにおいで？」

「は～い」

俺にトドメを刺そうとするヴィヴィオを、高町隊長とハラオウン隊長が止めてくれた。
そうするとヴィヴィオは何事も無かったように俺の上からどいて、2人の方へと駆けて行く。
人にトドメを刺しかけて平然としているとは、末恐ろしい妹である。

「お、お兄ちゃん」

「兄さん」

すると、入れ替わりでエリオとキャロが俺の方へ寄ってきた。
2人とも俺の方を見て、心配そうな顔をしている。

「よ。エリオ、キャロ」

「お兄ちゃん、大丈夫ですか？」
「大丈夫……じゃあねぇわな。見ての通り」
「あぅ……」
茶化して返すと、キャロは恥ずかしそうに俯く。
うむうむ。愛い奴よ。
「に、兄さ……」
「やめてよね。本気で可愛い顔したら、エリオがキャロにかなう筈ないだろ」
「えええぇぇっ！？」
似たような表情のエリオはとりあえず置いておく。
許せよエリオ。女の子＞野郎という公式は、同じ男としてわかるだろう？
わからなくても納得しろ。
「な、納得できないよ兄さん！」
「はっはっは。エリオ、俺が求める答えは“はい”か“イエス”だ」
「は、はい……ってそれどっちも同じだよ！？」

「悪い悪い……ちっ、誤魔化されなかったか」

「舌打ちしたよね！？　ねぇ、今舌打ちしたよね！？」

いちいち細かい奴だなエリオ。
そんなんじゃキャロに嫌われてしまうぞ。
男なら細かい事は言いっこ無しだ。

「うぅぅ……兄さんが酷い」

「野郎には厳しく、女性には優しくがモットーですから。特にキャロは可愛いしなー」

「え？　えと……ありがとうございます」

「……」

「痛い痛い痛い痛い痛い痛いっ！！」

右腕が！　右腕がミシミシ言ってる！！
ティアやめて！　俺の右腕がオシャカになるから！
もうゲーム出来なくなっちゃうから！！

「悪かった！　謝るから！　頼むから勘弁して！！」

「……知らない。馬鹿」

謝ったら、拗ねながらだけど離してくれた。
くそぅ、可愛いなオイ。思わず抱きしめたくなるじゃないか。

「はいはい。いちゃいちゃするんは、私らが帰ってからにしてな。
何や腹の底から黒いものが湧いてくるから」

「サーセン」

俺が肩を竦めて部隊長に謝ると、病室に皆の笑い声が響いた。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「っと、何だかんだで結構時間経っとったみたいやな」

どのくらい喋っていたのか、不意にはやてがそう呟た。
その言葉に、全員の視線が病室にかけられた時計に向く。
時計の針は、正午を少し過ぎたあたりを指している。

「それじゃあ、私達はそろそろ帰りましょうか。
ハヤト君も目が覚めたばっかりだし、あまり無理させても悪いわ」

「せやな。ほな、私らはこれで退散しよか」

「そうだね。それじゃあヴィヴィオ、行こう？」

「は～い。ハヤトおにいちゃん、またね～」

それを見たシャマルとはやてが皆を促し、全員がそれぞれ病室のドアへと向かう。
殆ど全員が病室から出た後、最後まで残っていたなのはがハヤトのベッドへと歩み寄り、ティアナが座っているのとは逆側に立つ。

「……ハヤト君」

「はい？」

逆側に立ったなのはが少しだけ辛そうにハヤトを呼び、それから小さな瓶を彼に差し出す。
中に入っているのは、赤い欠片が何個か。
それを見て、ハヤトは直ぐにそれが何なのかを悟る。

「隊長、これって……」

「うん。ブレイブハートの……欠片、だよ」

「……そう、ですか」

ハヤトは相棒の欠片が入った瓶を受け取り、握り締めて中の欠片を見る。

昔はハヤトの手に嵌っていた指輪。

けれど、今瓶の中に入っている欠片は小指の先程も無くて。

「ありがとう、ございます……」

「ううん」

それが、ハヤトには堪らない。

しかし人前で泣く事はしないと決めていたから、ハヤトは笑ってなのはに礼を言う。

上手く笑えていたかどうかは、わからないけど。

《　ハヤト　》

「……何ですか、レイジングハートさん？」

《　私の妹は、貴方に出会えて幸福でした　》

「そう、ですかね？」

《　少なくとも、私はそうだったと確信しています　》

そんなハヤトに、なのはの首にかけられたレイジングハートが、彼に語りかける。

零れそうな涙を必死で我慢して、ハヤトはそれに答えた。

レイジングハートはそんな彼の様子には見ない振りをして、言葉を続ける。

《　メンテナンスの時、あの子はいつも貴方の事を嬉しそうに語ってくれました　》

「……」

《　あの子はデバイスとして、誇りを持って逝くことが出来ました。それを、私はあの子の姉として、とても嬉しく思います　》

レイジングハートの言葉が、彼の心を揺さぶる。

けれど、ハヤトはそれに答えず、泣くのを必死に堪えていた。

だが――

《　……ありがとう。あの子と、出会ってくれて　》

彼女が最後にポツリと言った言葉に、堪えていた涙が溢れた。

「……っ。は、い……！」

ハヤトは嗚咽を噛み殺しながら両腕を動かし、ブレイブハートの欠片を両手で力の限り握り締める。
激痛が両腕から伝わってきても、気にならない。
今はただ、この欠片を抱きしめていたかった。
自分を残して逝ってしまった、世界一の相棒の事を。

「それじゃあ、私は行くね。ティアナ、後は……お願い」

「……はい」

「……ぅ、くっ」

涙を流し、欠片の入った瓶を握り締めるハヤト。
そんな彼を見て、なのはが彼の隣に座るティアナに短く告げ、病室から出て行く。
残されたのは涙を流すハヤトと、彼を見つめるティアナ。

「……ふぐっ、ぅあ……」

「ハヤト……」

「ティア、俺……俺……っ」

「いいから。何も言わないで」

嗚咽を繰り返すハヤトの頭を、ティアナが優しく抱きしめる。
そして、彼の耳元で小さく囁いた。

「好きなだけ、泣いていいから。ね？」

「……ご、めん……っ……」

抱きしめられた腕に縋って、涙を流す。
その光景は、ハヤトが初めて彼女の前で泣いた時と同じで。

「大丈夫よ。あたしが、ずっとここに居てあげるから」

「ぅん……うん……っ！」

あの時と同じように、ティアナは彼の背中を撫で続けていた。
それに安心したように、ハヤトの泣き声が大きくなる。

その泣き声は暫くの間、彼の病室に響いていた。

side：―　了

第６５話　『後日談　１』（後書き）

久しぶりのギャグ＆甘い展開だったせいで自重を忘れた……。
どうも、ラモンです。

そんな訳で後日談編開始です。
今回はハヤトの助かった理由、スカっちと愉快な仲間達の処遇編。

ディレトは封印処理という形にしました。
いくら使える人間は誰でも使う管理局でも、ディレトは使わないと思うんですよね。
暴走したらマジで洒落にならないですし。

そして更生組にはハヅキとギンガによる地ごk……じゃなくて更正プログラムが待っています。
皆廃人にならないといいネ！ｗ

えー、次回は入院中の様子か、更生施設訪問を書こうと思ってます。
いやー、マジでそろそろラストって感じですねぇ。
何だか妙に感慨深い今日この頃です。

そして！　ここいらで次回作アンケートの結果発表をしたいと思います！
覚えてる人いますかね？ｗ
次回作のアンケート、応募総数は５２票。
期間が長かったとはいえ、かなり応募して頂いて驚きましたｗ
では、結果発表です。

一番多かった次回作希望は……。
２６票で、『とある新人の日常の続編』です！

こんな稚作の続編を希望して頂いて、本当にありがとうございます。
現在敵キャラなどを考え、大体のストーリーも出来ました。
もう少し煮詰めれば、直ぐにでも投稿開始出来そうです。

次回作のタイトルは『魔法戦記リリカルなのは　ＺＸ　ｖｉｖｉｄ（仮）』
舞台はＳＳＸ～ｖｉｖｉｄ、大体本編が終了してから3～４年後を予定しています。
新規のオリキャラも大量に登場し、笑いあり、涙あり、感動（笑）あり、のストーリーを考えております。
スバルルートと同時投稿という形になりますので、多少更新スピードは遅めかも知れませんが、お楽しみに！

それではまた、次の話で。

第６６話　『後日談　２』（前書き）

※後書きにちょっとした宣伝があります

第６６話　『後日談　２』

俺が入院してから２ヶ月。
身体は順調に回復し、一応日常生活には支障ない程度までは回復した。
まだ左腕はギプスつけてるし、歩くのには松葉杖が必要だけど、とりあえず右腕が使えるようになってゲームが出来るようになったのは非常に嬉しい。

……まぁゲームやろうにも、本体もソフトも無いんですがね！

入院して直ぐに、病室にあったテレビはティアが取っ払ってしまった。
理由を聞けば、「アンタはテレビがあったら徹夜でゲームするでしょ？」との事。その通りなので何も言い返せなかった。
それでもＢＳＰやサンテンドーＥＳなどの携帯ゲーム機は取り上げられなかったので、とりあえずはそれで暇を潰していた。だがある日、ティアに『ラブ×』で凛子ちゃんとラブラブしてる所を見られて、鉄拳制裁と４時間の説教の後、漏れなく全部没収されてしまった。

いいじゃんか別に。浮気じゃないんだよ、ゲームは別腹なんだよ。

「何て言い訳しても、納得できないのが人情ってとこか」

顔を真っ赤にして怒っていたティアを思い出して、溜息を吐く。
たかがゲームにムキにならんでもなぁ。ま、そーゆートコも愛い

奴なのですが。

「うむ。一人で惚気ると虚しいことこの上ないな」

言ってて悲しくなってきたので、そろそろ自重する。

誰も居ない病室で、１人ニヤニヤしている俺。考えるまでもなくキモイね☆

やめよう。何かちょっと泣きたくなってきた。

「はぁ……やめやめ」

気分が落ち込んできたので溜息を吐いて思考を中断。

病院ってのは、どうにも思考が暗くなっていかんなぁ。困ったもんだ。

溜息と共に寝返りをうち、目を瞑る。することがないから変に色々考えるんだな、寝よう。昼間だけど寝よう。

寝るの大好き！

「おやすみなさ――「ハヤトおにいちゃ～ん！」――寝かせろよ！」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

第６６話　『後日談　２』

ツッコミを入れながら飛び起きて、あばらからの痛みでやめときゃよかったと後悔する。
けど、俺の中に流れるお笑いの血が騒ぐんだから仕方ないな。
それはさておき。痛む胸を右手で摩りながら、病室に入ってきた乱入者に視線を移す。

「おにいちゃん、大丈夫？」

「いつつ……大丈夫だよ。てかヴィヴィオ、また来たのか？」

「うん！」

入ってきたのは、ナース服（ミニスカ）姿のヴィヴィオ。
何で来たのかと言えば、勿論お見舞いである。
他のやつらは仕事で忙しいが、ヴィヴィオはこうして毎日お見舞いに来てくれている。
しかも、来る度に何かしらのコスプレをして。

「今日はナース服か」

「そだよ～。おにいちゃん、嬉しい？」

「ヴィヴィオがもうちょっと大きければな」

「ぶー」

確か昨日はチャイナで、一昨日はセーラー服だったなぁ。そういえば、誰が貸してんだあの服？

と、そこで今更ながら気になった事があったのでヴィヴィオに尋ねてみた。

「なぁヴィヴィオ。お前、その服どこから着てきた？」

「お家からだよ～？」

「そう……か」

絶望的な返事が返ってきてｏｒｚった。

道理で最近、医務官の人たちが俺を見る目が冷たいなと思ったんだよ。俺のこと見てヒソヒソ話してると思ったんだよ。

『ロリっ子にコスプレさせて毎日お見舞いに来させてる奴』って思われてたのね。どう贔屓目に考えてもドのつく変態です、本当にありがとうございました。

欝だ……。

「ヴィヴィオ。明日からは、せめて俺の部屋に着てから着替えような？」

「ヴィヴィオのお着替え見たいの？　おにいちゃんのえっちー！」

これ以上俺の評判が落ちないように注意すると、顔を赤くして頬に手を当て、いやんいやんと頭を振るヴィヴィオ。
なんか凄くムカついたので、右手で頬を軽くつまんで引っ張る。
ほう、結構伸びるじゃねぇか。

「だぁれがお前みたいな全体的に薄いガキの着替えなんて見たいもんか。
せめてもうちょっと身体に凹凸をつけてから寝言を言いやがれ、このマセガキが」

「にゃー、ひゃめてよ～」

文句を言いながら、上下左右にヴィヴィオの頬を引っ張る。
対するヴィヴィオは抗議をしながらも、顔はニコニコと満面の笑みだ。何が嬉しいのやら。
まあ、これは最近恒例となったやりとりなので、やれやれと思いつつも右手をヴィヴィオの頬から離す。そして、これまた恒例となった問いかけをヴィヴィオに投げかけた。

「ちゃんとココに来るって、高町隊長に言ってきたか？」

「うん！　ちゃんと言ってきたよ。偉い？」

「ああ、偉いぞ」

「えへへ～♪」

ぽんぽんと頭を撫でてやると、気持ち良さそうに目を閉じて笑うヴィヴィオ。

何つーか、ＪＳ事件（仮）が終わって以来、前以上に懐いてくんだよなぁ。それこそ、ティアがヤキモチ妬いてクロスミラージュを突きつけてくるぐらいに。

「隊長は、その服着てこっちに来るの、知ってるのか？」

「うん。可愛いって言ってくれたよ」

……どんな天然ですか高町隊長。

娘がコスプレして男の病室行こうとしてるんスよ？　止めましょうよ。これも何回思ったかわかんねーけどさ。

いや、半分諦めてますけどね！　いいですよ、どうせ俺が悪いんですともよ！

閑話休題。

どうせだし、ヴィヴィオが俺の病室に来るようになった経緯をご説明しよう。

勿論見舞いというのもあるが、それとは別にもう一つちゃんとした理由があるのだ。

六課はＪＳ事件（仮）の中心で動いていただけに、事後処理などのやる事が凄く多い。特に部隊長や隊長陣なんかは、寝る暇も無いぐらいに忙しいらしいのだ。更に、以前ヴィヴィオの面倒を見てい

てくれたトライトンさんはアースラには乗っておらず、護衛役だったザフィーラも完治する前に無理をしたせいで未だに入院中。

つまり、今現在ヴィヴィオの世話を出来る人が六課には居ないのだ。

そんな訳で、正午ぐらいから面会時間が終わる6時まで、俺がヴィヴィオの面倒を見るということになった。

病院から動かないので居場所が分かりやすいし、ヴィヴィオが前にも増して俺に懐いているから、俺から離れてどっかに行くこともないだろうからと高町隊長に言われ、特にすることも無かった俺は二つ返事で請け負った。

……のだが。

「おにいちゃん、あーん」

「はいはい」

どこをどう勘違いしたのか、ヴィヴィオは俺の世話をする為にここに寄越されたと思っているらしい。

なのでこうして無駄に色々と世話を焼きたがる。

食事は食べさせようとするし、着替えは手伝おうとするし、汗は拭こうとするし……もうちょっと恥じらいを覚えるべきだと思うんだ、ヴィヴィオの将来の為にも。

とはいえこうやって嬉しそうにスプーンを差し出されると、どうにも強く出れないあたり俺もシスコンの気があるようだ。なんつーか、母さんや姉ちゃんと血が繋がってるんだなぁ……と自覚させられ、しみじみしてしまう俺であった。

「おにいちゃん、ピーマンも食べなきゃダメなんだよ！」

「はいはい」

「ヴィヴィオもちゃんと食べたんだから、おにいちゃんも食べなきゃダメ！」

「はいはい」

「……おにいちゃん、聞いてる？」

「はいはい」

「むーっ！！」

「はいは……いっでえええええっっ！？」

しみじみしながら適当に返事をしていたら、首筋に思いっきり噛み付かれた。

やばいって！　首筋がすっげーギリギリ言ってるんですけど！？　噛み千切られたら俺死んじゃうよ！？　いやここ病院だから大丈夫なのか？

「痛い痛い痛い！　離せ馬鹿ヴィヴィオ！」

「う〝ーっ！！」

「ごめんて！　悪かったって！」

半泣きで謝ったら、何とか離してくれた。

超痛かった。噛まれたトコ右手で触ったらちょっと血ぃ出てたし。

「何すんだこの野郎！」

「おにいちゃんが無視するのが悪いんだもん！」

「だったら袖を引っ張るとかにしなさい！　噛み付くとかどんだけ凶暴なんだお前は！」

「うー！」

「わかった、俺が悪かった。だからまた噛み付こうとするな、洒落にならん」

可愛らしい八重歯を剥き出して唸るヴィヴィオに、手を上げて降参の意を示す。まぁ上げられるのは右腕だけなんだがな。

そうすると、満足したのか「わかればいいんだよ」と頷く我が妹君。

よし、今日からお前には『暴君』の二つ名を与えよう。

「おにいちゃん、何か言った？」

「イイエナニモー」

「ホントに？」

「ホントダヨー。ボク嘘ツカナイヨー」

「むー。いいもん、ヴィヴィオ大人の女だから許してあげるもん」

「大人の女（笑）」

大笑いしたらまた噛み付かれた。

自重しようと思います。

「ほら、おにいちゃん。あ～ん」

「はいはい。あ～ん」

再び謝って離して貰ってから、今度は大人しく世話を受ける。

つか別に飯ぐらい自分で食えるんだが……だが、この笑顔を前にすると断り辛い。

はぁ……なんとも厄介な。

なんて考えているうちに、昼食をあらかた食べ終わる。

ったく、結局今日も全部食べさせられちまった。

大きいお友達が見たら羨ましいのかもしれないが、生憎俺はそっちの気はないから、恥ずかしいって気持ちの方が強い。

ま、嬉しくないって訳じゃないのが困ったもんなのだが。

◇◇◇◇◇

昼食が終わると、再び暇になる。
当然と言えば当然だよな。入院患者に、そうそうやる事がある訳ない。
いつもならゲームでもやるんだが、生憎本体を全部取り上げられて手元には何も無い。残念な事に、ヴィヴィオもゲームのやりすぎで高町隊長に本体を取り上げられたらしい。
なので、仕方なく俺達は2人揃ってボケーっとしている。

「あがー」

「あがー」

俺はベッドの上で仰向けになり、ヴィヴィオは隣で椅子に座りながら天井を見上げて、2人で意味不明な鳴き声をあげる。
よほど奇妙な光景なのか、さっき定期健診に来た看護士にもの凄く怪訝な顔をされてしまった。
でも、することも無いんだし仕方ないよなぁ……。

「イギー」

「うぐぅ」

「それはマズイぞヴィヴィオ」
「にゃ？」

そんな感じで、特に意味のない会話をしながらダラダラと過ごす。
うむ、怠惰な日々万歳。

「ゲームやりてー」
「ゲームやりたーい」

兄妹揃って心の叫びを漏らす。
最近ヴィヴィオは大分俺に似てきたようだ。発言とかが結構被る。
うむ。俺に似るとは、ヴィヴィオは将来大物になるぞー。

「暇だなー」
「暇だねー」
「何かないかヴィヴィオ？」
「何もないよおにいちゃん」
「そうだよなー」

「そうだよー」

端から見れば、とんでもないダメ人間が2人である。
俺もヴィヴィオも天井を見上げ、会話とも言えない会話をしてる間に、無為に時間が過ぎていく。
たまにならこーゆーのもいいんだが、流石に毎日となると辛いなぁ。

「よしヴィヴィオ。何か面白いことしろ」

「えー。おにいちゃんがやってよぅ」

「俺を笑わせられたら、飴ちゃんあげるぞー」

「飴いらなーい」

予想ＧＵＹデス。
ヴィヴィオが飴を必要としないとか、天変地異の前触れじゃね？
何があった？

「飴ばっかり食べると虫歯になるって、なのはママに言われたの」

「む。それは正しいな」

「だから飴いらなーい」

むむぅ……正論だから文句も言えないか。
まぁしょうがない。それなら、俺が小粋なトークをしてやろう。

「ピーマン嫌いな子供の為に、食べやすいピーマンお菓子を作ったらどうだろうか。
味も食感も匂いも完璧に再現したピーマンスナックとか！」

「それもうピーマンじゃない？　おにいちゃん」

「ちっげーよ！　品物上はスナックだって！」

実にくだらない論議を繰り広げる俺とヴィヴィオ。
けど、余りにも内容がくだらないので直ぐに飽きてしまう。
なので再びボケーっと2人で天井を見上げる。

「あがー」

「あがー」

「むきゅー」

「むきゅー」

「ふんもっふ」

「ふんもっふ」

「あいむらびにー」

「あいむらびにー」

「……何してるのよ、２人揃って」

「「ふもっふ？」」

また２人鳴き声を出していたら、病室の入り口から声が聞こえた。
視線を移すと、呆れた顔で腰に手を当てているティア。
なんとも情けない姿を見られてしまった。

「いやん、恥ずかしい」

「きゃー」

「……ほら、着替え持ってきたわよ」

照れ隠しにヴィヴィオと一緒に乙女な反応してみたら、華麗にスルーされた。
くっ。だが、俺のボケは１０８式まであるぞ！

「着替えって事は下着もか？　ティアのえっちー」

「えっちー」

「……こっちの棚に入れておくからね」

またまたスルーされた。

これは中々緊急事態だ、俺は咄嗟にヴィヴィオとアイコンタクトを交わす。

（何でだと思うヴィヴィオ！？）

（うーん、ティアナさんが来るたびにやってたから、飽きられちゃったんじゃないかな？

しょうがないよ、おにいちゃん）

（諦めたら試合終了だ！　対策を考えようぜ！）

（諦めって、時には大事だとヴィヴィオ思うの）

（軟弱者め！）

この間、僅かに０．５秒。

一瞬で妹の裏切りに嘆いた俺は、仕方なく一人でボケ続ける決心を固める。

「そっちの棚には――「これ以上ボケるなら、撃つわよ？」――すいませんでした」

固めた決心は、ほんの数秒で撃ち砕かれてしまった。
デバイス突きつけるとか卑怯だよ畜生。

「全く。暇なのは分かるけど、絡まないでよね。こっちだって忙しいんだから」

「じゃあＢＳＰかサンテンドーＥＳ返せよ。そしたら大人しくなるから」

「……駄目」

「何でだよ！　返せよ！」

「浮気は、駄目」

オーケーわかった。だからクロスミラージュをこっち向けんな執務官志望。
それとその「今すぐ撃ち殺すぞこの野郎」って視線もやめなさい。
ヴィヴィオが怖がってるでしょうが。

「ふん。そんなに暇なら、コレでもやってなさい」

「っと」

俺の服を棚に入れながら、ティアが袋を放り投げてくる。

右手でそれをキャッチして、とりあえず中身を開く。

「……『執務官試験対策問題集』？」

袋の中から出てきたのは、そんなタイトルの書かれた分厚い問題集。

何で俺に？　まだ進路をどうするかなんて話、してなかった筈だけど……。

「ハヤトの考えてる事なんて、お見通しよ」

「？」

「フェイトさんに、執務官試験について聞いたんでしょ？」

「あー、ハラオウン隊長に聞いたのか。

でもだからって、即座に問題集買ってくるか普通？」

照れ隠しに頬を掻きながら、苦笑してティアを見る。

「……だって、どうせなら一緒に合格したいもの」

すると俺に背を向けたまま、耳を赤くしてボソボソと呟く。

超可愛いデレ頂きましたー。

「「萌えー」」

「……っ！！」

「「あいたぁっ！？」」

ヴィヴィオと一緒にからかったら、真っ赤になったティアに2人揃ってぶん殴られた。

頭が変形すると思いました。ティアさん酷ぇッス。

ヴィヴィオの方も、涙目で頭を押さえてる。あとで高町隊長に怒られてしまうといいよ。

「はぁ、もう。ホントになのはさんが心配してた通り、ヴィヴィオがハヤトに似てきちゃってるみたいね」

「心配してるとか失敬な！」

「そうだよ！　ヴィヴィオ別にハヤトおにいちゃんなんかに似てないもん！」

「なんかって何だヴィヴィオこの野郎！」

「にゃーっ！」

失礼な物言いをするヴィヴィオの頬を引っ張る。

くくく、よく伸びおるわ！

「にゅーーっ！！」

「へめっ！　ひほのほっへたひっはるんひゃへぇっ！！
（訳：てめっ！　人のほっぺた引っ張るんじゃねぇっ！！）」

小生意気にもヴィヴィオが反撃してきたので、そのまま2人でお互いの頬を引っ張り合う。
お互いに全力で頬を引っ張り合う17歳と6歳。
あれ？　冷静になって考えてみたら、どう考えても俺が悪い人じゃね？

けどそんなの関係ねぇっ！
妹に負けるなんぞ、俺のプライドが許さんのだ！！

「に〝ゃあ〝あ〝！」

「ぐぬ〝ぬ〝ぬ〝ぬ〝……！」

「何子供相手にマジになってんのよアンタは！！」

「ぐべらっ！？」

ヴィヴィオと一歩も引かずに頬の引っ張り合いをしていたら、またティアに殴られた。

何だよ！　ヴィヴィオも殴れよ！
俺だけが悪いワケじゃないだろ！？

「……妹の責任は、お兄ちゃんの責任よ」

「どういう理屈だ！」

「そういう理屈だよ、ハヤトおにいちゃん！」

「だまらっしゃい！　うしゃしゃい！」

「うしゃしゃい？」

「貴方達、静かにしなさい！　ここは病院ですよ！！」

ギャーギャー3人で騒いでいたら、最終的に見回りの看護士に全員怒られてしまった。
その後でティアとヴィヴィオからは殴られた。
退院前に俺の頭の形が変わらないかが酷く心配だ。

とまあ、毎日がこんな感じの入院生活は、概ね平穏に過ぎていくのであった。
……ん？　あれ？　俺だけめっちゃ損してねぇ？

第６６話　『後日談　２』（後書き）

こーゆーグダグダした会話の応酬って、書いてて楽しいなぁ。
どうも、ラモンです。

という訳で、入院生活編……というか、ヴィヴィオとハヤトの兄弟日記です。
おかしいなぁ。最初は他の皆も出てくる予定だったのに、何時の間にやらヴィヴィオしか出てきてなかった……。
ティアナもちょっとしか出せなかったし……ま、書いてて楽しかったからいいか。

次回は更生組訪問編の予定しています。
ハヅキやギンガ、チンク達やルーテシア、アギトファンの皆さんお待ちかね！
ハヤトと彼女達のドタバタ劇場をお楽しみに。

それではまた、次の話で。

※最後にちょっと宣伝を。
以前にこちらで言った『とあ新１８禁版』を書き上げて投稿しました。
ノクターンノベルスで『リリカルなのは』で検索すると、そのものズバリのタイトルが見つかると思います。
よければ読んでみてくださいね。

ヌルいですが性表現がありますので、１８歳未満の読者様はお読

みにならないようにお願い致します。

第67話　『後日談　3』

俺が入院してから3ヶ月。
最初に聞かされた通り、身体は無事に回復した。
一番損傷の酷かった左腕だけはまだ動かすと少し痛むけれど、とりあえず日常生活には問題ない。
あとは3ヶ月の完全休養期間でリハビリをすれば、後遺症も無く元通りということらしい。スカリエッティパねぇ。さすが天才科学者……ドのつく変態だが。
とにかく、俺は病院の消毒液臭いベッドに別れを告げ、今日無事に退院する事となった……のだが。

「何故俺は病院から出た途端、姉ちゃんに拉致られてるんでしょう？」

「それはな、お姉ちゃんの仕事をお前に見せたいからだ！」

「……そう」

「ふふふ、立派に働くお姉ちゃんを見て、惚れ直すといいぞ！」

「いえ、元から惚れてませんので」

やたらとテンションの高い姉ちゃんに辟易しながらも、抵抗するだけ無駄だと気付いているので溜息を吐くだけにしておく。
どうせ今日は退院したら、家に帰って父さんと母さんに揉みくちゃにされるだけの予定だったし。

俺って幸せ者だなぁ……愛され方が過激なのを除けば、だが。

「まぁ、それだけではないのだがな」

「え？」

唐突に姉ちゃんの声色が真剣さを帯びる。
それに驚いて横を見れば、姉ちゃんにしては珍しく困ったような表情を浮かべて前を向いていた。
あの姉ちゃんがこんな顔するなんて、何かあったのか？

「何かあったの、姉ちゃん？」

「少し、な。更生施設に居る、ルーテシアという召喚士の少女を知っているか？」

「知ってるよ。んで、そのルーテシアがどうかしたの？」

「うむ。先日お前が今日退院だということを更生プログラムの途中で話した時に、会ってみたいと言われたのだ」

「俺に？」

「ああ」

姉ちゃんの口から漏れた意外な言葉に、2，3度目を瞬かせる。

あの子とは下水道で1回会って喋っただけなんだが、何でだろう？

「情けない話だが、あの子は私にもギンガにも懐いてくれなくてな。更生プログラムにもイマイチ積極的に参加してくれぬので、最近は少し困っていたのだよ」

「姉ちゃんに懐かないって、そりゃまたすげぇな」

俺は子供に好かれやすいが、姉ちゃんは老若男女に好かれやすい。言うなれば天然の人たらし。男だったら間違いなくギャルゲ主人公になれただろう。

その姉ちゃんに懐かないってんだから、それは相当に珍しい事だ。

「そんなあの子が初めて私にしてきたお願いだ。聞いてやらねばなるまい」

頷きながら苦笑する姉ちゃん。

相変わらず、子供には馬鹿みたいに甘い人だ。まぁ、それでこそ姉ちゃんだけど。

「そういう建前で、退院当日にお前を攫いに行ったのだ！」

「建前って言っちゃったよ！　ちょっと感動した俺の心を返せ！！」

「む？　いけなかったか？

お姉ちゃんは愛故に、一刻も早くハヤトと一緒に居たかっただけなのだが」

「駄目だこの姉ちゃん……早くなんとかしないと……」

「なんとか!?　ついにお姉ちゃんに手を出してくれる気になったのかハヤトォォォッツ!!」

「危なっ!?　ちょっ、姉ちゃん運転中にハンドル離しちゃ……うぉあああああっっ!?」

中央分離帯が超高速で迫ってきてるぅぅぅっっ!!!
死にたくねぇえええええええ!!!!

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第６７話　『後日談　３』

何だかんだあったが、俺と姉ちゃんは無事（？）に海上隔離施設へと辿り着く事が出来た。
フラフラする足で何とか姉ちゃんの後に続き、入り口で中に入る手続きと、簡単な手荷物検査を受ける。
武器になりそうな物、通信機器の類など、まるで拘置所みたいな念の入れようだ。

隔離施設ってのは名ばかりで、これじゃあ拘留と変わんねぇな……。

まあ、彼女達の戦闘能力を考えれば、当然なのかもしれないけれど。

俺はそのまま、姉ちゃんの案内に従って施設内を進んでいく。

幾つかのゲートを越え、施設中央部の辺りに辿り着けば、そこに広がっていたのは小さな庭。

そこには白いローブみたいな服を着た少女たちが座っていて、思い思いに喋ったり本を読んだりしている。中には、見たことのある顔もちらほらと居るようだ。

「ふぅん。もっと厳重かと思ったけど、そんなでも無いんだね」

「最初はもっと厳重だったのだがな。有事の際には、私が何とかすると言って全員帰らせた」

「……また無茶なことを」

まぁ姉ちゃんの場合、あながち出来ない事でもないから困るところだが。

それはさておき、姉ちゃんが俺を拉致った本来の目的――ルーテシアの姿が見えない。

トイレにでも行ってんだろうか？

「姉ちゃん、ルーテシアはどこにいんの？　見当たんないけど」

「む？　あぁ、あの子なら今ギンガが呼びに行っている筈だ」

「そうなん？　それじゃ、来るまで暇になっちまうなぁ」

「確かにそうだが……なに、それ程時間はかかるまいよ。そうだ、もし良ければ中に居る子達と話でもしてやってくれ。あの子達も、いい加減私とギンガ以外の人間と喋ってみたいだろうしな」

「あいあい」

姉ちゃんの提案をふたつ返事で了承し、庭へと続くドアを開けて中に入る。

実際、ちょっとばかし興味もあったのだ。

主に姉ちゃんとギンガの教育（という名の虐め）によって精神に異常をきたしてないか、という意味で。

もし精神がアレな事になってたら……全力で慰めてやろう。同じ被害者として。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「……っ」

「ルールー！　走ったら危ないって！」

「ルーテシアちゃん！」

珍しく楽しそうな雰囲気――表情は無表情だが――で通路を小走りで駆けていくルーテシアを、アギトとギンガの2人が追いかける。ルーテシアの走る速さは小さな外見からは想像も出来ないほどに速く、上背のあるギンガでさえ軽く本気で走らなければならない程だった。

それ程までに彼女がハヤトの到着を待ち望んでいた事に驚きを覚えながら、アギトは走るルーテシアを諫めようと声を張った。

「そんなに急がなくても、アイツは別に逃げやしないってば！」

彼女の声にギンガも同意し、ルーテシアを止めようとする。

けれど彼女はそんな2人の言葉には耳を貸さず、ハヤトが居ると聞かされた場所に向けて走っていく。

その心の内は、まるで久しく会えなかった恋人と再会するかのように高鳴っていた。

「……」

ルーテシア自身、何故彼の事をこれほど心待ちにしていたのか、それはわからない。

今日彼に会いたいと言ったことでさえ、殆ど反射的に口から出てしまっただけなのだ。だからルーテシアは、パタパタと廊下を走りながら頭の隅で思考する。

けれど、こんな事は初めての経験だった彼女は、理由が全く思い浮かばずに戸惑うばかり。

そんな彼女の様子を他の人間が見れば、まるで恋する乙女のようだと思っただろう。

勿論ルーテシアの胸が高鳴るのはそういった色事が理由ではなく、どちらかと言えば憧れのヒーローに会えるのが楽しみで待ちきれない子供、といったところだろうか。

息を弾ませ、ギンガからハヤトの待つ更生施設中央の庭へと辿り着く。

「はぁ……はぁ……」

入る前に一生懸命息を整えていると、透明な硝子越しに庭で腰を下ろし、ナンバーズの面々と楽しそうに会話をしているハヤトの姿が見える。なんだか、憧れの人が取られてしまったようで少しだけルーテシアの眉尻が下がった。

そうやって息が整うのを待っていると、程なく彼女を追っていたギンガとアギトも追いつき、苦しそうに息を整えているルーテシアを心配して声をかけた。

「だ、大丈夫かルールー？」

「大丈、夫……」

息を整えているルーテシアに苦笑してから、ギンガは庭の方へと視線を移す。
その視線の先では、ハヤトとナンバーズが楽しそうに談笑している。ハヅキとハヤトの2人が着いたのは10分ほど前だというのにもう打ち解けたようで、相変わらず無駄に人懐っこいなぁ……とギンガは再び苦笑した。
そうしている間に息が整ったルーテシアは、中に入ろうとドアへと手を伸ばし、けれど躊躇って手を引っ込めるという事を繰り返していた。

「じゃあ入ろうか、ルーテシアちゃん？」

「……ん」

何度も躊躇うルーテシアにそう声をかけ、彼女が頷くのを確認してからドアを開ける。
そして――

「だよな！　やっぱギンガは口うるせーよな！」

「そうッスよねー、ちょっとした事ですーぐ怒るんスもん」

「ありゃ絶対に結婚できないよねー」

「しかもすぐ暴力振るうもんなぁ。ノーヴェ、セイン、ウェンディ、

正直同情すんぜ」

「「「いや、まったく」」」

――開けた途端に聞こえてきた自分の悪口に、全力でずっこけた。

その音に気付いたハヤト、ノーヴェ、ウェンディ、セインの４人は、ギンガの方を見てぎょっとした顔をしてから「ヤベ！　ギンガだ。ズラかれお前ら！！」というハヤトの掛け声で、一斉に出口目掛けて駆け出そうとする……が。

「ふ……ふふふ……」

「「「「！？」」」」

ゆらり――と。

幽鬼のようにゆっくりと立ち上がったギンガから発せられる怒気に、金縛りにあったように足を止める。

「ふ、ふぅん……？　ハヤト君はともかく。

ノーヴェも、セインも、ウェンディも、私の事そんな風に思ってたんだ？」

「「「「あわわわわわ……」」」」

ハヤト達は、暴風の如く叩きつけられるギンガの怒気にガクガク

と身震いする。
そんな４人に対して、ギンガはゆっくり一歩ずつ歩を進めていく。

「ノーヴェ、私そんなに口うるさいかな？」

「ひぃぃ！？」

まず、一歩。

「ウェンディ。貴女が悪戯しなきゃ、怒らないんだよ？」

「あわわ……」

また、一歩。

「セイン？　私、結婚できなさそう？」

「じょじょ、冗談だよ！　冗談！」

更に、一歩。

「ハヤト君、暴力的って何？」

「ちがっ！　あ、あれはノーヴェ達に合わせただけで、俺の意見じゃねぇ！！」

そして再び、一歩。

「あーっ！　ズルイッスよハヤト！　そうやって一人だけ逃げようとするなんて！」

「うっせぇ！　俺はお前らに合わせただけだ！　被害者だ！」

「てめこの、裏切ってんじゃねぇ！！」

「大体、最初はハヤトが言い出したんじゃん！」

「ちょっ！？　セインこの野郎！　それバラすんじゃねーよ！！」

「そっちが先に逃げようとしたんだろーが！」

「逃げようとしたんじゃねーよ！　戦術的撤退だ！！」

「それを逃げたって言うんスよ！！」

「やっかましゃあああああ！！！」

４人が醜い争いをしている間にも、ギンガと彼らの距離は着実に縮まっていく。けれどハヤト達は、互いに責任を押し付けあうことに夢中になっていて、逃げることを忘れてしまっている。

そして、遂にギンガが４人の目の前に辿り着き――。

「全員、お説教だよ」

「「「「い、いやあああああああっ！！！」」」」

ハヤト達の悲鳴が、更生施設内に木霊した。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

「酷い目に合った……マジで酷い目に合った」

耳元でまだギンガの説教が響いてる気がして、耳を押さえる。
アイツマジこえぇよ……。姉ちゃんでさえ止められないとかどんだけだよ……。
ちくしょう、ちょっと泣いちゃったじゃないか。

「大丈夫？」

「ん、あぁ。大丈夫大丈夫」

ブルーになってると、隣にいるルーテシアに心配されてしまった。
今、俺はルーテシアと2人だけで更生施設の屋上に来ている。本当はこういう場所には出れないらしいが、ギンガが連れて来る時に許可を取ってきてくれたらしい。

「……」

「……」

それはいいんだが、さっきから会話らしい会話が無い。
最初に会った時から無口なのは分かってたが、正直気まずくて仕方ないのでどうにかして欲しい。
とはいえここには助けてくれそうな人間はおらず、自分でこの気まずい空気を何とかしなくてはならない。仕方なく意を決して口を開いてルーテシアに声をかけた。

「えーと……あれだ、俺に会いたかったんだって？」

「……うん」

尋ねてみれば、暫くの間があってから小さく頷く。

「なんでだ？」

「それは……」

そう聞くと、困ったように俯いてしまい、再び俺とルーテシアの間に沈黙が下りる。

「……」

「……っ！」

何となく視線をやれば、丁度目が合って即座に逸らされた。

そしてまた沈黙。２人の間にとんでもなく重い空気が流れ始める。

ちょっ、マジで誰か助けて！　もうこの際スカリエッティでもいいから！！

「……貴方に、興味があったから」

「ん？」

ガチで助けを求め始めた瞬間、不意にそんな言葉が聞こえる。

ちょっと驚きながら再びルーテシアの方へ視線を向けると、ルーテシアが俺の方を見上げていた。

そして戸惑う俺に構わず、ルーテシアが言葉を続ける。

「エリオやキャロが、会いにきてくれる度に、貴方の事を話してくれた」

「ふぅん」

あの2人がここに来てるってのは聞いてたけど、俺の話もしてたのか。

……妙な事言ってないだろうなオイ。

そんな心配をしている俺を余所に、ルーテシアは言葉を選びながらポツポツと語りだす。

「あの2人は、貴方の事をお兄ちゃんだって、嬉しそうに言ってた。……エリオやキャロとは、本当の家族じゃないんでしょ？」

「ん、そうだな」

「なのに、あの2人にあんなに慕われてる貴方が、どんな人なのかな……って」

「興味が出た、って訳か」

「……うん」

纏めてやると、また小さく頷く。

「で？　実際会ってみて、どうだった？」

「……よく、わからない」

「さいで」

なんとも言えない返事に、苦笑しながら肩を竦める。

ま、がっかりされてないだけマシってもんか。

そんな風に考えていると、ルーテシアは俺の方を見て、軽く首を傾げて尋ねてきた。

「貴方にとって、あの2人はどういう存在？」

「弟と、妹だな」

「……他人、なのに？」

「ンなもんは関係ねーよ。俺がそうだと思って、あいつらもそうだと思ってる。それだけで十分だ」

そう答えると、ルーテシアは納得いかないのか首を傾げて眉を潜めた。それを見て、ちょっとだけ苦笑する。

何だってこう、俺の周りにいるチビっ子はどいつもこいつも、無駄に色々考えるんだろうか。

まあ、育った環境のせいってのもあるかも知れないけどな。

「わかんねーなら、今はそれでいい。
無理に理解しようとしなくても、そのうち理解できるだろうさ」

「そういうもの？」

「そーゆーモンだ」

「……そう、なんだ」

柵から身体を離しながら、そう答えておく。
ルーテシアもとりあえずは納得してくれたのか、視線を俺から逸らして小さく呟いた。
そのまま暫く俯いて、何かを考え付いたのか再び俺を見上げる。

「どうした？」

「私も、貴方の事を『お兄ちゃん』って呼んでいい？」

「……は？」

唐突な申し出に、思わず変な声が出てしまう。

「そうした方が、あの2人の気持ちが分かる気がするから」

「いやそのりくつはおかしい」

「？」

思わず某青狸の真似をしちまったじゃねーか。

どーゆー理屈だよそりゃあ。つか、俺はこれ以上弟も妹もいらねーっつーの。

「駄目？」

「いや、別に駄目とは言わねーけどさ」

「じゃあ、今日から呼ぶ」

そう言って俺を見るルーテシアの目は、エリオやキャロ、ヴィヴィオが同じ事を言い出した時と同じにキラキラしている。

この目はアレだ。何言っても無駄な目だ。そして俺は、子供にそーゆー目をされると弱い訳で。

「……はぁ。わかった、好きに呼べ」

「うん。好きにする」

抵抗するだけ無駄だと悟って、溜息を吐く。

すると、無表情ながらルーテシアの雰囲気がどこか嬉しそうな感

じになった。
おいおい、何かこの半年ぐらいで妹が3人も出来たよ。どーゆーことなの。

◇◇◇◇◇

その後は、取り留めの無い無駄話をして時間を潰す。
と、そこでふと思い出したことがあったので、ルーテシアに聞いてみた。

「そういやルーテシア、お前更生プログラムちゃんと受けてないんだって？」

「……ん」

「ちゃんと受けなきゃダメだろ？　何で受けないんだ？」

ちょっとだけ咎めるような口調で聞くと、俺から目を逸らして言い淀む。
ふむ。何か深い理由があるのかも知れないな。理由によっては姉ちゃん達にちゃんと報告しないと……なんて、ちょっと深刻になりながら彼女が話すのを待つ。
そうして待っていると、ルーテシアの口が開かれ――

「……勉強、嫌い」

「アホかぁぁぁあああああっっ！！」

思わず全力でツッコミを入れてしまった。

「……痛い」

「痛くしたんじゃボケェッ！！」

俺に引っ叩かれた頭を押さえてルーテシアが抗議してくるけど、そんなのどーでもいい。

姉ちゃんがあれだけ心配してるから、どんな深い理由あんのかと思ったらそんな理由かよ！？

俺が今日ここに連れてこられた原因の一端がそれなのに、そんな理由だったのかよ！？

ちょっ……マジで脱力感が半端ねぇんですけど。

「更生プログラムは勉強じゃねぇから。ちゃんと受けろって」

「……嫌」

肩を落としながら諭してみるが、ぷいっと横を向いて断れてしまう。

……どうしてくれようこのガキンチョ。

「受けなさい。受けないなら俺を『お兄ちゃん』て呼ぶの禁止」

「う……」

とりあえず軽く脅してみるが、眉尻を下げるだけで首を縦には振らない。

うむむ……こやつめ、真面目そうな顔して俺と同類だったとは。

む？　待てよ。俺と同類ってことは……。

「なら、ちゃんと受けたらご褒美をやろう」

「わかった」

「はやっ！？」

まさかと思ってご褒美を提案してみたら、あっさり釣れた。

何この子、素直すぎてめっちゃ御しやすいんですけど。そりゃスカリエッティにも騙されるわ。

まあいい。とりあえずやる気出したんだから、それで良しとしとこう。

「んじゃ、ご褒美は何がいい？」

「……えっと」

ご褒美の内容を尋ねたら、今日初めてルーテシアの表情が変わった。

しばらく指をもじもじと動かして間を置いてから、恥ずかしそうに頬を染めて俺を見上げ、小さく呟く。

「頭、撫でて欲しい」

「は？　そんなんでいいのか？」

「……うん」

あれだけ恥ずかしそうな顔してたからどんな無理難題かと思ったら、意外と普通だった。

つか、頭ぐらい姉ちゃんに言えばいくらでも撫でてくれるだろうに。

……いや、ダメだな。姉ちゃんが本気で頭撫でたら、摩擦熱でルーテシアの髪が焦げる。

いや流石に冗談だが、それはともかく。

「オーケー。今度遊びに来た時、ちゃんと更生プログラムを受けてたらな」

俺はそう言って、ルーテシアの頭に手を置いて髪をぐしゃぐしゃとかき回す。

べ、別に恥ずかしがってるルーテシアが可愛かったから、先払いしたくなった訳じゃ無いんだからねっ！

「そいじゃまあ、そろそろ戻るとするか。結構時間経ったしな」

「……ん」

話を切り上げ、ルーテシアを促して屋上のドアへと向かう。

すると、俺と一緒に歩き出したルーテシアの手が、服の裾を掴んで引っ張ってきた。

ちょっと驚いたけど、特に邪魔って訳でもないのでそのままドアをくぐり、姉ちゃん達の待つ施設中央へと向かう。

「あ、ルーテシア。俺を呼ぶ時は『お兄ちゃん』じゃなくて、『ハヤト兄（にい）』と呼べ」

「何で？」

「『お兄ちゃん』枠は既に埋まっているからな。個性を出す為だ」

「……そうなんだ」

「そうなんだよ」

向かう途中、面白半分で色々と洗脳はしておいた。

多分そう遠くない未来、ルーテシアは俺の良き同志となるだろう。

え？　変態？　違うよ、紳士だよ。

数日後、ルーテシアに色々と吹き込んだのがバレて、ギンガに呼び出されて説教された。

「いいじゃんか別に、萌えってのは学んでおいて損はねぇんだよ！」と反論したら、肉体言語で話し合う結果になりました。いつか泣かそうと思います。

第67話　『後日談　3』（後書き）

徹夜で書き上げたからテンションがおかしいぜ！
どうも、ラモンです。

ハヤト
「妹多すぎね？　どうも、主人公です」

どういうことだよ！
何でお前ばっかりフラグ立つんだよ！

ハヤト
「しらねーよ！　お前が書いてんだろうが！！」

はっ！？　い、言われてみれば！！
はい、そんな訳で海上隔離施設訪問（？）編でした。

ハヤト
「つか、ルーテシア編じゃね？」

まぁ、確かにそうだな。
でもさ、やっぱお前とルーテシアの絡みは書いとかなきゃと思って。
決戦の時にアレだけフラグ臭いの立てた訳だし。

ハヤト
「そうだなぁ。んで、コレでフラグらしいフラグは全部回収か？」

一応そのつもり。
さて、次回はどうしようねぇ。

お前の新デバイス編か、進路相談編のどっちかになるとは思うけど。

ハヤト
「まあどっちでもあんま時系列は変わらんし、適当でよくね？」

ま、それもそうか。
えー、そんな訳で次回は『ハヤトの新デバイス編』か、『進路相談編』を予定しております。
今度はあんまり間を空けずに投稿したいなぁ……。

ハヤト
「いいから書けって」

ういっす。

第６８話　『後日談　４』（前書き）

※最後にちょっとした募集があります。

第６８話　『後日談　４』

退院して１ヶ月と少し。
六課の隊舎も無事復旧して、再び六課の全員が隊舎で仕事をするようになった。
ティア達の訓練も再開、毎日ぶっ倒れるまで扱かれてるようだ。
スバルが大変だと愚痴るぐらいだから、相当だろう。
俺はと言えば、まだ訓練はドクターストップされているので、最近はもっぱらロングアーチの人達の事務仕事を手伝っている。
正直書類仕事とか超嫌いなんだが、まぁ、執務官になった時の予行演習だと思ってボチボチ頑張っている次第だ。

ちなみに、退院当日に姉ちゃんに拉致られて連れて行かれた海上隔離施設には、あれからも週一ぐらいで呼ばれて遊びに行ったりしてる。ただ、行く度に有休が減っていくのが微妙に困るところではあるのだが。
ナンバーズ連中とも結構仲良くなったし、初日以来ルーテシアも真面目にプログラムを受けているようだ。
ただ、俺が行く度にゲーム中毒者が増えて困るとギンガに文句を言われた。失敬な、俺はちょっとＢＳＰを貸しただけで、ナンバーズ連中に布教したのは姉ちゃんだぞ。まあ、俺もちょっとだけ色々と洗脳したが。

それは置いといて。

とりあえずはそんな感じで、ＪＳ事件後は特に深刻な事件も無く日々が過ぎて行った。

そんなある日、いつも通り事務仕事を片付けていた俺に、フィニーノ陸士がある提案をしてきた。

「……新しいデバイス、ですか？」

「そう。もう完全休養期間もあと半分ぐらいでしょ？
そしたら訓練も本格的に再開するし、そろそろ新しいのを用意しておいた方がいいかなと思って」

言われて初めて、そういえばと気付く。
今日まで俺はデバイス無しで過ごしてきた。入院中は必要なかったし、魔法を使うような場面も無かった。
けれど完全休養期間もあとちょっとで終わり、訓練に戻れるように少しずつ魔法の方のリハビリもしなきゃいけない。
言われてみれば、確かにそろそろ新しいデバイスを持たなきゃいけない時期だな。

「確かに、もうそんな時期ですもんねぇ」

「うん。だから、新しく造る子にどんな機能をつけるのか、ハヤト君と相談しようと思ってね」

「なるほど。んじゃ、早速色々話し合うとしましょうか」

「そうだね」

そんな経緯で、俺とフィニーノ陸士はデバイスメンテナンスルームの一角で、話し合いを始めたのだった。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「えーと……」

「その……」

「あの……」

あたしの隣でスバルとエリオ、キャロが困ったように声を上げている。

それはあたしも同じで、目の前で繰り広げられているいっそ狂気的とも呼べる光景に、何て言ったらいいのか分からない。

「ドリルは必要でしょ常識で考えて！」

「おかしいから！　そんなの邪道だから！」

「邪道も貫き通せば正道になる！」

「ならないよ！　デバイスマイスターとして、そんなの許しません！」

「いいじゃないですか！　ドリルは男のマロンですよ！」

「ハヤト君はデバイスを何だと思ってるの！？　あとそれ言うならロマンね！」

目の前では、シャーリーさんとハヤトが机を叩き壊さんばかりに叩いて議論（？）してる。

内容は……何か、頭が痛くなるような事だけど。

おかしいわね、あたしはなのはさんに、ハヤトがここで『新しいデバイスの話』をしてるって聞いたんだけど……。

何でドリルの話ばっかしてるのよ、２人して。

「だからやっぱドリルですって！」

「だからそれは無いから！！」

「「「「……なにこれ？」」」」

デバイスメンテルームに、あたし達４人の呆然として呟きが響いた……いや、響く前にハヤトとシャーリーさんの怒鳴り声に掻き消

されちゃったけど。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
第６８話　『後日談　４』

ぐぬぬ、フィニーノ陸士も分からず屋だな！

「ですから！　俺は杖型以外の形状が欲しいんですってば！」

「だからってドリルはないでしょ！？　どうやって戦う気なの！」

「天元を突破するんですよ！　俺を誰だと思ってやがる！」

「知らないよ！！」

ここで相談を始めてから１時間ぐらい。
さっきから俺と陸士の討論は平行線を辿っている。

杖型の他の形状――主に、男の浪漫たるドリル――をつけて欲し

い俺と、機能面から考えて杖型オンリーにしたいフィニーノ陸士。
2人の意見は真正面から激突し、お互いに妥協点を見出せないまま時間だけが過ぎている。
いいじゃないかドリル！　男の浪漫だろうよ！

「別にそれがメインじゃなくていいんですよ！
あくまで一形態として組み込んでくれればそれで！！」

「無駄な機構を付ければ、それだけＡＩやメモリの容量が無くなるの！
いちデバイスマイスターとして、そんな無駄な事をするのはプライドが許さないわ！！」

「ドリルを付けてくれないなら、新しいデバイスいらんとです！
支給品で我慢するとです！」

「何でそんなにドリルにこだわりが！？」

「男の子だからです！！」

「「理由になってない！！」」

「うあいたぁっ！？」

拳を握り締めて力説したら瞬間、後ろから思い切りぶん殴られた。
だ、誰だ！　俺の浪漫的演説を邪魔したのは！？

「……ってティアにスバル、それにエリオとキャロか。何でこんなとこ居るんだ？」

「なのはさんに、アンタの新しいデバイス開発の様子を見てきてって言われたからよ」

「おお、そうなのか。じゃあお前らからもフィニーノ陸士に言ってくれ！　ドリルは男の浪漫なんだ！　絶対新デバイスには必要だって！」

「却下」

「お兄ちゃん、それは流石に……」

意外にもティアとキャロには却下されてしまった。

ふ、貴様らも所詮はフィニーノ陸士と同じ女よ。男の浪漫を理解しろという方が無理な話か。

だが、お前達なら分かってくれるだろう！？　スバル、エリオ！

「ちょっと待って！　今さりげなくあたしを女の子としてカウントして無かったよね！？」

「ドリルサイコー！」

「流した！？」

「ドリルサイコー！」

「エリオまで反応しちゃった！？」

そのまま、とりあえずエリオと2人で「ドリルサイコー！」と拳を突き上げてみた。

結果として、女連中に豚を見るような目で見られたのでとりあえず自重して、2人でブルーになる。

「それで？　何でアンタはそんなにドリルを付けたいのよ」

む、ティアがドリルに興味を持ったご様子。

ここは凹んでる場合じゃないな。見事ティアを説得して、ドリル実装同盟に加えなくては。

そう気を取り直した俺は、姿勢を正してスバルを含めた女性陣へ、諭すようにゆっくりしっかりと語りだす。

「まずはオリジナリティだな。ドリル形態ってのは、俺の知る限り使ってる人が居ない。

ヴィータ副隊長が一応ドリルくっつけてるが、アレはハンマー形態が主になっている。だから、ドリルオンリーってのは俺が初めてになる訳だ。オリジナリティを何より大事にする俺としては、まずそれは外せない。

次に、近接戦闘での突破力を増加させられるってことだな。

執務官になろうってんだから、遠中近距離の全部をある程度こなせなきゃならない。んで、今から剣術だのを習うには時間が足りないし、格闘系をやるにも結局時間が足りない。

だから、とりあえず突破力が一番高そうなドリル形態を所望している。

最後に。まぁこれが一番の理由なんだが……それはな」

そこで一度言葉を切って、少しだけ間を置いて全員の反応を見る。

ふむ、全員そこそこに食いついてきてるな。この様子なら、最後の理由で落ちるだろうて。短い思考で俺がそう判断した時、焦れた表情のティアが口を開いて急かしてきた。

「何よ、もったいぶらないで言いなさいよね」

「ふふふ。まぁそう慌てるな、今話してやるよ。

最後の理由はな――」

「最後の理由は？」

「カッコイイからだ！！！！！」

ビシッ！　と天を指差してカッコよく言い放つ俺。

やべぇ。自分でもビビる位決まった……っ！　コレ絶対説得出来たろ。ティアとか俺に惚れ直したんじゃね！？

おぉう、皆から尊敬と畏敬の視線が――

「……シャーリーさん。ブレイブハートと同じでいいと思いますよ」

「そうだね。レイジングハートさんとブレイブハートのデータを元にして、ちょっと性能をアップさせる感じにしようかな」

「でも、お兄ちゃんの言うとおり、執務官を目指すなら近距離戦闘も視野に入れないと……」

「それは考えてあるよ。杖が元になるから、槍が一番適当かなと思ってる」

「あ、それじゃあ僕のストラーダのデータを使ってください」

――あれ？　視線感じないよ？
華麗にスルーされちゃってるよ？　ど、どういう事なの……。

「あの、えぇと……もしもーし？」

戸惑いながら、とりあえず呼びかけてみる。

「近距離のデータなら、あたしのマッハキャリバーのデータもどうですか？」

「う〜ん。でも、リーチとかが違うからなぁ……」

しかしまたしても華麗にスルー。

おかしい……俺の予定では「カッコイイからだ！」→「キャー素敵ー抱いてー！」の筈だったのに。

とりあえず、近くにいたティアに事の次第を聞いてみることにしよう。

「ティア、一体これはどーゆーこっちゃね？」

「……アンタが、ものすっっっごい馬鹿って事よ」

「えっ？　なにそれこわい」

「……」

ふざけたら、「お前〇すぞ？」的な視線を頂きました。

さっき飲んだジュースをそのまま漏らしそうなくらい怖いです。

「ごめんなさい。真面目に話をするので、出来れば仲間に入れてください」

あまりの怖さに即座に屈服。

額を床に擦り付けて、何とか仲間に入れて貰えた。

よかった、ホントよかった。

……ん？　何かおかしくね？

◇◇◇◇◇

さて、そんなこんなで俺の新デバイス案が纏まり――結局ドリルはつけて貰えなかった――連日連夜、フィニーノ陸士が頑張ってくれたお陰で、１週間という驚きの時間で新デバイスが完成と相成った。

そして今日俺は完成した新デバイスを受け取りに、ここ、デバイスメンテナンスルームへと再びやってきた。

ちなみに、他のＦＷメンバーと隊長陣、ヴィヴィオもくっ付いてきている。あんたら仕事はどうした……いや、言わなくていいですけどね。ロウラン准陸尉が泣いてるの見たし。

本当に大丈夫だろうか准陸尉……今度胃薬とか送ってあげようかなぁ。

「ハヤト君。これが、君の新しいデバイスだよ」

「え？　あ、はい」

おぉっと。ついボーっとしてしまったぜ。
フィニーノ陸士の言葉に、俺は意識を戻して陸士が差し出した手から『それ』を受け取る。

「……これが、俺の」

受け取ったのは、青い宝玉の周りに真紅の欠片があしらわれたペンダント。
真紅の欠片は、高町隊長から受け取ったブレイブハートの破片。
フィニーノ陸士に頼んで、装飾として埋め込んで貰った。

「――新しい相棒」

自分に言い聞かせるように、手の中のそれを握り締める。
待機形態が前と違うのは、俺の注文。まぁ、ブレイブハートを思い出しそうっていう、ただの感傷なんだけど。

「性能は、ブレイブハートが遺してくれたデータと、レイジングハートさんのデータを合わせて造ったの。だからきっと、今のハヤト君に一番ぴったりな子に仕上がってると思う」

「はい」

どうにも、まだブレイブハートの事は吹っ切れてないらしい。
当たり前と言えば当たり前か。アイツは俺の最初の相棒で……代わりなんて居ない存在だ。
そう簡単に吹っ切れるモンでもないだろうさ。

「それじゃあハヤト君。そのこの機能説明をするから、よく聞いててね？」

「あいあいさー」

バレないように苦笑してから、陸士の言葉に答える。
すると、メンテルームの巨大なモニタに、４つの形態のデバイスが映し出された。
それの左上を指しながら、フィニーノ陸士が説明を始め、俺はそれに耳を傾ける。

「まず、これが基本形態のシューターモード。ブレイブハートの時と同じで、射撃戦を主体とした形態だね。
機能的に特筆する変更点はないけど、何か質問あるかな？」

「特には」

「うん。じゃあ次の形態の説明いくよ？」

そう言ってフィニーノ陸士が、今度は右上のデバイス――ブレイ

ブハートのバスターモードに、ビットみたいなのが2つくっ付いた感じのモノ――を指した。

「これはバスターズモード。主体とするのは砲撃戦だね。
ただ、ブレイブハートの時と違って、ビットを同時に操作することで簡単な牽制射撃も出来るようになったの。
その分扱いが大分難しくなっちゃったけど、これで砲撃一辺倒ってことにはならないと思うよ」

「ほほぅ」

それは嬉しいお知らせだ。
バスターモードは、砲撃しか出来なくて微妙に使い辛かったからなぁ。

「ビットは基本で2個。最大6個まで増やせるよ。
ただし！　ビットを増やせば増やすほど、魔力消費量も跳ね上がるから気をつけて」

「一長一短って感じだな。ハヤトに扱いきれんのか？」

ヴィータ副隊長、酷い事言わないで！
頑張るから！　使いこなせるように凄く頑張るから！

「それじゃ今度はコレ」

副隊長の心無い言葉に傷つく俺を余所に、陸士は続けて左下の斧と槍を合わせたみたいな形態のデバイスを指す。

「これは近接戦闘を主眼に置いた新形態。名前はハルバードモード。今まで無かったモードだから、扱いについては慣れてもらうしかないかな。

これは魔力刃で戦うモードだから特筆すべき機能は付けてないけど、その分全モードの中で一番頑丈に出来てるよ」

「このモードの時、砲撃や射撃は出来ないんですか？」

「出来ると思うけど……他のモードに比べると、ちょっと大変かも」

「安心しろロックウェル。武器の扱いについては、私が付きっきりで教えてやる」

「はいコレ死亡フラグきましたー」

思わず声に出してしまった。

シグナム副隊長と付きっ切りで武器を使った近接戦闘訓練？　何その地獄。

「安心しろ。六課解散までに、一流の騎士に育ててやる」

「いえ。私は射撃型魔導師で結構です」

「そう不安がるな。私に任せておけ、ビシビシ鍛えてやろう」

話が噛み合っていませんシグナム副隊長。俺は、退院したばっかでまた入院とか嫌なんです。
すいません部隊長、俺今すぐ六課やめていいですか？

「給料なくなるで？」

「……やっぱりいいです」

世知辛い世の中やでホンマ。
なんて思ってるうちに、陸士の説明は最後の形態――右下にある、槍に近い形をしたデバイスを指した。

「これが最後、エクシードモード。
こっちも前よりも少しだけ限界値が上がったくらいで、大きな変更点はないよ。
……はい。それじゃあ説明はこれでおしまい。何か質問は？」

「ブラスターシステムは搭載してないの？　シャーリー」

俺が口を開くより先に、高町隊長が質問する。
そういえば、確かに今の説明では言ってなかったな。まぁ、無ければ無いでいいんだが。

アレはマジで洒落にならん、色々と。

「はい。ブラスターシステムは、この子には搭載してません。新しいモードを積んだせいでメモリに余裕が無かったですし、何よりアレはハヤト君の手には余りますから」

「……確かに、そうだね」

「本人の前で酷い言い草ですね2人とも」

ただ、事実なので言い返せないのが悔しすぎる。
実際もう一度ブラスターシステムを使えって言われたら、御免被るとしか答えられん。ホント辛いのよアレ。
俺みたいなヘタレには無理、嫌い、しんどすぎ。

「ハヤト君からは、他に質問あるかな？」

「いえ。大体は把握しましたし、後はおいおい覚えますよ」

何せもう暫くしたら嫌でも訓練再開だし。
……シグナム副隊長も、ビシバシ鍛えてくれるみたいだし。
ふふ。俺、六課解散まで生きていられるかなぁ……。
そんな感じで遠い目をして現実逃避をしようとしたところで、ふとある事に気付いた。

「そういえば、名前は決まってるんですか？」

前はレイジングハートさんの希望で、名前が決まってた。
新しい相棒もそうなのかと思って尋ねてみる。

「ううん。その子の名前は、ハヤト君が決めてあげて？」

「俺が決めていいんですか？」

「もちろん」

「そう、ですか」

頷いたものの、少し困る。
正直、陸士が考えてるとばかり思ってたから、全然考えてない。
とはいえこの空気だと、今この場で決めるしか無いっぽいし……。

「う～ん……」

首を捻りながら、手に持ったペンダントを見つめる。

俺の新しい相棒。
ブレイブハートのデータを受け継いだ、アイツの妹機。
恐らくはこれから先、誰よりも……多分ティアよりも俺と一緒に居るだろう存在。

だから、先に逝っちまったブレイブハートの分も、コイツを大事にしてやろう。

そんな事を一人決意しながら、俺は視線を上げて口を開いた。

「――名前、決めました」

「お、早いね。それじゃあ、何て名前にする？」

全員の視線が俺に集まる。

うわ、何か妙に緊張するなぁ……しかもちょっと恥ずかしい。

「決まってますよ。コイツは俺の相棒で、ブレイブハートの妹です。それに相応しい名前なんて、ひとつしかありません」

けど、新しい相棒のお披露目だ。ぐだぐだやって、ケチを付けるのは馬鹿らしい。

だから俺は、皆の視線を受けて止めながら、笑ってコイツの名を告げる。

「コイツの、名前は――」

第６８話　『後日談　４』（後書き）

はい、大体書きたいことはこれで終わりました。
どうも、ラモンです。

ハヤト
「死亡フラグが見えた……どうも、主人公です」

そんな訳で、後日談編第４弾『新デバイス』をお送りしました。

ハヤト
「何かアレだな。チート主人公とかが使うデバイスっぽいよな」

機能面は確かにね。
でも使うのが主人公（笑）だからなぁ。実力的にはそんなに変わらんよ。
前より砲撃戦がちょっと得意になった程度じゃね。

ハヤト
「酷ぇなオイ！　つか、俺はやれば出来る子だって！
きっと鍛えれば次回作では鬼の様にチートになれるって！」

いえ、無理です。
作者のこだわりにより、お前はいっても陸戦Ａまでです。

ハヤト
「俺の成長そこで終わり！？」

終わり。てか、それでも十分すぎると思うぜ？

普通の局員はＢに届かない人もいるんだし。

ハヤト
「む……確かに」

まぁ、ティアナとかはＡＡとか普通にいきそうだけどな。

ハヤト
「俺主人公なのに、恵まれてねぇぇ……ｏｒｚ」

恵まれてる主人公は、他の作者様に任せてる。
それに、俺は平凡な奴が足掻く様が大好きなのさ！

ハヤト
「こいつ……まぁいいや。
それで？　次回はどうするんだ？」

あぁ、うん。
次回は最終回だよ。

ハヤト
「そうか最終回……って最終回！？」

うん。後日談としてやろうと思っていたネタはこれで全部やったし。
進路相談ネタは、お前以外は原作と変わってないから、やっても微妙だしね。
だから、ちょっと話数のキリは悪いけど、下手に引き伸ばさないで、次回で最終話にしようと思う。

ハヤト

「……そっか。まぁ、スバルルートもあるしな。
あんまダラダラやっても仕方ないか」

そゆこと。

んでは、折角次回最終話ですので、次回予告をしてみましょうか！

◇◇◇◇◇

俺がこの部隊に入って1年、とうとう機動六課が役目を終える時が来る。

訓練して、戦って、挫折して、手に入れて、喪って。

俺みたいな凡人には刺激的過ぎた毎日も、これで終わり。

エリオにキャロ、スバルにティア。

進む道が同じ奴もいれば、違う奴もいる。

寂しくはあるけど、でも不思議と離れる事に対する不安は無い。

離れてたって、消えないモノや、忘れないモノはあるから。

次回、リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～最終話。

『とある新人の日常』

俺の日常は、もうちょっと静かな方がいいんだけどなぁ。

◇◇◇◇◇

それでは、次はティアナルート最終話で。

※緊急募集！

えー、今回のラストを見て頂ければ分かると思いますが、実はハヤトの新デバイスの名前が正式決定しておりません。
私の方で、暫定的に名前を考えたのですが、どうにもイマイチしっくりきてません。なので、折角ですから読者様に彼の新デバイスの名前を考えて頂きたく思います。

必須事項として、名前の最後に『～ハート』というのは付けてください。
レイジングハート、ブレイブハートの妹機という設定ですので、欠かしたくありません。

応募は感想、メッセージ、なんでも構いません。
〆切は最終話投稿までです。
採用発表は、最終話で使うことで発表とさせて頂きます。

採用された方には、ただ今絶賛封印処理中のディレト出演権をプレゼント！

後書きに出すなり本編で使うなり、お好きにしちゃってください！
え？　いらない？ｗ

最終話　『とある新人の日常』

００７６年、４月２８日。
機動六課は１年という試験運用期間を終えて、本日付けで解散。
部隊始動の時と同じホール、同じ壇上に部隊長が立ち、俺達に向けて挨拶をしている。

「長いようで短かった１年間。本日を持って、機動六課は任務を終えて解散となります」

それはとても感慨深い、感慨深いのだが。

「……ぁふ」

眠気に勝るほどでは無い訳で。
俺はあくびを噛み殺し、ボーっとする頭を何とか覚醒させようとする。
あー、部屋の片付けを１日で終わらせようとしたのが間違いだった。超ねみぃ。

「だから、早めにちょっとずつやれって言ったのよ」

「サーセン」

隣に立つティアに小声で注意されるが、半分寝ぼけてる俺には届かない。
視界の端にちょっとだけ映ったエリオも似たような感じだ。手伝いさせてすまん、エリオ。

「もー、ハヤトってば訓練校の時もそうだったよね。
夏休みの宿題を最後の1日でやろうとして、結局終わらなくてあたし達に手伝いさせたし」

「……反省してますん」

「してるのかしてないのか、どっちよ……」

寝ぼけててもボケてしまうあたり、俺の芸人根性も大したものだと思う。

「こら、そこの3人。最後なんやから、ちゃんと聞き～」

「「す、すいません」」

「ませーん」

そんな感じで喋っていたら、部隊長に怒られてしまった。
あー、何か最初の時も同じ事した気がするなぁ。
……成長してねーなぁ、俺も。

「皆と一緒に働けて、戦えて。心強く、嬉しかったです」

なんて苦笑している間にも、部隊長の挨拶は続く。

そして――

「次の部隊でも、皆どうか元気に――頑張って」

最後に極上の笑顔を浮かべながら、部隊長は最後の挨拶をそう締めた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

最終話　『とある新人の日常』

「何か、意外とあっさり終わったわね」

解散式が終わった後通路を歩いていると、拍子抜けしたような口調でティアが口を開いた。

「あんなモンじゃね？　最初の時だって、部隊長の挨拶とか短かったじゃん？」

「それに、この後お別れ二次会もありますしね」

「だよなー」

俺たちが今向かっているのは、二次会という名の宴会をする予定のホール。

ご馳走一杯あるんだろうなぁ……まぁ、スバルとエリオのフードファイトに参加する気は無いが。

「……うん」

「ん？」

そんな事を思っていたら、隣から蚊の鳴くようなスバルの声が聞こえてきた。

ちょっと驚いてそっちに視線をやれば、しょんぼりしているスバルが居る。

珍しいな、どうしたんだ？

『スバルさん、何だか元気ないですね……』

『なのはさんとお別れになっちゃうし、次の配置、ティアさんやお

兄ちゃんと別になっちゃったから……』

チビっ子2人もスバルの様子に気付いたのか、心配そうな顔でそんな念話を飛ばしてくる。

確かに、次の配置先は皆バラバラ。

チビっ子ズは自然保護隊へ、俺とティアはハラオウン隊長のとこで執務官補佐として研修が決まっていて、スバルは1人で災害救助隊へ行くことになっている。

何だかんだで訓練校から結構な長さの付き合いだ。

だから、確かに離れ離れになるのは寂しいものがある……ってのは分からないでもない。

「何をしけた面してんだオメーは」

「あたっ！」

馬鹿みたいに沈んでるスバルの頭をハリセンで叩く。

え？　どこからハリセン出したって？　禁則事項です。

……自分でやってなんだが、キメェ。

ってそれはともかく。

「無事解散式も終わって、これから二次会だってのによぉ。

ンな顔してたら、楽しめるもんも楽しめなくなっちまうだろうがよ」

「……だって」

「別に2度と連絡取れなくなる訳でなし、その気になりゃ休み合わせて会ったり出来んだろが」

「それは、そうだけどさ……」

励ましてみるけど、スバルの表情は晴れないままだ。

こいつのこーゆーとこは、いいトコであり悪いトコだな。

「ほら、いつまでもしけた顔してんなよ」

そう言って、スバルの肩を叩く。

寂しいからって今更ぐだぐだ言っても始まらない。

だったら、少しでも楽しい思い出を増やした方がいいに決まってる。

「今日で六課は解散だけどよ。新しい配属先に行くまで1週間準備期間もある。

暗い顔してうじうじするよりかさ、皆でワイワイやって楽しもうや」

「ハヤト……」

ようやくスバルが暗い顔をやめて、いつも通りの能天気な顔になる。

「そうだよね。ウジウジしててもしょうがないよね」

「そーゆーこった」

やっぱコイツは能天気な顔してねーとなぁ。

なんと言うか、こっちもペースが狂うし。

「……やっぱり、ハヤトがまともな事言うと違和感あるわね」

「ティア、人が良い事言ったのに台無しにするのは酷いと思うんだぜ？」

「事実だもの」

俺の抗議の視線を、平気な顔で受け流すティア。

いやね、確かに俺も自分で言ってて「似合わなねー」とは思いますよ！？

でもだからって言う事ないじゃん！　おにーさんは悲しいですよ！

「ま、でも……そういうトコもカッコイイけどね」

「え？　あ、どうも」

だからって速攻でデレるな！　リアクションに困るだろうが！
俺をどうしようってんだコイツは。この場で抱きしめてやろうか！

「あ、あの、お兄ちゃん」

「んお？」

何かもうティアが可愛くて、思わず本気で抱きつこうとした時。
キャロが俺の側に来てから制服の袖をちょいちょいと引っ張ってきた。何か言いづらいことでもあるのか、もじもじと頬を赤くしている。
何だ？　トイレでも行きたいのか？

「キャロ。トイレはあっちだぞ」

「ち、違いますっ！」

どうやら違ったらしく、ぽかぽかと叩かれてしまった。
トイレじゃないとしたら……何だ？　腹減ったのか？

「わ、私も……お休みになったら、お兄ちゃんの所に遊びに行ってもいいですか？」

「ん？　何言ってんだ、当たり前じゃねぇか」

「り、理由も無く行っても、いいんですか？」

「妹が兄貴のトコに遊びに来るのに、理由なんているのか？　会いたいから、ってだけでいいんじゃね？　姉ちゃんもそんな事言ってたし」

まぁ俺が関係している時の姉ちゃんなので、一般常識からはかなりズレてるかも知れないが。

「……っ、はいっ！」

「っとと」

だけどキャロは喜んでくれたようで、感極まったみたいに抱きついてきた。

よく考えりゃキャロはまだ１０歳。寂しくない訳ないよなぁ……

エリオ？　エリオは大丈夫だろ、男の子だし。

「兄さん！」

「あ、お前もなのね」

なんて思ってたら、エリオからも抱きつかれた。

この2人は歳の割に甘えたがりだな。普段がしっかりしてる反動か？
別に嫌では無いけどよ。

「……あ、皆、ちょっと！」

「「「「「？」」」」」

そうして立ち止まっていたら、高町隊長の声が後ろから聞こえてきた。

「なのはさん」

「ギン姉も」

振り返った先に居たのは、高町隊長とギンガの2人。
何の用だろうか？　今日は仕事は無いし、あとは二次会で騒ぐだけだと思ったけど。

「二次会前に、ＦＷメンバー、ちょっといいかな？」

愛らしく小首を傾げてそう尋ねてくる高町隊長。
そんなラブリーな仕草をされたら、断れる筈がないじゃないですか！　という本音は口にせずに、その言葉に頷く俺であった。

……ティアにはバレてたみたいで、思いっきり足を踏まれたが。

◇◇◇◇◇

「「「「「わぁ……」」」」」

高町隊長に連れられてやってきたのは、よく使っていた訓練スペース。

そこに広がる光景を見て、俺達は誰とも無く同じような感嘆の息を吐いた。

裏庭一面に広がる、桃色の花を咲かせる木々。その花びらが風に舞い、散っていく。その光景は、一言では言い表せない程に幻想的で、思わず感動してしまった。

「この花って、確か……」

「うん。私やなのはちゃんの故郷の花」

「お別れと始まりの季節に、つきものの花なんだ」

エリオの言葉に、部隊長とハラオウン隊長が答える。

そういえば俺も母さんに聞いたことあったな。たしか名前は……
サクラ、だったか？
向こうの方では、高町隊長に連れられてきたらしいヴィヴィオが
風に舞う花びらを追っかけて遊んでいる……コケんなよ？

「綺麗ッスねぇ。この下で宴会とかしたら楽しそうだなぁ」

「おっさんくせーぞハヤト」

「ぐへぇ」

相変わらずヴィータ副隊長は物言いが辛辣です。
俺の硝子のハートはボロボロですってばよ！

「ま、ハヤトは放っといていーや。おし！　ＦＷ一同、整列！」

「「「「はい！」」」」

「はい……って、ヴィータ副隊長ひでぇ」

自分の扱いに疑問を感じつつ、言われた通り整列する。
いつもの訓練の時みたいに俺達の前には隊長達が立っていて、それが何だか酷く懐かしく感じる。

「さて……」

俺達が整列するのを確認してから、高町隊長が一歩前に出て、その隣には。

「まずは5人とも、1年間、任務も訓練もよく頑張りました」

「この1年間、あたしはあんまり誉めた事無かったが……お前ら、まぁ随分強くなった」

「「「「「「!」」」」」」

高町隊長に続いて、ヴィータ副隊長が漏らした言葉。
初めて聞いたその言葉に、思わず驚いて息を呑む。
あんまりって言うか、ヴィータ副隊長が俺達の事を誉めるのなんて、これが初めてじゃないだろうか？

「辛い訓練、キツい状況、困難な任務……だけど、一生懸命頑張って、負けずに全部クリアしてくれた」

隊長の言葉に、この1年間の事を思い出す。
……半分は入院してたような気もするが、まぁそれは置いておいて。

確かに色んな事があったよな。
シグナム副隊長に斬られそうになったり、ガジェットとモノレー

ルの上で戦ってみたり、ディレトと戦ったり。
――大切な相棒を、失くしたり。

でも、それ以上に得るものがあったとも思う。
この1年は俺にとって、今までの人生で一番内容の濃かった1年かも知れないな。

「皆、本当に強くなった。5人とも……もう、立派なストライカーだよ」

「……高町、隊長」

あ、やべぇ。これは泣く。
なんて思ってる間にも、視界が滲んで鼻の置くがツーンとしてくる。
隣からは、他の皆が鼻をすする音も聞こえてきた。

高町隊長。最後にそんな事言うのは卑怯ッスよ。
貴女は俺らの目標で、先生で、憧れで――そんな人からそんな事言われたら、泣かない訳ないじゃないッスか。

「あーもう、泣くな！　バカタレ共！」

「「「「「……はい！」」」」」

俺らに向かってぶっきらぼうに言うヴィータ副隊長の目にも、光

るものがある。
そんな顔で「泣くな」って言われても、説得力無いですよ。

「……さて、折角の卒業、折角の桜吹雪。湿っぽいのは、無しにしよう！」

全員が涙を滲ませている中で、湿っぽい雰囲気を吹き飛ばすように、高町隊長が声を張った。

「そうだな」

「自分の相棒、連れてきてるだろうな？」

「「「「「……へ？」」」」」

その隊長の声に応えるように、シグナム副隊長が一歩前に出る。
さっきまで涙を浮かべていたヴィータ副隊長も、今はすっげー良い笑顔でグラーフアイゼンを構えていた。
……なんだろ、俺の第六感が「今すぐお逃げなさい！」と言っているぞ？

「えっと、高町隊長。どーゆーことでしょう？」

「折角最後だもん。全力全開！　手加減なし！　機動六課で最後の模擬戦！！」

恐る恐る尋ねてみたら、何だか素敵なお返事が返ってきた。

「いやいや隊長、さすがにそれは――「「「「はいっ！」」」」――何返事しちゃってんのお前ら！？」

何とか隊長達を思いとどまらせようとしたら、それよりも先にティア達が良い笑顔で返事する。

アホか！？　アホなのか！？

「全力全開って……聞いてないよ！？　そ、それに今日は折角卒業なんだし……」

「ハラオウン隊長が今いいこと言った！」

俺と一緒で、突然の模擬戦に驚いているハラオウン隊長が、慌てて高町隊長達を止めに入る。

頑張ってハラオウン隊長！　貴女だけが俺の希望です！

「まぁ、やらせてやれ。これも思い出だ」

「シグナム副隊長！　思い出には『良い思い出』と『悪い思い出』があるんですよ！」

「もぉ……ヴィータ、なのは！」

「固いこと言うな。折角リミッターも取れたんだしよ」

「心配ないない。皆、強いんだから」

貴女達に比べたら弱いですから！　チート軍団と俺達……いや、俺を一緒にしないでください！

入院はもう嫌だから！　つーかシグナム副隊長の相手とかマジ嫌だから！

「全力でいくわよ」

「頑張ろうね！」

「何でお前らは、そんなやる気満々なんだよ」

隣では、スバルとティアがやる気満々で喋ってる。

その向こうではエリオとキャロも同じ様にやる気満々のご様子だ。

あれ？　もしかして俺がおかしいのか？

「ハヤト……その、諦めたほうがいいと思うよ？

皆がこうなっちゃったら、もう止められないと思うし……」

ハラオウン隊長が残念そうな顔で、そう言ってくる。

うん、分かってた。分かってましたよハラオウン隊長。つか、俺とハラオウン隊長以外の全員がやる気満々じゃ、止められる筈無いですよね。

「フェイトさんも、お願いします！」

「頑張って勝ちます！」

「ってオイぃ！　お前らは何言ってますか！？」

向こうは隊長が3人も居るってのに、何で戦力増やそうとしてんの！？

アレですか！？　お前らは自殺志願者か何かですか！？

「え、でも……」

「フェイトママ、頑張って～」

「ヴィヴィオはお黙れ！　ハラオウン隊長、やめてくださいね！？」

流石にこれ以上はマジでヤバイので必死に止めてみる。

あぁでもどうせ無理なんだろうなぁ！　ハラオウン隊長は子供に甘いから、チビっ子ズに言われたらやる気になっちゃうんだろうなぁっ！！

「……もぉ、しょうがないなぁ」

ヴィヴィオの頭を撫でながら、満更でもない顔のハラオウン隊長。
やっぱりなぁ。うん、分かってた。

「……はぁ」

「ほら、ハヤトもいつまでもグダグダ言ってないで、準備する！」

「大丈夫だよ、ハヤト！」

大きな溜息を吐くと、いつの間にやらバリアジャケット姿になったティアとスバルが両肩を叩いてくる。
お前らのその自信やらやる気はどこから出てくるんだ全く。

「兄さん、頑張って勝とうね！」

「お兄ちゃん！」

「あのなぁ……ったく、お前らは」

同じようにバリアジャケット姿のエリオとキャロは、キラキラした目で俺を見ながら駆け寄って、そう意気込む。
今までになくやる気な2人に苦笑しながら、「こりゃ逃げようが無いな」と諦めて、胸元のペンダントを握る。

そして、気持ちを切り替えるように少し大きな声を出す。

「……っしゃあ！　どうせやるなら、勝って終わらせるぞお前ら！」

「「「「おうっ！」」」」

４人の返事を聞いてから、俺はペンダントを首から外して天に掲げた。

「いくぜ、クロスハート！！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．　Ｓｅｔ　ｕｐ．》

俺の声に呼応して、クロスハートに嵌め込まれた青い宝石と、周りに散りばめられた赤い欠片が光る。

魔力が巻き上がって身体を纏い、バリアジャケットへと変わっていく。

白を基調とした、高町隊長と似たようなデザインのジャケット。

背中に踊るは『天上天下唯我独尊』の文字。

右手に握っているのは、ブレイブハートやレイジングハートさん

と同じ形の杖。
コイツの――クロスハートの基本形態だ。

「それじゃあ皆、準備はええか！？」

「「「「「はい！」」」」」

俺がバリアジャケットを展開したのを確認した部隊長が、手を上げる。
それを合図に、俺達と隊長達は互いに構えて向かい合う。

「……それにしても」

「え？」

隣に立つティアにしか聞こえない声量で、呟く。

「こんだけ騒がしい日常が、今日で終わりかと思うと……少し、寂しいな」

最後だと思うだけで、この1年間の事が頭の中を過ぎっていく。
毎日毎日、ぶっ倒れるまで訓練して。
シグナム副隊長に、何かヤバイ感じになるまで扱かれて。栄養ドリンク片手に、書類を片付けたりもした。

正直、思い出すだけでげんなりするような、ハードな毎日だった。
それでも、それが悪くないと思えるような……そんな日常。
それが今日で終わるってのが――何だかんだで、結構寂しかったりもする。

「……そうね。確かに、ちょっと寂しいわ」

「ま、どーせ離れても騒がしくなるんだろうけどさ」

「原因は絶対アンタでしょうね」

「そうだろうなぁ」

2人で言い合って、笑う。

「こらそこー、イチャついてるとディアボるでー」

「イチャついて悪いか！　てかディアボるって何!?」

「“妬ましすぎるから、ディアボリックエミッションで闇に沈めて骨も残らず消滅させたる”。
略して“ディアボる”や！」

「長ぇよ！　つーか内容が犯罪だろうが！」

「証拠隠滅は得意やで？」

「アンタ一回捕まれ！」

部隊長のボケ――目は笑ってなかったが――に突っ込んでから、視線を戻して気を取り直す。

確かにこんな馬鹿騒ぎが出来るのは今日で終わりだけど――

「――日常ってのは、続いてくから日常なんだよな」

クロスハートを構えて、そう呟く。

「ハヤト君！　全力全開、真っ向勝負だよ！」

「消し炭になりそうなので、手加減して欲しいです」

高町隊長が居て。

「ぶっ潰されねーように、気合入れろよ！」

「……潰さないって選択肢は、無いんですかね？」

「ンなもんねぇ！」

「言い切ったよこの人……」

ヴィータ副隊長が居て。

「えぇと、ちゃんと加減はするからね？」

「天使ですか貴女は」

ハラオウン隊長が居て。

「私が教えた事を、余す事無く出し切ってかかってこい、ロックウエル。
私も全力で相手をさせてもらう」

「いえ。貴女の相手はスバルかエリオに任せます」

「なんだと！？」

シグナム副隊長が居て。

「兄さん！　頑張ろうね！！」

「まぁ、怪我しない程度にな」

弟（エリオ）が居て。

「お兄ちゃん、私、頑張ります！」

「おにいちゃん、がんばれ～！」

「キャロも怪我しないようにな？　あとヴィヴィオは危ないから、ちょっと離れてろ」

妹たち（キャロとヴィヴィオ）が居て。

「後ろは任せたからね、ハヤト！」

「はいはい。まぁ、好きなように突っ込んでこい。背中は適当にフォローしてやっから」

親友（スバル）が居て。

「折角だし、カッコイイとこ見せてよ？」

「はっ、当然。俺様の活躍を見て惚れ直すといいよ」

「そうなるように祈ってるわ」

そして、隣にティアが居てくれる。

確かに全員が一緒に居られるのは、今日で終わりかもしれない。
でも、終わらないものだって――確かにある。
だから、終わりなんて無いんだ。
俺が望む限り、俺が諦めない限り、“俺の日常”は続いていく。

「それじゃあ……」

「レディー……」

「「ゴーッ！！」」

いつまでだって、な。

「ごめんハヤト君！　クロスハートのリミッター外すの忘れてた！」

「そーゆーオチはいらねぇから！」

後書き的な何か

えー、そんな訳で『とある新人の日常』ティアナルート完・結！
どうも、ラモンです。

長かったような短かったようなハヤトの物語、いかがだったでしょうか？
兎にも角にも、まずはひと段落です。

最初は「そういや、平凡な主人公ってあんまり見ないよなぁ」と思いつき、プロットも何も無しで書き始めたこの小説。
本人的には最後まで書けないだろうなぁ、なんて思ってたんですよね。私は昔から小説を書いたりしてると、途中で色々と考えちゃってダメになるタイプでしたので。
ですが、読者の皆様の温かい応援や叱咤激励により、こうして無事にひとつの節目を迎える事が出来ました。
この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

とりあえず、これでティアナルートは完結。
次は次回作……ということになりますが、実は次回作はまだプロットも出来上がってない段階でして……。
投稿出来るようになるのは、もうちょっと先になりそうです（汗）
ちなみに、次回作はティアナルートの続編……時間軸的には3～4年後を想定しています。

そしてスバルルートですが、こちらは大体の概要は決まっているので、早めに書けると思います。思うだけですがw
スバルが本命という読者様は、ワクテカしながら全裸待機しておお

いてください。
あ、全裸待機したせいで警察に厄介になっても、私は一切責任を負いませんので悪しからずw

えー、それと前回の後書きで応募したハヤトの新デバイス名。
驚く程沢山の応募、ありがとうございました。
全てをリストアップして、友人まで交えて選考しまくった結果、雷天双壮さんが応募してくれた

『クロスハート』

を採用させていただきました。
採用された雷天双壮さんには、『ディレトの出演権』をプレゼント！
要らない時は返品してくださいw

……わざわざ後書きを別にした割に、言うことないなぁ。
仕方ないので、ハヤトのその後をちょっとだけ。

●ハヤト＝ロックウェル執務官補佐

フェイトの3人目の補佐官として、執務官になる為の実務研修。
ティアナやシャーリーと、毎日騒がしく過ごしている模様。
エリオやキャロ、ヴィヴィオ、ルーテシアといった弟、妹たちとは、小まめに連絡を取り合っている。
最近では、フェイトから子供との接し方について相談もされてい

るようだ。

とまあ、こんな感じでしょうか。

そういえば、感想で「ハヤトは執務官補佐の方が、ティアナと一緒に居られるんじゃね？」という質問がありました。

よく考えるとその通りなのですが、今更ハヤトの進路を変える訳にもいかないので、急いで考えた後付けご都合主義設定を今発表しようと思います。

この『とあ新』世界では、執務官限定で『バディ制度』というものがあります。

これは、執務官補佐を指定しない代わりに、誰か1人、執務官を指定して相棒として組むというものです。まぁ、言ってしまえば補佐役を他の執務官にやってもらう、という感じですね。

これがあるので、ハヤトとティアナが2人揃って執務官になっても問題ありません。

……と、これで納得してください！（汗）

正直ハヤトの進路を考えた時に、全然何も考えずに「ハヤトも執務官でよくね？」とか決めちゃったもので……。

計画性って大事ですネ！

さて、それでは後書きはここまで。次回はスバルルートで始まるハヤトの日常をお楽しみください。

ラモンでした。

オリジナルキャラ紹介（ネタバレ含みます）

【本人】

・名前……ハヤト＝ロックウェル

・歳　……１７歳

・性別……男

・所属……機動六課

・階級……二等陸士

・身長……１７２ｃｍ

・体重……６７ｋｇ

・性格……楽観主義

・術式……ミッド式

・髪の色…金

・目の色…緑っぽい青（信号機の青）

・魔力色…真紅

・魔力ランク……Ｂ＋

・魔道師ランク……陸戦Ｂ
・所持資格……災害担当部隊シューター／バイク免許／危険物処理
・趣味……ゲーム全般
・特技……ゲーム全般
・好きな物……ゲーム全般、おっぱい（巨以上に限る）
・苦手……シグナム副隊長、ヴィータ副隊長、姉ちゃん、ギンガ、訓練
・嫌いな物……早起き

【魔法】

●インビジブル・シューター

音速を超える速度で魔力弾を撃ち出す。
ただし、発動に必要な計算に時間がかかり、計算の量も膨大な為、多弾射撃も出来ない。
更にうっかり衝撃波減衰魔法をかけ忘れると、自分を含め周辺への衝撃波による被害が凄い事に……など問題点ばかりなので実用には程遠い。

●ディバインバスター（弱）

なのはの使うディバインバスターの劣化版。
ハヤトは集束が苦手で自分の魔力しか使えないため、今現在はカートリッジ2発を使って1発撃つのが限界。

●他、なのはや武装局員が使う魔法全般

ぶっちゃけ固有技は必殺技1のみ。
所詮は凡人に毛が生えた程度の人間だから。

【デバイス】

・名前……ブレイブハート

・規格……インテリジェントデバイス

・人格……女性型

・形状……待機状態では赤い宝石が嵌められた銀の指輪。
起動状態はレイジングハートと全く同じ。

●モード1《　シューターモード　》

なのはのレイジングハート・エクセリオンと同様の形態。

主にセンターに留まっての射撃戦を想定している。

●モード２《　バスターモード　》

主に砲撃戦を想定した形態。砲撃の威力が約２倍（当社比）になる。
ただ、ハヤトの集束の腕が上がるまでは無用の長物。

●モード３《　エクシードモード　》

リミッターを外し、限界ギリギリの最大戦力を発揮するモード。
負担が大きいのであまり多用は出来ない。

●モードＥＸ《　ブラスターモード　》

術者の限界を超えた魔力ブーストをかけることが出来るモード。
なのは程の使い手であっても、大きな後遺症を残す危険性がある。

・備考

レイジングハートを元に造られた姉妹機。
射撃戦を重視したデバイスで、演算能力が高めに設定されている。
スペックは、設計上レイジングハート＜ブレイブハートで、ハヤトには勿体無いくらいのスペックを誇る。

・ハヤト＝ロックウェル参考画像

＞ｉ４５４７―７７８＜

ハヤト
「へへへ……へったくそだなぁ！？」

やめて！
無い腕で必死に頑張ったんだからやめて！

ハヤト
「絵なんて殆ど描けないくせに、何で描いたし」

だって……お前の顔とかちゃんとしといた方がいいと思って。
読者の人もその方が色々とイメージしやすいかなーってさ。

ハヤト
「だとしても、もっと上手い人に頼むとか出来たろうよ」

……今んとこ絵を描いてくれそうな知り合いいないもん。

ハヤト
「友達いねぇでやんのｗｗｗ」

うっせぇ！

いいんだよ！　この画像を見て、挿絵描いてやろうって人が出てくるかもしれねーだろ！？

ハヤト
「そんな奇特な人がいるかよｗｗｗ」

いるよ！
きっといるよ！

ハヤト
「はいはいｗ
そーいやこの画像って俺のバリアジャケット？」

おう。アニメのクロノ君見ながら一生懸命描いたぞ！

ハヤト
「肩のトゲは？」

難しかったから削った。

ハヤト
「手抜き工事じゃねぇか」

いいんだよ。
どっちかってーと高町なのは基準のバリジャケなんだから。

ハヤト
「言い訳乙」

言い訳って言うなーーーっ！！

ハヤト
「はいはい。さて、続いてはディレトの紹介だ」

【本人】

・名前……ディレト
・歳　……17歳（外見）　稼動後1週間弱
・性別……女
・身長……152cm
・体重……―
・性格……無邪気、快楽主義
・術式……―
・髪の色…赤
・目の色…金
・魔力色…橙

・魔力ランク……ＳＳＳ
・魔道師ランク……―
・趣味……―
・特技……―
・好きな物……断末魔、悲鳴、姉妹
・苦手……ウーノ、チンク（お説教されるから）
・嫌いな物……退屈

【ＩＳ】

●エクスプロード・アイ

視界に映る光景をＸ，Ｙ，Ｚ座標に変換。その後、そこから座標を指定して一瞬で魔力を集中、圧縮して爆発させるＩＳ。
射程範囲は彼女の視界全体。
見えるならば、数キロ先でさえ爆発を起こすことが可能。

ただし、座標指定には凄まじい計算処理が必要な為、連発は不可能。
１度爆発させた後は、最低でも１０秒のインターバルを要する。

●キャンセラー

対象の魔力の質、波長などを計算し、それと真逆の性質を持つ魔力を生成。
その後、座標を指定して生成した魔力を、消滅させる魔法の周りに展開して対消滅させる。
理論上はあらゆる魔力に対応することが可能。消せない魔法は存在しない。

しかし、座標を指定せずに対消滅させる為の魔力を自身の周りに展開することも可能なので、エクスプロード・アイに比べて座標指定などに必要な計算は少なく、連続して使用することが可能。

・備考
スカリエッティが造りだした戦闘機人最後の1体。
無邪気で、自分の欲求に素直。また、精神はまだ子供であり、子供特有の残酷さを見せることも。
戦闘力のスペックは設計上、なのは、フェイト、はやての3人がリミッターを解除した状態でも圧勝できる程であるが、実際には経験が足りないためその通りになるかどうかは不明。
外見イメージはエウレカセブンのアネモネ。

【固有武装】

・名前……イービルハート

・規格……固有武装（ストレージデバイスと同じ規格）

・人格……無し

・形状……待機状態では指輪。起動状態の基本形はとツインブレード。

・備考

スカリエッティが造ったディレト専用の固有武装。
主に固有武装専用のＩＳを使用する際に使われる。形状は６種類有り、それをディレトが好きに変化、使用することができる。
デバイス技術を流用しているが、デバイスの様に使用者の補助などはせず、あくまで武器としての側面しか持ち合わせていない。

if21話　『デート（？）と幼女と下水道　1』（前書き）

※長らくお休みしてすいませんでした。
スバルルート開始です。それと、最後にちょっと宣伝を。

if21話　『デート（？）と幼女と下水道　1』

「ハヤト！　デートしよ、デート！」

「……ベッド貸してやるから、寝言は寝て言おうぜ。スバル」

いきなり人の部屋に押し掛けてきて目をキラキラさせ、訳の分からん事を言う訓練着のスバルに、俺は自分のベッドを指差し、

少し不機嫌な顔でそう言った。

何せ、今まさに寝ようとしていた時に叩き起こされたのだ。不機嫌になっても問題ないだろう。

だが――

「ふぇ！？　べ、ベッドはまだ早いよ！」

何をどう勘違いしたのか、スバルは顔を真っ赤にしてぶんぶんと首を振る。

……まぁどうでもいいや。眠いし。

「からかいに来たんなら帰れ。俺は寝る」

「か、からかってなんか無いよ！　デートしようって言ったじゃん！」

「……え、マジなん？」

「マジだよ！　てゆーか、冗談でこんな事言う訳ないし！！」

ちょっと驚きながら聞き返すと、真っ赤な顔で怒鳴られた。

スバルがこんな顔するなんて珍しいな。つーことは、マジって事か。

でも今更照れるような事か？　デートって訳じゃねぇが、一緒に出かけるとかちょくちょくやってただろうに。

「まぁ、一緒に出かけるってんなら別にいいけどよ。ティアナは？」

「ティアはその……えーと……そう！　残ってるお仕事をやるって言ってたよ！」

「ふーん。真面目だなアイツは」

「そ、そだね……えと、それで、どうかな？　一緒にデートしない？」

そう言いながら、妙に気合の入った表情で俺を見上げてくるスバル。

何でそんな『デート』に拘るんだ？　何か雑誌でも見て影響されたのか？

ぶっちゃけ寝てたいんだけどなぁ……折角の1日休みなんだし。

とはいえ、こーゆー時のスバルは無駄に意固地だから、グダグダ言うだけ無駄なんだけどさ。

「……わーったよ。３０分後に入り口に集合な」

「え……い、いいの！？」

「いいの？　って、お前から誘ってきたんじゃねーか」

「やったぁ！　じゃあ、すぐに用意してくるからね！！」

言うが早いか、吹っ飛ぶような勢いで自分の部屋へと帰っていくスバル。

どんだけテンション上がってんねん。

「まぁいいか。さて、と……とりあえず準備しますかね」

呟いて、準備をする為に部屋に戻る。

財布の中身、大丈夫だったっけなぁ？　最低限、今週末に出るソフト分の金は確保しておかねば。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｉｆ２１話　『デート（？）と幼女と下水道　１』

side：―

スバルがハヤトの部屋を訪れている頃。

ティアナは事務室の片隅で燃え尽きていた。いっそ見事なほど真っ白に。

「……ふ、ふふふ」

ティアナの脳裏に浮かぶのは、ついさっき自分から言い出した提案。

早朝訓練の後に突然告げられた丸一日の休日。降って湧いた休日に、折角だから好きな人と2人きりでデートをしてみたい。

始まりはそんな感じだったのだと思う。

好きな人が同じ女の子が2人、そして休日は今日しかないとなれば、争奪戦が起きるのは必然。

案の定ティアナとスバルの間でもデート権争奪戦が勃発。

肉体言語……ではなく、じっくりと腰を据えた話し合いの結果、じゃんけんで勝った方がハヤトと2人きりでデートをする、という結論に落ち着いた訳だ。

そしてその結果が――この燃え尽きているティアナ。

「なんで、あそこでパーを出したのかしらね……ふふふ……」

自分の右手を握ったり開いたりしながら、負のオーラを撒き散らして暗い笑みを浮かべるティアナ。

事務室で仕事をしている他の局員は、そのオーラに晒されて冷や汗や悪寒に苛まれていた。

そしてその地獄は、この数時間後に偶然なのはがここを訪れるまで続いたと言う。

◇◇◇◇◇

「えへへ～……」

ティアナが燃え尽きている一方。

ハヤトと別れたスバルは自室に戻り、一生懸命服を選んでいた。

鏡に向かって手に持った服を自分の体に当てるその頬は、だらしなく緩んでいる。

「こっちの方が、ハヤトは喜ぶかな？」

そう呟きながら彼女が手に取ったのは、普段はあまり着ないミニスカート。

上着は胸元が多少大きめに開いたカッターシャツだ。

「うー……ちょっと恥ずかしいかも」

自分で取っておきながら、恥ずかしそうに頬を染めるスバル。

「でもでも、折角2人っきりなんだから、ここでティアと差をつけておかないと……。頑張れあたし！」

しかしすぐに気を取り直して、自分に言い聞かせるように呟いて小さくガッツポーズをしてから、手に取った服に袖を通していく。そして程なく着替え終わってから、鏡に映る自分を見つめつつ、その場で軽く1回転。

穿きなれないスカートが風でふわりと持ち上がるが、下着が見える寸前までしか上がらず、結局中身は見えないまま重力に引かれて降りて行った。

「……ん。前にティアに教えて貰った『鉄壁のスカート』、ちゃんと覚えてるね」

スカートが必要以上に上がらないのを確認してから、スバルは満足そうに頷いた。

正直、男子連中からすれば全く嬉しくない技能なのだが、スカートを穿く女子には必須技なのだろう。スバルはその後も鏡に向かい、

何度か技能『鉄壁のスカート』が出来ているかを確認する。

「あ、でもハヤトってエッチだから、見えた方がいいのかな？」

しかし何度目かの確認の後で不意に思いついたのか、スバルがそんな事を口にする。

だが、直ぐに顔を真っ赤にして「そ、それは流石に無理！」と一生懸命に首を振った。

「う～～～……」

頬を赤くして鏡と向かい合いながら、悶々と唸るスバル。

すると、不意に彼女の部屋のドアがノックされた。

『おーい、スバル？』

「ぴゃあっ！？」

聞こえてきた声に、スバルが飛び上がって奇妙な声を出す。

『どうしたよ？　随分時間かかってるから、迎えに来たんだが』

「ハ、ハヤト！？　ご、ごごごめん！　今行くから、ちょっと待

って！！」

『あいよ～』

両手をわたわたと動かしながらドアを隔てたハヤトに答え、スバルは慌てて財布やマッハキャリバーを持って部屋を出る。

ドアを開ければ、目の前には廊下の壁に寄りかかって、少しだけ居心地悪そうに辺りを見ているハヤト。流石に、女子寮の廊下で待つのは照れるらしい。

「お、お待たせ！」

「おっせーぞ。何してたんだ」

「ごめんね、えと……色々準備に手間取っちゃって」

「そか……ん？」

「！」

軽い会話をする最中、ふとハヤトの視線が自分の服に向いたのを感じ、スバルの頬が熱くなる。

いつも彼と遊びに行く時は決して着ていなかった、女の子らしい服。

それなりで長い付き合いの中で、ハヤトに対しては初めて見せたかもしれないその格好に、彼がどんな反応を返すのか。スバルの胸中は期待半分、不安半分という感じで揺れていた。

「……へぇ」

「な、なに!?」

自分で着ておきながら、いざ視線が向けられると恥ずかしいようで、スバルはもじもじと身体を小さく捩らせながらハヤトの言葉を待つ。ハヤトはそんなスバルには頓着せず、暫く彼女を眺めてからポツリと感想を漏らした。

「そーゆーのも似合うな、スバルって」

「!!　ほ、ホント!?」

「おう。ぶっちゃけ意外なぐらい似合ってる」

「意外って失礼な……う～、でも、ありがと」

「ん？　あぁ」

中々失礼な物言いに一度頬を膨らませてから、それでもスバルは嬉しそうに微笑んだ。

お礼を言われるとは思っていなかったハヤトは一度きょとんとした顔になり、それからまぁいいかと頷く。

「それじゃ、さっさと出かけようぜ。時間は有限なんだし」

「そだね。えへへ……それじゃ、レッツゴー！」

「ってオイ！　ひっぱるな！　服が伸びるだろうが！」

服を誉められてテンションが有頂天なスバルは、ハヤトの襟首を掴むと彼の返事さえ聞かずに引き摺りながら入り口目掛けて走っていく。そして女子寮の廊下に、ドップラー効果を残したハヤトの悲鳴が響いた。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：高町なのは

「「行ってきます！」」

「はい。気をつけてね？」

元気良く手を振るエリオとキャロに、笑って手を振り返す。

「あんまり遅くならないうちに帰るんだよ？　夜の街は危ないからね？」

「「はいっ！」」

隣で心配そうな顔で繰り返すフェイトちゃんに、見えないように小さく苦笑する。相変わらず心配性なんだから、フェイトちゃんは。エリオもキャロも、もう子供じゃないっていうのに。

まぁ、そんなところもフェイトちゃんらしいんだけどね。

「気をつけてねーーっ！」

街に向かって歩いていく2人に、凄い勢いで手を振るフェイトちゃん。それを見て苦笑する2人に対して、私も軽く手を振る。

「あ、なのはさん！」

「？　あぁ、スバルとハヤト君もお出かけかな？」

「はい！」

2人が見えなくなったあたりで、次にハヤト君とスバルの2人がやってきた。

スバルは珍しく女の子らしい格好をしてて、何だか凄く嬉しそうだ。

「珍しいね、スバル。そんな可愛い格好してるなんて」

「え？　えへへ……可愛いですか？」

「うん。凄く似合ってる」

着ていた服を誉めてあげると、顔を真っ赤にして恥ずかしそうに微笑む。

うわぁ……何だろ、本当に凄く可愛い。お持ち帰りしたくなるよ。

「ハヤト君は……いつも通りだね」

「そりゃ、そんなに金ないですし」

「ハヤトは服よりゲームにお金かけてるもんね！」

「応よ！　その気になったら食費も削るぜ！」

自慢するようなことじゃ無いと思うけど……。

何でか胸を張るハヤト君に、フェイトちゃんと一緒に苦笑する。

「それにしても、２人だけで出かけるなんて珍しいね？」

「そうスか？　あー……でも、確かに六課に来てからは初めてかも知んないですね」

「前の部隊の時とかは、ちょくちょく2人で出かけたりしてたんですよ～」

「へぇ、そうなんだ」

ハヤト君達はいつでも3人一緒ってイメージあったから、ちょっと意外かも。

でもどうして今日は2人だけなんだろ？　今日はＦＷメンバーは全員お休みなのに……って、あ、そうか。

「2人とも、デート？」

「そうで――「あははは、違いますって。ちょっと遊びに行くだけですよ」――……うぅ」

私の問いにスバルが嬉しそうに答えたところで、ハヤト君が笑いながら否定してきた。

ハヤト君……私が言うのもなんだけど、それは酷いよ……。

ほら、スバルなんて凄くしょんぼりしちゃってるじゃない。

「ま、俺ら2人だけですし、デートっちゃデートかも知れませんけど」

「！」

ちょっと照れ臭そうにハヤト君がそう付け足すと、「ぱぁっ」って擬音が聞こえてくる位にスバルの顔が明るくなる。
やるね、ハヤト君。一度落としてから自分で上げるなんて。

「えへへっ、ハヤト～」

「何だよスバル、くっつくなって」

「いいじゃん別に」

「……変なやつ」

嬉しそうに自分の腕に抱きつくスバルを、ハヤト君は不思議そうな顔をして首を傾げている。
に、鈍いよハヤト君……。私でも分かるのに。
もしかしてワザとだったりするのかな？

「まぁいいや。それじゃ、そろそろ行かないと時間なんで」

「あ、うん。行ってらっしゃい、気をつけてね」

「うぃ～ッス」

「行ってきます、なのはさん！」

「ほら、急ぐぞスバル。乗り遅れたら洒落にならん」

「うん！」

そう言って歩いていく背中を、手を振って見送る。

スバルはハヤト君と腕を組んで、スキップしそうな勢いで走っていく。

青春って感じだなぁ。ちょっと羨ましいかも。

「……スバルとハヤトって、仲良いよね」

2人が見えなくなった辺りで、フェイトちゃんがポツリと呟く。

「そうだね。私達みたい」

「付き合ってるのかな？」

「それは……無いと思うよ」

楽しそうに呟くフェイトちゃんに、溜息を着きながら頭を横に振る。

だって……ねぇ？

「ハヤト君だし」

「……そだね」

なんとなく虚しい気分になって、フェイトちゃんと2人でスバルに同情しておいた。

頑張ってねスバル。応援してるから。

ｓｉｄｅ：高町なのは　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

一方その頃のティアナはと言えば……。

「ふ負フ……」

相変わらず黒い瘴気を吐き出しながら、延々と書類を片付けている。
事務室で一緒に仕事をしている他の局員は涙目だ。

（おい、誰か何とかしろよ）

（無理だっつーの！　近寄ったら呪われるぞ、確実に）

（うぅ……胃が痛い……）

近寄る事すら躊躇われる彼女に注意など出来る筈も無く、彼らはただ、一刻も早く自分の仕事を終わらせる為にパネルを叩く指の速度を上げることしか出来なかった。

「ふ負訃腐……」

（（（誰か、助けてくれ……））））

彼らの救世主となる高町なのはがココに来るまで、あと数時間。
ティアナの負のオーラに晒され続ける彼らにとって、それは地獄に等しい時間であった。
余談ではあるがこの翌日、ココに居たティアナ以外の全局員が原因不明の体調不良で休みを取ったと言う。

ｓｉｄｅ；―　了

if21話　『デート（？）と幼女と下水道　1』（後書き）

今回はちょっと短めでした。
どうも、ラモンです。

約2週間ぶりでこちらを更新しました。
お待たせしてすいません！
何だか完結させた事で燃え尽きてしまったようで、中々文章が思いつきませんでした。
なるべくティアナルートと被らないように文章を考えてたのもダメでしたね。
思いつかない思いつかない……。

という言い訳はさておき、スバルルート開始です。
ティアナルートと違って3人でお出かけではなく、2人っきりのデート！
次回は砂糖吐くような展開を予定しております。
特濃ブラックコーヒーを常備してお待ちくださいｗ

それではまた、次の話で。

if22話　『デート（？）と幼女と下水道　2』（前書き）

※更新遅くなって申し訳ないです。
スバルとハヤトの砂糖を吐きたくなるデート編、適当にお楽しみください。

if22話　『デート（？）と幼女と下水道　2』

さて、折角の全休の日に『デート』という名目で外に連れ出された俺なのだが。
……すいません、すでに色々とグロッキーです。ミッドに着いたばっかりだってのに、です。

「なぁ、おい。スバルよ」
「な～に～？」

俺の右腕に抱きついてるスバルに辟易しながら名前を呼べば、何でか知らんが無駄に上機嫌な声が返ってくる。

「歩きにくいから離れろって」
「い～じゃん別に～♪」
「良くねぇ。歩きにくいっつってんだろ」
「あたしは平気だも～ん」

何度目になるかわからないやり取りに、溜息が漏れる。
さっきから、何を言ってもこの調子で話にならねぇ。

普通に歩き辛いから止めて欲しいんだが……周りの視線も痛いし。

「離れろって、頼むから」

「嫌～」

「勘弁してくれ……」

俯いた顔を左手で覆いながら、げんなりして呟く。

いやね、俺だって男だし嬉しくない訳じゃ無いんだよ？　肘の辺りに当たる柔らかい感触とか、時々風に運ばれてくる良い匂いとか、ちょっと視線を下げると目に入ってくる結構な谷間とかさ。

けどそれ以上に、スバルのハイテンションぶりは疲れる。

いつもなら、適度なところでティアナが止めてくれるんだが……生憎とその抑え役が今日は居ない。となれば、スバルのテンションの上がり具合は留まるところを知らない訳で、俺の疲労も比例して積もっていくのだ。

「……やっぱ部屋で寝てりゃよかった」

同行を了承した数十分前の自分に憤りを覚えつつ、スバルに聞こえないように小さく小さく呟く俺であった。

とはいえ、別に俺は引き篭もりな訳じゃない。
街に出てきてしまえば、それなりでテンションも上がる。まぁ、結局レールウェイに乗ってる間中も人の右腕に抱きつきっぱなしだったスバルのテンションとは比べるべくも無いが。
ミッドの街中に入ってからのスバルは、雨の日の犬のようにテンションが天元突破。
目をキラキラさせながら、あっちこっちを見回してはキャーキャー騒いでいる。おのぼりさんかお前は、と小一時間ほど問い詰めてやりたいところだ。

「ほらハヤト、早くっ！」

「へいへい」

俺はといえば、気分はすっかり休日に妹の買い物に付き合わされた兄貴。
ちょっとは上がったテンションも、スバルの無駄なハイテンションに押されて落ちていく始末だ。
だってのに、スバルは相変わらずテンションを天元突破させたまま。体力の有り余ってるお前と、頭脳労働派の俺を一緒にするなっつーの。

「……で？　最初はどこ行くんだ？
まさかノープランで連れ出した訳じゃ無いだろ？」

「もっちろん！　最初は、ミッドのアイス屋さん巡りツアーだよ！」

「帰ります」

「ちょーっ！？」

わざわざ出てきたってのに、何が悲しくてそんな腹を下しそうなツアーをせないかんのじゃ。
もういい。この犬っ子は放っておいて、俺は中古ゲーム屋巡りをしようそうしよう。

「待って！　冗談だから待って！」

「……本当にぃ？」

「う〝……そ、その……2，3軒くらいならいい、よね？」

まぁ、そのぐらいなら許容範囲か。
さすがにミッドのアイス屋全部とかをガチで言ってたなら、本気で帰ってたぞ。
言動には気をつけましょう。

「うぅ……反省してます」

「んじゃまあ、さっさと行くか。時間は有限だしな」

「う、うんっ！」

スバルを促して、とりあえず記憶にある近場のアイス屋目指して歩き出す。

人の右腕を引き抜くような勢いで再び俺の腕に抱きついてきたスバルは……もういいや、放置しよう。

相手するの疲れた。

◇◇◇◇◇

その後、俺はスバルに引き摺り回されるようにして街中を巡る。

服屋に始まり、ゲーセン、本屋、デパート等など。

途中で昼食を採ったりはしたが、それ以外は殆ど歩き通しだ。体力が有り余ってるスバルならともかく、インドア派の俺には幾分辛い行程だった。

ともあれ、超ハイテンションのスバルに追随しその全行程を終えた俺は、今日の締めとしてスバルが予定していた、ミッドの海近辺にある公園に来ていた。勿論公園が目的なんじゃなく、そこに来ている移動店舗のアイス屋が目的なのだが。

「ふわぁ～～～～～……やっぱりここのアイスは見た目から素敵だぁ～～～」

「良かったな。だから涎を拭いて帰って来い。他の人の目が痛すぎる」

目をハートマークにしてヤバ気な表情のスバルを諌めるように、小さく声をかける――が。

「はぁぁぁぁぁ～～～～♪」

聞いてねぇし。

俺は6段重ねになったアイスを恍惚とした顔で見つめているスバルの襟首を掴み、近くにあるベンチへと引き摺っていく。

結構強めに引き摺ってるのに、6段重ねのアイスが微動だにしないようバランスを取るあたりは、流石と言うべきか、呆れておくべきなのか。

「ほら、ここに座っていい加減食べろ。溶けちまうぞ……ってもう半分食べてるし!?」

スバルを引き摺ってベンチまで来るのにかかった時間は僅かに数秒。

だというのに、奴の手に握られているアイスは、既に半分ほどが綺麗に無くなっていた。

いつ食べた？　つーか早すぎだろ。相変わらず食べる事に関してはエースオブエースだなコイツ。

「おいし～っ！」

「……よかったネ」

もはや突っ込む元気すら失せたので、適当に返しつつスバルの横に座り、自分の分のアイスを舐める。

「……うげ」

ちっ、やはり唐辛子アイスは失敗だったか。糞マズイ。
目新しいからって何でも試すモンじゃねーなと思いつつ、アイスの癖に何故か辛いそれを舐め続けていく。拷問か。
横を見れば、犬っ子は6段あったアイスの最後の1つを食べ終えたところ。早すぎるだろ常識で考えて。

「まっず……ん？」

ふと、スバルの鼻の頭にアイスがくっ付いてるのが視界に入った。
けれど本人は気付く様子もなく、嬉しそうにアイスを食べている。
子供かコイツは。
……子供なんだろうなぁ。

「スバル、ちょいこっち向け」
「え？　って、ひゃわっ！？」
スバルの顔をこっちに向けさせて、鼻の頭についているアイスを親指で拭う。
そんで、服で拭うのもアレなのでその親指を舐める。うむ、唐辛子アイスなんてゲテモノを食べた後だから、余計にアイスの甘さが身に染みるぜ。
「はわわわ……」
「……？　どうした、スバル」
親指を舐めていると、隣……っつーかスバルが顔を真っ赤にして妙な声を上げている。
今更何を恥ずかしがってるんだコイツは？
別に、今までだって何回かあったろうに、こんなこと。
「あうぅ……」
「何をそんなに恥ずかしがってんのお前？」
「ハ、ハヤトは平気なの？」

「ん？　何が？」

しどろもどろに喋りながら両腕をわたわたさせてるスバルに、俺は首を傾げる。

前に同じ事をした時は平気だったくせに、今日に限って何でこんなに恥ずかしがってんだ？　訳わからんなぁ。

まぁいいや。スバルの事だ、どーせ変な雑誌でも読んで影響されてるんだろ。似たようなこと前にもあったし。

「ハヤトって、時々天然の女ったらしになるよね」

「どんな言いがかりだ。女たらしになれてんなら、今頃彼女出来てるっちゅーねん」

中々傷つく嫌味を言ってくれるじゃないかスバル。

こちとら彼女いない暦＝年齢だぞ。女たらしなんて言葉、どっから出てくるんだ畜生。

あー、ちょっと涙出てきた。

「うー……自覚無しだから、タチ悪いよ……」

「うん？　何だって？」

「なんでもないよ～だ」

ボソボソとスバルが何かを呟いたので、思わず聞き返す。
けれど返ってきたのは惚けるような言葉。顔を見れば、何だか拗ねたような顔をしている。
……何なんだ？

「ま、いいや。それよっかスバル、この唐辛子アイス食わねぇ？すっげーマズイんだけど」

「いや、そんな美味しくないって分かってるのを渡されても……」

「俺は駄目だけど、お前ならいけるって！　大丈夫大丈夫！　やれば出来る！」

「いらないよぉ……」

無理矢理真っ赤なアイスを薦めると、泣きそうな顔で拒否するスバル。
ちっ、流石のアイス教信者でも、これは無理か……。仕方ない、自分で始末するとしよう。

「……辛い、マズイ。やっぱスバル食べて」

「いらないってば」

俺も泣きそうになりながら、仕方なく辛いアイスを舐める作業に

戻る。
　すると、スバルも特に喋ることも無くなったのか、暫くお互いに無言の時間が過ぎた。
　スバルが黙り込むなんてちょっと珍しいのだが、今の俺はそっちよりも目の前で自分が舐めている、罰ゲームにしか使えないようなアイスを処理する事が優先事項な訳で、あまり気にせず無心になってその作業を続けることにした。

ｓｉｄｅ：―

「……」

　隣で微妙な顔をしながらアイスを食べているハヤトに、声をかけようとして、何て言っていいのか分からなくて口を噤む。
　スバルは先程から、何度もそんな事を繰り返していた。
　聞きたいことも、言いたい事も決まってるのだが、それを口にしてしまう事に酷い不安を覚えているのだ。

　それを口にした後に、明確な返事が帰ってくる。それが堪らなく怖い。
　だから、先程からずっと同じような事を一人で繰り返している。

「……ぁぅ」

再び口を開こうとして、しかし、出てきたのは言葉にならない小さな声。
また何も言えなかった事に、スバルは自分に対する少しの落胆と、小さな安堵を覚える。
それは明確な返事を聞かなくて済んだことに対する安堵なのか、それとも別の何かに対する安堵なのか、それは彼女自身にもイマイチ判別の付かないところではあるのだが。

「……」

何も言えないまま、気付かれないようにハヤトの横顔へと視線を向ける。
ハヤトは厄介なアイスを、どうにかこうにか半分程片付けたところのようで、眉間に深い皺を寄せて唸っていた。
そんな彼を見て苦笑を浮かべながら、伝えたい言葉を、頭の中だけで彼へと放り投げる。

『あたしは、ハヤトの事が好き』

たったそれだけの、短い言葉。
言葉にしてしまえば、きっと1秒もかからずに言ってしまえるだろう。
けれど、その1秒に満たない言葉を口に出すのが、今のスバルには何より難しい。

あたしってこんなに臆病だったかなぁ？　などと思っている間にも、時間は無常に過ぎていく。
スバルが一人で悶々としている間にも、ハヤトは渋面のままアイスを片付けていってしまう。
これ以降の予定は立てていないので、ハヤトが食べ終えてしまえば後は隊舎に帰るだけ。そうしたら、折角のチャンスがふいになってしまう。さてどうしたものかと悩むスバルの目の前に、タイミング良くその光景が目に入ってきたのは、果たして偶然か必然か。

「あ……」

「ん？」

それを見つけたスバルが声を漏らし、その声にハヤトが反応して視線を上げ、彼女が見つめる先に視線を移す。
スバルが見つめる先にあったのは、どこでも見る事が出来るような、路上のアクセサリーショップ。
台の上に広げられたケースの中で、沢山のアクセサリーが日の光を反射して光っている。

「ハヤト、ちょっと行ってみようよ」

「え～……」

「いいから、ほら！」

目を輝かせてそこに行こうとするスバルに、ハヤトは残り少なくなったアイスを口に放り込みながら難色を示す。しかし、結局スバルに手を引かれるままに腰を上げ、彼女に引き摺られるようにして走り出す。

「おや、いらっしゃい」

そのアクセサリーショップの店主は、まだ年若い青年だった。とはいえ、ハヤトやスバルよりは年上で、おそらく２０代前半というところだろうか。

青年は走ってきた２人を見ると、陽気な笑みを浮かべて挨拶をする。

「君らはデートかな？」

「あー、いや「そうです！」……ヲイ」

青年の質問に否定を返そうとしたハヤトを遮って、スバルが嬉しそうに返事を返す。

そんな２人の様子に、青年は「まぁ適当に見ていってよ。安くしとくからさ」と笑うのだった。

『なぁ、何か見たいのあったのか？』

『うん。ちょっとね』

普段はこういうのに興味を示さないスバルの行動に、ハヤトが不思議そうな顔をしながら念話で尋ねた。

スバルはその問いに話半分で返しながら、一生懸命なにかを探していようで、そんな彼女に「訳わかんねー」と一人呟いた後、仕方ないと溜息をついてハヤトもケースに並ぶアクセサリーを眺め始める。

「へぇ、結構いいの揃ってますね」

「あぁ。これでも僕は装飾系の職人に弟子入りしててね、結構自信あるんだよ」

「そうなんスか」

「そうなんだよ。……ところで、本当に彼女さんじゃないの？」

「違いますって。友達ッスよ、友達」

「照れ隠しでよく聞く言葉だねぇ」

一生懸命に何かを選ぶスバルの横で、ハヤトは笑いながらからかってくる青年に疲れた声で返す。

暫くハヤトがそうしていると、不意にスバルが決心したように声を上げた。

「……これ！　これくださいっ！」

「はいどうも」

「ってオイオイ、スバル。それペアリングだぞ？」

「知ってるよ？　だから買うんだもん」

「はぁ？」

訳がわからないという顔のハヤトを無視して、スバルは同じデザインの銀の指輪を2つを青年に渡し、金額分の紙幣を渡してそれを受け取る。

「誰か渡す奴でもいんの？」

「いるよ～」

受け取ったスバルに訝しげな目を向けてハヤトが尋ねると、スバルは照れの混じった嬉しそうな顔で笑う。

そして、ペアリングを渡す――つまり好きな相手でもいたのかと驚いているハヤトの右手に、ペアリングの片方を握らせた。

「……へ？」

渡されたハヤトは、呆気にとられた顔で目を何度か瞬かせた後、まるで茹でた蟹のように顔を赤くする。
もちろん、渡したスバルの顔は、ハヤト以上に赤くなっていたのだが。

「え、ちょっ、待て。渡す相手って……俺？」

「……うん」

「は！？　え、何で！？」

渡された右手とスバルの顔を何度も交互に見ながら、彼にしては珍しく慌てに慌てて口を開く。
スバルはスバルで頭から煙でも出そうな程に顔を赤くして、そんな2人を見ている青年がニヤニヤと楽しそうに笑っているのだが、今のハヤトにはそれを気にする余裕さえない。

「おま、ペアリング渡す意味分かってるか？　付き合ってもらったお礼とかじゃねーんだぞ！？」

「し、知ってるよそれくらい！」

「じゃあ何で俺に！？　何？　からかってんの！？」

「そんな訳ないじゃん！」

「御二人さん、リングに名前でも彫ろうか？」

「「ちょっと黙っててください！」」

楽しげな笑みを浮かべて青年が言葉を挟むが、全く同じタイミングで２人に言われ、苦笑して引き下がる。

そして、２人が同時に口を開こうとした瞬間――。

『こちら、ライトニング０４。緊急事態につき、現場状況を報告します！』

「「！」」

２人のデバイスから、聞きなれたキャロの声が響く。

『サード・アベニューＦ－２３路地裏にてレリックと思しきケースを発見、ケースを持っていたらしき小さな女の子が１人……』

それは、休日の終わりを告げる通信。

通信を聞いたハヤトとスバルは、先程までの狼狽が嘘の様に表情を引き締め、それぞれのデバイスから聞こえてくる通信に耳を凝ら

すのだった。

side：―了

if22話　『デート（？）と幼女と下水道　2』（後書き）

リア充はち〇こがもげて死ぬといいよ。
どうも、ラモンです。

いや～、本当に更新が遅れて申し訳ありません。
中々筆が進まない上に、夏風邪というダブルパンチだったもので…
…はい、言い訳です、すみません。
そんな訳で、作者の夏風邪の一因（笑）となったデート編です。
本当は、もっと色々とデートの描写があったんですが……書いてて
イライラしたので削除しました。ええ、削除しましたとも。

スバルの告白（？）ですが……スバルならコレくらいストレートで、
さっさとしちゃうと思うんですよね。あくまで私見ですが。
まぁ、ハヤトの返事はまだ先ですけどw

次回からは下水道突入です。
ティアナルートとも、原作とも異なった展開にしたいですが……難
しいなぁ。
もしかしたら、次回以降でティアナルートでは出番の無かったゼス
トさんが出てくるかも！？　予定は無いですが（笑）

それではまた、次の話で。
皆さんも夏風邪には気をつけてくださいね。

if23話　『下水道攻防戦　1』（前書き）

※更新遅れて申し訳ないです。

if23話　『下水道攻防戦　1』

（……何のつもりなんだ？　スバルの奴は）

エリオとキャロの2人から通信で聞かされた場所に向かう途中、隣を走るスバルを見ながら考える。

そうして考えてる俺の右手には、さっきスバルから渡された銀色のペアリングがひとつ。

握っているそれを認識するだけで、走ってるからではなく頬が熱くなるような気がした。

（マジで分かってんのか？　ペアリング渡す意味）

ちなみに、だが。

他の地域ではどうだか知らないが、ミッドチルダにおいて『ペアリングを渡す』という行為は、一般的な告白と変わらない。

俺がよくやってるギャルゲーの告白シーンでも、ペアリングを渡して告白、というのが基本的な流れとして使われている位だ。

スバルだってミッド暮らしは長いんだし、いくら何でもそれを勘違いしてるとは思えない。

しかし、もし勘違いしていないなら、スバルが俺を……その、好きだという訳で。

正直まったく実感が湧かない。俺にとってのスバルは友達半分、妹半分みたいな存在だ。

そんな奴からいきなりそういう事をされて、戸惑わない奴が居る

だろうか？　いや居ない。

（……やめやめ。今は仕事を優先しよう）

混乱している思考を切り替える。

とりあえず今優先すべきはエリオとキャロ、それとティアナや隊長達と合流する事。

つまり、今はもう仕事の領域なのだ。私事を考えるべきではないだろう。

（レリックを持ってた少女、ね）

切り替えた思考で、キャロからの通信で得た情報を整理する。

保護された少女は６歳程度。レリックらしきケースを１つ引き摺っていた。それは少女の手首に嵌っていた手錠と鎖で繋がっており、もう一つケースがあったような痕跡が見れる……と。

つーことは、多分俺らはその女の子の護送かレリックの捜索、移動手段から考えたらレリック捜索を担当するだろうな。

助かったと思う反面、面倒だとも思う。折角の休日だったのになぁ。

「――いや、やっぱ助かったのかもな」

「ん？　何か言った？　ハヤト」

「んにゃ」

思考を締め括るような呟きをスバルに聞かれ、軽く首を振る。
どうやら思考の切り替えは上手く出来ていたようで、特に恥ずかしいとか、さっきまでみたいに混乱することは無かった。
……まぁ、全く何も感じなかったかと言われれば、そうでもないんだけど。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ２３話　『下水道攻防戦　１』

「エリオ、キャロ」

「あ、ハヤトさんにスバルさん！」

指定された場所に着いてみれば、どうやら俺達が一番乗りだったらしく、そこにはエリオとキャロ、そしてボロ布に包まって気を失っている少女しか居なかった。
俺はエリオ達から状況を聞きながら、気を失ってる子の隣に膝を付いて様子を見る。

「……」

とりあえず、呼吸は正常。転んだりしたのか多少の擦り傷はあるけど、見た感じ重大な外傷は無し。
専門じゃないから詳しくは分からないが、見る限りでは今すぐどうこうって訳では無さそうだ。

「レリックは？」

「あ、はい。一応私が封印しておきました」

「ん。上出来だな、偉いぞ。飴ちゃんをやろう」

「わぁ、ありがとうございます」

レリックの入ってるケースを両手で抱えているキャロに、懐から取り出した飴を放り投げる。
ちなみに今日のはオレンジ味だ。

「とりあえず、このまま待機して隊長達が来るのを待とう。
つっても、多分この子の護送かレリック捜索をやることになると思うから、全員準備だけはしとけよ～」

「「はい！」」

「うん！」

３人に軽い指示を出しておいてから、羽織っていた上着を女の子に掛けてやる。
肌寒いって訳でもないが、気を失っている時に体温を失うのは駄目って聞くしな。それ以前に、何か色々と見えそうでエリオが困ってたし。むっつりスケベめ。
え、俺？　俺は平気ですよ。ロリ属性ないもん。

◇◇◇◇◇

隊長達とティアナが着いたのは、俺とスバルが到着した１０分ぐらい後。
ティアナは着いた途端にエリオとキャロの手をとって「良くやったわ！」と妙に喜んでいた。
レリックが見つかったのが、そんなに嬉しかったんだろうか？

「うん、バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし……心配ないわ」

シャマル先生が女の子のバイタルを見ながら、安心したように息を吐く。
それを聞いてエリオとキャロが安心したように声をあげ、周囲を警戒していた俺とスバル、ティアナと高町隊長、ハラオウン隊長も

少しだけ緊張を解く。
最悪、この子そのものがレリックを餌とした罠である可能性もあった訳だから、まぁ当然だろう。

「良かった。でも、皆ごめんね？　折角のお休みだったのに」

少しだけ表情を和らげたハラオウン隊長が、眉尻を下げて俺達に謝る。
まぁ、多少は折角の休みなのに……という気持ちが無いでもないんだが、今回ばかりは助かったという気持ちが大きいので、他の皆と同じように「大丈夫ですよ」とだけ返しておいた。
それに、治安維持は俺らのお仕事。一応は休めた訳だし、文句を言うつもりは元から無いけどな。

「ケースとこの子はヘリで搬送するから、みんなは現場調査をお願い。
現場指揮はティアナ。ハヤト君は補佐をお願い出来る？」

「はい」

「了解です」

高町隊長の指示を受けて、俺とティアナは頷いて残りの3人を集めた。
その俺達の後ろでは、隊長達が女の子とケースの搬送について色々と話しているようだ。とりあえず、あちらは隊長達に任せておけ

ばいいだろう。
とりあえずは、あの子が運んできた――言葉は正しくないかも知れないが――レリックの片割れを探すのが先決。
そう頭で思考した時、少し焦りを帯びたフィニーノ陸士の通信越しの声が響く。

『ガジェット来ました！　地下水路に数機ずつの構成で総数１６……２０！
海上方面、１２機単位が５グループ！』

聞こえてきたのは、俺達がこれから向かうであろう下水道と、殆ど真逆方向の海上に展開したガジェットの報告。
どうやらもう一つのレリックは、下水道にあるって事で間違い無さそうだ。
となれば、下水のほうに隊長達が来て欲しい気もするが……海上からも来てるってことは、そっちには空戦魔導師である隊長達が行くのが妥当、か。ヘリの防衛は……シャマル先生がやってくれるのか？　うーん、どのみち手が足りない気がするな。
つっても、空戦が出来なきゃヘリ防衛も海上での戦闘も無理だし、困ったもんだ。

『ティアナ、ハヤト君』

「「はい」」

色々考えていると、不意に部隊長からの通信画面が開く。

何だろう、と思いつつその通信に応じて軽く背筋を正した。

『そっちにギンガ＝ナカジマ捜査官が合流するって言うてきたんやけど、かまへん？』

「ギンガさんですか！？」

「げっ……」

俺にとってはあまり聞きたくない名前に、思わず妙な声が喉から漏れた。

それに気付いた部隊長がちょっと驚いた顔をしたので、慌てて「何でもないッス」と首を振っておく。個人的感情はともかく、現状で戦力が増えるのはぶっちゃけ助かる。

……うん、嫌だけど仕方ない。

「助かります。それじゃあ、後はこっちで」

『うん。よろしくや』

「……うぃッス」

渋々ではあるが、それと悟られない程度に嫌そうな顔で頷いておく。

ギンガが来るのか……俺、ヘリの方に回れねーかなぁ。空飛べないから無理だろうなぁ。

会いたくねぇなぁ。いっそ殺るか？

『ほんなら、皆気をつけてな。何かあったら逐一報告してな？』

「了解です」

「わかりました」

部隊長との通信を負え、俺とティアナはスバル達の方に視線を戻す。

あーもー、ギンガもスバルも揃って悩みの種を蒔きやがって、厄介な姉妹だよ全く。

「全員、短い休みは堪能したわね？　……特にスバルは」

「あ、あはは。そ、それじゃあお仕事モードに切り替えて、しっかりやろー！」

「「はい！」」

テンション下がってる俺の横で、４人が下水に入る準備を始めているのが目に入った。

はぁ、と溜息を吐いてからその輪に加わる。配置は決まったんだし、今更ガタガタ言っても仕方ない。

……本当は凄く嫌なんだがな。

「それじゃあ、ちゃっちゃとやって早いトコ帰るとしましょうか」
「そだね。頑張っていこー！」
「はいはい。何でもいいから頑張れ」
「うん！」
「……随分と仲良いじゃない、２人とも？」
「いつも通りだと思うんですが、どうなんでしょうティアナさん」
よく分からないが、いきなりティアナにもの凄い形相で睨まれた。
なんだろう、今日は厄日か？

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

ハヤト達が下水に突入するのとほぼ同じ時刻。
彼らがいる場所から１ｋｍ程離れたビルの上にある電波塔の先端に、その少女は立っていた。
少女は何かを待つように目を閉じ、長い紫の髪を風に踊らせる。

『お嬢様』

「……」

そんな少女の顔の横に、小さなモニタが浮かぶ。
声をかけられた少女は聞こえてきたウーノの声に、ゆっくりと目を開いた。

『ヘリに確保されたケースとマテリアルは、妹達が回収します。お嬢様は、地下の方の回収をお願いしてもよろしいでしょうか？』

「ん……」

伺うようなウーノの言葉に、少女は小さく頷いて返す。
そこで初めて気付いたらしく、ウーノが少し意外そうな顔で彼女に尋ねる。

『騎士ゼストとアギト様は？』

「別行動」

『お一人、ですか？』

心配そうなウーノの問いを、少女は首を振って否定した。

「一人じゃ、ないよ」

囁くようにそう告げて、右手を軽く前に出す。

すると、右手を覆っているグローブに着けられた紫の宝玉が煌めき、虚空に漆黒の“穴”が現れた。

少女は表情を変えず、その穴に愛おしそうに頬を寄せて呟く。

「私には……“ガリュー”がいるから」

その言葉で得心がいったのだろう、ウーノは微笑んで小さく頭を下げる。

『失礼しました。協力が必要でしたら、お申し付け下さい。最優先で実行します』

「うん」

少女の頷きを確認してから、ウーノの映るモニタが閉じる。

それを横目に見ながら、少女――ルーテシア＝アルピーノは虚空に浮かぶ穴に語りかけた。

「行こうか。ガリュー」

その声に答える代わりに、穴が淡く紫色に発光する。
妖しく輝くその光を見た彼女は薄く微笑んで、自分の足元に魔法陣を展開させた。

「探し物を……見つけに」

呟きと共に紫の魔方陣が輝きを増した瞬間、少女の姿は空中へと溶けるように消えていく。
そして瞬きをし終わるかどうかの後、彼女はそこから間然に姿を消していた。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

「クロスファイアー……」

「アクセルシューター……」

「「シューートッッ！！」」

下水通路の中に俺とティアナの声が響き、同時に赤と橙、２つの弾幕が展開したガジェットに襲い掛かる。
展開した８機の縦に長い楕円形をしたガジェット群は、襲い来る弾幕に為す術なく撃ちぬかれ、次々に火花を上げて爆発して下水を巻き上げた。汚ねっ！

「スバル、エリオ！」

「「了解！」」

ティアナの合図で、スバルとエリオの２人が俺達の撃ち落したガジェット群の隙間を縫って、その向こう側に展開していた残りのガジェットに向かって突進。流れるような動作でその全てを撃墜していく。

「……ふぃ～」

通路の向こうで爆散するガジェットを眺めながら、ブレイブハートを肩に担いで息を吐く。

「とりあえず、この通路に居たのは今ので全部かしらね」

「だな。キャロ、レリック推定位置までは？」

ティアナと辺りを警戒しながら、ケリュケイオンで現在位置とレリックの推定位置を確認してくれているキャロに尋ねる。

「この先……あと少しです！」

「っし。ギンガと合流しないでさっさと行って帰るぞ！」

「……アンタ、本当にギンガさんが苦手なのね」

「苦手なんじゃない、奴とは敵同士なだけだ」

「意味わかんないから」

意味わからんことないだろ。

ギンガ……スバルの姉貴と俺とは、まさに犬猿の仲。不倶戴天の敵同士。

一目会ったその日から、敵意の華咲くこともあるということだ。

「……いや、本当に意味わかんないから」

「そんなガックリ肩落として言う事なくね？」

うんざりした顔で肩を落とすティアナに、何となく切ない気持ちになった。

なんだか知らないが、俺とギンガの関係性を聞くと皆同じ反応なんだよなぁ。こんだけ単純明快な関係だってのに。

「ハヤト、ギン姉のこと嫌いなの？」

「嫌いじゃないぞ。敵なだけで」

「「？？？」」

「エリオとキャロ、そんな「何言ってんのこの人？　病院送ったほうがよくね？」みたいな顔をするな。泣くぞ」

「……ティア、ハヤトがお馬鹿だよ？」

「正常運転（いつもどーり）でしょ」

おかしい。ＦＷチームは５人しかいないのに、その中で俺がハブられている。

ちくしょう！　先生に言いつけてやるからな！　全員揃って怒られるがいいさ！！

「先生って誰よ……」

「高町隊長かヴィータ副隊長かシグナム副隊長」

「……それって、むしろハヤトが怒られない？」

「僕も、そう思います……」

「わ、私も……」

なにこの孤立無援ワロタ。

余りにも場の空気が俺に対してアウェーなので、空気を仕切り直すように咳払いをひとつ。

「げふんげふん。そ、それじゃあ先に進むか！　早く回収して帰りたいしな！」

「誤魔化したわね」

「誤魔化したね」

「誤魔化しましたね」

「誤魔化したんですね」

「きゅくるー」

「お前らうっさいよ！」

ＦＷメンバー総出のツッコミに泣きそうになりながらそう叫んだ、その瞬間。

ドゴォォンッッ！！

「「「「「！？」」」」」

下水中に響きそうな爆砕音を立てて、俺たちの少し前の通路の壁が吹き飛ぶ。

さっきまでの緩んだ空気はどこへやら。全員が表情を引き締めて、その吹き飛んだ壁を見ながら自分のデバイスを構える。

まだガジェットが残ってたのか？　でも、ならこんなに近づかれるまで気付かないってのはおかしい。ロングアーチを通して、ガジェットの大体の位置はこっちが把握してるんだから。

「……先手必勝だ、1，2，3で仕掛けるぞ」

煙が晴れるのを待たず、全員に小さな声で指示を出し、ブレイブハートを握り締める。

相手が誰であれ、まずは先制攻撃をしてペースを握る。そのまま打倒できりゃ上出来だし、出来なくてもペースを握れば後の戦いが楽になるからな。

「1，2……3ッ！！」

合図と共に、煙の向こうに見えた人影に向けてスバルとエリオが突っ込み、ティアナと俺は援護射撃の準備をする。

スバルが猛スピードで煙を切り裂き、もうもうと立ち込めていた煙が晴れていく。果たして、その先に居たのは――。

「ギ、ギン姉っ！？」

「ギンガさん！？」

「え、ちょっ……スバル！？」

驚いた顔をした、バリアジャケット姿の紫が混じった青いロングヘアーの女――ギンガ＝ナカジマ。

その姿を確認したスバルが慌てて急ブレーキをかけ、同じく突っ込んでいたエリオも敵じゃないと分かって全力で停止する。ティアナは狙いをつけていた銃口を下ろし、キャロもフリードの口元に発生させていた炎の弾を掻き消す……が。

「死ねよやぁぁぁぁぁっっっっ！！！」

「「「「「ええええええええっ！？」」」」」

不倶戴天の敵を事故に見せかけて攻撃出来る絶好の機会を、この俺様が逃す訳も無い！

俺は展開していたアクセルシューター全てをギンガ目掛けて撃つ……ってあれ？

「な、何で撃てない！？」

撃ち出す筈だったアクセルシューターは、ピクリとも動かずに空中に止まったまま。

≪　フレンドリーファイアです。マスターハヤト　≫

慌てている俺の耳に聞こえてきたのは、何も無かったかのように平坦なブレイブハートの音声。

あ、あるぇ～？　フレンドリーファイア防止装置とか、ついてましたっけ？

いや、そりゃあ本気で撃つつもりは無かったけどさ。

≪　あちらのデバイスから味方の識別信号が出ていましたので、私の判断で発射を止めました　≫

何て優秀なデバイスだろう。

だが、今この瞬間にその優秀さを発揮して欲しくはなかったぜ！

「……ハヤト君」

「「……ハヤト」」

「「……ハヤトさん」」

ほら！　混乱が落ち着いたＦＷメンバーとギンガが凄い顔でこっち睨んでるよ！
ギンガとか両手をボキボキ鳴らしながらこっち近づいてるし！
やっぱあの時仕留めておくべきだったって！
ブレイブハート！　今からでも遅くない！　俺の身を守る為に撃たせてくれ！！
大丈夫、非殺傷設定だから気絶するくらいだし！！

《　マスターハヤト。やって良い事と悪い事の区別はつけるべきです　》

ブレイブハートにフツーに怒られた。何か凄い凹む。

「……ハヤト君」

「！！？」

俺がブレイブハートに意識を移した、ほんの一瞬。
その一瞬の間に、ギンガは俺の懐に潜り込み、身体を屈めながら右拳を握り締め、パンチを撃つ為に身体を限界まで捻りこんでいた。
馬鹿な！？　あの一瞬で、だとぉっ！？

「お仕事中にふざけたら……」

「ガ、ガード……ッ！！」

何が来るかは分かっている、だから身体を動かしてガードしなきゃ……。

頭では採るべき行動が分かっているのに、身体は俺の意思に反してのろのろとしか動かない。そんな俺の目の前で、ギンガは捻りに捻って蓄えた力の全てを、右拳に乗せて解放。俺の顎目掛けて、物凄いスピードで拳という牙を突き立てる。

「駄目でしょおおおおおおおっっっっ！！！！」

「ウイニング・ザ・レインボォォォォォッッ！！？？」

視界が下から上に猛スピードで移動し、脳が縦に揺さぶられる。

自分の体が宙に浮くのを感じながら、俺は最後に、以前見たボクシング漫画のフィニッシュブローを思い出しながら意識を手放した。

ギンガ＝ナカジマ、恐るべし……がくっ。

ｉｆ２３話　『下水道攻防戦　１』（後書き）

どうしてこうなった！　どうしてこうなった！
どうも、ラモンです。

てな訳で、ｉｆ２３話をお送りしました。
あれですねぇ、ティアナルートと同じ展開にならないように、かつ原作のストーリーから乖離しないように、というのは中々難しいです。

あ、ありのままに、コレを書いている時に起こったことを話すぜ！
“俺はシリアスストーリーを書いていたと思ったら、いつの間にかギャグストーリーを書いていた！”
な、何を言っているかわからねーと思うが、俺も訳がわからねー。
キャラが勝手に動き出したとか、天啓が降りてきたとか、そんなチャチなもんじゃ断じてねぇ！
もっと恐ろしい、ＳＳという地獄の片鱗を味わったぜ……。

……すいません。暑さで脳がやられたみたいです。
さて、次回はいよいよルーテシアご登場。ティアナルートと、どう差異をつけていくか……今から悩んでます。
もういっそ、ティアナルートと同じ展開にしようかなぁ……。
いやいや、それじゃあルート分けした意味ないし……。

……どうやら、次回更新も時間がかかりそうです。
余り期待せずに、まったりのんびりお待ちくださいませ。

それではまた、次の話で。

if24話　『下水道攻防戦　2』

side：―

「いきなり攻撃するなんて、相変わらず非常識だ……ねっ！！」

「知らねぇよ……っとぉっ！」

「もう、後で絶対お説教するんだか……らぁっ！」

「うっせぇこの脳筋……がっ！」

ギンガが右足を振り抜き、縦に長い楕円形をしたガジェット？型を3機纏めて蹴り飛ばす。

そのフォロースルーを補うように、隙を見せたギンガに迫るガジェットを、ハヤトの魔力弾が一つ残らず撃ち抜いていく。まるでダンスでも踊るかの如く、ハヤトとギンガはガジェットを一蹴しながらティアナ達を先導するように下水通路を駆ける。

彼らの後ろを歩くティアナ達の前には、蹴り飛ばされ撃ち抜かれ、鉄屑になったがガジェットが散乱しているだけ。

「……相変わらず、コンビネーションだけは抜群なのね」

その残骸を横目に走りながら、ティアナは呆れたように呟く。

2人のコンビネーションは、口喧嘩しているのに目を瞑れば熟練

コンビのソレと何ら変わりない。下手をすれば、ゴールデントリオと呼ばれたティアナ、スバルと一緒に闘っている時よりも、動きにキレがあるようにさえ見える。

「えと、ティアさん」

「何？」

「ギンガさんとハヤトさんって、仲、悪いんですか？」

前方で暴れまわっている2人を見ながら、キャロが心配そうな顔でティアナに尋ねる。

その問いに、ティアナは溜息を返しながら口を開く。

「悪いって言うより、ハヤトが一方的にギンガさんの事が苦手なのよ。

ギンガさんって結構世話焼きでね？　ハヤトは性格がアレだから、何だかんだって注意されたりするの。

ハヤトはそれが嫌で嫌でしょうがないみたい」

「……何だか、子供みたいですね」

「子供なのよ」

「あ、あはは……」

もう一度深い溜息を吐きながら、ティアナは隣を走るキャロに苦笑する。

「でも、凄いですよ……」

一方エリオは、ガジェットを蹴散らす2人に憧憬の眼差しを向けて呟く。

その呟きに少しだけ誇らしげな気持ちになりながら、ティアナは思いを巡らせた。

ハヤトは、射撃型としての実力は高くない。だがその代わり、フォローの上手さがずば抜けて高いのだ。

一人なら絶対に出来てしまうような隙から、本人や周りさえ認識していないような僅かな隙……そういった、大きなところから小さなところまでの全てを、ハヤトは完璧にフォローしてくれる。

ティアナ達が9割やった後の、残りの1割を補完する……と言えばわかりやすいだろうか？

とにかく、ある意味ハヤトという人間は貴重な人材なのだ。

前衛1人に後衛2人という、微妙な戦力バランスであるこの3人がゴールデントリオと呼ばれる由縁は、ハヤトのそのフォローに因る部分が大きい。そんなハヤトが、突破力においてはスバルさえも上回るギンガと組めばどうなるか。

その結果は今、目の前に広がるガジェットの残骸だ。自分とスバルの3人でやれば近いことは出来ると思う……が、少なくとも自分と2人だけではこうはならないだろう。スバルでもきっと同じだ。

そういう意味で、ギンガとハヤトの2人はコンビの理想像と言えるかも知れない……。

「……なんて、ね」

自分で考えておきながら、ティアナはそこに小さな嫉妬を覚え、そんな自分に苦笑する。

その時を狙いすましたかのように、ガジェット群の奥から巨大な球――ガジェット?型が姿を表し、先行するギンガとハヤトの2人を叩かんと、その長く太いアームを伸ばす。

「脳筋じゃないもん、失礼……なっ！」

「何でも力づくで解決すんだから、間違ってないだろ……っと！」

「脳筋って言う方が脳筋なんだ……よっ！」

「俺はお前より頭いいっつー……のぉっ！

アームは下水通路の壁を砕き、通路の手摺りを引き千切っていく。だが、それは2人を捉えることは出来ない。ギンガもハヤトも、アームをかわしながら器用に口喧嘩を続けている。

それに呆れながら、流石にフォローしなければとティアナ達がデバイスと構えた――その瞬間。

「ああくそっっ！！」

「ああもうっっ！！」

「「喋ってるんだから、邪魔するなっっ！！！」」

彼女達の目の前で、ギンガとハヤトが殆ど同時に？型のアームを掻い潜り、襲い掛かる。

ギンガが？型の巨体に左手を突き刺してその巨体に穴を空け、左手を抜いた瞬間、今度はハヤトが間髪入れずにその穴にブレイブハートの切っ先を突っ込み、中に向かって全力の砲撃を叩き込む。

下水に展開したガジェット群の最後を務める個体だった？型ガジェットは、哀れ抵抗らしい抵抗も、見せ場らしい見せ場も与えられずに爆発し、一瞬で物言わぬ鉄屑へと変わり果てた。

「「「……」」」

ある意味信じられない光景を目にしたティアナ、エリオ、キャロの３人は呆然とそれを眺めつつ、引き攣った笑いを浮かべることしか出来なかった。まぁ、スバルだけはその光景を見て「さっすがギン姉にハヤト！」と大喜びしていたようだが。

ｓｉｄｅ：―　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

「……つ、疲れた……」

下水通路を抜けた先、レリックの推定位置とされている広い空間の片隅で死んでいる人間が一人。
言わずもがな、俺である。

「体力馬鹿に合わせて、頑張りすぎた……げふぅ」

「た、体力馬鹿じゃないわよっ！　ハヤト君が体力無さ過ぎなの！」

「アレだけ動いて、息一つ乱れてねぇ時点で……体力馬鹿だろ……うぉぉ、明日ぜってー筋肉痛だ」

体力もだが、魔力も結構カラに近い。
畜生、ギンガと組むといつもこんなんだ……。何かやりやすいから、つい調子にのって張り切って最終的にぶっ倒れる。いつものパターンなんだから、いい加減学習しろよ俺。
くそっ！　それもこれも全部、青髪体力馬鹿脳筋巨乳健康優良児が悪いんだ。

「し、失礼だよハヤト君！　そこに座りなさい！　お説教です！」

「いぃ～やぁ～でぇ～すぅ～。いいから早くレリック捜索してください～。任務中なんですからぁ～。
それともギンガ＝ナカジマ陸曹殿はぁ～、任務を放棄してでも俺に説教したいんですかぁ～？」

「ハ、ハヤト君だって休んでるじゃない！」

「俺はぁ～、現場指揮官のティアナに休んで警戒してろって言われてるんですぅ～。
ちゃんと警戒してるんでぇ～、休んでるわけじゃないですぅ～」

「ぐぬぬ……減らず口を……」

通路の上に大の字に寝転がりながらギンガを小馬鹿にすると、真っ赤になってプルプル震えだした。
とてもいい気味なので、少しだけ疲れが取れたような気がする。
気がするだけで、正直指一本動かせんのだが。

「レ、レリックの回収が終わったら、お説教だからねっ！」

「はいはいそうですかぁ～、ギンガ＝ナカジマ陸曹殿は真面目ちゃんですねぇ～」

「～～～っ！！」

「ギ、ギンガさん！　こっちを手伝って貰えますか！？」

どうやらギンガの我慢が限界になったのを察したらしく、ティアナが慌ててギンガの腕を引っ張って俺から遠くの場所へと引き摺っていく。何かギャーギャー俺に向かって喚いていたが無視。どうせアレだろ、後でお説教だから逃げるなーとか言ってるんだろう。

奴の言いそうなことなど、全部マルっとお見通しだ！

「……えと、ハヤトさん？」

「んー、何だ？　キャロ」

ニヤニヤ笑いながら連れて行かれたギンガの方を見ていたら、ちょうど頭の上あたりからキャロの声がする。

視線を動かして頭上を見れば、キャロが心配そうな顔で俺の顔を覗き込んでいた。その隣には、フリードが暢気な顔して浮かんでいた。フリードいいな、何か凄く癒される、モフモフしたい。

「大丈夫ですか？　回復魔法とか、必要ですか？」

「へーきへーき。ちょっと休んでれば復活するから、放置プレイしといて。

それよりゴメンな？　レリック捜索混ざれないで」

「そ、そんなの全然です！

ハヤトさんとギンガさんのお陰で、私達は元気一杯ですから！

ね、フリード？」

「きゅくる～」

何て良い子なんだろう。おいちゃん涙出てきたよ。
この可愛らしさの1億分の1でもギンガに備わってればなぁ……
なんて思いつつ、流石に寝転がってるのも格好悪いと思って身体を起こす。
うぅ、やっぱまだ辛いか。すっげー体ダルい。

「とりあえず、俺はここで辺りの警戒してるから、キャロはエリオと一緒に頑張って探してくれ。
あぁ、気をつけて探せよ？　ガジェットは全部片付けたと思うけど、新手がくるかも知れないし」

「は、はいっ！　頑張ります！」

ダルい身体を動かして、キャロの腕をポンポンと叩いてやる。
そうすると、キャロは何だか嬉しそうに頬を染めながら笑って、こっちに手を振りながら走っていく。
……転ぶなよー、下水塗れになると臭いぞー。何て思いながらその背中を見送り、疲れを吐き出すようにもう一度深呼吸する。

「ハ～ヤトッ！」

「ん、おぉ……スバルか」

そうしていると、今度はスバルがニコニコしながらこっちに寄ってきた。

途端、ダルさとかはどっかに行って、代わりにさっきのやり取りを思い出して何となく恥ずかしくなる。まぁ、それは俺だけみたいで、スバルの方は何が楽しいのか満面の笑みで、座っている俺の横にやってくる。

うーむ……妙に気恥ずかしい。くそ、何を意識してるんだ俺。相手はスバルだぞ！　落ち着け！　まだ慌てるような時間じゃない……と思いたいな！

「あー、えーと、どうした？」

絶賛混乱中の頭で色々とネタを連発しつつ、表情だけはいつも通りに取り繕って話しかける。

「久しぶりでギン姉とコンビだったから、疲れてるかなーって思ってさ」

「あぁ……それなら平気だ。もうちょい休んでたら、とりあえず動けると思う」

「そっか、よかった」

大丈夫だとアピールするように右腕をグルグルと回せば、安心したようにスバルが笑う。

その笑顔を見て不覚にも胸が高鳴り、自分の単純さにちょっとだ

け自己嫌悪する。いや、意識するなってのは無理だと思うけどさ、こんな簡単にスバルを「そういう目」で見れる自分の現金さが嫌っていうか何ていうか……。

「……はぁぁぁ」

「？　どしたの？」

「……何でもねーよ」

人がこんだけ悩んでるっつーのに、その元凶は素知らぬ顔をしてやがる。

くそ、何かムカつくなぁ。

「にゃっ？」

「……」

「ハ、ハヤヒョ？」

ムカつきに任せて、腕を伸ばしてスバルの頬を横に引っ張る。

そうすると、スバルはきょとんとした顔をしてから、マヌケな発音で俺の名前を呼ぶ。よし、少し気持ちが落ち着いた気がしないでもない。とりあえず暫くはこのまま引っ張っていよう。俺様をムダに悩ませた罰だ。

「い、いひゃいよ？」

「痛いように引っ張ってるからな」

「にゃんで～？」

「何となく。いいから引っ張られてろ」

「いひゃだよ～……」

嫌だと言いつつ、特に逃げようとはしないスバル。

それどころか、ちょっと嬉しそうにしてるではないか。何この子ドMなの？

長い付き合いだったが知らなかったＺＥ！

……駄目だ、何かテンションがおかしい。俺らしくねぇ。

ちょっとガチで落ち着こう。

「ふぅ……」

賢者モードみたいな溜息を吐いて、目を瞑る。

落ち着け俺。今は仕事中、余計なことを考えるな。優先すべきはレリックの回収であって、スバルから貰ったペアリングの意味とか返事をどうするとか、もし告白ならどうしようとかじゃない。

そーゆーのは、レリックを回収して帰ってからじっくり考えた方がいいな。

「……よし」

「ど、どうひたの？」

「気にするな。こっちの話だ」

頬を引っ張られたまま聞いてくるスバルに頭を横に振って答え、頬を引っ張っていた手を離して立ち上がる。

「……っと」

けどやっぱりまだ疲労が足に残っていたみたいで、膝が崩れて倒れそうになってしまう。

やばい、と思ったのも束の間。直ぐに足を踏ん張ってバランスを取ろうとする……が、やっぱりまだバランスが悪いので、何かを掴もうと右手を伸ばし、最初に手に触った物を思い切り掴む。

――――もにっ。

「ひゃあんっ」

「ん？」

手に伝わってきた柔らかい感触と、妙な声を出したスバルに首を捻りながらも、とりあえず掴んだものを軸に何とかバランスを取り直す。今度は膝が崩れることもなく、ちゃんと立つことが出来た。

「いやー、危うくすっ転ぶとこだった……ぜ……」

情けなさを誤魔化すようにスバルに苦笑を向け、そのまま思い切り絶句する。

原因は、バランスを取る為に何かを掴んだ俺の右手。

「えっと……」

「あわわ、はわわわわわわ……」

俺の右手が掴んでいるのは……アレです、俗に言うおっぱいです。

おぉ、そーいやこうやって触るのって初めてかも知れん。へー、結構柔らかいんですねぇ……などと、思考停止状態でも、ムダに冷静な脳の一部が命じるままに右手を動かして、その感触を堪能しておく。

え？　いいのかって？　いや別にもう何でも良いよ。どうせこの後の展開は分かってるし。

「ハ、ハ……」

「お前って、意外と大きかったのな」

辞世の言葉は、とりあえず俺らしい言葉で。

「ハヤトの……っ！」

真っ赤になったスバルが、恐ろしい速度で右手を動かした。

――ここからは、この間とある動画サイトで見た実況風にお伝えしよう。

「ハヤトの……っ！！」

「うおぅっ！？」

ナカジマがぁ！！！　（俺を）捕まえてぇ！！！

「馬鹿ぁぁぁぁあああああっっっっ！！！！！」

「ぎゃあああああっっ！！」

ナカジマがぁ！！！　画面端ぃぃぃぃっっ！！！

「ソ、ソニックk……」

「逃いぃげぇぇるぅぅなぁぁぁぁっっ！！」

ソニックムーブを読んでぇ！！！

「ハヤトのっ、えっちぃぃぃっっ！！！」

「おごべらっ！？」

まだ入るぅっ！！！

「ウィング、ローーーードッッ！！」

ナカジマがぁっ！！！　近づいてぇっ！！！

「エロエロ魔神皇帝ぇぇぇっっっっ！！！」

「締めはビンタですかぁぁぁぁっっ！？」

ナカジマが決めたぁぁーーっっ！！！

「……ナ、ナイスコンビネーション」

襟首を掴んでからの投げ、右ストレート、左フックで俺を浮かせて、ラストに全力ビンタ。

本物の格闘家顔負けの見事なコンビネーションに、俺は吹っ飛ばされながらいっそ清々しい気持ちになっていた。ふっ、随分と成長したな、スバル。

……いや、別に胸の話じゃないよ？　本当だよ。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「……？」

その光景を見たルーテシアは、不思議そうに首を傾けた。

彼女の目の前では、青い髪の少女が、金髪の少年をボコボコにしている。スカリエッティのところで見た映像で、彼らが管理局員だという事は分かっているのだが……。

「……仲間割れ？」

ここに居るということは、レリックを回収しにきたのだろう。
だというのに、仲間割れをするとも思えないが、事実として少女は少年に全力で攻撃を仕掛けている。

「あ……」

そうして考えているうちに、少女が全力で放ったビンタが少年の頬を捉え、少年が何かを叫びながら空中でクルクルと錐揉み回転をしながら地面へと落ちていく。

「……」

あれは痛そうだなと思いながら、ルーテシアは気配を殺したまま意識を他の局員達へと向ける。
桃髪の少女と赤毛の少年は、少し遠くを探している。橙色の髪の少女と、紫の混じった青いロングヘアーの女性は、２人１組でルーテシアからは見えない場所へと向かって行ったのを確認した。

後は、彼らがレリックを見つけたところで隙を突いてレリックを奪取して離脱。
それがルーテシアの立てた、今回のレリック回収に際する計画だ。

「……今度は、当たりだといいな」

祈るようにルーテシアが胸の前で手を握り締めて呟く。

「あ、ありましたーっ！」

「！」

その呟きとほぼ同時、彼女の呟きが終わるかどうかの瞬間に、ルーテシアの耳に桃色の髪をした少女の発したレリック発見の報せが届いた。

「……ガリュー」

ルーテシアはそれに機敏に、しかし焦らず反応して、何者かの名前を呼ぶ。

その声に対する答えは無かった。だが、答えよりも雄弁な音がルーテシアの耳朶を揺らす。

「お願い」

辺りに響く音と、戸惑う少女達を聞きながら、ルーテシアはもう一度だけ呟く。

答えの変わりに再び聞こえた音は、小さな悲鳴と、自分の目の前にケースが転がってくる乾いた金属音だった。

ｓｉｄｅ：―　了

if24話　『下水道攻防戦　2』（後書き）

……悪ふざけが過ぎたかも知れないなぁ。
どうも、ラモンです。

今回もあんまりストーリーが進まなかった気がします。
ノリと勢いで書くとロクな事になりませんね……反省してます。
でも、次回からシリアスなんで『六課の休日』編最後の悪ふざけと思って見逃してくれると、作者がフライング土下座衛門23世を決めるぐらい喜びます。

ちなみに、ナカジマがぁ！！！　の元ネタは『ウメハラ　画面端』でググると分かります。

さて、次回からはややシリアス。
ルーテシア、ガリュー対FWチームです。
スバルルートはどういう風に決着つけようか、のんびり考えてやっていこうと思っとります。

それではまた、次の話で。

if25話　『下水道攻防戦　3』

side：―

その攻防は、その場に居る殆どの人間が反応出来ずに終わった。
キャロがレリックを発見し、「ありました」と大声で報告。その声に全員の緊張が一瞬緩む。
そこで、突如として周辺に響き始めた金属を蹴るような声。

「何、この音？」

辺りを見回しながら、ティアナが訝しげに呟く。
そうしている間にも音の間隔は短くなり、金属を蹴る音からパシャパシャと水を切る音へと変わり、更に音の間隔を短くしていく。
そして最後に2度、大きく金属を蹴る音がした直後、“それ”がハヤトの視界に映った。

「……っ！」

キャロの前方上空、そこに薄っすらとだが人影のような物が浮かぶ。
とはいえ、ハヤトはそこに誰かが居るのを認識できた訳ではない。
そこの空間が微妙に歪んでいて、それが人型に見えたからそう思うだけだ。実際ハヤト達の目に見えていたのは、紫色に光る蟲の羽ら

しきモノだけ。
けれど、ハヤト達にそれが何なのかを思考する暇は無かった。

「キャロッッ！！！」

人影をハヤト達が認識した瞬間には、それの前に４つの黒い魔力の塊みたいな物がが浮かんでいた。
どう見ても対象を撃ち抜く射撃系の魔法。そして、その射線上に居るのは――レリックのケースを持ったキャロ。
そう認識した瞬間、ハヤトが殆ど反射的にキャロの名前を叫んだが、あまりにも遅い。

「――ちぃっ！」

彼の声にキャロが反応するよりも、ハヤト達全員が動き出すよりも早く、人影の前に浮かんだ魔力弾が撃ち出されてキャロの近くに着弾。小柄な彼女の身体を爆風で吹き飛ばす。
それを見せ付けられながら、ハヤトが舌打ちと共にキャロの方へ走り出す。
ハヤトの隣に居たスバルも同時に駆け出し、ハヤトとは逆に人影目掛けてローラーを回転させて向かっていった。

「でやあああっっ！！」

そしてキャロの最も近くに居たエリオは、裂帛の気合と共に人影へと肉薄、ストラーダでソレを一閃する。
鋭く大きな音が響き、エリオの攻撃が当たったことを知らせる。
だが、人影とて黙ってやられるばかりではなく、反撃として放たれた一閃が彼の左頬を撫でるように走り、空中に赤い水を躍らせた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ２５話　『下水道攻防戦　３』

「くっ……！」

「エリオ君っ！？」

自分の前に降り立つエリオの頬に流れる血を見て、キャロが声を上げて駆け寄る。
けれど、エリオはそれには答えずに、彼女を庇うように腕を広げて前を睨む。

「エリオ、キャロ。大丈夫か！？」

丁度そのタイミングでハヤトもキャロの側へと辿り着き、エリオ

と並んで彼女を守るように、３人とは逆側へと降り立った人影の前に立ちはだかる。

「「「……」」」

呼吸を整えるように、人影とエリオ、ハヤトの３人が睨みあう。
すると、景色が歪んでいるように見えていた人影が少しずつ削れ、その姿が露になっていく。

――現れたのは、全身を黒い甲冑のようなモノで覆われた、昆虫を彷彿とさせる姿の人型。
その顔の中心にある４つの赤い瞳が、ハヤト達を威嚇するように妖しく煌いている。

「黒いボディに真っ赤な目、そしてその姿……てつを！　てつをじゃないか！」

その姿にどこぞの変身ヒーローを思い出したのか、ハヤトが今までの緊迫した表情はどこへやら、目を輝かせて声を上げた。
しかし悲しいかな。今この場にそのネタを理解出来る人間は彼以外におらず、結果として、少し興奮気味な彼の言葉に返ってきたのは、緊迫した雰囲気をぶち壊されてどうしたらいいのか分からない、という顔をしたエリオとキャロの沈黙と、恐らくは敵であろう相対した相手からの冷たい視線だった。

「……ごめん。悪かった」

「い、いえ……」

「えと、お知り合いですか？」

その沈黙と視線に耐えられなくなって、渋い表情でハヤトが謝る。

エリオは何とも言えない表情でそれに答え、キャロは少々ズレた質問を投げかけた。その質問に「違います、すいません」と情けなく謝って、もう一度黒い甲冑に覆われた敵と睨みあう。

「……？」

その時キャロの耳が、後ろから聞こえてきた小さな水音と、何かが擦れ合う音を捉える。

誰も居なかった筈の場所に誰が……とキャロが振り返る。すると、そこには先程の爆風でキャロが手放してしまったレリックのケースを抱えた、腰まで届く長い紫銀の髪の少女。

「あ……っ！」

その手からレリックを取り替えそうと、キャロが慌てて少女の方へと駆け寄っていく。

「……邪魔」

少女はそんなキャロを冷たく眺め、小さく呟いて左手を彼女に向ける。

驚くキャロを余所に、その左手に紫色の魔力が集束されていき、それが一気に吐き出された。

それは碌な防御も出来ないキャロを吹き飛ばす――筈だった。だが。

「っぶねーだろ！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

少女の手から紫の魔力が放たれる瞬間、ハヤトが逆手に持ったブレイブハートの切っ先がキャロを守るように突き出され、真紅のバリアが広がり、紫色の魔力の奔流を受け止める。

「……」

少女は自分の攻撃が防がれると思っていなかったのか、紫色の魔力攻撃が消えた後も、罅一つ入らずに輝いている真紅のバリアに、少しだけ目を丸くする。そのバリアを張った本人であるハヤトは少女の攻撃が止んだのを確認し、キャロを守るようにエリオと共に彼女を挟んで背中合わせに立ち、ブレイブハートの切っ先を少女に突きつけて口を開いた。

「そのケース、渡してもらっていいか？」

「……」

しかし少女はハヤトの問いを無視して踵を返し、歩き出す。

「ちょ、待てコラ！」

「！！」

ハヤトが少女の後を追おうとしたのを見て、黒い人型が地面を蹴る。

人型は睨み合っていたエリオの隣を高速で通り過ぎ、ハヤトに襲い掛かろうと肉薄した。

「はあああっ！！」

しかし、それをさせまいと青い髪の少女――スバルが人型の進路に割り込むような形で蹴りを放つ。

横からの急襲に、それでも人型はスピードを落とす事無く彼女の蹴りを難なく回避、再びハヤトへ迫ろうと前を向き――今度こそ、その歩みを止めるに至った。

「やあああああっ！！」

妹の攻撃に合わせ、人型の前に回り込んでいたギンガの拳。
それは人型が意識をスバルから前方に戻した瞬間に襲い掛かり、ガードした人型の身体を僅かながら宙に浮かせる程の衝撃で、その侵攻を強制的にストップさせた。
そのまま2人は相対し、人型の横と後ろを囲むようにエリオとスバル、キャロが立つ。

「待てって言ってるだろ！」

「……っ」

その間にハヤトは少女に追いつき、彼女の肩を掴んで引き止める。
少し力が入ってしまったのか、引き止められた瞬間、少女が少しだけ声を漏らした。

「っと、悪い。けどな、それはこっちが先に見つけたモンだ。俺らに断りも無く持って行くってのは、マナー違反じゃないか？」

「……持ってく。それじゃ」

「いや、別に断ったら持って行って良いよって話じゃねーから」

「あうっ」

反射的にツッコミながら少女の頭を叩くハヤト。

「あ、悪い。ついクセで」

「……」

思わず叩いてしまった事を謝るハヤトを、少女はレリックのケースを抱えたまま恨みがましい瞳で見上げ、見つめられたハヤトは気まずそうに「ごめんよぅ」と呟いて視線を逸らす。

後ろではスバル達が緊張感たっぷりに睨み合っているのに対し、この2人の間には随分と間の抜けた空気が漂っていた。

だが、その空気を変えるように、少女の首元に橙色の魔力刃が唐突に現れ、押し付けられる。

「あ……」

「ごめんね、乱暴で。そこの馬鹿がちゃんとやってれば、もうちょっと穏便にいけたんだけど」

「馬鹿と申したか」

「事実でしょう、この馬鹿。ふざけるにしても、ＴＰＯを考えなさいよね」

「ごめんなさい」

そんな風にコントのようなやりとりをしながらも、２人の視線は少女から離れない。
２人とも何時でも動けるように構えつつ、警戒したままデバイスを構えていた。

「ほら、それ渡せ。爆発とかしたら困るだろ？」

「……いや」

しかし、その状況でも少女は頑としてケースを渡そうとはせず、ケースを抱えたまま俯いて首を振る。

「何か訳があるなら聞いてやるから、とりあえずそれを――」

《《Ｃａｕｔｉｏｎ！！》》

「「っ！？」」

彼女の腕をケースから外そうとハヤトが手を伸ばした瞬間、クロスミラージュとブレイブハートから同時に警告が飛ぶ。

「スターレンゲホイルッッ！！！」

魔力刃を構えるティアナと、ブレイブハートの切っ先を少女に向けていたハヤトの2人がそれを聞き、何かアクションを起こすよりも早く聞きなれない声が響き、耳を劈く爆音と、目を焼くような閃光が辺りを包んだ。

ｓｉｄｅ：―

「……くそっ」

閃光と爆音が響く中で薄目を開け、レリックを確保してる少女の方を見る。

俺達とは違って、落ち着き払った様子で目を瞑り、耳を塞いでじっとしているところを見ると、どうやらこの閃光弾を撃ったのはあの子の仲間で間違いなさそうだ。

「く……」

「このっ……」

閃光と音が収まった瞬間、耳を押さえていた手を離してもう一度

ブレイブハートの切っ先を少女に向ける。
少女の近くに居たティアナも、同じようにクロスミラージュを構えた――が。

「っ！？　きゃあああっ！！」

「うおぁっ！？」

横合いから突進してきた現れた黒い奴に、ティアナが反応する間も無く蹴り飛ばされ、玉突き事故みたいな形で俺にぶつかる。
くそっ！　スバル達に任せてたから、あいつの存在忘れてた！
飛ばされてきたティアナを受け止めながら、自分の迂闊さに舌打ちする。アレだけでかい規模の閃光弾だ、普通に考えりゃスバル達も俺達と同じ状況になるって分かるだろうに。閃光弾がいきなりすぎて、ちょっと混乱してたか。

「この……っ！」

「っ！」

反省もそこそこに、俺とティアナはすぐさま体勢を立て直し、それぞれ黒い奴と少女にデバイスを向けて構え、状況を頭の中で整理する。
数の上ではこっちが有利。だが、相手は何人いるか分からないし、何よりレリックはあの子の手の中だ。
あっちのお仲間がどんな奴か分からないが、ここは一気に全員で

行って無理矢理レリックのケースを回収、その後で逃げるってのが最良か……？

「ったくもー。あたし達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ、ルールーもガリューも」

そこまで考えたところで、俺達の左上の方。天井付近から、そんな言葉と共に小さな影が降りてくる。

降りてきた小さな影が少女の近くまでやってくると、ここに備え付けられた淡い電灯によって、その姿が見えた。

大きさは随分と小さく、リインフォース曹長と同じくらい。つまり、ユニゾンデバイスのようだ。

燃えるような赤髪に、水着みたいな服――騎士甲冑か？――を着込んでいて、目つきやらなんやらは随分と生意気そう。

ああいう奴を泣かせると楽しいんだよなぁ……じゃなくて。

小さなお仲間を観察している間に、スバル達４人が俺とティアナの回りに集合してくる。

こっちは全員で向こうを警戒してるんだが、向こうはそんな俺たちには全く構わず、楽しそうに会話を続けていた。

「アギト……」

「ホントに心配したんだからな、ルールー」

「……うん」

一応黒い奴がこっちを向いて構えているものの、向こうの空気は随分と緩い。
舐められてんのか、あの黒い奴がそれだけ強いのか、それともまだ何か隠し玉があるのか……。
分からないが、用心して悪いってことは無さそうだ。

「……なぁオイ。ちょっといーですかァ？」

「あン！？」

とりあえず声を掛けてみたら、会話を邪魔されたのがムカついたらしく、物凄い形相で睨まれた。
ち、ちっこいクセに迫力あるじゃねーか。チビるかと思ったぜ。
けどな、こちとら毎日シグナム副隊長に怒鳴られてんだ！　その程度じゃ怯まねーぜ！

「えーと……お前は、そっちの仲間でいーんだよな？」

「当たり前だろ！　あたしはいつだって、ルールー達の味方だ！」

「それじゃあ、ソレを渡してくれるように説得してくれたりは……」

「アホか！　しねぇよ！！」

「ですよねー」

駄目もとで聞いてみたら、めっちゃ怒られた。
畜生、何であんなちっこい奴にアホとか言われなきゃならんのじゃ。

「じゃあ、交渉の余地無しってことでいいのか？」

「あったりめーだ！　だーれがお前ら管理局なんかと交渉するもんか！」

「……初対面の相手にそこまで嫌われると、俺のガラスのハートが砕け散るんですが」

「「「「ガラスのハート！？」」」」

「きゅるるっ！？」

「何なのお前ら？　俺のこと泣かせたいの？」

超大げさに声を揃えたスバル達に溜息を吐いてから、少女たちの方を向きなおす。
後ろでまだ全員が「ガラスのハート？」とか呟いてるが無視。後で全員の靴にこっそり小石を入れてやる。
すっげー違和感を感じて嫌な思いをするがいいさ！

「……まぁ、冗談はさておき。俺達の目的も、そっちの目的も同じ

ブツ。
そんで交渉の余地無しってことは……気は進まねーけど力ずくになっちまうんだが、そっちはそれで構わないんだな？」

「上等ォッ！　お前ら、あたし達に勝てると思うなよ！
何しろこっちはこのあたし！　烈火のぉ、剣精！！　アギト様が居るんだからな！」

自分の周りに小さな花火を飛ばしながら、うっすい胸を張って名乗りを上げるちっこい奴……アギト。
いいのか、そんな簡単に自分の名前バラして？　まあいいか。
とりあえず先制して、精神攻撃しておこう。

「劣化の剣精と申したか」

「そうそう、何か最近日が経つにつれて段々調子が悪く……って劣化じゃねぇよ！　烈火だよ！
苛烈な炎って意味だよ！　てめぇふざけてんのか！？」

「……」

「な、何だよ……」

「いや、予想外に上手いノリツッコミだったもんで、感心してた」

ホントに驚いた。
下手したら部隊長やティアナよりも鋭いツッコミだったぞ。

「よし。お前そこ動くな、消し炭にしてやっから」

「嫌でござる！　絶対に嫌でござる！！
劣化の剣精さんには燃やされたくないでござる！」

「ルールー。アイツはあたしが燃やすから、ルールーとガリューは他の奴らの相手しててくれ」

「……えと、うん」

どうやら俺が思っていた以上に熱くなりやすい性格だったらしく、ちょっとからかったらマジギレされた。
そのキレっぷりにそっちの子――ルールーって言うのか――がちょっと引いてるんだが、いいんだろうか？
まあいっか。んで、そんな訳で戦闘開始なんだが、皆準備はいいか？

「いつでもいいわよ……けど、もう少し真面目にやりなさい。空気がもう色々と酷いわよ」

「あたしとティアは、いつもの事だから慣れてるけど……」

「ならば良し！」

「「良くない！！」」

ティアナとスバルにツッコミを入れられつつ、ギンガ、エリオ、キャロにも確認。

「とりあえずあのアギトって奴は、俺をご指名みたいだから、アイツの相手は俺がする。
3人はスバル、ティアナと一緒にあの子と黒い奴の相手を頼むわ。
5対2なら、そうそう負けんだろうし」

「は、はい。頑張ります！」

「でも、ハヤトさんは1人で大丈夫なんですか？
ここにくるまでに、結構魔力も体力も使っちゃったんじゃ……」

「何とかなるっしょ。ヤバかったら逃げ回るし」

「……ハヤト君。本当に後でお説教だからね。
お仕事中でこんな状況なのに、ふざけてたら駄目でしょ？」

聞こえませんなぁ。なーんにも聞こえませんなぁ。

「～～～～～っっっっ！！！！！」

「ああ、そうそう。目的はレリックの確保だから、別に相手を倒す事に拘らなくていいぞ。
レリックを確保できたら、全員で相手の攻撃を防御しながら撤退ってことでよろしく」

「……指示だけはマトモなのが、凄く納得できない……はぁぁぁぁ」

大仰に溜息を吐くギンガは無視し、ブレイブハートを構え直して最終状況を整理。

相手は現在俺達の確保目標であるレリックを所持。こちらとの交渉に応じる気は無く、交戦も已む無しという状況。

相手の戦力――黒い奴はギンガやスバルと似た徒手空拳が主体っぽく、ルールーは不明。あのちっこいのは直情馬鹿。

対するこっちは6人で、さっきのを見た限りじゃそれほど酷い見劣りは無し。

落ち着いて対処すれば問題なくレリックを確保出来る……と思う。

「よっし、じゃあ油断せずに頑張るとしましょう」

「「はい！」」

「何でアンタが仕切ってんのよ！」

「ま、まぁまぁティア。抑えて抑えて……」

「……うぅ、納得いかない」

何とも締まらんなぁ。俺ららしいって気もするけどさ。

「でも、ハヤト。ホントにだいじょぶ？」

と、隣に立っていたスバルが心配そうに尋ねてきた。

まぁ、相手の実力が未知数だから、俺も不安っちゃ不安だけど…

…折角のご指名だしな。

「心配すんな。俺、この戦いが終わったら新しいゲームを買うんだ」

「ちょっ！？　それ、明確な死亡フラグだよ！？」

「ほら、これがそのゲームのヒロインの写真」

「更に死亡フラグを重ねた！？」

「よし。それじゃあいくぜお前ら！」

「待ってハヤト！　危ないから！　今のハヤトすっごく危ないからーーーっ！！」

駆け出した俺の背中に、スバルが悲痛な声で叫ぶ。うるさいなぁ。

自分でわざと立てた死亡フラグだから大丈夫だっつーの、きっと、多分。

if25話　『下水道攻防戦　3』（後書き）

どうしてこうなった！　どうしてこうなった！
どうも、ラモンです。

あれ～？　今回からシリアスになる予定だったのに……。
気付いたらギャグ全開になっていたという謎。
多分コ○ンでも金田○少年にも解けない謎でしょう。

えーそんな訳で、ルールー、アギト、ガリューのご登場です。
アギトは相変わらずハヤト専用ツッコミ融合機としてのスペック高いなぁ。とても書きやすい。本人からしたら凄く嫌でしょうけどｗ
途中から凄いノリノリでギャグ書いてました。多分暑さのせいでしょう。

スバルルートでは、『六課の休日』編はもうちょっと長くなりそうです。
次回でルールー達ＶＳＦＷメンバーを書いて、次々回で終わり……という感じでしょうかね。
アニメ見てて思ったんですけど、レリックのケースっていつの間にかＦＷメンバーが持ってたんですよね。何時の間に取り返したんだろう？　見逃したのかな……。という訳で、スバルルートではケースを取り返すまでを書いてみようと思います。
もうちょっとお付き合いくださいね。

あぁ、ゼストの旦那も出したいなぁ……でも出したらハヤト達勝てないよなぁ。
旦那！　アンタは何でそんなに強いんだ！！
まぁ、機会があったら旦那にも活躍してもらいたいと思います。

それではまた、次の話で。

if26話　『下水道攻防戦　4』

「ブレネン・クリューガーッッ！！」

「アクセルッ！　マキシマムドライヴ！！」

《　ありません　》

ブレイブハートの冷淡なツッコミを受けながら、チビ助の撃ち出した炎の弾を撃ち落す。

俺の撃ち出した魔力弾が炎の球とぶつかって、大きな音を立てて弾け飛ぶ。

「あっち！　ちょっ、火の粉熱いんですけどっ！！」

「はっはー！　当たり前だろばーかっ！」

「馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞっ！
第一ペタンコなクセにビキニ着てるような自虐趣味な奴に、馬鹿とか言われたくねーっつーの！」

「だ、誰がペタンコだこの野郎ォォッッ！！」

何となく勢いで言った悪口は、どうやたら逆鱗に触れてしまったらしい。

チビ助はさっきまでとは比べ物にならない程デカイ火球を作り出

し、俺に向けて投げつけてきた。ちょっ！？　流石にアレ食らったら熱いじゃ済まないんですけど！！

「うおぉぉっ！？　ソ、ソニックムーブ！！」

《Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ．》

撃ち落すのも大変そうだったので、ソニックムーブで慌てて火球の射線上から逃げ出す。

直後、火球が俺の居た場所を飲み込み、炎の舌で辺りを嘗め尽くす。その温度は凄まじく、攻撃範囲から逃げていた筈なのに、肌にチリチリとその熱を感じるほどだ。

あんなん当たったら、燃えるを通り越して蒸発すんぞ！？

「あ、危ねぇな。殺す気か！」

「燃やす気だ！！」

「一緒だから！　人殺しは駄目って学校で教わんなかったのか！？」

「学校なんざ行ってねーっつーの！！」

「それじゃあ就職大変だったろ？」

「そーなんだよ。学校行ってないと世間の風当たりが厳しくてさ。お陰でロクな職にも就けなくて、毎日バイトばっか――って、ンな訳あるかぁぁっ！！」

マジで素晴らしいツッコミ人材だな。
六課にスカウト出来ないだろうか？　部隊長と俺とコイツでトリオ漫才やれば、お笑いで天下取れる気がする。
――なんてことを、チビ助が撃ち出した火球を魔力弾で撃ち落しながら考えてみた。

「アクセルシューター！」

「ブレネン・クリューガーッッ！！」

何度目か数えていないが、再び空中でぶつかり合う俺の魔力弾と、チビ助の火球。
弾速と、一度に撃てる弾の数は互角。そんで魔力ではチビ助が、体力では俺がやや有利……ただ、あっちは空を飛べる分、総合的に見ればあっちが有利という感じだろうか。

「空を飛ぶなんて卑怯だぞチビ助この野郎！　男らしく、地面に降りてきて正々堂々闘いやがれ！」

「あたしは女だ！　大体、地面に降りたらあたしの方が不利になるだろが！」

「俺が有利になるならなんでもいーっつの！」

「最悪だよお前！」

「あざーっす！」

「誉めてねぇぇっ！！」

そんな風に漫才を続けている訳だが、実際俺の方は結構一杯一杯だ。

なんせあのチビ助の方が魔力ランクが上っぽく、ちょっとでも大きな火球が来ると避けるしか手立てが無い。

魔力ランクの高さってのは、使う魔法の威力や強度に直結する。

つまり、ランクが上の相手が5の力で撃った魔法を撃ち落したけりゃ、こっちは7～8ぐらいの力で撃たなきゃいけない。

そして魔力ってのは有限で、結果的に消耗は格下である俺の方が随分と早くなってしまう訳だ。

く、悔しくなんかないもんね！

「熱っ！　ちょ、火球の温度下げろ！　燃えちゃうだろうが！」

「燃やすつもりなのに、下げる馬鹿いねぇだろ！！」

「ごもっとも！」

言いながら、飛んできた火球を避けて、空中のチビ助目掛けてアクセルシューターを撃つ。

けれど、チビ助の小さな身体は狙いが定め難く、更にチョコマカ動くせいで誘導弾でも当てづらい。そうして俺が狙いをつけられれず手間取っている間に、チビ助は再び火球を撃って俺の弾を撃ち落

す。
　さっきからこれの繰り返しだ。直接攻撃できれば、また話は変わってくるんだが……俺、飛べないし。

「さてさて、あとどれ位頑張ればいいのやら……っとぉっ！」

　再び飛んできた火球を避けながら、黒い奴とルールーの2人相手に戦っているスバル達の方を見て、小さく呟いた。
……熱っ！？　ちょっと掠った！　超熱いっ！！

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ２６話　『下水道攻防戦　４』

ｓｉｄｅ：―

　ハヤトがアギト相手に漫才を繰り広げている横で、スバル達はルーテシアとガリューに苦戦を強いられていた。
　別段力が劣っている訳ではなく、レリックを抱えたルーテシアを守る為に、ガリューが取った戦法が原因だ。

「……」

ルーテシアはレリックを抱えていて、余り激しく闘えない。

実質5対1という状況であることを把握したガリューは、ただひたすら動かず、『待ち』を決め込んだ。

自分からは決して動かず、ティアナ達のする攻撃を素早く見極め、それに合わせて適切な行動を必要最小限の動きで取るだけ。攻勢に出ようとはせず、ただひたすらにじっと待つ。自分だけで対処できないと悟れば逃げ、その時初めてルーテシアが少しだけ攻撃に参加する、といった具合である。

消極的な戦法ではあるが、レリックを守りきり、アギトがハヤトを倒した後に逃げれば勝ちという勝利条件が向こうにある以上、これ以上ない位に有効なものだと言えるだろう。

事実、ティアナ達は数的に有利な状況にありながら、2人で闘うルーテシア達に対して攻めあぐねている。

「困ったわね……」

ギンガとスバルの同時攻撃を受け流すガリューを見て、ティアナが小さく呟く。

ガリューとルーテシアの闘い方が『待ち』一辺倒なせいもあって、どうしてもイマイチ攻め切れない。戦いにおいて、隙とは攻める時にこそ生じるものであり、守備に徹していれば、殆ど隙は発生しない。勿論それは“殆ど”であって0ではないのだが、それでもその隙は、今のティアナ達には突くことが出来ない程に小さなものでしかない。

それはガリューの技量の高さというのもあるが、最も大きな要因

は、ギンガが入りハヤトが抜けたことに因る、チーム編成の変化だろう。スバルとティアナはギンガと何度か練習で手合わせしたこともあり、彼女の動きをある程度は理解できる。
だが、エリオとキャロの2人はギンガと共に戦うのは今日が初めて。更に、今までやったことのない前衛3、中衛1、後衛1というフォーメーション。連携にギクシャクした部分が出てしまうのは、ある意味必然とも言えた。

「かといって、あの馬鹿を連れ戻してる暇は無いし……」

眉を寄せて呟きながら、ハヤトが戦っている場所へと視線を移す。

「ばーかばーか！　ペタンコ融合機ーっ！」

「ペタンコじゃねぇ！　まだこれから成長するんだ！」

「するわけねーだろ！　諦めろよ！」

「諦めたらそこで試合終了なんだよ！」

「なんの試合してるんだお前は！？」

「……た、大変そうだしね」

どう見ても、仲の良い2人がじゃれてるようにしか見えない戦いを繰り広げているハヤトとアギト。

あれは口だけで、きっと本人は一生懸命なんだ。だからどう見ても余裕そうだけど、ハヤトに余裕は無いんだと自分に言い聞かせながら、ティアナは意識を自分たちの戦いへと戻す。

「どうにかして、あの子の持ってるケースを直接狙えないかしら……？」

スバルとギンガを援護する為にガリューに照準を合わせて引き金を引きながら、ガリューの後ろに立つルーテシアを見る。

ルーテシアはケースを抱えているだけなので、近づく事さえ出来れば取る事は出来るだろう。問題は、どうやって彼女に近づけばいいのかなのだが――。

「あの、ティアさん」

「何、キャロ？」

引き金を引きながら思案するティアナに、キャロがブースト魔法をかけながら呼びかける。

「ちょっと、思いついたことがあるんですけど……」

「思いついたことって、あの子からケースを取る方法？」

「はい」

キャロは力強く頷いたあと、慌てて「えと、あんまり自信はないですけど」と付け加えた。

それを見てティアナは逡巡し、しかしこのままでは泥沼になるばかりだと判断、彼女に続きを促した。

「……いいわ。とりあえず言ってみて？」

「は、はい！」

ティアナの返事に嬉しそうに笑って、キャロはスバル達のサポートをしながら、思いついた作戦をティアナに話し始めた。

◇◇◇◇◇

「……」

スバル達と戦うガリューを見つめながら、ルーテシアは困ったな

と眉を寄せた。
すでに目的であるレリックは回収した。
なのに何故、こんな事になっているのだろうか？　と。

「……」

とりあえず、自分に危険が及ぶ心配は無い。
目の前で自分を守るために立っている召喚獣――ガリューの存在が、それを彼女に確信させている。
彼女としては一刻も早くスカリエッティのラボに戻り、このレリックが自分が必要としているモノ――Ｎｏ．１１かどうかを確かめたいのだが……。

『アギト、帰っちゃ駄目？』

『駄目だルールー！　この馬鹿燃やすまで、あとちょっと待ってくれ！！』

『……うん。分かった』

助けにきた筈のアギトは、何度尋ねても同じ返事ばかり。
どうやったら、あの短いやり取りでココまで他人を怒らせることが出来るのだろうかと、ルーテシアはアギトを怒らせたハヤトに少し感心していた。

「……ガリュー、危ない」

そんな事を考えながら、スバルの拳を避けたガリューに迫っていた橙色の魔力弾を、自分の生み出した紫のダガーで撃ち落す。

負ける気は全くしないのだが、このままでは時間だけが無駄に経過してしまい、今戦っている彼女たちよりも強い魔導師が到着してしまうかもしれない。そうなれば、いくらガリューといえども自分を守りながらでは分が悪い。

だから、本当ならアギトの言葉を無視してでも逃げればいいのだが、それをしたらアギトは多分臍を曲げてしまうだろう。

そう考えると、勝手に逃げるわけにもいかない。

「……困ったな」

もう一度眉を寄せ、ルーテシアが呟く。

刹那、もう一度ガリューに向かって橙色の魔力弾が殺到する。

「……」

ルーテシアはそれを見て、もう一度レリックを抱えていた右腕を動かし、紫色のダガーを生み出す。

その瞬間、彼女は自分の右側に、勇壮な羽ばたきの音を聞いた。

「え……」

「きゅく～～～っっ！！」

右を向いた彼女の目に入ったのは、鳴き声を上げながら自分に向かって突っ込んでくる白い竜――フリード。

フリードはルーテシアが反応するよりも素早く彼女が抱えたケース目掛けて突進し、その両脚でケースをしっかりと掴み、そのまま天井目掛けて急上昇する。

「あっ……」

片手で支えられたケースは簡単にルーテシアの手から離れ、フリードの両脚に奪われる。

「！」

「「はあああああっっ！！」」

ルーテシアが上げた小さな声に反応し、ガリューが意識を逸らす。

それは僅かな、しかしこの戦いが始まって初めて出来た明確なガリューの“隙”。その隙を、それを待ち望んでいたスバル達前衛の3人が逃す理由などありはしない。

3人は自分の持てる全速でガリューへと肉薄、互いに目配せでタイミングを合わせ、それぞれの持てる全力の攻撃をガリュー目掛け

て叩き込む。しかし、ガリューとて黙ってやられる程無様ではない。咄嗟に両腕を胸の前で交差させ、３人が全力で打ち込んだ攻撃を防御した。

「……ッッ！！」

物言わぬガリューが息を呑み、交差した腕の装甲がミシミシと音を立てて罅割れる。

腰を落とし、自分を吹き飛ばそうと放たれた攻撃の衝撃に耐えようと踏ん張るガリュー。だが、３人が全力で放った攻撃に、耐え切ることなど出来はしない。一瞬の拮抗の後、ガリューは衝撃に耐え切れずにその場から真後ろへと吹っ飛ばされ、その身体を下水の壁にぶつけて大きく凹ませ、網目状に罅を走らせた。

「ガリュー……っ！」

ルーテシアは吹っ飛ばされたガリューを振り返り、悲痛な声を上げる。

彼女の声に反応するように、壁にめり込んだガリューが身体をゆっくりと壁から離す。その間にフリードはケースを持ったままキャロの隣に舞い戻り、嬉しそうに声を漏らす。

「きゅくる～っ！」

「お疲れ様、フリード。ありがとうね」

「きゅる～」

フリードからケースを受け取り、キャロがその頭を軽く撫でる。
それを確認したティアナは、作戦が上手くいった事に小さく安堵の息を吐いた。

キャロが考えた作戦、それはフリードを相手の死角から突っ込ませてケースを掠め取るというものだった。
何度かルーテシアはティアナの弾丸からガリューをフォローする為に、ケースを片手で抱えることがあった。ケースはとても大きいので、彼女では抱えるのも一苦労だ。だから、両手ならばともかく片手で抱えている時ならば、フリードで奪う事が出来る。果たしてキャロの考えた作戦は成功し、こうしてケースはここにある。

「それじゃあ、後は撤退するわよ」

「はいっ！」

「スバル、エリオ、ギンガさん！　撤退します！」

「「「了解！」」」

キャロと、前方でガリューとルーテシアを牽制していたスバル達に撤退を呼びかけ、ティアナはアギトと交戦中のハヤトへと念話を飛ばす。

『ハヤト！　ケースは無事確保、撤退よ！』

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

『ハヤト！　ケースは無事確保、撤退よ！』

そろそろ魔力、体力ともにかなり辛い状況になってきた時、タイミングよくティアナからの念話が届く。
本気で助かった。もうちょいかかるようなら、流石に向こうと合流しなきゃと思ってたところだぜ。

『了解！　助かったぜ！』

その念話に答えながら、チビ助の火球を避けて、どうやってこのチビ助から逃げるかを考える。
何だかんだで、コイツ結構隙が無いからなぁ……。

「ッ！　ルールルーっ！？」

なんて思案していると、いきなりチビ助が驚いた顔をしてスバル達の方――つまり、さっきの子と黒い奴がいる場所を見る。
よっしゃ、ナイスタイミング！

「俺だってやれば出来る子なんですよアターーーック！！」

《Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ．》

その隙を見逃さず、とりあえず全力で攻撃を仕掛ける。
チビ助目掛け、俺の真紅の弾丸が空を裂いて飛ぶ。

「うわぁっ！？」

目を逸らしたチビ助が、飛んできた弾丸に気づいて慌てて回避。
そこで出来た俺が逃げ出せる位の隙に、全力で床を蹴ってスバル達の方へと跳ぶ。チビ助が「あーっ！？」とか声を上げるが、気にしてる余裕は無い。っつーか、もうアイツの相手ヤだ。髪もバリアジャケットも焦げるとか、やってらんねーよ！
俺、ぜってー火を使う相手と相性悪いって。シグナム副隊長とか、シグナム副隊長とか、あとシグナム副隊長とか！

「よう、首尾良くケース取り返したっぽいな」

スバル達と合流し、キャロが抱えたケースを見て安心する。
とりあえず全員ケガも無さそうだし、後は無事に撤退できりゃあ万々歳だぁな。

「ハヤト、怪我してない？　大丈夫？」

「おうよ。ちょっとばかし、あっちこっち焦げてるけどな」

「あ、ホントだ。髪の毛チリチリになってる」

心配そうな顔で聞いてくるスバルに返事をして、目の前に立つ黒い奴に向けてブレイブハートを構えた。
すると、チビ助がすっ飛んできて、黒い奴の横に並んで俺達を睨む。

「てめぇら！　よくもガリューを！！」

「いや、だから力ずくになるけどいーか？　って聞いたじゃん。最初に」

「だからって、仲間をやられたら怒るに決まってんだろ！」

「む、それは確かに。すまなかった、謝るから見逃しておくれ」

「お？　おう、わかりゃーいーんだよ」

どうやら見逃してくれるようだ。
意外と物分りがいいじゃないか、チビ助。

「それじゃ、俺たちはこれで」

「おー。気をつけて帰れよー！」

「……アギト、帰しちゃ駄目」

「はっ！？　そ、そうだった！　待て、このヤロー！！」

ちぃっ！　紫ロリめ、余計なことを。
折角これ以上苦労しないで帰れるところだったってのに。

「待てと言われて待つ奴はいないっての！　さらばだ、馬鹿なチビ助！！」

「馬鹿ってゆーなーーーっ！！」

一際デカイ声で怒鳴ってから、チビ助は逃げる俺達目掛けて火球を放つ。
何なのアイツ！　見逃すって言ったくせに！！

「回避！！」

ティアナが鋭い声を飛ばし、それに従って俺達は全員思い切り後ろに跳んでそれをかわす。
チビ助の火球は俺達が居た場所を直撃し、爆音と共に土煙と下水を巻き上げ、まるで雨の様に辺りに下水を降らせた。

ｓｉｄｅ：－

「あっちだ！　あっちの柱の影に隠れろっ！」

爆音と共に土煙が舞う中、私達の前を走るハヤトが叫ぶ。
ギンガがその声に従うように、柱の方を向こうと視線を動かした瞬間――。

「ッ！？」

彼女の視界の端に、土煙の中からガリューが飛び出してくるのが映った。
それを認識した瞬間、ギンガはその場で１８０度回転し、飛び出してきたガリューに向かって地面を走る。そして、ガリューが突き出した右手から伸びた刃に、自分の左手のナックルを叩きつけた。
一瞬の拮抗。お互いの魔力が火花を散らし、行き場を無くして衝

突した2つの魔力が爆発。
その爆発に巻き込まれないように、ギンガとガリューは互いにバックステップで距離を取り、それぞれの仲間の所まで下がる。

「ギンガ、こっちだ！」

「わかった！」

ギンガが着地した瞬間、横合いの柱の影に隠れたハヤトが彼女に声を飛ばす。
声に従ってギンガは彼の隠れる柱の影に飛び込み、その直後、アギトが横薙ぎに放った炎が地面を直撃し、再び下水と土煙を巻き上げた。

「くっせぇぇ……この、チビ助！　汚いだろーが！」

「うっせぇ！　隠れてないで、男らしく出てきて戦えってんだ！」

「俺のモットーは“正々堂々真後ろから不意打ち”ですから！」

「お前ホントに管理局員か！？」

「残念だったな！　これでも現役の管理局員だ！」

「……ホントに残念だよ」

アギトとハヤトのやり取りを聞いたギンガはがっくりと肩を落とし、盛大な溜息を吐いた。

「……ティア、どうする？」

ハヤト、ギンガの隠れている柱とは逆方向にある柱の影に隠れたスバルが、隣に居るティアナに尋ねる。

ティアナは少し顎に手を当てて考え、一度キャロの抱えているレリックのケースに目を遣ってから、顔を上げた。

「任務はあくまでケースの確保。

ケースは確保できたから、無理に戦わないで、撤退しながら引き付ける」

「こっちに向かってるヴィータ副隊長とリイン曹長に上手く合流できれば、あの子達も止められるかも。だよね？」

「そういうこと。エリオとキャロも、いい？」

確認するスバルに頷いて、エリオとキャロを振り返って尋ねる。

「「はい！」」

「うん、それじゃ――」

『よし。中々いいぞ、お前ら』

2人が頷くのを確認して、ティアナが動き出そうとした瞬間。
その場に居たＦＷ全員の頭に、聞きなれた声が響く。

「ヴィータ副隊長！」

『私も一緒です。ティアナ、状況をよく読んだナイス判断ですよ～！』

聞こえてきた声に思わずティアナが声を上げると、その後に嬉しそうなリインの声も聞こえてきた。

「っ！？　ルールー、何か近づいてきてる！」

瞬間、アギトが天井を見上げて焦ったような声を上げた。
何かを探るようにせわしなく天井を見回した後、彼女の表情に驚きが浮かんだ。

「魔力反応……でけぇっ！？」

「うおりゃあああああっっっっ！！」

アギトが再び声を上げるの同時に、裂帛の気合と共にティアナ達の近くの天井が突き破られる。大量の瓦礫が降り注ぎ、土煙を巻き上げた。

一瞬の出来事に全員が息を呑み、その後一拍置いてその煙の中からリインが飛び出す。

彼女の視線が捉えたのは、驚いた顔のアギトと、無表情なまま天井の方を見上げるルーテシア。

リインは空中で2人に向けて右手を突き出し、そこに魔方陣を描きながら呪文を紡ぐ。

「捕らえよ、凍てつく足枷！」

2人の足元から渦を巻くように風が巻き起こり、ルーテシアの長い紫銀の髪を靡かせる。

アギトとルーテシアは足元から突然巻き起こった風に戸惑い、自分の足元へと視線を移す。

「フリーレン、フェッセルン！！」

その刹那、巻き起こった風は一瞬で凍りつき、2人を包むような氷の繭を作り出した。

「！」

２人が捕らえられたのを見たガリューが土煙から意識を逸らし、２人を助けようと地面を蹴ろうとした。だが彼が地面を蹴るよりも早く、今度はギガントフォームになったアイゼンを振り被ったヴィータが土煙から飛び出し、ガリュー目掛けてその大槌を振り下ろす。

「ぶっ飛べえええええっっっっ！」

咆哮と共に振り下ろされた大槌を、ガリューは左腕で防ぐ事に成功した。

「ぐ……っ！」

「……っ！」

「こ……のぉっ！！」

押し込もうとするヴィータと、押し返そうとするガリュー。２人の力が一瞬拮抗するが、再び力を込めたヴィータに押し切られ、ガリューは再び吹き飛ばされて近くの柱を削って壁へと激突、崩れる瓦礫と巻き起こった煙の中へと飲み込まれた。

「……おう、待たせたな」

「皆、無事で良かったです～」

敵が沈黙したのを確認し、ヴィータがアイゼンを通常形態に戻してハヤト達を振り返る。その隣には、ホッとしたような笑みを浮かべるリインがふわふわと浮いていた。

２人とも、今の攻防が何でもなかったかのような態度で、いつもと変わらぬ表情で立っている。

「……俺らの頑張りって、何だったんだろうな」

「……言わないで、虚しくなるから」

「ふ、副隊長達って、やっぱり凄かったんだ……あはは」

そんな２人の態度を見て、ハヤト達は苦笑を漏らすしか出来なかった。

ｓｉｄｅ：―　了

if26話　『下水道攻防戦　4』（後書き）

あーつーいー……溶けるー……溶けた。
どうも、ラモンです。

これで下水道攻防戦、ケース奪取→ヴィータ、リイン合流までをお送りしました。
絶望した！　どんなにシリアスを書こうとしても、アギト&ハヤトのシーンを書くとギャグが絶対入ってしまう私の脳に絶望した！
アギトこんなキャラじゃねーよと思ってるアギトファンの皆さん。超ごめんなさい。謝るんでロンドンタワーブリッジは勘弁してください。

……あー、もうスバルルートは全編ラブコメにしようかなぁ。
ゆりかごとか、スカっちが操作間違えて壊したりとかで決着にして……いや流石にそれは無いか。

さて、次回は下水脱出→ヘリ攻撃ですね。
果たしてゼストの旦那の出番はあるのか!?
……旦那を出しても大丈夫な展開を思いついたら、出るかも知れません。
すべては私次第！w
旦那が好きなそこの貴方、私が何かを思いつくよう祈っていてください！

それではまた、次の話で。

ｉｆ２７話　『下水道攻防戦　５前』（前書き）

※今回は長くなったので、前後編に分かれます。

if27話　『下水道攻防戦　5前』

「ちっ……」

黒い奴が吹き飛ばされた壁を見て、ヴィータ副隊長が舌打ちをする。

どうしたのだろうと思い、副隊長の隣に並んでそこを見ると、確かに壁にめり込んだ筈の黒い奴の姿がそこから消えていた。

移動した瞬間が見えなかった……アイツ、ヴィータ副隊長にぶっ飛ばされたのに元気だなぁ。

「こっちもです！」

リイン曹長が声を上げ、全員でそこに集まった。

曹長の放った拘束魔法が解けた跡には、ルールーとチビ助の姿は無く、代わりに地面に空いた大穴が覗いている。どうやら、曹長が魔法を構築する一瞬で逃げたようだ。意外と器用な奴らだな。

「逃げられた、ですね」

「みたいですね。どうしましょう？」

「う～ん……レリックは確保したですし、多分もう逃げてるでしょうから、一度撤退して――っ！？」

可愛らしく首を捻った曹長が其処まで言葉を漏らした時、唐突に地面が揺れだした。
いきなりの事に、全員がバランスを崩してたたらを踏む。

「何だ！？」

「ヴィータ副隊長が柱とかぶっ壊したせいじゃ？」

「そ、そんな事は……ねぇと……思う、けど」

何となく思った事を口にしたら、ヴィータ副隊長は全力で目を逸らして冷や汗を流し始める。
……自覚、あったんスね。

「大型召喚の気配があります。多分、原因はそっちだと……」

ヴィータ副隊長がだらだら冷や汗を流し、俺がジト目で副隊長を見ていると、俺の隣に居たキャロが天井を見上げて呟く。
召喚士……今の状況と消去法で考えればルールルーか？　つか、ここで地震おこすとか俺達のこと生き埋めにする気かよ。洒落にならねーっつの。

「ひとまず脱出だ！　スバル！」

「はい！　ウィング、ロードッ！！」

ヴィータ副隊長の指示で、スバルが副隊長の開けた穴から外に向けてウィングロードを螺旋状に展開する。自分の空けた穴が、ただの破壊行為じゃなくなって若干副隊長が嬉しそうである。つーか副隊長、そんな「穴あけてきて良かったろ？」みたいな顔しないでください。薄い胸を張られても涙しか出てきませんから。

「スバルとギンガが先頭で行け！　あたしは最後に飛んでいく！」

「「はい！」」

ギンガとスバルが頷いて走り出し、それに続こうとした俺の目に、ティアナがキャロと何か悪巧みしてるのが見える。

多分ティアナの事だから、レリックに何か細工でもするんだろう。

ルールーがこうやって地震を起こしてるかもって事を考えるに、まだレリックを諦めてないっぽい。なら、ここから脱出した後にまた狙ってくる可能性もある。ティアナは慎重な奴だし、そこら辺の対策でもやってるんだろうな。

なら、俺が特に心配する必要は無いか。

「ティアナ、先行ってるぞ」

「ええ」

そう考え、ティアナに一声かけてからスバル達の後を追う。
てかよく考えたら、この糞長いウィングロードを走って昇るのか……超だりぃ。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ２７話　『下水道攻防戦　５前』

ｓｉｄｅ：―

ハヤト達が地上へ向けて走っている頃。地上の廃棄都市区画の一角、その道路上に巨大なカブトムシが鎮座していた。
角の間でバチバチと断続的に雷を起こし、その雷をエネルギーとして両脚から地面に向けて放出している。恐らくは、この蟲こそが地下に地震を起こしている原因なのだろう。

「だめだよルールー！　これはマズイって！！」

そこから近い場所にあるビルの上から蟲――地雷王を見下ろすルーテシアに、アギトが必死に訴えている。
地下が崩れれば、ハヤト達は必然的に生き埋めになり、ルーテシアが殺人を犯すことになってしまう。それはアギトが望むところで

はない。だからアギトは、ルーテシアに懇願するように訴え続けた。

「埋まった中からどうやってケースを探す？
あいつらだって、局員とはいえ潰れて死んじゃうかもなんだぞ！？」

一生懸命に理由を語って、何とか地雷王での地下崩落を止めさせようとするアギト。
だが、ルーテシアは表情を動かさず、じっと地雷王を見つめて呟く。

「あのレベルなら、多分これくらいじゃ死なない。ケースは、クアットロとセインに頼んで探して貰えばいい」

その言葉に、アギトがさっきまでとは違った意味で血相を変えた。

「よくねーよルールー！　あの変態医師とかナンバーズ連中と関わっちゃ駄目だって！
ゼストの旦那も言ってたろ？
あいつら口ばっか上手いけど、実際のところあたし達の事なんてせいぜい実験動物くらいにしか――」

「アギトがムキにならなかったら、やらなくて済んだんだよ？」

「う〝……」

まだ言い募ろうとしたアギトの言葉を、ちょっと咎めるような目のルーテシアが遮る。アギトが思わず言葉を詰まらせた瞬間、何かが崩れるような大きな音が廃棄都市区画に響いた。

そちらに視線を遣れば、地雷王の居る場所が地雷王を中心として円形に窪み、角の先端で瞬いていた雷が消えている。

それはつまり、あの場所を崩し終えたということなのだろう。

「……あぁ、やっちまった」

円形に窪んだ道路を見て、アギトがそう呟いて項垂れる。だが、その口調は存外に軽いものだった。恐らくは彼女も、ハヤト達がアレで死んだとは思っていないのだろう。

ルーテシアはアギトに「ごめんね」とだけ言ってから、自分の隣に立っていたガリューへと視線を移す。

「ガリュー……怪我、大丈夫？」

「……」

尋ねられたガリューは、左胸――エリオに斬られた箇所と、スバル達3人の攻撃をガードした両腕から血を流しつつ、特にダメージを負った様子無く頷いた。先ほどまで流れていなかったのは、恐らく筋肉を無理矢理引き締め、無理矢理血が流れるのを止めていたのだろう。

「戻っていいよ。アギトが居てくれるから」

「……」

「大丈夫。アギトも反省してる」

ルーテシアの言葉に一度は躊躇するものの、ルーテシアにもう一度言われ、返事の代わりに頭を下げる。すると、ガリューの身体が紫に輝き、一転に集束されるようにして消える。

ガリューの身体が消えるのを見届け、ルーテシアの視線が地雷王に移る。

「地雷王も……っ！」

「戻っていいよ」と彼女が続けようとした瞬間、その地雷王の真下に桃色の魔方陣が浮かび上がり、そこから何本もの鎖が飛び出し地雷王に巻きついて地面へと縫い止めた。

「何だ！？」

「召喚……？」

自分と同じような召喚にルーテシアが眉を潜め、アギトが突然の

事態に驚きの声を上げる。２人とも、確かにアレでハヤト達が死なないだろうとは思っていたが、まさかこれほど早く脱出しているとは予想していなかった。
動揺するアギトとルーテシア目掛けて、空色と青色、２本のウィングロードの上を走るスバルとギンガ、そして空を裂く様に飛ぶヴィータが迫る。

「っ！」

動き出そうとした瞬間、２人は自分達の真正面にあるビルの屋上に居るティアナとハヤトに気付く。
しかしルーテシア達が何かをするよりも早く、それを阻止するべく２人が狙いを定め、真紅と橙、２色の弾丸をルーテシアとアギト目掛けて撃ち出した。

「ちぃっ！」

「……」

風を切って迫る魔力弾を回避しながら、アギトが火炎弾を、ルーテシアが虚空より生み出したダガーを撃ちだす。しかしそれは牽制以上の意味を成さず、ティアナ達には避けられ、ヴィータ達の勢いを止めることは愚か、勢いを殺すことすら叶わない。
それを見て眉を潜めながら、ルーテシアは近くの高架の手摺部分に着地、アギトはその近くに飛んできた。

だが、それらは全て罠。
彼女が着地するのとほぼ同時に、高速で移動したエリオがルーテシアの胸元にストラーダを突きつけ、アギトの周りには氷で出来た無数のダガーが浮かぶ。

この間、実に数十秒。
人数の差、そしてルーテシア達の僅かな油断が招いた結果だといえるだろう。

「……ここまでです」

ルーテシアの横にやってきたリインがそう告げ、ルーテシアとアギトをしっかりとバインドする。
それを追うように、ティアナやスバル、ギンガやハヤトといった面々も彼女達の方へと集まってきた。完全に囲まれたことを認識すると、ルーテシアは小さく俯き、アギトはもがくのをやめて地面に座り込んだ。
その近くに降り立ったヴィータが溜息を漏らしながら彼女らを見据える。

「子供を虐めてるみてーで、いい気分はしねーが。
市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他諸々で逮捕する」

グラーフアイゼンをルーテシアに突きつけ、彼女がそう口を開いた。

◇◇◇◇◇

ハヤト達がルーテシアを拘束した頃。
廃棄都市区画の中でも一際高いビルの屋上に、２人の人影があった。

１人は眼鏡をかけてケープを羽織った、髪を二つ結びにしている女性。
もう片方は襤褸切れをマントの様に身体に巻きつけ、自分の身長ほどもある巨大な何かを持ち、首の後ろで髪を一つに纏めている少女だ。特徴的なのは、２人とも同じようなボディスーツを着ていることだろうか。
それぞれの首の少し下、胸の上あたりには、それぞれ『？』と『？』の刻印が入ったプレートが光っている。

「ディエチちゃ～ん。ちゃんと見えてるぅ？」

眼鏡をかけた女性が、襤褸切れに身を包む少女――ディエチに語りかける。
ディエチは瞑目していた目を開き、遠くを見つめてそれに返す。

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる。……よく見える」

言葉と共に、彼女の瞳から小さな機械音を立てる。
ディエチが見つめる視線の先――そこには、管理局が保護した少女とシャマルを乗せたヘリが飛んでいる。肉眼では点にしか見えないヘリを、しかしディエチの視界はしっかりと捉えていた。

「でも、いいのかクアットロ？　撃っちゃってさ。ケースは平気だろうけど、“マテリアル”の方は破壊しちゃう事になる」

ヘリを撃墜するという穏やかではない内容を、何でもないことのように話すディエチ。
それを聞くクアットロも同じように、軽い笑いさえ漏らして肩を竦めて語る。

「ふふ、ドクターとウーノ姉さま曰く。あの“マテリアル”が当たりなら。
……本当に『聖王の器』なら、砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよ？」

「ふぅん」

自分で質問しておきながら気のない返事をして、ディエチは持っていた巨大な物を包む布を取る。
中から出てきたのは、小柄なディエチの身長よりも高い、巨大な砲身。

「さぁて、それじゃ早速準備して頂戴ねぇ？」

「うん」

クアットロの指示に従って、ディエチがその大砲を構える。

狙うは、彼女の目が捉えて離さない――少女とシャマルを乗せたヘリ。そして、砲撃の開始をクアットロが指示しようとした、まさにその時。それに割り込んでウーノの映ったモニタが、彼女の顔の横に開いた。

「あらぁ、どうしました？　ウーノ姉さま」

『……ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「あぁ～。そういえば、例のチビ騎士に捕まってましたねぇ」

渋面で告げるウーノに対して、惚けるような、しかしどこか楽しそうな声で答えるクアットロ。

いつもの事ながら困ったものだと溜息を吐いて、ウーノは言葉を続ける。

『今はセインが様子を窺っているけど……』

「フォローしますぅ？」

姉が自分に何を求めているのかを即座に察したクアットロが、彼女の言葉を先取りする。
いつも通り語尾を延ばした間の抜けている声だったが、その言葉を放ったクアットロの目には惚けた口調とは裏腹に、冷たく鋭い光があった。

『お願い。騎士ゼストも動かれているようだけど、一応ね』

「了解で～す」

『頼んだわよ』

ウーノの短い返答と共に、浮かんでいたモニタが消える。
クアットロは眼鏡の位置を直しながら、様子を窺っているという自分の妹――セインへと思念通話を繋げた。

「……セインちゃん、聞こえてるぅ～？」

ｓｉｄｅ：－　了

◇◇◇◇◇

ルールーとチビ助を拘束し、ケースを持ったエリオと直接戦闘は苦手なキャロから遠ざけ、俺達で囲むようにして尋問する。

……傍目には、俺達の方が悪役っぽいな。

でも、尋問の方は全く上手くいっていない。こちらが何を尋ねても、ルールーもアギトも俯くばかりで何も答えない。チビっ子ながら大した根性だと感心する。とはいえこのままダンマリは困る訳で。

「とりあえず、隊舎の方まで連れて行きませんか副隊長？」

「……ん、そーだな」

いい加減イライラし始めたヴィータ副隊長がキレないうちに、と声をかけて提案する。

その提案に副隊長が頷き、ティアナ達を振り返って撤退の指示を出そうとした――まさにその時。

「すまんが、連れて行かせる訳にはいかんな」

俺達の後ろから、聞いた事の無い、低く響く声が聞こえてきた。

突然聞こえてきたその声に、俺達全員が振り返る。

「怪我は無いか。ルーテシア、アギト」

そこに居たのは、ボロいローブを纏った厳つい顔のおっさん。
右手には、先端が剣の様な形状をした槍――薙刀って言ったほうがいいのか？――を持ち、それを俺達に向けて構えながら空中からこちらを見下ろしている。

「旦那っ！！」

「……ゼスト」

おっさんを見て、今まで黙して語ろうとしなかったチビ助とルーが口を開いた。
けれど、俺達の誰一人としてそれを気にしない……というよりも、気にしている余裕が無くなったと言うべきか。

「そこの2人とレリック……渡して貰うぞ」

短く告げた瞬間、こちらが身構えるよりも早くおっさんが動く。
その大柄な身体からは想像出来ない弾丸のような速度で突進し、俺達が瞬きをする一瞬で俺達の中心――ルールーの前へと移動して、先端が薙刀のようになった槍を構えてこちらを睨みつけた。

「……仲間か？」

振り返り、グラーフアイゼンを握り締めて副隊長がおっさんに尋ねる。

俺も慌てて全員己の獲物を構え、おっさんに向けて構えた。スバル達もそれぞれ、すぐにでも戦えるように体勢を整える。

おっさんの佇まいは、ただ構えているだけだというのに、こっちの肌が粟立つ程に威圧感を帯びていた。それだけで、目の前に立つこのおっさんの実力が尋常ではないと感じさせる程に。

勿論、威圧感だけじゃない。つい今しがたのルールーの側に移動した動きだって、あのヴィータ副隊長が反応しきれなかった。いくら不意打ちに近いタイミングだったとはいえ、そんな動きを出来る奴がそうそう居るとは思えない。つーか、そうそう居て堪るか。

「仲間、か……そうだな。どちらかと言えば、保護者に近いかも知れんが」

「それは、まぁどっちでもいい。武器を捨てて、投降する意思は？」

相手にそんなつもりが無いのは、ヴィータ副隊長とて分かっている。もし投降する気があるなら、このタイミングで、しかも武器を持って俺達の前に出てくる訳が無いだろう。

「……無い。先に言ったとおり、この2人と、そちらの少年が持っ

ているレリックを奪取させて貰う」

「この状況で、出来ると思ってんのか？」

「無論だ」

断言して、おっさんが手に持った槍を大きく振るう。

ゴウッっと風を切る大きな音がして、おっさんの威圧感がより一層強くなる。

――来るか？

俺達がおっさんの動きに合わせて動こうと身構えた、その瞬間。

『砲撃のチャージ確認！　物理破壊型、推定Ｓランク！』

「なっ！？」

「どこに！？」

悲鳴のようなロングアーチからの通信が響く。

その声に、俺達全員が身体を強張らせた。

『位置は……嘘、ヘリのすぐ近く！？』

『回避！』

『駄目、間に合わない！！』

次々と耳に届いてくる、ロングアーチの声。

ヴィータ副隊長達は一斉に、ヘリの飛んで行った方角に目を向ける。俺も目を逸らしそうになったが、誰一人としてこのおっさんに注意を向けていないのはマズイと思い、ブレイブハートを突き付けたまま、おっさんを睨みつける。

直後、俺達の耳にまで届くほど大きな轟音が辺りに響いた。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「め、い、ちゅう～」

空中に漂う黒煙を見ながら、クアットロはケラケラと楽しげに笑う。

ディエチは砲身をヘリに向けたまま、煙が晴れるのを無言でジッと待っていた。

「あっはは！　ほぉんと、お馬鹿ちゃん達ばっかりぃ。

目の前の事に精一杯になって、ホントに守らなくちゃいけない物は疎かなんだもの。
まぁ？　私がそうなるように仕向けたんだから、当然だけどねぇ」

クアットロとディエチ以外には誰も居ない廃棄ビルの屋上に、高笑いが響く。
けれど、砲身を構えたままのディエチは、自分が見ている光景に違和感を覚えた。

「……あ」

その違和感が何なのか、それについて考えを巡らせ――思い至る。

「破片が、落ちてこない……」

「あははは……ん？　何か言った？　ディエチちゃん」

ヘリが撃墜、爆散したなら破片が宙を舞って然るべきだ。
だが、彼女の視界が捕らえているのはあくまで“煙だけ”であり、そこにヘリの破片はひとつも見受けられない。
それはつまり――撃墜失敗ということ。

「クアットロ！　ヘリはまだ、落ちてない！！」

「えぇ！？」

苦い顔で叫んだディエチの声に、クアットロが目を見開いて煙の残る空中――ヘリが飛んでいた場所を凝視する。

「……あっら～」

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ……マジで？」

２人の視界の先――煙が晴れたその場所に居たのは、桃色の障壁を張ったエースオブエースこと、高町なのは。

彼女を過小評価していた訳ではない。こちらに向かってきているのも知っていたし、こちらの攻撃を防ぎきる事が可能だという事も知っていた。だが、それを考慮した上でこの作戦を練り、実行し、それでも尚こうしてこちらの予測を上回った彼女の力に、クアットロもディエチも呆気にとられてしまう。

「見つけた」

「「！」」

その２人の背後から、凛とした声が響く。

クアットロとディエチは咄嗟に振り返り、そこに立つ『金色の死神』の異名を持つ美女を見て、息を呑んだ。

「市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で……逮捕します」

金色の鎌を2人に突きつけ、彼女――フェイト＝Ｔ＝ハラオウンは静かな声でそう告げた。

ｓｉｄｅ：―　了

ｉｆ２７話　『下水道攻防戦　５前』（後書き）

後書きは、後編でまとめて書きます。

ｉｆ２８話　『下水道攻防戦　５後』（前書き）

※今回は長くなったので、前後に分かれています。

if28話　『下水道攻防戦　5後』

side：―

「……随分、えげつねーことするじゃないか」

耳にロングアーチからの『ヘリは無事』という通信を聞きながら、ハヤトがゼストに向かって口を開く。彼にしては珍しく、声には怒気が込められ、ゼストを睨む視線には殺気さえ混じっている。

「信じてもらえるとも思わんが、アレはこちらとは関係ない。俺も困惑しているところだ」

「……てめぇっ！　この期に及んで、そんな言い訳が通ると思ってんのか！？」

呟くように言葉を漏らしたゼストに、ヘリの方を向いていたヴィータがゼストを振り返りながら怒鳴る。

彼女以外のメンバーも言葉こそ発しないものの、全員がゼスト達を敵意剥き出しの目で見ていた。

「信じようと信じまいと、事実は事実だ。だが、それを証明している時間も無い。

先に言った通り、ルーテシアとアギトを解放して、そのレリック

を奪取させて貰う」

「んなこと、させるかぁぁっっ！！」

我慢も限界とばかりに、ヴィータが再度怒鳴りながらグラーフアイゼンを振り上げ、ゼストに向けて突撃する。

ヴィータは一瞬で彼との距離を詰め、その横っ腹目掛けて振り上げたアイゼンを思い切り振り下ろす。振るわれた鉄槌はゼストの横腹に吸い込まれ、そのまま彼の大柄な身体を宙に舞わせる筈――だった。

「はあぁっ！！！」

「なぁっ！？」

しかしヴィータが鉄槌を振り下ろすよりも早く、ゼストの槍が動く。

彼女を払いのけるような横一閃。それは、ヴィータが振るった鉄槌を弾き、その際に起きた風圧と衝撃で彼女の小柄な身体をも吹き飛ばす。力比べにおいて、拮抗するならともかく一蹴されるとは思っていなかったヴィータは、吹き飛ばされ、受身も取れないまま地面へと叩きつけられた。

「この――「ぜあぁぁっっ！！」――っっ！？」

次いで、一番近くに居たハヤトが全速で魔力弾を形成、ゼストに向けて放とうとする。しかしゼストが振り切った槍を再び振るう速度はそれよりも尚速く、振るわれた槍の穂先は地面を抉り取り、その破片はハヤトだけでなく後ろで構えていたスバル達にまで届き、全員の目を一瞬とはいえ晦ませる。

「く……っそが！」

ハヤトは顔を腕で庇いながらも、形成した魔力弾をゼスト達を見ないままに3人が居た場所へと叩き込む。

「はぁっ！」

だが、聞こえてきたのは魔力弾が撃ち込まれる音ではなく、ゼストが発した裂帛の気合と、魔力弾が弾かれる金属的な音。
その音に、ハヤトは撃墜が失敗したのを悟って小さく舌打ちする。

「くっ……」

顔を庇うように交差させた腕をどかし、慌ててハヤト達が目を開けた時、既にゼストとルーテシア、アギトの姿は其処には無かった。
今の一瞬で遠くには行けまいとリインが反応を探すが、どんな術を使ったのか既に3人の反応はロストしている。

「リイン曹長！　３人の反応は！？」

「……駄目です。反応、ロストしてるです」

「ちぃっ！！」

「無駄ですハヤト。反応がロストした以上、探すのは……不可能ですよ」

焦ったハヤトが３人を探そうと動き出そうとして、リインの力無い言葉に呼び止められる。

その声にハヤトは足を止め、小さく舌打ちしながら地面に転がっていた石を蹴飛ばした。

「っつ……ぅ」

「！　ヴィータちゃん、大丈夫ですか！？」

「ああ……あいつ等は？」

そうしているうちに、吹き飛ばされたヴィータが顔を顰めて戻ってくる。

リインが慌てて彼女の側に行き、簡単な治癒魔法をかけながらヴィータの問いに首を振ることで答えた。

「そう……か」

彼女の言葉に、ヴィータは項垂れて小さな声を漏らすのだった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ２７話　『下水道攻防戦　５後』

（……妙だな）

気持ちを落ち着けながら、ハヤトは頭の隅で考えていた。

（あのおっさんは、レリックも奪取するって言ってた。なのに、ケースはまだエリオが持っている）

視線を動かし、確認するようにエリオが手に持っている黒いケースを見た。

それは確かに彼の手に握られ、そこにある。

（なら、もう一度来るはずだ……必ず）

確信にも似た予想を頭に浮かべながら、ハヤトは全神経を研ぎ澄まして辺りを観察する。

既に、ゼスト達に逃げられたという事に対する憤りから、思考は切り替えていた。そんなハヤトだからこそ、ソレに気づく。

「……っ！　エリオ、足元！！」

「え……うわぁっ！？」

エリオの足下に見えた右手。それに気付いたハヤトが鋭い声を上げるが、それと同時にその場所から水色の髪の少女が、まるで水の中から出てくるように飛び出し、ケースを持っていたエリオの左手からケースを奪いながら高く飛び上がり、そのまま少し離れた場所へと再び“飛び込む”。

その場に居た中で唯一事前に気づいていたハヤトが、少女目掛けて魔力弾を撃ち出す。しかし少女が降りた場所は彼から最も離れていたせいで、撃った魔力弾は間に合わず、彼女が消えた後の地面を虚しく削り取っただけだった。

「くそっ、下か！？」

彼女が地面に飛び込んだのを見て、舌打ちしながら高架下へと飛び降りるハヤト。

しかし降りた高架下に少女の姿は無く、辺りを見回してもそれらしい人影は見えない。そうしているうちに、スバルとギンガの2人が彼を追ってウィングロードを駆けながら降りてくる。

「ハヤト！　さっきの子は!?」

「……駄目だ。逃げられた」

隣に並んで焦ったように尋ねてくるスバルに、ハヤトは溜息を吐きながら首を振って答える。

「反応は?」

「ロスト……っつーより、ステルスか何かしてんだろ。でなきゃ、あれだけ近寄られて気付かないなんて、ありえねーし」

「そんなの、どうやって……」

「さぁな。レアスキルか何か分からんが、とにかくそういう類だろ」

疲れたように右手で顔を覆いながら、ハヤトが疲れたように大きく息を吐く。

「……はぁ、最悪だな。ルールーとチビ助には逃げられて、ケースは取られちまったか」

「……そうだね」

「ったく、ティアナに任せて正解だったな」

「え……？」

「ハヤト、どういう事？」

顔から右手をどかし、さも当然の事とばかりにハヤトが言葉を漏らすと、スバルが困惑したように首を傾げる。

その隣で同じように不思議そうな顔で首を傾げるギンガと彼女を見比べ、ハヤトは説明しようと口を開きかけ、思い直したように首を振って2人の背後に回り、その背中を押す。

「疲れたから、解説すんのは面倒だ。上に戻ろうぜ、そうすりゃ分かる」

「「？」」

訳がわからないとばかりに首を捻る2人の背中を押して、ハヤトはウィングロードの上を歩く。

「ね、ねぇハヤトってば！　ティアに任せたってどーゆー事！？」

「いーから戻るぞ。戻ったら、ティアナが説明してくれるって」

「むー……何か以心伝心な感じ……」

「まぁ、同じポジションだからな。考え方が似てる部分はあるだろ」

「……ぶー」

全部分かっていると言う表情のハヤトを見ながら、スバルは小さく口を尖らせる。

そんなハヤトとスバルの様子を観察して、スバルの姉であるギンガは、ひたすら頭に疑問符を飛ばしていた。

◇◇◇◇◇

「待ちなさい！」

「遠慮しておきます～～っ！！」

フェイトにバルディッシュを突きつけられたクアットロとディエチは、一瞬の隙を突いて逃走を始めた。

しかし、フェイトとて雷神の異名を持つ魔導師。そう易々と逃がしはしない。すぐさま2人を追いかけ、空を飛ぶクアットロとビルの屋上を飛び移りながら逃げるディエチ両名との距離を、徐々に詰めていく。

「止まりなさい！　止まらないと、投降の意思無しとみなして、攻撃します！」

「だ～か～ら～！　遠慮しておきますってばぁ～っ！」

静止を呼びかけるフェイトの声に、必死ながらもどこか余裕のある口調でクアットロが返す。

「……なら！」

「ＩＳ起動、シルバーカーテン」

これ以上の逃走は許さないと、フェイトが雷を帯びた魔力弾を形成する。

それと同時に、クアットロは己がＩＳ（インヒューレントスキル）を発動し、自分とディエチの姿を景色の中へと溶け込ませた。

「っ！？　はやて！！」

それを見たフェイトは、遠い場所で準備を整えてくれているだろう親友へと通信を飛ばす。

間髪いれず、それに答えるはやての声が響いた。

『位置確認。詠唱完了。発動まで……あと、４秒！』

「了解！」

はやてからの通信に答え、フェイトがその場から離脱する。

「離れた？　……なんで？」

「まさかっ！？」

彼女が離れていくのを見て、地面に降りていたクアットロが天を仰ぐ。

その視界が捉えたのは、空に開いた穴の様に見える、巨大な黒色の魔力の塊。

「広域……空間攻撃！？」

「うっそ～ん！？」

認識した瞬間、２人は全力でその場から離脱する。

同時に、空に浮かんでいた魔力の塊が一気に膨張し、あたりを飲み込みながら２人へと迫る。その速度は、２人が逃げるソレよりも更に早く、クアットロとディエチの姿は黒の中に飲み込まれた……かに見えた。

だが――。

「危機一髪！」

迫り来る黒色に一度は飲み込まれたものの、クアットロはディエチを抱きかかえたまま、ソレから脱出。勿論無事という訳ではなく、彼女の纏っていたケープの肩口が破け、中に着込んでいたスーツのプロテクターには罅が入っていたが。

何はともあれ、脱出に成功したクアットロは、そのまま一気に逃走を図ろうと高度を増した。

《　投降の意思無し。逃走の危険ありと認定　》

《　砲撃で昏倒させて捕らえます　》

しかし、それを許すフェイトではなく、エースオブエースでは無い。

高度を上げたクアットロとディエチを挟むように、フェイトとなのはがそれぞれに砲撃の準備をして構えている。

「「！？」」

「トライデント……」

「エクセリオン……」

「スマッシャーーーーッッ！！」「バスターーーーッッ！！！」

そして、２人に向けて金色と桃色をした魔力の奔流が放たれた。
２つの奔流はクアットロ達を飲み込み、その意識を断ち切る筈だった。

「！」

けれど、フェイトもなのはもソレを見た。
自分たちの砲撃が当たろうかというその瞬間、紫色の閃光が割って入り、クアットロとディエチの事を掠め取っていくのを。

「……避けられた！」

「アルト、追って！」

当たったかどうかを確認するまでもなく、なのはとフェイトは喜びに湧くロングアーチに指示を飛ばす。
けれど、クアットロとディエチの反応を捕まえることは無く、異常反応もそれが合図だったかのように終息していった。

◇◇◇◇◇

「……逃がしたか」

ロングアーチから対象反応のロストという報告を聞き、はやてが眉を顰める。

そして、はやてと通信を繋いでいたヴィータも、苦々しい表情でそれに続けた。

「ああ、こっちは最悪だ。召喚士一味には逃げられ、ケースは持っていかれちまった。逃走経路も攫めねぇ……」

「あ、あのヴィータ副隊長……」

その途中でティアナが話しかけようとするが、ヴィータにグラーフアイゼンを突きつけられて押し黙る。

すると丁度ハヤト達も下から戻ってきて、項垂れたティアナの元に集まり、どうしたのかと事情を彼女から聞かされ、そのままそこでニ、三言葉を交わす。

それからハヤトが他の皆に押し出されるような形で、未だに通信を続けているヴィータの側にやってきて、口を開いた。

「ああ。ＦＷ陣はベストだった……今回は、完全にあたしの失態だ」

「リインもです……」

「えーと、あの、副隊長？」

「何だよ！　報告中だぞ！？」

「ひぎぃ」

イラついた声でヴィータが振り返りざまに怒鳴りつけ、１人でその怒りを受け止めるハメになったハヤトが泣きそうになりながら後ろを振り返り、ティアナにさっさと喋れという視線を送る。

その視線を受けたティアナが苦笑しながら前に出て、ヴィータに事情を話し始めた。

「えぇと、ですね。ケースはシルエットではなく、間違いなく本物でした。

あたしのシルエットは衝撃に弱いんで、下手に増やしても奪われた時点でバレちゃいますから」

高架の上ではティアナとキャロ、そしてエリオの３人が、ヴィータとリインに解説をしていた。

ハヤトとスバル、ギンガの３人は既に簡単な説明は聞いていたので、周辺の警戒に務めている。

「ですから、さっき脱出する前にケースを開封して、レリック本体に直接厳重封印をかけて」

「中身は……」

そう言いながら、エリオがキャロの被っていた大きめの帽子を取る。

そこには、一輪の花が咲いているヘアバンドがあった。それはキャロが普段つけないものであり、それを知っているヴィータとリインは不思議そうな顔でその花を見る。

「こんな感じで」

そんな2人の前でティアナが指を鳴らすと、ヘアバンドが赤く輝く小さな結晶――レリックへと姿を変えた。

「敵との直接接触が少ないキャロに持ってて貰おうって」

「なるほどぉっ！」

ティアナ達の解説に、リインが両手を合わせ、目を輝かせながら声を上げる。

対するヴィータはホッとする反面、さっきまで本気で落ち込んでいた自分が何だか虚しくなり、頬を引き攣らせて乾いた笑いを漏らすのだった。

「……な？　ティアナに任せといてよかっただろ？」

「む～。ハヤトは、あの事知ってたの？」

その後ろで周りを警戒しながら、ハヤトがスバルに話しかける。
スバルはそれに答えつつも、どこか納得いかないという顔で口を尖らせていた。

「んにゃ？　知らなかったけど、脱出の時にティアナが何かしようとしてたのは見たからな。
アイツに任せときゃ間違いはないだろ、とは思ってた」

「ふ～ん……信頼してるんだ」

「そりゃお前、信頼してるさ。ティアナはこーゆー作戦任せたら、ピカイチだもんよ」

「……ふぅぅぅん？」

当然とばかりにティアナへの信頼を口に出すハヤトに、スバルは面白くないとばかりにより一層口を尖らせた。
そんな彼女を見ながら、ハヤトがどうしたのかと口を開こうとした瞬間、先んじてスバルが言葉を続ける。

「ハヤト。あのペアリング……あたし、本気だからね？」

「は？　あ、あぁ……そうか」

唐突に言われた言葉に、ハヤトの顔が一気に赤くなる。

それを見て満足そうに頷きつつ、スバルは周り――というよりも、自分以外のＦＷメンバーとヴィータ、リインの視線がこちらに向いていないことを確認し、悪戯っぽく笑う。

「だから、これは本気だって証拠」

「え……っ！！？」

その言葉の意味を問う前に、ハヤトの唇に柔らかいモノが押し当てられた。

「――――」

「えへへ……初めてだから、安心してねっ！」

一瞬触れ合った唇を離し、口を押さえて絶句するハヤトに笑いかけるスバル。

そしてとびきりの笑顔ではにかみながらそう言って――まぁ、ハヤトからすれば何を安心すればいいのか、という状態だが――少し

離れた場所で警戒しているギンガの下へ走っていく。

「……え、ちょっ……え……？」

一人残されたハヤトは、その後ヴィータにグラーフアイゼンで殴られるまで、真っ赤になったままフリーズしていた。

ちなみに、スバルはその後は終始上機嫌で、ギンガ達は不思議そうにハヤトとスバルを見比べ、ティアナは再び瘴気を撒き散らしたという。

こうして、長い長いＦＷメンバーの休日は終わりを迎えた。

レリックを狙う新たな敵の幻影をハヤト達に植え付け、ハヤト個人には、今までの人生で一番の混乱を残して――。

ｓｉｄｅ：―　了

if28話　『下水道攻防戦　5後』（後書き）

ゼストの扱いが難しすぎる……あとラブコメ凄く恥ずかしい。
どうも、ラモンです。

そんな訳で『六課の休日』編、終了です。
纏めるの大変でした……。特に旦那をどう動かしたらいいのかがもう……。
正直、出しただけという使い捨てキャラっぽくなってないかが心配で心配でしょうがないです。
一応プロットでは、この後ゼストの旦那には何回も見せ場はあるんですが……。

キャラを使い捨てるって、凄く嫌なんですよね。だから、なるべく見せ場っぽくしたんですが、上手く出来てたでしょうか？
最初に書いた時は、旦那無双になってて逆に駄目だったので何回も書き直しました。
ですが、もしかしたら気になって後でまた書き直すかもです。

まぁ、それも今回は大変だったんですが……。
一番大変だったのはラストですよ、ラスト。あのスバルとハヤトのラブコメ。
もうね、リア充滅べと。蒸発しろと。

さて、そんな訳で次回はいよいよヴィヴィオ登場。
そしてスバルとハヤトのラブコメもどんどん増えていく予定です。
さあ逝くぞ読者達。砂糖の貯蔵は十分か？

それではまた、次の話で。

※報告とお詫び。

魔法少女リリカルなのはＳＳＸ　～とある新人の事件簿～について、報告とお詫びです。
詳しい事は活動報告に書きましたので、細かい部分はそちらを読んでください。

えーと、簡単に申し上げますと。
先日私の小説と、ある個人サイトで掲載している小説が似ているという報告がありました。
確認したところ、盗作と言われても仕方ない程に似ていまして、更にそちらのサイトの方が私よりもずっと先に掲載していました。
なので、そちらの作者さんと協議の結果、今回私の方のＳＳＸを削除することになりました。

私の作品を楽しみにしてくださっている皆様に連絡も無しに削除ということになってしまい、大変申し訳なく思っています。
わざわざアンケートまで取って書き始めたというのに、こんな結果になって本当に申し訳ありません。

これからはこういう事が無いように、細心の注意を払って執筆したいと思います。

こんな私の作品でもよろしければ、今後とも、どうかよろしくお願い致します。

また、似ているという報告のあったサイト名、ＵＲＬ、作者さんの名前につきましては、教えないで欲しいとの連絡があったので、私からは一切お教えすることが出来ません。ご了承ください。

if29話　『金髪幼女と恋する乙女と』

「……」

ボーっと空を眺めて、流れる雲を目で追いかける。
ちなみに今はまだ早朝。しかもここは六課隊舎の屋上なので、俺以外に人の姿は無い。
何でここに居るのかと問われれば、寝れなかったのと色々と頭の中を整理したいから。

「……」

けど、ぶっちゃけ整理するも何も、頭ン中は真っ白で何を考えたらいいのかさえ分からない。
こーゆー事は生まれて初めてなんで、対処法も全然思い浮かばん。
原因については……まぁ心当たりがある。つーか、それしかないだろって感じな訳で。

「……どーすっかなぁ」

右手にもった銀色のリングを弄りながら、誰にともなく呟く。
ブレイブハートも部屋に置いてきている今、そんな俺の呟きに答える人は、勿論居やしない。
最も、俺だって誰かの答えを期待していた訳じゃ無く、唯の独り

言だったわけだから別に構わないけれど。

「あーあ……ホント、どーすっかなぁ」

溜息を吐くようにもう一度呟いて、屋上で大の字に寝転がって空を眺める。

くっそー。雲め、何も考えてない感じで呑気にプカプカ浮かびやがって。高町隊長に頼んでぶっ飛ばしてもらうぞこの野郎。

こちとら色々ありすぎて思考が絶賛ストップ高更新中だってのによぉ。

「ばっかじゃねぇの、俺」

雲に八つ当たりしてどーすんだよ。クールになれ、クールに。

ハヤト＝ロックウェルはいつ如何なる時もクールなのが売りだったじゃねーか。いや、そんな事誰かに言われた記憶なんて全くないから、自称ですけどね～。

「あのスバルが……ねぇ」

色恋沙汰とかには、一番縁が無さそう……つーか興味無いもんだと思ってたんだが。

そのスバルから渡された銀のリング――まぁ、ペアリングだな――を空にかざして眺めていると、不意に昨日自分の唇に当たった感

触を思い出し、頬が熱くなる。
まさかあの状況でキスしてくるとか、予想外にも程があるだろ。
大胆とかそーゆーレベルじゃないぞ。
ヴィータ副隊長たちに見つかったらどーするつもりだったんだよ、あの馬鹿。

「あーもう。今日これから、どんな顔してスバルの馬鹿と会えばいいんだっつの。畜生」

一向に熱が退いてくれない頬に当たる風を感じながら、左手で顔を覆って呟く。
まさか、俺がこういう事で頭を悩ますような時が来るとは……いや、どう考えても突然すぎるけどさ。
まぁそれはいい。とりあえず暫くは、なるべくスバルと2人っきりにならないようにしないと。何かもう色々と考えなきゃいけない事がありすぎて、パニックになりそうだ。

「どーしろってんだ。ホントによぉ」

空に向かって呟いた声に、当然ながら答えは返ってこなかった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ２９話　『金髪幼女と恋する乙女と』

「どうしてこうなった」

「ん？　どしたの、ハヤト？」

「どーしたのー？」

現在時刻……正午ちょい過ぎ。現在地……高町隊長の部屋にあるソファ。

状況……俺とスバルの2人だけで、昨日保護した金髪で赤と緑のオッドアイの少女――ヴィヴィオの子守中。

ティアナ、エリオ、キャロの3人は報告書作りってことで事務室に居て、高町隊長は部隊長、ハラオウン隊長と一緒に聖王教会へと行っている。

「……どうしてこうなった」

「さっきからどしたのハヤト？　何かブツブツ言ってて、変なの。ね、ヴィヴィオ？」

「ねー」

呻くように言葉を漏らせば、人の気持ちなんぞ欠片も理解してない顔でこっちの顔を覗きこんで笑うスバルと、俺の膝の上に乗っか

って、同じように俺の顔を覗きこんで笑うヴィヴィオ。……俺が変なのは、間違いなくお前のせいなんだぞスバル、何だその能天気なツラは。

「ていっ！」

「に〝ゃっ！？」

腹が立ったので、能天気に笑ってるスバルの脳天にチョップを見舞う。

するとスバルは猫が押し潰されたような声を出した後、涙目になり頭を押さえて蹲る。その顔も何か可愛い……じゃなくて！

何でこんな事になったんだ？　と、首を捻ってこうなる前までの記憶を掘り起こす。

確か早朝訓練が終わった後、高町隊長から午前、午後の訓練は中止して昨日の報告書を纏めてと言われたんだよな。

それで、朝飯食ってから全員で事務室に行って報告書を作成。量が多くて終わらなかったから、一旦休憩ってことで昼飯にして……食い終わって事務室に戻ろうとしたら、高町隊長から通信が入ったんだ。

通信の内容は「今すぐ部屋に来て欲しい」ってんで、隊長の部屋に5人揃って向かって、そこでヴィヴィオに出会った。

隊長は俺たちにヴィヴィオの世話を……みたいな話をしてたんだが、その途中でいきなりヴィヴィオが俺に抱きついてきて、それか

ら隊長が出かけるまで、ずっと俺から離れようとしなかった。

それを見た隊長が、俺に「ヴィヴィオのお世話を任せていい？」って聞いてきて、俺はそれを断れずに承諾。

でも流石に1人では大変だから、エリオとキャロも……という流れになったところで、突然スバルが手を上げて「あたしも一緒にやりますっ！」と志願。2人きりを避けたかった俺は全力で拒否し、ティアナは「スバルよりもあたしが！」と何故か志願し、エリオとキャロ、そして隊長は苦笑い、ヴィヴィオは俺にしがみついたまま。

……あれ？　思い出したらこの時点で既にかなりカオスだったんじゃね？　まぁいいや。

けれど、ティアナも俺と一緒になってしまっては、報告書を纏める貴重な戦力が居なくなってしまう。

何せ報告書作成などの書類仕事が得意なのは、FW陣では俺とティアナのみ。スバルは書類仕事は苦手だし、エリオとキャロの2人はまだまだそーゆー事には不慣れだ。なので、隊長は俺とスバルを子守組。ティアナとエリオ、キャロを書類仕事組へと組み分けした。その指示を聞いた瞬間、ティアナは黒いオーラを撒き散らしながらエリオとキャロをつれて事務室に戻って行った。

俺は最後まで渋っていたんだが、隊長から「女の子に恥をかかせちゃ駄目」とよく分からないお叱りを受けて、断るわけにもいかず、スバルと2人でヴィヴィオの世話をすることになってしまった。

「そうだな。そうだったな……」

現状に至る経緯を思い出し、深々と溜息を吐く。
そんな俺をスバルとヴィヴィオは揃って不思議そうに眺めつつ、手に持ったプリンを食べている。お前ら、それ5個目だぞ？
あんまり食べて腹壊しても知らないからな？

「大丈夫だよ。あたしのお腹は丈夫なのが自慢だもん！」

「じまんだも～ん！」

「やめろ馬鹿スバル。ヴィヴィオが真似するだろが」

「あてっ」

プリンを口の周りにつけてるヴィヴィオの口を拭いながら、逆の手でスバルの額を叩く。
ぺちっ、といい音がしてから、軽く身体を強張らせてスバルが小さな悲鳴を上げる。

「ん。よし、これでいい」

「ありがと～。おにーちゃん！」

「はいはい」

ヴィヴィオは俺の事を、何故かずっとお兄ちゃんと呼んでいる。
なんでかと聞いてみたら「何となく、おにーちゃんぽかったから

！」という、意味不明な返答を頂いた。子供の考えてることはよくわかりません。

「う～、ハヤト酷いよ～」

「うっせ。お前が悪い」

「ひどい～」

隣でグズグズ言ってるスバルの額を、もう一度軽く叩いておく。

しかしまぁ。昨夜から午前中にかけてはアレだけ意識してたってのに、今は意外と平気でちょっと驚いた。

ヴィヴィオが居るからだろうか？　それとも、俺が気付かないうちに気持ちの切り替えが出来てたんだろうか？　まぁ、この際それはどっちでもいい。

下手に意識しすぎて思考がオーバーヒートするより、何倍もマシだ。

「おにーちゃんはプリン食べないの？」

「あ？　あぁ、俺の分無いしな」

「食べたい～？」

「別にいいさ。気にしないで食べな。ヴィヴィオ」

「う？　じゃあ食べる～っ！」

また色々考えていたら、膝の上にいるヴィヴィオがこっちを見上げて、半分ほど食べたプリンを差し出してきた。
意外と気遣いの出来るお子様だなぁ、と考えつつ頭を撫でながらやんわりと断る。そうすると、元気一杯に返事をして再び猛烈な勢いでプリンを食べ始めた。
丁度それで終わりだし、別に子供のを取ってまで食べたいとは思うほどプリンは好きじゃないしな。

「……えへへ」

「なんだよ。いきなり笑ったりして」

なんて思っていると、不意にスバルが頬に両手を当てて笑い出す。
そんなスバルに首を傾げながら問いかけると、頬を赤くして何ともいえない表情になりながら俺を見て口を開く。

「なんかね。こーしてると、家族みたいだなぁ……って」

「はぁ？」

「ハヤトが旦那さまで、あたしが奥さんで、ヴィヴィオがあたし達の子供で……みたいな」

「いや、いきなり何言ってんだよお前」

なんだか随分飛躍しすぎた事を言い出すスバルに、照れるのを通り越して呆れてしまった。
まだ昨日の返事とかもしてないうちに、何を言ってるんだろうかコイツは？

「だって、何だかこういうの憧れない？」

「別に」

「む～。ハヤトは夢が無いなぁ」

肩を竦めて答えると、頬を膨らませて俺の脇腹を突いてくる。やめろ、くすぐったい。
つか、17歳で所帯持ちになることを夢見てたら、ある意味夢がないだろうが。

「ふーんだ。そんな夢の無いハヤトには、プリンあげないもん」

「いらねーって言ってんじゃん」

「……む～。今日のハヤト、ノリ悪いよ」

「お前ね……昨日の今日でそんだけ普通にしてられる方がおかしいと思うぜ？」

「そうかな？」

ジト目で睨んでみても、スバルは気にしないという素振りでプリンを片付けている。
いつも思うんだが、どこにアレだけの量が入るんだろうか？　宇宙か？　お前の胃袋は宇宙なのか？
少しは自重しとけよ全く……。

「プリンおいしいね、おねーちゃん！」

「おいしいね～」

「……はぁぁ。まぁいいさ」

嬉しそうに笑い合うスバルとヴィヴィオを見ていると、何だか突っ込むのも馬鹿らしくなってきて、思わず脱力する。
すると、それが引き金になったのか、突然眠気が襲ってきた。あー……そういや、結局昨夜は一睡もしてないもんなぁ。

「スバル悪い。ちょっと寝るわ」

「え？　あ、うん。いいけど……」

「1時間くらいしたら起こしてくれ。
ヴィヴィオ、俺は今からちょっと寝るから、起きたらまた遊ぼうな？」

「おにーちゃんお昼寝するの？　じゃあ、ヴィヴィオもするー」

「ぁふ……好きにしろ……」

駄目だ、眠気を意識したら猛烈に眠くなってきた……。
ヴィヴィオが俺に体重をかけてくるのを感じながら、俺は眠気に任せて意識を手放した。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「ハ、ハヤト。寝ちゃった？」

ハヤトとヴィヴィオ、２人の寝息を聞きながら、スバルが恐る恐るハヤトの名前を呼ぶ。
しかし、ハヤトは完全に寝入っているらしく、返事は無い。

「ヴィヴィオも、寝ちゃったかな？」

そのハヤトの膝の上、ハヤトに体重を預けて眠っているヴィヴィ

オの頬をつつく。
するとヴィヴィオは「うにゅ……」と声を上げるものの、目を覚ます気配は無い。どうやら、ハヤトと同じく完全に寝入ってしまっているようだ。

「ふふ。こうやってると、ホントの兄妹みたい」

眠っている2人は目を閉じており、ヴィヴィオの特徴である赤と緑のオッドアイは見えない。
そうすると、同じ金色の髪である2人は、事情を知らなければ本当の兄妹だと言われても信じてしまうだろう。
顔立ちが似ているという訳でもないのだが、なんと言うか、雰囲気が似ているのだ。

「……む～」

最初は微笑ましい光景に笑っていたスバルだったが、段々と不満そうに眉を寄せる。

「なんか、ヴィヴィオが羨ましいかも」

自分は隣に座っているのだが、ヴィヴィオはハヤトの膝の上。しかも殆ど密着状態だ。
ハヤトに恋する乙女であるスバルとしては、羨ましがらずにはい

られない。

「……」

ハヤトとヴィヴィオを交互に見つめ、それから「よしっ」と小さく呟いて胸の前で両手を握る。

「ハヤト……寝てるよね？」

「……」

ソファから降り、跪くようにして下からハヤトの顔を覗きこむ。勿論ハヤトは熟睡しており、返事は返ってこない。

「……っ」

軽くハヤトの頬をつつき、狸寝入りではない事を確認したスバルは、意を決して自分の唇をハヤトのそれにそっと重ねる。

それは触れるだけのような軽いキスで、当然ハヤトを起こさないように配慮されたものだ。

「えへへ、なんちゃって」

唇を離し、赤くなった顔を両手で覆いながら小さな声で一人騒ぐスバル。
どうやら彼女の乙女回路は絶賛暴走中らしい。

「ん～～？」

だが、寝惚けたハヤトは右手で自分の唇をゴシゴシと擦る。
どうやら違和感を感じて無意識でそうしたのだろう……が、乙女回路が絶賛暴走中のスバルにとって、それは中々どうしてムカつく光景だった訳で。

「……せいっ！」

「ぽもろっ！？」

気合の入ったスバルの声と、パグンッ！　という小気味いい音が響き、スバルが振るった左拳がハヤトの顎を打ち抜いた。

◇◇◇◇◇

「ヴィヴィオ、いい子にしてるかなぁ？」

「スバルも一緒だし、大丈夫じゃないかな？　多分だけど」

「うん。けど、子供の相手って凄く疲れるから」

「にゃはは。子供の相手を一杯してきてるフェイトちゃんの言葉だから、凄く説得力があるね」

午後の5時を少し回った頃。聖王教会から帰ってきたなのはとフェイトは、そんな事を話しながら自室への廊下を歩く。

予定していた時間よりも遅れてしまった為、自室へと向かう足は少しだけ速い。

「でも、あの子は何でハヤトに懐いたんだろうね？」

「う～ん……精神年齢が近いからだったりして」

「そんなことは……ありそう」

本人がいないから言いたい放題だが、あながち外れてるとは言えないのが悲しいところだ。

そんな風に話しているうちに、なのはの部屋――正確にはなのはとフェイトが共同で使っている部屋――に辿り着く。

「あれ？　声、しないね」

「ホントだ。どうしたんだろう？」

部屋にいるなら聞こえてくるだろう声が聞こえないことに、揃って首を傾げるなのはとフェイト。

もしかしてどこかに行っているのだろうかと思いながら、扉を開けて中を覗く。

「「あ……」」

そして、2人の声が重なった。

その後なのはとフェイトはお互いに顔を見合わせ、小さく笑いあう。

「夕飯、先に食べてこよっか」

「そうしようか」

笑い合う2人の先には、ソファの上で身体を寄せ合って眠るハヤト、スバル、ヴィヴィオの3人。

ヴィヴィオはハヤトの膝に乗って、彼の身体を背もたれ代わりに体重を預け、スバルはハヤトの隣に座り、彼の肩に頭を預けて小さく寝息を立てている。

2人に密着されているハヤトは、寝苦しいのか少しだけ眉を顰めているが、起きる様子は無い。知らない人が見れば、まるで本物の親子だと思ってしまうような光景だ。

そんな3人を見てから、なのはとフェイトは小さく頷き合って、なるべく音を立てないように扉を閉める。

「夕飯食べてきたら、3人を起こさないとね」

「うん。あ、でもスバルはお腹すいたからって起きてくるかも？」

「あはは。確かに」

食堂へと足を向け、冗談を交わしながらのんびり歩く。

その顔には、何だか楽しそうな笑みが浮かんでいた。

余談であるが、この日ティアナと共に事務室で仕事をした局員（エリオとキャロ含む）の全員が、原因不明の体調不良で休むという謎の事態が起きたのだが……スバルとハヤトの事が関係しているかどうか、真相は謎のままである。

勿論、その体調不良の原因も不明であるが、休んだ局員は口を揃えて「オレンジの……オレンジの悪魔が……」と、うわ言のように呟いていたと言う。

if29話　『金髪幼女と恋する乙女と』（後書き）

私はもう駄目なようだ（主に脳が）。
どうも、ラモンです。

新作の案がまとまらなくて、ついカッとなった。
ラヴコメなら何でもよかった。今では反省している。
というわけでお送りしたハヤ×スバのラヴコメです。どうだったでしょうか？
砂糖吐きました？　私は吐きました。

新作の話なんですが、最強って難しいですね。
最強っぽい能力を考えてるはずなのに、思いつくのは『女性限定で身長、体重、３サイズが分かる能力』とか、『女性限定で全身の肌が敏感になる能力』とか、そういう下ネタ系の能力ばかり。
私の脳はどうなってるんだ！

……ゴホン。さて、次回から暫くはこんな感じが続く事になりそうです。
皆、覚悟は出来ているか？　私は出来ている。

それではまた、次の話で。

ｉｆ３０話　『ヴィータさんのお悩み相談室』（前書き）

※最後にちょっと宣伝があります。

if30話　『ヴィータさんのお悩み相談室』

ヴィヴィオが機動六課にきてから1週間が経った。
最初こそ人見知りをして、俺とスバル、そして高町隊長とハラオウン隊長の4人にしか懐かなかったヴィヴィオだが、最近では他の六課メンバーとも結構打ち解けてきた。特にエリオ、キャロの2人とは年も近いせいか特に仲良くなって、休みとか休憩時間に一緒にゲームしてるところを良く見るようになった。やっぱり子供は子供同士が一番ってことだな。

さて、それで全部めでたしめでし……となればいいんだが、そうは問屋が卸さない。
俺こととハヤト＝ロックウェルには、ヴィヴィオの事が些細な事に思える程の問題が、現在進行形で発生中な訳で。
それが何かと言えば……。

「ハ～ヤトッ！　一緒に戻ろうっ！」

「……はいはい」

早朝訓練が終わるなり、俺の右腕にしがみついてくる青髪の少女――スバル＝ナカジマ。
コイツこそ、俺の頭を悩ませる元凶だ。
ヴィヴィオがここに来てから1週間ということは、俺がスバルに告白――と言っていいのかどうか微妙だが――をされてから1週間ということでもある。
ちなみに、返事はまだ出来ていない。だというのに、スバルは特

に俺に答えを迫るでもなく、変わりにこうして毎日積極的にアプローチを仕掛けてくるようになった。それこそ、殆ど時と場所を選ばずに。

何をしてくるかと言えば、こうして腕にしがみつくのはまだ序の口で、普通に抱きついてきたり、食事の時には「あ～ん」をしようとしてきたり、それこそイチイチ挙げるのも面倒なくらいに色々な事を、だ。

多分本人は全く意識していないんだろうが、それは下手に返事を急かされるよりも、俺にとっては苦痛だった。

何せ、俺としてはスバルの事を1週間前の告白で初めて『そういう対象』として見るようになったばかりで、実際アイツの事を自分がどう思っているのか、なんて、全くわからない状態なのだ。

だというのに、スバルは毎日毎日俺に引っ付いてきて、暇さえあれば「好きだよ～」とか言ってくる。

返事が返せないという後ろめたさと、ハッキリしない自分の気持ち。

……自分らしくないとは思うんだが、スバルの気持ちがいい加減なものじゃない訳だから、ちゃんとした答えを考えて返さなきゃならない。そう思うと、どうしても無駄に考え込んでしまうのが、俺という人間の悪いところな訳で。

最近じゃあ夢見が悪くて、ロクに眠れてない。

（はやいうちに、何とかしねぇとなぁ）

スバルの体重を右腕に感じながら、そんな事を思う。

今んとこ、訓練とか仕事には影響が出てないけど、これじゃあそ

のうち必ず影響が出る。
こーゆー事で悩むのは、ある意味夢だったんだがなぁ。まさか実際に体験すると、こうも嬉しくないモンだとは。
やれやれ……。

「ハヤト」

「え？　あ、はい何ですかヴィータ副隊長」

頭を悩ませながら歩き出そうとしたら、いきなりヴィータ副隊長に呼び止められた。
振り返ると、ちょっと不機嫌そうな顔をした副隊長が俺の方を見て――いや、睨んでいる。何かしたっけか？　訓練とか仕事じゃ、特に変な事してなかったと思うんだが……。
そんな風に色々と考えている俺に向かって、ヴィータ副隊長は不機嫌そうなまま口を開く。

「お前、ちょっと残れ」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ３０話　『ヴィータさんのお悩み相談室』

side：―

「ハヤト。お前、何かあっただろ？」

訓練スペースの片隅に移動し、周りに誰も居ない事を確認してから、ヴィータはそう切り出した。

突然核心を突かれ、ハヤトが息を呑む。

「多分１週間前、ヴィヴィオを保護したあたりだな。

上手いこと誤魔化してるつもりだろーが、ここ１週間、ずーっと訓練中の動きがぎこちねぇ」

「う……バレバレッスか？」

「いんや。なのはもフェイトも、シグナムも気付いてねぇだろ。

あたしだって、何となく違和感を感じただけだしな」

バツが悪そうに頭を掻くハヤトに、ヴィータはグラーフアイゼンを肩に担いだまま片眉を上げる。

そうすると、ハヤトは天を仰いで「誤魔化すのは得意だったんスけどねぇ」と溜息を吐く。そんなハヤトを見て、ヴィータは彼の側に寄って背中を叩く。

「何かあったなら話してみろ。とりあえず、相談くらいにゃ乗って

やるぞ」

「副隊長……」

ハヤトを見上げながら、ヴィータがニカッと笑う。
その笑みに気持ちが軽くなったのか、ハヤトはポツポツとヴィータに向かって悩みを話し始める。

1週間前に、スバルに告白されたこと。
その返事が今日まで出来ずにいること。
そもそも、自分がスバルの事をどう思っているか分からないこと。
そのせいで最近、結構な寝不足気味だということ。

「……って、感じなんですけど」

「はぁ～……あのスバルがなぁ」

「びっくりッスよね」

ハヤトが話し終わると、ヴィータは感心したように目を丸めて声を漏らす。
それに同意するように苦笑してから、ハヤトは彼女に「どうしたらいいと思います？」と尋ねてみた。するとヴィータは、ちょっと意外そうな顔になってハヤトを見返してくる。

「どうしたらって……そんなの、お前が考えるしかないだろ」

「相談に乗るって言った副隊長に手酷い裏切りを受けた件」

「アホか」

「ひでぶっ」

突き放す言い方にハヤトが抗議すると、ヴィータはアイゼンで思い切りハヤトの頭を引っ叩く。しかし、すぐに自分の言い方が拙かったのを自覚して、バツが悪そうに「あー」と声を漏らしながら頭を掻く。

「あたしが言いたかったのは、だな。
オメーの気持ちなんて、あたしらが何言ったところで左右されるモンじゃねぇだろ、ってことだ」

「は、はぁ……」

「その程度で自覚したり、左右されたりする気持ちだったら、それは所詮その程度の気持ちってこった。
オメーの気持ちをあたしが推測で語るのは簡単だけどよ。最終的にそれが正しいかどうかなんて、あたしにはわかんねーし。
そんな状況であたしが言ったアドバイスなんて、結局あたしの意見な訳であって、オメーの気持ちじゃねぇ」

饒舌に語るヴィータに、ハヤトは驚いたとばかりに目を瞬かせた。
そんな彼の視線を受けながら、ヴィータは彼を見上げながら言葉

を続ける。

「だからな。あたしがオメーにしてやるのは、こうやって悩みを聞いてやるだけだ」

「……それって、意味あります？」

「あるに決まってんだろ。大体だなぁ、そうやって相談する奴ってのは、結論自体はもう自分の中であるんだよ。ただ、それに自信を持てねーから、誰かに後押しして欲しいだけなんだ」

「はぁ……？」

そう言われて、そんなもんだろうかと首をかしげるハヤト。自分自身ではいまだに答えが出ないままだと考えているので、実感が湧かないのだろう。

しきりに首を傾げるハヤトを見ながら、ヴィータは深々と溜息を吐いて、彼の訓練着の襟にグラーフアイゼンを引っ掛け、そのまま歩き出す。当然、そうすると襟が絞まるので、ハヤトは慌てて体勢を立て直そうとする。

けれどヴィータの力は存外に強く、ハヤトは段々と苦しくなっていく呼吸を必死で確保しながら声を上げる。

「ふ、副隊長！　な、なんスかいきな、り……つか、苦し……っ！」

「いーからついてこい。ちょっとばかし、頭スッキリさせてやらぁ」

その小柄な体からは想像できない力でハヤトを引き摺りながら、ヴィータは訓練スペースの中央を目指す。
辿り着いたのは、普段訓練の最後に全員で模擬戦を行う場所。
そこに辿り着くと、ハヤトの襟に引っ掛けていたグラーフアイゼンを外し、ゲホゲホと咳き込むハヤトに構わず少しだけ彼から距離をとり、バリアジャケットを展開してアイゼンを構える。

「げほっ……ふ、副隊長？」

「よしハヤト。今から模擬戦やっぞ、勿論全力でな」

「うえぇっ！？」

突然の宣言に、文字通り飛び上がって驚くハヤト。
さっきまでの話の流れから、どうして全力での模擬戦になるのかと問いかけるが、ヴィータは「いーから構えろ」と取り合おうとはしない。

「えーと……ホラ、まだ早朝訓練終わっただけですし。
これから午前と午後の訓練とかありますし……」

「今日は休みにしといてやる。それと、もし1発でもあたしに当てられたら、オメーの好きなモン何か1個奢ってやんよ」

「いや、そーゆー話でなくて……何でいきなり模擬戦を？」

「それ話したら、オメーの為にならねーから、今は教えねぇ。いいから構えろ。
やんねーなら午後の訓練１０倍だ」

そう言われては断りようもなく、ハヤトは渋々ブレイブハートを起動。バリアジャケットを纏ってヴィータと相対する。

「よーっし。そんじゃまぁ……いっくぞぉっ！！」

開始の合図を高らかに叫びながら、ヴィータはアイゼンを振り上げ、ハヤト目掛けて弾丸のような速度で突っ込んできた。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

「おっらぁぁっっ！！！」

「どわあああっ！？」

ヴィータ副隊長が振るったアイゼンを、思いっきり上体を逸らして避ける。

こっわ!?　この人マジで全力じゃねーか!!　何これ虐め!?

「ほらほら!　ボーっとしてんじゃねぇぞっ!!」

「勘弁してくださいっ!」

嘆く暇すら与えられず、殆ど勘を頼りに思い切り後ろに跳ぶ。

けれど、ヴィータ副隊長はそれすら読んでいたようで、間髪いれずに俺との距離を一足で詰めてきた。

「どうしたハヤト!?　シグナムに鍛えられてんのに、その程度かぁっ!?」

「シグナム副隊長とヴィータ副隊長じゃ、戦い方が違いますよっ!」

「そうかいっ!!　ぶち抜けぇぇえええっ!!」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

もうこの人ガチで俺の事殺しにきてんじゃねぇの!?　って位に全力で振るわれた副隊長の攻撃を全身全霊で張ったプロテクションで受け止める。しかし、直ぐにピキピキと亀裂が入り俺は慌てて更

に魔力を込めてプロテクションを強化。
けど、ヴィータ副隊長はそれを気にしないように更に足に力を込めて、俺の体をプロテクションごと吹っ飛ばす。
何なのこの無駄なパワー！？　アイスか！　アイスが原動力なのかっ！？

「ってアホな事ばっか考えてらんねぇっ！　ディバインバスターーッ！！」

吹っ飛ばされながら空中で体勢を整え、副隊長目掛けて砲撃を放つ。
咄嗟だから集束もクソもねぇけど、流石にこの威力なら足止めくらい……。

「いよいしょおおおおっっ！！」

「うそおおおおっ！？」

とか思ってた時期が俺にもありました！
ヴィータ副隊長は、あろう事かその場で俺の砲撃を、グラーフアイゼンで『思い切りぶん殴った』。
風を切って唸るアイゼンに横からぶん殴られて俺の砲撃は、あえなくその軌道を大きく逸らし、明後日の方向に飛んでいってしまった。もうヤだあの人、滅茶苦茶にも程があんだろ。

「……マジで？」

「オラオラ！　ボーっとしてんなって、言っただろうがっ！！」

「うっひゃあああっ！？」

怖っ！？　今ちょっと掠ったって！　頬切れたって！
ヤバイですってヴィータ副隊長！　これ以上やったら俺死んじゃいますって！！

「死ぬ2歩手前ぐらいで勘弁してやる、安心しろぉっ！」

「安心できねぇぇぇぇっっ！！」

・　・　・　・

「……」

「おう。生きてっか？」

「へんじがない。ただのしかばねのようだ」

「返事してんじゃねーか」

模擬戦開始から大体1時間……ぐらいだと思う。

途中から時間の感覚なんて無くなって、ひたすらに逃げ回ってたからなぁ……生きてるって、素晴らしいネ！

なんてことを息も絶え絶えな様で大の字に寝転がりながら考えていると、汗一つかいてないヴィータ副隊長が面白そうにニヤつきながら俺のことを覗き込んできた。

……この人マジでバケモンだ。

そりゃ、俺とヴィータ副隊長じゃ実力にすげー差があるとはいえ、一応お互い全力だったんだぞ？　なのに息が弾むどころか汗一つかかないとか……。

「その様子じゃ、もうあーだこーだ考える余裕はねぇな？」

「……ある、ように、見えたら……眼科、行ってくだ、さい……」

「ん。そんじゃ、目ぇ閉じろ」

「……？」

その言葉の意味を考える余裕もないので、言われるまま目を閉じる。

あー……やっべ、疲労感がスゲーからこのまま寝そう。でも寝たら殺されるだろうなー、物理的に。

なので、飛びそうな意識を繋ぎ止めながら、ヴィータ副隊長の言葉を待つ。

「ハヤト。今、オメーの中で一番大きな存在になってんのは誰だ？」

そして唐突に聞こえてきた質問に、少しだけ疑問を覚える。

けど、それについて考える体力的、精神的余裕も無くて、言われるまま考えて答えた。

「……スバル、ですかねぇ」

「そうか。それじゃあ、それがお前の悩みに対する、あたしの答えだ」

「……は？」

唐突な副隊長の宣言に、思わず目を開けて身体を起こす。

そうすると、ヴィータ副隊長はグラーフアイゼンを肩に担いだまま、俺の方を真剣な顔でじっと見つめて、それから口を開く。

「オメーの、そーやって色々と細かい事まで考えるトコ、あたしは評価してっけどな。

でもよ。たまにゃ、そーやって頭を空っぽにして考えるってのもアリだと思わねーか？」

「……でも、今の「あたしは」……」

咄嗟に否定しようとして、副隊長に遮られる。

「あたしは、恋愛なんざわかんねぇ。興味もねーしな。けど、人を好きになるってのがどんな感じなのか、想像するぐれーは出来る」

言いながら、副隊長は俺の頭をグラーフアイゼンでコンコンと軽く叩いてくる。

……なんだろ。見た目は俺より小さいのに、副隊長がすっげー大人に見えてしまう。

「好きになった奴ってのは、いつの間にか自分の中で一番大きな存在になってた……そーゆー奴のことだと思う。

そーだな……例えば、告白されたからってんで、この1週間そいつの事しか考えられなかったり、な」

「……」

「そもそも。本気で何とも思ってないなら、オメーの性格からして直ぐに断ってるさ。

断ったら関係が気まずくなるかも、なんて言い訳すんなよ？　オメーは屁理屈だけは一流なんだ。そーゆー事にならねーように断るなんざ簡単だろ」

副隊長の意見は的を射ていて、何も言い返せなかった。
言われるまで気付かなかったけど、確かにいつもの俺なら、こんなに悩まなかっただろう。スバルを傷つけないように断るなんて、別に難しいことじゃない。はぐらかして、やんわりと断ること位は出来ると思う。けど、俺はそうしなかった。
……でも、だからってそういう結論になるんだろうか？

「まぁ、これもあたしの推測だけどな。参考ぐらいにはなっただろ？」

そんな俺の考えを見透かしたように、副隊長はそういう言葉で会話を締め括って俺に背を向けた。そして、2，3歩足を動かしたところで「ああ」と小さな声を漏らしてこっちを振り返る。

「今日の訓練は休んでいーぞ。あたしからなのはに言っとく。いまの気持ちも含めて、じっくり考えてみな。自分の気持ちなんて、結局のところ自分にしかわかんねーんだから」

「……うっす」

俺の返事に満足したのか、ヴィータ副隊長は「そうかそうか」と白い歯を見せて笑った。
見た目とは不釣合いにさえ見えるその大人っぽいその仕草に、思わず憧れてしまう。

「カッコイイっすね、副隊長」

「ちっげーよ馬ァ鹿。あたしはカッコイイんじゃなくて、“イイ女”なんだ」

何となく思ったことを口に出せば、副隊長は片眉を上げて得意げに言い返す。

「……それ、自分で言います？」

「うっせ。それじゃあな」

それに対してからかうように返すと、副隊長は苦笑しながら俺に手を振って去っていった。

その背中が完全に見えなくなるまで見送ってから、息を吐いてまた寝転がって空を見る。

「……俺の気持ち、ね」

空を見上げて呟く俺の頭に浮かぶのは、スバルの笑顔。

考えてみりゃ、ここ1週間はスバルの事ばっかり考えてた気がする。でも、それはアイツに返事を返すためだとずっと思ってた。

だけどこうやって余計なこと考えらんねー頭で考えてみると、素直にアイツが好きなのかもって思う。

思うけど……同時に、コレってヴィータ副隊長に言われたからじゃね？　とも思う訳で。

「難しいモンだなぁ……」

憧れてはいたものの、実際に悩むとなると大変なんだって事を実感しながら、それでも頭ン中は前よりもずっとスッキリしていた。

これなら、スバルの事も少しは冷静になって考えられるかも知れない。ヴィータ副隊長に、後で感謝の品でも送らないとな。……いや、でも扱かれた分で相殺か？

気分が軽くなった俺は、空を見上げつつ、そんなどーでもいい事を延々と考えていたのであった。

if30話　『ヴィータさんのお悩み相談室』（後書き）

うーん……青春って難しいですね。
どうも、ラモンです。

今回は「ヴィータさん超かっこいいッス！」をコンセプトに、ハヤトに気持ちの整理をさせてみました。
何故ヴィータかといえば、こういうお節介というか、部隊メンバーの事を相談に乗ったりするっていう行動を、隊長陣の中で一番やりそうだったから、ですね。
誰にやらせようかって考えた時に、何故か彼女しか適役いねーって思ったぐらいですから（笑）

しかし今回は難産でした。
なにせ、ヴィータのキャラを崩さずに、ハヤトに自分の気持ちをある程度気付かせる台詞を考えなきゃいけなくて……それがまぁ難しい難しい。
その結果、個人的にはそれなりに満足いく出来になりましたが……ヴィータのキャラ崩れてません？　大丈夫でしょうか？
それだけが、凄く心配で夜も眠れません。いえ、投稿した時はまだ夕方ですけれど。

さて、次回はギンガ合流の話あたりを書く予定です。
そして日常編をもう1，2話やってから『その日、機動六課』編に突入……という予定でいます。ハヅキに関しては、登場するかどうか微妙です。
ストーリー上必要といえば必要なんですが、無理に出す必要も無いと言いますか。

とりあえず、彼女の登場はあまり期待しないで次回をお待ちください。

それではまた、次の話で。

※宣伝です

先日、最強主人公モノを投稿し始めました。

タイトルは『私が最強モノを書いたら、こんなん出来ました。』です。

多分あまり見たことのない主人公設定になってると思うので、良ければ見てやってくださると、作者が目と耳から血を流して喜びます。

if31話　『お義姉ちゃんと呼ばないで！？』

「ハヤトッ！　ご飯食べに行こっ？」

「はいはい、ちょっと待ってろ。この書類終わってからな」

「ぶ～……いいじゃん、それは午後にすればさぁ」

「そーゆー訳にいくかよ。隊長に怒られるだろうが。大人しく待ってろ」

「むぅ、は～い」

後ろから抱き着いてきたスバルを適当にあしらいつつ、書類を整理していく。

ヴィータ副隊長に力ずくなアドバイスをされてから、前みたいに変にスバルを意識する事は無くなった。もちろん、返事をしなくていいと思ってる訳じゃないんだけどな。

なんつーか……落ち着いて考えることが出来てる？　とかそんな感じだ。

「……随分、仲いいじゃない？」

「そうでもねーだろ。こんぐらいさ」

隣で同じく書類を片付けてるティアナが、拗ねてるような顔でこ

っちを見てくる。
スバルが俺とだけ仲良くしているのが、随分と気に入らないらしい。まぁ、前はスバルの奴、ティアナにべったりだったからなぁ。寂しいんだろう。

「……ば～か」

「いきなり馬鹿とは失礼な。馬鹿はスバルだろ」

「ば、馬鹿じゃないもんっ！　これでも、訓練校で主席だったんだからねっ！？」

「知ってる。お前はアレだ、頭の良い馬鹿ってヤツだ」

「ティア～……ハヤトが酷いよぉ……」

少しからかってやると、スバルが泣きそうな顔をしてティアナにしがみつく。

「あーもー、引っ張らないでよ。仕事の邪魔でしょ！」

しがみつかれたティアナは、いつもの調子でスバルを振りほどく。いつもの、当たり前の光景。だってのに、スバルだけを目で追いかけてしまうのは……やっぱ、そういう事なんだろうか？
あーあ。ヴィータ副隊長に相談したってのに、こうやってまだウジウジ悩んじまうあたり、なかなかどうして重傷みたいだな、俺も。

「……ん。とりあえず俺の分はこれで終了だな。ティアナ、そっちは？」

「こっちも終わりよ。ふぅ」

最後の一文字を打ち終わり、隣でキーボード叩いていたティアナに尋ねれば、丁度俺と同じタイミングで終わったらしく、背伸びをしてから溜息を吐いた。

それを確認してから、自分の書いた書類をざっと見直して、高町隊長に向けて送信する。

画面に『送信中・・・』という文字が『送信完了』へと変わるのを見届け、後ろで待っていたスバル達を振り返って声をかけた。

「終わったぞ。それじゃあ飯食いに行くか」

「おーそーいー。お腹と背中がくっつきそーだよ」

「くっついたら昼飯を奢ってやろう」

「馬鹿なこと言ってないで行くわよ。ほら、スバルもハヤトに引っ付かない！」

「あぅ、ティアが叩いた～」

書類を作り終えたデスクの電源を切ってから、スバル、ティアナ

の２人とギャーギャー騒ぎつつ食堂へと向かう。どうでもいーんだが、２人揃って腕にしがみつくのは止めて貰いたい。
凄まじく歩きにくいんだっつーの。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ３１話　『お義姉ちゃんと呼ばないで！？』

一難去ってまた一難……とはよく言ったもので。
スバルについてのアレコレがひと段落したと思った俺にとって、全く嬉しくない事が起きていた。いや、現在進行形で起きている。というべきか。

「さて。今日は朝練の前に、ひとつ連絡事項です」

整列した俺達フォワード５人の前には、隊長達４人と、フィニーノ陸士。
そしてハラオウン隊長の隣には初対面の眼鏡美人のお姉さんが立っていて、ヴィータ副隊長の隣には――。

「陸士１０８部隊のギンガ＝ナカジマ陸曹が、今日から暫く六課に出向になります」

脳筋巨乳女……じゃなくて青ロングの怪力女……でもなくて、俺の宿敵にしてスバルの姉でもある、ギンガ＝ナカジマが立っていた。

しかも俺の耳がおかしくなっていないなら、暫く六課で俺らと一緒に仕事するとの事。

正直聞き違いであって欲しいのだが、スバルが大喜びしてる所を見る限り、どうやらその可能性は大分低いようだ。テンション下がるってレベルじゃねぇぞ！！

「陸士１０８部隊、ギンガ＝ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします」

「「「「よろしくお願いします」」」」

「……しま～す」

テンションがバカみたいに下がっている間に、スバル達がギンガに向かって敬礼しながら挨拶をしたので、俺も続けてボソッと挨拶しておく。……まあいい。ギンガのことは後回しだ。

俺は気を取り直して、視線を動かしてギンガではなく、初対面の眼鏡美人のお姉さんを見る。肩口でちょっと反り返ってる緑色のセミロングが特徴的名、俺好みの綺麗なお姉さんだ。

顔はとても好みなんだが、惜しむらくはおっぱいがやや小さめだということだろうか。だが、それでも標準よりは大きめだ。目測だから何とも言えんが、ＤかＥはあると見たね！

「それともう一人」

おねーさんをそれとなく観察していたら、ハラオウン隊長がお姉さんの紹介を始めてくれた。

俺、この紹介を聞いたらお姉さんをデートに誘うんだ。

「１０年前から家の隊長陣のデバイスを見てきてくださっている、本局技術部の精密技術官」

「マリエル＝アテンザです。気軽に声をかけてね」

アテンザ技官か……うむ！　素晴らしい名前だ！

それではいざっ！！

「アテンザ技術官！　デートしてくだ――「お前は黙っていろ」――シュランゲっ！？」

気合を入れて手を挙げ、デートを申し込もうとした瞬間。鞭の様に伸びてきたシグナム副隊長の愛剣、レヴァンティンの刃に切り刻まれて宙を舞った。

……副隊長。コレ、ツッコミって言うにはちょっと過激すぎやしませんか？

心の中でそんな事を思いつつ、とりあえず空中で体勢を整えて着地。

ふっ、慣れたもんだぜ俺もよ。

「ふむ。アレでも体勢を整えられるようになったか……これからは、もう少しキツ目の訓練もいけそうだな」

「シグナム副隊長！！　それは訓練という名の処刑だと思います！」

「問答は無用だ」

「ひでぇ！　教える側の言葉じゃねーッスよ！？」

「黙れ。今度は本気で斬ってもいいのだぞ？」

真顔で脅されて、泣きそうになりながら押し黙る。

こえぇよ……アレは狩人の目だよ。これ以上喋ったら、本気で斬るつもりだよあの人。

ち、ちくしょう！　八神部隊長に、「シグナム副隊長がお笑いを理解してくれない」って言いつけちゃうんだからねっ！？

「おーっし。んじゃ、コントも済んだとこで早速、今日も朝練いっとくか！」

しかも流されたし！　俺は悲しいですヴィータ副隊長！

せめて弄って！

「それじゃあ、ライトニングは私のところに集まってね」

「「はい！　フェイトさん！」」

「ティアナは今日もあたしとだ。突撃型の裁き方、第６章いくぞ」

「はい！」

しかも他の皆まで俺の事無視するしっ！

泣くぞ？　本気で泣くぞ？　今すぐ泣くぞ！？

「ロックウェルは私とだ。くだらん事を言う体力も残らんように、扱いてやる」

「ぅへーい」

などと遊んでいたら、シグナム副隊長に襟首を引っつかまれて引き摺られていく。

逆らったら本気で斬られそうだから、ここは大人しく副隊長にされるままに、力なく返事を返しておく。……どーでもいいけど、シグナム副隊長俺のこと引き摺るの慣れてるなぁ。

まぁ、毎回毎回訓練でシグナム副隊長の担当になるたびに引き摺られてるんだ、そりゃ慣れるわな。

え？　引き摺られるようなことするなって？

無理無理。俺の性格上不可能ですわ。

◇◇◇◇◇

「はい、皆集合～！」

朝練のメニューを終わらせて、訓練スペース中央に集まる。

よかった、今日も無事に生き残れた。訓練着は相変わらず襤褸切れになっちまったがな。

……後でコレ捨てて、新しいの貰わんとなぁ。

「それじゃあ折角だし、ギンガも入れたチーム戦、やってみようか」

ボロボロになった訓練着を見ながら溜息を吐いていると、俺たちを見回した高町隊長がそう切り出した。

チーム戦、と言われて思いつくのはひとつしかないワケで。俺達は全員「あぁ、またか」みたいな感じでお互いの顔をみて苦笑する。

今日合流したばっかのギンガは、すげぇ驚くだろうな。ふ、驚きのあまり心臓発作でも起こすといいよ。

「フォワードチーム６人対、前線隊長４人チーム！」

「……え？」

案の定、隊長の口からでた内容にギンガが目を丸くして絶句する。
そりゃあそうだろう。高町隊長1人ならともかく、エース級の隊長4人と新人6人でのチーム戦とか言われたらな。俺らだって、最初に聞いた時は驚きのあまり飛び上がったもんだ。

「いや、あのねギン姉。これ、時々やるの」

「隊長達、かなり本気で潰しにきますので」

「まずは地形や幻術を駆使して逃げ回って」

「どんな手を使っても、決まった攻撃を入れられたら、撃墜になります」

目を丸くして固まっているギンガに、ティアナ達が説明していく。
実際、キツイ訓練なんだよなぁ。虐めですかとガチで思うくらいに。
だってアンタ、高町隊長だけでも半端じゃなく強いってのに、隊長と互角な人達が3人ですよ？　これを虐めと言わずして、何を虐めと呼べばいいのやら。

「ギンガはスバルと同じく、デバイス攻撃ね。左ナックルか蹴り、どれかが当たれば撃墜判定」

ティアナ達の説明が終わったあたりで、高町隊長がギンガの当たり判定を指定する。

スバルと同じってことは、まぁ基本前衛だわな。ギンスバ姉妹のツートップってのが妥当か？　ふむ、作戦会議の時にでも話し合っておくか。

「……わかりました！」

「うん。それじゃあ、やってみようか！」

「「「「「はい！」」」」」

「ベテランの隊長チームに、新人６人が挑む。俺の田舎ではコレを虐めって言うんですよね！」

「オメーは黙ってろ」

「ヴィータ副隊長酷い！？」

隊長の掛け声に頷くスバル達を横目に、俺はやれやれと肩を竦めた。

何でこいつらは、こんなに元気有り余ってんだかねぇ。

……ん？　この考えって、もしかして随分と年寄り臭かったりしねぇか？

ｓｉｄｅ：―

「いつものことだけど、なのはさんをどう捌くかが鍵ね」
「だな。今回はギンガがいるし、フォーメーション変えてみねぇか？」
「だけど、それじゃあ連携とり難くならない？」
フォワードの6人は、訓練スペースの一角で作戦会議をしている。
とはいえ、実際に作戦を立案しているのはハヤトとティアナの2人だけで、残りの4人は思い思いに身体を解しているというのが現状なのだが。
「ギンガとスバルのツートップにして、エリオをフリーにして俺らのカバーに回せば大丈夫だろ。
スバルはギンガに慣れてるし、俺らもギンスバコンビなら慣れてる」
「でも、それだったら3トップの方が攻撃力が増すんじゃない？」
「駄目だろ。エリオはギンガとの連携に慣れてないんだし、下手に組ませたら逆効果だ」
「ん～……それはそうだけど……」

「……相変わらずこういう時は別人なんだね、ハヤト君」

真剣な表情でティアナと議論するハヤトをストレッチをする横目に眺め、ギンガは苦笑しながら呟いた。

すると、彼女の隣で同じくストレッチをしていたスバルが、熱の篭もった声でその呟きに答える。

「うん。ハヤト、カッコいいでしょ？」

「え？」

聞こえた声に、ギンガは驚いて妹の顔を見た。

そして、頬を染めて彼を見ているスバルの顔を見て、つい先日妹から貰ったメールの内容を思い出し、ちょっと呆然としながら問いかける。

「スバル……あのメールって、本気だったの？」

「え？　あのメールって……」

「ハヤト君に、ペアリングあげたっていうメール」

「あ、うん。本気だよ～」

恐る恐るという感じで尋ねた姉に、スバルは恥ずかしそうにはに

かみながらも、あっけらかんと返事をする。
まさかあっさりと返事を返されるとは思っていなかったので、ギンガは妹の返事に驚き、ぽかんと口を開けてスバルの事を見た。
冗談かもと思ったが、視線の先でハヤトを見つめているスバルの目は、恋をしたことがないギンガでも分かるような『恋する女の子』の目で。それを見たギンガは、まるで妹が自分の手元から去っていってしまうような、そんな錯覚を覚えた。

（まさかあのスバルが、しかもハヤト君になんて……）

ハヤトとスバルを交互に見て、ギンガは寂しさを感じている自分に少しだけ驚いた。
母親が死んでから、ギンガはずっとスバルの姉であり、母親代わりでもあった。だからだろう、ギンガがスバルの初恋に戸惑いを覚えたのは。

「……いつの間にか、大きくなっちゃったんだね」

「え？」

一人呟いて苦笑すれば、スバルが不思議そうな顔で首をかしげる。
そんな妹に「なんでもないよ」と笑いかけた。

「おーい、作戦教えるから全員集合ー」

その時、丁度ハヤトの声が聞こえてくる。
まあ、妹の恋を応援するかどうかは、この模擬戦が終わってから考えよう。模擬戦とはいえ、ちゃんとした戦いなのだ、戦闘中に余計なことを考えるのは命取りだから。
ギンガはそう結論付けて、ハヤトとティアナの元へと向かうのだった。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

「凄いね～、いつも朝からこんなにキツイの？」

模擬戦が終わった後、全員でクールダウンしていると、ギンガが俺の方を向いて聞いてきた。
ちなみに模擬戦は俺達の負け。あとちょっと、というところまでは行ったんだが、やっぱり経験の差が出たという感じで、ギリギリで負けてしまった。
元々そう簡単に勝てるとは思ってなかったんだが、やっぱり悔しいもんだ。

「そうだなぁ……大体いつもこんなモンだ。出動に差し支えが無い

程度まではギリギリに、な」

「密度、濃いんです」

俺の説明に、キャロが苦笑しながら続ける。
しかしだなキャロよ。アレは密度濃いってレベルを超越してると思うぜ？

「それで、練習後はガッツリ食べて、バッチリ回復」

「そして体重の方もガッツリですねわかります」

「う〝……そ、そんなことないもんっ！！」

俺のツッコミに、顔を真っ赤にして抗議してくるスバル。
だが俺は知っているのだ。ここ最近、ＦＷ女性陣がさりげなく食事の量を減らしている事を！　ふふふ、フィニーノ陸士からの情報だから間違いは無いんだぜ。

「ま、真偽はどっちでもいいけどなぁ」

「う～、ティアも何か言ってやってよー」

「言い返したり反応したら負けでしょ、こーゆー場合」

ティアナは俺の扱いに慣れたモンで、肩を竦めて取り合おうとしない。
ぬぅ、この女やりおる。こうなったらティアナの体重をここで暴露するしか！

「……殺されたい？」

「生きていたいです」

人の思考を読んだ挙句に銃口を向けないでください。
怖くて泣きそうになります。というか涙出てきました。

「もう、ハヤト君は相変わらずデリカシーが無いんだから。前にも言ったでしょ？　女の子はデリケートなんだから、優しくしてあげなさいって」

そうしていると、ギンガがちょっと眉を寄せて俺の側に寄ってきてお説教を始めやがった。
しまった、コイツの説教センサーに引っかかっちまったか。あーもー、コイツ説教始まると長いから嫌なんだよなぁ。しかも何でか知らんが逃げるに逃げられないし。
何が悲しくて同い年のコイツに、訓練校の先生からされてたような説教を喰らわなきゃなんねーんだっつの。

「ハイハイソーデスネー」

なので、とりあえずギンガの説教は右から左に受け流しつつ、適当に相槌だけ打っておく。

どーせアレだ、管理局員としての心構えだの、年上としての心構えだの行動だのについて熱く語るだけだもんコイツの場合。もう耳にタコが出来るくらい聞いたから、半分暗記しちまったよ。

「……なんだから。って、ちょっとハヤト君聞いてる？」

「ハイハイソーデスネー」

「聞いてるならいいけど……それでねハヤト君」

「ハイハイソーデスネー」

「やっぱり聞いてないでしょ！？」

「ハイハイソーデスネー」

「もーっ！」

どうやら聞き流していたのがバレたらしく、ギンガは『ぷんぷん！』と擬音が聞こえてきそうな程に眉を吊り上げ、俺の方へと詰め寄ってくる。

「ちゃんと聞きなさいっ！」

「聞いてるだろー。そんな大声だすなって、飴いるか？」

「あ、うん。ありがとう」

誤魔化しがてら、訓練着の秘密ポケットに入れておいた飴（ミント味）を渡すと、あっさり引っかかって飴を口に放り込んで幸せそうな顔になるギンガ。

……やっぱコイツ馬鹿だ。

「おいし～……ってそうじゃなくて！」

「ちっ。飴ぐらいじゃ誤魔化されなかったか」

「当たり前ですっ！　私の事を何だと思ってるの！？」

「脳筋」

「の、脳筋！？　失礼なっ！！」

俺の言葉に、ギンガは「キーッ！」と大声を出して地団駄を踏む。

子供かお前は。

そんな反応が面白いのでついついもう少しだけからかってみたくなり、俺はニッコリと笑いながらギンガの肩をポン、と叩く。

「……そうだな、悪かった。お前は脳筋なんかじゃないよな」

「ハ、ハヤト君……そうよ。わかればいいの」

「ちょっと、脳みそが筋肉で出来てるだけだよな？」

「そうそう……って、ん？　あれ？」

「やーいやーい！　自分で脳筋って認めてやんのーっ！　ばーかばーかっ！」

ギンガを全力で馬鹿にしながら、隊舎に向かって駆け出す。

多分こんだけ馬鹿にすればいい加減キレると思うんだよね、経験的に。なのでヤツに捕まる前に逃げ出したという訳だ。捕まったら、きっとボコボコにされるしな。これまた経験的に。

……まぁ、よくよく思い返せば、逃げられた試しが無いんだがな。

ｓｉｄｅ：―

「……っ！！」

「あわわ。ギン姉、落ち着いて！　ね？」

「あの、ホラ、ハヤトが馬鹿なのはいつもの事ですし」

ハヤトに馬鹿にされ、怒りでプルプルと震えるギンガを、スバルとティアナが慌てて宥める。
まぁどう考えてもハヤトが悪いのだが、ギンガが本気で怒ると周りの被害がそれなりに酷いので、何とかここで抑えようという訳だ。

「そうよね……ここで怒ったらハヤト君の思う壺だもんね」

「そ、そう！　そうだよギン姉！」

「あの馬鹿なんて、相手にすること無いですって！」

必死になって宥めた結果、何とかギンガが落ち着きを取り戻し、ホッと安堵の息を吐く2人。
そんな2人をよそに、ギンガは頭の中である想像を考えていた。

（……待って。もしハヤト君がスバルと付き合うような事になって、あまつさえけけ……結婚、とかいう非常事態になったとしたら、私、ハヤト君に『お義姉ちゃん』とか呼ばれることに!?
無理無理無理無理！　そんなのいろんな意味で耐えられない！！
絶対に無理っ！）

どうやら随分と思考が暴走気味だが、残念なことにコレは彼女の脳内で呟かれたことなので、特にそれにツッコミを入れる人間は存在しない。
そんな暴走した思考の末、ギンガはガバッ！　と起き上がり、スバルの肩を思い切り掴んだ。

「ひゃあっ!?　ギ、ギン姉?」

「スバル……」

「な、何?」

尋常ならざる迫力のギンガに、思わずたじろぎながらも何とか返事をするスバル。

そうすると、姉であるギンガはスバルの目を必死な形相で睨みつけながら、大声で叫んだ。

「私は!　絶対に!　認めませんからねーーーっっ!!」

「な、何がーっ!?」

その叫びは、機動六課の敷地内全てに響き渡るほどだったと言う。

side:―

if31話　『お義姉ちゃんと呼ばないで!?』（後書き）

スバルルートが、本格的にラブコメっぽくなってしまった件。
どうも、ラモンです。

という感じで、ギンガが合流しました。
なんかね、ギンガってこんなキャラだっけ？　とか思いつつ書いてました。
ギンガファンの方、こんなのギンガじゃないって怒らないでください。悪いのは全部ハヤトなんです。

まぁ冗談は置いておいて。
次回もまたこんな感じの日常回です。次はヴィヴィオメイン……の予定ですが、果たしてどうなるか、私にもわかりません。
何だか、ナカジマ姉妹とハヤトの絡みをもう少し書きたい気もしますし、この際とっととハヤトに告白させたい気もするし……。

まぁとりあえず、日常回を1，2話ほど挟んだら、いよいよ『その日、機動六課』編へと突入です。
果たしてスバルルートは本当に全編ラブコメ一直線でいくのかどうか！？
乞うご期待！　……でも、ホントどうしよう。

それではまた、次の話で。

if32話　『日常と、非日常』

side：―

「むぅ……」

「にゅ？　どしたの、おにーちゃん」

機動六課の中庭、そこにあるベンチでヴィヴィオを膝に乗せながら、ハヤトが小さく声を漏らす。中庭に見える人影は、2人以外には少し離れた場所に居るザフィーラの姿だけ。

なのはとフェイトは仕事で出かけており、スバル達は事務仕事、普段はヴィヴィオの世話を担当しているアイナ＝トライトンも、今日は買出しということで朝早くから出かけていた。

そこで、アイナが帰ってくるまでの間、ヴィヴィオが最も懐いているハヤトが世話を代行することになったのだ。ザフィーラが居るには居るのだが、彼は護衛が主な任務であり、あまり子供の世話は得意ではない。

「……これ。何だかわかるか？」

「なぁに、それ？」

膝の上に乗ったヴィヴィオに、右手で転がしていた指輪を見せる。ヴィヴィオは日光を照り返して光るその指輪を何度か突いてから、

不思議そうな顔でハヤトの事を見上げた。
そんな彼女に苦笑を返しながら、ハヤトは説明しようと口を開く。

「ペアリングっつってな、好きな人に贈る指輪なんだ」

「ぺありんぐ～？」

「そう。好きな人に告白する時に贈って、指に嵌めて貰えたら告白成功。突っ返されたら失敗って感じの告白手段だな。ヴィヴィオも大きくなったらやる事になるかもだし、覚えておきな」

「う～……？　よくわかんない」

口を尖らせ、ベンチに座って足をブラブラさせるヴィヴィオに「まだちょっと早かったか？」と笑いながら、自分の膝の上に乗って居るヴィヴィオの頭をわしゃわしゃと撫でる。

「やぁの、髪の毛くしゃくしゃってしたら駄目なの～」

「はっはっは。駄目と言われるとやりたくなるのが人情よ」

「やぁなの～！」

そのまま撫で続けていると、いい加減にしろとばかりにヴィヴィオが身を捩ってハヤトの膝から飛び降りる。
ソレを見て、移動するのかと思ったザフィーラは身体を起こすが、

ヴィヴィオはハヤトをビシッと指差しながら「今度やったら噛むからねっ！」と大声で宣言して、それから再び彼の膝に飛び乗った。

「……」

（ザッフィー、ご苦労さん）

ヴィヴィオが膝に飛び乗ったを見て再び体を芝生の上に寝かせるザフィーラを見ながら、ハヤトは心の中で彼を労う。行動予測のし辛い子供を護衛するのは、実は結構な重労働なのだ。

「それでおにーちゃん。そのぺありんぐ？　がどーしたの？」

「んー……スバルから貰ったんだけどさ」

「スバルおねーちゃんから？」

「そうそう。んで、それから1週間ぐらい経ってんだけどまだ返事出来てなくてな。
どーすっかなぁ……って思っててさ」

ハヤトの言葉に、ヴィヴィオは顔に疑問符を浮かべて首を傾げるばかり。
まぁハヤトとしても、まだ子供であるヴィヴィオが理解出来るとは思っていないので、半分は自分自身に言い聞かせるような感じで話しているのだが。

「ホント、困ってんだよなぁ」

膝に乗せたヴィヴィオの頭に顎を乗せながら、ハヤトはそう言って嘆息するのだった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ３２話　『日常と、非日常』

「おにーちゃんは、スバルおねーちゃんが好きなの？」

不意に、頭にハヤトの顎を乗せられているヴィヴィオが尋ねる。
その問いにハヤトは「ん～……」と悩むように小さく声を貰した。

「好き、だとは思うんだけどな。自分でもハッキリわからねーんだわ」

「自分のことなのに、わからないの？」

「だから困ってんだよ。兄ちゃんは」

「ふ～ん。難しいねぇ」

「あぁ。難しいな」

膝に乗せたヴィヴィオの声に応えながら、ハヤトは空を仰ぐ。
ヴィヴィオもハヤトに倣って空を見上げて、膝に乗った事で地面から浮いた足をブラブラさせ、身体を少しだけ左右に揺らしながらハヤトの胸に体重を預ける。

「恋は病気ってのも、何となく納得できらぁな」

「おにーちゃん、びょーきなの？」

「ん～……“恋患い”って言うくらいだし、ある種の病気なのかも」

「そっか。だいじょーぶ？　おにーちゃん」

心配そうに自分を見上げるヴィヴィオの額に自分の顎を乗せ、軽く体重を乗せてグリグリと動かす。
そうすると、ちょっと痛いのかヴィヴィオは「やぁ～なの～」と身体をよじって彼の膝の上から身体をどかそうとする。けれど、ハヤトは上手い具合に体重を移動させて、ヴィヴィオが逃げられないようにする。

「やぁの。痛いの～っ！」

「はっはっは。兄ちゃんは元気だから、ヴィヴィオは余計な心配しなくていーんだぞー」

「うーっ、にゅーっ！」

いい加減怒りそうなヴィヴィオの声を聞いて、ハヤトは顎をどかして「悪い悪い」と笑う。

すると、ヴィヴィオは暫く「ぷーっ！」と肩を怒らせて頬を膨らませていたが、怒りが一段落すると、もう一度空を見上げ、ハヤトの胸へと体重を預けた。自分の胸の辺りにかかってくるヴィヴィオの体重を感じながら、ハヤトは同じく再び視線を上に向け、そこから動かさずに呟く。

「スバルとティアナはさぁ、何だかんだで家族以外じゃ一番長く一緒に居た奴らなんだよな。

3人でチーム組んでたってのもあるけど、それ以上に気が合うんだよ」

「おにーちゃん達、仲良しだもんね」

「だろ？　……だから、なんだろうな。

こういう状況になってもまだ、スバルへの『好き』って気持ちが『友達に対して』なのか、『異性に対して』なのかが、イマイチふんぎりつかないのは」

「んぅ？　どっちも『好き』なんでしょ？　ちがうの？」

不思議そうな顔で聞いてくるヴィヴィオに、どう説明したものかとハヤトが苦笑し、そして、彼女の髪を梳きながら言葉を続ける。

「ヴィヴィオも誰かを好きになったらわかるさ。友達への好きと、異性への好きの違いがな」

「……？　でも、おにーちゃんは分かるんだよね？」

「そうだな。何となくだけど」

「じゃあ、おにーちゃんはスバルおねーちゃんを、『いせー』として『好き』なんじゃないの？」

「……あ」

何の気なしに発せられたヴィヴィオの言葉。
それを聞いて、ハヤトはアレだけはっきりしなかった自分の気持ちが、急にハッキリしたような気がした……というよりも、何故そんな簡単な事に気づかなかったのかとさえ思う。

「そう、だな。そうだよなぁ……ははっ」

ヴィヴィオの事を後ろから抱きしめて、嬉しげにハヤトが笑う。
抱きしめられたヴィヴィオは、何故彼が笑い出したのかわからず首を傾げたが、とりあえず抱きしめて貰えて嬉しいので「えへへへ」

とニヤケ笑いを漏らした。

「ヴィヴィオはすげぇな。兄ちゃん助かったぞ」

「ふふーん、わかればいーんだよっ！　ヴィヴィオはすごいんだから！」

「あぁ、ホントすげーよ」

本当に嬉しそうに、ハヤトはそう言ってヴィヴィオの頭を撫でてやる。

すると、今まで少し離れた芝生にうつ伏せになり、黙して語ろうとしなかったザフィーラが、唐突に言葉を発した。

「……人の気持ちとは、曖昧なものだ」

「え？」

「思い込みで隠れてしまったり、ちょっとしたきっかけで気付いたり。

移ろいやすく、酷く曖昧で、だからこそ尊い」

いきなり話し始めたザフィーラに、ハヤトとヴィヴィオは驚いて目を丸くしているが、ザフィーラは特に気にせず言葉を続ける。

「そも、好意という感情を区別すること自体が酷く難しい。
お前が判別に悩むのも、仕方ないことだろう」

「ザッフィー……」

「けれど、気付いたのなら早く行動する事だ。その気持ちがまた、曖昧になってしまう前に。
……それと我の名前はザフィーラだ。勝手に略すな馬鹿者」

言うべきことは全て言ったのか、ザフィーラは言葉を終えると再び芝生にうつ伏せになる。
その瞬間、ハヤトとヴィヴィオが声を揃えて叫ぶ。

「「ザッフィー喋れたの!?」」

「そっちか!?　今の我の話を聞いて食いつくのはそっちか!?」

自分の話をそっちのけにされたザフィーラが思わず叫ぶが、ハヤトとヴィヴィオはそれどころではなく、慌ててベンチから降りて、ザフィーラの近くに行って彼の体にペタペタ触りながら、興奮した口調で話す。

「マジで!?　喋れんなら早く言ってくれよ～っ！　喋れる犬とか凄くね!?」

「すごいすご～いっ！　ザッフィー喋れたんだーっ！」

「いや、だからなお前らっ！　というか我は狼だっ！！」

泣きそうになりながら叫ぶザフィーラだったが、ヴィヴィオは余計に面白がって彼に飛び乗り、背中の上で上機嫌に鼻歌を歌いだしてしまう。その現状に、ザフィーラは喋ったことを本気で後悔したのだが……丁度その時、ハヤトが彼の耳元で苦笑しながら恥ずかしそうに言葉を告げた。

「サンキューな、ザフィーラ。お陰で決心ついたよ」

「……そうか」

背中に乗ったヴィヴィオに青い体毛をぐしゃぐしゃにされながら、ザフィーラはそれでも満足そうに頷いた。

ハヤトが決断する一因になったのだとしたら、こんな状況になってまで、喋った甲斐があったものだ、と思いながら。

◇◇◇◇◇

「……ドクター。こちらにいらしたのですか」

モニタの明かりだけが辺りを照らす、スカリエッティのラボに作られた彼の私室。
無数の書類が所狭しと散りばめられたその部屋の扉を開け、紫銀の長い髪を持つ女性――ウーノは、その部屋の中央にある椅子に座ってモニタを眺めているスカリエッティに話しかけた。

「あぁ、ウーノ。どうしたんだい？」

彼女の声に、スカリエッティは目の前に浮かぶモニタから目を逸らさずに返事をする。
ウーノは「目に悪いですよ」と部屋の明かりをつけてから、彼の隣まで移動し、抱えていた書類を彼のデスクへと置きながら報告を告げた。

「後発組の準備も、ほぼ整いました。まだ調整が必要な妹もいますが、ほぼ問題ないかと」

「そうかい。それはなによりだ」

「……ドクター、それは？」

自分の報告にどこか上の空で返したスカリエッティに対し、ウーノがスカリエッティの見つめているモニタを彼の肩越しに覗き込む。
そこに映っていたのは、２人の人間の生体データ。その中央には、

重なった2つの二重螺旋と、『適合率９８％』という文字。それを見たウーノは驚いたように目を開き、小さく声を漏らした。

「これは……」

「素晴らしいだろう？」

その声に、初めてスカリエッティはウーノを見る。

ウーノへと向けられたその視線には、どこまでも深く暗い愉悦が浮かんでいた。

「単体でも面白いとは思っていたけれどね。まさかこんなおまけまで付いていたとは、予想外だよ」

９８％という文字に指を当て、楽しそうにくつくつと笑いを漏らすスカリエッティ。

どこまでも暗いその笑みに、ウーノは知らず背筋が寒くなるのを感じた。

「タイプゼロも興味深いと思ったが、こちらに比べたら屑のようなものだ。

いいねぇ……是非手に入れたい。こんなに興奮させられた実験素材は、生まれて初めてだよ」

恍惚とさえしながら、スカリエッティは画面を見つめて笑いを漏らし続ける。

「ふふ、今から待ちきれないよ……ウーノ。皆に伝えておいてくれないか？
3日後の催しの時には、コレを最優先で確保するように、とね」

「……それ程までに？」

「あぁ。何故、今の今まで気付かなかったのやら。過去の私を殴りつけてやりたいよ」

ウーノの問いに肩を竦めてからモニタを消し、スカリエッティは彼女の置いた書類を持って立ち上がる。ウーノは素早く彼の半歩後ろに立ち、スカリエッティが歩き出すと、その距離をぴたりと保ったままついてく。
スカリエッティは書類に目を通しつつ、時折自分の後をついてくるウーノに質問を投げかけ、その答えを聞いて満足そうに頷いたり、書類にいくつかの項目を書き足したりしながら通路に足音を響かせる。後ろを付いていくウーノは、彼の言葉を聞き、手に持ったバインダーに挟んだ紙に書き留めた。

「……と、こんなものかな。細かい指示などは君に任せよう」

「了解しました」

「ガジェットはＡ－８７からＣ－５８区画までのを全て使って構わ

ないよ。
もちろん、少なくて済むならそれに越したことはないが」

「はい」

書類全てに目を通し終えたところで、２人の足が止まる。
そこにあるのは、研究専用の部屋へと続く大きめの扉。そこで、ウーノはスカリエッティが手にしていた書類を受け取りつつ彼の言葉に返事をして恭しく一礼し、扉を開けて中に入っていく彼を見送ってから、ガジェットの起動確認をするために、格納庫へと足を向けて歩き出した。

「……さて、と」

研究室の中に入ったスカリエッティはそう言葉を漏らして、羽織った白衣の胸ポケットから小さなＵＳＢメモリを取り出し、彼だけが使うＣＰＵへと接続、起動する。すると研究室に置かれた数多のモニタ全てが一斉に明滅し、その全てに先程まで彼の私室にあるモニタに映っていたモノと同じ２人の写真と、重なった二重螺旋が映し出された。

「……」

それを確認すると、彼は無言でキーボードへと手を置いて、もの凄い速さでカタカタとキーボードを鳴らす。

キーボードの音に合わせて、画面にはいくつもの小さなウィンドウが開いては閉じるという事を繰り返し、研究室の中には彼がキーボードを叩く音と、時折小さなエラー音だけが響き、それが数分の間続く。

「やはり、ねぇ」

座った椅子の背もたれに体重を預けながら小さく呟き、最後とばかりにエンターキーを押し、2人の写真と重なった二重螺旋の画像以外の、開いていたウィンドウを全て閉じる。

代わりに新しく開いたウィンドウには、先程と同じ『適合率98%』という文字が浮かぶ。

それを満足そうに眺め、スカリエッティは手を組んでニヤリと口の端を持ち上げた。

「あぁらドクター。面白そうなモノを見てますねぇ？」

「……おや、クアットロ。いつの間に入ってきていたんだい？」

そのスカリエッティの後ろから、眼鏡をかけた女性――クアットロが声をかける。

座っていた椅子を回転させて後ろを振り返り、手を組んだままスカリエッティはわざとらしく驚いてみせ、クアットロもそれに応じて、わざとらしい笑みを浮かべながら答えた。

「あぁん、ドクターったら酷ぉい。最初に入ってきた時から居ましたよぉ～」

「くっくっ……そうだったかな？　面白い発見があったせいで、どうやら目に入らなかったようだ」

「面白い発見って……ソレですよねぇ？」

スカリエッティにしなだれかかり、モニタを指差すクアットロ。

「そうとも。どうだい？　実に面白いだろう？」

「そうですねぇ……ええ、とっても面白そう」

画面に映るウィンドウを目を細めて眺めつつ、クアットロはチロリと舌を出し、獲物を狙う獣のように唇を舐める。その仕草は実に妖艶で、浮かべる笑みはスカリエッティのソレよりも遥かに邪悪だった。

「この子、捕まえるんですよねぇ？」

「そのつもりだよ。既にウーノを通して、全員に伝えてある」

「うふふ……それじゃあドクター。この子、私に任せてくださいますぅ？」

「おやおや、私の楽しみを奪わないで欲しいな。クアットロ」

クアットロに椅子の背もたれ越しに抱きつかれつつ、スカリエッティはおどける様に肩を竦めて笑う。

２人は同じような笑みを浮かべ、モニタに浮かんだ画像をくつくつと笑いながら見続け、そうして２人同時にモニタに映る２名の生体データの片方へと指を置く。

「この子……とんだ拾い物ですわね、ドクター？」

「全くだね。まさか、ある種ここまで非常識な生体データを持っている人間が居るとは、考えてもみなかった」

言いながら、スカリエッティは指を動かして、その人間の生体データを拡大する。

「戦闘機人適合率、そして……『　』の遺伝子への適合率、ともにほぼ１００％とはね。

いやはや、世の中には奇妙な人間も居たものだ」

「本当に。“事実は小説より奇なり”ってヤツですわねぇ」

「ああ。これだから、科学はやめられない」

楽しげにもう一度手を組んでから、スカリエッティは自分の首に

腕を絡めているクアットロを見上げ、そして彼女の手に自分の手を重ねてニヤリと笑う。

「私の思想を一番濃く受け継いだのは君だ、クアットロ。だからコレに関しては君に一任しよう。
何を仕込むのも、どんな改造を施すのも、全て自由にして構わない」

「きゃん♪　嬉しいですわぁ、さすがはドクター」

彼の言葉に、クアットロは大喜びしながらより一層強くスカリエッティに抱きつき、スカリエッティは苦笑いしながら首に回された腕を軽く叩いた。

「さぁ、それでは手伝ってくれるかな？　クアットロ。
コレに関するデータを、もう少し纏めておきたいのでね」

「もっちろぉん。誠心誠意、喜んでお手伝いさせて頂きますわ♪」

告げられた言葉を聞いて、クアットロはスキップさえしながら彼とは違う椅子へと座り、キーボードを自分の前へと持ってきて、カタカタと音を鳴らして叩き始める。それを横目にしながら、スカリエッティは一人で再びくつくつと笑って椅子に座り直す。

「……楽しみだ。早く3日後になって欲しいものだね」

モニタに映る生体データを指で撫でつつ、スカリエッティは呟く。
そうしている彼の顔は、まるで玩具の発売日が待ちきれない子供のような、そんな表情をしていた。

ｓｉｄｅ：－　了

if32話　『日常と、非日常』（後書き）

ザッフィーが久しぶりで出てきた気がする……。
どうも、ラモンです。

そんな訳で、日常編のラスト。
ハヤトとヴィヴィオがほのぼのして、スカッちと眼鏡は何やら悪巧み。
そして、ヴィヴィオの何気ない一言と、ザッフィーの含蓄ある言葉でスバルを自分がどう思ってるか気付いたハヤト。

今回は意外と書くのが面倒でしたねぇ。
どうやってヴィヴィオの言葉でハヤトが気付くように仕向けるのかを考えるのが特に。ちょっと胃が痛くなりましたw
こう……子供が何気なく真理を突いたことを言う、という感じを出すのって、凄く難しいですね。二度とやりません。
さて、とりあえずこれでハヤトがスバルに返事をする下地は整いました。

しかしながら、次回からは『その日、機動六課』編。
ハヤトがどんなタイミングで返事をするのか、それは私にもわかりませんw
とりあえず、次回からは多少なりともシリアスが続きますので、シリアスが苦手な読者の皆様は、今回のハヤトとヴィヴィオのやりとりでほのぼの成分を補給しておいてくださいね。

それではまた、次の話で。

ｉｆ３３話　『その日、機動六課　１』（前書き）

※今回は短めです。

if33話　『その日、機動六課　1』

9月11日、PM19：14。
機動六課の作戦会議室に、俺達FWを含めた前線メンバー全員が集められた。
そういや、こうやって全員集合するのって、結構久しぶりな気がするな。

「という訳で、明日はいよいよ公開意見陳述会や」

整列した俺達の前に立つ八神部隊長がそう切り出す。
ちなみに『公開意見陳述会』が何かと言うと……まぁ、簡単に説明すれば管理局がどんな働きをしてるのか、それを民間人の皆さんに知って貰う為に、お偉いさんがあーだこーだ意見を言い合う会だ。
地上、本局問わずお偉いさん――それこそトップクラスのお偉いさんが集まるので、テロリストにしてみれば途轍もなく襲撃日和な会な訳で。だから、こうして俺達も警備に借り出されることになっている。

「明日14時からの開会に備えて、現場の警備はもう始まってる。なのは隊長とヴィータ副隊長、リイン曹長とフォワード5名はこれから出発、ナイトシフトで警備開始」

「みんな、ちゃんと仮眠とった？」

「「「「「はい！」」」」」

確認してくるハラオウン隊長に、元気よく返事する俺以外のＦＷ５名。
俺？　俺は寝てませんよ。だってゲームしてたもん。
まぁどーせ警備中にもちょくちょく交代して仮眠は取れるし、今寝不足でも問題ないと思う。

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝に集合入りする。それまでの間、よろしくな」

「「「「「はい！」」」」」

「部隊長！　ゲームは持ってっちゃ駄目ですか！？」

「私に叩き斬られたいなら、持って行くといい」

「超すいませんでした。持って行きませんので勘弁してください」

ちょっとしたお茶目だったんだが、シグナム副隊長がガチでレバ剣構えたので即土下座。
ふっ、俺も慣れたモンだぜ。膝を折ってから額を地面に擦り付けるまで、１秒もかからねぇもんな。
……泣いてない。泣いてないぞ。

「なんや、ココまで土下座が似合うっちゅー子も珍しいなぁ」

「そうだねぇ。でもホラ、ハヤト君だし」
「せやな。ハヤト君やしな」

部隊長に高町隊長、俺のこと嫌いですか？
くそぅ、涙で明日が見えねぇよ。

「……はやて、なのは。ハヤト泣いてるから」

ハラオウン隊長、貴女の優しさが温かいです。
きっとこの部隊の良心はこの人だけなんだ。あとの隊長達は皆悪鬼羅刹なんだ。

「ハヤト君。はい、ハンカチ」
「くっ……すまねぇギンガ」

敵からの同情がこんなに嬉しいとは、なんと言う屈辱。
とかなんとかボケ倒してから、俺達は現場に向かうヘリに乗り込むために屋上のヘリポートへと向かう。
さてさて、何も起こらずに、平和に終わるといいなぁ……いやマジで。

「……ふう」

溜息を吐いて、腕に嵌めた時計を見る。
時間は午前2時３５分。俺達がここに着いてから、大体3時間と少し経った。
ナイトシフトで警備することになっている俺達ＦＷ陣と高町隊長、ヴィータ副隊長、リイン曹長は、内部警備になった高町隊長を除き、全員がペアになって外周警備にあたっている。
ちなみにペアは、いざって時に戦えるようにギンガとティアナ、エリオとキャロ、俺とスバルという組み合わせで決定した。ヴィータ副隊長とリイン曹長は子供組のフォローってことで、エリキャロ組に合流している。

「……うん。タイミング的にはいーんだけどさ」

そう呟いて、少し離れたところを見回っているスバルを見る。
何のタイミングかって言えば、何だかんだで2週間近く保留になっちまってるスバルへの返事だ。
え？　３日間も時間あったのにしてないのかって？

しょーがねーじゃん！
自覚したら、今度は意識しすぎてマトモに顔も見れなくなっちまったんだもん！
お陰でここ最近はロクに会話もしてねぇよ畜生！！　あと最近はこの公開意見陳述会の準備とかで忙しかったから、そもそもあんまり会ってねぇし！

まぁそんなわけで、こうやって2人きりに近い状況なのは、ある意味タイミングとしては良い筈なんだ。
俺がムダに緊張しまくってるってのを除けば、だが。

「……あーもー、マジ俺らしくねぇし」

頭をガシガシと掻きながら、思わずその場で悶えたくなる。
やることなんて簡単なんだよ。アイツから渡されたペアリングを指に嵌めて、「俺もお前が好きだー」って言えば言いだけ。シグナム副隊長の攻撃を避けるよりも圧倒的に簡単だ。なのに、それが全く出来やしねぇ。
俺ってこんなヘタレだったかなぁ。

「ハヤト、差し入れだって」

「ひょぎふっっ！？」

「うひゃあっ！？」

とかなんとか考えてたら、いきなりスバルに声をかけられ、思わずアホみたいな声を上げてしまった。
慌てて振り返れば、そこには両手に缶コーヒーを持って目を丸くしているスバル。

「えと……コレ、差し入れだって。はい」

「そ、そうか。サンキュ」

驚いた顔のスバルが差し出したコーヒーを、わたわたしながら受け取る。
どうにもこうにも、最近はずっとこんな感じだ。スバルの顔を見るだけで頬が熱くなり、まともに喋ることも出来なくなってしまう。
どこの思春期だ。

「どしたのハヤト？　顔真っ赤だよ？」

「な、なんでもねーって」

「でも、耳まで赤いよ？」

「だいじょぶ、だいじょぶだから」

顔を覗きこんでくるスバルから逃げるように顔を逸らす。
ちくしょう誰だ！　前々回あたりで『変にスバルを意識する事は

無くなった（キリッ）』とか言った奴は！
あ、俺だ。

「だいじょぶならいいけどさ、変なハヤト」

「変で結構だっての。ほっとけ」

「ほっとけないよ。だって、ハヤトの事大好きだもん」

「うぁ……」

そう言って笑うスバルの顔を見るだけで、もうアレです。頭が沸騰しそう……っつーか沸騰します。
こいつ卑怯すぎるよ！　誰が勝てるんだこの天然に！！

「？　ホントに大丈夫？　顔凄いことになってるよ？」

「大丈夫だっつの、コレは素です」

「そうかなぁ？　な～んか怪しい」

「あ、怪しくなんかねーです！」

あーもーそうやって顔を覗きこむな！
上目遣いとかマジ勘弁！　やめて！　俺の心のライフゲージはとっくに０よっ！！

「ふーん？　まぁ、ハヤトがそう言うならいーけどさ」

「お、おう。それで良いのだよ」

「ふふ。何か変なのー」

「くっつくな笑うな頬をつっつくなーっ！」

「にゅふふふ……いつも意地悪する仕返しだよ～、だ」

人の腕に抱きついて、頬をつんつん突っついてくるスバルに大声で抗議するが、スバルは楽しそうにニヤニヤ笑いながら、まったく止める気配が無い。こ、この野郎！　可愛いじゃねえか畜生！！

ってそうじゃ無いだろ俺！　いやでも可愛いのは事実だし……ってだから違う！

「そ、そーやってくっつかれてたら、缶コーヒー開けられないだろうが」

「ん～？　じゃあ、あたしが開けてあげるよ？」

「いいから離れろって、そしたら自分でやれるから！」

言いながら、無理矢理スバルを引っぺがして距離を取る。

スバルの奴は何で平気なんだ？　俺とかもう心臓バクバクでヤバ

イってのに。これが男と女の違いなのか……いや、多分スバルが天然なだけだな……とか何とか、くだらないことを考えて気分を落ち着かせながら、コーヒーの蓋を開けて中身を飲む。

「はぁ……」

茹った頭の熱を逃がすように、深々と溜息をひとつ。

そうすると、どうにかこうにか顔の熱も引き、思考に少しだけ余裕が出来る。

「あぁもう、マジ俺らしくもねぇ」

「何が？」

「何でも無……くはないのか」

「んぅ？」

少しだけ余裕の出来たところで、スバルを見る。

スバルは不思議そうな顔な顔をして、ちょっと離れたところでこっちを見ながら首を傾げてる。

その顔を見たら、少しだけ覚悟が決まった……というか、今言わなきゃいけないというか、とにかくそんな気分になった訳なのですよ。

「……なぁ、スバル。ちょっとこっち来い」

「もーなに～？　離れろって言ったり、来いって言ったり～」

だから、この気分がヘタレないうちに言おうと思って、スバルの事を呼ぶ。

そうするとスバルはちょっと不満そうに唇を尖らせ、小走りで俺のすぐ横に寄ってくる。ホント、犬みたいな奴だよなぁ……なんて思いつつ、近くに来たスバルの肩を掴んで、目を合わせる。

「え？　な、なに？　どしたの？」

突然な俺の行動に、スバルの顔が赤くなった。

……何だか、この2週間で初めてコイツが赤くなったところ見たかも知れないな、なんてどうでもいい事で、ちょっと気分を良くしてみたり。

「あのな――」

そして、そのまま勢いに任せてしまおうと口を開いた。

side：スバル＝ナカジマ

な、なな何なに!?
どど、どーなってるんだろこの状況!?
えとえと、ハヤトが何だか凄く真面目な顔になって、あたしの事を見つめてて。肩を掴まれてるからあたしは殆ど動けない状態で、ハヤトの顔は目と鼻の先。

「あのな――」

そんな状況で、ハヤトが口を開く。

「その、アレだ。2週間前の返事、しようと思うんだが」

「ふえええぇっ!?」

いきなり!?　しかもこんなタイミングで!?
いや、確かに今は2人っきりだし、タイミング的にはいいのかな?
あぁでもでも、あたしの方が心の準備できてないよぉ～～。だって、まさか警備中に返事してくれるかも、なんて思うワケないじゃん!!

「えーと……言っても、大丈夫か?」

「ちょっ、ちょっと待って！　いいいい今、まだ心の準備が出来てなくてっ！！」

「あー……そうだな。うん。いきなりすぎた」

あたしが慌てて言うと、ハヤトはちょっと残念そうな顔で肩に置いてた手を離してくれる。

むぅ、別に手はそのままで良かったのに……って今はそれどこじゃなくて！

落ち着けあたし。深呼吸深呼吸、すーはー……すーはー……う～～、落ち着ける訳ないよぉぉぉ……。

「お、落ち着いたか？」

「むむむ無理に決まってるじゃんかぁ。い、いきなりすぎだよぉ」

「そうだけどな。ホラ、2週間も間経っちまってるし、即決即行動がいいかなって思ったし」

「うぅぅ……それにしたって、タイミングがあるじゃんかぁ」

ハヤトの事を見上げながら文句を言ってみる。

そうすると、ハヤトは顔を真っ赤にして「そりゃそうだけど」と言いながら顔を逸らした。

あ、ハヤト照れてる。ちょっと可愛いかも……。

「あーもー。グダグダしてんのは俺らしくねぇ！
いいから言うぞ！　お前も黙って聞け！」

「ひゃ、ひゃいっ！！」

２人でもじもじしてるのにイラついたのか、ハヤトが頭をガシガシ掻いてから大声で宣言して、あたしはその声にびっくりして思わず頷いちゃった。それを確認してから、ハヤトがもう一回肩を掴んで、じっとあたしの事を見つめてくる。その顔は凄く真剣で、凄く真っ赤だった。

（こ、これって期待してもいいのかな？　いいよね？）

ハヤトの顔を見て、胸が凄くドキドキする。
だってもし断るなら、ハヤトはこんな風に真っ赤になったりしない。多分、凄く辛そうな顔して、それから何でも無いって顔で苦笑いして、そして断る……と思うんだ。長い付き合いだし、そういうのは分かってるつもり。

だから――期待しても、いいんだよね？　ハヤト。

「じゃあ、言うぞ？」

「は、はい。どど、どうぞ」

手をぎゅっと握って、ハヤトの言葉を待つ。
そして――。

「俺は――『ハヤト、スバル。交代の時間だぞ』――えいしゃおらあああっっ!?」

「はにゃあああああああっっ!?」

突然聞こえてきたヴィータ副隊長の言葉に、大声を出して2人揃って飛ぶように離れる。
びびび、びっくりしたぁ!!

『あん？　どーした？　何かあったのか？』

「なななな、なんもないッス！　交代ですね？　わかりましたっ！」

『？　まぁいいや。んじゃ、集合場所に一旦集まってから交代だ。場所はわかってるな？』

「は、はい！　大丈夫ッス。それじゃあ!!」

ヴィータ副隊長からの通信に、ハヤトが顔を真っ赤にしたまま答えて、通信を切った。
……あうぅ、ヴィータ副隊長タイミング悪すぎですよぉ……。

「えーと……」

「あ、あはは……」

ハヤトもあたしも、この空気をどうしていいかわかんなくて、お互いに顔を見合わせて苦笑いする。

うー、個人的にはやり直して欲しいんだけど……無理、だよねぇ。空気的に。

「……続きは、六課に戻ってから改めて……って事でいいか？」

「だ、だよねぇ……あははは……はぁ」

「それじゃあ、集合場所行くか」

「そだね……」

あたしとハヤトはお互いに溜息を吐きながら、とぼとぼと集合場所目指して歩き出す。

折角、あとちょっとでハヤトから返事もらえたのになぁ。

うー……もぉ、ヴィータ副隊長の馬鹿ぁ……。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

if33話　『その日、機動六課　1』（後書き）

本当にシリアスになると思ったか！？　甘いよ！！！ｗｗ
どうも、ラモンです。

ラブコメって、こんなんで良かったですかね？
……恥ずかしくて死ぬかと思った。というか、普通に死にました。
こんなん、2度と書きたくねぇぇ……ｗ

えと、次回からはちゃんとシリアスになります。
今度は裏切ってラブコメ！　とかはないです。ちゃんとシリアスです。
なので安心して次回をお待ち下さい。
はい。それでは精神力が限界なので、今回はここで終わります。

それではまた、次の話で。

if34話　『その日、機動六課　2』

side：―

「連中の尻馬に乗るのは、どーも気が進まねぇけど……」

赤くなった空をそこに浮かびながら眺めつつ、３０センチ程の赤毛の少女――アギトが呟く。

その隣に立つ大柄の男は、目の前に開いたモニタに映る映像を見ながら、その声に答えた。

「それでも、貴重な機会ではある。今日ここで全てが片付くなら、それに越した事は無い」

「まぁね。でも、あたしはルールーも心配だ。大丈夫かなぁ、あの子……」

アギトは空中に浮かびながら器用に胡坐をかき、ここには居ない紫銀の髪を持つ少女の事を思う。

「心配なら、ルーテシアについてやればいい」

「今回に限っては、旦那の事も心配なんだよ。ルールーには、ガリューや蟲達がいるけど、旦那は1人だろ？」

静かに呟かれた言葉に、アギトがゼストの顔の前まで移動して文句をつける。
けれどゼストはそれに答えず、ただじっと目の前のモニタに映る人物を見つめ続けていた。その視線に気付いた
アギトが、彼の手元――モニタへと視線を落として口を開く。

「旦那の目的は、この髭親父だろ？　そこまではあたしが着いていく。旦那の事、守ってあげるよ」

「……お前の自由だ、好きにしろ」

彼女の言葉に、ゼストは左手を軽く振ってモニタを消しながらそう答えた。
その返事を聞いて、小さな身体で胸を張りながらアギトが誇らしげに声を出す。

「するともさ！　旦那はあたしの恩人だからな」

「……そうか」

アギトには見えぬよう小さく微笑み、それから眉を顰めてモニタを見つめ続けてゼストが声を漏らす。

「しかし、わからんな。何故このような配置にしたのか……」

視線の先に映っている光点は、彼とアギト以外にこの場にいる者――ナンバーズの配置を示している。

彼女らが今から攻撃しようとしているのは、時空管理局の地上における総本山、地上本部だ。本来ならば、内部工作を行う人員以外は表の攻撃に向かわせるべきだ。

だが、実際に配置についている人員は何人かが欠けている。

そしてその欠けた人員がどこに向かっているのか、何を目的としているのか、ゼストには知らされていない。

「べっつにどーでもいいじゃん、連中が何考えてたってさ。旦那の目的には関係ないだろ？」

だが、アギトは気にした様子も無く、頭の後ろで手を組んでぼやく。

確かに彼の目的に、彼女らの動きは関係ない。混乱に乗じて自分の目的を果たすだけだ。

しかし、ゼストは胸の内に渦巻く嫌な予感が止まらず、考えることをやめられない。

「何を考えている。ジェイル＝スカリエッティ……」

呟きと共に、ゼストは右手に握った己が愛槍を握り締めた。

全てが動き出すまで、あと少し――。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ３４話　『その日、機動六課　２』

「……開始から４時間ちょっと、中の方もそろそろ終わりね」

地上本部の正面玄関前。
そこで、ティアナが自分の腕に嵌めた時計を見ながら呟いた。

「最後まで気を抜かずに、しっかりやろう！」

「「はい！」」

その傍らで、スバルがエリオとキャロに声をかけ、２人がしっかりと頷く。

「ん……あっちは心配なさそうだな」

「そうですね」

少しは慣れた場所で４人を見ながら、ヴィータとギンガは顔を見合わせた。
あと少しで公開意見陳述会も終わり……このまま、何も起こらずに終われば良いと思いつつ、それでも２人が気を抜くことは無い。
完全に終わるまで、何が起こるのかはわからないのだから。
と、そこでヴィータが不意に辺りを見回しながら呟いた。

「ハヤトはどうした？　あの馬鹿、どっかでサボってんじゃねーだろな？」

「違うですよぉ。いくらハヤトだからって、ヴィータちゃん酷すぎです」

ヴィータの推測に、リインが苦笑いしながら言葉を返す。
隣ではギンガが「あはは」とリインと同じく苦笑を漏らしていた。

「んで？　ハヤトの奴はどーしたんだ？」

「ハヤトさんなら、エントランスに報告に行ってくれてます」

「多分、もうちょっとで戻ってくると思いますよ？」

キャロとエリオがヴィータの問いに答え、ヴィータは「そうか」と頷いて入り口の方を見た。

よく見れば、入り口の向こうに見慣れた少年の背中が見える。

「……アイツ、体よくサボってんじゃねーだろーな」

「ヴィ、ヴィータちゃん。流石にそれはない……と思うですよ？」

「そうですよヴィータ副隊長。いくらハヤト君でも、そんなことはしない……と思います……多分」

ジト目でハヤトの後姿を眺めてそう呟くヴィータに、リインとギンガの2人が苦笑しながら返す。

語尾が段々と弱くなっていっているのは……まぁ、ハヤトの普段の行いが招いた結果、というものだろうか。

「まぁいいか。アイツなら、何かあっても大丈夫だろ。しぶとさだけなら、六課最高だしなぁ」

「ですです。ハヤトのしぶとさは折り紙つきです！」

「ふふ、確かにそうですね」

誉めてるのか貶してるのか微妙なヴィータとリインの会話に、ギンガは思わず笑ってしまった。

その会話はティアナ達にも聞こえていたのか、少し離れているティアナ達の方からも笑い声が聞こえてくる。

（ホント、ハヤトはさりげなくすげぇ奴だよな）

聞こえてくる笑い声に、ヴィータはそんな事を思う。
どんな状況であれ、彼を話題に出すだけで皆から笑いが漏れる。
それは、それだけ彼という存在が彼女らの中心に居て、それだけ彼女達が彼を信頼しているということ。
狙って出来ることではないし、やろうと思って出来ることでもない。

（アレでもうちょい性格が真面目なら、指揮官としていいトコ狙えそうなんだけどなぁ）

そこまで考え、ヴィータは自分で考えたことに自分で苦笑した。
正直、今はそれを考えるべき時ではないというのに、何となく気にしてしまう。
なんだかんだで、自分も彼のペースに巻き込まれているという事に気づいたのだ。

（今のあたしに出来ることは、コイツらを守ってやることだけだ）

思考を切り替え、手に持ったグラーフアイゼンを握りなおす。
――瞬間、それは起きた。

「な、何だ！？」

巨大な魔力反応、耳を劈く爆音と、地面を揺るがす衝撃、そして――悲鳴。

それらの全てが一度にヴィータ達の耳と体に届く。届いてきたのは、彼女達の背後……地上本部から。

全員がそちらを振り返り、そして目を見開いた。

「まさか、本当に来たってのか！？」

「ヴィータちゃん！」

「わーってるよ！　ＦＷはハヤトと合流してから、なのは達と合流！」

「「「「「はい！」」」」」

動揺は一瞬。すぐにヴィータは動揺を抑え込み、スバル達に指示を飛ばす。

「外はあたしが何とかしとく、だから、コイツらをなのは達に届けてやってくれ！」

「了解です！」

ヴィータからシグナムとはやてのデバイスを受け取り、ティアナ達は地上本部に向けて走り出す。

……だが。

「あっ！」

彼女達の視線の先にある地上本部の入り口に、突然シャッターが降り始める。

それを見てスバルが小さく声を上げるが、その瞬間にもシャッターは次々と降りていき、スバル達がその前に辿り着く時には、既に入る場所が無くなってしまっていた。

「ティア、どうしよう！？」

「落ち着きなさいスバル。ティアナ、ハヤト君と連絡は？」

慌ててティアナを振り返るスバルの肩を叩いて、ギンガがティアナを見る。

ティアナは耳に手を当て、ハヤトと通信を取ろうとするが通じる気配は無く、ギンガに向けて首を横に振り、しかしすぐに言葉を続けた。

「ハヤトもいざって時の集合場所は分かってるから、そっちに向かえば恐らく合流できる」

「そうね。合流できなくても、ハヤト君の通りそうなルートを逆に行って、迎えにいけるかも知れないし」

「じゃあ急ごう！　ハヤトが危ないかもだし！！」

「ええ。まぁ、ハヤト君は1人だと怖いとか言って、エントランスから動かないかもだけど」

重苦しい空気を払拭するように、ギンガが会話の最後を軽く茶化す。

それに全員が軽く笑ってから、スバル達は合流場所を目指して走り出した。

ｓｉｄｅ：：―　了

◇◇◇◇◇

「わーお。閉じ込められたんですけど」

いきなり降りてきた分厚いシャッターを眺めながら、とりあえず一言。

周りを見れば、あっちこっちで地上本部局員の人達がわたわたと走り回っている。飛び飛びに聞こえてくる会話を聞くに、どうやら通信室あたりがやられたらしく、どことも連絡が取れないらしい。

俺も試しにスバル達に通信を繋いでみるが、聞こえてくるのはノイズだけ。

さて、どうしたモンかね。

「集合場所は聞いてるけど……1人で動いて大丈夫なもんかどうか……」

言いながら、モニタを開いて集合場所を確認する。

高町隊長から事前に聞かされていた合流場所は、地下通路のロータリーホール。ここからだと、少しばかり大回りするルートしか無い。敵が来てますよ～って時に単独行動はちょっとなぁ……勇気がいる決断ですよ？

「とはいえ、連絡とれねぇんだから合流地点行かないと、心配させるよな」

《　そうですね。もし途中で連絡が取れれば、その場で待機という手もありますし　》

通路の端っこで邪魔にならないようにしながら、ブレイブハートと作戦会議。

今んとこ、この階での被害は無い。聞こえてくる情報では、狙われたのは上層階と通信室、その他地上本部の機能に関わる重要な場

所のみ。死者は出ておらず、全員麻痺性のガスを吸って倒れてる程度らしい。
流石にもうちょっと被害がでかけりゃ、合流は諦めて現場の手伝いを……と思ってたが、話を聞く限りではその必要は無さそうだ。なので、こうやって安心して作戦会議を開かせて貰っている。

「ブレイブハート、お前何とかして通信繋げねぇ？」

《　試みてはいますが、正直見通しがつきません。合流した方が早いかと　》

「シャッターぶっ壊すって手は？」

《　建物にどの程度のダメージがあったのはわかりませんから、下手に破壊するとこの階自体に被害が出るかもしれません。それに、壊したら修理費取られますよ？　》

ブレイブハートから最もな指摘を受けて苦笑い。
ここの修理費っつったら、俺の給料の半年分はくだらねぇ。わざわざ金を取られるようなことしねぇっつーの。

「ここで待機して、本部の通信が戻るのを待つってのはどうだ？」

《　あまり良い手とは思えませんね。周りの混乱を見る限り、かなりの損害だと思われます。
少し待った程度で通信が回復する見込みは、かなり低いかと　》

「だーよなぁ……」

溜息を吐きながら周りを見回せば、地上本部の局員達が大慌てであっちこっちを走り回っている。

もうちょっと落ち着かなきゃ、混乱が酷くなるばかりだと思うんだが……まぁ、まさか来ないだろう、来ても何とでもなる、そう思ってたところに完璧な先制攻撃を受けたんだ、混乱しねぇ方が無理かも知れないけどさ。

「……過信ってなぁ、怖いねぇ」

壁に背を預けながら、そう皮肉気に決めてみた。

やっべ、今の俺超カッコよくね？

《　マスターハヤト。早く移動して、指定された合流場所に向かいましょう　》

「あれ、無視？」

《　すみません、緊急時ですので　》

ブレイブハートが冷たすぎるぜ……くすん。

つっても、実際あんまりのんびりもしてられないか。多分、スバル達はもう合流場所に向かってるだろうから、あんまり遅いと俺の迎えに人員割くことになるかも知れない。

この状況で戦力を分散させるのは、あんま得策じゃないだろ。何が来るかわかんねーし。

……こないだのオッサンクラスが出てきたら、正直無理ポだし。

「っし。それじゃあ地下通路通って合流場所に急ぐとするか。ブレイブハート、最短ルートを割り出してナビしてくれ。頼んだぞ」

《　了解です　》

「あぁ、なるべく敵と会わないようにしてくれな」

《　それは……流石に保障しきれません　》

ですよねー。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

『ドクタ～』

ラボの中央にある自分用の椅子に腰掛けたスカリエッティの耳に、間延びした声が届く。
あちこちに開いたモニタに映る、彼の作品であるナンバーズとガジェットが地上本部を蹂躙していく映像を眺めて下を向き、笑いを堪えていたスカリエッティは、その超えに視線を上げる。

「おや、クアットロ。どうしたんだい？」

『えぇっとですねぇ。私のやる仕事は終わったのでぇ、あの子のお迎えに行きたいと思うんですけどぉ』

「あぁ」

クアットロの申し出に、合点がいったとばかりに声を上げて手を叩く。
その言葉に対し答えたのは、スカリエッティではなくウーノ。

「何を言っているの。持ち場を離れるなんて、許されるワケが無いでしょう」

『え～。でもぉ、ウーノお姉様ぁ』

「我が侭を言わないで頂戴。アレの確保は、他の姉妹に任せなさい」

『そんなぁ～、あの子は私の担当ですのにぃ……』

厳しいウーノの言葉に、クアットロは眉尻を下げて泣きそうな顔をする。

「くっくっ……いいじゃないかウーノ。クアットロの好きにさせてやれば」

「ドクター！」

そんなクアットロを見て小さく笑いを漏らし、スカリエッティが彼女の申し出を許可する。

ウーノが慌てて彼を振り返って抗議の声を上げるが、彼はウーノの事は気にせず、画面の向こうに居るクアットロに笑いかけた。

「アレに関しては君に一任してあるからね。君の思うとおりにすればいい。

あぁ、作戦に支障の無い程度ならガジェットをいくつか連れて行っても構わないよ」

「ドクター！」

『ありがとうございますぅ♪　それじゃあ、私はあの子のお迎えに行ってきますねぇ～』

「頼んだよ」

「あ、コラ！　待ちなさいクアットロ！」

眉を吊り上げるウーノには構わず、スカリエッティとクアットロは話を終えて勝手に通信を切ってしまう。

完全に無視される形となったウーノは、納得いかないとばかりに眉間に皺を寄せてスカリエッティを見つめた。

「ウーノ、そう怒らないでくれるかい」

「ドクターはクアットロに甘すぎます。確かにあの子は、ドクターの思考パターンを一番色濃く受け継いでいますが、遊びが過ぎるところがありますのに」

「良いじゃないか。それで何かが起きたとしたら、それもまた一興だよ。

結果としてアレさえ手に入れば、後はどうでも良いと私は思っているしね」

「……ですが」

軽薄な笑みを浮かべたままのスカリエッティに対し、ウーノは渋い顔のまま食い下がる。

なにせ、今彼女らがやっていることは、正直ちょっとしたミスが命取りになる可能性が高いことであり、正直ここで個人の楽しみなどを入れて欲しくはない。

けれど、彼女にとって至上の存在であるスカリエッティが是としたのだから……という思いもある。

故に言葉を濁し、躊躇いがちに彼に言葉をかけた。

「その、何かあってからでは、遅いのでは？」

「その時はその時。クアットロとて馬鹿じゃない、他のナンバーズと一緒に行くだろうさ。
心配する必要はないよ、ウーノ」

「……わかりました」

ウーノの進言に笑いながら答え、返ってきた言葉にウーノが渋い顔のまま頷く。
スカリエッティはウーノが頷いたのを確認すると、満足げな表情になって椅子の背もたれに体重を預け、そのまま地上本部の各所を映しているモニタの中の1つへ視線をやる。そこに映っているのは、地下通路を走っているスバル、ティアナ、ギンガ、エリオ、キャロの5人の姿。
地下通路を走る5人を眺めつつ、スカリエッティは楽しげに呟いた。

「さぁて、どうするのかな？　クアットロのお手並み拝見といこう」

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

《　次のT字路を右折です　》

「あいよ！」

右手に握ったブレイブハートのナビゲートに従って、地下通路を走る。

今んとこ、敵が中まで入り込んでる気配な無さそうだ。通信だけは相変わらずノイズまみれだが、そっちはブレイブハートに任せるしかない。

「……通信、どうだ？」

《　現在も全力でロングアーチと通信を試みています。ですが、通信妨害が思ったよりもキツいですね　》

「そうか。とりあえず、スバル達と連絡取れればなぁ」

《　現在地の情報を交換できれば、随分と安心――『……ト！　ハヤ…！』――マスターハヤト！　》

ブレイブハートとそこまで話した瞬間、俺の耳にノイズ混じりの声が聞こえてきた。
聞こえてきた声にブレイブハートが声を上げ、俺も走っていた足を止める。

「こちらハヤト。おい、聞こえるか！」

『ハ…ト！　ねぇ？　聞こ……！？』

耳に手を当て、聞こえてきた声に答えるが、ノイズが酷くてこっちからの声も聞こえてないらしい。

「ブレイブハート、ノイズ除去できるか？」

≪　やってみます……ノイズ除去完了。どうぞ　≫

「サンキュ。こちらハヤト。聞こえるか？」

『ハヤト！　大丈夫なの！？　ねぇ！？』

俺の声に答えたのは、スバルだった。
つーか声でかすぎだろ。耳がキーンってなったぞヲイ。

「うるせぇっての。ちょっと声のボリュームさげろ」

『あ、ごめん。……ってそうじゃなくて！　大丈夫なの？　怪我してない！？』

「してない。今んとこ敵とも遭遇してないしな。そっちはどうだ？」

『こっちは大丈夫。今、合流場所に向かってるところ。ハヤトは？』

スバルの答えに、アイツらは無事なんだと少し安心してから辺りを見回す。

とりあえず現在位置を知らせて、可能なら合流しないとな。

「今Ａ－３２通路だな。そっちはどこに居るんだ？」

『こっちはＣ－２４！　合流できそう？』

「ブレイブハート」

≪　検索中……位置は殆ど真逆ですね。合流は無理そうです　≫

ブレイブハートの声に、思わず舌打ちする。

ったく、折角ラクできると思ったのによ。仕方ないか。

「場所は殆ど真逆らしい。途中で合流は無理そうだな。指定された合流地点で会うことにしようぜ」

『だ、大丈夫？　あたしが迎えに行こうか？』

「アホ。俺んとこ来るよりか、合流場所で合流した方が早いだろっての」

『ア、アホじゃないもんっ！』

「じゃあバカ」

『バカじゃないもんっ！！』

こんな状況でも相変わらずなスバルにちょっと安心し、苦笑しながらからかう。

まぁ実際、俺とスバル達は真逆に居るってんだから、待機して迎えを待つよりも合流地点に急いでそっちで合流した方が懸命だ。じっとしてる間に、敵が中に入ってこないとも限らないし、そうなったらなったで、合流するまでの距離が短い方がいいに決まってるしな。

そうして一通りスバルをからかってから、ティアナと代わってもらい、今後について短く話し合う。

「……そんじゃ、お互い合流地点まで全力疾走。何かあったら連絡ってことでいいな？」

『そうね。特にアンタは小まめに連絡しなさい。１人なんだから』

「りょーかいだ。それじゃ、合流地点で会おうぜ」

『ええ』

『ハヤト、気をつけてね！？　絶対、絶対合流地点で会おうね！？』

「はいはい。そーゆーのは死亡フラグだからやめろってーの」

わざわざ通信に割り込んでまで人の死亡フラグを立てるスバルに笑いつつ、そう返事をしてから通信を切る。

さて、と。とりあえず通信は復活したし、後はさっさと合流するだけだな。合流地点に行けば隊長達も居る筈だから、その後はどうにでもなるだろ。隊長達が戦ってくれれば、ガジェットなんて物の数じゃねぇし。

「……さて、そんじゃあ気合入れて、もうひとっぱしり行きますか！」

《　Ｙｅｓ．　》

気合を入れなおし、合流地点目指して再び走り出す。

俺の顔の横に浮かんだモニタに映る合流地点までの距離は、まだ結構ある。あいつ等よりか先について、ギンガの奴をバカにしてやろう。くっくっく、奴が真っ赤になって怒る顔が目に浮かぶようだぜ！

if34話　『その日、機動六課　2』（後書き）

奇跡的に1日で書けたので投稿してみました。
どうも、ラモンです。

今回の話、いつも投稿前に推敲を兼ねて見せてる友達に見せたら「先の展開分かりやすすぎプギャー」と言われたんですよねぇ。
わかりやすいですかね？　個人的にはそこそこに誤魔化してると思うんですが……フラグ立ちすぎって自覚はありますけどw

ティアナルートでは出番の無かった旦那ですが、スバルルートではそこそこ活躍して頂く予定です。
ちなみに、現在の予定ではラストバトルの時でも、もの凄く活躍する予定ですよ！　旦那好きな皆様は、ワクテカしながら全裸待機でお待ちください！w

さてさて、次回あたりでスカっちと眼鏡の狙いが明らかになる……予定です。予定は未定なので、書いてる途中で変わる可能性大ですが。
スカっちの狙いは何なのか！　結構わかりやすいですけどね！w

それではまた、次の話で。

ｉｆ３５話　『その日、機動六課　３』（前書き）

※注意です。
今回は、読む人によってはハートフルボッコになる場合がございます。ご注意ください。

if35話　『その日、機動六課　3』

≪　次の通路を左折、そのまま真っ直ぐ進んでください　≫

「あいよ」

ブレイブハートの指示に従って通路を駆ける。
どうやら敵は中までは入ってきてないのか、ブレイブハートの指示が的確なのか、さっきから敵とは全く遭遇しないまま合流地点まであと半分、という所まで来ていた。うん、まぁそれはいい。
それはいいんだが……。

「なげーよ地下通路！　つーか広すぎなんだよ地下通路！！」

何だかんだでもう２０分近く走ってんだぞ！？
どんだけ広く造ってんだよ！　こういう時に走らなきゃならないこっちの身にもなれよ、造った奴！！
アホかってんだ畜生！！

≪　時空管理局の地上部隊を纏めている場所ですから、当然かと　≫

「そーゆーツッコミはいらん」

≪　申し訳ありません　≫

ブレイブハートの冷淡なツッコミに溜息を吐きながら、指定された場所を左に曲がる。
ったく、いい加減どっかで休憩挟みたいところなんだよなぁ。走るだけならまだいいんだが、敵が居るかもって想定して３６０度全部を警戒し続けてるから、精神的に結構辛い。ストレスで禿げちまうよ。

「この先で、休めそうなとこはあるか？」

《　あと２００ｍほど進めば、通路の合流点があります　》

返答と共に、前方右側のあたりにモニタが開いてマップが表示される。
ふむ、確かに通路の合流点になってて大分広い空間になってるな。ここなら、とりあえずちょっと休むぐらいは出来るか。

「オーケー。じゃあ、そこで一旦止まってスバル達と連絡を取るとしよう」

《　了解しました　》

そう言っているうちに、前の方に灯りが見えてきた。
よし、あそこまで行けばようやく休めるな。なんて思いながら入り口をくぐった。

「……そう思っていた時期が、俺にもありました」

そして目の前に広がった光景に、泣きそうになる。くそっ、何だってこう想定外の事態ってのは、時と場所を選ばずに起きるのかね。あぁ、だから想定外なのか……ってそうじゃねぇ。

くだらない考えを追い払うように頭を横に振ってから、目の前に広がる光景に意識を戻す。

「はぁ～い、初めまして。ボ・ウ・ヤ」

俺の前――この広い部屋の中央には、こっちに向かって眼鏡をかけた女がこちらに向けて手を振り、部屋の全てを埋め尽くす程のガジェットを引き連れて立っていた。

……今すぐ逃げちゃ駄目かな？

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｉｆ３５話　『その日、機動六課　３』

side：―

「まずは自己紹介を。私の名前はクアットロ。ドクター・スカリエッティの配下、ナンバーズの４番目ですわ」

「こりゃご丁寧にどーも。俺は――」

「ハヤト＝ロックウェル二等陸士。貴方のことは良く知ってるわ、貴方以上にね？」

ハヤトの言葉を遮り、クアットロはそう告げて蠱惑的な笑みを浮かべた。

その笑みに背筋が寒くなるのを感じつつ、ハヤトが口を開く。

「そいつは嬉しい限りだな、と。それで、何の用だ？」

警戒は解かず、ブレイブハートを握り締めたままでハヤトがクアットロに問う。

その問いを受けたクアットロは、笑みを浮かべたまま、ハヤトの事を指差して楽しげに告げた。

「単刀直入に言うわね。貴方、私のモノになりなさいな」

「……はっ。デートのお誘いにしちゃあ、随分と色気のねぇ。せめて、アンタの周りに浮かんでる物騒なお友達をどっかに仕舞

ってから出直してきな」

クアットロの申し出を、ハヤトは鼻で笑って却下する。
けれど、彼女は心外だとばかりに彼を眺め、それから「あらあら」と呟き馬鹿にするような視線でハヤトを見つめて言葉を続けた。

「勘違いしちゃってるみたいねぇ？　これは“お願い”でも“要請”でも“お誘い”でもないの。
これは……め・い・れ・い。理解出来たかしら？　お馬鹿なボウヤ」

「そっちこそ、頭大丈夫か？　何で俺が、アンタの命令に従ってやる義理があんだよ」

「従う義理は無くても、従うのが得策よぉ？　痛いのは、嫌でしょう？」

発せられた言葉に操られるかのように、彼女が引き連れているガジェットがゆるりと動く。

「そりゃ痛いのは嫌さ、俺は別にマゾじゃねぇしな」

苦笑と共にそう答えつつ、ハヤトは急いでスバル達と通信を繋ごうとする。
けれどついさっき繋がった筈の通信は、今は再び酷いノイズ音を

立てるばかりで繋がろうとしない。

（ブレイブハート、何があった？）

（わかりません。ここに着いた途端、酷い電波障害が……）

「あらぁん？　何だか慌ててるようだけどぉ……もしかして、通信が繋がらないとかぁ？」

「！」

ハヤトとブレイブハートの念話を聞いていたかのようなタイミングで、クアットロが口を挟む。

その声と表情で、ハヤトは全てを察した。恐らくは、この電波障害というのは目の前の女――クアットロがやっている事なのだと。

「ガジェットを連れてきただけじゃなくて、通信妨害までとはね……随分と用意周到じゃん？」

「ボウヤには、それだけの価値があるってこと。光栄に思いなさい？　この私がここまで手間暇かけて、貴方を手に入れようとしてあげてるんだから」

「……ありがた迷惑って言葉、知ってるか？」

「存在してるのは知ってるわよぉ？」

自分が圧倒的に優位に立っている事を理解しているのだろう。クアットロの笑みは深くなる。
対するハヤトは苦々しく眉を寄せ、それでも頭の中で必死に計算を始めた。

（あいつ等の方が合流地点に着くのは早い。多分あと5分もすりゃ合流地点に着くはずだ。そんで、俺からの通信が無いってことに気づいて、ルートを逆算してここに来るまで……長く見積もっても2、30分。
つまり最低でも30分ぐらい粘れれば、この事態を打破する可能性はあるってこった）

それだけの事を一瞬で考え終え、ハヤトがブレイブハートを構え、クアットロを睨む。
彼の視線に抵抗の意志を見たクアットロは、笑みを引っ込め、イラついたように鼻を鳴らした。

「はっ。思っていた以上に馬鹿な子ねぇ？　こっちは別に、最悪ボウヤが死んでも問題ないのよぉ？
そぉんなに死にたいのかしらぁ？　とんだ自殺志願者ねぇ。
まぁでもぉ？　私はとっても慈悲深いからぁ、もう一度だけチャンスをあげる。

……私のモノになりなさい、ボウヤ？」

鋭利な視線でハヤトを貫くように見つめ、クアットロが告げる。
だが、ハヤトはそんな視線など気にしていないように肩を竦め、クアットロに向けて中指を立てた。

「お断りだっつーの、この眼鏡ブス」

「ブッ……！？」

ハヤトの言葉に、クアットロの眉が吊り上がる。
そのまま感情に任せて声を発しようとして、しかしクアットロは紙一重で言葉を飲み込んで、頬を引き攣らせながら笑みを浮かべて喋り始めた。

「い、いいですわぁ。どうしても抵抗するって言うならぁ、力ずくで連れて行ってあ・げ・る」

「はっ、上等だよ眼鏡ブス。俺がアンタに、デートの誘い方ってモンを教育してやんぜ」

「こっちの台詞よ。糞餓鬼が、死んでじっくり反省なさいな」

その会話を最後に、最早言葉は要らぬとハヤトが駆け出す。
迎え撃つクアットロは右手を軽く振り、彼に目掛けてガジェットの群れを突っ込ませた。

◇◇◇◇◇

「ハヤト！　ハヤトってば！」

なのはから指定された合流地点。そこで、スバルは必死にハヤトとの通信を試みていた。

けれど、さっきまで繋がっていた筈の通信は、今はノイズだけしか返してこない。耳に五月蝿く響くそのノイズが、スバルの心に焦燥感を生み出していく。

「ハヤト！　答えてよ！」

「……ティアナ」

「最後の通信から２０分……多分、何かあったんだと思います」

ティアナの報告を受けて、なのはが顎に手を当てて思考する。

先程、同じくノイズ混じりの通信が六課から届いた。内容は六課がガジェットとアンノウンに襲撃され、危機的状況にあるということ。まさか六課まで襲われるとは想定していなかったので、彼女も、そしてスバル達も動揺を隠し切れない。

そこに来て、ハヤトとの通信が途絶しているという事実。

どうしようかと逡巡した後、なのはは自分の横に立つフェイトへと視線を向け、お互いに頷きあい、スバル達の方へと視線を戻して

指示を告げる。

「分散しよう。スターズはハヤト君の救援と、襲撃戦力の排除。ライトニングは六課に戻る」

「ギンガは外まで私達と一緒に戻って、その後は外で戦ってる局員と一緒に外に居るガジェットを排除する。
それでいいかな？」

「「「「「はい！」」」」」

なのはとフェイトの指示に全員が頷き、交差するように走り出す。
スバル、ティアナ、なのはの３人はハヤトが来るであろうルートへと、フェイト、エリオ、キャロ、ギンガの４人は地上へ向かう道へと。

（……ハヤト）

なのは達に先んじて通路を駆けながら、スバルは心の中で彼の名を呼んだ。
――勿論、答えは無かったが。

◇◇◇◇◇

真紅の魔弾が空気を裂いてガジェットへと迫る。
けれど、ガジェットはその弾に触れた瞬間、まるで幻影の様に消え去り空中へと溶けていく。

「くそっ！　また偽者かよっ！！」

それを脇目に、伸びてきた3本の巨大なアームをバックステップして避けながらハヤトが舌打ちをする。
戦いが始まって既に１０分強が経過しようとしていた。けれど、目の前に広がるガジェットの群れは、一向にその数を減らさない。それどころか、時間が経つ毎にその数を増していく。

「うふふのふ～……どうかしら？　私のはＩＳ“シルバーカーテン”の銀幕芝居は？」

「悪趣味すぎて、反吐が出るね！　子供相手を狙うなら、もうちょい楽しいシナリオ考えな！」

「減らず口だけは一人前ねぇ。魔導師としてはぁ、二流もいいところなのに」

「てめぇじゃ戦えないお前に、言われたくねぇよっ！！」

休む間を与えずに襲い来る？型のアームと、？型の射撃弾。それ

ら全てを避け、時には防御しながら、ハヤトは口だけでも反撃しようと声を上げる。
けれど、所詮は悪あがき。ハヤトの体力も魔力も、既にかなり危ない領域まで追い詰められていた。

「……くっ！　ブレイブハート、偽者と本物の区別はつけらんねぇのか！？」

《やっています。ですが、やはりロングアーチからの情報が無いと……》

「ちっ、ホントに用意周到な眼鏡だ！」

横っ飛びになって飛んできた射撃とアームを避け、壁を蹴って再び跳ぶ。
跳ぶ先に見えるのは、？型の巨大な丸いボディ。

「アクセル、シューターッッ！！」

《Ａｘｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ．》

そのボディ目掛けて、ハヤトの撃った真紅が迫る。
しかし――それはそのボディを貫かない。魔力弾が当たるその瞬間、？型のボディは再び幻の如く消え去り、真紅の魔力弾は地面へと命中してそこに小さな穴を穿っただけ。

「あぁくそっ！　イラつくな……ってうおぉっ!?」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．》

その隙を逃さず、空中のハヤトを捉えんとアームが迫る。
咄嗟にブレイブハートがシールドを張り、その攻撃からハヤトを守る。そして、ハヤトは空中で何とか体勢を立て直し、地面に叩きつけられるのをギリギリで回避した。

「ぐっ、いってぇな畜生！」

歯を食い縛り、ハヤトが地面から視線を上げる。
上げた視線の先では、クアットロがニヤニヤと笑みを浮かべながら彼を見下し、優越感に浸った声で彼に語りかけた。

「あらあらぁ？　威勢がいいのは口先だけかしらぁ、情けないことこの上ないわねぇ？」

「うるっせぇ！　面倒くせぇモン使いやがって！！」

「あぁら、ＩＳは私の武器ですものぉ？　武器って言うのは、最大の威力と効率、そして最大の不条理で出来てるモノでしょお？」

「……いちいちムカつく眼鏡だな、っと！」

クアットロを睨みつけながら、横から伸びてきたアームを地面を転がって避ける。
そうして攻撃が一旦止んだところで飛び起き、そのまま壁を背にしてブレイブハートを構え直し、彼を囲むように動き出したがジェット群を見据え、頭の中で考えを巡らせた。

（あれは、ティアナのフェイクシルエットの強化版ってとこか。厄介な！）

舌打ちしたい気分だったが、敵はその程度の暇さえ許さない。
攻撃は相も変わらず単調な射撃と、アームによる直接攻撃だけ。
けれど、その数が尋常ではない。
もちろん、全てが実体な訳ではない。むしろ、その半分はクアットロがシルバーカーテンで生み出した幻影だ。けれど、それを見分ける術が無い以上ハヤトにとって脅威であることに変わりは無い。

「くっそ……アクセルシューター！」

≪　数が多すぎます！　≫

「うるせぇっ！　やらなきゃやられるだろが！！」

悲鳴のような声をブレイブハートが上げるが、ハヤトはそれを怒声で封殺する。
そして、彼が操れる限界量の魔力弾を生み出し、それを操って迫

り来る射撃弾とアームを撃ち落していく。
実体の分は全て真紅の魔力弾で撃ち落され、幻影は当たった端から消え去り霧散する。けれど、それで対処出来たのは半分にも満たない。

「く……っ！」

迫り来る攻撃を避けようと、反射的に身体を“後ろに”動かす。
……けれど。

「しま――っ！？」

操れる限界までの魔力弾を操った弊害と、幻影か本物か分からぬ敵と戦い続けた事による精神的な疲労。
それらの蓄積によって、ハヤトの注意力と判断力は、極限まで低下していた。
そう――。

――“自分が、壁を背にして立っていた”事を忘れてしまう程に。

ミスったと思っても、既に遅すぎた。
反射的に動いてしまった身体は壁にぶつかり、驚きに筋肉が硬直し、動かなくなる。
それは、致命的なまでの硬直時間、致命的なまでの――『隙』だ

った。

シールドを張るのも、避けるのも既に間に合わない。

無数の射撃弾とアームがハヤト目掛けて殺到し、彼の身体を撃ち叩き、打ち据える。

殺到した射撃弾の内の一つは彼の左目で弾け、ハヤトの頭を跳ね上げて、鮮血を空中へと散りばめた。

「が……ぁっ！」

《　マスターハヤト！！　》

苦悶の声が響き、右手に握られたブレイブハートが彼の名前を呼ぶ。

直後に訪れたのは沈黙、そしてパラパラと砕かれた壁の破片が地面に落ちる音。

「ぐ……」

小さく呻いた後、ハヤトの身体はゆっくりと前のめりに倒れた。

けれど、地面にぶつかる直線で何とか手を突っ張り、激突するのを阻止する。

「うげ……はぁ……ぺっ」

折れた歯を血と共に吐き、左手で左目を押さえて荒い呼吸を繰り返す。
そして、呼吸を整えながら身体の状態を確かめる。

（身体は動く……骨にも問題はねぇ。けど……）

熱い血が流れる感触を感じながら、押し当てていた左手をどかし、焼けるような痛みを訴えてくる左目を開けてみた。しかし、開けた筈の左目は真正面にある光景を何一つ映そうとしない。血で視界が覆われているとかそういうワケではなく、『何も映していない』のだ。

（完璧に潰れたか……）

左目からの痛みに苛まれながら、それでも思考だけは冷静だった。
何故なら彼が今置かれている状況は、痛みと左目を失ったことでハヤトが思考を停止することを許さない。

≪　左から来ています！　≫

「く……！」

それを証明するように、彼の失った視野を補うようなブレイブハートの声が聞こえる。
聞こえた声に従い、何も考えずに右へと跳ぶ。見えはしないが左側から床が砕け散る音が聞こえ、ハヤトは小さく舌打ちした。

「人の左目潰したんだ、少しは休ませろっての！」

「嫌に決まってるじゃなぁい。それに言ったでしょ？　死んで後悔なさい、ってね」

「この糞アマがっっ！」

最早、ハヤトには彼女とまともに会話するだけの余裕は無い。
左目から伝わる痛みは、ただそれだけで彼の精神をすり減らし、ひっきり無しに彼を狙う攻撃は、じりじりと、しかし確実に体力を奪っていく。更に言うなら、先程受けた攻撃のダメージも決して軽くない。

「アクセ――《Ｃａｕｔｉｏｎ！》――ぐあぁっ！？」

右目の視界に映る敵を倒そうと魔力弾を生み出すが、見えない左からの攻撃に対処できず、無防備なまま？型のアームによる攻撃を受け、地面に叩きつけられて２，３度ボールの様にバウンドする。

「あっははは！　よく弾むわねぇ、ボウヤ」

「……こ、のっ！」

クアットロの哄笑を聞きながら、バウンドする身体で無理矢理受身を取って体勢を立て直し、そのまま膝立ちになってブレイブハートの切っ先をクアットロに向け、砲撃を撃とうと魔力を集束する。

「ハヤト！！」

――その時、構えたハヤトの左から、聞きなれた少女の声が彼の耳に届く。

「スバルか！？」

聞こえた声に、ハヤトの意識が一瞬逸れ、視線が声のした方へと動く。

けれどその行動の全ては、この状況下では隙以外の何でもない。そして、クアットロはそれを見逃してくれる程、間の抜けた性格はしてない。

「お・馬・鹿・さぁん♪」

視線を動かしたハヤトの耳に、２つの音が聞こえる。ひとつはク

アットロの嘲笑。
もうひとつは、ゾブリ、という肉が切り裂かれる嫌な音。それが聞こえたのは、自分の右腕から。

「が……ぁ……っ！？」

「ハヤトォッッ！！」

ハヤトの苦悶の声と、スバルの悲鳴。
それと同時に、ブレイブハートを握っていたハヤトの右腕――肘から先の部分が宙を舞い、水音の混じった嫌な音を立て、地面を跳ねた。

ｓｉｄｅ：―　了

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

嘘だ、嘘だ、こんなの嘘だ！
あたしは、目の前の光景を必死で否定する。
でも、その光景は全然変わってはくれない。

あたしの目には今、右腕を切り落とされたハヤトしか見えてない。
よく見たら他にもあちこち怪我もしてるみたいで、白いバリアジャケットに所々血が滲んでるのがわかる。
そして、あたしとハヤトの間には、沢山のガジェットが道を塞ぐように並んでいる。

（ハヤト、ハヤト、ハヤトッッ！！）

馬鹿みたいにハヤトの事だけを思いながら、止まりかけた足を全力で動かす。

「……っ！」

ハヤトとあたしの距離は、大体２０メートル。
マッハキャリバーなら5秒もかからない筈のその距離が、まるで断崖絶壁みたいに遠く感じて、あたしは堪らずに声を上げた。

「急いで！　マッハキャリバー！！」

≪　Ｙｅｓ！　≫

あたしの声に答えて、マッハキャリバーが速度を上げる。
すると、ガジェット達があたしの行く手を遮るようにワラワラと動きだした。

「どぉけぇえええっっ！！」

目の前に飛び出してきた?型のガジェットを殴り飛ばしながら、走る。

けど、今度はまた違うガジェットが飛び出してきて、あたしの邪魔をしてくる。そのせいで、ハヤトとの距離は全然縮まらなくて。

（邪魔だ、邪魔だ、邪魔だ！！！）

飛び出してきたガジェットを蹴り飛ばしながら、ハヤトに向かって手を伸ばす。

そうすれば、この距離が少しでも縮まると思ったから。

「ハヤトォッ！！」

ハヤトに聞こえるように、ただただ必死に、声の限りハヤトの名前を呼ぶ。

すると、ハヤトがあたしの方に顔を傾けてこっちを向く。だけど、あたしに向けてくれた左目は血塗れで、あたしが見えているのかどうかも分からない。

それでもハヤトは、左手をあたしの方へ伸ばしてくれた。

だから、あたしもガジェットを蹴散らしながら、ハヤトの所へと

急ぐ。
　ワラワラと出てくるガジェットを、殴り飛ばして、蹴り砕いて、ハヤトとの距離を縮めていく。
　そして。

「ハヤトッ！！」

「ス、バル……」

　あたしとハヤトの手が、あとちょっとで触れそうになった――その瞬間。

「はぁ～い。残念無念、タイムアップ～。ご苦労様でしたぁ、セカンドちゃん♪」

　耳障りな、離れた場所にに立ってる女の人の声が、やけにハッキリと聞こえた。
　その直後に、まるでスローモーションの様にゆっくりと、目の前の光景が動いていく。

――いきなり、両腕が鎌みたいになっているガジェットがハヤト

を囲むように現れて。
――その腕が、ハヤト目掛けて一斉に振り下ろされて。
――ハヤトもあたしも、ソレに反応出来ないままで。

「はい、しゅ～りょ～♪」

あたしの手は、結局ハヤトの手には届かないままで――。

「――ぁ」

機械的に振り下ろされた沢山の鎌が――次々にハヤトの身体を刺し貫いていった。

「――――ぁあ」

それを見た瞬間、まるで目の前が真っ暗になった気がした。
心が、握り潰されたような気がして――

「いやあああああああああああっっっっ！！！」

――声の限り叫ぶ。
この目に映る全てを、否定するように。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

if35話　『その日、機動六課　3』（後書き）

皆が死亡フラグ死亡フラグ言うので、回収してみました。
……いえ、最初から決めてた展開なんですけどね。
どうも、ラモンです。

……うー、テンション上がらない。
前々から決めていた展開とはいえ、実際書くとここまでキツイとは。
無理矢理馬鹿なこと言ってテンション上げないと、凹んだまま書けなくなりそう……。
辛すぎて泣きそうです。
ちなみに先日、『その日、機動六課』編のプロットの全てを友人に見せたら、「お前のコレ酷すぎ」と言われ、そのまま肉体言語で少し頭冷すことになりました。

クアットロのＩＳって、ランク低い魔導師にとってはかなり厄介だと思うんですよね。実体と幻影の見分けつかないって、なのはクラスの殲滅力が無いと対処しきれないと思いますし。
そんな妄想の結果、ハヤトＶＳクアットロはあんな内容に。

しかし、クアットロとハヤトの対決をどう書いたもんかと一番悩みました。１対１は無理だし、かと言って絶対に他のナンバーズの皆様を入れたくはなかったしで（汗）
それで、最終的にガジェット軍団を使うという結果に落ち着いたわけですね。

今回書いた部分の一番の目的は、クアットロを原作以上の腐れ眼鏡にすることでした。
とりあえず、原作以上に下種に見えてたら成功かな～……とは思っ

ています。正直、書いてても凄く気分悪かったですけれど（笑）
眼鏡とスカっちは皆から嫌われればいいよ。でも嫌われると悪役としては逆に良いという矛盾……ちっ、眼鏡め。今度指紋つけまくってやる。

次回はこのシーンの続きとなります。
まだまだ暗いシリアスが続きますので心の準備を！
……まぁ、作者の私が出来てないって話なんですけどね。

それではまた、次の話で……。書きたくねぇぇぇ……。

※最後に。
今回の話で、気分を悪くした方もいるかも知れません。
ハッピーＥＤが好きな人などは、多分本気で最悪な気分になったと思います。
ですが、物語上必要不可欠な部分でしたので、もう暫くお付き合いください。
私もハッピーＥＤが大好きな人間なので、そちら目指して頑張っていくつもりですので。

if36話　『その日、機動六課　4』

（……体中刺されるのって、こんな感覚なのか）

体中に走る異物感と熱さを自覚しながら、まるで他人事の様にそう考える。

呼吸をしようとすると、空気の変わりに液体が気道を通り、ゴボゴボと嫌な音を立てる。多分、肺をやられたんだろう。マジでこんな音するんだな。

身体の至るところを刺されてるってのに、全然痛くねぇ。

ゲームとかで『致命傷だと痛みを感じなくなる』とか言ってたけど、だとしたらこれって相当ヤバイよな。

（死ぬ……のか？）

ボンヤリとそんな考えが浮かんでくる。

つか、意識もどんどん遠くなってるし……どう考えてもヤバイだろ。

「ハヤトッ！」

俺を呼ぶスバルの声も、どこかくぐもって聞こえて遠い。

ったくよぉ……告白の返事もしてないってのに、こんなのアリかよ。

「か……ひゅう……」

スバルの名前を呼ぼうとすると、喉の辺りから空気の抜ける音だけがする。

右の視線を下に向ければ、俺の喉から変な金属が突き出してるのが見えた。あぁ、喉刺されてんなら、声が出なくても当然だわな。

……やれやれ、何だってこんな時までムダに冷静なんだか。

アレだな。血がなくなりすぎて、脳が上手く働いてないんだろう。

（そうだ……反撃、しなきゃな……）

そう考えながら右手に持ったブレイブハートを構える……って、右腕もう無ぇじゃん。

はは、マジで頭働いてねぇや。

「ハヤト！　やだ、ハヤトォッ！！」

（……スバル）

左側からスバルの声が聞こえるけど、姿は見えない。

何で……ああ、左目潰れてたんだっけか。

「ハヤト、ハヤトォォッ！！」

姿は見えないけど、多分泣いてんだろうな。
アイツ、何だかんだで涙もろいし。

「ぐぶ……ぉあ……」

感覚の殆どない左腕を動かして、スバルが居ると思う方へ伸ばすけど、何かに触れた感じはしない。
つーかまぁ、感覚なんてもう殆ど無いから、触っても分からないかも知れねーな。
最期だってのに、好きな奴に「好きだ」って言うことも出来ないのか……神様って奴は、随分酷だよなぁ。

（……スバル）

もう、自分の心臓の音以外、何も聞こえない。唯一聞こえてるその音だって、どんどん小さくなっていく。
俺は……こんなとこで、終わりなのか？

告白の返事も出来ないまま。
好きな奴を泣き止ませることも――出来ないまま。

終わり、なのか……？

（……いやだ）

左手を伸ばす。

せめて、スバルを泣き止ませてやりたい。

最期に……アイツに触れていたい。

（……いや、だ）

けど、もう左腕は全く動いてくれやしねぇ。

（……くそっ、たれが……）

意識も、段々と遠のいていく。

そして――。

（死にたく、ねぇなぁ……）

――俺の意識は、途切れた。

ｓｉｄｅ：―

「あ……あぁ……」

呆然と、スバルが言葉にならぬ言葉を漏らす。
その体中からガジェット？型の鎌を生やしているハヤトを涙の止まらぬ瞳で見つめ、ただ、喘ぐように喉を鳴らす。そんな彼女を見つめ、クアットロは楽しげに口の端を持ち上げた。

「んふふ～、い～い表情ねぇ。セカンドちゃん？」

けれどすぐに興味を失ったように視線を動かし、ハヤトの体中を刺し貫いている？型の群れを見た。
そして人差し指を立て、自分の方へと招くように動かして口を開く。

「それじゃあ、撤退するとしましょうか。？型ちゃ～ん、ソレ、こっちに持ってきて頂戴ねぇ」

『……』

彼女の声に答えるように？型がハヤトを貫いた姿勢のまま、その蜘蛛のような足を動かして彼をクアットロの居る場所へと持っていこうとする。

その、瞬間――。

「ぅあああああああああっっっっ！！！」

咆哮と、爆発するような魔力の奔流。

それを感じたクアットロが視線を上げ、スバルを見る。すると、クアットロの目の前で彼女の瞳が、青色からクアットロと同じ金色――戦闘機人特有のソレへと変わっていく。

魔力の奔流に巻き込まれ、彼女を取り囲んでいた？型ガジェットのうちの何体かが爆発、四散する。

「……せ」

スバルがその双眸で、薄笑いを浮かべているクアットロを睨む。

もし視線で人が殺せるとすれば、すでにクアットロの心臓は止まっていただろう。だが、実際にはそんな事は無く、クアットロはスバルの目の前で、ニヤニヤと笑って彼女――いや、?型に刺し貫かれたまま連れて行かれようとしているハヤトを見ている。

「……なせ」

ゆっくりと、しかし明確な動きでスバルがスタートダッシュの姿勢を取る。

だが、ハヤトに集中しているクアットロは、そんなスバルの動きを見ようとしない。代わりに、展開しているガジェットがクアットロと6体の?型を守るように動き、スバルとクアットロ、?型の間に鉄の壁を作り出す。

「離せっ！！」

しかし、スバルはそんなものを意に介さない。

彼女の視線が捉えるのは、体中を刺し貫かれたまま連れ去られようとしているハヤトの姿だけ。

その間にある物は、全てが異物、全てが障害だ。

だから――ぶち壊す。

「ハヤトを……離せえええええっっっっ！！！」

絶叫に近い咆哮と共に、マッハキャリバーのローラーが煙を上げて地面を削り取る。

そしてそのエネルギーの全てを加速へと変換し、まるで爆発でも起こしたような音を立てて走り出す。その初速は凄まじく、彼女を囲んでいたガジェットの全てが反応さえ出来ない。

スバルは動けないガジェット達には構わず、進路上に居る異物だけに狙いを定め、走る速度をそのまま破壊のエネルギーへと変えて拳に乗せ、自分に向けてアームを伸ばそうとしていた？型の巨体へと叩き込む。

「はぁあああああっ！！」

拳が？型の装甲にぶつかるのと同時に、彼女の戦闘機人としてのＩＳ――インヒューレント・スキルと呼ばれる特殊技能、振動破砕が発動する。ぶつかった拳の先端から？型の装甲に振動波が送られ、共振現象が起こり、？型の分厚い装甲などモノともせずに貫く。振動のエネルギーはそのまま内部機構に壊滅的なまでのダメージを与え、？型の巨体を爆発させた。

しかし、感情持たぬガジェットはその程度で隊列を乱しはしない。それどころか、より一層下がっていく？型とスバルの間に群がって分厚い鉄の壁を築き上げていく。

「邪魔、すんなぁあああっっ！！」

その群れに向かって、スバルは真正面から突っ込んでいく。
少し冷静になれば、あたりの壁を使って敵を撹乱するのがベストだと気付いただろう。
だが、彼女の目の前には愛しい人の姿があり、その彼を殺し、亡骸さえ奪おうとする憎い敵がいる。

――冷静になれなどと、誰が言えるだろうか。

「あらら、セカンドちゃんたらこわ～い。でもぉ、もうちょっと冷静にならないと、危ないわよぉ？」

ただ一人、鉄の壁を挟んだ先にいる女――クアットロを除いて。

勿論、その言葉はスバルを激昂させ、冷静さを奪うための言葉。
スバルも頭の片隅でそれはわかっている。わかってはいるのだが――。

「黙れぇぇえええっっ！！」

――思考の全てを、感情が押し流す。

再び走り出したスバル目掛け、？型の群れが黄色い射撃弾を雨の様に放つ。
降り注ぐ射撃弾を体中に受けながら、それでもスバルは止まらない。

「う～ん、このままじゃ襲われちゃうわねぇ。？型ちゃん。急いでぇ～♪」

ガジェットの壁など物ともせずに、自分の方へと向かってくる？型を追うスバルを、ふざけた態度と軽薄な言葉でからかいながら、声を飛ばして自分もスバルとは反対側の入り口へと移動し始める。
ハヤトを運ぶ？型も、クアットロの声に反応して動く速度を上げ、ガシャガシャと音を立てて彼女の移動する方向へと向かっていく。
しかし、スバルがそれを見逃せる筈も無い。

「待てぇえええっっ！！」

声を張り上げ、手を伸ばす。
けれどクアットロは止まることなくスバルを振り返り、馬鹿にしたような笑い声を上げる。

「あはははは！　待てって言われて待つ訳ないでしょお～？
セカンドちゃんのお相手はぁ、ガジェットちゃん達がしてくれるから、安心なさぁい？」

「ふざけ……きゃあぁっ！！」

その言葉に激昂したスバルが、思わず足を止めて言い返そうとすると、その隙を見逃さずに?型の巨大なアームが横薙ぎに振るわれ、彼女の身体を吹っ飛ばす。

逃げるクアットロと?型に集中しすぎていたスバルは、ロクに受身を取ることも出来ずに壁に叩きつけられる。

叩きつけられた衝撃で、肺から空気が一気に抜け、一時的な呼吸困難になってしまう。

「かはっ……げほっ、げほっ！」

壁に叩きつけられた後、地面に這い蹲って咳き込むスバル。

それを見て、クアットロは楽しくて仕方ないとばかりに笑い声を上げながら飛び去っていく。

「無様ねぇ？　自分の仲間1人助けられないなんてぇ。タイプゼロの名が聞いて呆れちゃうわぁ」

「げほっ……ま、てぇっ！！」

呼吸が整わないまま立ち上がり、また駆け出す。

けれど、ろくに呼吸も整っておらず、思考さえ感情に押し流されている状態では、壁の様に折り重なったガジェットの群れを突破し

ようとするのは……あまりにも、無謀すぎた。

「くっ……ぅあっ……」

？型の弾丸が、？型のアームが、スバルを排除しようと襲い掛かってくる。

被弾を厭わぬスバルは、クアットロまでの最短距離を、彼女の出せる最速で走っていく。だがそれでも、スバルがガジェットを突破するよりも、クアットロ達が逃げる方が速い。

既に、クアットロと？型は別の通路入り口へと近づき、あと少しでその通路に入ろうとしていた。

「ど……けぇぇえええっっっっ！！！！」

叫びながら、拳で？型を貫き、蹴りで？型を吹き飛ばす。

そのたびに彼女のＩＳが発動し、凄まじい爆発音と、カートリッジから薬莢が吐き出される音が辺りに響く。そして、再び咆哮と共にスバルの手足が振るわれ、爆砕音が巻き起こる。

ガジェットも反撃はするものの、スバルの進軍速度を僅かに緩める程度の効果しかない。

しかしそれでも――それでも、逃げるクアットロと？型からすれば、それは十分過ぎる効果を持つ。

「うふふのふ～。それじゃあ、私と？型ちゃんはこれで失礼させて頂きますわねぇ？
それじゃあセカンドちゃん。ま～たね～」

通路の入り口まで辿り着き、クアットロはスバルに向けてアイドルの様にウィンクをしてみせた。
そして、スバルが何か言葉を発するより早く、彼女と、彼女に追いついた？型、そして刺し貫かれたままのハヤトの身体が景色に溶け込むように消え去っていく。

「あ……ぁあっ……」

それを見てスバルが声を上げ、急いで駆けようとする……が、ガジェット達がそれを許さない。
スバルは最早無我夢中で敵を排除し、少しずつ、少しずつ前に進んで行く。
しかし、その速度はあまりにも遅すぎた。

「そんなに焦らなくてもぉ、また会わせてあげるわよ。
だって、セカンドちゃん達には、もっともぉ～っと絶望して貰いたいしねぇ～……あはははっ！」

耳障りな声で笑いながら、スバルの視線の先でクアットロ達の体が完全に消える。
残されたのは、２０体程のガジェット達と、満身創痍のスバルだけだった。

「あああああっっっっ！！」

絶叫と共に、それでもスバルは駆けていく。
前へ、前へ、前へ。
ハヤトを助ける為に。
ハヤトを、取り戻す為に。

「悔しかったら追いついてみなさぁい？　まぁ、無理でしょうけどねぇ～」

そんな彼女の耳に、どこからか分からないクアットロの声が届く。
その声はスバルの感情を逆撫で、怒りを更に爆発させる。

「うあああああああああっっっっ！！！」

――クアットロの姿を見失ったまま、スバルは絶叫と共に、感情に任せて拳を振るう。
そこには、スターズ3としてのスバル＝ナカジマでは無く。
ただ、恋する少年を失ってしまった少女の姿があった。

◇◇◇◇◇

どれだけの時間が過ぎただろう。
ガジェットが全て沈黙し、スバルは動きを止める。

「……」

既に、彼女の身体は満足に動こうとしない。
左腕は皮膚が裂け、裂けた部分から彼女が戦闘機人である証のケーブルや、人工筋肉が見えていて、身体のあちこちから血が流れている。
その状態で、それでもスバルはハヤトの姿を探す。
もしかしたら……もしかしたら、と一縷の望みに縋るように。

「……あ」

けれど、彼女が見つけられたのは、切り落とされたハヤトの右腕

のみ。
それを見つけたスバルは、まるで吸い寄せられるように足を引き摺りながら、そこへと向かう。
ハヤトの右手は、ガジェットの残骸の中にポツンと転がっていた。握られていた筈のブレイブハートは、見当たらない。

「……嘘だ、よ」

少しずつ、スバルは歩みを進めていく。
間違いであって欲しい、と願いながら。

「嘘だ……嘘だ……」

だが、そこにあるのは待機状態に戻ったブレイブハート――銀色の指輪が嵌った、紛れもない彼の腕で。
殆ど思考が停止している状態のスバルにも、それが何を意味するのかは明らかで。
必死に否定していた事実を突きつけられ、彼女はその場に力なく膝から崩れ落ちた。

「ハヤ……ト？」

ふらふらと、スバルはハヤトの右腕を持ち上げ、抱きしめる。
ほんの数時間前に自分の肩を抱いたその腕は、今はまるで氷の様

に冷たくて。その冷たさが、嫌でもスバルに現実を突きつける。

「ハヤト、ハヤトォ……」

いつでも側にいて、笑いかけてくれたあの人は、もう居ないのだと。

永遠に失われてしまったのだと。

もう2度と、あの笑顔を向けてはくれないのだと……。

「……ぁ……ぅ」

全てを理解してしまったスバルの双眸から、止まる事無く涙が零れ落ちる。

スバルはハヤトの腕を抱きしめ、そこから目を逸らすように天を仰ぐ。

そして――。

ガジェットの残骸が広がるその空間に、彼女の悲鳴の様な慟哭が響いた。

ｓｉｄｅ：―　了

if36話　『その日、機動六課　4』（後書き）

心が……心が痛ぇよとっつぁん……。
どうも、ラモンです。

クアットロの台詞を書いてる時に、1人で「この腐れ眼鏡が！」と呟いていたのは内緒です。
一応『その日、機動六課』編は次でラスト。
ゼストの旦那の動きを少し書いて、『その日～』編のまとめをして終わりという形になります。

……今回はねぇ、ホント書くのが辛かったですよ。
スバルの心情とか、痛々しすぎて書きたくねーって話です。どうしてこんな展開にしたし。
読者の皆さんが死亡フラグ死亡フラグ言うからですよ！（えー）

という冗談はさておき。
前回の感想で、眼鏡がいい感じに嫌われ始めて、計画通りだと言わざるを得ません（笑）
この調子で眼鏡は皆から嫌われればいいよ！
あ、他のナンバーズは嫌わないでくださいね！（贔屓）

それでですが。
これから暫くは、かなり暗い話が続くと思います。もちろん、多少なりとも明るい場面を入れていきたいとは思いますが。
読むのが辛い読者さんもいらっしゃると思いますけれど、お付き合いくだされば幸いです。

それではまた、次の話で。

if37話　『その日、機動六課　5』

side：―

（オーバーSの魔導師が動き出したか……）

巨大な槌を構えるヴィータと対峙しながら、ゼストは巨大な魔力が動き出したのを感じた。
意識はヴィータから逸らさず、こうなっては仕方が無いと思考を切り替える。目の前の騎士1人だけでも手強いのに、更に人数が増えては勝ち目が薄いのは明白だ。
目的は果たせなかったが、ここで退くという選択肢が最善だと、彼の戦士としての勘が告げている。

（アギト、退くぞ）

（何言ってんだよ旦那！　折角のチャンスなんだぞ！？）

（機会ならまたある。今ここで無理をする意味は無い）

（けどよぉっ！）

彼とユニゾン状態にあるアギトが叫ぶが、事態は一刻の猶予も無く、ゼストはやや焦っていた。
しかし、対するヴィータにも、それ程の余裕は無い。彼女とリイ

ンが今戦っている男――ゼストとアギトの2人は、自分達に比べてユニゾンの相性こそ悪いが、それを補うだけの経験と実力をゼストが備えている。
もし逃げに徹されてしまえば、追いきれる自信は無い。

（ちっ……一気に行きてぇとこだが、隙がねぇ）

（シグナムが今こっちに向かってるですけど……向こうも気付いたみたいです）

（ああ。このまま逃げられたら厄介だな）

グラーフアイゼンを構えたまま、ヴィータと、ユニゾンしているリインの2人は、目の前で槍を構えるゼストの隙を窺っている。だが、構えるゼストには、こちらから仕掛けられるだけの隙は見つけられない。
対するゼストも、ヴィータから逃げ出せるだけの隙を見つけられずにいた。そうして両者が睨みあったまま、時間は過ぎ去っていくかのように思えた。

『……っ！』

「「！！」」

しかし、そんな状況のヴィータに、ひとつの通信が飛び込んでくる。

それは彼女へ向けて発信されたものではなく、この混乱のせいで混線した通信が偶然届いただけのもの。けれどその通信は、ヴィータとリインの思考を、一瞬とはいえ停止させるには十分過ぎる内容だった。

「ハヤトが……？」

目を見開き、その通信の内容を反芻するように、呆然と呟く。

「！」

ゼストはそれを見逃さず、ヴィータに背を向けて全速で撤退を開始する。

そのタイミング、速度共に常人のソレとは比べ物にならない速さで、ヴィータも反応出来ずに見逃すかに思えた。いや、実際反応は出来ていなかったのだが――

「逃げてんじゃねえええええっっっっ！！！！！」

「何だとっ！？」

聞こえてきた怒号に振り返り、ゼストは息を呑む。
振り返った彼の視線に映ったのは、鬼神の如き表情でグラーフアイゼンを振り上げ、自分のほぼ真後ろまで迫ってきているヴィータの姿。
逃げ切れるタイミング、速度だと思っていただけに、ゼストの驚きは激しかった。
とはいえ、このまま追跡されては撤退する意味が無い。仕方ないとゼストは動きを止めて、ヴィータを迎え撃とうと構え直す。

「ぶっ潰れろおおおおおっっ！！！」

そんなゼストに対して、グラーフアイゼンを振り上げたヴィータが、獣の様な咆哮と共に踊りかかった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ３７話　『その日、機動六課　５』

甲高い金属音を立てながら、ヴィータの振るった大槌を受け止める。

「ぬぅっ！？」

そのまま叩き落されそうな衝撃に、思わず食い縛った歯の間から声が漏れた。

先ほどまで戦っていた時とは明らかに違う、怒りに任せて振るわれた、技術も何も無い力任せの一撃。それを受け、ゼストは疑問に思う。

ヴィータは見た目こそ幼いが、その戦い方は熟練されたそれだった。

だが、今の攻撃は技術もへったくれもない攻撃。ヴィータほどの騎士が何故こんな攻撃をしたのか、ゼストは頭の片隅で思考し、ついさっき彼女に届いた通信が原因だろうと当たりをつける。

「てめえっ！！　仲間はどこに居やがるっ！？」

「……知らんな」

鍔迫り合いをしながら、力の限りグラーフアイゼンを押し込みつつヴィータが怒鳴る。

ゼストはそれを受け止めながら、短く返す。すると彼女は、表情を憤怒に染めてさらに声を荒げた。

「知らねぇとか、ンな寝言信じると思ってんのか！
どこだ！！　あたしの部下を……ハヤトを何処に連れて行きやがったっ！！！」

その言葉に、ゼストが眉を顰める。
彼女の言葉から推測できるのは、彼女の部下――ゼストが先日出会った少年が、スカリエッティらによって連れ去られたようだ。ならば、ヴィータがここまで怒るのも納得が行く。
それを悟り、ゼストは彼の知っているスカリエッティの居場所を教えようかとも考えた。
自分の過去と今のヴィータが重なり、そんな思いを覚えたのだ。
だが――。

「……知らんな」

今、スカリエッティを逮捕させる訳にはいかなかった。
彼自身の目的の為には、スカリエッティが行おうとしている計画は必要不可欠。そしてその目的は、ゼストがこうして生きている目的と言っても過言ではない。それを達成させる為なら、例え悪鬼羅刹と罵倒される覚悟さえ、彼にはある。
だから、ゼストは再び否定の言葉を口にした。

「――っ！！　ああそうかよ！　なら、力ずくで聞き出してやらあっっ！！」

ゼストの返答に再び怒鳴り返し、ヴィータがグラーフアイゼンを持つ手に更に力を込める。
常人ならば、そのまま押し切られてしまっていただろう。しかし

相手は歴戦の戦士であるゼストだ。ただの力押しで何とかなる訳もない。

「すまんが、捕まってやる訳にはいかんのだ」

「っ！？　ぐあぁっ！！」

グラーフアイゼンを受け止めていた槍を斜めに構え、受け止めていたヴィータの力を全て受け流す。

力任せに押していたヴィータは、押していた力を全て受け流されて体勢を崩してしまう。そして、無防備になったヴィータ目掛け、ゼストが彼女の鳩尾目掛けて体重を乗せた回し蹴りを見舞う。

ロクな防御も出来ないままそれを喰らい、空中をヴィータが吹き飛んでいく。

「ぐ……っ！！」

それでも何とか空中で体勢を立て直し、前を向いた。

だが既にゼストは再び逃走し始めており、吹き飛ばされたせいでその距離はかなり開いてしまっている。

今から全速で追いかけても無駄だと分かる程の距離。それでも、ヴィータは怒りに任せてゼストの後を追おうとした。

『ヴィータちゃん！　無理です！！』

しかし、そんな彼女をユニゾン状態のリインが止める。

「けどっ！！」

『ヴィータちゃん！！』

「っ……」

食い下がろうとしたヴィータに、リインが鋭い声を飛ばす。
その声に、ヴィータはグラーフアイゼンの柄を思い切り握り締め、音が鳴る程に歯を噛み締める。
明らかに納得していない表情の彼女に対し、リインは咎めるような声色で言葉を続けた。

『悔しいですけど、もう追いつけないのですよ。それに、罠って可能性もあるです。
下手に深追いして、ヴィータちゃんにまで何かあったらどうするですか！』

「……そう、だな」

リインの声で幾分か頭の冷えたヴィータは、ゼストが撤退して行った方角を見続けながらも、そう返答した。

「……くそっ！！」

暫くそちらを見続けた後、吐き捨てるように毒づいて地上本部へと踵を返す。

その胸の内に渦巻く後悔と無力感、そしてゼストを追いかけたいという気持ちを必死で押し隠しながら。

◇◇◇◇◇

「何を考えている、スカリエッティ……」

ヴィータから逃れ、空を飛びながらゼストは呟く。

彼が聞かされていた計画では、捕らえるのは聖王のクローン体である少女だけだった。なのに、ヴィータは先日出会ったあの少年が攫われたと言っていた。それは、彼が聞かされていない事実。

勿論、ゼストとスカリエッティとは利害が一致しているから協力しているだけであり、仲間でも何でもない。

話せない情報や計画があったとしても然るべきだろう。

「だが……」

ゼストが見た限り、ハヤトというあの少年はスカリエッティが目

をつけるようなモノは無かった筈だ。
無能ではないだろうが、少なくともゼストにとって脅威になるとは到底思えなかった。そんな少年の何がスカリエッティを惹きつけたのか。それが分からない。

『どうでもいいだろ、あんなヤツの事なんてさぁ』

「……」

ユニゾンしたアギトの言葉に、ゼストは答えない。
殆ど勘だが、この事実が何か大きな意味を持つのではと思ったのだ。
しかし、どれだけ思考しても正しい答えなど出せる筈も無い。何せ圧倒的に情報が少なすぎる。情報らしい情報は、ヴィータの短い言葉だけ。それで正しい判断を下せと言う方が無茶だろう。

『今はとりあえず逃げようぜ旦那。考えるだけなら、戻ってから考えればいいだろ?』

「ああ、そうだな」

今度はアギトの言葉に返事をし、思考を打ち切り逃走に専念する。
だが、何となく燻る嫌な予感だけは拭えず、彼の胸の内にしこりの様に残っていた。

◇◇◇◇◇

地上本部を襲ったガジェットが全て排除されたのは、日が傾き、空に星が輝き始めた頃だった。管理局側が受けた被害は甚大で、地上本部は重傷者多数、建物は半壊という状況。

とりあえず、上層部の人間に被害が出なかったのは幸いだろうか。

「……なんて、そんな事言ってられへんわな」

事後処理の書類の山を片付けつつ、はやては苦々しく呟く。

地上本部の被害は先に述べた通りだが、機動六課単体が受けた被害はそれの比では無い。六課隊舎は敵の襲撃で全壊。元通りになるには早くても3ヶ月は必要だろう。

ロングアーチのメンバーも、待機メンバーだったシャマルやザフィーラ、そしてFWメンバー達の何人かは重傷を負ってしまっている。しかし重傷ではあるが、命に関わる程の傷では無い。更に、保護していたヴィヴィオも奪われてしまった。シャーリー達の報告から、奪ったのは例の召喚士の少女だったらしい。

しかし、それはまだ良い。

建物は修理すればいいし、怪我だって後遺症も無く治る。

攫われてしまったヴィヴィオも、スカリエッティを逮捕する上でもう一度保護する事だって出来るだろう。

けれど――。

「ハヤト君……」

――喪われてしまった人は帰ってこない。
手に持った分厚い書類を投げ捨て、はやては大きな溜息を吐く。
まだ正式な報告が来た訳ではないが、ティアナとなのはからの報告を聞く限りでは間違いないだろう。

「中の警備にばっかり気ぃ取られとったわ……」

自分を責めるように呟いて、椅子に体重を預けて天を仰ぐ。
もし隊長陣の誰かがもう1人外に居れば、そうでなくとも、もう少し早く状況に対応出来ていれば……。
ネガティブな考えばかりが浮かび、気持ちがどんどん沈んでいく。

「って、隊長の私がこんなんじゃアカンわな」

このままネガティブな考えに埋没してしまいそうになり、はやては思考を打ち切って頭を振る。
今は反省や後悔に浸っている場合では無い。ただでさえ人手が足りていないのだ。反省や後悔なら後でいくらでもすればいい。少なくとも今は、これからどうするかと考えなければいけない。
やらなくてはいけない事も、考えなくてはいけない事も山の様にある。

入院している六課のメンバーの分まで、自分が踏ん張らなくては。
はやてはそう自分に言い聞かせ、気合を入れるように両頬を叩いてから、再び書類の整理を始めた。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「……ふう」

５分に一度ため息をついてるなんて、どうかしてる。
目の前にある『欠員報告書』は、さっきから少しも筆が進まない……。時計は夜の１０時を少し回ったところで、報告書を八神部隊長に提出するまで、あと２時間しかない。

「はぁ……」

また溜息を吐いてから、机に突っ伏して書きかけの書類を指でつ

まんでヒラヒラと遊ばせる。
『欠員者』の欄に『ハヤト＝ロックウェル』と書き込めばいいだけなのに、中々それが出来ない。臨時にと宛がわれた部屋の明かりは、何故か今はひどく寒々しく、無機質なものに見えた。
溜息を吐きながら、病院にスバルの着替えなんかを届けに行ってエリオ達他のＦＷメンバーを顔を合わせた時のことを思い出す。

エリオは怪我をしてたけど、いつもと変わらず元気に振舞っていた。目が赤くなっていた事以外は。
キャロは戻ってからもう何時間も経っていたのにまだ泣いていて、ギンガさんが背中をさすってあげていた。
ギンガさんもエリオと同じく普段どおりに振舞って、エリオやキャロを励ましていた。少しだけ、やっぱり憔悴している様子はあったけれど。

――スバルは、見ていない。
一番重傷だったから、今日一日は集中治療室で絶対安静というのもあったし、病院に運ばれるまでの間のスバルの様子を見たら、とてもじゃないけど声なんてかけられないと思ったから。

「……何で、１人で動こうとしたのよ。馬鹿」

的外れだと分かってる文句を呟いて、手に持ったペンを転がす。
ただの紙切れなのに、ここにアイツの名前を書いてしまったら本当にアイツが死んでしまうような、そんな気がして。こうしてたった１人の名前を書けないまま、ダラダラと時間が過ぎてしまっている。
明日も現場調査があるから、少しでも寝ておかないといけないっ

てのに……ホント、何してるんだか。

「……っ」

ペンを動かそうと身体を起こして、やっぱり出来ずにペンを置いてもう一度机に突っ伏す。

本当に、馬鹿みたいだ。

「ふっ……く……っ」

突っ伏して腕の中に顔を埋めると、途端に涙が出てきて、思わず声を噛み殺す。

泣いてる場合じゃないって分かっていても、後から後から溢れてくる涙は止まらない。

「ハヤトの、馬鹿ぁ……」

最後に呟いたつもりのその言葉は、ちゃんと声になったのかどうか、自分にも分からなかった。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

ｉｆ３７話　『その日、機動六課　５』（後書き）

よし、今回はあんまり鬱描写は無かったぞ！
どうも、ラモンです。

という訳で、ちょっと駆け足でしたが『その日、機動六課』編ラストの纏めです。
本当は、病院に搬送される間のスバルの描写も書いたんですけどね……。
書いてみたところ、私の心が途中でへし折れたのでやめました（笑）
ヴィータがちょっと直情すぎた気もしますが、彼女ならハヤトが死んだって聞いたらこれくらい怒ってくれると私は信じている！ｗ

さて、とりあえずゼストの旦那、ヴィータ、はやて、ティアナの４人の視点で『その日、機動六課』編の最後を飾りました。
次回以降は『翼、再び』編ですね。

スバルとハヤト、そしてＦＷの皆がどうなるのか。
読んでくれた人を感動させられるようなモノを書きたいなー……などと神頼みしている次第ですｗ
次回からも結構暗めなので、皆精神ポイントをしっかり補充しておいてくださいね。

それではまた、次の話で。

if38話　『傷ついた翼たち　1』

side：スバル＝ナカジマ

12歳の時に、彼に出会った。

お父さん以外で、初めてあたしの側に居てくれた男の子。
いつでも笑ってあたしを励ましてくれた、まるで太陽みたいな人。
あたしの身体の事を知っても、「だからどーした」って笑い飛ばしてくれた人。

――あたしが初めて、恋した人。

幼いこの手に掴めるのは、貴方だけだった。
けど、世界はどこまでも残酷で。
あたしの手から、その全てを奪っていく。

どうして、世界はこんなに残酷なんだろう？
どうして、世界はこんなに優しくないんだろう？

どうして――あたしの好きになった人を、奪っていっちゃうんだろう？

目を閉じれば、今でも思い出せる。

微笑んで、あたしに触れるその指も。
優しさも。
微笑みも。
――温もりも。

その全てが、あたしの目の前で失われてしまったのに。
けど、まるで今この場にあるかのように鮮明に思い出せる。

あたしはきっと、馬鹿なんだ。
失ってしまったって、居なくなっちゃったって、理解しているのに。

それでも。
それでも――まだ。

まだ、恋をしている。
――恋を、してるんだ。

こんなにも。

こんなにも――。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ３８話　『傷ついた翼たち　１』

ｓｉｄｅ：―

スカリエッティによる襲撃があった翌日。
動ける機動六課のメンバー達は、朝早くから全壊してしまった六課隊舎の現場調査をしていた。
その中にはティアナも含まれていて、彼女は正面玄関周辺の調査を担当している。

「ランスター陸士、こちらの確認をお願いします」

「……はい。大丈夫です」

渡された書類を確認し、そう言って持っていたパネルのモニタに触れてチェックする。
六課メンバーの殆どが現場調査をしているとはいえ、その人数は決して多くなく、ティアナの仕事は思っているよりも多い。けれど、ティアナにはその忙しさに『助かった』という思いを抱いていた。
こうやって働いている間は、余計な事を考えなくて済むから。

「……」

それでも――と。
ティアナは手元のパネルから視線を上げた。
上がった視線の先にあるのは、ボロボロになった機動六課の隊舎。

六課に配属になってから、まだ半年も経っていない。
だというのに、隊舎を見ているだけで、様々な思い出がティアナの頭を駆けていく。
ただ、その思い出の殆どでハヤトが馬鹿をやっている映像だけが思い浮かんできて、なんだかなぁ……とティアナは小さく笑った。

訓練のたびに、サボりたいとハヤトが愚痴を零して。
そしてそんな彼を自分が引き摺るように無理矢理連れて行って。
スバルはその隣で、呆れたような顔で笑っていて。
エリオとキャロは少しは慣れたところで、楽しそうに自分たちを見ていた。

そんな当たり前の……でも、もう2度と見ることの出来ない景色。

自覚していても、思い出さずにはいられない景色。

「……っ」

そうしていると、涙が溢れて手に持ったパネルのモニタへと落ちた。

ティアナは慌てて袖で涙を拭い、手元の書類へと視線を戻してペンを動かす。まるで、ハヤトを喪ってしまった悲しみから逃れるように。

「……大丈夫か、ティアナ？」

「っ！　シグナム副隊長……」

その時、不意に背後から声をかけられ、ティアナは再び顔を上げて振り返った。

振り返った先に居たのは、ティアナの事を気遣わしげな表情で見つめているシグナム。それを見たティアナは「大丈夫です」と小さく笑った。けれど、それは誰が見ても無理をしていると分かる程に痛々しい笑みで、シグナムは彼女に何かを言おうと口を開く。

「……そうか。無理は、するなよ」

「はい」

だが、こうして本人が気を張っているというのに、わざわざそれを指摘するのも躊躇われ、シグナムは一度口を閉じて、短く彼女を気遣う言葉をかけるだけにした。

（……こういう時、ロックウェルならどう言ったのだろうな）

そして、シグナムは居なくなってしまった少年の事を思う。

彼がここに居たのなら、恐らくいつもの様にふざけて、こんな重苦しい空気など掻き消してくれるのに、と。けれど、こうしてティアナ達が憔悴している原因は、そのハヤトが居なくなってしまったからで。

シグナムは月並みな励ましさえ満足に出来ない自分に、小さな苛立ちを覚える。

同時に、自分達が知らぬ間にどれほどハヤトという存在に頼っていたのかを理解した。

今までも何度か空気が重くなるような事はあった。ＦＷメンバーはまだ子供なのだ、時には喧嘩をするような時もあった。だが、そういう時はいつも、隊長達が何かアクションを起こす前に、ハヤトが積極的に動いて解決してくれていた。

だから、シグナム達もいつしか「彼に任せておけば大丈夫」と思ってしまっていたのだ。

（そのツケを、まさかこんな形で実感させられるとはな……）

自嘲するような思考と共に溜息を吐き、視線を六課隊舎へと向けて暫し物思いに耽る。
シグナムにとって、ハヤトは初めての『教え子』と呼べる存在だった。時には彼の言動に呆れる事もあったけれど、それでも彼との訓練している時、確かに彼女は楽しいと思っていたのだ。

「……」

六課隊舎を見上げながら、シグナムは手を握りしめた。
そうして隊舎を見ているシグナムに、ティアナが質問を投げた。

「病院の方は、どうでした？」

「ん？　あぁ……問題ない。重傷だった隊員達も、峠は越えたそうだ」

「そうですか。よかった」

シグナムの答えに、ティアナは初めて嬉しそうに頬を緩めた。
それを見たシグナムは薄く微笑み、ティアナの近くに歩み寄って彼女の手からパネルを取る。

「後は私が引き継ごう。お前も、病院の方に顔を出して来い」

「え、でも……」

「スバルの側に、行ってやれ。ギンガも、疲れているだろうしな」

「あ……」

言われて気付いたのか、ティアナが小さく声を上げた。

ギンガは集中治療室にいるスバルについていて、恐らく一睡もしていないだろう。いくら人よりも体力的に優れているとはいえ、昨日は襲撃があったのだ。一睡もしないで辛くない筈がない。

「お前も辛いかもしれんが、頼む」

「……はい」

シグナムも、今のティアナをスバルに会わせるのが酷だというのは理解しているつもりだ。

ハヤトの死に六課で最も傷ついているのは、間違いなくスバルとティアナの2人だろう。なにせ、訓練校から4年近くパートナーとして共に居た人間だったのだ。それを失って、平静でいられる方がどうかしている。

けれど、だからこそシグナムはティアナにスバルの近くに居て欲しかった。

同じ傷を持つ者同士なら、その痛みを分け合えるかもしれないと思うから。

それに――。

「情けない話だが、私達ではスバルをどう励ましてやれば良いか分からんのでな」

「それは……」

「なに、無理に励ませとは言わんさ。お前たちの気持ちは、私には想像しか出来んしな。

だが――それでも。ロックウェルが居ない今、その役目を果たせるのはお前しか居ないと、私は思う」

「ハヤトが居ない」というシグナムの言葉に、ティアナの身体が小さく強張る。

そんな彼女の肩を軽く叩いて、シグナムは言葉を続けた。

「変に意識せず、少し休憩するつもりで顔を出してこい。無理をしてお前にまで倒れられたら困る。

なにぶん、私はこういう書類仕事は苦手だからな」

「……はい。ありがとうございます」

シグナムがそう彼女なりの冗談を言って、微笑む。

ティアナはそれに逡巡してから小さく頷き、頭を下げて病院へと歩き出した。

◇◇◇◇◇

『なのはさん、ティアナです』

崩れた六課隊舎の中を調査していたなのはに、ティアナからの念話が届く。

なのはは届いたソレに、書類に走らせていたペンを止めて答えた。

『あぁ、ティアナ……どうしたの？』

『シグナム副隊長が現場を代わってくださって、これから、ちょっと病院の方に行ってきます』

『そう。フェイト隊長も、向こうに行ってる筈だから』

一度止めた手を動かしながら、ティアナの言葉を聞く。

『えと、さっき窺った話って、スバルやシャーリーさんに伝えても……？』

『そうだね。伝えて元気が出るようなら、伝えてあげて。判断は任せるよ』

『了解しました。それじゃあ、いってきます』

『うん。気をつけてね』

最後にそう言って、念話を終える。

そして、思っていたよりもティアナの声が沈んでいなかった事に安堵し、小さく息を吐いた。

無理をしているのかも、と。そう考えはしたが、それでもＦＷを纏めるティアナには無理をして貰わなければならない。ハヤトを失った今、ＦＷを纏められるのはティアナしかいないのだから。

「……」

頭ではそう判断できても、まだ気持ちの整理はついていない。

昨日――地上本部と、そして機動六課が襲われた時に出た被害は……大きかった。

六課隊舎の崩壊を筆頭に、ロングアーチメンバーのほぼ全員が軽くない怪我を負い、前線メンバー達も半数以上が重軽傷を負った。

そして、何よりも大きな被害は――。

「ハヤト君……ヴィヴィオ……」

その名前を、小さく呟く。

ハヤトは喪われてしまい、ヴィヴィオは攫われてしまった。

「私が、もっとしっかりしてれば……」

意味の無い仮定。ヴィヴィオが攫われてしまった事も、ハヤトが死んでしまった事も、起こってしまったことは今更変えようが無い。けれど、なのははそう考えずにはいられなかった。

もし、自分があの時ハヤトの下へともっと急いでいれば。

リミットを解除してでも、六課へ戻っていれば。

そんな風に自分を責めながら、なのはは血が滲む程に唇を噛み締めた。

「……っ」

視線を動かした時、少し先の瓦礫が崩れた場所に、ある物が見えた。

それを見て、なのはが息を呑む。

そこにあったのは、彼女がヴィヴィオにあげたウサギの人形。

ヴィヴィオがとても気に入っていて常に肌身離さず持っていたソレは、所々焼け焦げ、破れた部分からは綿が出てしまっている。

「……」

なのはの脳裏に思い浮かぶのは、ハヤトとヴィヴィオが一緒に笑っていた、いつかの光景。

まるで本当の兄妹ように笑い合う2人は、けれどもう2度と見る事は出来ないのだ。
そう思うと、なのはの視界が涙で滲む。

「ふっ……ぅ……」

そして、なのははその場で声を殺し、小さく肩を震わせた。

◇◇◇◇◇

薄暗く、仄かに小さい明かりだけが灯る室内。
その部屋の中央には、液体の満ちた大き目の生体ポッドがひとつ鎮座している。

「んふふ～。やっぱり壮観よねぇ、この光景♪」

部屋の主であるクアットロは、生体ポッドを眺めながら、うっとりとした顔で楽しげに呟く。

彼女がそうしている間にも、生体ポッドからは小さなモーター音や機械音が響き、中に浮かぶ人影に向かって伸びた様々な機械のアームが忙しなく動き続けていた。

「改造率は４８％、遺伝子の定着率は５８％……。順調順調」

満足気に呟きながら、クアットロは手元にある２つのキーボードを両手で同時に操作していく。

それに合わせ、大小様々なモニタがクアットロの目の前に開き、情報を提示する。

「データも順調に揃ってますしぃ、あとは固有武装とＩＳの調整をすれば……起動出来るわねぇ」

「ほう。随分と順調に進んでいるようじゃないか」

クアットロの呟きと同時に部屋のドアが開き、スカリエッティが感心したような声を上げて入ってきた。

その声に振り返り、クアットロは得意気な笑みを浮かべる。

「当然ですよぉ。なにせ、この私がドクターのデータを素に造り上げてるんですから。

むしろ、順調じゃなかったら困っちゃいますよぉ」

「なるほど。確かに言われてみればその通りだ。それで？　いつ頃

起動出来そうだい？」

「う～ん……この調子だとぉ、あと2日もあれば起動出来ますねぇ。それからちょっと動作確認とかをしてぇ……実戦で使えるようになるのは、４日ほど後だと思いますよぉ？」

質問にデータと進行状況を知らせる数値を見てから答え、クアットロは「急ぎますぅ？」とスカリエッティを見上げた。だが、スカリエッティは首を振って「問題無い」と言外に告げてから、ふとクアットロの前に開いているモニタのひとつに目を留めた。

「クアットロ、これは何だい？」

「ああ、それは……今は秘密にしておきますぅ」

「ふむ。恐らく何かの制御装置あたりだとは思うが……まぁいい。君に任せよう」

「うふふ～、ぜぇったいに、ドクターも満足してくれると思いますよぉ？」

「なるほど。それでは楽しみにしておくとしよう」

「ええ。楽しみにしておいてくださいねぇ？」

クアットロはスカリエッティの指したモニタを見つめて笑い、スカリエッティはそんな彼女の笑みを見て愉快そうに口の端を持ち上

げた。

「あぁ、ドクター。頼んでいた固有武装はどうですかぁ？」

「2日後には完成するよ。しかし、妙な固有武装を思いついたものだね」

「どうせなら、ＩＳも凝った造りにしたいですしぃ。それを生かすには、どーしても必要ですからぁ」

「ふふ。なら、急いで完成させるとしよう。ソレの完成した姿を、私も見てみたいからね」

その言葉を最後に、スカリエッティはそのまま踵を返して部屋を後にする。

残されたクアットロは1人、モニタの方を振り返り、もう一度キーボードを叩いて操作を始める。すると、幾つも開いていたモニタが順次消えていき、最後に一つだけモニタが残った。

「さぁ、早く完成して頂戴ねぇ……“アイン”ちゃん」

クアットロは目の前に開いたそのモニタに、唇を舐めながら指を這わせる。

そこに映っていたのは、男性型のシルエットと『タイプアイン・

ファースト』という文字。

「うふふふ……た～のしみぃ。
“コレ”が目の前に現れたら、あの子達はどんな顔をするのかしら。早く見てみたいわぁ……」

頬を紅潮させ、蟲惑的な吐息を漏らしながらクアットロはそう呟く。
その声に答えるように、生体ポッドの中で大きな空気の泡が弾け、ゴボリと大きな音を立てた。

ｓｉｄｅ：―　了

if38話　『傷ついた翼たち　1』（後書き）

なにコレ辛い。超辛い。
どうも、ラモンです。

今回の話を書いている最中、「なにコレ辛い」と何回言ったか分かりませんね。ええ。
何でこんな展開にしたし。馬鹿じゃないのか私。
書いてるだけでテンション下がりすぎてどうしようも無いし！

途中でちょっとネガティブ描写がしつこい気がしたんですけど、私の思考がネガティブスパイラルに陥ってたせいで、そのまま行くことになりました。
ホントもうどーしようもない位にネガティブスパイラル中です。
暗くてホントに申し訳ない。

しかし、今回書いてて一番楽だったのがスカッちサイドってどういうことなの……。ホントもう私の心はボドボドですよ！！
しかも次回は多分、書くのがもっと辛いっていうね！！

そんな訳で、次回はスバルのお話です。
多分今回よりも２０割増しで暗くネガティブな話になると思います。
……そんな精神状態で大丈夫か？
大丈夫だ、問題ない。

それではまた、次の話で。

※そういえば今回で１００話突破したので、記念に何か番外編を書こうと思います。
何を書くかの候補としては、他の作者さんとの初コラボ番外編、普通のギャグ番外編、この間のハヤ×ギンみたいな感じの他ヒロインとの甘ったるいラヴ番外編、の３つです。
どれを書くかは気分次第なのでわかりませんが、お楽しみに～。

if39話　『傷ついた翼たち　2』

side：―

「ん……」

うっすらと、スバルの目が開く。
目を開いた彼女の視界に入ってきたのは、白い天井。
幼い頃に見た記憶のあるその天井で、スバルは自分が病院に居るのだと理解した。

「あ、スバル。目が覚めた？」

「ギン姉……？」

彼女が目を開いたのを見て、スバルが横になっているベッドの隣に座っていたギンガが安堵の声を上げた。
スバルはベッドに横になったままギンガの方へと視線を向け、彼女の名前を呼ぶ。

「ここ……病院、なの？」

「そうよ。どこか痛むところはある？」

「ない、と思うけど……っ！！」

ギンガに答えている間に、スバルの意識は少しずつ覚醒していった。

それと同時に、彼女の脳裏にある映像が思い浮かぶ。それは――鮮血に塗れた、ハヤトの姿。

瞬間、スバルの意識は一気に覚醒し、彼女は弾かれたように上体を起こしてギンガへと詰め寄った。

「ギン姉！　ハヤトは！？　ハヤトはどうしたのっ！？」

「ス、スバル。まだ動いちゃ駄目よ。傷が開いちゃうわ」

「そんなのいいからっ！！　ハヤトはどうしたのっ！？　答えてっ！！」

スバルに肩を握られ、ギンガが少しだけ痛みに顔を顰める。だが、そんなことに構ってられないとばかりにスバルは彼女へと問い続ける。自分の頭に思い浮かんだ映像が、悪い夢であって欲しいと願いながら。

「スバル……」

そんな彼女にどう答えたら良いのか判らず、ギンガは困った顔で言いよどむ。

ハヤトがどうなったのか……それはスバルが一番良く分かっている筈なのだ。なにせ、彼女が一番近くで彼の最期を見ていたのだ――彼が、ハヤトが、その命を喪ってしまった場面を。

「ねえっ！　答えてよギン姉っ！！」

スバルはギンガの肩を掴んで必死に叫ぶ。

けれど、スバルも恐らく分かっている。自分が思い出してしまった映像が、本当である事を。

でもそれを認めたくなくて、スバルは何も言わないギンガに詰め寄る。

「……」

肩を掴まれたまま、それでもギンガは何も言おうとしない……否、何も言えないのだ。

今、妹は心身ともに傷ついている。そこに、わざわざ塩を塗りこむような真似をするなど、姉である彼女には到底できる筈も無い。

「スバル、とりあえず横になって？　傷が開いちゃうわ」

「誤魔化さないでよっ！　ハヤトは無事なの！？　病院に居るの！？」

力の限り腕を動かしているせいか、スバルの左腕に巻かれた包帯には血が滲み始めている。

それを見たギンガは何とかスバルを宥めようとするが、スバルは聞こうとせず、悲痛な顔のまま、より一層ギンガの肩を握る手に力を込めて問い続けた。痛みは伝わっているが、溢れる感情のせいでその痛みは痛みと感じる前に掻き消されていく。

「……スバル、お願いだから」

懇願するように、ギンガが呟く。

言わなければいけないのは分かっている。でも、言ってしまえば妹を傷つけてしまう。そのジレンマで、彼女自身もどうしたらいいのかわからなくなってしまっていた。

そんな時だった――。

「……何してんのよ、スバル」

病室のドアが開き、そう呟きながらティアナが入ってきたのは。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｉｆ３９話　『傷ついた翼たち　２』

「ティア……」

「ティアナ」

ドアから入ってきたティアナを、スバルは驚いた顔で、ギンガは若干の安堵が混じった表情で振り返る。

ティアナはギンガに「お疲れ様です」と声をかけ、手に持っていたコンビニの袋を近くにあった机に置く。そして、ギンガとは逆側……スバルの居るベッドの左側に歩を進め、そこに立ってからギンガの肩を掴んだままのスバルの手を外した。

「廊下まで聞こえてたわよ。病院なんだから、静かにしなきゃ駄目だって知ってんでしょ？」

そうしながら語りかける彼女の声は、いつもと変わらない調子で。

その声で、ティアナの乱入に呆然としていたスバルは意識を引き戻す。そしてそのまま、今度は縋りつくようにティアナの腕を掴んで叫ぶ。

「ティア！　ハヤトは!?　病院に居るの!?　怪我は大丈夫なの!?　生きてるの!?」

否定して欲しいという思いがありありと浮かんだ表情で、目尻に涙さえ溜めてスバルは問いかける。
生きている、と。彼はここに居る、と。
そう言って欲しかった。他の誰でもない、同じ人を好きになった彼女に。

けれど、ティアナは目を伏せて唇を噛み、言葉を発する代わりに小さく首を横に振った。
その仕草と表情は、スバルに現実を突きつけるには十分すぎるもので……。

「……ぁ」

言葉にならない小さな息を漏らし、ティアナの腕を掴んでいたスバルの手から力が抜ける。
そのまま、スバルはベッドの上にペタンと座り込み、自分の両手を見つめた。
あの時、ハヤトに向かって伸ばした自分の手を。
どれだけ伸ばしても、最後の最後まで届くことのなかった自分の手を。

「あ……あぁ……」

そうしていると、段々と彼女の心にあの時の光景が現実として押し寄せてきた。

血に塗れたハヤトの表情が、最後に自分に向かって伸ばされた手が、最後に自分の名前を呼んだ彼の声が。
その全てが、『ハヤトは死んだ』という事実をスバルに突きつける。

「スバル……」

「ギンガさん」

自分の手を見つめながら震えるスバルの肩を抱こうとしたギンガを、ティアナが制する。
どうして？　と目で問いかけるギンガに対して、ティアナは今は駄目だと首を振って見せた。
どれだけ辛くても、どれだけ心が壊れそうでも、受け入れなくてはならないのだ。どれだけ目を逸らして逃げていても、いつかは現実に追いつかれてしまう。だから、今この場で受け入れさせなければならない。
ティアナはそう考えて、スバルに向けて言葉を続ける。

「アンタが一番良く分かってるでしょ？　ハヤトが、どうなったのかは」

「……あ、たし……」

「アイツの欠員報告書……今日の朝、八神部隊長に出してきたわ」

「っ！！」

欠員報告書。
それが何を示すのか、彼女は知っている。
だから、その単語を聞いた途端、スバルは下に向けていた顔を上げ、両手でティアナの襟首を掴んで叫んだ。

「何でっ!?　何でそんなの書いたのっ!!?」

「……アイツが、死んだからよ」

「嘘だっ!!　ハヤトはまだ死んでないっ!!　確認だって取れてないのに、何でそんな事言うのっ!?」

「確認なら、ブレイブハートの記録映像でちゃんとしたわ。ちゃんと医務官の人にも確認してもらってね。
あの傷で助かる確率は、殆どゼロ……つまり、生きてる見込みは無いそうよ」

「殆どってことは、ゼロじゃ無いんでしょ!?　なら――「スバル!」――っ!!」

必死に否定しようと叫ぶスバルを、ティアナが一喝する。
怒鳴られ、スバルは言葉を止めて身体を竦めた。それを見てから、ティアナは自分の襟首を掴む彼女の手に自分の手を重ね、諭すように言葉を続ける。

「殆どって言うのは、あの場で直ぐに手当てが出来ればあるいは……ってだけ。スカリエッティが何を考えてるのか知らないけど、アイツを攫っても手当てするとは思えない。だから……」

ティアナも、こんな事を言うのは辛い。自分だって、まだ受け止め切れていない。

だけど、彼女が言わなければならないのだ。ギンガは妹に対して優しすぎるし、エリオやキャロには当然任せられない。他の隊長達が言っても、恐らくスバルは聞かない。今のスバルに言葉を届かせる事が出来るのは、彼女しか……親友のティアナしか居ないのだ。

だから、自分の心に蓋をして喋る。

泣くのは後でいくらでも出来る。今はスバルを――親友を立ち直らせなきゃならないから。

「嘘だ……嘘だよ、そんなの……」

「否定するのは勝手よ。でも、事実は変わらない」

「だって！　約束したんだもんっ！
六課に戻ってきてから、返事をしてくれるって言ったんだもんっ！！　ハヤトはいい加減だけど、絶対に約束破ったりしないもんっ！」

子供の様にイヤイヤと首を振りながら、叫ぶ。

ありえないと判っている可能性に縋りつくように、声の限り。

そんな彼女を見ながら、ティアナは辛そうに眉を寄せ、一度ぎゅっと目を閉じてから、開く。そして、何かを決意したように表情を

改めると、スバルに向けて怒鳴った。

「いい加減に現実見ろ！　この馬鹿っ！！」

「っっ！！」

「アイツは……ハヤトは、もう居ないのよっ！　この病院にも、六課にも、あたしやアンタの隣にもっ！！」

心を切るようなティアナの声が、病室に響く。

それは、紛れもないティアナの本心で。だからこそ、より一層強くスバルの胸を抉る。

「否定してアイツが戻ってくるなら、いくらだって否定してやるわよっ！

けど、どれだけ否定したってハヤトは帰ってこない！！　もう絶対に、帰ってこないのよっ！」

「……でも、でもっ！」

「あたしだってそう思いたいわよっ！　アイツは生きてるって！絶対に生きてるって！！

でも……それでも、事実を受け止めなきゃ駄目なのよっ！！」

目尻に涙を浮かべながら、スバルを睨みつけて叫ぶ。

その声に気圧されるように、ティアナの襟を掴んでいたスバルの

手が離れ、力なくベッドの上に落ちる。

「……」

「……」

「ティアナ、スバル……」

ベッドの上で項垂れるスバルと、そんなスバルを涙を溜めた瞳で見つめるティアナ。

ギンガは2人に声をかけようとして、でも結局何も言えないまま口を閉じた。

「……どうして？」

そんな中で、ポツリとスバルが言葉を漏らした。

「どうして……あたしの事、助けたの？」

「「！？」」

絶望しか孕んでいないその声に、ティアナとギンガが驚きに目を見開いた。

そんな2人の前で、スバルの慟哭は止まらない。

「こんなに辛いなら、あのまま死んじゃえば良かったんだ……」

「スバル！　何てこと言うの!?」

「だって!!　ハヤトが居ないんだもん!!」

呟いたスバルの言葉にギンガが声を上げるけれど、それを遮って彼女の叫びが響く。

まるで全てに絶望したように、全てを拒絶するように。

「ハヤトが居ないなら……もうなんにもない……」

両手をベッドについたスバルの目から涙が零れ、シーツを濡らす。

「もう、なんにも……なんにも無いよぉっ!!」

一際高くそう叫んで、スバルは泣き崩れた。

ティアナは、何も言えない。彼女も、スバルの気持ちは痛い程に理解できるから。

ギンガは何かを言おうとして、けれど今度も結局何も言えない。
彼女はまだ、恋をしていないから。

「うあああああああっっっっ！！」

3人しか居ない病室に、スバルの泣き声だけがいつまでも響いていた。

◇◇◇◇◇

「……」

スカリエッティが使っているラボの通路を、ルーテシアは1人で歩いていた。
特に目的がある訳ではない。ただ単に、迷ってしまっただけなのだ。

「……ここ、広い」

眉を寄せて不機嫌そうに呟いてみるが、それでどうなるモノでもない。
いっそ転送魔法で出て行こうとも思ったけれど、それは何となく彼女のプライドが許さなかった。
なので、こうしてさっきからずっとラボを彷徨っている訳だ。

「……？」

そうしていると、彼女の耳に聞き慣れない音が聞こえてきた。
不思議に思ったルーテシアは、首を傾げながら辺りを見回して音の出所を探る。
すると、その音が聞こえてくる場所――ドアが半分ほど開いている部屋が目に見えた。

「あそこ……」

興味半分、警戒半分でその部屋に近づき、半分開いていたドアを完全に開けて中へと進む。
中には誰もおらず、起動中のモニタと乱雑に散らばった書類や機械系の部品だけが目立つその部屋の中央で、ルーテシアはあるモノを見つけて驚きに目を開いた。

「……この人……見たこと、ある」

彼女の視線の先にあるのは、薄い緑色の液体が満ちた生体ポッド。
その中に浮かぶ人物の顔を見て、ルーテシアは呟いた。

「でも、何でこの人がここに……？」

中に浮かぶ人物は、口元に酸素吸入器のようなマスクをつけ、目を閉じて微動だにしない。
右腕の肘から先はケーブルや鉄の骨や装甲が見え、左目には大きな傷跡がある。その姿は、ルーテシアの記憶にある同一人物の容貌とはかけ離れていた。

「……」

だから、ルーテシアは首を傾げて生体ポッドを見つめ続けていた。
ポッドの中に浮かぶ人物の姿に、酷い違和感と嫌悪感を覚えながら。

「あらぁ～？　誰かと思ったら、ルーテシアお嬢様でしたかぁ～」

「っ！　……クアットロ」

そうしていると突然後ろから声をかけられると同時に首元を撫でられ、飛び上がるようにしてその場から飛び退いてから振り返り、声の主を確認すると、ルーテシアは安心したように息を吐く。

対して彼女に声をかけたクアットロは、そんな彼女の様子が面白いのか小さく笑いを漏らしながら口を開く。

「申し訳ありませぇん、お嬢様。まさか、そんなに驚くなんて思わなくってぇ」

「……別に、いい」

反省した様子も無く謝るクアットロに、いつも通りの無表情で答える。

それから、思い出したように自分の背中側にある生体ポッドに視線を戻し、クアットロに尋ねた。

ここに彼女が居るということは、ここはスカリエッティかクアットロの研究用の部屋なのだろうから、何故この人がここに居るのか、その理由が聞けると思ったのだ。

「クアットロ……何でこの人、ここに居るの？」

「んん？　あぁ、そういえばお嬢様達には言ってませんでしたねぇ。コレは、私とドクターの新しい実験の素材なんですよぉ。それで、昨日地上本部を襲った時に回収してぇ、こうして実験してるって訳です。あ、でも騎士ゼストやアギト様には秘密ですよぉ？」

悪戯っぽく微笑みながら、口元に人差し指を当ててそう釘を刺すクアットロ。

だが、ルーテシアは彼女のそんな仕草に、小さな違和感を感じた。

何故そう感じたのか、理由はわからない。
彼女自身は、共に行動しているゼストやアギトの様に、彼女らに対してそこまで酷い不信感を抱いている訳ではない。むしろどちらかと言えば、好感を抱いている部分があった。
だというのに、今の彼女の言葉と仕草、その全てがルーテシアにクアットロへの不信感を植え付けた。

「……うん。内緒にする」

けれどその不信感はルーテシアの中で確かな形にはならず、小さな違和感以上の何かにはならなかった。
結局ルーテシアはその違和感を無視して、クアットロの要求に、深く考えないまま頷いた。

「ありがとうございますぅ。そういえばお嬢様、どこかに向かわれるところなんですかぁ？
よろしければ、私がお送りしますよぉ？」

「……お願い」

「はぁい。このクアットロにお任せあれ♪」

ルーテシアの肯定に楽しげに頷き返しながら、クアットロは彼女の手を取って歩き出す。

「……」

クアットロに手を引かれて部屋を出る瞬間、ルーテシアは一度だけ中を振り返って生体ポッドを見た。

そこに浮かぶ人物は、先程と変わらぬ格好のままそこに浮かんでいる。まるで、彼女の母親の様に。

「……っ」

だからだろうか？

物言わぬその人の姿に、ルーテシアの胸が酷く痛んだ。

ｓｉｄｅ：－　了

if39話　『傷ついた翼たち　2』（後書き）

もうやめて！　私の精神ポイントはとっくに0よ！
もう偵察さえ使えないわ！　　HA☆NA☆SE！！
どうも、ラモンです。

色々と辛い話が一応終わりました。
スバルの台詞考えてる時、ガチで泣きそうになったのは秘密です。
今回はスバルがどれだけヤバイ状態なのかって説明と、ルーテシアに関するちょっとしたフラグ建てが目的でした。

うん、もうね、心がへし折れるってレベルじゃねーぞ！
何かもう色々とボッキボキですよ！　死ぬかと思ったよ！
作業用BGMを聞いてなかったら、真面目に投稿するのが1ヶ月後とかになりそうでした。
早く、早く明るい話を書きたい！

さて、次回はスバルをティアナが元気付けるあたりを書きたいと思います。
多分今回以上に難産で、今回以上にクオリティに拘って書きたいと思っていますので、もしかしたら投稿まで間が空くかもしれません。ですが、全力で良いものを書けるように頑張るので、もし投稿の時間が空いても、見捨てずにお待ち下さいませ。

それではまた、次の話で。

※100話突破記念番外編は、現在執筆中です。
本編がもうちょっと明るくなってから、投稿したいなーと思って

いますです。

ｉｆ４０話　『翼、ふたたび　1』（前書き）

※今回は短めです。

if40話　『翼、ふたたび　1』

side：―

「……ギンガさん」

ベッドの上で泣き崩れるスバルの横で、ティアナはベッドを挟んだ向かい側に立つギンガに声をかけた。
ギンガはどうしていいのか判らないままオロオロしていて、声をかけられると顔を上げ、戸惑った表情でティアナを見た。

「何？　ティアナ」

「ちょっとだけ、スバルと2人きりにして貰っていいですか？」

「え……」

唐突に告げられた言葉に、ギンガの目が驚きに見開かれる。
けれど、ティアナはギンガを見つめて「お願いします」と続け、頭を下げた。ギンガとしては、こんな状態の妹の側を離れたくは無いのだが、しかしこれ以上ここに居ても、スバルに対して何か言葉をかけられそうも無いという事も、認めたくは無いが理解していた。

「……え、と」

だから、ギンガはこの場を彼女に任せてみようと思った。
妹の――スバルの親友である、ティアナに。

「うん、わかった。私じゃ、どうしようもないから……お願いね、ティアナ」

「……ありがとうございます」

ティアナに対して弱々しい微笑みを向け、ギンガは足を動かして部屋から出る為にドアへと向かう。ティアナはギンガに向けてもう一度一礼を返し、その背中を見送った。

「……」

ギンガは部屋の出入り口であるドアの前に立つと、ドアノブを回してドアを開いてから、視線を後ろに向けて自分の妹を振り返る。

「……っ」

けれど、彼女の視線の先に見えるスバルは、ただベッドに突っ伏して涙を零しているだけで、姉である自分の視線には気付く気配も無い。

そんな妹に対して何も言ってあげることが出来ない自分に歯噛みしつつ、ギンガは部屋を出る。
スバルの事を、ティアナに託して。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ４０話　『翼、ふたたび　１』

「スバル」

ギンガがドアを閉めて部屋から出て行ったのを見送ってから、ティアナは涙を零すスバルの名前を呼んだ。
しかしスバルは首を振るだけで、彼女の声に答えようとはしない。
だから、ティアナはスバルの肩を掴んで、無理矢理顔を自分の方へと向けさせる。

「スバル。聞きなさい」

「……ゃだよぉ……」

その青い双眸から涙をポロポロと零し、しゃくりあげながら頭を振ってティアナの手を振りほどこうとするスバル。だが、ティアナ

は肩を掴む手に力を込めて、それを許さない。

「ちゃんと聞きなさい。スバル。大事なことだから」

「……っ」

「スバル！」

ぐずるスバルを叱りつけるように、鋭い声を飛ばす。

けれど、その声を聞きたくないとでも言うように、スバルは必死に両手で耳を塞ぐ。

これ以上、現実を突きつけられたく無いから。これ以上、悲しい言葉を聞かされたく無いから。

「気持ちはわかるけど、聞きなさい！」

ティアナが呟いた言葉を聞いた瞬間、スバルの中にあったやり場の無い悲しみが、怒りと苛立ちに変わる。

「――っ！！　ティアはっ！！」

「っ！」

顔を上げ、睨みつけるようにティアナの事を睨みながらスバルが

怒号を上げた。
その声に驚き、ティアナが言葉を止めて息を呑む。

「ティアはいいよ！！　そうやって仕事してれば気も紛れるし、平気そうな顔だってしてられる！
でも……でもっ！　あたしは今こんなだから、そうする事も出来ないんだよっ！？」

憎しみをぶつけるように、自分の前にいるティアナへと言葉をぶつけていく。
スバルもわかっている。ティアナだって、自分と同じくらい辛いのを我慢しているという事は。
それでも、ティアナがつい今しがた呟いた言葉は、スバルにとって許容出来るものでは無かったのだ。

「スバル……」

「それにっ！！」

何かを言おうとしたティアナの声を遮り、尚もスバルは怒号を上げ続ける。
八つ当たりだと理解していても、言葉は止められない。

「それに、ティアにあたしの気持ちがわかるわけないっ！」

言いながら、ティアナの手を思い切り振りほどく。
手を叩く乾いた音がして、ティアナが小さな声を上げて痛みに眉を寄せる。だがスバルはそんな彼女の表情など気にしていない。考えているのは、ただひたすらに自分の気持ちをぶつける事だけ。

「わかるわけないんだよっ！　ティアに――」

そこから先を言ってはいけないと、スバルの理性が訴えるが……言わずにはいられなかった。
――わかるわけが無い。ティアナに、自分の気持ちなど。
そんな思いが、スバルの口を動かして、彼女にその言葉を吐き出させる。

「あの場所に間に合わなかったティアに、わかるわけないんだっっ！！」

「――――ッ！」

怒りに任せてスバルがその言葉を言い切った瞬間、病室に乾いた音が響いた。
音が鳴ったのは、スバルの左頬。

「「……」」

右手を振りぬいた格好のティアナと、自分の左頬を押さえるスバルの視線が空中でぶつかる。そのまま2人の間に暫しの沈黙が流れた後で、ティアナがゆっくりと口を開いた。

「……確かに、そうかも知れないけど」

右手を自分の胸の前で握り締め、震えそうな声を必死に抑えてティアナは喋る。

スバルの言った言葉は、正しく真実だ。

あの場に――ハヤトがボロボロにされたあの場にいなかったティアナに、その光景をまざまざと見せ付けられたスバルの気持ちがわかることなど有り得ない。想像することは出来るけれど、それは気持ちがわかるというのとは全く違う。そんなこと、言われるまでも無くティアナにだってわかっている。

けど、例え想像だとしても……例えソレがスバルの辛さの半分にも満たないとしても、ティアナが感じた辛さだって嘘ではないのだ。

「でも……だったら何？　アンタはずっと、こうしてウジウジしてるの？」

「……」

咎めるようなティアナの視線に、スバルは下を向いて目を逸らす。

「……あのね、なのはさんが言ってた」

「え……」

そんなスバルを見つめて、そう言葉を続ける。

突然出てきた名前に、スバルが小さく声を上げて視線を少しだけ上に向けた。彼女の憧れであるなのはが、何を言ったのかが気になったのだ。

もしかしたら、ハヤトを救うような……そんな何かを言ってくれるのではないかと思って。

「これから、六課の任務はレリックの捜索から、スカリエッティ一味の逮捕に変更になるんだって」

「……だから、何？」

しかし、ティアナの口から聞かされた言葉は彼女が期待していたような事ではなく、それを聞いて興味が失せたとばかりにスバルは短く切って捨て、再び下を向く。

「多分だけど、その途中でハヤトの……遺体を、取り返せると思うの」

「っ……」

“遺体”という単語に、スバルの肩が震える。

「あたしは、絶対に取り返すつもり。アイツに……スカリエッティなんかに、ハヤトの事を取り上げられたままなんて、我慢できないもの」

「……」

ティアナは決意を込めた声で、スバルに語りかけていく。

だが、スバルは下に向けた視線を上げようとはしない。

「アンタは、どうする？」

下を向いたままのスバルに向かって、問いかける。

ここに来る途中で医務官に聞いた限り、スバルの怪我は見た目ほどに酷くは無いらしい。おそらく4，5日もあれば完全に回復するということだ。だから、六課が動くまでには復帰することが出来る。ただ、それも彼女が動く気になればの話。なのは達隊長陣は、スバルに無理はさせられないと考えている。

病院に運ばれるまでの彼女の錯乱振りを見れば、その判断も妥当だと頷けるものだ。けれど正直な話、今の六課には戦力が足りていない。ただでさえ、六課隊舎そのものが襲撃され、それによって多

数の負傷者が出た後なのだ。戦える人間は、少しでも多いに越した事は無い。

「……無理、だよ」

ティアナが言外に語った意図は、スバルにも感じられた。
それでも、スバルは首を横に振った。

「あたしは……ハヤトのこと、助けてあげられなかった。
そんなあたしが居たって、きっと邪魔になるだけだから……無理だよ」

「そんなこと――「それに」――っ」

下を向いたまま、ティアナの言葉を遮ってスバルが続ける。

「それに、これから先どれだけあたしが頑張っても、スカリエッティを逮捕できても、あたしが好きだった……大好きだったハヤトは、もう戻ってこないんだよ？」

「じゃあアンタは、ハヤトがスカリエッティに取り上げられたままでも良いって言うの？」

「そうじゃない。そうじゃないけど……どうしたらいいか、わかんないんだよ……」

一度は止まった涙が、再び彼女の瞳から落ちてシーツを濡らす。
スバルの思考はぐちゃぐちゃだった。このままこうしていても仕方ないという事も理解しているし、スカリエッティが許せないという気持ちも、確かにある。
それでも、何かをしようと思うたびにハヤトの声が、顔が、あの時の光景が頭の中に蘇ってきてしまう。
思い出したくないと思っても、それを忘れることなど出来なくて。

「助けてよ……ハヤトォ……」

今はこの場にいない彼を呼ぶ。
けれど、勿論声は返ってこなくて。

「……ねぇ、スバル」

変わりに、ティアナの優しい声が聞こえてきて、同時にふわりと抱きしめられる。
驚いて声を上げようとしたが、胸に押し付けるようにティアナが抱きしめているので、上手く声が出せない。

「前にね、ハヤトから貸してもらった漫画に、こんな言葉が載ってたの。
『誰かと出会うという事は、いつかその人を失ってしまうという

事なんだ』って」

その言葉を言ったティアナの表情はスバルからは見えないけれど、何となく、スバルはティアナが苦笑しているような気がした。

「その時は何にも思わなかったけど。でも、今なら何となく分かるの。

ハヤトを失うのがこんなに辛いなら、こんなに苦しいなら……。それならいっその事あたし達、最初からアイツに恋なんてしない方がマシだったと思わない？」

「ティア……」

ようやく彼女の腕から逃れ、視線を上げる。

視線を上げた先で、スバルの頭を抱きしめるティアナは――

「でも、きっとダメよね」

――泣きながら、笑っていた。

「耳を塞いで聞かないようにしても。目を閉じてみないようにしても。

たぶん……ううん、絶対に無駄だった」

ポタリ、と。
ティアナの顎を伝った涙が、スバルの頬に落ちる。

「だって、さ」

ティアナはそれでも、笑っていた。
愛しくて仕方ない、彼を想いながら。

「だってアイツは……ハヤトは。
馬鹿で、スケベで、いつも適当な事ばっかり言う奴だったけど……。でも」

彼女が何を言おうとしているのか、スバルにはその続きが予想出来た。
だって、ティアナとスバルは同じだから。同じ人を好きになって、同じ人を失った親友だから。
だから――。

「それでも……どうしようもないくらいに、いい男なんだもの」

「……っ。……っ！」

自分の事を抱きしめるティアナの胸に顔を押し当てて、頷く。
ティアナはスバルを抱きしめながら、笑って言葉を続ける。

「そんな顔してるとこをハヤトに見られたら、笑われちゃうわよ？」

「……うん」

「取り返しに行きましょ？　一緒に、ハヤトを」

「……うんっ！」

2人ともわかっている。
取り返せるのは彼の身体だけ。あの笑顔も、声も、温もりも返ってこない。
それでも、取り戻したいとスバルは願う。

愛しい人を奪われたままでいるなんて、自分らしくない。
やられたら、十倍にしてやり返す。
取られたら、何がなんでも絶対に取り返す。

彼なら……ハヤトならきっとそうしただろう。
いつもの様に笑いながら、肩にブレイブハートを担いで、自分たちを振り返って。
だから、自分達もそうしよう。そう思いながら、辛くても無理にでも笑ってみせる。

いつか笑い飛ばせるなら、今笑い飛ばす事だって……きっと不可能じゃないから。

「……ねえ、ティア」

「何？」

でも。

それでも――と、スバルはティアナの胸に顔を埋めながら呟く。

「今だけ……今だけはさ。もうちょっと、泣いてもいいよね？」

「……ええ、泣いていいわよ。あたしもちょっとだけ、一緒に泣くから」

そのまま2人は暫くの間、声を押し殺して涙を流した。

もう戻ってこないハヤトの事を想いながら、自分の気持ちに踏ん切りをつけるように。

ｓｉｄｅ：―　了

if40話　『翼、ふたたび　1』（後書き）

今回の話のテーマ曲は、マブラヴオルタネイティブの主人公、武ちゃんのテーマとも言われている『翼』です。もしよかったら聞きながら読み直してみてくださいね！
そんなわけで。どうも、ラモンです。

今回はスバル復活回でした。
短めですが、それでも個人的には納得の行く出来になったと思ってます。
なんというか、スバルとティアナは書くのが難しいですね。
年頃の女の子の気持ちなんて、おっさんの私にはわからんとですよ（笑）
スバルが前向きになるのがちょっとあっさりしすぎな気もするんですが、これ以上ウダウダさせても、文章がクドくなるだけだったので自重しました。
でも、後日やっぱり気に入らないからと書き直すかもです。

さて。今回はスバルルートで、ある意味一番書きたかった部分です。
親友同士だからこそ、みたいな雰囲気を出せてればいいなー……と思いつつ一生懸命書いてました。
ちなみに、一番書きたかったのはティアナの台詞。
「前にね、～」の部分から「いい男なんだもの」までの部分が書きたくて書きたくて仕方なかった為、こんな展開になったと言っても過言ではありません。いや過言ですが（汗）

次回は他のメンバーが気持ちに踏ん切りをつけるところを書ければ、と思います。マッハキャリバーやブレイブハートの様子も書きたいですしね。

それではまた、次の話で。

※番外編に関するお知らせ。
番外編の内容は、氏家ト全先生の漫画『生徒会役員共』のパロディの、『機動六課局員共』になる予定です。
本当は『絶対に笑ってはいけない機動六課　りたーんず』にする予定だったのですが、思いつくネタが足らず、どう考えても後半までネタが持たないっぽかったので、泣く泣く没になりました。
まぁその分『機動六課局員共』は面白くする予定ですので、お楽しみに～。

if41話　『翼、ふたたび　2』

side：タイプアイン・ファースト

――本体の起動を確認。
――現在地：生体ポッド内。培養液は無し。
――現状の把握を確認……。
――続けて、各機能の確認を開始。

――身体の表面を流れる培養液の感触を確認。
――……触覚機能、良好。

――ポッド内に残留する培養液の臭気を確認。
――……嗅覚機能、良好。

――口唇部を自ら損傷する。……血液の味覚成分を確認。
――……味覚機能、良好。

『アインちゃ～ん？　聞こえてるぅ～？』

――声紋を確認。照合：クアットロ姉様。
――……聴覚機能、良好。

『あ、目を開けたわね。見えてるかしらぁ？』

――視覚内にクアットロ姉様を確認。照合：完了。
――視覚機能、良好。

「見えています。クアットロ姉様」

――クアットロ姉様に返答。自身の声紋照合：完了。
――声帯機能、良好。

『自分の事はわかるかしらぁ？　ちょっと、お姉様に教えてくれる？』

「はい。私の識別名称はタイプアイン・ファースト。識別略称は『アイン』。
クアットロ姉様とドクタースカリエッティが造られた、現状でのラストナンバーズです」

――本体識別機能、良好。
――記憶機能、良好。
――思考機能、良好。

『うんうん、よろしい♪
身体はちゃんと動くかしら？　ちょっと、そのポッドのガラスを壊して御覧なさい？』

「了解しました。危険ですのでお下がりください、クアットロ姉様」

『はいは～い♪』

――クアットロ姉様の退避を確認。

――運動機能テスト、開始。

――テスト内容……右腕部による破壊行為。目標……目前の生体ポッド容器。

――力量設定を７０に固定。テスト開始。

ガシャアアンッッ！！！

――目標の破壊を確認。右腕部に損傷なし。

――運動機能、及び右腕部装甲、共に良好。

「はぁ～い。おはよう、アインちゃん。こっちまで来て頂戴～」

「おはようございます。クアットロ姉様」

――行動選択：歩行。

――歩行を開始……目標地点までの到達を確認。

――歩行機能、良好。

「んふふ～。お利口さんね、アインちゃん」

――クアットロ姉様による抱擁行為を確認。

「ありがとうございます。クアットロ姉様」

「うんうん♪　それじゃあ、次は……戦闘機能のテストといきましょうか♪
着いて来なさい、アインちゃん。専用の場所まで移動するわよ～」

「了解致しました」

――全機能の確認を完了。
――問題点：無し。
――次いでクアットロ姉様の命令を確認。場所を移動した後に、戦闘機能のテストへと移る。

ｓｉｄｅ：タイプアイン・ファースト　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ４１話　『翼、ふたたび　２』

side：ブレイブハート

私はメンテナンス用の小さなポッドに浮かべられ、中に満たされた専用の液体の中でたゆたっていた。
特に酷い損傷があった訳ではないのだから、本来ならばこんなところに居る必要などないのだが……。
マスターを失ったデバイスに、他に行ける場所などありはしない。

『ブレイブハート。調子はどう？』

自虐的な考えに身を委ねていると、マリエル技官が私に話しかけてきた。
表情は笑顔だが、些かの疲労が窺える。あの日から3日間、殆ど寝ずに私やマッハキャリバー、その他のデバイス達全てのメンテナンスを行ってきたのだから、当然と言えば当然だろう。

《　問題ありません。良好です　》

だから私は、技官に心配をさせぬように務めて平静な声で返した。
とはいえ、機械の合成音声である私の声は元より抑揚などあって無いようなものだが。

『そう、何かあったら言ってね？　私は暫く、マッハキャリバーの

方に集中してるから』

《　わかりました。ありがとうございます、マリエル技官　》

『どういたしまして』

マリエル技官は朗らかに笑うと、私に背を向け、空中に開いたパネルを叩き始めた。

その向こう側に見えるのは、私と同じポッドに浮かべられたマッハキャリバーの姿が見える。

前回の襲撃でいくつかのデバイスは少なくない損傷を受けたが、その中でもマッハキャリバーの受けた損傷は最も酷いものだった。本体が全損し、ともすれば廃棄となってもおかしくない程の損傷。

それでもああしてマッハキャリバーが持ち直したのは、マリエル技官の技術とのお陰と言っていい。

《　……　》

だがそれ以上に、マッハキャリバー自身の意志もあったのだろう。再びマスターと共に戦いたいという意志がマッハキャリバーにあったから、マリエル技官の技術に答え、元どおり――いや、それ以上の性能となって復活することが出来た。

――本当に、羨ましい。

それに比べて、こうしてただ何もする事無くたゆたっている私の何と無様な事か。

マスターを守ることも出来ずに失い、自分だけが碌な損傷も無く生き残る。

……デバイスとして、これ程屈辱的なことがあるだろうか？　私は、無いと断言してもいい。

≪　マスターハヤト……　≫

私が守れなかった、私の使い手。

ただ1人しかいない私の……私の、マスター。

もしあの時、私が敵の使っていた幻術を見破れたなら。

もしあの時、私のオート防御が間に合っていたなら。

もしあの時――マスターハヤトが1人で動くことを止めていたなら。

そのどれかでも実行出来ていたなら、ここでこうして惨めな思いなどしていなかっただろうに。

しかし、それが出来なかったからこそ、私はこの場所でこうして無様に漂っている。

≪　私は、どうしたらいいのでしょう……　≫

使い手の居ないデバイスに、どれだけの価値があろうか。

かと言って、マスターハヤト専用に近いチューニングをされている私は、他の誰かに使ってもらう事も出来ない。……いや、仮に出来たとしても、そうするつもりは更々ないけれど。

しかし……と。

ネガティブな思考に埋め尽くされた私の思考回路に、ただひとつだけ残った目的がある。

それは、スカリエッティとその仲間たちの逮捕と、マスターハヤトを殺害した敵の排除。

復讐などと気取ったことを言うつもりは無い。

マスターを失った私には、それ位しかやるべき事が思いつかないだけだ。使い手を失い、次の使い手に出会える宛ても無く、宛てがあったところでその人に使われる意志の無い私には、それだけしか――。

《……マスターハヤト。私は……》

液体の中に響いた私に声に答える者は、誰1人としていなかった。

side：ブレイブハート　了

◇◇◇◇◇

side：―

「はやて、書類持ってきたぞー」

「うん。ヴィータ、ありがとな」

部隊長室のドアを開け、ヴィータがその小さな身体が隠れてしまう程に積み重ねた書類を持って入ってきた。

はやてはドアから入ってきたヴィータに微笑み、席を立って彼女の元へと向かってその書類を受け取る。

「こんなに沢山、大変やったろ？　ご苦労さんやな」

「いーって。これ全部捌かなきゃなんねーはやてに比べたら、どーってことねーよ」

肩を回してはやてに答えてから、ヴィータはそう言ってニカッと笑う。

ヴィータもここ2，3日働きづめだったというのに、ヴィータはその笑顔に些かの疲れも見せない。はやては自分以上に働き詰めで、自分以上に疲れている。だから、せめて自分まで疲れた顔をしてはいけない……と。

「……ごめんなヴィータ。ありがとな」

「何ではやてが謝るんだよ。ただでさえ今は、六課の全員が忙しいんだ。

シャマルは病み上がりだってのに医務室に缶詰だし、シグナムは地上本部や本局、教会なんかを走り回って今後の話をつけてる。なのはもフェイトも……他の連中も皆全力で働いてる。

だってのに、あたしだけがサボるとかありえねーって」

少しだけ寂しそうな顔をしてから、それでもヴィータは快活に笑って見せた。

はやてはそんな彼女を見て、一度小さく辛そうな顔をして……でも、すぐに同じように朗らかな笑みを見せて彼女の小柄な身体を抱きしめた。

「ヴィータはええ子やな～」

「や、やめろよはやて！　恥ずかしいだろー！」

「ふふ。ええやん、久しぶりやし」

恥ずかしがって弱々しく身を捩るヴィータを抱きしめながら、はやては自慢したい気持ちで一杯になった。

小さな身体でも、精一杯に自分達を守ろうとしてくれている鉄槌の騎士を。

「でもなヴィータ。頑張りすぎんのはアカンで？　ヴィータかて、大事な六課の一員なんやから」

「わーってるよ、はやて。はやてこそ、無理しちゃ駄目だぞ？

あたしやシグナムと違って、はやてはあんま無理できねーんだから」

「大丈夫やって、あたしがそーゆー要領ええんはヴィータが一番良く知っとるやろ？」

「それは知ってるけどさ。はやてがこーゆー時に無理しやすいってのも知ってるぞ？」

「……何や、今日のヴィータは随分とお姉さんやなぁ」

抱きしめる自分の背中をポンポンと叩くヴィータに苦笑いしてから、彼女を抱く腕に力を込める。

「は、はやて。恥ずかしいって……」

「うん。ゴメンなヴィータ……でも、もー少しだけこーさせてな？」

「……まぁ、いいけどさ」

自分の肩に頭を乗せて疲れた声で呟くはやてに、ヴィータは恥ずかしいのを我慢して、されるがままにすることにした。何だかんだではやても疲れてるのだから、ここはまぁ自分が大人になろうと思いながら。

と、そこでふとある事を思い出したヴィータが口を開いて彼女に尋ねる。

「はやて。聞いたんだけど、アースラに本部を移すんだって？」

「そやで。六課の皆も怪我が軽かった子らは退院してくるし、居住区を含めて本部は必要やろ？
今後の事を考えたら、移動できる本部の方がええもんな」

「そりゃそうだけど……はやて、無理してんじゃねーのか？」

「無理せなアカン時もあるんやで？　私は部隊長やしな」

心配するヴィータに対し、はやては彼女を抱きしめるのをやめて可愛らしくウインクする。
こういう時の彼女には何を言っても無駄だと判っているヴィータは、それ以上は言及することなく「わかったよ」と溜息を吐く。

「けどさ、少しはあたしやシグナムにも頼ってくれよ。あたしらは、はやての騎士なんだから」

「わかっとるよ。頼りにしてるで？　ヴィータ」

「任せとけって」

最後に薄い胸をドンと叩いて笑ってから、ヴィータははやてに「それじゃ、仕事に戻るな」と手を振って部隊長室を後にした。残ったはやては、そんなヴィータの背中を見送ってから、気合を入れるように自分の頬を軽く叩き、書類の積み上げられたデスクへと向か

った。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：タイプアイン・ファースト

――ガジェット？型、？型、？型の全撃破を確認。
――戦闘機能の確認を完了。戦闘機能、良好。

「どこか気になるとこはあるかしらぁ？　アインちゃん」

「問題ありません、クアットロ姉様。戦闘機能は良好です」

「んふふ～♪　それは良かったぁ。あ、そうだそうだ」

――クアットロ姉様の右手に銀製のリングを確認。

「アインちゃん。コレに見覚えあるかしらぁ？」

――記憶内の記録と照合……該当事項無し。

――……該当事項、無し？　疑念事項を確認。再照合……該当事項無し。

――先程の疑念事項はノイズと判断、カット。

「……記憶内に該当事項はありません」

「あら、そ♪　ならいいのよぉ～」

「はい」

「それじゃあ、ラボに戻って身体を洗浄しましょうねぇ。オイルでベトベトよぉ？」

――クアットロ姉様の言葉を確認。

――体表面の８０％に、ガジェットのオイルを確認。

「了解致しましたクアットロ姉様」

「うんうん、いい子ねぇ～アインちゃん♪」

「ですがクアットロ姉様。洗浄ならば私１人で可能ですが……」

「駄目よぉ。アインちゃん私のたぁいせつな“弟”なんだから、私

が直々に洗ってあげるわぁ」

「理解しました。お手数をおかけします、クアットロ姉様」

「いいのいいの♪　それじゃあ、先に私の研究室に戻ってなさい。私はここの後始末をしていくから。
ああ、大丈夫だと思うけれど、ルーテシアお嬢様やアギト様には見つからないようにねぇ？」

――クアットロ姉様からの命令を認識。
――最優先事項：クアットロ姉様の研究室への帰還。
――次点優先事項：ルーテシアお嬢様、アギト様から発見されないこと。

「命令、認識しました」

「よろしい」

――記憶領域野からラボ内の地図を検索：該当事項アリ。
――クアットロ姉様の研究室までの道筋を確認。これより帰還する。

ｓｉｄｅ：タイプアイン・ファースト

ｓｉｄｅ：クアットロ

「うふふのふ～♪」

訓練用スペースの後始末をしながら、思わず鼻歌が漏れてしまう。
そりゃ、元々簡単にいくと思ってたけどぉ、ここまで上手く事が運ぶとおかしくて仕方ないわねぇ。

「戦闘能力数値はトーレ姉様より１５０％増、運動能力数値も他のナンバーズと比べて２００％近く増、と。
う～ん、自分の才能が怖くなっちゃうわぁ♪」

魔力数値も、ドクターに造って頂いたＩＳ機能も全て順調。
後は他の妹達と戦わせてみて、細かい部分の修正をすれば大丈夫かしらねぇ？

「記憶や意識を弄くったのも、上手くいったようだし？」

言いながら、さっきアインちゃんに見せた銀色のリングに視線を遣った。
改造前のアインちゃん――ハヤト＝ロックウェルを捕獲した時、アレが着ていた服の胸ポケットに入っていたリング。あの時の反応から察するに、セカンドちゃんが贈った物らしい。
確か愛の告白に使われるペアリング……だったかしら？　ほぉん

と、意味わかんないわよねぇ。
　こんな銀の塊ひとつでギャーギャー騒げるんだもの。馬鹿らしい。

「ま、その記憶も完全に消去出来たみたいだから、どーでもいいんですけどね」

　記憶操作が上手くいっているかどうかを確かめる為に見せてみたけどぉ、結果は私の思惑通り。アインちゃんには、ハヤト＝ロックウェルだった時の記憶は残ってなかったみたいねぇ。
　流石はドクターが考えた洗脳プログラム♪　惚れ惚れする効き目だわ。

「けどぉ、ちょ～っと答えるまでに間があったし……一応、後でもうちょっと念入りに再調整をしておこうかしらねぇ。念には念を……っていつもウーノ姉様が仰ってるしぃ」

　もし洗脳プログラムが効きすぎて壊れちゃっても、最悪細胞からクローンでも何でも作ればいいから、気楽なもんよねぇ。ついでだし、他にも色々と弄っておこうかしら？　私に対する絶対服従プログラムとか。ま、それはおいおい考えるとして、とにかくまずは洗脳プログラムの強化と再調整ね。
　完全に、完璧に、アンチプログラム無しでは絶対に解けない……ってくらいまでやるのが懸命よねぇ。いざって時にアインちゃんが使えないんじゃ、面白く無いもの。

「ふふふ……セカンドちゃんや他の局員がどんな顔をするのか、見ものねぇ～♪」

右手に持っていたリングを床へと落とし、呟きながら右足で踏みつける。

パキン、と乾いた音がして、足裏からリングが砕ける感触が伝わってきた。うぅ～ん、こうやって他人の大事な物を踏み躙るのって……か・い・か・ん♪

さて、と。あんまりふざけてばっかりもアレだし、そろそろ研究室に戻ってアインちゃんの再調整をしてあげなくちゃ。ドクターの計画が発動した時に、セカンドちゃんのあの絶望した顔をもう一度見る為にもね♪

まぁ……今度は、も～っと酷い絶望の顔になるでしょうけど？

うふふ……あぁ、考えただけで楽しくなっちゃうわぁ。

ｓｉｄｅ：クアットロ　了

if41話　『翼、ふたたび　2』（後書き）

クアットロテラウザス。
どうも、ラモンです。

ブレイブハートがちょっとヤンデレ入りました。
ヴィータは相変わらずいい女です。
はやては部隊長を頑張ってます。
ハヤトは改造されました。
クアットロテラウザス。
といった感じの41話、いかがだったでしょうか。

バレバレでしたが、タイプアイン＝ハヤトでした～。
まだ戦闘能力とかは秘密ですが、かなり強いです。
主人公が敵になる……新しい！　と自分で言ってみるテスト。
アインの口調……というかアイン一人称での文を書くのが、凄く大変でした。メカっぽい単語が中々思い浮かばなくて……w

さて、次回からは決戦準備中の両陣営を書いていきます。
色々なキャラを書いていくんで、結構長くなっちゃうかも……？
でも、頑張っていこうと思うのでよろしくお願いします。

それではまた、次の話で。

if42話　『深紅の女帝、紫銀の召喚士』

side:―

時空管理局本局。
その中で個人用のオフィスが集合している場所へと通じる廊下に、規則正しい足音が響く。
足音の主は、黄金の髪を靡かせる切れ長の目の女性。
管理局の青い制服に身を包んだ彼女は、やや足早にあるオフィスを目指す。

「……あ、お疲れ様です」

「ああ。お疲れ様だ」

途中で擦れ違った女性局員が、驚いた表情と共に女性に向かって敬礼する。
それに対して女性は足を止めず略式の敬礼を返しながら、直ぐに前を向いた。

「堅物爺共め、アレだけ圧力をかけねば動かぬとは……お陰で貸しを殆ど使い切ってしまったじゃないか。
こんなことなら、ちゃんと階級を上げておくべきだったな……ちっ」

イラついた表情で呟きながら、女性は右手の爪を噛む。
逆側の手には、バインダーに挟まれたいくつかの書類が握られていた。そこに書かれている文字の中には、中将や少将といった階級の文字がちらほらと見てとれる。

「……む、ここか」

そうしている間に、女性はひとつのドアの前に辿り着く。
彼女の目の前にあるドアには、『八神はやて』のネームプレート。それを確認すると、女性は早足で歩いてきた為にやや乱れた呼吸を整えてから、ネームプレートの下あたりを軽くノックした。

『あ、はい。どうぞ～』

「失礼する」

ドアの向こうから返事がきたのを確認してから、女性はドアを開けて中へと歩を進める。
部屋の中にある書類の束が乗ったデスクの向こうにいるのは、機動六課部隊長、八神はやて。はやては視線を上げて、部屋に入ってきた女性を見ると、不思議そうに目を丸くした。

「あ、あの……どちらさんでしょうか？」

「初めまして、八神はやて二等陸佐殿ですね？」

「はい、そうですけど……その、貴女は？」

「おっと、これは失礼を。少しばかり気が立っていたもので」

不思議そうな顔のまま尋ねるはやてに、女性は苦笑してから姿勢を正し、芸術的なまでの敬礼をしながら自分の名を名乗る。

「私は地上本部陸士１０１部隊副長の、ハヅキ＝ロックウェル一等陸尉です。
本日付で、機動六課に出向となりました。どうぞよろしく」

「……は？」

唐突過ぎる彼女の言葉に、はやては丸くしていた目を更に丸くして、呆然と声を漏らしたのだった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ４２話　『深紅の女帝、紫銀の召喚士』

「え……あの、ロックウェルって……」

名乗られた名前に混じっていた、聞き馴染んだその名前。

呆然としていたはやては、その名前に恐る恐るといった感じで口を開いた。

何故なら、それはつい最近喪われてしまった、彼女の大事な部下と同じ名前だから。それに対し、名乗った女性――ハヅキは意外そうな顔をしてから、頷く。

「ええ。貴女の部隊に居た、ハヤト＝ロックウェルの姉です。弟から聞いていませんでしたか？」

「は、はい。初耳です……それで、その……」

「あの子の事なら、聞いていますよ」

「……すみませんでした」

ハヤトの姉、ハヅキに対してどんな顔をしていいのか判らず、はやては項垂れてそれだけを短く呟いた。

直接的な関係は無いかもしれないが、それでもハヤトの死に対して、彼女は自分にもその一因があると考えている。もしあの時、自分がもっと注意深く作戦を考えていれば……もしかしたら、ハヤトは喪われなかったかも知れない、と。

「気になさいますな」

「え……？」

けれど、ハヅキは彼女を責める事無く、その肩を叩いてそう言った。

「私はあの子の姉ですので、思うところが無いとは言いません。ですが、私とてあの場に居る事が出来なかった人間です。あの子の死に対する責任が誰かにあるとするなら、その遠因は間違いなく私にもあります」

「そんな事ありません！　私が、もっとちゃんとしとったら……」

「……今はやめましょう。誰が悪いかなど、後でいくらでも話し合えます。

私達が今すべきなのは、スカリエッティの逮捕とミッドチルダ全域の安全確保。

この機動六課と手を組むことが、その目的を達成する最も近い道だと判断したからこそ、私はこうしてここに居るのです……違いましたか？」

はやての肩に手を置きながら、ハヅキは諭すように声をかける。

椅子から立ち上がり悲痛な表情で口を開こうとしたはやては、ハヅキの言葉に勢いを失い、気分を落ち着かせる為に一呼吸を置いてから椅子に腰を下ろした。

「そう、ですね。すみません」

「構いませんよ。八神二佐もお疲れでしょう。時には愚痴を零すのも大事です。

それはともかく……私の出向、認めてくださいますか？」

「それは勿論です。……でも、ホンマにええんですか？　地上本部も、今は忙しいんじゃ？」

躊躇うように彼女を見上げ、はやては尋ねた。

地上本部は先日の襲撃で少なくない被害を受けた。陸士部隊も色々と忙しいとゲンヤが零していたのを、はやては記憶している。その状況で、１０１部隊の副隊長である彼女が抜けても大丈夫なものなのだろうか？

「大丈夫ですよ。あちらには、私よりも優秀な者が沢山います。私のような無骨者が１人居なくなったところで、それほど困ることもありますまい」

「は、はぁ……」

本人が言うならそうなのだろうか、と思いながらはやては書類に目を落とす。

そして、そこに書いてある名前に思わず目を丸くした。

「ミラ中将にヴァルケンハイン少将……って、大物ばっかやないで

すか！」

書類に出向を受諾する旨に【連名】として書いてあった名前は、そのどれもが新人局員でさえ名前を知っているような大物ばかりだ。はやて自身も、面識は無くても名前自体は非常によく覚えている。ここに名前を連ねている全員が、若くして佐官以上の地位まで上り詰めた大物達ばかりで、こういう言い方はアレだが、たかだか尉官の出向に名を連ねるとは思えない人たちばかりだ。

だというのに、何故ここに名前が書いてあるのか、それをはやては驚愕の視線でハヅキに尋ねた。

「ん？　あぁ、そいつらは全員私の知り合いでしてね。私の出向に対して地上本部の爺共が五月蠅かったので、圧力をかける為に全員に声をかけ、名前を貸してもらった次第です。

お陰であいつらへの貸しを殆ど使わされてしまいましたが……全く、老人方は頭が固くていけませんね」

やれやれと溜息を吐いて肩を竦めるハヅキに、はやては頬を引き攣らせた。

少なくとも、彼女が今「そいつら」と揶揄した人たちは、階級で言うならば全員が彼女より遥か上の存在だ。

その人たちを自分の出向を許可させる為だけに動かせるとは、一体どれだけの貸しがあるというのだろう。

「とはいえ、私は基本的に地上本部所属という扱いになるでしょう。いざとなれば、地上本部側の警備になるようになってしまいます

が……」

「それでも、手伝って貰えるなら助かります」

「ええ。私の出来る範囲を全力で手伝わせて頂きます。もし上が五月蝿いようでしたら、色々と手を使って黙らせますのでご安心を」

「あ、あはは……えーと、その時はお願いします」

自慢げに胸を張るハヅキに対し、はやては本日何度目になるかわからない苦笑を浮かべ、頭の中で呟いた。

『ハヤト君、アンタのお姉ちゃん何者やねん……』と。

◇◇◇◇◇

「……」

あの日――タイプアイン・ファーストと呼ばれた彼を見た時から、ルーテシアの胸の奥には、もやもやとした不快感がずっと残っていた。そしてそれは日を追う毎にその大きさを増し、彼女は今も不快感に眉を顰めている。アギトやゼストに相談しようかとも考えたが、

クアットロに「秘密にしてくれ」と約束してしまった為、それも出来ないままだ。

「ルールー、どうしたんだよ？　ここんとこ、ずっと辛そうな顔してるぞ？」

「……大丈夫だから」

「大丈夫って……」

そんな彼女を心配してアギトが尋ねてくるが、ルーテシアは俯いて首を振る。

アギトは尚も心配そうな視線を彼女に向けて食い下がるが、肝心のルーテシアは頑なに何も語ろうとはしない。

アギトかゼストに自分が見たことを話して相談すれば、きっと何かしらの解決策を示してくれる。それは彼女にもわかっているのだが、彼女は律儀にもクアットロと交わした「2人には秘密にしておく」という約束を守ろうとしていた。

だが、そのせいでアギトを心配させているという事実が、余計にルーテシアの表情を翳らせる。

アギトは長い間一緒に過ごしてきた、彼女にとって『家族』とも呼べる存在だ。それをルーテシアが自覚するしないに関わらず、である。

それだけ親しみを覚えている相手に隠し事をし続けるというのは、子供である彼女には相当なストレスだ。

けれど、話してしまって約束を破るのも「イケナイこと」だという気がして、結局ルーテシアは思考がそこでループしてしまい、た

だ俯いて眉を顰めるだけになる。

「旦那ぁ……旦那からも何とか言ってやってくれよ。ルールー、こんな顔で平気なわけねーんだから」

「……む」

何も言おうとしないルーテシアに困り果てたアギトは後ろを振り返って、大木に背を預けて座り込んでいるゼストに助けを求めた。その声に対し、呼ばれたゼストは顔を上げて小さく声を漏らす。

彼もルーテシアの様子には気付いていたが、自分から喋らない以上は放っておくべきだと考えていた。

今まで彼女と共に過ごしてきて、どうしても言うべき事ならば必ず話してくると思っていたからだ。

「必要なことならば、自分から話すだろう」

「いや、そーだけどよぉ。こんな顔してたら心配だろ？」

「……ごめん」

「ああ！　違う違う、別にルールーに怒ってる訳じゃないんだって！」

ゼストのそっけない言葉に、アギトは口を尖らせてルーテシアの周りをクルクルと飛び回る。

その言葉を聞いて、ルーテシアは一層表情を暗くしてしまい、それに気づいたアギトは慌てて彼女を慰めた。

（……珍しいことではある、か）

俯き、暗い表情をするルーテシアを見ながら、ゼストはそう思う。

ルーテシアは基本的に感情の起伏が少ない子供だ。それは彼女の育ってきた境遇を思えば当然の事だが、そんな彼女がここまで感情――今回はマイナスな感情ではあるが――を露にするのは非常に珍しい。

長い間を共に過ごしてきた中でも、彼女がここまで感情を露にした事は数える程しかなかった。

（それだけの事があった、と考えるべきだろうな）

思考を短くそう結論付けたゼストは、まだ困った顔でルーテシアを慰めているアギトに小さく苦笑し、腰を上げて2人の近くへと歩み寄る。

そして、ルーテシアと視線を上げるように膝をつき、彼女に語りかけた。

「……何故、話せんのだ？」

「約束、したから」

「誰とだ？」

「クアットロ」

「だーかーらー！　あんな奴らとの約束なんて、守る必要ねーだろ！？」

だーっ！　と両手を挙げて憤慨するアギトを目で制し、ゼストはルーテシアの頭に手を置いた。

「話せんというのなら、俺は無理に聞こうとはしない。ただ、それを話すのがお前の中で『正しいことだ』と思ったのなら……その時は、話せ。何か不都合があるのなら、俺はその場限りでその話を忘れる」

「……ゼスト」

常の彼にしては珍しく長い言葉を口にしたゼストに、ルーテシアは驚いた表情で顔を上げる。

見上げた彼の顔は、いつも通りの静かな表情ではあったが、その口元にはルーテシアを安心させるような小さな笑みが浮かんでいた。

「……」

ゼストの表情と言葉に、ルーテシアは一度黙して考えてみる。

クアットロと約束した以上、それを守るべきだとは思う。
けれど、彼女の中の何かが『それは間違いだ』と告げていて、それがこの不快感の正体なのだ。

何が間違いだと告げているのかはわからない。
それでも『それ』は告げ続けているのだ。『自分の見たことを、彼に言うべきだ』と。

「……あのね」

気付いた時には、言葉が漏れていた。
一度漏れてしまった言葉は止まらず、ルーテシアは彼に自分が見た全てを話し始める。

「この間、ドクターのラボで……前に会った人を見たの」

「前に会った……？」

「うん。下水道で会った、変な人」

「変なって……あ！　もしかしてあの馬鹿か！？」

ルーテシアが言葉で示した人物に、ゼストは首を傾げ、アギトは思い当たる節があったのか両手を叩いて声を上げた。それに対し、ルーテシアは頷くことで肯定を示してから言葉を続ける。

「その人がクアットロの部屋で、お母さんと同じ容器に入れられて……何かされてた」

「……そうか」

ルーテシアの言葉に頷きながら、ゼストはその脳裏に、地上本部襲撃の時に自分を止めた小さな騎士が言っていた言葉を思い出す。

あの時、相手の騎士――ヴィータは自分の部下が連れ去られたという事を示唆する事を言っていた。ルーテシアが見たというのは、恐らくはその部下……ゼストが前に会ったことのある、あの少年なのだろう。

「それで、その人を見てから……ずっと、胸の辺りがモヤモヤしてる」

言いながら、ルーテシアは眉を顰めながら自分の胸の辺りで右手を握った。

「ねえ、ゼスト。何で私は、こんな気持ちになるのかな？　あの人の事、全然知らないのに」

「……」

「ルールー……」

不安げな彼女に問われ、ゼストとアギトは沈黙した。
アギトはルーテシアの問いに対する答えがわからず、ゼストはどう説明したものかと考える為の沈黙。
彼女の問いに対する答え、ゼストはそれをルーテシアなりの正義感だと考えた。自分の母親と同じような状況に置かれている少年を見て、無自覚なままに少年の仲間達と自分とを重ねてしまっているのだろう。
誰よりも『待つ側』の人間の心理を知っている彼女だからこそ、少年をそのような状況に置いたスカリエッティ達に対して、嫌悪感に近い感情を抱いたのではないか……ゼストはそう結論付けた。けれど、それをどう説明したものかわからず、難しい顔で黙り込むばかりだった。

「この気持ちが何なのかわからないけど……凄く、モヤモヤする」

「ルールー……」

アギトは何も言えないまま、俯くルーテシアを慰めるように彼女の肩へと腰掛け、頬を撫でた。
そんな2人を眺めつつ、ゼストは1人思考に埋没する。

ルーテシアがこういった反応を見せたのは、長く共にいた中でも初めての事だ。
先程その理由は推測できたものの、それを話すべきかどうか、迷う。話しても特に何も起きないかも知れない。理由がハッキリした事で、すっきりとした気持ちになれるかも知れない。
だが――今の状況下でスカリエッティに明確な反感を抱いてしま

う可能性も、０ではないのだ。

それだけは避けたいと、ゼストはそう考えた。

ルーテシアの召喚士としての能力は、スカリエッティにとっては必要不可欠……とまではいかないが、重要度が高い筈だ。そんな彼女が仮に反感を抱いたとしたら、スカリエッティは間違いなく彼女の母――メガーヌ・アルピーノを盾にルーテシアを脅迫してくるだろう。

そうなってしまえば、ルーテシアに待っているのは今よりも更に苦痛な道。

自分の意志を捻じ曲げられ、傀儡として動かされる。今も似たような状況かもしれないが、そこに反感があると無いとでは大きな違いがある。

では、メガーヌを自分が助ければ……と考え、有り得ない可能性に頭を振る。

メガーヌはルーテシアに対する抑えの切り札。スカリエッティが何の対策もしていないとは思えない。よしんばそれを突破出来たとしても、今度は自分がスカリエッティと袂を分かつことになり、自分の目的が果たせなくなってしまう。

（どのみち、手詰まりということか……）

メガーヌという要素を取り除けない以上、ルーテシアの問いに答えてやる事は出来ない。

彼女がスカリエッティに対し反感を持つ可能性が０でない以上、彼女の事を考えても、自分の目的の為にも、マイナス要素は少ない方を取るべきだ。ならば、自分はここで何も言わないのが正しいと

ゼストは思う。
後でルーテシアに『自分を利用していた』と憎まれるかもしれないが、それでもいい。
元より、自分の目的の為ならばどんな罵倒も嘲笑も、汚名も被る覚悟はある。そこに、親しい人間からの侮蔑が含まれたとしても、構わない。

「……ルーテシア」

自分が悪役になる覚悟を決め、ゼストが口を開いた……その時。

『騎士ゼスト、少しよろしいでしょうか？』

突然空中にモニタが開き、そこに彼らへの連絡役を務める女性―ウーノの姿が映った。

ｓｉｄｅ：―　了

if42話　『深紅の女帝、紫銀の召喚士』（後書き）

地の文が多いよ！　読み辛いよ！
どうも、ラモンです。

ハヅキ登場＆旦那、ルーテシアにフラグ立ての回でした。
ハヅキは悩んだんですよねぇ。この人、一応この小説最強という設定なので、出しちゃうとパワーバランスが著しく崩れるから本当はあんまり出したくなかったんです。
ただ、最終決戦時にとあるシチュエーションを書く為にはどうしても彼女が必要で……なんでもっとオリキャラ用意しなかったし！

そして説明文……というか、地の文が多すぎるルーテシア＆ゼスト組。
ちなみにコレはフラグです。何のフラグかと言えば……わかりやすいですよね。
このフラグも最終決戦でとあるシチュエーションを書く為の布石です。
スバルルートでは絶対に書きたいシチュエーションなんで、そこに続く為の準備は念入りに。石橋を叩き壊す勢いで叩きながら進めます。

グダグダと長い話が続きそうですが、私は凄まじい小心者なので、呆れずにお付き合いくださいませ。

さてさて、次回は今回の続き＋α。
ウーノさんがゼストに何故通信を繋いだか。
ゼストはルーテシアにどう答えを返すのか。
そしてルーテシアはその答えを聞いてどうするのか。

そこいら辺を中心に書いていければ、と思います。

……あと、ふと思い返してプロット（らしきもの）を確認したら、実はスバルルートはこの最終決戦準備期間で書くべき事が多すぎた罠。
下手したら、準備期間だけで１０話近く使いそうです（汗）

結構中だるみしそうですが、そうならないように頑張っていきます。ですが、最終決戦を盛り上げる為にも、色々と下準備を念入りにしておきたいので、もうちょっとだけダルダルなお話にお付き合いくださいませ。

それではまた、次の話で。

if43話　『騎士と召喚士』

side：―

『騎士ゼスト、少しよろしいでしょうか？』

唐突に聞こえた声に、ゼストとルーテシア、アギトは揃って視線を上げる。

3人が見上げた視線の先には空中に開いたモニタがあり、そのモニタにはいつもスカリエッティからの連絡などを伝える役目をしているウーノが映っていた。

「……立ち聞きか」

ゼストはルーテシアの頭に置いた手をどかし、立ち上がってモニタの向こうに居るウーノを睨む。

多少の怒気も混ざった彼の視線に、ウーノは小さく身体を強張らせた。しかし一度頭を振って気を取り直してから、彼の視線を真正面から受け止めて口を開く。

『申し訳ありません。通信を開こうとした時には、お取り込み中でしたので……』

「何の用だ」

彼女の謝罪を受け、ゼストは息をひとつ吐いてから尋ねる。
その問いを聞いたウーノは、「感謝します」と小さく頭を下げてから言葉を続けた。

『ご相談があります。……出来れば、内密にして頂きたい内容が』

「お前が、俺にか？」

ウーノが言った内容に、ゼストは眉を顰めて聞き返す。
スカリエッティに対するウーノの忠誠心は、彼も良く知っている。
そして、ゼストがスカリエッティに対して良くない感情――敵対心と言ってもいい――を抱いているのは、彼女が一番良く知っている筈だ。
それ故今まで、ウーノはゼストを気遣う素振りを見せつつも、その実、常に彼を警戒し続けていた。
その彼女が自分に相談事……というのは、ゼストには想像も出来ない。

「内密ということは、俺とお前の2人だけという事だな？」

『はい』

「……何故、スカリエッティには言わんのだ」

眉を顰めて尋ねれば、ウーノは言い辛そうに視線を逸らして言葉を詰まらせた。
そしてそれから、彼女は蚊の鳴くような小さな声でゼストに告げる。

『ドクターに話しても、恐らくは聞いていただけないでしょうから……』

「……ふむ」

ウーノの言葉に、ゼストは暫し思考に耽る。
彼女の言葉に嘘があるようには聞こえない。むしろ、どちらかと言えばその必死さが窺える口調と態度だ。
それだけの内容が一体何なのか……興味が無いと言えば嘘になるだろう。

「いいだろう。聞くだけは聞いてやる」

『ありがとうございます。騎士ゼスト』

ゼストからの返答を受け、ウーノは安心したような微笑みを浮かべて頭を下げた。

『騎士ゼスト、それでは……』

「ああ。わかっている」

ウーノに頷きを返しつつ、ゼストはルーテシアに「少し離れるぞ」と言ってから、少し離れた場所にある森の影へと移動した。

「これで良いのだろう」

『申し訳ありません。ありがとうございます、騎士ゼスト』

「例はいい。それよりも、早く話せ」

『はい……』

ゼストに促され、ウーノは手元を動かす仕草を見せた。
すると、彼女が映っていたモニタに人型――少年の身体を元にした改造図がモニタに映し出される。
それが何を指す図なのか、ゼストには直ぐに想像がついた。

「これが、ルーテシアの見た少年か」

『はい。元管理局局員、ハヤト＝ロックウェル。騎士ゼストが以前お会いした事のある少年です』

「……それで、これがどうした？」

腕を組みながらモニタに映る図を見続け、ゼストは尋ねた。

映っている図は、戦うことだけをしてきた彼には何を意味しているのかなど分からない。ただ、彼女が話そうとしている事とコレが関係しているのだろう、ということ位は理解出来ている。

『この少年は、先日の地上本部襲撃の際にクアットロ自ら回収し、そして戦闘機人へと改造を施しました』

「……」

ウーノの言葉に、組んだゼストの腕に力が篭もる。

彼は今、とある目的の為にスカリエッティと協力関係にはあるが、決して正義を捨てた訳ではない。

そのような少年の人権を無視した行為を聞かされ、不快に思わない訳が無いのだ。だが、とりあえずは話を聞かなければと自制し、黙したままウーノの言葉を待つ。

『ですが……その内容は私は愚か、ドクターにも詳しくは語られていないのです』

「何だと？」

ピクリ、とゼストの片眉が上がった。

スカリエッティとは、ウーノ達ナンバーズにとって絶対の存在である筈だ。

ウーノの彼に対する忠誠心は別物だと思っているが、それでも他のナンバーズもそれぞれ差はあれど、スカリエッティに対して少なくない忠誠を誓っていると思っていた。だから、その1人であるクアットロがスカリエッティに隠して何かをしている……という事実が、信じられなかったのだ。

『タイプアイン・ファーストにどのような改造を施したのか、どのようなＩＳを使うのか。

その全てが、ドクターも含め私達全員に知らされていません。誰もが顔を知っている程度です』

モニタには未だに設計図が映っているので、彼女の表情は見えない。しかし聞こえてくる声は、明らかな不快感を孕んでいるのが分かる程に、低く暗いものだった。

『一度問い質しましたが……ドクターに許可は貰っている、と誤魔化されてしまいました。

それ以来、私の事を極端に警戒しているようで……この設計図も、私があの子に極秘で入手したものです』

「……ふむ」

『最近のクアットロは、どうにもドクターの計画から外れた思惑を持っているように思えてなりません。
ですが、ドクターがそれを許容している以上、私が表立って批難する事も出来ませんので……』

「それで俺に、か」

『はい』

組んだ腕を解いて、ゼストは納得がいったとばかりに頷いた。
ウーノとしては、クアットロの独断に近い動きを良くは思っていない。だが、それをスカリエッティが許しているのに、助手である彼女がいよいよスカリエッティの“計画”も大詰めというこの時期に、クアットロと積極的に対立する訳にはいかない。

「それで？　俺に何をさせる気だ」

尋ねるゼストに、ウーノは「簡単な事です」と前置きしてから言葉を続けた。

『もし“計画”の最中に、クアットロがドクターに敵対するような行動を行った際、タイプアイン・ファーストとクアットロを止めて頂きたいのです。貴方に』

「なるほど」

頷きながら、ウーノが言わんとしている事を理解する。本来ならば彼女自身がクアットロを咎め、その行動を止めたいのだろう。だが、先の理由で彼女自身がその役目を担う訳にはいかなくなった。

そして、そういう役目を任せるにはゼストという人間は適役だ。元々が利害関係の一致で協力関係にあるだけの人間だから、仮にクアットロの行動に疑問を持って敵対的な言動や行動をしたとしても、それはある意味で当然とも言えるから問題はそれ程ない。

そして何より、彼の“目的”を達成する為にスカリエッティの“計画”は必要不可欠。

例えウーノが無茶な要求を彼にしてきたとしても、それがスカリエッティの計画を進めるために必要であれば、ゼストが否と言う確率は低い。

そうして彼とクアットロが衝突し、その間をスカリエッティが取り持つという状況になれば……ウーノがクアットロのしようとしている事を調査する隙も生まれるだろう。

実に合理的な手段だ。しかし――。

「それを俺が受ける利がどこにある」

ゼストはウーノを見据え、尋ねる。

少なくとも、クアットロの行動がスカリエッティの起こそうとしている“計画”を妨げるようには聞こえなかった。ゼストが必要としているのは『計画そのもの』ではなく、計画が始まった時に確定事項として起きる『混乱』なのだ。そして、彼は自分の目的を達成

した後は、クアットロがどう動こうともスカリエッティを止めるつもりで居る。
仲間同士で潰し合ってくれるというのならば、彼からすれば好都合以外の何でもない。だからこそ、ウーノは何か交渉材料を持っている、と。そうゼストは考える。
そして彼女が用意しているソレは、恐らく――。

『もし受けてくだされば、ルーテシアお嬢様の母君の身柄を保証いたします。
例え、お嬢様が我々に敵対したとしても。……いかがでしょう、騎士ゼスト？』

「……つまり、ルーテシアを救いたければ貴様の駒になれ、という事か」

『そうですね。そういう事になります』

予想通りの返答に、吐き捨てるように呟いて彼女を睨む。
ルーテシアはゼストに対する人質として十分な価値がある。先程の会話を聞いていたからこそ、ウーノはそう判断し、こうして交渉材料として『メガーヌ＝アルピーノ』という手札を切ってきた。

「だが、お前がそれを守るという保障はあるまい」

『それでは、今すぐそちらに母君の身柄をお送りする……という条件では？』

「……何？」

完全に予想外のウーノの申し出、それにゼストは目を丸くする。
メガーヌの身柄はルーテシアへの脅し、そして人質として重要な役割を持っている筈。だからこそ、先程ゼストはルーテシアへの返事を保留したのだ。それをウーノ自身が手放すというのは……あまりにも不自然。

『不審に思われるのも当然かと思いますが、私はルーテシアお嬢様が敵対することより、クアットロの独断を許したままにしておく方が危険と……そう判断しました』

「……」

その言葉を、ゼストは頭の中で吟味するように反芻した。
もし本当にメガーヌの身柄をこちらに寄越すというのなら、ルーテシアをスカリエッティに縛り付けている人質は居なくなる。そうすれば、ゼストはルーテシアの悩みを解決し、彼女をスカリエッティから解放してやる事が出来るようになるのだ。
――だとすれば、ゼストが『否』と言う訳が無い。

「……いいだろう。今すぐメガーヌをこちらに渡せば、お前の申し出を受けてやる」

『ありがとうございます。では、今すぐにお嬢様の母君の身柄と、こちらをお送りします』

そう言ってウーノは手に持った一枚のディスクを彼に見せた。
それが何かと問うゼストの視線を受け、ウーノがその視線に答える。

『これは、タイプアイン・ファーストに使われている洗脳プログラムのアンチプログラムです。
デバイスにデータを組み込み、直接タイプアイン・ファーストに触れれば発動しますので』

「……わかった」

『では、お願い致します。騎士ゼスト』

最後に恭しく頭を下げてそう言ってから、ウーノは通信を切る。
直後、彼の背後に転送用の魔法陣が浮かびあがり、そこから紫銀の髪の女性が浮かぶ生体ポッドと、それに括りつけられている1枚のディスクが入ったケースが現れた。

「……どうやら、真実だったようだな」

生体ポッドに触れて本物かどうかを確認し、呟く。
まぁ、彼女が嘘を吐く理由など無いのだし当然と言えば当然ではあるのだが。

「では……戻るとするか」

ゼストはポッドをゆっくりと一度撫でてから、アンチプログラムの入ったディスクを取り外して懐に仕舞い、ルーテシアとアギトを待たせている方を向いて歩き出す。

メガーヌの生体ポッドが無くなった事をウーノがどう誤魔化すかはわからないが、あちらから話を持ちかけてきた以上は、スカリエッティに咎められるようなヘマはしないだろう。

後は、自分が上手くルーテシアを説得するだけ。

自分に未練を残さぬように。

彼女が、後腐れなく自分と手を切れるように。

・・・・・

「あ、旦那ぁ。や～っと終わったのか？」

「ああ」

「何の用だったんだよ？　まぁ、どーせロクな用事じゃねーだろうけどさ」

戻ってきたゼストに気づいたアギトが、彼の方へと飛んできて彼の周りをクルクルと回る。
そんな彼女に短い返事を返しつつ、ゼストは未だに俯いているルーテシアの側まで歩み寄って再び膝をつく。

「ルーテシア」

「……どうしたの、ゼスト？」

ルーテシアが顔を上げ、固い表情のゼストに戸惑いの視線を向けた。
だがゼストはそれに構わず、ゼストはルーテシアの肩を掴み、優しく諭すように言葉を続ける。

「お前が感じているその違和感は……『正義』だ」

「……せい、ぎ？」

呟いた彼の言葉に、ルーテシアは首を傾げてゼストを見上げる。
そんな彼女の目を真正面から見据え、ゼストはゆっくりと言葉を選んでルーテシアへと告げていく。

「お前の母とあの少年……同じ状態にあった2人を見て、お前は理解した筈だ。

あの少年を待っている人間の気持ちを……違うか？」

「……わかんない」

問われ、ルーテシアは力なく首を横に振る。

ルーテシア自身は、今まで“自分”という個の感情に目を向けた事が殆ど無い。彼女自身が感情の起伏に乏しいというのもあるが、それ以上にここまで長い間彼女の感情を刺激する事が無かったからだ。

だからこそ、ルーテシアには自分の気持ちが分からない。

「そして、お前の中にある『正義』がクアットロという『悪』を否定している。

それが違和感となって、お前の中にあるのだろう」

「ちょっ……旦那、いきなり何言ってんだよ！？」

ゼストの顔の横に浮かんでいたアギトが、驚いた顔をして声を上げた。

彼が言っている事は、表立ってスカリエッティに反旗を翻すような発言だ。もしスカリエッティに聞かれていれば、どんな不都合があるか分からない。そしが分からないゼストではないだろうに、と思っての言葉。

だが、ゼストはアギトの心配に首を振ってみせた。

「大丈夫だ。問題ない」

「でも、旦那ぁ……」

「……今は、黙っていろ」

それでも食い下がろうとするアギトを制し、ゼストはルーテシアに語り続ける。

「だから、恐らくお前はこれからここに居ても苦しむだけだろう。自らの正義に背を向けるということは、子供であるお前には辛いだろうしな」

「……ゼスト」

続く言葉が何なのか、それが予想出来てしまったルーテシアは声を震わせる。

けれど、それ以上彼女が何かを言う前に、ゼストはその言葉を告げた。

「――お前は、ここに居るべきではない。管理局で保護して貰え」

「だ、旦那!?　ホントに何言ってんだよ!?
管理局にルールーを預けるってか!?　馬鹿言うなって!!」

それを聞いたアギトが、ゼストの顔の正面に回って怒鳴りたてる。
アギトは管理局を信用していない。彼らが正義を謳うその裏で、その正義を守る為に非合法な研究や行為を行っているのを知っているからだ。だから、アギトからすればルーテシアに管理局に向かわせるという事は、すなわち彼女を管理局に売り渡す行為と変わらない。
ゼストはそんな事をしない、そう信じていたからこその激昂。
けれど、ゼストはそんなアギトの激昂など意に介さず、冷めた声で言葉を続けた。

「先程の連絡で『ルーテシアはもういらない』と言われた。
証拠として、お前の母の身柄も渡された……つまり、もうお前が俺と共にいる必要は無いという事だ」

「っ!?」

「旦那!」

先程までのやんわりとした言葉ではなく、明確な拒絶の言葉。
それにルーテシアが息を呑み、アギトは信じられないといった顔で再び怒鳴った。

「アンタ、ルールーの事見捨てんのかよっ!?　ルールーは、アン

タとずっと一緒にいたじゃねぇか！！」

「……それは、俺とルーテシアの利害が一致していたからだ。
レリックを見つけるだけならば、俺と共に居るよりも、管理局に保護させた方が合理的だろう」

「ふっざけんなよ！　管理局がどーゆー奴らなのか、旦那が一番良く知ってんだろ！？」

「では、スカリエッティという協力者が居ない状態で、どうやってレリックを集めるというのだ？」

「あたしらが一緒になって探せばいいだろ！！」

顔を付き合わせるような距離で、アギトが怒鳴る。
けれど、ゼストは目を逸らす事無く彼女の言葉を否定した。

「俺は自分の目的を果たす為に、スカリエッティと袂を分かつ訳にはいかん。
俺の協力も、スカリエッティの協力もなしに、子供1人でどれだけの事が出来るというのだ」

「それは……っ、でもよぉ！！」

「アギト……もう、いい」

「！　ルールー！？」

歯を鳴らし、嘆願するようにアギトが怒鳴った瞬間……その声を、ルーテシアが遮った。
驚いてアギトが振り返れば、その先に見えたのは服の裾を握り締め、俯いているルーテシア。
その姿に、アギトが何かを言うよりも先に、震える彼女の声が響く。

「お母さんが戻ってきて、ゼストがそうする方がいいって言うなら……私は、そうする」

「ちょっ！　な、何言ってんだよ!?」

「……私のこの気持ちが、ゼストが言う『正義』なのかはわからないけど。
でも、ゼストがそう言うなら、きっとそうなんだと思うから。だから……管理局に、行くね」

「ルールー！　行っちゃ駄目だって！　アイツらが悪者だったなんて、前から分かってた事だろ!?
今さら管理局に行ったって、どうにもならないよ!!」

「それでも……もう私に出来るのは、これしか無いから」

「ルールー……」

寂しげに呟くルーテシアに、アギトは言葉を失う。
確かに、ゼストの言葉の通りならば、彼女がスカリエッティ側に

反意を持ち、向こうも彼女を必要としていない以上、ルーテシアがゼストと共に行動する必要は無くなった。
むしろこれ以上共に行動していても、どちらにも利益が生まれないと言ってもいい。

ならばルーテシアは管理局に保護させ、彼女の母を目覚めさせる方法を調べた方が得策だ。
それぐらい、アギトにも分かっている。けれど、ルーテシアを本当の家族のように思うアギトからすれば、ルーテシアを売るような行為は、決して認められるモノではないのだ。

「あちらの林に、お前の母親の生体ポッドがある。それを持って管理局……そうだな、あの少年の仲間達のところへ行け。彼女らならば、悪いようにはしないだろう」

「……うん」

けれど、既にゼストもルーテシアも行動を決めて動き出している。
恐らくは今更アギトが何かを言ったところで、どちらも聞きはしないだろう。

「ルールルー……」

「アギトは、ゼストと一緒に居てあげて」

「でも！」

「大丈夫だよ。私には、ガリュー達が居るから」

最後に弱々しい笑みを浮かべてから、ルーテシアはゼストとアギトに背を向け、生体ポッドがある林の方へと駆けていく。アギトはそれを追おうとして、結局追えずに彼女の背中を見送った。

「……旦那、本気だったのか？」

「当たり前だ。これ以上、俺達と共に居てもルーテシアの為にはならん」

「っっ！　ああそうかい！　旦那のわからず屋！！」

彼の返答に、アギトは大きな声で怒鳴ってからどこかへと飛んで行った。

アギトが飛んで行った方角を見上げながら、ゼストは大きな溜息を吐いてその場に腰を下ろした。

「これでいい。いずれ朽ちる俺と共にいるよりも、温かな場所に居る方が、ルーテシアの為になる」

右手を何度か動かしながら、呟く。

既に身体は限界が近づいている。恐らく、自分の目的を果たしてスカリエッティを止めれば、そこで自分の命は尽きてしまうだろう。

だから、その前に彼女をこうして陽の当たる場所に帰すチャンス

を得られたというのは、幸いだった。
これで――心残りはもう、無い。

「……だが、存外に辛いものだな」

自分の右手を握り締め、ゼストは自嘲的な苦笑を浮かべて呟く。
そのまま彼は、暫くの間その場にしゃがみ込み、静かに自分の右手を見続けていた。

ｓｉｄｅ：―　了

ｉｆ４３話　『騎士と召喚士』（後書き）

うーん……グダグダだな。
どうも、ラモンです。

今回は辻褄あわせが難しすぎた……。
どうやってルーテシアを離反させ、かつゼストはスカっち側に残留させたままにするか。
そしてルーテシアの感じた気持ちをどう理解させるか。
アギトの立ち位置をどうするか。
結局、最後まで自分的に納得の行く結論には到りませんでした。なので今回の話は妥協に妥協を重ねた結果の産物ですねぇ。
くそう、無念すぎる……。

もうね、本気で知恵熱出しました。
お陰で仕事中もそればっかり考えて、書類間違えて怒られましたよもう！（えー）

という訳で、グダグダで変な感じですが、今の私の精一杯な理屈責めでした。「」が凄く少ない……。
本当は六課とルーテシアが合流する場面までやりたかったんですが、そこの辻褄あわせがまだ出来ていなかったので、次回以降に回したいと思います（汗）

さて、次回は……何やろうかな。
候補としては、スバルとマッハキャリバーの会話ｗｉｔｈブレイブハートか、お姉ちゃんＶＳシグナムで軽い模擬戦、ルーテシア六課に合流するの巻などなど……。
とりあえず思いついたモノをどんどん書いていって、早いトコこの

準備期間を終了させようと思います。

それではまた、次の話で。

if４４話　『聖王／造反　１』

ｓｉｄｅ：―

「……ん、ふぁっ……ちゅ……っ」

薄暗いクアットロ専用ラボの中に、水音と熱っぽい吐息が響く。
音の主は、部屋の中心に立つ男女――クアットロと、タイプアイン・ファースト。
吐息と水音は２人は口元……正確には、重ねられた唇から響いている。

「――ぷはっ」

暫く唇を合わせた後、息を吐き出すようにしてクアットロが顔を離す。
そうすると、絡んでいた２人の舌の間にかかった唾の橋が、モニタの明かりを反射してキラキラと光った。

「んふふ～。今日の分の調整はこれでお終い、お疲れ様ぁ。アインちゃん」

「いえ。ありがとうございます、クアットロ姉様」

頬を上気させて楽しそうに笑うクアットロとは対照的に、アインは無表情なまま頭を下げる。

そんな彼に少し不満そうな顔をした後、それでもクアットロは直ぐに笑みを浮かべ、自分用の椅子に腰掛けてキーボードを叩き始める。その背中に向けて、直立不動のままアインが疑問を投げかけた。

「ですがクアットロ姉様。プログラム再調整でしたら、このように口唇部の粘液接触でなく、他の方法で行った方が効率が良いのではありませんか？」

「気にしない気にしない。大事な“弟”とのスキンシップってヤツよぉ」

「なるほど、理解しました」

モニタから視線を動かさず、悪戯っぽい笑みを浮かべたままのクアットロの答えに、アインは頷いて黙る。

しかし、実際のところはクアットロにそんなつもりは欠片も無い。アインは彼女にとって忠実な道具であり、自分の実験結果の産物……それ以上でも以下でも無い。キスによってプログラムの再調整を行っているのも、単純に脳へのプロセス距離が短いからというだけ。

確かにアインの言うとおり、他の方法だってある。脳に直接プログラムを叩き込んだ方が効率だけを考えるなら正しいだろう。だがそれをすると、弊害として折角の洗脳プログラムが解けてしまう可能性が高いのだ。

だから、多少面倒だとは思っていても、この方法によるプログラムの再調整が現状一番効率がいい。
クアットロはとりとめもなくそんな事を考えながら、キーボードを叩いてモニタに映るデータをひとつひとつ確認していく。それらが示すのは、彼女が行っている再調整――主に制御プログラムを中心としている――が上手くいっているという結果。
その数値に満足気な笑みを深くし、クアットロはモニタを閉じた。

「さぁ～て、それじゃあそろそろ時間かしら？　アインちゃん」

「はい。現在時刻は、ドクタースカリエッティが指定された時間の１０分３２秒前です」

「そ。ならさっさと移動しましょうねぇ。遅れたら、楽しいイベントに間に合わないもの♪」

クアットロはそう言うと座っていた椅子から腰を上げ、軽い足取りでドアへと向かう。
彼女の後を追うようにアインも足を動かし、クアットロを守護するような距離で彼女の隣に並んだ。

「クアットロ姉様。私もご一緒してよろしいのですか？」

歩きながら、アインがクアットロに尋ねる。
これまで、アインは他のナンバーズは勿論、スカリエッティにも殆ど会ったことがない。顔見せで少しだけ言葉を交わしたくらいだ。

今回呼び出しを受けたのはクアットロだけ、そんな場所に自分が一緒に行っていいのかどうか、それが気になったのだ。

「だ～いじょ～ぶよぉ。アインちゃんはぁ、私のボディガード役なんだから」

「ボディガード、ですか？」

「そう♪　いいかしら？　アインちゃん、よく聞いてね。【何があっても、私を守ること。例えそれが、他のナンバーズ相手でも】……わかったかしら？」

アインの眉間に自分の人差し指を当て、言い聞かせるようにクアットロが呟く。

瞬間、彼の左目が緑がかった青から黄色へと変色し、その左目から小さなモーター音が聞こえた。

「命令――認識しました。クアットロ姉様」

「うん、いい子ねアインちゃん♪　ご褒美あ・げ・る」

彼の返答に満足そうな笑みを浮かべ、クアットロは足を止め、彼の唇に自分のソレを重ねる。

勿論、それは彼への褒美などではなく、自分今彼に与えた【指示】をアインが絶対に遵守する、というプログラムを植えつける為の作業なのだが。

少し長めの口付けを終えた後、クアットロは満足気な顔で再び歩みだした。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ４４話　『聖王／造反　１』

暫く歩いた後、アインとクアットロの2人はとある部屋に辿り着く。

一際重厚なその部屋の扉の向こうからは、少女の小さな悲鳴が聞こえてきている。

その悲鳴は、もしアインにハヤトとしての記憶があったなら、誰のものだったかがすぐにわかっただろう。けれど、記憶が残っていない彼は少女の悲鳴が聞こえても無表情を貫いていた。

「アインちゃん、それじゃ入るわよ～」

「はい」

クアットロに促され、アインが先導する形で扉を開けて中に入る。

部屋の中に立っていたのは、スカリエッティとウーノ、そしてディエチの3人と――。

「やだぁぁぁっ！！」

部屋の中心にある大きな台の上に仰向けにされ、両手足と腰をバインドされているヴィヴィオ。

その拘束から逃れようともがいているが、所詮子供の力。バインド魔法を力ずくで解ける訳も無い。

「遅れちゃってすみませぇん。ドクター」

そんなヴィヴィオに聞こえるように、クアットロは声を張り上げた。

彼女の声に反応し、ヴィヴィオが顔を少し上げて入り口の方を見る。そして――

「おにいちゃん！！」

そこに居たアインの姿に、表情を明るくした。

彼が……『アイン』がどういった存在なのかを知らないヴィヴィオにとって、そこに見えるのは『ハヤトおにいちゃん』なのだ。その『ハヤトおにいちゃん』がここにいる、つまり、自分の事を助けに来てくれた。幼いヴィヴィオはそう考え、ここから逃げ出せる…

…そう思った。

しかし、今の彼は『ハヤト』ではなく『アイン』でしかない。

だから――。

「私は、貴女の兄ではありません。聖王陛下」

「え――――――？」

アインはヴィヴィオの言葉に否定を返し、彼女を『陛下』と呼んで恭しく頭を下げる。
その返答に、少女の顔が絶望に染まった。

「ハヤト、おにいちゃん……？」

「ハヤト……という名前は登録されていません、陛下。
私の正式個体名称は『タイプアイン・ファースト』、略式個体名称は『アイン』です」

冗談であって欲しいと、そんな願いを込めてもう一度呼びかけるが、返答は同じく冷淡なモノ。
返ってきたその冷淡な声色に、ヴィヴィオは目に涙を溜め、懇願

するようにアインを見た。けれど、彼が自分を見つめる目つきは、彼女が知っている優しい兄のソレとはかけ離れていて。
まるで機械のような……そんな冷たさと鋭利さを持って、彼女を貫いた。

「クアットロ、何故アインを連れてきたの？」

そんなヴィヴィオとアインの様子には構わず、ウーノが咎めるようにクアットロに問うた。
スカリエッティが呼び出したのはクアットロ1人で、アインは呼ばれていない。だというのに、こうして彼を連れてきたクアットロの行動が、ウーノにとってはスカリエッティの指示に反しているように思えたからだ。

「ボディガードですよぉ。ウーノお姉様ったら、こわ～い」

「クアットロ！」

「構わないよウーノ。彼がここにいても、問題は無いからね」

「ドクター、ですが……」

しかしウーノの問いに対してクアットロは飄々とした答えを返し、その答えに眉を吊り上げたウーノをスカリエッティが制した。ウーノは尚も言い募ろうとしたが、スカリエッティに「作業の続きを」と促され、渋々それに頷いてモニタへと顔を向けた。

モニタに向かうことでスカリエッティとクアットロからは見えなくなった彼女の顔には、ありありとしたクアットロへの不信感が見て取れる。それは、彼女らにとってスカリエッティが絶対の存在だと信じているからこその不信。クアットロの行動は、どう見てもスカリエッティの意に反しているとしか思えない。

だのに、スカリエッティはそれを是として咎めようとしない。アインがここに居るという事は、すなわち自分達の身の安全も危ういというのに、だ。

（ドクターは一体、クアットロをどう思っているのか……）

そこまで考え、一度だけ頭を振って思考を止める。

スカリエッティの考えを自分が推し量るなど、傲慢にも程があるのだと彼女は思う。所詮、自分はスカリエッティの道具であり、手足なのだ。道具や手足が持ち主の行動を妨げる事など、あっていい筈が無い。

「ディエチ、バイタルはどうかしら？」

気を取り直すように息を吐いて、ヴィヴィオが寝かされている台を挟んだ隣でモニタを操作しているディエチへとウーノは問いかけた。

「バイタル良好、魔力安定良し。移植準備オーケー」

「では、早速やるとしよう」

ディエチの言葉を聞いて、スカリエッティがその言葉を口にする。

「はぁ～い♪　じゃあ、私もお手伝いしますねぇ～」

その言葉に楽しそうに答えつつ、クアットロが近くのデスクに置かれていた箱を持ち、鍵のような部分を操作して開く。開かれた箱の中に入っているのは――レリックの結晶体。

赤く輝くソレは、中空に浮かびながら妖しい光を放つ。まるで、意志を持っているかのように。

「――――っ!?　イヤアアアアアッッ!!」

レリックの結晶体を見た瞬間、今までにも増してヴィヴィオが激しく暴れ、叫び声を上げる。

彼女は本能的に察したのだ。

――アレが、レリックが、自分という存在を脅かす物だと。

だからこそ彼女は必死になって叫び、逃げ出そうともがく。

けれど、それはクアットロの無慈悲な言葉で断ち切られた。

「うるっさいわねぇ。アインちゃん、ちょっと口を押さえててくれない？」

「はい。わかりました、クアットロ姉様」

クアットロの言葉に頷き、アインがヴィヴィオの口を塞ぐ為に彼女の頭上へと移動する。

「やだっ、やだぁあああっ！！　おにいちゃん！！　やめてぇぇぇ！！」

「……私は、貴女の兄ではありません。聖王陛下」

「おにいちゃん！　やめてっ！！　やめ――むぐぅっ！？」

彼女の言葉を遮るように、アインが左手でヴィヴィオの口を塞ぐ。右手は頭に添えられ、彼女の頭が動かないようにしっかりと固定している。

（何で……なんで……！　何で助けてくれないの！？　何でこんなことするの！？）

ヴィヴィオは目を見開き、涙を流しながら自分の口を押さえるアインを――ハヤトを見た。

だが、彼女を見下ろすアインの瞳は、どこまでも冷たいもので。

だからこそ、ヴィヴィオの心にはより一層強い絶望が植えつけられる。

今ここに、自分を助けてくれる人は誰も居ないのだ、と。

「……クアットロ、これが狙いだったのかい？」

「んふふ。ひ・み・つ、ですよドクター。ほらほらぁ、早く移植しちゃいましょうよぉ」

「ふむ。まぁ確かに今はそちらの方が重要だね……それじゃあ、始めるとしようか」

言いながら、スカリエッティがレリックの結晶体をその手に持ち――実際にはレリックの結晶は空中に浮かんでいるので、持つという表現は正しくないかも知れないが――そして、アインに押さえられているヴィヴィオを見て口の端を歪めた。

「聖王の器に今、王の証を譲り渡す……」

レリック結晶体を持ったスカリエッティがヴィヴィオに近づくと、レリックはまるで主の身体に自分を戻せと主張するかのように、その輝きを増していく。

そして――。

「ヴィヴィオ……君は、私の最高傑作となるんだよ」

狂気的な笑みを浮かべたまま、手に持ったレリックをヴィヴィオの胸へと下ろした。
瞬間、レリックは歓喜するような輝きを放ちながら、彼女の胸の中へと吸い込まれていく。その時、ヴィヴィオの体中を想像を絶するような激痛が駆け抜けるが、口を塞がれているので、出てくる声はくぐもった悲鳴だけ。

痛みに目を見開き、痙攣するように身体を逸らすヴィヴィオ。
そんな彼女を、クアットロとスカリエッティは楽しそうに、ディエチとウーノは少し眉を顰め、そしてアインは無表情なまま、冷徹な瞳で見つめていた。

・・・・・

「……移植、全行程終了」

数十分の後、モニタを見つめていたディエチがそう告げる。
ヴィヴィオは寝かされた台の上でぐったりと身体を弛緩させ、虚ろな瞳で天井を見上げていた。

「それは良かったわぁ。アインちゃん、もういいわよ～。手を離して、こっちにいらっしゃいな」

「はい。クアットロ姉様」

終始無表情なまま、アインはクアットロの声に従ってヴィヴィオの口を塞いでいた手を離し、ヴィヴィオの頭上からクアットロの隣へと移動して、彼女の隣に立つ。

「ふむ、後遺症も無いようだ……どうやら上手くいったようだね」

「はい。ドクター」

スカリエッティはウーノの側に歩み寄り、彼女の手元のモニタを覗き込んで満足そうに頷く。

ウーノも彼の言葉に肯定の意を返し、モニタを閉じた。

「よろしい。これで、あとは行動を起こすのみとなった訳だ」

腕を組み、嬉しそうな笑顔を浮かべてスカリエッティが頷く。

ウーノとディエチも、やや複雑そうな顔をしながらも、彼の言葉に頷いて見せた。

その時。

「これでもう、ドクター達はいりませんねぇ？」

クアットロの言葉が、部屋に響いた。

「……クアットロ、何を言っているの？」

ウーノが厳しい目つきでクアットロを睨む。

冗談だとしても、そんな事をナンバーズである彼女達が口にしていい訳が無い。

だというのに、クアットロはまるで何でもない事のようにソレを口にした。

「私ってぇ、ドクターに一番近い思考パターンを持ってるんですよねぇ？」

「そうだね。そういう風に造ったつもりだよ」

しかし、クアットロは彼女の言葉を無視してスカリエッティへと問いかけた。

スカリエッティはクアットロの問いに対し、泰然とした顔のまま頷く。

「ねぇドクター？　ドクターなら、自分と同じ人間が2人も必要だと思いますぅ？」

妖しげな……いっそ蟲惑的とも呼べる笑みを浮かべ、クアットロは語る。

その言葉で合点がいったのか、スカリエッティもクアットロと似たような笑みを浮かべ、笑い出す。

「くははは！　なるほど、そういう事か！」

「ええ。わかっていただけて何よりですわぁ」

そこで言葉を切り、クアットロが右手の指を鳴らす。

その途端に、敵襲を告げる警報が部屋の中に鳴り響く。ウーノとディエチはその警報にあわてて周りを見回し、スカリエッティは感心したような声を漏らしてクアットロを見る。

「なるほど。既にガジェット達は掌握済みだったか」

「もっちろぉん。大変でしたよぉ？
バレないように、こっそりこっそりガジェットちゃんのＡＩを改造したりしましたし」

「……では、私からの命令は受け付けないということかな？」

「だぁい正解～♪　あ、勿論強制停止コードも無効にしてますからねぇ？」

ここにあるガジェットの数は、ゆうに５００を超える。
それらが全てクアットロの手にあるというのは、スカリエッティ達には脅威だった。
だが――それでもスカリエッティの表情には余裕がある。そして彼はその余裕と共に口を開き、自分の目の前に立つ、自分に反旗を翻した作品（クアットロ）に問いかけた。

「クアットロ、私が君の考えに気付いていないとでも思ったかい？」

「？」

その問いに対してクアットロが首を傾げた瞬間、部屋のドアを蹴破り、天井を割り、地面から飛び出してその場にいなかったナンバーズ達が現れ、クアットロとその隣に立つアインを取り囲む。

「私が、君の考えを見抜けていないとでも？　君の思考の元になっ

たのは、私なんだよ？」

「……あっら～。可能性は考えてましたけど、ホントにバレてましたかぁ」

「まぁね。私とて、そこまで鈍くなったつもりはないよ」

自分以外の姉妹から殺気混じりの視線をぶつけられ、しかしそれでもクアットロは悠然と笑ってみせた。

まるでこんな事は既にお見通しだ、とでも言うように。

「まぁ……こんな時の為の“タイプアイン・ファースト”ですから、平気ですけどぉ。

理論上は、この子以外のナンバーズ全員を相手どっても負けないスペックなんですよぉ？」

自分を取り囲む姉妹達を見回してから、クアットロは隣に立つアインへとしなだれかかった。

その言葉に反応し、トーレを始めとしたナンバーズ達全員が戦闘態勢を取り、アインもまた、小さな駆動音と共に身体を動かし、腰を落として戦闘を始められる体勢を取った。

「なる程なる程。では、試してみるとしよう。アレに乗るのに相応しいのが君か、それとも私かをね」

「それはいいですねぇ、ドクター。面白そうですぅ」

そんな緊迫した空気の中で、スカリエッティとクアットロの2人だけは余裕の態度を崩さず、互いに向かい合ったまま、挑発的な視線をぶつけ合う。

そして――

「命までは取りませんから、ご安心くださいねぇ」

「命までは取らないよ。安心しなさい」

――その言葉を合図に、ナンバーズとアインが一斉に動き出した。

ｓｉｄｅ：―　了

ｉｆ４４話　『聖王／造反　１』（後書き）

予告してたのと全然違うのが出来てしまったでござるの巻。
どうも、ラモンです。

まさかの展開になりましたね。
私自身も全く予想してませんでした。どういうことなの……。

こんな展開になったのは、実はルールーのせいなんです！（えー）
あの子ってホラ、洗脳されてたじゃないですか？　私、その事を完璧に忘れてまして……。このまま六課に合流させちゃうと、それが無かった事になっちゃうんですよ。
だから、そこの辻褄あわせをする為にプロットを弄くった結果、こんな事態に……畜生、ルールーめ！（ええー）
まぁ、それでも大筋は殆ど変わりませんので、ある意味ではご安心ください。

しかしアレですね。ヴィヴィオを泣かせるのは心が痛みすぎて泣きそうになりますね。
子供虐めたら駄目！　絶対！
でもこの後で、もう１回か２回は泣かせないといけない展開が……。
くそぅ、何故こんな展開にしたし！ｗ

さて。次回はナンバーズＶＳアインです。
アインの能力も出てくるかもしれないので、お楽しみに～。

……今思ったんですが、この部屋で戦うとヴィヴィオがモロに被害受けますよね（汗）
……ま、まぁいいか！　ヴィヴィオは聖王だから平気ですよね！

それではまた、次の話で。

if45話　『聖王／造反　2』

side：―

「……」

ウーノは自分の目の前に広がる光景に、言葉を失った。
たった数分。クアットロとスカリエッティの言葉を合図に、アインとナンバーズが同時に動き出してから、まだその程度の時間しか経っていない。
だというのに。
だというのに、だ。

「ぅ……あ……」

無表情に自分の方を見つめているアインの足元には、姉妹達が倒れ、苦しげに呻いている。
立っているのは戦闘経験の豊富なトーレ、チンクの2人と、後衛を担っていたウェンディとオットーだけ。

「……姉様がた。そろそろ諦めては頂けませんか？」

対して、アインは傷一つ負っていない。

金色となった左目と緑がかった青い右目のオッドアイで、自分を含めたナンバーズ達を無機質に眺め、悠然と立ったままそんな事を告げてくる。

彼は今、普段着ている白い病院着姿ではなく、まだハヤトであった時に着ていたバリアジャケットを、その身に纏っている。ただし、ソレは黒一色で染め上げられ、背中に踊っていた文字も無くなっているのだが。

「ふざけるな！　反逆者のお前達に降伏などするものか！！」

アインの言葉に対し、トーレが激昂する。

彼女の言葉は、ナンバーズ達全員の思い。生みの親であり、絶対的な忠誠を誓うべきスカリエッティに反逆することなど、許されることではない。

それなのに、クアットロはその許されざる事をした。

同じナンバーズとして造られた姉妹として、それを許せる筈が無い。そして、そんなクアットロの手駒となっている最近増えた同じナンバーズであるアインの事も。

だからこそ、トーレは息を乱しながらも2人を怒鳴りつけた。

しかし、アインはさして気圧された風も無く、ただ残念そうに眉尻を下げただけ。

「そうですか……残念です」

「アインちゃ～ん。そろそろＩＳと固有武装の実戦試験もやっておきなさいなぁ。

トーレお姉様達なら、丁度いい『実験台』になるでしょうしねぇ」

そんなアインに向けて、彼から少し離れた後ろに立っていたクアットロが声をかけた。

「――命令、認識」

にこやかに笑うクアットロのその言葉に、アインの目がより一層無機質な色に染まっていく。

それと反比例するように、金色に輝く左目は、その煌きをより増していった。

「……っ！」

対して、相対しているトーレ達は、彼女の言葉を聞いて初めて気付いたとばかりに息を呑んだ。

ＩＳと固有武装を使っていない……それは、まだアインが本気の一端も見せていないということ。その状態でさえ、その両方を使っていた自分達はまるで歯が立っていない。

それを今からが彼が使うという、その意味は――。

そこまでトーレが考えた時、右手を前に突き出す形で差し出したアインが、小さな声で呟いた。

「固有武装“ライト・トゥ・クリエイト”……起動」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ４５話　『聖王／造反　２』

小さな呟きと共に、アインの右手の先に赤い光が集まっていく。集まった光は集束していき、ひとつの形を作り出してから中空へと霧散していった。霧散した光が造りだした、アインの右手に握られていた“ソレ”は――。

「【レイジングハート・イミテーション】生成終了」

なのはが１０年という月日の間使い続けたデバイス、レイジングハート。

だが、今アインが自分の右手に握っているのは、１０年間という年月をなのはと共に戦い続けた、白と金色を基調としたモノでは無い。

アインの右手に握られたレイジングハートはどす黒く染め上げら

れ、唯一デバイスコアである宝玉だけがギラギラと血の様な赤色を放つ、その名前の示す通り明らかな“偽物”だ。

「続けて、ＩＳ“ミラー”起動」

偽物のレイジングハートを握り締め、冷たい視線でトーレ達を見据えながら続けてアインが呟く。

「――モデル【エース・オブ・エース】」

その瞬間、彼の足元に桃色の魔法陣が展開された。

魔法陣から煌く桃色の光は、まさにエース・オブ・エースと呼ばれた『高町なのは』と同じモノ。

魔力光は個人特有のものであり、本来ならば魔力光が変わるという事はあり得ない。しかし、現実としてトーレの目の前で、アインは桃色の魔力光を放っているのだ。

「――つまりコレが、タイプアイン・ファーストのＩＳ【ミラー】。その能力……という訳かい？」

「その通りですよぉ、ドクター。

魔法なんて、所詮は科学の延長線上の存在。ちょっと体外に出るまでのプロセスの計算式を変えてあげれば、魔力光なんていくらでも変えられますもの」

アインを眺めながら感心したように声を漏らすスカリエッティに、クアットロが「大正解」と手を叩いてカラカラと笑いながら答える。

そしてひとしきり笑った後、指を鳴らしてトーレ達を指差して声を出す。

まるで、モルモットを処分するかのように。

「さあ、アインちゃん。殺さないように、ちゃ～んと……手加減してあげるのよぉ？」

「はい。了解しました、クアットロ姉様」

クアットロの言葉に頷いて、アインは黒いレイジングハートを構えた。

トーレ達も、先手必勝だとばかりに腰を落とし、それぞれが自分の固有武装を構え、ＩＳを起動する。

けれど――４人を包む悪寒は、全く止まらない。むしろ、その寒さを刻一刻と増していく。まるで、蛇がじわじわと獲物を嬲り殺しにするかのように。

「ＩＳ【ミラー】、固有武装【ライト・トゥ・クリエイト】の正常稼動を確認。

続けてこのまま実戦での試用試験を開始します」

そんなトーレ達４人に向けて、アインは無機質な声で言葉を続ける。

「――実験対象指定。トーレ姉様、チンク姉様、オットー姉様、ウェンディ姉様。
対象破壊リミット設定……５７．６％まで……設定完了。
――――――実戦試験、開始」

放たれた言葉は、まるで死刑宣告のような冷淡な響きを持って、トーレ達の耳へと届いた。

ｓｉｄｅ：―　了

ｓｉｄｅ：トーレ

「ＩＳ、【ライドインパルス】！！」

先手必勝。
アインのＩＳと固有武装には驚いたが、だがそれとて何かさせる前に潰せば意味が無い。
私はそう判断し、自分のＩＳ【ライドインパルス】を起動。そのまま、今の私に出せる最高速度でアインへと駆け出した。先程の戦闘の際、奴は私の全速についてこれる様子は無かった。しかし奴の動きも相当に速く、私が奴を攻撃するよりも先にノーヴェやセッテといった、前衛を担う妹達が一蹴されてしまったのだが。
だが、この一撃で――叩き潰す！
「終わりだっっっっ！！！」
速度の全てを破壊力と変え、握りこんだ右拳をアインの顔目掛けて突き出す。
奴は私の速度に反応出来ていない。
捉えた――！
「ざぁんねん無念。また来週～♪」
「――なっ！？」
だが、私の拳は虚しく空を切る。
今までそこにあったアインの姿は、私の拳に貫かれると、まるで

霞の様に霧散していった。
原因を考え、即座にソレに思い至った私は、“奴”を睨んで思わず声を荒げた。

「クアットロ!!　この卑怯者め!!」

奴のＩＳ【シルバーカーテン】……幻術を基礎として、あらゆる生物の視界、機械のセンサー類を惑わすクアットロ特有のソレが造りだした幻。恐らく、今アインの姿が消えたのはそのせいだ。
アイン１人に戦わせていると思わせておいて、今更の様にこんなくだらない手を使うとは!!

「あらぁん？　戦ってる最中に余所見ですかぁ……余裕ですねぇ、トーレお姉様？」

「！」

しまった――と。
アインを探さずに、クアットロの方へと向いてしまっていた視線を戻し、慌てて周囲を窺う。
そして。

「……っっ!!!!!」

アインは居た。
私の背後で、漆黒のデバイスの切っ先を私へと向けた格好で。
その切っ先に、桃色の魔力を集束させながら。

「スターライトブレイカー・イミテーション。集束率１００％突破。発――「ランブルデトネイター！」「エリアルショット！」「レイストーム」――っ！」

しかしそれが発射されようとした瞬間、チンク、ウェンディ、オットーの攻撃が奴へと迫る。
アインは集束されていた桃色の光を掻き消し、だが全く慌てる様子もなく、自分の周りを１周させるように手に持ったデバイスを振った。

《Ｓｔａｒ Ｌｉｇｈｔ Ｂｒｅａｋｅｒ ｉｍｉｔａｔｉｏｎ. Ｃｉｒｃｌｅ ｓｈｉｆｔ.》

「発射」

次の瞬間、奴の周囲にリングが浮かび上がり……そこから円が広がるように桃色の光が溢れた。

「……くぅっ！？」

私はそれを、直感だけを頼りにギリギリで避ける。
あんなものをマトモに喰らえば、非殺傷設定――かどうかもわからんが――だとしても唯では済まん。
全力で床を蹴り、天井に張り付くようにして桃色の光を避け、上からその桃色の光が傘の様に広がるのを見た。溢れるように放たれた砲撃は、チンク、ウェンディ、オットーの攻撃を一瞬で掻き消し、そのまま妹達を飲み込んだ。

「くぅぅぅうっ！？」

チンクとオットーは避ける事も出来ず、唯一ウェンディだけはライディングボードでその砲撃を防げた。
しかし、それでも砲撃の勢いを止めきれずに、ウェンディは防御したライディングボードごと吹き飛ばされ、壁へと叩きつけられた。
光が消えた後に立っていることが出来たのは、私1人だけ。
チンクとオットーは砲撃のダメージで倒れ、ウェンディは意識さえあるものの、叩きつけられたダメージが抜け切っておらず、立つことすらできない。戦うなど、到底不可能だろう。

「化物め……」

知らず、私の口から苦々しい言葉が漏れた。

集束砲撃魔法をあんな風に撃つなど、聞いたことが無い。集束し終えるまでの時間も異常に短く、そのくせ威力はオットーのレイストームやウェンディのエリアルキャノン以上……あり得ん。

あり得んが、実際目の前で見せられてしまっては否定しようも無い。

「トーレ姉様。まだ、諦めてはいただけませんか？」

アインは悠然と私の前に立ち、こちらを憂いを帯びた目で見ながら降伏を促してくる。こいつは、クアットロとは違って私達に対する仲間意識などがあるのだろう。

だが……だからと言って、私が裏切り者に降伏する訳が無い。

「当たり前だ！！　私1人になろうと、貴様とクアットロを倒すっっ！！」

「……ですが、既に情勢は決しました。トーレ姉様御一人では、私に勝つ確率は0です。

私は、姉様とこれ以上戦いたくはありません」

「ならば、貴様が私に倒されればいい。そうすれば、全てが片付く」

「……それは、出来ません」

その返答に、私は小さく舌打ちする。

奴の言うとおり、彼我の戦力差は……悔しいが、明らかに私が劣

っている。
いくら私がライドインパルスで高機動戦闘を行おうと、クアットロのシルバーカーテンがある限り、アインを捉えられるとは思えない。恐らくは先ほどの攻防の二の舞になるだろう。
逆にクアットロを先に狙ったとしても、シルバーカーテンを破れない限り、奴を倒すのは不可能だ。

「トーレ姉様――「だァめよぉ、アインちゃん」――クアットロ姉様？」

私に何かを言おうとしたアインを遮って、クアットロが下卑た笑みで私を見ながら告げる。

「トーレお姉様は武闘派ですものぉ。言う事を聞かせたかったら、徹底的に、心が折れるまで叩き潰して差し上げなきゃだめよぉ？それに、トーレお姉様は油断ならないからぁ……そうね。
両手両脚をへし折ってあげなさいな？」

「ですが、クアットロ姉様。それでは損耗率が設定された破壊リミットを越えてしまいます」

「アインちゃん？　【命令】よ……やりなさい」

冷徹な声でクアットロが宣言すると、アインの様子が変わった。
先程まで見せていた、私に対する遠慮や配慮といった感情が完全に消え、能面のような無表情になる。

まるで、一切の感情が消えてしまったかのように。

「――命令、認識。ＩＳ“ミラー”……モデル【女帝】。固有武装“ライト・トゥ・クリエイト”。生成……【レオンハルト・イミテーション】」

その表情と同じく、抑揚の無い声でアインが呟けば、奴の足元に真紅の魔法陣が浮かび上がり、手に持っていたエースオブエースのデバイスは消え、代わりに奴の身体を黒い軍服が覆った。

恐らくアレが【レオンハルト・イミテーション】という武装なのだろう。

「トーレお姉様ぁ？」

「……なんだ、クアットロ」

アインを挟んだクアットロが、癇に障る高い声で私を呼ぶ。

それに合わせる様に、アインは私に向かってこようと腰を沈め、私も動けるように体勢を整える。

「せいぜい、いいデータを取らせてくださいねぇ♪」

「断る！！！」

奴の下卑た声を遮るように吼えて、私はアインへと駆け出した。

ｓｉｄｅ：トーレ　了

・　・　・　・　・

ｓｉｄｅ：―

「「……」」

スカリエッティとウーノは、黙したままその光景を見た。
２人の目の前には、全滅したナンバーズ達の姿がある。特に損傷が酷いのはトーレで、両手両脚がおかしな方向に曲がっていて、呼吸もどこか弱々しい。
他のナンバーズ達も、程度の差こそあれど誰もが動けない程のダメージを受けている。
……勝敗は、決したのだ。

「これほどとはね。いやはや、恐れ入ったよクアットロ」

感嘆の声を漏らし、拍手さえ送りながらスカリエッティが声を出す。

彼からしても、この光景は予想外だった。

ナンバーズはスカリエッティが手塩にかけて造った、最高品質とも言える戦闘機人。

だというのに、クアットロが造ったタイプアイン・ファーストは、単騎戦力――まぁ、一部クアットロが手を出した部分はあったが――で、12体のうち戦闘に特化させた10体全てを退けて見せた。

それが意味するのは、戦闘機人生成……という部分においてクアットロがスカリエッティに匹敵、もしくは凌駕するだけの能力を持っているということだ。

それだけが全てでは無いとは言え、それは驚嘆に値する事実。

だからこそ、スカリエッティは笑みさえ浮かべてクアットロを賞賛した。

「ありがとうございますぅ、ドクター。それで、もう降参ですよねぇ？」

「……そうだね。こちらの戦力が全滅した以上、抗う術は無い」

「ドクター！？」

スカリエッティがあっさりと敗北を認めた事に、ウーノが驚きの声を上げた。

しかし、そんなウーノに対してスカリエッティは意外そうな顔を向ける。

「どうしたんだいウーノ？　私は自分の持てる最高傑作であるナンバーズを持って、クアットロの作品に勝てなかった。つまり、私はもう不要という訳だ。ならば、潔く負けを認めるべきだろう？」

「ですが……っ！　まだ、まだ聖王が！！」

「器はまだ移植がすんだばかり、とてもじゃないが戦うことなんて出来ないよ。
　クアットロも、だからこそこのタイミングでこんな事をしたのだろうしね？」

「大正解ですよドクター。流石に陛下まで一緒になったら、いくらアインちゃんでもちょ～っと厳しいもので」

「だ、そうだ。それでクアットロ、私達をどうするつもりかな？」

　クアットロの返答に肩を竦め、スカリエッティが尋ねる。
　普通に考えれば、どこかに幽閉……ないし動けない状態にするのが妥当なところだろう。

「ドクター達にはぁ、ここで餌になってもらいますぅ」

「……餌？」

「はぁい♪　管理局の連中を釣る為の、生餌ってヤツですねぇ」

だが、クアットロが提案したのはそうではなく、スカリエッティ達を囮に使うというもの。
スカリエッティはその答えに一度は首を傾げたものの、直ぐに納得がいったのか頷いて「なる程」と呟いた。

「いくらアインとはいえ、管理局のエース達を一度に相手取るのは難しい。
だから、私を餌として向こうの戦力を分散させる……という訳だね？」

「さっすがドクター。物分りが良くて助かりますわぁ」

「いいだろう。敗者である私には、元より拒否権などない。このままここで、クアットロの言うとおり生餌の役をしようじゃないか」

「ドクター！！」

ウーノがスカリエッティを諫めようとするが、スカリエッティは聞く耳を持たない。
結局のところ、彼は自分の実験成果を見ることが出来れば、後はどうでもいいのだ。それを実行するのが誰であれ、結果が自分の目で見れるのなら問題ない。むしろ、クアットロの方が自分より確実に実験結果を出せるというのであれば、そちらに任せるべきだと彼は考えているのだ。

「……くっ」

既にスカリエッティが納得してしまったのでは、いくらウーノが否定しても意味が無い。

それを悟ったウーノは、自分の危惧していた事が現実になってしまった事に歯噛みする。だが、同時に頭の片隅で「騎士ゼストを引き込んでおいてよかった」とも考えた。

だが――

「ああ、そういえばウーノお姉様。ルーテシアお嬢様を逃がしたり、騎士ゼストと何やら交渉なさったりしていたみたいですねぇ？」

「っ！？」

――クアットロは、それすら見透かしていると笑いながら、口を開く。

「貴女、何でそれを――！」

「うふん♪　自分を怪しんでいる相手をチェックしておく、これは基本なんですよぉ？

でも、怒ってなんかいませんからご安心を。むしろ、感謝してるくらいですぅ」

「……感、謝？」

意味が分からない、とばかりにウーノは眉を顰めた。
クアットロがどこまで知っているのか分からないが、少なくともウーノはクアットロの利になりそうな事はしていない筈だからだ。

「ルーテシアお嬢様を逃がしてくれた事ですよぉ。私、どうやってお嬢様を単独行動させようか、ず～っと悩んでましたのでぇ。ウーノお姉様が逃がしてくれたことは、ほぉんとに感謝してるんですぅ」

「……どういう、ことなの？」

「んふふ～。お姉様達をノしちゃった訳ですからぁ、管理局に喧嘩を売る時、どうしても手が足りませんよねぇ？
ガジェットちゃん達はフル稼働しますけどぉ。やっぱり大きい力が無いと……ねぇ？」

クアットロの解説を聞いても、未だウーノにはピンと来ない。
確かに、作戦では来るべき管理局との戦いの序盤は、ナンバーズによる強襲から始まる筈だった。
それとルーテシアとが、どう関係していると言うのか。答えは、クアットロが次に語る言葉でハッキリする。

「ルーテシアお嬢様に、その役目をやって貰うんですよ」

「ど、どうやってそんな事を！　もうお嬢様とは、連絡も取れない状態なのよ！？」

「あらあらぁ？　ウーノお姉様、お忘れですかぁ？

ルーテシアお嬢様にはぁ……ドクターと私お手製の、洗脳処理を施してるじゃないですか♪」

「！！」

その言葉に、ウーノは雷に打たれたような衝撃を感じた。

完全に失念していたが、確かにルーテシアには洗脳処理が施されている。それも、発動すれば周りの全てを敵と認識し、暴走状態にするという厄介すぎるものが。

もしルーテシアが管理局に保護、もしくは逮捕されていた場合にそれを発動すれば、ナンバーズによる強襲以上の混乱を引き起こす事が出来るだろう。なにせ、ルーテシアが召喚できるのは、ガリュー、インゼクト、地雷王、そして――巨大な龍である白天王もいる。

それだけの戦力が暴れたのなら、間違いなく凄まじい被害を出すことが出来る筈だ。

「……くっ」

自分の浅慮に、ウーノは歯噛みした。

スカリエッティの為と思ってやった事が、結局はクアットロの利になっていた。それどころか、あれだけ警戒していた筈のクアットロにいいように利用されてしまったのだ。悔しくない筈が無い。

「あははははっ！　騎士ゼストとどんな約束をしたのかわかりませんけどぉ、ぜぇんぶ無駄でしたねぇ！！」

「……？　私と騎士ゼストが、どんな契約をしたのかは知らないの？」

「え？　えぇ、知りませんよぉ。
でも、あんな死に損ないが1人で動いたところでどうってことないでしょう？　アインちゃんに勝てる筈もないですしねぇ？　あははははっ！！」

「……」

高笑いするクアットロを見て、ウーノはそこに一筋の光を見出した。
ルーテシアを逃がした事はバレていたようだが、ゼストに対してアインの洗脳アンチプログラムを渡した事はバレていない。もし、アインを何とかすることさえ出来れば……クアットロを守るべき壁は無くなるのだ。
既に戦況が変わってしまった以上、自分たちは囮として管理局に逮捕されるだろう。
だが――クアットロの1人勝ちにだけはさせてはいけない。彼女の思惑は、スカリエッティのソレとは大きく違うものなのだから。

「さて、と。アインちゃん？　ドクターと他のナンバーズちゃん達を適当な部屋に押し込んでおいて頂戴。
あぁそうそう、前衛系のセッテちゃん、ノーヴェちゃん、ディードちゃん、あと厄介なＩＳ持ちのセインちゃんは、両手足を砕いて動けないようにしておきなさい。【命令】よ、いいわね？」

「――命令、認識しました。クアットロ姉様」

「よろしい♪　じゃあ私は、聖王陛下を例の場所に移して置くからぁ、ウーノお姉様達の処理が終わったら、アインちゃんもおいでなさいねぇ？」

最後にアインにそう命令を下すと、クアットロは上機嫌で台の上に寝かされていたヴィヴィオを抱え、部屋を後にした。残されたアインは、ゆっくりとスカリエッティとウーノに近づき、２人をバインドで拘束した。

その表情には、やはり感情らしき感情は読み取れない。

アインの顔にあるのは、ただひたすらに機械的な冷たい印象だけだった。

ｓｉｄｅ：―　了

if45話　『聖王／造反　2』（後書き）

クアットロマジ詰め甘い。
どうも、ラモンです。

久しぶりのバトル回。どうだったでしょうか？
私は疲れました（笑）
何か久しぶりなせいか、どんな感じで書いてたか感触忘れてました。
まぁ、そんなこんなでアインのＩＳと固有武装初登場。
大体どんな感じかは分かっていただけたでしょうか？　戦闘シーンをキンクリしまくったので、微妙に分かりづらいかも知れませんが……一応最終決戦では使いまくる予定なので、分かり辛かった読者さんは、そこまで我慢してくださいませ。

そしてクアットロの詰めの甘さが露呈。
こうやって悪は負けるんですよねぇ、大概の場合は。
さぁ、皆で言いましょう！

「クアットロざまぁｗｗｗｗ」

あと、ルーテシアの洗脳処理フラグも回収してみました。
そう、すべてはクアットロの計算だったんだよ！

ΩΩΩ＜な、なんだってー！？

……辻褄あわせをしたら、こんな感じになりました。
お陰でルールーを六課に合流させ辛くなってしまった……くそぅ、
何故前々回を書く時に気づかなかったし！
これでルールーもやっぱり最終決戦で戦線参加することになりまし

たねぇ。
うーん……対戦相手どうしよう。

さて、次回は今度こそスバルとマッハキャリバーの会話ｗｉｔｈブレイブハート辺りを書いて、いい加減最終決戦へと話を進めたいと思います。
大体のフラグ立て＆回収、能力ネタバラシなどはやったので、下準備は殆ど整いましたしね。

それではまた、次の話で。

ｉｆ４６話　『相棒』（前書き）

※今回はちょっと短めです。

if46話　『相棒』

side：―

時空管理局本局、メンテナンスルーム。そこに、スバルとマリーの姿があった。

スバルはメンテナンスルームにある専用のベッドに寝かされ、マリーに全身スキャンを受けている。スバルは本日付で退院となったのだが、一応最終チェックということで、こうしてマリーが全身スキャンを行っているという訳だ。

彼女は戦闘機人……普通の人間とは身体の構造が異なる。

だからこそ、スバルの身体に異常が残っていないかどうかをチェックしているのだ。

「うん。神経系は完全回復してるわね」

モニタに羅列されたスキャン結果を眺め、マリーは安心した声で呟く。

最も損傷の激しかった左腕も、結果を見る限りでは以前と全く同じ状態にまで回復している。

彼女の声を聞いて、スバルはベッドに仰向けになったまま自分の左腕を上げて何度か握ったり、そのまま少し動かしたりして状態を把握した。

「もう全力で動かしても、痛みは無い筈よ」

「はい」

自分で動かしてみて痛みがない事を確認したスバルは、マリーの言葉に頷いてベッドから降りる。

そしてその場で腰を捻り、短く息を吐きながら全力で拳を突き出す。

空気を切る鋭い音と共に『パァンッ！』と小気味良い炸裂音が響いた。それは彼女の拳が空気の壁を叩いた音。痛みが残っていたり、全力で動かせなければ不可能な芸当だ。

これが可能になったということは、マリーの言うとおり完全に左腕が回復したという証。

「……よし。ありがとうございます、マリーさん！」

前と同じように動く左手を握りしめて、スバルは嬉しそうな声でマリーに礼を言った。

地上本部襲撃からまだ5日と少ししか経っていない。そんな短い期間でスバルがここまで復調出来たのは、マリーの尽力があったからに他ならない。

勿論、病院での治療も大きな意味を持つが、戦闘機人にとってメンテナンスはそれ以上に重要なのだ。

人工筋肉や神経ケーブルの再接続、その他諸々の修理が終わらなければ、いくら身体が回復したとしても満足に動くことは出来ない。だからこそ、マリーは寝食の時間を削ってまでスバルの回復に努めた。

それを知っているから、スバルはまず彼女に頭を下げる。

「気にしないで。私も好きでやってることだし。後は……マッハキャリバーだね」

マリーは自分の後ろ――デバイスメンテナンス用のポッドに浮かぶマッハキャリバーを見つめて呟く。

そこに浮かぶ青い宝石にはまだ細かな罅が入っていて、ポッドの隣に開かれたままのモニタには修理中を示す文字が羅列されている。

「……はい」

彼女の言葉に、スバルは俯いて小さく返答した。

スバルの居る場所からは、マッハキャリバーの姿は見えない。しかし、マッハキャリバーがどういう状態なのかは、誰よりもスバルが良く知っている。何故なら、マッハキャリバーが全損した原因は――敵の攻撃よりも、むしろスバルが使ったＩＳ“振動破砕”が大きなウェイトを占めるからだ。

振動破砕は、その特製上使用された側はもちろんの事、使用した側への反動も凄まじい。

だからこそ使用する時には威力の調整や反動の計算など、様々なことをしなければいけないのだが、あの時……地上本部地下でガジェットを相手にした時、スバルはそんな事を欠片も気にせずに使い続けた。

その結果が、マッハキャリバーの全損だ。

（……ちゃんと、謝らなきゃ）

自分に言い聞かせるようにそう考えてから息を吐き、スバルはマッハキャリバーの元へと向かう為に、ベッドのあるスキャンルームの扉を開け、その先にあるマリーの居る場所へと続く階段へと向かった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ４６話　『相棒』

「ごめんね、マッハキャリバー。私の事……怒ってるよね？」

マッハキャリバーの浮かぶポッドの前に立ち、スバルはそう問いかけた。

ちなみにだが。マリーはスバルがこの部屋に来るのと入れ替えになるように、呼び出しを受けて部屋から出て行っている。なので、今この場にはスバルしか居ない。

《「怒る」という感情が、私にはおそらく存在しません。心配は不要です》

スバルの言葉に、マッハキャリバーは冷静な声で返す。
その返答はスバルの言葉に対してやや的外れなものであったが、それでもスバルには相棒が自分の事を気遣ってそう言ってくれたのだと分かった。

「……ううん」

けれど、スバルは俯いて首を振った。
スバルはマッハキャリバーが怒ることを心配していた訳ではない。むしろ、怒って欲しかった。マッハキャリバーがこんな状態になったのは、間違いなく自分の責任だから。

「マッハキャリバーはＡＩだけど、ちゃんと心があるって……一緒に走る相棒だって、言ったのに……」

そう呟くスバルの脳裏に浮かぶのは、初めてマッハキャリバーと出動した時のこと。
あの時からずっと、自分はマッハキャリバーを相棒だと思ってきた筈だった。

「あたし、あの時……マッハキャリバーの事、全然考えてなかった。自分勝手に、道具扱いして……」

けれど地下でガジェットと戦った時、そんな事などまるで考えていなかった。戦っている最中にスバルが考えていたのは、速く走る事と、少しでも強い攻撃を繰り出すことだけ。マッハキャリバーへの負担など、毛ほども気にしていなかった。まるで消耗品か何かのように。

「こんなに、傷つけちゃった……」

後悔と謝罪を声に乗せて、ポッドに浮かぶ相棒を見る。

自分で言った事なのに、それを忘れてしまった自分への自責で、スバルの表情は暗くなる。デバイスを使う人間として、最低な事をしてしまった……と。

《　いいえ。問題があったのは私の方です　》

しかし、マッハキャリバーはそんな彼女の言葉をキッパリと、いっそ清々しい程に否定した。

その声にスバルは俯いていた顔を上げ、目の前に浮かぶ罅の入ったマッハキャリバーを驚いた表情で見る。

スバルは自責の念で一杯だった。自分がどれだけ最低な事をしてしまった、という自覚があったからこそ彼女はこうしてここに来た。なのに、マッハキャリバーはそんな彼女の言葉を真っ向から否定しただけでなく、問題があったのは自分だと言う。スバルが戸惑うのも、無理からぬ事だろう。

《　貴女の全力に応えきれなかった、私の力不足です　》

「マッハキャリバー……」

マッハキャリバーは抑揚の無い、しかしそこに確かな意志を感じさせる声で告げる。

デバイスであるマッハキャリバーからすれば、主人をフォローし、その力を遺憾なく発揮させる為に造られた自分が主人を全力を受け止められなかった事が問題なのであり、全力を出したスバルに否など無いのだ。むしろ、スバルの全力を受け止め切れなかったせいで、スバルがハヤトに届かなかったという事実があるのだから、責められて然るべきだと考えていた。

「――」

スバルが、そんなマッハキャリバーに何かを言おうとした時。空気の抜けるような音と共に、デバイスメンテナンスルームの扉が開く。

「あ、ごめんね。大事なお話し中？」

「えと、いえ……」

《　反省会です　》

向かい合うスバルとマッハキャリバーを見てそう問いかけたマリーに、スバルとマッハキャリバーは揃って問題ないと答えを返した。それからスバルは、マリーの隣に立っていたシャーリーに気づき、少し驚いた顔で彼女に問いかける。

「シャーリーさん、もういいんですか？」

スバルの記憶が正しければ、シャーリーも軽くない怪我をして入院していた筈だった。

元々身体が頑丈でその上鍛えているスバルと違い、シャーリーの身体は一般女性とほぼ変わりない。勿論彼女もある程度の訓練は受けているだろうが、それはあくまで基本的なものであり、前線部隊のスバルとの鍛え方には大きな差がある。

それこそ命に関わるという程ではないだろうが、あまり無理をしていいとも思えない。しかしシャーリーは彼女の問いに対し、メンテナンス用のモニタの前へと移動しながら、ちょっとだけ苦笑して答えた。

「六課が大変な時期だし、デバイス達の面倒も見なきゃだし……寝てられないよ」

元々デバイスマイスターと呼ばれる職種に就いている人間は、とても少ない。

更にシャーリーはロングアーチでの業務も兼任している。多少の無理をしてでも動かなければ、とシャーリーは思ったのだろう。事

実、彼女が復帰すれば現状の六課にとっては大きなプラス要素となる。

「……はい」

それがわかっているから、スバルはそれ以上何も言わずに頷いた。
スバルが頷くのを見て微笑んだ後、シャーリーは表情を正してモニタにマッハキャリバーの設計図を映し出してスバルに向かって話しかける。

「ねえ、スバル」

「？」

「マッハキャリバーね。修理ついでにって、強化プランを自分で考えちゃったのよ」

「え……？」

突然言われた事に、スバルはマッハキャリバーが浮かぶポッドの前から、シャーリーの居るモニタの前へと移動して彼女の手元で開いているモニタを覗き込んだ。そこに映し出されているのは、マッハキャリバーが愚直なまでに、ただひたすらに、主の全力を受け止めようと考え出した強化プラン。

「アウトフレームの強化とか、装甲強度のアップとか」

「かなり重くなるし、扱い辛くなるかもだから、スバルに聞かないと……って言ったんだけど」

シャーリーの言葉を継いで、マリーが続ける。

２人の言葉を聞きながら、スバルはモニタに映った強化プランに目を通していく。

「魔力消費１．４倍、本体重量２．５倍……やれます！　この程度なら、確実に！」

目を通し終わってから、スバルは表情を輝かせて２人を振り返った。

自分の勝手で傷つけてしまった相棒が、自分の為にこれだけの強化プランを出してくれた。それが、とても嬉しかったから。

「それじゃあ、この強化プランは採用だね。よかったね、マッハキャリバー」

≪　Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．　≫

「じゃあ、私とシャーリーはパーツ受け取ってくるから」

「もう暫く待っててね、スバル」

嬉しそうにマッハキャリバーの浮かぶポッドを見ているスバルにそう声をかけ、シャーリーとマリーの2人はモニタを閉じて、入ってきた扉の方へと向かう。
スバルはそんな2人に対して、「ありがとうございます！」と快活な返事をし深々と頭を下げる。
2人はスバルに軽く手を振ってから、扉を開けて部屋を出て行った。

「……」

下げていた頭を上げ、スバルはマッハキャリバーを振り返る。
自分の為に、ここまでしてくれた相棒を。

≪　もう一度、私にチャンスをください　≫

マッハキャリバーは罅割れた身体で、それでも確りと告げた。

≪　今度は必ず、貴女の全力を受け止めます。貴女が誰よりも、何よりも遠くまで、どこまでも走れるように。
今度こそ、貴女の手がハヤトさんに届くように　≫

それは、誓いにも似た神聖な言葉。
どこまでも自分を想ってくれる相棒のその言葉に、スバルは涙を

零して頷いた。

「今度は絶対、一緒に走ろう……マッハキャリバー」

◇◇◇◇◇

「……どうしよう、かな」

森の中で、ルーテシアは木の根元に腰掛けて溜息を吐いた。
ゼスト、アギトの2人と別れてからはや4日。
2人には「管理局に保護してもらう」と言ったものの、何故だか管理局に近寄ってはいけない気がして、こうしてずっと管理局地上本部に程近い場所をずっとウロウロしているのだ。

「何で、なんだろ」

自分でも何故管理局に近寄っていけないのかが分からず、小さく首を傾げて自分の隣にある大きめのポッドをそっと撫でた。けれど、その中に浮かぶ彼女の母は、勿論返事をしてはくれない。
早く母を何とかしたいという気持ちはあるのに、管理局に近づく

のはいけないと思う自分が居る。
その矛盾に、ルーテシアは不快そうに眉を顰めた。

『ルーテシアお嬢様ぁ～』

「っ！？」

そんな時、不意にルーテシアの目の前にモニタが開き、そこに映ったクアットロがニコニコと笑いながらルーテシアに向けて手を振っていた。

『探しましたよぉ。もぅ、どうされたんですかぁ？
いきなり私達のところから居なくなってしまうなんてぇ、心配しましたよぉ？』

「……え、と」

理由はわからないが、そのクアットロの笑みに言いようの無い恐怖を感じ、ルーテシアは言葉に詰まる。
表情には明確な恐怖が浮かんでいるが、クアットロはそんな事など気にせず、笑顔を顔に張り付かせたままで言葉を続けていく。

『お嬢様に万が一の事があってはマズイと思って、発信機をつけておいて正解でしたねぇ』

「……何か、用？」

メガーヌ入ったポッドを無意識的に背に庇い、尋ねる。

そんなルーテシアに対し、クアットロはクスクスと笑いを噛み殺し、目を細めて楽しそうに手元のキーボードを叩きながら彼女を見た。

『そうですよ、お嬢様ぁ。実はぁ、ルーテシアお嬢様に、ちょっとやって欲しいことがありまして♪』

「やって欲しい事？」

『ええ。3日後でいいんですけれどぉ、私がこれから指定する場所で、白天王……でしたっけ？アレを呼んで貰いたいんですぅ』

言いながら、ルーテシアの前に浮かぶモニタに地図が映し出される。

そこには赤い印が付けられており、恐らくそこが、ルーテシアに白天王を呼んで欲しい場所なのだろう。

だが――

「……嫌」

殆ど反射的に、ルーテシアはその申し出を断った。

理由は分からない。ただ、クアットロの言葉に従ってはいけないと……そんな気がしたのだ。

しかし、クアットロは「あららぁ？」とからかうような笑みを浮かべるだけ。そして、彼女の後ろ――メガーヌが浮かぶポッドを指差し、片眉を上げて囁く。

『お母様、助けたくないんですかぁ？』

「！？」

『お母様を助けるのに必要なレリックの１１番、つい先程私達が見つけましてぇ……もしお嬢様が手伝ってくださるのなら、３日後にお渡ししたいと思うんですけれどぉ？』

「……」

もちろん、クアットロの言葉は嘘だ。

レリックの１１番は見つけていないし、恐らく管理局が保管しているだろうとクアットロは思っている。

こうして交渉の真似事をしているのは、あくまでルーテシアを『自主的に』協力させる為だ。

彼女に施された洗脳処理は２つ、１つは『管理局に近づきたくない』と思わせるもので、もう１つは『コンシデレーション・コンソール』という自我を喪失させて破壊衝動を増すだけのモノで、命令に従わせるようなモノでは無い。

あくまで『自主的』という事にクアットロが拘ったのは、下手に脅迫染みた事をすれば、仮に３日後に指定の場所に向かう時、土壇

場で思い直してしまう可能性があったからだ。
だが、こうして彼女に『自分は母の為に動くのだ』という先入観を与えてしまえば、その可能性は限りなく0に近くなる。何せ、母を助ける手段――と、ルーテシアに思い込ませているだけなのだが――であるレリックは自分の手元にあると思わせている。もし逆らえば、永遠に母を助けることは出来ない。

ゼストとアギトという保護者が居ないこの状況で、長年の願いであった母を助けるという事を引き合いに出されてしまえば、まだ幼い子供であるルーテシアにまともな判断が出来る訳もない。

「……わかった。3日後に、そこで白天王を呼べばいいの？」

頷いたルーテシアに、クアットロは「かかった」と内心で哄笑した。
しかし、それを態度にはおくびにも出そうとせず、感動しましたとばかりに大げさな身振りで、芝居がかった台詞をクアットロは吐く。

『ええ。呼んでくれるだけでいいんですよぉ、後は私達で何とかしますからぁ』

「そうしたら、レリックの11番、くれるの？」

『もっちろぉん。私ぃ、嘘は吐かないってことで有名なんですよぉ？』

「……うん」

クアットロの事は、ルーテシアは正直信用していない。
けれど、今この状況では、ルーテシアにクアットロの言葉が真実かどうかを確かめる術は無い。
だから――ルーテシアは頷いた。

『それじゃあお嬢様。3日後、よろしくお願いしますねぇ？』

最後に念を押すようにそう言って、一方的に始まったクアットロからの通信は、同じく一方的に切れた。
モニタが消えた後、ルーテシアは自分の身体が極端に疲労していることに気付く。

「……はぁ」

ルーテシアは重い溜息を吐き、メガーヌの浮かぶポッドへと身体を預けた。
まるで、母親に助けを求めるように。けれど、ポッドの中に浮かぶメガーヌは、勿論彼女を助けてはくれない。

「……疲れちゃった、な」

最後に小さくそう呟いて、ルーテシアはポッドに身体を預けたまま小さな寝息を立て始めた。

一寸先も見えぬ程の夜闇の中で、メガーヌの浮かぶポッドだけが月明かりを反射し、ルーテシアを照らし続けている。それは、まるで母親が娘を守っているような……そんな優しさを持って。

ｓｉｄｅ：―　了

if４６話　『相棒』（後書き）

下準備はこれで大体終了、かなぁ……？
どうも、ラモンです。

一応、最終決戦前にやろうと思っていた事は、大体終わりました。
も、もうやってない事とかは無いよね？　最終決戦行って大丈夫だよね？
もう……ゴールしても、いいよね？

スバルとマッハキャリバーのやり取り、最初はもっと色々考えてたんですが、何だかちょっとグダグダになったので原作通りにしました。
ちょっとだけマッハキャリバーの台詞を改変したぐらいですね。あそこのやり取りは、何度見ても胸が熱くなります。

そして相変わらず安定の鬱陶しさを誇るクアットロ。
まぁ、もはや原作とはかけ離れたキャラになっちゃいましたが（汗）

さて。これでルーテシアの戦線参加、スバルとマッハキャリバーのやり取り、クアットロの造反といった、最終決戦の下準備は一応終わり……の筈です。
もし何かやり忘れがありましたら、感想などで指摘して下さい。
やっぱり万全の状態で最終決戦書きたいですからね。

そして、何事もなければ次回からはいよいよ最終決戦です。
ああ……ようやくだ。ようやく私が一番書きたかった場所が書ける！
うおおおお！　テンション上がってきたーーーっ！
まぁ、執筆速度には余り関係しないんですけどね（笑）

それではまた、次の話で。

if47話　『始まりの時』

side：―

「さて、と……」

楽しみで仕方ないという笑顔を浮かべ、クアットロが呟きを漏らした。

彼女の隣には、玉座に両手両脚を縛り付けられて座らされているヴィヴィオが居る。そして、その玉座を挟んだ向こう側に立つのは、灰色のバリアジャケットを着たアイン。

ヴィヴィオは気絶しているのか、目を瞑ったままピクリとも動かない。

アインも相変わらず無表情なまま、微動だにせず虚空をただ見つめている。

「準備は万全、あとはルーテシアお嬢様が配置についたら……いよいよお祭りの始まりねぇ」

妖艶な笑みを浮かべ、自分の周囲を囲むように表示されたモニタ全てを操作しながら、まるでその場で踊りだしそうな高揚感の中でクアットロは笑みを深くする。

「この船が……“聖王のゆりかご”が昇ってしまえば、もう誰も私

に逆らえない。
そうしたら邪魔なモノはぜぇ～んぶ壊して、私のこの手で新しい秩序を作り、新世界を作るのも悪くないかもしれないわねぇ……アインちゃんも、そう思わない？」

「私には、判断しかねます。クアットロ姉様」

「邪魔になりそうな人間や魔道士なんて、全部ぶっ殺してぇ……私の言う事を聞く人形だけの世界。
だぁれも私に逆らわないし、誰も彼もが私に跪く、私だけの美しい世界……」

アインに話しかけたものの、結局彼の言葉など聞いていないのだろう。
クアットロは倒錯的な笑みのまま、頬を紅潮させて自分の身体を抱きしめ、熱い吐息を漏らす。

「私の世界……私だけの、私の為だけの世界。
ああ……なぁんて素晴らしい世界なんでしょう……っ！」

恍惚とした顔で震える身体を抱きしめながら、クアットロが天を仰ぐ。
そんな彼女に対し、アインは何も答えない。
ただひたすらに、虚空を見つめて直立不動のままでいるだけだ。

「さぁて、と。それじゃそんな理想の世界を作る為にも、いらない

モノは手早くお掃除しないとねぇ」

自分に言い聞かせるように呟いて、自分の身体を抱いていた手を解く。

そして、玉座に座らされているヴィヴィオの頬を右手で撫でる。

その右手は、頬から首、鎖骨と徐々に下へと向かっていき、鎖骨と鎖骨の間……丁度心臓の上の辺りで止まった。

クアットロは顔に張り付かせた笑みを崩さずに、その場所で人差し指を円を描くように動かす。

触られたことに違和感を感じたのか、ヴィヴィオが目を瞑ったまま小さな声を出して身体を動かそうとする。しかし、クアットロは左手で彼女の身体を軽く押さえ、それを許さない。

「駄目ですよ、陛下ぁ。陛下には、私の思い通りに動く“お人形”になって貰わなきゃいけないんですからぁ」

楽しげに声を漏らすクアットロの右手、その人差し指に淡い光が灯る。

同時に、彼女の周りを囲むモニタの群れ全てに、同じ意味を表す文字が表示された。

薄緑の光を放つモニタに表示されたその文字は――

『『『『『コンシデレーション・コンソール。インストールスタ

ート』『『『『『

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ４７話　『始まりの時』

アインヘリアルという兵器がある。
地上の守護者とも呼ばれるレジアス＝ゲイズ中将が主体となり、その開発を進めてきた地上防衛用の巨大魔力攻撃兵器。魔力による対空砲撃を可能とする、地上を守る為だけに製造された砲撃兵器だ。
その危険性や禁止されている質量兵器に類するのではないかという議論が交わされ、未だ運用段階には至っていないものの、その開発は日夜続けられ現在は2号機までが完成、3号機が製造中であり、その3基ともがミッドチルダ全域を見渡せる高台の上に鎮座している。

その高台から2キロ程離れた森の中。
森の中でも一際太い木の根元に、ルーテシアは立っていた。

「……多分、ここ」

ルーテシアは手元に小さなモニタを開き、そこに映し出された地図に示されている赤い印と、自分の現在地を示す青い光点とが重なっているのを確認する。
後はここで白天王を呼べば、クアットロから頼まれていた事は全て終わり――なのだが。

「今すぐで、いいのかな？」

辺りを見回し、彼女は小さく首を傾げた。
クアットロから告げられていたのは場所のみで、いつ、どのタイミングで白天王を召喚すればいいのかについては、一切聞かされていなかったのだ。確認しようとも思ったのだが、クアットロに連絡を取るのは躊躇われ、結局この3日間連絡はしないままでいる。
適当にやってしまえばいいか、とも思う。
しかし白天王という“力”は適当に使うにしては余りにも強大で、凶悪だ。

それに何より、白天王の巨体は目立ちすぎる。
管理局からそれ程離れていない場所で、あの巨体を悪戯に召喚すればどういう展開になるかなど、いくら幼いルーテシアといえども簡単に想像がつく。

「やっぱり、聞かなきゃ駄目だよね……」

気乗りしないという顔のまま、ルーテシアはモニタを閉じてクアットロとの通信を開こうとした。

だが、彼女がそうするよりも先に閉じた筈のモニタが開き、そこに上機嫌な顔をしたクアットロが映る。

『お嬢様～。私の言ってた場所につきましたかぁ～？』

「！　……うん、着いた」

いきなり開いたモニタに驚き少しだけ身体を強張らせてから、クアットロの声に頷く。

彼女が頷くのを見て、モニタの向こうのクアットロは満面の笑みを浮かべ、両手を合わせて殊更に猫撫で声を上げてルーテシアに話しかけた。

『ありがとうございますぅ。それじゃあ……』

「ん？　おい君、そんなところで何をしているんだ？」

「っ！」

突然、ルーテシアの後ろから若い青年の声がした。

その声に息を呑んで、ルーテシアが慌てて背後を振り返る。そこにいたのは、武装局員の制服を着た２０代前半と思しき青年。おそらくは、アインヘリアルの警備を担当している局員だろう。

「迷子かい？　それなら俺が案内を……」

局員は、ゆっくりとだが確実にルーテシアの方へと近づいてくる。
今は木の影になっていて見えないだろうが、あと少し近づけばメガーヌの浮かんでいる生体ポッドが彼の視界に入ってしまうだろう。
そうなれば、局員である彼がどう思うか、そしてその後にどういう対応を取るか。
それを想像し、ルーテシアの顔に冷や汗が浮かぶ。
だが、彼女の後ろに開いたモニタに映るクアットロは、全く慌てた様子も無く彼女に語りかけた。

『あららら、お嬢様大変ですよぉ？　このままじゃ、あの局員にお母様が奪われちゃうかも？』

「……」

『そうしたら、お嬢様はまた1人ぼっちですねぇ？』

まるでルーテシアを追い込むように、クアットロは嗜虐的に口元を歪めて言葉を続ける。
彼女の言葉に、ルーテシアの顔色はどんどん悪くなり、もはや蒼白と言ってもいい程だ。

『騎士ゼストとアギト様にも見捨てられ、その上お母様とも離れ離れ……お嬢様ってば、可哀想ですねぇ』

「……嫌」

『そうでしょうとも。1人ぼっちは嫌ですよねぇ？　寂しいのは嫌ですよねぇ？」

「……寂しいのは、嫌」

クアットロの言葉は発せられる毎にルーテシアを追い詰めていく。ルーテシアは近づいてくる局員の青年を怯えた表情で見つめ、ガタガタと体を震わせる。そんな彼女を見つめるクアットロは、弓のように目を細め、決定的とも言える言葉を吐いた。

『お嬢様。そうならないようにそいつらぜぇんぶ……吹き飛ばしちゃいましょう？』

「……でも」

悪魔のような彼女の囁きに、ルーテシアは躊躇いを見せた。言うとおりにすれば、確かに最悪の事態は防げるだろう。けれど、そうしてしまったら、何かが決定的に崩れてしまうような気がして――それ故に、ルーテシアはすぐには頷けなかった。

『う～ん。何だか、お嬢様も色々と厄介になっちゃいましたねぇ……』

煮え切らない態度のルーテシアに、クアットロが眉を寄せる。

勿論、その間にも局員はどんどんと近寄ってきて、ルーテシアとの距離はもう2，3メートル程度しかない。

『それじゃあしょうがないですねぇ、お嬢様』

溜息を吐いて、クアットロが手を動かす。

叩くのは、彼女の周りに浮いたキーボードのような操作パネルの群れ。

以前にウーノが使っていたモノの、上位互換機だ。

『ドクターが仕込んだ『コンシデレーション・コンソール』で、お嬢様に誰の言う事にも耳を貸さない、ただ破壊するだけの素敵で無敵なハートをプレゼント♪』

「――っっ!?」

クアットロの指がコンソールを叩き終えた瞬間、ルーテシアが身体全体を強張らせ、目を見開いた。

その様子に、近づいていた局員も驚いて足を止める。

「ちょっ、おい、大丈夫か君?」

「あ……あぁ……」

局員の問いかけにも、ルーテシアは答えられない。
今彼女が感じているのは、自分の思考を何かが塗り潰していくような、そんな感覚だけ。
悶えるように声を漏らすルーテシアを眺めながら、クアットロは満足気な顔で彼女だけに聞こえる音量で囁く。

『さあ、お嬢様。この辺り一体を吹き飛ばして、『お母様と一緒に』なりましょう？』

「――――っ！！！！！」

その言葉が、引き金となった。

「な、なんだ！？」

ルーテシアの目前まで迫っていた青年の周囲に、紫色の魔法陣が幾つも浮かび上がる。
同時に、彼女の周りには紫色の小さな光――インゼクト達が無数に召喚され、耳障りな羽音を立て始め、彼女の真正面には漆黒の外皮を纏うガリューが立ちはだかった。

「ど、どうなって――ぐあっ！？」

慌てて辺りを見回した青年を、ノーモーションで駆け出したガリ

ユーが蹴り飛ばす。
青年は防御すらロクに出来ずに吹き飛ばされ、近くの木にぶつかって気絶した。だが、ルーテシアはそんな事には気付かない。ただゆらゆらと身体を揺らし、天を仰ぐように視線を上に向ける。
空を見上げた彼女の瞳は常の紫色ではなく、血で染め上げたような深紅をしていた。
そして――。

「あああああああああああああああああっっっっ！！！！！！」

絶叫と共に天空に巨大な魔法陣が煌いて、地響きを轟かせながらそこから一つの巨大な塊が吐き出された。同時に、周りに展開した中くらいの魔法陣からは、カブト虫に似た召喚蟲――地雷王が競りあがってくる。
天空から吐き出された巨大なモノは、地面にぶつかる直前に2対の紫色をした翅を広げ、大空へと舞い上がる。
全身を白い外皮で覆い、2本の角を荒々しく振り上げ、大空を舞うその巨人の名は――

「全部……全部吹き飛ばして！！　白天王！！！！！」

召喚主であるルーテシアの悲鳴にも似た命令。

それに答えるように、白天王は大空を震わせるような、巨大な咆哮を轟かせた。

◇◇◇◇◇

「うふふふ、まずは第1段階完了〜。あの管理局員、丁度いいところに通りかかってくれたわねぇ」

モニタ越しにルーテシアが白天王、地雷王、インゼクト、ガリューを召喚したのを確認し、クアットロは満足気に呟いた。今の彼女は、『コンシデレーション・コンソール』の支配下に置かれ、破壊衝動でのみ突き動く、いわば『破壊人形』とでも言うべき存在になった。

後は放っておけば、それだけであの辺り一帯を更地にするだろう。それは勿論、あそこに設置されているアインヘリアル諸共だ。

「まぁ、身体のリミッターも外されちゃいますから、ルーテシアお嬢様も無事じゃあ済まないでしょうけど……どうでもいいのよねぇ。実際、もうお嬢様の力なんて要らない訳ですし」

言いながら、クアットロは自分の後ろ――アインを振り返る。

そこには大量のガジェット群を前に、その両手にルーテシアと同じデザインをしたグローブを着けているアインが居る。勿論このグ

ローブはルーテシアが使うそれと同じ物を、アインの固有武装『ライト・トゥ・クリエイト』で作り出した偽物だ。

「準備いいかしら？　アインちゃん」

「いつでも」

「それじゃ、やりなさい」

「了解しました。――ＩＳ“ミラー”……モデル【召喚士】」

アインの左目が黄金に輝き、それと同時に彼の足元とガジェットひとつひとつの下に、紫色の魔法陣が浮かぶ。

それも勿論、ルーテシアが使う召喚用魔法陣と同じ物。

「座標固定完了、誤差２００メートル以内――転送、開始」

彼がそう言った瞬間、ガジェットの下に展開した魔法陣が輝き、何百と居たガジェット全てが消え去る。

その直後、クアットロの周りに浮かんでいたモニタから、いくつもの爆発音と悲鳴が上がり始めた。モニタに映っているのは、突然現れたガジェットに戸惑い逃げ惑う人々と、破壊される建物や乗用車。

局員の姿もあるにはあるが、逃げ惑う人々の避難誘導に手を取られていて、とてもガジェット迎撃にまで手が回っているようには見えない。人手不足というよりも、いきなりの奇襲に驚いているとい

う感じだ。

「あはははははっ♪　いくら警戒してたって、街中にいきなり戦力を放り込んじゃえば関係ないのよねぇ」

その光景に嘲笑混じりの笑い声を上げながら、クアットロはモニタを閉じる。

そしてアインの側へと駆け寄ると、彼を抱きしめて嬉しそうな声で彼を誉めながら頭を撫で回した。

「ほぉんとにアインちゃんは、私の言う事を良く聞いてくれるいい子ねぇ～。お姉さん、嬉しくて嬉しくて、思わずアインちゃんにご褒美あげたくなっちゃうわぁ♪」

「お役に立てたなら、それが何よりの褒美です。クアットロ姉様」

「いいからいいから。黙って受け取りなさい、アインちゃん」

そう言ってクアットロは半ば強引にアインの唇を奪う。

アインはそれにさしたる抵抗もせずに彼女の舌を受け入れて、クアットロにされるがまま、辺りに淫猥な水音を響かせた。

「ん……は……ぁっ」

数分そうした後、ゆっくりと息を吐きながらクアットロがアインから口を離す。

勿論この時にもアインへと洗脳用のプログラムを流し込む事は忘れない。今現在、クアットロの身を守る最大の盾はアインだ。万が一にも、洗脳が解けるような事があってはならないと理解しているクアットロならば、当然の行動と言えるだろう。

口付けを終えてアインから離れると、クアットロは通信用のモニタを開いた。

通信が繋がる先は、ナンバーズの中でただ1人別行動を取っている姉――ドゥーエ。クアットロが通信を繋ぐ為の認証ナンバーを押すと、モニタから小さなコール音が響く。

『――はい』

「あ、ドゥーエお姉様ぁ。聞こえますぅ？」

『ええ、聞こえるわ。どうやら、始まったみたいね？』

繋げた通信は直ぐに繋がり、金色のロングヘアーを指先でクルクルと弄ぶドゥーエの姿が映った。

どうやら物置のような場所にでも居るのか、後ろの方からは男性と思しき怒号がモニタ越しにも聞こえてくる。

「そうなんですよぉ。それで、お姉様の首尾はどうかと思いましてぇ」

『問題ないわ。最初に聞いていた通りに行動し、目的を果たす――

それよりもドクターやウーノは？
　貴女が連絡係をやるなんて珍しいと思うけれど』

「ああ、ドクターもウーノお姉様も、今ちょっと忙しいみたいなんですよぉ。なので、ちょっと暇の出来た私が、こうして連絡役をやってるって訳なんですぅ」

　いけしゃあしゃあと嘘を吐くクアットロだが、生憎とそれを否定する人間はここには居ない。
　ドゥーエ自身も彼女の嘘をさして疑いもせずに信じ、「そうなの」と短く答えるだけだった。

『なら、私は私でそろそろ行動に移るわ。終わった後は合流、でいいのかしらね？』

「そうですね。お待ちしてます、お姉様」

『ええ。それじゃあね』

　最後に短く挨拶を交わし、通信が終わる。
　だが、クアットロは最後に行った言葉とは裏腹に、今までドゥーエが映っていたモニタに向けて廃棄する道具へ向けるような視線を向けていた。

「残念ですけどぉ、当初の予定を果たした後は、お姉様ももう用済みなんですぅ。だ・か・ら、こっちに来たとたん……アインちゃん

に襤褸切れにされちゃうんですけどね。あはははは！」

「ドゥーエ姉様も、ですか？」

「そうよぉ。何か問題があるかしらぁ？」

「――いえ。申し訳ありません、クアットロ姉様」

「いいのよアインちゃん♪　私は今と～っても機嫌がいいから、特別に許してあ・げ・る」

ウィンクしながらアインに答え、クアットロは自分の周囲に浮かぶコンソールやモニタの全てを消した。

「さぁて、と」

彼女は小さく呟いてから軽く背伸びをし、それからロングコートを翻しながら振り返り、ガジェット格納庫の入り口を振り返る。

そして、背後に立つ形になったアインを肩越しに振り返り、彼に向かって声をかけた。

「次はいよいよ宣戦布告よぉ？　アインちゃん、ついてらっしゃいな」

「はい。わかりました、クアットロ姉様」

アインはクアットロの言葉に恭しく頭を下げ、歩き出した彼女の少し後ろをついていく。
歩きながら、クアットロは自分の歩みが常よりも早足になるのを抑えきれないでいた。もう少し、あと少しで彼女が理想とする『彼女だけの世界』への道が開かれるのだ。
それを目前に、誰が興奮せずにいられるだろう。

「ふふふ……あはははは……」

口から漏れる哄笑を隠そうともせず、クアットロは歩き続ける。
笑いは段々と大きくなり、ついには通路中に響き渡る程に大きな声となった。

「あはははははっっっ！！　さぁさぁ、それじゃあ次はいよいよメインイベント！！
いったい、あの子達はどんな絶望の表情を見せてくれるのかしらぁ！？
あははっ！　あはははははっ！！　あっはははははははははっっっっ！！！！！」

狂ったように笑うクアットロ。
その後ろを無言のままでついていくアイン。

２人が目指すのは玉座の間。

――ヴィヴィオが縛られ、眠っている場所。

side：―　了

ｉｆ４７話　『始まりの時』（後書き）

クアットロ絶好調（悪い意味で）の巻。
どうも、ラモンです。

いよいよ始まりました決戦編。
まずは悪い意味で絶好調なクアットロと、アインヘリアル強襲導入部。
個人的には、いい感じに読者の皆様のボルテージを上げられたと思います。うん、私自身クアットロ早くボコボコにしたくて仕方ない。
でも、アニメ見てて思ったんですが、何でスカっちは街中にガジェット転送とかしなかったんでしょうかね？　そうした方が、町の人の避難誘導とかに人員割かなきゃいけなくなって、管理局的にも凄く困ったと思うんですが……謎です。

そして今回を一言に纏めると……。
クアットロテラウザス。まさにこの一言に尽きる！　私が思いつく限りで最大限にウザく書きました。
もうアニメとは別キャラになるとか気にしない！
ラスボスクアットロは、このくらい外道でいきます！
別にいいよね？　答えは聞いてない！！（聞けよ）

さて、次回は六課出動の辺りを書こうと思います。
色々と考えて、結構面白い対戦カードを用意してるつもりですので、全く期待などはせずにお待ち下さい。

それではまた、次の話で。

ｉｆ４８話　『ゆりかご』

ｓｉｄｅ：―

地上本部、陸士１０１部隊隊舎。
そこに、突然警報がけたたましく鳴り響いた。

「何だ！？」

「敵襲！？」

鳴り響いた警報を聞いて、今までデスクの前で書類を片付けたり、キーボードを叩いていた局員達が一斉に立ち上がり、それぞれのデバイスを手に取る。すると程なく、１０１部隊の隊長ミハエル＝ミュンゼンが、彼らが居る部屋のドアを蹴破るような勢いで開けて飛び込んできた。

「おめぇら、揃ってるか！？」

「一佐！　何が起きたんですか！？」

「敵が来たに決まってんだろ！　いきなり現れやがったってんで、上も混乱中だよ！」

質問した青年を怒鳴りつけながら、ミハエルは白髪混じりの頭をガシガシと掻いて自分のデスクへと歩み寄り、机の上に放り投げてあった自分のデバイスを乱雑に握り締める。
そして息を吐く間も無くそれを起動。
武装局員の黒いバリアジャケットを纏い、支給品の杖型のデバイスを肩に担ぐと、他の局員達を見回して怒鳴りつけるように指示を飛ばす。

「陸士１０１部隊は全員、すぐに準備して出動だ！
ファルコとミラの分隊は南地区へ、リョウとクーラの分隊は俺と一緒に来い！！
それとヴァネッサ！！」

「は、はいっ！」

「ハヅキを呼び戻せ！　あいつにゃ悪いが、今はあいつの手がなきゃ間に合わん！！」

「了解しました！」

「っしゃあ！　おめぇら、気ぃ入れていくぞ！！」

「た、隊長！！」

「って、今度ぁ何だ！？」

指示を出し終えて走り出そうとしたミハエルだったが、背後から違う部下の声に呼び止められてたたらを踏む。

そして、苛立ちを声に乗せて彼を呼び止めた通信を担当する青年局員を振り返った。ミハエルを呼び止めた局員は、通信用のモニタを開いたまま、たった今通信で告げられた事をミハエルへとそのまま伝える。

「地上本部からの伝令です！
我々１０１部隊は、アインヘリアル周辺で暴れている敵勢力の鎮圧にあたるように、とのことです！
詳しくは分かりませんが、アインヘリアルの近くに巨大な魔力反応も確認されています！」

「随分遠いな……映像は！？」

「今、メインモニタに映します……映像、着きました！」

局員の声と共に、１０１部隊隊舎のメインモニタにノイズ混じりの映像が映し出された。
その場に居た全局員の視線がメインモニタに集まり、そして――

「なんだ、ありゃ……」

映像を見た全員の心を代弁するように、呆然とミハエルが呟きを漏らした。

「……始まったか」

「始まったか、じゃねぇよ旦那！！　何でルールーが参加してんだよ！！

ルールーは管理局に行ったんじゃなかったのかよ！？」

手元に開いた小さなモニタに映る白天王や地雷王を見て、小さく呟いたゼスト。そのゼストに向かって、近くに浮かんでいたアギトが噛み付くような勢いで怒鳴り声を上げた。

だが、ゼストはアギトには分からない程度に眉を寄せただけで、何も言おうとはしない。

彼が見つめるモニタの先では、白天王と地雷王が暴れている。けれど、遠距離から映した映像ではルーテシアの姿は確認できない。恐らくはこの映像の場所のどこかに居るのだろうと予測は出来るが、だからと言って今のゼストに彼女の安否を確かめている時間は無いのだ。

「旦那！　ルールー助けに行こうよ！！　あんな無差別に攻撃するなんて、いくらなんでも普通のルールーだったら絶対にやらねぇって！！　絶対なんかされてるよ！」

「……ルーテシアのところに行くのなら、1人で行け。俺は、俺の目的を為さねばならん」

「旦那！？　本気で言ってんのかよ！？」

「そうだ」

「――っ！！」

信じられないという顔で問い詰めたアギトの言葉に、ゼストは表情を変えずに頷きを返す。

そんな彼に対し、アギトは言葉を無くして両手を握り締め、ワナワナと身体を震わせた。アギトは、ゼストの目的が何なのかは知っている。ただ、当事者ではない彼女からすれば、それは家族のように過ごしてきたルーテシアを見捨ててまでするべき事なのか、という思いの方が強いのだ。

ゼストもそれを理解しているからこそ、余計な事は言おうとしない。

ルーテシアの身に何が起こっているのかはわからない……いや、おおよその予想はついているが確かでは無い、と言った方が正しいだろうか。

彼女がこんな行動を取るというのは、当初ゼストがスカリエッティから聞かされていた計画には含まれていなかった。勿論、スカリエッティがちゃんとした計画を彼に伝えていなかった、という可能性も否定は出来ない。けれどゼストには、不思議と今起こっている事態の元凶がクアットロであるという確信があった。

そしてルーテシアがクアットロに何かをされているのだろう、という事も。

けれど――。

「なんで……なんで、そんな事言うんだよ旦那！」

「俺には、為すべき事がある。それを為すために、俺は今日まで生き長らえてきた。

それを終わらせる機会が目の前にあるのだ。逃す訳にはいかん」

――だからと言って、今更自分の目的を捨てられる程、ゼストという人間は器用では無かった。

迷いが無い訳では無い。だが、迷っている暇が無いのも事実だからだ。だから、ゼストは自分に言い聞かせるように、硬い声でアギトに答えた。

「旦那はっ！　ルールーが心配じゃないのかよっ！！」

「……」

大声で咎めるアギトには答えず、ゼストは黙したままモニタを閉じる。

それを肯定と取ったのか、アギトは何かを言おうと口を開き、しかし言葉にすることが出来ず、舌打ちをしながらゼストから視線を逸らした。彼の言うとおり、ゼストに構わずルーテシアのところに行けるのなら、どれだけ楽だろうか。

当然の事ながら、ルーテシアは心配だ。

けれどアギトにとって、ゼストを見捨てるような選択など出来る

筈も無い。

それは恩義とか、そういう義務感などでは決してない。

アギトはルーテシアと同じ位に、ゼストを家族のように思っているし、慕っている。

そんな彼を見捨てるなど、誰が出来るだろう。

「……もし」

「！」

……そんな彼女の思いを感じたからだろうか。

ゼストは決して語るつもりのない口を開き、低く小さな声で呟いた。

「もし、目的を為した後も俺の命があったなら。必ずルーテシアの元に向かおう」

「旦那……」

彼の言葉に、アギトの表情が目に見えて明るくなる。

対して、口を開いたゼストは苦い表情を作り、自分を責めるように思考した。

（……“必ず”などと、馬鹿な事を）

これから彼が向かうのは地上本部。
相手が馬鹿でないのならば、必ずそれ相応の実力者が出てくるだろう。
その実力者を相手に、フルドライブを使わずに勝てるとは思っていない。そして――自分の体が、もう既にフルドライブに耐え切れない程に消耗しているという事も、勿論知っている。
だから、ゼストは何も言い返すつもりは無かった。下手に約束をして希望を持たせるような事をしたくなかったし、どうせ死ぬのならば1人で静かに……とも思っていた。それが、様々なモノを犠牲に生き長らえてきた自分の責任だと、そう思っていたからだ。

「じゃあ、あたしが旦那が必ずルールーのとこに行けるように守ってやる！
だから……だから！　全部終わったら、必ずルールーのところに行ってくれよ！？　ルールーの事を助けられるのなんて、旦那しかいねぇんだからな！！」

「……そうだな」

嬉しそうな笑顔で彼の周りを飛び回るアギトに、ゼストは表情を変えぬまま頷いて答え、それから沈んだ気持ちを切り替えるように頭を振ってから、前を向いて空を移動し始める。
彼の、唯一無二の親友だった男――レジアス＝ゲイズが居る場所、時空管理局地上本部へと。

◇◇◇◇◇

次元航行艦、アースラ。
機動六課の新しい隊舎となったその船は、六課メンバー全員を乗せて空を飛んでいた。飛んでいる……というよりは、浮かんでいるという表現の方が正しいかも知れないが。
それはさておき、このアースラにもアインヘリアルを襲っている白天王の姿を映した映像は届いていた。
艦長席に座るはやては、手すりを握り締めながらその映像を食い入るように見つめていた。

「……完全に先手を取られたわ。まさか、あんな隠し玉持っとったなんてな」

「流石に、あれは予想外でした。てっきり戦闘機人が出てくるかと……」

呻くように呟いたはやての言葉に、隣に立つグリフィスが答える。
けれど、とはやては思う。相手側に召喚士が居る事は知っていたのだから、白天王のような戦力がある事は予想して然るべきことだった。受け入れてもらえる可能性が低くとも、せめて地上本部にそれを通達しておく事くらいは出来たのではないか、と。
しかし、それも今となっては既に後の祭りだ。

「ルキノ。地上本部の対応はどうなっとるん？」

「ミッドチルダ市街に現れたガジェット群は、陸士部隊が出撃して対処にあたるようです。
アインヘリアル１号機、２号機の方への対応は……通信が混乱してて、わかりません」

「そか。一応、何か動きがあった教えてな」

「了解です！」

パネルを忙しなく叩きながら答えたルキノの声に、はやては顎に手を当てて考え込む。

（戦闘機人を温存しとる……って事は、隊長陣を出す訳にはいかへん。
あのデカブツの相手やったら、同じ召喚士のキャロに任せられるやろか……？　でも、そうするとフォローで他のＦＷの子らも出さなあかんよな。そうなると市街の方に回す人員が足りひん。大体キャロやったら大丈夫って保障もあらへんし、八方塞りやな……さて、どないしよか）

「部隊長！　アコース査察官から、直通連絡です！」

彼女の思考を遮るように、緑色のロングヘアーの青年が映るモニ

タが開く。
　映っているのは、査察官のヴェロッサ＝アコース。はやてからの依頼で、極秘にスカリエッティのアジトに関する情報を集めていた青年だ。

『はやて、こちらヴェロッサ。スカリエッティのアジトを発見したよ』

「ほんま!?」

『ああ。今、シャッハが迎撃に出てきたガジェットを叩き潰してるところだよ。
　中の警備もかなり厳重だったし、ここで間違いないと思う』

　はやてに答えるヴェロッサの後ろでは、両腕に構えたトンファーでガジェットの群れを殴り飛ばしているシスター・シャッハの姿が見える。モニタ越しに見えるだけでもかなりの数のガジェットが居るあたり、彼の見つけた場所がスカリエッティのアジトなのだろう。

『一応、教会騎士団からも戦力を呼び寄せてるけど、そっちからも制圧戦力を送れるかい？』

「うん。そら勿論やけど……」

「八神部隊長！　地上本部に向けて、あの騎士が高速で接近中！　ルートは……アインヘリアルとは真逆の方向からです！」

「……ああもう、次から次へと千客万来やな」

言いながら、はやては溜息を吐きながら渋い表情を作る。

白天王と騎士ゼスト、そしてスカリエッティのアジト。現時点で、六課から戦力を向かわせなければいけないと判断できるのは3箇所。しかも、そのどれもが隊長クラスを割かなければいけないレベルだ。

だが、先程彼女が考えていたように容易に戦力を割くような真似はしたくない。

スカリエッティの主戦力である戦闘機人は今の所確認されていないのだ。

下手に戦力をバラけさせて、各個撃破されでもしたら目も当てられない……しかし、戦力を割かなければ現在の戦況に対処出来ないのも事実。

「な、何コレ……勝手に通信に割り込んで……!?」

「――!」

はやてが思考に埋没していると、突然ルキノの驚いたような声が上がった。

その声に彼女が反応するよりも早く、白天王が暴れている映像が映っていたモニタにノイズが走る。そして、数回ザザッ、という耳障りな音がした後で映像が切り替わる。

切り替わった映像に映っているのは、盛り上がった山肌に取り付いている数十機のガジェット?型。

地面の上にケーブルを突き刺して自分を支え、その巨体の周りに

はバチバチと音を立てる電撃が纏わりつき、そしてその電撃はケーブルを通して地面へと流れていく。

はやて達の耳に、モニタ越しでも分かる程に凄まじい轟音が響く。それは、ガジェット達が地雷王と同じ原理で辺り一帯の地面を揺り動かしている音。

そして同時にそれは、クアットロ――正確に言うならばスカリエッティが心奪われた、過去の遺産が目覚める音でもある。だが、それをはやて達が分かるはずも無く、全員が首を傾げてその映像を見ていた。

「あの下に、何かあるんか……？」

『はぁ～い、皆様ご注目ぅ～』

眉を顰めてはやてが呟いた時、彼女の声を遮るように弾んだ声がモニタから響く。

聞こえてきた声は、スカリエッティの低い声ではなく、甲高い女性の――クアットロの声。

嘲るような、楽しくて仕方が無い子供のような、そんな声。それが、アースラの……いや、この映像が流れているミッドチルダ全域の空気を揺らした。

◇◇◇◇◇

「うふん♪　さぁ、本日のメインイベントよぉ！！」

クアットロは無数のモニタを自分の前に展開し、それらを眺めながら優雅に両手を天に掲げた。
その仕草をウーノが見たなら、あまりにスカリエッティと似通っている事に驚いたかも知れない。
けれど今ここに彼女はおらず、スカリエッティもこの場には居ない。

「ドクターをいいように使っていたスポンサーの皆様」

彼女の言葉を合図としたように、モニタに映るガジェット?型のうちの1機がオーバーロードを起こし、ケーブルを突き刺した地面を吹き飛ばしながら爆発、破片を四散させた。

「世界を管理したつもりになっている、管理局のお馬鹿さん達」

爆発は無数に開いているモニタ全てで起こり、連鎖的な爆発によって地面が少しずつ削り取られ、山肌の地面は罅割れ、まるでこびり付いた泥が剥がれるように割け、地響きを起こす程の振動に耐え切れず地面へと落ちる。
そうしている間にも、地響きは刻々と強く、大きくなっていく。
その地響きはまるで獣の咆哮にも似た、目覚めの音。

「ありもしない“平和”に溺れた、聖王教会の愚かな人たち」

剥がれ落ちた地面の下から、青い鋼の装甲。
山だと思っていた場所は、次々と地面が剥がれてひとつの姿を露にしていく。

「その塞がった目を見開いて、よぉ～くご覧なさいな!!
これが貴方達が畏れて忌避しながらも、ずっと憧れ、欲しがっていた絶対の力!」

刹那。一際大きな地響きという名の咆哮と共に、『それ』が浮上

する。
　自分の身体を覆う長い年月をかけて降り積もった大地を振り落とし、自分を地面へと縛りつけようとする重力など歯牙にもかけず、自身の復活を喜ぶように巨大な地響きを――咆哮を奏でながら。

「旧暦の時代に一度は世界を席巻し、そして世界を滅ぼした古代ベルカの叡智の結晶！
　何よりも強大で！　何よりも凶悪で！　何よりも美しい究極の兵器！」

　クアットロの声に答え、『それ』は自分にこびり付く泥を振り落としながら高度を上げていく。
　そして――遂にその全身を中空に晒し、モニタ越しに自分を見せ付ける全ての人間へ、その威容を見せ付けた。
　青々とした空に浮かぶ、深い青と金色を基調とした巨大な空中戦艦。
　次元航行艦と同じ……いや、それよりも遥かに巨大なソレは、まさに究極の兵器と呼ばれるに相応しい姿。

　それは、聖王に纏わる御伽噺の中だけで語られていた筈の存在。
　誰もが存在する筈が無いと、そう思っていた存在。

　しかしその全てを否定するように空中に浮かぶ『それ』の名は――

「“聖王のゆりかご”よ！！」

名を呼ばれた瞬間、ゆりかごが一際大きな音を上げて動き出す。
辺りの空気を震わせたその音は、まるで産声のようだった。

ｓｉｄｅ：：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：：スバル＝ナカジマ

「何、あれ……」

アースラのブリーフィングルームで、あたしの隣に座っているティアが呟く。
でも、あたしはそれに答えることも出来ずに、ブリーフィングルームにある大きなモニタを見つめていた。
ブリーフィングルームにいるのは、あたし達ＦＷメンバーとハヅキさん、そしてなのはさんとフェイトさんの隊長２人。これからあたし達がどう動くのか、それを説明して貰っていた時、なのはさんが立っているモニタに突然ノイズが走って、信じられない映像が映し出された。

それは、もの凄く大きな戦艦。
アースラを外から見た時も大きいって思ったけど、それよりも更に一回りくらい大きな船。
それを見てあたしもティアも、なのはさん達でさえ言葉を失っていた。

『はぁ～い。機動六課の皆様、見えてますぅ～？』

そんな時、モニタにノイズが走って再び映像が切り替わった。
次に映ったのは、眼鏡をかけた――忘れたくても、忘れられない顔。

『そういえばまだ名乗ってませんでしたよねぇ？
私、ナンバーズの４番目で、名前はクアットロって言うの。以後よろしくお願いしますねぇ』

モニタの向こうでそう言って、眼鏡をかけた戦闘機人――クアットロが頭を下げた。
その仕草を見たら、背中がチリチリして……あたしは思わず拳を握り締める。そうしなきゃ、思わずモニタに殴りかかってしまいそうだったから。

『そ・れ・でぇ……実は、機動六課の皆様に会って欲しい人がいる

んですぅ』

「……会って欲しい、人？」

クアットロの言葉を、何となく繰り返す。

どうしてだろう？　凄く……もの凄く、嫌な感じがする。

『アインちゃ～ん。ちょっとこっちに来てくれるかしらぁ？』

そんなあたし達には構わずに、相手は後ろを向いて楽しそうな声で口を開いた。

多分呼んだ相手は近くにいたみたいで、返事は直ぐに返ってくる。

そして――――

『わかりました。クアットロ姉様』

「え……？」

――――聞こえたその声に、息が止まった。
画面が少し動いて、クアットロの後ろから、灰色のバリアジャケットみたいな服を着た人が歩いてくる。

（……嘘）

最初は顔が暗くてよく見えなかったけど、その人がモニタに近づくにつれて、段々と顔が見てるようになって。

（……嘘）

綺麗な金色の髪と、緑っぽい青の瞳。
左目は金色になってて、いつも笑っていた表情は、まるで機械みたいに冷たくなってた。
でも、そのくらいでその人の顔を、声を、あたしが間違える訳が無い。

だって……だって！

『ご紹介しますねぇ？　この子の名前は“タイプアイン・ファースト”。
私のボディガード兼、最愛の“弟”ですよぉ。ホラ、アインちゃん？　ご挨拶なさい』

だって、今モニタに映っている人は。
左右違う色の瞳で、こっちを見つめているその人は――――

『タイプアイン・ファーストです。“初めまして”、機動六課の皆様』

「ハヤ……ト……？」

――あたしが、世界で一番大好きな人だったから。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

if48話　『ゆりかご』（後書き）

投稿まで時間が掛かって申し訳ない。しかも微妙な出来と言う……（汗）
どうも、ラモンです。

旦那、六課、そして陸士部隊とスバル。
４つの視点からみたラスト序盤。いかがだったでしょうか？
クアットロの演説は、スカっちのを元にちょくちょく改変を加えてみました。眼鏡が月光蝶……じゃなくて絶好調すぎて困る。
ちなみに陸士部隊の皆さんは、この後特に出番があるという訳では無いです。一応名前はちょくちょく出てくるかもですが、活躍はしません。
これ以上オリキャラの活躍の場を増やしたら、原作キャラが空気になっちゃいますからね。

今回一番の苦労所は、旦那パートでした。
ルールーが洗脳されてるかもって知ったら、アギトは間違いなく助けに行こうとすると思うんですけど、旦那はどうするかなーって感じで、ずっと悩んでました。
最終的に、目的に向かって愚直に突き進む人、っていう私個人のイメージ優先でこんな感じになりましたけれど。
旦那ファンでイメージと違う！　って人はゴメンなさい。
ただ、ちゃんと活躍する場が残ってるんで勘弁してね！　お願いだから石投げないで！！

さて、次回は再びクアットロオンステージ。
六課に向けての宣戦布告やら、その時にやる挑発やら、とにかくクアットロが絶好調になる予定です。

イラッ☆ときても我慢してくださいね！
出来れば、今度はもっと早く投稿したいなぁ……。

それではまた、次の話で。

if49話　『宣戦』

side：―

誰も、声を発することが出来なかった。
機動六課の誰もが自分達の前にあるモニタを、信じられない、という顔で見つめている。
彼女らの視線の先にあるモニタには、1人の少年が映っていた。

『タイプアイン・ファーストです』

少年は金と青、左右色違いの瞳で彼女らを見つめて口を開く。
発せられた声はどこまでも機械的で冷たく、モニタ越しに彼女達を見つめる瞳はどこまでも鋭利で、モニタに映る彼が、六課の皆が知っている彼では無いことを如実に物語る。

『“初めまして”　機動六課の皆様』

誰も声を出せないアースラ艦橋に、アインの抑揚の無い声が響く。
「初めまして」という単語を聞いたスバルが身体を強張らせ、引

き攣った笑いを浮かべながらモニタを見上げ、そこに映っているアインを見つめた。

「ハヤト……何、言ってるの？　そ、その冗談、面白くないよ？」

そうであって欲しいと、冗談であって欲しいと願いながら尋ねる。

だが、スバルの言葉に対するアインの反応は、彼女が期待していたものとは真逆のものだった。

アインは彼女の言葉に眉を顰めて首を傾げ、困ったような顔をして口を開く。

『冗談を言ったつもりはありません。それと、私には“ハヤト”という呼称は登録されていません。

私の正式呼称は“タイプアイン・ファースト”。略式呼称は“アイン”です』

「違うっ！　貴方はハヤト……ハヤトだよっ！！　ねえっ！　あたしの事、知ってるでしょっ！？」

悲痛な声で、スバルがモニタの向こうに居るアインへと呼びかける。

彼女から自分に向けられた言葉に、アインは顎に手を当てて考えるような仕草をしてから、「ああ」と声を漏らしてスバルに視線を戻し、彼女の顔を真正面から見つめて答えを返した。

『貴女の事なら知っていますよ』

その答えに、スバルの顔が明るくなった。

アインに――ハヤトに、自分の記憶があったのだと思ったからだ。

だが。

『ドクター・スカリエッティの技術を流用して造られた、私達ナンバーズの姉妹機、タイプゼロの2号機。

名前はタイプゼロ・セカンド……でしたよね？』

「――――っ！？」

『……？　違いましたか？』

続けられた言葉に、顔を青くして息を呑んだ。

彼女の反応に、アインは首を傾げて尋ねる。尋ねられたスバルは直ぐに我に返って、アインの言葉を否定しようと口を開く。

「ちがっ……あたしは――『大丈夫よアインちゃん。間違ってなんかないわぁ～』――っ！？」

しかし、その言葉も途中で遮られた。

遮ったのは、モニタからは外れているクアットロの声。

その声はスバルにそれ以上何かを言わせることなく、畳み掛けるようにアインに指示を出す。

『それじゃあ、もういいわよアインちゃん。後は下がってなさいな』

『はい。了解しました、クアットロ姉様』

「ま、待って！　ハヤトッ！！」

モニタに向かって手を伸ばし、スバルはアインを呼び止める。

だが、アインは一度肩越しに彼女を振り返っただけで、何の反応も示さずにモニタに背を向けて歩いていく。

尚もスバルが彼を呼び止めようとするが、それよりも先にモニタの中心に眼鏡をかけた女――クアットロが、楽しげな笑みを浮かべて戻ってきた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｉｆ４９話　『宣戦』

「あはははははっっ！！　い～い表情してるじゃないの、セカンドちゃん！」

自分の目の前に開いたモニタに映る、アインを呼び止めようとモ

ニタに向かって手を伸ばしているスバル。その彼女の顔を見て、クアットロは高らかに哄笑を響かせた。
アインは最初に立っていた位置――ヴィヴィオが縛り付けられている玉座の隣に戻り、そんな彼女を感情の起伏が無い、冷めた視線で見つめている。
モニタの向こう側に居るスバル達には、アインとヴィヴィオの姿はクアットロの影になっていて見えない。
アインは高笑いを響かせるクアットロを見つめながら、頭の片隅で思考していた。

（――『ハヤト』という名前は、データベース中に該当事項無し。
では、何故タイプゼロ・セカンドは私をその呼称で呼んだのだろうか……？
もしかして私は――――エラー。思考の部分的削除――削除、確認）

もしかして、と。そこまで彼の思考が及んだ時、突然別の意志が彼の意識を占領した。
そして次の瞬間には、彼の思考から『ハヤト』に関する疑問や推測は綺麗さっぱりと“削除”されていた。それは、クアットロが彼に恒常的に施している“調整”の産物である。

「どうだったかしら、セカンドちゃん？　中々面白い出し物だったでしょう？」

『――っ！！　ふざけないでっっ！！』

楽しげな笑みを浮かべるクアットロに対し、スバルが噛み付きそうな勢いで怒鳴り返す。
そんな彼女の表情が楽しくて仕方ないのだろうか、クアットロの顔に浮かぶ愉悦はますます深くなっていった。

「あはは！　いい表情ねぇ……ゾクゾクしちゃう♪」

『ハヤトに、何をしたのっ!?』

「何って……命を救ってあげたのよ。まぁ、他にもちょ～っとだけ、悪戯しちゃったけど」

『……返して！　ハヤトを、返してよっ!!』

「嫌に決まってるでしょお？　だってアインちゃんは、私のボディガード兼“弟”なのよぉ？」

大仰な仕草で首を振り、スバルの言葉を拒否する。
それから、クアットロは彼女を指差して、不満げな声で訂正の言葉を口にした。

「それとぉ、不愉快だからアインちゃんの事を“ハヤト”なんて呼ばないでくれますぅ？
あの子はタイプアイン・ファースト。それ以上でも、それ以下でも無いんだから」

『違うっ！　ハヤトはハヤトだっ！！』

スバルは頭を思い切り振りながら、クアットロの言葉を否定する。
けれど、クアットロの嘲りは止まらない。

「もう、物分りの悪い子ねぇ……ま、そう思いたければ思いなさいな。
他にもやらなきゃいけない事もあるし、セカンドちゃんだけに構ってられないの」

『ふざけ――『スバル。ちょっと、代わってもらってええ？』――っ、部隊長？』

自分から視線を動かしたクアットロに、スバルが尚も言い募ろうとする。
だが、その言葉を遮ってはやてが声を発した。

『気持ちは分かるけど、今は相手の目的を聞くのが先や。
……私かて、ホントは胸糞悪くて今すぐにでもぶっ飛ばしてやりたいんやけどな。けど、こんな性格悪いのが、ただハヤト君を私らに見せる為だけに、わざわざ六課だけに通信を繋いできたとは思えへん』

『……でも』

『追求するのは、相手の目的を聞いてからでも出来る。辛いやろけ

ど、今は私に任せてくれるか？』

『……はい』

『ありがとな』

落ち着いたはやての声に諭され、渋々という様子ではあるがスバルが引き下がる。

そんな彼女に微笑みかけて礼を言ってから、はやては表情を厳しくして、ブリーフィングルームを映したモニタから、クアットロの映っているモニタへと視線を戻す。

「うふふ、さっすが隊長さんですねぇ。すぐに頭に血が昇る小娘とは大違い。

顔色ひとつ変えないなんて、逆に凄いですよぉ」

『……目的は何や？』

「あらら、無視ですかぁ？　ひっど～い。私、傷ついちゃいますよ？」

『おふざけはいらんから、目的があるならさっさと言って。私らかて、暇や無いんや』

挑発的なクアットロの言葉に、はやては厳しい視線を彼女に向けたまま、硬い声で答えた。

その声と表情で、彼女にはからかったりしても通じないと悟った

のだろう。クアットロはつまらなさそうに口を尖らせ、言葉を続ける。

「面白くないわねぇ……まぁいいわ。時間が無いのは私も同じですし。

目的って言っても、大したことじゃないんですよぉ。機動六課の皆様を、この“ゆりかご”にご招待しようと思いまして。こうして通信を繋いだ次第ですぅ」

『……招待？』

眉を顰め、はやてが問い返す。

『招待』と言う以上、おそらくクアットロはあの巨大戦艦――“聖王のゆりかご”に居るのだろう。

だが、わざわざ自分が拠点としている場所に、エース・オブ・エースと呼ばれるなのはを擁する自分達を招待するなど、正気の沙汰とは思えない。何か、別の狙いがあるのではないか……そう思ったのだ。

「そうですよぉ。別に、断る理由もないですよね？」

『わざわざ、罠かも知れへん誘いに乗ると思ってるんか？』

「あらら。罠なんて心外ですねぇ。ま、信じる信じないは貴女達に任せますよ？

私はただ、このまま楽勝ムードだと盛り上がりに欠けてつまらないから、提案してみただけですしぃ」

嘲りの表情でそう言い放つクアットロの言葉を、六課の誰もが嫌悪感を浮かべて見つめた。
今こうしている間にも、地上では沢山の民間人や局員達が傷ついている。
だというのに、それを彼女は「つまらない」と言い切った。それを、彼女達が許せる訳が無い。

『……っ』

「う～ん。あんまり乗り気じゃ無いみたいですねぇ？
折角アインちゃんを見せたのに、ノリが悪いですねぇ。それじゃあ……こっちも見せれば、乗り気になってくれるかしらね？　アインちゃん！」

「はい。クアットロ姉様」

渋い顔をして返答しないはやてに痺れを切らしたのか、クアットロは後ろを振り返ってアインを呼ぶ。
彼女の声に反応し、アインは自分の周りに幾つものモニタやパネルを展開。まるでクアットロの様に素早く手を動かしてパネルを叩いていく。
その姿を満足気に見ながら、クアットロは視線をもう一度自分の前のモニタに――機動六課の面々へと戻し、大仰に両手を広げ、謳うように声を発した。

「さあ、御覧なさい！！
待ち望んだ主を得て、古代の技術と叡智の結晶は今その力を発揮するのよ！！」

◇◇◇◇◇

「嘘！？」

クアットロが大仰な仕草でモニタの前からどいた瞬間、そんな言葉と共にティアナが息を呑む。
なのはとフェイトは目を見開いてモニタに見入り、エリオとキャロは椅子から立ち上がってモニタの近くに駆け寄った。そして、艦橋で艦長席に座るはやても、それを見て呆然と声を漏らした。

「……あれって」

彼女達の目が捉えているのは、大仰な椅子に座らされ、両手を拘束されているヴィヴィオ。
項垂れていて顔は見えないけれど、彼女達が少女の事を見間違う訳が無い。

ヴィヴィオが座る椅子からはケーブルが何本も伸び、その両脇には球体が浮かんでいる。
それらが何を意味するのかは分からないが、少なくともヴィヴィオに害を及ぼすモノだということは想像するに難くない。
だが、なのは達にはそれを考える暇すら与えられなかった。

「何で……」

『っ！！』

なのはが小さく言葉を漏らした時、ヴィヴィオが座る椅子の両脇に浮かぶ球体の間に電撃が奔り、少女は弾かれるように顔を上げて、小さな声を漏らしながら閉じていた目を見開く。
すると、椅子の後ろから伸びているケーブルが紫に光り、何かがそこを通っていく。

『ぅあ……っ！！』

全員の耳が、ヴィヴィオの苦しげな呻きを捉える。

『いたいよ……怖いよぉ……っ、ママぁ……っっ！！』

「……っ！！！」

体を捩りながら、悲痛な声を漏らすヴィヴィオ。
その悲鳴に、誰もが拳を握り締めて体を震わせている。

『うあぁぁぁっ！　痛いよぉぉっっ……！！』

「ヴィヴィオ……っ」

なのはも、まるでそれ以外の行動を忘れてしまったようにモニタを見つめ、ヴィヴィオの名前を小さく呟きながら、レイジングハートを握り締めていた。

「ハヤト！！　やめてよ、ハヤトォッ！！」

『……出力８０％強。供給ケーブルにも問題ありません、クアットロ姉様』

『そう、ならそのまま続けなさい。アインちゃん』

『はい』

スバルが懇願するようにアインに向かって叫ぶ。
だが、アインはスバルの声にもヴィヴィオの悲鳴にも眉一つ動かさず、まるでそうする事を義務付けられた機械の様に淡々とパネルを叩き続けていた。その姿が、余計に彼女達の心を抉る。何故なら、六課の全員がヴィヴィオと仲良く笑い合っていたハヤトを知ってい

るから。

だから、ヴィヴィオの叫びを無視してパネルを叩き続けるアインを止めようと、スバルがまた口を開いた――その瞬間。まるで計っていたようなタイミングで、ヴィヴィオを隠すような位置に愉悦を浮かべたクアットロが戻ってきた。

そして、モニタ越しにはやて達の顔を順番に眺めてから、面白くて仕方ないとばかりに哄笑を上げた。

『あはははははははっっ！　どいつもコイツもいい顔になったじゃない！！

これで少しはやる気を出してくれたかしらぁっ！？　ねえ、機動六課の皆様！？』

「あんたは……あんたは、どこまで……っ！」

哄笑し続けるクアットロを、手を握り締めたはやてが睨みつける。けれどクアットロは欠片も怯む事無く、その瞳を真正面から嘲りと共に見つめ返し、笑い混じりの声で彼女の声に言葉を返す。

『いやぁん。そんな顔してもぉ、ぜぇんぜん怖くないですよぉ？

さあ、悔しかったら全員で取り返しに来てみなさいな！　ああ、でも地上の方も見捨てない方がいいですよぉ？

地上が綺麗さっぱり全滅しちゃったら、取り返しても意味ないですもんねぇ！！　あっはははは！！』

「……っ！！」

ギリッ、と音がなる程にはやてが歯を噛み締めた――その時。

『もういい。貴様はもう喋るな……耳障りで、酷く不快だ』

凛とした声が、辺りに響いた。

◇◇◇◇◇

「ハヅキ……さん？」

声を発した主――腰まで届く金髪を揺らす女性、ハヅキにブリーフィングルームにいたなのは達の視線が集まった。だが、ハヅキは彼女達の声には答えず、ハヤトと同じ青い瞳でクアットロを殺気さえ感じさせる視線で貫き、ゆっくりと言い聞かせるように言葉を発する。

『あらあらぁ？　随分と殺気立っちゃってますねぇ、管理局の“女帝”サン？

まぁ、肉親のあんな姿を見せられたら、それも仕方ないですよねぇ～』

「――そうだな。出来る事なら、今すぐ貴様の首を引き千切ってやりたいよ。

だが、今は感情に任せてそうする訳にもいかん。ミッド市街も守らなければならんしな。

何せ私達は、地上の平和を守る為に作られた組織なのだから」

握り締められたハヅキの右手の指を伝い、赤い液体が地面に落ちて小さな水音を立てた。

けれど、ハヅキは決して取り乱すこと無く、努めて平静な態度でクアットロを向かい合う。

『あはっ！　いいですねぇ。この状況でも出てくる、その偽善染みた正義の味方的な台詞！

清廉潔白すぎて反吐が出ますよ!!　そぉんなに正義が大事ですか？』

「――正義、だと？　何を言っているんだ、馬鹿か貴様は？」

『……はぁ？』

「私達は、『正義』などという曖昧なモノの為に戦った事など一度とてない。

守るべきモノを守り、自分の誇りを失わぬために戦うのだ」

静かな――しかし、数瞬前まで饒舌だったクアットロを黙らせる程の威厳と迫力のある声で、ハヅキが喋る。

「そして少なくとも、私達は今まで守るべきモノの為に戦って、負けたことなど……一度も無い」

言葉と共に、ハヅキが左手でクアットロを指差す。

何をさせるでも無いのに、それでもクアットロは、まるで自分が射抜かれたような錯覚を覚えた。

「お前が私達から奪ったものは、必ず取り返す。貴様の馬鹿げた遊びも、必ず終わらせる。

安心しろ、それほど時間は取らせんさ。――まぁ、貴様は楽しくないかも知れんがな」

『――そう。それじゃあ、楽しみしてますねぇ？　ああ、もし招待に応じてくださるなら、ここから侵入してくださいな。私とアインちゃんと、特別ゲストで丁重にお持て成しして差し上げますから』

気圧されたのを誤魔化すように、それでも悠然とした笑みを浮かべたクアットロがそう言うと、モニタにゆりかごの全体像が浮かび、

その一箇所に赤い光点が示される。
そこは、丁度ゆりかごの中心にあたる場所だった。

「……いいだろう。じっくり貴様に教育してやる。
喧嘩を売る相手と手段を間違うと、どういう目に会うことになるかをな」

『その言葉、そっくりそのままお返ししますよ、女帝さん？
それじゃあ機動六課の皆様、ご機嫌よう～。せいぜい、楽しませてくださいねぇ？
あはははははっっ！！』

最後に笑顔と共に手を振りながら、クアットロが通信を切った。
戦いの幕開けを告げる、耳障りな哄笑を残して。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：タイプアイン・ファースト

――聖王の器から、ゆりかごへの魔力供給の安定化を確認。
――以降はこちらからの操作無しでも、問題は無いと思われる。

「クアットロ姉様、全行程完了しました。後は放置しても構いません」

「そう。いい子ねアインちゃん♪　それじゃあ、次の指示を与えるから、よぉく聞いてね？」

「はい」

「アインちゃんに、次やって欲しいことはぁ……」

――クアットロ姉様の指示を確認。
――……内容に不確定要素を確認。姉様へ再確認する必要ありと判断。

「クアットロ姉様。不確定要素があるのでは？」

「ん？　……ああ、大丈夫よ。間違いなく、来る筈だから」

「もし来なかった場合、私はどうすれば？」

「その時は、その時になってからまた指示をあげるわ。だから、アインちゃんはいい子にして、私の言う事を聞いてなさいね？　いい

かしら？」

「……はい。了解しました、クアットロ姉様」

――不確定要素はあるが、姉様の指示を最優先とする。

――これより、玉座の間に通じるルートにて、迎撃行動準備。

――指定されたターゲット達が現れ次第、迎撃行動に移ることとする。

――迎撃対象……エース・オブ・エースを除く、機動六課。

ｓｉｄｅ；タイプアイン・ファースト　了

if49話　『宣戦』（後書き）

ハヅキさんが主人公すぎて困る。
どうも、ラモンです。

ここまで書いててテンション下がる回も珍しい……といった感じの、クアットロオンステージ！　な回でした。
もうね、外道なことは書いててホント辛いですね。
まぁ、クアットロの台詞自体は蝶ノリノリで書いてましたけど！ｗ
さてさて。今回のクアットロはアレですね、デスノートで言うところの、Ｌを倒した直後の月君レベルに絶好調でした。まぁ、それでもやっぱり自信過剰気味なのは相変わらず。
早く松田君に撃たれないかなぁ。

そして、何かもうこの人主人公でよくね？　的なカッコよさを見せてくれたハヅキ姐さん。このままだと『とある新人の日常』じゃなくて、『とある女帝の日常』になりそうな予感（笑）
何だか主人公補正が凄すぎるよこの人。
え？　違いますよ、贔屓じゃないですよ！　優遇してるだけですよ！ｗ

さて。いよいよ次回は出撃です！
そして、多分対戦カードが大体明らかになる……と思います。
誰が誰と戦うことになるのか。程よくお楽しみに～。

それではまた、次の話で。

if50話　『出撃　1』

side：―

「一番、なって欲しくない状況になってもうたな……」

モニタに浮かぶゆりかごを見つめながら、はやてが苦々しく呟く。
彼女が聖王教会の理事であるカリム＝グラシアからこのことを示唆する予言を聞いてから今日まで、はやては彼女なりに様々な事態を考え、それに対処出来るように動いてきたつもりだった。
しかし、流石に彼女もこんな状況は想像の埒外だったと言わざるを得ない。元々予言は詩文形式なために、解釈が曖昧だったというのもあるが、そもそも誰がこんな状況を想像できたと言うのか。まさか、古代ベルカの負の遺産とも呼べる巨大戦艦が復活するなどと、想像できる方がおかしい。

（……なんて、愚痴ってもしゃあないわな）

いい訳染みたことを考えてしまう自分に苦笑して頭を振った。
その時、彼女が座る艦長席の前に開いた通信用のモニタに映ったカリムが目を伏せ、口を開く。

『教会の……ううん、私の不手際だわ。予言の解釈が不十分だった……』

「未来なんて、わからへんのが普通や。カリムや、教会の皆さんのせいとちゃう」

自分を責めるカリムの言葉に首を振ってから、はやては顔を上げてメインモニタを見る。

そこに映っているのは、少しずつ、しかし確実に空へと浮かび上がっていく巨大戦艦――聖王のゆりかご。

青い空に浮かぶその巨体を見つめたはやては、自分の身体が小さく震えるのを感じた。それ程に、空に浮かぶゆりかごの姿、威圧感は凄まじいものがあったのだ。

「さぁて、どないしよか……」

『はやて。クロノだ』

自分を奮い立たせるように彼女が呟いた時、カリムが映っているモニタの隣に、新しくモニタが開く。

映っているのは、艦長用の制服に身を包んだクロノ。

『本局は、巨大船を極めて危険度の高いロストロギアと認定した。次元航行部隊の艦隊は、もう動き出している』

そうはやてに告げるクロノの画面越しに、彼が居る艦長席の天井を透かして多数の艦船が見えた。

次元の海に浮かぶその数は凄まじく、管理局本局がどれだけ力を入れているかが窺える。

『大まかな方針としては、地上部隊と連携して事件の収束にあたることになる。機動六課、動けるな？』

「……勿論や！」

確認するしてくるクロノに対し、はやては力強く頷きを返した。

頭の中で、どのように動くかを考えながら。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｉｆ５０話　『出撃　１』

「……ふん」

クアットロが消え、再びミッド市街を映したモニタを見つめてハヅキが鼻を鳴らした。

それから彼女が辺りを見回せば、ハヅキ以外の六課の面々は誰もが俯き、あるいは小さく震えている。

（あんなものを見せられてしまえば、仕方の無い事か）

彼女達を見て、ハヅキは思う。

落ち着いているように見えるハヅキでさえ、努めて意識してそうして見せているだけで、内心は色々と複雑な思いが渦巻いている。彼女でさえそうなのだから、年下であるなのは達に気にするな、というのは無理というものだろう。だが、今の戦況はそうも言っていられないのもまた事実。

だからハヅキは場の空気を変えようと、息を吐いて表情を緩め、苦笑しながら肩を竦めた。

「ふむ、柄にも無く熱くなってしまったな。見苦しいところを見せました」

「え？　あ、いえ、そんなこと……」

そんな彼女の言葉に、なのはが慌てて手を小さく振りながら答える。

なのはの声を聞いた他のメンバーも、金縛りにあっていたような状態から立ち戻り、わたわたと手を振っているなのはを見て、少しおかしそうに口元を緩めた。

ただ、その中で唯一人……スバルだけは、手を握り締めて俯いている。

その様子に気づいたハヅキが彼女の隣まで歩き、彼女の肩を軽く叩いて声をかけた。

「どうした、何を俯いている。ナカジマ陸士」

「ハヅキ……さん……」

声をかけられ、スバルがハヅキの顔を見上げた。

ハヅキの顔を見つめる彼女の瞳は不安に揺れ、唇は小さく震えている。そしてスバルはハヅキを見つめたまま、震える唇を動かして、消え入りそうな声で呟くように言葉を漏らした。

「ハヤト……が、あたしの事……知らないって……」

「……そうだな。姉である私の事も、覚えていなかったようだ」

スバルの言葉に頷き、先ほどモニタに映っていたハヤト――アインの事を思い出す。

ずっと姉弟として生きてきた弟に忘れられていた……その事実は、少なからずハヅキの心も傷つけていた。こうして彼女が毅然としていられるのは、そうあろうと彼女が意識して努めていたからだ。

そうでなければ、彼女もスバルのように――いや、もしかすると彼女以上に取り乱していたかもしれない。

「多分、あの性悪女に何かをされてしまったのだろう」

「……っ」

「……そんな顔をするな。陸士」

眉尻を下げ、今にも泣き出しそうになったスバルに、ハヅキが笑いかけた。

「忘れさせられたのなら、思い出させてあげればいい。人は本当に心から大切に想っているものは、どんな事があったとしても取り戻すものだ。それが、己にとって大切な物であるなら……尚更な」

言いながらスバルの髪をくしゃくしゃと撫でる。それからハヅキは片眉を上げ、からかうように言葉を続けた。

「それに、惚れた男のことをそう簡単に諦められるのか？　君は」

「そ、そんなこと……！」

反射的に彼女の言葉に答えてから、スバルは自分の言葉に顔を赤くして身体を小さく縮こまらせた。

顔を赤くして俯くスバルがおかしかったのか、ハヅキが思わず小さな笑いを漏らす。彼女の笑いにますます顔を赤くするスバルの頭から手をどかし、彼女の顔を覗きこんでニヤリ、と口の端を持ち上げて尋ねる。

「くっくっ……さて、少しは元気が出たかな？　ナカジマ陸士」

「……え？」

彼女の言葉に、スバルはきょとんと目を丸くした。

そんな彼女の顔に再び小さく笑いを漏らしながら、ハヅキは言葉を続ける。

「諦めるな、ナカジマ陸士。諦めなければ、きっとあの子は……ハヤトは、答えてくれるさ。

何せハヤトは私の弟だ。自分を想ってくれる人を裏切ったりはしない。だろう？」

「……はい」

「うむ、良い顔になった。その顔なら、もう大丈夫だな？」

「はい！」

確認するように尋ねたハヅキの顔を、スバルは真正面から見つめ返した。

その顔に、先ほどまでの不安気な表情は無い。そんなスバルの顔を見て、ハヅキは安心したように笑みを零した。

するとその時、ハヅキが首に掛けていたネックレス――彼女のデバイスであるレオンハルトから、通信での呼び出しを告げる音が鳴り響く。

響いたその音に「む？」と声を漏らしてから、ハヅキは通信用の

モニタを開いた。
開いたモニタに映ったのは、赤いショートカットの少女。

「なんだ、ヴァネッサか。どうした？」

『ハヅキさん！　直ぐに戻れませんか！？　地上の方、あのガジェットとか大きな怪物のせいで結構混乱しちゃってて、全然人手が足らなくて……。隊長も、直ぐに戻ってきて欲しいって！』

「……私抜きで、何とかならないか？」

悲鳴のような彼女の声に、ハヅキは少しだけ眉を顰めた。彼女とて、地上が厳しい状況にあるのは重々に承知している。けれど、あの巨大戦艦――ゆりかごには、彼女の弟がいるのだ。出来ることなら自分の手で助け出してあげたいと、そう思うのは至極自然なことだろう。

『なってたら、隊長もハヅキさんを呼び戻しませんってば！』

「そう、だな……わかった、なるべく急いで戻る」

『お願いします！』

ヴァネッサの声と彼女の後ろから聞こえる局員達の怒号を聞きながら、ハヅキはモニタを閉じた。
その顔には、苦々しい表情が浮かんでいる。彼女個人としては今

すぐにでも、弟を助けに行きたい。けれど、彼女は陸士１０１部隊の副隊長であり、それでなくともハヅキ＝ロックウェルという人間個人の戦闘能力は混乱する地上において必要不可欠なもの。
それを理解できない程にハヅキが愚かだったら、どれだけよかっただろうか。

「……はぁ」

沈む気持ちを吐き出すような重い溜息を吐いて頭を振り、ハヅキは思考を切り替える。
起きてしまった事態は変えようが無い。ならば今自分がやるべきは、少しでも早く地上の事態を収束し、弟を救出に行ってくれる彼女達が、地上の心配をしなくて済むようにすること。
だから――

「申し訳ありません。どうやら、地上の方に行かねばならぬようです。
急いで戻ったほうが良いですしょうから、八神ニ佐にお伝えしておいて頂けますか？　高町一尉」

ハヅキはなのはに向かって、小さく笑いながらそう告げた。
彼女の表情を見てハヅキの思いを悟ったなのはは、その言葉にしっかりと頷いて言葉を返す。

「わかりました。六課からも、すぐに誰かを応援に向かわせますね」

「……いえ、それには及びません」

「え？」

なのはの申し出を、ハヅキは少しの間を置いてから断った。

まさか断られるとは思っていなかったなのはが、それに驚きの声を上げる。

地上本部の戦力は、3分の1程度がミッドチルダ市民の誘導、護送に当てられており、ガジェット達の掃討に当たっている数は決して多いとは言えない。その上、ＡＭＦ下での戦闘に慣れている魔導師の数も多くない。

戦力で言うなら、間違いなく足りていない筈なのだ。

「で、でも……陸士部隊だけじゃ空を飛ぶ？型の相手は大変ですよね？

それに、アインヘリアルの周辺に居るあのアンノウンも……」

「確かに。けれど、機動六課の戦力を小分けにするのは得策ではないでしょう？」

「それはそうですけど……」

言い募るなのはに、ハヅキは笑って返した。

それでも、なのはは尚も口を開いて言葉を続けようとする。相手の力が未知数な上、味方側の戦力も足りていない。そんな状況を「仕方ない」と割り切って見過ごせないのが、高町なのはという女性

なのだ。

「やっぱり、六課から誰か応援を出した方が――」

「貴女達機動六課は、スカリエッティの方に集中してください。地上を心配してくれるのは、同じ局員として誇らしい程ですが……今は、優しさよりも合理性を優先させるべき状況ですよ」

「……っ」

なのはの言葉を制して、諭すようにハヅキが続ける。

その言は至極最もで、それを理解している彼女はそれ以上言葉を続けられずに息を呑んだ。

ハヅキはそんな彼女に向かって笑いかけ、その近くまで歩み寄って軽く肩を叩く。

「大丈夫ですよ。私も伊達に“女帝”と呼ばれている訳じゃない。貴女達の代わりとは言いませんが、代役程度ならばキチンとこなしてみせましょう」

「ハヅキさん……」

「それに、貴女達が手早く首謀者を確保できれば、地上の混乱も治まる。

その為にも、そちらには少しでも多く戦力を残しておくべき……違いますか？」

「……はい」

なのはに向かってそう言いながら、楽しげな笑みを浮かべるハヅキ。

彼女の笑みにつられて、なのはも小さく笑ってその言葉に頷いた。

「では、私は地上に戻ります。なに、さっさと片付けて貴女達の応援に駆けつけますよ」

なのはが頷いたのを確認してから、ハヅキは制服の裾を翻し、ブリーフィングルームの入口を目指して歩き出す。その足取りは高らかで、なのは達に見せる背中からは、地上で起きていることに対する不安など、微塵も感じさせることはない。

まさに“女帝”という彼女の2つ名に相応しい、威厳に溢れた後ろ姿。

毅然と歩くハヅキの背中を、ブリーフィングルームに居る誰もが溜息と共に見送った。

と、入り口の扉が開いたところで不意にハヅキが振り返り、ブリーフィングルームに居る六課の全員を見回し、深々と頭を下げて短く告げる。

「ハヤトを……弟を、頼みます」

「はい。任せてください」

「絶対、絶対に！　ハヤトの事、助けますから！」

「……ふふ、頼もしいな」

局員としてではなく、1人の姉としてのハヅキの言葉。

その言葉になのはが確りと頷き、スバルは少し興奮気味に答えを返した。

ティアナ達も言葉こそ無かったが、全員がその目に確りとした意思の光を宿して彼女に頷いて見せる。そんな彼女達を見て、ハヅキは嬉しそうな笑みを浮かべてブリーフィングルームの扉から出て行った。

◇◇◇◇◇

その光景を一言で表すならば、『惨劇』と言う他には無いだろう。

【――――――――――ッッッッ！！！！！】

「「「うわあああああっ！？」」」

白い外皮に身を包んだ白天王がひとたび尾を振るえば、その風圧

だけで地上に展開した魔道士部隊が吹き飛ばされ、陣形に穴が開く。
そして、浮き足立った魔道士達目掛けて地雷王が放った雷が彼らを襲う。
更にダメ押しとばかりに無数のインゼクトもそれに続き、ガリューがそれと共に集団の中へと突進、目に留まらぬ程の速度で次々と打倒していった。

「――っ！！」

その光景を、ルーテシアは真紅に染まった双眸で見つめていた。
今、彼女の思考を占めるのは全てを消し去ってしまいたいという破壊衝動と、母を奪われたくないという恐怖にも似た防衛本能だけだ。

「あああああああっっっ！！」

彼女が何かに耐えかねたかのように絶叫する。
すると、それに呼応して白天王がその尾を振るい、地雷王達が雷を飛ばす。
目標など定めてはいない。ただ、目の前にある物全てを破壊する為だけの攻撃。辺り構わず振るわれるその暴力は、しかしクアットロの思惑通りアインヘリアルとその周辺に展開していた管理局の部隊に壊滅的な被害を齎した。

仮にクアットロがまともな指揮官であったなら、この辺でルーテシアに攻撃を止めさせ、別の場所に移動させるなり一度撤退させる

なりという判断をしただろう。
けれど、クアットロにとってルーテシアは既に切り捨てるのが決定した駒。
その駒に対する配慮など、彼女が持ち合わせている筈も無い。

「うあああああっ！！」

再び絶叫が響くと共に、白天王の腹に埋まった紫の宝玉から閃光が放たれる。
閃光は一直線にアインヘリアルがあった丘の先端へと直撃し、轟音と共にその場所をを吹き飛ばし、無理矢理に大きく形を変えさせた。その時に起きた爆風は遠く離れているルーテシアの元まで届き、抉られた地面の欠片が辺りに降り注ぐ。
その破片はメガーヌの生体ポッドの周辺にも降り注ぐが、ルーテシアにそんなことなど気にかけている様子は窺えない。それは、クアットロが彼女に施した洗脳処理――コンシデレーション・コンソールの効果であろう。
破壊衝動のみを特化させるその効果により、ルーテシアは自分の母を失いたくないと思いつつ、その母を危険に晒すという、矛盾した行動を取っていた。

「――――ッッ！！！」

けれど、ルーテシアは止まらない。
真紅の双眸で全てを睨みつけ、絶叫を合図として自身の召喚した者達に破壊を告げる。

合図と同時に振るわれる暴力を見つめる彼女の瞳からは、いつしか涙が流れていた。

それは果たして彼女の意志が流させたものかどうか、それは分からない。

けれど、涙は止まらず流れ続け、ルーテシアの頬を濡らしていく。

「あああああああああああああああっっっっ！！！！」

涙を流しながら叫ぶ彼女の姿は、まるで誰かに助けを求めるようで。

しかし彼女が求めている人も、彼女の声に答えてくれる人も……まだ、ここには居なかった。

ｓｉｄｅ：―　了

if50話　『出撃　1』（後書き）

師走だからって忙しすぎだろ常識で考えて。
どうも、ラモンです。

そんな訳で出撃編その1をお送りしました。
今回はハヅキオンステージに近い状態でしたかね。
うん、すっげー書き辛かったです。
最近の仕事の妙な忙しさも手伝って、文章が出てこない出てこない……。本気でどうしようかと思ったくらいです。
出来れば年内に終わらせたかったんですが、ちょっと無理そうですね。

さて、次回はアニメとほぼ同じ場面になります。
サクサクっと書ければいいなぁ……なんて思いつつ、頑張って書いていこうと思ってます。
時間がかかっても怒らないでくださいね（汗）

それではまた、次の話で。

if51話『出撃 2』

side：―

『皆、揃っとるな？』

ブリーフィングルームに、はやての声が響く。
その声を聞くのは、縦長の机の前に並べられた椅子に座る機動六課の前線メンバー達。
ヴィータやシグナム、そしてアルトといった先ほどまでは別の用事で席を外していたメンバー達も合流し、機動六課の全戦力がそこに集まっていた。

『レジアス中将と最高評議会が、今回の事件に関わっとるのは、もう明白や。
どんな理由があったにせよ、中将と評議会は異形の天才犯罪者、ジェイル＝スカリエッティを利用しようとした……けど、逆に利用されて、そして裏切られた』

一語一句、確認するようなはやての言葉を、ブリーフィングルームに居る誰もが黙って聞く。

『どこからどこまでが誰の計画で、何が誰の思惑なのか……それは分かれへん。

そやけど今、巨大船が空を飛んで、街中にガジェットとアンノウンの巨大生物が現れて市民の安全を脅かしてる。これは事実や』

そこで一旦言葉を区切り、はやてが前線メンバーの顔を見回す。全員が確りとはやての映るモニタを見上げ、直ぐにでも戦えるという気迫を顔に表している。

その顔を見て、彼女は安心したように一度小さく微笑んだ後、表情を引き締めて言葉を続けた。

『絶対に、私達が止めなあかん』

「……ゆりかごには本局の艦隊が向かってるし、地上のガジェットやアンノウンには、ハヅキさん達陸士部隊を始めとした地上の部隊が協力して対応に当たってくれてる」

「だから私達は、ゆりかご、スカリエッティのアジト、2つのグループに分かれて行動するよ」

はやての言葉を引き継ぎ、なのはとフェイトの両隊長が続ける。戦場という意味では他にも色々な場所があるが、実質この事件の中心となっているのは『ゆりかご』と『スカリエッティのアジト』の2箇所。そこさえ押さえてしまえば、ガジェット達は止まる筈なのだ。

アンノウンについては不確定だが、それでも街中に展開しているガジェットさえ止めれば、それこそ地上本部の戦力を総動員して対処に当たることも出来る。

「私とヴィータ副隊長、そしてＦＷの５人はゆりかごに。
フェイト隊長はスカリエッティのアジトに、そしてシグナム副隊長は万が一の場合に備えて待機。
……これでいいかな？　部隊長」

『うん。私もそれがベストな配置やと思う』

「え？　あの、あたし達は飛べませんけど……」

配置を告げるなのはと、それに頷くはやてに対してティアナが手を上げて質問する。
なのはを始めとした隊長陣は空戦魔道士――つまりは空を飛ぶことが可能だが、ティアナ達は飛行魔法に対する適正が少ない陸戦型の魔道士だ。空に浮かぶあの巨大戦艦に乗り込む方法が無い。

「そうだね。だから、ＦＷの皆はアルトが操縦するヘリで一緒に行ってもらう事になるかな」

「道中の露払いは、あたしとなのはがやってやんよ」

戸惑うティアナ達に、なのはとヴィータが笑って答えた。
でも、とティアナは続ける。そうまでしてＦＷである自分達がゆりかごに行く理由はあるのか、と。
確かに彼女も、出来るならゆりかごに行ってハヤトを助けたいと思っている。けれど、現状を鑑みるになのはとヴィータの２人に消耗させるのは得策では無い。ならば自分達は地上のガジェット殲滅

に行った方がいいのでは、そう尋ねた。
そのティアナに対し、はやては小さく首を振りながら答える。

『多分、あの戦艦はスカリエッティ達の計画にとって一番重要なモンの筈や。
せやから中で待機しとる戦力も一番多い……私は、そう思ってる。なら、こっちも出し惜しみしとる場合やない。全部の戦力使って、迅速に事件を解決する。そーゆー事や』

「大体だなぁ。おめーらがあたしやなのはの心配するなんて、１０年はえーっての」

はやての言葉に続いて、ヴィータが呆れたような顔をして口を開く。
言葉こそ乱暴だが、その声からは「心配するな」という彼女の意志が感じられて、隊長陣３人は素直じゃないなと苦笑いを漏らし、ティアナを始めとしたＦＷ達はそれ以上何も言わずに頷いた。

『ん、他に質問は……無さそうやな。せやったら、３０分後に機動六課出撃や！』

『了解！！』

最後にブリーフィングルームを見回し、これ以上質問が無い事を確認し終えた後、はやては一度頷いて表情を引き締め、椅子から立ち上がりながらよく通る声でそう号令を出した。

『降下ポイントまで、後３分です……』

アースラの下部にある出撃待機所に、スピーカーから聞こえるルキノの声が響く。

その声を聞きながら、なのはとヴィータ、そしてＦＷの５人は向かい合うように立っている。

彼女らがここにいるのは、出撃直前の最終確認をするため。特に、今から向かう場所――ゆりかごにはどんな状況が待っているかも分からない。だから、という訳ではないだろうが、全員の顔には少なくない緊張が見て取れる。

「今回の出動は、今までで一番ハードになると思う」

張り詰めた空気の中、なのはがそう口を開く。

「敵の戦力もまだ把握しきれてないし、向こうから誘ってきた場所

だから罠があるかも知れない」

「……」

なのはの言葉に、フォワードの5人は息を呑む。

彼女が言った事は5人も考えていた事だが、それでも自分で考えるのと、こうやってなのはから言われるのとでは実感がまるで違うものだ。

5人は知らずのうちに自分達の身体が強張っていくのを感じた。

「でもね」

そんな彼女達の緊張を悟ったのか、なのはは表情と声を緩める。

「皆、どんな状況でも頑張れるように、今日まで教えてきたつもり」

そう言って、なのはが微笑む。

彼女の言葉を継いで、今度はヴィータが口を開いた。

「つーかお前ら、あたしらに教わってんのに何がそんな不安なんだっての」

「ヴィ、ヴィータちゃん」

口を尖らせてそう言ったヴィータに苦笑するなのは。
フォワードの5人もつられるように、それぞれ小さく苦笑いしてヴィータを見た。勿論、全員がさっきの言葉をヴィータなりの気遣いだと分かっている。だから、なのはも咎めるようなことはしない。
まぁ、それでも場の空気が少しばかり緩くなりすぎたのを感じたのか、一度その空気を切り替えるように咳払いをして続ける。

「私が言うのもアレだけど……訓練、凄くキツかったよね？」

「それでも、全員ここまで良くついてきた」

「5人とも誰より強くなった……とは、ちょっと言えないけど。だけど、どんな相手が来ても、どんな状況でも、絶対に負けない位に強くなった」

言いながら、なのはは笑みを深くする。
自分の教え子を安心させるように、自信を持って戦いに臨めるように。

「守るべきものを守れる力。救うべきものを救える力。絶望的な状況に立ち向かっていける力。
ここまで頑張ってきた皆は、それがしっかり身に付いてる」

言葉と共に拳を握り、5人を鼓舞するように突き出す。

「夢見て憧れて……必死に積み重ねてきた時間。
どんなに辛くてもやめなかった努力の時間は、絶対に自分を裏切らない。
……それだけ、忘れないで」

「厳しい状況をビシッとこなしてこそ、ストライカーだかんな」

「「「「「はい！」」」」」

微笑むなのはと不敵に笑うヴィータに、５人は自信に溢れた顔で確りと頷いた。
その返事を聞いて、なのはとヴィータは大丈夫だと感じたのだろう。こちらも満足そうに頷く。
それから、なのはは５人を見回して出撃の号令を告げる。

「それじゃあ、機動六課フォワード隊、出撃！」

「さっさと準備しねーと、置いてくからな！」

「「「「「了解！」」」」」

告げられた号令に、５人は見事な敬礼を返した。

◇◇◇◇◇

同じ頃、陸士部隊が集まる地上本部前にハヅキの姿があった。
その身に纏うのは地上本部の制服ではなく、彼女のデバイス――レオンハルトの起動形態である真紅の軍服。ロングコートのようなその裾と腰まで届く金色の髪を風に揺らし、自分の前に整列している陸士１０１部隊の面々を眺めている。

「……何故、私がこんな演説の真似事をせねばならんのです」

「お前の方がこーゆーのに向いてるからだよ。俺ぁこーゆーのは苦手なんでな」

ハヅキは一度深々と溜息を吐いてから、隣に立つ陸士１０１部隊隊長、ミハエルを恨みがましい視線で見つめた。けれどミハエルは気にした様子も無く肩を竦め、明後日の方を見ながら口笛を鳴らした。

「副隊長である私より、ミハエル隊長がやった方が士気が上がると思うのですが？
それに、私はこういうのは苦手だと何度言えば分かるのです」

「いーんだよ。俺みてぇなムサいおっさんが言うより、お前みてぇな綺麗どこがやった方が嬉しいってモンだ。いーからさっさとやれ、隊長命令ってヤツだ」

「……後で覚えておいてください」

最後に底冷えする程に低い声でボソッと呟いてから、気を取り直すように息を吐いて視線を整列する局員達に戻す。

「……」

ハヅキの前に並ぶ局員の顔には、漏れなく緊張と恐怖が浮かんでいる。

そんな顔を見て、ハヅキは仕方の無い事かと思った。地上本部は、本局と対を成す、いわば管理局のもう一つの総本山とも言える場所だ。その膝元であるミッドチルダにおいて、これほどの規模で何かが起きたという事は今まで無かった。

それはつまり、そこで働く局員達がこういう状況に不慣れだという事。

しかも、今回は相手に完全と言っていい程に先手を取られてしまっている上に、戦艦型ロストロギア『聖王のゆりかご』の登場、巨大な生物によるアインヘリアル強襲と絶望的な状況ばかりが重なってしまっている。これで怯えるなという方が無理な話だろう。

だが、これからハヅキ達陸士１０１部隊はその一角、巨大なアンノウンが強襲しているアインヘリアルで戦う陸士部隊へと応援に行かなくてはならない。

そんな時に、これだけ士気が低くては勝てるものも勝てない。

（確かにこれは、誰かが士気を上げねばなるまいな）

呼び戻され、いきなり彼らの前に立たされて「演説でもして士気を上げろ」とミハエルに言われたハヅキは、怯える隊員達を見てそう思った。

彼女個人としてはこういう見世物の様なことは嫌いなのだが、それでもやらないと彼らの命に関わるということは理解している。だから、ハヅキは仕方ないかと溜息を吐いて顔を上げ、胸を張る。

「……私は、君らに無理をしてアインヘリアルの所まで一緒に来いとは言わん」

一呼吸置いて、彼女の薄いルージュが引かれた口から放たれた言葉に、整列した局員達の間にざわめきが広がる。常のハヅキならば、こういう場面なら「死ぬ気で戦え」とでも言うだろう。

隊員達はそれを知っているからこそ、彼女の言葉に驚いた。

「恥ずかしい話だが、私だってあの巨大な敵を恐ろしいと思う。だから、君らがアレに恐怖を覚えても、咎めたりはしない。代わりに、しっかりとミッドを守ってくれればそれでいいと、私はそう思う」

「お、おいハヅキ――」

「だが」

わざわざこちらの戦力を減らすような事を言うハヅキに、ミハエルが口を挟もうとした。しかし、ハヅキは彼を目で制し、それから視線を上げて、ミッド市街の空を悠々と横切ろうとしている『ゆりかご』を見て言葉を続ける。

「君らより歳若い少女達が、あの空を飛ぶ戦艦に突入しようとしている。
中に何が待ち受けているか分からんのに。罠であるかも知れないのに……だ」

大声ではないのに、しっかりと響く声。
その声を聞いて、ざわめいていた隊員達の声が止まる。

「人は、敬愛するものの為に戦うものだ。彼女達……機動六課のエース達は、ミッドの為に戦おうとしてくれている。己の戦いをしようとしてくれている者達に敬意を払う為に、私は戦おうと思う。
他の誰の為でもない、私が心から敬愛する彼女らのために」

そこで一度言葉を切り、ハヅキは拳を天に突き上げた。
自然、隊員達の視線もそこに集中する。

「だから」

言葉と共に軍服の裾を翻して隊員達に背中を見せ、そのままゆっくりと歩を進めながら――

「私と同じように、彼女らの勇気に応えたい者はついて来い。あの戦艦で悠然とふんぞり返っている奴らに見せてやろうじゃないか。

私たち陸士部隊が、貴様らの思っている程に弱くない事をな」

――不敵な笑みを浮かべながら、最後にそう締め括る。

果たして、彼女の背から聞こえてきた声は。

『おおおおおおおっっ！！！』

天を揺らさんばかりの、隊員達の咆哮だった。

「……や～れやれ。何が苦手だよ、対した演説だったじゃねーか」

歩き出したハヅキの隣に、ミハエルが意地の悪い笑みを浮かべて並ぶ。
対するハヅキは苦虫を噛み潰したような顔をして、隣に並んだ彼の顔を見上げて呟く。

「恥ずかしくて死にそうですよ、全く」

「はっ、そう言うなよ。いい加減お前に隊長職を譲りてーんだ、その予行演習だと思っとけ」

「だから、それはお断りしてるでしょう。隊長だって、まだお若いんですから」

「４０近いおっさんに、何言ってんだか」

並び立って歩きながら、ハヅキとミハエルはお互いに小さく笑う。
そして、後ろから隊員達の足音が近づいてくるのを耳で確認してから、少しずつ足を早め、走り出す。
目指すのはアインヘリアル。そこで暴れる敵を打倒すべく、陸士１０１部隊は出撃した。

◇◇◇◇◇

「ふぅん、ハエが色々と動き出したみたいねぇ」

玉座の間。ヴィヴィオが座らされている玉座の隣で、自分の周囲に浮かぶ無数のモニタを眺めながら、クアットロはさして興味も無さそうに呟いた。すでに彼女の隣にアインの姿は無く、ヴィヴィオは痛みによって気絶している為、その声に対する返事は無い。

「まぁ、地上の虫は放っといていいでしょ。どうせ、ルーテシアお嬢様の白天王に勝てる人間なんて存在しないだろうし、仮に勝てたとしても、その頃にはゆりかごは空の上。

２つの月の魔力を受けて、難攻不落の要塞となった後。そうなってしまえば、例え本局の次元航行艦隊が相手でも渡り合える……そうなってしまえば、後は全て私のモノ」

クアットロは愛おしげな声でそう呟きながら、ゆりかごの設計図が映るモニタを撫でた。

「うふふ。ドクターが私達ナンバーズを総動員してやろうとしてたことを、たったこれだけの戦力で出来るんだから、私って優秀よねぇ。自分で自分が怖くなっちゃう」

自画自賛しながら、クアットロはヴィヴィオの頬に指を這わせた。

ヴィヴィオは意識が無い中で、それでもその指から逃れるように少しだけ身を捩る。

「エースオブエースも、私の狙い通りに動いてくれてるみたいですし？　罠だって分かってても突入するって選択肢しか取れないなんて……ほぉんと、呆れちゃうお馬鹿さんの集まりよねぇ」

そんなヴィヴィオの様子を気にした風も無く、クアットロは続けてアースラを映し出しているモニタへと視線を向け、侮蔑の笑みを浮かべた。

そのモニタでは、今まさになのは達が出撃している場面が見える。

「……今現在、戦力として厄介なのはエースオブエースと雷神、そして夜天の主とその守護騎士達。

そこさえ潰してしまえば、残るのはガジェットにも梃子摺る雑魚ばかり」

他のモニタから聞こえる悲鳴をＢＧＭとして、まるで歌う様に呟く。

「私に逆らえるだけの力を持った人間は、誰一人として残さない……絶対に、どんな手を使ってもね」

モニタを見つめるクアットロの視線から楽しげな色が消え、背筋が寒くなる程の冷たい色が浮かぶ。

「さぁ、急いて急いていらっしゃいな。愚かなエースオブエースとそのお仲間達。
今なら大サービスで、とびっきりの絶望と、あの世への片道切符を無料で差し上げますわ。
あはははは！　あはははははははっっ！！」

玉座の間に、クアットロの哄笑が響く。
途切れることなく延々と、高らかに。

まるで、戦いが始まる合図とでも言うかの様に――。

ｓｉｄｅ：―　了

ｉｆ５１話　『出撃　２』（後書き）

ようやく書けました。
どうも、ラモンです。

はい、出撃編完了。
大体の対戦カードを決定してみましたが、わかりましたかね？
ハヅキは白天王（＋ルーテシア）の相手をさせることになりました。

しかしアレなんですよね。
白天王の強さを調べようとＮａｎｏｈａＷｉｋｉを見てた時なんですが。
こんな一行がありました。
↓六課の前線メンバーで対抗出来るのは、キャロのヴォルテールのみ。

（　。д。）

（つд⊂）ゴシゴシ

（　。д。）

（つд⊂）ゴシゴシ

（；。д。）　↓キャロのヴォルテールのみ
｜　．　｜
（；。Д。）

リアルでこんな反応しました。

ハヅキ勝てなくね？　なのは達よりも強いってなんですか白天王さん。
なので、本気でどうするか考えたんですが、そこいら辺は上手くバランスとって書こう、という結論に至りました。
白天王はもっと強い！　と思われる読者さんもいらっしゃるとは思いますが、どうかご勘弁ください。

次回からはいよいよ決戦開始です。
六課の皆の頑張りをご期待ください。
……最近仕事が忙しいので、今回みたいに投稿まで時間が空いちゃうかも知れませんが、必ず完結までは投稿しますのでご安心ください。

それではまた、次の話で。

if52話　『出撃　3』

side：―

「スバル！　ちょっと待って！」

出撃する為にヘリの格納庫へと向かっているスバルを、息を切らせて駆けて来たマリーが呼び止めた。
呼ばれたスバルは足を止めて振り返り、自分の側で荒い呼吸を整えるマリーを見る。

「ど、どうしたんですか、マリーさん？　そんなに慌てて」

「ちょ、ちょっとね……はぁ、はぁ……」

呼吸を整えながら、マリーは握っていた自分の右手をスバルに向けて差し出し、開く。
開かれた彼女の掌に乗っていたのは、赤い宝石が嵌った銀の指輪。
それは、今はここに居ない少年が振るっていた、『勇気の心』という名を冠するデバイス。

「ブレイブハートがね、どうしてもスバルのトコに連れて行って欲しい、って」

「ブレイブハートが……？」

マリーの言葉に少し驚きながら、スバルは視線を銀の指輪に移す。
その視線を感じたのか、それまで一言も喋らなかったブレイブハートが、核である赤い宝石に淡い光を灯して言葉を発した。

《　スバルさん。私を貴女と共に連れて行ってくれませんか？　》

「……私と一緒に？」

良く通る女性の声で、ブレイブハートは短く告げる。
まさかそんな事を言われると思っていなかったスバルは、思わず首を傾げて聞き返した。
現状、使う人間が居ないブレイブハートは言い方は悪いがデバイスとしての価値は殆ど無い。一応スバルが使おうと思えば使えるが、彼女には既にマッハキャリバーというデバイスがある。他のフォワードメンバーも同じくだ。
だから、仮にブレイブハートが彼女らと共に行ったとしても大した働きは出来ない。
勿論それは、他の誰でもないブレイブハート自身がよく理解している。

《　私が一緒に居ても大した役には立たないでしょうが、それでも通信役程度のことは出来ます。
……お願いします。私を、マスターハヤトのところまで連れて行ってください　》

自分のマスターであるハヤトが、死んでしまっていたと思っていたハヤトが生きていて、空を飛んでいる巨大戦艦に居ると知って、ただ待つことなど出来る訳も無い。
その気持ちは、スバルにもよく分かる。

「……うん。一緒に行こう、ブレイブハート」

だから、スバルはブレイブハートの言葉に頷いて銀の指輪をマリーの手から受け取った。
そしてブレイブハートを制服のポケットに入れようとした所で、ブレイブハートが再び言葉をかける。

《ポケットの中では、いざという時に困ります。
スバルさんが邪魔でなければ、どちらかの指に嵌めて頂けませんか？》

「え？　あ、うん。わかった……はわっ！？」

言われるまま、スバルは無意識にブレイブハートを自分の左手の薬指に嵌め、その直後に自分の左手を見て、耳まで顔を赤くした。
とはいえ、他に嵌めのに丁度良い指も無いので、嵌め直すことはせずにそのままマリーに頭を下げ、ヘリに向かって駆け出す。
ブレイブハートを嵌めた自分の左手を、大切そうに握りしめながら。

「……」

ゆりかご内部、玉座の間からは離れているものの、そこに通じる一本道の通路。
その通路を守るように道の中心に立ちながら、アインはじっと通路の先を見据えていた。
勿論、まだ彼の殲滅目標である機動六課が突入してきた、という情報は聞いていない。とはいえ、他の魔道士が突入してくる可能性が０とは言い切れないだろう。

「……」

アインは無言のまま右手を動かし、自分の周りにモニタを３つ開く。
映し出されている映像は、ゆりかご周辺、アインヘリアル周辺、ミッドチルダ市街の３箇所。
どの映像でも無数のガジェットが画面狭しと動き回り、迎撃しよ

うとする魔道士達との激しい弾幕合戦が始まっている。とはいえ、情勢はＡＭＦを装備しているガジェットの方がやや優勢……といったところだろうか。

「現状、問題無し」

自分側の有利を悟ったアインはそう短く呟き、モニタを閉じる。

モニタを閉じてアインが黙ると、通路には静寂が訪れた。もとより、ゆりかごの中にはアインとクアットロ、そしてヴィヴィオ以外には待機状態で配置されているガジェットしか居ない。

だから、この静寂はある意味必然だと言えるだろう。

まぁ、元々アインにはそんな事を気にするような感情は無いので、特に何かがある訳でもない。

彼はただ前を向き、暫く後に来るであろう機動六課と戦うシミュレーションを頭の中で行っていた。

『アインちゃ～ん』

「……はい。何でしょうか、クアットロ姉様」

そんな時、彼の前にクアットロからの通信用モニタが開く。

アインは思考を中断して姉である彼女の声に答える。

『さっき、機動六課の連中が出たから、教えておくわねぇ？

早ければあと２０分くらいでそこを通ると思うから、準備はしておくのよ？』

「勿論です。姉様のお手は煩わせません」

『んふ♪　いい子ねアインちゃん。それじゃあ、一応貴方の目的を復習しておこうかしら。
アインちゃん。貴方がそこでやるべき事はなぁに？』

クアットロに問われ、アインは彼女から言い渡されていた目的を復唱する。

「ここに突入してきた時空管理局員のうち、エース・オブ・エースを除いた全局員の排除。
その際、タイプゼロのファースト、セカンドが居た場合、可能ならば捕獲すること。それ以外の局員については生死を問わず……これでよろしかったでしょうか？　クアットロ姉様」

『はい、よくできました～』

返ってきた答えに、クアットロは満面の笑みで頷いた。
そんな彼女をモニタ越しに見ながら、アインは無表情なまま確認するように続ける。

「エース・オブ・エースは、ここを通せばよろしいのでしょうか？
それとも、私が玉座の間に直接転送しましょうか？」

『通せばいいわよ～。わざわざ、こっちの手の内を見せてやることもないでしょ』

「了解しました」

『それじゃあ頑張ってね、アインちゃん？　上手く出来たら、後でご褒美あげるから♪』

「勿論です。クアットロ姉様」

上機嫌でアインの言葉に答えてから、クアットロはモニタ越しにひらひらと手を振って通信を終えた。

モニタが閉じた後、再びアインが立つ通路に静寂が訪れる。そんな中で、アインはまた1人静かに瞑目した。そして、彼が目を閉じるのに呼応してその右手に一本の杖が出現する。

「……？」

彼の右手に握られていたのは、なのはが使うレイジングハートによく似た魔杖。もしクアットロがこの映像を見ていたなら、顔色を変えていただろう。

右手に現れたのは、アインがまだ“ハヤト”であった時に使っていた彼だけのデバイス――ブレイブハート。しかしその記憶が無い今のアインは、自分の意志とは関係無しに突然発動いた固有武装『ライト・トゥ・クリエイト』を見て、不思議そうな顔で首を傾げるだけだった。

「……記憶該当無し。エラーと判断」

暫くの間、右手に握った黒いブレイブハートを眺めた後、アインはそう短く呟いて右手を振る。そうすると、彼が握っていた黒いブレイブハートは真紅の光となって霧散していった。

霧散する光を見つめるアインの瞳に一瞬意志の光が宿るが、それは直ぐに消えていく。

そうして真紅の光が完全に空気に溶けた後、アインは再び瞑目し、腕を組む。

――ここに来るだろう、機動六課の面々を待ちながら。

◇◇◇◇◇

「なのはちゃん、ヴィータ。フォワードの子らの事、よろしくな」

「おうよ」

「任せて」

「フェイトちゃん。シスターシャッハが一緒やけど、無理せんようにな？」

「大丈夫だよ」

「シグナムとリイン、2人は地上本部に向かってるあの騎士をお願いや。
　ハヅキさん達が何とかしてくれる言うとったけど、流石に空戦魔道士の相手は辛いやろし」
「お任せください」
「お任せですよ！」
　アースラ下部の降下ハッチの前で、はやては自分の前に並ぶ隊長達に向けて、最後の確認と言葉をかける。その言葉に全員が力強い頷きを返し、それを見たはやては安心したように頬を緩めた。
　すると、タイミングよくハッチ開放を告げるルキノの声が響き、重い音を立ててハッチが開く。
「ほな、いこか！」
「「「「「了解！」」」」」
　はやての言葉に答え、同時に全員が開いたハッチから飛び出した。
　アースラの現在地は遥か上空。飛び降りた全員の頬を、吹き抜ける風が叩く。
『機動六課隊長、副隊長一同。能力限定、完全解除……』

その風の中、全員の耳に聖王教会理事、騎士カリムの声が届く。

『はやて、シグナム、ヴィータ、なのはさん、フェイトさん。皆さん、どうか……！』

「しっかりやるよ！」

「迅速に解決します」

「お任せください！」

切実な彼女の声に答えるのは、はやて、フェイト、なのはの３人。３人ともが自信の篭もった笑みを浮かべ、それぞれ自分のデバイスを手に握る。

『リミット……リリース！』

彼女らの言葉を聞いて、通信の向こうでカリムが頷く気配が聞こえる。

直後、なのは達の体がそれぞれの魔力光に包まれ、全員が自分のバリアジャケットを身に纏った。

◇◇◇◇◇

「あっは♪」

ゆりかごの先頭部分にある玉座の間。

そこにあるヴィヴィオが座らされている玉座の隣に立ちながら、クアットロは流れるように自分の周りに浮かべたパネルを叩きつつ、楽しそうな笑いを漏らした。

彼女がパネルを叩くたび、ゆりかごの砲座から青い閃光が空を裂き、進行を阻止しようと展開した航空魔道士部隊を叩き落していく。

「ふんふふ～ん……おっと、あんまりやりすぎて、折角ご招待した人たちまで落とさないように気をつけないと。楽しいから、意識しておかないと手が滑っちゃいそうですし。ねぇ、陛下？」

「う、ぁ……」

コロコロと笑いながらヴィヴィオに同意を求めるものの、気絶しているヴィヴィオが答える筈も無い。

けれど、クアットロは元より返事など期待していなかったのだろう。特に気にした様子も無く、再びパネルを叩く作業に戻る。その姿はまるで演奏でもしているかのようで、彼女がそれをする事で起きる結果を知らなければ、多くの人間が見惚れるような美しささえ感じられた。

「さっき出撃したのは確認したからぁ……後はタイミングを見計らって、ガジェットちゃん達を動かして道を作ってあげないとねぇ。放っておいてもガジェットちゃん達を蹴散らしてくるだろうけど、わざわざ自分から戦力を減らすのも馬鹿らしいもの」

言いながら、横目でなのは達が映っているモニタを見る。

そこに映っているのは、ゆりかごがある方向へと向かっているヘリと、そのヘリを護衛するように周りを飛行しているなのはとヴィータの2人。

パネルを叩く手は止めずに見ながら、クアットロはつまらなそうに鼻を鳴らした。

「ふぅん。こぉんな少ない戦力なんて……舐められたわねぇ。執務官は餌の方に食いつくと思ったけど、まさかエース・オブ・エースと守護騎士のおチビちゃん、それから半人前が5人……ね。その程度で、アインちゃんの相手が務まればいいけど」

クアットロは困ったな、とばかりに片眉を上げた。

彼女からしてみれば、ここに突入してくる機動六課の局員達は、アインの性能を試す絶好の試金石なのだ。エース・オブ・エースは万全を期す為にクアットロが自分で片付けるとして、そのほかの人間はアインで打倒することで、自分の理論が間違っていないことを証明する。

その為に、わざわざ機動六課だけに直接ああして、宣戦布告染みたことさえしたのだから。

だというのにアインと戦う者が弱くては、そうまでした意味が無

い。

「ま、その時はその時で、本局に直接殴りこませちゃえばいいわね。もうアインちゃんは何時でも量産できるし、最悪死んでも問題ないものねぇ」

モニタを眺め、手を動かしつつ呟く。

そうしながらも、横目でなのは達を観察することは忘れない。

「そろそろドゥーエお姉様も、邪魔な老害を始末してくださってる頃かしら。

それが終わったら、後の始末はあの死に損ないに任せればいいでしょ。丁度、あっちも地上本部に向かってるみたいですし。

うふふ。ルーテシアお嬢様を見捨てるなんてねぇ……お嬢様ったら可哀想♪」

何もかもが自分の思い描いた通りに進んでいる事に、クアットロは自然と浮かぶ笑みを抑えられないでいた。誰よりも優秀であろうとする彼女からしてみれば、こういう展開は自分の優秀さが証明されたようで、楽しくて仕方ないのだろう。

その昂ぶりを逃がすように、クアットロはかけていた眼鏡を取り、髪を解く。

「ああ、そういえばまだ“コレ”の起動確認、してなかったわねぇ」

そこでふと思い出したように、ひとつだけ赤く光っていたパネルを叩く。
瞬間、玉座を囲むようにして、極彩色の結界がドーム状に広がった。

「?型ちゃ～ん。ちょっと攻撃してみてくれる～?」

結界が発動したのを確認してから、クアットロは近くに待機させていたガジェット?型に指示を飛ばした。その指示に応え、?型はおもむろに自分のアームを点に向けて伸ばし、そのまま全力でクアットロとヴィヴィオ目掛けてアームを振り下ろす。
振り下ろされたアームは一直線に結界へと向かい、あらん限りの力を持って結界とぶつかる。

重低音の打撃音と共に、触れた場所から凄まじい火花が散って、同時に電撃がアームを伝って?型へと殺到する。そして次の瞬間には、?型の巨体は玉座の間に響く程の大音量と共に爆発した。

「うん、完璧ねぇ♪」

パラパラと降り注ぐ?型の破片を見ながら、クアットロは満足そうに言葉を漏らす。

「これがあれば、エース・オブ・エースも怖くない。

後は、陛下を盾にじわじわ甚振ってあげれば……んふふ。自分の才能が怖くなっちゃう」

楽しげに笑みを零しつつ、1人呟くクアットロ。
右手に握った眼鏡を弄びながら、それでも左手でパネルを叩き続けるあたりは流石と言うべきか。
勿論、周りに展開したモニタの全てを観察することも忘れない。

「こっちには手札がまだまだあって、向こうの打てる手は殆ど潰したしぃ。
後はもう、こっちがただ一方的に蹂躙するだけねぇ……あははっ、た～のしみぃ♪」

弾む声で言いながら、右手で弄んでいた眼鏡を握り潰す。
握り潰した破片を床に投げ捨てながら、クアットロは何度目になるかわからない哄笑を響かせた。
モニタの向こうに映る、自分を止める為に動いている時空管理局の局員達を眺めながら。

ｓｉｄｅ：―　了

if52話　『出撃　3』（後書き）

決戦編だ！　と思ったら、出撃編がまだ続いていたという罠……。
どうも、ラモンです。

年末で忙しい仕事の合間を縫って書いてて、ようやく書けました。
そんなこんなで『出撃　3』をお送りしました。
ホントは『決戦　1』でもいいかと思ったんですけど、内容的にはどう見ても出撃編だったので（汗）

今回のメインは裏ヒロイン（笑）ブレイブハート、最近影の薄い主人公ハヤト、ラスボスウザットロ（神崎さん命名）、の3人でした。
次回からは……次回からはいい加減決戦編に入りたい、と切に願う私です。

さて、一応予定では次回こそ『決戦編』に入る筈です。
盛り上げていきたいですねぇ……盛り上げられれば、ですけど（笑）

それではまた、次の話で。

※追記
先日の12月22日をもって、私がここに投稿し始めてから丁度1年が過ぎました。
クリスマスに書けなかった腹いせも兼ねて、1周年記念の番外編を書こうと画策しております。
内容は、ハヤト×ティアナのだだ甘な話か、ハヤト達の訓練校時代

の話のどちらかを予定してます。
年末年始は忙しいんで、投稿出来るのはもうちょっと後になりそうですが、それなりに楽しみにしてお待ちくださいませ～。

if53話　『決戦　1』

side：―

空を悠然と飛ぶ揺り籠。
その周辺は、まさに激戦区と呼ぶに相応しい様相を呈していた。
絶え間無く襲い来る飛行型ガジェット。
間断無く揺り籠の砲門から撃ち出される、紫色の砲撃。

航空魔導師隊を率いるはやては、その攻撃の激しさに内心舌打ちしながらも、それをおくびにも出さずに指示を飛ばし、飛んでいるガジェットを撃ち落す。
それでも、敵の数は全く減らずに、むしろ増えているようにさえ見える。
敵も味方も入り乱れている為、はやてお得意の範囲殲滅魔法も使えない。

（やっぱり、外からやなくて中から何とかせなあかんか……）

アースラよりも巨大な揺り籠を見上げ、はやては苦々しげな顔で考える。
巨大すぎる揺り籠には、いかにはやての魔法を使ったとしても、決定的な打撃とはならないだろう。
止める為には、内部に突入して動力を何とかしなければいけない。

『２４番射出口より、小型機多数！』

『南側の射出口からも……こちらは市街地降下型です！』

「！」

思考を遮るように、散らばっている航空魔導師達からの報告がはやてに届く。

はやては揺り籠攻略の考えを一旦頭の隅に置き、思考を前線指揮官のそれへと切り替える。

「皆、落ち着いて！　拡散されたら手が回れへん。叩ける小型機は空で叩く、潰せる砲門は今のうちに潰す！　ミッド地上の航空魔導師隊、勇気と力の見せ所やで！」

『はい！！』

はやての叱咤に、彼女の指揮下にある航空魔導師隊は力強く答え、それぞれのデバイスを構えた。

彼らの頼もしい返答に頷きを返しながら、はやてはゆりかごに向けて飛ぶなのは達の方を見る。

（なのはちゃんとヴィータ、それからフォワードの子らの周りには敵が全く行ってない。そのくせ、他の局員が同じ軌道に入ると容赦なく叩いてくる。……招待受けたモン以外は入るな、ってことやろな）

冷静にその状況を分析しつつ、はやては彼女らに注意を払うのをそこで止めた。
あの調子ならば、放って置いてもなのは達は特に消耗することなく、ゆりかごの内部に突入出来るだろう。だから、自分がやるべき事に集中しようと思考を切り替える。

（アルトのヘリ、送りはええけど帰りも見逃して貰えるとは思えへん。
せやったら、アルトが無事に帰れるように、最低限安全なルートは確保してあげへんと）

いくつかの思考を並行して行いながら、手に握るシュベルトクロイツを振って周りに指示を出す。
もちろん、合間を縫って航空型である？型ガジェットを撃ち落すのも忘れない。

「私は暫くこっちに釘付けやな……なのはちゃん、ヴィータ、皆、中の方は頼むで」

ゆりかごに向かって飛んでいくなのは達を最後にちらりと横目で見て、はやては小さく呟いた。

「何か、ちっと拍子抜けだな」

ヘリを先導するように飛びながら、ヴィータは周りの戦況を見て声を漏らした。

てっきり、突入組である自分達は一番激しい攻撃を受けると思っていたのに、実際蓋を開けてしまえば自分達に対する攻撃は全く無い。周りでは激しい戦闘が行われているのにも関わらず、だ。

まるでアリの大群の中に意志でも放り込んだように、なのは達の周りだけがぽっかりと空白地帯のようになってしまっている。

「誘い込まれてる……って事だろうね。向こうとしては、全力の私達と戦いたいんじゃないかな」

「はっ。舐められたモンだぜ、あたし達もよ」

推察するように語るなのはの言葉に、ヴィータは凶暴な笑みを浮かべた。

なのはの推測は、要するに「全力の自分達と戦っても勝てる」と言われたようなもの。

ベルカの騎士……戦闘に対する力に誇りを持つ身であるヴィータ

からすれば、そこまで舐められて黙っていられる訳が無い。

「まーいいさ。周りの連中には悪いけど、今は中に入るまで体力も魔力も温存させて貰う。
んで、中に入ったら思う存分暴れてやるさ」

「だね。私達が早く中を制圧できれば、外で戦ってる他の局員達も楽になるだろうし」

「っしゃ！　じゃあ、とばしていくぜぇっ！！」

「あわわ、ヴィータちゃん待って！　そんなに急いだら、アルトのヘリが追いつけないよ！！」

気合を入れて速度を上げたヴィータを慌てて諫めるなのは。
攻撃が無いとはいえ、2人の後ろを飛んでいるヘリは殆ど非武装に近い状態なのだ。流石に2人が近くにいなくては危ないだろう。
けれど、テンションが上がりきってしまったのか、ヴィータはどんどん飛ぶ速度を上げていき、最終的にはヴィータだけが大分先行する形になってしまった。

「もう、しょうがないなぁ」

そんな彼女の背中を見て一度だけ苦笑し、それからすぐに表情を引き締める。
なにせ、彼女達の目の前には、先ほどよりも更に巨大になった戦

艦があるのだから。

「……」

見ているだけで圧倒されるその姿に、なのはの背を冷たい汗が流れた。

けれど気後れしている暇は無いとばかりに頭を振り、気を取り直すように息を吐いてから自分の手に持ったレイジングハートを握り直す。

そうしている間にも、近寄るもの全てを拒絶するような威容を放つ戦艦はどんどんと近くなっている。

恐らくあと2，3分もすれば、先にクアットロから指定された突入口へと到着するだろう。

「……待っててね。ハヤト君、ヴィヴィオ」

そこに居るだろう2人の名前を呟き、手に力を込める。

威容を見せつけながら空を飛ぶゆりかごと彼女らの距離は、既に目と鼻の先と言っていいものになっていた。

◇◇◇◇◇

同時刻、もはや殆ど更地に近い状態になってしまったアインヘリアル周辺。

その中心には、敵などほぼ残っていないというのにそれでも尚、咆哮を上げて暴れまわる白天王の姿がある。周辺には地雷王の姿も見えるが、やはり最も目を引くのは白天王だろう。

時折、アインヘリアル周辺に配置されていた部隊の残存していた局員達が散発的に反撃するものの、統制の取れていない散発的な攻撃など、有効打となり得る訳もない。結果として、ただ自分達の居場所を教えるだけとなり、白天王によって一瞬でなぎ払われていく。

山のような白天王がこれだけ暴れまわっているこの場で、まだ死者が出ていないのは奇跡と言っていいだろうか。それも時間の問題、という程の有様ではあるが。

「ハァッ……ハァッ……」

白天王が暴れる場所からかなり離れた場所。

まだ森が残っているそこの一番大きな木の根元で、ルーテシアは滝のような汗を流しながら、胸元を押さえて荒い呼吸を繰り返す。

彼女がここまで消耗している原因は、勿論過剰と言って然るべき数の召喚だ。

召喚というものは、召喚する行為だけでも魔力を消耗するが、その後にも維持コストとして永続的にじわじわと魔力を消耗していく。召喚しているのが、彼女が出来る召喚の中でも最も強力で、究極召喚とまで呼ばれる類の白天王ならばなおさらだ。

「……ハァッ」

けれどルーテシアは白天王は勿論、地雷王さえも送還しようとはしない。
普通なら、限界が近くなれば召喚した生物を戻して、一時的に体力と魔力の回復を待つ。だが、今のルーテシアは普通の状態には無い。
ただひたすらに敵をなぎ倒し、全てを破壊する事だけを至上としている。
正確に言うなら“そうさせられている”のだが。

「寂しいのは、嫌だ……」

荒い呼吸を繰り返しながら近くにある自分の母が浮かぶ生体ポッドに縋りつき、搾り出すように呟く。

「一人ぼっちは、もう、嫌だ……」

彼女の呟き呼応して、暴れている白天王が咆哮を上げ、その腹部にある巨大な紫の宝玉に魔力が集まり始めた。ルーテシアはそれを見ていないが、それでも白天王が自分の意志に副う行動をしてくれているのはわかる。

「だから……皆、消えちゃえっっっっ！！！！」

【――――――っっ！！！！】

何度目かの白天王の咆哮と、腹部から奔る光。
その光は再び地面を抉り取り、凄まじい爆音と衝撃を齎すかに思われた――が。

「ファング……バスタァァァァッッッ！！！」

地面へと向けて直進した光は、しかしその真逆から煌いた真紅の砲撃によって阻まれる。
ぶつかり合う白天王が吐き出した紫の光と、迎え撃つ真紅の光。
その2つのぶつかった中心から、爆音と残っていた周りの木をなぎ倒す程の暴風が溢れ、その直後に両方の光が相殺し終えて消えた。

「……っ！？」

その光景を遠くから見て、ルーテシアの背中に疲労から流れる汗とは別の汗が流れた。
召喚主であるルーテシアは、白天王の強さを一番良く知っている。
彼女の切り札とも呼べる白天王は、それこそ1体だけで地上本部を壊滅させるだけの力を有している。その白天王が、一切の加減無し

に放った砲撃を真正面から相殺した砲撃……それを撃った魔道士は、どれ程の力を持っているというのか。

ルーテシアの居る位置からは、その恐るべき力を持った魔道士の姿は見えない。

白天王の影になっているという事もあるが、２つの魔力がぶつかった際に起こった土煙がもうもうと立ち込めているからだ。

「やれやれ、流石に今のは肝が冷えたぞ。デカいだけあって、魔力も桁違いだな」

土煙の向こうで、砲撃を打ち消した魔道士が呟く。勿論、その声は白天王の遥か後方に立っているルーテシアに聞こえる訳も無く、呟いた魔道士もルーテシアにではなく、目の前に居る山のような白天王に向かって呟いたのだが。

「全く、髪が乱れてしまったじゃないか」

立ち込めていた土煙が晴れ、その向こう側に1人の人影が見える。人影は腰まで届く長い髪をバサッとかき上げ、乱れた前髪を直すように手櫛で軽く梳きながら、白天王に向かって言葉を続けていく。

「さて、冗談はここまでとしよう。見たところ、言葉が通じるとも思えんしな」

そう言ってゆっくりと構えを取るのは、魔力の光と同じ真紅の軍服を身に纏い、豪奢な金色の髪を風に揺らす女性――地上本部に置いて女帝と呼ばれる魔道士、ハヅキ＝ロックウェル。
彼女は白天王を見上げ、何も持たぬ両手をゴキゴキと鳴らして握りこむ。

「それでも、一つだけ忠告しておこう」

そして――。

「覚悟しておけデカいの。今の私は、少しばかり虫の居所が悪いぞ？」

――呟きと共に、凄惨な笑みを浮かべた。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

「う～……」

「あーもー鬱陶しい！　大人しくしてなさいよ！」

「だ、だってぇ……」

ヘリの中に座ってる間、どうしても落ち着かなくてもぞもぞと身体を動かしてたら、ティアに怒られちゃった。でも、仕方ないじゃん。もう少しで、ハヤトの事を助けに行けるって思うだけで、何て言うか……こう、落ち着かないんだもん。

「今そうやってもぞもぞしてて、本番で疲れましたーなんて言ったら承知しないわよ。
あたし達は、絶対に失敗出来ないんだから」

「わ、わかってるよ？」

「……ホントかしら」

うー、ティアが信用してくれない。
確かにちょっと気分が昂ぶってるってのは否定しないけど、それはティアだって同じだと思うんだけどなぁ。だって……だって、ハヤトが生きててくれた。
あのクアットロって奴に変な事されちゃってたけど……それでも、生きててくれたんだ。
それが、嬉しくない訳ないよね。

「スバル。気持ちはわかるけど、もうちょっと落ち着きなさい？
あと少し……ほんの数分後にはあのゆりかごに突入するんだから。
今の気持ちは、中に入ってから思いっきり発散すればいいでしょ？」

「ギン姉……」

2人に言われて、落ち着かないから動かしてた身体を意識して止める。
でも、やっぱり落ち着かなくて、どうしても身体が動いちゃう。
あと少しで、ハヤトに会えるんだ。
あたしの事を忘れちゃってたのは……凄くショックだったけど、けど、だからっていつまでも下を向いてたって仕方ない。あたしは、絶対にハヤトを助ける方法があるって信じてるから。

「……そんなに気を張らなくても大丈夫でしょ。
あたし達がするべきなのは、ゆりかごに突入して、全力で戦って。
そして……あたし達の事を忘れてるあの馬鹿をぶん殴ってでも、絶対にあたし達の事を思い出させる。それだけ」

「それだけって……」

なんでもない事みたいに言うティアに、ちょっと苦笑した。

きっとティアも分かってる。言ってる内容が、本当は凄く難しいって。

ハヤトが何をされたかわからないし、方法はあるって信じてるけど……どうやったらハヤトに思い出して貰えるか、その方法は全然思いつかないから、そこはちょっとだけ不安。

でも――。

「大丈夫よ、スバル。私も、ティアナも、エリオ君とキャロちゃんも。何より、ヴィータ副隊長と、なのはさんが一緒に居てくれるんだから」

「……うん！」

ギン姉の言葉に、あたしはしっかりと頷く。そう。あたしには、皆が一緒に居てくれる。

あたし1人じゃ全然どうしたらいいかわかんないけど、それでも、皆が居てくれれば大丈夫だって、そう思えるから、落ち込んだりなんてしない。

「エリオ、キャロ。頑張ろうね！」

「はい！」

「頑張りますっ！」

反対側に座ってるエリオとキャロにそう言って、小さくガッツポーズ。

うん、気合は十分。緊張は……ちょっとしてるけど、別に支障が出る程じゃない。逆に、これくらいの緊張感があった方が戦いやすい。

『もう直ぐ降下ポイントだから、皆準備してて！』

そんな時、ヘリを操縦してるアルトの声が響く。その声に返事をしながら、あたしは立ち上がってマッハキャリバーを起動。バリアジャケットを身に纏う。

よし、と小さく呟いて、それから自分の左手を見た。

正確に言うなら、左手の薬指に嵌めた、銀色の指輪――ブレイブハートを。

「……待っててね、ハヤト。今、助けに行くから」

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「……待っててね、ハヤト。今、助けに行くから」

スバルの呟きを聞いて、それに同調しそうになった口を慌てて閉じる。

今のあたしはフォワードを率いる立場。自分の感情に振り回されちゃいけない。

そんな事をしたら、ここに居ない、あたし達の事を忘れてるあの馬鹿に何て言われるかわかったもんじゃないしね。……まぁ、実際アイツが何か言ったら、ぶん殴るけど。

って、違う違う。今はそういう事を考える時じゃない。

「……はぁ」

昂ぶった自分の神経を落ち着かせる為に、息を吐く。

自分でも驚く程に熱い息が漏れ、同時にごちゃごちゃしていた思考も落ち着いていった。

そうすると、今度は違う自分が表に出てくる。

出てくるのは、冷静で、ともすれば冷酷だと自覚している自分。

これからあたし達が乗り込むのは、敵の本陣。しかも、相手にわざわざ誘われていくのだから、罠だって絶対にある……そんな、危険な場所だ。

だから、私情は挟んじゃいけない。あたしのミスは、皆の命に関わるかもしれないんだから。

もちろん、そんな事は無いって自信を持って言えるけど。それでも、ちゃんと全員で帰る為に。

感情的な部分は、スバルに任せよう。そういうのは、あの子の方がずっと得意だから。
その分、あたしが誰よりも冷静になろう。そうすれば、きっと上手くいく。
あたしに出来ないことは誰かがやってくれて、そいつが出来ない事をあたしがやる。チームっていうのはそういうモノだ、ってあの馬鹿が教えてくれたから。

「よし」

だから、今は全部ここに置いていこう。
あの馬鹿がくれた、一人の女としての安らかな思いも。
あの馬鹿に感じる、このはちきれんばかりの思いも。
いまは、置いていこう。

アイツを連れて変える為に。
みんな一緒に、無事に帰る為に。
共に戦う仲間と、待っていてくれている人たちの為に。

「それじゃあ、機動六課フォワード隊。行くわよ！」

「「「「了解！」」」」

あたしは、あたしに出来る事を全力で頑張ろう。

side：ティアナ＝ランスター　了

if53話　『決戦　1』（後書き）

今年最後の更新……に、なるのかな？
どうも、ラモンです。

いよいよやって参りました、決戦編。
最初に遭遇したのは、ハヅキ姐さんと白天王。何か、ハヅキ姐さんが悪役に見えて仕方ないのは何故でしょうね（笑）
そしてフォワード勢からは、メインヒロインのスバルとティアナの2人の心情をお届けしました。ティアナの方がヒロインっぽくなっちゃった気がします（汗）　まぁ、アレです。ティアナルートで使い切れなかったヒロインポイントを消費したんですよ、きっと！ｗ
でも、何だかんだで久しぶりの一人称を書いた気がします。最近はずっと三人称視点でしたからねぇ……。

さて。
次回はいよいよアインと遭遇するスバル達を書こうと思ってます。
その他に、旦那もちょろっと書けたらいいなー……。書けたら、ですけどね（笑）

それではまた、次の話で。
皆様よいお年を～。ガキ使楽しみだなぁ。

if５４話　『決戦　２』

ｓｉｄｅ：―

「……」

彼の中に登録されている魔力パターンを感知し、アインは目を開けた。

アインが感じた魔力は、７つ。なのはとヴィータ、そしてスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガの５人だ。まぁ、アインからすれば、名前などさしたる意味を持たないのだが。

「……」

沈黙したまま、アインは組んでいた腕を解き、軽く動かしてチェックする。

彼からしてみれば、姉達と戦った時以来の全力戦闘となる。その時になって、身体に問題があって負けました、ではお話にならない。

解いた腕を２、３度握り、開くという事を繰り返しついで自分のシステムをチェックしていく。

その作業は数秒で終わりを告げ、今度は戦う時のように腰を落とし、半身に構えた。

「しっ！」

短く吐き出された呼吸と共に、彼の右手が空を裂く。
突き出された右拳は、文字通り目にも留まらぬ速さで動き、パァンッ！　と破裂するような音を立てて静止した。音を立てたのは空気。響いた音は彼の拳がそれ程の速度で動いたという証。
自分の視線の先にある拳を見つめ、アインは続けざまに今度は右足を振り抜く。すると再び空気を切り裂く音がして、閃光を思わせる速度で彼の右足が空間を切り裂いて動いた。

「……身体機能、問題なし」

右足を振り抜いた格好のまま、そう呟いて身体の緊張を解く。
それからアインは右手を動かして、ゆりかごの内部地図を表示しているモニタを空中に開き、そのマップ上を高速で移動している光点を見た。
ひとつはゆりかご後部にある駆動炉方向へ。
そして……残りの６つは、彼が待つ玉座の間に通じる方向へ。

「現在位置、Ｐブロック。こちらに到着するまで、おおよそ５分」

光点が動く速度から、その光点が示す者――突入してきた機動六課が自分の居る場所まで辿りつく時間を逆算、確認するようにポツリと呟くアイン。
モニタを見つめる彼の瞳には、相変わらず何の感情も無い。
ただ無機質にモニタの中を動く光点を見つめるだけ。

「……タイプゼロ・セカンド」

しかし。その名前を呟いた時、一瞬だけ彼の目に意志の光が宿ったように見えたのは、果たして見間違いだったのか否か――。答えを知る者は、誰も居ない。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ５４話　『決戦　２』

地上本部に向け、ゼストは隣にアギトを連れて空を飛ぶ。
やはりルーテシアと白天王が目を引いているせいだろう。地上本部まで後数百メートルという距離だと言うのに、空を守る局員達の姿は見当たらない。
その状況を幸いとし、彼は飛行する速度を上げる。
少しでも早く自らの目的を果たし、叶う事なら、ルーテシアを助けに行く為に。

「……む」

「旦那、あいつ等！」

そうして飛行を続けるゼストの正面に、人影が映った。
人影を見つけたゼストとアギトは、自分達の進路上に浮かぶその人影の前で静止する。
２人の前に立つのは桃色の髪を結い、白と桃色の騎士甲冑に身を包む騎士――シグナム。そして、銀の髪を揺らす融合機――リインフォース？。

「……局の騎士か」

「本局機動六課、シグナム二尉です。前所属は首都防衛隊……貴方の後輩という事になります」

「そうか」

短く問いかけたゼストに、シグナムは淡々と答えを返した。
そして、シグナムもまた短く彼に問いかける。

「中央本部を、壊しにでも行かれるのですか？」

「古い友人に……レジアスに会いに行くだけだ」

対するゼストの返答もまた、短く簡潔なもの。
低く、力強い彼の声からは、彼が語ったこと以外の意志は感じ取ることは出来ない。

「それは……復讐のために？」

けれど、シグナムはそう尋ねずには居られなかった。
彼の経歴を調べた彼女からすれば、ゼストがそういう選択肢を選ぶ可能性も、決して低くは無い。
誇りを重んじる騎士と言えど、元を正せば“人”なのだから。

「言葉で語れる事ではない。……道を、開けてもらおう」

シグナムの問いに今度は答えず、ゼストはそう短く告げる。

「言葉で語って貰わねば、譲れる道も譲れませぬ」

対するシグナムは小さな声で告げ、頭を振った。

「勿論、ただ通せとは言わん」

彼女がそのように答えるのは分かっていたのだろう。
ゼストはそう言いながら、自分の懐から一枚のディスクを取り出す。
それは、彼が以前ウーノから渡されていたディスク。クアットロ

がルーテシアに、そしてハヤトに対して使っている洗脳プログラムに対するアンチプログラムが入ったディスクだ。

「これを使えば、今起きている一連の事件を終息させる手助けとなるだろう。
このディスクを渡す代わりに、そこをどいては貰えないだろうか」

「……残念ですが」

ゼストの提案に、しかしシグナムは首を振る。
そして、腰に下げた鞘から愛剣レヴァンティンを抜き、構えた。
同時に鍔の少し上の部分からリロード音と共に薬莢が一つ吐き出され、刃を真っ赤な炎が覆う。

「どのような条件を出されても、貴方の目的を語って頂けぬ以上、ここをお通しする訳には参りません」

「……そうか」

彼女の返答を聞いたゼストは、短くそう答えただけだった。
それから、彼もまた自分の得物である槍を構え、シグナムと対峙する。

「……」

「どうした、アギト？」

「え、あ！　な、なんでもねぇ！」

構えたゼストが、隣で驚いた表情をしているアギトに尋ねる。その声で正気に戻ったのか、アギトは慌てて否定の言葉を返し、眦を吊り上げてレヴァンティンを構えるシグナムとリインを睨みつけ、ゼストとユニゾンしながら大声を張り上げる。

「グダグダ語るなんてなぁ！　騎士のやるこっちゃねえんだよっ！！」

アギトの言葉に返すのは、同じ融合機であるリイン。

彼女もまたシグナムとユニゾンを始めながら、大きな声で答えた。

「騎士とかそうじゃないとか！　意地を張ってお話しないから、戦うことになっちゃうんですよ！」

2人の言葉が終わると同時に、ゼストとシグナム、両者のユニゾンも終わる。

金色の髪と真紅の目。そして金色の鎧を纏う、烈火の剣精をその身に宿すゼスト。

薄桃色の髪と紺碧の瞳。銀に煌く鎧に身を包む、祝福の風に包まれしシグナム。

『うっせぇバッテンチビ！
剣精アギト、大義と友人ゼストが為に！　この手の炎で、推して参る！！』

『祝福の風、リインフォースツヴァイ。管理局の一員として、貴方がたを止めさせてもらいます！』

ユニゾン状態のアギトとリインの両者が名乗りを上げる。
その様は、まさに騎士の一騎打ち。
彼女らの言葉に呼応するかの如く、シグナムとゼストの間に流れる空気が次第に緊迫を増し、ついには触れれば切れてしまいそうな程に張り詰めた。

そして――。

「……行きます」

「……こちらも、行くぞ」

短く告げられた言葉と共に、２人の騎士の戦いが始まった。

◇◇◇◇◇

「ヴィータ副隊長、大丈夫でしょうか？」

通路を走りながら、少し前を飛ぶなのはに向かってティアナが問いかけた。

彼女が問いかけた内容の中心であるヴィータの姿は、通路を走る彼女達の側には無い。

ここに突入してすぐ、彼女達が向かう玉座の間とは正反対の方向にある駆動炉を破壊する為、１人でそちらへと向かったのだ。

「大丈夫だよ。ヴィータちゃん、強いもん」

視線を通路の先から動かさずに、なのはは彼女の問いに答える。

そう言った顔はティアナからは見えなかったが、聞こえてきた声にはヴィータに対する絶対の信頼を感じ取ることが出来た。

ヴィータが１人で駆動炉に行くと言った時、当然ながらティアナ達は揃って反対した。けれど、その反対を却下したのはヴィータではなく、なのはだった。

『ヴィータちゃんなら、大丈夫だから』

突入した中で、誰よりもヴィータと共に戦ってきた彼女だからこその言葉。

その言葉にティアナ達は反論できず、駆動炉にはヴィータが1人で向かうことになった。

「……」

けれど、なのはだって不安が無い訳ではない。
相手の戦力はまだ未知数。ナンバーズが全部で何人いるかも分からないし、そのうちの何人がこのゆりかごに居るのかも分かっていない。そんな状況で、ヴィータを1人にしていいのかと聞かれれば、勿論いい訳は無いのだ。
それでも、なのははヴィータを信じた。長年、一緒に戦ってきた彼女を。

「それに、私達が早く解決しちゃえば、ヴィータちゃんの応援に行ける。でしょ？」

「……そうですね」

少し前を飛ぶ彼女の言葉に、ティアナは頷く。
どの道、自分たちフォワード個人での戦闘能力は隊長達にはまだまだ及ばないのだから、どちらかに着いていくとしたら、結局はなのはかヴィータ、どちらかが1人になるのだ。なら、片方を全力で終わらせて、少しでも早くもう片方へ応援に行くのが得策だろう。
自分の中で思考をそう完結させ、ティアナは地面を蹴る足に力を込める。
他の皆もそう思ったのか、スバルやギンガ、エリオにキャロの4

人も走る速度を上げた。

「次の角を曲がれば、後は一本道……っ！」

言いながら角を曲がったなのは達の視線の先。

無機質な金属製の板が張り合わされて出来上がった通路の先に、全員が１人の影を見つけた。

その影を認めたなのはが、驚きに息を呑んで足を止める。

スバル達も同じように小さく息を呑み、走っていた勢いを無理矢理に殺して立ち止まった。

何故か。

「……」

答えは簡単。

彼女らの目の前に、１人の少年がその進路を遮るようにして立っていたから。

そして、その少年が……彼女達がここに居る理由のひとつだったから。

「ハヤト……」

少年の名を呼んだのは、誰であったか。

呆然と呟かれたその声が耳に届いたのだろう、瞑目していた少年が目を開ける。
開かれた目は、青と金色のオッドアイ。左目で輝く金色の目は、まるで少年がなのは達の知る少年とは違うのだと雄弁に語るかの如く、爛々と輝く視線で彼女らを射抜いていた。

「お待ちしていました。機動六課の皆様」

元はハヤトと呼ばれた少年――アインは組んでいた腕を解いて、そう言って恭しく頭を下げる。
そんな彼の態度に、スバルとティアナが辛そうに眉を顰めた。けれど、アインはそんな彼女らには一切構おうとはせず、先頭に立つなのはだけに話しかけた。

「エース・オブ・エース、高町なのは一尉。貴女だけはここをお通しするようにと、クアットロ姉様から言付かっています。どうぞお通りください」

「……私、だけ？」

「はい。私にはクアットロ姉様の意図はわかりかねますが、そういう命令ですので」

問い返すなのはに淡々と答え、道を譲る。

「他の皆は、通っちゃ駄目なのかな？」

「はい。他の皆様は、私がここで排除するように、と」

淡々と。

本当に淡々と受け答えを繰り返すアイン。

言っている内容は、とてもではないが淡々と語るべきことではないのに、だ。

「もし私を全員で打倒してから、とお考えでしたら、再考なさった方が良いかと。

ゆりかごが完全浮上するまであと２０分弱程度しかありません。

私を打倒している間に、その程度の時間などあっという間に過ぎてしまいますので」

「……そう」

頭の片隅で考えていた事を先に否定され、苦い顔でなのはが呻く。

（どうしよう……明らかに罠だと思うけど、ハヤト君が言うように時間が無いのも確かだよね。

けど、だからってハヤト君を無視するのも……）

なのははベストな選択を模索して必死に思考する。

ハヤトは間違いなくなんらかの改造――恐らくは戦闘機人に関す

る――を受けているだろうから、戦闘能力はなのはが知るハヤトとは大きく異なっている。一度気絶させようにも、そこに至るまでにどれ程の時間がかかるか計算出来ない。かと言って、そんなハヤトをフォワードの5人に任せるのも不安が残る。

どうすれば一番いい結果を残せるのか、地上本部が襲撃された時に自分のせいでハヤトがこうなってしまったという責任を感じているなのはは考える。

しかし、こうして考えている間にも時間が過ぎていくという事を自覚しているせいか、一向に考えは纏まってくれようとはしない。

「なのはさん、行ってください」

そんな時。彼女の後ろから、聞きなれた声が聞こえた。

驚いた表情のなのはが振り返れば、そこには自信に溢れた表情で笑う、自分の教え子達。

「ハヤトの事はあたし達に任せて、なのはさんはヴィヴィオを」

笑顔でそう告げるスバル。

ティアナとエリオ、キャロ、ギンガも彼女の言葉に頷き、笑顔を見せる。

「スバル……でも……」

「大丈夫です！　ハヤトにおしおきするなら、あたし達が一番慣れ

てますから！」

躊躇うなのはに、スバルは場違いな言葉と明るい笑顔を返す。

「そうですよ。あの馬鹿の相手をわざわざなのはさんがするなんて、時間の無駄ですし」

「ハヤトさんなら、僕達で何とかします！」

「なのはさんは、ヴィヴィオを助けてあげてください！」

「ハヤト君にちゃんとお説教してから、直ぐに合流しますから」

スバルに続いて、ティアナ達も声を上げる。

そんな彼女達の言葉を聞き、なのはは小さく吹き出してしまう。

そして同時に、彼女達を過小評価していた自分に、小さな恥ずかしさを覚える。彼女の教え子達は、いつの間にかこんなにも成長していたというのに。

「……うん。それじゃ、私は先に行くね？」

「「「「「はい！」」」」」

自分の言葉に全員が頷くのを見て、なのはは嬉しそうに笑いながら駆け出した。

アインは先に言った言葉の通り、自分の横を通り抜けていくなのはを見送り、彼女の背中が遠くなったあたりで視線を前……スバル達へと戻す。

「……ＩＳ『ミラー』及び、固有武装『ライト・トゥ・クリエイト』起動。
モデル『烈火の将』。武装モデル、『レヴァンティン・イミテーション』」

呟かれた言葉に呼応し、スバル達を見つめる左目が妖しく光る。
瞬間、アインの足元に真紅のベルカ式魔法陣が展開し、右手にはシグナムと同じ形状をした漆黒の剣が握られていた。

「あれって……！？」

「シグナム副隊長の……」

それを見たエリオとスバルが驚愕の表情で声を上げた。
ティアナ達も、声こそ出さないものの同じ驚きの表情を浮かべている。

「……戦闘準備完了」

黒に染まったレヴァンティンを構え、アインはゆっくりと顔を上

げた。
青と金のオッドアイが5人を真正面から射抜き、彼女らを打倒するという意志を雄弁に語る。
だが、その視線を受けてもスバル達は最早怯まない。
――彼を、ハヤトを必ず助けると心に決めたから。
――自分達を鍛えてくれた人に、そう約束したから。

「ティア、皆、行こう！」

「当然！」

「ええ！」

「「はい！」」

スバルが拳を構えて高らかに声を上げ、ティアナ達がそれに答える。
そして、次の瞬間にはスバルを先頭に全員がアインに向かって駆け出す。
彼にこれ以上間違ったことをさせない為に。彼を止める為に。

「戦闘開始。目的……機動六課の打倒」

そんな彼女達と対するアインは、淡々とそう呟いて地面を蹴る。
ただ彼女達を打倒する為に。
ただ、姉であるクアットロの命令に従う為に――。

ｓｉｄｅ：―　了

ｉｆ５４話　『決戦　２』（後書き）

新年あけました。おめでとうございます。
どうも、ラモンです。

新年一発目の投稿は、シグナム姐さんＶＳ旦那、ＦＷメンバーＶＳアインの対決開始でお送りしました。
さてさて、どうだったでしょうか？
ちょっとシグナムと旦那が昔の人っぽい喋り方になっちゃった気もしますね（笑）

えーと、これで一応対戦票は殆ど埋まりました。
後はなのはＶＳクアットロをやるくらいでしょうか。
ヴィータとフェイトに関しては、殆ど原作と変わらないので、今のところ書く予定はありません。彼女達まで書いちゃうと、長さが凄いことになりそうですので（汗）

次回はなのはＶＳクアットロ開幕と、ＦＷメンバーＶＳアインを書いていければと思っております。
なるべく頑張って、１～２月中には完結させたいと思っていますので、本年も『とある新人の日常』をよろしくお願い致します。

それではまた、次の話で。

※ちょっと質問なのですが、１話の文章量はこのくらいで問題ないでしょうか？　それとも、もう少し多い方がいいでしょうか？　何

となく気なったので、ご意見を伺えればと思います。

if55話　『決戦　3』

side：―

「邪魔っ！！」

狭い通路を塞ぐように湧き出すガジェットの群れ。
その全てを一発の砲撃で蹴散らし、舞い散る残骸の中をなのはが翔ける。
まさに鎧袖一触。エース・オブ・エースの二つ名に恥じぬ強さを見せつけながら進み続けるなのは。

「……やっぱり、おかしい」

けれど、通路の先を見つめるその表情は晴れない。
自分ひとりだけが通されたのだから、何かしらの罠、もしくは待ち伏せがあるのは覚悟していた。そしてその予想の通り、待ち伏せは確かにあった。

けれど、襲ってきた戦力は彼女が想像していたよりも遥かに脆弱なものだったのだ。
襲ってきたのは、ガジェットの群れだけ。ＡＭＦ濃度が高めなゆりかご内部では確かに少し厄介な相手だが、所詮はそれだけ。どう考えても、なのはを落とすには戦力不足と言わざるを得ない。

「玉座の間で待ち伏せしてる……？　でも、それでもこんなに手薄なのは……」

飛ぶ速度は下げず、呟きながら思考する。

本気で戦う気があるのか、と思わず考えてしまう程に、相手の攻撃は緩慢だ。

あるいはそれこそが罠なのかも知れないが、それにしてもここまで戦力を出し惜しむ必要性がどこにあるのだろうか。実はこのゆりかごこそが囮の役目で、本命は他にあるのかも知れない……なのはがそう考えたのも、無理もないことだろう。

「……」

だが、なのはは一度頭を振ってその考えを思考の外に追い出す。

どの道ゆりかごも放っては置けないし、ヴィヴィオとハヤトも助けなくてはならない。

なら今は悩むよりも、少しでも早くゆりかごを止める事に全力を尽くすべきだ、と。

「……よし」

新たに気合を入れ直し、なのはが飛行する速度を上げる。

先ほど確認した玉座の間までの距離は、もう殆ど目と鼻の先と言ってもいい程の距離。しかも、そこまでは殆ど一本道だ。このまま

何も無ければ、あと少しで玉座の間に辿り着くだろう。
待ち伏せがあっても、相手の戦力がそこに集中していたとしても、彼女のやることは変わらない。
全力で戦って、何が何でも勝って。自分の娘を助ける。今は、それだけを。

そんな風に思考を帰結させたなのはの前に、再びガジェットの群れが現れる。
今度もやはり、通路を埋め尽くす程の凄まじい数。けれど――。

「どいてっ！！！」

――その程度で止まってやれる程、彼女の決意は甘くない。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ５５話　『決戦　３』

「あらあら、やっぱり仮にもエースって呼ばれてるのは伊達じゃないってことかしら。
どれだけ数を揃えても、ガジェット程度じゃ足止めにもならないわねぇ」

ガジェットが蹴散らされていく様をモニタ越しに眺め、大して興味も無さそうに嘆息するクアットロ。
元々彼女とて、この程度は想定の範囲内。ガジェットも足止め程度の意味でしか出していない。
何せ、今まで何度も今ぐらいの数のガジェットと機動六課は戦ってきたし、その度に全滅させられてきたのだ。しかもなのはは砲撃、射撃戦のスペシャリスト。こういう狭い場所で密集していれば、砲撃で蹴散らされるのは目に見えていた。

「ま、それでも多少なりとも体力、魔力ともに削られるでしょ。万が一って可能性もゼロじゃないし……まぁどうやっても、ここまで辿り着いた時点で詰み、なんだけどねぇ」

呟きながら、獲物を前にしたかのように、チロリと赤い舌で自分の唇を舐める。
それからクアットロは、自分の右側にある玉座で気を失っているヴィヴィオへと歩み寄り、その身体を軽く揺すりながら声をかけた。

「陛下ぁ、ちょ～っと起きてもらっていいですかぁ？」

「ぅ……ん……」

何度か身体を揺すられ、小さく声を上げて目を開く。
しかし、まだ完全に意識は覚醒していないのか、どこか虚ろな目であたりを見回している。

「……あ」

その目が自分の左隣で笑みを浮かべているクアットロに向けられ、そこで始めて焦点を結ぶ。

同時にヴィヴィオは驚きと恐怖の表情を顔に浮かべ、口から声を漏らす。

「目が覚めましたぁ？」

「ひっ……！」

「あらあら、そんな反応をされると傷ついちゃいますねぇ」

声をかけられて短い悲鳴を上げたヴィヴィオに、言葉とは裏腹の楽しげな笑みを浮かべて頬を撫でる。

その瞬間、ヴィヴィオの背筋を寒気が走るが、それでも拘束されていてはどうしようもない。

「そんなに抵抗しなくてもぉ、もう少ししたらお母さんが助けに来てくれますよぉ？」

「……っ！？　なのはママが！？」

楽しげな笑みを浮かべたクアットロがそう言うと、ヴィヴィオの顔が目に見えて明るくなる。
けれど、そんな反応も彼女の予測していた通り。クアットロがより一層楽しむ為に、そうなるように演出したのだから。
そんな事は与り知らぬヴィヴィオは、彼女の言葉に嬉しそうに頬を緩めた。

「ええ。もうすぐ、陛下のだぁい好きな『なのはママ』が、陛下の事を助けにきてくれますからね」

――だが、何故だろうか。
ヴィヴィオは自分にとって朗報を語っている筈のクアットロの言葉を聞いて、何故か嫌な予感が止まらなかった。彼女の言葉が、まるで『そんな事はあり得ないけれどね』と語っているような、そんな風に聞こえてしまうのだ。
しかし、ヴィヴィオがそれ以上その事について思考する時間は与えられなかった。

「ほぉら、噂をすれば……そろそろご登場みたいですよ？」

待ち望んだ玩具がやってきた子供のように弾んだ声でそう言いながら、クアットロは何故かヴィヴィオの座っている玉座から距離をとった。
距離にして数メートル。戦闘型ではない彼女からしてみれば、どう頑張っても一足で詰められるような距離ではない。ヴィヴィオが人質である以上、そこから離れるのは愚策でしかないというのに、

だ。

「……あはっ♪」

その次の瞬間。

バガァッ！！　というもの凄い音と共に、玉座の間の入り口を塞いでいた扉が吹き飛ばされた。

宙を舞う扉の破片と、扉の前を守護していたガジェットの残骸。

その中をすり抜け、なのはが部屋の玉座の間へと突入してくる。

「っ！　見つけた！！」

突入したなのはが最初に視界に捉えたのは、アースラで見た時と同じ玉座に拘束されている愛娘。

そして、その隣で余裕という表情を顔に貼り付けている女性――クアットロ。

（他の戦闘機人は居ない……ならっ！）

一瞬で状況を把握し、なのはは桜色の魔弾を作ってクアットロへと撃ち出し、それと同時に玉座目掛けて駆け出した。

なのはクアットロが戦闘を得意としていないことは知らない。

けれど、こうして魔弾で牽制し、その隙にまずヴィヴィオを助けようと考えたのだ。

なるほどそれは正しい考えであった。
元々クアットロは独力での戦闘は出来ないし、彼女がしたように魔力弾での牽制があれば、例え戦闘型だとしても、なのはが玉座に着くのを邪魔するのは難しい。
更に言うなら、この場にクアットロ以外の戦闘機人が居たとしても、クアットロよりも離れた場所に居るのなら、なのはがヴィヴィオを確保する方が早い。

だから、彼女の判断は正しかったと言えるだろう。
しかし――正しくはあったが、些か短絡的だったと言わざるを得ない。

「きゃあん♪　いきなり攻撃なんて、こっわ～い」

何故なら、クアットロが人質であるヴィヴィオをむざむざ無防備にする訳が無いからだ。
つまりそれは、ここに何かしらの罠があるという事。
もし普段どおりの彼女なら、その可能性も考えてもう少し慎重に動いただろう。

だが、愛娘であるヴィヴィオが捕まっていて気分が昂ぶっていた事、そして何より、この部屋にクアットロ以外の敵の姿が無く、気が緩んでしまったのだろう。
理由はどうあれ、なのはは油断してしまった。
これで、ヴィヴィオを助けられる……と。

「ヴィヴィオッッ！」

「ママッ！！」

一瞬で玉座までの距離を詰め、ヴィヴィオが座る玉座の前で地面に降り、そのままヴィヴィオに向かって手を伸ばす。

伸ばしたその手はヴィヴィオに届くかと、そう思えた。

だが。

「っ！？」

ヴォン、と。空気が揺れる音がする。

その音が何なのか、それをなのはが思考するよりも早く、彼女の身体を凄まじい衝撃と雷撃が貫く。

襲い来る衝撃は、なのはの纏うバリアジャケットのあちこちを吹き飛ばしてボロボロにし、やや軽い彼女の身体を玉座の入り口近くまで吹き飛ばし、まるで物のように彼女の身体をバウンドさせた。

「か……はっ……」

どれだけの衝撃だったのか、四つん這いになって息を整えるなの

はの口から血が流れ、地面を濡らす。

「あはははははっっ！　おしかったわねぇ、エース・オブ・エース！」

一瞬でボロボロになった彼女を見ながら、クアットロが高々と哄笑を響かせた。

衝撃の余韻で揺れる視界を上げれば、ヴィヴィオが座る玉座の周りに極彩色を放つ半円形の結界が張られているのが見えた。

「何の策も無しに、大事な大事な人質を無防備にするワケないでしょう？

この玉座周辺には、任意の敵に攻防一体の強大な結界が働く仕組みになってるのよ。

丁度、さっきみたいにね」

得意気に語りながら、自分の言葉を証明するように結界の中へと歩みを進めていくクアットロ。

彼女の言葉を聞いて、なのはは自分の失態を悟る。

（焦りすぎた……罠があるかもって、ちゃんと警戒してたのに……）

しかし、今更悟ってもすでに遅い。

あれだけ警戒していたのに、それでも自分は罠にかかり、こうして少なくないダメージを受けた。その事実は覆りはしない。

「……くっ」

それでも、何時までも倒れているワケにはいかない。

罠があったのなら、間違いなく次が来ることは想像に難くないからだ。

だから、なのははレイジングハートを杖代わりに立ち上がり、構える。よろける立ち姿からダメージの深刻さは窺えるが、目に宿る意志には些かの翳りも見えない。

「……なぁんだ、つまらないわね。もう少し絶望でもしてくれると、楽しいのだけど」

「ふざけ、ないで」

詰まらなそうに口を尖らせるクアットロを睨みつけるなのは。

「ふぅん」

その視線を真正面から受け止め、その上でクアットロは眉を上げて息を漏らす。

既にクアットロは、なのはとの戦いにおける自分の勝利を疑っていない。彼女が受けたダメージは決して軽くなく、そして自分の周りにある結界は、例えなのはが全力の砲撃を撃ったとして耐えられ

るように造られている。言ってしまえば既に“詰み”であり、これ以上は唯の足掻きでしかない。
けれど――。

「……まぁ、いいわ」

なのはを見下ろしながら、クアットロが「ぱかり」と口を開けた。
それは、暗闇を切り裂いてできあがった真っ赤な空隙のよう。
その隣で玉座に座るヴィヴィオは“それ”を真正面から見て、しかしそれが意味するものを、頭では理解していながら、心では真っ向から拒絶していた。

それが――つまり、嗤いであると。

だが、クアットロは背筋を凍らせたヴィヴィオなどには構わず、楽しそうな顔でなのはを見つめ、赤い口から言葉という呪詛を漏らしていく。

「陛下を退屈させてはいけませんもの、ショーを続けましょうか。
どうせ、貴女ほど厄介な相手を生かしておく訳にもいきませんしね」

そして、彼女の言葉と共に、なのはの周辺の空間が歪む。

「……！！」

歪んだ空間を破って出てきたのは、大量のガジェットの群れ。
今まで何処に隠れていたのかと疑う程、現れたガジェットは多い。
廊下で何度も襲ってきたガジェットとは比べ物にならない程の物量だ。

「くっ……」

ついさっきまでの……ここに向かってくる途中のなのはなら、何とでもなっただろう。
だが、今の彼女は少なくないダメージを受けてしまっている。
そんな彼女にとって、自分の周りに現れたガジェットの群れは、絶望的な数にさえ見えた。
けれど。それでもなのはは諦めない。

「待っててね、ヴィヴィオ……っ！」

娘にそう言って、彼女はガジェットの群れと対峙する。
絶望を否定する為に。絶望に立ち向かう為に。

「さぁ……頑張って踊りなさい、エース・オブ・エース。
上手く踊れたら、ご褒美にガジェットのおかわりをあげるから、

ね？」

その光景を見ながら、クアットロは下卑た嗤いを顔に浮かべる。
絶望に立ち向かうなのはを、嘲笑うように。

◇◇◇◇◇

「紫電、一閃」

短く呟かれた言葉。
それと共に、彼の右手に握られた黒い剣が目の前の敵に向かって振り下ろされる。

「くぅっ！？」

受け止めるのは、炎の様に赤い髪を持った少年――エリオのストラーダ。

「ふっ！！」

「うわぁっ！？」

一度は受け止めたものの、やはり少年であるエリオは、アインの力任せな踏み込みに押し込まれ、弾き飛ばされてしまう。体勢を崩したエリオに追撃を仕掛けようとアインが踏み込むが――。

「させないっ！」

「！」

それを阻止するように、彼の右側からギンガが迫り、全体重を乗せた左拳を振るう。

しかし、それにいち早く気付いたアインは、迫る拳を身体を少しだけズラして回避する。そして、同時にアインは右手に握ったレヴァンティン・イミテーションの柄で、ギンガの鳩尾を打ち据えた。

「ぐっ！？」

「シュランゲフォルム」

《Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ.》

淡々とした呟きと共に、黒い剣の刃がバラバラと分かれ、蛇の様にうねる。

波打つ黒い蛇はギンガへと襲い掛かり、彼女の身体を包んでその牙で傷つけながら吹き飛ばす。

「きゃあああっ！」

「ギンガさん！？」

ダメージを受け、吹き飛ばされたギンガを視線で追ったティアナが悲鳴を上げる。

だが、ティアナにそんな事をしている暇は与えられなかった。

「何をしているのですか。私に集中してください」

「っ！？」

ゾクリ、と。

ティアナの背筋を冷たい汗が流れていく。

視線を前に戻せば、そこにはいつの間にか自分の前まで距離を詰めてきていたアインの黄金の髪と、自分を見据える青と金の瞳。

「戦場で敵から目を逸らすのは、愚の骨頂ですよ」

諭すように呟く彼の右手に握られているのは、先ほどまで握っていた黒い剣ではなく、同じく黒に塗り潰された柄の長い槌。ヴィー

タが使う、グラーフアイゼンの偽物だ。
ティアナが息を呑むのと同時に、その黒い槌の先端の形が変わる。

《Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ.》

「いきますよ」

丁寧な攻撃宣言と、同時に槌の片側から吐き出されるロケットの火。
何とか回避しようとティアナが動くが、それよりも早くその回転を利用した巨大な槌の一撃が彼女に襲い掛かった。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ.》

「くうぅぅぅっっ！？」

咄嗟にクロスミラージュがシールドを張るが、振るわれた一撃はそれを意に介さず、ティアナの身体を吹き飛ばして壁に叩き付けた。
ティアナの叩きつけられた壁には小さなクレーターが出来、その衝撃を物語る。

「かっ……は……」

衝撃に、肺の中の空気を吐き出すティアナ。

飛びかける意識を繋ぎとめ、ティアナは歯を食い縛ってその衝撃に耐える。
ここで意識を失うということは、敗北と直結することを分かっているからだ。

「ティア！」

「いいから！　アンタはあっちに集中しなさい！！」

ティアナへと駆け寄ろうとしたスバルだったが、そうする前にティアナに怒鳴られ、慌てて意識を目の前のアインに意識を戻す。ティアナを吹っ飛ばしたアインは、何故か彼女を追撃しようとはせず、黒いグラーフアイゼンを構えたままスバルの方をじっと見つめていた。
次は自分が相手なのか、スバルはそう考え、自分の後ろに立つキャロを庇うようにして構える。

「モデル『雷神』、『バルディッシュ・イミテーション』」

暫しスバルを見つめた後、今度はアインの手にバルディッシュが握られる。
元々黒いバルディッシュは、外見に目立った変化は無い。唯一変化があるとすれば、その鍔から伸びる黄色の刃に雷を纏っていないという事だろうか。

「ハヤト……本当に、覚えてないの？」

「何のことか、わかりかねます」

スバルの言葉に、アインは小さな声で答えて首を振る。

目の前に居るのは確かに彼なのに、返ってくる答えは否定だけ。

それは、彼が本当に全てを忘れてしまっているという、何よりの証拠だった。

「……うん。なら、それでもいいよ」

けれど。

スバルはスッキリした表情で言葉を紡ぐ。

何故なら、そうすると決めたから。自分の心に、誓ったから。

「あたしが……ううん、あたし達が、思い出させてあげるから」

――愛しい人を、絶対に助けると。

side:|了

if55話　『決戦　3』（後書き）

やっぱり書きたい場面だと筆が進みますね。
どうも、ラモンです。

さて、最後の対戦カード『眼鏡ＶＳ悪魔』の開幕です。
まぁ開幕からなのは大ピンチなんですが。
ただ、こういう場面の悪役を書くのは楽しいですね。ワクワクします。
これでまたウザットロの評判が下がるかと思うと……ククククク。

ＦＷメンバーＶＳアインもちょっとだけお送りしました。
アインの強さ、分かりやすく書けてましたかね？
力が他人の物メインなので、イマイチ書き辛かったりしてます。何故こんな能力にしたし（笑）

さて、次回は白天王ＶＳハヅキの怪獣対決と、ＦＷメンバーＶＳアインその2をお送りできればと思います。
いい感じに筆が乗れば、早いうちに投稿出来ると思います。
あまり期待せずにお待ちください。

それではまた、次の話で。

ｉｆ５６話　『決戦　４』（前書き）

※諸事情で時間がずれちゃいました。すいません。

if56話　『決戦　4』

side：―

真紅と紫。ふたつの閃光が辺りを照らしながら絡み合うように衝突、辺りの地面を波打たせる程の衝撃波が円形に広がり、少し遅れて爆発音があたりの空気をビリビリと震わせた。
その爆発の原因となった閃光を放ったのは、豪奢な金色の髪を揺らして空を駆ける女と、その女を相手に咆哮をあげて手足を振り回す、一匹の魔獣。

「はあああああっっっっ！！」

【――――――ッッッッ！！】

互いに腹の底からの声で吼え、1人と1匹は再び閃光を放つ。
何度目になるか分からない閃光同士の衝突。そしてまた何度目になるかわからない爆発。
その爆風に髪を揺らしながら、ハヅキは自分が生み出した真紅の道へと降り立った。

「ふっ！！」

短く息を吐き、ウィングロードを蹴って白天王の顔面へと肉薄、

魔力を込めて強化した足でその右頬を全力で蹴り上げる。
しかし、それは白天王の外皮に阻まれてしまい、巨体の顔を僅かに揺らすだけ。
ならばともう一度蹴りを見舞おうとするが、それよりも先に白天王の顔が彼女の方を向き、ハヅキの鼓膜を破らんばかりの咆哮を放ち、吐き出した息で彼女の身体を吹き飛ばす。

「ちっ！　馬鹿でかい声だな！！」

吹き飛ばされたハヅキは空中で体勢を整え、右手を自分の足元に沿え、何も無かった虚空に真紅の魔力で出来た道――ウィングロードを生み出してその上に着地する。

【――ッッ！！】

「舐めるなよデカイのっ！！」

着地した彼女目掛けて振るわれた白天王の腕。
まだ完全に体勢が整っていない状態で、しかしそれでもハヅキは持てる力の全てでウィングロードを蹴って空中へと飛翔した。直後、彼女がいた場所を白天王の腕がなぎ払い、展開していたウィングロードが薄氷が割れたような乾いた音と共に粉々に砕く。
それを見ながら、ハヅキは右手に魔力を集束。そのまま、サッカーボール程の大きさとなった魔力の塊を足元へと持っていき――。

「私が素手とはいえ、砲撃を手だけで撃つモノと思うなっっ！！」

――全力で“それ”を蹴り抜き、白天王の顔の間近で真紅の砲撃を見舞った。

同時に、彼女は魔力の塊を足場として空中でもう一度ジャンプし、白天王のリーチの外まで空中を移動した。そのまま彼女は流れるような動作でウィングロードを展開。再びそこに着地した。

「……さて、どうだ？」

ハヅキは体勢を整えながら、間近から自分の砲撃を直撃させられた白天王を見る。

少なくとも今の砲撃は、ゆうに並の魔道士３０人分の威力はあった。まさか、無傷という事は無いだろう……縋るように、そんな事を思いながら。

【……ッ】

「……糞っ」

しかし、そんな彼女の思いを裏切るように、砲撃の残光が消えた

先には悠然と立つ白天王が居た。
　砲撃の名残かその顔はやや煤けているものの、然したるダメージがある様には見えない。今の砲撃は、彼女の全力に近いものであったのにも関わらず……だ。

「何度か喰らわせて分かっていたが……流石にショックだな」

　悠然と自分を見据える白天王の赤い瞳を睨みつけながら、ハヅキは1人苦笑した。

ｓｉｄｅ：―　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ５６話　『決戦　４』

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「エリオ！　ハヤトの右から回り込んで！　ギンガさんは左から！」

「わかりました！」

「了解！」

エリオとギンガさんに指示を出して、あたしはハヤトに照準を合わせて引き金を引く。

余裕は無いけど、狙うのは出来るだけ手と足だけ。非殺傷設定でも、目に当たったりしたら失明するかもしれないし……って、あたしも何甘いこと言ってんだか。

「せぁっ！」

けど、あたしの撃った弾は気合と共に振るわれたバルディッシュの偽物で切り落とされる。

ったく、そんな簡単に切り払ってくれちゃって……でも、これで体勢は崩れた！

「はあああっ！！」

「でりゃあああっっ！」

振り切った体勢のハヤトに向かって、エリオとギンガさんが突撃する。

ハヤトが持ってるバルディッシュは、フェイトさんがいつも使っている両刃の大剣型をしている。

大剣は一度振り切らせてしまえば、もう一度振るまでにどうして

もタイムラグが生じる。遠心力や慣性がついた大剣をいきなり反対方向に振るなんて、ほとんど不可能。それが自分の身長と同じくらいの長さなら尚更だ。

それは、例え今のハヤトにどれだけの腕力があったとしても同じこと。それに、もうエリオとギンガさんはハヤトの間近まで迫ってる。あの距離なら、大剣は振るえない。

だから……これで！

「甘いですね」

「嘘っ！？」

けど、あたしのその考えは、目を疑うようなハヤトの行動で覆された。

「なっ！？」

「そんなっ！」

ハヤトが取った行動。

それは、剣を振り切った勢いを殺さずにその場で身体を捻り、無手のギンガさんやや短めの得物を持ったエリオよりも『速く』、一回転しながら2撃目を放ってきたのだ。

「ストラーダ！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．》

右側から迫ってくる攻撃に反応して、そっち側から回り込んでいたエリオがシールドを張る。

でもハヤトはそんなシールドなんて存在しないかのように、手に持った大剣（バルディッシュ）をシールドに叩きつけ、勢いそのまま自分の左側から迫っていたギンガさんに向かって、“エリオごと”大剣を振り抜いた。

当然、すでに攻撃態勢に入っていたギンガさんは回避出来ず、エリオを受け止めるような形で揃って吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「あうっ！」

「きゃあっ！？」

２人の悲鳴が聞こえるけど、今はそっちを見ている余裕が無い。

……こっちの攻撃は、まだ終わってないからだ。

「スバル！」

「任せて！」

「キャロ、ブーストお願い！　それとフリードで牽制！」

「はい！」

殆ど間を空けず、今度はスバルが突撃。
同時にキャロにブーストをかけてもらってあたしも全力で射撃。
あたしの魔力弾とフリードの火炎弾の援護を受けて、スバルがハヤトへと肉薄する。
ほんの僅かな時間差で撃ったから、今度はハヤトが攻撃する間も無くスバルの拳が届く筈。

「はぁっ！」

こっちの予定通り、ハヤトはまた身体を捩ってフリードの火炎弾をまず切り払う。
その直ぐ後に撃ち込まれるあたしの魔力弾は、流石に切り払えないと判断したのか体勢を崩すようにして無理矢理に回避。
あの体勢なら、流石に大剣での攻撃は出来ない！

「うっりゃあああああっっ！」

絶妙なタイミングで、スバルが拳を振るう。
今度は流石に……そう思ったあたしは、肝心な事を忘れていた。
つまり、ハヤトの得物は別に『バルディッシュの偽物』だけに限定されていないという事を。

「――モデル『タイプゼロ・セカンド』。武装選択、『リボルバー

ナックル・イミテーション』『マッハキャリバー・イミテーション』
」

「っ！？」

囁くような呟きと共に今までハヤトが握っていたバルディッシュが消え、代わりに右手と両足にスバルと似た、けれど色は黒く塗り潰されている手甲とローラーが装着された。

それを見たスバルとあたし、キャロの3人が驚きに息を呑むよりも早く、ハヤトの右足がスバルの鳩尾に突き刺さる。

「ぐ……ああっっ！？」

「スバル！」

「っ！？　ティアさん！！」

苦しげな声を上げて、スバルがあたしの横を物凄い速度で吹っ飛ばされていく。

それを目で追いかけて振り返った途端、今度はキャロの悲鳴があたしの耳に届いた。

慌てて視線を前に戻せば、そこには――。

「モデル『エース・オブ・エース』、『レイジングハート・イミテーション』。

フェイク・ディバインバスター……」

《Ｆａｋｅ　Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ．》

真っ黒いレイジングハートを握り、その切っ先をあたし達に向けているハヤトが居る。
向けられた切っ先には、桃色の魔力が球状の塊になって浮かんでいた。
……あれは、やばい！

「キャロ！　全力でシールド！！」

「は、はいっ！」

急いでキャロに指示を出しながら、あたしも自分の前にシールドを展開する。
さっきから戦ってて分かるけど、今のハヤトはなのはさん達の攻撃をそっくりそのまま……それこそ使う魔法の威力もしっかり再現出来るみたいだ。
だったら、あのディバインバスターの直撃を喰らうのはマズイ！

「……シュート」

《Ｓｈｏｏｔ　ｉｔ．》

あたしがシールドを張った直後、桃色の光が視界を覆う。
次いで襲ってきたのは、体が吹っ飛ばされそうになるような衝撃。
それは、訓練で何度か喰らったことのあるなのはさんの砲撃と、それこそ全く同じなものだった。

「くぅぅぅっっ！！」

歯を食いしばって、吹き飛ばされないように足を踏ん張る。
アタシの後ろにはキャロが居る。あの子は援護専門で、防御とかもそれ程得意じゃない。
あたしが何とか軽減してあげないと、こんなの喰らったら一発で気絶させられてしまうだろう。こんな状況でキャロが居なくなるのは、流石にマズイ。

「……く、はぁっ！」

どのくらい耐えていただろうか？
ようやく視界を覆いつくしていた桃色の光が消え、シールド越しに感じていた衝撃も途切れる。
耐え切った、と安心して軽く息を吐く。けれど、その直後にあたしは目を見開いた。

「ホッとしている時間は、ありませんよ？」

踏ん張る為に頭を下げて地面に向いていたあたしの視界。
その視界の中に、無表情でそう呟くハヤトの顔が映る。右手には、さっきと同じく真っ黒いナックルを装備して、直ぐにでもあたしを殴り飛ばせるようにと身体を捩っている。

（回避……っ！）

「ふっ！」

「「きゃあああああっっ！！」」

思考は間に合ったけど、身体がそれに追いつかない。
結局あたしは思い切りハヤトに殴り飛ばされ、キャロを巻き込むようにして後ろ……スバルが吹っ飛ばされたのと同じ方向へと身体を飛ばされた。

「ぐっ、あぅっ！」

何度か地面にバウンドするようにして、キャロとあたしの身体が止まる。
直ぐに手をついて起き上がろうとするけど、視界がぐらぐらと揺れて上手くいかない。
……こんなことなら、もうちょっと攻撃を受ける訓練もしとくん

だったわね。

「何を這い蹲っているのですか？」

そんな益体のない事を考えていると、少し離れた場所からハヤトの声。

その声に、あたしと……隣で同じように立ち上がろうとしていたスバルが顔を上げた。

視線の先に居るのは、またフェイトさんのバルディッシュの偽物を手に持ち、あたし達の方を見下ろしているハヤト。

「早く立ってください。機動六課の皆様」

目の前で必死に立とうとしているあたしとスバル……そして他の皆を見回しながら、ハヤトは言う。

まるでその声だけで殺されてしまいそうな、ゾッとする程に冷たい声で。

「私はクアットロ姉様の邪魔をする貴女達を排除する為にここに立ち、貴女達は私に排除される為に、ここへと招かれ、そして今この場に居るのですから」

……言ってくれるじゃないの、この馬鹿。

ちょっと強くなったからっていい気になって！

「舐めんじゃ、ないわよ」

「そうだよ……まだ、あたし達は負けてない」

ガクガクと震える膝に力を入れて、立ち上がる。

スバルも同じようにして立ち上がり、腕を上げて構えを取った。

そして2人揃って、視線の先で偉そうな事をほざいてくれたハヤトに向け、馬鹿にするようにさっきの台詞を鼻で笑ってやる。

ハヤトの癖に生意気だ、って。

「ちょっと優勢になったらいい気になるなんて、やっぱりハヤトよね」

「うん。それで、いつも変なトコで失敗するんだ」

「……？　何を言っているのですか？」

あたし達の言葉に、ハヤトは首を捻った。

「わかんないなら、それでいいわよ」

「うん。そうだね」

「けど、いい気にならない事ね、ハヤト。

あんたは……絶対、あたし達には勝てないんだから」

言っている間に、キャロやエリオ、ギンガさんも立ち上がって構えを取る。

さあ、教えてやろうじゃないの。ハヤトは、どんなに強くなったってハヤトでしかないって事を！

「第2ラウンド、いくわよ皆！」

「「「「おう！」」」」

side：ティアナ＝ランスター　了

◇◇◇◇◇

side：―

ウィングロードを自在に展開し、空戦魔道士と見紛う程に空を駆けるハヅキと、山の様に巨大な白天王との戦いは、一見するとハヅキが押しているように見えた。

何せ白天王の攻撃は大振りで、山のようなその巨体で狙うには小さすぎるハヅキを捉えることが出来ないで居る。対して、ハヅキの

攻撃はその悉くが命中し、強かに白天王を打ち据えているのだから。
だが――。

「ハァッ……ハァッ……」

神経をすり減らし、体力と魔力を著しく消耗しているのはハヅキの方だった。
何せ、一撃の重みが段違いだ。ハヅキが数十発の砲撃を当てたとしても、多少のダメージを与えられるだろうが、どう足掻いても倒すことは出来ない。だというのに、白天王の攻撃が一撃でも当たってしまえばハヅキはそれだけで戦闘不能になってしまうだろう。
それだけならば、まだ救いはある。

何より彼女の足枷となっているのは、周りを気にして戦わねばならない事だ。
彼女と白天王が戦っている近くでは陸士１０１部隊の仲間が戦っている。下手に白天王の砲撃を受けて流れ弾がそちらに向かってしまえば、どれだけの被害が出るか分からない……そうなると、ハヅキは白天王の砲撃を避ける訳にはいかず、真正面から砲撃で受け止めなければならないのだ。
となれば、どうしても魔力の消耗は避けられない。

「ここまで……はぁっ、疲れさせられたのは……っ、何年振りかな」

玉のような汗を流しながら、ハヅキは呟いて苦笑する。
如何にハヅキが常人離れした魔力量を誇っているとしても、所詮

は人の範疇での話。
山のような巨体と、それに見合うだけの魔力量を持った白天王と彼女とでは、まるで比較にならない。プールと水溜りとを比べるようなものだ。

「2，3発は、直撃させたというのに……図体に比例して、タフすぎる奴だよ。全く」

【〜〜〜ッッ！！】

彼女の言葉を嘲笑うように咆哮をあげる白天王。
同時に、再び白天王の握られた拳が彼女を狙って突き出された。

「ちぃっ！　息を整えさせる時間もくれんとは、融通の利かない奴だ！」

ハヅキからすれば、壁が迫ってくるような圧倒的質量の白天王の拳。
小さく舌打ちし、悪態を吐いてからハヅキは何度目になるか分からない跳躍をした。
空中に体を投げ出しながら、白天王の行動に目を光らせる。先ほど述べた通り、白天王とハヅキとではダメージレースに重大すぎるハンデがある。一度でも後手に回るわけにはいかない。

【――！！】

白天王もいい加減ハヅキを捉えられない事に苛立ちを感じていたのだろう。
右腕が空振った後、まるで駄々を捏ねる子供のように地団駄を踏み始め、手や足を滅茶苦茶に振り回した。

「そんなものに当たる訳が……っ！？」

いくら白天王の身体が大きく、そうやって手足を振り回すだけでもかなりの脅威になるとはいえ、普通ならばハヅキはそんなものには当たらない。
何せ、白天王とハヅキは人間と虫ぐらいに大きさの差がある。
狙って当てることさえ難しいのに、ただ振り回すだけで当たる筈が無いのだ。

……だが。不運なことに、ハヅキは視界の端に“それ”を捉えてしまった。
紫色の髪を持った少女と、少女の隣に置かれている生体ポッド。
勿論彼女は、それがこの白天王を召喚した少女であることなど知らない。ただ、その少女を押し潰すように、暴れる白天王の足が振り下ろされようとしているのを、見てしまったのだ。

「ちぃっ！！」

殆ど反射的に、ハヅキはウィングロードを幾重にも展開しながら

それを蹴り、自分の身体を加速させて少女のいる場所へと急ぐ。
白天王の足が迫り、踏み潰されそうになっているというのに、少女には逃げる意志が見られない。

「間に合え……間に合え……っ！」

あのままいけば、間違いなく白天王の足は少女と、その隣にある生体ポッドを踏み潰してしまうだろう。
そうなれば少女がどうなるかなど、想像するまでも無い。

「間に……合った！！！」

「！？」

最後の一蹴りと共に、ハヅキが少女の目の前に降り立つ。
突然空から降ってきた金色の髪を揺らす女性に、少女――ルーテシアは目を丸くして息を呑む。
だが、ルーテシアが何か言葉を発するよりも早く、ハヅキが彼女に向かって大声で告げた。

「死にたくなければ、そこを動くなっ！」

言うが早いか、ハヅキはルーテシアの返答など聞かずに地面を蹴り、頭上にウィングロードを展開してその上に降り立ち、そのまま

上を睨みつける。
視線の先には、今まさに振り下ろされようとしている白天王の大きすぎる足。
風を切る轟音と共に迫るそれを見据え、ハヅキは全身に魔力を漲らせてウィングロードにしっかりと足を踏ん張り、両腕を交差させて防御の姿勢を取って目の前に全力のシールドを張った。
足を受け止めるだけでは駄目。勿論受け止められないのも駄目。
ハヅキがやるべきは、この足を受け止めて明後日の方向へと向けて飛ばすこと。
出来なければ、自分と少女の命が失われるのだ。

「うおおおおおおおおおおおっっっっ！！！！！！」

直後、ハヅキのシールドと白天王の足とが激突する。その瞬間、砲撃同士がぶつかった時よりも凄まじい衝撃音が辺りに轟音として響く。
踏ん張ったハヅキの足元のウィングロードにピシリと幾つものヒビが入り、受け止めた足から伝わる衝撃がどれほど凄まじいモノかを示し、噛み締められたハヅキの奥歯が、ギシリと不快な音を奏でる。
２つの力は拮抗していたが、そのうちに体重で勝る白天王がハヅキに攻撃を当てたこの瞬間を好機と捉え、自分の全体重をハヅキが受け止めている足へと乗せる。そうなれば、体重で劣り、しかも受け止めているハヅキは一方的に不利となり、じりじりと押され始めた。
このままではハヅキが押し切られるのも時間の問題……だったが。

「舐ぁぁめぇぇるぅぅなぁぁぁあああああっっっっ！！！！！」

乾坤一擲。

腹の底から吼え、ハヅキが目の前で交差させていた腕を解き、自分の前に展開したシールドで受け止めていた足を、ありったけの力を込めた右拳で“殴りつけた”。

その細い右腕に伝わる衝撃は、いったいどれ程のものなのか想像もつかない。ただ、途方も無いその衝撃は、彼女の細い右腕を壊すには十分に過ぎたのだろう。ベキベキと鈍く嫌な音を立ててハヅキの右腕がへし折れ、激痛が彼女を襲う。

「おおおおぉぁぁあああっっ！！！！」

しかし、その程度でハヅキは怯まない。

自分を鼓舞するように大きく吼え、折れた右腕に構わず、そのままアッパーの要領で天に向かって拳を振り抜いた。振り抜いた瞬間、まるで待っていたとばかりに折れた右腕の骨が皮膚を破り、血に塗れた顔を外気に触れさせる。

しかしそれでも、ハヅキの拳は無駄に傷ついた訳ではなかった。

【――ッッ！？】

今まで下に向けて力を込めていた足をいきなり跳ね上げられた白天王が、堪らずにたたらを踏む。
果たして。右腕を生贄に、ハヅキは白天王の足を明後日の方向へと弾き飛ばすことに成功したのだ。

「ぐぅ……あああああっ！？」

だがその代償は、ハヅキの右腕だけでは到底追いつかない。
全力で殴りつけることで、足を受け止めた衝撃のいくらかは相殺出来たとしても、決して衝撃そのものがゼロになるというものではない。何せ彼女と白天王の体重差は何十倍、何百倍だ。純粋な肉体での攻撃力がイコールになることなど、絶対にありえないのだから。
拳を天に突き上げたままのハヅキの身体を、殴った時に相殺し切れなかった衝撃が襲い、彼女の身体を地面に向けて吹き飛ばす。
吹き飛ばされた彼女の身体は垂直に落ちていき、まず最初に轟音と共に地面を丸く抉ってクレーターを作り出した。しかしそれでも衝撃は消しきれず、彼女の身体は地面の上で何度もバウンドを繰り返し、まるで蹴飛ばされたボールのように地面を跳ねながら転がっていく。

その際に、白天王が暴れたことで出来た岩や木の破片に彼女の身体は何度も打ち据えられ、その度にハヅキの口からは苦しげな呻き声が漏れる。
そして何度目かのバウンドの後、ようやく衝撃が消え去ったのか、ハヅキの身体はバウンドをやめて地面の上にドサリと落ち、そのままゴロリと横たわる

「が……はっ……」

仰向けに転がったハヅキが、苦しげに息を漏らす。

受け止めた衝撃はやはり凄まじく、彼女の右腕は見るも無残に折れ、吹き飛ばされた際にぶつけた体中には、打撲や擦過傷が無数に出来ていた。更に言うなら、あまりの衝撃で意識が飛んでいて碌にシールドも張れずに岩に激突した為、彼女が受けたダメージは戦闘不能になってもおかしくない程に大きなものとなっていた。

こうして意識があるのは、彼女が日頃行っていた狂人のような訓練の賜物と言えるだろう。

「ぐぅっ……く、そっ……」

ぐわんぐわんと揺れる視界の中、ハヅキは折れていない左手を地面について立ち上がる。飛ばされた最中に切っただろう額から流れた血を拭いながら、それでもしっかりと前を向き、毅然と顔を上げる。

今この場で、彼女以外に白天王の相手を出来る人間など居ないのだから。

『ここで私は倒れる訳にはいかないのだ』と、自分に言い聞かせながら。

【グルルッ……】

そんな彼女に向かって、白天王が悠然と歩を進めてくる。
白天王からすればまさに想像していなかった幸運。鬱陶しく飛び回っていた敵に、自分の攻撃を直撃させられたのだ。ここで追撃しない訳が無い。

「……これは、流石に……困ったな」

自分に向けて砲撃を放とうと、腹の宝玉に魔力を集める白天王を見上げるハヅキの口から、ポツリとそんな弱気な言葉が漏れる。
それを合図としたように、白天王は宝玉から紫色の魔力の奔流を撃ち出した。

ｓｉｄｅ：―　了

if56話　『決戦　4』（後書き）

戦闘の連続で脳内物質がヌルヌル出てるせいか、筆が進みます。
どうも、ラモンです。

今回はアイン無双＆女帝大ピンチをお送りしました。
え？　ハヅキが一発でダメージ受けすぎだって？
いやだなぁ。人間が怪獣に生身で勝てる訳ないじゃないですか（笑）
というか、実際あんなもんだと思いますよ、怪獣の一撃を人間が受け止めたりしたら。バリアジャケットや魔力の恩恵があったから、死なずに済んだようなものです。

白天王がヴォルテールでしか倒せないというのは、そういう意味もあると個人的解釈をして、そしてそれを反映させた今回でした。
体重の違いって、やっぱりそれだけでハンデですからね。某格闘ギャグ漫画でも言っていたので間違いありません。

アイン無双は……ねぇ。
何だかアインがカッコよくなりすぎている気が……敵なのに。
ハヤトに戻れた後、このカッコよさの反動が怖いです（汗）
それから最後にいい訳をひとつ。
スバルのナックルって、厳密に言うとマッハキャリバーじゃないんですけど、正式名称が何なのかちょっと分からなかったので、今回はマッハキャリバーとしてひと括りにしました。
正式名称が分かったら、修正しようと思います。

さて。
次回は皆さんお待ちかね、旦那ＶＳシグナム姐さんをお届けします。
字数が余っていれば、アイン無双か怪獣対決の続きも書くと思いま

す。
今、脳内物質（ヤバメの）が一杯出てるので、筆がニュルニュル進みますので、意外と早くお届け出来る……かも？　内容とかにはあまり期待せずにお待ちください。

それではまた、次の話で。

※追記。
スバルのナックル、感想にて名前を教えて頂きましたので、早速修正しておきました。
よくよく考えたら、Ｎａｎｏｈａｗｉｋｉ見ればよかったんですよねｗ
うーん、ヌルヌルでた脳内物質のせいで判断力がなくなっていたようですｗ

※更に追記
１月９日に、白天王ＶＳハヅキに関する描写における、私の決定的な間違いを修正しました。
……白天王には、尻尾ナンテナカッタンダヨ。

if57話　『決戦　5』

side：―

槍と剣が交錯し、地上本部から程近い市街の空に、金属のぶつかり合う音が何度も響く。
剣を構えるシグナムは、目にも留まらぬ速度で空を飛び回り、前後左右あらゆる角度から愛剣レヴァンティンでの斬撃を見舞う。迎え撃つ槍を持ったゼストは、速度で勝る彼女を追おうとはせずにほぼ一箇所に留まり、閃光と見紛う程の攻撃を手に持った槍で全て捌いていく。
熟練の戦士2人の戦いは、まさに一進一退。どちらも譲らぬ戦いとなっていた。

静と動。

もしこの場に2人の攻防を見る者が居たならば、その誰もが息を呑んで魅せられていただろう。
空中に描かれる炎の軌跡と、いっそリズミカルにすら聞こえる剣と槍のぶつかる音色。
まるでダンスでも踊っているかのように美しく続く攻防。

シグナムも、そしてゼストも。
どちらも互いの得物を交わす度に、自分がこの戦いを楽しんでいることをまざまざと実感させられた。
お互いに決して譲れぬ目的があるというのに……だ。

「カートリッジ、ロード！」

《Ｊａｗｏｈｌ！》

短いシグナムの呼びかけに答えるレヴァンティン。
それと同時に、魔剣の刀身を炎が包む。

「はあああああっっ！！」

空中に炎の軌跡を描きながら、シグナムが翔ける。
目指す先には、両手で槍を持ち、どっしりと空中に構えるゼスト。
構えるその姿からは一分の隙も見つけることは出来ないが、隙が無くとも攻撃が出来ぬ訳では無い。

「紫電――――、一閃ッッッッ！！！」

裂帛の気合と共に振るわれる炎の魔剣。
炎を纏って空気を切り裂く魔剣は、しかしゼストの身体に届くことは無い。
常人ならば目で追うことすら困難だろう刃を、ゼストは臆する事無く手に持った槍の刃で受け止める。そうすると、何度目になるか分からない甲高い金属同士のぶつかる音が再び響いた。

「やるな」

「そちらも」

鍔迫り合いは、ほんの数瞬。

短く互いを讃えた後で、シグナムとゼストは互いの得物を振るって距離を取る。

離れた場所でお互いを見つめる2人の顔には、堪えきれない笑みが浮かんでいた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ５７話　『決戦　５』

ゼストとシグナム同士が戦っていたのは、それ程長い時間ではない。

ちゃんとした時間に換算すれば、ほんの5分程度。たったそれだけの時間なのだ。

だが、たったそれだけの時間を戦っただけで、ゼストの身体は悲鳴を上げ始めていた。

「……ぐっ」

シグナムには聞こえない声量で、ゼストの口から呻き声が漏れる。
先程……戦い始めて少しした辺りから、彼は身体を動かす度に激痛に襲われていた。
それは彼の身体がすでに限界を超えているという証だ。元々適正があったとはいえ、彼がスカリエッティに施された改造は完全なものではない。むしろ、どちらかと言えば不完全なものだと言えるだろう。

それ故に、彼は力を使えば使っただけ、その反動で寿命を縮めていく。
反動は彼の身体をじわじわと蝕んでいき、今となってはただ戦うことすら難しい状況なのだ。
今でこそシグナム相手に渡り合えているとはいえ、それも殆ど綱渡りのようなもの。いつ敗北が彼の元へ転がり込んできても不思議ではない。

「レヴァンティン！」

《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ．》

そんな彼の目に、鞘を取り出し、その中へとレヴァンティンを納刀するシグナムの姿が見える。
納刀されたレヴァンティンの鍔から薬莢がひとつ吐き出され、同時に魔力が跳ね上がった。

（……これ以上、時間はかけられん）

自分の身体の状態を察し、ゼストはそれを迎え撃ってそのまま突破しとうと構えを取る。

『炎熱加速！』

シグナムとユニゾンしたリインの声が、シグナムの脳内に響く。
その直後、炎によって加速されたレヴァンティンが鞘から抜かれ、その勢いで剣の刃はひとつひとつ離れて紫がかった桃色の炎に包まれた、連結刃と呼ばれる形状へと変貌する。

「『飛竜……』」

そしてシグナムは刃を空高く振り上げ――

「『一閃！！』」

ゼストめがけて振り下ろす。
振るわれた連結刃は鞭の如くうねり、その先端は寸分違わずにゼストへと襲い掛かる。

「はあああああああっっ！！」

刃を迎え撃つゼストは気合と共に槍を振り上げ、その際に柄の一番下の部分から薬莢が飛ぶ。

『炎熱消去！　衝撃加速！』

彼とユニゾンしたアギトが、振り上げられた槍の刃に宿る魔力に属性を付加。

それを確認したゼストは全力で刃を振り下ろし、刃に溜めた魔力を『飛ばす』。衝撃波となった魔力は連結刃の先端へと直撃、連結刃が纏っていた炎を吹き飛ばして、更に連結刃そのものも撥ね飛ばす。

「なっ！？」

避けるでも受け止めるでもなく、まさか弾き飛ばされるとは思っていなかったのだろう。

それを見たシグナムの顔に衝撃が走る。けれど、ゼストは悠長に驚いている暇をシグナムに与えない。

「ぬあああああっっ！！」

咆哮と共に、先程までのシグナムに見劣りしない程の速度で突撃、豪腕を振るってシグナムへと槍の穂先を落とす。

「くっ！！」

シグナムは頭上から降ってきた穂先を咄嗟に鞘で受け止める。
だが、どうあっても鞘は鞘。彼女が握る剣と同じだけの強度を求めるのは酷というものだ。
受け止めた瞬間、『ピシリ』という音と共に穂先の刃が鞘へとめり込み、鞘全体に罅が走った。

「おぁああっ！！」

そのままゼストはシグナムに何かさせる暇と与えず、槍の柄を持つ両手に力を込める。
すると、鞘に走った罅は次々とその数を増し、めり込む刃もそれに従って深度を深めていった。
そして――

「ぜいやぁっ！！」

「っ……うあああああっ！？」

気合と共に刃は振り下ろされ、鞘を真っ二つに両断する。
振り下ろされた刃の衝撃は鞘を壊すだけに留まらず、シグナムの身体を地面に向けて吹き飛ばす。

「いくぞ、アギト」
『あいよっ！』
市街地の地面に向けて落ちていくシグナムを一瞥し、ゼストは再び地上本部へ向けて飛び始める。
その口元から顎にかけては、赤い雫が流れて細い線を引いていた。

◇◇◇◇◇

「……おかしい、ですよね？」
「ええ」
「そうだね」

ゆりかごが飛び去った後の山岳地帯。
その一角に存在した洞穴の中に突入したフェイトと、彼女に同行したシスター・シャッハ、そしてヴェロッサ＝アコース査察官の３人は、そう言って顔を見合わせた。
ここはヴェロッサが調べて辿り着いたスカリエッティのアジトの筈なのだ。

しかし、さっきからどれだけ進んでも防衛の為の戦力が全く出てこない。

……まるで、ここを放棄しているかのように。

「もっと凄い抵抗があると思ったんだけど……それとも、わざとこうして油断させる作戦かな？」

「いえ。だとしても、わざわざこんな奥まで侵入させる意味もないでしょう」

周囲を警戒しつつ進みながらヴェロッサが漏らした言葉を、シャッハが軽く首を振って否定した。

油断させる為に戦力をあえて出さない、というのは確かに頷ける理屈ではあるが、しかし3人は既にアジトの中心部に大分近い場所まで来ている筈なのだ。

別働隊の方からも、敵と遭遇したという報告は入ってこない。

自分のアジトにここまで侵入されて、何も行動を起こさないというのは、最早策と呼ぶにはあまりにも愚かしい。

「とにかく、先に進みましょう」

「そうですね」

「了解だよ」

フェイトは2人を振り返ってそう言うと、走る足を早める。
彼女にしてみれば、スカリエッティは長年追い続けた、ある意味宿命の敵と言ってもいい。
その近くまで来ているせいか、フェイトは熱くなっている自分を自覚していた。

「……ん？　見つけたみたいだね」

走って程なく、ヴェロッサが声を漏らす。
それは別働隊から通信が入った訳では無く、彼の持つレアスキル『無限の猟犬』によって創られた魔力の猟犬達が先行し、彼に情報を送ってきたのだ。

「アコース査察官。案内を」

「勿論……とはいえ、ここからそれ程離れては居ないみたいだよ」

ややドスの利いたフェイトの声に苦笑しながら、ヴェロッサは猟犬から送られてきた位置情報を元にフェイトとシャッハに順路を示していく。
そして彼が言っていた通り、緑色の身体をした猟犬たちは直ぐに見つかった。
見つかった猟犬たちが集っていたのは、一枚の大きな鉄の扉の前。
どうやらそこから先には入れず、とはいえ他の場所にスカリエッティ達の姿を認められず、恐らくここに居ると判断したのだろう。

「……随分と物々しい扉ですね」

「そうだねぇ。なんというかこう……監禁場所、といった感じかな」

その扉を見て、シャッハとヴェロッサはそう評した。

フェイトも2人と同じ感想を抱いたのか、怪訝な視線を扉に向けている。

確かに無骨なその扉は、外敵から中に居る人を守るのが目的ではなく、むしろ中に居る人間を外に出さない為のもの、と言う方が妥当に思えた。

「でも、中に入らないことには始まりませんから……シスター・シャッハ、アコース査察官、少し下がっていてください」

そう言って2人を下げ、フェイトはバルディッシュを肩に担ぐ。

そして、短く息を吐いてバルディッシュをXの字を描くように動かし、重厚な鉄の扉を切り裂いた。

切り裂かれた扉は支えを失い、重い音を辺りに響かせながら崩れ落ちる。

「……おや」

「！！」

扉が崩れ落ちた先。
明滅を繰り返す照明の薄暗い明かりしかない中に、その男は居た。
男を認めたフェイトはまず怒りを表情に滲ませ、しかし直後に視界に入ってきた光景に息を呑んだ。

「これは……」

「酷い……」

フェイトに続いて扉の中を除いたヴェロッサとシャッハが、揃って眉を顰めた。
そこに居たのは、あるいは両手両足をあらぬ方向に曲げられ、その激痛で呻く少女。あるいは、見るからに重症のまま放置されている女性。
何人かは無事な様子だが、それでもそこには目を背けたくなるような惨状があった。

その中で、スカリエッティは扉の真正面、丁度部屋の中央にある柱に縄で縛り付けられていた。
どの位そうしていたのか、やや頬は扱け、髪はボサボサになっている。けれど、それでもフェイト達を見据える眼光には、些かの曇りも見えはしない。

「随分と遅かったじゃないか。フェイト＝テスタロッサ」

相当に消耗している筈だろうに、それでもスカリエッティはフェ

イトを見つめ、そう言って口の端を持ち上げ、以前と全く変わらぬ笑みを見せた。
そして彼は柱に括りつけられたまま、それでも余裕という顔で周りを見回して言葉を紡ぐ。

「色々と話したいところではあるけれど……まずは、この縄を解いて貰っていいかな？
流石に、そろそろ身体が痛くなってきたところだよ」

果たして、その声からは僅かな疲労も窺えない。
最高にして最悪と呼ばれた、稀代の天才科学者ジェイル＝スカリエッティ。
彼の笑みに含まれるのは、邪悪な意思か、それとも――。

◇◇◇◇◇

「はっ……はっ……」

地上本部へと向けて飛びながら、ゼストは浅い呼吸を繰り返している。
シグナムとの戦闘は激しかったとはいえ、それでも息を乱す程ではなかった。
つまり、もはや彼はそこまで消耗しているのだ。

「旦那……」

苦しげな彼と並んで飛びながら、アギトが心配そうな声を漏らす。

「すまんなアギト。ユニゾンして貰っても、もうお前の炎を殆ど使ってやれん」

ゼストが思い返すのは、先程のシグナムとの戦闘。

本来ならば、『烈火の剣精』であるアギトとユニゾンした彼は炎を操ることが出来る筈だった。

しかし、実際には先程の戦闘でゼストは一度たりとも炎を使う事が出来なかった。適正云々というよりも、炎を操るだけの体力が残っていなかったからだ。

「構わねぇよ！　旦那を守る方法は、まだ幾らでもあるんだ」

謝るゼストを気遣ってか、アギトは努めて明るい声で返す。

そうする事が、少なくとも今自分がやるべき事だと考えたから。

「……シグナムと言ったか。あれは、良い騎士だな」

「え？」

けれど、ゼストが続けた言葉に目を丸くする。

「あの剣閃に炎熱能力、お前が言っていた理想のロードに、丁度適合するな」

「な、何だよそれ!?」

「先程の太刀筋は紛れもなく、真性の古きベルカの騎士。お前と同じように、どこかに保存されて、今まで眠っててでもいたか」

「違うよ！　何でそんな奴が管理局に居ンだよ!!」

淡々と語るゼストの言葉を、アギトは必死に首を振って否定した。認めたくなかったのだ。自分の捜し求めていた理想のロードが、まさか自分と敵対している組織の中に居たなどと。そしてその事を、家族のように慕っていたゼストの口から聞かされているという事を。だが、それでもゼストは言葉を止めようとしない。

「魔力光の色までお前と適合する。だとするなら、あるいは……」

それはまるで、自分の死期を悟っているかのようで。

「やめてくれよ！　敵だぞ！？　アイツは！！」

だから、アギトは彼の言葉を遮った。
薄々ではあるが、アギトとて気付いている。恐らく、ゼストの身体はこの事件を無事に乗り切ったとしても、決して長くは無いという事を。でも、だからこそ今そんな話をして欲しくは無かった。
アギトも先程の戦いの最中、何度かゼストと同じことを考えていたのだ。
自分と同じ魔力光、そして炎と剣を操る騎士。

長年自分が求めてやまなかった理想が、目の前にあった。
もしシグナムは自分達の側だったらどれだけ良かっただろう。そうだったなら、アギトは一も二も無く彼女を自分のロードとしていた筈だ。
……しかし、現実は違う。

シグナムは恩人であるゼストの行く手を遮る敵で、自分はゼストの味方。
その2つは、決して交わることは無い。それに――。

「頼むよ……あたしの事なんて考えないでさ、自分の為に、全力で頑張ってよ……」

ゼストの服を引っ張りながら、アギトは涙声でそう懇願した。
恩人であるゼストに……もう時間が残っていないゼストに、後悔を残して欲しくなかった。アギトにとって今、自分自身の事など瑣末な事でしかない。

今の彼女にとって何よりも大事なのは、ゼストに己が本懐を達成して貰う事。

だから、アギトは願う。

これ以上、恩人である彼の目的を邪魔するような人間が現れないで欲しいと。

そして……同時に決意を新たにした。

ゼストの事は何がなんでも自分が守る、と。

「……ああ。ルーテシアも、助けに行かねばならんしな」

小さく決意したアギトに視線は向けず、ゼストはそう答えを返す。

そうした彼の視線の先には、天高く聳える地上本部の中央本部があった。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：タイプアイン・ファースト

――エラー。
――エラー。
――エラー。

「ハヤト君！」

――タイプゼロ・ファースト。
――……違う。ギンガ。
――……エラー。記憶削除。

「「ハヤトさん！」」

――Ｆの遺産と竜召喚士。
――……違う。エリオと、キャロ。
――……エラー。記憶削除。

「ハヤト！　この馬鹿！　いい加減、目ぇ覚ましなさいよ！」

――幻術使い。
――……違うだろ。あいつは、ティアナだ。
――……エラー。記憶削除。思考修正。
――記憶の関連項目に多数のエラーを確認。戦闘思考と並行し、エラー部分の削除を行う。

――先程から記憶領域にて多数のエラーを確認。
――再調整の必要アリ。戦闘を早期に終了させる為、体内駆動炉からの魔力供給を１０％上昇。
――上昇確認。身体速度の５％上昇を確認。身体への負荷１２％上昇……問題なし。

「ハヤトッ！！」

――タイプゼロ・セカンド……違う、スバル。
――エラー。記憶削除。思考修正。
――どうやら思考部分の中枢に致命的なエラーがある模様。

「……手早く戦闘を終了させ、クアットロ姉様に再調整を求める必要を認む」

――まずはリーダー格である幻術使いを撃破。
――その後に、前衛の３人、最後に竜召喚士を撃破予定。
――勝率、８７％超。問題なし。

「ハヤト！　今、助けてあげるからっ！！」

――……エラー。記憶削除。

ｓｉｄｅ：タイプアイン・ファースト　了

ｉｆ５７話　『決戦　５』（後書き）

アニメ本編での旦那と姐さんの戦闘シーン短すぎて泣いた。
どうも、ラモンです。

そんなこんなで、姐さんＶＳ旦那の渋い人対決と、まさかのスカっち再登場。そしてアインをちょこっとお届けしました。
旦那と姐さん、戦闘シーンが５分も無いってどういうことなの……。
お陰で、どうやって次数を稼ごうか悩んだじゃないですか（汗）

そして退場と思われたスカっちがまさかの再登場。
この後、ちょっとだけ見せ場もあったりなかったり……やっぱりなかったり（笑）
スカっちが活躍しても誰得？　って感じなので、書かない可能性が高いですね。
ヴィータは……うん、流石に書けません。
ただでさえスバルルートは今のままだと８０話越えそうなのに、ヴィータまで書いたらどんなことになるか……ガクガクブルブル。

さて。
次回はアイン無双その２、そして魔王ＶＳ中ボスと、スカっちによる『分かりやすいアインの強さ徹底解剖』をお送りできればと思います。
３，２，１，ドカーン！　わーい！
……的な解説ではありませんのであしからず（笑）

それではまた、次の話で。

そういえば、最近友達に「最近地の文多すぎね？」と自分でも思っていることを言われ、思わず「ペラップ！」と意味不明な叫びを上げちゃいました。

……多いですかね？

多くて読み辛いという意見があれば、もうちょっと削るように努力していこうと思います。

if58話　『決戦　6前』

side：―

金の閃光が走る。
桃色の魔弾が空間を舞い、鉄槌が壁や床を粉砕する。
銀の連結刃が宙を舞い、鉄槌が壁や床を粉砕する。
左右に目まぐるしく所在を変えるナックルがスバル達を打ち据え、振るわれる槍は彼女らの攻撃を切り裂き、二丁の拳銃は精密な射撃で攻撃の隙を的確に突いてきた。
十字の杖は空間殲滅魔法で彼女達の逃げ場を奪い、何とか距離を取ったとしても、指に嵌められた指輪やグローブが堅牢なバインドを繰り出して、彼女達に休む暇を与えない。

「はぁっ！　……はぁっ！」

「……」

息を乱すことも無く、激しく息を吐く彼女らを見下ろすアインの姿は、正しく一騎当千。
1人である筈なのにひとつの部隊を相手取っているような、そんな錯覚を起こさせる。

「ったく、あたしより弱かったくせに……！」

そんなアインを見据え、荒い息を吐くティアナが冗談混じりの呟きを漏らす。
彼女の両隣には、同じように肩で息をしているスバルとギンガ、エリオとキャロの姿がある。
後衛であるティアナとキャロはそうでもないが、前衛を担当しているスバルとギンガ、エリオの負ったダメージは決して軽いとは言えないだろう。

何せ、アインの繰り出す攻撃は避けるのも困難で、それでも3人は何とか直撃を避けて防御しているのだが、防御はあくまでダメージを軽減するだけで0にすることは無い。
そして例え僅かなダメージだったとしても、それが回復する暇もなく連続で叩き込まれてしまえば、それはどんどん蓄積されていくのだ。

彼女らが受けたダメージを象徴するように、3人のバリアジャケットは所々が切り裂かれ、土埃で汚れて酷い有様になっていた。血が出ていないのは、まだ攻撃が直撃していないという証拠。それだけが救いとも言えるだろう。

「でも、さっきからちょっと動き、変わったよね？」

「ええ」

前を見たまま呟くスバルの言葉に、ティアナが頷く。
彼女の言う通り、少し前からアインの動きには変化が生じていた。
それまでは向かってきた相手に対して反撃するだけだったのが、

今では明確にティアナ“だけ”を狙って動いている。理由は恐らく、ティアナがこの5人の司令塔だからだろう。

「でも、今の方が戦いやすくてありがたいわ」

「……だね。狙いがハッキリしてる分、あたし達も動きやすいもん」

そして、スバル達はそこにこそ活路を見出していた。
狙いが決まっているというのは、逆に言えばそれだけ行動が制限されるという事だ。それが例えどれだけ小さな行動制限であろうと、あるのと無いのとでは戦いやすさが全く違う。

「それ、でも……やっぱり、辛いですけど」

「そうだね……前のハヤト君とは、全然違う」

スバルとティアナの言葉に、エリオとギンガが苦笑した。
だがやはりアインと戦う事は凄まじく消耗するのだろう、顔にある苦笑とは裏腹にその息は荒い。たとえ行動が制限されていたとしても、彼と戦うという事は、機動六課全員を相手にする事に等しいのだ。消耗しない方が嘘というものだろう。

「わ、私も一緒に戦えたらいいんですけど……」

アインの動きを警戒しながら、３人に自然治癒力を高める簡単な回復魔法をかけるキャロは、そう言って表情に陰を落とす。
彼女はこの中で唯一、殆ど攻撃を受けていない。せいぜい、ティアナが吹き飛ばされた際に巻き込まれた程度だ。フルバックというポジションからして仕方ないことではあるが、それでも負い目を感じてしまっているのだろう。

「気にしないで、キャロ」

「そうだよ。キャロがブーストしてくれるお陰で、ハヤトに力負けしないもん」

そんな彼女を振り返り、エリオとスバルが微笑みかけた。
事実、キャロのブーストやアルケミックチェーンに助けられた場面もあったのだ。
だから、その言葉は決して気遣いからのものではない。それでも、とキャロが口を開こうとした時。

「お喋りはそこまで。来るわよ！」

ティアナの声と共に、再び全員に緊張が走る。
そして――アインが突撃してきたのは、まさにその直後だった。

「ふざけるなっ！！」

スカリエッティがアジトとしていた山岳部の洞穴。
その最奥の部屋に、フェイトの怒声が響いた。
滅多に声を荒げぬ彼女のその声に、酷い有様だったナンバーズ達に治療を施していたヴェロッサとシャッハが、驚いた顔でそちらを振り返る。

「ゆりかごを止めたければ、ハヤトを殺せと言うのか、お前はっ！」

「それが確実かつ、手っ取り早い方法だと言っただけさ。質問に答えたのに、ふざけるなはないだろう」

人を射殺しそうなフェイトの視線を受けて、それでもスカリエッティは何でもないように肩を竦めた。
彼を柱に括りつけていた縄は既に外され、代わりに彼が妙な真似をしないようにバルディッシュの切っ先が突きつけられている。そんな状況だというのに、スカリエッティの態度は常と変わらず、顔には笑みさえ浮かべている。
そんな態度が、彼女の神経を逆撫でした。

「あの子がゆりかごに何の関係がある!?　いい加減な事を言うな!」

「関係が無い？　本当に？　私が自分の計画に全く関係の無い事を、この時期にすると？」

「それは……っ」

挑発するような彼の言葉に、フェイトが言葉に詰まる。
少し冷静になってみれば、確かにスカリエッティの言うとおり、彼が無駄な事をするとは思えない。
そう考えれば、最初に彼が言った言葉も真実なのだろう。

「ゆりかごを起動する鍵となるのは“聖王”ヴィヴィオ。
けれど、私達にとっては起動してしまえば後の操縦を任せるのは、幼い彼女よりも自分にとって使いやすい人間の方がいいだろう？
……まぁ、少し裏技は使ったけれどね」

「裏技？」

「ゆりかごは聖王の為に造られた不沈艦。本来ならば鍵は当然として、操縦者もまた聖王でなくてはならないもの。それは分かるね？」

「……」

フェイトはスカリエッティの言葉に頷きを返す。

確かに聖王の為に造られた船ならば、その全てにおいて聖王が必要なのは道理だ。

「だが、ヴィヴィオを私達の思い通りに動かすのは些か骨が折れる。人間の意識を完全に操作するというのは、中々難しいものだからね。だから私は常々、こちらの思い通りになる存在を探していた。まぁもっとも、オリジナルに近い聖王の遺伝子を持った人間など、そうそう現れる訳も無い。

私が長年研究を続けて、成功したのがヴィヴィオだけという辺りでも、それは分かって貰えると思う。

だが、そんな時……私は彼を見つけた」

解説しているうちに興奮が極まってきたのか、スカリエッティは喉元に突きつけられたバルディッシュの刃など気にも留めずに立ち上がった。

その喉に切っ先が少しだけ触れて血が滲み、フェイトは慌てて刃を引いた。

しかしそんな彼女には構わず、スカリエッティは愉悦を顔に浮かべて言葉を続ける。

「科学者としてこの単語を口にするのは憚られるが、正直奇跡だと思ったね！

彼はまさに私の駒となる為に生まれてきてくれたような人間だった！！」

「っ！」

「彼は戦闘機人への改造適正が高いだけではなく、聖王の遺伝子との適合率も非常に高かった。
それこそ、聖王のクローンであるヴィヴィオの代わりに『ゆりかごの操縦者』となれる程にね！！」

「貴様っ！！」

その物言いに我慢が出来なくなったのか、バルディッシュの刃が彼の首元に添えられる。
しかも今度は牽制の為では無く、少しでも動けば首を刎ねると言わんばかりの殺気と共に。

「だから私は彼を欲した。意識を支配するのは確かに難しい。
それでも……死した後ならば、それはとても容易な事だからね。
最も、私が手を下すまでもなく、クアットロが彼を殺して連れ帰ってきてくれたお陰で、手間が省けたのだけれど」

「黙れっ！」

「君が話せと言ったのだろう？　まだ話は終わっていない、邪魔をしないでくれるかな」

「……っっ！！！！」

「クアットロに任せきりだったが、彼女は私の指示通りに彼の死体に戦闘機人としての改造を施し、そして同時に聖王の遺伝子を彼の遺伝子と同化させた。
それと並行してゆりかごのシステム面にも多少の改造を施し、ヴ

ィヴィオを鍵、アインを操縦者と認識するように……とね」

楽しくて仕方がないという表情で笑う彼に、フェイトは寒気を覚えた。

人の命を弄ぶという事に、この男は何の感慨も抱いていない。この男の頭の中にあるのは、ひたすらに自分の理論を試し、その正しさを証明したいという考えだけ。

狂っていると、誰もが思うだろう。そう、確かに狂っている。

「とはいえ、半分以上が賭けに近い状態だったのは確かだ。

彼がいかに遺伝子的な適合率が高かったとはいえ、元々あった遺伝子に無理矢理他の遺伝子を組み込んで書き換えるという作業だ。成功と失敗の確率は五分……いや、失敗の確率の方が高いと言えただろう。

まぁ、失敗した時はヴィヴィオに多少無理矢理な精神操作を施せば良かったけれどね。

そうなれば彼女の人格は間然に破壊されてしまうだろうが……些細な問題さ」

狂っているが……その姿は正しく、1人の科学者なのだろう。

それでも、フェイトがそんな事を納得できるワケも無い。

「お前は……っ！　人の命を何だと思っている!?」

「消耗品さ。この世で最も安価で替えるのが可能な、ね。

知っているかい？　この次元世界中で毎日どれだけ多くの人間が

命を落としているのか。
それでも人間は減らず、むしろ増え続けていく……何とも凄い勢いでね。

その中で私が消耗するのはほんの1人か2人。
戦争をしているような愚かな連中に比べれば、随分と良心的だと思わないかい？
それに私は、ただ無駄に消耗はしない。どれだけ取るに足らない命だろうと、ちゃんと有効活用してあげているのだから感謝されこそすれ、罵倒される謂れは無いよ」

「ふざけるなっ！！」

声を荒げ、フェイトは彼の首筋に触れていた刃に力を込める。
それでもスカリエッティの顔から余裕の笑みが消えることは無い。

「私は至極真面目だよ。それよりもフェイト＝テスタロッサ。
こんな事をしている暇は無いのではないだろう？　私にさっさと口を割らせ、ゆりかごを止めなくてはいけないのではないかな？」

「ぐっ……」

「まぁ、ワタシにはどうでもいいことだ。とりあえず話を続けるとしよう。
幸いにも改造と遺伝子の定着は成功。アインはゆりかごの操縦者として生まれ変わった訳だ。
だから、今現在ゆりかごの操縦を担当しているのはアイン。引いては彼の姉であるクアットロになる訳だね。けれど、ゆりかごにお

ける全権はアインにあるから、仮にクアットロを逮捕したとしてもゆりかごは止まらない。
かといって、アインを魔力ダメージでのノックダウンで倒したとしても、彼自身が望まなければやはりゆりかごは止まらない。つまり、確実に止めるならば彼自身を破壊するしかないという結論に至る訳さ」

口の端を吊り上げたまま、スカリエッティは自分の言をそう締め括る。

「そんな……」

スカリエッティの解説を聞き終えたフェイトの口から、そんな弱々しい声が漏れた。
彼女の不幸は、なまじ彼の解説を理解出来る頭脳を持っていたことだろう。スカリエッティの言葉を聞き、どうしようもない現実を理解してしまったのだ。

「あの子を殺さなくても、何とかする方法が……」

「さて、ね。私は既にこの計画には携わっていないし、アインについても今述べた事以上は知らない。」　だから何とも言えないよ」

「……？　どういう意味だ？」

肩を竦めて苦笑するスカリエッティにフェイトが尋ねる。
この事件の首謀者は彼であり、全ては彼が操っているとフェイトは思っていた。
だからこそ、今彼の口から漏れた言葉が引っかかったのだ。

「そのままの意味さ。確かに私はこの一連の事件を目論み、そして計画した。
けれど、最後の最後で詰めを誤り、自分の娘に足元を掬われて…
…このザマだ」

言いながら、スカリエッティは部屋の中を見渡す。
つられてフェイトが視線を動かせば、見えるのはヴェロッサとシャッハに治療を受けている少女達や、最初の彼と同じように縛り付けられている少女達。
その光景は、彼の言葉が正しく真実であったという事を物語っている。

「自分の作品がキチンと結果を残しているから、私は別段不満も無いけれどね」

負け惜しみのようにも聞こえる言葉を呟いてから、スカリエッティは「さて」と続けた。

「私が話せるのは以上だ。これ以上は何をされても話すことは無いよ」

「……」

スカリエッティの宣言に、フェイトは悔しそうに唇を噛んだ。
この男を逮捕すれば、間違いなく事態は好転すると思っていた。
ハヤトを助ける術も見つかると思っていた。だが、実際は何も変わらない。それどころか、六課は自分という戦力を欠いてしまった。
事前に察することが出来なかったとはいえ、それでも後悔を覚えぬ筈がない。

「フェイト執務官。ここは私達に任せて、ゆりかごの方へ……」

「無駄だろう。ここから彼女がどれだけ急いだとしても、ゆりかごの所に着くころには衛星軌道上に到達してしまっている。そうなってしまえば、最早一介の魔道士がどう足掻いたところで無駄だろう」

シャッハがフェイトにした提案を、スカリエッティが一蹴する。
事実、ここからどれだけ急いだとしても、ゆりかごの場所に到達するには30分はかかってしまう。
フェイトが出撃前にみたタイマーでは、衛星軌道到着の限界時間は20分程度。どう足掻いてもタイムオーバーだ。

「……じゃあ」

「既に君たちは王手をかけられた状態。他に出来ることがあるとするなら、ゆりかごに突入している仲間に、ゆりかごを止める手段を

教えることだね。まぁ、可能かどうかは別としてだが」

「そんな……」

「……困ったね」

最終通告とも取れるスカリエッティの言葉に、3人が項垂れる。
彼女らには分かっていた。仮にゆりかごに突入しているなのは達にゆりかごを止める手段を教えたとして、彼女達にアインを……ハヤトを殺すという選択肢を取れる筈が無い。
つまり、現状は完全に“詰み”なのだ。

「……ドクター、少しよろしいでしょうか？」

3人が項垂れた時、ポツリと1人の女性が声を発した。
フェイト達が視線を動かせば、そこには椅子に縛られていたウーノが手を上げている。

「どうしたんだい？　ウーノ」

「ゆりかごを止める手段に、ひとつだけ心当たりが」

「？」

「本当ですか！？」

ウーノの言葉にスカリエッティは意外そうな顔をして、フェイトは一も二も無く彼女に詰め寄った。

「発言しても、よろしいですか？」

「……ふむ」

しかしウーノはフェイトには構わず、スカリエッティへと問いかける。

スカリエッティはウーノの言葉にどう返答すべきか考えているのか、顎に手を当てた。

そんな彼を説得するように、ウーノは言葉を続ける。

「ドクターが負けた側の私達が手を出す事に躊躇いを覚えていらっしゃるのは承知しています。

ですが、クアットロの行動は既にドクターがお考えになっていらしたモノとはかけ離れ、暴走していると私は思います。これでは、ドクターの作品達のデータも正しい数値が取れないのでは？」

「……しかしね」

「それに、負けたまま大人しく引き下がるというのは、ドクターらしくないのでは？」

「！」

ウーノが言ったその言葉に、スカリエッティは目を開いて驚きの表情を浮かべる。
そして少しの間沈黙した後で、弾かれたように笑い出した。

「くっ……あはははは！　確かに確かに！　どうやら柄にも無く落ち込んでいたようだ。
確かに娘に負けたままというのは私らしくなかったな！！　あははははっっ！！」

「では、話しても？」

「いいだろう。ウーノ、どんな内容かは分からないが好きにしたまえ！」

「わかりました」

笑いの止まらないスカリエッティからの許可を受け、一度彼に向かって深々と頭を下げてからフェイトの方へと視線と身体を向ける。
視線を向けられたフェイトは一瞬身体を強張らせたものの、それでも気を取り直して彼女の目を正面から見返した。

「では、私から解決案を示させていただきます」

「……ありがとう、ございます」

「勘違いしないでください。

ドクターがクアットロに負けたまま……というのが、我慢ならないだけです」

彼女の手を取って謝辞を述べたフェイトにぶっきらぼうに答えてから、ウーノは口を開く。

果たしてその内容は、スカリエッティの止まらぬ笑みを更に大きなモノとする内容だった。

ｓｉｄｅ：－　了

ｉｆ５８話　『決戦　６前』（後書き）

説明多いよ！！　辻褄合わせ面倒だよ！
どうも、ラモンです。

前後編に分けまして、決戦６をお送りします。
最初のアイン戦の出だしでは、一応六課全員のデバイスを出してみました。出てない人……ザッフィー以外には居ないよね？
ザッフィーが居ないのは、あの人の手甲はデバイスじゃないからですね。……ごめんねザッフィー。

さてさて。今回は前編、なぜなにスカっちのお時間でした。
本当はここでアインのＩＳ『ミラー』の解説をしたかったんですが、どうしても彼にして貰う必要のあった、アインの存在意義を語って貰いました。
矛盾がありそうで怖いんですが、一応矛盾なしにしたつもり……です。

ただ、何か矛盾があったら遠慮なくツッコミをお願いします。
適時修正し、なるだけ矛盾が少ない理論に直しますので。

ちなみに、ハヤトが聖王の遺伝子云々に関しては、事前に伏線とも言えない伏線を張ってあったりします。
例えばｉｆ２９話でヴィヴィオがハヤトの事をお兄ちゃんと呼ぶ理由を「何となく、おにーちゃんぽかったから！」と言っていたあたりとか……分かり辛いですよね。すいません（汗）

それはともかく、誰得なスカっち大活躍（？）の巻でした。
後編でも解説役として活躍の予定はありますが、それでも根っこは

糞野郎のまま、改心なんてしませんよ。
だってスカっちは、あの歪んだ性格が魅力ですからね。
キレイなスカっちなんて要らない！　だって男だもん！（笑）

さて、次回は後編。
いよいよアインのＩＳ『ミラー』の概要と、その弱点……ぽいものが披露される予定です。
また今回みたいに解説が多くなるので、ちょっとダレそうですが、どうかお付き合いくださいませ。
ちなみに後編の解説役には、メインとしてウザットロ、サブとしてスカっちとウーノ姉様をお呼びしております。

それではまた、次の話で。

ｉｆ５９話　『決戦　６後』（前書き）

※今回は説明台詞が多く、読み辛いかもしれません。
そういうのが苦手な方は、ある程度の読み飛ばしを推奨します。

if59話　『決戦　6後』

side：―

「うふふのふ～♪」

虹色のシールドに守られたクアットロが、楽しげな笑い声を漏らす。

薄いが堅牢なシールドを隔てた向こう側では、エース・オブ・エース……なのはが無数に襲い来るガジェットを相手に孤軍奮闘していた。

ガジェットは彼女の魔力弾に次々と貫かれ爆発、四散するが、それでもなのはに襲い掛かる数は一向に減少せずに、初期の頃と同じ勢いのまま何度も何度も襲い掛かってくる。

「くぅっ！」

当のなのははと言えば、やはり最初にシールドから受けたダメージが大きいのだろうか、身体の動きや魔力弾の狙いに精細さを欠き、明らかに追い詰められ始めていた。

それでも、なのはとて伊達や酔狂でエースと呼ばれている訳ではない。

圧倒的な数の暴力に晒されていながらも、クアットロを守るシールドを壊そうとガジェットが襲い掛かるまでの僅かな隙を突いて、何度か砲撃をしようとした。

「……っ」

だが、そのタイミングを見計らって、クアットロはシールドを解除し、玉座に座るヴィヴィオの隣に寄り添うように身体を移動させる。

そこは丁度、なのはが砲撃を放てばヴィヴィオごとクアットロを撃ち抜いてしまうような位置。

だから結局砲撃は放たれず、なのはは再び襲い掛かってくるガジェットの処理に追われるハメになる。

「ほぉんと、甘ちゃんね……。ま、アレならそろそろ落ちるでしょ」

酷薄な笑みを浮かべながら、クアットロが呟く。

事実、なのは自身の動きも魔力弾の速度も、最初に比べれば大分鈍くなってきている。僅かずつではあるが、なのはの身体に疲労とダメージが蓄積されている証拠だろう。

それを確認しながら、クアットロはつまらなさそうな顔になる。

「あんまり楽勝すぎて、ちょ～っと退屈ねぇ」

呟いてから、クアットロが「そうだ」と声を上げた。

声と共に上げられたその顔には、悪戯でも思いついたような笑顔が浮かんでいる。

彼女はそのまま口を開き、ガジェット相手に奮戦するなのはに向けて声を発した。

「ねぇ、エース・オブ・エース？　ちょっと、私の暇潰しに付き合ってもらっていいかしら？」

「何を……言って……っ！！」

間断なく襲い来るがジェットに悪戦苦闘しながら、なのはがクアットロを睨みつける。

しかしクアットロは自分から話しかけておきながら、彼女の事など気にしていないように言葉を続けていく。

「どうせ貴女もあとちょっとで落ちるみたいだし。最後に、私の弟自慢を聞いていってくださいな」

そう言って浮かべたクアットロの笑みは、語るない様に不似合いな、本当に楽しそうなものだった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ５９話　『決戦　６後』

「アインちゃんのＩＳ……『ミラー』って言うんですけどね？
アレを造るのは、ほんっとぉ～に苦労したのよ。何せ、貴女達機動六課を始めとした数々の魔道士のデータをどうやって蓄積、適時引き出しを可能にするか。
いくら何でも、人間の脳に蓄積するにはデータが多すぎますし……」

クアットロは語る。
語る相手であるなのはは、ガジェットを倒すのに手一杯で碌に聞いている余裕も無いのだが、そんな事はお構いなしだ。

「でもね、それでも私は諦めずに考えて、いい事を思いついたワケ。
人の脳で蓄積しきれないんなら、別の場所にデータ蓄積用のモノを用意して、そこから好きな時にデータを送信出来るようにしちゃえばいい。ね？　簡単なことでしょう？」

得意気に、親に誉められようと必死になる子供のようにクアットロは歌う。
けれどその言葉は果たしてなのはに届いているかどうか。何せなのはの周りでは絶え間なくガジェットが爆発する音が響いているのだ。大分距離の離れているクアットロの声が聞こえるかどうか、怪しいところだ。

「それでもぉ、準備を進めるのは本当に大変だったのよ？

ドクターに反抗する気マンマンでしたから、ドクターに気取られないように水面下で色々と小細工しなくちゃでしたし。まぁ、ウーノお姉様にバレてたみたいでしたけど、それは私も承知の上だったから、どうとでもなったんですけどね。

な～んて愚痴はともかく、そんな私の地道な努力のお陰で、アインちゃんのＩＳ『ミラー』は完成。

勿論？　元になったあの餓鬼は、どんなに優秀な適合率を持っていても所詮は三流の魔道士。

あの餓鬼のリンカーコアじゃ、いくら完璧に貴女達のデータをコピーしたって、魔力不足でロクに魔法も使えやしないもの。やぁよねぇ……弱っちぃ奴って」

そこまで喋ってから、クアットロはやれやれと溜息を吐いた。

彼女の顔と声から感じられるハヤトへの嘲りに、今まで下を向いていたヴィヴィオが彼女を睨みつけ、初めて声を上げた。

「おにいちゃんを、バカにするなぁっ！」

今もそれなりの痛みに晒されているだろうヴィヴィオの声に、クアットロは意外そうな顔をした。

けれど、すぐにまた嘲る笑いを顔に貼り付け、自分を睨むヴィヴィオの頬を楽しげに撫でる。

「あらあら陛下、優しいんですねぇ。自分の事を守ってくれなかった駄目なお兄ちゃんを庇うなんて。

でもね陛下？　陛下がどれだけ怒っても、お兄ちゃんが使えない屑って事に変わりはないのよ？
わかるかしら？　ねぇ、愚かな陛下？　わからないかしら？　ねぇ、愚かな陛下？」

「ひっ……」

三日月の様に開いたクアットロの口から漏れる声に、ヴィヴィオは悲鳴を上げる。
クアットロは笑っているのに、その笑顔は余りに無機質で、ヴィヴィオを見つめる瞳は空洞のように真っ暗で。まるで能面のような冷たさを感じさせ、恐怖を覚えさせた。

「貴女があの屑をどう思おうと事実は決して変わらない。
あの餓鬼が弱かったということも、事実だし。あのままじゃ、あの屑はどう改造したって私の手駒として使えなかったのも純然たる事実なんですよ？
そもそも屑を屑って言って何が悪いのかしら？　陛下だって、ゴミはゴミって呼ぶでしょう？
なのに私が屑を屑って言うのは駄目なんですかぁ？　どうして？　何で？」

「あ……ひぅ……」

クアットロが触れている頬から悪意が流れ込んでくるような気がして、ヴィヴィオは言葉を失う。
けれど、クアットロの口は止まらない。ヴィヴィオを追い込むよ

うに、楽しそうに、彼女は語る。

「けど、私は偶然にも屑を宝石に変える魔法を知っていて、あの餓鬼には私から慈悲を施されるだけの下地を持っていた。これってぇ、すっごい幸運なんですよ？

そうじゃなきゃ、貴女の大好きな大好きなお兄ちゃんはいつまで経っても屑のまま。

私とドクターが目をつけてあげたからこそ、アインとして生まれ変わったからこそ、あの餓鬼は強くなれた。それこそ誰よりも、ね？　それの何処が不満なのかしら？　何が不服なのかしら？」

「ぅ……うぅ……」

「うふふ、言い返せませんよねぇ？　ごめんなさい、陛下。ちょっと意地悪言っちゃいました。

それより続きを聞いてくださいます？　えぇと、どこまで話しましたっけ……そうそう、あの餓鬼のリンカーコアが貧弱すぎるって話でしたよね」

話す相手をなのはからヴィヴィオに切り替え、クアットロの言葉は続く。

「どんなに上手くやったとしても、無いところから魔力は出せない。だから私は、アインちゃんに魔力の塊をプレゼントしてあげたの。

そう……丁度、陛下と同じ物（レリック）をね。

アインちゃんは偽物の聖王ですから、陛下と同じくレリックの力を限界まで引き出すことが出来る。

そしてその力は、アインちゃんが振るう魔力となってあの子の力になる。

あの子が力を振るえば、それはそのまま私の力になって、貴女のママ達を傷つける刃になるワケ。

でも哀れで可哀想な貴女のママ達は、元々仲間だったアインちゃんを殺せない。

例えそれが、このゆりかごを止める唯一の方法だと知ってもね」

「お兄ちゃんを……ころ……？」

言っている意味が、分かっていても理解したくないのだろう。

ヴィヴィオは震える声で呟き、揺れる瞳でクアットロの虚ろな目を見た。

クアットロの両手は彼女が顔を動かすことを許さず、そのポッカリと開いた空洞のような目はヴィヴィオではなく、その先にある自分の功績だけを見つめているように見える。

「そこも私の狙い。貴女達甘ちゃんは、たとえそれがベストの手段だと知っても、それが自分に関係のある人間なら、ベターな選択肢を探してしまう。たとえその一分一秒が、世界の命運を左右するとしても。

何て愚かで哀れで無様なんでしょうねぇ、陛下？

だから私はアインちゃんに貴女のママ達をぶち殺せる力をあげて、そして同時にあの子をゆりかごの運転手にした。

いわば、あの子はたった1人で最強の矛で最強の盾なの。

……どう？　完璧でしょう？」

クアットロは謳う。
自分の言葉に酔っているのか、既にヴィヴィオの事など意識してはいない。
まるで自分自身を賛美するかの如く、喋る言葉は全て自分へと向かっていて、見つめる瞳には自分の輝かしい未来しか映っていない。

「あ……あぁ……」

「ねぇ陛下どうです？　これ全部私が1人で計画したんですよ？　凄いでしょ？　普通は出来ませんよね？　無能な奴には思いもつきませんよね？
そして、無能な陛下のママ達には止められませんよね？　だぁって無能だもの！！」

パカリと開いた彼女の口から漏れる悪意。
その悪意に晒され続けたヴィヴィオの目から、涙が溢れた。
理解してしまった。したくないと望んでいても、強制的に理解させられた。
もう、何もかもがどうしようも無いのだ……という事に。

そこまで語ったところでようやく彼女の顔に浮かぶ笑みが消え、再びヴィヴィオへと視線を向けてクアットロは「まぁ……」と続ける。

「難点が無いってワケじゃあ無いんですよね。

データベースを破壊されちゃえば『ミラー』も『ライト・トゥ・クリエイト』も使えなくなる。
とはいえ、データベースは私が直々に管理してますし、あのシステムに介入できるのも私だけ。仮にシステムに侵入しようとしても、私謹製の防御プログラムを突破してハッキング出来る人間なんて、それこそ世界中を探しても何人いるか……。

うふふ……ホント、いい手駒だわ。アインちゃんも、そして陛下……っ！」

言葉を言い切る前に、クアットロを守るシールドに桃色の砲撃が炸裂する。
興を削がれたとばかりにやや厳しい視線を向けると、その先ではガジェットに囲まれながらも、レイジングハートの切っ先をクアットロに向けているなのはの姿。
僅かな隙を突いて、更にヴィヴィオに当たらないようにという配慮まで一瞬で行ったのは驚愕に値するが、それでも彼女の砲撃はシールドを貫く事無く掻き消えた。

「ちょっと、邪魔しないでくれるかしらエース・オブ・エース？」

「貴女は、もう、喋らないでっ！」

これ以上喋るのは我慢ならぬと、なのはがクアットロを睨みつける。
ガジェットを蹴散らしながら、それでも彼女の憤怒の視線はクアットロを射抜く。

でも、それでも今のなのはに出来るのは、せいぜいそうして彼女を睨むことだけ。それが、クアットロには滑稽で堪らない。

「ぷっ……あはははは！　なら止めてみせなさいなエース・オブ・エース！！
エースなんでしょう！？　陛下のママなんでしょう！？　アインちゃんは教え子なんでしょう！？」

笑いながら、クアットロの表情が凶悪に歪む。
初めて彼女が見せる、イラついた表情。それはヴィヴィオは勿論の事、なのはでさえも恐怖を覚えさせられる程に恐ろしく、寒気を覚える程の殺意に満ちていた。

「出来もしないくせに、この私に偉そうな口を叩くな無能がっ！！
この雑魚がっ！　私の策にまんまと嵌って今にも死にそうな屑がっ！！　私に向かって偉そうな口を叩くんじゃあないっ！！！　私は有能なんだ！！！！　生みの親であるドクターに勝って、たった1人であんた達無能どもの相手をしてやってる私は、誰よりもっ！！！！！
たった1人じゃ娘を救うことも出来ない糞餓鬼が、粋がるのも大概にしなさいな！！！！！！！」

憎悪。
憎悪。
憎悪。

自分の頭を掻き毟りながら、なのはに向けて憎悪を叩きつける。
なのはは既に動くのも億劫な程に疲労し、ダメージを受けている。
だというのに、クアットロを射抜く視線はそれでも毅然としていて、正義に溢れていて。
それが、クアットロには我慢ならない。

彼女が見たいのは絶望なのだ。
自分以外の全ての人間が自分に頭を下げ、媚びへつらう様なのだ。

「イライラする！　ムカムカする！
そうやっていつまでも自分が正義だと言わんばかりの貴女の顔は！
弱いくせに！　１人じゃ何も出来ないくせに！！」

「……確かに、私は１人じゃ何も出来ないかもしれないけど！」

憎悪の言葉に、毅然とした言葉が返ってくる。

「でも、やらなきゃいけない時があるっていう事を知ってる！
そして、今がその時だっていうことも！！」

「……れ」

「正義とか、そんなの関係ない。私は、貴女がヴィヴィオを傷つけたから、だから貴女を捕まえる！
これ以上私の大切な人を傷つけさせない為に！　私の大切な人を守るために！
……ヴィヴィオを、助ける為に！」

「黙れっ！」

「だって、私は……管理局員で、ヴィヴィオのママだから！」

「黙れと言っているのよっ！！！」

ズダンッ！　と苛立ちをぶつけるように地面を蹴る。

そしてそのまま、憎悪と苛立ちを始めとした全ての悪意を視線に乗せ、ガジェットに群がられているなのはを睨みつけ、次いで手元のパネルを操作して、なのはの周りにモニタを表示させた。

「もういい！　もう喋るな！！　囀るなっ！　口を開くな息をするなっ！！

貴女の言葉はイライラする！　聞いてるだけで虫唾が走る！！

吐き気がするっ！！

無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！

無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！

無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！

無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！　無能がっ！」

ガリガリと、血が出る程に右手で頭を掻き毟り、空いた左手でパネルを叩いていく。

そうすると次々とモニタに数式や文字の羅列が走っては消え、走っては消えを繰り返し、対にはひとつの文字がモニタに映し出される。

「……希望があるから、そんなムカつく事を言えるのよね？
未来があるから、貴女はそんなに毅然としていられるのよね？」

頭を掻き毟っていた手を止めたクアットロの声が、最初と同じ平静を保ったものに戻る。
そして、彼女はなのはを見上げて笑みを浮かべた。
最初と同じ……いや、それ以上に空虚で悪意と殺意に満ちた笑みを。

「だから、貴女の希望を粉々に打ち砕いて、粉砕して、細切れにしてあげる」

言葉と共に左手の指がパネルの決定キーを叩く。
瞬間、なのはの周りに開いたモニタには映像が映し出される。映し出されたのは、アインと戦うスバル達の映像。モニタの向こうでは、アインがスバル達を圧倒している姿が見える。
そして――。

「絶望の味を、嫌っていうほど教えてあげるわ。この糞餓鬼が」

クアットロはそう言って嗤った。
その顔に浮かぶ笑みは凄惨で、酷薄で、凶悪で、醜悪で。
けれど、どこまでも純粋な悪意で彩られたその笑顔は――美しいものだった。

◇◇◇◇◇

突撃してきたアインの手に握られていたのは、黒に煌く鉄槌。
Tの字を描くその先の片方から炎を吐き出しながら、アインは身体を捻ってグルグルとその場で回転を始め、勢いを殺すこと無くスバルへ達へと向かっていく。

「ラケーテンハンマー」

振るわれる鉄槌の勢いは激しく、だが呟かれる言葉は淡々と冷酷に。

「そう何度も、やられないよっ！」

彼を真正面から迎え撃ったのは、左拳をリボルバーナックルで覆

ったギンガ。
キャロから威力のブーストをかけられた左拳を振り上げ、振るわれる鉄槌に向けて、全体重を乗せた今自分が打てる最高の打撃を叩き込む。

「無駄……ですっ！」

「きゃあああっ！？」

けれど、それでもアインの――ヴィータの攻撃には届かない。
アインが僅かにその腕に力を込めただけで、ギンガはあっさりと弾き飛ばされる。
そのままアインは弾き飛ばしたギンガには目もくれず、再び地面をその両足で蹴り飛ばして前へと走り出す。目指すのはフォワードを纏める司令塔であるティアナ。
だが――そのアインの目の前に炎のような赤い髪と、日の光のように明るい橙色が躍り出た。

「ストラーダ！」

「クロスミラージュ！」

振るわれる青い槍と、橙色の魔力刃。
それは正確無比にアインへと向かい、彼を捉えたかのように見えた。
しかし。

「「っ！？」」

捉えたはずの彼の姿は、まるで陽炎の様に揺らめき、消える。

「モデル『幻術使い』、『クロスミラージュ・イミテーション』」

聞こえた声は、正面から。

視線を上げれば、その先には黒く染め上げられた二丁拳銃を胸の前で交差させているアインが居た。

フェイク・シルエットだと気付いた2人は、急いで体勢を整えようとする……が、乾坤一擲の一撃を放った体は慣性に突き動かされ、思い通りに動いてはくれない。

「そろそろ、終わらせます」

対してこの瞬間を待っていたアインは、淀み無く2人に向かって突撃しようとした。

しかし、その侵攻を阻むものがある。

「錬鉄召喚！　アルケミックチェーン！！」

「っ！？」

前傾姿勢になった彼の身体が動くより先に、地面に現れた召喚陣から鉄の鎖が幾本も現れ、アインの体に巻きついて締め上げる。
今までバインド系魔法を使わず、補助魔法を使う事に徹していたキャロがチェーンを用いてくるのは流石に予想外だったのか、戦いが始まってから始めてアインの顔に驚きの色が見て取れた。
そして。

「うおおおおおっっ！！」

雄叫びと共に、スバルが拳を振り上げてアインへと突進してくる。
それを見た回避行動を取ろうとアインが動くが、しかしそれは鎖に阻まれて失敗に終わった。
全速力で突っ込んできたスバルは、その隙を見逃さずに彼の身体目掛けて拳を振り下ろした。
勿論身体が動かせないとはいえ、それでもシールドが張れない訳では無い。アインは冷静に自分へと迫る拳を見ながら、赤いシールドを張った。

「うっりゃあああああっっ！」

次の瞬間には、アインの張ったシールドとスバルの拳とが激突し、魔力同士がぶつかった火花と、バチバチという耳障りな激突音を響かせる。
一見すれば、拮抗しているようにも見えただろう。

だが、実際は防がれた時点でスバルの負け。

（突破できなかった……！）

それは、スバル自身が一番良く理解していた。

キャロのアルケミック・チェーンは優秀なバインドではあるが、それでもバインドは時間をかければ解除できない訳では無い。そしてそれは、鎖を召喚して相手を拘束するこの魔法も同じこと。

事実、アインは少しずつではあるが、シールドを張りながらチェーンを引き千切っていく。

少しずつ、だが確実に。

「スバル、よくやったわ！」

けれど、それでも隙は隙。

攻撃後の崩れた態勢から立ち直ったティアナとエリオ、そして吹っ飛ばされた場所から舞い戻ってきたギンガの３人が、チェーンに拘束され、シールドを張っていて動けぬアインに踊りかかる。

「「「いっけえええええっ！！」」」

「が……っ！？」

ティアナの魔力刃、エリオの雷を纏った槍、ギンガの拳がスバル

のそれと同じくシールドに叩きつけられ、その負荷に耐え切れなくなった赤いシールドに罅が入り、ついには薄氷の割れるような音と共に砕け散る。
そうなれば、チェーンに拘束されて動けないアインに４人の攻撃を止める術は無い。
４人の攻撃は彼へと叩き込まれ、チェーンごとアインの身体を吹き飛ばす。

「……今ので、気絶はさせられたかしら？」

「多分……」

アインが吹き飛んだ先、仰向けに転がる彼を見つめながらギンガが呟き、エリオが答える。
シールドでいくらか威力を減じたとはいえ、今の攻撃は４人の全力に近い。
少なくともハヤトであったなら、間違いなく目を回して気絶しているだろう攻撃だ。

「今ので駄目となると、ちょっと厳しいわね」

「うん。でも、その時はその時だよ」

ティアナとスバルも構えを崩さぬまま、仰向けのアインを見据えた。
その、次の瞬間。

「「っ！？」」

アインを見つめていた筈のティアナとエリオの視界が暗くなる。
何事かと認識する間もなく、２人の頭は鉄製の床がベコリと凹む程の勢いで下に向かって叩きつけられた。

「ティア！？」

スバルに見えたのは、仰向けになっていた筈のアインが凄まじい速さで動いて、ティアナとエリオの顔を両手で持って床に叩き付けた、その叩きつける瞬間だけ。
何時動いたのかも、何時２人の顔をその両手で持ったのかも、知覚することは出来なかった。
それは彼女以外の誰もが同じ。

アインの動きが追えなかった。
否。知覚することさえ出来なかった。

一体どれ程の速度で動けばそんなことが出来るのか。

「スバル、余所見しない！　今は……きゃあっ！？」

「ギン姉！？」

スバルに注意を促すギンガも、次の瞬間には壁にめり込み、磔にされていた。
そちらにスバルの視線の先では、アインが先程の場所よりも僅かに動き、蹴りを見舞った体勢で止まっている。

「スバルさ……あうっ！」

「キャロ！」

次に聞こえた声は背後から。
振り返れば、そこには腕を振り抜いた格好のアインと、吹き飛ばされて気を失って倒れているキャロ。
そして、アインはゆっくりとスバルを振り返り……。

「肉体強化、リミットリリース。目的変更。
目的――敵戦力の全滅。捕虜は無し。見敵必殺。
肉体損耗限界までの、あと２０分３２秒で決着をつける」

黄金に光る左目で、スバルを見据えた。

side:|了

if５９話　『決戦　６後』（後書き）

私の邪気眼が光って唸って暴れだして邪気眼を持たぬ者にはわかるまい！
どうも、ラモンです。

おかしい。
私はＩＳ『ミラー』の弱点発表会をしようとしていたのに、いつの間にか黒歴史発表会になっていた……。
中二病って恐ろしいですね。もう２５にもなるのに完治しません。
不治の病、か。

ところで、ＩＳ『ミラー』と固有武装『ライト・トゥ・クリエイト』の弱点（？）が分かり辛かった人も居ると思います。何せ殆どが中二病台詞で埋め尽くされてますしね。
なので、簡単にここで説明いたします。
凄く簡単に言っちゃうと。

なのは達のデータは別の場所で保管してるから、そこを壊されるとデータが引き出せなくて使えなくなっちゃうよー。

という事です。
ね？　簡単でしょう？

はてさて。いよいよ物語も中盤が終わり、ラストスパートの時期になってまいりました。
……正直、風呂敷を広げすぎて纏められる気が全くしませんが、まぁそこは適当に誤魔化し誤魔化しでやっていこうと思います。
辻褄が合わない？　物語がご都合主義？

こまけぇことはいいんだよ！（汗）

えー、ごほん。
次回はアイン無双、ハヅキのリアルモンハン、旦那ァァァ！　の３本立てをお送りする予定です。
もしかすると、長さの事情で旦那ァァァ！　は別枠になるかもですが。

それではまた、次の話で。

if６０話　『転機　１』

ｓｉｄｅ：ハヅキ＝ロックウェル

「どうにも、参ったな……」

ガクガクと震える足に力を要れ、ウィングロードを蹴る。
まったく、ここまでダメージを受けたのはいつ以来だろうな。
流石にアレだけ大きい奴を相手にした経験は無かったからなぁ…
…今度、技術部に頼んでシミュレーションルームのダミーエネミーとして登録しておいてもらうか。

「……っと！」

などと馬鹿な考えをしているうちに、デカブツの手が私に向かって下りてきた。
それを何とか避け、風圧に晒されて崩れた体勢を空中で立て直す。
ちっ。右腕が使えないと、体勢を立て直す時のバランスを取るのも一苦労だな。こっちも、今後こういう事態がある事を考えて練習しないとな。課題が多くて困ったものだ。

「レオンハルト、沈痛魔法はまだか」

≪　あと１２秒ですよボス。というか、６秒前にも聞いたでしょう

が》

「さっさとしろ。痛くてかなわん」

《イエス、ボス》

レオンハルトの答えを聞きながら、全力でデカブツの顔を蹴り飛ばす。

1度で効かないのは分かっているから、今度5発。同一の場所に、寸分違わず叩き込んでみた。

……が。

【――――ッッ！！】

「効果無し、か。忌々しい」

デカブツは私の蹴りを受けても尚、平然と吼えてきた。

少しばかり自信を失うな。これでも、攻撃力だけなら地上本部最強を自負していたんだが。

ダメージで足に力が入っていないという言い訳も出来るが……それでも、装甲版なら10枚は割れるくらいの威力はあるんだ、まぁ奴の装甲がそれより硬いということだろう。

全く、私の力が及ばないとは想定外だったよ。

「なら、これならどうだっ！！」

直ぐに思考を切り替え、奴の目を狙う。
流石にそこは鍛えようがあるまい。卑怯な気がしないでもないが、細かい事を気にしていたら私が負けてしまうからな。何せ、ダメージが思っていた以上にデカイ。
全力で戦えるのは、長くてあと１０分前後といったところか？
……やれやれ、母さんにバレたらどやされるな。

【ッッ】

「ちぃっ！」

とかなんとか考えている間に、私が放った奴の目を狙った蹴りは読まれていたのだろう。顔を少しズラすことで防がれてしまう。
やはり思考力は人間と同じ程度か。
この図体で、私と同じ程度の事を考えられる。

……厄介極まりないな。

「と、愚痴っても始まらないか」

《　その通りですよ、ボス。愚痴る前に、奴を倒す算段を考えましょう　》

「その通りだな。さて、知能は人間と同じ程度、硬さと攻撃力は向こうに分があり、私は少なくないダメージを負っている……やれやれ、大ピンチというヤツだ」

《　その割に、楽しそうですね　》

レオンハルトに言われて気付けば、確かに私は笑っていたようだ。口の端が上がっているのが自覚できるし、このような状況だと言うのに心が踊っているのも分かる。

「まぁ、私がこれだけ本気で戦って倒れない相手など、母さんとあの人以来だからな。

久方ぶりの全力だ。心が躍らないといえば、嘘になるだろう。それにな、レオンハルト」

言いながら、再び全身に魔力を漲らせる。

ウィングロードを四方八方に張り巡らせて、奴の動きに注意を払う。

奴の一挙手一投足を見逃さぬよう、揺れる視界で奴を見る。

「こんな状況から逆転したら、カッコイイじゃないか。後でハヤトに誉めて貰えるぞ」

《　そっちがメインですか、ボス　》

「当然だ。ハヤトに誉めて貰えるのなら、この惑星だって壊して魅せるぞ私は」

《　……ハァ。ボスも大概ですよね　》

さあ、次だデカブツ。
女帝の意地と底力、その身で思い知れ。
私がハヤトに誉めてもらう為、せいぜい派手なフィニッシュを決めさせろよ？

ｓｉｄｅ：ハヅキ＝ロックウェル　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ６０話　『転機　１』

ｓｉｄｅ：―

時間は少し遡る。
時空管理局地上本部、その中央本部の一室。
そこで、恰幅のいい中年男性――レジアス＝ゲイズと、彼の副官であるオーリス＝ゲイズ。そして今起きている事態に怯えているの女性士官が居た。

「オーリス、お前はもう下がれ」

自分用の椅子に座り、机の上で手を組んだ格好のまま、レジアスが娘に告げる。
けれど、オーリスは彼の言葉に首を振って反論した。

「それは貴方もです。貴方にはもう、指揮権限はありません……ここに居るい意味は無い筈です」

彼女の言葉は道理だった。
戦闘が始まってしまえば、指揮のは現場指揮官に一任され、レジアスはただ静観するのみ。
彼がここに残っていても意味は無い。悪く言うなら邪魔なのだ。

「……儂は、ここに居らねばならんのだよ」

「？　それは、どういう……」

オーリスが尋ねる言葉が終わる前に、部屋の扉が破壊される音が響く。
その音にオーリスは慌てて後ろを振り返り、女性士官は身体を竦めた。

「手荒い来訪で済まんな、レジアス」

壊れた扉の向こうから舞い上がった煙を掻き分け、槍を持った騎士――ゼストがそんな言葉と共に現れる。彼の姿を見たオーリスがレジアスの前に立ち、自分の身を盾として彼を睨む。
レジアスは地上本部にとって無くしてはならぬ人材。その彼を守る為に。

「構わんよ……ゼスト」

「っ！　ゼスト……さん？」

だが、レジアスが呼んだ聞き覚えのある名前に彼女の顔が驚愕に染まる。
けれどゼストは彼女の態度は気にせずにレジアスの机へと近づき、世間話でもするようにレジアスへと語りかけた。

「オーリスは、お前の副官か？」

「頭も切れる分、我が侭でな。子供の頃から変わらん」

2人はオーリスを間に挟み、久方ぶりの友との会話を交わす。
しかしそのやり取りは長くは続かず、ゼストは自分のコートから2枚の写真を取り出し、それをレジアスの机へと投げた。

「聞きたいことは、ひとつだけだ」

投げられた写真には、まだ若いゼストとレジアスと、ゼストが元々所属していた部隊の人たちが映っている。やや色褪せたその写真を見て、レジアスは眉を顰める。

それは、ゼストがここに来た目的。

レジアスにとっては忘れ得ぬ過去。

「8年前、俺と、俺の部下達を殺させたのは……お前の指示で間違いないか？」

「……」

彼の問いかけに、レジアスは答えない。

黙したまま、彼が投げた写真を見つめている。

「共に語り合った、俺とお前の正義は……今はどうなっている？」

問いかけながら、ゼストは過去に思いを馳せる。

まだ若かった頃に、共に正義について語り合ったことを。

地上の平和を守ろうと、躍起になっていた頃を。

「……お前に問いたかった」

けれど過去は形を変えて、醜く歪んだ“今”になってしまっている。
それが……ゼストには、耐え難い程に悲しかった。

「俺はいい。共に語ったお前の正義の為になら、殉じる覚悟があった。
だが、俺の部下達は……何の為に死んでいった」

喋る声は低く平静に。
しかし、そこに含まれる感情は間違いなくレジアスを咎めるモノ。
レジアスを見つめるゼストの瞳もまた、彼が犯した罪を咎めている。
その目を見ることが出来ず、レジアスは視線を逸らす。

「どうして、こんな事になってしまった。
俺達が守りたかった世界は、俺達が欲しかった力は、俺とお前が夢見た正義は……」

哀しげに、ゼストが声を絞り出す。
あの日語り合った正義は、もっと清廉なモノだったのに。
あの日に欲した力は、もっと純粋なモノだったのに。
あの日守ろうと決意した世界は、もっと美しいモノだったのに。

「……いつの間に、こんな形になってしまった」

その全てが今、悪意に満ちた“ナニカ”になってしまっている。

そういった悪意から守ろうとした筈なのに。

守る為、正義の為に力を得ようと決意してきた筈なのに。

どうして、何故こんな事になってしまったのか、と。

「……」

暫しの沈黙の後、レジアスは口を開く。

何故こんな事になってしまったのか。何故、彼と彼の部下を犠牲にしたのか。

許されるとは思わないが、それでも説明しなければならない。全てを話し、その後はゼストに委ねようと、そう思った……けれど。

「ふぐっ！？」

「「っ！！」」

開かれた彼の口から出たのは、言葉では無かった。

言葉の代わりに溢れたのは赤い鮮血。

驚愕に目を開いたゼストの身体を緑色のリングバインドが縛りつけ、振り返ったオーリスは胸を長く鋭い爪で貫かれた父の姿と、彼の背後で歪に笑う……先程まで、部屋の隅で震えていた筈の女性士官の姿を見た。

「父さん！　……きゃあっ！！」

胸を貫かれたレジアスに、オーリスが駆け寄ろうとした。
けれど、女性士官が放った緑色の衝撃波を喰らい、近くの本棚まで弾き飛ばされて気絶する。

「ぐ……ぅっ！」

「お役目、ご苦労様でした」

バインドを破ろうと足掻くゼストが睨む先で、女性士官が微笑んで労いの言葉をかけた。
勿論、そこに労いの意志など感じられず、感じられるのは嘲りだけ。

「ふふっ。貴方が来た時はどうなる事かと思いましたが、何とかなるものですね」

そうやって言葉を漏らす彼女の桃色だった髪が、金色へと変わっていく。着ていた服も士官用の制服から、ナンバーズの証であるボディスーツへと変化する。
変化が終わったそこに立っていたのは、ナンバーズの次女であるドゥーエ。

「貴方はもう、ドクターの今後にとって、お邪魔ですので」

「ぐぬっ……」

レジアスの胸から、ゆっくりと爪が抜かれていく。

爪が抜かれると、硬直していたレジアスの身体は机へと倒れこみ、机の上に広がった鮮血の中に沈む。

が、彼はそれでも顔を上げ、ゼストに向かって手を伸ばす。

「ゼスト……俺、俺は……」

何と言いたかったのだろうか。

しかし彼の声は繋がる事無くそこで途切れ、友に向けて伸ばされた手は掴まれずに力無く机に落ちる。地上の守護者と呼ばれ、誰よりも正義に燃えた男の最後は、あまりにもあっけないものだった。

「これにて、貴方の役目も復讐も終わりです。騎士ゼスト」

自分の右手の指に嵌めた3本の爪。そこにベットリと張り付いた血を舌で拭いながら、ドゥーエが妖艶な笑みと共にそう告げる。

けれど、ゼストは彼女の言葉に答えない。

ただ俯き、力なく声を漏らすだけ。

「いつもそうだ……俺はいつも、遅すぎる……」

「……？」

ゼストの呟きの意味が分からず、ドゥーエが眉を顰めた。
その次の瞬間、彼を縛り付けていたバインドが粉々に砕け散る。

「なっ！？」

その光景が信じられず、ドゥーエは目を見張る。
彼女は直接戦闘型ではないが、その分バインドなどの捕獲魔法には長けていた。
ましてや今のゼストは全盛期に比べて格段に力が落ちている。間違っても、自分のかけたバインドを力ずくで破壊するような真似は出来ない筈なのだ。
驚きによって、彼女の身体が強張り、反応を遅くする。

それは、ゼストという武人を前に一番してはならないモノだった。
彼女の身体が強張った一瞬で、ゼストが槍を構えて地面を蹴る。
そして彼女目掛けて槍を振りかぶりながら突撃し――。

ドゥーエが知覚出来たのはここまで。
彼女の意識はそれ以上を知覚する前に途切れ、そのまま二度と浮上することは無かった。
痛みも苦しみも無く、彼女はゼストによって命を絶たれたのだ。

「……っ！」

「旦那！」

そしてタッチの差で、レジアスの部屋にアギトとリインの2人と共にシグナムが駆けつける。

駆けつけた彼女が見つけたのは、気絶しているオーリスと、机に突っ伏して絶命しているレジアス、そして上下2つに両断された戦闘機人の残骸。

「……これは、貴方が？」

レジアスとドゥーエの死体を見て、シグナムがゼストに尋ねる。

とはいえ、彼女とて武人であるのだから、レジアスの死がゼストの手によるものでは無いことは分かっている。だから彼女は、ドゥーエを両断したのが彼かどうかだけを尋ねたつもりだった。

「そうだ。レジアスも、俺が殺した。……俺が弱く、遅すぎたせいで」

けれどゼストはレジアスの死もまた、自分のせいだと答える。

目的は果たせた。旧友であるレジアスに会って、問いたかったことを問う事が出来た。

答えは聞けなかったが、それでも彼の表情や仕草から、レジアスもまた自分が目指した理想と現実との差に苦しんでいた事を窺うことが出来た。

……満足ではあった。

それでも、思ってしまう。

こうなる前に止めてやれれば、あるいはレジアスは死ななかったのでは無いのかと。

こうなる前に止めてやれれば、彼は今も正義に燃えていたあの頃のままで居られたのではないかと。

「夢を描いて未来を見つめた筈が……いつの間にか、随分と道を違えてしまった」

天井を仰ぎ、1人呟く。

自分もレジアスも、目指した先に見ていたのは平和な未来だった筈なのに、気付けばどちらも、その未来を壊すための道を歩んでしまっていた。

その道を選んだ事に後悔は無い。

後悔は無いが、過去の自分達を裏切ったという事もまた、事実。

「本当に守りたい物を守る。ただそれだけのことの、何と難しいことか」

理想はいつだって現実に打ち負かされる。

分かっていたつもりだった。理解していたつもりだった。

それを承知で、それでも現実に打ち負かされないだけの覚悟を持っていたつもりだった。

けれど現実は、自分達の覚悟程度ではどうにもならない程に非情で、残酷で。
厳しすぎる現実の前に、いつの間にか自分達はつまづき、膝をついてしまった。
それでも尚自分達はつまづいたという事実から目を背け、理想を追い続けていた。もう追いつけないと分かっていても、目指さずには居られなかった。

「……理想を追うには、もう俺達は歳を取りすぎたのかも知れんな。レジアス」

物言わぬ親友に最後の言葉をかけ、ゼストはシグナムの方を向く。

「もう、よろしいので？」

「ああ」

彼とレジアスの関係を知っているシグナムが、問いかける。
その問いに彼が頷いたのを見て、再びシグナムの口が開く。

「それでは、同行願えますか？」

「……すまんが、今は出来ん」

ゼストの口から漏れた拒絶に、少しだけ眉を顰めて尋ねるシグナム。

「何故、と聞いても？」

「俺が救ってやらねばならん娘が居る」

「……！　旦那ぁ！！」

彼女の問いに対し、ゼストは窓の外――ルーテシアが居るであろう方角を見ながら答えた。

彼の見ている方角に何があるのか、彼の言葉が誰を指しているのかを知っているアギトは、顔を輝かせて嬉しそうに声を上げる。

「俺の身勝手で苦しませてしまった娘だ。俺が、責任を持って救ってやらねばならん。

……今ならまだ、遅すぎはしない筈だからな」

槍を握り締め、決然とした声で彼が言う。

レジアスは間に合わなかった。救えなかった。

けれど、あの子は――ルーテシアだけは救ってみせる、と。

「全てが終われば、俺は大人しく捕まろう」

「何を持って、その証と？」

「今となっては意味も無いが……俺の騎士の誇りにかけて」

「……分かりました」

「……シグナム、いいんですか？」

その彼の言葉をあっさりと了承してみせたシグナムに、リインが驚きの声を上げる。

彼の人となりはリインもある程度分かっているつもりだったが、それでも彼はつい今しがたまで、管理局に敵対していたのだ。

すぐに信じろ、と言う方が無茶な話かも知れない。

けれど、シグナムはゼストの目を見据え、訥々と言葉を紡ぐ。

「この方も私も騎士だ。騎士が、己の誇りを汚すことなどしないと……私は、そう信じる」

「旦那は絶対に嘘なんて言わねぇよ！　何だったら、あたしがここに人質で残ってもいいからさ！

だから……だから、旦那をルールーのところに行かせてやってくれよ！！」

シグナムの言葉に続けて、アギトがリインの手を取って訴える。

そこまで言われてしまえば、リインに反対する理由など無い。

彼女も、まだ生まれて間もないとは言えベルカに由来される存在。

騎士という存在が、その誇りを懸けるという事がどれだけの事かは、

理解しているつもりだった。

「じゃあ、私はこれからはやてちゃんの所に向かうので、その道中で騎士ゼストを現場までご案内しますです。シグナムは、アギトさんの監視をお願いするですよ。
ついでに、外の敵の侵攻を食い止めてくれると助かります」

「承知した」

「あ、あたしもか？」

「勿論ですよ。今はとっても人手が足りないです。使えるなら、猫だって使うのが機動六課の心意気だって、はやてちゃんも言ってたです！」

薄い胸を張ってエヘンと得意気に声を上げるリインに、シグナムが苦笑した。
そんな彼女にゼストが歩み寄り、コートの中から先の戦闘の前に見せたディスクを取り出し、シグナムに手渡す。

「これは……先程の」

「あの少年を犯している、スカリエッティの洗脳プログラムを解除するデータが入っている。
聞いた話だが、デバイスを相手に直接当てることで、そこから侵入させるものらしい」

「……ありがたく」

ゼストからディスクを受け取り、シグナムは頭を下げた。
そこで、アギトが2人の間に割って入り、ゼストに疑問を投げかける。

「で、でも旦那。ルールーも同じの使われてんだろ？
ディスク渡しちまったら、ルールーは……」

「安心しろ。有事に備えて、俺のデバイスには既にデータを移植してある」

「そ、そーなのか？　流石旦那だ！」

「あはは……それじゃあ、騎士ゼスト。私が現場までご案内するです」

「ああ。頼む」

何故か得意気に頷くアギトに苦笑しながら、リインがゼストを先導する形で部屋を出て行き、ゼストも彼女の後を追って部屋を後にした。
残さったのは、烈火の将と呼ばれる女性と、烈火の剣精と呼ばれた融合機。

「私はこれから空に上がる。このディスクを機動六課に届けねばな

らんしな。
　リインはああ言ったが、お前はここで待っていても構わない……どうする？」

「旦那が帰ってきた時に、あたしだけサボってたら格好つかねーしな。
　……だから、アンタを手伝ってやる。か、勘違いすんなよ！　仕方なくだかんな、仕方なくっ！」

　耳まで赤くするアギトに微笑み、シグナムが彼女に手を差し伸べた。
　それは、アギトが待ち望んだ本当の意味で自分のロードに相応しい者の手。
　その手に触れられる事に、アギトは自分でも分からないうちに無常の喜びを覚えた。これでもう、自分は半端な存在じゃなくなると、そんな気がしたのだ。

「ユニゾン・イン！！」

　だから彼女は高らかに唱えた。
　自分が、自分であるという事を世界に伝えるかのように。

◇◇◇◇◇

赤と紫。
女帝と呼ばれた女性と、白き天の王と呼ばれる怪物。
片方はボロボロでありながら、なお両者の戦いは互角であるように見えた。

女帝――ハヅキの右腕は既に動かない。
何せ骨が外に飛び出る程の怪我だ。動かせる方がおかしいだろう。
しかしそれでも、ハヅキは何ら気にした風も無く動く。最初の方こそ、右腕が使えないことでバランスを取るのが難しそうではあったが、直ぐにそれにも慣れたのかあっという間に元と変わらぬ動きをするようになった。
それだけで、彼女が如何に人間離れした戦闘センスを持っているかが分かるだろう。

「ファング・バスター！！」

零距離での砲撃。
それの直撃を受けても、白天王は揺るがない。
平然と、泰然と、山の如く怪物は動かずに彼女を睨みつけている。

「ちっ！　ムカつく位にタフな奴だなお前は！　尊敬すら覚えるよ！」

舌打ちをしながら、それでも彼女は笑う。
楽しげに、玩具でも与えられた子供のように。

「くふふっ……あはははっ！　楽しい、楽しいなぁデカブツ！！
これだけ心が躍ったのは久しぶりだよ！　本当に久しぶりだ！
いつ以来だろうかな！？
１５であの人と戦った時以来だろうか！？　神様とやらがいるのなら、感謝せねばなるまいよっ！」

砲撃、砲撃、また砲撃。
巨大な閃光でありながら、その赤い光は精密に白天王の同一部分を撃ち抜いていく。
もちろんその間に、白天王の攻撃を避けることも忘れない。その動きは、とても彼女が一度白天王の攻撃を、ガードの上からとはえ直撃されたとは思えない程に優美で華麗で。それを見ていた誰もが彼女の動きに目を奪われてしまった。

「砲撃が駄目なら、やはり直接がお望みか！　このドMさんめっ！！」

魔力が篭もった彼女の蹴りが、白天王の左頬を捉える。
何度目になるか分からない直撃。今まではその蹴りは白天王の頑強な装甲に弾かれるだけだった。
しかし――。

【――――ッ！？】

この時、初めて彼女の攻撃に手応えが返ってくる。
白天王の顔面の装甲に亀裂が走り、その顔がハヅキが蹴った方向へと弾き飛ばされたのだ。

「はっはぁっ！！　今のでその場所を蹴ったのは通算２０３回目だ！　つまり、それだけ同じ場所に叩き込めば、お前の装甲でも壊れるということだな！　勉強になったよ！！」

額と口から血を流し、右腕は血塗れ。
だというのに、ハヅキは実に楽しげに、面白そうに笑って吼える。
その笑顔を見た彼女を良く知る人間が見れば、「また悪い病気が始まった」とでも零しただろう。

《　またボスの悪い病気が始まりましたか　》

事実、彼女を幼い時から知っている相棒からは、そのような言葉が漏れた。

「何を言うかレオンハルト！　光明が見えたのだ、喜ばない方が馬鹿だろう！！」

《　ボスの場合は、久方ぶりに全力で戦えるのが楽しいんでしょうが　》

「ああそうだな！　楽しくて仕方ないよ！
後でハヤトに誉めて貰えると思うと、今から身体が火照ってしょうがないなぁ！！
ああもう、今すぐにでもハヤトに抱きしめて欲しいものだよっ！」

≪　……駄目だ、この人。人の話聞いてない　≫

ピンチであると言うのに、女帝もそのデバイスも、言葉にそれを滲ませない。
それは“女帝”と呼ばれた彼女の意地でもあり、二代に渡って女帝と呼ばれた女性達に仕えたデバイスの意地なのだろう。

「さてさて、攻撃が通ると分かれば話は早い。レオンハルト、さっさとあいつを片付けるぞ！」

≪　そうですね。それには同意ですよ、ボス　≫

「くくく……あはははっっ！　楽しい、楽しい、楽しいなぁぁぁあっっ！！！」

≪　やれやれ、こういう所は本当に先代と似てらっしゃる　≫

再び自分のウィングロードに降りてから、ハヅキは白い歯を覗かせて笑う。
ダメージは抜けていないし、体力も気力も魔力も限界が近い。だというのに、球の様な汗を流しながらそれでも楽しげに、満足気に笑うハヅキ。

その顔はどうしようも無い程に、戦闘狂の顔だった。

side：―　了

ｉｆ６０話　『転機　１』（後書き）

連☆日☆更☆新！　ウザいですね、すみません。
どうも、ラモンです。

そんな訳で、旦那だけで殆ど終わっちゃったｉｆ６０話でした。
旦那の魅力をどの程度再現できたのかは分かりませんが……あの人の魅力の万分の一でも出せてればいいな、と思います。
恐らく、原作に忠実っぽいのはここまでになりそうです。後は、殆どオリジナルになりそうな感じですし。

さて、リアルモンハン中のハヅキは白天王にダメージを与えて戦闘狂に目覚め、いよいよ旦那もルーテシア救出戦線に参加しました。
少しずつですが、逆転フラグが立ってきた感じですかね。
旦那は大変ですけど、もうちょっと頑張って貰います。
頑張れ旦那。超頑張れ。

次回はスカっちとウーノ姉様大活躍（？）の予定です。
何だか脳汁が凄い勢いで溢れてるので、もしかしたら今日中にもう一回投稿もあるかも……？
まぁ、余り期待せずにお待ちくださいませ。もし、もう一度投稿した時は、またお付き合いくださいね。

それではまた、次の話で。

if61話　『転機　2』

side：―

大きく横に広がったパネルの上を、４本の腕が走る。
その腕は、スカリエッティとウーノの物。

「ウーノ、3番と5番のラインを繋いでくれるかい」

「わかりました」

２人は隣り合い、まるで音楽でも奏でているかのような、絶妙なコンビネーションでパネルの上で手を滑らせていく。２人の指がパネルを叩くたびに、開いたモニタには肉眼で捉えられるのかどうか怪しい程の速度で文字が走っていく。
フェイトは自分では全く読み取れないその速度に呆気に取られていたが、スカリエッティもウーノもそれをキチンと読み取っているのか、次々と新しい文字を画面に記していく。

「2番から7番を経由して9番に」

「はい」

「ふむ……いいね。見つかりそうだ」

呟くスカリエッティの顔に、笑いが浮かぶ。
先程までとは違う、彼本来の笑顔。それは言うなれば、科学にとり憑かれた狂人の笑みだ。
まぁ、それでこそスカリエッティだと言えるのかも知れないが、やはり気持ちのいい笑みではない。

「巧妙に経路を隠してはあるが……1人で出来るのはここが限界、ということか」

「そのようです。ですが、この防壁は……」

ピーッという甲高い音と共に、モニタに『Ｗａｒｎｉｎｇ！』の文字が躍る。
それは、2人が求めていた部分へと辿り着いた証だ。

「……ふむ。確かにこれは、少しばかり骨が折れそうだね」

「ええ。ですが、時間は余りありません」

「そうだね。じゃあ、早速取り掛かるとしよう」

科学者然とした顔で笑いながら、2人は再びパネルに手を走らせた。

時間は少しだけ遡る。
ウーノが語った解決策。
それは、聞いてしまえば余りに簡単で、「そんな事か」と言いたくなるような事だった。

「……ハヤトとヴィヴィオから、ゆりかごの操縦権限を奪う？」

「いえ。正確に言うなら、ゆりかごにアインと陛下を操縦者として認めさせなくする、です」

首を傾げて尋ねたフェイトの言葉を、ウーノが訂正する。

「ゆりかごの操縦権をアインから奪ったとしても、再びクアットロがアインに操縦権を移してしまえば意味がなくなる。そこでウーノは、ゆりかごそのものにアインを操縦者として認めさせないようにしよう、と言っているのさ。
そうすれば、アインの状態に関わらず、彼がゆりかごを動かすのは不可能になるだろう。そうなれば、後はゆりかごの動力炉さえ何とかしてしまえばアレは止まる」

「その通りです。ドクター」

ウーノの説明を引き継いで、スカリエッティが解説を続けた。
その説明でようやく理解出来たのか、フェイトが頷きを返す。それを確認してから、スカリエッティはやや不審そうに眉を顰め、ウーノを見て問いかける。

「しかしウーノ、ここからそんな事が出来るのかい？　クアットロは私と同程度には優秀だ。
誰かがそういう可能性に気付く事くらいは想定済みだろう。ここにある施設は、クアットロが使っている物よりも数段劣る。しかも時間制限付きだ……間に合う可能性は低いと見るが？」

「可能性は低いですが、０ではありません。こちらを」

言いながら、モニタに違う映像を映し出す。
映し出されたのは、プログラムを示す数値の羅列が２つ。
フェイトにはそれが何なのか分からなかったが、スカリエッティは直ぐにそれが何を示しているかに気づき、感嘆の声を漏らした。

「これは……私の洗脳プログラムに対してのみ有効なアンチプログラムかい？
いつの間にこんなものを……」

「クアットロの行動に不審な点が見られるようになってから、ドク

ターには秘密裏に。
　お叱りは後で如何様にも」

「いやいやまさか、むしろ私は感動しているよ。私の洗脳プログラムは、自分で言うのも何だが完璧に等しいプログラムだった。それに対するプログラムを作れるとはね。
　くくくっ……これが娘の成長を喜ぶ親の心境、と言ったところかな？」

　楽しくて仕方が無いとばかりにスカリエッティが笑う。
　その笑顔は、まさにクアットロと同じ狂ったモノ。やはりこの人間だからこそ、あの狂児を造り出せたのだと思わせるのに、それは十分過ぎた。
　フェイトはその笑みに不快を覚え、眉を顰める。

「話を続けよう。それで？　このアンチプログラムをどうするんだい？」

「こちらは、既に騎士ゼストに既に渡してあります。恐らく、今頃機動六課に渡っているかと」

「ふむ。いつの間に……ああ、クアットロが言っていたあの時か」

「はい……それでは話を続けます。
　このアンチプログラムは、発動した際に一定の信号をココに送るようになっています」

そう言ってウーノが取り出したのは、小さなＵＳＢ。
それを指しながら、ウーノは解説を続けていく。

「ドクターもご存知でしょうが、洗脳プログラムはクアットロが使っている管理システムとも繋がっています。ですので、アンチプログラムがアインにインストールされれば、間違いなく管理システムと一度回線がつながります」

「……なるほど。その瞬間、ウーノが持っているＵＳＢを介して管理プログラム、そしてそのままゆりかごのシステムに侵入。ゆりかごに強制介入して、アインとヴィヴィオの操縦者権限を剥奪。ならびにゆりかごから、２人の操縦者登録を抹消。
そうなれば、操縦者を失ったゆりかごは、駆動炉さえ破壊されれば止まる……か。
そっちはどうなんだい？　フェイト＝テスタロッサ」

「え？」

突然話を振られ、今までスカリエッティとウーノの会話についていくだけでやっとだったフェイトは、思わずおかしな声を上げてしまう。
けれど、直ぐに気を取り直して咳払いをひとつすると、彼の問いに答えた。
とはいえ、フェイトにゆりかごの状況は届いていなかったので、答えは殆ど彼女の推測となってしまうのだが。

「そっちは……大丈夫です。なのは達が、きっと何とかしてくれま

す」

「何とも確信に欠ける言葉だが……まぁこの際だ、贅沢は言わないでおくとしよう。

さてウーノ。恐らく回線と繋がるのは余り長い時間ではないだろう？　いつでもいけるように、準備をしておいた方がいいと思うのだが？」

「はい、ドクター」

「ではさっさとやるとしよう。

ついでに、少しばかり意趣返しをしておきたいしね」

そう言って、彼は笑う。いつもと変わらない狂気染みた笑み。

ただ……気のせいだろうか。フェイトにはその笑みから、少しばかり狂気が抜けているように見えた。

◇◇◇◇◇

時間は、今に戻る。

ゆりかごの通路。アインが守るそこでは、戦いとも呼べない蹂躙が続いていた。

蹂躙する側は1人。される側は4人。

される側の5人とて素人ではなく、むしろ強者の部類に分類される筈なのだ。

けれど――。

「なによ、アレ!?　反則じゃない!!」

悲鳴のようなティアナの声も、仕方ないだろう。
蹂躙する側であるアインは、あまりに規格外すぎた。
身体へのあらゆる負荷を無視した魔力ブースト。それによって齎された恩恵を一身に受けるアインの動く速度は、既に人の域にあらず。
目で追うことなど出来ず、従って防御もままならない攻撃は、前衛として鍛えられたスバル達でさえ意識を繋ぐのがやっとという重さと威力を持ち、非殺傷設定の付加されていない魔力での攻撃は、防御や避けることは出来るものの、それでも全員の精神を疲弊させる。

それが間断なく、今まで以上の鋭さで襲ってくるのだ。
恐怖を覚えない方が無理というもの。

（指揮をしようにも、立った瞬間に倒されるような状況じゃ、何もしようがないじゃない！）

ティアナは何度も打ち据えられて朦朧とする意識を何とか覚醒させながら、苦々しい思いを抱く。
彼女の言の通り、先程から全員……といっても主に前衛であるスバル達は、立ち上がった瞬間にアインに殴り飛ばされ、あるいは蹴

り飛ばされ、攻撃どころか1秒以上立ち上がることさえ出来ないでいる。
元々フルバックで打たれ弱いキャロは既に気絶し、スバル達も少しずつだが立ち上がるまでの時間が長くなってきている。
そんな体験した事もないような状況で、一体どう指揮をしろというのか。

そもそも、指揮というのは今までの経験と、相手の動きを見てするもの。
相手の動きも見えず、今まで経験のしたことのないこの状況で、一体どんな指揮が出来ると言うのだろう。いや、この状況では例えなのは達でも、大した指揮など出来る筈も無い。

「けど、泣き言いってる場合じゃない！」

《Ｓｈｏｏｔ．》

自分を叱咤するように言ってから、今まさにギンガを打ち据えた格好のアインへと照準を定める。
――が。

「……」

「っ！！」

まるで瞬間移動でもしたのかと錯覚してしまう程、一瞬でアイン

が彼女の目の前に現れた。
彼女が反応するよりも早く、ティアナは自分の左頬に熱を感じ、それが殴られたことによる熱だと理解する間も無く地面に叩きつけられる。恐るべきは、打撃音がしなかったこと。それはつまり、衝撃が一切逃げずに全て伝わったという事だからだ。

「が……っ！？」

地面に叩きつけられた衝撃で、ほんの1秒にも満たない間ではあるがティアナの意識が飛ぶ。
その1秒に満たない僅かな隙を狙って、アインは地面に仰向けに倒れた彼女の鳩尾を体重を乗せた足で踏み抜いた。

「かふっ！！」

踏み抜かれた痛みで強制的に意識を戻され、しかしダメージは深刻で直ぐに起きることは出来ない。

（この、状況……やばっ……！？）

ティアナがそう思ったのと違わず、アインが彼女の顔を狙うように手を向けて、そこに赤い光が集束し始める。いつの間にチェンジしたのか、彼が纏っているのは黒い軍服――ハヅキのバリアジャケットだ。

つまり今、彼の手に集まっている光はハヅキがメインで使っている砲撃魔法であり、非殺傷設定の無いそれを受けてしまえば、下手をすれば命に関わるだろう。
けれど、彼女の身体はティアナの言うことを聞いてはくれない。

「ファングバスター・イミテーシ「させないっ！」――！」

だが、まさに砲撃が撃ち出されようとした瞬間、青い髪の少女が右拳を振りかぶってアインに踊りかかった。しかし彼女の拳は、アインに届くことは無い。
アインはあろうことか、集束した魔力を空中に留めたまま、後ろにいるスバルを振り返ってその勢いを殺さずに右足を彼女目掛けて叩き込んだ。しかも、その一連の動作は相変わらず彼女の目では追うことすら出来ず、防御も間に合わない程の速度。
その速度と、リミッターを開放された人ならぬ膂力の乗せられた足が叩き込まれたのだ。
スバルが受けることになったダメージは、どれだけのモノか。

「あがっ！？」

スバルの口から苦悶の声が漏れる。
そしてそのまま、彼女の身体はトラックにでも跳ね飛ばされたように横に向かって弾き飛ばされ、壁が砕けて円形にへコむ程の勢いで叩きつけられた。

「ファング……「だから、そんなことっ！」「させませんっ！」……」

空中に留めた魔力を再び撃ち出そうとしたアインに、今度はギンガとエリオが同時に仕掛ける。

だが、そうした2人の目の前からアインの姿が掻き消える。まるで、それが幻だったかのように。しかも恐るべきは、それは幻でも何でもなく、正しく彼が超スピードで動いて2人の前から姿を消してみせたという事実。

2人の視界に残ったのは、倒れているティアナと空中に留まったままの集束された魔力の塊。

次いで聞こえてきたのは自分達の後ろで鳴った、金属製の何かを構える音。

「「！？」」

「……」

振り返れば、槌の部分が巨大に膨れ上がった黒いグラーフアイゼンを構えるアインが居る。

「破壊」

何の技術も使われず、ただ力のままに振るわれる巨大な鉄槌。

しかしその鉄槌は目に映らず、残像さえ残しながらまずエリオを

横から打ち据え、そのままギンガを巻き込んで吹き飛ばした。

「ぐあっ！」

「ぎゃんっ！！」

巨大な質量を横から叩きつけられ、2人は為す術無く飛ばされ、壁に激突する。

そしてその衝撃で再び意識が飛び……しかし今度は、彼女らの意識が浮上することは無かった。

「……」

完全に気絶したギンガとエリオを一瞥し、それからティアナへと視線を戻すアイン。

今度こそ彼女にトドメを刺すべく、彼は空中に浮かんでいる魔力の塊の前へと歩み寄り、ゆっくりと集束した魔力を打ち抜こうと右拳を振りかぶり……。

「……？」

「はぁっ……はぁっ……！」

しかしその拳は、荒い呼吸を繰り返すスバルに握られ、振り下ろ

されることは無かった。
アインはゆっくりと自分の手首を握る彼女に視線を送り、そして無機質な瞳で彼女を見据え、氷の様に冷たい声で彼女に尋ねる。

「何故、邪魔をするのです。幻術使いに私が砲撃を撃っている間に攻撃した方が、効率的でしょう」

「ハヤトに……ティアを殺させない為だよ」

機械のような彼の目を、炎の様に苛烈なスバルの目が見返す。
その瞳に気圧されたように、アインの機械のような瞳が僅かに揺らぐ。

「先程クアットロ姉様から、貴女がたの完全排除が命令されました。そのことに何も疑問はありません。何故、貴女がそれを気にするのです。タイプゼロ・セカンド」

「決まってるよ……貴方が、ハヤトだから」

「ですから、それは違うと……」

「違わない」

アインの言葉を遮ってスバルの声が響き、彼の右手を握る彼女の手に力が入った。
今の彼なら、彼女の拘束など簡単に振り切ることが出来ただろう。

だが、何故かアインはそうしない。瞳は相変わらず無機質で冷たくスバルを射抜く。
けれど……アインは動かない。

「さっきから、ハヤトはずっとなのはさん達の攻撃しか使わない。多分だけど……今のハヤトなら、あたし達が知らない他の部隊のエースって呼ばれている人たちの魔法だって使える筈なのに、ハヤトは六課の人たちと、ハヅキさんしか真似してないんだよ？気付いてたかな？」

言いながら、頬を染めてちょっとだけ照れ臭そうに、「えへへ」と彼女は笑う。

「それってきっと、ハヤトが覚えてるからだと思うんだなのはさん達の事を。あたし達の事を。機動六課の事を……」

アインの手を握るスバルの手には、力など殆ど入ってない。こうやって平気なフリをして立っているのだって、ただの虚勢だ。その気になれば、アインは今すぐにだってスバルを打倒してティアナに向けて砲撃を放つ事が出来る。

けれど、アインは動かない。

「だから……あたしは、絶対に諦めない」

アインの手を掴んだまま、スバルがそう言って拳を握る。

「ハヤトに何度殴られたって、蹴られたって、全然平気」

彼女が攻撃をしてくるのが分かっているのに、何故かそれでもアインは動かない。

……否、“動けない”でいる。

ボロボロで、膝はガクガク震えていて、今にも倒れてしまいそうなのに。

それでも自分をジッと見つめるスバルの毅然とした瞳に、アインは目を奪われていた。

彼には、そんな感情などある筈が無いのに。

「だって……だってね。嬉しいんだ」

彼女は笑う。

口の端から血を流しながら、それでも白い歯を覗かせて。

「こうやって戦ってると、ハヤトがハヤトなんだって思えるから」

握られた拳に、魔力が集まる。

それは間違いなく彼女からの攻撃で。

しかし、アインはそれでもなお、スバルの瞳に射竦められて動けない。

「ハヤトが、あたしの事を忘れてないって信じれるから」

少しだけだが、アインの左右違いの瞳に意志の光が宿る。
そこに映った光は、間違いなく彼女が好きな……大好きな彼のモノ。
見間違いかもしれない程の一瞬だが、スバルはそれが間違いなく彼の光だと確信できて、それが何よりも嬉しかった。

「だから――」

だから、スバルは笑う。
ボロボロでも、倒れそうでも、そんなことが関係ない程に美しく。

「だからね、ハヤト」

言葉と共に、スバルの唇が一瞬だけアインのそれに重なる。

「待ってて。あたしが、助けてあげるから」

次の瞬間、アインはスバルの放った近距離砲撃に飲み込まれた。

ｓｉｄｅ：―　了

ｉｆ６１話　『転機　２』（後書き）

前回までがムダに長かったので、今回はやや短めに。
どうも、ラモンです。

んー……脳汁の命じるままに書いてたせいで、何か微妙な感じがしないでもないなぁ……。
そんな感じの、ｉｆ６１話でした。

今回はスーパー科学者タイム＆スーパーヒロインタイムでした。
ちょくちょくではありますが、逆転劇のスタートです。
まだフラグを立ててるくらいですので、本格的なのは早くて.ｉｆ６３話、遅ければ６５話くらいになるかと。

あー……何かこれ以上は語ることがないですなぁ。
スバルが可愛く、スカっちが何故かカッコよく書けてれば、今回は満足です。
次回は引き続き、スバルのスーパーヒロインタイムと、旦那が頑張る話になる予定です。
予定なので変える可能性は大いにありますが。

それではまた、次の話で。

if62話　『転機　3』

side：―

壁に叩きつけられ、崩れてきた瓦礫を頭から浴びながら、アインは戸惑っていた。
本人に自覚は無いが、それでも確かに彼は戸惑っていた。

「……？」

攻撃を受けたというのは理解できている。
ただ、その攻撃を何故受けてしまったのかが分からない。
十分に避けられるタイミングだったし、彼女の手を振りほどくのも、彼女を蹴り飛ばすことも十分過ぎる程に可能だった。けれど、アインはそれをしなかった。

それがアインには理解できない。
そうすべきだと彼は判断していたし、動かそうともしていた。
けれど、動かなかった。

「……？？？」

自分の手と足を動かして異常が無い事を判断し、ゆっくりと立ち上がる。

異常は見当たらず、ソフト面でのエラーも無い。
暫しの間沈黙してから、アインは偶発的なエラーだと断じて前を見た。

「……どうかな？　マッハキャリバー。ブレイブハート」

彼が見た先では、スバルが構えながら自分のデバイスと、左手の指に嵌めたブレイブハートに、アインのダメージ具合を尋ねている。けれど、返ってきた答えはスバルが期待していたような、あまり色好い答えではなかった。

《　残念ながら　》

《　ダメージがゼロではないでしょうが、大きくもありません　》

「あはは……だよね」

苦笑しながら答えを返し、アインに注意を向けながら後ろに庇っていたティアナに声をかける。

「ティア、大丈夫？」

「あんまり……大丈夫じゃ、ないかしらね……」

ティアナはよろよろと立ち上がり、苦笑と共にその問いに答えた。
けれど、言葉通りダメージは大きいのか足元はフラついて、何とか壁に寄りかかって立っているような状態だ。少なくとも、もう暫くは戦えないだろう。
ギンガとエリオ、キャロの3人は気絶していて目を覚ます気配が無い。
実質、今この場で戦えるのはスバルだけ、ということになる。

「スバル、暫く1人で頑張れる？」

「……もちろん。あたしがハヤトの事、助けてあげるんだから」

「ちょっと、あたしも休んだら加わるからね」

得意気なスバルの言葉に、怒ったようなティアナの声が返ってくる。
後ろを向くことが出来ないので表情を窺うことは出来ないが、それでも長い付き合いのスバルには、ティアナが口を尖らせているだろうことが分かり、それがおかしくて微笑んだ。

「……！」

そうしていると、スバルの前でアインがゆらり……と幽鬼のように立ち上がる。
瓦礫で切ったのか、傷口から流れた血が額を伝って左目へと垂れて、彼の左目を濡らす。しかし、義眼である左目がどれだけ濡れよ

うと、彼は目を閉じようとはしない。

「……戦闘、続行」

血に濡れた左目がスバルを捉える。
相変わらずその瞳は無機質で、機械的に冷たくスバルを見据えている。
けれど、額から流れた血が左目、そして頬を伝っていく様はまるで――。

「――泣いてるみたい」

小さく小さく、スバルは呟いた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ６２話　『転機　３』

「すみません、私が同行出来るのはここまでなのですよ」

暴れている白天王が遠目に確認できる場所で、リインが自分の隣を飛ぶゼストに声をかけた。
ゼストはその声に一度飛ぶのを止め、空中に留まったままリインに視線を送る。

「いや、十分だ。世話をかけたな」

「いえいえ、管理局員として当然の事をしたまでです」

「……そうか」

胸を張るリインに口元を緩めながら返事をし、ゼストは遠方で暴れる白天王を見る。
明らかに統制されていない動きで暴れまわる白天王の周りでは、何回も真紅の光が明滅しているのが見て取れた。それを見たゼストは、内心「まさかあの白天王と戦える人間が居たとは」と驚きを隠せない。
実際、彼でも戦うことは出来ただろうが、それを実行しようとは思わないだろう。

「では、私は行きますです」

「ああ」

「あ、騎士ゼスト」

リインの言葉に返事をして彼女に背を向けたゼストに、リインが声をかける。
ルーテシアを探しに動き出そうとしたゼストはその声に振り返り、彼女に視線を送った。
そんな彼に、リインは太陽のような微笑みを向けて口を開く。

「貴方の事はまだよく知りませんけど、それでも、貴方が良い人だっていうのは分かるです。
だから……御武運を。貴方に、祝福の風が吹きますように」

「……感謝する」

顔を見せずにそう告げ、ゼストはルーテシアを探す為に空を翔ける。
その背中を見送って、リインもまた彼とは逆方向へと飛び始めた。

◇◇◇◇◇

「っ、くぅっ！」

地面を蹴って自分の顔面を狙ってきたアインの左足を、咄嗟に右腕を上げてガードする。
当たれば一撃で相手を昏倒せしめるだけの威力を持った蹴りが、

ガードした右腕とぶつかって、パァンッ！　と空気の弾けるような音を出した。
　咄嗟のガードとはいえ、キチンと衝撃を受け流すようにした筈なのに、それでも受け止めたスバルの右腕がビリビリと痺れ、一瞬だが力が入らなくなる。

「……そこっ！」

　けれどスバルはそれに構わず、蹴りを放った格好でいるアインの軸足である左足目掛けて、間髪入れずに足払いを見舞う。肉体的リミッターを外し、超人的な運動能力を得ているアインとはいえ、流石に軸足を払われては立っていることは出来ず、身体のバランスを崩した。
　しかし、恐ろしいかな。
　アインは崩れた体勢に逆らわず、そのまま身体全体を捻って逆立ちの状態になり、そこから両足を開いて手のような正確さの蹴りを何発もスバル目掛けて放つ。

「うわわっ！？」

　その攻撃は想像していなかったスバルが、小さな悲鳴と共に数歩下がって蹴りを回避し、アインの間合いの外に出る。普通ならば追撃が来る所ではあるが、アインは逆立ち状態。いくらなんでもその体勢で彼女を追いかけることは不可能だ。

「もらった！」

それを見越していたスバルは、彼の連蹴りが終わった隙を突いて再びアインに向かって拳を振り被る。

逆立ちでは足に比べて上手く動けないのは道理。今なら、間違いなく彼に拳を被弾させることが出来る筈だと考えて。

だが、その考えはまだまだ甘かった。

「ふっ！」

「えっ！？」

あろうことか、アインは逆立ちのまま両手を曲げて勢いをつけ、丁度スバルの頭を飛び越えるような形で思い切り跳躍してみせた。

本来なら、人間が両手で自分の体重をそこまで浮かせるのは不可能だ。

けれど今のアインは肉体の限界であるリミッターを外し、その上で身体自体も改造されている。その程度、造作も無いことだったのだろう。

「！」

そのままアインは左腕でスバルのバリアジャケットの右襟を掴み、首を絞めるように思い切り襟を引っ張る。そして、その勢いを殺さずに彼女の首に左腕を引っ掛け、まるでダンスでも踊るかのように

彼女の首を軸としてぐるりと回る。
彼の体重まで加わった回転の勢いには、いくらスバルと言えども耐えられない。
引っ張られた襟を中心をして身体のバランスを崩し、そのままアインの回転につられるように身体を回転させて地面へと倒されてしまう。

「痛っ！」

小さな悲鳴と共に、スバルがアインに組み敷かれる。俗に言うマウントポジションだ。
そのままアインは拳を振りかぶり、スバルを打倒せしめんと彼女の顔目掛けて振り下ろす。

「危なっ！？」

スバルは悲鳴を上げながら、振り下ろされた拳を上半身をうまく捻って回避する。
顔に目掛けて振り下ろされた拳は通路の地面を殴りつけ、鈍く壊滅的な音を立てて金属製の床が罅割れながらべコンとへこむ。
その威力に顔を青くして、スバルは捻った上半身の勢いを利用して何とか身体を起こそうと試みる。
しかしマウントポジションを取られた状態での反抗は難しく、何度身体を捻っても、腹の上に乗った彼をどかすことは出来ない。

「く、ぅっ！」

「モデル『タイプゼロ・セカンド』、『リボルバーナックル・イミテーション』」

「っ！！」

冷たくスバルを見下ろすアインの右腕に、無骨な鉄のナックルが嵌る。

同時にアインの胸の前――スバルからすれば目と鼻の先に、スバルと同じ青い魔力の球が生まれた。

しかもその球はスバルのそれよりも遥かに大きく、これが放たれればどれ程の威力になるのか想像もつかない。

「や、ばっ！」

「ディバイン――」

そして、魔力を打ち抜こうとアインが拳を振り下ろしかけた、まさにその時。

スバルの目の前で渦巻いていた魔力の球は、横から飛んできた橙色の魔弾に撃ち抜かれ、空中へと霧散する。拳を振り上げたアインと、彼に組み敷かれたスバルとが魔弾の飛んできた方を見れば、そこには壁に寄りかかった状態ではあったが、それでも自分のデバイスである二丁拳銃を構えたティアナ。

スバルは一度驚いた様に目を見開いたが、直ぐに我に返って自分

から視線を逸らしているアインの身体を突き飛ばす。
　視線を逸らして油断があったのか、アインは簡単にスバルによって突き飛ばされ、少しだけスバルから離れた場所に着地する。その隙に、スバルは慌てて身体を起こし、壁に寄りかかっているティアナの方へと合流した。

「大丈夫、ティア？」

「何とか……立てるくらいはね。でも、あんまり大丈夫じゃないわ」

　そう答えるティアナの顔は笑っていたが、確かに言葉の通りなのだろう。寄りかかって立つ彼女の膝は小刻みに震えていて、クロスミラージュを持つのも億劫に見えた。

「でも、援護くらいは出来るから、いつも通りやるわよ」

「……うん。あたしが前で、ティアが後ろね」

「そーゆーこと」

　確認するように互いに短く言葉を交わし、黒いリボルバーナックルを構えたアインと相対する2人。
　ダメージだけで見れば、明らかに2人が不利だ。
　何せアインはまだ、ダメージらしいダメージなど先程スバルが与えた一撃だけしか受けていない。
　対して2人は、それこそ数え切れないくらいに何度も殴られ、蹴

られ、ダメージを蓄積させている。
普通に考えれば、勝ち目など無い様に見えるだろう。
けれど、それでも2人の目に諦めの色は見られなかった。

『スバル、ティアナ、聞こえる!?』

「「!」」

そんな時、2人の耳に聞きなれた人物の声が聞こえてくる。

「シャーリーさん、どうしたんですか?」

『今ね、シグナム副隊長から連絡があって、ハヤト君を助けられる手段が見つかったって!』

「ホントですか!?」

『うん。今、副隊長がアースラに来てくれるって話だから、もうちょっと頑張ってて!』

最後にそう言って、シャーリーからの通信が切れる。
スバルは慌ててティアナを振り返り、ティアナはスバルに向かって頷きを返す。
そして2人は、嬉しさを隠そうともせずに表情に表してアインに視線を戻した。

◇◇◇◇◇

「おらぁぁああっ！！」

砕けた白天王の左頬目掛けて、ハヅキが蹴りを見舞う。
しかし、その蹴りを喰らうと流石にマズイと気付いている白天王は、僅かに顔をそらして蹴りを受ける場所を変えて彼女の蹴りを受け止めた。
ハヅキはそれに悲観するでもなく、そのまま足の当たった白天王の装甲を足場として跳躍。
少し離れた場所に足場を作って着地する。

「……げほっ」

その場で白天王と睨みあいながら、ハヅキは口に溜まった血を吐き出す。
先程まではその一瞬を狙って攻撃してきたであろう白天王は、今は攻撃せずにジッとハヅキの様子を窺っている。彼女のダメージが大きく、このまま持久戦にすれば自分が勝つと分かっているからだ。

「ムカつく程に頭がいいな……ったく。戦うのは楽しいが、負ける

のは楽しくないなぁ」

《　ですが、倒すのは難しいですよ。やはり召喚士を先に捕まえては？　》

「そんな卑怯な真似が出来るか。これは、私と奴の喧嘩だぞ」

《　いや、そんな事言ってる場合じゃないでしょ　》

漫才のような会話だが、それでもハヅキの視線は真剣だ。

実際、レオンハルトの言っているように、白天王は召喚された身なのだから、召喚した主を何とかしてしまえば話は早い。そしてハヅキは、恐らくその召喚士が先程自分が助けた紫色の髪の少女だと目星もつけている……だが。

「召喚士が説得に応じれば良し。だが、もし説得に応じなければ事態解決には召喚士を殺すしかない。

……私に、あの年端もいかぬ少女を殺せと言うのか。お前は？」

《　ですが！　》

「くどい！　私がここでこのデカブツを倒せば済む話だ！

あの子をどうするかは、それからでいい！　分かったなレオンハルト！！」

《　ッ……！　》

そう言って、ハヅキが再び足場を蹴ろうとした……その時。

「すまんが、その役目。俺に任せては貰えんだろうか」

不意に、彼女が作った足場の隣に1人の男性が現れる。
ボロボロになった茶色のロングコートを身に纏い、槍型のデバイスを持つ騎士――ゼストだ。
いきなり現れたゼストに、ハヅキはさして驚いた様子も見せず、白天王を見据えたまま彼の言葉に答える。

「貴方は？」

「ゼスト。この白天王を召喚している者の、知り合いだ」

「……ならば、私達の敵ですか？」

前を向いたままの彼女の問いに、ゼストはゆるゆると首を振って答える。

「いや。今の俺は、知り合いを助けに来ただけの……1人の人間だ」

「なるほど。では、お願いします」

「……いいのか？」

自分で言ったが、流石にこれだけ簡単に信じて貰えるとは思っていなかったのか、ゼストは面食らった顔でハヅキの方を見て尋ねた。
そんな彼に対して、ハヅキはニヤリと口の端を持ち上げて笑う。

「こう見えても、人を見る目はあるつもりですので」

《　いやボス。説明になってないですから　》

意味の分からない返答を返すマスターにツッコミを入れるレオンハルトは無視して、ハヅキは折れていない左の拳を握り、足場の上でいつでも飛び出せるように構え、「それに」と付け加えた。

「もし貴方が敵だったとしても、その時はこいつを倒した後に私が貴方を打倒すれば良いだけだ。
そうそう、召喚士らしき少女でしたら、ここから7時の方角の木の下に居ましたよ。では」

最後に短くそう告げて、ハヅキは足場を蹴って白天王へと向かっていった。
その背中を、信じられない者を見るような目で見送ってから、それでもルーテシアの元へ迎えると分かったゼストは顔を引き締め、彼女から教えて貰った方へと急ぐ。
今度こそ、手遅れになる前に辿り着くために。

「う、はぁ……」

ゆっくりと、ルーテシアが膝から崩れ落ちる。汗は滝の様に流れ、呼吸は荒いが酷く弱々しい。

彼女が両手に着けているグローブ型のデバイス、アスクレピオスに嵌められた宝玉の光も、彼女の様子に呼応するかのように弱々しくなってきている。

明らかに限界を超えての召喚が影響しているのだが、それでも彼女は白天王たちを戻そうとはしない。

「ぜぇっ……ぜぇっ……」

苦しいのか、ルーテシアの目から涙が流れて地面を濡らす。

眉尻を下げて滂沱の涙を流すルーテシアの思考は、既にグチャグチャだった。

頭の片隅では、このままでは母であるメガーヌが入った生体ポッドが壊れてしまうと危惧している。けれど、それ以上に本人も理解できない憎悪の感情が渦巻いていて、それが止められない。

理性を訳の分からない感情に塗り潰される恐怖、そして自分のせいで母を喪ってしまうか知れないという恐怖、誰も自分を助けてくれないと分かっている恐怖。

そういったあらゆる感情がない交ぜになった挙句に、限界を超えた魔力使用による疲労が加わる。それは、僅か9歳の少女の心では、

到底処理しきれるものではなかった。
ルーテシアは、一種のパニック状態に陥ってしまっているのだ。

「た……すけ……」

そんな孤独と恐怖、自分に制御できない感情に苛まれるルーテシアの口から、声が漏れる。
けれど、その声に答えてくれる人は居ない。一番近くに居るのはガリューだが、それでもガリューの居る位置は彼女から３００メートルはゆうに離れていて、更にガリューには、ルーテシアに近づいた敵を倒せという命令をされている為、彼女を気遣うことさえ出来ない。
勿論その命令は、ルーテシアを汚染している洗脳プログラムが言わせた事ではあるのだが、それでも召喚主からの命令は、召喚された側であるガリューには絶対で、破ることは出来ない。

【……】

黙ったまま、崩れ落ちるルーテシアを遠くから見つめるガリューの拳が力の限り握り締められる。
何度動こうと思っても、命令がガリューの身体を戒め、動かさせない。
だから、ガリューにはただルーテシアを見つめることしか出来なかった。ついさっき、ハヅキが白天王の足を殴り飛ばした時も、ガリューは動けなかった。

【……っ】

ガリューの表情は変わらない。
けれど、そこには確かに悲壮があった。

「だれか……助けて……」

誰にも聞こえないようなか細い声で、ルーテシアが言葉を零す。

「お母さん……アギト……ゼス、ト……」

彼女の言葉には、誰も答えてはくれない。
その、筈だった。

「ルーテシア」

「っ！！」

だが。
答えは返ってきた。
その声は、彼女が共に過ごした懐かしい声で。
顔を上げた彼女の視線の先には、確かにその人が居た。

「遅くなってすまなかったな」

「あ……あぁ……」

ポロポロと、先程まで流れていたのとは違う種類の涙が、ルーテシアの目から流れる。

恐怖ではなく、安堵から流れる涙。

頭痛のように頭を苛むあらゆる感情に支配されながら、それでもルーテシアは彼の名を呼んだ。

助けて欲しいと、どうにかして欲しいと、そんな、あらゆる思いの全てを込めて。

「……ゼスト！」

ｓｉｄｅ：―　了

if62話　『転機　3』（後書き）

インフルキタコレ。
どうも、ラモンです。

スーパーヒロインタイムがいまいちできなかった……。
でも、スーパー旦那タイムが出来たので満足です。
んー……大体これで逆転のピースは揃いましたかね？　後は逆転劇を書いていくだけだと思うんですが……さて、どうなることやら。

次回はいよいよ逆転劇開始の予定です。
最初は、多分スバル達のところからですかね。
あー駄目だ。イマイチ頭が回ってない。
ではでは、次回を期待せずにお待ちくださいませ～。

それではまた、次の話で。

ｉｆ６３話　『揃うピース、追い詰められる者』（前書き）

※今回、あるキャラがキャラ崩壊をしています。
そういうのが嫌な方は、気をつけてお読みくださいませ。

if63話　『揃うピース、追い詰められる者』

side:―

スバルが駆け、彼女目掛けて襲い来る魔力弾をティアナが撃ち落す。
魔力弾を撃った後の一瞬の隙を見逃さず、スバルはアインへと肉薄して拳を繰り出した。
けれどアインはその拳を、身体を半身にすることで紙一重で避けてみせる。そして、そのまま彼は自分の手に握られたバルディッシュの偽物を振るう。

「くっ！」

しかしやはり大剣では振られる速度はやや遅く、スバルはそれに助けられながらも振るわれた大剣の射程範囲外までバックステップで逃げる。黄色い刃を持つ大剣を振り抜いた格好のアインに、スバルと入れ替わるようにして無数の橙色をした魔力弾が襲い掛かった。
アインはその魔力弾ひとつひとつを目で捉えながら大剣を消し、代わりにその左手に2つの黒い指輪……クラールヴィント・イミテーションを造り出す。

「シールド」

短く呟かれた言葉と共に、彼を囲むように半球型をしたエメラルドグリーンのシールドが展開、襲い掛かってきた橙色の魔力弾の悉くを弾いてみせた。

そのシールドに守られながら、アインはゆっくりと視線を上げて2人を見る。

彼の鋭い視線に射抜かれつつ、2人は小声で言葉を交わす。

「……まだ、連絡こないね」

「しょうがないでしょ。どんな手段かわからないけど、解析とかにも時間かかるだろうし」

「でも――っ！！」

ティアナに言い募ろうとした瞬間、2人の間を切り裂くように、鞭の様にしなる連結刃が上から下へと振るわれ、2人は左右に分かれて跳躍する。

それを見たアインは直ぐに黒いレヴァンティンから手を離し、それが魔力の粒となって消え去るよりも早く、今度は黒い槍――ストラーダを造り出した。直後、槍の穂先の少し下からブースターの炎が吐き出され、それに引き摺られてアインの身体がティアナの方へと加速しながら突っ込んでいく。

「ティア！」

「くぅっ……ちゃんと分かってるじゃない！」

アインが狙うのは、ダメージの蓄積が多く接近戦に長けていないティアナ。
先に潰すなら彼女だと判断して、アインは加速のついた穂先で彼女を貫かんと迫る。
けれど、ティアナとてその程度はお見通しだ。

「このっ！」

迫る彼の顔に銃口を向け、躊躇無く引き金を引く。
いくら非殺傷設定とはいえ、顔に当たれば流石にただでは済まない……が、ティアナはアインがそれを避けるか防ぐという核心があった。

「ふっ」

その通り。
彼はストラーダを横に一閃することで、彼女の攻撃を切り裂いてみせる。
けれど、それで体勢を崩すことがティアナの目的であり、そしてそれは果たされた。

それに安心しながら、ティアナは跳躍を終えて再び動けるように体勢を一瞬で整える。
けれど、アインは追撃しようとはせずに、加速を上手く使ってティアナの遥か後方へと着地した。

（……妙ね。何か、あったのかしら？）

先程までなら確実に追撃されていた筈なのに、しかし今度は来なかった追撃にティアナは疑問を持つ。

彼女はストラーダを持つアインを注意深く観察し……そして、それに気付く。

「……」

攻撃など当たっていない筈の、ストラーダを握った左手。

その先から、血が流れている事に……。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｉｆ６３話　『揃うピース、追い詰められる者』

「ティア、大丈夫！？」

「ええ。それよりスバル、あれ、見える？」

「え？」

ティアナに促され、スバルの視線もアインへと向く。
暫く観察して、彼女もまたティアナと同じことに気付いたのか、驚きの声を上げた。

「な、何で！？」

「分からない。けど、何かおかしいわ」

「何かって……でも、ハヤト怪我なんて……」

「ちょっと黙って。今、考えてるから」

ティアナは表情と声は冷静なまま、スバルの声に答える。
だが、実際は彼女もスバルに負けぬ程に混乱していた。攻撃を受けた時に血が出たとしても、左腕から出るのは不自然だ。何せそこは、黒いバリアジャケットによって守られている。壁にぶつかった程度で怪我をする可能性は限りなく0に近い。

では何故？

その理由を考えて考えて……ティアナはある結論へと辿り着いた。

「……まさか」

「ティア？」

「スバル、急いで――「シュワルベフリーゲン」――っ！！」

何かを言おうとしたティアナが口を開くのとほぼ同時に、アインが黒いグラーフアイゼンで撃ち飛ばした、魔力を帯びた鉄球が２人へと襲い掛かる。

２人はそれを後ろに跳ぶことで避け、その動作をしながら空中で会話を続けた。

「さっきからのハヤトの動き、尋常じゃなかったわよね！？」

「うん！」

「推測だけど、多分身体のリミッター外してる筈よ！　だから、あれはきっとその反動！」

「じゃあ……！」

「そう！　早く止めないと、あの馬鹿の身体が持たないわ！」

推測と口では言ったが、ティアナは恐らくその推論が正しいと思っていた。

というか、それ以外にあの血を説明出来ないのだ。彼が自分達の攻撃を喰らったのは、スバルの近距離砲撃１発だけ。砲撃は基本的に魔力によって、相手に魔力的ダメージを与えて昏倒させるのが目的。

肉体的なダメージは、非殺傷設定である限り、どれだけ見た目が派手だろうと微々たる物。
その後壁に激突したが、先に考えた理由で怪我を負うとも考えられない。

「けど、ハヤトを助ける手段が……っ！」

「そうよね……っ！」

地面に着地した瞬間、そのタイミングを見計らったように再び鉄球が襲い来る。
２人は間髪入れずにもう１度地面を蹴り、空中へと跳躍した。その先では、アインが先程と同じ位置でグラーフアイゼン・イミテーションを振りぬいた格好をしているのが見える。

「どうしよう！？　ねぇ、ティア！」

「……あたしにも、わかんないわよ！」

彼を助ける手段がわかるのが何時なのかが分からず、さらに彼の身体にはタイムリミットがあり、それが迫ってきている。どれだけティアナが指揮官として優秀な資質を持っていても、まだ１６歳の少女。
一度に与えられた状況と情報を整理しきれず、その苛立ちを声に出してスバルを怒鳴ってしまう。
常に冷静だったパートナーの怒声に、元々パニックになりかけて

いたスバルは更に困惑する。本来ならここで一度時間を空け、頭を整理する必要があるのだろう。
しかし、アインは2人に頭を整理する暇も与えない。

「紫電、一閃――」

今度アインが狙うのは、パニックを起こしかけているスバル。
そんな状態で、彼女が神速の領域での攻撃をガード出来る筈が無い。
――そう。彼女『は』ガード出来る筈が無かった。

《Protection.》

《Caliburshot, leftturn!》

「!」

彼女に迫る黒い刃を“赤い”シールドが守り、彼女の意思とは関係なく、左足のマッハキャリバーが無理矢理彼女の脚を動かして、その刃を弾き飛ばす。更に、それで体勢を崩した彼女の代わりにバランスを整え、地面に着地させた。

「マッハキャリバー……ブレイブハート……」

《何をしているのですか、貴女たちは！》

呆然と呟いたスバルに、ブレイブハートの鋭い声が飛んだ。
その声を聞いて、スバルは勿論、その隣に着地したティアナも身体を強張らせる。

≪　今、マスターハヤトを助けられるのは、貴女たちしかいないのでしょう！？
なのに、何を戸惑っているのです！　≫

「で、でも……ハヤトが……」

≪　そこで動揺していても、何にもならないでしょうっ！！　≫

「っ！」

≪　マスターハヤトを助ける手段があるのに、貴女たちがそんなザマで、何が出来ると言うのか！！　≫

ブレイブハートの怒号。
デバイスは本来感情を持たない。それでも、その声は確かに怒号だった。

≪　貴女たちには、マスターハヤトを救う為の腕があるでしょう！
マスターハヤトの所へ生ける、足があるでしょうっ！　言葉を伝える口があるでしょう！！
“諦めない”という……“決意”があるでしょうっ！！！！　≫

彼女の言葉に、ティアナとスバルは驚いていた。
言葉こそ2人を叱責するモノだが、そこにあるのは苛烈なまでのハヤトへの想い。
デバイスである彼女が、それをここまで発露させていることに、2人は驚いていた。

≪　パニックになっている暇があるのなら！　少しでも解析までの時間を稼ぎなさい！
　動揺している暇があるのなら！　マスターハヤトの力を使わせない方法を考えなさい！　≫

ブレイブハートは吼える。
手を出せぬ自分の代わりに、自分の敬愛する主を助けようとしている2人に向けて。
助けて欲しいと、あの人を救って欲しいと誰よりも願う彼女だから。

≪　貴女たちには、それを為せる“力”があるのだからっ！！　≫

だから――。

≪　惚れた男ぐらい、ちゃんと救ってみせろっっ！！！　≫

――万感の思いを込めて、彼女は吼える。
それが、主持たぬ今のブレイブハートに出来る精一杯。
果たしてその声は、その言葉は……万の言葉にも勝ってスバル達の心を打つ。

「「……ごめん」」

2人の声が、重なる。

「そうだよね。ハヤトを助けるって、決めてきたんだもん」

「……ええ。動揺してる暇なんて、無かったわよね」

呟く彼女達に、三度アインが迫る。
アインの左手を覆うのは、黒いリボルバーナックル。
けれど、振るわれる拳はさっきよりも明確に遅くなっている。それは、ハヤトの身体が悲鳴を上げ始めているからだろう。彼が動こうとしている速度に、身体が追いつかないのだ。だから、余計に速度が遅くなる。

「スバル！」

「うん！」

それを避ける2人の顔に、もう焦りも戸惑いも無い。

余裕さえ感じさせながら彼の攻撃を回避し、彼の動きを止めるようにバインドをかける。

「……ぎ、ぐっ！」

それを破ろうとアインは身体に力を込める。

既に限界を超えつつある体が悲鳴を上げるが、アインはそんな事など気にもせずに自分を縛るバインドを粉々に砕く。

そして、彼がまた誰かの力をコピーしようとした……その時。

「！？」

アインの脳内に、エラーが走る。

「データベースより、モデルのダウンロード不可。

ＩＳ『ミラー』、固有武装『ライト・トゥ・クリエイト』……共に使用不可」

無表情で、しかし信じられないという感情を覗かせ、アインが呟いた。

◇◇◇◇◇

「なっ！？　そんな馬鹿な！！」

自分の周りを囲むように展開したモニタ全てに表示された『エラー』の文字を見て、クアットロが目を見開いて声を上げる。

「データベースからの応答が消えた！？　破壊された形跡……無し！？　じゃあデータベースからアインへのダウンロード経路だけを遮断したとでも言うの！？　一体誰がそんな事……」

『私だよ。クアットロ』

「！！」

パネルを叩きながら叫んだクアットロが、自分の前に開いた小さなモニタと、そこに映る男をその視線に捉える。だが、クアットロは信じられなかった。

何故ならそこに映っていた、自分に良く似た笑みを浮かべている

男――ジェイル＝スカリエッティが、こうしている筈が無いからだ。
クアットロの計画では、スカリエッティは既に逮捕され、今頃護送されている予定だった。
だから、自分にこうして通信を繋げる状況に居る筈が無いと、そう考えていたのだ。

「ドクター……！？　ど、どうやってアインのデータベースに！？」

『何、簡単なことさ』

焦った表情で問い詰めるクアットロに、得意気な顔でスカリエッティが解説を始める。

『忘れたのかい、クアットロ？　私と君の思考は殆ど同じ。
君が考え付くことなら、私もまた思いつくということさ。データベースの場所を調べ、そのプロテクトを突破してアインへと経路を邪魔することなど、容易い事だったよ』

「そんな、理由で……！？」

『そんな理由、ではないよ。少し考えれば、そういう結論に辿り着くのは道理だろう？
万全を期すのなら、私を閉じ込めるのではなく、あの時に殺しておくべきだったね。それをしなかった時点で、君は詰めを誤っていたのさ……。
そして、その誤りはこうして、何ともお粗末な結果を呼んだ訳だね』

「くっ……何故、ドクターが管理局と！」

歯をギシリと噛み締めながら、クアットロはモニタに映るスカリエッティを睨む。

彼女の表情を見て、スカリエッティは楽しそうな顔で口の端を持ち上げながら笑いを漏らす。

『くっくっ……いい表情だねクアットロ。ああ、その顔を見て少し溜飲が下がったよ』

「質問に答えてください！」

『ふむ。では答えるとしよう。ひとつは、私の科学者としての意地だよ。

自分の造った娘に負けたままというのは、どうにも鼻持ちならなかったのでね。意趣返しが上手くいって満足だよ。管理局に尻尾を振った甲斐があったというものだ。

もうひとつは――』

そこで一旦言葉を区切り、スカリエッティはニヤリと嗤う。

さっきまでクアットロが浮かべていたような、相手を見下す侮蔑の笑み。クアットロとそっくり同じそれを浮かべながら、スカリエッティが告げた。

『――相手が一番調子に乗っている時に、その邪魔をするというの

は……とても楽しいからさ』

「ふざけ……きゃあっ！？」

その言葉に声を荒げようとした瞬間、クアットロを守るシールドに凄まじい衝撃が加わる。

衝撃の原因は、なのはの撃った砲撃。ディバインバスターよりも遥かに強力な、なのはの必殺の砲撃、スターライト・ブレイカー。

間断なくガジェットに襲われながら、どうやって集束をしたのか、彼女はそれを放ったのだ。

だが、それでもクアットロの造った結界は破れない。

それでも、衝撃を与えられたという事実が、クアットロの心を逆立たせる。

「くっ……邪魔をするな！　エース・オブ・エース！！」

『おやおや、随分と余裕が無くなってきたね。クアットロ？』

「黙れ！　この程度、なんてこと無いわ！！　直ぐにまたデータベースとアインを繋いで……」

『無駄よ。クアットロ』

「！？　ウーノ姉様！？」

スカリエッティに変わり、今度はモニタにウーノが映る。

『もう少しすれば、私が騎士ゼストに渡した物がアインと戦っている機動六課の人間に渡る筈だわ』

「渡した、物!?」

『貴女がアインに施している洗脳プログラム。そのアンチプログラムよ』

「な……っ!?」

今度こそ、クアットロは絶句した。

無理もないだろう。自分が全て見透かしていたと思っていたウーノの行動で、見逃していた部分があったのだから。しかもその見逃した事実が今、こうして自分の追い詰める為のピースとなっている。

『アンチプログラムがあれば、アインは貴女の支配下から抜け出す。そうなればもう、貴女を守る者は存在しない……違うかしら?』

「……」

実際にはアインの洗脳が解けても、クアットロは負けない自信があった。

彼女を守る最後の砦は、今発動しているこの結界だ。これが破られない限り、彼女に触れることは絶対に出来はしない。……けれど、そんな事を考える余裕さえ、クアットロは無くしていた。

『くくく……形勢逆転、というところかな？　どんな気分だい？　クアットロ』

そしてその余裕の無さは、スカリエッティのその言葉で、怒りとなって爆発した。

「っざっけんなあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

ビリビリと空気を震わせる怒声。

その声量は、モニタ越しのスカリエッティに言葉を失わせる程に激しかった。

叫んで顔を上げたクアットロの表情は、そこに居る彼女が先程と同一人物とは思えない程に怒りに歪んでいて、憎しみに染まっている。

「一度私に負けた雑魚が、粋がってンじゃねぇよっ！！

管理局に尻尾振って助けて貰って、ちょっと私の邪魔をした位で、何を勝った気になってやがンだよ！

ふざけんじゃねぇぞ、この糞が！！」

パネルを思い切り叩きつけながら、口汚くスカリエッティを罵る。
いきなり口調が変わったクアットロにスカリエッティが驚いた表情を見せるが、そんな事は気にせずにクアットロは言葉を続けていく。

「アンチプログラムだぁっ!?
ンなもん、それを使われる前にあいつ等を殺しちまえば問題ないでしょうが!」

『……データベースが無く、身体も限界に達しているアインに出来るのかい?』

「出来るに決まってンだろうがぁぁっ! アレは、そういう風に私が造ったんだよ!!
てめぇみたいな屑が考えつかない方法で、ちゃんと対策はしてあるのよっ!!」

『だが、それで仮にアインが勝利しても、アインが潰れてしまっては問題なのではないかな?』

既に体裁を繕うことも忘れたクアットロの言葉に対し、スカリエッティはあくまで冷静に返す。
それが気に入らないのだろう。憎悪で顔を醜く歪め、更にクアットロは吼える。

「アインなんざなぁ、いくらでも替えが利くのよ、ぶぁーーーか！！

遺伝子はもう採取してあるんだから、あとはいくらでも培養クローンを造りゃあ、あの程度の玩具くらい、何体だって用意出来るって話なのよ！　わかったかボケがっ！！」

『……なるほど』

クアットロの言葉に、スカリエッティは頷きを返す。

そんな彼の言葉の代わりとばかりに、なのはがガジェットの隙をついて再びクアットロ目掛けて砲撃を放ち、それが結界にぶつかって再び凄まじい衝撃がクアットロを襲う。

「邪魔すんなこの糞餓鬼が！　そんなに死にに急がなくても、ちゃんと殺してやるわよっ！

舐めるなよドクター！　この程度の邪魔で、私をどうにか出来ると思うな！！」

『だが、アインのデータベースを使えないというのは、中々に困った事態だと思うが？』

「舐めんなっつったろうが、腐れドクターが！！

ＩＳも固有武装も使えなくなる事態ぐらい、ちゃんと想定済みなンだよぉっ！！

もちろん、それに対する対応策もなぁぁっっ！！！」

叫びながらパネルを叩き、クアットロはアインとの通信を繋ぐ。

『クアットロ姉様。どうなされました？』

「アイン！　セーフティオールリリース！
モード“聖王”の起動を承認！　てめぇの前に居る餓鬼共をぶち殺しなさい！！」

『――――起動承認、確認』

彼女の言葉に、アインは小さく答えた。

◇◇◇◇◇

「――――起動承認、確認」

小さくアインが呟く。
同時に、彼の黄色に光っていた左目の色が変わる。

「！」

「あれって……」

戦闘機人たちと同じ黄色から――彼本来の魔力光と同じ、真紅へと。

緑がかった青と血のような赤。左右違いのその目は、丁度ヴィヴィオと同じ色をしていた。

そうなった彼の目を見て、スバルとティアナが驚きの声を上げて彼を見る。

「モード『戦闘機人』終了。同時に、モード『聖王』……起動」

アインの左目が完全に赤に染まると同時に、彼の身体から極彩色の魔力が噴き出した。

その光はまさに、聖王と呼ばれる存在が使う魔力の光。

『あはははははっ！　さあ、止めるんならさっさと止めてみせなさい！？

古の聖王の力を忠実に再現した、今のアインを止められるなら、だけどよぉっ！！』

光に包まれるアインの横にモニタが開く。

『まぁ、そのままだったらあと5分もしないで、アインの体は聖王の力に耐え切れないでバラバラになるけどなぁ！　アインは所詮“聖王の偽物”！　本物の力なんて使いこなせやしない！

それが嫌なら止めてみろ！！　正義の味方サンよぉっ！！

最も、そのモードを発動したアインは、てめぇ等にやられる程弱くはないけどなぁっ！？

あはははははははっっ！！　ぎゃはははははははははっっっっ！！』

もはや、狂っているのか正気なのかもわからないクアットロの笑い声。

それを聞くスバルとティアナの耳にそんな状況をひっくり返すような声が届く。

『スバル、ティアナ、お待たせ！！　ハヤト君を助ける手段……用意完了したよ！』

「……っ！　ティア！」

「ええ！」

聞こえてきたその声に、２人は顔を見合わせて頷く。

これで、逆転できるピースは全て揃った。後はただ、全力を尽くすだけ。

それなら簡単だ、と。スバルは１人そう思って小さな笑みを口元に浮かべた。

ｓｉｄｅ：―　了

if63話　『揃うピース、追い詰められる者』（後書き）

キャラ崩壊したのはクアットロでした。というか、最早別キャラですね。
どうも、ラモンです。

スーパー（裏）ヒロインタイム&ウザットロキャラ崩壊の今回でした。
ここまでキャラ崩壊させて大丈夫でしょうかね。
何か、もう殆ど別キャラになっちゃってて、色んな人から怒られないかなー……と戦々恐々しています（汗）
言い訳をしますと、こういう場面で冷静な仮面が剥がれて、いきなり汚い言葉遣いになる方が、追い詰められた感があって面白いかなー、と思ってこういう風にしました。
でも、あんまり不自然でおかしい、と仰られる方がいましたら、ある程度修正しようとは思っています。

さて、今回でいよいよ全てのピースが完璧に揃い、逆転劇の幕が上がり始めました。
次回からは、本格的に物語を進めていこうと思います。
まずはスーパー旦那タイムから。
次回は旦那が大活躍する予定ですので、ほどほどに期待していただけると嬉しいです。

それではまた、次の話で。

ｉｆ６４話　『彼らが目指した理想（ゆめ）』

ｓｉｄｅ：―

「遅くなったな。ルーテシア」

ゼストは目の前で地面に膝をついているルーテシアに向け、そう切り出した。

「ゼ、スト……？」

双眸から涙を零しつつ、消え入りそうな声で彼の名を呼ぶルーテシア。

すでに意識は朦朧としているのだろう。ゼストを見る涙の浮かんだその瞳は焦点が合っておらず、どれだけ消耗しているのか、息はヒューヒューと耳障りな音を立てる。

そんな彼女の様子を見て、ゼストは眉を顰めた。

「……すまん」

小さく、ゼストが呟く。

彼女がこういう状況になった一因は、間違いなく彼にある。

少し考えれば、自分達の行動が監視されていたこと、そしてルー

テシアに対してスカリエッティ達が何かしらの対策を取っていることぐらい、容易に想像がつく。

あの時は最善の方法だと思っていたが、今この状況に至って考えれば、愚かな選択だった。

自分か、せめてアギトが共にいたならば……ルーテシアはこんな状況になっていなかっただろう。

そんな後悔が、ゼストにはあった。

「――っ！！」

しかし。

彼の言葉に返ってきた返答は、紫色のダガーだった。

「ルーテシア？」

「だ、め……ゼストは……でも、殺さなきゃ……」

驚きの声を上げたゼストの前で、ルーテシアが苦しげに頭を押さえて誰にとも無く呟いている。

彼女の言葉とは裏腹に、その前には再び幾つもの紫に光るダガーが、照準をゼストへと定めて浮かぶ。

「ゼス、ト……逃げ……」

だが、そのダガーは今度は撃ちだされない。
空中に浮かび、ゼストへと照準を定めてはいるものの、ダガー本体はゆらゆらと揺れるだけで動き出そうとはしない。それは、ルーテシアが必死に逆らっているからだ。
『己の意思を捻じ曲げようとする何か』に。

「このままじゃ……私……」

「ルーテシア」

震えるルーテシアの声を、ゼストの泰然とした声が遮る。

「帰るぞ」

短く、しかし優しく決然と。
まるで遅くまで遊んでいた子供に言い聞かせるように、彼は言った。
そしてルーテシアに向かって手を伸ばし、彼女へと歩み寄ろうと足を踏み出す――が。

「っ！？」

その行く手を遮るが如く、ひとつの影が舞い降りる。

全身を黒い甲冑のような外皮で覆い、首元には紫色のマフラー。
そして、ルーテシアと同じプログラムに侵された証である、４つの真紅の瞳でゼストの前に立つのは――

「――ガリューか」

【……】

ゼストの声に反応し、ガリューはゆっくりと両腕を上げて構える。
すると、その両腕の外皮を突き破り、赤い血に塗れた刃が飛び出した。
“ルーテシアに近づく敵を排除する”という命令が、ガリューの身体の事に構わず、ただ敵を排除するためだけに特化した身体へと造り替えているのだ。

【……】

「――」

ガリューとゼストの視線が交わる。
ゼストが見つめるガリューの４つの瞳からは、滂沱の如く血が流れ、涙のようにガリューの頬を濡らして地面へと垂れていく。
それは、この戦いをガリュー自身が望んでいないという事を、何よりも雄弁に物語っていた。

「……ああ、そうだな」

暫し視線が交差した後で、ゼストは微笑みを浮かべてそう呟いた。
まるで、視線を交わすことで会話をしていたかの如く。

「お前は……ルーテシアの“騎士”だものな」

槍を構え、腰を深く落とす。
対するガリューも腰を深く落とし、いつでも動けるような臨戦態勢へと移行する。
守られる格好でガリューの後ろに居るルーテシアは、すでに声を出す気力すら残っていないのか、両手をついて2人を見守ることしか出来ないでいる。そんな彼女をガリューを挟んで見ながら、ゼストは一度目を閉じて深く呼吸をし、そして目を開きながらガリューに告げた。

「悪いが、俺の身体も、ルーテシアの身体も限界が近い。……加減は、してやれんぞ」

【……】

返答とばかりに、ガリューが地面を蹴ってゼストに向かう。
それを見たゼストも地面を蹴り、槍を振り上げた。

そうして召喚獣と騎士とはぶつかり合う。

――ただ、１人の少女を守る為に。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ６４話　『彼らが目指した理想（ゆめ）』

ガキン、と凄まじい金属音が連続して辺りに響く。
ガリューは細かい技能など無しに、力任せに両腕の刃を振るい、ゼストはそれを冷静に捌き、時に受け止めてガリューの隙を探る。
もう、彼の身体は殆ど彼の意思通りには動いてくれない。
今こうしているのも、気力で何とかしているようなものだ。

（……思っていた以上に、時間が無いか）

ギシギシと悲鳴を上げる身体に、ゼストはそんな事を考える。
本来なら圧倒してしかるべき相手であるガリューと、ほぼ互角…
…むしろやや押されている様な戦いをしているところからも、それが窺えるだろう。
けれどゼストは決して焦らず、ただひたすらにガリューの攻撃に耐える。
彼がするべき事は困難を極めるものだ。

一撃でガリューの命を絶つことなく戦闘不能にし、その後ルーテシアに近づいて、自分の槍型デバイスを彼女に触れることで洗脳のアンチプログラムで彼女を救う。

言葉にすれば簡単だが、行うのは何よりも難しい。

ただでさえ上手く動いてくれない身体で、そこまで微妙な調整が出来るかどうか……。

（……いや。出来るかどうか、では無いな。やらねばならんのだ）

自分の脳裏に浮かんだ考えを否定し、再び意識をガリューの動きを見切る事に集中させる。

ガリューの動きは速度こそ凄まじいものだが、その分大雑把だ。

恐らく、ガリュー自身がそうなるように身体を動かしているのだろう。

あるいはその動きは、洗脳プログラムの影響で、主を苦しめると分かっていても戦うことを止められないガリューの、主――ルーテシアを守ろうという確固たる意志が為せる業か。

刃を交えることでそれを感じ取ったゼストは、だからこそ焦らず時期を待つ。

――必ず訪れる、“その瞬間”を見逃さぬように。

【……！！】

「ぐっ、う……」

振るわれた刃を受け止めたゼストの口から苦悶の声が漏れ、刃を受け止められたガリューの、腕のから生えた刃の根元から血が噴き出す。

そろそろ、お互いに限界が近づいている証拠だ。

ガリューも身体の動きを意志の力で押さえつけている。それは、筋肉や神経、その他諸々の器官に凄まじい負担を齎し、傷つけていっている。

「ゼ、スト……ガリュー……」

そんな2人を見て、ルーテシアは声を漏らす。

どうして、こんな事になっているのだろうかと。

何故、大切な2人が戦うような事になっているのかと、涙を流しながら。

「あぐっ……！」

涙を流すルーテシアを、酷い頭痛が襲う。

同時に、彼女の頭の中で「殺せ」「憎め」と、もう1人のルーテシアの声が響く。

頭に響く声に苛まれ、しかし抗うだけの体力も気力も残っていない彼女は、ただ力なく地面に手をついて涙を流すしか出来ない。

先程まで破壊衝動しか無かったルーテシアの頭の中に、ゼストが

現れたことで彼女本来の思考が戻ってきている。もう会えないと、会うことが出来ないと思っていた彼との再会が、コンシデレーション・コンソールに支配されていた彼女の意志を引っ張り上げたのだ。

それは、何と言う奇跡だろうか。

もし彼女の意識が表層まで上ってきていなければ、ガリューとゼストの一騎打ちは決して実現しなかった。間違いなく、ルーテシアもゼストへの攻撃に参加していただろう。

けれど、現実はそうならなかった。

表層まで上ってきた彼女の意志が、一時的にではあるがコンシデレーション・コンソールの洗脳を上回り、攻撃しようとする自分のモノではない、強制された意志を押し留めている。

「……ぁ、ぅ」

しかしそれでも、限界が近づいている。

元々奇跡のような確率で再び表層へと浮かんだ彼女の意志は、時間と共に再び意識の奥へと追いやられようとしている。恐らく、それ程長くはもつまい。

それを感じ取ったルーテシアは、足掻くようにゼストの方へと手を伸ばし、消え入るような声で呟く。

「ゼスト……助けて……！」

「――！」

その叫びは、果たして剣戟の音が響く最中（さなか）に居るゼストへと届い

た。
瞬間、ゼストの持つ槍の穂先の中心にある黄色いデバイスのコアが煌く。

《Ｆｕｌｌ　Ｄｒｉｖｉｎｇ》

響いた機械音声と共に、ゼストの身体は一気に加速。
その加速を力へと変換してデバイスに乗せ、そのまま振り上げた刃をガリューの肩口へと垂直に叩き落す。勿論、命を取らぬ為に刃の部分ではなく、刃のついていない腹の部分で殴りつける格好ではあるが。

【……ッ！？】

ゼストの膂力と、魔力によるブースト、そして加速して移動した速度そのもの、全てがひとつに凝縮された一撃は確実にガリューの身体を捉え、更には衝撃を逃がさない為に上から下へと叩きつけられた攻撃は、その一発で確実にガリューの身体に動けなくなる程のダメージを与えた。
ガリューの黒い外皮には罅が入り、身体は地面に勢い良く叩きつけられ、そのまま一度大きくバウンドした後に再び地面へと落ち、動かなくなる。

「ぐ……が、は……っ！」

だが、その代償として彼の槍はパキンと乾いた音を立てて柄の半ば程から折れ、ゼスト自身はフルドライブの反動でその場に膝をつき、血を吐いた。
そのまま倒れることが出来たなら、どれだけ楽だろう。
しかし彼には、そんな事をしている暇さえ与えられないのだ。

「ルーテシア……」

少女の名を呼ぶことで、自分の動かぬ身体に無理矢理いう事を聞かせ、折れた槍の穂先を拾い上げて、デバイスのコアがまだ動いていることを確認し、そこに向かって語りかける。

「すまんな……もう少しだけ、付き合ってもらうぞ」

《……》

返答は無く、代わりにデバイスコアが一度だけ淡く点滅する。
それを見たゼストは小さく微笑み、今度は倒れたガリューへと視線を送った。
ガリューは地面に倒れ伏したままゼストを見上げ、語りかけるようにゼストを見つめている。

【……】

「……ああ、わかっている」

視線で語られたガリューの言葉――「主を助けて欲しい」という言葉に、ゼストはしっかりを頷きを返す。彼が頷きを返したのを見て、ガリューは安心したように意識を手放した。

気絶したのを表すようにガリューの４つの目から光が消え、全身から力が抜ける。

そんなガリューから視線を動かし、ルーテシアへと視線を向けた。

「ルーテシア」

「……ぁ……ぁあ……」

呟かれたゼストの声に、ルーテシアは頭を振った。

「来ちゃ……駄目……」

彼女は分かっているのだ。もうすぐ自分の意識が、表層から追いやられてしまうという事を。

そうなれば、自分はゼストを攻撃してしまうという事を。

「私……ゼストを、殺したく、ない……っ」

それは耐えられない程に嫌な事だから。
必死に自分の意識を深層へ追いやろうとする何かに抗い、ゼストにそう告げる。

「このまま、じゃ、私……ゼストを――「ルーテシア」――っ」

彼女の言葉を遮り、ゼストが再び彼女の名前を呼ぶ。
優しく、自分の子供に言い聞かせるように。

「帰るぞ」

そしてもう一度、そう言った。
遊びすぎた子供を、連れ帰る親のような声で。

「――お前が、笑って暮らせる世界に」

「む、り……だよ……私は……」

「無理ではない。俺が、お前を連れ帰る……必ずな」

決意を込めて彼女に告げ、ゼストは歩みだす。
すでに身体は限界を超えて、崩壊する寸前なのだろう。その足取りは重く、不確かだ。
歩くのは愚か、立っていることさえ難しいのではと思わせる姿で、

それでも彼は一歩ずつルーテシアとの距離を短くしていく。

「お前はもう、十分に苦しんだ」

「だ、め……ぜすと……ぁぁあああああっっ！！」

そのゼストに向けて、宙に浮かんでいた無数のダガーが遂に発射される。

限界を超えたゼストには、それを捌くことはもちろん、避けることすら出来はしない。

撃ち出されたダガーはゼストへと吸い込まれていき、彼の身体を情け容赦なく貫いていく。それこそ、彼の命を刈り取るように。

「ぐ、ぉ……っ！」

「ゼスト！！」

飛び散った鮮血に、ルーテシアが悲鳴を上げた。

けれど、ゼストは一度身体をよろめかせたものの、倒れる事無く足を踏ん張り、また歩き出す。

「だめ！！　ゼスト、駄目ぇぇえええっっ！！」

必死になって、自分に向かってくるゼストを止めようと叫ぶ。

歩くたびに傷口からはボタボタと血が流れ、苦しげな声が彼の口から漏れる。
しかも、既に自分の意志から離れた身体はそんな彼に向けて、新たなダガーを放とうとしているのだ。
これ以上は本当に命の危険がある。いや……あるいは既に……。

「俺は、今までお前を守ろうとして……その実守っていなかった」

「いやだっ！！　こんなの、いやだっ！　止まれ、止まれぇぇえええっっ！！」

止めようと叫ぶが、無常にもそんな彼女の意志を無視してダガーの追撃が放たれた。
それはまたしてもゼストの身体を貫く……かに思われたが。

「だから、ルーテシア」

ルーテシアを宥めるようにそう言って、ゼストは襲ってきたダガーの全てを槍の一振りで叩き壊した。
ボロボロの槍はその衝撃でさらにボロボロとなり、既に穂先は槍としての役目を為してはおらず、かろうじてデバイスコアだけが原型を留めている程度だ。
けれど、ゼストはそんな状況でも微笑んで呟く。

「……今度こそ、俺がお前を守ろう。
お前が苦しまぬように。お前が――笑って生きていけるように」

そしてまた一歩、ルーテシアに向けて足を動かしていく。

「いやだ！　もう止まって！　止まってよぉおっっ！！」

「が……ぐぅ……っ！」

再びダガーが彼を襲うが、最早ゼストはそれを気にしない。どれだけ身体を貫かれようと、それによって身体を悲鳴を上げようと、ルーテシアへと歩み寄り、手を伸ばす。
まるで、我が子を求める親のように。

「――――帰るんだ。ルーテシア」

囁くように、全てを包むように呟かれたゼストの言葉。
その言葉と同時に、遂にゼストの手がルーテシアへと届く。

「お前が、お前として生きていける場所へ。人を傷つける魔法を、使わなくていい場所へ」

「あ……」

ゼストはそのまま、ルーテシアの小さな身体を抱きしめる。
親が子を抱きしめるように優しく、力強く。

「許せ……少しだけ、痛いかも知れん」

抱きしめたルーテシアの耳元でそう言ってから、ゼストは自分のデバイスのコアを彼女の身体へと触れさせた。

「あ……うぁぁぁぁぁあああっっ！？」

瞬間、電撃が走ったように彼女の身体が痙攣する。
彼女を蝕んでいる洗脳プログラム、コンシデレーション・コンソールと、ゼストのデバイスに入れられていたアンチプログラムとがぶつかり合い、それが苦痛となって彼女を襲ったのだ。
しかし、それは一瞬の事。
直ぐに彼女の身体からは力が抜け、ゼストへ体重を預けるように倒れる。

「ルーテシア……？」

力なく自分に体重を預けるルーテシアに、ゼストの表情に不安が走る。
間に合わなかったのではないか？
体力を消耗しすぎて、今の痛みに耐え切れなかったのか？　と。

「……ぅ」

「……」

しかし、耳元にルーテシアの呼吸を感じて安心したように息を吐くゼスト。
その後、ゼストは彼女を抱きしめたまま、ルーテシアの立っていた場所にある木へと身体を預け、その身を襲う疲労感と苦痛を逃がすように大きく息を吐き、自分の隣にある生体ポッドを見た。

「メガーヌ……」

そこに浮かぶのは、自分の腕の中で眠る少女の母で、かつて自分が救えなかった部下。
物言わぬ彼女に視線を向けて、ゼストは短く独り言を零した。

「俺は……間に合ったぞ」

もちろん彼女からの返答は無い。
それを分かっているゼストは、ゆっくりと視線をルーテシアへと戻し、独白を続ける。
まるで、この場に居ない誰かに聞かせているかのように。

「メガーヌ達の時も、レジアスの時も……俺はいつも遅すぎた。だが、ここは……ルーテシアだけは、間に合うことが出来た。この娘を、救うことが出来た」

彼はそう言って空を見上げる。
近くではまだ戦いが続いていて、それでも見上げた空はどこまでも青く澄んでいた。
そうして空を見上げる彼の顔に、ふと驚きの表情が浮かぶ。

「……ああ、そうか」

納得したように言葉を漏らし、苦笑を浮かばせた。

「これが、俺とあいつが目指した……理想だったか」

腕の中にある小さな命。
彼が守りたいと願い、その為に命を燃やし、そして守りきった命。
本当に守りたいものを守った自分の、なんと誇らしいことか。

「俺達が目指したものは……案外、簡単な事だったのかも知れんな」

呟かれた言葉は、果たして誰に対してのモノだったろうか。

本当に守りたいものを守る……彼が難しいと、成し遂げられない理想だと思っていたことは、それでもやってみれば驚く程あっさりと成し遂げることが出来て。

成し遂げた時、彼の中にはあの日、友と目指した確かな“正義”があった。

それは――実に、実に単純で、こんなにも簡単なことだったのだ。

「簡単な事を、難しくしていたのは……俺達だったようだ」

そんな風に呟きながら、思う。

色々な考えや周囲の考えに動かされ、実は目の前にあった答えを見過ごしていた。

自分達の理想は、黄金に輝くそれは遠くに無くてはいけないのだと。

こんな、足元に転がっている石ころが“それ”である筈が無いのだと、思い込んでしまっていた。

足を止めてそれを拾ってみれば、それこそが自分達の目指し、求めていたものだというのに。

その事に気づくのに、こんなにも遠回りと足踏みとを繰り返して

きてしまった。

そう思いながら、彼は笑う。
あの日、友と語り合った時の様に。

「俺達の求めていたモノは、こんなにも近くにあったのだな」

言いながら、ゼストはゆっくりと青空に手を伸ばす。
そこに居る誰かの手を掴むように。

「魂無き理想は、虚ろ。力無き理想もまた、虚ろ。
がむしゃらに力のみを求めたお前も、昔の理想に縋りついた俺も、
虚ろだったのやも知れん」

一度、そこで言葉を切って息を吸う。
そして彼は、また笑う。

「だが、俺はあの日お前と見つめた理想に追いつけた」

誇らしく、声高に。
誰かと会話でもするように、空を仰いで呟いた。

「ああ……俺達の理想は、こんなにも美しく、尊いものだったんだ

な」

そうして彼は、見上げた空に向けてその名を呼ぶ。

「なぁ……レジアス」

共に理想を目指した、友の名を。

ｓｉｄｅ：―　了

ｉｆ６４話　『彼らが目指した理想（ゆめ）』（後書き）

アニメの旦那がカッコよすぎて、自分の小説に出すのが失礼な気がして仕方ない。
どうも、ラモンです。

今回は１話全部を使ってルーテシア救出＆ハイパー旦那タイムをお送りしました。
ちょっと駆け足気味になっちゃいましたが、下手に引き伸ばす要素もありませんでしたので、短くまとめてみた次第です。
ガリューがあっさりやられすぎな感もありますが、そこは彼も本意ではない戦いだったので、力を無理矢理セーブしていたと納得していただければ、幸いでございます。
元々の技量差も凄いでしょうしね。

さて、今回はどうだったでしょうか。
私個人としては、私の持てる技量と、灰色の脳細胞で思いつく全ての発想を使って、私に書ける最大限の『魅力的なゼスト』を書いたつもりです。
本家の旦那には到底及びませんが、その数千億分の一でも魅力を感じていただけたなら、嬉しい限りですね。

最後に、今回の話はちょっとＢＧＭを指定してみたいと思います。
曲名は『あさきゆめみし』。真・恋姫†無双の呉ルート挿入歌ですが、今回はこれをエンドレスでリピートしながら書いてました。
ですので、もしよかったら聞きながら読み直してみてください。
あ、もちろん皆さんが「こっちの方がいい！」と思うＢＧＭがあったなら、そちらを聞きながら読んでくださって全然オッケーですけれど（笑）

さて、次回はハヅキＶＳ白天王の対決に決着を付けたいと思います。
多分今回と同じく１話であっさり片がつくとは思いますが、その分内容は濃くしていきたいな、と考えている次第です。
面白い仕上がりになるといいなぁー……。

それではまた、次の話で。

ｉｆ６５話　『真紅の女帝、白き天の王』（前書き）

※僭越ながら、今回もＢＧＭ指定させていただきたく。
曲は、ｄｏａの『英雄』です。
勿論、別に流す必要はありませんけれどね（笑）

if65話　『真紅の女帝、白き天の王』

side：ハヅキ＝ロックウェル

視界が回る。
チカチカと点滅する。
気を抜いてしまえば、意識が飛びそうになるのが自覚できる。
どうやら、大分血が抜けてしまったようだな。

「……ぜぇ……はぁ……っ」

息をするのも、もはや億劫だ。
体力は既に限界を超えている。立っている事も出来なくて、足場の上に膝をついて整わない呼吸を一生懸命に整えようと試みる。
そんな状態で、とりあえず目の前の相手……白天王を窺う。

【――ッ】

どうやら、最初に壊した部分だけを狙って徹底的にぶん殴っていた甲斐があったようで、向こうもそれなりでダメージを受けているようだ。
本当に僅かではあるが、奴の巨体が先程よりも沈んでいるように感じる。
少しは足に来ているようじゃないか。

「ハッ！」

その姿を見て、思わず嬉しさが笑いとなって口から漏れる。
子供の頃、母さんが良く言っていたな。『ダメージが入ったなら、それは勝利と同義だ』と。
なるほど、今なら言っていた意味が良くわかるぞ。

「まだやれるな、レオンハルト！」

《　当然です。先代の時に比べれば、まだ楽な方ですよ　》

「言ってくれるな……むっ！？」

頼もしい相棒の言葉に、私は再び足に力を込めて跳躍しようとした。
――その瞬間、奴の両腕に新たな刃が生え出す。まるで、進化でもするかのように。

「何だ！？」

《　ハッキリとはわかりませんが……どうやら、暴走しているようです　》

「暴走？」

召喚された生物が暴走するのは、召喚主が制御を放棄した時か、召喚主がそう望んだ時。

あの少女に関しては先程の人物に任せたが、何かあったのか？

いや、何かあったとしても、ここまで急に暴走するのはおかしい。

召喚術に関しては齧った程度の知識しかないが、確か暴走するということは、それだけで召喚主の命を縮める結果になりかねない。

元来、召喚士と召喚獣とは固い絆で結ばれているもので、仮に召喚主から暴走を命令されたとしても、普通なら抵抗したりする筈だ。

そして召喚主が制御を放棄したとしても、そうそう暴走する訳ではない。

何せ召喚獣には意志があり、暴走したら自分の主がどうなるかもちゃんとわかっているからだ。

けれど、今あの白天王はあっさりと暴走した。

……どういう事だ？

「わかるか、レオンハルト？」

≪　いえ、わかりませんね。ですが、推測は出来ます　≫

「ああ。私もひとつ思いつく可能性がある」

それは――無理矢理戦うようにさせている“何か”があるという事。

洗脳か、それとも他の手段があるのか、それは分からんがそういい

う事なんだろうさ。
……と、私がそう考えていた時。

【――――ッッッッ！！！！】

抗うように、白天王が吼えた。
暴走は止められないが、まるでそれが自分の本意では無いとでも言うように。
……いや。奴は確かにそう言っているのだろう。誰でも無い、この私に向かって。
「こんな戦いは、自分の望むものではない」と。

「……だろうな」

声ならぬその声に、その言葉に私は同意する。
召喚主に望まれ、それに応えたのならまだいい。暴走の末の結果も、納得出来なくとも受け入れることは出来るだろう。
だが、白天王は望まぬ暴走を強いられている。
やはり、操られているのだろう……哀れな。

【――――ッッッッ！！】

白天王は吼える。
身体を裂く痛みと、心を裂かれる痛みに赤い涙を流しながら。

自分の誇りを踏み躙られた怒りに震えながら。

「ああ」

奴は吼える。
自分を止めろと。これ以上、主を傷つけさせてくれるな、と。

「……ああ！」

声ならぬ言葉。
切なる慟哭。
主を思うひたむきな心。

――それを感じて、聞いて。答えられないようでは、“女帝”などと名乗る資格などあるまい。

私は母からこの名を受け継ぎ、相棒を受け継ぎ、誇りを受け継いだ。
その重みも、この名を背負ってやるべき事も。いやという程に知らされてきた。

「任せろ、白き天の王よ。お前の誇りも、主も……必ず、この私が守ろう」

拳を握り、腰を落とす。
奴もまた私に向けて顎(あぎと)を開き、刃の生えた両腕を振り上げる。
私の体力と魔力を考えれば、時間がかかってしまえば私は負けるだろう。
……だが、負ける気など毛頭無い。

「真紅の女帝、ハヅキ＝ロックウェル。推して参る」

――勝利こそが、私の歩むべき道なのだから。

ｓｉｄｅ：ハヅキ＝ロックウェル　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ６５話　『真紅の女帝、白き天の王』

ｓｉｄｅ：―

「おおおおおおおおおおおおおおおっっっっ！！！！」

【――――――――ッッッッ！！！！！】

響き渡る2つの咆哮。

ハヅキは自分の作った足場を何度も蹴って白天王へと近づき、罅の入ったその横っ面を蹴り飛ばす。

その衝撃で外皮が砕けて宙を舞い、蹴られた白天王の顔が跳ね上がる。しかし暴走した白天王はその程度では止まらず、蹴りを放って動きの止まった彼女を狙って右腕を振るう。

だが、ハヅキは蹴った反動を使って跳躍、振るわれた右腕を回避し、更にその時に起こった風圧に身を任せて白天王から距離を取る。

「レオンハルトォッ！」

≪　オーライ、ボス！　≫

ハヅキが呼び、レオンハルトが答える。

すると、後ろに跳んでいる最中のハヅキの眼前に、赤い魔力が集束されて球状を形成していく。

その魔力の球に狙いを定め、ハヅキは思い切り右足を繰り出した。

「ファング・バスターッッ！！」

魔力の塊を彼女の右足が打ち抜き、そこから真紅の光が溢れて白天王の顔を飲み込む。

ハヅキは砲撃を撃った反動で後ろへと更に跳躍しながら、バク宙の要領で縦に体を一回転させ、自分で生み出した足場へと降り立つ。

「まだまだぁっ！！」

そして足場に着地した瞬間、再び足場を蹴って、まだ砲撃の残滓が残る白天王の顔面へと肉薄。

残滓が消えるのと同時に、もう一度罅の入ったその顔面を蹴り飛ばす。今度は1発ではなく、2発、3発と連続で。

「オラオラオラァァァッッ！！！」

重ねられた衝撃は、白天王の顔を再び跳ね上げ、その巨体を仰け反らせた。

【――――ッッ！】

咆哮をあげて、白天王の巨体が揺れる。

「どうだ……！？」

ハヅキは空中で姿勢を整えながら、巨体が倒れる様を眺めて呟く。
けれど、白天王は巨体を揺らしたものの倒れるまでには至らず、たたらを踏むに留まった。

「ちっ、やはり普通の攻撃では駄目か！」

《 あの巨体に加えて、あれだけ硬い外皮です。ちょっとやそっとじゃ、脳は揺れないでしょうね 》

「なら、アルティメイトで撃ち抜けばどうだ？」

《 無理でしょう。砲撃では、あの外皮を抜けません 》

「ちっ……」

新たに作った足場の上に着地し、ハヅキはまだ余裕さえ感じさせる白天王を見据えて苦々しく舌打ちを漏らした。戦いを再開してからまだ5分。しかし、戦いが始まってからはすでに２０分近くが経過しようとしている。
もうそろそろ、ハヅキの体力も魔力も限界だ。
特に身体の方は、白天王から受けたダメージが積もってフラフラになりつつある。

「レオンハルト、私が動けるのは、あとどのくらいだ？」

≪　正直に申し上げるなら、1分前後でしょうね。ボス　≫

「ハッ、ならもう……アレを使うしかないだろ」

≪　ボス！？　≫

呟かれたハヅキの言葉に、レオンハルトが驚愕の声を上げた。

≪　正気ですか！？　アレは万全の状態でも危ないっていうのに……　≫

「だが、アルティメイトでも駄目、通常の打撃でも駄目となれば、アレしかあるまい」

≪　下手したら、死ぬんですよ！？　≫

レオンハルトの声に、ハヅキは左拳を握り締め、どこか自信に溢れた笑みを零して答える。

追い詰められているのは彼女である筈なのに、しかしその笑みには微塵の恐怖も悲壮も無い。あるのはただ、白天王を止め、この戦いに勝利するという毅然とした決意のみ。

「私の命と引き換えに、ミッドとあの幼い少女、そして白天王の誇りが守れるのなら、安いものだ」

≪　……っ！　≫

「母さんも言っていただろう。“人には、その身が朽ち果ててもやらねばならぬ時が来る”と。
私にとって、それが“今”だ」

《　ですが、それでも倒せるという保障は……　》

「倒せるかどうかじゃない。倒すんだよ、レオンハルト！」

叫ぶようにそう言いながら、ハヅキは左拳をウィングロードに叩きつけた。
衝撃で罅が入る程に力の込められた拳。
それと同時に、ハヅキは叫ぶ。己の魂に刻んだ誇りを。

「今ココで！　奴を止めてやれるのは私だけだ！
ならば、私がやらずに誰がやる！　私が救わずに、誰が奴を救ってやるというのだ！！」

《　……　》

「やらねばならない事をやる！　それが私の……“女帝”の誇りだ！！」

《　……ああもう、分かりましたよ　》

彼女の言葉に、レオンハルトが諦めたような声を出した。
呼吸をしないデバイスであるの彼の声には、ため息が混じっているようにも聞こえる。

《 ったく。先代といい、ボスといい、何故私のマスターは全員こうなのか。
誇りは寿命を縮めるって知ってますか？ 》

「それでも、誇りを無くした女帝など、お前のマスターとして相応しくあるまいよ」

《 まぁ、それもそうですがね 》

苦笑しているようなレオンハルトの声を聞きながら、ハヅキは嬉しそうに笑って口を開く。

「では、やるぞ」

《 オーライ、ボス。全力でサポートしますよ 》

「当然だ」

レオンハルトの返答に犬歯を覗かせて笑いながら、ハヅキは足場に叩き付けた左拳を上げ、彼女が止めるべき相手を――白天王を見

る。
そして、目の前で赤い涙を流す白天王に向けて、高らかに宣言した。

「白き天の王！　これが、私の最後の攻撃だ！
これで、私は必ずお前を止めてやる！！　だから、大人しく受け止めろ！」

《Ｓａｆｅｔｙ　Ａｌｌ　ｒｅｌｅａｓｅ．》

その声と共に、彼女の身体から真紅の魔力が溢れ出す。
溢れ出したそれは、まるで炎の如く揺らめき、天を焦がすかの如く立ち昇る。

「そして誇れ！　この私の、乾坤一擲、最強最大の攻撃を受けることを！！」

天を焦がす程に立ち昇った真紅の魔力の全てが、彼女の左拳へと集められていく。
どれだけの負荷が掛かっているのか、魔力の集束した左拳から左肩にかけて、バリアジャケットでありデバイスでもある赤い軍服が消し飛んだ。
それでも、ハヅキは更に自分の左拳へと魔力を集めていく。
まさに乾坤一擲。次の攻撃に、自分の持てる全てをつぎ込んでいると言わんばかりに。

「この一撃で、私がお前を救ってやる！」

【――――ッッ！！】

だが、既に暴走に歯止めが聞かなくなった白天王は、咆哮と共に腹部から砲撃を放つ。

それは真っ直ぐにハヅキへと向かい、そしてハヅキはそれを『避けず』に、紫色の光に飲み込まれた。

もしこの戦いを見ている者が居れば、これで戦いは終わったと思っただろう。何せ、彼女が受けた砲撃の威力は山ひとつを吹き飛ばす程の威力があり、だからこそハヅキは今まで直撃しないように、相殺、ないしは回避していたのだ。

しかし――。

「か、は……っ！　ははっ、やっぱり効くなァ、おい！」

ハヅキは、変わらぬ格好でそこに……白天王の目の前に立っていた。

砲撃の直撃で、軍服はボロボロになっていて、どれだけのダメージを彼女が受けたのかを物語る。

しかしそれでも尚、ハヅキは笑ってそこに立っていた。

「今度は、私の番だなぁっ！！」

≪　集束率１００％。行けますよ、ボス！　≫

「よし！！　それなら……っ！」

真紅の道が、白天王の胸元へと伸びる。

「いぃくぅぞぉぉおおおおっっっっ！！！」

咆哮を上げ、ハヅキがその上を駆けていく。
白天王目掛けて、真っ直ぐに。

【――――ッッッッ！！】

白天王を暴走させているプログラムが、危険を感じて白天王に距離を取らせようとする。
だが、白天王は自らの意思を総動員してそれに抵抗し、動こうとした自分の脚を地面へと縫いとめ、自分に向かってくるハヅキの拳を待つ。

自分を止める為に。
心優しい主を、これ以上苦しめぬ為に。

しかしそれでも、プログラムの力は白天王の意志を捻じ曲げた。

「が、ぁっ！？」

今までは使わなかった、小型の魔力弾での攻撃。

小型とはいえ、人間の顔ほどの大きさはあるその魔力弾が彼女を襲う。

彼女の顔面に当たった紫の魔力弾が弾け、ハヅキの意識が飛ぶ。そして、白天王の目の前まで来ていたハヅキの身体がゆっくりと倒れかけ――。

「――――っっ！！！」

しかし、彼女はギシリと歯を食い縛って体勢を持ち直す。

そして――

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっっ！！！！！！！」

雄叫びと共に最後の一歩を踏み込み――

「威風、撃砕……っっ！！！！」

自分に残った魔力の全てを集め、灼熱色に煌く振り上げた左腕を――

「クリムゾン・インパクトォォオオオッッッ！！！！！！！！」

――白天王の胸の中心に向けて、振り下ろした。

次の瞬間、白天王の砲撃を何発も纏めて叩き込んだかの様な巨大な爆発が、ハヅキの拳が打ち込まれた場所を中心として巻き起こる。

その衝撃は白天王の強固な外皮を打ち砕き、山のような巨体を後ろへと吹き飛ばす。

響いた轟音は、遠くミッド市街にまで響き渡り、爆発の中心から放たれた真紅の閃光は、太陽よりも明るく辺りを照らした。

【――――ッッ！！】

悲鳴の様な咆哮を上げて、白天王の巨体が仰向けに倒れる。

胸の装甲である外皮は粉々に砕け、その下にある柔らかな部分には爆発の熱による焦げ後が見えた。

【――ッ】

声を上げながら身体を動かそうとする白天王だが、与えられたダメージによって、指一本動かすことさえ出来なかった。
だが、それは白天王が望んだ結末。
だから白天王の口からは、満足気な鳴き声が漏れる。

【――――】

言葉は分からないが、その声は、感謝の言葉を言っているようにも聞こえた。
自分を止めてくれた、誇り高い真紅の女帝に。そして、その声を漏らした直後に白天王の身体から力が抜ける。ダメージによって、気絶したのだ。

「……」

その白天王から１００ｍは離れた場所。
そこに、自分の爆発で吹き飛ばされ、白天王と同じく仰向けになって地面に転がるハヅキが居た。
攻撃した側であるというのに、目に見える損傷は彼女の方が遥かに酷い。

バリアジャケットはボロボロで、既にバリアジャケットとしては愚か、服としての役割もろくに果たしていない。
右腕は言わずもがな、白天王を殴った左腕もまた骨があちこちで折れ、数箇所の皮膚を破って骨が外へと飛び出し、拳はグシャグシャで正視できない程に損傷していた。

また、爆発の熱によって体中のあちこちに重度の火傷を負ってしまっている。
生命の危険がある程では無いが、それでもその火傷の度合いは凄まじく、白天王を打った左腕は未だにブスブスと耳障りな焦げた音を立て、肉の焼ける嫌な匂いを漂わせたまま。
更に爆発の衝撃で、彼女は殆ど体中から酷い出血をしていた。
彼女が横たわる地面には、身体から流れた血で小さな血溜りが出来ている程だ。

……死んでいると、そう見えても仕方ない程の怪我。

「……ぶはぁっ！」

だが、それでも彼女は生きていた。
天を見上げて、その口から大きく息を吐く。

「ぜぇっ！　……ぜぇっ！」

荒い呼吸を繰り返して体内に酸素を取り入れるハヅキ。
そして、彼女は軋む身体を動かして少しだけ上体を起こし、遠くに見える仰向けに倒れた白天王を見つめ、ニヤリと歯を覗かせる。

「勝った……か……」

嬉しそうに呟いて、ハヅキは力を使い果たしたとばかりに再び仰向けになる。
そんな彼女の呟きに、ボロボロになった軍服の左肩部分に取り付けられた、罅だらけの青い宝石が明滅して答える。

≪　ええ……勝ちマシたネ……　≫

彼女の呟きに答えるレオンハルトの声は、ノイズ混じりのもの。
ハヅキが受けるべきだったダメージの殆どを肩代わりした結果である。

「やはり、この、技は……キツ、イ、な……」

≪　生きてルだケで、奇跡デスよ……　≫

「はは、違いない……ぐっ」

既に笑うことさえ苦痛なのだろう。苦笑した後、彼女は痛みで顔を顰めた。
それでも、彼女は嬉しくて仕方ないとばかりに笑う。

「くははっ……やっぱり、勝つのは、気持ちいいなぁ……」

≪　付き合わサレる、こっチの身ニモ、ナってくだサイよ　≫

「母さんも、私と似た者だった、んだから……慣れた、もの、だろう？」

《　……ソう、ですネ。先代と貴女ハ、確カに親子でスヨ　》

呆れた声のレオンハルトにまた苦笑した後、ハヅキは自分の体の状態を調べる。

「あー……これは、暫く、動けんな……」

《　でスネ。ギリぎり、命に別状ハありままセンけド　》

「後は、隊長達に任せよう。私は……少し、休憩だ」

《　じゃあ私ハ、１０１部隊全員に、救難信号を出シテおきまスよ　》

「ああ、頼む……」

そう答えて、ハヅキは目を閉じる。

するとほどなく、彼女の口からは規則的な寝息が聞こえていた。

これだけの怪我をして、命に別状も無く、更に眠れるというのだから……最早、呆れるしかない。

そんな彼女のバイタルに注意しながら、レオンハルトは陸士１０１部隊全員へと救難信号を送る。

恐らくだが、白天王を倒した今、それ程敵は多くあるまい。１０

１部隊の隊員達ならば、鎮圧にそれ程かからないだろう。救援が来るのも意外とすぐだろうなと、そう考えながら。

ｓｉｄｅ：―　了

ｉｆ６５話　『真紅の女帝、白き天の王』（後書き）

ありのままに、今起こったことを話すぜ！　お、俺は魔法少女の二次小説を書いていると思ったら、いつの間にかドラゴン○ールの二次小説を書いていた。何を言っているか（以下略
どうも、ラモンです。

そんな訳で、リアルモンハン改め、ドラゴンボー○魔法少女風でした。
どうしてこうなった。
……どうしてこうなった。
いやまぁ、ハヅキの基本戦法が肉弾戦って時点で、こうなるのは予想出来た未来だったのですけれどね。
ただ……その……ここまで龍球っぽくなるとは思いませんでした。

ＢＧＭもアレですよね。
何で女なのに「おっとこならぁ～！」の曲なのかっていう。
でも、今回書いてる間中流してたから仕方ないんです！　勘弁してください！（汗）

さて、それはさておいて次回の話をしましょう。
過ぎたことは振り返らない。それが私のいいところ（笑）

次回からは、いよいよアインＶＳスバティアと、中ボスＶＳ魔王の戦いを書いていくことになります。
そろそろ大詰め。後はラストに向けて一直線。
……ただ、スーパー主人公タイムをやるか否かで悩んでます。
まぁ、そこまで書き進める頃には決まるでしょう。

それではまた、次の話で。

if66話　『君に届くまで』

side：―

「糞っ！　糞っ！！　あの死に損ないがっ！！　私の計画を邪魔しやがってっっ！！」

自分の周りに展開したパネルに手を叩きつけながら、クアットロが叫ぶ。

彼女が見る先には、ゼストに抱かれるようにして気を失っているルーテシアと、地面に仰向けに倒れている白天王。そしてその周囲で次々と捕獲されていく地雷王や、破壊されていくガジェット群が映っていた。

破壊の要であった白天王が倒れたお陰で戦力的な畏怖が無くなり、さらに召喚主を失ったことで地雷王達の動きが鈍くなったこともあり、地上での戦況は徐々にクアットロ側が押され始めていた。

まるで、ゼストがルーテシアを止めた事が引き金となったように。

そういう意味で、正しくゼストは救世主だったと言える。

「死に損ないの雑魚だと思ってたのが間違いだったっていうの！？……違う、ウーノの奴が入れ知恵しやがったせいかっ！　糞っ！　糞、糞っっっ！！

どいつもこいつも！　私の邪魔ばかりしやがってっっ！！！」

苛立たしげにパネルを叩くクアットロ。
地上で動いているガジェットの被害状況を確認すれば、既に半数以上が落とされているではないか。
白天王が倒れた事で、地上本部局員達にあった絶望感が払拭され、しかも倒したのが1人の魔導師であるという事実が彼等を勇気づけ、ガジェットを押し返しているのだ。

「……糞がっ！　死に損ない一匹のせいで、ここまで私の計画が乱れるだとっ！？
そんなこと、あっていい訳ねェだろうがっっ！！」

恨み言を吐いても、戦況は変わらない。
いくらゆりかごが完全に浮上してしまえば地上は関係なくなるとはいえ、クアットロにとっては自分の計画がここまで邪魔されたこと自体が我慢ならないのだろう。

だが、クアットロはそこで一度感情を落ち着けるように息を吸う。
そして幾分か冷静さを取り戻し、再びパネルを叩いてモニタにアインの居る場所を映した。

「……ちっ、まぁいいわ。アインがあのガキ共さえ殺せば、邪魔者はもういない。
エース・オブ・エースは、もうすぐ落ちるし、あの赤いチビもどうせ駆動炉は壊せない……。
そうよ。まだ……まだ戦況は私が勝っている！」

その顔に歪んだ笑みを貼り付け、クアットロはアインの映るモニタに視線をやった。

◇◇◇◇◇

「つまり、デバイスを直接ハヤトに触れさせればいいんですね？」

シャーリーからの説明を聞き終え、視線をアインから動かさずに聞き返した。

視線の先では、アインが極彩色に光る魔力の嵐の中心に立ち、どこか焦点の合っていないヴィヴィオと同じ色をした左右色違いの瞳で彼女達を見つめている。

『うん。そうする事で、デバイスを通じてハヤト君にアンチプログラムが注入されるの。

多分それで、ハヤト君の事を元に戻せる筈だよ！』

「わかりました」

『私に出来るのはここまでだけど……頑張って！』

「……はい！」

最後にそう言って、シャーリーとの通信が切れる。
ティアナは、倒れているギンガ達の位置を確認しながら、隣で構えているスバルに声をかけた。

「今の、ちゃんとわかった？」

「もちろん。とにかく、あたしかティアが、デバイス部分でハヤトに触ればいいんだよね？」

力強く頷いて、スバルはリボルバーナックルを構えて笑う。
その言葉に頷きながら、ティアナは「それと」と付け加える。

「ギンガさんとエリオ、キャロも、安全な場所に動かしたいわ。
今の場所だと、戦闘に巻き込まれて危ないし、あたし達も気にしながら戦わなきゃいけないから、どうしても全力で戦えなくなる」

「うん……じゃあ、その間はあたしが囮かな？」

「逆。あたしはダメージが残っててロクに動けないから、あたしが囮で、アンタが3人を避難させるの」

「え？　でも……」

ティアナの提案に、スバルは難色を示す。
今の……2人の前で極彩色の嵐の中に立つアインは、どれだけ強いのか分からない。

先程までだって、殆ど防戦……というよりも一方的にやられていたのだ。少なくともそれよりも強くなっているであろう今の状態のアインを相手に、彼女1人で戦うというのは無謀に思える。
けれど、ティアナは呆れたように笑って、スバルの頭を左手に持ったクロスミラージュで軽く叩いた。

「機動力のあるアンタの方が、早く3人を退避させられるでしょ。大丈夫よ。あの馬鹿に、そう簡単にやられてやるつもりなんてないから」

「……わかった。けど、無理しないでね？」

「わかってるわよ。アンタこそ、急ぎなさい」

「うん！」

確認するように尋ねたティアナにスバルは笑みを零して頷き、動き出そうと構える。
そして。

「さあ、行くわよ！」

「おう！」

駆け出したティアナに続いてスバルもまた走り出した。

『アイン！　あのガキどものデバイスに触らないように気をつけて、ぶっ殺しなさいっ！』

「……は、い」

極彩色に光る嵐の中心で、アインはクアットロの声に何とか返事をする。

肉体への負荷は既に限界値に近く、これ以上戦闘が続けば、間違いなく彼の身体は崩壊するだろう。

だが、アインは止まらない……否、止まれない。

アインにとってクアットロの命令は、何より優先すべきことなのだ。

それこそ、自分の命よりも。

「――」

ギシギシと軋む身体を動かすアインの視線が、自分に向かってく

るティアナを捉える。
アインはゆっくりと腰を落とし、そのまま地面を蹴って獣の様にティアナへと飛び掛った。そして、クアットロに言われた通りデバイスに触らぬよう、距離を詰めながら自分の周囲に魔力弾を生成し、殆どクロスレンジの距離からそれを放つ。
ダメージを負っている彼女ならば、これはかわせないと判断して。

「……！　こ、のっ！」

しかし、その判断は誤りだったと言わざるを得ない。
ティアナは身体を捻って襲い来る極彩色の魔力弾を回避しつつ、自分に当たりそうなものを全て撃ち落してみせた。その動きは、到底ダメージを負って動くのもやっとな人間の動きには見えない。

「っ！」

魔力弾を回避したティアナはそのまま地面に倒れるように身を投げ出しながら、アインへと照準を定めて引き金を引く。彼女の動きに動揺したのか、アインは回避行動を取らずにその弾丸を受けるように思われた……が。

「嘘っ！？」

弾丸の向かってきた方向を向きもしないアインの左拳が、不自然

とも言える軌道を描いて飛来した弾丸を裏拳で叩き落した。
規格外すぎるその動きに、思わずティアナが驚きの声を上げる。
だが、すぐに我に返って2度、3度と引き金を引いて魔力弾を撃ち出した。

「……」

しかしその全てがアインに届くよりも先に、人間離れした速度と軌道を描く両手足によって叩き落されてしまう。加減なし、撃った全ての弾がアインの死角に向けて撃ったのに、である。

「何だってのよ……！」

思わずティアナが苦々しく呟く。
すると、アインの顔の横にモニタが開き、そこに映るクアットロが狂ったように笑う。

『ぎゃはははははっっ！　ざァんねんだったなァ！？　今のアインにそんなモン通用しねェんだよ！
“聖王の鎧”を発動させてる、今のアインにはなぁ！！』

「聖王の、鎧……？」

聞き慣れない単語にティアナが眉を顰めると、クアットロはゲラ

ゲラと笑いながら得意気に彼女に向かって解説を始める。

『“聖王の鎧”っつーのはなァ、聖王のみに許された先天技能！
遺伝子レベルで染み付いた、本当なら聖王の直系しか使えねぇ先天技能だが、私はそれも完璧に再現したってワケだ！！
それを使ってるアインに、てめェらの弱っちい攻撃なんざ――』

「うおおおっっ！」

『！？』

高らかに笑うクアットロの言葉を遮って、アインの後ろからスバルが拳を振り上げて迫る。

「――迎撃」

「ぐあっ！？」

しかし、その攻撃も届くことは無い。
スバルが拳を振り下ろすよりも先に、今度は左足が不自然な軌道の回し蹴りを放ち、彼女の胴を捉えて吹き飛ばす。

『だァから無駄だっつってんだろが！？　“聖王の鎧”は本人の意識が無くても勝手に迎撃行動を取る、究極の防衛機構！　てめェらの攻撃よりも速く、反撃が返ってくるんだよ！！

さっさと諦めて、死ねってのよ！！　すぐにアインも後を追って死ぬからさァッ！！
あはははははっっ！！　あっはははははははっっ！！』

「うるさいっ！」

≪Ｒｅｖｏｌｖｅｒ　ｓｈｏｏｔ.≫

耳障りなクアットロの声を切り裂くように、青い魔力弾がアインを襲う。
それは再び彼によって打ち落とされるが、それでもクアットロの笑い声を止める事には成功した。
迎撃したアインは、リボルバーシュートの飛んできた方……自分が吹っ飛ばしたスバルが飛ばされていった方を見る。

「……どんな障害があったって、構うもんか」

蹴り飛ばされたダメージがまだ抜けていないのか、視線の先のスバルは片膝をついていた。
けれど、その青い瞳に確かな意志を宿してアインと、モニタに映るクアットロを見つめている。

「あたしは……あたし達は、絶対に！　ハヤトを助けるって決めたんだ！」

「その、通りよっ！」

『「！？」』

スバルの言葉に続いて、反対側――ティアナが魔力弾を撃つ。
魔力弾自体は叩き落されてしまうが、そんなことには構わない。

「アンタの思い通りになんて、誰がさせてやるもんですかっ！」

『ン、の糞ガキ……っ！』

クアットロの顔に、憤怒と苛立ちが浮かぶ。
普通なら、もう諦めていい筈なのだ。アインを助ける手段はあれど、彼に触れることすら叶わない。そしてアインの身体は、もうあと数分ともたない……どう考えても、絶望する筈なのだ。
なのに……。

「1回駄目だったからって、そう簡単に諦められる程、物分りは良くないのよ。あたし達」

「ハヤトを助けられるなら、何回だってやってやるっ！」

なのに、スバルもティアナも、その顔に微塵の絶望も浮かばせない。
それどころか、より一層希望の意志を滲ませているではないか。
クアットロはそれが気に入らない。自分の思い通りに動かないこ

の2人が。どれだけ自分が絶望を叩きつけても、希望を失わないこの2人が。

それは、ある種の恐怖だったのかも知れない。

クアットロにとって、2人は余りにも『異質』だった。

人間が最も従ってしまいやすい感情は、絶望と諦観。どれだけ歴戦の猛者と言えど、その2つにはそうそう勝てるものではない。だというのに、2人はそれを真正面から跳ね除けている。

感情のある生き物は、自らが理解できない存在を恐れるものだ。

だから、クアットロは2人に恐怖を抱いた。自分が理解できない、この2人を。

『……っ、け、けどなァっ！　仮にてめェらがアインを助けられても、もうアインに居場所なんざねェんだよっ！！　アインが私側に居るって事は、ミッドチルダの誰もが知ってる！！

こいつはもう、ミッドチルダ全部から憎まれ、嫌われてんだよ！』

恐怖に気圧され、クアットロは顔を引き攣らせて咄嗟に嘘を吐く。

アインがその姿を見せたのは、六課への通信の時のみ。ミッドの市民からすれば、彼がクアットロ側にいたかどうかなど、分からないのだ。けれど、スバルとティアナにそれを判断する材料は無い。

これなら、2人を絶望させられるとクアットロは思った。

「別に、そんなの構わない」

『なっ！？』

けれど、スバルは平然と答えてみせた。

「世界中の人がハヤトを嫌いになっても、それでも……」

恋をする女の子の顔で、見ている人間が見惚れる程の笑みを浮かべて。

「……あたしがその分も、ハヤトの事を大好きになるから」

『～～～～っっ!!　アインッッ!!』

「は、い」

我慢ならぬとばかりに、クアットロが叫ぶ。

これ以上、スバルとティアナの言葉を聞きたくないと耳を塞ぎ、憎悪さえ込めた瞳でスバルを射抜きながら絶叫にも近い声でアインへと命令する。

『この2人は必ず殺せっ！　てめェの身体がぶっ壊れても!!　必ずなァッッ!!』

「――命令、認識」

命令を吐き捨てて、クアットロはモニタを切る。

残されたアインは腰を落とし、再び体から極彩色の魔力を噴き出す。

噴き出した魔力は暴風の如く2人を襲い、2人はそれに体を吹き飛ばされないように踏ん張って耐えながら、互いに念話で会話する。

『スバル、ギンガさん達は?』

『安全な場所に退避させたよ！　だから、思いっきりやって大丈夫!』

『オッケー、じゃあ……行くわよ!』

互いにタイミングを合わせ、アインを挟む形で立っていた2人が同時に動く。

2人はアインを倒す必要は無いのだ。ただ触れさえすれば、それでアインをハヤトへと戻すことが出来る。だからスバルとティアナは、それを第一にアインへと迫る。

「迎、撃」

「「きゃああっ！？」」

しかし、それが何よりも難しい。

アインが今、無意識下で発動している“聖王の鎧”は完全な自動防御。

彼が意識していなくとも、近寄ってきた攻撃を全て叩き落し、鋭い反撃をスバル達に見舞う。回避不能という程の速度ではないのだが、それでも彼に触れる為には大きすぎる障害だ。

「く、っそ……！」

ティアナは彼に蹴り飛ばされながら、それでも自分に触れた足にクロスミラージュを触れさせようと手を動かす。だが、それが触れるよりも先に彼女の体はアインの蹴りで横に吹き飛ばされ、壁へと激突してしまう。

スバルも同じような状況で、何とか彼の体に触れようとするのだが、触れるよりも先に蹴られ、殴り飛ばされて触れることさえ出来ない。

恐るべしは、アインの戦闘能力だ。

２人の攻撃が終わった瞬間瞬間を狙い、しかも触れようとする２人の腕の間を上手くすり抜けて攻撃を繰り出してくる。その戦い方はまるで……。

「……ハヤト」

そう。まるで、２人が良く知るハヤトのようだった。
此方の動きを良く観察し、一瞬の隙を逃さない。ハヤトに強大な魔力と、凄まじい身体能力があったなら、きっとこうなるだろうと思わせるような、そんな動き。
正直、アインの動きはあまりにも完璧と言えるものだった。最小の動きで効率よくダメージを相手に与え、反撃の隙を与えず、防御は無意識下で行われる完璧なもの。
ともすれば、全力のなのは達よりも強いかも知れないと、そう思う程に。

「でも……！」

「だからって……！」

しかし２人は歯を食いしばり、再び体勢を整えて足を一歩踏み出す。

「「負けて、られるかぁぁっ！！」」

だが、それでも……届かない。
２人が踏み出すよりも速く、アインが丁度２人の視界をその手で覆うように両腕を伸ばす。
そこに浮かぶのは、極彩色の光を放つ魔力の球。

「――砲、撃」

呟かれる言葉と共に、球状の魔力から光が迸って2人を飲み込む。

「うあああああっ！？」

「きゃあああああっ！？」

2人は虹色の砲撃に飲み込まれ、地面に体を投げ出すように転がった。

アインはそれを横目に確認しながら、今度はその場に片膝をついて地面に両手を当てる。

「――追撃」

次の瞬間、2人の足元から光の柱が立ち昇って2人を包み込む。

これがアインの本気なのか、とスバルとティアナは吹き飛ばされながらその強さに愕然とする。

触れるだけなら何とか……と思っていたが、それどころか近づくことさえままならない。仮に近づいても触るより先に吹っ飛ばされ、後は遠距離で砲撃の雨に晒されてダメージだけが蓄積していく。

「く……ぁ……っ」

「か、は……」

砲撃の雨が止まった後には、小さなクレーターの中に倒れ伏す2人の姿。
アインはその2人を両脇に見る形で、荒い呼吸を繰り返していた。

「ぜぇっ……ぜぇっ……」

そろそろ、魔力攻撃による反動で体が悲鳴を上げ始めたのだろう。
無表情ながら顔には大量の汗が流れ、地面に落ちて小さな染みを作っている。
だが、アインはそれには構わずに再び両腕を上げ、掌を地面へと倒れている2人へと向けた。

「……対象、殲滅」

手に宿るのは、殺傷設定の砲撃魔法。
避けなければと思うが、ダメージが体が動かない。

（体が……動かな……）

（……これで、終わり？）

2人は悔しさに歯軋りし、自分に向かって放たれようとしている光を見た。
そしてそれは無常にも2人に向かって放たれ――

「サンダー、レイジィッ！！」

「錬鉄召喚！　アルケミック・チェーン！！」

「！？」

――ようとした直前、2つの声と共にアインの身体を鉄の鎖が縛り、戸惑う彼の頭上から雷を纏った槍を振りかぶった赤毛の少年が、槍を振り下ろしながら降ってくる。
アインは一度だけ目を見開いたが、それでも焦らず自分の周りに光の壁を作り出す。
振り下ろされた雷を纏う槍の穂先はそれに阻まれ、一瞬の拮抗の後弾かれた。

槍を弾かれた少年――エリオは空中で体勢を整えて、スバルの隣に着地する。
同時に、ティアナの隣にはキャロとギンガが立つ。

「エ、リオ……？」

「キャロに、ギンガさん……どう、して……」

気絶していた筈の3人に支えられて立ち上がりながら、2人が尋ねる。
そんな2人に対し、エリオ達は苦笑しながら「決まってる」と答えた。

「ハヤト君を助けるんだもん、寝てられないじゃない」

「スバルさん達だけに任せるなんて、出来ませんよ」

「私達だって、ハヤトさんの仲間ですもん！」

3人はそう言って、それぞれのデバイスを構える。
スバルとティアナは、少しだけ驚いた顔をしてアインを挟んで立つお互いの顔を見た。
そして、2人とも口元を綻ばせる。

「だよね。あたし達だけで、なんて……気負う必要なかったよね」

「……あたしに出来ない事は、他の誰かがやってくれて。
他の誰かが出来ない事を、あたしがやる……だったわよね。ハヤト」

言いながら、2人もまたデバイスを構える。
それから、ティアナは全員に向けて念話を飛ばす。この戦いを終わらせる為に。
全員で、彼を――ハヤトを助ける為に。

『スバル！　あたし達が全員でアンタがハヤトに近づけるようにするわ！
だからアンタは動かずに、隙が出来たらいつでも行けるように、準備してなさい！』

『う、うん！』

スバルはその指示に頷きながら、少しだけ不思議に思う。
今この場で、アンチプログラムをデバイスにインストールされているのは、自分とティアナだけだ。
だから、自分1人よりもティアナと一緒に行ったほうが確率が高くなるのではと、そう思った。けれどティアナはそんなスバルの考えを見透かしたように、苦笑混じりの声で付け加える。

『あたしは元々接近戦は向いてないし、クロスミラージュもあんまり近接には向いてない。
だから……ちょっと悔しいけど、ここはアンタに譲ってやるって言ってんのよ。わかった？
一発で、アイツの目を覚ましてやんなさい！』

『あ……』

ティアナの言葉から、スバルは彼女の想いを受け取った。
本当はティアナだって、自分でハヤトを助けたいのだ。けれど、彼女はセンターガードだから。全員を導く立場だからこそ、この場

でベストの選択をしたのだと。
だからスバルは、それ以上何をいう事も無く、ただ頷く。

『任せて！』

ティアナと、信頼できる仲間達が必ず作ってくれる“その一瞬”を逃さないと、心に決めて。
そして――

『ギンガさん、エリオ、キャロ！　準備はいい！？』

『勿論！』

『いつでも！』

『いけます！』

彼女の声に３人が返事をしたのと同時に、スバル以外の全員がアインへと向かう。
自分に向かってくる４人を、アインは焦点の合わぬ瞳で見つめていた。
その表情のどこかに、安堵を浮かばせて――。

ｓｉｄｅ：―　了

ｉｆ６６話　『君に届くまで』（後書き）

ウザットロもう誰だよって感じですね。
どうも、ラモンです。

今回はハヤト救出前編をお送りしました。
スーパーヒロインタイムも発動し、いよいよ大詰めって感じですねー。
次回は、ウルトラヒロインタイム（裏もあるよ！）なハヤト救出後編になると思います。

……うん、あんまり書くこと無いですね。
とりあえずもう、ウザットロがオリキャラすぎて困るという事ぐらいしか（汗）
クアットロファンの皆様、ホントごめんなさい。
多分もう、今から軌道修正は不可能なんで、ウザットロはこのまま突っ走って行くと思います。

ではでは、頑張って次回のウルトラヒロインタイム（裏もあるよ！）を執筆していこうと思います。
後はスーパー主人公タイムを入れるか否か……。
悩みますねぇ。

それではまた、次の話で。

ｉｆ６７話　『君に届け』（前書き）

※今回、結構勢い任せな部分がございます。
ですので、あまり深く考えずに読むと、より一層楽しめる気がします。
また、今回は皆さんが『一番燃えるＢＧＭ』を流しながら読んでいただけると、もしかしたら更に楽しく読んでいただけるかもしれません。

if67話　『君に届け』

side：―

４人の力を合わせても、それでも戦いは絶望的だった。
近づく者全てを拒絶するような虹色の雨、仮に近づけても“聖王の鎧”によって攻撃する前に迎撃されるか、あっという間に距離を離されてしまう。
それだけでなく、ティアナの牽制もキャロの召喚する鎖も、アインを捉えることは出来ない。
やる事の全てを見透かしているかのように、アインはその悉くを回避する。

「くっ……」

未来予知でもしているのではないかと思える程のアインの動きを見て、ティアナは眉を寄せる。
スバルが突撃するタイミングだけなら、いくらでも見つけられた。けれど、ただ突撃するだけでは意味がないのだ。あくまで彼女等の目的は、スバルがデバイスでアインに触ること。
その為には、アインの動きを完全に止めなければならない。

少しでも動ける状態なら、現状のように避けられるか迎撃されてしまう。
だから、キャロの鎖で縛り、更に自分とエリオ、ギンガの攻撃を障壁で受け止めさせて完全に動きを止めた状態に持っていかなけれ

ば、スバルを突撃させても徒労に終わる可能性が高い。

「ティア！　やっぱりあたしも……」

「いいから！　アンタはそこで待ってなさい！！」

アインの猛攻に晒されるティアナ達を見たスバルの声を、大声で遮る。

確かにスバルが入れば、戦況は変わるだろう。けど、それでは駄目なのだ。

今の自分達は、スバルという刃を持ったひとつの“槍”。

アインの持つ“聖王の鎧”という盾を貫くには、刃であるスバルが何よりも重要。

どれだけ自分達が盾に罅を入れたとしても、刃が動けなくては盾を貫くことは出来ない。

だから……スバルだけは、何があっても動かせないのだ。

「絶対に……絶対に、アンタをハヤトのところまで送り届けてあげるから」

言いながら、ティアナが自信の篭もった笑みを浮かべる。

それは、空元気なのかも知れない。この場の指揮官である彼女は、弱気な姿など見せられない。それ故の、虚勢なのかも知れない。ただの強がりなのかも知れない。

でも……それでも。

「あたしを、エリオを、キャロを、ギンガさんを信じなさい。……仲間でしょ？」

「ティア……」

少しだけ照れ臭そうに、彼女はそう言った。ぶっきらぼうなその言葉は、けれどずっと共に戦ってきたスバルには、何にも替え難い言葉で。

だからスバルはそれ以上何も言わず、ただじっとアインを見つめる。

彼の一挙手一投足の全てを見逃さずに観察し、その時が来るのをひたすらに待つ。

――そして、その時は遂に訪れた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ６７話　『君に届け』

「クロスファイアー、シュートッッ！！」

ティアナの撃ち出した無数の弾丸が驟雨の如くアインへと殺到する。
それを見てアインは後ろに跳んで避けようとするが、そこである事に気づいた。

「！」

自分が知らぬ間に、通路の終わり……丁度壁を背にする位置まで下げられていた事に。

「……」

ティアナの弾丸は通路の横幅一杯に隙間無く撃ち込まれている。
後ろに跳んで避けられぬ以上、回避は不可能に思われた。
だが、アインはそれでも焦る事無く、自分に向かってきている弾丸をその色違いの両目で見つめ、自分に当たるコースに飛んできている弾丸だけを算出し、両手足を動かしてそれだけを正確に迎撃した。

先程までなら、ティアナはそれを見て舌打ちをしたところだろう。
けれど、今は違う。
――彼が自分の弾丸を避けずに迎撃した今の状況こそ、ティアナが待ち望んでいたものだからだ。

「エリオッ！」

「うおおおおっ！！」

ティアナの声に応え、気合の咆哮と共に、エリオはブーストを吹き上げるストラーダに引っ張られるようにして、アインの左側から周り込んで彼へと突撃する。

その速度はともすれば雷神と呼ばれるフェイトにも引けを取らぬ程の速度。

そんな彼の速度はアインの反応速度を超え、彼自身は反応できないでいた。

しかし“聖王の鎧”は肉体の反射よりも更に素早く判断を下し、エリオの攻撃を避けられると見るや、アインの周りに半球状の虹色の障壁を張ることで、エリオの突撃を受け止める。

しかしエリオは、受け止められる事こそが目的だったと言わんばかりに、防がれても距離を取ろうとはせず、より一層ストラーダのブースターを吹かして彼の張った障壁へと力を叩きつける。

障壁は壊れぬだろうが、それでも彼にこのまま攻撃するのは難しいと判断したアインは、一度彼から距離を取る為に動こうと体を傾けた。

「はあああっ！！」

だが、今度は反対側から拳を振り上げたギンガが彼へと迫る。

完全に意識をエリオへと向けていたアインは、しかしそれでも、

速度ではエリオに劣る彼女には反応できたようで、迎撃しようと足を動かして蹴りを繰り出す。
しかし繰り出した蹴りは、横から飛来したオレンジ色の弾丸に撃ち弾かれ、その軌道を大きくギンガから外されてしまう。

「！」

「そう何度も、させるわけないでしょっ！」

目を見開いたアインが弾の飛来した方を見れば、そこに居たのは自分に向かって銃口を構え、不敵な笑みを浮かべているティアナ。
彼我の距離はかなり離れているというのに、彼女は一瞬で、しかもかなりの速度で動いていた筈のアインの蹴り足だけを見事に狙撃してみせたのだ。
なのはでさえ難しいかも知れない、高速で動く小さな対象への超精密射撃。
それを成し遂げた彼女の集中力は賞賛されるべきだろう。

「っ！！」

それにアインが驚く間も与えず、彼の張った障壁に向かってギンガもまた拳を叩きつける。
エリオの槍とギンガの拳とが虹色の障壁にぶつかり、凄まじい火花を散らす。

「ぐ……うっ……」

2人の全力での攻撃を受け止めたアインは、小さく呻いた。
攻撃そのものは障壁に防がれてダメージは無い。けれど、左右両側から打ち込まれた衝撃は、受け止めていてもビリビリと彼の身体に伝わってきている。

そしてそれは、体の限界が近づいているアインにとって、中々に辛いものだった。
だから彼はティアナのいる前方へ逃げようと、体を前傾にして地面を蹴ろうとした。

「アルケミック・チェーンッッ!!」

しかし、またしても彼の行動は別の人物によって阻止される。
踏み切ろうとしたまさにその瞬間、足元に現れたピンク色の魔法陣から飛び出した何本もの鎖が、彼の体に二重三重に巻きついて、アインが動けぬように戒めた。
それを為したのは、勿論キャロ。
アインが鎖を引き千切るよりも先に、彼女は更に鎖を召喚してアインへと巻きつける。

「スバル、今よっ!」

鎖で雁字搦めになり、両側からの攻撃を受け止めて動けなくなっ

ているアインを見て、ティアナがスバルの名を呼ぶ。……今まさに、待ち望んだ時が来たのだ。

ティアナはこういう状況になるように、アインに気づかれぬように幾つもの布石をしておいた。

アインの使う“聖王の鎧”は厄介な防御だが、けれど弱点が無い訳では無い。

聖王の鎧は、無意識でも防御行動を『取ってしまう』もの。意識している時ならともかく、脊髄反射と同じ無意識下で取った行動は、周りの状況の確認などしている暇など無く行われる。

そして、そういった無意識で取る防御行動の殆どは、バックステップによる“距離を取る為の後方への回避”だった。

アインの動きを観察していてそれに気づいたティアナは、エリオとギンガ、キャロに指示を出して様々な角度から攻撃させ、アインが気付かぬうちに通路の終点……彼が壁を背負うように誘導していった。

壁を背負ってしまえば後方への回避は不可能になり、避けられるのは左右か前方のみ。そこでティアナが前方から通路一杯に魔力弾を撃てば、アインに残された選択は足を止めての迎撃のみとなる。

その後は今起こった通り。

聖王の鎧の『無意識下でも勝手に防御行動を取る』という特性を逆手に取った作戦。

彼女がこの数分で考え付いた作戦は見事に嵌り、彼をその場に縫いとめ動けなくするという、全員が待ち望んだ理想的な状況を作り出した。

「わかってるっ！！」

ティアナの声に答えて飛び出すスバル。
目指すのは半球状の障壁に守られ、自身に巻きついた鎖を引き千切ろうとしているアイン。

「うっりゃあああああああっっっっ！！」

「……射撃」

一直線に向かってくるスバル目掛けて、障壁を展開して鎖に縛られたまま、それでもアインは無数の虹色に光る魔力弾を撃ち出した。
けれど、スバルは気にしないとばかりにその魔力弾の群れへと突っ込んでいく。
それもその筈――

「！」

「させないって、言ってるでしょ！」

――彼女へと殺到した虹色の魔力弾は、残らずティアナによって撃ち落された。
ティアナが自分を守ってくれると信じていたからこそ、スバルは迷わずに突っ込めたのだ。

「いっけぇぇぇぇぇっっ！！」

雄叫びと共に、スバルの拳がアインの張った障壁と激突する。

「ぐぅぅぅぅうっ！？」

「ぬ……ぐっ……！」

エリオとギンガ、そしてスバル。
３人の全力を受け止めて、しかしそれでも虹色の障壁には罅ひとつ入らない。
中心に立つアインは衝撃で軋む体に顔を歪めるが、それに構わず自分の前へと虹色の球体を浮かばせて小さく口を開く。

「っ！　スバル！！　下がりなさい！」

「……砲撃」

「きゃあああああああっ！？」

アインが取ろうとした行動を理解したティアナが警告するが遅く、スバルは真正面から砲撃を受けて後ろに吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

「か、は……っ！」

「スバル！？」

「大、丈夫っ！！」

ティアナがスバルに駆け寄ろうとしたが、スバルはそれを制して直ぐに自分の足で立ち上がった。

そして、自分の左手の薬指につけた指輪に視線を落とし、短く礼を告げる。

「ありがと、ブレイブハート」

《　どういたしまして　》

先程の砲撃を受けた際、咄嗟にブレイブハートがシールドを張ってくれていたのだ。

それが無ければ、間違いなく今の一撃でスバルは戦えなくなっていただろう。

「……もう、一度！」

キッと前を見据え、再び走り出そうとするスバル。

けれど、そんな彼女をブレイブハートが呼び止めた。

《　待ってください、スバルさん　》

「っ、ど、どうしたのブレイブハート？」

《　先程の攻撃と同じでは、恐らくあの障壁を突破出来ません。何か策が？　》

「う……」

ブレイブハートの言葉に、スバルは言葉を詰まらせる。

先程の攻撃は、彼女の全力に近い一撃だった。それだけでなく、あの障壁はエリオとギンガの全力を同時に受けてもなお罅一つ入らない堅牢なもの。

もう一度同じ攻撃をしても、あまり効果は無いだろうと、そう思えた。

「でもっ！」

それでも、と。スバルが声を上げる。

それでも自分は行かねばならない、と。

彼を――ハヤトを助ける為に。

《　ええ。ですから、私に考えがあります　》

「考え？」

《　危険ですが……乗りますか？　》

試すような、ブレイブハートの言葉。

「……もちろん！」

その言葉に、スバルは迷い無く頷いた。

彼を助けられるのなら、スバルには自分の身を引き換えに差し出すぐらいの覚悟がある。

そんな彼女が、何を迷う必要があると言うのだろうか。

《　なら、私をセットアップしてください　》

「ブレイブハートを？」

《　私とマッハキャリバーのモード3を使えば、乗算効果でスバルさんの攻撃力は数倍になります。

そうすれば、あの障壁を抜くことも、恐らく可能となる筈です　》

「そ、そんな事……出来るの？」

聞いた事も無い提案に、スバルは思わず尋ね返した。

デバイスの多重起動自体は、それ程珍しいことではない。現にス

バルも、リボルバーナックルとマッハキャリバーを同時に起動している。
だが、その状態で両方をリミッター解除状態にするというのは、発想の埒外だった。
体への負担がどうこうと言うよりも、魔力が持つのかどうか、それすら不明の賭け。

≪　出来ます。貴女と私、マッハキャリバーが居れば、必ず！　≫

≪　その通りですよ、相棒　≫

力強く肯定するブレイブハートに、マッハキャリバーも賛同する。

≪　あなたが教えてくれた、わたしの生まれた理由。あなたの憧れる強さ……。
証明してください。それが、嘘では無いと　≫

「マッハキャリバー……」

マッハキャリバーの言葉を聞いて、スバルはギュッと右手を握り締めた。
そして――。

「ブレイブハート、セットアップ！！」

《《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ.　Ｓｅｔ　ｕｐ.》》

スバルは高々と左手を掲げ、ブレイブハートを起動する。
彼女の左手から赤い光が迸り、それが彼女を包む。光が迸ったのは一瞬で、光が消えた後には形状の変わったバリアジャケットを纏うスバルの姿があった。

基本は殆ど変わらないが、上着はハヤトの着ていたものと同じになり、背中には彼のトレードマークでもあった『天上天下唯我独尊』の文字が躍る。
左手は銀色の装甲に覆われ、その中心には赤く煌く宝石が嵌っていた。

「いくよ！　ブレイブハート、マッハキャリバー！！」

《《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｂｕｄｄｙ.》》

丁度、ハヤトとスバルのバリアジャケットを合わせたようなデザインのそれに身を包み、スバルはゆっくりと腰を落とし、静かに、そして力強く告げる。
ハヤトを助け出す為の……最後の切り札の名を。

「ギア……エクシード・エクセリオン！！！」

《Ｅｘｃｅｅｄ．》《Ｅｘｅｌｉｏｎ．》

「イグニッション！！」《《Ｉｇｎｉｔｉｏｎ！！》》

告げられた名と共に、彼女の足に赤と青、２対の翼が生える。
そしてスバルは、自分の体から溢れる二色の魔力に包まれながら確信した。
これなら彼に――ハヤトに届く、と。

ｓｉｄｅ：―了

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

凄い……なんか、体中から力が溢れてるみたいだ。
そんな風に思いながら、リボルバーナックルを嵌めた右手を握る。

「……これなら」

自分の体を駆け巡る力に呟いた。
これなら、あの障壁を打ち砕ける。……ハヤトに、届く！
そう確信できる位に、あたしの体には力が溢れている。

《　行きましょう、相棒　》

「うん！」

マッハキャリバーの声に答えて、ハヤトに向けて全速力で走り出す。
自分でも驚く位の速度でマッハキャリバーが地面を駆けて、あたしとハヤトの距離をあっという間に詰めていく。でも、あたしには流れる景色が何故だかゆっくりに見えた。

少しずつ縮まっていくあたしとハヤトの距離。
その途中で、虹色のあの障壁を破る最高の攻撃をする為に、タイミングを見計らって拳を振り上げた。

そうしてる間にも、距離はどんどん縮まって。
そして、ついにそれがゼロになった、その瞬間。

「うおおおおおおおおおっっっっ！！！！！」

渾身の力を込めて、ハヤトの回りに張られてる障壁を殴りつける。
さっきぶつけた力の何倍……ううん、何十倍って力。それを叩き

つけられた虹色の障壁から、乾いた音がした。それは、あたしの拳がぶつかった所に罅が入った音。
やっぱり、今ならこれを破れる！！

「が、あぁぁっ！！」

「っ！？」

あたしがそう思った瞬間、ハヤトがまた自分の体から虹色の魔力を溢れさせた。
溢れた魔力はあたし達を吹き飛ばそうと、嵐みたいに叩きつけられる。

「うわぁっ！？」

「きゃあっ！！」

魔力の嵐を叩きつけられて、エリオとギン姉が堪えきれずに吹き飛ばされてしまう。

「くっ……うぅ……っ！！」

罅はどんどん広がってきてるけど、まだ障壁は壊れない。
でも、ここであたしまで吹き飛ばされちゃったら、同じ手は多分

もう通用しない筈。
だから絶対に、ここで決めなきゃ……！！

「あああああああっっ！！！」

「ぐうぅぅっっ！！」

ハヤトの体から溢れる魔力が、更に強くなる。
何とか耐えてるけど、でも、もう……っ！

「スバル！！」

「っ！」

突然、後ろからティアの声が聞こえた。

「諦めんじゃないわよっ！！　アンタとあたしが惚れた男を、助けるんでしょ！！」

……っっ！
そうだ、諦めてなんていられないんだ。
ハヤトを助けられるのは、今、あたしだけなんだからっ！！

「う、おぉぉおおおおおおっっ！！！」

体中に力を込めて、マッハキャリバーの車輪を更に回転させる。
あとちょっと、あとちょっとでハヤトに届くんだ！

地上本部の時は届かなかったこの手を、今度こそ届かせるんだ！！

「ぐぅぅぅぅぅぅっっっっっ！！！」

これが最後だから！
もう腕が動かなくなったっていい！！
ここで体がバラバラになってもいい！！！
だから……っ！　届けっ！　届けっ！！

「届けえええええええええっっっっ！！！！！！！」

あたしがそう叫んだ瞬間、乾いた音を立てて、あたしの前にあった障壁が砕け散った。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

ｓｉｄｅ：―

「……っ！」

障壁が砕けた瞬間、アインが「信じられない」という表情で目を見開く。

「はぁっ……はぁっ……」

スバルは障壁を砕いた格好のまま荒い呼吸を繰り返して呼吸を整え、ゆっくりと手を下ろす。

そして呼吸が整ったあたりで顔を上げ、足を一歩踏み出して、彼との間に残っている距離を詰めながら彼の名を呼ぶ。

「ねぇ、ハヤト……」

そのまま彼女はもう一歩足を踏み出して、ハヤトとの距離を更に詰める。

「聞こえてる？」

「っ！」

そんな彼女に反応して、アインは……いや、彼の中にある“洗脳プログラム”が、スバルから逃げようとアインの体を動かしてもがく。

けれど、それは彼の体を戒めるキャロの鎖が許さない。

「あたしね、頑張ったよ」

嬉しそうに、愛おしそうに話しかけながら、スバルはまた一歩距離を詰める。

「寂しかったけど、悲しかったけど……一生懸命、頑張ってみた」

そう言って、また一歩。

「でもね……」

もう一歩足を踏み出した時、微笑むスバルの目から涙が零れた。

「ハヤトが居ないと、やっぱり駄目なんだ……」

ポロポロと涙を零しながら笑い、彼女はついにアインとの距離をゼロにする。

「ティアが居ても、エリオやキャロが居ても、ギン姉が居ても駄目なの……」

想いを告げながら、彼を抱きしめる。

瞬間、アンチプログラムがスバルのリボルバーナックルから流れ込み、アインの体が強張った。

「今でも、ハヤトが大好きなの……」

洗脳プログラムに操られ暴れようとする彼の体を、その細い腕で一生懸命押さえながら、スバルは彼の胸に顔を押し付け、掠れた声で想いを紡ぐ

大好きな、誰よりも大好きな彼に。

「ハヤトにもう一回、名前を呼んで欲しいの。

もう一回、頭を撫でて欲しいの。もう一回、笑顔を見せて欲しいの……」

最後はもう、嗚咽混じりで声に鳴らない声が、アインの耳に届く。

「……ぁ」

その時、不意にアインが暴れるのをやめ、小さな声を漏らした。
けれどスバルには聞こえていないのか、彼女はそのまま想いを呟く。

「あの時の返事だって、まだ聞いてないんだよ……？」

「ぁ……ぅ……」

アインの瞳に、光が灯る。
それは、間違いなく“ハヤト”という人間の、意志の光。

「だから……だから……っ！」

そして――。

「お願いだから……戻ってきて、ハヤト」

その言葉と共に、アインの目に確かな意志が戻った。
彼は光の戻った瞳で一度辺りを見て、それからゆっくりと視線を
自分の胸に顔を埋めて泣いている少女へと向けて――。

「……よぉ」

照れ臭そうに、ちょっとだけからかう様に。

「呼んだか？　スバル」

スバルが何よりも見たいと望んでいた、彼らしい苦笑を浮かべて、
そんな言葉を漏らした。

ｓｉｄｅ：―　了

if67話　『君に届け』（後書き）

燃えたよ……燃えつきた……真っ白にさ……。
どうも、ラモンです。

頑張って書きました。今回はそれだけです。
ちょっと気力とか使い果たしたので、あまりもう語る力が残ってません。
一応、私の持てる全ての力を注いで書き上げたつもりですので、楽しんでいただけたなら、それだけで私はもう満足です。

勢いに任せて書いたので、独自設定や、後で読み直すと「何コレ？」と言われそうな部分はかなりあるかと思います。
ですが、まぁそこはご都合主義とお見逃しいただけると、作者が喜びます（笑）
もちろん、感想などでのツッコミはどんと来いです。

最後に、皆さんは今回どんなＢＧＭを流したのでしょう？
ちなみに私は、マクロスＦ最終回で流れていた『娘々スペシャルサービスメドレー』でした。
もしよければ、これを流しながら読み直してみてくださいね。

さて、次回はいよいよウザットロに鉄槌を下す回が始まります。
今回で燃え尽きたので、イマイチなクオリティになりそうですが、頑張っていきたいですね（笑）

それではまた、次の話で。

if68話　『野望の終焉』

「……よぉ」

妙にスッキリした頭で、視線を下ろして口を開く。
すると、目と鼻の先に見えるのは顔を上げたスバルの泣き顔。
ったく酷い顔だなオイ……なんて思いながら苦笑して、彼女に話しかける。

「呼んだか？　スバル」

まぁ、確認するまでも無いんだけどな。
コイツが呼んでくれたから、こうして俺がここに居るわけだし。

「……ハヤ、ト？」

「おう」

幽霊か何かを見るような驚いた顔で、スバルが俺の名前を呼ぶ。

「ホン、トに……ハヤト？　あたしの夢とかじゃ、なくて？」

確かめるように俺の顔を触って、確認するように呟くスバル。
失礼な奴だ。人を勝手に夢の住人にしてんじゃねーっての。いや、仕方ないとは思うけどさ。

「ったりめーだろが。ホレ、ちゃんと触れんだろ？」

軽口を叩きながら、俺の顔を触っていたスバルの手に自分の手を重ねる。
あれ、そういや俺って鎖で雁字搦めにされてたような？　と不思議に思ってキャロの方へ視線を上げたら、凄く嬉しそうな顔でこっちを見ていた。
どうやら、空気を読んでくれたらしい。感謝だぜ、キャロ。
心の中でキャロに感謝を述べながら、スバルの耳元に顔を寄せ――

「俺は、ここにいるよ。……ずっと、お前のそばにいる。
もう2度と、どっか行ったりしねぇから」

――そう言ってスバルを抱きしめて、安心させるように背中を叩いてやる。
すると、俺の体に回されたスバルの手が俺の服を強く掴み、俺を見上げる瞳にみるみる涙が溜まっていって、そして。

「うわあああああんっ！！」

堰を切ったように、子供みたいな声でスバルは泣き出した。

「あああああっ！　わぁぁぁぁんっっ！」

泣きながら、一生懸命俺にしがみつく。
離したくないとでも言うみたいに。

「あああああっ……ひぐっ……ハヤトぉ……」

「ん」

「っく……ハヤトぉぉ……っ」

俺の肩に顔を押し付けて、スバルは泣き続ける。今まで我慢していた分を、全部吐き出すみたいに。
だから俺は、ただ黙ってスバルの事を抱きしめた。

「うえぇっ……ハヤトぉ……っ」

「うん」

どのくらい、寂しさに耐えてきたんだろう。
スバルの体は、前よりもずっと小さく感じて、ちょっと力を入れ

たら折れてしまいそうに儚くて。
必死に俺へとしがみつく腕の力だって、ホントに弱々しくて。
ホントにコイツが、あのスバルなんだろうかって思える程に“女の子”で。

「……ただいま、スバル」

その全てが、泣き出しそうなくらいに愛おしかった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ６８話　『野望の終焉』

ｓｉｄｅ：―

「……っっ！！」

モニタに映る映像を見て、クアットロは声も無くただ歯をギリギリと鳴らして噛み締めた。
聖王モード……最後の手札まで切ったアインが、スバル達に負けた……いや、正確に言うならハヤトへと“戻された”のだ。理論上

ではありえない展開を目の当たりにした彼女の感情は既に飽和状態になり、怒りが思考を焼き尽くす。

クアットロの頭の中では、ありえない事象なのだ。

聖王の力を発動したアインの力は、到底スバル達では届かぬ領域。

そのアインにスバル達が近づくのも、ましてやああしてハヤトに戻すことなど。

けれど、ありえない事象は現実に目の前で起こっていて。

その事実がクアットロの感情を飽和させる。

「なんで、なんであのガキどもは……きゃあっ！？」

更に、そんなクアットロに追い討ちを仕掛けるように、ゆりかごが凄まじい衝撃に揺れる。

「な、何っ！？」

クアットロが衝撃にたたらを踏み、辺りを見回す。

同時に『駆動炉全損』のエラーを示す文字が、モニタを赤く染め上げた。

それを見て、クアットロの顔が驚愕に歪む。

「駆動炉が破壊された！？　……糞、あの赤いチビか！！」

イラついた声で吐き捨て、しかし彼女は直ぐに平静を取り戻すように努めながら、自分を落ち着かせる為に口を開きながらパネルを叩き始める。

「だ、大丈夫。駆動炉が破壊されても、予備の駆動炉を動かせば……」

だが、結局はそれも上手くいく事はない。

彼女がパネルを叩くと、唐突にエラー音が響く。

そしてモニタに映し出されるのは、『アクセス権限がありません』という赤い文字。更にはその横に、『ゆりかごの操縦者登録が全て抹消されました』という文字までもが浮かぶ。

どれだけパネルを叩いてみても、返ってくるのはエラー音のみ。

「な……あ……？」

訳がわからず、クアットロの口から呆然とした声が漏れた。

すると、突然モニタが開き、再びそこにスカリエッティの顔が映り出す。

モニタに映ったスカリエッティは、呆然としているクアットロの顔を見て、実に楽しそうな笑い声を上げて語りだした。

『ははははははっ！　良い顔をしてるじゃないか、クアットロ！』

「ドクター……っ！　まさか！？」

『多分君の考えている通りさ。すまないが、ゆりかごのシステムを乗っ取らせて貰ったよ』

「ぐ……っ！　やっぱり、てめぇかっ！！」

楽しそうに笑うスカリエッティを、クアットロは睨みつける。

「舐めないで貰えます？　システムぐらいすぐに乗っ取り返して……」

『無駄だね。時間が無かったから簡単なものではあるけれど、私がプロテクトをかけておいた。君がどれだけ頑張ろうと、システムの全て……それどころか、最低限の部分まですら届かないよ』

「くっ！」

自分でも分かっていた事を指摘され、クアットロはギリ、と歯を鳴らす。

それでも諦められないのか、彼女は再びパネルを叩こうと手を動かす。しかし、それを見たスカリエッティはニヤニヤと笑いながらクアットロに向けて忠告する。

『そんな事をしていていいのかな？』

「あぁっ！？」

『言っただろう？　システムを全部乗っ取らせて貰った、と。つまり……』

「！！　しまっ……！？」

スカリエッティの言わんとしていた事を理解したのか、クアットロが視線をパネルから空中で戦っている筈のなのはへと跳ね上げる。

そこでは未だなのはが波状的に押し寄せるガジェットと交戦していた。

その光景を見て、クアットロはまだ状況が自分にとって絶望的では無いと安堵したが――。

『安心したところで悪いけれどね、クアットロ。君の茶番も、そろそろ閉幕だ』

楽しげなスカリエッティの声と共に、突然全てのガジェットが動きを止める。

なのはに今まさに襲いかかろうとしていたガジェットも、待機しているガジェットも、それどころかクアットロが自分の周りに開いたモニタに映る、市街地で地上本部局員達と交戦していたガジェットも、それこそ全てのガジェットが、だ。

それを見て、クアットロが頬を引き攣らせた。

何せ、すでにアインはハヤトの自我を取り戻し、彼女の戦力はガジェットのみ。

そしてたった今、その最後の戦力さえも奪われてしまったのだ。

「そ、んな……」

『ああ、ついでだ。君の周りに張られているそのシールドも、解除させて貰おう』

そう言いながらモニタの向こうでスカリエッティが手を動かした。しかし、クアットロとヴィヴィオの周りに張られていた虹色のシールドは消えることなく、虹色の輝きを放ち続けている。

『……ふむ？　ああ、そのシールドはメインシステムから切り離されているのか』

「と、当然でしょう？　これは、私を守る最後の盾なんだから！」

やや焦った声と安堵した表情で、息を吐きながらクアットロは笑う。

しかし、スカリエッティは特に気にすることもなく手を動かし続け、ニヤリと口の端を持ち上げた。

『だがそのシールドの動力は駆動炉がメインだったようだね？　なら、駆動炉が破壊され、予備駆動炉も動かせない今、随分と脆くなっていると見たが……どうだい、クアットロ？』

「……ぐっ」

『……くくっ、あっはははははっっ！！　いい顔だ！　実にいい顔だよクアットロ！！
本当にいい表情をするようになったじゃないか！　いいね、やはり君は一番の成功作だったよ！！』

彼の指摘に悔しげに顔を歪めるクアットロを見て、スカリエッティは狂ったように笑う。

「で、でもなぁっ！　それでも、このシールドを抜ける奴なんて……」

『いるだろう？　君の目の前に、砲撃戦のエキスパートが』

「っ！」

反論をスカリエッティに事も無く論破され、クアットロが言葉に詰まる。
スカリエッティはそんな彼女を見て、楽しげに笑っていた。

「……？」

その光景を離れた場所から見ていたなのはは、状況が掴めずに困惑していた。

なにせ、今まで猛攻してきたガジェットがいきなり止まったと思えば、クアットロが目の前に開いたモニタと口論を始めたのだ。彼女の位置からでは、モニタに誰が映っているのかは確認できず、またスカリエッティとクアットロの会話も聞こえない。

だからなのはは、警戒しながらも動けないでいる。

ガジェットの動きが止まったのだから、ヴィヴィオを助けに行きたいという気持ちはある。だが、あのシールドがある限りはヴィヴィオに近づけないというのも分かっている。そしてあのシールドは、ブラスターシステムを使っても抜けるかどうか分からない程に強固だということも。

だからなのはは、助けたいと思いつつも迷う。

そんな時、彼女の目の前に通信用のモニタが開いた。

『なのは！』

「フェイトちゃん！？」

そこに映ったのは、彼女の親友――フェイト。

『細かいことは言えないけど、今ならあのシールドを、なのはの砲撃で抜ける筈だよ！』

「え、ど、どうして？」

『詳しいことを説明してる時間は無いから、説明は後で！　とにかく、今はあのシールドを壊して、ヴィヴィオを助けてあげてっ！！』

「……うん、わかった！」

力強く言い切るフェイトに、なのははそれ以上何も聞かずにヴィヴィオを助ける為に彼女が座っている玉座へと視線を向ける……が、それは少しだけ遅かった。

なのはが迷っている間に何とか我に返ったクアットロは、既に悪あがきの領域ではあるが、自分に取れる最後の手を使っていたのだ。

「近づくんじゃねぇぞ、エース・オブ・エース！」

「っ！　ヴィヴィオッ！？」

クアットロは玉座からヴィヴィオを引き剥がし、抱えるように右手で彼女を抱き上げ、その首に左手を添えている。そして、既に余裕など無くなり恐慌と焦りとが混ざった顔で叫ぶ。

「いいか！　そこでジッとしてろ！！　少しでも妙な真似したら、このガキの首をへし折るぞ！！」

『……クアットロ。何を無様なことをしているんだい？
とても、私の思考をコピーした素体だとは思えないね……全く』

「黙れ！　てめぇが邪魔しなきゃ良かったんだよ！！　負け犬が、今更噛み付いてきやがって！！」

『ふむ。まぁそれはどうでもいいけれど、それでこの後どうするつもりだい？
そうやっていては両手も使えない。システムを取り返すことも出来ないだろう？　駆動炉を破壊され、予備の駆動炉も動いていない今、ゆりかごの浮上スピードなど微々たるものだ。
仮に浮上が終わっても、このスピードでは管理局の次元航行艦隊に撃ち落されるのが関の山だろう。
諦めた方が、楽だと思うよ？　クアットロ』

つらつらと冷静な声で正論を吐くスカリエッティを、クアットロは憎悪と嫌悪の混じった瞳で睨み、しかしすぐに狂ったように笑い出す。ヴィヴィオを抱き上げた腕に加減無く力が込められ、ヴィヴィオは苦しそうな声を上げるが、それすらクアットロの狂笑に遮られて届かない。

「あはははははっっ！　別にンな事ァ分かってんだよ！！
私がもう詰みだってことはなァ！！　けど、私はアンタみたいに潔い性格じゃあ無いんでね！！」

言いながら、クアットロは狂気を宿した目でなのはを見る。
そして――。

「せめて、このガキだけでも道連れにしてやるっ！！」

「なっ！？」

抱き上げたヴィヴィオをなのはに見せ付けるようにしながら、そう叫ぶ。

「そうすりゃ、てめぇらには十分すぎる程の痛手だろ？　なぁ？　エース・オブ・エース！！」

「ヴィヴィオは関係ないでしょっ！？　離してっっ！！」

「やぁーーーなこった！！　嫌なら取り返してみるんだなぁっ！　最も！　このシールドはそうそう破れねぇし、てめぇが何かするよりも、私がこのガキの首をへし折る方が速いけどよぉっ！！」

言い放ち、クアットロはまた狂ったように笑い出す。

なのはも、彼女の近くに開いたモニタに映るフェイトも悔しげな声を漏らすが、事実としてクアットロとなのはの間には一息で詰めるには無理のある距離が開いているし、シールドがある以上は近づけない。

そのシールドは抜けるのかも知れないが、それでも砲撃を撃つには集束する時間が必要で、それを短くすることは出来ない。

そして間違いなく、クアットロはなのはが集束を始めたらヴィヴィオに害を為すだろう。

「あはははははっ！　さぁどうするエース・オブ・エース！？　逃げなきゃアンタも私と一緒に撃ち落されるぞ！？　まぁ、それならそれでいいけどなぁ！！」

クアットロは嗤う。狂ったように、楽しそうに。
けれど、既に運命は彼女に微笑まない。

「……っ！」

彼女に抱き上げられ俯いていたヴィヴィオが、何かを決意したような表情で視線を上げる。
視線を向けるのは、少し離れた空中で心配そうに自分を見つめているなのは。
ボロボロになって、それでも自分を助けに来てくれた、優しいお母さん。

あの人の娘である自分が、泣いてばかりでいい訳が無い。
自分が頑張れば、きっと全部が上手くいく。ヴィヴィオはそう確信していた。
だからヴィヴィオは、自分を逃がさぬように抱き上げているクアットロの腕を見て――

「あぐっ！？」

――その腕に、思い切り噛み付いた。
突然訪れた痛みに、思わずクアットロの腕から力が抜ける。
その瞬間を見逃さず、ヴィヴィオは彼女の腕から逃れて駆け出した。

「……っの、ガキッ！！」

ヴィヴィオが駆け出した後、すぐにクアットロも彼女を追いかけるが、しかしヴィヴィオは全力で駆け抜けて虹色に輝くシールドの範囲から抜け出し、なのはの方へと駆けていく。

「く……っそ……！」

クアットロはヴィヴィオを追いかけようとしたが、シールドから出てなのはに撃たれる恐怖の方が勝ったのだろう。悔しげな声を漏らしながらも、シールドの範囲を超えてヴィヴィオを追いかけようとはしなかった。

結論だけ言うなら、クアットロはココで危険を犯してでもヴィヴィオを捕まえておくべきだった。

なぜなら、ヴィヴィオが居ないと言う事は、すなわちなのはが全力の砲撃を放てるという事だから。

「ヴィヴィオっ！」

「ママッ！！」

自分の方へと駆けてくるヴィヴィオを見て、なのはが安堵の声を漏らす。

だが、ヴィヴィオは走る途中でガジェットの残骸に足を引っ掛け、転んでしまう。

「ヴィヴィオッ!?」

それを見たなのはは、慌てて彼女の元へ行こうとした。

「来ないでっ!!」

「!?」

しかし、そんな彼女をヴィヴィオが止める。

ヴィヴィオは床に擦りむいて赤くなった顔を上げ、一生懸命に願う。

「私は、大丈夫だから……っ!」

自分を助けに来てくれた、“正義の味方”である母に。

「悪い人を、やっつけて!!」

「……っ、うん!　任せて、ヴィヴィオ!」

そして、彼女は……高町なのはは、その願いに答えるのだ。
いつだって、どんな時だって。

「レイジングハート！」

《 Ａｌｌ ｒｉｇｈｔ． 》

なのはがレイジングハートの切っ先をクアットロに向け、レイジングハートが彼女の声に答える。そして、クアットロに向けられた切っ先に、桃色の魔力が集まっていく。

「ひっ……！」

その光を見たクアットロが、怯えた声で息を呑む。
怯えで顔を歪める彼女を見て、スカリエッティはモニタを閉じながら最後に小さく告げた。

『残念だよクアットロ。複雑で周到な仕掛けほど、歯車の歯一つ欠けただけで予想もつかないことが起きる……その程度の事も分からず、策に溺れてしまうとは』

「全力、全開っ……！！」

切っ先に集まる魔力は、どんどんと大きさを増していく。
それはまさに、クアットロを断罪する光。逃げることも出来ず、威圧されるクアットロはその顔を恐慌に染めてその場にへたり込む。
そして――。

「スターライト……ブレイカァァァァッッッ！！！！」

星の光が放たれる。
放たれた光は一直線にクアットロを守るシールドとぶつかり合い、しかしシールドは砕けずに、その光を受け止めて見せた。

「……！　は、ははっ！！　や、やっぱり無理じゃないのっ！！
私の造ったこのシールドを破るなんて、いくらエース・オブ・エースでも……」

《Ｂｌａｓｔｅｒ　ｓｅｔ．》

クアットロの言葉を遮るように、レイジングハートの機械音声が響いた。

「ブラスター……スリーッッ！！！」

なのはの声と共に、星の光がその輝きと強さを増していき、遂には受け止める虹色に罅を入れた。

「な……ぁっ！？」

驚愕に声を失ったクアットロの目の前で、罅は大きくなっていく。あっという間に、虹色に走った罅はシールド全体まで広がっていき、クアットロの周りにあるモニタからは、シールドの限界を知らせる警告音がひっきりなしに鳴り響いた。

「い、いや……」

恐怖に駆られ、クアットロは逃げるようになのはに背を向けて走り出した。

けれど、全てはもう遅い。逃げるのも、後悔するのも。

「ブレイク……シューーーーートッッッ！！！！」

「いやあああああああっっっっ！！！」

逃げ出そうと彼女が足を踏み出した瞬間、シールドは遂に砕かれ、
桃色の光がクアットロを包む。
桃色の光はクアットロの野望も執念も、悲鳴さえをも飲み込んで、
全てを粉砕するように爆発した。

side：―　了

ｉｆ６８話　『野望の終焉』（後書き）

皆、スッキリしていってね！
どうも、ラモンです。

スーパーバカップルタイムと、皆様お待ちかね！　ウザットロざまぁｗｗｗタイムでした。
意外と難産だった今回。
どうしてもＳ．Ｌ．Ｂをなのはに撃たせたかったんですが、どうやったら撃たせられるのかなぁと思って、すっげー悩みました。

今回のＭＶＰは、実はなのはよりもスカっちとヴィヴィオ、そして全く描写されていないけど、駆動炉を破壊したヴィータだったりしますけどね（笑）
スカっち、結構ウザい事言わせてるのに、ウザットロのお陰で全然目立たないという……ウザットロ恐るべし。
さておき、これで一応Ｊ・Ｓ事件における戦いは全部終了です。

次回は脱出編。
スーパーヒータイムでハヤトを活躍させたいなぁ、と思っています。
ハヤトだから活躍しないかもですが。

それではまた、次の話で。

if69話　『脱出　1』

side：―

（糞っ、糞っ、糞っ！！）

地面に穿たれた穴の中に倒れながら、クアットロは心の中で毒づいた。

なのはの放った砲撃は、シールドで大分威力を削られたとはいえ、それでもクアットロに体を思うように動かせなくするには十分すぎるダメージを与えていた。

ガジェット達も動き出す気配も無く、本来なら操縦者を失った事で動き出す筈の『システム復旧』も、メインシステムをスカリエッティが支配しているせいか発動しない。

（この私がっ！　この、私がっっ！！）

憎悪と憤怒がクアットロの思考を焼き尽くす。

しかし、既に彼女の体は声を出すことが出来ない程にダメージを受け、その憎悪も憤怒も思考を焼くだけで声にならない。

（糞っ、糞っ、糞っっ！！！）

その時。まるで彼女の憎悪に反応したかの如く、小さな、本当に小さなモニタが開いた。

彼女の意志で開かれたのではなく、恐らくは何かの弾みで偶然開いたのだろうが、そのタイミングはまるでクアットロの憎悪に応えたかのような、そんな絶妙なタイミング。

開いたモニタには、たった3行の文字が並んでいる。

「……？」

モニタの開く音を聞いたクアットロは、視線だけを動かしてそのモニタに送り、自分の顔の横に開いたモニタに映る文字を見た。

「！！！」

そこに映っていたのは、クアットロにとって奇跡とも言っていい内容。

そして、クアットロ以外の人間には最悪と言っていい内容。

開いたモニタは小さく、距離が離れていた上に、視線をヴィヴィオの方に向けてしまっていたなのははには気付かれることは無かった。

もしなのはがもう少し気を抜かずに居れば気付けたのだろうが、シールドを破られ、ガジェットとアインを失ったクアットロに、打てる手は残っていなかった。彼女が油断……というよりも、終わったと確信して気を抜いてしまったのも仕方ない事だろう。

実際、これは本当に偶然に偶然が重なった結果訪れた現象。

万が一……いや、確率だけならそれこそ限りなく0に近い確率の事。

なのはが油断したのが悪いのではなく、ただ最悪のタイミングで、最悪の相手に、最悪のモノが“偶然にも”渡ってしまったというだけの事。

誰にも予想出来ない、本来ならある筈のない……いや、あってはならない最悪の偶然だった。

（……これなら！！）

しかしそれは起こってしまった。

今、この瞬間に。

「……っ、っ！」

クアットロは言う事を聞かぬ体に鞭を打ち、残った力を総動員して右手を動かす。

ズリズリと這うような動きをしながら、クアットロの右手が少しずつモニタに向かって動いていく。

「っ！！」

本人にしてみれば永遠のようにも感じた時間が過ぎ去った後、遂

にクアットロの右手はモニタに届き、指先がモニタの一部に触れた。
それと同時に小さく響く、ピッ、という電子音。
そして小さなモニタの中に展開される凄まじい量の文字群。

（動いた！！）

甲高い音を聞き、モニタの中を猛スピードで動き回る文字を見て、まるで息を吹き返したかのように彼女の右手が忙しなくモニタの上を滑る。
けれど、やはりなのははそれに気づけない。当然だろう。クアットロの動きは右手だけ、しかもモニタはなのはからは角度的に見えない位置にあり、音も極小なのだ。
そして……いくつかの操作を終了したモニタから、全工程終了を告げる電子音が鳴り響く。
甲高いその音が耳に届いた瞬間、クアットロの口がパカリと開き――

「……ぁハッ♪」

絶望を呼ぶ、歓喜の声がそこから溢れた。

side：―　了

●魔法少女リリカルなのはStrikerS　～とある新人の日常～
if69話　『脱出　1』

「……落ち着いたか？」

「……うん」

結構な時間泣いていたスバルの泣き声が終わった辺りで聞いてみれば、スバルは俺の肩に顔を押し付けたまま、小さな声で頷いた。
その声を聞いてから、もう一回軽く背中を叩いて体を離……そうとしたんだが、スバルは俺に抱きついたまま離れようとしない。離そうとしたら、すげー泣きそうな顔されるし。
いやまぁ、俺は別にいいんだけどさ。状況が状況だし、流石に離れて欲しいような……。

「スバル、ちょっと離れようぜ？」

「……や」

離れてくれるように頼んだら、子供みたいに頬を膨らませてより一層きつく抱きつかれた。
何度か離してくれるように頼んでも、ずっと「や」の一言で片付けて離れてくれない。
……はぁ、まぁいいか。最悪、俺が運んでいけばいいさ。

「何してんのよ、もう」

そんな風に思って溜息を吐いていたら、ティアナがこっちにやって来た。
ティアナは観察するように俺の顔を見て、口を開く。

「どう、元気？」

「おうよ」

いつもと変わらない口調の問いに、軽く手を上げて元気さをアピール。
実際はあっちこっち痛いけど、それでもティアナやスバル達よりは元気だと思う。

「結構凄いんだな、戦闘機人の身体って。お前ら相手でも、５対１で余裕だったし」

「……ハヤト、アンタ記憶が？」

「ん。全部じゃねぇけど、大体は残ってるな」

俺が“アイン”と呼ばれていた時の記憶。

ぼんやりしてる部分もあるけど、さっきまでの事はハッキリと覚えてる。

スバル達が、俺の為に頑張ってくれてたことや、俺がこいつら相手に大立ち回りしたことも。

「あんま、気分がいいモンじゃねぇけどさ」

言いながら、苦笑する。

すると、ティアナは俺の肩に自分の拳を軽く当てて呟く。

「……ホント、大変だったんだからね」

「あぁ……悪い」

口調は怒ってるけど、ティアナの目も何となく潤んでる。

ティアナに続いて、ギンガにエリオ、キャロも俺の方にやってくる。全員、やっぱりちょっとばかり涙目だ。……やっぱ心配させたよな。

ぼんやりとだけど、大体全部覚えてる。
自分が何をされたのか、こいつらに何をしたのか。

「……あー、その、なんだ」

だからまぁ、まずは感謝を。

「ホント、ありがとな。みんな」

そして次に謝罪を。

「それと……迷惑かけて、悪かった」

そう言って、軽く頭を下げる。
本当は深々と頭を下げたいとこなんだが、スバルがひっついて離れてくれないから仕方ない。
ギンガからの小言のひとつくらいは覚悟してたんだが、返ってきたのは予想外のリアクションだった。

「お帰り、ハヤト」

「お帰りなさい、ハヤト君」

「「お帰りなさいっ、ハヤトさんっ！」」

「おぉっとぉっ！？」

何か知らんが、全員に抱きつかれてしまった。

うん、お前ら俺の身体が結構凄いことになってんの忘れてない！？　やせ我慢して立ってたけど、普通にギシギシ言ってんだからね！？

そんな状態の俺が５人分の体重を支えられる訳もなく、俺は抱きつかれた勢いそのまま、仰向けになるように倒れて、スバル達に押し倒されてしまう。

「ぎにゃーっ！？」

５人分の体重の下敷きになった俺の口から、猫が潰されたような悲鳴が漏れる。

うん、おかしいね。助かった筈なのに死に掛けてるよ？　しかも味方の手によって。ちくしょう！　こいつらやっぱ怒ってたな！？

だからこんな陰湿な仕返しをしてんだな！？

裏切ったな！　俺の気持ちを裏切ったんだ！

謀ったな、シャア！！　シャアって誰だよ！！

「重い重い！　お前ら一旦どけ！　死ぬ！　死ぬから！　ピザ生地みたくなるから！！」

そんな冗談は置いといて、ガチで重くて辛いので、俺は必死に悲鳴を上げて訴えた。
復活した途端に圧死とか洒落にならんですよ！　けど何か全員感極まってるみたいで、俺の訴えなんて全然聞こえてないっぽいですよ！？

「ちょっ、ねぇ皆さん！？　マジでどいてくださいませんかーーっ！？」

俺の悲鳴が、虚しくゆりかごの通路に響いた。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「ほんなら、ヴィータの事、お願いします」

リインとユニゾンした状態のはやては、そう言って自分と共に突入した武装局員に、血塗れのヴィータを託す。ヴィータは気絶しているのか、ぐったりとして動かない。
彼女は１人で駆動炉に向かい、その道中で数え切れない程のガジェットの群れと戦ってきた。

そして見事に駆動炉を破壊したものの、ダメージで動けなくなってしまったところではやてが彼女と合流し、彼女を連れて突入口まで戻ってきて、今に至る。

「はい。私達が必ず」

はやてからヴィータを託された武装局員達は、彼女を抱えて突入口から外へと飛び出していく。

その背中を見送ってから、はやては踵を返して通路を飛んで移動を始める。目指すのは駆動炉とは反対側にある玉座の間。はやてはそこで戦っている筈のなのはと、その途中の通路に居るティアナ達フォワードの元に向かおうとしているのだ。

「リイン、皆の位置はわかっとる？」

『はいです！　ちゃんと捕捉してるですよ！』

ユニゾンしているリインからはやてに、ダイレクトでなのは達の位置情報が送られてくる。

「魔力反応が無いっちゅーことは、戦闘は終わっとるみたいやな」

『なのはさんの近くにヴィヴィオの反応があるです。フォワードの方も、近くにハヤトの反応があるですよ。バイタルもちょっと乱れてるぐらいで正常ですから、多分みんな無事です！』

なのはとフォワード、そしてハヤトとヴィヴィオの安否を飛行しながら確認し、全員の無事を確認するとまずは安心と安堵の溜息を吐く。
けれど、すぐに表情を引き締めて前を向く。

「せやけど、もしかしたらダメージで動けなくなっとるかも知れへんし、急ぐよ、リイン！」

『もちろんです！』

リインにそう言って、はやては飛ぶ速度を上げる。
彼女は、自分の親友と部下達を助ける為にここに来た。
それが自分の――部隊長としての責任であり、為すべき事だと思っているから。

（ガジェットは私が突入する直前から動かなくなった。
多分、なのはちゃんが首謀者を止めてくれたからやとは思うけど……）

同時に飛びながら考える。
ガジェットは、彼女がここに突入する前に突然全てが動きを止めていた。
その原因はわからないが罠だという可能性もゼロでは無く、今こうしている間にも、突然また動き出して襲ってくるかも知れないの

だ。

（そうなった時に、私が皆を守ってやらんと！）

そんな事を考えながら飛ぶはやてだったが、突然、辺りに警報が鳴り響く。

同時に聞こえてくる、機械音声の艦内放送。

【緊急自壊プログラムが発動されました。４５０秒後に魔力結合を全てキャンセル、４６０秒後に侵入経路を全て閉鎖、４８０秒後にゆりかごはプログラムに従って自壊を始めます。
乗員は閉鎖の始まる４６０秒時点までに、速やかにゆりかごから脱出してください。
なお、侵入経路閉鎖には従来のプログラムではなく、新たに組み込まれた魔力障壁を使用します。

繰り返します。緊急自壊プログラムが発動されました……】

「自壊……」

『プログラム！？』

聞こえてきた艦内放送に、はやてとリインは揃って驚きの声を上げた。

◇◇◇◇◇

時を少しさかのぼった、玉座の間。

ついさっきまで激しい戦闘が行われていたそこは、今は静寂に包まれている。

そこに居る人間は3人。高町なのはとヴィヴィオ……そして、床に穿たれた穴の中で倒れているクアットロ。その3人以外に、今ここに動く人間も、ガジェットも存在しない。

「大丈夫？　ヴィヴィオ」

なのははクアットロの方を一度確認し、彼女が立ち上がる気配が無いのを見てから、転んでしまっていたヴィヴィオの所に駆け寄る。

転んだ時に擦りむいたのか、その小さい顔や膝が赤くなっていて、目の端には涙が溜まっていた。けれどヴィヴィオは、自分の腕でぐしぐしと顔を擦って涙を拭き、なのはに向かって白い歯を見せて笑う。

「うん！　大丈夫だよ、なのはママ！」

「……そっか。偉かったね」

それがヴィヴィオなりの、なのはに心配をかけまいとする強がり

だと悟り、なのはは反論せずに微笑んで彼女を抱きしめ、ゆっくりと頭を撫でながら誉めてあげる。
母と慕う人に抱きしめられて緊張の糸が解けたのだろう。なのはからは見えないが、ヴィヴィオの瞳にまた涙が溜まっていく。けれど、ヴィヴィオは泣き声を上げればなのはを心配させてしまうと思い、一生懸命に彼女の胸に顔を押し付けて声を噛み殺す。

なのはは、何も言わずにそんなヴィヴィオをただ抱きしめた。
胸元から聞こえる押し殺した泣き声に、気付かぬフリをして。

「……ヴィヴィオ、立てる？」

少しの間そうしていて、胸元から聞こえてきた押し殺した泣き声が聞こえなくなったのを確認して、なのはは立ち上がってヴィヴィオに尋ねる。
彼女の問いにヴィヴィオは俯いたまま、またぐしぐしと腕で目を擦ってからなのはを見上げて頷いた。
元気良く頷いた彼女を抱き上げ、なのはは微笑んで口を開く。

「じゃあ、帰ろうか？」

「うんっ！」

なのはの言葉にヴィヴィオもまた笑って頷きを返した。
その返事に頷いて、なのははヴィヴィオを抱き上げ、抱き上げら

れたヴィヴィオは嬉しそうになのはに頬を寄せた。
自分の娘の体温を感じて、なのははようやく全部が終わったのだと思った。
――しかし。

「……ぁハッ♪」

そんな彼女の耳に、歪な笑い声が届く。
自分のものでも、ヴィヴィオのものでもない、耳に残るその笑い声が聞こえた瞬間、なのはの背筋を悪寒が走り抜け、彼女は視線を声のした方向――自分が穿った穴の中で倒れているクアットロへと向けた。

「な……っ！？」

見えたのは、自分の前に開いた小型手帳程度の大きさしかないモニタに触れているクアットロ。
もう体が動かないのか、うつ伏せで倒れていたクアットロは、しかしそれでもなのはの方を見て笑っていた。彼女の前にあるモニタに何が映っているのかなのはには分からない。
しかし、真っ赤に染まったモニタには、きっと最悪の事が示されていると、彼女の勘が叫んでいた。

「くっ！　レイジングハート！」

《Ａｘｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ．》

なのはは自分の感覚が告げるまま、アクセルシューターをクアットロに向ける。

しかし、それでも距離の開いたこの状態では、ボロボロのクアットロが指一本を動かすよりも速く飛ぶことは出来なかった。

――ピッ。

短く鳴ったその音が、なのはには殊更ハッキリと聞こえた。

彼女が放ったアクセルシューターは、その数瞬後にクアットロの手に当たって、その手を弾き上げた。

しかし、それと同時に辺りに警報が鳴り響き、機械音声の艦内放送が危険を告げる。

【緊急自壊プログラムが発動されました。４５０秒後に魔力結合を全てキャンセル、４６０秒後に侵入経路を全て閉鎖、４８０秒後にゆりかごはプログラムに従って自壊を始めます。

乗員は閉鎖の始まる４６０秒時点までに、速やかにゆりかごから脱出してください。

なお、侵入経路閉鎖には従来のプログラムではなく、新たに組み込まれた魔力障壁を使用します。

繰り返します。緊急自壊プログラムが発動されました……】

その音声が響いたかと思うと、ゆりかご全体がグラグラと揺れ始めた。
玉座の間のあちこちに罅が入っていき、限界を超えた壁や天井が次々に崩れだす。

「……っ！　何をしたの！？」

なのはは揺り籠を揺らす大きな揺れに、抱きかかえたヴィヴィオが落ちないようにバランスを取りながら、クアットロに向かって大声で問いかけた。
彼女の問いに、クアットロはうつ伏せに倒れたまま顔だけを上げる。

「あはははははっっ！　何でか知らねぇが、自壊プログラムだけは動かせたんでなぁっ！
てめぇがお涙頂戴の茶番をやってる最中に、それを起動させてもらったんだよ！」

「なっ……そんなことしたら、貴女も……」

「ひゃははっ！　ああそうだなぁ！
このままなら、くひひっ、私も巻き込まれてくたばるだろうよ！！」

完全に狂っているのだろう。
クアットロは笑いながら楽しげに答える。
動かぬ体でそれでも顔だけを上げ、その狂気の宿った双眸でなのはとヴィヴィオを見ながら。

なのははそれに苦々しく眉を寄せながらも、クアットロの身柄を確保しなければと飛行しようとした、しかしその瞬間、再び凄まじい揺れが起こって、なのははその揺れに足を取られて飛び立つタイミングが少し遅れる。

自分に向かって必死に近づいてくるなのはに向かって、クアットロは狂気的な笑いを漏らしながら、なのはに向かって言葉を続けていく。
それが、今の自分にできる精一杯の抵抗だとでも言うように。

「けどなぁ、私は寂しがり屋なんですよねぇっ！！　だから……」

彼女の言葉の途中で、丁度クアットロの真上の天井が崩落する。
なのはがそれを見て飛ぶ速度を上げるが、それでも崩落した天井が落ちる速度の方が圧倒的に速い。
そして。

「てめぇらも、道連れだ」

呪詛を残し、クアットロの体は落ちてきた巨大な瓦礫に飲み込まれた。
轟音と共に土埃が巻き上がり、なのはは空中で止まって巻き上がった土煙からヴィヴィオを庇う。

「……っ」

土埃が収まった後に見えたのは、クアットロの居た辺りを完全に押し潰した瓦礫の山。
それを見て、なのはは悔しそうに唇を噛み締めた。確かにクアットロはどうしようも無い悪ではあったが、それでも自分は救う為にここに来たのに、と。

「なのはママ……」

「……大丈夫。帰ろう、ヴィヴィオ」

そんな自分に心配そうな声をかけてくれたヴィヴィオに笑いかけ、なのはは踵を返して玉座の間の入り口へと向かう。
何時までも立ち止まっている訳には行かない。
時間は刻一刻と迫っているし、自分には共に突入した仲間達が居るのだから。
全員で必ず帰らなければ、と。

「ヴィヴィオ、しっかり掴まっててて！」

「うん！」

抱きかかえているヴィヴィオに声をかけ、なのはが飛行する速度を上げる。彼女の姿はあっという間に玉座の間からは見えなくなり、通路の先へと消えていく。

玉座の間に残されたのは、瓦礫の山と、崩れかけた誰も座らぬ玉座だけ。

空席となった玉座の近くに重なる瓦礫の山……クアットロが居たその場所から、赤い液体が流れて玉座の足元を濡らす。

まるでその流れた液体の持ち主が、そこに執着していた事を示すかのように。

【プログラム開始から５０秒が経過しました。自壊まで、あと４３０秒……】

ｓｉｄｅ：―　了

if69話　『脱出　1』（後書き）

脱出開始～。
どうも、ラモンです。

脱出編その1をお届けしました。
ウザットロが……うん、まぁこんな最期になってしまいました。
凄く悩んだんですけど、こういう終わり方が一番似合ってる気がしまして、こういう悪役としては王道の最期にしました。
しかし、ウザットロは嫌いなキャラなのに、何でか寂しくなりました。やっぱり半オリキャラ化してた分、思い入れがあったんだなぁ、と今更ながらに自覚しましたね。

そんなこんなで、原作とは違ってゆりかごには自爆して頂きます。
なのは達は無事脱出することが出来るのか！？
……というか、これクロノ君たちの見せ場無くしちゃう感じになりますよね。アルカンシェル撃つ前に自爆しちゃうんだし。
……クロノ君。ごめんね。

しかし、今回は自爆までの時間設定をどうするか悩みました。
長すぎても駄目だし、短すぎても駄目……なので、個人的に一番長すぎず短すぎない8分という結論に。
どうでもいい情報でしたね（笑）

さて、いよいよ次回の『脱出　2』を持って、最終決戦編は全て終わりとなる予定です。もしかすると、脱出編が3つ目まで伸びてしまうかも知れませんが。
その後は後日談を書き、そして完結と相成ります。

完結までのあと少しの間、どうかお付き合いくださいませ。

それではまた、次の話で～。

if70話　『脱出　2』

「何なんですかァ、君達はァ！？　俺の事を殺す気なンですかァッ！？」

「わ、悪かったわよ……」

「ごめんね、つい……」

「“つい”で殺されたら堪んないンですけどねぇっ！？」

全員を上からどかして正座させ、説教をかます俺。

いや、まぁスバルは結局まだ離れてくれてないんで、いまいち格好つかないけど。

それはともかく、とりあえずは説教だ。

【緊急自壊プログラムが発動されました。４５０秒後に魔力結合を全てキャンセル、４６０秒後に侵入経路を全て閉鎖、４８０秒後にゆりかごはプログラムに従って自壊を始めます。

乗員は閉鎖の始まる４６０秒時点までに、速やかにゆりかごから脱出してください。

なお、侵入経路閉鎖には従来のプログラムではなく、新たに組み込まれた魔力障壁を使用します。

繰り返します。緊急自壊プログラムが発動されました……】

そう思ってまた口を開こうとした時、不意にそんな艦内放送が流れてきて、俺は一旦説教を中断。
はて？　自壊プログラムってなんだろうな、と考えてティアナ達と顔を合わせる。
……うん。いや、何となく想像はつくけどな。

「自壊プログラム……って何だ？」

「自爆する、ってことじゃないかな？」

「まぁ、名前からして多分そんな感じよね」

「４８０秒ってことは、８分ですか」

「しかも、４５０秒後には魔力が使えなくなるみたい」

「それに、出入り口も封鎖するって……」

「つまりはそれまでに逃げられなきゃ巻き込まれて終わり……か」

「「「「「……」」」」」

うん。ボケはここらでいいだろう。

「「「「「自爆ぅぅぅぅっっっっ！？」」」」」

俺達６人の声が通路に響く。
ちょっ、いきなり急展開、しかもテンプレすぎるだろ！？
何だよ自爆って！？　しかもいきなりゆりかご全体が揺れ始めて、それっぽい感じ出してるし！！

「ど、どどどどうしようハヤト！？」

「おおお落ち着け！　まだあわわわわ、あわ、慌てる時間じゃない！！」

「はわわーーーっ！？　ヴォ、ヴォルテール！　ヴォルテールーーーッ！！」

「キャ、キャロも落ち着いて！　えと、こういう時は……ど、どうしたら！？」

「あーもー！　ちょっと落ち着きなさいよアンタ達！
慌てても仕方ないでしょ？　まずはなのはさんとヴィータ副隊長に連絡を取って、指示を貰うの。
もし２人と連絡が取れない時は、２手に分かれて２人のところへ。いい？
ギンガさん、私がなのはさんと連絡を取りますから、ギンガさんはヴィータ副隊長の方をお願いしていいですか？」

「うん、任せて」

絶賛大混乱中の俺、スバル、エリオ、キャロの４人を尻目に、ティアナとギンガは冷静に高町隊長たちと連絡を取ろうと話し合って

いる。
何でお前らそんな冷静なの!?　自爆ですよ自爆!?
きゅっとしてドカーンですよ!?

「だからって、慌てても仕方ないでしょ。あたしだって、一応これでも焦ってんのよ?」

「おぉう……ティアナ、立派になって。おじさんは嬉かとよ……」

「アンタはあたしの何なのよ……」

通信を繋いでいるティアナが、人の言葉にガックリと肩を落として溜息を吐きやがった。
そんな態度に「ノリ悪いわー」と思った瞬間、俺達の後ろから聞き覚えのある声がする。

「おーい、皆ーっ!」

「……?」

その声に振り返った俺の目に入ってきたのは……。

「八神部隊長!」

こっちに向かって手を振っている、２Ｐカラーっぽい色になった八神部隊長だった。
……なんで２Ｐカラー？

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ７０話　『脱出　２』

「皆、大丈夫……」

隊長は近くまで飛んでくると、俺たちの様子を見ながら降りる。
そして、スバルに抱きつかれたままの俺を見て、にっこりと笑う。

「……みたいやな」

「あの、部隊長。どうしてここに……？」

「皆の応援やったんやけど、ちょっと遅かったみたいやね」

俺の方を見て苦笑する部隊長。
俺からすれば、来てくれただけで嬉しいんだけどな。

「部隊長、ヴィータ副隊長が1人で駆動炉の方に……」

ギンガの不安げな声に、部隊長はちょっと真面目な顔になって「大丈夫」と頷いた。

「ヴィータは無事や。ちょっと怪我しとったから、私が一緒に来とった航空隊の人らに任せてきた。
なのはちゃんは分からんけど……私が今から迎えにいくとこや。せやから、皆は先に脱出……って、そういう訳にもいかへんのか」

俺達に脱出するように指示しようとして、部隊長が困ったように眉を寄せた。
そう、実際脱出しようにも手段が無いのだ。
ゆりかごは空に浮かんでいる訳で、脱出するにはどうしても飛行手段が必要になる。そして残念ながら俺を含め、ここに居る全員が陸戦魔導師。空なんか飛べるワケもない。

一応フリード（大）に乗ることは出来るだろうが、それも多くて3人。
流石に全員はフリードが飛べないだろう。そうなると、どうしても部隊長や高町隊長など、空を飛べる人に抱えてもらう必要が出てくるワケだ。

「時間もあらへんし……しゃあない、皆はここから一番近い入り口を確保してもらおか。

そんで、私となのはちゃんが戻ってきたら、一緒に脱出……って、あ！」

「？」

俺達の後ろを見ながら、部隊長が声を上げる。

その声にまた振り返ると、今度は部隊長が来たのとは反対側。つまり玉座の間があった方向から、少し煤けた白いバリアジャケットを着た高町隊長が飛んでくるのが見えた。

何というナイスタイミング。ご都合主義の片鱗を見た気がする。

「なのはちゃん！」

「はやてちゃん！？　何でここに！」

「みんなの応援や！　ところでなのはちゃん、クアットロは？」

「……」

クアットロの事を部隊長が尋ねると、高町隊長は目を伏せて頭を横に振った。

それで、何となくだが俺も他の全員も、何があったのかを察した。

……何だかなぁ。まだプログラムが残ってんのか、アイツの事を『姉様』だと思ってる自分が居て、無自覚のうちに胸が喪失感で一杯になる。

俺自身は、そこまで悲しくないっていうのに。

「……っ」

あーもう！　なんか涙出てきたし！
どんだけ悲しいんだよ俺（アイン）！！

“姉”としてクアットロを慕っていた“アイン”としての俺。
“敵”としてクアットロを嫌っていた“ハヤト”としての俺。

そんな“俺”と“アイン”の、クアットロに対する正反対の感情が、俺の中でごっちゃになってワケわかんねーことになってやがる……くそっ。

高町隊長達には見えないように、こっそりと腕のところで涙を拭う。

最後の最後まで、厄介なことしてくれやがって、あの野郎が。

「そっか。とにかく、細かい説明は後や！
時間もあらへんみたいやし、なのはちゃんと合流できたならさっさと脱出せな！」

【自壊プログラム作動から１８０秒経過。自壊開始まで、残り３００秒です】

けど、時間は俺の感情が整理できるのを待っちゃくれない。
気を取り直した部隊長の言葉を肯定するように、再び時間をアナウンスする艦内放送。

「フォワードの皆、走れる！？」

「「「「「「はい！」」」」」」

「ほな、私が先導するから着いてきぃ！！」

そう言って部隊長が踵を返して飛び、スバル達が全員その後に続いて走り出す。

スバルも流石にこの状況で引っ付いてるのはマズイと思ったのか、離れて自分の足で走り出した。

俺もその後に続こうとして、その前に高町隊長が来た方向……玉座の間の方に視線を送る。

「……どうか、安らかに眠ってください。“クアットロ姉様”」

呟いた言葉は、多分“アイン”としての俺の、最後の言葉だったんだろう。

それを言った途端、何か気分が軽くなった。

俺はそれ以上何も言わず、踵を返してスバル達を追いかける。

……ったく、何で俺がこんな感傷的にならなきゃいけねーんだっつーの。

【自壊プログラム作動から１９０秒経過。残り２９０秒です】

そんな益体もない事を考えていた俺を急かすように、再び艦内放送が流れる。くっ、１０秒おきにアナウンスしてくれるとか、何て親切なんだ！

出来れば画面の右上あたりにタイムカウンターを表示してくれ！

とか何とか馬鹿みたいなことを思いながら走っていると、思い出したようにスバルが自分の左手の薬指に嵌めていた銀の指輪――ブレイブハートを外して俺に投げた。

「ハヤト！　ブレイブハート、返すね！」

「おう！」

それを受け取って、走りながら自分の指に嵌める。

よう、久しぶり……になるかな？　相棒。

《　はい。無事に帰ってきてくださって、何よりです。マスターハヤト　》

「おう、またよろしくな。ブレイブハート」

《　よろしくお願いします。マスターハヤト　》

相変わらず冷静で嬉しいよ、相棒。
なんて思いつつ、ブレイブハートを嵌めた左手を握る。
さて、後は脱出するだけだ。ガジェットも動かなくなってるみたいだし、急げば何とか……！
ここまで来たんだ、ちゃんと全員で脱出しねぇとな！！

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

【自壊プログラム作動から４００秒が経過しました。自壊開始まで、残り８０秒。
４５０秒が経過した時点で魔力結合がキャンセルされます。乗員は急いで避難してください】

「だったら自壊プログラムやめろっつーの！！」

「全くよっ！」

無機質な艦内放送に毒づきながら、ハヤト達が走る。
しかし、やはりダメージを負ったその足取りはやや重く、必死で走っているつもりでも、思っている程に速度が上がらない。

出入り口までの距離は、本来なら全員が余裕を持って辿り着ける程だったが、ハヤト達の速度が上がりきらないせいで、じりじりと時間が迫ってきている。

残り時間は、このままの速度でギリギリ間に合うかどうか、というところだろう。

「あとちょっとや！　皆、頑張って！！」

先導するはやてがハヤト達を振り返り、励ます。

事実、彼女がゆりかごに入ってきた入り口までは残り２００メートル程度。このままの速度で行けば、ギリギリ障壁が張られるよりも先に外に出れる筈だった。

しかし、そんな時に限って、起こって欲しくない事が起きるもの。

「きゃっ！？」

「キャロッ！！」

疲れとダメージで足が上がらなくなっていたキャロが、通路に投げ出されていた？型の巨大なアームに足を取られて転んでしまう。

そんな彼女の小さな悲鳴と、エリオが出した声に全員の足が止まり、そちらを振り返る。

けれどキャロは直ぐに立ち上がって再び駆け出した。

「大丈夫ですっ！」

「わかった！　急げっ！！」

キャロの言葉にハヤトがそう答えて、また全員が走り出す。
だが、一度止まったその時間は、致命的なロスタイムとなってしまった。

【自壊プログラム作動から４５０秒が経過しました。魔力結合をキャンセルします】

「わっ！？」

「きゃあっ！？」

スピーカーから流れた艦内放送と共に、はやてとなのはの足元に生えていた魔力の翼が消える。
それと同時に、はやてはユニゾンまで解除されて、リインが彼女の弾き飛ばされてしまう。

「部隊長！」

「なのはさん！？」

「平気や！」「平気ですっ！」

「だから、みんな走って！！」

また足を止めた全員に向かってなのは達が叫ぶ。

出口まではあと１００メートルも無い。全力で走れば、まだ間に合う距離。

だからなのは達は、直ぐに飛ぶのでは無く自分の足で走り出し、ハヤト達もまた走り出す。

――が、それでもやはり、２度も止まるというロスタイムは重かった。

【自壊プログラム作動から４６０秒が経過しました。侵入経路全てを、新型の障壁で閉鎖します】

「っ！！」

ハヤト達が出入り口に辿り着く直前で、艦内放送と共に出入り口に虹色の障壁が張り巡らされた。

張られたその障壁は、クアットロが玉座の間で自分の周りに張っていたのと同じモノ。触れた者全てにダメージを与え、そして進入を絶対に許さないという、堅牢で凶悪な障壁だ。

「くっそ！」

目の前で張られた障壁に、ハヤトが悔しげな声を漏らす。

反射的になのはが砲撃でその障壁を壊そうとしたが、魔力が結合出来ない状態なのを思い出したのか、彼女もまた悔しそうに歯噛みした。

「別の通路を……」

「探してる時間は無いで！　何とかこの障壁を突破せな……！」

「ならっ……！！」

道を戻ろうとしたティアナを、はやてが呼び止める。
そして、ギンガが障壁を叩き割ろうと拳を上げて突撃した。

「！　駄目、ギンガっ！！」

なのはが慌てて止めるが、遅い。

「っ……きゃあああああっっ！！」

ギンガの拳が障壁とぶつかり合い、次の瞬間にはギンガの体が後ろの方に弾き飛ばされた。
クアットロが張っていた時と同じ効果を、やはりこの障壁も持っていたのだ。

「ギンガさん！」

「ギン姉！」

弾き飛ばされたギンガに、スバルとティアナが駆け寄る。

彼女のバリアジャケットはボロボロで、体も小さくないダメージを負っているようだったが、それでもまだ意識はハッキリとしていて、自分の意志で立つことも出来る程度ではあった。

それを確認して、２人は安堵の息を吐く。

【自壊開始まで、あと１０秒……】

そうしている間にも、時間の経過を告げる艦内放送が無機質に響き渡る。

なのはとはやてはお互いの顔を見合わせ、眉を寄せて呟く。

「……障壁を抜くには砲撃しかない……けど、魔力が結合出来ないんじゃ、それも出来ない」

「……打つ手無し、やな」

なのはとはやての顔に、諦めの色が混じった。

事実、どうしようもないのだ。スバルが戦闘機人モードを使った

としても、砲撃などは魔力を使っているので撃つことは出来ない。

振動破砕でならば砕くことも可能かも知れないが、直接触れなければ意味が無いという振動破砕の性質上、使ったらスバルもギンガの二の舞になってしまうだろう。

そんな危険な事を、この状況でスバルにやらせるわけにはいかなかった。

回り道をしようにも、あと１０秒では不可能だし、そもそも他の出入り口も全て塞がれている筈だ。

まさに逃げ場無し、どうしようも無い状況に追いやられてしまった。

「……」

諦めと絶望が辺りの空気を重くした時。

不意に、ハヤトが障壁の方へと一歩踏み出す。

「ハヤト君？」

「砲撃撃って、この障壁をぶっ壊しゃ、皆で脱出できるんスよね？」

「そう、だけど……でも、魔力が結合出来ないんじゃ……」

「魔力は無理でも、代わりのエネルギー結晶体ならありますよ」

「ここにね」と自分の胸を指差しながら、ハヤトはなのは達の方を振り返って口の端を持ち上げた。
全員がそれの意味するところが分からずに不思議そうにする中、ハヤトは気にする事無く障壁の方へと視線を戻しながら言葉を続ける。

「今の俺の身体には、レリックが入ってます。これを取り出してぶん殴って、そのエネルギーで砲撃を撃てば、こんな障壁ぐらい壊せる筈です」

「……っ！　そんなの、危険だよ!?」

ハヤトの提案に、なのはが悲鳴を上げた。
レリックは確かにエネルギーの結晶体。それを殴って砕き、魔力の代わりとすれば確かに強力な砲撃を撃つことが出来るだろう。

しかし、それは同時に撃った側の人間にとてつもない危険を及ぼす。
なにせレリックはロストロギア指定を受ける程のエネルギーが固まっているのだ。上手く制御出来なければ爆発を起こし、人ひとりぐらいは簡単に消し飛んでしまう。

「ハヤト君がそんな事しなくても、他に手が……」

「ンな事言ってる時間が無いでしょう!?」

既にカウントダウンは始まり、残り7秒を告げている。事実、こうしている時間さえも惜しいのだ。
それが分かっているハヤトはブレイブハートをセットアップして、自分本来の、白を基調としたバリアジャケットに身を包む。
その背にトレードマークとも言える『天上天下唯我独尊』の文字を背負い、ハヤトはしっかりと前を見据えた。
ブレイブハートの本体である杖は無く、ブレイブハートは左手の指に嵌ったまま。杖の形状を取る分のキャパシティを、全てエネルギーの制御に回す為だ。

《マスターハヤト！　危険です！！　今の貴方の身体では、不可能です！！》

セットアップしたものの、ブレイブハートもまた、叫ぶようにそう告げる。
けれど、ハヤトはそんな相棒にニヤリと笑って吼えた。

「おいおい、何しけた事言ってんだよブレイブハート！
盛り上がっていこうぜ！？　こんだけ良い場面なんだからさあ！！！

俺には無理！？　何言ってんだよ！　出来るさ！　絶対に！！
今の俺と今のお前が組んで、出来ないことなんざこの世にあるもんか！！」

ハヤトは吼える。

楽しくて仕方ない子供の様な顔で、ヒーローに憧れる子供のように笑いながら。
そんな彼に、ブレイブハートがそれ以上何も言えるワケが無い。
そんな彼だからこそ、ブレイブハートのマスターに相応しいのだから。

《……っ，……Ｙｅｓ！！　Ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ！！》

だから、彼女は答えるのだ。
それでこそ自分の主だと。
それでこそ、自分の求めた主（マスター）だと。

「ハヤト！」

楽しそうに笑う彼の名前を、今度はスバルが呼ぶ。
ハヤトが視線だけを後ろに向けると、その視線の先で、スバルはちょっとだけ泣きそうな、しかしそれ以上にハヤトを信頼している、という顔で拳を突き出して、笑う。

「やっちゃえ！　ハヤト！」

「おうよ！」

スバルの声に答え、ハヤトは自分の胸の前に手をかざす。

そうすると、胸の中から染み出るようにレリックの赤い結晶体が浮かび上がり、かざされた手の中にすっぽりと納まった。

「さぁて、と」

ハヤトは自分の手の中にあるレリックを空中に浮かべ、そこに照準を合わせて拳を引いて腰を落とし、その場に居る誰もが見たことのある構えをとった。

その構えは、彼とティアナのパートナーの、とある少女がよく使う近距離砲撃の構え。

ハヤトはその少女の技を、全てを終わらせる為の技に選んだ。

「スバル……ちょっと、お前の技、借りるぜ？」

小さな声で、こっそりと少女の名前を呟いて――

「一撃ぃっ！！　必倒ぉっ！！！！！」

裂帛の気合と共に、後ろに引いた拳をレリック目掛けて繰り出した。

「ディバイィィィン、バスタァァァァァァッッッ！！！！！！」

彼の咆哮と共に突き出された拳によってレリックが砕かれ、砕かれたレリックは一瞬赤いエネルギーの塊に変換された後、砲撃として撃ち出される。

真紅の砲撃は障壁へとまっすぐ飛んでいき、虹色の障壁にぶつかって激しい火花を散らす。

しかし、ありえない程の破壊力を持ったその砲撃を受けても障壁は壊れない。

呆れる程の堅牢さをもって、障壁は誰一人ここから逃がすまいと、虹色の輝きを放ち続けていた。

「ぐ……ぅっ……！！」

ハヤトの口から、苦悶の声が漏れる。

人の身には大きすぎるエネルギーは、どれだけブレイブハートが上手く制御したとしても、やはり変換しきる事が出来ずに、ハヤトの体を駆け巡って負担となって彼の体に痛みを齎す。

それでも、ハヤトは歯を食い縛って足を踏ん張った。

「どうしたよレリック！！　てめぇ、腐ってもロストロギアなんだろうが！！」

自分の前でエネルギーの塊となって荒れ狂うレリックに向かって、ハヤトが叫ぶ。

「だったら！　こんな障壁ぐらい、さっさと砕いてみせろぉっっ！！！」

渾身のハヤトの叫びに応えるかの如く、真紅の砲撃がその勢いを増す。

だが、それとタイミングを同じくして、ハヤトの右腕が負荷に耐え切れずに悲鳴を上げ始める。義手の上に張られていた人工皮膚が剥げ、むき出しの機械部分が露になって火花を上げる。

しかし、ハヤトはそんなことには構わない。

そうしている間にも、ギチギチと機械が悲鳴を上げ、義手は少しずつ砕けていく。

そして――

「いいいいっっっけぇぇぇぇえええええええっっ！！！」

最後の咆哮と共に障壁を真紅の砲撃が撃ち砕き、同時に彼の右腕の義手も砕け散った。

「今や！」

「みんな！　走って！！」

その瞬間を見逃さず、全員が出口に向かって駆け出す。
ギンガはティアナとスバルが両脇から支えながら、そしてなのは達は自分の足で。

「……っ！」

ハヤトもまた、倒れそうになる身体に鞭打って駆け出した。

「外に出たら、キャロはフリードでエリオとハヤト君を！
なのはちゃんはヴィヴィオとギンガをお願い！　スバルとティアナは私が回収するから！」

「わかった！」

「わかりましたっ！」

はやてがそう指示を出すのと同時に、全員が出入り口から外に飛び出す。
そして――

【カウントゼロ。ゆりかご、自壊します】

飛び出した彼女達の背後から、そんな機械音声が聞こえてくる。
次の瞬間にはゆりかごのあちこちから爆発が巻き起こり、その巨大な戦艦は瞬く間に火に包まれた。

外に出たなのはとはやては直ぐに飛行魔法を展開し、それぞれ空中に投げ出される感じになっていたスバル達を回収する。キャロもまた、即座に竜魂召喚でフリードを本来の大きさに戻し、その背にエリオと自分を乗せ、ハヤトを回収した。

「……ふぅ。何とか、脱出できたね」

「せやなぁ……ハヤト君に感謝や」

全員が無事なのを確認し、はやてとなのはが安堵の息を吐く。
ギンガには治療が必要だが、それでも全員が無事に脱出することが出来た。

もう少し遅ければ、今頃あの爆発に巻き込まれていただろう。

「……なぁ、キャロ」

そんな風に全員が安心していると、ふとハヤトの不満たらたらな声が響く。

なのは達が視線を声のした方に向ければ、そこに見えたのは――

「俺すっげー頑張ったのに、この扱いは無いだろ！！」

フリードにバリアジャケットの襟元を咥えられ、ぶら下がっているハヤトの姿。

最後の最後でいい所を見せたのに、それが台無しになるような滑稽な格好だった。思わずはやて達が吹き出したのも、無理からぬことだろうか。

「わ、私が言ったんじゃないですよ！？　フリードが自分の意志で……」

「ちっくしょー！　フリードこの野郎！　俺も背中に乗せろよ！　絶対その余裕あっただろ！　わざとか！？　わざとなのか！？　ぶん殴るぞコンチクショー！

アレか！？　３ヶ月前に『お前ならモン○ン出てきても、余裕で狩れそうだよな』とか言ったの根に持ってんのか！？　何てちっちぇ男だ！！　ん、男？　まぁいいやちっちぇ男だ！！」

じたばたと暴れながら、ハヤトが必死に訴える。
けれど、フリードは知らぬ存ぜぬとばかりに彼の声を無視してアースラに向かって飛んでいく。なのは達も、苦笑しながらその後に続いてアースラへと向かう。

こうして、後にＪ・Ｓ事件と呼ばれる一連の事件は解決した。

「ちくしょーーーーっ！　後で竜のから揚げにして食ってやるーーーーっ！！！
あ、嘘！　嘘だから口を離そうとすんなーーーーっ！？」

最後の最後に、何とも絞まらない叫びを残して。

ｓｉｄｅ：―

if70話　『脱出　2』（後書き）

脱出編、これにて完了～。
どうも、ラモンです。

いやぁ……今回も意外と難しかったです。
最初はギャグオンリーにしようと思ったんですが、そうすると前回のラストのクアットロの死が、物凄く軽く見えておかしい感じになっちゃって。かといってシリアス一辺倒は、いい加減書きたくな……げふんげふん、皆さんも読んでて疲れると思いまして。

んで、間を取ってラストはシリアス。それ以外はギャグという方向で落ち着きました。
ただ、これはこれでちょっと詰め込みすぎな感が否めないという……。
実力不足をヒシヒシと感じた今回でした。

さて、今回で一応脱出編を含め、決戦編は終了。次回からは後日談となります。
後日談は大体全部で約3～4話となる予定です。
ちなみに後日談は一部を除いてギャグしかありません。久々にとあ新らしいシナリオをお楽しみ頂けるよう、頑張っていきたいですね。

それではまた、次の話で。

※2／6　22：02　ちょこちょこっと修正しました。

ｉｆ７１話　『後日談１　“事件のその後と彼女の決意”』

ｓｉｄｅ：―

ゆりかごの内部とその周辺、そして地上本部近く……アインヘリアルという兵器周辺と、ミッド市街を主戦場としたあの事件が解決してから、１週間が経った。

地上局員達の頑張りもあり、ミッドチルダ市街にそれ程大きな被害は無かった。

最後のゆりかごの自爆による被害も、脱出したはやてが、アースラに合流していたシグナムを連れていち早く航空隊を指揮して撃墜に出向いたお陰で、奇跡的に幾つかのビルに小さな破片が当たっただけという被害に留まった。

けれど、この事件は『管理局』にかなりの影響を及ぼす事になる。

地上本部の実質的なトップだったレジアス＝ゲイズ中将と、管理局の支配者とも言われていた最高評議会全員も死。これによって、全体的な命令系統……特に地上ではかなりの混乱が起きた。

何せ管理局の最高権力者と、地上の最高権力者と目されていた人間が一気に亡くなり、レジアスの代わりに地上を率いていけるだけの人材も居なかった。

これで混乱が起きない方がおかしいだろう。

この混乱は、伝説の三提督が一時的に現場復帰して指揮を執ることで、一応の終息を見た。

もちろん一応であって、これから最高評議会を始めとしたあらゆる人事を再編成した上で、また命令系統などを一から作り直さなくてはいけないのだが、まぁ、それは時間をかけてやれば問題ないだ

ろうか。
ともあれ、今回の事件で一番被害を被ったのは管理局だったといえるだろう。

さて、次に機動六課の状況について。
こちらは比較的説明が簡単だ。語るなら『酷い』の一言。
なにせ前線メンバーの殆どが大怪我をしていて、動けるのはフェイトとシグナムのみ。はやてとリインも出動自体は出来るのだが、書類整理や事件の事実確認などに追われて実質出動は無理。

ハヤトとギンガを含めたフォワード6人は1ヶ月～4ヶ月の入院を余儀なくされ、なのはとヴィータも最低2ヶ月の入院、その後も暫くリハビリや通院をしなければいけない程だった。
まぁ、なのはは「直ぐにでも仕事に戻らなきゃ！」って言って、シャマルに怒られていたのだが。

人員が不足しているというのに、事件の中心となって動いていた機動六課にはやる事が山ほどあり、ロングアーチは毎日睡眠時間が1時間あるかないかという、地獄のようなスケジュールを送っている。その忙しさは、ワーカホリックで有名なはやてやフェイトを持ってして、「流石にキツイ」と言わしめる程。
話を聞いたティアナとギンガ以外のフォワード達は震え上がったと言う。

閑話休題。

次に、スカリエッティ達の処遇についても少し触れておこう。
スカリエッティ本人は、無期限での軌道拘置所入りが決定してい

る。だが、今回の事件についてはやたらと捜査に協力的で、取調べを行っているフェイトも驚いていたようだ。
その理由を聞けば、「興味が失せた」からしい。
もっとも、今回の事件以外の事に関しては非協力的で、知らぬ存ぜぬを貫いている。

そして彼の配下であるナンバーズ達だが、こちらは『正しい教育を選択できなかった』として、管理局が指定した海上隔離施設にて再教育を受けることになった。
ただ、長姉であるウーノだけは頑なにこれを拒否。スカリエッティと同じ拘置所に入る事を希望した。

トーレとセッテの2人も最初は拒否していたものの、ハヤトが生きている事を知ると、『アインとの再戦』を条件として、捜査協力、そして再教育を受け入れたらしい。
この話をフェイトから聞いたハヤトは、病室で「何で人の事売ってんスか!?」と大声で泣き叫んだらしいが、まぁそれはご愛嬌だろう。彼女達の他にも、ノーヴェやウェンディ、ディードといった面々も、ハヤトとの再戦を望んでいる。
まぁ、恐らくハヤトが“アイン”としての力を失っていると知れば、興味もなくなるだろうが。

ナンバーズと言えば、この中で死亡が確認されているドゥーエとクアットロについて。
クアットロの死体はゆりかごの爆発に巻き込まれ、確認は取れていない。けれど、あの状況で生き残っているとも考えられず、死亡が確定された。
そしてドゥーエだが、こちらは実に特殊な経緯があった。

ドゥーエは最高評議会とレジアス中将殺害の実行犯であり、管理

局として彼女が最高評議会に近づいた経緯、そして殺害が起きた現場の情況など、聞き出したいことが多くあった。
なので管理局はスカリエッティにドゥーエの『復元』を要求。
スカリエッティも「娘の為なら」と快くそれに応じ、彼女は見事に復元された。

しかし、ここで深刻な問題が起きた。
一度死亡した事で、ドゥーエの記憶は完全に初期状態……つまりは何も覚えていない状態になってしまっていたのだ。これでは事件の状況を聞くことも出来ず、かといって彼女が思い出す可能性もゼロではない為、管理局はドゥーエの記憶が再現される事に期待して、彼女もまた海上施設での再教育を受けることにした。現在は他の姉妹達と共に大人しく再教育プログラムを受けている。
ドゥーエの記憶に関して、スカリエッティがわざと記憶を消したのではないかという意見もあったが、本人はそれを否定。真相は謎のままである。

ルーテシアとアギトもまた、海上施設にて再教育を受けている。
ルーテシアの母であるメガーヌ＝アルピーノは管理局指揮下の病院に入院中、現在意識覚醒に向けての治療中。
２人とも積極的に再教育プランに従っているとの事。

そして最後に、ハヤトの体についてだが――

ｓｉｄｅ：―　了

「それじゃあ、ハヤト君の体について説明するね」

病院の一般病棟、ちゃんとした診察室をひとつ貸しきった状態で、色んな資料とか図が書かれたホワイトボードの前に立つアテンザ技官が、コホンと軽い咳払いをして口を開く。

アテンザ技官、なんでこんなノリノリなんだろうか。ちゃんと白衣まで着てるし。

……まぁ聞かないでおこう。

とか思ってると、アテンザ技官がホワイトボードに貼られた資料を指しながら口を開く。

「自分で分かってるかも知れないけど、ハヤト君の体は色んな改造をされてしまっているの。

遺伝子操作、戦闘機人への肉体改造、それからＩＳと固有武装に関する事で色々とね」

「はい。まぁそれは何となく」

俺が頷くと、アテンザ技官は最初に指した資料の隣ある図――俺の全身スキャンの結果を示したもの――を指して、少し申し訳なさ

そうに目を伏せた。

「……残念だけど、私達じゃハヤト君を元に戻してあげられないの。出来るとしたらスカリエッティだけなんだけど……協力は得られなかったから。

勿論、これからも元に戻す方法は探していくけど、現時点では何も出来ないの」

そう言って、技官は「ごめんなさい」と頭を下げる。

さすがに頭を下げられるとか予想外すぎて、俺は慌ててアテンザ技官に向かって言葉をかけた。

「いや、そんな気にしないでくださいよ。俺、別にそこまで気にしてませんから！」

「でも……」

「そりゃ確かにショックじゃないって言ったら嘘ですけど、そんな悲観もしてねーッスよ？

“こうなった”お陰で、またここにこうして戻ってこれたんですから」

そう、元を正せばスカリエッティのせいなんだが、まぁとりあえずそれは置いといて。

アイツが俺を戦闘機人にしたことで、また俺は機動六課に戻ってこれた。だからまぁ、そこまで悲観はしていない。気にしてないワ

ケじゃないけどな。

「それにほら、左目も見えるようになってますし」

言いながら自分の左目を指差す。

戦闘機人に改造される前に潰れた左目は、ちゃんとした義眼が入って見えるようになっている。

あの時の戦闘の影響かなんだか知らないが、瞳の色が赤くなったまま戻らなくて、ヴィヴィオとお揃いになっているのがちょっと気になるが。

「だからまぁ、気長に待ちますよ。悪いことばっか考えてても、仕方ないですし」

「ハヤト君……」

「それに、やっぱ憧れるじゃないですか！　敵に捕まって改造された俺！

そしてその洗脳から無事抜け出した俺はその力を使って、襲い来る組織からの刺客をちぎっては投げ、ちぎっては投げ……！　最後には敵の大首領を倒して、俺が世界に平和を齎す！！」

「……あ、あはは」

ヒーローモノの王道展開だよなぁ。

あぁ、楽しみだ。退院したら始まるであろう俺無双！！

ティアナ達5人を相手にあれだけ無双出来たんだ、きっと高町隊長とかも指先ひとつでダウンだろ！　そしたら隊長が「私に勝った男の人なんて初めて……ポッ」とか言ってもうね……ぐへへへへ。

「あ、そうそう。ハヤト君に言っておくことがあったんだった」

「げへへ……え？　何スか？」

「うん。ハヤト君の戦闘機人としてのＩＳと固有武装なんだけど、もう使えないんだ」

「……はい？」

何か今、技官の可憐な口から凄く切ない言葉が聞こえなかった？　気のせいだよね？　気のせいだって言ってくれ。

「ハヤト君のＩＳ『ミラー』と固有武装『ライト・トゥ・クリエイト』は、どっちもレリックからの莫大なエネルギー供給を前提とした仕様だったの。

ほら、ハヤト君の中にあったレリックは脱出した時にハヤト君が壊しちゃったでしょ？

それに固有武装が装備されてた右手も壊れちゃったし……だから、もう使えないの」

「……え、マジですかそれ？」

右手の固有武装が使えないってのは、まぁ右手の義手がぶっ壊れた時に予想してたけど、何？　ＩＳも使えないの？　戦闘機人になったのに？
ちょっと混乱している俺をよそに、アテンザ技官は説明を続けていく。

「うん。それにハヤト君自身の身体能力も、レリックからのエネルギー供給が前提でのスペックだったみたいだから、今はレリックがあった時よりも数段力は落ちてるだろうね。
使える魔力なんかも、ハヤト君本来の魔力だけになっちゃうかな」

「……つまり、どういうことだってばよ？」

恐る恐る尋ねる。
いや、多分返ってくる答えはわかってるんだ。
ただ、それを自分が認識したくないだけで……。

「簡単に言うと、今のハヤト君は体がちょっと丈夫になったくらいで、前と変わらないハヤト君だね」

「前と変わらない？」

「うん」

「つまり、陸戦Ｂのまま？」

「そうなるかな」

ハハハ。そんなまさか。
だって仮にも全身改造ですよ？　多少スペックが落ちたとしても、その程度な訳が……。

「うーん、確かにスペックだけなら凄いんだけどね。レリックのエネルギーを運動エネルギーに変換して動くことを前提だから、ハヤト君本来の魔力だと、どうしてもエネルギー不足になっちゃうの。もし、レリックなしで本来のスペックを出すなら、六課隊長陣ぐらいの魔力が必要かな」

「ハハッ、ワロス」

突きつけられた現実に絶望した！　隊長達と同じだけの魔力を持ってたら、そもそも戦闘機人になる意味ねーから！！　何だよもう！　せっかく改造された俺のヒーロー物語を夢見てたのに！！
折角義眼になった左目のお陰で、金髪オッドアイとか中二病ヒーローっぽい容姿になったのに、実力伴わないんじゃ意味ないじゃねーかちくしょう！！

くっそ、こうなったら！！！

「え、ちょっ、ハヤト君どこに！？」

「ロストロギアの保管室です！　レリック貰ってもう一回俺の中に入れます！」

「えぇぇっ！？　だ、駄目だよハヤト君！　それ、犯罪よっ！？」

「無理を通せば道理が曲がる！！」

「曲がらない！　曲がらないから！　捕まっちゃうから！」

「止めないでくださいアテンザ技官！　俺は、俺は最強主人公として生まれ変わるんだぁぁ！
そして俺だけのハーレム！　夢のパラダイスをぉぉぉぉっ！！！！」

「け、警備員さん！　警備員さーーーんっ！」

その後、俺はアテンザ技官に呼ばれてやってきたガチムチの警備員によって取り押さえられた。ちなみにこれが原因で、俺の入院期間が１週間ほど延びたんだが、まぁそれはこの際置いておこう。
取り押さえられること１０数分。
ようやく落ち着いた俺は、アテンザ技官の前の椅子にまた座って説明の続きを受けていた。
警備員さん達は外に出て行った。また呼ばれたら困るので、今度は自重しよう。

「もう大丈夫？」

「すいません、俺無双が出来ないと聞かされて絶望しました」

「……ハヤト君って、変わってるよね」

「そんな誉めないでくださいよ。照れるじゃないですか」

「……はぁ。何かもういいや。最後に、ちょっと重要なお話しをするね」

溜息を吐いた後、技官の顔が真面目になる。

何で溜息を吐いたのか聞きたいとこだが、今はとりあえず俺も真面目に聞こう。

「ハヤト君の体をくまなく検査した結果、今のところ目立った問題はありません。

ただ、戦闘機人としての改造だけでなく後天的な遺伝子操作まで受けた以上、今後問題が全く起きないという保障も無い。だから、月に1回、必ず私のところで定期健診を受けて欲しいの」

「月1って、結構な頻度ですね」

「それくらい何が起きるか分からないって事。ハヤト君も、もし体に違和感を感じたら、直ぐに私のところに来てね？　すぐに検査とかを手配するから」

「……はい」

そう言われて、やっぱり自分が以前の自分とは違うって思い知らされる。

まぁ、別にそれについて悲観する気は無いんだけど、ちょっとだ

け寂しいわな。
……やめやめ。暗く考えても仕方ない。

「ま、仕方ないッスね。オッドアイになって、俺のイケメン度が上がっただけで、良しとします」

「それはそうとして、右腕の具合はどう？」

流された！　アテンザ技官に流された！
畜生わかってるよ！　オッドアイになった程度でイケメンになれる訳ないですよね！
けどもうちょっと構ってくださいアテンザ技官！
兎は寂しいと死ぬんですよっ！？

「それ迷信だよ？　で、右腕の具合はどうかな？」

「……ぐすん。あー、右手ッスか？　まぁ、悪くないです」

涙を呑んで技官の問いに、“右腕を”動かしながら答える。
これは、３日前に取り付けられた新しい義手。固有武装なんてついてない、普通の義手だ。
人工皮膚で覆われているから、一応は普通の腕に見える。けど、やっぱり動かすと機械音が鳴るし、まだ少し違和感はある。
けど、日常生活には支障がない程度には慣れてきた。
もう少し時間が経てば、前と全く変わらない……いや、前よりも細かく動かせるだろう。

ゲームがさらに上手くなるよ！　やったねたえちゃん！

「そっか。何かあったら言ってね？　すぐに調整するから」

「は～い」

俺はアテンザ技官に間延びした返事をして、椅子から立って診察室の入り口に向かう。

さて、病室に戻ってリハビリという名目でゲームでもしましょうかね。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

管理局地上中央本部を見渡せる墓地。

そこで、２人の人間の隊葬が行われようとしていた。

横並びに置かれた２つの棺。その棺が運ばれる道の両側に、管理局の局員達が並ぶ。その中には、オーリスやシグナム、陸士１０１部隊隊長のミハエルなどの姿も見える。

その場にいる全員が背筋を伸ばし、手に持ったデバイスを構えて、大きく掘られた穴へと運ばれていく棺を見送る。運ばれていく棺に

は、それぞれの棺に納められた人間の名が刻まれていた。
刻まれている名は、『レジアス＝ゲイズ』と『ゼスト＝グランガイツ』。

地上本部の実質的なトップと言われたレジアスはともかく、何故スカリエッティ側……つまりは敵対していた側のゼストまでがここまで大々的な隊葬をされるのか。
それは、オーリスがレジアスと共に彼の葬儀も、と地上のお偉方を説得して回った結果だった。
レジアスの為にと各所に頭を下げ、異例とも呼べるこの隊葬を実現させた。その理由を聞かれた時、オーリスは短く「きっと、父も望んでいたでしょうから」とだけ答え、それ以上は答えなかったという。

やがて、棺が穴の中に納められ、その上に土がかけられていく。
2人の棺は隣り合うように埋められ、直ぐに完全に土の中へと埋められる。

「……全員、デバイス掲げ！」

棺が完全に埋められたのを確認し、ミハエルが声を張る。
彼の声に伴って、その場にいた局員達が自分のデバイスを天に掲げた。

「地上の守護者、レジアス＝ゲイズ中将！」

ミハエルがこの場にいる人間達を代表して、別れの言葉を告げる。

「己が正義を貫いた、騎士ゼスト＝グランガイツ！」

続いたゼストへの別れに、何人かの局員が少しだけ驚いた顔をした。

仮にもここは管理局の公式の隊葬だ。棺を共に埋めるだけならまだしも、この場に置いて敵だった人間の名を口にすることなど、普通ならばやってはいけない事だろう。

しかし、ミハエルは気にする風も無く別れの言葉を締め括る。

「地上の平和を目指した2人に、せめて安らかな眠りがあらんことを！！」

そしてミハエルが天に掲げた自分のデバイスから魔力弾を空に向かって1発だけ撃つ。

彼に続くように、並んでいた局員達も次々と自分のデバイスから1発ずつ魔力弾を撃ち出した。

「……」

ただ、シグナムは魔力弾は撃たず、自分の前にレヴァンティンを

掲げて静かに目を閉じる。
それが、彼女なりのゼストとレジアス、2人の安らかな眠りを願い方なのだ。

そして、そんな光景を少し離れた場所で2つの人影が見つめていた。
1人は紫銀のロングヘアーを揺らす少女、ルーテシア。
もう1人は、赤い髪を2つに結んでいる人形ほどの大きさの少女、アギト。

2人は監視役の局員と共にではあったが、この葬儀への参加を許されていた。
シグナムからルーテシア達の事情を聞いたはやてが地上に働きかけ、そういう風にはからったのだ。
もちろん、近くには行けずにこうして遠くから見守ることしか許されなかったが、それでも、2人ははやてとシグナムに深く感謝していた。

自分達とずっと一緒にいてくれた恩人で、家族だった人の葬儀に出られたのだから。

「うぇぇぇ……旦那ぁぁぁ……」

アギトはルーテシアの肩に乗って、地面に埋められたゼストの棺を見ながら大粒の涙を零していた。
何度も何度もゼストの事を呼び、その度にまた涙を流す。

下手をすればルーテシアよりもゼストを慕っていた彼女だからこそ、なのだろう。

「……」

対して、ルーテシアは小さな手をギュッと握ったまま、涙は零さないでいた。
表情はどうしようもなく泣きそうでも、決して泣かずにゼストの葬儀を見守っている。

「ルールーぅ……旦那がぁ……」

アギトがルーテシアの頬に寄り添って涙を流す。
そんな彼女を優しく撫でながら、ルーテシアは小さく呟く。

「ねぇ、アギト」

「ぅえ……？」

呼びかけられたアギトが顔を上げて、ルーテシアを見る。
すると、見上げたアギトの視線の先で、彼女は笑顔を作っていた。
目には涙が溜まって、頬を引き攣っていて酷く不恰好ではあるが、それでも、笑っていたのだ。

「私、もう泣かないよ」

零れそうになった涙を自分の腕で拭いながら、ルーテシアは震える声でハッキリと宣言した。

「ゼストは命がけで、私を『笑って暮らせる世界』に連れ戻してくれた」

拭った涙は、それでもすぐにまた溢れて、今度こそ目から溢れて頬を伝う。

でも、それでもルーテシアは笑う。どれだけ不恰好な笑みでも、必死に笑顔を作る。

それが――ゼストが自分に望んだことだから。

「だから私……もう、泣かない」

小さな手を力一杯に握って、まっすぐ前を見て言葉を続ける。

まるで、そこに居るゼストに向かって喋っているかのように。

「そして、絶対にゼストのぶんも幸せになって、ゼストの分も笑うって決めたの。

それが……多分、今の私がゼストの為に出来ることだから」

「ルールルー……」

アギトは、驚いていた。
彼女の知っているルーテシアは、こんなに強い瞳をしていただろうか。
こんなにハッキリと、自分の意志を口にする子供だっただろうか、と。

「……あ〝あ〝、もぢろんだ！　ルールルーなら、ぜっだいにじあわぜになれるっで！！」

だから、アギトも自分の涙を拭いて笑顔を返す。
言葉は鼻声で、目は真っ赤で涙が溢れている。でも、アギトも笑う。ルーテシアと同じように。

そして、ルーテシアは空を見上げる。
最後の別れを、彼に伝える為に。

「ありがとう、ゼスト。私……何があっても負けないから。ゼストの分も頑張るから」

呟く声は掠れていて、笑顔は酷く不恰好で。
でも、そんな彼女の浮かべる笑顔は、何よりも美しくて。

「――バイバイ、　　」

見上げた青空は、彼女のこれからを示すように、どこまでも澄んで広がっていた。

ｓｉｄｅ：―　了

if71話　『後日談1　“事件のその後と彼女の決意”』（後書き）

説明&スーパーお嬢タイムでした。
どうも、ラモンです。

説明しなきゃいけないこと多すぎっ！
何か自分で増やした気がしないでもないですけどね、ドゥーエとか。
彼女を復活させたのは、私的に普通ならこうすんじゃね？　と思ったからなんです。

ドゥーエ姐さんは、三脳とレジアスを殺害した実行犯。
ライアーマスクを使ったとはいえ、三脳に近づいた経緯とか、その他にも色々聞かなきゃいけないことあっただろうし、そういうのを聞く為にも、普通なら事情聴取のために復活させるべきだろ。と思いまして。

え？　こじつけ？　すみませんその通りです。

ハヤトは「普通の人」から、「ちょっと頑丈な普通の人」にクラスチェンジしました。独自理論展開しまくりのこじつけでしたが、皆さんついてこれましたかね？（汗）
ハヤト無双なんて、もうありえない話ですよ。
だってハヤトですもん。

ちなみに、ハヤトの目はヴィヴィオと同じ緑っぽい青と赤のオッドアイになっています。
ハヤトの瞳の色も、こういう風にする伏線だったんですよ！
……すいません後付です。

そして最後にスーパーお嬢タイム。
前半との落差に自分で驚きました。最後どんだけ重いんだよ！（笑）
まぁ、旦那の葬儀とかはちゃんと書きたかったので、シリアスのやり収めという事で真面目に書いてみました。
前半とのギャップが酷くて、ホントすいません。
そうそう、ルールーの最後の台詞が空白なのは、誤字や脱字ではなくわざとです。
あそこで彼女がゼストを何と呼んだのか。それは、皆さんがそれぞれ頭の中で思い描いた言葉が、貴方だけの正解です。
……くっさ！？　何この台詞くっさっ！？ｗ

なんか今回謝ってばかりだなぁ……。
さて、次回は後日談その2。ハヤト達の入院風景を書こうと思います。
そしてその3あたりで告白の返事をさせて、そして最終話……という流れになりそうです。
ナンバーズは……すいません、スバルルートでは空気でお願いします。
仲直りさせる方法が思いつかなくて……。

それではまた、次の話で。

if72話　『後日談2　“姉と妹は偉大です（色んな意味で）”』

「ハヤトォ～、ハヤトォ～♪」

「姉ちゃん。離れて」

「なっ！？　ひ、ひひひ酷いぞハヤト！　お前はお姉ちゃんに弟分不足で死ねと言うのか！？」

「いや、そうは言わないけど、ホラ。俺、今日まだシャワー浴びてないから汗臭いだろうしさ」

「お前の匂いなら、お姉ちゃんはドンと来いだ！　ハヤトの匂いだけでご飯10杯はいけるぞ！」

「やめて姉ちゃん……身内として本気でやめて……」

俺に擦り寄ってくる姉ちゃんにげんなりしながら、そう呟く。

ちなみにね、姉ちゃん？　ここって一般病棟だから。しかも個室じゃないから、周りに他の入院患者さんとか居るからね？　すっごい注目されてるからね？

いや、まぁ居るって言っても、同じフォワードの面子なんだが。

俺達の怪我はそれなり酷いんだが、なにぶん今俺達が入院しているミッド中央病院は、先日の事件のせいで満員御礼。いくら局員と言えども個室なんてそうそう入れて貰える訳が無い。

……とはいえ、男女が同じ病室ってどうなん？

「大丈夫だハヤト。私はお前が望むなら、衆人環視の中でいたす事も嫌ではないぞ！」

「何する気ですか！？　つーか、姉ちゃんの病室は全然別の場所で、しかも姉ちゃんは絶対安静の筈じゃなかったの！？　何でこの病室に毎日毎日くんの！？」

「愛ゆえに！」

「答えになってねーーーーっ！！！」

まぁ、男女が同じ病室云々は置いとくとして、最近ホント困ったもんだ。何がと言えば、今も俺にすりすりと頬ずりしているハヅキ＝ロックウェル……つまりは俺の姉ちゃんがだ。

姉ちゃんは両腕の開放性の複雑骨折に加え、全身のあちこちを骨折してたり内臓にも凄いダメージがあったりと、間違いなく今回の事件で一番の重症を負っていた。

一時期なんて、ガチで死の淵を彷徨ってたくらいだ。

なのに、何でこの人はたった1週間で、自分の足で歩き回れるくらいに回復してんの？

つーか体中包帯まみれなんだから、ちゃんと寝てようよ姉ちゃん！！

人間やめてんの？　俺達の中で一番怪我が酷かったギンガとか、まだ寝てなきゃ駄目なんだよ？

「弟成分が補給されたお姉ちゃんは、回復力が常人の７８倍になる

んだぞ、ハヤト！」

「いやいやいやいや、ありえねーから」

「何を言う！　信じられないならば、証明するからもっとお姉ちゃんとスキンシップしよう！！」

「いやいやいやいやいやいや、意味わかんねーよ姉ちゃん」

どんな理屈ですかお姉様。
そんな理由で怪我の回復が早くなるなら、医者いらないから！

「……仲いいのね、アンタんとこは」

「ねー。ラブラブだぁ」

「ティアナにスバル、この状況を見て本当にそう思うなら、眼科に行ってこい」

「何を否定することがあるんだハヤト！　私とお前は、子供の頃からずっとラブラブじゃないか！！」

「姉ちゃんはちょっと黙ってて。話がややこしくなるから」

苦笑いしながら楽しそうにこっちを見ているティアナとスバルを睨む。
姉ちゃんが嫌いなワケじゃないんだが、この人のスキンシップは

度を超えてるから疲れるんだよ。
明らかに姉弟ってレベルじゃねーんだもん。

「さあハヤト！　お姉ちゃんの胸に飛び込んでおいで！！」

「そんなギブスと包帯だらけの、飛び込んだら「ボキッ！」とか音の聞こえてきそうな胸に飛び込むのはゴメン被ります！！　つか、絶対飛び込んだら駄目っしょ！？」

「お前に飛びつかれて骨が折れるなら、お姉ちゃんは本望だ！！！」

「ホント勘弁してください、おねーさまっ！」

耐え切れなくなった俺は、ベッドを飛び降りて走り出す。

「ああっ、ハヤト！　お姉ちゃんを捨てて行ってしまうのか！？
ハッ！？
それともこれは、噂に聞いた放置プレイというヤツなのか！！
そうなんだなハヤト！！
そんなプレイをされたらお姉ちゃんは……お姉ちゃんはーーーーーっ！！」

後ろから姉ちゃんの声が聞こえてくるけど気にしない。つか気にしたら負けだと思う。
姉ちゃんは嫌いじゃないけど、こう毎日だと色々磨り減るっちゅーねん！！

俺の精神安定の為にも、ここは全力で逃げさせて貰う！！　つか姉ちゃんはいい加減自分の病室に戻らなきゃ駄目だろうが！　こないだも医務官の人に怒られてたんだから！！

「スバル、ティアナ！　後は頼んだーーーっ！」

「「え、ちょっと！？」」

最後にそう言い残し、俺はとりあえずいつもの避難場所へと向かうのだった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｉｆ７２話　『後日談２　“姉と妹は偉大です（色んな意味で）”』

「……はぁ。疲れた」

俺達が入ってる病室から離れたロビーの椅子に腰掛けて、溜息を吐く。

入院してから今日で２週間……最初の１週間は良かった。凄く平和だった。

だが、最近はもう毎日姉ちゃんが病室に来て、俺のひっついて離してくれない訳よ。誰だよ羨ましいとか言った奴。じゃあ代わってやるよ。つーか代わってくれ。

「んー？　お、ハヤトじゃねーか」

溜息を吐きながら俯いていると、頭の上から聞いた事のある声がした。

その声に頭を上げると、そこに居たのはバリアジャケットの帽子についてる毒ウサギが、あっちこっちにプリントされたパジャマを着ているヴィータ副隊長。

ああ、そういえば副隊長もまだ入院中だっけ。

つかそのデザインはどうなんでしょう？　とか思いつつ副隊長に答える。

「あ、ども。ヴィータ副隊長」

「何してんだこんなトコで？」

「……ちょっと、とある人からの逃走中です」

「？　ふーん。まぁガンバレ」

「うッス」

まぁ、多分そのうち見つかっちゃうんだろうけど。

俺の事に関する姉ちゃんは、ガチで人間やめてるから、匂いとか辿ってここに辿り着きそうで怖い。
……うん。考え方を変えれば、愛されてるってことなんだけどね。
今の姉ちゃんはストーカーとそんな変わらないから怖い。

「そういやお前、ヴィヴィオには会ったか？」

「え……」

何となく振られたその話題に、思わず言葉に詰まった。

「えー……あー……そのー……」

「何だ、まだ会ってねーのか？　別にもう会ってもいいんだろ？」

「そりゃまぁ、そうなんスけど……」

意外そうな顔をするヴィータ副隊長。
ヴィヴィオは事件終了当初は、体の検査とか簡単な事情聴取などで、保護責任者である高町隊長と後見人であるハラオウン隊長以外と会うことが出来なかった。
ただ、１週間も前に検査や事情聴取などは終わり、すでに会うことは自由になっている。
実際今日までに、何度かヴィヴィオと会う機会はあったんだ。
高町隊長もまだ入院中だから、そのお見舞いって事でハラオウン

隊長に連れられて何度か来てるし。
会ってないのは、その度に俺が絶対に会わない場所に逃げ回っているからな訳で。

「逃げてる？　何でだよ。おめー、なのはとフェイトを除いたら一番ヴィヴィオと仲良かっただろ」

「いやその……そこには深いようで浅い理由がございまして」

「ンだよハッキリしねぇな。何かあるなら言ってみろよ、あたしが相談に乗ってやっから」

目を泳がしていると、そう言ってヴィータ副隊長が俺の隣に腰を下ろした。
端から見たら幼女に慰められてる駄目な男にしか見えないよな、なんて思ってみる。うん、口にだしたら確実に殺されるね。
とはいえ、ヴィータ副隊長には前にも相談に乗ってもらったし、確かに丁度いいかもな。
よし、ちょっと相談してみよう。

「実は……ヴィヴィオと顔合わせ辛いんスよ。嫌われてるかも知んねーですし」

「嫌われてる？」

「ほら、俺ってゆりかごでヴィヴィオに酷いことしちまったじゃねーッスか」

「ん、あぁ……確かにな。でもありゃ仕方ねーだろ、お前の意志じゃなかった訳だしよ」

ヴィータ副隊長はそう言ってくれるけど、やっぱどんな理由があっても俺がやったって事に代わりは無いと思う訳で。だから、ヴィヴィオに謝らなきゃとは思うんだが、会った途端に逃げられそうで怖いと言うか何と言うか……。

「アレですね。仲の良い友達と喧嘩した後、何となく顔合わせ辛い感覚です」

「なるほどなぁ……ま、わからんでもねーか」

俺の言葉に何度か頷いてから、「けどよ」とヴィータ副隊長は言葉を続ける。

「だからって、逃げてて状況が良くなる訳でもねーだろ？」

「いや、そりゃそうッスけど……」

「それに……お」

「え？」

何かを言おうとして、副隊長が何かを発見したような声を上げた。
その声に釣られて視線を上げると、廊下の向こうから、ハラオウン隊長に連れられてこっちに歩いてきているヴィヴィオが視界に映った。

「やべっ……」

「いーから座ってろ」

「うごっ！？」

それを見て慌てて逃げようと立ち上がったところで、ヴィータ副隊長に思いっきり脛を蹴られた。
この人酷い！？　手加減無しで蹴ったよ！　痛いとかそーゆーレベルじゃねぇんだけど！！

「丁度いーや。あたしが一緒にいてやっから、とっとと謝っちまえ」

「いや、そんないきなり……心の準備が……つーか痛ぇ……」

「いーからあたしの言う事聞いとけ。ったく、おめーは妙なとこでビビリだなぁ……」

涙目になって抗議するけど、副隊長はニヤニヤと笑ってこっちを見るだけ。
くそぅ、何て意地悪な人だ。これからは心の中でエターナルロリ

副隊長って呼ぶからなっ！　面と向かって言ったら命の危険に晒されそうだから、心の中だけでしか言わないけど！！

とか言ってる間にヴィヴィオとの距離は回避不可能な程に近くなっている。

あーくそ、こうなったら腹括るしかないか？　でも、やっぱこう、会った瞬間に「嫌いっ！」とか言われたら流石にヘコむよなぁ……いやいや、でもちゃんと謝らなきゃだし、いやでも……。

「あ！」

グジグジと考えているうちに、ハラオウン隊長に連れられたヴィヴィオが俺とヴィータ副隊長が近くにやってきて、俺を見つけて声を上げた。

俺はと言えば、俯いて視線を合わせないままだらだらと冷や汗を流している。

ど、どう対処すればいい！？　そ、そうだ！　ここはひとつブレイブハートに念話で相談して……。

（ブレイブハート！　どうしたらいい！？）

（謝れば良いのでは？　折角ヴィータ副隊長が作ってくださった機会です。

これをムダにすれば、マスターハヤトの性格からして次の機会がいつになるかわかりませんし）

（……お前、最近言うようになったよな）

（そうでしょうか？）

くっ、味方が居ない！
でも確かに、ブレイブハートのいう事も最もなんだよな。
よし、ここは腹を括って……！

「あのな、ヴィヴィオ！」

「おにいちゃんだ～っ♪」

「うォポッ！？」

顔を上げて謝ろうとした途端、ヴィヴィオは満面の笑顔で俺の方に駆け寄ってきて、その勢いのまま俺に向かって飛び込んで、首の辺りに抱きついてきた。

「え、えぇぇっ！？」

「おにいちゃんっ、おにいちゃん～っ！」

突然の事に驚く俺をよそに、ヴィヴィオは嬉しそうな声を上げて俺の胸に頬ずりしている。
ど、どういうこと！？　俺の予想とは違いすぎるリアクションで困るんだけど！

「ふふっ、良かったね。ヴィヴィオ」

「ハ、ハラオウン隊長？　何がどうなって……」

戸惑いながらハラオウン隊長に説明を求めてみた。

だって、会った途端に逃げられるか、「嫌いっ！」って言われると思ってたんだもの。

今までと同じ……いや、下手したらそれ以上に懐かれてるよコレ!?

「ヴィヴィオね、ずっとハヤトに会いたがってたんだよ？　面会できるようになったのに全然会えなくて、凄く寂しがってたんだから」

「え、マジですか？」

「おにいちゃん～♪」

「ちょ、ちょっと待ってくれヴィヴィオ」

まだ俺の胸に頬ずりしてるヴィヴィオを一旦引き剥がす。

とりあえず、色々と聞かなきゃいけない事がありすぎる。こうして普通に接してくれてるのは嬉しいけど、理由がわからんと逆に不安になるから。

「やーの！　もっとおにいちゃんにグリグリするのー！」

「俺の質問に答えてくれたら、いくらでもさせてやっから！　だから、まずは質問に答えてくれ」

「むー……うん、約束だよ？」

引き剥がされたヴィヴィオはじたじたと暴れていたが、俺がそう言うと渋々という感じで頷いてくれた。

よし、とりあえず一旦コレでヴィヴィオは落ち着いてくれた。次は俺が落ち着こう。よし、まずは深呼吸だ。

すーはー……すーはー……うん、落ち着いた。じゃあ、早速質問するとしよう。

「あー、ヴィヴィオ？　お前、俺が怖かったりしないのか？」

「？　何で？」

「だってその……アレだ、俺、お前に酷いことしちまったろ？」

「……うん。そだね」

俺がそう言うと、ヴィヴィオの顔が曇る。

あぁ、やっぱり忘れてたとかじゃないよな。だって、俺と違ってヴィヴィオは特に洗脳とかされてた訳じゃ無いんだし。記憶だって、ちゃんとハッキリしてるだろう。

じゃあ、なんでこんな普通に？

「でもね！　なのはママやフェイトママから聞いたの。
あの時のおにーちゃんが変だったのは、悪い人のせいなんだよね？」

「ん、まぁ……そうなるけど」

「だったら、おにーちゃんがヴィヴィオの事キライになったワケじゃないんだよね？」

「ああ、別にヴィヴィオが嫌いになった訳じゃねーよ。でも……」

それでも、やっぱりアレは一応俺の意志だったワケだ。
だから、俺の事を怖がっても仕方ないと思うんだが……。

「……うー。おにーちゃんはヴィヴィオが嫌い？」

「いやいや、そんな訳ないだろ。勿論、好きだぞ？」

「なら、ヴィヴィオもおにーちゃんが大好きっ！！」

嬉しそうにそう叫んで、ヴィヴィオはまた俺の胸に頬ずりを始めた。いやいや、「なら」に繋がる理屈がわかんねーから。どうやっても会話の流れ的に、そういう結論にはならんから。
ちょっと落ち着いて考えようぜヴィヴィオ？

だって俺、この1週間ずっとそれで悩んでたんだぞ？　なのにそんなあっさり……。

「いーんだよ。子供ってのはそんなモンだ」

「いや、でも……」

「ハヤト」

ヴィータ副隊長の言葉に反論しようとしたら、俺の言葉を遮ってハラオウン隊長が俺の事を呼んだ。

その声にヴィヴィオから視線を上げると、ハラオウン隊長が少し屈んで苦笑しながら俺を覗き込んでいた。ちっ、谷間は見えな……げふんげふん。

「ヴィヴィオもね、ハヤトと会えない間にたくさん考えてたんだよ。いっぱい悩んだし、いっぱい辛いことも考えた、でも……それでもやっぱりハヤトが大好きだった。

だから、それでいいんじゃないかって私は思うな」

「……ハラオウン隊長」

「ハヤトが色々気にしちゃうのは仕方ないと思う。でも、ヴィヴィオの気持ちは分かってあげて」

ヴィヴィオの気持ち……か。ンなこと言われちゃったら、これ以

上反論しようがないッスよ。
俺と同じ……いや、それ以上に悩んだヴィヴィオがそういう結論を出したなら、俺のウジウジした言い訳なんて、軽すぎてどうしようも無いモンだから。
だったら俺に返せる答えなんて、ひとつしかないよな。

「そう……ですね。ヴィヴィオがそう決めたなら、俺が気にしすぎるのは筋違いッスよね」

「そうそう。ふふっ……これからも、ヴィヴィオをよろしくね？お兄ちゃん」

「うぃッス」

「おにーちゃん、大好きーっ！」

そう言ってより一層抱きついてくるヴィヴィオを抱き返しながら、俺は苦笑する。
……ホント、子供ってのは時々偉大だと思うよマジで。
でも、一回ちゃんと謝る事だけはしないといけない。それは、ケジメだからな。

「ごめんな、ヴィヴィオ」

「おにーちゃんがヴィヴィオを大好きなら、許してあげる！」

「何だそれ……ったく、はいはい。俺はヴィヴィオが大好きですよ

ー」

「うんっ♪　じゃあ、許してあげるー！」

言われるがままにそう言ってやると、ヴィヴィオは頬を染めて嬉しそうに笑う。

うん、これで……いつも通りだ。

「……ハヤト、おめーロリコンの素質あるよな」

おぉう。折角のいい雰囲気をヴィータ副隊長が台無しにした。

でも、大丈夫ですよ副隊長。いくらなんでも、前と後ろの区別が付かない人には欲情しませんから。

俺の恋愛対象はDカップから！　それ以下は路傍の石と同じですたい！！

「最低だな」

「最低だよ」

「あははー。おにーちゃん、さいてー」

「おぅフッ」

女性陣に揃って言葉でボコボコにされた。

ちくしょう、いいじゃないかおっぱいフェチだって！
世の男7割はおっぱいフェチなんだぞーーーっ！！

「ホント最低だなお前」

「ハヤト。私、ハヤトは逮捕したくないから、早く正常に戻ってね？」

「おにーちゃんのスケベー！」

「うおぉん……」

3人にボロクソに言われながらも、俺はちょっと安心していた。
下手をすれば、ヴィヴィオとはもう二度とこうして喋ることも無かったかも、何て思ってたからなぁ。やっぱり嬉しいよ、妹分に好かれてるってのはさ。
ああもう、こんな嬉しいなら、ちゃっちゃと謝っておけばよかった。

なんて、俺がいつも通りの、懐かしい空気にホッとしていたその時。
……唐突に。本当に唐突に“あの人”は現れた。

「みぃつけたァァ……」

「「「「！？」」」」

地獄の底から響くような声に驚いて振り返ると、そこには四つん這いになって、口から「ゴフー、ゴフー」と白い息を吐いている姉ちゃんの姿があった。

怖っ！？　姉ちゃん何それ怖いよっ！？

説明しよう。ハヅキはハヤト成分が３０％を切ると暴走してしまうのだ！」

「あ！　ナレーションぽいけど、自分で喋ってる！」

「つーか、暴走って何だよハヤト」

「姉ちゃんの事は、弟の俺にもよく分からんとです」

「というわけで、ハヤト成分を早急に補給させてくれ！　ハヤト！！具体的には唇と唇の粘液接触、もしくは×××と×××の体液交換で！！！」

「具体的過ぎるわーーーっ！！！！」

獣の様に飛び掛ってきた姉ちゃんを何とか避け、俺に抱きついたままのヴィヴィオを抱えて走り出す。

ホントあの人重傷なの!?　今の動きとかもう、完治してるようにしか見えないんだけど!?

「言っただろうハヤト！　弟成分を得たお姉ちゃんは、時に人間のスペックをオーバーできるのだ！」

「もうそれ人間じゃねーから!!」

「あははっ！　おにーちゃんがんばれーっ！」

「おめーは能天気でいいなぁ、ヴィヴィオ!!!」

ヴィヴィオを抱えながら廊下を駆け抜ける。
途中でナースの人が怒ってたけど、後で謝りますから！
今の姉ちゃんに捕まったら、色々と危ない気がする！　いやむしろ危ないから！

「ハーヤートーーーーッ!!!」

「姉ちゃんはちゃんと安静にしててくれーーーーーっ!!!!!」

「私を気遣ってくれるのか!?
おぉ、おぉ……もうお姉ちゃんは辛抱堪らんですたいーーーっ！」

「いーーーやーーーーっ!!」

俺は何度目になるか分からない叫びを上げながら、廊下を駆け抜けたのだった。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

ヴィヴィオを抱えたハヤトと、猛獣を思わせる速度でハヤトを追いかけて行ったハヅキ。
３人が行ってしまった廊下の向こうを呆然と見つめていたヴィータとフェイトだったが、不意にヴィータがフェイトに向かって呟きを漏らす。

「……なぁ、フェイト」

「ど、どうしたのヴィータ？」

「確かハヤトの姉ちゃんって、全治６ヶ月とかじゃなかったか？」

「うん。私もそう聞いてたけど……」

「……ホントか、それ？」

「……」

ヴィータの問いに、フェイトは目を逸らす。
どう見ても、さっきの動きは怪我人の動きではなく、洗練された狩人のモノ。
それこそ、フェイトやヴィータが本気で動いた時と比べても、殆ど遜色のない動きだった。あんな動きは、絶対に怪我人には出来ない筈なのだ。

「……まぁ、ホラ。ハヤトのお姉さんだし」

「……ああ」

頬を引き攣らせたフェイトの言葉に、ヴィータは深々と頷くのだった。

ちなみにこの後、ハヅキは警備員２０人がかりで捕獲され、そのままＩＣＵに放り込まれた後、婦長のありがたいお説教を１時間ほど受けたらしい。
対して追いかけられた側のハヤトは精魂尽き果て、病院の屋上で真っ白になっているところを心配して探しに来たスバル達に発見され、病室まで搬送された。一緒に居たヴィヴィオは、久しぶりにお兄ちゃんに遊んでもらったとご満悦で、その事を嬉しそうになのはに語ったという。

side:|了

if72話　『後日談2　“姉と妹は偉大です（色んな意味で）”』（後書き）

さぁ、いよいよ残すところ後わずかとなって参りました。
どうも、ラモンです。

今回はハヅキ&ヴィヴィオタイムでした。
久しぶりにハヅキブラコンモードを書いたせいで、何かもうハヅキがただの変態になってしまった……どういうことなの……。
まぁ、ハヤトのお姉ちゃんだからという事で納得してください。
何かもう、久しぶりの全部ギャグということで、私自身に歯止めが利かなくなっていた部分があります。

そしてヴィヴィオは、色々考えたりもしたけれど、やっぱりハヤトが大好きという事で、こんな感じに収まりました。
子供ってのは純粋な分、色々と偉大だと思っています。
本当はヴィヴィオが悩んでる部分も書こうと思ったんですが、まぁ、それを書くと蛇足になりそうでしたので、今回は吹っ切れてお兄ちゃん大好きっ子になったヴィヴィオのみを書いてみました。
このヴィヴィオはアレですね。「将来はおにーちゃんのおよめさんになるーっ！」とか言いそうですね。
ハヤトもげろ。

さて、次回はいよいよ後日談の最後。
皆さんお待ちかね、ハヤトとスバティアの恋に決着が！
……ややシリアスにするか、それともギャグにするか、めっちゃ悩みます。
両方書いてみて、出来のいい方を投稿しますね。

それではまた、次の話で。

if73話　『頑張んなさいよ、男の子』

最近、ふと思うことがある。

「なぁ、スバ――」

「ハヤトォォォッッ！！　今日もお姉ちゃんとラブラブしようーーっ！！」

「ぎゃーーっ！？」

いやふと思うどころか、ガチで思うことがあるんだ。
しかもかなり切実に。

「ちょっといいか？　スバ――」

「おにーちゃん！　遊びにきたよーっ！」

「……あぁ、うん」

ホントさぁ……。

「おいスバル、ちょっ――」

「ハヤト君、ちょっとリハビリ行くから付き合って」

「えぇー……何で俺がギンガの……」

「いいからいいから」

……ホントさぁ。

「スバ――」

「ハヤトさん！　ＢＳＰやりましょう！」

「私もやりたいです！」

「エリオ、キャロ……はぁ、しゃーねーなぁ」

「「わぁいっ！」」

……ホントさぁ。

「あーもー」

病院の屋上で、フェンスに体を預けて空を見上げながら溜息を漏

らす。
俺達が入院してから1ヶ月。体はもう殆ど回復したし、義手も随分と馴染んで前と同じ程度に動かすことも出来るようになった。
予定では、明後日にはフォワードの中で俺が一番最初の退院となる。
だからその前に、スバルに返事しなきゃと思って、入院してから毎日あいつを呼び出そうと努力してた訳なんだが、何でかその度に邪魔が入ってしまう。

「ワザとなのか？　そんなに俺がスバルに返事するの邪魔したいのか？」

額を右手で多いながら愚痴を零す。

「あたしに言われても知らないわよ。アンタの運が悪いんでしょ」

すると、隣にあるベンチに座って缶コーヒーを飲んでいたティアナが、呆れた声を返してきた。
何だよー、その冷めた態度はー。もうちょっとこう、慰めてくれたっていいじゃんかよー。

「知らないわよ、馬鹿。それで？　わざわざ愚痴を聞かせる為に、あたしを呼んだわけ？
そうなら、遠慮なくぶん殴るんだけど……？」

「ンなわけねぇだろが。ちゃんと相談があんだよ」

「イヤ」

「まだ言ってもいないのに！？」

あまりの即答っぷりにちょっと感心しちゃったよ。
どういう理屈だよ、まだ話してすらいないってーのに。
いいからちょっと聞いてくれって、いやマジで。

「イヤ」

「何で！？　お前俺のこと嫌い！？」

「……はぁぁぁ」

でかい溜息を吐かれました。泣きそうです。
あまりの扱いにちょっと黄昏てると、ティアナが「で？」と聞き返してきた。
お、何だ。聞いてくれる気になったのか？

「とりあえず話を聞くぐらいはね」

「サンキュー……つっても、大したことじゃないんだけどな」

そう前置きして口を開こうとしたら、ティアナが呆れたような顔で俺よりも先に口を開き、俺が言おうとしていた台詞を先取りする。

「アンタの事だから、どうせあたしに協力して欲しいとかでしょ。ハヅキさんとヴィヴィオ、エリキャロとギンガさんを、どこかに引き付けといて欲しいとか？」

「……大正解。ほんの１０分くらいでいいから、頼めるか？」

「お断り……って、言いたいところなんだけどね」

そんな風に溜息を吐きながらも、ティアナは苦笑しながらこっちを見上げる。

それから少しだけ真面目な顔になって――

「……あたしね、アンタが好きよ」

――そんな、とんでもない爆弾発言をしやがった。

「……はぁぁ！？　ちょっ、おま、何をそんな、いきなり」

戸惑いながら、あわあわと手を動かして声を漏らす俺。
そんな俺を見ながら、ティアナは楽しげに笑って肩を竦めながら言葉を続けた。

「んー……ちょっとは脈アリかな、と思って。やっぱり駄目？」

「駄目も何も……あの話の流れで、どう脈アリと思ったのか聞きたいぐれーなんだが」

「やっぱそうよねー。あはは」

軽く笑ってから、ティアナはベンチから立ち上がる。
そしてそのまま俺の近くに歩いてきて、戸惑う俺を無視して思い切り抱きついてきた。

「ちょっ！？　な、ななな……」

「……ハヤト。約束しなさい」

「は？　な、何をだよ？」

抱きつかれて慌ててる俺に構わず、ティアナが真剣な声で告げる。

「あたしをフったんだから、絶対に、スバルを泣かせない事」

「……っ！」

ちょっと掠れて震えた声で呟かれた言葉に、俺は思わず言葉を失った。

落ち着いてみたら、俺の背に回された腕は微かに震えてて、顔が押し付けられた胸元は何となく湿ってきてる気がする。……そうだよな。あんまりやりとりが軽かった挙句に、展開が急すぎだったから意識できなかったけど、俺、いまティアナの事をフったんだよな。

「ティアナ……」

思わず慰めの言葉とかを言いそうになって、思い留まる。

ンなことしたら……ティアナを馬鹿にしてるようなモンだよな。

やりとり自体は軽かったけど、ティアナだって必死だったんだ。

なら、俺がこの場でティアナに返せる言葉なんざ、ひとつしか無いだろ。

「ああ、約束すんよ。絶対に、スバルは泣かせねぇ」

「……ん。よろしい」

ちょっと満足気な声でそう言って、ティアナが俺から離れて笑う。

その目元は赤くなってたけど、それは言わないのが優しさってモンだろうさ。

何て思っているうちに、ティアナはそのまま俺に背を向けて、屋上の出入り口へと向かって歩き出す。

「１０分ここで待機してなさい。スバルの事、ここに来させるから。さっさと済ませるのよ？　ハヅキさん、そんなに長く止めてられないと思うし」

「……おうよ。サンキュ」

ドアを開けながらそう言ったティアナに、短く告げる。

そうすると、ティアナは最後にこっちを向いて笑いながら、左手を上に挙げてこう言ってくれた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～　ｉｆ７３話

「頑張んなさいよ、男の子」

そうして１０分が経った訳だが。

「……来ねぇじゃん」

現在待ちぼうけをくらっている最中であります。
スバルの奴、迷ってんじゃねぇだろうな……もしくは姉ちゃんに襲われたか……。
いやいや、流石に姉ちゃんでもそんな事は……しそうだから困る。

「ま、待つのも悪くないかぁ」

そんな風に呟いて、ベンチに腰掛ける。
ふと横を見れば、さっきまでティアナが飲んでいた空のコーヒー缶がベンチの上に置きっぱなしになっていた。あぁ、やっぱアイツも色々と一杯一杯だったんだなぁ……。
缶捨てるの忘れるなんて。

「……よっと」

そう思いながら、缶を持って出入り口の向こう側にあるゴミ箱を狙って放り投げた。
缶は綺麗な放物線を描いてゴミ箱に向かっていき、そのまま入るかと思えたんだが――

「ハヤト～……あたっ！？」

「お、大当たりだ」

――狙ってたんじゃねーのか、っつータイミングでドアを開いて出てきたスバルの頭に当たって明後日の方向にすっ飛んで行っちまった。

マジでどんなタイミングだよ……なんて感心しながら、苦笑を浮かべて腰を上げる。

そして、ドアの前で缶の当たった額を押さえて蹲っているスバルの隣まで近づく。

「あうぅ……いーたーいー……」

「悪い悪い。狙ったワケじゃねーんだぞ？　ホラ、立てるか？」

涙目のスバルに手を出して、握り返してきたスバルを立ち上がらせる。

「大丈夫か？」

「うー、ハヤト酷いよー。ちょっと遅れちゃったのは謝るけど、何も缶投げなくたっていーじゃん」

「だからワザとじゃねーって。缶を捨てようとしたら、お前が射線上に飛び出してきたんだよ」

「ホントかなぁ……？」

「おめーはどんだけ俺を信用してねーんだ」

「あてっ」

こっちをジト目で見てくるスバルにチョップを入れて、そのまま頭をぐしゃぐしゃと掻き回す。

ったく、おめーはホントに俺の事が好きなのかっつーの。少しは信用しやがれってんだ。こちとら、少し前にわざわざ1人フって、お前に返事しようって思ってるのに。

普段の行いが悪かったせいですか、そうですか。

「……えへへ」

「っと。何だ何だ、どーした？」

ちょっと自分の普段の行いを反省してると、ふいにスバルが俺に抱きついてくる。

それを受け止めてやると、スバルは人の胸元に頬を摺り寄せながら、やたらと上機嫌そうにしてる。やってる事がヴィヴィオと変わんねーし。それでいいのか15歳。

「ハヤトもうすぐ退院しちゃうから、ハヤト分を補給しておくの～」

「姉ちゃんかお前は……」

もうその台詞姉ちゃんで聞き飽きてるんですけど。
俺の退院が明後日に決まってから、何百回姉ちゃんが人の耳元で言ってたと思ってんだこの野郎。耳にタコどころか、暫く夢に見てうなされるレベルなんだぞ。
人のトラウマスイッチを押してくれたスバルには、おしおきとしてつむじをグイグイと押しておく。

「あうあう、何するんだよー」

「悪いことをした子におしおきしてるんです」

「意味わかんないよ」

「俺も自分で言ってて意味わかんなかった」

「なにそれ」

人に抱きついたまま、スバルがコロコロと笑う。
そんなスバルに軽く溜息を吐いてから、そういえば何の用事でスバルをここに呼んで貰ったのかを思いだした。しまった、何となく和んじまったじゃないか。
気を取り直して一旦スバルを引き剥がそうとするんだが、人に抱きついてご満悦なスバルを見てると、何か引き剥がすのが凄く悪いことしてるように思えてくる。

「……まぁいっか別に。このままでも」

早速の妥協。いいじゃん、好きな子に抱きつかれてるって幸せなんだもの。

「ん？　何が？」

「お前に用事があったワケですよ。ティアナから聞いたろ？」

「あ、うん。なんかティア、あたしに「ハヤトが屋上で呼んでる」って言ってから、悲壮な顔でハヅキさんの所に向かったけど……どしたの？　いきなり泣き出して」

「ティアナと俺の友情を再確認したもので」

「？　よくわかんないけど……むぅぅ」

あまりに篤い友情に涙が止まらない俺であった。

けどスバルはお気に召さなかったようで、ちょっと頬を膨らませてより一層強く抱きついてきた。

うーむ、しかし返事をするタイミングを逃した気がするな……やっぱ最初に缶がスバルに当たったのが敗因だったかなぁ。とはいえ、このままムダに時間を消費したら、姉ちゃんがすっ飛んできそうだし。

困ったな、何か切欠は無いだろうか……なんて考えていた時、スバルが不意に顔を上げる。

そして、俺の事を見て頬を染め、恥ずかしそうに笑いながら口を開く。

「えへへ……ハヤト、大好き」

……何ともまぁ、簡単に言ってくれる。一生懸命に返事を言う切欠を探してた俺が馬鹿みたいじゃん。ホントこの犬っ子には敵わないわ、と思いながら苦笑して俺もスバルを抱きしめる。

「ふぇっ！？」

耳元でスバルが驚いた声が聞こえるが、とりあえず無視。人に散々抱きついといて、何を照れてんだコイツは。まったくよぉ……こんな細っこい身体して。俺を助ける為にあんな無茶しやがって。

「俺も」

ホント、お前にゃ敵わないよ。

「俺も……お前が好きだよ。スバル」

俺だけの、愛しい愛しい女の子。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ

聞こえてきた言葉に、息が止まりそうになった。
だってそれは、あたしがずっと聞きたかった言葉だったから。

「ぁ……」

何か言おうとして、でも言葉にならない。

どうしよう。
すごく嬉しい。
嬉しし過ぎて、胸が一杯になっちゃうくらいに。

「……っっ」

それを伝えたいのに、でも言葉にはならなくて。
だから、代わりに一生懸命ハヤトの背中に回した腕に力を込める。
あたしの嬉しいって気持ちが、ハヤトに伝わるように。

「何か言えって、恥ずかしいじゃん」

ハヤトの言葉に、無理だと頭を横に振る。
こんなにいきなりなんて、ずるいよ。
あたしにだって、心の準備とかあるのにさ。

「ま、いーけど。これからよろしくな、彼女サン」

「……ぅんっ」

ああ、ホントにもう。
嬉しすぎて、ドキドキし過ぎて死んじゃいそうだよ。

「あと、返事が遅れてごめんな」

「……ううん」

そんなの、全然気にしない。
だって、こうしてあたしの事が好きだって言ってくれたんだもん。
それだけでもう、十分すぎるくらい。

「先に退院すっけど、ちょくちょく顔見にくるから」

「うん」

「お前も退院したら、２人でどっか行こうな」

「うんっ」

ハヤトの言葉に、一生懸命頷く。

そして、この嬉しさを伝えようと言葉を考えて考えて……。

「ハヤト、大好きっ」

結局、それしか言えなかった。

ｓｉｄｅ：スバル＝ナカジマ　了

スバルに抱きつかれたまま、とりあえずやるべき事は終わらせた。

終わらせたんだが……。うん、凄く恥ずかしいね。

勢いに任せて色々言ってみたんだけど、ちょっと冷静になってみると軽く悶絶モノなんですが。

「……」

スバルはスバルで、顔を耳まで真っ赤にして俺に抱きついている。
いやまぁ、顔の赤さだったら今の俺も負けてはいないと思うけどね。
ともあれ、これでようやくスバルに答えてやる事が出来た。
何だかんだで、告白されてから3ヶ月近く。
随分と待たせちまったよなぁ。
こうやって嬉しそうにしてるスバルを見ると、余計に申し訳なさを覚える。
だから、やっぱりこれからはその分も、こいつを大事にしてやらんと。

「……ああ、そうだ」

ふと思いついて、少しだけスバルを離す。
そして驚いてるスバルの顔を上に向けて、俺の事を見上げるような格好に。
そこまでやると、流石に俺が何をしようとしたのか分かったのだろう。ちょっと恥ずかしそうに視線を泳がせてから、静かに目を閉じる。

「……スバル」

一度だけ名前を呼んでから、俺もスバルに顔を寄せ――

『あ、ちょっ！　押すな！　押すなって！』

『あわわわっ！？　バランスが、バランスがっ！！』

『ちょい待ちっ！　全員で倒れてきたらさすがに……』

『やばっ！　ドアの手すりに袖が絡まって……！』

『きゃあああっ！』

――ようとした瞬間、そんな大勢の声と共に屋上のドアが開き、どんがらがっしゃーんという音を立てながら人の山が倒れこんできた。

『……あ』

倒れこんできたのは、ティアナとシグナム副隊長を除いた六課前線メンバーの全員。

それからフィニーノ陸士と姉ちゃん、ヴィヴィオ。アテンザ技官も居る。

「……」

「……」

俺もスバルも、驚きのあまり一言も喋れない。
スバルに至っては、顔がさっきの3倍ほど赤くなった挙句に涙目になっている。
うん、その気持ちすっげー分かるぞスバル。

「……」

《 Ｓｅｔ ｕｐ. 》

とりあえず俺はスバルを残して、倒れてきた人の山の前に移動。
ついでにブレイブハートも起動。バリアジャケットを身に纏う。

「……えーと、ですね」

本当にさ。何してンすかアンタ達。
部隊長とかフィニーノ陸士はともかく、高町隊長やハラオウン隊長、挙句にヴィータ副隊長まで。
思わず呆れてため息が漏れてしまう。

「何か、申し開きはありますか？」

そして俺は、出来るだけ穏やかな笑顔で、そう尋ねる。

「あわわわわ……」

「はわわわわ……」

「ガクガクブルブル……」

「ハ、ハヤト！　落ち着いて欲しいのですよっ！　リインは悪くないのですよっ！」

「ごごごめんねっ！　ごめんねっ！？」

やだなぁエリオにキャロ、ヴィヴィオにリイン曹長、あとギンガ。何をそんな怯えてるんでしょう？

俺は別に、少しもちっとも微塵も欠片も怒ってなんかいないのにね？

ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね。とか、ぜぇんぜん思ってないのにね？

「ち、違うんだよハヤトっ！　私は、はやてに無理矢理……！」

「そ、そうそう！　はやてちゃんに無理矢理連れて来られたの！　一応止めたんだよ！？」

「そうなの！　私もはやてちゃんに無理矢理連れてこられて……」

アハハハハ。隊長たちにシャマル先生まで何を怯えてるんですか？
俺がそんな心の狭い人間なワケ無いじゃないですか。別に怒ってませんって。

「あっ！　フェイトちゃん、なのはちゃん、シャマル！　人に罪を擦り付けるんはズルイで！？
３人もノリノリで覗いてたやん！！」

「ハヤトぉ～……お姉ちゃんは……お姉ちゃんはぁぁぁ……」

部隊長と姉ちゃんはちょっと黙ってましょうか。
つーか姉ちゃんは鼻水と涙拭いて。凄い顔になってるから。

「あたしもはやてに連れて来られただけだ！　だ、だからそんな怒んなよハヤト！」

「べ、別に邪魔しようとしたんじゃないのよ！？　ホントだよ！？」

「だ、だから見逃して、ハヤト君！！」

ヴィータ副隊長、フィニーノ陸士、アテンザ技官。
そうやって言い訳すると、逆に怪しいって自覚あります？
てゆーか、怒ってないって言ってるじゃないですか、イヤだなぁ。

「大丈夫ですよ。事情を聞きたいだけですから」

何だか誤解されてるようなので、自分でも驚く位に穏やかな声でそう告げる。
すると、皆に押し出されるような形で、部隊長が俺の前に立つ。

「えーと……えーとな？」

「はい。なんでしょう」

部隊長は冷や汗をダラダラと流しながら、目を泳がせる。
しかし、やがて何かに耐え切れなくなったのか、やや切れ気味の声で叫ぶ。

「こんな面白いイベント、見逃すワケにいかんやんっ！！！！！！」

「ディバインバスター」

≪　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ．　≫

『にゃあああああああっっっっ！！！！！？？？？』

次の瞬間、俺は今までで最高の砲撃を放ち、部隊長達はそれに巻き込まれて吹き飛んだ。

そして俺達はこの後、全員まとめて婦長さんにお説教を頂いたのだった。

めでたしめでた……くねーよ！！！　どんなラブコメのラストだこれは！？

ｉｆ７３話　『頑張んなさいよ、男の子』（後書き）

なにこれ恥ずかしい。
どうも、ラモンです。

恥ずかしさのあまり、恥ずか死にしました。
何このバカップル。死ねばいいのに。
悶絶しすぎて書くのに時間かかっちゃいましたよ。
……まぁ、実際のところは、元々この２人は返事をしてなかっただけですでに両想いだったから、告白に関しては結構あっさりと終わっちゃって、文量が足らなかったのが原因ですが。

そして恥ずかしさに耐え切れず、ラストはラブコメ伝統のオチにしてみました。ティアナは、まぁ当然参加させませんでしたけど。
最初はシグナムも参加してたんですけど、私の独断と偏見で参加は見送りとなりました。だって姐さんは俺の嫁だもんっ！！（えー）

ティアナはいい女マジで。略してＴＩＭ。
スバルルートのティアナは、ヴィータに次ぐいい女になって貰いました。
こんないい女をフるとか、ハヤトもげろ。マジもげろ。

さてさて、１年とちょっと続けてきたこの『とあ新』ですが、いよいよ次回で最終回となります。
多分ですが、金、土、日のどれかには投稿できると思いますので、最後までお付き合いくださいませ。
最終回だけでも予告を書いてみようと思ったんですが、いかんせんまだ内容を考えついてないので、書けませんでした（汗）
もし思いついたら、こっそりとこの後書きを編集してるかもです。

それではまた、最終話で。

if最終話　『君とずっと』

「あーあ、今日で六課も解散かぁ……」

「そうですね……やっぱり、ちょっと寂しいです」

六課の制服に袖を通しながら、そんな事を呟く。

すると、隣で同じように着替えていたエリオがちょっと寂しそうに笑う。

まぁ、何だかんだで1年間一緒に居た訳だし、俺もなんだかんだで寂しいわなぁ。

「そういえば、ハヤトさんは次の配置先って決まったんでしたっけ？」

「おう……っつか当たり前だろ。無職は勘弁だって」

苦笑しながら、エリオの質問に答える。

そういえば、次の配置先についてはまだ話して無かったっけ。

「エリオはキャロと同じトコだっけ？　相変わらず仲いいよな～……もう告白は済ませたのか？」

「え、えぇっ！？　こ、ここで告白ですかっ！？」

俺の言葉に、エリオは顔を真っ赤にしてキョロキョロと忙しなく視線を泳がせた。

あー……この反応じゃ、まだしてねぇんだな。いい加減告白しろよ。お前とキャロ、見ててこっちが恥ずかしくなってくる位にアレなんだからさぁ。

「ア、アレって何ですかアレって！」

「アレはアレで、アレな訳よ。もういいから告白しとけって、大丈夫だって成功するって。

むしろ成功しなかったら天変地異レベルの異変だから」

「うぅぅ……そ、そうですか？」

「あんな新婚夫婦みたいな空気出してキャロがお前を嫌いだったら、俺女性不信になるって」

いや、俺とスバルも大概だっつー自覚はあるよ？

でもエリキャロのはその比じゃねぇ。俺とスバルがバカップルとして、エリキャロのは完璧に新婚夫婦のそれだ。もうね、エリオの帰りをキャロが出迎えて「ご飯にする？　お風呂にする？　それともわ・た・し？」とか聞いちゃうレベル。

これで仮にエリオが振られたとしたら、俺もう一生女を信用出来なくなるわ。

だから大丈夫。おっちゃんの事を信じて、とっとと告白……いやもうこの際結婚しちゃえ。

「ぼ、僕のことはいいですから！
そそ、それより、ハヤトさんの次の配置先ってどこなんですか？」
「誤魔化したな……まぁいいや。それは後でたっぷり弄ってやるとして。
俺の次の配置先は――」

俺がエリオに自分の配置先を言おうとした時、俺達の部屋のドアがノックされて、その向こうから聞き覚えのある、脳筋で委員長気質な奴の声が聞こえてきた。

『ハヤト君！　エリオ！　もうすぐ解散式始まるわよ！』

その言葉に時計を見れば、確かにもう解散式の１０分前。
ちょっと急がないと、遅刻しちまう時間になっていた。

「――うわ、やっべ。エリオ、急いで着替えるぞ。
もし遅れでもしたら、あの脳筋に何されるか分かったモンじゃないからな」
「何かされるのは、いつもハヤトさんの自業自得な気が……」
「キコエマセンナー」

エリオの冷たいツッコミと視線を受け流しながら、急いで着ている途中の制服を着込む。
ネクタイは……いいや、行きながらやることにしよう。
とりあえずエリオと共に制服を着終わり、急いでドアを開ける。

「おっは～」

「遅いよハヤト君！　何時だと思ってるの！？」

「はいはい。ごめんなさいねオネーサマ」

「……っ！！　そ、そんな風に呼ばないでくれる！？　鳥肌立つから！！」

「えー？　事実だし、いいだろ。オ・ネ・エ・サ・マ？」

「～～～っ！！？」

ニヤニヤと笑いながらそう呼ぶと、凄まじく嫌そうな顔で逃げていくギンガ。
ふっ、もうギンガなど恐るるに足らず。ちょっとお姉様、とかお姉ちゃん、とか呼べばすぐに逃げ出すからな。くっくっく……うん、まぁ俺も結構ダメージ受けるんだけどね。

「アホなことやってないで行くわよ。アンタのせいであたし達まで怒られたら堪んないわ」

「うへーい」

ギンガで遊んでたら、ティアナに怒られた。
確かに、もう時間が結構ヤバイよな。じゃあ急ぎますか。
……おっと、その前に。

「おっす。今日も可愛いな、マイハニー」

「おはよっ！　今日もカッコイイよ、ダーリン！」

ニコニコと笑っているスバルに挨拶をする。
スバルはそれに答えながら、俺の右腕に抱きついてきた。
うんうん、愛い奴よ。なんて思いつつ、その頭を撫でながら解散式をやる集会場へと急ぐ。

「「「「……」」」」

他の４人がこっちに向ける生ぬるい視線は……まぁ、無視しておいた。
つかエリキャロ。お前らにだけは、そんな視線を向けられる覚えはねぇ。

「意外とあっさり終わっちゃったね」

解散式が終わった後。
俺とスバルは、隊舎裏のベンチに座ってボケーっと時間を潰していた。
何の時間つぶしかって言えば、二次会開催までの時間つぶしですよ。会場設置の手伝い？　絶対に働きたくないでござるっ！！！

「ま、こんなモンだろ。解散式なんだから、変に盛り上がってもな」

「あはは、確かに」

本当はティアナ達も一緒にと思ってたんだが、どうにも気を利かせてくらせたらしい。
……ホント、あんにゃろうは無駄に気が利くなぁ。ギンガオネーサマにも見習わせたいくらいだ。
って、それはさておき。

「そういやギンガに聞いたけど、ナンバーズの何人か、出て来れそうなんだって？」

ちょっと小耳に挟んだ情報を聞いてみる。
スバルは最近……つーか退院してからちょくちょく、海上隔離施設でギンガの指導の下で再教育を受けているナンバーズのところに行っている。
聞いた話だと、全員と随分仲良くなっているようだ。トーレとセッテあたりの武闘派勢――俺からすれば今一番会いたくない奴等だが――なんかとは特に。

まぁそんな訳で、ナンバーズの話はちょくちょく耳に入ってくる。
ちなみに俺は退院した後すぐ、ナンバーズ達に謝罪しに行った。
操られていたとはいえ、女の子をボッコボコにしちまった上、何人かはホラー映画真っ青な事をしちまった訳だし。
ただ、その時にトーレとセッテの2人に「勝負しろ！」と言われて全力で襲い掛かられて以来、二度と海上隔離施設には近寄らないようにしていたりする。うん、今の俺じゃ、あの2人に襲われたら速攻で死んじゃうからね？

「うん。チンクとノーヴェ、それとディエチの3人が。出てくる間は、家で一緒に住むんだよ。
お父さんとギン姉、家族が増えるって喜んでた」

「そうかい」

んで、話は最初に戻るわけだが、隔離施設で再教育――ギンガの教育という時点で、深い同情を覚えるわけだが――を受けているナンバーズのうちの何人かが、仮釈放みたいな形で出てこれるらしい。

ちなみに出て来る間の身元引受人兼監視役はゲンヤ＝ナカジマ。
スバルとギンガの親父さんだ。

「しかし、ゲンヤさんも奇特な人だなぁ。食費とかすげーだろうに」

「だ、大丈夫だよ！　チンク達も、管理局でアルバイトするって話だし！」

「その程度で賄えるのか？　経済破綻しねぇ？」

「大丈夫に決まってるよっ！　失礼だよっ！」

ホントかよ……いや、まぁ確かに大丈夫なのか？　俺も自分が戦闘機人になってみて分かったんだが、スバルとギンガのあの食欲は、戦闘機人とは特に関係ないみたいだし。
事実として俺、別に食べる量変わってないしな。
そうなると、なるほど確かにチンク達が一緒に住んでも、ナカジマ家の経済状況破綻は免れそうだ。
……まぁ、いざとなったらスバルの食費は俺が出そう。一応、これでも彼氏だし。

「はいはい。そーゆー事にしといてやんよ」

「うー……絶対思ってないでしょ」

「ナンノコトヤラー」

「ハヤトの馬鹿っ！　もう知らないっ！！」

ケラケラと笑ってからかっていたら、どうやら機嫌を損ねてしまったようで、スバルは頬を膨らませてそっぽを向いてしまう。だから、お前は子供かっつーの。

とはいえ、こちとら伊達に半年近く彼氏をやってる訳じゃない。こーゆー時の対応方法は知り尽くしてますのことよ。

「わーるかったって。ホラ、機嫌直せよ」

謝りながら、頭をわしゃわしゃと撫でてやる。

するとすぐにスバルの耳が赤くなり、少し見える頬がにやけた。

まぁ、一応プライドはあるみたいで、そっぽ向いたままではあるが。

「ふーん、だ」

「はいはい、おにーさんが悪かったですよ。機嫌直してくださいな」

「……絶対悪いって思ってない」

ああ、もう大丈夫だわ。

本人は必死に取り繕ってるつもりなんだろうが、声も完璧に嬉しそうだもんよ。

とりあえずスバルのご機嫌とりに成功した俺は、そのまま次の話題を振ってみた。

「そういやスバル、特別救助隊に行く準備は終わってんのか？」

「あ、うん。一応荷物は殆ど纏めてあるよ……はっ！　ふ、ふんっ！」

俺の問いに普通に答えてから、思い出したようにまたそっぽを向くスバル。

あーもー、何かいちいち可愛いなコイツは。

「くっくっ……そんなんで大丈夫かよ、特別救助隊サン」

「……うぅ」

笑いを噛み殺しながら、またからかってやる。

そう。スバルはこのたび、本人が希望していた特別救助隊にめでたくスカウトされたのだ。

高い身体能力と本人のやる気、そして六課での実績を買われた結果らしい。

「ま、冗談はそろそろやめるとして。良かったな、長年の夢が叶ってよ」

ポンポン、と頭を叩きながらそう言う。

スバルは訓練校で会った時から、ずっと特別救助隊に入ることを夢見ていた。
それがこうして叶ったんだ、随分と本人も大喜びだろう。

「……うん」

「……？」

そう思ってたんだが、返ってきた声は予想外に暗かった。
不思議に思って顔を覗き込めば、何でかスバルは泣きそうな顔になっている。
念願叶って特別救助隊にスカウトされたってのに、何でこんな顔してんだコイツは？

「何だよ、そんなしけた顔して。あ、あれか、高町隊長と離れるのが嫌なのか？」

「違うよ！　……それも、ちょっとだけあるけど」

あるんかい。
いや、まぁそれは仕方ないか。高町隊長は、スバルの憧れの人だった訳だし。
でもそれだけが理由じゃないとしたら、他に何があるんだ？　ティアナと離れるってのもあるだろうけど……うーん、それだけでこんなヘコむかぁ？

「だって……」

「あん？」

ヘコんでる理由が分からずに首を傾げていると、スバルがポツリと言葉を漏らす。

「だって、六課が解散しちゃったら、ハヤトと別になっちゃうし……」

「……へぇあ？」

漏れたその言葉に、思わず変な声を出してしまった。

何を言ってるんだろうかこの犬っ子は。しかもこんな泣きそうな顔をして。

呆然としている俺をよそに、スバルはポツポツと言葉を続けていく。

「ティアから聞いたんだけど、ハヤト、八神部隊長に自分の所で指揮官の勉強しないか、って誘われてるんでしょ？　そしたら、あたしよりも忙しくなるだろうから、あんまり会えなくなっちゃうし……」

言葉を漏らしながら、耐え切れなくなったのかスバルがポロポロ

と涙を零す。

「ハヤトと離れるの、ヤだよォ……」

「スバル……」

俯いて涙を流すスバルに手を伸ばし――

「……なぁに勝手な思い込みで泣いてんのお前は」

「ふぎゃっ!?」

――その脳天に思いっきりチョップを見舞ってやった。

「な、なな……っ!?」

「あのなぁ。確かに俺ぁ部隊長から誘われてたよ?
指揮官訓練を受ければ、結構いいとこまでいけるかも知れないってさ」

「痛っ、痛いっ!?」

溜息を吐きながら、何度も何度もスバルの脳天にチョップをかます。

ホント、こいつのこういう思い込みが激しいところは困ったもんだぜ全くよ。

「けどさぁ、俺がいつそれを受けたって話をしたよ？」

「痛っ……え……？」

俺にチョップされて余計に涙目になっていたスバルが、驚いた顔で俺を見る。

そこで俺はチョップを止め、この犬っ子の勘違いを鼻で笑ってやった。

「俺の次の配置先は、お前と一緒……特別救助隊だよ」

「え……えぇぇっ！？」

隊舎裏に、スバルの声が響く。

そんな驚くなよ、いや驚かせる為に黙ってたんだけどさ。

「大変だったんだぜ？　部隊長や姉ちゃん、母さん達にお願いして色々と根回しして貰ってさぁ。

ホント、どんだけ借りが出来たかわかったもんじゃねぇや」

ホントに大変だった。

スバルはともかく、俺は六課でも結構地味な部類だから、エリートに近い特別救助隊なんて部署の目に留まるような奴じゃなかったんだ。

だから、部隊長と姉ちゃん、それに母さんなど、俺の知る限りのありとあらゆるツテ持ちの人らに頼んで何とか特別救助隊入りを認可させた。最後とか姉ちゃんと母さんに直接乗り込んで貰う力技だったけどさ。

ま、お陰で俺は何とか特別救助隊入りすることが出来た。

姉ちゃんと母さんには、あとあと凄い要求されそうだが……まぁ、我慢しよう。

「……ホント？」

「ホントだよ」

「また、一緒なの？」

「おうよ。つか、俺以外にお前のストッパー出来る奴なんていねぇだろ。

ティアナは進路の関係上、絶対に別になっちまう訳だしな」

信じられないって顔をしてるスバルの頭を、苦笑しながらわしゃわしゃと撫で、そして、スバルを真正面から見つめて言ってやる。

「一緒に居てやるよ。ずっとな」

ま、そうそう離れられる訳もねぇわな。
一度死んだ俺を、それでも好きで居てくれた奴だ。
こいつを離したら、世界中から「馬鹿かお前」って言われちまうよ。

「……っ」

「っとと」

俺の言葉を聞くと、スバルが思いっきり飛びついてくる。
その体を受け止めて、仰向けに倒れそうになるところで頑張ってバランスを取った。
どうしてこう、ヴィヴィオもスバルも、何かあると直ぐに飛びついてくるんだか。この癖だけは、ホント直して欲しい。

「ふぇぇぇんっ！！　ハヤトォ、よがっだよぉぉぉ……っ！！」

「あーはいはい、泣くな泣くな。黙ってて悪かったよ、驚かせたくてさ」

「ハヤトの馬鹿ぁぁぁ～」

「はいはい、俺は馬鹿ですよ～」

わんわんと泣きじゃくるスバルの背中を撫でる。
ったく部隊長。黙ってた方がスバルが喜ぶだろうって言ってたけ

ど、これはちょっと効果ありすぎじゃないッスかねぇ。何か逆に悪いことした気分なんスけど。

「……ん？」

そんな風に思っていると、ふいにティアナから通信が入った。
人の胸を借りて泣いているスバルはそのままに、とりあえずその通信を繋ぐ。

「どーした？　二次会、もう行けるのか？」

『違うわよ馬鹿。なのはさんが、ちょっと集まって欲しいんだって。だから、アンタ達もさっさと来なさい？　場所は、いつもの訓練スペース。急ぎなさいよ？』

「……集まるって、またどうして？」

『さぁ？　あたしも聞いてないわ。いいから、早く来なさい。あたし達、先に行ってるからね』

「おう、りょーかいだ」

ティアナの言葉にそう答えて通信を切る。
隊長が、ねぇ。最後だし、何か特別なお祝いでもしてくれるんだろうか？
ハッ！　まさか最後だからってあの豊満な胸にダイビングでもさ

せてくれるのか！　やっべ、すぐに行かなきゃ！　マッハで行かなきゃ！！

「……ていっ」

「ミゲルッ！？」

隊長のお祝いに夢を膨らませてたら、凄まじくいいパンチを腹に貰った。

な、何しやがるスバル！！

「……今、すっごくやらしい顔してた」

「し、してねーよ！　別に高町隊長のおっぱいを想像したりなんて……ハッ！？」

「……」

しまったと思ったが時既にお寿司……じゃなくて遅し。

つい今しがたまで人の胸で泣いてた筈の犬っ子は、今やマジギレしたヴィータ副隊長もかくやと言わんばかりの鬼の表情で両手をボキボキと鳴らしている。

……俺も、こういう自分の欲望に正直なところは直さないとなぁ。

「何か、言い訳はあるかな？」

背中に黒い瘴気を背負い、極上のスマイルでそう尋ねてくるマイハニー。
ああ、でもこういうのが俺とコイツの日常なんだろうなぁ。
――だから。

「おっぱいが嫌いな男子なんていません」

――――だから。

「ブ・チ・コ・ロ・シ・カ・ク・テ・イ・ダ・ネ・♪」

――――――君と、ずっと。いつまでも。

「ごめんなさぁぁぁぁぁいっっっっ！！！！」

――魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～　これにて完結。

ｉｆ最終話　『君とずっと』（後書き）

※ＥＤ曲は『君の胸にＬａＬａＬａ』です。
ポケモンＤＰのＥＤ……名曲ですね。

後書きと、これからの更新なんかについて。

ここまで読んでいただき、真にありがとうございました。
どうも、ラモンです。

今回を持ちましてスバルルート、堂々の完結と相成りました。
1年と少しの間、ハヤトの日常にお付き合いくださり、感謝感謝です。
こうしてここまでやってこれたのも、読者の皆さんの温かい励まし、叱咤激励があったお陰です。
この場を借りて、心よりお礼申し上げます。

普通の少年ハヤトの、ちょっと普通じゃない日常はどうだったでしょうか？
スバルルートでは無双したりしましたけど、書いた本人的には楽しんで頂けたかなと思っています。
まぁ、スバルルートでは中盤から終盤にかけて、とあ新らしくない、どシリアスな展開のオンパレードだったので、読んでいて疲れた方も多かったのではないでしょうか？
少なくとも、書いている私は凄く疲れました（笑）

ですが、ティアナルートから読んでくださっていた方、スバルルートから新しく読み始めて頂いた方。
様々な形でこの小説に触れてくださった全ての方が楽しんで読んでくれて、時に笑い、時に泣いてくださったのだとしたら、私としても嬉しい限りでございます。
毎回のように感想を書いてくれた読者さんには、本当に感謝の念が絶えません。

ぶっちゃけ、今読み返すとティアナルートとか最初から書き直したい衝動に駆られます。
別に今も文章を書くのがそれ程上手くなったとは思っていませんが、それでも共通ルートやティアナルートは……ねぇ？　見直すと色々酷い部分が多いこと多いこと……（汗）
まぁ、それでも書き直したりはしませんけどね。アレはアレで、その時の私の全力だったワケですし。
最初から読むことで、自分の成長記録を見ている気にもなれますから。
……成長してるのかなぁ？

スバルルートでのハヤトの今後ですが、スバルと同じ特別救助隊に入り、２人で夫婦コンビなどと呼ばれながら仲良く、時々喧嘩もしたりしながらやっていきます。
喧嘩の原因は主にハヤトが胸の大きな子に見惚れていたから、というのが８割ですけど。
ハヤトだから仕方ないですね（笑）

……さて、書くことが無くなってしまいました。
でも、折角こうして後書きを別としたワケですし、もうちょっと何か語りたい……。
なので、今後の執筆に関しての事を少し。

ありがたい事に、ｖｉｖｉｄやＳＳＸでの続きを、と言ってくださった読者さんも居るのですが、ＳＳＸは以前に書いて諸々の事情で削除した為、もう一回書くのはちょっと抵抗があります。

ｖｉｖｉｄは書いてもいいかな～とは思っていますが、何分私はｖｉｖｉｄは単行本派な上に、原作もまだまだ終了していません。仮に書く場合はオリジナル要素が多く含まれてしまうでしょう。そこいら辺を踏まえて、私が自分で納得するようなプロットを思い描けた場合、ハヤトの新しい日常が始まると思います。あまり期待はしないでくださいね（笑）

これから暫くの間は、もう一つの連載である『私が最強モノを書いたら、こんなん出来ました。』と、とあ新らじおを中心に更新を進めていく予定です。

……さて、長々と語りましたが、そろそろ後書きを終えようと思います。

最後に、第１話を投稿した時からずっと読んできてくださった方々、そして途中からでもここまでお付き合いくださった読者さん達に無上の感謝を。

もしよければ、時々読み返してみて、またハヤトの日常で楽しんで頂ければと思います。

ではでは、ラモンでした。

誰得か分からないキャラ語り。（前書き）

※これは私が何となく書いたキャラ語りです。
多分時間の無駄ですんで、読まないほうがいいと思いますよ？
……読むんですか？
……後悔してもしりませんよ（笑）

誰得か分からないキャラ語り。

●ハヤト＝ロックウェル

キャラ属性『お兄ちゃん』『スケベ』『ゲーオタ』『ヘタレ』

作者が「普通のまま最後まで行く主人公って面白くね？」という安易な発想から生まれた主人公（笑）。

多分『とあ新』本編を通して、一番成長してるようでしてない男。

キャラコンセプトは『ＦＷメンバーのお兄ちゃん』。

基本的に隊長とＦＷにはどれだけ距離が近くなろうと、絶対に『保護者と被保護者』の壁があると思ってたので、何となく「じゃあその中間に立てるキャラにしてやろう」と、隊長陣ではフォローしきれない部分を、それとなくフォローしてやるナイスガイ……を目指して彼を生み出しました。

結局出来上がったのは、ギャグ１００％なアホの子でしたが（笑）

まぁその分、歳相応のキャラになったかなとは思ってます。

ハヤトは基本行動が馬鹿なので勘違いされ易いですが、実はＦＷ陣内でならティアナに続いて第２位。六課全体で見ても結構上位に食い込める程度には頭が良いです。

それこそ、ガチで勉強したら執務官試験だって余裕で突破できたりします。

まぁ、基本的にものぐさな性格なので、ありえない話ではありますが。

ティアナもスバルも訓練校時代を一緒にすごしたので、ハヤトが

賢いという事は知っていますが、普段の行いが酷いので忘れがち。
時折思い出しますけど。
六課の皆さんは基本的に『頭が可哀想な子』という認識ですね。
例外として、隊長陣は「頑張れば出来る子」ぐらいに認識してはいます。

戦闘スタイルは、なのはのような『ガチンコタイプ』でも、ティアナのような『戦術タイプ』でもなくて、例えるなら『騙し討ちタイプ』です。
ある種の戦術タイプとも言えなくないですが、作者的には全く別物のスタイルだと思っています。
とはいえ結局全体的な実力が足りないので、シグナムなんかの実力が圧倒的に上な相手からすれば、いいカモになっちゃうという悲しい現実。

ちなみにハヤトがゲームに夢中になるのは、自分に才能が無い事に対するコンプレックスの表れ……という裏設定があります。ゲームなら、努力さえすれば世界最強にだってなれますから。
勿論、本人は欠片も気付いていませんけど。
本当はそこら辺を、本編中で深く掘り下げたかったですねぇ。
機会が無くて、結局脳内のみの妄想になってしまいましたが。

カップリングとしてのイメージは、ハヤスバはバカップル、ハヤティアはちょっと大人なカップル。
まぁ、基本的にどっちも見てて鬱陶しいレベルでイチャつくのは確かなんですが。

●ブレイブハート

キャラ属性『良妻賢母』『裏ヒロイン』

レイジングハートの姉妹機にあたる、ハヤトのデバイス。
基本的に私はデバイスに喋らせるつもりは無かったので、本編中でも口数は少なかったですね。
ハヤトが基本ものぐさなので、それをフォローしてくれる『しっかり者のお姉さん』というコンセプトの元に生まれたデバイスです。
性格や喋り方は、レイジングハートを基本に、やや人間味を持たせた感じですかね。

意外と苦労したのが、喋らせるタイミング。
ベラベラ喋っちゃうと言葉の重みがなくなりますし、あまり喋らなさ過ぎても駄目。
まぁ、ここいら辺は結構上手くタイミングを使えてたんじゃないかなと思います。
そのお陰か分かりませんが、裏ヒロインと呼ばれるぐらい人気が出ちゃいましたし（笑）

ティアナルートでは最後にハヤトに対して告白をしていましたが、スバルルートでも同じくらいハヤトを深く愛しています。ただ、スバルルートでは自覚までは至っておらず、自分にとって大事なマスターだという認識しか無い……という設定が自分の中にはあります。
ティアナルートのラストでは壊れてしまった彼女ですが、スバルルートではハヤトの良きパートナーとして一緒に頑張っています。
ティアナルートでも、クロスハートの一部として、ハヤトの事を見

守っていると私の脳内設定では決定されておりますw
ある意味、スバティアにとっては一番の強敵と言えるかも知れないですね。

●ディレト

キャラ属性『チート』『ラスボス』『ヤンデレ』『アホの子』

ティアナルートはオリキャラをラスボスに、そして凡人の相手は最強しか居ないだろう！　という考えの下に生み出されたチートオリキャラ。
どんなキャラにしようと考えた時に、真っ先に思いついたのがエウレカセブンのアネモネ。
あのちょっと狂っていた感じが凄く好きだったので、そのままキャラの原型に。

あとは個性付けとしてお嬢様言葉と、無邪気な残酷さを出す為に精神年齢は幼めに設定。
ハヤトに対する執着を出す為に一番いいという事で、ヤンデレ属性も付加。

一番難しかったのは、主人公よりも圧倒的に強いけど、何とか頑張って頭を使えば勝てないことも無いかな～……という辺りを目指した強さや能力の設定でした。
出てきた時点では「え？　こんなのにハヤト勝てるの？」と読者に思わせておいて、後々弱点を少しずつ明かすことで光明を見せる。

そんな演出をやりたかったんですが、これは上手くできていたかどうか疑問が残るとこです。
何せディレトの能力は全部、私の独自理論で成り立っていましたから、そこを説明し切れたかどうかが未だもって甚だ疑問だったりします（汗）

名前の由来は、他のナンバーズのようにイタリア語から。
１３番はトレディチと読むらしいのですが、これをそのまま読むのはちょっとダサイなぁ、という事で色々と試行錯誤の末、チを抜いて逆から読んだディレトという名前に。

ちなみに、アホの子属性は感想欄でいつの間にか付いていた属性ですね。
……何が原因だったんだろう？（笑）

●ハヅキ＝ロックウェル

キャラ属性『チート』『最強』『ブラコン』『お姉ちゃん』『主人公』

ティアナルートで１回だけ出てくるギャグキャラのつもりで作った、ハヤトのお姉ちゃん。
初期で考えていた彼女の立ち位置は、戦えば滅茶苦茶強いけど、その機会は絶対に回ってこない『設定上強いキャラ』の予定でした。
けれど、気が付けば準レギュラーっぽくなり、最終的にスバルルートでは主人公の座を脅かす程に濃いキャラと人気を獲得してしま

った、ある意味作者の予定を振り切って勝手に動き出したキャラですね。

ちなみに彼女の階級は低いですが、それは部下や知り合いに作戦の手柄を全て譲ったからであり、それらを全て自分のモノにしていたら軽く中将レベルまで昇格している……という設定があります。

チートで最強属性だから、それくらいは出来るだろうという私の偏見で出来た設定ですが（笑）

そういう訳で上層部には彼女のお陰で昇進できた元部下が多く在籍し、彼等はハヅキには借りがあって逆らい辛いので、彼女の影響力はレジアス中将なみのもの……という設定があったりなかったり。

ちなみに、ハヅキはハヤトを大好きですが、一応ちゃんとギリギリのところで弁えてはいます。

本気でハヤトとキスしようとか、ハヤトの貞操を奪おうとかは考えていません。

ハヤトに彼女が出来たら、色々と世話を焼いたり応援してやろうと考えている、凄く良いお姉ちゃんなんですよ。普段はブラコン病が酷いので、そうは見えませんがw

ハヤトに対してハヅキがあれだけ甘いのは、幼かった頃、自分のせいでハヤトに嫌な思いをさせてしまったから、その分自分が愛してあげなければと思って……という裏設定があります。

才能で圧倒的に勝る姉と色々と比較されたりとか、ハヤトの小さい頃には色々あったんですよ。

ハヤトが虐められていると、どこからとも無くハヅキが現れていじめっ子を1人残らずぶちのめしたりとか、そういうエピソードもいくつか考えてはいました。

こういうのも、出来ればどこかで書きたかったんですが、結局書けず仕舞いでしたねぇ。

誰得か分からないキャラ語り。（後書き）

最後まで読んでくださった読者さん。
お疲れ様でした～。

何か質問とかがあれば、感想やメッセージでどうぞ。
可能な限りは答えさせていただきます。

ギンガルートを読む前に　（なるべく読んでください）（前書き）

ギンガルートを始める挨拶や、設定で変更された点を書いてあります。
出来れば変更点を覚えてから第１話を読んでみてくださいね。

ギンガルートを読む前に　（なるべく読んでください）

読者の皆様、お久しぶりのラモンです。

今回、新作が思いつかずに気分転換でギンガルートを考えた結果、こっちの方がスラスラと書けてしまったんですね。まぁ、ある意味私の原点ですから、書きやすいというのもあったんでしょうが。

そして、一度は完結したこの『とある新人の日常』を、こうして再開する運びとなりました。

本当は、完結したこの物語を再開することに抵抗があったのですが、活動報告にて「ギンガルートを連載してもいいのか？」とご意見を頂いたところ、沢山の方から読んでみたいと言ってもらえまして、恥ずかしながら再開してみようと思い立ちました。

久しく書いていないという事もあり、お目汚しな部分もあるでしょうが、折角再開するからには、以前のように沢山の読者さんに楽しんで貰えるような作品になるよう頑張っていく所存です。

ギンガをヒロインとした、新しいようでいつも通りなハヤトの日常を、また楽しんで貰えたなら嬉しいです。

さて、前書きはこのあたりで終わりにしましょう。

次にこの『ギンガルート』について、いくつか諸注意がございます。

ギンガルートは、やはり六課に途中合流するギンガをヒロインとしている事もあり、スバルルート、ティアナルートとは設定が異なっている点が多々あります。

このあたりの変更は、私も始めてやる部分ですので、設定の摺り合わせなどが上手くいかない場合もありかもしれませんが、出来る

範囲で頑張っていこうとは思っています。

では、変更された設定を少しだけ列挙していきたいと思います。
劇中でも語るつもりなのですが、いちおう事前知識という形で頭の片隅に置いておいてくださいませ。

変更点１：ハヤトとギンガ、スバルの３人は幼馴染です
変更点２：ハヤトはギンガと同じ、陸士１０８部隊所属です
変更点３：ギンガが最初から六課に出向しています
変更点４：ハヤトとティアナは、ティアナ・スバルルートよりは親しくありません
変更点５：スバルはハヤトの事を「ハヤ兄（にい）」と呼びます

とまぁ、大きな変更点はこの５つぐらいですかね。
ちなみに、ハヤトは相変わらず普通でエロ小僧で主人公（爆笑）ですので、ご安心ください。

では、長々と続けても意味がありませんので、そろそろギンガルート第１話を始めましょうか。
ギンガルートはＥｘｔｒａルートという扱いになり、物語はｅｘ１話、ｅｘ２話、という感じでカウントしていきます。
それでは……とある新人の日常、ギンガルートのはじまりはじまり～。

ｅｘ１話　『機動六課に出向だそうです』

ｓｉｄｅ：―

陸士１０８部隊。時空管理局という組織の中で、地上の平和を守っているこの部隊に宛がわれた隊舎の廊下を、一組の男女が歩いている。
２人は茶色い陸士部隊の制服に身を包み、少しだけ早足でどこかを目指しているようだ。

「……あ、ハヤト君」

その途中、ふと青いロングヘアーの少女が、隣を歩く金髪の少年の首元を見ながら声をかける。
彼女の声に、ハヤトと呼ばれた少年は足を止め、自分の隣を歩いていた少女に視線を向けた。

「何だよ？」

「ネクタイ。ちょっと緩んでるし、曲がってる。だらしないなぁ、もう。ほら、直してあげるからこっち向いて？」

「ん、悪い」

ハヤトの問いかけに溜息を返しながら、少女――ギンガがハヤトの首元へと手を伸ばす。
そんな彼女の言葉に従って、ハヤトはギンガの方に身体を向ける。すると、ギンガは慣れた手つきで彼のネクタイを締め直し、「はい出来た」と言いながらハヤトの身体を軽く叩き、一歩下がってハヤトの全身をしげしげと眺める。
どうやら、他になにか変な部分が無いかを見つけようとしているようだ。

「――あ」

「？」

すると、ギンガは彼ご自慢の金髪の一部が跳ねているのを発見し、小さく声を上げる。

「寝癖までついちゃってるじゃない。もー、ホントにだらしないんだからぁ。
ほらほら、直してあげるからちょっとしゃがんで？」

言いながら、ギンガが自分のポケットから小さめのブラシを取り出して、ハヤトへと近づいて身体を密着させ、彼の髪を梳こうと背を伸ばす。
しかし、先程はされるがままだったハヤトも、これには嫌そうな顔で眉を寄せて彼女から身を捩って離れ、そのまま軽く距離を取り、うざったそうな顔をして口を開く。

「別に寝癖くらい、ほっといたって死にゃしねぇって」

「だーめーでーすー。格好の乱れは心の乱れ、ちゃんとしなさい」

そんなハヤトを、ギンガは腰に両手を当て、子供を注意するような口調で叱って再び彼に近づく。

ハヤトは「やめろよ」と言いながら彼女の手を払い、嫌そうな顔のままでギンガに文句を垂れた。

「細かいことグチグチ言うなっつの。小姑かなんかかお前は！」

「私だって言いたくないわよ。でも、だらしないハヤト君が悪いんだからね？

言われるのが嫌なら、ちゃんとすればいいでしょ」

「うわぁ、マジうぜぇ。何そのお姉さん気取り。同い年の癖に」

「なっ！？　実際。私の方がお姉さんじゃない！　……み、三日だけだけど」

「三日程度でお姉さん気取りってのがありえねーわー」

手櫛で髪を直しながら心底うざったそうな顔をするハヤトに、ギンガが眉を吊り上げて反論をする。けれど、ハヤトは明後日の方を向いて聞こえないとばかりに口笛を吹いてみせる。

そんなハヤトの態度に、ギンガは「むむむ」と唸って口を尖らせた。

それはギンガが何となくとってしまった行動なのだが、今この状況では間違った選択肢だった。

ハヤトはそんな彼女の顔を見て、鬼の首を取ったような笑顔を浮かべる。

「なんですかぁ？　口を尖らせて可愛いつもりなんですかぁ、ギンガちゃんはぁ？」

「ち、違うもんっ！　そんなつもりじゃないもんっ！」

「“もん”とか笑えるわー。１７歳が“もん”とかマジ笑えるわー」

ムキになって反論するギンガを、ケラケラと笑いながらからかうハヤト。

「そ、そうやっていっつも私の事からかって！　そんなに面白いのっ！？」

「面白いですよー。からかい甲斐のある奴ですからね、ギンガちゃんは～。

前にも言いまちたよね～？　いい加減学習しまちょうね～？」

「むぃぃぃぃっっ！！」

怒りに頬を真っ赤にしながら、思い切り地団駄を踏むギンガ。
そんな彼女を見ながら、ハヤトは満足気にひとしきり笑った後、廊下の時計を見る。
すると、そこに示されていた時間を見たハヤトの顔が一気に青褪めていく。

「……やっべぇ！　呼ばれた時間から、もう３０分も過ぎてんじゃねぇか！？」

「え！？　あぁ！　ホントだ、大変っ！」

ハヤトの叫びにギンガも時計に視線を向けて、慌てた声を上げた。
そして２人は同時に全速力で廊下を走り出す。本当は廊下を走ったりしてはいけないという規則なのだが、今の２人にそんな細かい事を気にしている余裕は無い。
自分達を呼び出した人物からの説教に比べれば、規則を破る程度、なんてことは無いのだ。

「ハヤト君のせいなんだからねっ！　お父さんにちゃんと謝ってよ！？」

「はぁ！？　おめぇのせいだろうが脳筋め！　お前がゲンヤさんに謝れよ！」

「何言ってるのよ！　絶対ハヤト君のせいなんだから！」

「ふっざけんな！　てめぇのせいだろ脳筋真面目っ子！」

「何ですってぇ！」

「んだゴルァっ！」

全速力で走りながらも、ずっとお互いを罵り合っているのは、呆れるべきか感心するべきか。

そんなこんなで、２人は目指していた場所……陸士１０８部隊の隊長室へと辿り着いたのだった。

ｓｉｄｅ：―　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｅｘ１話　『機動六課に出向だそうです』

「……お前らなぁ」

「「……すいませんでした」」

目の前で深い溜息を吐いている初老の男性――俺が所属している

陸士１０８部隊の隊長である、ゲンヤ＝ナカジマ三等陸佐。ゲンヤさんのその声に、俺とギンガの２人は揃って深々と頭を下げた。
何で謝ってるのかと言えば、ゲンヤさんからの呼び出して指定された時間よりも、かれこれ１時間近く遅刻してしまったからだ。

「俺だって暇じゃあねぇんだよ。なのに１時間とか……」

「いや、俺は悪くないんですよ！？　ギンガが余計なことするから……」

「ち、違うでしょハヤト君！　私の事からかって遊んでたのは、ハヤト君じゃない！」

「何だよ！？」

「何よ！？」

「……ああもう、その辺にしとけよお前ら」

「む……まぁ、ゲンヤさんがそう言うなら」

「お父さんがそう言うなら……」

苦笑するゲンヤさんに止められて、俺もギンガも渋々ながら喧嘩をやめる。
一応今は勤務時間内で、ゲンヤさんは俺達の上司だからな。流石にこれ以上怒らせるのはマジで得策じゃないと思う。始末書の山とか渡されたら堪んねぇし。

「えーと、気を取り直しまして。なんの用で俺達を呼んだんですか？」

「お？　おぉ、そうだったそうだった。
ハヤト、ギンガ。ちょっとこの資料みてくれや」

気を取り直して俺が尋ねると、ゲンヤさんが俺達に向かって書類を差し出してくる。
それを受け取って、とりあえずギンガにも見えるように広げながら、中身を読む。
……えーと、何々？

「古代遺物管理部機動六課？　新設の部隊ですか？」

「おうよ。部隊長は八神はやて……お前らも名前くらいは聞いたことあるだろ？」

「あー、はい。小耳に挟んだ程度ッスけど」

「他の構成員は……高町なのは一等空尉に、フェイト＝Ｔ＝ハラオウン執務官！？
その他にもエリートな人たちの名前ばっかり……」

ギンガの驚いた声に視線を書類に戻してみれば、確かに一般局員の俺でも聞いた事があるような、そんな有名人の名前がところ狭し

と並んでいる。
おいおい、すっげー豪華メンバーじゃんか。しかも全員美人さんばかりだし。
出来ればお近づきになりたいモンだけど、流石に無理だよなぁ……って、ん？

「スバル！？」

「え？　あ、ホントだ！」

豪華メンバーの並んだ部隊員名簿の中に、見知った名前――スバル＝ナカジマの名前を見つけた。
しかも、その隣にはティアナ＝ランスターの名前までありやがるし！
ど、どういう事だ……奴等がエリート部隊の仲間入りだと！？
ティアナはまぁ分かるとして、スバルは何でだ？　黄金色のお菓子でも送ったのか？

「お父さん、どういう事！？」

「落ち着け落ち着け。今から、それも含めて話してやるからよ」

詰め寄るギンガを宥めながら、ゲンヤさんが姿勢を正す。

「今日お前らを呼んだのはな、その機動六課に出向してもらう為な

んだよ」

「は？」

「え？」

思わずギンガと揃って間抜けな声を出してしまう。

すんません、ゲンヤさん。今なんておっしゃりやがりました？

「あぁ？　仕方ねぇな、今度は良く聞いとけよ、ハヤト。

お前さんとギンガの2人に、この機動六課に出向しろって言ってんだ」

「……俺が？」

「おう」

「ギンガと一緒に？」

「そうだ」

「何で？」

意味が分からないので、首を傾げてゲンヤさんに尋ねる。

いや、まぁギンガは分かりますよ？　陸戦Ａだし、一応捜査官の資格も持ってるしさ。

でも何で俺？　ギリギリ陸戦Ｂで、しかも他には大した資格も持

ってないですけど？
明らかにこの機動六課とか言う部隊には不釣合いだよね？　もしかして虐めですか？　エリートの集団に俺を突っ込んで、無様な様子を見て笑ってやろうっつー魂胆ですか！？

ち、畜生！　ゲンヤさんめ！！
アンタだけは俺の味方だと信じていたのに……裏切ったな！！

「おいおい、何でおめぇさんはそう被害妄想が激しいんだよ……」

「え？　違うんスか？」

「当たり前だろうが。嫌がらせで、わざわざ人事異動なんざしてる余裕はねぇっつーの」

俺の想像を苦笑しながら否定するゲンヤさん。
あぁ、何だ。この間、ゲンヤさんが大事にしてた盆栽壊したお返しじゃないのね。
まぁアレは良く考えりゃバレる訳ないんだよな。巧妙に偽装して、犯人が分からないように仕立て上げたもんよ。今までの管理局生活で培った全てを注ぎ込んだ、会心の偽装工作だったもんな！

「……ハヤト君。全部口に出てるから」

「やっぱおめぇだったのか。……アレの金は給料から差っ引いとくからな」

「オゥ……謀られたでござるよ」

「もういい、話が進まねぇからお前は少し黙ってろ。で、続きなんだがなギンガ」

「あ、はい」

黙ってろと怒られたので、とりあえず黙っておく。

これ以上怒らせて、給料が激減するのだけはマジで勘弁だしな。

ただでさえ、あの盆栽の分を引かれて殆ど残ってねぇと思うしよ。

あぁ、次の給料日で買おうと思ってた『ラブマイナス＋』がぁぁぁ……凛たん！　凛たん！

「さっき名簿で見たから分かってるとは思うんだが、六課にはスバルも居る。

お前まで呼ぶってのは、ちっとばかし引っかかるがな。まぁ、色々とフォローしてやれや」

「それは分かったけど……でも、こっちは大丈夫なの？」

「お前とハヤトの２人くらい、居ても居なくても大して変わんねぇよ。余計な心配すんじゃねぇや。

それよっか、出向は１ヵ月後だ。今の内に仕事の引継ぎとか、荷物とか纏めときな」

「え？　あれ？　もう出向は決定なんスか？　俺の意志とかは？」

「……もし素直に行くってんなら、盆栽の件は見逃してやってもい

いぜ」

「全身全霊、粉骨砕身の精神で頑張らせていただきます！」

額を床に擦り付け、俺に出来る全力全開の土下座をしてみせた。

情けないだと？　舐めるな！　凛たんの為なら、プライドなんぞ犬に喰わせてやらぁな！！

「ハヤト君……何て見事な……」

隣でギンガが泣きそうな顔で俺を見ているが、とりあえず無視。

つか、お前はガキの頃から一緒なんだから、俺の土下座なんぞ見慣れてんだろうが。

「よし。それじゃあこれで用件は終わりだ。

さっきも言ったが、出向は１ヵ月後だからな。ちゃんと準備しとけよ」

「了解しました」

「うぃ～っす」

立ち上がり、ギンガと共にゲンヤさんに向かって敬礼を返す。

やれやれ、新しい部隊とか面倒だなぁ。折角この１０８部隊の仕事とか、適度にサボるやり方を覚えたばっかだってのに……また一

からサボり方を考えなきゃいけねぇじゃんか。
ま、いいか。ギンガも一緒なんだから、こいつに全部仕事を押し付けちまえ。
真面目なギンガの事だ、嫌々ながらも絶対に終わらせるだろうからな！

「それじゃあ、俺らは戻りますねー」

「おうよ」

なんて事を思いながら、そう挨拶してギンガと一緒に隊長室を後にしようとする。
すると、ゲンヤさんが思い出したように俺達に向かって声をかけてきた。

「おぉ、そうだそうだ。ギンガ、ハヤト」

「うぃ？」

「何？」

ゲンヤさんは、俺とギンガを見てニヤリと笑い、そして――

「向こうに行ったら、あんまり夫婦喧嘩すんじゃねぇぞ？」

「「はぁ！？」」

――すっげー楽しそうにンな事を言ってきた。

「な、何言ってるのお父さん！」

「そうッスよ。何が悲しくて俺がギンガなんかと……」

「失礼な！　それはこっちの台詞よ！」

「えー、俺の台詞ですぅ」

「私です！」

「俺ですー」

「私なのーっ！」

「くっくっく、だから、そういう痴話喧嘩は控えろって話だよ。なんせ、向こうにゃ若い奴が多いんだからなぁ」

「だ、だから違うってばお父さん！」

笑いながら喋るゲンヤさんに、ギンガが真っ赤になって過剰反する。

本当にアホだなぁ、ギンガは。こんなのからかってるだけに決まってんだろうが。そんなだから、いつまで経っても俺に口で勝てな

いんだよ。

「はいはい、勝手に言っててくださいよゲンヤさん」

「なんでぇ……面白くねぇ反応だなオイ。ギンガじゃ不満か？」

「ガキの頃から一緒なんスよ？　今更そんな風に見れるわけねーッスから。

つーか、俺の好みはこう……もっと年上で巨乳で胸がでかくておっぱいの大きな、大人の女性ッス」

「がっはっは！　なるほどな！　それじゃあ仕方ねぇか！！」

「そーッスよ。ギンガ程度の胸じゃ……ハッ！」

ギンガの胸を見ながら鼻で笑ってやる。

まぁ？　確かに小さくはないけどな、その程度の戦闘力じゃ話にもならんのだよ！

最低でも９０のＥくらいになってから出直してくるんだな！

「まったくなぁ。あれだけ食うのに、それはどこに行くんだか」

「胸以外じゃないッスかね？　主に腹とか腹とか腹とか」

「おぅ？　そういやギンガ、最近腹回りが……」

「あ、知らないんスかゲンヤさん？　ギンガ、最近ウエストが３セ

ンチ程太エンッ！？」

からかい半分で、ゲンヤさんにギンガの秘密を暴露しようとしたところ、腰の入った凄まじく重いボディブローを鳩尾に叩き込まれた。

その衝撃に、思わず訳わからん声を出して倒れこむ俺。

そんな俺の服の襟首が掴まれ、無理矢理引き起こされる。

「……ハヤト君？　何か言おうとしたのかな？」

「ゲホッ、ゲホッ……何しやがる！　俺はただお前のウエス――」

「何か、言おうと、したのかな？」

「――イイエナニモ」

咳き込みながら、ギンガに文句を言おうとした俺だったが、ギンガの顔を見た瞬間、「イイエナニモ」以外の言葉を選ぶことが出来なかった。

だってこの女、口元が笑ってるのに目が笑ってないんだもんよ。

アレ以上喋ってたら、ガチでデバイス起動して殴りかかってくるつもりだったって。

「それでは、私達はこれで失礼しますね。ナカジマ三佐」

「お、おう……」

ギンガはそう言って俺を引き摺りながら隊長室を出て行く。
ちょっと待てギンガ！　何で俺だけ殴るんだよ！？　ゲンヤさんだって同罪だろうが！
不公平だろ！　贔屓反対！　贔屓反対！

（悪ぃなハヤト。これでも俺ぁ一応上司なんでね）

（畜生！　これだから権力を持った人ってのは！！）

（悔しかったら、お前さんもさっさと昇進して俺より階級が上になるんだな）

（無理だってわかって言ってるっしょ！？）

（おうよ！）

（こんちくしょーーーっ！！）

喋らずにアイコンタクトで語りあう俺とゲンヤさん。
ちなみにこの間、僅か０．３秒である。

「あ、お父さんは帰ってからじっくりと家族会議しましょうね？」

「え　ぇ！？」

しかし、隊長室のドアを閉める直前で、ギンガがゲンヤさんを振り返ってとんでもなくイイ笑顔を浮かべながらそう呟き、その顔を見たゲンヤさんが一気に青褪めた。

そしてギンガはゲンヤさんの返事を待たずにドアを閉め、俺を引き摺って歩き出す。

俺はギンガに引き摺られつつ、隊長室を見ながら大声で笑ってやった。

「ざまぁ！　ゲンヤさんマジざまぁ！」

「何言ってるの？　ハヤト君は、これからじっくりお説教だよ？」

「え〝……、えぇ～……」

「ふふっ、女の子に言っていい事と悪い事があるってこと、じぃぃぃっっくり教えてあげるからね？」

一瞬上がったテンションが、再び一瞬で急降下した俺であった。

ちなみに、この後俺がギンガから解放されたのは、きっかり3時間後だったりする。

しかもギンガの奴、自分だけちゃっかり仕事終わらせてやがって……畜生、サービス残業とかマジ地獄でござるよ。覚えてやがれギンガの野郎。

ex1話　『機動六課に出向だそうです』（後書き）

恥ずかしながら再開しました。
どうも、ラモンです。

えー、今回から始まりましたギンガルート。
ギンガルートでは、

・ハヤトもげろ
・ギン姉マジ良妻
・お前らもう結婚しろ

の3つを合言葉に頑張っていきたいと思います。

さて、次回は機動六課に出向して、スバル達と会う辺りを書ければいいなと思います。
何だかんだで設定が変わりつつも、相変わらずなハヤトと愉快な仲間達の日常をお楽しみください。

それではまた、次の話で。

ex2話　『引っ越しやら、再会やら』

古代遺物管理部機動六課。
八神はやてニ佐が部隊長として構成された、新設の部隊。
エース・オブ・エース『高町なのは』一等空尉を始めとして、エリートと言って差し支えの無い連中、しかも魔力ランクだけで言えば管理局最強クラスって言っても過言じゃない、ある意味おかしい編成をしている部隊だ。まぁ、戦力だけで言えば教導隊っつー化物部隊もいるけどさ。
ともあれ、あと1週間後には俺もその部隊の一員になるわけで。
そう考えると憂鬱だよなー。エリートの中に放り込まれる普通の人としてはさ。

「……あーあ、今からでも断れねーかなぁ」

「何言ってるの。無理に決まってるでしょ？」

「だーよなー……憂鬱だわ、マジで」

手元の書類を片付けながら、もう一度大きな溜息を吐く。
一応荷物のまとめとかは終わったんで、今は引き継ぎ出来ない分の仕事を片付けているところだ。
まぁ、そんなに多くはねーんだけど、書類仕事なんで面倒っちゃ面倒なんだよな。一応手書きでやんなきゃいけないしさ。

「えーと……ギンガー、アレってどこだったっけー？」

「え？　えっと……あった、あった。はい、コレ」

「サンキュー」

ギンガから書類を受け取って、カリカリとペンを走らせる。

あ、やべ。ボールペンのインク切れた。

「ギンガー」

「インク切れ？　はい、どうぞ」

「うむ、ご苦労」

「お礼はちゃんと言いなさい。子供じゃないんだから」

「うっせーし」

お互いに手を動かしたまま言い合う俺とギンガ。

流石に仕事中、しかも他の皆も居るところで喧嘩するのはマズイもんな。

下手に騒ぐとゲンヤさんにどやされっちまう。減俸されるのに比べれば、ギンガと仲良くするくらいなんて事ねーんだぜ。

「しっかし、スバルと会うのなんて何時以来だ？」

「今年の頭に会ったばかりでしょ、もう。ボケるには早いんじゃない？」

「あー、そういやそんな記憶が薄っすらと……あん時は72時間耐久、年越し積みゲー消化大会を1人で開催した後だから、意識朦朧としてたんだよなぁ。何してたんだか、あんま思い出せねぇ」

「またそんな体に悪い事して……おば様も心配してたわよ」

「母さんは過保護なんだよ。3日寝なかった程度じゃ死なないっつーのにさ」

ホント、家の女性陣は俺に対して過保護すぎなんだよ。

姉ちゃんも母さんも、俺がちょっと指切ったくらいで救急車呼ぼうとするしよぉ……。

まぁ、確かに3日完徹はマジでヤバかったわな。最後らへんは、ちょっと幻覚見えてたし。

「心配だなぁ……新しい部隊じゃスバルが後輩になるんだから、ちゃんとしてよ？」

「知んねーし。給料分の仕事はすっけどさ、スバルはお前がやれよ。妹だろが」

「もう、すぐそんな事ばっかり言うんだから。

ハヤト君には、まだまだ私が一緒に居て見張ってなきゃ駄目だね」

「うっぜ。このギンガさんうっぜ」

小言ばっかり言ってくるギンガに辟易しながら眉を寄せる。
ったく、マジで細けー奴だな。いや、別に悪いとは言わないけどさ。そういうのも、コイツの個性な訳だし、実際この細かさには結構助けられてるし、第一ガキの頃からずっとこんなだからいい加減慣れたってのはあるわな。
でも、ウザいモンはウザいんです。

「ウザくて結構ですよ～、だ」

「うわ、何その言い方。かっわいくねーなお前って奴ぁ」

「別にハヤト君に可愛いって思われなくても平気ですー。
おじ様やおば様にハヅキさんは、会うたびに可愛いって言ってくれるもの」

「ンなもん、社交辞令に決まってんだろーが。ばーかばーか」

「馬鹿って言った方が馬鹿なんです。てゆーかハヤト君、手が止まってる！」

「うっせーうっせー」

とまぁ、その後も互いに文句を言い合いながら書類を片付ける俺とギンガであった。
結局、書類仕事が終わるまでギンガには小言を言われまくった。
マジムカつく。しかも、終わらせた書類を届けに行ったら、副長に

「死ねよリア充」って唾吐かれたし。
なんだってんだよ畜生。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ２話　『引っ越しやら、再会やら』

嫌だ嫌だとは思いつつも、時の流れには逆らえないもので。
あれよあれよという間に機動六課が始動する前日、俺とギンガが新設された機動六課隊舎へと引っ越しをする日になってしまった。
引っ越しとは言うものの、大体の荷物は既に配達で送っておいたので、今俺が持っているのはバッグ１つに収まる程度の荷物が入ってる。あ、携帯ゲーム機のＢＳＰは手元にあるけどな。
……うん、俺の荷物はそんなモンなんだ。すっげー少ないの。

「なのに何で俺は両手一杯にバッグを抱えてるんだよ！」

「私の荷物を持ってもらってるからよ？」

「少しは悪びれろよこの脳筋！！」

しれっとした顔で、隣で軽い荷物の入ったバッグを持ってる脳筋に向かって、声の限り怒鳴ってやる。

そう。俺は今、右手に5個、左手に6個の旅行用カバンをぶら下げていたりする。ちなみに、そのうち俺のバッグは1個だけ。残りの10個は全部この脳筋の荷物だ。

「つーか何だこの荷物は！　多すぎだろ！　お前シロネコ大和で配送してなかったのかよ！？」

「送ったけど、持って行く荷物の整理をしてたら、思ってたよりも荷物があったのよ」

「配送出来ないぐらいとか、どんだけ荷物あんだよ！」

「服とか化粧品とか、色々とね。女の子だもの」

何故か無駄に胸を張ってドヤ顔をするギンガ。

アホだ。こいつマジでアホだ。服はまだ分かるが、化粧品なんざ新しく買えばいいだろうが！

いや、それはまだいい。許してやろう。

しかし、何でそれを全部俺に持たせてるんだよ！　自分の荷物は自分で持てよ！！

「ハヤト君、女の子にこんな重い荷物を持たせるつもりなの？」

「お前の方が力あるだろが！　未だに腕相撲で勝てない俺へのあてつけかゴルァ！！」

「うるさいよハヤト君。もうすぐ機動六課の寮に着くんだから、静

かにしなきゃ駄目でしょ？
　同僚の皆さんに聞かれたら恥ずかしいじゃないの」

「おーまーえーなぁぁ！　……いいやもう、怒鳴ったら疲れた。さっさと寮に行こうぜ」

「うんうん。頑張れ、男の子！」

「お前後で泣かす」

　いい顔してサムズアップしてくるギンガを睨みつけ、仕方ないと諦める。どうせギンガの事だ、ここで俺が何を言っても聞きゃしないだろうしな。
　しかも、俺がゴネたら母さんや父さんに連絡するんだろうし。
　母さんはともかく、父さんはギンガ可愛がってるからなぁ……俺が悪くなくても、俺が悪いって事にされて説教されんのが目に見えてる。糞、あの娘大好き親父め。母さんに「浮気者！」って殴られてしまえばいいんだ。

「そういえばハヤト君。スバルと昨日電話したら、ハヤト君に会えるの楽しみにしてるって」

「スバルがぁ？」

「うん。ホラ、あの子ってハヤト君に凄く懐いてるから」

　ふとそんな話題を振られて、ガキの頃から知っているギンガの妹、

スバル＝ナカジマの事を思い出す。
俺の覚えてる一番新しいスバルの記憶は、2年前の年末に家に遊びにきた時か？
少しはでかくなってんのかねぇ。

「ハヤト君も嬉しいんじゃない？　久しぶりにあの子に会うんだし」

「べっつにー。メールとかはしょっちゅう送ってくるから、そんな久しぶりに会うって気はしねぇよ。
あんにゃろう、人の仕事中にもメール送ってきやがってからに……」

しかもメールの内容が9割どーでもいい事なのが、ホント始末に終えん。
本人に悪気がねーから怒るに怒れないし、怒ったら怒ったで謝罪メールを何通も何通も送ってくるし。
最終的にはガチ泣きしながら寮まで来るんだもん、どーしろっつーのよ。

「ギンガ、ちゃんと躾しとけよ。姉だろうが」

「そんなこと言っても、あの子のブラコンには私も困ってるのよ。
てゆーか、アレってハヅキさんから伝染ったんだと私は思ってるんだけど？」

「……正直すまんかった」

ギンガにツッコまれ、確かにその通りだと項垂れる。
スバルは俺の姉ちゃん――ハヅキ＝ロックウェルに一番懐いてて、そのせいか姉ちゃんから色々と影響受けてるんだよな。大体が悪い影響なんだけどよ。
困るくらいに俺に懐いてるのも、多分そのせいだ。
姉ちゃんェ……。

「まぁ、あの子も１５歳になったんだし、最近は落ち着いてきてると思うわよ？
何よりティアナと一緒だったんだもの。きっと大丈夫」

「ティアナ、ねぇ。そういや俺って、アイツとあんまり面識無いんだよなぁ」

「そうなの？　スバルがちょくちょく家に連れてこなかった？」

「お前が休みの時にな。俺は結構仕事が入ってたりで、ちゃんと会ったのは４，５回ぐらいじゃね」

「へー、そうなんだぁ」

次いで思い出すのは、スバルが陸士訓練校でルームメイトになり、それから何だかんだで一緒に居る友達のティアナ＝ランスター。
とはいえ、今言った通り俺はそんなに面識は無い。
一応お互いに名前は知ってるし、何回かスバルやギンガも含めて４人で出かけたりはした。
けど、そんだけっちゃそんだけだ。友達って言える程に親しいと

は思えない。

「大丈夫大丈夫。すぐに仲良くなれるわよ。そういうのだけは得意だもん、ハヤト君は」

「“だけ”っつーな“だけ”って」

「えー？　私は事実を言っただけよー？」

「ちっ、両手が塞がってなきゃぶん殴ってやんのに！」

「ざーんねーんでーしたー♪」

「ギギギ……」

どれだけギンガがムカついても、両手が塞がってるので反撃出来ない。

なにこれ超くやしい。

「ふふっ。でもね、ハヤト君なら大丈夫だと思ってるのはホントだよ？」

「ハッ、どーだか」

「子供じゃないんだから、そんなに拗ねないでよ……もぅ」

そんなやりとりをしながら歩くこと数分。
ようやく、俺の目の前に白塗りの壁の大きな建物――機動六課隊員寮が見えてきた。
話に聞いていたとおり、機動六課が新設されるにあたって新しく建造されたらしく、すっげーピカピカしている。前にいた寮が結構古かったから、余計に新しく見えんのかも知れないけど。

「おぉ、すっげー新しいなぁ」

「ホント。ちょっとびっくりしちゃった」

「前の寮はボロかったかんなー、今度はGに悩まされずに済みそうだ」

「……それって、ハヤト君が部屋を汚くしてたからじゃないの？」

「ンなこたねぇ……と断言できる自信はねぇな」

「もー。やっぱりおば様が心配してたとおりだった。だから、時々私が掃除しに行ってあげようか？　って言ってたのに……そもそもハヤト君は……」

ヤベ、地雷踏んだ。
説教モードに突入し始めたギンガの意識を逸らそうと辺りを見回す。
何か、何かないか!?　話題を逸らす事のできる何か……っ!!

「ギ、ギンガ！　あれってスバルとティアナじゃね？」
「だから私だってついつい小言が……え？　ホント？」

隊員寮の入り口に並んで立っている、見慣れた青いショートカットとオレンジのツインテール。
さっき話題に出た2人を見つけ、ギンガに教えてやる。するとギンガは俺の狙い通り説教を中断して、視線を隊員寮の入り口へと向けた。

「わ、ホントだ。おーい！　スバル、ティアナー！」
「「え？」」

2人の姿を認めたギンガが、嬉しそうに手を振りながら名前を呼ぶ。
その声にスバルとティアが俺達の存在に気付き、驚いた顔でこっちを振り返る。
振り返ったその顔は、久しぶりな割にはあんまり変わってなかった。発育わりーな、あいつ等。

「ギン姉！　ハヤ兄（にい）！」

俺とギンガを見た途端、スバルが目を輝かせて走り出す。
お、相変わらず無駄に足はえぇなアイツ。ま、久しぶりの姉との

再会だし、嬉しいんだろうな。

「ほれほれギンガ、抱きとめてやれよ。妹との再会だぜ？」

「うーん……多分違うと思う」

「？　何言ってんだよ」

からかうつもりでそう声をかけたら、なんか同情してます的な視線を返された。

何だ？　何でそんな大量に売れ残った在庫の山を見る目で俺を見る？

「可哀想だけど、信じられない安値でワゴンに並ぶのね」みたいな目はやめろよ！

「だって、スバルの目標って多分――」

「ハヤ兄ぃぃぃぃっっ！！」

「え？」

最初はギンガの方に行くかと思ってたんだが、スバルの狙いはどうやら俺だったらしい。

懐かしい呼び方で俺を呼びながら、こっちに向かって猛ダッシュしてくるスバル。見事なまでの前傾姿勢から察するに、あのスピードのまま思いっきり飛びついてくるつもりなんだろうな。

ハハッ、あのスピードで突っ込まれたら軽く死ねるね。
受け止める奴、マジ同情するわー……。

「……って待て待て待て待て！　落ち着けスバル！」

「ハーヤーにーいーーーーっっ！！！！」

必死に制止するものの、スバルの奴は全く聞いちゃいないらしい。
どんどん殺人的な加速をしながら、俺との距離を見る間に詰めていく。やべぇ！　今両手塞がってるからガードも出来ねぇってのに、あんなタックル喰らったら死ぬぞ！？
おいギンガ！　ちょっと助け……。

「ハヤト君、私の荷物は落とさないでね？」

「こんの薄情者ぉぉぉぉ！！」

ギンガは既に安全圏に退避してやがった。
てめぇ、後でマジで酷いかんな！　ゲンヤさんに言いつけるからな！

「それはいいけど、そろそろくるよー？」

「ハッ！？　スバル待て！　ちょっと落ち着け！　いや落ち着いてください！！」

「ハヤ兄だぁぁぁぁっっっっ！！！！」

「ぎゃぼーーーーっ！？」

懇願虚しく、スバルは全速力で走ってきた勢いそのまま、地面を蹴って俺の鳩尾辺り目掛け、素晴らしく美しいタックルを決めてくれやがった。

両手が塞がれていてガードすることも出来ない俺は、タックルを受けて悲鳴を上げながら宙を舞う。

６０キロ近い俺が浮かぶって、どんな衝撃だよ！！

「ぐほぉっ！？」

その直後、俺は仰向けに地面に押し倒された。

受身も取れなくて、後頭部とかを強かに地面に打ちつける。

痛ぇってレベルじゃねぇぞ！　何だこの衝撃、ちょっとした事故レベルなんですけど！？

「げほっ、げほっ！　……こ、殺す気かおまいは！？」

「ハヤ兄ぃ、ハヤ兄ぃ～♪」

涙目になりながら顔を上げ、俺に乗っかっているスバルを怒鳴りつける。

けれど、スバルは恍惚とした表情で人の胸板に頬ずりするのに夢中になっていて、俺の声なんぞまさに馬の耳に念仏状態。オイコラ！　誰だよスバルのブラコン治ってるとか言った奴！！
つーか助けろギンガ！　お前スバルの姉ちゃんだろが！！

「久しぶり、ティアナ。元気だった？」

「はい。ギンガさんもお元気そうで何よりです」

「うん。聞いてるかもしれないけど、私とハヤト君も機動六課に出向することになったの。
これからは一緒の部隊だから、よろしくね」

「よろしくお願いします」

助けを求めたら、ギンガはティアナと和やかに挨拶してやがった。
無視すんなよお前ら。それでも正義の味方、時空管理局局員か。

「え？　だってそうなったスバルは手がつけられないもの」

「それに、ハヤトさんなら大丈夫ですよね？　慣れてるから」

「いや、現に今助け求めてんじゃん！？　ねぇちょっとお嬢さん方！？」

「それよりハヤト君。私の荷物落とさないでって言ったじゃない！
３個も落ちてるわよ！？」

文句を言ったら、何故かギンガに怒られた。

「人を見捨てといてその台詞か。よーしお前こっちこい、ぶん殴ってやるから」

「そう言われていく訳ないでしょ？　ハヤト君ってお馬鹿さんだね」

「冷静に考えりゃそうなんだろうけど、今のお前にだけは言われたくねぇぇ！！」

ギンガをぶっ飛ばそうとしたけれど、スバルが上に乗っているので起きられない。

というか、さっきのダメージが凄すぎて普通に起き上がれねーわ。何このダメージ。

ちょっとした砲撃魔法をモロにくらったぐらい効いてるんですけど……。

「それじゃあ、私とティアナは先に寮の部屋とか見てくるから。あんまり遅くなっちゃ駄目よー？」

「スバル、先に部屋行ってるから。荷物の片付けとかあるんだから、さっさと来なさいよ」

「本物のハヤ兄ぃだぁ……ハヤ兄ぃの匂いだぁ……くんかくんか……」

「不幸だーーーーーーっ！！」

機動六課が始動する前から、今後に大きな大きな不安を抱える俺であった。

ｅｘ2話　『引っ越しやら、再会やら』（後書き）

スバルよ、お前はどこに向かおうと言うのだ……。
どうも、ラモンです。

『とあ新』書くの楽しいなぁ。
ハヤトを動かしてると、何だか凄く気分がいいです。
話の流れを考えてたら、あっという間にラスボス、ラストまでの持っていき方なんかが浮かぶくらいですからねぇ。やっぱり、私には『とあ新』が一番合ってるんだな、と思わされました。
まぁ、今回はなんか久しぶりすぎて暴走気味だったかもですが、大丈夫でしょうか？

今回は、ハヤトとスバル、ティアナの関係の説明でした。
スバルはブラコン&シスコン。ティアナとはちょっと仲のいい顔見知り、という感じだと思ってもらえれば良いかと。
ブラコン……スバルがハヅキ2号になりそうで怖いなぁ（笑）

次回はいよいよ六課始動。エリオとキャロも出てきます。
ギンガが最初から居る事で、色々と変化をつけていくつもりですので、そこそこに期待してお待ちください。

それではまた、次の話で。

ｅｘ３話　『機動六課の始動と、新しい仲間の登場と』（前書き）

※前回投稿した３話が気に入らなかったので、再投稿しました。
大まかな流れは変わってませんが、細部を色々と変えてみました。

ｅｘ３話　『機動六課の始動と、新しい仲間の登場と』

ｓｉｄｅ：ギンガ＝ナカジマ

『うえぇぇん……』

公園のようなところで、青いロングヘアーの小さな女の子が泣いている。
そんな彼女を、私はぼんやりとした意識のままで見つめていた。
本当なら直ぐ側に行って慰めてあげなきゃいけないのに、何故かそれはしなくていいって確信がある。私がしなくても、きっと大丈夫って確信が。

『ギンちゃーん！　どこー？』

どのくらい女の子が泣いていただろうか。
不意に、私の後ろから小さな男の子の声が聞こえてきた。
相変わらずぼんやりした頭のままで意識を背後にうつすと、私の後ろ――丁度この場所に入ってくる入り口の辺りを、金髪の男の子がキョロキョロと忙しなく視線を動かしながら走り回っているのが見えた。
あ、なんだかこの子見覚えあるなぁ……。
なんて私が思っているうちに、男の子は泣いてる女の子を見つけたのか公園の中へと入ってきて、一目散に女の子のところまで駆け

寄った。

『ギンちゃん！』

『ひぐっ……ハー君？』

女の子は名前を呼ばれ、泣くのをやめて男の子を見上げる。

『どうしたのギンちゃん、いつまで待っても家に来ないから、心配したんだよ？

……わっ、膝擦りむいちゃってる！？　痛くない？　大丈夫？』

近くまで寄ってきた男の子が、女の子の膝から血が出ているのを見て驚いた顔になった。

すると、それでまた膝の痛みを思い出したのか、女の子の目にみるみる涙が溜まっていき、すぐにその子はまた泣き出してしまう。

『あわわ、泣かないでよギンちゃん。ほら、飴あげるからさ』

『うわぁぁぁんっ！　痛いよぉぉぉ～～～っ！！』

『あわわわ……えっと、えぇっと……っ！　そうだ！』

全然泣き止んでくれない女の子に困惑してた男の子だったけど、

不意に何かを思いついたのか、男の子は女の子の目の前に回って彼女の肩に手を置く。いきなり肩に手を置かれて驚いたらしく、女の子はビクッと身体を震わせて顔を上げた。
女の子は泣いたままだったけど、男の子は凄い真剣な顔でその子の目を見つめている。

と、そこでようやく今までぼんやりしていた私の意識が、一気に覚醒していく。
同時に私の頬が一気に熱を持ち、私は慌てて大声をで叫びながら2人に向かって走り始めた。

（だ、駄目！　まだ子供にそれは早いから駄目ーっ！）

だけど叫んだ筈の私の声は声にならず、頭の中に響いただけ。
そうしている間にも2人の顔の距離はどんどん近づいていってー。

◇◇◇◇◇

「わきゃあぁぁぁあいたぁっ！？」

慌てて飛び起きた瞬間、2段ベッドの天井に思い切り頭をぶつけてしまう。

ゴンッ！　と凄い音がして、同時に額に激痛が走る。

「……っ！　……っ！！」

その痛みに悶えながら、私はベッドの上をゴロゴロと左右に転げまわった。

暫くそうして痛みが消えるのを待ってから、今度はゆっくりと身体を起こしてベッドから降りる。

うぅ、朝からとんだ災難だよ……。

「なんで今更、あんな昔の夢なんか見ちゃったんだろ……」

多分、昨日久しぶりにハヤト君と私、そしてスバルの3人で話をしたからだろうなぁ。

でも……だからって、何もあの時の夢を見なくたっていいのに。

あの時の事なんて、今日夢に見るまですっかり忘れたのに。

「うぅ、恥ずかしい」

呻くように呟きながら、熱くなった頬を冷ますように右手でパタパタと自分の顔を扇ぐ。

子供の時だったから別に他意は無いってわかってるけど、それでも恥ずかしいものは恥ずかしいもん。

もう……朝からこんな思いをするのも、全部ハヤト君のせいだよ。

昔から変なことばっかりして私の事を困らせておいて、本人は知らんぷりで2，3日したら忘れてるんだもんなぁ……まったく。

一向に冷めてくれない頬の熱を感じながら、ハヤト君に濡れ衣を着せて責めてみる。

本人を責めてる訳じゃないんだし、実際ハヤト君のせいとも言えるんだから、いいよね。

「……でも、懐かしかったなぁ」

そんな風に呟いて、枕元に置いた写真を手に取って持ち上げた。

その写真に写っているのは、小さい頃の――丁度さっき私の夢に出てきた8歳くらいの頃の私とハヤト君、そしてハヤト君を両脇から取り合っている、小さい頃のハヅキさんとスバル。

こんなに小さい時から、ハヅキさんとスバルはブラコンだったんだよねぇ。

ハヅキさん、どうやってあそこまで洗脳したんだろ？　実姉の私よりもハヤト君に懐くって、よっぽどの事だと思うんだけど……。

「まぁ、お陰でハヤト君ってば、全然女の子にモテなかったけど」

クスクスと笑いつつ、「モテてーっ！」と叫んでむくれていたハヤト君の顔を思い出す。

しょうがないと言えばしょうがないんだよね。だって、四六時中ハヅキさんかスバルが引っ付いてて、近づいてきた女の子達を威嚇するんだもん。そりゃ女の子達は近寄りがたいよ。

実際私だって近寄りがたかったし。

「そのせいか、今じゃゲームが恋人みたくなってるけどね……ハァ」

あーあ、自分で言ってて情けなくなってきちゃった。

昔は頼りがいがあって、凄くカッコイイ男の子だったのに、女の子にモテないからって捻くれて育っちゃった結果がアレだもん、そりゃ溜息も吐きたくなるよ。

お陰で私も、毎日毎日ハヤト君のフォローしなきゃならなくなったし。

……今度からはティアナも居るし、少しは楽できるといいなぁ。

ハヤト君のフォローって、すっごく気力使うんだもん。これじゃあ老け込んじゃうよ。

「なんてね。さぁ、急いで着替えなくちゃ。ハヤト君の事、起こしに行かなきゃだし」

小さく独り言を締め括って制服に着替え始める。

時間はまだまだ余裕だけど、急がなくちゃ。ハヤト君ってば、寝起きの悪さには定評があるしね。

ｓｉｄｅ：ギンガ＝ナカジマ　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ３話　『機動六課の始動と、新しい仲間の登場と』

「ふふふ……今度の職場は楽しみだな、仕事にもやり甲斐が出るってもんだ！」

現在の時刻は１２時過ぎ。
機動六課始動式を終えた俺は、挨拶をしてくれた高町一尉、ハラオウン執務官、八神二佐を始めとした美人揃いの隊長陣の顔を思い出し、ニヤニヤしながらそう呟いていた。
特にフェイト＝Ｔ＝ハラオウン執務官！
あの胸はヤバイね。もう見た瞬間に圧倒されたよ。

久しぶりに、俺のおっぱい計測器（スカウター）のゲージが振り切れたわ。
あれは確実にＥ……いや、ＦもしくはＧと見たね！

「セクハラしな～いの」

「いでででで！　耳を引っ張るな耳を！　伸びるだろうが！」

「全く、ちょっと目を離すとすぐにセクハラ発言するんだから……。
そんな調子で六課で上手くやっていけるのか、お姉ちゃんは心配ですよ」

「うわーうぜー。3日早く生まれただけでお姉さん面うぜー」

「ハヤト君の方が数万倍ウザいですー」

「何だとこの野郎」

「何？　やるなら相手になるわよ？」

「ちょ、ちょっと2人ともやめてくださいよ！　何でいきなり喧嘩腰なんですか！」

調子にのったギンガを懲らしめようとしたら、ティアナが慌てて割って入ってきた。

邪魔をしないでくれティアナ。このお姉さんぶってる脳筋に、どちらが上位の存在なのかを体に教え込んでやらなきゃならんのだ！

「意味分かりません！　と、とにかく、これから同じフォワードチームのメンバーに会いに行くんですから、仲良くしてください。お願いですから」

「むぅ……年下にそう言われては断る訳にはいかんか」

「そうだね。ティアナに気苦労かけるわけにもいかないし」

「命拾いしたな、ギンガ」

「あら？　ハヤト君こそ、黒星が増えなくて良かったわね？」

俺が勝ち誇った顔で見下ろしてやれば、ギンガは嘲笑を浮かべてこっちを見る。
いい度胸だこの脳筋。その大胸筋だけでデカく見せてる胸をベッコベコに凹ましてやらぁな。

「やんのかコラ？　あ゛？」

「あらあら、やるの？　ハヤト君」

「だからやめてくださいってばぁっ！」

「あたしを無視するなーっ！」

「うおぁっ！？」

再びギンガと俺が睨みあった瞬間、スバルが「にゃーっ！」と叫びながら俺の背中に飛びついてきた。
俺は驚きながらもそれを受け止めて、倒れないように足を踏ん張る。
静かだと思ったらいきなりコレか！　俺じゃなかったら倒れてたぞ、オイコラスバル！　人にいきなり飛びつくなって何万回言えばわかるんだお前は！？

「ねぇねぇ。ハヤ兄とギン姉も、あたし達と一緒になのはさんの教導受けるんだよね？　だよね？」

「無視かい！　……あー、もういいや」

人の注意を軽くスルーしながら、スバルが満面の笑みを浮かべてそう尋ねてくる。

この野郎、何て能天気な……いやまぁいいけどさ。でも、コイツ聞いてないんだろうか？

「スバルよ」

「なぁに？　ハヤ兄」

「俺とギンガも一応教導を受ける予定はあるけど、時々しか受けねーぞ？」

「え？　……えぇー！？」

俺の言葉に、スバルが耳元で思い切り驚きの声を上げた。

「ハヤ兄とギン姉、あたし達と一緒じゃないの～！？」

「うっせーよ馬鹿。耳元で騒ぐな」

「あにゃっ！？」

人の背中に乗ったまま、わざわざ耳元で大声を出して叫ぶスバル

に、黙らせる意味合いと教育的指導も兼ねて額を叩いておいた。
相変わらずムダに声がでかいなコイツは、鼓膜破れるかと思ったっつーの。
まぁ、とりあえずそれは置いといて、解説の続きだな。

「配属的には同じ前線部隊だけどな。ただ、俺とギンガはハラオウン執務官の捜査を補佐するって仕事があるから、お前やスバルと一緒に毎日訓練を受けたりはしないって話だ。
流石に捜査の資料とかを纏めながら、その上で訓練とか身がもたねぇからな」

「あら？　私は別に平気よ？」

「体力馬鹿は黙ってろ」

「んな……っ！？」

今言ったとおり、俺とギンガはスバル、ティアナの2人とは微妙に配属が違う。
大まかな括りでは同じ前線部隊なのだが、スバルとティアナは高町なのは一等空尉が担当する、教導を中心とした日程を過ごす事になり、俺とギンガはハラオウン執務官の補佐をメインとした日程を過ごす予定なのだ。
ちなみに俺は捜査官の資格は持ってないんだが、まぁゲンヤさん的にはギンガと俺、2人1組で一人前っていう認識なんだろう。迷惑な話である。

「えぇ～、いいじゃん、頑張って一緒に訓練しよーよー」

「我儘言うなっつの。いいだろ、憧れの高町一等空尉の教導だぞ？存分に受けてこいよ」

「うー……確かに、なのはさんの教導は楽しみだけどさぁ。やっぱりハヤ兄と一緒じゃないと寂しいなぁ……あ、もちろんギン姉も一緒じゃないと嫌だよ？」

「……何で実姉の私がおまけっぽいのかしら」

口を尖らせて俯くスバル。どんだけ残念がってんだよって話だ。ったく、こいつは１５になっても相変わらずだなぁ。少しは落ち着いてると思ったんだが……。

慕われて悪い気はしないけど、いい加減兄離れして欲しいわけですよ、兄貴分としては。

「だって折角同じ部隊になれたんだし、ハヤ兄とギン姉にいっぱい誉めて欲しいんだもん」

「スバル……もう、仕方ない子ね」

いやいやギンガ。そこは嬉しそうに頬を染めてはにかむ場面と違うから。

どっちかっつーと、スバルの幼さに呆れる場面だから。

「ねぇ、ハヤト君。スバルもこう言ってるし、やっぱり私達も訓練――」

「却下」

「えー」

「えー！」

ギンガの申し出を一刀両断すると、姉妹そろってブーブー文句を垂れてきやがる。

ブーブーうるさいぞ、お前らは豚か！

「し、失礼な！　そんなに太ってません！」

「そうだよ！　あたしだって、（ピー）キロ台をちゃんと維持してるもん！」

「いや、聞いてないから」

ギャーギャー騒いでるナカジマ姉妹は放っておいて、視線を隣に居るティアナに移す。

さっきから身内だけで騒いじまってるから、寂しい思いさせちまったら悪いし、それにこれから同じチームになるんだから親睦を深めておくのも悪くないだろうしな。

「悪ぃなティアナ。うるさくしちまって」

「いえ。こういうのは、スバルで慣れてますから」

「……お互い大変だなぁ」

「ハヤトさんと一緒にはされたくないです。むしろ元凶じゃないですか」

「え」

「え？」

お互いの苦労を分かち合おうとしたら、何故だか元凶呼ばわりされたでござる。

全く失敬な。俺はいつだって巻き込まれる側で、哀れで可哀想な被害者だというのに。

「あははっ、その冗談笑えますね」

「冗談じゃねーし」

「スバルから聞いてますよ？　ハヤトさん、昔から一番騒ぎを起こしてたって」

「よーしスバル今すぐ背中から降りろこの野郎。

俺のこの手が真っ赤に燃えて光って唸って轟き叫んじゃうぞこんちくしょうめ」

「やーだー、降りないもーん」

背中にしがみついてるスバルを振り落とそうとしてみるが、スバルはキャーキャー喜ぶばかりで一向に振り落とされやしねぇ。それどころか、余計に密着してくる。

そうやって暫く振り落とそうと試みてみたが、結局俺が疲れたので断念。

スバルを背中に乗っけたままで、他のチームメンバーと顔合わせする場所へと向かうのだった。

はぁ、マジでスバルには困ったもんだ。

おいギンガ、お前の妹のブラコンはどうにかならんのか？

「私にはどうにも出来ないかなぁ。諦めるって、時には大事だよ？ねぇティアナ」

「そうですね。あたしも一緒に居て慣れた……ってゆーか諦めましたし」

お前ら2人して諦めてんのかよ。

いやまぁ、俺も半分以上諦めてますけどね。長いこと幼馴染やってきて、すでに矯正不可能なレベルでスバルがブラコンになってるの知ってるし。でも、諦めない心ってステキだと思うんだ。

だから2人にも、諦めない心を持って欲しいんだよ！

「……さ、ティアナ急ごっか。ちょっと時間かかっちゃったし」

「はい。あんまり待たせたら悪いですもんね」

俺の深イイ話を見事にスルーしてくれるティアナとギンガ。

聖王様、俺に味方はいないんでしょうか。そんな人生悲しすぎるんけど！

「ハヤ兄！　あたしが居るよ！！」

「いや、お前はむしろ元凶だから。味方だって言うなら背中から降りろ」

「味方だけど、それは嫌～♪」

「やれやれ……」

そんな風に騒ぎながら、俺達は少しだけ早足でチームメンバーと顔合わせする場所へと向かう。

前にチラッとみた資料によれば、俺達と同じ前線部隊、フォワードチームに配属されているのは俺を含めて６人。ここに４人が揃ってるわけだから、今から会うのは残りの２人って事になる。

マトモな奴等だといいなぁ。主に俺の精神安定的な意味で。

◇◇◇◇◇

程なくして、俺達は目的の場所――機動六課第3休憩室へと辿り着く。

「ほれスバル、いい加減降りろ。新しいチームのメンバーに、子供って思われるのは嫌だろ？」

「はーい。んしょ、っと」

スバルを背中から降ろしてから、軽くあたりを見回す。

休憩室って名前の割に、人の気配は全然無い。まぁ、今日が六課稼動初日な訳だし、他の職員達も自分の同僚と顔合わせ中だろうから当然と言えば当然か。

そんな閑散とした休憩室の長椅子に座って、楽しそうに会話している1組の少年少女が座っているを発見した。他に人がいない事から考えるに、あの子達が俺達のチームメンバーって事なんだろう。

「あの2人か？」

「そうじゃないかな。他に人も居ないし」

俺達と同じ陸士制服を着ているとこを見る限り、十中八九間違いないだろうな。

という訳で、まずは遠目に2人を観察してみる。見た目的には10歳前後ってとこか？　あんな若いのにエリート部隊のここに居るとか、すっげー才能なんだろうな。

ちょっと羨まし……くはないぞ。俺は大人だもんよ。

「羨ましいなら羨ましいって言っちゃえばいいのに。意地っ張りだね、ハヤト君は」

「うっせーよ。おーい、そこの少年少女ー」

人の思考を読んでからかってくるギンガに悪態を吐きながら、2人に近づきつつ声を掛けてみた。

俺の声に2人はこっちを振り返り、椅子から立ち上がって小走りに俺の方へと駆け寄ってくる。そして俺は2人が目の前に来たところで、軽く笑いかけながら確認してみた。

「えーと、確認したいんだけどさ。君らって、機動六課フォワードチームの子？」

「はいっ！」

確認するような俺の問いに、赤毛の男の子がハキハキと答えを返してくる。

うんうん、素直そうないい子じゃないか。どこぞの犬っ子にも見習わせたいくらいだ。

「エリオ＝モンディアル三等陸士、１０歳であります！」

「キャロ＝ル＝ルシエ三等陸士、えぇと、私も１０歳であります。それで、こっちが白竜のフリード」

「きゅくる～」

俺が感心していると、２人はビシッと綺麗な敬礼をしながら自己紹介をしてくれた。

ここまでキチッと自己紹介されたら、こっちもちゃんと自己紹介を返さないとな……てなわけで、俺達４人も２人に向かって言葉を返す。

「俺はハヤト＝ロックウェル陸曹、１７歳だ。エリオとはルームメイトになる予定だから、よろしくなー」

「私はギンガ＝ナカジマ陸曹、同じく１７歳だよ。キャロちゃんとルームメイトになる予定なの。よろしくね」

「ティアナ＝ランスター二等陸士。１６歳よ」

「スバル＝ナカジマ。１５歳だよ、よろしくねキャロ、エリオ、フリード！」

「「よろしくお願いします！」」

「きゅく～！」

それぞれが自己紹介を終えると、エリオとキャロの２人がまたま

たビシッと敬礼を返してくる。
　随分しっかりしたお子様だ。俺が１０歳の時っつったら、もっとギャーギャー騒いでたような気がするけどなぁ。ついでに言えば、こんな風にちゃんとした敬語とかも使えなかったし。

「ハヤト君の小さい頃より、ずっとしっかりしてるよね」

「うっせー黙れ脳筋。人の考え読むんじゃねーっての」

「あら、自分で思ってたの？　ふふっ、自覚はあるんじゃない」

「ぐぬっ……こ、この野郎」

　からかう様なギンガの視線に、俺の怒りが有頂天……なんだが、流石に小さい子が居る前で大人気なくギャーギャー怒るのもどうかと思うわけで。
　仕方なく俺は騒ぎ出したいのをぐっと堪えた。
　後でエリオとキャロの２人に、ギンガが小さいころにやった色んな失敗を教える事で復讐しよう。

「さて、それじゃ自己紹介も済んだところでポジションの確認とかしておきますか」

「そうね。エリオ君とキャロちゃん……でいいかな？」

「「はい！」」

「うん。それじゃあ2人とも、こっちの椅子に座ってね。スバルとティアナはそっちで、ハヤト君は私の隣に座るように」

「何で俺がお前の隣なんだよ。ヤだよ、お前ケツでかいから席が狭いぐぇぷっ！？」

早速仕切り屋の本領を発揮しだしたギンガに抗議したら、思い切り引っ叩かれた。

何だよ！　お前のケツがデカイのは事実だろうが！　この前だって体重計に乗って絶望的な顔してたくせに！　ゲンヤさんだって知ってるぞこの野郎！

「ハ、ハヤト君のエッチ！　スケベ！　変態！　デリカシー無し！」

「んだとこの野郎！　事実を言われたからってンな怒るなぐへぁっ！？」

「うぅぅ……ハヤト君の意地悪！　おば様に言いつけてやるんだからー！」

「なっ！？　母さんに言うのはやめろよ！　小遣い止められるだろうが！！」

「エッチでデリカシーの無いハヤト君なんて、ゲームが買えなくて困ればいいんだもん！」

「何をぉぉぉぉっ！！」

結局ギンガと喧嘩を始めてしまう俺とギンガであった。
……何か最初っからグダグダだなぁ。まぁ、俺とギンガらしいっちゃらしいけどさ。

ｅｘ３話　『機動六課の始動と、新しい仲間の登場と』（後書き）

うむ、今度は結構満足のいく出来になった。
どうも、ラモンです。

第４話を期待して覗いてくださった皆さん、すみません。
ちょっと前回投稿した第３話が気に入らなかったので、書き直しして投稿してみました。
前回は暴走しすぎな感があったスバルを大人しめにしてみたり、その他にもちょこちょこと変えてみて、今度は自分的には満足のいく出来になっております。

ただ、どうしてもエリオとキャロの影を濃く出来なかったのが残念ではありますね。
まぁ２人はまだ初登場ですし、次回から色々と話に絡ませていきたと思っています。だって折角なら皆でワイワイ騒いでる、歳相応なエリキャロを書いてみたいですしね。

あと、これから以下は前回投稿した第３話と同じ後書きとなりますので、飛ばしてくださっても大丈夫ですよー。

さて、劇中でハヤトも言っていましたが、ハヤトとギンガはＦＷではありますが、教導がメインではありません。
どちらかというと、フェイトと一緒に事件捜査なんかを担当することが多くなるようにしてみました。

これは、折角色々とオリジナル設定を入れたんだから、展開も今までと変えてみたいな～と思ったからです。

ティアナ・スバルルートでは前線メンバー、特にＦＷを中心に物語を展開していきましたが、ギンガルートではロングアーチを始めとした、前線メンバー以外を中心にしてみたいと考えています。

もちろんＦＷメンバーも出てきますけど、物語の視点が全く違う感じになっていくと思います。
だから、スバティア両ルートでは空気っぽかった、はやて、シグナム、シャマル、そして聖王教会のカリムとシャッハさん辺りが活躍する可能性も無きにしも非ず！　という感じになりますかね。
まぁ、私の力量を考えると、そう上手くいかないとは思いますけど（笑）

次回は……実はどうするか特に考えていませんｗ
仕事風景あたりをちょこっと書きたい気もしますが、原作通り訓練をやるのも面白そうですし……という感じです。
どうなるか分かりませんが、全力全壊で頑張っていこうと思います。

それではまた、次の話で。

ｅｘ４話　『上司に挨拶したり、チームについて考えたり』

「あ、そろそろ移動しなきゃ」

「ん？　……おー、マジだ」

キャロとエリオ、これから1年間チームとして過ごす事になる2人と合流した少し後。

ポジションとかについて色々と話し合っていた俺達だったが、ふと視線を上げたギンガがそんな事を呟き、その言葉に俺もまた視線を上げて同意した。

俺とギンガの視線の先にあるのは、休憩室の時計。

時間は、ここに来てから1時間くらい経っている。

「確かこの後は、それぞれ上司の人と顔合わせだったか？」

「うん、私とハヤト君はフェイトさんとで、スバル達はなのはさんと、だね」

「あいよ。んじゃ、さっさと移動すっか」

確認するギンガの言葉に頷いて、座っていた椅子から立ち上がる。

すると、それに続いてティアナとエリオ、キャロのチビっ子2人も椅子から降りた。

そして時間も迫ってるしさっさと行こうと歩き出した、その途端。

「ハヤ兄、途中までおんぶー！」

「うおっ！？」

そんな感じで、またしても後ろからスバルに飛びつかれた。

飛びつかれた勢いで転びそうになるのを何とか踏ん張り、人の背中に飛び乗ってきたスバルを肩越しに振り返って軽く睨む。

「お前なぁ……」

「えへへー」

「はぁ……まぁいいか」

チビっ子2人の手前、ちゃんと叱らなきゃと思ったんだが、人の背中で嬉しそうに笑っているスバルを見ると、何だか毒気を抜かれてしまって結局溜息を吐くだけにした。

あー……こーやって甘やかすから駄目なんだろうなぁ。

でも仕方ないじゃん？　なんかこう、妹とかは無条件で甘やかしたくなるじゃん？

だから俺がスバルに甘いのも、仕方ないことなんだよ！

「ハヤト君って、実はハヅキさんの事言えないくらいシスコンだよね」

「う、うるせぇよ！　誰がシスコンだ誰が！　ぜってーちげーし！！」

「ふふっ、照れない照れない」

「だぁから違うっつってんだろ！？　チビっ子2人が誤解すんだろが！！」

「「あ、あはは～……」」

必死に否定していたら、チビっ子2人に苦笑されてしまった。
あれは確実に誤解してるな。違う、違うんだ2人とも！　俺はシスコンじゃない！
ちょっと年下に甘いだけの、至って健全な17歳男子　かっこ彼女募集中　かっことじ　なんだ！！

「え、えぇと……？」

「大丈夫だよ2人とも、ハヤ兄はとっても優しいから」

「ぐぬ……ち、ちげーし！　全然優しくねーし！」

「そう言いながら、スバルは振り落とさないんですね」

「しょうがないよ。だってハヤト君、シスコンだし」

純粋な好意で人を陥れてくるスバルの言葉を全力で否定すれば、

今度はニヤニヤと笑ったティアナとギンガが追い討ちをかけてくる。
何なのその絶妙なまでの連携プレー。いくら前々から親交があったからって、いくらなんでも連携良すぎじゃね？

「そんなことないわよ。ねぇティアナ？」

「はい。全然そんなこと無いですよ？」

「ち、ちくしょう！　誰か俺の味方はいないのか！？」

「ここにいるぞー！」

元凶が味方になっても嬉しくありません。
ああもう、情けないがエリオとキャロの2人に味方になってもらおう！
エリオにキャロ！　2人は俺の味方になってくれるよな！？

「ハヤトさん達、凄く仲良しなんですね」

「ちょっと羨ましいです」

「あ、駄目だこの2人天然さんだ」

絶望した！　俺の訴えにズレた答えを返してくれた2人に絶望した！
ちくしょう、なんだこのフォワードチームは！　世話焼き脳筋に

犬っ子、そして天然さんが2人、まともなのはティアナだけか！
ティアナ！　お前は俺を見捨てたりしないよな!?　な!?

「ハヤトさん、現実を受け止めるって大事ですよ?」

「酷いっ！　薄々気付いてたけど、そんな思いっきり現実を突きつけなくてもいいじゃん！」

「これから同じセンターガードとしてやっていくんですから、早いうちに現実を認めさせるのも、チームメイトとしての役目かと思いまして」

「嘘だっ!!　そのニヤニヤしてる顔は、絶対にそんなこと思ってねぇっ！」

「言いがかりはよしてください、ハヤトさん」

「じゃあそのニヤニヤ笑いを引っ込めろー!!」

ギンガとティアナに弄られながら、大声で叫ぶ俺であった。
畜生！　何かこの一瞬で、フォワードチームでの俺の地位が決定した気がする!!
全部スバルのせいだ！　あとでおしおきしてやる！

「またまた、出来ないくせに強がっちゃって」

「うるせーーーっ!!」

ギャーギャー騒ぎながら途中までスバル達と一緒に移動し、途中で俺とギンガだけが別の通路へと分かれた。まぁ、俺とギンガはスバル達とは違う場所で、別の上司に挨拶するんだから当たり前だわな。

ちなみに俺達はフォワードメンバーではあるものの、上司となる人は高町一尉じゃない。

いや、厳密に言うなら高町一尉もまた上司ではあるんだが、まぁそこは色々と複雑な事情があったりなかったりという事でご了承願いたい。

「しっかし、チビっ子2人は随分と礼儀正しかったよなぁ」

「うん。凄くいい子みたいだし、スバルやティアナとも直ぐに仲良くなれるんじゃないかな」

「ん。まぁ堅苦しいのがちっと気になるけど、それは慣れるのを待つしかねぇか」

「そうだねー……ふふっ」

「なんだよ、いきなり笑ったりして」

話してる途中でいきなり笑い出したギンガにそう尋ねる。
すると、ギンガはクスクスと笑いながら「ごめんごめん」と謝って言葉を続けた。

「ハヤト君、相変わらず小さい子には優しいな～って思ってさ」

「はぁ？」

「さっきもさ、エリオ君とキャロちゃんが変に遠慮しないように、あんなに騒いでたんでしょ？」

「……さてね」

こっちを覗き込んでくるギンガから視線を逸らし、そんな風に惚ける。
確かにそういう事を思わなかった訳じゃないけど、イチイチ指摘すんなっつーの。そーゆーのは仮に気付いても知らないフリをすんのが礼儀だろうが、まったく。

「別に照れなくてもいいのに」

「照れてねーよ。つか別にそんな事思ってねーし」

「そうだね、ハヤト君はただ単に小さい子に優しいだけだもんね？」

人聞きの悪い事を言うんじゃねぇよ。それだと俺がロリコンみたいじゃねーか。

俺は年上で巨乳のお姉さんが好きなんだよ。それに俺はいつでも誰にでも優しいんだよ！

「そうかなぁ？　私、いつもハヤト君に虐められてると思うんだけど？」

「十分優しくしてると思いますがね」

「うふふっ……はいはい、そういう事にしておいてあげる」

肩を竦める俺と、口元に右手を当てて笑うギンガ。

ったく、こういう時のコイツはからかい甲斐が無くて面白くねーんだよな。

ギンガは主導権握られると弱いくせに、自分が主導権握ってる時は欠片も動揺したりしねぇ。つーか逆に俺の事をからかってくる始末だ。しかも、こうなると今までの経験から言って、俺は絶対にギンガに勝てなかったりする。

「じゃあ、優しいハヤト君は私の分の仕事も頑張ってくれちゃうよね？」

「それとこれとは話が別ですー」

「ホラ、やっぱり優しくない」

「厳しくするのも優しさなんだろ？　お前が何時も言ってることじゃねーか」

「アーアー聞こえなーい」

人の反論を両手で耳を塞いで聞こえないフリをするとか、１７歳のすることじゃねーだろ。

つーかそのニヤニヤ笑いを引っ込めろ。すっげームカつくんですけど！

「アーアー聞こえなーい。全然聞こえなーい」

「……はぁ」

悪びれる様子もないギンガに、なんだか怒るのもバカらしくなって溜息を吐く。

どうせこの状況じゃこいつには勝てないんだから、イチイチ反論してもギンガを楽しませるだけだ。

なら、さっさと話題を切り替えてこっちのペースに持ち込んだ方が話が早い。

という訳で、俺はやや強引に話題を摩り替える。

「そういや、エリオが入ったお陰で前衛３人に増えたよなー」

「あ、誤魔化した」

「前衛がお前とスバル、エリオの3人、後衛が俺とティアナ。そんで支援がキャロ。
まぁ、悪くはないバランスだわな。お前はクロスとミドルの距離の出し入れも出来るし」

「あはは、ハヤト君らしい誤魔化し方だね……うん、私も結構いいバランスだと思う」

チームに置いて、基本的に前衛と後衛の比率は2：1ぐらいの方がいい。
あんまり前衛が多すぎると後衛のフォローが追いつかないし、後衛が多いとチーム全体の防御力的な面で不安が残るし、支援が居ないといざって時に不都合が起きる可能性が非常に高い。
そう考えれば、フォワードチームの構成はかなりいい方だと思う。

「とはいえ、エリオとキャロはまだ子供だかんなぁ……あんま無理は出来ないか」

「うん。さっきの話を聞いてた限りだと、チームを組むのも初めてみたいだったし」

「だよなぁ。ま、あの4人がチーム戦に慣れるまでは、俺らでフォローするっきゃないか。
ティアナもスバルも、何だかんだでこれだけ大所帯なチームは初めてだろうしな」

喋りながら、スバルからちょくちょく送られてきたメールの中身を思い出す。
ティアナとスバルの２人は、コンビとしてそれなりに場数を踏んではいるが、コンビで戦うのと大所帯のチームの一員として戦うのとでは、動きなどの勝手が大分違う。
まぁ、それは訓練をするうちに何とかなると思うが、最初のうちはフォローが必要だろ。
なにせ俺とギンガは、１０８部隊でチーム戦闘は何度もやってるからな。

「つっても、俺とギンガはあんまり訓練とかには参加しねーんだがな」

「でも、相談に乗ってあげたりは出来るよ。特にエリオ君とキャロちゃんは私達と同室なんだし、色々と出来ることはあるんじゃないかな？」

「だな。じゃあ、今日の夜から早速俺がＢＳＰの布教を……」

「それはやらなくていいからね？」

いきなり全てを否定されてしまった俺であった。
いいじゃねーかゲーム！　年頃の男なら、誰でも夢中になる夢の機械なんだぞ！？
つーか、それを否定されたら俺はどうやってエリオとコミュニケーションを取ったらいいんだ！！

「普通に喋るとか、何か他にも色々あるでしょ！？　何でゲーム一択なの！？」

「？」

「いや、そんな「わけがわからないよ」みたいな顔されても！　むしろ私の台詞なんだけど！」

「俺からゲームを取り上げたら、もうおっぱいに対する執着しか残らないじゃないか！」

「そんなの絶対におかしいから！」

何故か必死になって、俺がエリオにＢＳＰを普及することを阻止しようとするギンガ。

なにがそんなに気に入らないんだろうか。スバルだって、今じゃ立派なＢＳＰユーザーだろうに。

「だからだよ！　ハヤト君のせいで、一時期スバルは休日に１日中家に引き篭もってゲームをやってたんだから！　同じ犠牲者は出させません！！」

「休みの日に１日中とか基本だろ」

「どこの基本！？」

俺の言葉に、何でか再びギンガは驚いた顔をする。
新作のゲームを買ったら、それこそ1週間徹夜とか普通だと思うんだが……。
どうやらＢＳＰのヘビーユーザーである俺の価値観は、脳筋であるギンガには分からんようだ。
なんとも哀れな女よ……あの楽しさが分からんとはな。

「哀れでいいから、永遠に分かりたくないよ……何か情けなくなってきた……」

「そ、そんなガチの反応すんなよ、何か俺まで悲しくなってくんじゃん……」

最終的に、２人揃ってテンションダウンしてしまう俺達であった。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「え、えっと……」

機動六課第３会議室。
執務官であるフェイト＝Ｔ＝ハラオウンは、自分の前に立つ２人――今日から自分の仕事を手伝って貰う事になる、ギンガとハヤトを見て戸惑いの声を漏らした。
というのも、何故か２人とも滅茶苦茶にローテンションだからだ。
２人揃って憂鬱そうな顔をして、俯いた上に溜息まで吐いている。

「ど、どうしたの２人とも？」

「いえ……気にしないでください。ハヤト君のせいなので」

「お前のせいだろが……」

「ハヤト君のせいですー……」

「ちげーし……」

「何よ……」

「ンだよ……」

「あわわわ、ふ、二人とも喧嘩しないで！　ね？」

２人の様子が気になって尋ねたら、何故か一触即発の空気になってしまい、慌てて仲裁するフェイト。
仲裁されたギンガとハヤトはお互いの顔を見て「ふんっ」と鼻を鳴らした後、揃って気持ちを切り替えるように頭を振り、これまた揃って顔を上げた。

「すいません。ちょっと色々あったので」

「そ、そうなの？」

「すんません、ハラオウン執務官。初顔合わせなのに、変なとこ見せちまいました」

「私は気にしないけど……本当に大丈夫？」

「「大丈夫です」」

さっきまでの沈んだ表情に心配して声をかけたフェイトだったが、声を揃えてそう言われ、そうなんだとあっさり納得した。１９歳になっても、この素直さを保っているのはある意味奇跡かも知れない。

そんなこんなで、ようやくフェイトとハヤト、ギンガの３人はお互いに自己紹介を始めた。

「えっと、ギンガは何度か会ってるけど、ハヤト……でいいかな？

ハヤトは初めましてだよね。

私はフェイト＝Ｔ＝ハラオウン。これから１年の間、君の上司ってことになります」

「ハヤト＝ロックウェル陸曹です。捜査員の資格は無いんで、あんま役に立てるかどうかはわかりませんけど、やれる範囲の事は全力で手伝わせて貰います」

「そんなことないよ。ハヤトの資料を見せて貰ったけど、凄く優秀だと思う。
だから、頼りにさせてもらうね？」

「あー……はい。まぁ、期待に沿えるよう頑張ります」

微笑みながらそう言うフェイトに、ハヤトは照れ臭そうに頬を掻いて答える。
普段はあまり見せないハヤトの表情を見て、隣に立つギンガは楽しそうにクスクスと笑いを漏らした。
いつものハヤトなら直ぐにでもそれに食って掛かるのだが、今は他人に誉められるという慣れない経験をしているせいか、そんな余裕も無いようだ。

「そそ、それよりハラオウン執務官。俺等ってスバル達とは同じチームなんですか？」

（……あ、照れ臭くなって誤魔化した）

照れくさいのに耐え切れなかったのか、目を逸らしながら強引に話題を変えるハヤト。
ギンガはそれにツッコミを入れようかどうか迷って、流石に可哀想かと心の中でツッコむだけにする。

「あ、言ってなかったね。ハヤトとギンガの2人は、ライトニング隊に配属だよ。

コールサインは、ギンガがライトニング5で、ハヤトがライトニング6」

「5と6ですか？　1と2は隊長、副隊長として……3と4は？」

「ライトニング3はエリオ、ライトニング4はキャロだよ。あの2人は経験が少ないから、フォロー役も兼ねて2人にはライトニング隊に入ってもらったんだ」

「ああ、なるほど……了解ッス」

説明にハヤトとギンガが頷き、そのまま簡単な確認を済ませる。そして、ひと通りの説明や確認が終わると、フェイトは「そういえば」と言葉を続けた。

「2人は、エリオとキャロと同じ部屋なんだよね？」

「え？　あ、はい」

「そうッスね」

「あの子達、今まで歳の近い子と接する機会はあんまり無かったから、ハヤトもギンガも、もし良ければプライベートでも仲良くしてくれると嬉しいな」

「ああ、それはもちろん」

「同じチームの仲間ですから」

フェイトの頼みに、当然だと頷くギンガとハヤト。
スバルで慣れているせいか、2人とも年下の面倒をみるのは当然だと思っているようだ。
その返事を聞いて安心したように微笑み、フェイトは2人に向かって右手を差し出す。

「それじゃあ、これからよろしくね。2人とも」

「はい、よろしくお願いします」

「うぃッス。よろしくお願いします、ハラオウン執務官」

しっかりと握手を交わし、こうして3人の初顔合わせは無事に終了した。
この後ハヤトがフェイトに交際を申し込んだりしたのだが、まぁそれは割愛しておこう。

ｓｉｄｅ：―　了

ｅｘ４話　『上司に挨拶したり、チームについて考えたり』（後書き）

よーやく書けたー……。
どうも、ラモンです。

ようやく４話がかけました。
今回は新しいチームについてのアレコレと、フェイトとの初顔合わせを書いてみました。
年長者は色々と考えてるんですよ、という感じですね。

書いてて思ったんですが、エリキャロについて語るハヤトとギンガって、まんま子供について語る夫婦ですよね。
ハヤトもげて爆発すればいいのにと思います。割とマジで。

次回は……何を書くか未定です。
訓練か仕事の風景になるとは思いますが、思いつかない場合はファーストアラートまで時間がすっ飛ぶ可能性も。
うーん……ギンガヒロインって難しいなぁ。
自分でめんどくさい設定考えておいて、何言ってんだって話ですがｗ

それではまた、次の話で。

ｅｘ５話　『チームメイトの世話も、仕事のうちって事で』

ハラオウン執務官との顔合わせをしてから数時間後。
俺とギンガの２人は訓練着に着替えて、機動六課の中にある室内トレーニングルームに来ていた。
執務官は、八神はやて部隊長と地上本部で会議かなんかがあるらしく、俺達に仕事の説明と、今日のうちにやっておいて欲しい事を指示してから、地上本部へと行ってしまった。

んで、残された俺とギンガは執務官に言われた通り、前に居た１０８部隊から持ってきた事件資料やデータの整理をしていたんだが、流石に資料整理でそんなに時間がかかる訳もなく、２時間もしないで言われた分の仕事は終わっちまった。
ハラオウン執務官からは、終わったら今日は上がっていいって言われてたんで、俺は狂喜乱舞しながら部屋に帰ろうとしたんだ。
……そう、帰ろうとしたんだよ。

「なのに、何でこんなことになってるかなぁっ！？」

「何を騒いでるの！　ほらほら、逃げてばっかりじゃ、勝てない、よっ！」

風を切って迫るギンガの拳や蹴り足を、体のバネを使って全力で回避する。
それでも、ギンガの攻撃は避けきれずに頬や髪を掠っていく。
何でこんな状況になってるのかって言えば、部屋に帰ろうと俺が

帰る用意をしていたら、ギンガの奴が笑顔で「折角だから訓練していこうね」とか言って、俺の事を無理矢理拉致りやがったからだ。
なぁにが「折角だから」だよ！　俺は部屋に帰って惰眠を貪りたかったってのに！

「デバイス無しの格闘で、お前に、勝てる訳、ねぇだろがっ！」

全力で反論しながら、ギンガの顔目掛けて蹴りを見舞う。
けれど、殆ど格闘戦なんてしない俺の稚拙な蹴りなんかがギンガに当たる訳も無く、あっさりと避けられてしまう。ちっ、「ハヤト君の蹴りなんて余裕ですよー」みたいな顔しやがって！　ホントに可愛くねぇなこの脳筋がっ！！

「男の子でしょっ！　簡単に、諦めないっ！」

「ただの、事実、だろ！！」

的外れな説教をしながらも、攻撃の手は一向に緩まない。
それどころか、体が温まってきたのかより一層速度やキレを増して俺に迫ってくる。
今は何とかギリギリ直撃は避けられてるが、これじゃあそう時間が経たないうちにクリーンヒットしちまうだろう。くそっ、大体なんで射撃型で後衛の俺が、前衛のギンガと格闘戦の訓練してんだよ！
そんなに訓練したかったら、高町一尉のとこ行けよ！
今だったらまだ訓練中だろうから、混ぜてもらえるだろうが！

「ホラ、足元がお留守だよ、ハヤト君っ！」

「うおぁっ！？」

頭の中でギンガに文句をつけてる隙に、目にも留まらぬ速度でしゃがんだギンガの足払いを受けて、背中から思い切り地面に叩きつけられる。

余計な事を考えてたせいで意識の切り替えが遅れ、ロクに受身も取れずに地面に叩きつけられ、その衝撃で肺の中の空気が一気に口から出て行き、「かはっ」と奇妙な声が出た。

それでも反射的に身体を起こそうとして、しかし目の前に突きつけられた拳を見て、それを諦める。

「これで通算……えっと、３７８連勝かな？」

「……３７７連勝だよ畜生め」

人の顔の真ん前に右拳を突き出したまま微笑むギンガに、ギリギリと歯軋りしながら訂正しておく。

自分で言うと余計に屈辱なんですが。狙ってやがんのかこの脳筋め。

ちなみに、この通算ってのは今年に入ってからの通算であって、ガキの頃からで言うと……あー、正直数えるのも億劫なくらいに負けている。多分、数万とかそのぐらいの単位で負けてる。

……やだ、泣きそう。

「ちょっと強く倒れたけど、立てる？」

「うっせー、立てるっつーの」

涙を堪えつつ、差し出されたギンガの手を取って立ち上がり、訓練着を軽く払う。

「もー、相変わらずハヤト君は格闘が弱いなぁ」

「いんだよ、俺ぁ射撃型なんだし、ポジションだってセンターガードだ。
お前やスバルと違って格闘戦やる機会なんて殆どねーんだし、格闘が弱くたって困んねーよ」

「負け惜しみだね、分かります」

あ、今のカチンときました。
よーしギンガ、もう一回勝負しろこの野郎。今度は泣かす。絶対泣かす。
君が泣くまで殴るのをやめない！

「はいはい、それじゃあもう一回やろうか」

「かーっ！　その「絶対負けませんー」っつー余裕な態度マジムカつく！！

いいか！？　次俺が勝ったら、今週買う予定だった新作のゲーム、お前の奢りだかんな！」

「いいわよ。それじゃあ、私が勝ったらハヤト君に服でも買って貰おうかな？」

「じょーとーだコラァッ！　さっさと開始位置に戻りやがれ！」

ギンガと互いに条件を出し合い、さっさと開始位置に戻る俺。

背後から「扱いやすいなぁ」とか聞こえてきた気もするが、今はそんなのどーでもいい。

最優先事項は、ギンガを格闘でボッコボコにして、自信喪失させてやることだ。

さー、覚悟しろよギンガ！　本気になった俺は相当に強ぇんだからなっ！！

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｅｘ５話　『チームメイトの世話も、仕事のうちって事で』

それから数時間。それこそ空が暗くなるまでトレーニングルームで戦っていた俺とギンガ。

多分１０戦以上はやっていただろう。お陰で初日だってのにクタクタだ。

そんで、今俺達は朝着ていた制服に着替えて機動六課隊員寮に帰っているところ。ちなみに、俺は今猛烈に落ち込んでいる……。

「ふんふふ～ん♪　あー、今度の休日が楽しみだなぁ」

「……ぐぬぬ」

そんな俺の隣で、鼻歌混じりで上機嫌のギンガ。
上機嫌な理由？　……頼むから聞くな。お願いだ。

「なっさけないなぁ、ハヤト君。結局私に一回も勝てないなんて」

「目を逸らしてた現実を突きつけんなよ！」

「え？　だって、現実を見据えないと強くなれないでしょ？
今日だけで、黒星１０個以上増やしちゃった訳だし」

「うっせーし！　うっせーし！」

隣で上機嫌な顔で笑ってるギンガを、思い切り睨みつけてやる。
別にいーんだよ！　俺が格闘強くなったって、披露する機会なんて０に近いんだから！
だから、俺は射撃型として射撃の腕が良くなればいいだけなんだよ！　格闘とか二の次なんだよ！

「そうかなぁ？　１０８に居た時、結構格闘戦になってた気が……」

「大丈夫だ。問題ない」

「問題あるでしょ。射撃型だからって格闘を軽んじてたら、いざって時に苦労するのよ？」

「アーアー聞こえねー。なーんも聞こえねー」

「もう……」

昼間ギンガがやったように、両手で耳を塞いで聞こえないフリをしてやったが、どうやらギンガもそれなりで疲れてるようで、お得意の説教は飛んでこなかった。何だかんだで眠そうだし。

俺程度の腕じゃ大して練習にはならないんだろうが、それでも数時間ぶっ通しで格闘戦をやってれば、いくら体力の有り余ってるこいつでも、そりゃ確かに疲れもするわな。

そう思った俺は、それとなく……ギンガには分からない程度に歩く速度を落とす。

別に気遣ってるとかそーゆーんじゃないぞ。ギンガの事を置いてくと、後で女の子を置いていくとは何事ですか！　とかギャーギャーうるさいから、仕方なくスピード落としただけだからな。

勘違いすんじゃねーぞ。

「……ふふっ」

「ンだよ」

「べっつにー」

「……ケッ」

くそっ、こいつのこの『何でも分かってます』って態度はホントムカつく。

確かに幼馴染なせいか、俺もギンガもお互いの考えとか行動はある程度分かるし、それはお互いに承知してるけど、イチイチ態度に表すあたりホント性格悪いよこの脳筋。

特にギンガは、そのたびにお姉さん風を吹かせるから、尚の事ムカつくのである。

……まぁ一番駄目だと思うのは、そんなギンガの態度を、俺自身が口で言うほど心底嫌だと思ってないって事なんだけどな。

「あーもー！　さっさと帰って寝るぞ！　お前のせいで、初日から疲れちまった」

誤魔化すように大声で叫んでから、歩くペースはそのままにギンガの少し前を歩く。

そうすると、後ろからギンガの小さく笑う声が聞こえてきて、何となく耳が熱くなる。ちっ、こんな脳筋に優しくしてやろうとしたのがそもそもの間違いだったか。

「私はまだ平気なのに、そんなので大丈夫？　男の子」

「体力馬鹿なお前と違って、俺は繊細なんだよ」

「女の子に体力馬鹿って……失礼でしょ！」

「事実ですー。純然たる事実ですー。動かせない事実ですー」

昼間の分も含めて、ここぞとばかりに全力でギンガをからかっておく。

だって実際ギンガは体力馬鹿ですし？　書類仕事なら、俺の方が微妙に出来る訳ですし？

ゲンヤさんだって、書類仕事は俺の方がマシだなって言ってくれてますよね。ぷすすーっ。

「ぬぬぬぬ……」

「やーいやーい、脳筋ギンガー！」

「……ハ～ヤ～ト～く～ん～！！」

どうやらからかいすぎたらしく、ギンガの声に剣呑な響きが混じる。というか、背後から強烈な殺気をビリビリと感じた。俺は「やべっ」と小さく呟いてから、疲れた身体に鞭打って全力で走り出す。

さすがに疲れたこの状態で、ギンガの長ったらしい説教を聞かされるのは勘弁だからな。

すると、ギンガも俺が走り出すのと殆ど同時に走り出し、俺の肩口あたりを目指して思い切り手を伸ばしてくる。まぁ俺もそれは読

んでいたので、軽く身体を動かして手をかわす。
そのまま後ろを振り返れば、鬼の様な形相をしたギンガが見えた。
こりゃ捕まったりしたら、説教だけじゃすまねぇなぁ……よし、
全力で逃げよう。

「待ーちーなーさーーーーい！」

「待てって言われて待つ訳ねーだろバァーーーーカ！」

「きーーーーーーーーっ！！！！」

ギンガの金切り声を聞きながら、俺は今日一番の全力で、自分の
部屋がある機動六課隊員寮へと続く帰り道を駆け抜けるのだった。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「ぜー……ぜー……」

「はぁっ……はぁっ……」

２人で荒い呼吸を繰り返しながら、ハヤトとギンガは隊員寮の入

り口に居た。
どちらも、明らかに１０戦以上格闘戦を繰り返した後よりも疲れている。１７歳にもなって、こんなに疲れるまで全力で追いかけっこをするのはどうかと思うのだが、これもこの２人なりのコミュニケーションの取り方なのだから、野暮は言わないでおこう。

「ハ、ハヤト君のせいで……はぁっ、余計に、疲れちゃったじゃない……はぁっ」

「ぜー……お前が、追いかけて……来るからだろが……」

「ハヤト君が怒らせるような、こと、言うからでしょ……」

「事実だし……ぜーはー」

苦しげに呼吸を繰り返しながら、それでもお互いに憎まれ口を叩くあたり、流石と言うか何と言うか。
そんな風にお互いに憎まれ口を叩きながら呼吸が整うのを待ち、２人は同時に顔を上げて互いを見る。そのままもう一度何かを言おうと口を開きかけ、すぐにこれ以上は不毛だと判断したのか口を閉じ、それから再び同時に溜息をついて言葉を漏らした。

「……部屋、帰るか」

「そだね」

どうやら疲れすぎて、かえって冷静になったらしい。
揃って重い足を引き摺るように歩いて、2人は隊員寮の正面ドアを潜る。
隊員寮の入り口を入ってすぐのロビーはすでに消灯さて、昇り始めた月明かりに照らされていた。

「消灯時間にゃ、ちっと早くね？」

「そうかな？　もう7時近いし、ロビーは消灯してもおかしくないと思うけど……」

薄暗いロビーを見回しながら、2人はそれぞれさっさと自分の部屋に戻って休もうと歩を進める。

「……ん？」

その途中で、ロビーに並んでいるソファの方を見て、ハヤトがそんな声を共に足を止めた。
いきなり足を止めたハヤトに、ギンガが不思議そうな顔で尋ねようと口を開きかけたが、彼の視線の先を見て「あらあら」と小さく呟くだけにする。

2人が見つめる先……ロビーにある休憩用のスペースでは、スバル、ティアナ、エリオ、キャロの4人が思い思いの格好で――スバルはソファの背もたれに寄りかかるようにして、ティアナとキャロは互いに寄りかかって、エリオはソファの横の廊下に座って、訓練

着のまま、それぞれ静かに寝息を立てていた。
どうやら結構しごかれたらしく、４人の訓練着は初日だというのに随分と汚れている。

「こんなトコで寝てたら風邪ひくだろうが……ったく」

呆れたように溜息を吐いてから、ハヤトは寝ているスバル達の方へと近づいていく。
そして、とりあえず1人で寝ているエリオの横にしゃがんで、軽く身体を揺すりながら声をかけた。

「おい、エリオ起きろ。こんなとこで寝てんなって」

「……ぅ、ぅうん……」

「野郎の寝息はいらん。起きろ」

何度か揺すってみるが、姿勢の割に眠りは深いらしく、エリオは一向に起きる気配がない。
ギンガもソファに寄りかかって眠っているスバルに声をかけるが、こちらも一向に起きようとはしなかった。そのまま数回同じ事を繰り返した2人だったが、結局起きそうにないと結論付け、お互いの顔を見て小さく肩を竦めた。

「ったく面倒くせぇ……」

そして、エリオの横で頭を掻きながら立ち上がり、ハヤトは自分の制服の上着を抜いで、床で眠っているエリオにそれを羽織らせる。
そのままハヤトはティアナとキャロがお互いに寄りかかって寝ているソファの後ろに回りこみ、物音ひとつ立てずにティアナとキャロの腰に手を回して、2人を小脇に抱えた。ハヤトは慣れた手付きで2人を抱えなおし、向かいのソファで寝ているスバルを顎で指しながらギンガに小声で声をかける。

「ギンガ、スバルはお前な」

「了解」

ハヤトの声に答え、ギンガも音を立てず器用にスバルを背負う。
それを確認してから、ハヤトはティアナとキャロを抱えたまま、女子寮の方へと歩き出す。ギンガもそれに続き、直ぐにハヤトに追いついて彼の隣をゆっくりと歩き出した。

「それにしても相変わらず器用だね、普通そんな風に抱えられたら起きると思うんだけど」

「スバルの世話してたから、嫌でも慣れちまったんだよ」

「そっか。そういえば、昔はスバルが寝ちゃった時は、ハヤト君が家まで運んでくれたっけ」

「……いつの話してんだ、いつの」

スバル達を起こさない程度の声量で言葉を交わしつつ、なるべく揺らさないように気をつけて、ゆっくりと歩くハヤトとギンガ。

歩きながら、はやとは何度も「何で俺がこんなこと……」とぶちぶち文句を垂れるが、その顔は言葉とは反比例して嬉しそうな苦笑を浮かべているのだから、説得力が無い。

なんだかんだで、こうやって人の世話を焼くのが好きなのだろう。

「あーもー、初日っから他人の世話とかマジ勘弁だぜ」

「まあまぁ。こうやってチームメイトのお世話をするのも、年長組の役目でしょ？」

「ふざけんな。そんな役目なんざ真っ平ゴメンだっつーの。今日は初日だから大サービスしてこうやって部屋まで運んでやっけど、次は無い」

「そんな言って、どうせ次があったらまた世話しちゃうくせに」

「黙れ。黙らないとお前の恥ずかしい秘密をバラす」

「その時はハヤト君のもバラしますから、どうぞご心配なく」

「かっわいくねーの」

「どういたしまして」

溜息混じりに呟くハヤトと、クスクス笑いながらそれに応じるギンガ。

ハヤトは両脇にティアナとキャロを抱え、ギンガはスバルを背負ったまま、お互いに遠慮なくズバズバと悪口を言い合っている。

一見すると妙な光景ではあるのだが、もしこの光景の中心であるハヤトとギンガの2人の顔を見た人が居たら、揃ってこう言っただろう。

――「2人とも、それはそれは楽しそうだった」と。

まぁ、本人達が聞いたら全力で否定するだろうけど。

「あ、そういえばエリオ君はどうするの？」

「もちろん部屋に帰る前に拾ってくさ。一応上着かけたし、今日の気温なら風邪もひかんだろ」

「そっか……あ、そういえばフリードって居た？」

「いや、俺は見てねーけど……あそこに居るんなら、後で適当に拾ってこっちの部屋で寝かしとくわ」

「うん、お願いね。あ、その角は右に曲がって」

「へーへー。あぁくそっ、さっさと眠りてー」

廊下に楽しげな声を響かせつつ、ハヤトとギンガはテクテクと歩

き続けるのだった。
　ちなみに次の日、スバルとティアナの部屋に入ったハヤトが2人から「えっち！」と罵られ、ムダに年長者っぽい行為をした事を後悔するのだが――ギンガはそれを横目に見て、「締まらないなぁ」と呆れたように笑っていた。

ｅｘ5話　『チームメイトの世話も、仕事のうちって事で』（後書き）

ほのぼのが書きたかった。
どうも、ラモンです。

何かうまく投稿できなかったんで2回目の投稿。
呪われているようだ……（笑）

今回は前回からの続きっぽくして、ハヤギン夫婦をイチャつかせました。
アニメを見てて、ロビーっぽいとこで寝てるＦＷ４人を見てたら、無性に書きたくなりましてｗ
ハヤトは基本的に世話焼きですが、ツンデレなのであまりやりません。
ギンガは良妻なので、いつでも皆の世話を焼きます。
何この夫婦。さっさと結婚しろ。式場は用意してやる。

それはさておき、次回はファーストアラートあたりになると思います。
もしかしたら、もう1回日常回を挟むかもですが。
どっちにしても、ハヤギン夫婦は相変わらず無自覚にイチャつくと思いますので、糖分補給は忘れずに。

それではまた、次の話で。

ex6話　『ハヤト＝ロックウェルの1日』

機動六課が発足してから1週間。
なんだかんだで忙しくしていたせいか、思った以上に早く時間が過ぎていったような気がする。
勿論、仕事自体は滞りもなく……というよりも、むしろ１０８部隊に居た時よりも仕事をしてると胸を張れる位には頑張ってる自信があるぜ。
ギンガの奴が「……本物のハヤト君だよね？」と尋ねてくるぐらいだもんな。

全く、ギンガも失礼な奴だよ。
俺だってやる気を出せば、そんじょそこらの事務員なんかよりも遥かに仕事が出来るんだっつの。
なんせ、前の職場と違って今の職場にはハラオウン執務官の素晴らしいおっぱいが――げふんげふん。現役エリートのハラオウン執務官の仕事を、間近で勉強させてもらえるんだ。
これでテンションが上がらなきゃ嘘だろ。うん。

――とはいえ、それでも改善できてない部分もあったりする。
いや、実際には俺に改善する気が無いんだけど。

「……むぅ」

その朝は、ことさらに布団から出たくない気持ちでいっぱいだった。

まず、溜まった疲れからか体がダルい。
そして、昨日の夜遅くまでゲームをしていたせいで、非常に眠い。
ダルさと眠気のせいで、全くと言っていい程に瞼を開く気になれない。

「……眠い」

うん、眠いんだから仕方ない。

「よし」

俺は二度寝という英断を下すことにした。
流石センターガード、現在の状況を鑑みたナイス判断だぜ。
というわけでお休みなさ――

「よし、じゃないでしょーっ！」

寝返りを打とうとした瞬間、そんな聞きなれた怒鳴り声と共に俺が包まっていた布団が剥がされた。
布団を全身に巻くようにしていた俺は、布団を剥がされた勢いで一瞬宙に浮き、そのまま空中で一回転して再びベッドの上へと全身で着地する。
いてー……けど、眠いからいいや別に。

「もう、ハヤト君！　早く起きなさい！！」

「ねーむーいー……」

「眠いじゃないでしょ！　もうそろそろ早朝訓練の時間じゃない！」

「……しんねーしー」

「知らないって……はぁ、ホント仕方ないんだから」

布団が無くなったせいで余計に寒くなっちまった。

だから、とりあえず身体を丸めて寒さから身を守りつつ、後ろの方から聞こえてくる聞き慣れた脳筋の声におざなりな返事をしておく。

「ほら、身体起こして」

「うー」

瞼も開けられない程の眠気の中で、腕を掴まれて無理やり身体を起こされる。

それでも俺は瞼を開けず、ボケーっとした意識の中で声を聞いていた。

「エリオ君、ハヤト君の訓練着ってどこかな？」

「え？　訓練着なら、そっちの棚ですけど……」

「ありがと。えーと……あ、あったあった」

あーマジ眠い、ベッドに腰掛けてる体勢だけど、このまま寝るかなー……なんて俺が考えている間に、ゴソゴソと服を脱がされる感覚がする。どうやらギンガが俺の事を着替えさせようとしてるらしい。

半分寝たままの俺は、特に抵抗する事もなく夢の世界に片足を踏み入れてされるがままになっていた。

途中で「ちょっ、ギンガさん！？」っていうティアナの声とか、「はわわ……」っつーキャロの声が聞こえてきたするけど、俺を襲う凄まじい眠気の前には瑣末な事、無視しておく。

ギンガの奴も手馴れたモンで、寝惚けて脱力しまくってる俺の身体を器用に操って服を脱がして訓練着に着替えさせてるようだ。

そういや、前に寝起きの俺を着替えさせるのは慣れてるから、今ではそんなに苦労しないとか前に言ってたような気がするなぁ。そんなにギンガの世話になった覚えは無んだが……まあいいか。

「はい出来た。ほらほら立って、ハヤト君。顔とか洗わなきゃ」

「んぁ～……めんどい～……」

「めんどいじゃないでしょ。ほら、シャキッと立つ！」

数分で手早く俺を着替えさせ終えたギンガが、また俺の手を取って引っ張ってくる。
個人的にはこのままベッドに倒れこみたいんだが、か弱い一般男子である俺が脳味噌まで筋肉で出来ているギンガの力に勝てる訳もなく、夢心地のまま立ち上がり、けれどそこで力尽きてそのまま目の前に居るであろうギンガに寄りかかった。
ベッドに比べると硬いが、まぁ贅沢は言うまい。
丁度体勢的にも悪くないしこのまま寝てしまおう……ぐぅ。

「はぁ……相変わらず寝起きが悪いなぁ。年下のエリオ君が一緒なら、カッコつけようとして少しはマシになると思ったんだけど、ここまで筋金入りだったとは……甘く見てたよ。
ああもう、寝癖までついちゃってるじゃない。スバル！　ハヤト君のそっち側支えてくれる？
また寝ちゃったみたいだし、1回シャワールームまで連れて行って、顔洗っちゃうからさ」

「はーい！」

意識が落ちる寸前、そんな声が聞こえた気がしたが、夢の世界に旅立ちかけていた俺は特に気にすることもなかったのだった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ６話　『ハヤト＝ロックウェルの１日』

side：―

機動六課フォワードの朝は、早朝訓練から始まる。
とはいっても、主に訓練を受けるのはスバル、ティアナ、エリオ、キャロの４人であり、ハヤトとギンガの２人は急ぎの仕事が無い場合のみに限られている。これは２人がフェイトの補佐を務めているからという理由と、２人はそれほど基礎訓練をする必要は無いとなのはが判断したからだ。

しかし、「それほど」と言うとおり、全くしなくていい訳では無い。
２人は他の４人に比べて実戦経験が多く、それなりに基礎は出来上がっていて当然だが、それでもまだまだ訓練する余地はある。１０８部隊の資料を読んだなのはの判断はそうであった。
とはいえ２人の仕事の本分はあくまで『フェイトの補佐』な訳で。訓練と仕事を両立させなければならない２人は、実の所スバル達よりも忙しかったりするのだ。

「……眠い」

「もう、いい加減にしないと怒るよ？」

「だってよー、カレンがよー、避けてくれなくてよー……」

「聞いてないし……ああもう、まだ寝惚けてるの？」

「何で命中率８０％を外すんだよー……」

「あーもー」

けれど、欠伸を噛み殺すハヤトと、そんな彼を見て呆れたような溜息を吐くギンガは、そんな忙しさは微塵も感じさせない。ここいら辺はちゃんとした実働部隊に居た証なのだろう。

まぁ、ハヤトに関してはそれらしい行動を殆どしてないのが問題ではあるのだが。

「もういい年なんだから、朝の用意くらいちゃんとしてよね。女子寮と男子寮は離れてるし、これからは前みたいに毎日起こしに行ったりは出来ないんだから」

「何でそこで落ちんだよルナー……使えねー……ぐぅ」

「ハヤト君！」

端から見たら痴話喧嘩にしか見えない２人から少し離れた場所。自分達の声が２人に聞こえない程度のその場所で、ティアナとスバル、エリオ、キャロの４人は互いに顔を付き合わせて小声で囁き合っていた。

「ねぇスバル。あの２人、本当に付き合ってないの？」

「うん。そーゆー話は聞いてないよ」

「アレで？」

「アレで」

「でも……どう見ても……」

「ですよね……」

途中でチラチラと様子を窺えば、もう殆ど密着状態でハヤトの事を叱っているギンガ。

その様子はどう見ても痴話喧嘩をしている恋人同士で、これで付き合っていないのが不思議だとティアナ達が思うのも仕方ないだろう。バカップル滅べ。

……閑話休題。

実際、この1週間の間に2人と仕事をした人間の殆どが、2人は既に付き合っていると認識していた。

最も多く2人と一緒に仕事をしているフェイトなどは、真相を聞くまでの間、本気で2人が結婚してると思っていたとか何とか。

「てゆーかスバル、ギンガさんって昔から今朝みたいなことしてたの？」

「ん？　今朝って？」

「だ、だからその……ハヤトさんの事を着替えさせたりとか……」

殆ど初めてに近い、間近に見た歳の近い少年の裸の上半身を思い出したのか、スバルに詰め寄ったティアナの言葉尻がもごもごと頼りないモノになり、頬が薄く朱に染まる。

そんな彼女につられたのか、キャロもその光景を思い出して、ティアナよりも真っ赤になった頬に手を添えて、「へぅ……」と可愛らしくも情けない声を上げた。

「そだねー。あたしが知ってる限りだと、小さい頃から殆ど毎日やってたと思うよ。

ハヤ兄の寝起きの悪さは、ハヅ姉も匙を投げたくらいだからね。ちなみに、あたしはもうとっくにハヤ兄を起こすのは諦めてるよっ！」

「何でそんな誇らしげなのよ……」

「あ、あはは……」

何故か誇らしげに胸を張ってドヤ顔と共に告げるスバル。

その答えを聞いて、ティアナは何かを諦めたような溜息を吐き、エリオは苦笑した。キャロはまだ顔を赤くして「へぅぅ……」と小さく声を漏らしている。どうやら少女に、それなりで鍛えられた少年の上半身は刺激が強かったらしい。

そうこうしているうちに、彼女達の教導を担当している空戦のエキスパート――エース・オブ・エースの称号で呼ばれる高町なのは一等空尉と、その親友であり、雷神の異名を持つフェイト＝Ｔ＝ハラオウン執務官の２人が、訓練着姿でやってくる。

「お待たせ」

「ゴメンね、遅くなっちゃって」

朗らかに笑う2人の姿を見て、ハヤトを除いた5人が一斉に姿勢を正す。

ハヤトも条件反射的に姿勢を正してはいるのだが、目を瞑った上に首が頼りなさ気にガクンガクンと揺れているので、眠たいのが丸分かりだったりする。

まぁ、なのはとフェイトもこの1週間で彼の人となりが分かってきたらしく、この程度では既に動揺しない。せいぜい、またかぁ～、と苦笑するくらいだ。

どの道訓練が始まってしまえば嫌でも目が覚めるのだし、今は夢心地にしておこう。

何度か注意して、彼の寝起きの悪さに匙を投げた2人の出した結論は、ある種の諦観だった。

もしこの場にシグナムかヴィータでもいれば、また違った結末が待っていたのだろうが……今はそれには触れないでおくとしよう。

どの道、その2人のどちらもこの場には居ないのだから。

「それじゃあ、早速始めようか！」

「「「「「はい！」」」」」

「はぃ～……ぐぅ……」

なのはの言葉に元気よく返事をするスバル達と、寝惚けながら答えるハヤト。
この１週間ですっかりお馴染みとなった、機動六課フォワード組、早朝訓練の様子であった。

◇◇◇◇◇

「あ、コラスバル！　人の分まで食ってんじゃねーよ！」

「これってハヤ兄のだったの？　置いてあったから、誰かの食べ残しかと……」

「唐揚げを丸々１０個食べ残す馬鹿がどこにいんだよ！？　つーか食べ残しだとしたら、余計に食うんじゃねー！　行儀の悪い！」

「……食べながら大声で喋ってるハヤト君に、行儀がどうこうって言われたくないなぁ」

「って、そう言いながらてめーも人が楽しみに取っといた唐揚げ食うんじゃねーよ！」

早朝訓練の後に朝食をはさみ、午前の訓練を終えた後。

ハヤト達は、朝食を摂ったのと同じ六課隊舎の食堂で昼食の真っ最中であった。
――いや、それはある意味食事というよりも戦争と言った方が正しいのかも知れないが。

「えぇ？　ハヤト君が食べるの遅いのが悪いんだよぉ」

「お前らの食う速さと量がおかしいんだよ！　ってまた食うし！！」

「ハヤ兄、早く食べないと無くなっちゃうよー？」

「むぎぃぃぃっっ！　お前らなぁぁぁぁ！！」

あっという間に空になっていく、テーブルの上に所狭しと並べられた沢山の皿。
その原動力となっているのは、ギンガとスバルのナカジマ姉妹だ。
２人は本当に噛んでいるのかと疑いたくなる程の速度で、山のように盛られた料理を次から次へと口の中へ放り込んでいく。

見ているだけなら、凄い、の一言で済むのだが一緒に食事をするとなると話は別だ。
現に２人と一緒に食事をしているハヤトは、自分が食べようと取って置いた皿を守ることに精一杯で、とてもじゃないが自分の分を食べている余裕があるようには見えない。

「大変ですね、ハヤトさん」

「ちくしょう！　安全圏から物を言いやがってちくしょう！　だああっ！　だから人の分まで食うなっつってんだろーがーーーっ！！」

そんなハヤトに向かって、隣のテーブルでエリオ、キャロの2人と食事をしているティアナが楽しげな笑みを浮かべて声をかけた。

実はエリオもギンガやスバルに負けず劣らずの勢いで食べているのだが、流石に1人だけ、しかもちゃんと自分で持ってきた物だけを食べているので、全く殺伐とした雰囲気は無い。

「だって、スバルとギンガさんの食欲と食事スピードは知ってましたから。

むしろ何でハヤトさんは2人と一緒に座ったんです？」

「いつもの癖だよくそったれ！　ああもうヤだ！　俺ぁ他の席に行く！」

「でも、他の席は満席ですよ？」

「嘘ぉっ！？　ってホントだし！　くっ……ティアナ！　そっちに入れてくれ！」

「すみません、こっちもテーブル一杯ですから」

にこやかに笑ってハヤトの申し出を拒絶するティアナ。

実際、あと1人くらいが座って食事をするスペースはあるのだが、そうするとスバルがハヤトを追いかけて一緒に来てしまう可能性も

ある。
そうすれば、今度は自分があの戦争に巻き込まれてしまう。
ティアナとしても、流石にそれは御免被りたかった。生贄は1人で十分なのだ。

「頑張ってくださいね、ハヤトさん」

「心の全く篭もってない応援ありがとうよっ！　そしてお前らは俺の飯を食うなぁぁぁ！！」

「だからハヤト君、食事中に叫ばない。お行儀悪いよ？」

「お前が言うなぁぁぁぁぁぁ！！」

そんなこんなで、フォワード組の昼食時間は騒がしく過ぎていくのであった。

◇◇◇◇◇

昼食が終わると、ハヤトとギンガの2人とスバル達は別々の予定となる。
というのも、ハヤト達が本来の仕事であるフェイトの補佐の仕事を行うからだ。

捜査官の資格を持つギンガは、フェイトと共に事件の捜査などを行い、ハヤトはフェイトとギンガが捜査して集めてきた資料の整理と、そこから必要な情報を選り分け、報告書に纏めるのを担当している。

ハヤトの仕事は本来、フェイトの執務官補佐を務めるシャリオ＝フィニーノがやる事なのだが、デバイスマイスターも兼任している彼女は、現在とある仕事に集中している為に手が開いておらず、フェイトの補佐まで手が回らない。

そこで、ハヤトにこの仕事が回ってきたという訳だ。

「ああくそっ、ムダに量が多いなぁ……」

うず高く積もった書類の束に目をやりながら、ハヤトは1人モニタを開いてキーボードの上で手を走らせる。文句を言う割に手の動きは素早く、書類を捌く手も淀み無く動いている。

驚くべき事だが、ハヤトは至極真面目に仕事をしていた。

「えーと、こっちの資料は……ああ、こっちか。

んでコレがココにこうなって……ん？　何か違うな。間違ったか」

本来サボるのが大好きなハヤトが何故ここまで頑張って仕事をしているか。

それには当然ながら理由がある。

「さっさと終わらせねーとなぁ。そうすりゃ、今日の夜はハラオウン隊長と晩飯だ……フヒヒッ」

そう。今は捜査の為に出ているが、ハヤトは夜にフェイトと一緒に食事（もちろん食堂でだが）をする約束をしていたのだ。まぁ、ギンガも一緒なのだが。

何を隠そう、ハヤトは自他共に認める無類の巨乳好きだ。

そんな彼にとって、フェイトとの出会いはまさに運命――いや、デスティニーと言ってもいい。どっちも同じ意味だが微妙に意味合いが違うのだ。

恐らく機動六課の中でも有数のバストサイズを誇る彼女と食事をするという約束は、ハヤトの中にある数少ない『やる気』を引き出させるのには十分すぎた。

「あれだ、これだけの仕事がちゃんと終わってたら、ハラオウン執務官もきっと驚くよな。

そんでもって、「こんなに仕事が出来るなんて素敵！　抱いて！」みたいな流れに……フヒヒッ」

思春期にありがちな妄想を膨らませ、１人モニタの前で笑うハヤト。

ここがフェイトの仕事部屋で彼１人で無かったとしたら、その笑いを見た人間の全てがこう思ったことだろう。――気持ち悪い、と。

「さぁて！　俺の薔薇色の未来――いやピンク色か？　まぁいいや薔薇色の未来に向けて、さっさとこんな書類は全部片付けっちまう

ぜぇぇ！！　ヒャッハーーーー！」

ひと際ヤバげな奇声を発して、ハヤトはより一層動かす手を早めた。

そうすると、うず高く積もっていた書類の束がみるみるうちに減っていく。その速度たるや、本職のベテラン事務員も顔負け……むしろ裸足で逃げ出すほど。

煩悩とは、こうも人の能力を底上げできるのか。その証拠がここにあった。

◇◇◇◇◇

「ハヤトくーん？　いるー？」

丁度夜の7時を回った頃、フェイトの執務室のドアを開けて、そこからギンガが顔を覗かせた。

フェイトが戻ってきた事を一足先に教えようとしたのだが、返ってくる筈のハヤトの声は無い。

「あれ？　ハヤトくーん？」

もう一度呼びかけるも、やはり返事は無い。

ハヤトの好み――というか性癖を知っているギンガは、まさかフェイトとの約束を彼が破るとも思えずに、不思議に思って部屋の中を見回して驚いた顔になる。
何せ、出かける前にはうず高く積みあがっていた書類は全て無く、部屋自体も驚くほど綺麗に掃除されているどころか、花まで飾られていたのだから。

「ハヤト君……ちょっとこれは露骨すぎ……って、見つけた」

幼馴染の露骨すぎる行動に若干引いていると、その直ぐ近く――自分の机にうつ伏せに倒れ込み、小さな寝息を立てているハヤトの姿があった。
どうやら張り切りすぎて、そのまま寝てしまったようだ。

「仕方ないなぁ。ホント、子供なんだから」

幸せな夢でも見ているのか、だらしなく緩んだ彼の寝顔を見ながら微笑むギンガ。
どんな動機であれ、彼が頑張ったのは間違いなく事実なのだから、責める気にはなれないのだろう。
だからギンガは、もう少しだけ寝かせてあげようかと思い、なるべく物音を立てないように注意しながら部屋のドアへと向かう。
そして、部屋の電気を消しながら自分の机で寝ているハヤトを振り返り、小さく声を掛ける。

「お疲れ様。ハヤト君」

「むにゃ……ハラオウン執務官のおっぱいは最高ですにゃぁ～……」

「……はぁぁ」

絶妙なタイミングで返ってきた彼の寝言に溜息を漏らしつつ、ギンガはドアを閉めて出て行く。

この後ハヤトは、ギンガが起こしに来るまで眠り続けていて、起こされた後にフェイトと一緒に食事が出来なかった事を泣き叫んで後悔したらしい。

とまぁ、ハヤト＝ロックウェルの1日は大体こんな感じに過ぎていくのだった。

ex6話　『ハヤト＝ロックウェルの1日』（後書き）

今回は解説回みたいな感じですね。
どうも、ラモンです。

ハヤトの設定が微妙に変わりましたので、彼がどんな仕事をしているのか、どんな1日を過ごしているのかを書いてみました。
まぁ、次回からファーストアラートで若干シリアスが入りますので、その前のギャグ回って感じですかね。
ハヤトはやれば出来る子なんですよ！　エロが絡まないと駄目ですけど！（笑）

さて、次回からはファーストアラートに入っていこうと思ってます。
ハヤトは新デバイスを手に入れるのか！
それとも、やっぱり相方はブレイブハートなのか！
はたまた支給品デバイスなのか！
それは全く決まっておりません！（えー）

それではまた、次の話で。

ex7話　『ファースト・アラート　1』

side：―

「「新しいデバイス……ですか？」」

機動六課が発足してから1ヶ月ほどが経ったある日。
自分のデスクに座りながら仕事をこなしていたハヤトとギンガは、自分達の上司でもあるフェイトが口にした言葉に、思わず声を揃えてそう聞き返していた。

「うん。フォワードの皆もそろそろ基礎がしっかりしてきたから、もう少ししたら本格的な訓練に移る予定なんだ。それで、ちゃんとそれぞれ個人に合った実戦用のデバイスを――って事になって」

「はぁ……そうッスか」

微笑んでそう続けるフェイトに対し、ハヤトが気の抜けた返事をする。
普段の彼の様子からてっきり手放しで喜ぶと思っていたフェイトは、意外と大人しいハヤトの様子に驚いた顔をして首を傾げた。

「ハヤト、嬉しくないの？」

「え？　だってスバル達だけの話ッスよね？
そりゃいいことだなーとは思いますけど、俺が大喜びする必要はないんじゃ？」

「……ああ」

自分の質問に、同じ様に不思議な顔をしながら答えたハヤトの台詞を聞いて、自分の言葉が足りなかったのかと納得した。確かにさっきの自分の発言を省みれば、そう取るのが普通かもしれない。
だからフェイトはハヤトに向かって、説明を付け足す。

「ハヤトとギンガの2人にも、もちろん新しいデバイスがあるからね？」

「え？」

「そうなんですか？」

「うん。2人だって、フォワードの一員なんだから当然だよ」

自分達も新しいデバイスをもらえるのだと分かり、ハヤトとギンガは一度互いに顔を見合わせる。
しかしすぐに嬉しそうに顔を綻ばせ、思い切り立ち上がってフェイトの側に一瞬で寄ってきた。その身のこなしたるや、フェイトでさえ一瞬姿を見失う程。

「マジですか!?　俺の分も!?　しかも俺専用!?」

「う、うん。同じチームなんだから、やっぱりある程度デバイスの規格も統一しておかないとね」

「いいいい、いつ貰えますか!?　今日の午後!?　それとも今すぐですか!?」

「そ、そんなにすぐは無理だよ。まずはハヤトとギンガが今使ってるデバイスのデータを集めて、それを元にデバイスの基礎を作ってからだから――もうちょっと後かなぁ」

「もうちょっとってどれくらいですか!?　明日!?　明後日!?　明々後日!?」

「ひぅっ!」

余程待ちきれないのか、フェイトに対して怖いくらいに詰め寄るハヤト。

やや目が血走っているうえに鼻息も荒いので、フェイトはちょっと怯えて小さな悲鳴を上げた。

そんな彼女を気にせず、なおもハヤトが言い募ろうとした瞬間――

「ていっ」

「ぽもろっ!?」

彼の隣に座っていたギンガが、ハヤトの首筋を右斜め４５度の角度から正確にチョップで打ち据える。
ハヤトは奇妙な声を上げてから机に倒れ、ギンガはそれを見て満足そうに頷いて、それからフェイトの方に視線をやって苦笑しながら口を開く。

「すみませんフェイトさん。ハヤト君、興奮しすぎると周りが見えなくなっちゃうもので……」

「そ、そうなんだ」

「ハヤト君、前から自分専用のデバイスに凄く憧れてて……。ほら、今使ってるのも支給品のストレージデバイスじゃないですか？　だから、自分専用のをわざわざ作ってもらえるのが、本当に嬉しかったんだと思います」

気絶しているハヤトを見てやれやれと溜息を吐きながら、一応彼をフォローするギンガ。
実際、ハヤトが他のフォワードメンバーとは違って、一般の武装局員が使っているのと同じ規格のデバイスを使ってるのはフェイトも知っていたし、そのデバイスも大分古くて、時々ハヤトが「そろそろ交換しねーとな～」と漏らしていたのも知っている。
だから、まぁさっきの行動も――少しだけ納得できた。あくまで少しだけだが。

「それじゃあ、出来上がったデバイスを見たら、もっと凄いことになりそうだね」

「その時はまた私が責任もって止めますから、心配しないでください」

「あはは……うん、その時はよろしくね」

「はいっ」

そんな会話を交わしながら、ギンガとフェイトは笑い合うのだった。

――ギンガの隣で気絶したままのハヤトは放置して。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ７話　『ファースト・アラート　１』

「俺専用デバイスかぁ……くふふ、これは楽しみだなぁ。なあ、ギンガ！」

フェイトから新しいデバイスを貰えると聞いた日の昼休み。
ハヤトはギンガと並んで、上機嫌で鼻歌を歌いながら食堂に向かって歩いていた。

「うーん、私はあんまりその感覚はわかんないかも。
ほら、私とスバルのリボルバーナックルってお母さんのでしょ？
だから、一応自分専用デバイスみたいなモノだし」

足取りも軽く、満面の笑みで告げるハヤトの言葉に対し、ギンガは少しだけ寂しそうな笑みを浮かべ、申し訳なさそうにそう答えた。

彼女とスバルが使っているリボルバーナックルは、2人の母であるクイント＝ナカジマが使っていたモノで、形状はガントレットでカートリッジシステム付きというという特徴的な物。
今ではそれをギンガとスバルとが左右片方ずつ使っている。
その特徴的な形状と2人が使うシューティングアーツという特殊な格闘技との兼ね合いもあり、ギンガとスバルはそれぞれ自作のローラーシューズを使って戦っているのだ。つまり、ある意味最初から自分専用――というよりも自分しか使えないというのが正しいが――のデバイスを使っていた。

ずっと支給品の量産型ストレージデバイスを使ってきたハヤトの気持ちは、想像することは出来ても、感覚を共有するのは難しいのだろう。

「……あぁ。そういや、そうだったな」

彼女の返事と表情に、申し訳なさそうな表情になって目を逸らす。
ギンガとスバルがクイントのデバイスを使っているのには、まだハヤトやギンガが小さい頃、クイントが任務中に殉職してしまった

という経緯がある。
ギンガにとって、いや――子供にとってあまり意識したくないだろう母の死。
それを、自分の不用意な一言で、彼女に意識させてしまったのかと気にしたのだろう。

「もう、そんな顔しないの。……私なら、大丈夫だから」

目を逸らしたハヤトに小さく笑いを漏らして、ギンガは隣を歩くハヤトの頬を軽く撫でた。
頬を撫でられたハヤトは、くすぐったそうに彼女の手を軽く払ってから、目は逸らしたまま彼女に撫でられた頬を掻きつつ言葉を続ける。

「つってもお前よぉ……」

「本人がいいって言ってるんだから、気にしない。ハヤト君らしくないよ？」

「……うっせ。こーゆーのは、気になんだろうが」

「いいから気にしないの。あんまりウジウジ言ってると格好悪いぞ」

口を尖らせて拗ねたような口調で呟く幼馴染の肩を叩き、そう言ってギンガは片眼を閉じる。

「……ん。悪かった」

「はいはい。まったく、普段は酷いことも平気で言うくせに、変なとこだけ気にするんだから。
私もスバルも、もう子供じゃないんだよ？　変に気を遣わなくて平気だってば」

「けど、さぁ……」

「もう、まだ言うの？　それじゃあ……」

尚も俯いて言い募ろうとしたハヤトの言葉を遮って、彼にからかう様な口調でそう言いながらギンガは彼の左腕に自分の腕を絡めて、悪戯っぽい笑顔を浮かべた。

「お詫びに、今日のお昼は奢ってもらおうかな。それでいい？」

「……へいへい。仰せのままに」

「あははは っ。うむうむ、苦しゅうないぞー」

「なんだそれ。全然似合ってねーし」

「ひっどーい」

自分の左腕にギンガの体重を感じながら、ハヤトは苦笑いしながが

ら足を早める。
そうして2人は寄り添うようにして歩き出す。ゆっくりと、食堂へと向かって。

◇◇◇◇◇

それから、さらに数日が過ぎた。
その日もまた、ハヤトとギンガは朝からせっせと書類仕事に精を出していた。新しいデバイスの話を聞いてから数日の間は、ハヤトが浮かれすぎて使い物にならなかったのだが、あまり呆けていたらデバイスが貰えなくなるかもとギンガに言われ、今では真面目に仕事をしている。

「……あ、そうだ。ギンガ、ハヤト」

仕事がある程度片付いてきた頃、ふと手を止めてフェイトが2人の名前を呼ぶ。
呼ばれた2人も手を止めて顔を上げ、ギンガは不思議そうな、ハヤトは何かに気づいたのか期待を込めた視線をフェイトに向けた。

「はい？」

「何スかハラオウン執務官！　デバイスですか！　デバイスの話で

すか！」

「もうっ、ハヤト君！」

「あ、あはは……」

椅子から立ち上がり、今にも詰め寄ってきそうなハヤトの勢いにフェイトは苦笑し、ギンガは眉を吊り上げて注意した。

でも、ハヤトはギンガの声など全く気にしていないようで、鼻息荒くフェイトに期待の篭もった視線を送る。

「でも、今回はハヤトが正解。さっきなのはから連絡があって、フォワードの全員、今日の午後に新しいデバイスに切り替えなんだって。

２人もその時、一緒に新しいデバイスを受け取るようになるよ」

「マジすか！　やった！　俺の時代キタコレ！！」

「だからはしゃがないの！　まだ仕事中なんだよ！？」

「うっせーし！　お前これでテンション上がらない訳ないだろうよ！あれだけ待ち焦がれた専用デバイスだぞ！？　やっべテンション上がりすぎて鼻血出そうだ！」

両手を握り締めて感動に震えるハヤト。

そして、そんな彼を見て頭を抱えて溜息と吐くギンガと、苦笑するしかないフェイト。

自分の様子に呆れ顔の2人には気付かず、あるいは気付いていても気にせず、ハヤトは身体全体を捻るようにして執務室の壁に掛けられた時計に目をやった。
コチコチと小さな音を立てて居る時計の針が指す時間は、既に昼近い。
もう数十分もすれば、午前の業務終了時刻になるだろう。

「おおおお！　もうこんな時間じゃねーですか！
ハラオウン執務官！　俺、午前の分の仕事終わったんで、デバイスルーム行ってていいですか！？」

「え？　えと、どうせなら皆と一緒に――」

「そんなん、待ってらんねーですよ！　だって俺のデバイスが！
デバイスが！」

玩具を前にした子供のように頬を紅潮させ、フェイトに詰め寄るハヤト。
そんな彼の腕をとって引っ張りながら、ギンガが必死にハヤトを諫めようとする。

「ちょっと落ち着いてハヤト君！　ホントみっともないから！」

「ああ、待っててくれ俺の愛しいデバイスちゃん！　名前は何にしようかなぁ！
クアンタとかケルディムとかマスラオ、ああ紅蓮とかランスロットとかもよさ気だな！！」

「何そのどこかで聞いたような名前!?　てゆーか落ち着いてよ！
そんなに焦らなくても、デバイスは逃げたりしないでしょ!?」

「逃げるかもしれねーじゃん！　そうしたらお前はどう責任を取ってくれるんだ!?　この溢れんばかりのデバイスに対する熱情を受け止めてくれるとでも言うのか!!」

「だから意味わかんないってば！」

「あの、ハヤト……？　お、落ち着こう？　ね？
午後になったら、ちゃんとハヤトも渡してもらえるから」

「俺は落ち着いてますよハラオウン執務官！　これでもかってくらい落ち着いてます！」

目を爛々と輝かせ、どう見ても落ち着いてないのに「落ち着いている」と連呼するハヤトに、ギンガとフェイトは何かもう哀れみの視線を向けて、同じように疲れた溜息を吐く。

「……ギンガ」

「はい……ていっ！」

「まそっぷ!?」

溜息を吐いてから、フェイトが指示を出してギンガが右斜め４５

度の角度で手刀をハヤトの首元に当てる。淀みの無い、実に洗練された流れ作業である。
綺麗な当身を喰らったハヤトは、先日と同じように奇妙な鳴き声を上げて気絶。
力の抜けた彼の体が崩れて、一度机に思い切り頭をぶつけてから地面に仰向けに転がった。

「……ホントにすみません、フェイトさん」

「う、ううん。別に気にしてないよ。こんなに喜んでくれるなら、シャーリーも嬉しいと思うし。
私だって、こんなに喜んでくれたなら嬉しいしね」

「そういうものですか？」

「そういうものだよ」

疲れた声で謝るギンガに、フェイトは手を振ってそう答える。
実際、フェイトもなのはと同じく、フォワード達に新しいデバイスをと提案していたので、こうやって喜んでくれるのは、素直に嬉しいのだ。
まぁハヤトの喜び方は、流石にいきすぎだと思ってはいるけれど。

「えっと、それはそれとしてね。ちょっと連絡があるんだ」

「あ、はい。なんでしょうか？」

床に倒れたハヤトを苦笑しながら見ていたフェイトが、思い出したようにギンガに声をかけた。

「私、午後からちょっと出かけなきゃいけなくなって、デバイスの受け取りには一緒に行けないんだ。
だから2人は、なのはや他のフォワードの皆と合流してから、デバイスルームに向かうようにしてね。
なのはにはちゃんと伝えておくから」

「わかりました。私は一緒に行かなくていいんですか？」

「はやて……八神部隊長との、ちょっと難しい用事なんだ。だから、今回は私だけで」

「なるほど、了解です。それじゃあ、デバイスを受け取った後の仕事は？」

「うーん、今日の分は殆ど終わってるし――」

フェイトとギンガは、そのままお互いに午後の仕事をどうするかなどの話をかわす。
何か用事がある時はまずギンガに伝え、それからギンガがハヤトに伝達する。そういった形式が、この1か月の間で何となく出来上っていた。別にフェイトがハヤトを信用していないとかではなく、単純にその方が効率がいいのだ。
ハヤトもちゃんと伝えてはくれるのだが、生来のものぐさな性格が影響しているのか、変に伝言をはしょったりしておかしな内容に

なってしまい、結局ギンガがフェイトに確認する……という二度手間になってしまう事が多々あった。
流石にこれでは問題があるという事で、フェイトとギンガとが話し合った結果、こういう連絡形式に落ち着いたという訳だ。まぁ、ハヤト本人としてはちゃんと伝えたと思ってるので、少しばかり不満があったりなかったりするのだけど。

「あ、と。それじゃあ私はそろそろ行くね」

「はい。ハヤト君にはちゃんと伝えておきますから」

「うん、よろしくねギンガ」

暫く連絡事項などを伝えた後に時計を見て、フェイトは少し慌てた様子でギンガに後を任せ、自分の荷物を手早くまとめて執務室から出て行った。
ギンガは彼女を見送って、床で気絶している幼馴染に視線を移す。当身によって気を失ったハヤトは、どうやらそのまま睡眠に移行したらしく幸せそうな顔で寝息を立てている。
人に苦労をさせておいて幸せそうにしている彼の顔を見て、なんだか悔しくなったギンガは、彼の隣にしゃがみこんで、眠っているハヤトの頬を軽くつまんで小声で抗議した。

「もー、少しは反省してよね。ハヤト君」

「……うへへ、俺のデバイス―……俺だけのデバイス―……」

「どんな寝言よ……仕方ないなぁ」

けれど、気絶――もとい眠っているハヤトが返事をするわけもなく、だらしなく頬を緩めてそんな寝言を零すだけ。夢に見るほど、新しいデバイスを楽しみにしていたのだろう。

「ホント、いくつになっても子供なんだから」

子供を見守る母のような呟きを漏らし、仕方ないなぁと微笑みを浮かべてギンガはハヤトをそのままに自分の席に戻る。そして、まだ終わっていない分の仕事を黙々と片付け始めた。デバイスを受け取った後は、慣らしも兼ねて、なのはの教導に混ざるようにと指示を受けている。

「はやく終わらせなきゃね。お昼御飯もちゃんと食べたいし」

自分に言い聞かせるようにそう呟いて、頬をペチペチと叩く。と、そこで思い出したようにハヤトのデスクで開いていたモニタを覗き込む。本人は終わったと言っていたが、もし終わっていないなら叩き起して続きをさせなければいけない。

けれど、覗き込んだモニタから見てとれる範囲では、自己申告の通りちゃんと仕事は終わらせていたようだ。それを確認して安心したように頷き、ギンガは自分の席に座りなおして手を動かす。

「さーて、お仕事もあと少し。頑張りますか！」

腕まくりをする仕草をしながら、ギンガは気合いを入れなおす。
ハヤト程ではないにしても、ギンガもまた、新しいデバイスが来るのを楽しみにしていたのだ。この後に待っている嬉しい時間を考えれば、残っている僅かな仕事など苦にもならない。

「……ふふっ、楽しみだなぁ」

鼻歌交じりにキーボードを叩きつつ、弾んだ声でそう呟く。
年相応の少女らしい、嬉しそうな頬笑みをその顔に浮かべて。

ｓｉｄｅ：－　了

ex7話　『ファースト・アラート　1』（後書き）

ハヤトとギンガを一緒にすると、勝手にイチャつくから困る。
どうも、ラモンです。

いよいよ始まりましたファースト・アラート。
でも、何故か内容はハヤギンがイチャつくだけとなりました。
この2人どうすればいいだろう？
イチャつかせないようにと、試行錯誤すればするほどイチャつくんですけど……もうお手上げ侍ですよ私は。

次回はいよいよハヤトのデバイスが登場です。
ブレイブハートになるのか、それとも違うのか！
あまり期待せずにまったりお待ち下さいませ。

それではまた、次の話で。

ex8話　『ファースト・アラート　2』

自分だけの専用デバイス。
嗚呼、なんと甘美な響きだろうか。
管理局に大勢在籍している魔導師の中で、自作だからという意味で専用デバイスを使っている人を除けば、専用デバイスを持っている人間はそう多くない。
エースと呼ばれる人たちでも、支給品のデバイスを使っている人は多い。
そのくらい、専用デバイスってのは貴重で珍しいモンなのだ。

特に俺みたいな射撃型の魔導師は、ティアナみたいに自作デバイスでも使ってない限りは、管理局を引退するその日まで、支給品のデバイスを使い続ける場合が多い。
頼めば作っては貰えるんだが、金がかかるし、何より支給品で十分戦えるから作る意味が無い。
だから、専用デバイスに憧れている魔導師は多くても、実際に使っている魔導師は少ないわけだ。
そんな理由もあって、俺もまた、引退のその日まで支給品を使うんだろうと思っていた。

だがしかし。

だ　が　し　か　し　！！

俺の手の中には今、支給品のストレージデバイスとは違う、赤い宝石の嵌った銀色の指輪がある。
つい先ほど、目の前で機械を操作しているシャリオ＝フィニーノ陸士に渡された、俺だけの、俺専用のインテリジェントデバイス。

それがこの指輪だ。

「ふおぉぉ……」

思わず俺の口からそんな奇妙な声が漏れたのも、致し方ないというものだろう。

憧れていた自分専用デバイスが、今この瞬間、俺の手の中にあるのだ。

こんな状況で、ニヤニヤすんなってのが無理な話だっつーの。

「ちょっとハヤト君。そのニヤニヤ笑いやめて、気持ち悪いから」

隣でギンガが何かほざいてるが、今の俺には全く気にならない。

そのくらい、俺の頭の中は『専用デバイスを手に入れた喜び』というモノで一杯になっていた。

憧れだった自分専用の……しかも、支給品と同じストレージデバイスじゃなくて、超高級品と誉れ高いインテリジェントデバイス。

本来なら、俺みたいに普通程度の実力しか持ってない奴には、一生お目にかかれない代物。

それが、今この瞬間俺の手の中にある。

嬉しくない訳ねーじゃん。……嬉しくない訳ねーじゃん。

大事なことだから2回言いました。

「だから、ニヤニヤしないでってば。ホント凄い気持ち悪いから」

「うるさいギンガ。胸が3センチでかくなったからって、あんましいい気になるなよ」

「な、何で知ってるの!?」

「見りゃわかる」

「どうしてそれで分かるの!?　普通わかんないよ!?」

うるっさいな。他の人はともかく、俺は分かるんだよ。
だって俺はおっぱいマイスター（自称）だからな。普通はわからなくとも、俺にはわかるのだ。
……いや、今それはどうでもいいか。

「はーい。皆自分のデバイスは受け取りましたか～?」

気を取り直し、トリップするのをやめて視線を上げる。
その視線の先では、水色のロングヘアーを揺らす人形サイズの人――八神部隊長の融合騎である、リインフォース曹長が空中に浮かんで俺達の顔を順に見た。

「この6機は、前線メンバー隊長陣とメカニックが、経験と技術の粋を集めて造った最新型です。
スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、それとハヤトにギンガ。それぞれの個性に合わせて、各自が自分の力を１００％発揮できるよ

うに造られた、文句無しに最高の機体なのです」

ちょっとだけ得意気に胸を張りながら、リインフォース曹長は俺達が自分の手に持っていたデバイスを自分の周りに円を描くようにして浮かべた。

あぁん、折角もらった俺のデバイスぅ……もうちょっと感触を楽しみたかったのに。

「すぐに返しますから、そんな顔しないで欲しいですよ～」

「あ、すんません。顔に出てましたか」

「ハヤトは正直さんですね」

「そんな誉めないでくださいよ。照れますって」

「ハヤト君、誉められてない。誉められてないから」

「知ってるっつの」

人のボケに大真面目に返してくるギンガを適当にあしらって、もう一度曹長の言葉に耳を傾ける。

曹長は気を取り直すように、可愛らしく「こほんっ」と咳払いをしてから言葉を続けた。

「この子達はまだ産まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが

込められてて、一杯時間をかけてようやく完成したです。ただの道具と思わないで、大切に……でも、性能の限界まで思いっきり、全力で使ってあげて欲しいですよ」

「うん。きっと、この子達もそれを望んでるから」

リインフォース曹長の言葉に、今まで少し離れた場所でキーボードを弄くっていたシャリオ＝フィニーノ陸士が、顔を上げて俺達を見ながら頷いた。

勿論、曹長に言われるまでもなくそうするつもりだった。

デバイスは道具じゃなくて相棒。それは、訓練学校を出た奴なら誰でも教わる事だ。

とはいえ、そう思わない奴だって沢山いるけどな。

１０８部隊にだって、そういう考えの奴は結構居た。ま、そこら辺は個人の自由だろう。

少なくとも俺は、デバイスは相棒だと考えている。デバイスは友達だね！

「それでは、これから皆のデバイスの機能説明をするですよ～」

そんな曹長の言葉と共に、曹長の周りに浮かんでいた俺達のデバイスがそれぞれの手元に戻ってくる。

おおぅ、俺のデバイス～……俺専用デバイス～。

「ごめんごめん、お待たせー」

戻ってきたデバイスに大喜びしていると、メンテナンスルームのドアを開けて、制服姿の高町一尉がそう言いながら入ってきた。

「ナイスタイミングですよ、なのはさん。丁度今から機能説明をするところでしたから」

「そっか、間に合ってよかった」

高町一尉は、フィニーノ陸士の言葉を聞いて朗らかに微笑んだ。
相変わらず綺麗なお人だ……マジで結婚してくれねーかなぁ。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ８話　『ファースト・アラート　２』

「――という訳だね。皆、大体は理解できたかな？」

「うぃっす！」

フィニーノ陸士と高町一尉、そしてリインフォース曹長の３人に

よる、俺達全員の新デバイスのおおまかな機能説明を聞いた後、俺は元気よく手を上げて答えた。

3人の説明を簡単に纏めると、スバル達のデバイスには何段階かに分けて出力リミッターがかけられているらしい。最初に最新型とリインフォース曹長が言ったように、最初からリミッター無しだと、流石に今のスバル達には手に余る代物らしい。

そのリミッターは、訓練が進んで各自が扱いきれると判断されたら、順次解除されていく。

ただし、俺とギンガはまた別で、最初から第2段階までのリミッターは外されている。

これは俺達がスバルやティアナ達に比べて実戦慣れしているから、というのが主な理由らしい。

――っても、格闘主体のギンガはともかく、射撃主体の俺は要練習ってコトらしい。

ギンガみたいに殴ればいいって訳じゃなく、色々と繊細な操作が必要だからな。

まったく脳筋は単純明快で羨ましいぜ。

「ハヤト君。今失礼な事考えたでしょ？」

「考えてねーし。言いがかりはやめて頂きたく思う」

「……怪しい」

となりで唸るギンガは無視して、スバル達の顔を見る。

スバルとチビっ子2人はもちろんはしゃいでるとして、普段は冷

静な風を装ってるティアナも、心なしか嬉しそうな顔で、フィニーノ陸士から渡された待機状態のデバイスを眺めていた。

まぁ、あの４人だってティアナが一番年上で１６歳。

１７の俺がはしゃいでるんだから、あいつらだってはしゃいで当然だよなぁ。

やっぱ、『専用』ってのは嬉しいモンだし。

「そうそう。スバルとギンガのはリボルバーナックルとのシンクロ設定も出来てるから、安心してね」

「え、本当ですか？」

「うん。もちろん違和感があれば言ってね。ちゃんと調整し直すから。

それと、持ち運びが楽になるように収納と、瞬間装着の機能もつけておいたよ」

「わあっ！　ありがとうございます！」

フィニーノ陸士の言葉を聞いて、スバルが尻尾でも振りそうな勢いで喜んで、ギンガも目を輝かせた。

確かに2人とも、リボルバーナックルの持ち運びが結構面倒だったみたいだしなぁ。

アレって結構重いんだよ……前に持とうとしたら、マジで腰が「ゴキャッ！」って嫌な音を立てたくらいだしな。

……ギンガはあんなの持ってばっかいるから、脳味噌まで筋肉になるんだよ。

あ、だから体重増えてんのか。筋肉って重いもんな。

「……やっぱり、失礼な事考えてるでしょ」

「考えてねーってば。しつこい」

事実を事実として確認してるだけだから、失礼にはあたらないよな、うん。

実際、こないだも食堂のデザート眺めて暫く悩んでたし。

「ティアナのは前から使ってたアンカーガンと同じ拳銃型。エリオとキャロは、形状そのものは今までと同じにしてあるから、違和感なく使えると思うよ」

「あ、はい」

「「ありがとうございますっ！」」

ふむ、まぁ長年使った得物の形状が変わったら扱い難いよなぁ。特にティアナなんかは拳銃型だし、いまさら通常通りの杖とかになったら、逆に扱いきれなくて戦力的にはマイナスになりそうだしなぁ……当然、そこら辺は考えてあるんだろう。

エリオとキャロのも槍とグローブ型で特殊な形状してる訳だし、良く考えると、ウチのチームって結構面白いデバイス揃ってるな。

ティアナ、スバル、エリオ、キャロにギンガ。

なんだ、一般的な形状のデバイス使ってるのは、このチームだと

俺くらいか。

「それからハヤト君」

「うぃッス。俺のはどんなでしょうか？」

「ハヤト君のは特別製だよ。ちょっと自信作だから、期待してね」

「おお！　ドリルでもついてんですか！？」

「いや、それはないけど……」

俺の言葉に苦笑して頬を書いたフィニーノ陸士は、俺の前にモニタを開く。

モニタには支給品の魔導師用杖に良く似た形状をした、杖型のデバイスが映っている。

「ハヤト君のデバイスは、なのはさんのデバイス、レイジングハートを基本形としてハヤト君が今まで使っていたストレージデバイスのデータを基に、ハヤト君専用に調整したデバイスだよ。

レイジングハートっていう基礎がある分、他の皆のデバイスよりも完成度は高いと思う。

構造とかはかなりレイジングハートに似せてるから、姉妹機ってことになるのかな？」

「高町一尉のデバイスと姉妹機……って、マジすか！」

それを聞いて、俺のテンションはさらに2段階ほど上がった。
そりゃそうだ。エース・オブ・エースと言えば俺達魔導師の憧れ。その人のデバイスが、これから自分が使うことになるデバイスが、その憧れの人のデバイスを基にしていると聞いて、テンションが上がらない奴なんざいねぇ。

「おいおい聞いたかギンガ!?　俺のデバイス、高町一尉とお揃いだってよ!」

「ひゃあぁっ!?」

「うっはーっ!　マジ嬉しいんですけど!　超テンション上がるわーっ!!」

「ちょっ、は、離してハヤト君!　恥ずかしいってば!」

「うっひょひょーい!」

上がったテンションに身を任せて、隣に立っていたギンガを思わず抱きしめる。
ギンガが何か言ってるけど、全然気にならねぇ。もうアレですよ、新しい自分専用のデバイスってだけでもテンション上がるってのに、それが“あの”高町一尉が長年相棒として使っている最高ランクデバイスの姉妹機!　これはもう、俺に運が向いてきたとしか思えないね!

「やっべ、すげぇ嬉しいんだけど！　ギンガ、チューしていいですか！？」

「今は嫌！　ハヤト君今日はまだ歯を磨いてないでしょ！？」

ちっ、人の好意を無碍にしよってからに。

まぁいい、どうせ本気でやるつもりは無かったしな。

「それでフィニーノ陸士！　このデバイス、名前は何て言うんですか！？」

「え、あ……えっと、名前は『ブレイブハート』だよ。レイジングハートの姉妹機だから、似たような名前がいいかなって思って。もちろん、ハヤト君が気に入らなかったら変更して構わないからね」

「いえいえ変更なんてそんな！　カッコイイじゃないッスか！」

「てゆーか、いい加減離れ……てっ！」

「あひゃんっ」

ギンガに無理矢理引き剥がされながらも、俺はフィニーノ陸士から名前を聞いた、右手に握っている赤い宝石の嵌った新デバイス――ブレイブハートを眺めた。

凄く綺麗で、傷一つ無い俺のデバイス。

多分これから長い間、一緒に戦うことになるデバイス。

「――よろしくな。ブレイブハート」

感慨深さを感じながら、そうブレイブハートに声をかける。
そんな俺の声に応えるように、掌の中にある指輪の宝石が煌いた。

「そうそう。ブレイブハートには、ハヤト君が今まで使ったことが無い『カートリッジシステム』が搭載してあるの。だから、後でなのはさんやスバル達から使い方の説明を聞いてね？
初めて使う機能だろうから、説明無しだと勝手が分からないと思うし」

「了解ッス」

なんとまぁ、おニューのデバイスってだけでも有難いのに、まさかのカートリッジシステムまで。
何つー至れり尽くせりな展開。機動六課凄すぎて濡れる。

「他に質問はあるかな？　あるなら、今の内に聞いちゃおうと思うけど」

「ドリルはついてますか？」

「ついてません」

「変形合体は？」

「しません」

「ナイスバデーなお姉ちゃんに変身したりは？」

「あり得ません」

「俺の事を『ご主人様（はあと）』と呼んでくれたりは？」

「なのはさん。ハヤト君ぶん殴っていいですか？」

「落ち着いてシャーリー。気持ちは何となく分かるけど、とりあえず落ち着いて」

むぅ、残念だ。アニメとかなら、間違いなく俺のデバイスは美少女に変身するか、ドリルとかがついてる筈なんだが……現実はアニメとは違うということか。

無念でござる。

「ハヤ兄！　後であたしがカートリッジシステムの使い方、教えてあげるね！」

「いや、スバルには無理だろ。お馬鹿ちゃんだもの」

「いやいやハヤトさん？　スバル、訓練学校では主席でしたよ？」

「でも、馬鹿だろ？」

「……否定できませんね」

「ハヤ兄もティアも酷いっ！？」

そんな風にスバルを弄って遊んでいた時だった。

突然、耳障りな警報音と共に、デバイスルームの中にある赤いランプが明滅する。

デバイスルームに並んだモニタに俺たちが視線を向ければ、その全てにランプと同じ赤い色で書かれた『ＡＬＥＲＴ』の文字。

「このアラートって――」

「一級警戒態勢！？」

「グリフィス君！」

いち早く反応した高町一尉がモニタに向かって呼びかければ、その声に反応したのか、モニタの一つにやや険しい顔をしたロングアーチ部隊のロウラン准陸尉が映る。

あの顔を見る限り、どうやら間違いって訳じゃなさそうだ。

……出来れば、間違いであってほしかったけどな。

「今のって――」

『はい。教会本部から出動要請です！』

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君？　こちらはやて』
『状況は？』

一尉の質問にロウラン准陸尉が答えた直後、准陸尉が映っているモニタの両隣のモニタに、八神部隊長と、ハラオウン執務官が映った。映っている背景が違うってことは、どうやら既にハラオウン執務官は現場に向かって移動中らしい。

この部隊が発足してから初めての正式な出動ってこともあり、モニタに映る部隊長と執務官の顔にも少しばかり緊張が見て取れた。まぁ、当然と言えば当然だろう。

スバル達も、ある程度慣れてる俺とギンガも、デバイスルームに居る全員が、緊張した面持ちで八神部隊長の言葉に聞き入っている。

『教会の調査団が追っていたレリックらしき物が見つかった。場所は、エイリの山岳丘陵地区。目標は山岳リニアレールで移動中』
『移動中って……』
「まさか！」

部隊長の言葉に、高町一尉とハラオウン執務官が驚いた顔をする。

――あー、何か展開読めてきた。

『そのまさかや、内部に侵入したガジェットのせいで、リニアレー

ルのコントロールが奪われてる。
リニアレール車内のガジェットは、最低でも３０体。他にも、大型や飛行型の未確認のタイプが出てくるかも知れへん』

ですよねー、と言いそうになって慌てて口を噤む。
恐らくは移送中かなんかだったんだろう。移送中の対象を確保する場合、一番手っ取り早いのは移送手段ごとの強奪だかんなぁ……。
テンプレっつーかお約束っつーか。
まぁ、とりあえず初出動にしちゃ、ちょっと難しい任務か。
高町一尉だけじゃフォローの手が回らんだろうし、俺とギンガである程度はやるとして――。

『いきなりハードな初出動や、なのはちゃん、フェイトちゃん、いける？』

『私は、いつでも』

「私も！」

考えているうちに、部隊長と高町一尉、そしてハラオウン執務官の話は進む。
そして、高町一尉達の返事に満足そうに頷いてから、部隊長の視線が俺達に移った。

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ハヤト君、ギンガ。皆もええか？』

「「「「「「「「はい！」」」」」」」」

『よし。いいお返事や、シフトはＡ－３、グリフィス君は隊舎での指揮、リインは戦闘管制。
なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮』

『わかった』

「うん」

『ハヤト君とギンガは、スバル達のフォローをお願いや。ホントはなのはちゃん達にお願いしたいんやけど、手が回らへん場合の保険やね』

「了解ッス」

「わかりました！」

『ん。頼りにしてるで、２人とも』

言われなくてもするつもりだったけど、こうやって部隊長直々に頼まれたからには、半端な事は出来ねぇか。ま、出来る範囲でフォローしてやりましょうかね。
これでも一応、年長者ですから。

『ほんなら、機動六課フォワード部隊……出動！』

「了解！」

部隊長の声に敬礼と共に返事をしながら、俺達は一斉に走り出した。

さてさて、六課発足以来、初めての本格任務だが……どうなりますやら。

ex8話　『ファースト・アラート　2』（後書き）

お待たせして申し訳ありませんでした。
どうも、ラモンです。

考えた結果、ハヤトのデバイスは従来通りブレイブハートにしました。
クロスハートとどっちにしようかと悩んだんですけど、アレはティアナルートを前提に考えたデバイスという事もあり、今回はいつの間にか裏ヒロインという認識が定着したブレイブハートに。

しかしアレですね。
折角違うヒロイン、違う設定で最初から書いてるから、新しい展開を……といつも考えてるんですが、どうしても最初に書いたのと似たような展開になっちゃいます。
私の文才の無さと言えばそれまでなんですが、これは今後の課題ですねぇ。

そんな話はさておき、いよいよ次回は初戦闘。
ガジェット相手に奮闘する、六課ＦＷ陣の活躍をご期待ください。
ハヤト？　ハヤトは画面の隅っこで適当にガジェットの相手してればいいんじゃないですかね。ハヤトだし。

それではまた、次の話で。

ex9話　『ファースト・アラート　3』（前書き）

※今回はちょっと長めです。

ex9話　『ファースト・アラート　3』

side：―

機動六課前線部隊の中で、飛行適性を持っている魔導師は、なのはを始めとした隊長陣だけだ。ハヤトを始めとしたフォワード組は飛行適性が無い陸戦魔導師。当然空を飛ぶ事は出来ない。

まぁ、飛行適性が無いというだけだから、無理をすれば飛べないことはないのだけれど。

それでも、せいぜいが数分空中に浮かべる程度なのだから、飛べないといって差し支えはないだろう。

さて。なんでこんな話をしているのかと言えば、現状を語る上での前フリなのだ。

今、ハヤトやギンガを始めとした機動六課フォワードの6人は、ヴァイス＝グランセニック陸曹が操縦する移送用ヘリのコンテナ部分の中でそれぞれが椅子に座っている。

現在時刻ははやてがフォワード部隊に出動命令を出した10分後。ヘリが飛んでいる場所は、目的のリニアレールが走行している渓谷まであと数分という位置。

「……さすが新設部隊。ヘリも新しいなぁ」

そんなヘリの中で、ハヤトがコンテナ内部を見渡しながら感心したように呟く。

「そうだね。１０８のは、結構年代モノだったし」

「アレが年代モノぉ？　廃棄寸前の間違いだろ……毎回出動するたびに墜落するんじゃねーかと、俺はいつも戦々恐々しながら乗ってたっつーの」

「えー？　私は別に平気だったよ？　ハヤト君がビビリなだけじゃない？」

「誰がビビリか！　実際ヘリに関する苦情は腐るほど出てただろーが！」

「そうだっけ……？」

「俺、副長、班長その他大勢いたっつーの！
あぁくそ、こんなとこばっかゲンヤさんに似やがってこの脳筋は……」

大声で抗議するハヤトに、首を傾げて可愛らしく唇を尖らせるギンガ。
そんな2人のやりとりを見て、反対側の座席に座っていたスバルとティアナ、なのはの3人が「相変わらずだなぁ」なんて事を考えながら、小さく笑いを漏らす。

「脳筋って言わないでよ。失礼だなぁ」

「失礼じゃないだろ！　実際お前は脳筋なんだし！」

「ハヤト君よりも頭はいいですー。実際私の方が仕事できてますー」
「なにそのドヤ顔!?　すっげーむかつくんですけど!」
「ふっふーん」

自身も笑いを噛み殺しながら、なのはは視線をハヤト達の隣に座っているエリオとキャロに向けた。
ヘリに乗って出動したばかりの時はガチガチに緊張していた2人だったが、今はハヤトとギンガのやり取りを見て、なのは達と同じように笑っている。彼女が見る限りでは、まだ少しは緊張しているが体の固さは随分と取れてきているようだ。
ハヤトもギンガも、さりげなく横目で2人の様子を確認している。
どうやら、ハヤト達はコレを狙ってわざとおふざけしていたらしい。

「はいはい、2人が仲良しなのは分かったけど、そろそろ現場だからやめようね」

やはりある程度実戦を経験していると余裕があるなぁ、などと思いつつ、なのはがそう言って笑みを浮かべながらハヤトとギンガのやり取りに割って入った。

「うっす」

「すみません、なのはさん」

やはりなのはが考えていた通りらしく、ハヤトとギンガは彼女の言葉を受けて、特に抵抗も無く言い合いを中止してそれぞれ居住まいを正す。

同時に、スバル達も同じように姿勢を正してなのはを見る。

「いきなり新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習どおりで大丈夫だからね」

スバル達の視線を受けながら、なのはは殊更明るく笑ってそう告げた。

ハヤトとギンガのやりとりで大分抜けたとはいえ、やはり経験の浅いスバル達４人の顔には、まだ緊張の色が浮かんでいるのが見て取れる。

なのはも、こうやって隊長としてキチンとした形で指揮を執るのは初めてに近いので、実のところかなり緊張していたりするのだけれど、それは決して表情に出さない。

誰にでも、どんな出来事にでも初めては存在する。

しかしそれは、時に何の言い訳にもならない。

特に今、彼女はスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、そしてハヤトとギンガという６人の命を預かる立場なのだ。たとえ初めてだろうと全力を尽くし、そしてこの６人を無事帰還させなくてはならない。

「危ない時は、私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから。
おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう！」

ならば今彼女がすべきことは何か。
それは、少しでも目の前の少年少女達の緊張を取り除き、本来の、皆が持っている最高の力を出せるようにしてやることだ。
だからそうする為に、彼女は言葉を続ける。

「みんなしっかり、ですよ～！」

そんな彼女の意思を汲み取って……という訳では無いだろうが、副官としてヘリに搭乗していたリインフォースも、小さな身体を精一杯に動かしてスバル達を励ました。
自分達よりも小さい上官の励ましに、スバル達が小さく笑う。

「むーっ！　何で笑うですかー！？」

せっかく励ましたのに笑われてしまったリインが眉を吊り上げて怒るが、人形サイズの彼女ではそういった仕草さえも愛らしく見えて、余計にスバル達は笑みを零す。

「リインフォース曹長萌えー」

「萌えられる覚えはないのですよー！」

ぷんすこと両手を上げて怒るリインと、そんな彼女を見ながら笑うスバル達。

それを見て、なのはは小さな声で「これなら大丈夫そうだね」と呟くのだった。

ｓｉｄｅ：－　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ９話　『ファースト・アラート　３』

俺とギンガ以外のフォワード……特にチビっ子2人の緊張をほぐそうと、ギンガと馬鹿をやっていて、あと少しで目標地点であるリニアレールが見えてくるという場所まで差し掛かった時。

突然、ヘリに乗っている全員に音声通信が入る。

『ガジェット反応、空から!?』

『現地航空観測隊、反応を多数確認！』

少し焦った感じの声と、敵を示す赤い光点がいくつも映っているモニタが開く。
ここに来て敵が増えるとか、初出動なのにハードすぎワロタ。

「空って言うと、航空型のガジェットかな？」

「だろうな。前に報告書でチラッと見た記憶が薄っすらとあるような無いような」

「……どっちなの、ハヤト君」

「それはともかく、どうしますか？　高町一尉」

隣に座るギンガと話しながら、高町一尉の指示を待つ。
つってもまぁ、大体どういう指示がくるのかは想像がつく。なんたって、この場で空戦が出来るのは高町一尉だけ。リインフォース曹長も出来るだろうが、流石に俺達だけに全部を任せるのはあり得ない。
となれば――

「私がフェイト隊長と出て、空を抑えるよ。ヴァイス君、いい？」

「うっす。なのはさん、お願いします！」

ま、こうなるわな。
モニタに映る敵を示す光点を見る限り、敵の数はかなり多い。
多分隊長達だけしかいなかったら、きっと高町一尉かハラオウン執務官だけしか行かないんだろうが、今回は空戦の出来ない俺達が居る。
万が一にも、こっちに航空型のガジェットが来たりすりゃ大変だ。
そういった事態にならないように、念には念を……ってことだろう。

「じゃあ、私はちょっと出てくるね。一応通信で指揮は執るつもりだけど、現場の判断はリインとティアナ、それからハヤト君にお任せするから」

「お任せですよ～！」

「了解です」

「うぃーっす」

リインフォース曹長がこっちに残るのは、万が一航空型ガジェットの増援が来た場合の保険もあるだろう。俺とティアナのセンターガード組に現場判断をってのは、恐らく少しはなれた場所で任務にあたるってことだろう。新人が多いと、こういう時はちっと心許ないな。
スバルとティアナもある程度実戦はやってるだろうけど、まだ経験は浅い。俺とギンガも同じくだ。
……ま、なるようになるさ。考えても仕方ない。

「それじゃ、皆も頑張ってズバッとやっつけちゃおう！」

「「「「「はい！」」」」」

「……はい」

ん？　何かキャロが元気ねぇな。
視線を向ければ、キャロは俯いて眉尻を下げていた。
どうやら、まーだ緊張してるらしい。まだ小さいし、女の子だから仕方ないのかもなぁ。

「なぁ、キャロ――」

「大丈夫だよ、キャロ」

けれど流石にこのタイミングでまだ緊張してるってのはアレだと思い、俺が口を開いたのに合わせ、高町隊長がキャロの近くに腰を落としてその両手でキャロの頬を包んで笑う。

「離れていても、通信で繋がってる。一人じゃないから、ピンチの時は助け合える。
キャロの魔法は、皆を助けてあげられる、優しくて強い魔法なんだから」

「……はいっ！」

「うん。いい返事」

おお、流石高町一尉。
結構落ち込んでた感じのキャロを、一瞬で元気にしちまった。
ドナ○ドマジックならぬ高町マジックを見た！

「それじゃあ、行ってくるね」

キャロがしっかり頷き返したのを見てから、高町隊長はコンテナハッチの方へと向かう。それに合わせてハッチが開き、そこから一気に外の風が流れ込んでくる。

あ、何か白と青のストライプが見えた。

――げふんげふん。そして、高町一尉は制服姿のまま、開いたハッチから外へと身を投げ出す。
まさかの投身自殺……な訳はなく、ただ単純に落下しながらセットアップするんだろう。

俺も１０８に居た時は、降下任務で何回かやっているから特に心配しちゃいない。
まぁ、アレすっげー怖いから俺はやりたく無いんだけどね。

「では、リニアレールに着く前に今回の任務の確認をするですよ」

高町一尉が出撃した後、ヘリの中に残った俺達は任務の最終確認をする為に、リインフォース曹長の隣に開いているリニアレールの全体図が映ったモニタを見た。
リニアレールの中心――重要貨物室の部分が赤く光っていて、そこが目標である事を示している。

「任務は2つ、ガジェットを逃走させずに、手早く全機破壊すること。
そして、ロストロギア『レリック』を安全に確保することです」

「そのレリックってのが、その赤いトコにあるんですね？」

「そうです」

一応確認のつもりで尋ねれば、曹長はその通りだと頷く。

「今回、スターズはスバルとティアナ、ライトニングはエリオとキャロ、ハヤトとギンガの3組に分かれて、それぞれ別の場所からこの貨物室を目指してもらうです」

「俺とギンガは、どっちかのフォローじゃなくて別組ですか？」

曹長の言葉に、思わずそう聞き返す。
スバル達はともかく、エリオとキャロは流石に2人だけだと色々危ないと思うんだが。

「それはそうなのですが、ハヤトとギンガには囮をやってもらいたいのですよ。
２人はこの中では一番実戦に慣れてるです。だから、２人に派手に暴れてもらって、敵の注意が逸れたところで、他の皆で安全確実にレリックを確保したいんです」

「……なるほど」

まぁ、確かに正しい作戦ではある。
でもなぁ……。

「でも、やっぱり私かハヤト君がキャロちゃん達と一緒の方がいいと思います」

「うーん、それはリインもそう思うですけど……。
ハヤトとギンガも、１人で戦わせたらかえって危ないと思うですよ？」

「う……」

「確かに」

曹長の言葉に、俺もギンガも頷くしかない。
指摘された通り、俺は１人じゃ大して戦力にならない。そしてギンガはギンガで、１人では遠距離の弾幕を捌く術が少ないから近づ

けなくてキツイ。
なるほど。確かに俺達も組んで行かなきゃいけないな。
エリオとキャロには悪いが、今回は2人で頑張ってもらおう。

「わかりました。すみません、お時間とらせちゃって」

「無問題ですよ～」

謝るギンガにニコリと笑みを返し、リインフォース曹長は任務説明を締め括る。

「では、今回はハヤトとギンガ組に囮としてリニアレール一番前の車両で暴れてもらうです。
その間に、スターズ分隊とライトニング分隊の2人が前後から挟み込むようにして、7両目にある最重要貨物室へと移動。そして、先に到達した方がレリックを確保するですよ」

「「「「「「「はい！」」」」」」」

リインフォース曹長は、そこで「それで……」と言葉を区切って、身体を白銀の光に包みながら華麗に一回転。純白のバリアジャケット――じゃなくて騎士甲冑――に身を包む。
どうみても布オンリーなのに甲冑とはこれ如何に？

「私も下に降りて管制と全体の指揮を担当するです。

ですが細かい部分までは手が回らないので、スターズの現場指揮はティアナに、ライトニングはハヤトにお願いするですよ。大丈夫ですか？」

「私は大丈夫です」

「俺も……って言いたいんスけど、流石に離れた場所だと自信ねーです」

こっちはこっちで襲われる訳だし、それを捌きながらエリオ達のまで、ってのはちょっと微妙だ。

ある程度近いならまだしも、今回はそれなりで距離が開くわけだし。

「うーん、確かにそうですねぇ。

けどティアナにお願いするのもちょっと難しいのですよ～」

そう言いながら心底困ったという顔をするリインフォース曹長。

くっ、可愛いじゃねぇか。俺がロリコンだったら一発で惚れてたぜ……って今はどうでもいい。

問題はエリオ達をどうするかだ。

俺とティアナはちょっと厳しいし、曹長も管制と全体指揮があるから難しい。

かといって、作戦内容からしてエリオとキャロを別々にするのも心配だ。何せ2人はコレがマジで初めての実戦。どんなイレギュラーが発生するかわかったもんじゃない。

……ああくそっ、想像しただけで何か心配になってきた。

「ハヤト君。戦うのは私が頑張るから、やってみたら？」

「ギンガ……」

「ほら、ぶっちゃけ戦闘は私がいればなんとかなるし」

「しばき倒すぞこのアマ」

「あいたっ」

随分と失礼な事を言ってくれちゃったギンガの頭を軽くど突く。
それからエリオとキャロに視線をやれば、なんというか期待しているような顔でこっちを見てる。
やれやれ、そこまで期待されちゃ仕方ないか。

「わかりました。エリオとキャロの指揮は俺がやってみます。
ただ、あんま自信ないですから、曹長もフォローたのんますよ？」

「お任せです！」

とまぁ、そうやって確認をしているうちに目標地点であるリニアレールに辿り着いた。
とりあえず開いているハッチからあたりを確認し、敵航空戦力がいない事を確認。そのまま降下ポイントへと向かう。

「よーし新人共！　隊長さん達が空を抑えてくれてるお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ！
全員、準備はいいか！？」

「「「「「「はい！」」」」」」

グランセニック陸曹の声に答え、まずはスバルとティアナがハッチの入り口へと立つ。
……あ、こいつらセットアップしてねぇ。高町一尉の真似する気だ。

「ちょっと待てお前ら、流石にちゃんとセットアップしてから――」

「スターズ０３、スバル＝ナカジマ」

「スターズ０４、ティアナ＝ランスター」

「「行きます！」」

呼び止めようとした俺が台詞を言い切るよりも先に、２人はハッチから飛び降りてしまう。
まだちゃんと動くかどうかも分からねーってのに何してんだ、あの馬鹿２人は！

俺は慌ててハッチから身を乗り出して、２人がちゃんとセットア

ップできるかどうかを見守る。
　2人は降下しながらも、ちゃんとセットアップしてリニアレールへと着地した。
　ふぅ……マジヒヤヒヤしたわ。あいつ等帰ったら説教だな。

「次！　ライトニングの2人！」

「「はい！」」

　安心したのも束の間、次はエリオとキャロの番……ってお前らもセットアップしてないの！？
　流石に今度は駄目だよ！？　危ないからね！？

「待てお前ら！　ちゃんと機内でセットアップしていきなさい！」

「え？　でも……」

「でもじゃないの！　危ないからちゃんとしていきなさい！　お願いだから！」

「そうだね。2人は降下自体初めてだろうし、ちゃんとしていった方がいいよ？
　誤作動なんかがあったら、命に関わっちゃうから」

「わ、わかりました！」

俺の必死の訴えと、ギンガの「命に関わる」という単語が効いたのか、2人はこっちの言う事を聞いてくれてその場でデバイスを起動させた。

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「「セットアップ！！」」

それと同時に2人の体がそれぞれの魔力光に包まれ、一瞬後にはそれぞれバリアジャケットを纏った姿になる。エリオは赤いシャツと若さの象徴の半ズボン、それに白いロングコートを羽織った動きやすさ重視の格好に。

対するキャロは桃色の上着と白いロングスカート、そして白いマントと大き目の白い帽子を被った厚手の服という感じの服装だ。

「「……あ」」

「へぇ」

そのバリアジャケットを見た2人と、俺の声が重なる。

根本的なデザインは違うけど、所々ハラオウン執務官のバリアジャケットとデザインが似てる。

なるほど、それぞれの分隊の特徴ってとこか。

「デザインと性能は、各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ。ちょっと癖はありますが、高性能さは折り紙つきです！」

バリアジャケットについてアレコレ考察していると、リインフォース曹長の解説が入る。

なるほど、それはわかりましたが何故貴女がドヤ顔してるんでしょうか、曹長。

いや、答えなくていいですけどね。

「ほれほれ、後がつかえてんだ。用意が出来たらちゃっちゃと出撃だ！」

「「はい！」」

解説もそこそこに、グランセニック陸曹の声が飛ぶ。

確かに、あんまりのんびりしてられる状況でも無かったか。

「……」

でも、キャロはハッチに立ったところで少しだけ怯えた表情になる。

けれど、エリオが笑って手を差し出しただけで、キャロは嬉しそうに笑ってその手を取った。

どうやらエリオの笑顔だけで勇気１００倍らしい。

……なんという青春。お兄さんは砂糖を吐きそうです。

「ライトニング０３、エリオ＝モンディアル」

「ライトニング０４、キャロ＝ル＝ルシエとフリードリヒ」

「きゅく～」

「「行きます！」」

手を繋いだまま、２人と１匹は元気よくハッチから飛び出す。
そして俺とギンガが見守る先で、無事にリニアレールの上へと着地してみせた。

「最後！　ハヤトとギンガ！　時間がねぇからさっさと行け！」

「へーい」

「了解！」

何か扱いが雑な気もするが、今は確かに時間が無いので反論は割愛。
俺とギンガもハッチに立って、降下ポイントを見下ろす。
……予想してたより大分高いんですけど。めっちゃ怖いんですけど。

「なぁギンガ、やっぱウイングロードで安全に……」

「ほら、行くよハヤト君！
ライトニング０６、ギンガ＝ナカジマ！　それから同じく０５、
ハヤト＝ロックウェル！　出撃します！」

「ってオイ待て手を引っ張るな馬鹿ギンガ落ちうぉわぁぁあああっっ！？」

高さにビビッて安全策で行こうとしたら、ギンガに手を引っ張られてそのままハッチから飛び出してしまう。だからギンガと組むのは嫌なんだよ畜生！！

「ブリッツキャリバー！」

「あぁくそっ、ブレイブハート！」

落下しながら何とか体勢を整え、手に持った銀色の指輪をかざす。
兎にも角にもセットアップしなきゃ、マジで命に関わるからな。

「「セットアップ！！」」

≪　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ.　ｓｅｔ　ｕｐ.　≫

降下しながら、俺達はバリアジャケットを展開する。
それぞれの言葉にデバイスが答え、それぞれの魔力光が各自の身体を包んだ。
光が消えれば、そこにはバリアジャケット姿の俺達2人。展開した後は、そのまま魔力で降下の勢いを殺してリニアレールの上に着地する。

「……死ぬかと思った。割とガチで」

あの頬を撫でる風と、猛スピードで近付いてくる景色は怖すぎる。
しかもこっちは心の準備できてなかったから余計に。後でギンガは絶対にぶっ飛ばす。

「……ん？」

そんな決意を固めたところで、俺は自分のバリアジャケットのデザインが、今まで着ていた物と違っている事に気付く。
今まで着ていたのは、デバイスが支給品ってのもあって、ジャケットも一般的な武装局員が着ているのと同じだった。まあ、鎧とかは邪魔だったから自分でちょっと改造したりはしたけど。
しかし今俺が着ているのは、デザインこそ武装局員のそれと同じだが、色が高町一尉のジャケットと同じ白が基調でそこに青のラインが入っている。
上に羽織っている服は白地に青のラインが入り、所々一尉のそれと似通っている。

「あれ？　私のはそんなに違わないんだ」

対して、ギンガのは今までのと殆ど変わらない。

なんというか、体のラインにピッチリしたボディスーツみたいな感じのまま。

正直、何度見ても痴女にしか見えん。やーい、痴女～。

「あ、ハヤト君のバリアジャケット、ちゃんとトレードマークは入ってるんだ」

「は？　え、どこよ？」

「背中背中。ロングコートの背中に入ってるよ、『天上天下唯我独尊』」

自分では見えないが、ギンガが言うならあるんだろう。

姉ちゃんに勝手にデザインされて、そのまま変えるのも面倒だからずっと入れておいて、いつの間にか俺の数少ない特徴になった文字。

別に消してくれても良かったんだが……フィニーノ陸士なりのサービスなんだろうか。

そして俺のデバイス『ブレイブハート』は、高町隊長のレイジングハートさんと全く同じデザインだった。いやいや、姉妹機だからって似すぎだろ。

違うのはレイジングハートさんの配色が金と桃色が中心なのに対し、俺のブレイブハートは銀と赤が中心なところか。それ以外のデザインは全く一緒。

「こりゃ、背中の文字以外見たらペアルックだと思われるレベルだな」

「だね。まぁ、なのはさんは嫌だろうけど」

「ンだとコラ……っと」

前方から聞こえてきた爆発音と衝撃に、戦いが始まったのを知覚する。

「スバル達の方、始まったみたいだね」

「ああ。馬鹿やってる場合じゃねーな。今回俺らは囮なんだから、精々派手に暴れて敵さんを引きつけるとしようか」

「了解！」

言葉と共に一切の無駄な思考を捨て、とりあえず頭をクリアにする。

なにせ俺は今回、エリオ達の指揮をしながら囮もやんなきゃいけなくて大忙しだ。

まったく、帰ったらボーナスでも出して貰わなきゃ割に合わんぜ。

「それじゃあギンガ、とりあえずはいつも通りだ！」

「オッケー！　任せて！」

「任せたぞ脳筋！」

「脳筋じゃなーい！！」

俺の指示にギンガが答え、軽口を叩きあいながら、俺達は同時に駆け出す。

さーて、新デバイスでどこまで出来るか、楽しみにさせて貰いますか！

ex9話　『ファースト・アラート　3』（後書き）

色々と解説してたら長くなってしまった……。
どうも、ラモンです。

いつになったらブレイブハートを喋らせられるんだ……。
本当なら今回喋る予定だったのに、色々と解説っぽいのを入れてたら長くなってしまったでござるの巻。
まぁ、今回はハヤギンが囮になるっていう、原作と違う展開があるんでどうしても解説が必要だったので、ご容赦くださいませ。

えー、そんな訳で出撃編でした。

ここって、意外と文句言われてる部分なんですよね。
初出動なのに、隊長が部下ほっぽって出撃すんなよ！　って。
ただ、あそこで下手にフェイトだけに任せて、いざって時に航空戦力がこっちに来るよりは、なのは達でガッツリ食い止めてた方が、安全性は上だと思うんですよ。個人的に。
なので、そこら辺を軽く解説してみました。
飛び降りセットアップ？　危ないけど、アニメだからいいんだよ！w

閑話休題。
次回でファースト・アラート編は終わりにしたいですね。
何かまたグダグダ書いて長くなるかもですが（汗）
そしていよいよ次回、ブレイブハートの初台詞が！！

……あ、今回一応ひとことだけ喋ってはいたのかw

それではまた、次の話で。

ex10話　『ファースト・アラート　4』

「ギンガ！」

「了解！」

とりあえず敵の気を引く為に、派手に暴れる事にする。

幸いというか何というか、敵であるガジェット――縦長の楕円形をした、いかにも雑魚ってデザインのロボットだ――は俺達の周りにも湧いてきている。

こいつらを一瞬で倒しちまえば、多分俺らが危険だと判断されてこっちに敵が来るだろ。

「試運転も無しでぶっつけ本番だけど、大丈夫かねぇ」

《　私がキチンとフォローしますので、問題ありません。マスターハヤト　》

「うおぅっ！？」

右手に持った杖型デバイス『ブレイブハート』を握り直し、そう呟いた時。

いきなり聞き覚えの無い女性の声が聞こえてきた。まさか乗ってる人いたの！？

しかし慌てて周りを見回してみても、リニアレールの屋根の上に居るのは俺とギンガ、そしてスバル達４人だけで他に人の姿は見え

ない。

「？」

《　こちらですよ。マスターハヤト　》

「こっちって……あ、そうか」

首を捻っているとさらにもう一度声がする。

そこで、ようやく俺はこの声を発している“誰か”の正体に思い至った。

「喋れたのか。ブレイブハート」

《　はい　》

そう。声を発していたのは俺が右手に握っていたデバイス、ブレイブハート。

考えてみりゃ、インテリジェントデバイスなんだから、音声機能がついてて当然だよな。

インテリジェントデバイスってのは、今まで俺が使っていたストレージデバイスと違い、魔法を発動する手助けとなる処理装置、状況判断を行える人工知能も有しているのが一番の強み。

意思を持っているからこそ、その場の状況判断をして魔法を自動起動させたり、使用者の性質に合うように自らを調整したりもする。

だからこそ魔導師達が欲してやまないデバイスな訳だし。

「おお、今までずっとストレージ使ってたから、受け答えがあるのは何か新鮮だ」

《それはいいのですが……あちらは、放っておいていいのですか？》

「ん？」

ブレイブハートに言われて視線を上げると、目の前ではギンガが縦長の楕円形をした、雑魚っぽいデザインの機械――ガジェット？型を相手に無双をしているのが見えた。

おーおー。派手にやれとは言ったけど、頑張りすぎじゃね？

まさにちぎっては投げ、ちぎっては投げ状態なんですけど。

「ああ、別に大丈夫だろ。ギンガなら、油断さえしなきゃあんな相手じゃ怪我もしねーよ。

むしろ相手のガジェットが可哀想だ……っと、エリオ、キャロ。あんま無理して相手しなくていいぞ。ガジェットはこっちに通して、お前らは先に進む事だけ心がけてな」

『『わかりました！』』

「ティアナとスバル。調子はどうだ？」

『こっちは平気だよハヤ兄！』

『そっちも無理しないでください』

エリオとキャロに指示を出してから、スバル達と通信で現状を確認しておく。

今のところ、どっちも心配するような事態にはなっていないようだ。流石はあの高町一尉たちがスカウトしたってだけの事はあるな。

スバル達の現状を確認してから、目前でガジェット無双やってるギンガを見る。

「ギンガ。お前はその調子で適当に頑張れ」

「ちょっと！　何か私だけおざなりじゃない！？」

「うるさい。俺は忙しいから、こっちに敵がこないようにしろよ」

「何か注文つけてるし！」

俺の言葉に文句を言いながらも、ギンガは次々とガジェットを殴る蹴るの暴行をした末に鉄屑にしていく。もうアイツ1人でいいんじゃないだろうかと、割と本気で思う。

だが、俺がそう思ってボケッとしている隙に、ギンガの周りに居たガジェットのうち1体が、黄色い弾丸を吐き出した。それは一直線にギンガに向かって――

「あっぶねっ！」

《 Ｐｈｏｔｏｎ ｂｕｌｌｅｔ. 》

当たる直前、こっちが撃ち出した赤い魔力弾で撃ち落された。
おお、やっぱすげぇなインテリジェントデバイス。今の、殆ど照準なんて適当だったのに、ちゃんと当てられちゃったよ。照準補正パねぇ。

「お前すげーなぁ……あの一瞬で照準補正してくれたのか」

《 それが私の役目ですから 》

「いいね。少しは楽できそうだ」

流石はインテリジェントデバイス。マジで頼もしい。
自慢じゃないけど、俺は戦闘と指揮とを両立できる程に優秀じゃない。１０８に居た時に両方をいっぺんにやってみたんだが、散々な結果に終わっちまったしな。
さっきみたいに、咄嗟に何かをしなきゃいけない時にどうしても意識の切り替えが出来ねぇんだ。
照準補正だけでもブレイブハートがフォローしてくれるってんなら、問題は少ないだろう。

なるほど、リインフォース曹長が俺にエリキャロコンビの指揮を任せたのも納得できるわな。
出来ないことは頼まないってことか。

「そんじゃフォロー頼むな。ブレイブハート」

《　了解しました。マスターハヤト　》

「という訳だギンガ！　頑張って１０００人斬り達成しろよ！」

「意味分かんないよっ！　そもそもガジェットは１０００体もいないしっ！」

「お主こそ、真の三国無双よ！」

「だから意味分かんないってば！」

最後にギンガをそう言ってからかってから、俺はリインフォース曹長から送られてくる戦況データと、エリオとキャロを映した映像に集中する。

チビっ子２人は、絶対に怪我さえないようにしないとな。

年長者の責任ってヤツだ。ま、余程の敵が出てこない限りは大丈夫だろ。

……あれ？　何かこれフラグじゃね？

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｅｘ１０話　『ファースト・アラート　４』

エリオとキャロの2人は、ギンガが思っていた以上に囮としての役割を果たしてくれているお陰で、こっちが想定していた以上のスピードで重要貨物室のある第7車両へと近づいていた。
第7車両を挟んだ逆側でスバルとティアナが結構派手に戦ってるのもあってか、エリオとキャロの周りに敵影は見えない。この調子なら、2人が一番乗りだろう。

「エリオ、キャロ。そのまま目的のロストロギアを確保。敵影は見えないけど、油断するなよ？」

『『はいっ！』』

2人にそう指示を出してから、今度はギンガの方に意識を集中させる。
あそこまで行っちまえば、さすがに大丈夫だろ。そんなにしないでスバルとティアナの2人も合流するだろうし、そうすれば俺が指揮を執らなくても大丈夫な筈だ。
後はギンガに群がってるガジェットを掃除しちまえば、万事解決になる……筈。

「ギンガ～、まだ平気だよな？」

「もちろん！　まだまだ平気だよっ！」

どうやら１０分以上ガジェット相手に無双してたのに、ギンガは元気ハツラツらしい。
まったく、相変わらず体力だけは人並み外れてやがんなぁ。

「あと少しでエリオとキャロがロストロギアを確保するから、後はここを片付けりゃ終わりだ」

「わかった！　じゃあ、さっさと終わらせちゃおう！」

「あいよぉ」

元気が有り余ってるギンガに答えつつ、目の前でギンガに群がってるガジェットに集中する。
数は大体２０ちょい、これなら2，3分もあれば片付くだろ。さっさと終わらせて帰りてぇし、少しは張り切らせてもらいましょうか。
久しぶりの実戦に少しだけ心躍らせながら、ブレイブハートを握り直す。

同時にギンガに群がってきたガジェットに狙いを定め、真紅の魔力弾をありったけ撃ち出す。
俺じゃＡＭＦを抜けるかどうかは五分五分だが、弾幕を張るだけだって十分意味はある。

「ナイス、ハヤト君！」

その弾幕が当たって体勢を崩したガジェットに向けて、ギンガが一瞬で距離を詰めて蹴り飛ばす。
瞬間、俺はもう一度弾幕を張って、ギンガの後ろから迫ってきていたガジェットを撃ち抜いた。

「右！」

「了解！」

「今度は左！」

「そっちはハヤト君やって！」

「えぇ～、めんどい」

「あのねぇっ！」

短く言葉を交わしながら、ギンガと背中合わせになりつつガジェットの群れを撃破していく。
……いや、俺も少しは撃墜してるよ？　役立たずじゃないよ？

「バレットいくぞ！　当たんなよ！？」

「ハヤト君じゃあるまいしっ！」

「ハッ、上等ォッ！」

次にフォトンバレットの弾幕をギンガ――正確にはギンガを挟んだ反対側にいるガジェット目掛けて撃ち出す。それとタイミングを合わせてギンガは横に動いて魔力弾を避け、俺の撃ち出した弾は見事ガジェットに命中、ガジェット共に綺麗な風穴を開けた。

「どうよ！　俺だってやれば出来るんだぜ！？　全国の女子諸君見てる！？

ファンレターは年中無休で受け付けしてるから、ドシドシ送ってくれよな！」

「誰も見てないから！　お馬鹿なこと言ってないで、集中しなさい！」

「ボケ殺しをするやつの言う事など、誰が聞くか！」

「殴るよ！？」

「すいません」

ちょっとボケただけでコレだよ。全くこれだから脳筋は。

ゲンヤさんだったら、いい感じにボケ返してくれただろうに。嘆かわしい。

とはいえ、脳筋の言う事も尤もなので、今はガジェット掃討に集中する事にしておく。囮として派手に暴れただけあって、こっちに来ている数は結構なモンだ。

ギンガに任せてりゃ余裕だろうけど、働かないと後で説教されるからなぁ。

「ふぉとんばれっと～」

「何その青狸っぽい言い方!?　やる気無いでしょ!?」

「気のせいだよ、のび○君」

「誰!?」

会話はアレだが、一応ちゃんと倒してはいるんだぜ?
その証拠に、最初は３０機以上いたガジェットも今じゃ片手で数えられる位に数を減らしている。
そして――

「これで!」

「ラストッ!!」

ラスト一体にギンガが拳を打ち込み、少し遅れて俺の魔力弾が次々とガジェットに襲い掛かって、楕円形の本体に穴を開けていく。
数秒後、穴だらけになったガジェットは爆発。破片をあたりに撒き散らして沈黙した。

「ふぃ～」

「お疲れ、ハヤト君」
「おうよ」

周りを確認するが他のガジェットは見当たらない。
よし、とりあえず後はエリオとキャロが目標を確保すれば……。

『うわあぁっ！！』
『エリオ君っ！』
「「！？」」

そこまで考えたところで、突然通信でエリオとキャロの悲鳴が聞こえてきた。
驚いて視線を前――つまりエリオとキャロが居る重要貨物室のある、第7車両へと向ける。

「はぁ！？」
「嘘！？」

その先に見えたのは、車両の屋根の上に鎮座している、俺の倍はあろうかという大きさの球状をしたガジェットと、そのデカイアームに掴まれているエリオ。

ちぃっ！　ちょっと考えりゃ分かるだろうが！
古今東西どんなゲームにだって、目的地の前にゃボスが居て当たり前だってのに！

「っ！！」

「うそっ！？」

そうこうしてる間に、アームに掴まれていたエリオが空中に放り投げられた。
やべぇっ！？　エリオは意識失ってるっぽいし、あのままじゃ地面に叩きつけられちまう！

『エリオ君っ！』

「ってオイオイ、キャロは何してんのっ！？」

しかもそんなエリオを追って、キャロまでリニアレールから飛び降りちまった。
あの2人、こんな高高度からのリカバリー訓練はしてないだろうに、何で飛び降りちまうかなぁ！
いや、キャロの性格考えたら咄嗟にって話なんだろうけどさ！

「ギンガ！」

「駄目、距離が離れすぎてる！」

「ンなこと言ってる場合かよっ！！」

「でもっ！」

「俺じゃ届かねぇんだ、お前が行かないでどぉすんだよ！」

『大丈夫だよ、２人とも』

焦って口論する俺とギンガの耳に、今度は高町一尉の声が聞こえる。

いや、大丈夫って一尉！？　流石にこの状況で大丈夫な訳――

『んにゃ、大丈夫やで。飛び降りた事で、あの大物との距離が離れた。

それはつまり、ＡＭＦの効果範囲からも離れてるって事や』

――今度は八神部隊長？　いや、確かにアレだけでかけりゃＡＭＦの範囲も広いだろうし、ああやって飛び降りたらその範囲からは抜け出せるだろうけど、それとこの状況に何の関係が……。

『だから、使えるよ。フルパフォーマンスの魔法が！』

いや、高町一尉。フルパフォーマンスでも、キャロはサポート系

の魔法しか使えないんじゃ？
そんなんでこの高度からのリカバリーは無理……って嘘ぉっ！？

「りゅ、龍！？」

『知らなかったんか？　アレはキャロの龍魂召喚っちゅー召喚魔法や。
ちなみにあの龍、フリードやで？』

「いやそりゃ見れば何となく分かりますけど……」

まさかあのチビ助が、あんなデカくなるとか想像もしてなかった。
見た目とか、完璧にゲームとかに出てくる龍そのものじゃん。キャロすげー、憧れるー。
いやホントマジで驚いた。あんなの出来るなら、最初からやれば良かったのに。

『キャロにも色々と事情があるんよ。それに、万一に備えてちゃんとリインも待機しとったしな』

『そうなのですよー』

「あ、そういえばリインフォース曹長居たんでしたね」

『……忘れてたですか？』

「はい。割と綺麗さっぱり」

『ハヤトは後でお説教なのです。リインのありがたみを、じっくりと教育してあげるのですよ』

「おぅ、ジーザス」

口は災いの元でした。

とまぁ、エリオとキャロが無事だった事で気を抜いていたら、突然爆音が聞こえてくる。

まさか2人に何かあったのかと思い慌てて振り返れば、そこに見えたのは爆煙を背に、自分の槍型デバイスを振り上げた格好をしているエリオ。

ロングコートの裾が爆風に靡き、なんというかヒーローの決め技後みたいで、カッコよさが凄い。

同じ男枠だというのに、この扱いの差はなんだろうか。

「ま、とりあえず怪我も無かったみたいでなによりだ」

「そうだね。それじゃあなのはさん、八神部隊長。私とハヤト君はこれからエリオ君たちと合流して、そのまま目標を確保します。よろしいですか？」

『うん、お願いねギンガ』

『もう近くに敵はおらんと思うけど、油断はせんといてな』

「「はい」」

そうやって部隊長達と話している間に、少しずつリニアレールの速度が落ちていく。
どうやら、スバルとティアナがリニアレールの制御を取り戻したらしい。となれば、これで今回の事件は万事解決……という訳だな。

「やれやれ、最後は肝が冷えたけど、とりあえずは無事任務完了、だな」

「うん。それじゃあ、回収とかを手早く終わらせて帰ろっか」

「あいあい。さっさと帰ってゲームやるぞー！」

「いや、報告書とか出すんだから、ゲームやってる暇なんてないよ？」

「それはお前に任せた」

「もー！　ハヤト君！！」

後ろから眉を吊り上げてくるギンガから逃げながら、第7車両に向かって走っていく。
ホント、無事に終わってなによりだよ。ギンガも無茶な役割押し付けちまったけど、怪我ひとつしなかったしな。まぁ！？　それもこれも、俺の活躍があってこそなんですけどね！

「今日という今日は、ちゃんと報告書を書いてもらうんだから～っ！」

「いーじゃんか。１０８の時はいつも書いてくれてただろ！」

「ハヤト君が書かないから、私に回ってきただけじゃないのっ！」

「じゃあ今回もそんな感じでよろしくー！」

「ふざけるなー！！」

こうして、機動六課に来て初めての出動は無事に終了できた。

とりあえず今回の教訓として、俺は二度と指揮と戦闘の両立はしないと固く心に誓うのだった。

次の機会があったら、その時はティアナに任せるとしよう。

適材適所って大事だよネ！

ex10話　『ファースト・アラート　4』（後書き）

どうにもスランプ気味ですなぁ。
どうも、ラモンです。

ギンガとハヤトを別組にしなきゃ良かったと、今回ほど切実に後悔したことはありませんでしたね、ええ。
実際スターズともライトニングとも離れた場所なんで、原作の場面が殆ど使えないんですよ。しかもハヤトはライトニングの指揮もしてるから、ライトニングの場面はある程度使わなきゃいけないっていう。
くっ、考え無しにやる事じゃなかった……（笑）

あんまり違和感無いようにしたつもりですが、正直微妙な気がしてしょうがないでごわす。
それはさておき、次回は日常回を書く予定です。
どんな内容かはまだ考え中ですが、ティアナについて書く可能性が高いかなーと思われます。
ギンガルートは、苦労するのを承知で、色々と原作にない展開を目指してみようかと思ってますので。……文才無いクセに、挑戦する魂だけは持っているというね（笑）

それではまた、次の話で。

ex11話　『閑話・ちょっとした昔話』

「ん？　おー、ティアナじゃん」

「え……あ、ハヤトさん」

初出動で俺達が出張ってから2日後。
午前の仕事を終わらせて、さて昼飯だと食堂に向かっている途中、休憩所のソファに寄りかかってメール用のモニタを開き、その画面と睨めっこをしているティアナを見つけた。
俺が手を上げて声をかけると、ティアナは画面から視線を動かして少しだけ驚いた顔をする。

「1人なんて珍しいな。スバルに振られたか？」

「スバルは書類仕事の真っ最中です。ハヤトさんこそ、ギンガさんに見捨てられました？」

「わけわからんこと言うな。ギンガはハラオウン執務官と資料整理だとさ。
俺は捜査官の資格を持ってないから、立ち会えないんだよ。守秘義務とかそんな感じで」

「ああ、なるほど」

会話をしながら、ティアナの対面に座る。

む、このソファ意外といい座り心地じゃないか。さすが新設部隊、ソファも新しいって訳だな。
　１０８にあったソファは、固くて座れたもんじゃなかったし……俺、ここに来てよかったよ。隊長陣は美人揃いだし、胸も素晴らしい人が多いし。何より直属の上司が巨乳美女とかもうね。

「情熱を持て余す」

「いきなりドヤ顔で何の話ですか……」

「いや、俺の中にあるエントロピーが爆発してＱＢが大喜びって話をね」

「は、はぁ……？」

　どうやら俺の心の声は聞こえてなかったようで、ティアナはしきりに首を傾げている。
　ふむ、そういえばコイツとこうやって２人だけで話す機会はあんまり無かったな。折角の機会だし、少し色々と話してみるとしようか。悩みがあったら相談に乗ってやろう。

「という訳で、悩みを話してごらん」

「え？　いや特にありませんけど……なんですかいきなり」

「むぅ……えーと、最近学校はどうだ？」

「行ってませんけど」

「恋人とかはできたのか？」

「いえ、まだ……すいませんハヤトさん。ちょっと聞きたいんですけど、何でそんな久しぶりに娘と話す父親みたいな会話なんです？」

不思議そうな顔で尋ねてくるティアナ。

いやね、俺って彼女いない暦＝年齢じゃないですか。だから、女の子と2人きりだと何を話していいのか分からんのですよ。だから、いまだに嫁さんも貰えん。

「なんですかそれ、意味分かんないですよ」

クスクスと笑うティアナを見て、ふと最初に会った頃のコイツを思い出す。

そして今目の前で笑っているティアナとを比べ、ふと思った事を口にした。

「随分と丸くなったよなぁ」

「え？」

「あ、いや。昔、初めてスバルがお前を連れて家に来た時を思い出してさ」

「ああ……確か2年前くらいでしたっけ？　それで？」

「ん。それで、その頃に比べて今のティアナが……なんつーかこう、余裕が出来たっつーのかな。
あー、何か上手く言葉に出来ねーけど、そう思ってな」

そんでつい口にしてしまった訳だ、と言葉を締め括ると、ティアナは何だか恥ずかしげに苦笑して頬を掻きつつ「あー……」と納得したような声を漏らした。

side：ティアナ＝ランスター

ハヤトさんの言葉を聞いて、思わず自分で納得してしまった。
確かに、ハヤトさんと最初に会った頃、あたしはもっと切羽詰っていたと思う。あの頃は自覚なんて殆どしてなかったけど、今になって思えばかなり余裕が無かった気がする。

それは訓練校でコンビを組んでいたスバルに対する嫉妬や羨望であり、自分自身の才能の無さへの失望であり、私の目標だった『兄さんの代わりに執務官になる』という夢に対する焦りだった。
初めて会った頃は、お世辞にも優秀とは言えなかったスバルが、その頃にはすでに自分と同等以上の実力を持っていて、逆に自分はそれ程実力を伸ばしている実感が湧かなくて。

だから、このままじゃ駄目なんじゃないかと、あの頃は毎日そんな事を思っていた。

でも……うん。確かに今は、あの頃に比べたら随分と余裕があると自分でも思う。
そしてそれは――

「多分、ハヅキさんのお陰だと思います」

「姉ちゃんの？」

私がハヅキさんの名前を出したのが意外だったらしく、ハヤトさんはびっくりしたような顔で目を丸くした。まぁ、確かに意外に思って当たり前だろう。

あたしとハヅキさんは、会った回数はそんなに多くない。
回数だけで言うなら、本当に片手で数えられるくらいだ。それくらいしか会っていない人の名前が出るなんて、普通は思わないだろう。
でも。

「そうですよ。ハヅキさんのお陰です」

でも、あたしが変われたとするなら、間違いなくハヅキさんのお陰なんだ。

「はぁ～……あの姉ちゃんのお陰、ねぇ……」

隣でイマイチ納得いかなさそうにしているハヤトさんを見て、苦笑する。
実のお姉さんなのに、そんな不思議そうにしなくてもいいのに。
ああ、むしろ実のお姉さんだから、なのかしら……なんて、そう思いながら、あたしはあの日の事を思い出していた。
ハヅキさんが、あたしの悩みを吹き飛ばしてくれた、あの日の事を。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ１１話　『閑話・ちょっとした昔話』

ｓｉｄｅ：―

現在から遡る事、１年ほど前。
ナカジマ家の庭に２つの青い光の道が所狭しと広がっていた。
展開された青い光の道――ウィングロードの上をスバルとギンガが走り、１人の女性目掛けて迫る。
２人が目指す先には、腰まで届く金色の髪を揺らし、黒いジャージを着た女性が両手を組んで立っていた。女性は少しだけ関心した

ように目を開き、自分に迫るスバルとギンガとを眺めて口を開く。

「……なるほど、この1年で随分とサマになったじゃないか」

嬉しそうな笑みを浮かべながら、それでも女性は動かない。

そうしている間に、スバルとギンガは目で追うのも難しい程の速度で女性に迫り、同時に殴りかかろうと拳を振り上げ、一気に突撃する。

「だが――」

その、刹那。

「――まだまだ遅い」

「っ！？」

「嘘っ！？」

今まで2人の視線の先に居た女性の体が消え、次の瞬間にはギンガの目の前まで移動していた。

ぶつかりそうになったギンガは、咄嗟に体の軸をずらして衝突を回避しようとする。だが、それは判断ミスだったと言わざるを得ないだろう。

何せ、女性の方はギンガに「その行動を取らせる事」こそが目的なのだから。

「判断が甘い」

「きゃあっ！？」

「ギン姉！」

短い言葉と共に、女性がギンガを蹴り飛ばす。

一瞬の事態にスバルが叫ぶが、その瞬間には女性が彼女の目の前まで迫っていた。

「うぃっ！？」

「お前もこの程度で動揺するな、スバル。まぁ、まだ１４では仕方ないか」

「あうっ！」

そして、今度はスバルが投げ飛ばされて宙を舞う。

宙を舞ったスバルは目を回して地面に叩きつけられ、そのまま動けなくなる。

時間にして僅か数秒の出来事。

その僅かの時間で、女性はスバルとギンガとを一瞬で倒してのけた。

「どうする？　まだやるか？」

「……いえ」

「無理～……」

「ん、よろしい」

地面に倒れたギンガとスバルへの問いかけに2人が首を横に振ったのを確認し、女性は体の緊張を解いて2人に笑いかけながら口を開く。

「中々良くなっていたぞ、2人とも。思っていた以上に良い訓練になった」

「いたたた……」

「うー、ハヅ姉ひどいー」

「はっはっは！　すまんすまん、ちょっと加減が足りなかったかな？」

蹴り飛ばされた腿を摩るギンガと、地面に打ち付けた背中の痛みに呻きながら、目の前でカラカラと笑う女性に抗議するスバル。

けれど、女性はスバルの抗議に笑うだけで、反省の色はないよう

だ。
まぁ、訓練なのだから多少痛い目に合うのは当然な訳で、反省するのもおかしな話だろう。

「では今回の訓練はここまで。スバル、ギンガ、2人とも風呂に入ってこい。
それが終わったら、反省点と改善点を教えてやるからな」

「は～い！」

「わかりました」

女性の指示に頷いて、2人は自宅へと入っていった。
その背中を見送ってから、ハヅキはナカジマ家のリビングへと視線を移す。

「すまないなティアナ。退屈ではなかったか？」

「あ、いえそんなっ！　凄く勉強になりました、ハヅキさんっ！」

「そうか？　ならば良いのだが」

彼女の視線の先に居たのは、スバルの帰省に付き合わされてナカジマ家へと遊びに来ていたティアナがリビングから庭へと続く縁側に座っていた。
問いかけた女性――ハヅキは、ティアナの返答にホッとした様な

顔をする。
スバルとギンガ、そしてハヅキとのこういった訓練は、スバルが実家に帰省するたびに行われていた。
当然というか、その度に付き合わされるティアナは、何度もこの訓練を見ている。

――そして、少なくともこの3人の訓練は見ていて退屈するようなレベルではない。

ハヅキは管理局地上本部において、『エース・オブ・エース』と並び称される……いや、人によってはそれ以上の評価をされている『女帝』という通り名を持つ女性。
そんな人間の訓練を間近で見れるのだ。退屈などする暇はないだろう。

「ふぅ。それにしても、流石にそろそろデバイス無しで2人の相手はキツくなってきたな。
たった1年あっていないだけだというのに、驚く程成長している」

そのハヅキは、そう言いながら庭をテクテクと歩いてティアナの隣に腰を降ろした。
呟く顔には、2人の成長を純粋に喜んでいるような、そんな笑みが浮かんでいる。

「そう、ですね……」

しかし、嬉しそうなハヅキとは反対に、彼女の声に答えるティアナの表情は暗い。

「む？　どうした、ティアナ」

「あ、いえ……別に、何でもないですよ」

「なんでもない顔では無いだろう。どうした、言ってみろ」

ティアナの表情に気づいたハヅキが尋ねるも、ティアナは苦笑して首を振る。

だが、ハヅキはそれを良しとはせずに、自分の顔を鼻先が触れ合う程にティアナへと近づけた。

「ち、近いですよハヅキさんっ！」

「大丈夫だ。私の唇はハヤト以外には捧げん。それで、どうした？何か悩みでもあるなら聞いてやるぞ。悩みとは、人に話すだけでも楽になるものだからな」

顔を赤くした彼女のツッコミに、女であるティアナさえ見惚れるような微笑みと共に訳のわからない言葉を返し、ハヅキは尚も問いかける。このあたりの他人を心配しすぎるところは、流石スバルやギンガの幼馴染というべきだろうか。

「いや、ですから……」

「話せ」

「そんな大した事じゃ……」

「話さないなら泣くぞ。大声で」

「あの……」

「いいのか？　君の前で２３歳の女が大声で泣くんだぞ？　きっと凄まじく居心地が悪くなるぞ？　正直、なんで話さなかったのかと後悔するぞ？」

「……わかりました」

自分よりも年上の女性に「泣くぞ」と意味の分からない脅迫を受け、渋々ながらティアナは頷いた。

いや、実際目の前で年上の人に泣かれるというのは、かなり嫌なのだけど。

「でも、気分のいい話じゃないですよ？」

「構わん。気分のよくなるような悩みなどあるものかよ。それでも、私の友がそんな暗い顔をしているよりは、億倍マシというものだ」

「あはは……なんか、凄い殺し文句ですね」

胸を張るハヅキに苦笑してから、ティアナは口を開く。

「……最近、スバルが羨ましいんです」

「ほう、スバルが？」

ティアナの口から漏れた名前に、ハヅキは目を丸くする。

「それはまた何故だ？」

「アイツは、あたしに比べてこの1年でホント成長しました。魔力も随分伸びてきたし、戦闘だって訓練校の時とは見違える位に強くなった」

「そうだな。それは私もそう感じるよ」

「……それが、凄く羨ましくて。嫉妬しちゃうんです」

「嫉妬、か」

言葉通り、ティアナはこの1年で実力をグンと伸ばしたスバルに嫉妬を覚えていた。

自分が沢山努力して辿り着いた場所に、スバルは一足飛びで追いついてくる。そして、いつしか自分の少し前に居るような、そんな

気持ちになってしまう。
それが、酷く羨ましくて。筋違いと分かっていても、嫉妬してしまうのだ。

「スバルを見てると、自分がいかに凡人なのかっていうのを思い知らされちゃって。
やっぱり、才能ってのはズルいなぁ……何て思っちゃうんです」

「ふむ……」

「最低ですよね。あの子は普通に努力してるだけなのに、勝手に嫉妬して、勝手にこんな事思って」

自嘲気味に笑いながら、ティアナが呟く。
彼女も分かっている。自分の言っていることが、本当に自分勝手な言い分だということは。
けれど。

「いや、それは当然のことだろう？」

「は？」

ティアナの言葉に対して、ハヅキは「何を当然の事を」と言わんばかりの顔をする。

「才能のある者に対して嫉妬を覚えるなど、日常茶飯事だろうよ。私とて、スバルやギンガには嫉妬しているぞ。しかも、かなり本気でな」

「嫉妬って……ハヅキさんが、ですか！？」

何故か胸を張って言い切ったハヅキに、ティアナは思わず大声を上げてしまう。

それも当然だろう。彼女は『地上本部最強』とまで呼ばれる程の実力者で、管理局全体を見てもかなり上位に食い込める程の人物だ。

そんな彼女が、自分よりも弱いであろうスバルやギンガに嫉妬していると言うのだ。

これを聞いて驚かない人間など、いる筈もない。

「うむ。そして私はちゃんとスバル達に言っているぞ、「お前達が羨ましい」とな」

「え……いや、でもハヅキさんは……」

「確かに、今現在私の事を地上本部最強などと呼ぶ輩も居るな。けれど私は、魔力値が高いという以外は、全てにおいて凡俗なのだよ、ティアナ。

なにせ、実の母親から「才能が無い」と言われたくらいだからな」

恥ずかしそうに笑いながら、ハヅキの言葉は続く。

「私は精密射撃が下手だ。私は空戦が出来ん。
格闘だって、毎日全身が悲鳴をあげるくらいに鍛えなければ、スバル達に追い抜かれそうで怖い。
砲撃魔法なんぞ、レアスキルが無ければ撃てないんじゃないかと毎日思っている。
指揮能力もそれ程高くないし、幻影魔法なぞを使われたら堪ったものじゃない」

つらつらと、ハヅキは自分の欠点を挙げていく。
それは、普段の彼女からは想像も出来ないような内容で。
ティアナは驚きに声を失いながら、ハヅキを見つめていた。

「お前の言う『凡人の気持ち』なら、私は誰よりも理解出来るさ。
才能のある者に対する嫉妬も羨望も憧れも、何もかもな」

「……ハヅキさん」

「天才が一瞬で理解出来ることを、何度も何度も繰り返し、血反吐を吐いてモノにする。
そして、そうやって辿り着いた場所に天才どもが一瞬で辿り着いた事に嫉妬し、自分の才能の無さに絶望する。ずっとそれの繰り返し……そういう人種なんだろうよ。私達凡人という人種は」

肩を竦めてそう言いきり、ハヅキは「けどな」と笑う。

「よくよく考えれば、そんな事はどうでも良かったんだよ」

「どうでも、良い？」

「他人は他人。自分は自分。比べる事自体が間違っているんだと、私は思う」

そう言いながら、ハヅキは自分の前に真紅の魔力弾をひとつ作り出し、庭の隅にあった大きめの石に照準を合わせてそれを撃ち出した。

しかし、撃ち出された魔力弾は狙いからは大きく逸れ、その後ろの塀にぶつかって消滅する。

ハヅキは「やっぱりなぁ」と溜息を吐いてから、ティアナを振り返って尋ねた。

「ティアナ。君なら、今のを外したりはしなかっただろう？」

「え？　いや、わかりませんけど……はい、多分」

「そういう事だ。所詮、全ての分野において他人を凌駕できる人間など存在しない。

君が言うところの天才であるスバルやギンガだって、射撃においては君よりずっと下手だろう。

ならばそれは、『射撃』という技術においては、君が私やあの２人よりも才能がある……という事にはならないか？」

「……っ！」

言われて、初めて気付いたとばかりにティアナが目を開く。
そんな彼女に向けて、ハヅキはこう言葉をかける。

「才能なんてそんなモノさ。見ようによっては、誰にでも何かしらの才能があるんだよ。
ならば、いちいち他人と自分とを比べて卑屈になるなんて、馬鹿らしいじゃないか」

言葉と共にティアナの肩を叩き、白い歯を見せて笑う。
その笑みは、ティアナには眩しい位に綺麗で。だからティアナも、つられるように微笑む。

「そう……ですね。そうかも、知れません」

「嫉妬なら存分にすればいい。自分に無いモノを持っているヤツを羨ましく思う事の、何が悪いものか。
ただ、それに目を奪われて自分自身を否定してやるな。
少なくとも、お前にはお前だけの、私には私だけの『才能』は必ずあるのだから」

「……はい」

頷きながら、でも、ティアナは納得は出来ていないのだろう。
当然だ。そう簡単に自分の意識を変えられる程、彼女は器用な人間ではない。
けれど、それでも――

「もし誰かが「凡人は天才に勝てない」などと言うなら、私はこう返そう。
面白い冗談だ。あまり凡人を舐めて貰っては困る……とな」

「あははっ……そうですね。凡人を舐めてもらっちゃ困りますよね」

――ティアナにとってハヅキの言葉は、十分すぎる言葉だった。
さっきまで持っていた自分の嫉妬が、つまらないモノだと思ってしまうくらいに。

「では、私もシャワーを浴びてくるとするかな。どうだティアナ、一緒に入るか？」

「いや、流石にそれは遠慮しておきます」

「はっはっは！　そうかそうか、残念だ」

最後にそう快活に笑いながら、ハヅキはナカジマ家の隣にある自宅へと戻っていく。
その背中に、ティアナは小さく頭を下げた。そうやって頭を下げた彼女の顔には、さっきまでの暗い表情ではなく、嬉しそうな微笑みが浮かんでいたのだった。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター

「……おい、ティアナってば」

「っ！」

ハヤトさんの声に呼ばれて、我にかえる。
やばっ、何か回想に浸っちゃってたわ。

「どうしたよ。何か複雑な顔しやがってからに」

「あ～、いや、何でもないですよ。あはは」

不思議そうな顔をするハヤトさんに、笑って誤魔化しながらそう答えておく。
言えないわよね、自分でもあの頃の事は思い出したくないくらいなんだし。

「ははーん、その顔……男だな！？」

「違います。てゆーかハヤトさん、さっきから話題が普通に下世話なんですけど」

「えぇ～？　そうでもないだろ。スバルとかだと、普通に返してくるぜ？」

「スバルと一緒にしないでください。割とマジで」

「酷いなお前、友達だろうに……」

あの日ハヅキさんに言われた事。
いまだに、才能の差っていうのに悩むことはある。
でも、前みたいにそこで立ち止まってウジウジ卑屈に考えるような事はなくなった。

だって、あたしはハヅキさんから大切な事を教わったから。

「ティア～、お待たせー……って、ハヤ兄だぁっ！」

「うおっ！？　いきなり抱きつくなっつってんだろ、スバル」

「えへへ、ごめんなさーい」

「反省してねーよこいつは」

スバルに出来る事で、あたしに出来ない事は沢山あるかもしれないけれど。
でも逆に、あたしに出来ることで、スバルに出来ないことだって沢山あるんだ。だから、いちいちそれを比べて卑屈になるなんて馬鹿らしい事は、もうしない。

「あたしお腹すいちゃった。ハヤ兄、ティア、お昼ご飯食べよ、お昼ご飯！」

「はいはい。まぁ、あたしもそのつもりで待ってたんだしね」

「それはいいからどけよ。重い」

「あー！　ハヤ兄、女の子に重いとか言っちゃ駄目なんだよー！」

「へーへー」

あたしはあたしに出来る事を誇っていいんだ。
それはきっと、自分だけの『才能』なんだから。

ｓｉｄｅ：ティアナ＝ランスター　了

ｅｘ１１話　『閑話・ちょっとした昔話』（後書き）

誰でもいい、私に文才をくれ、いやください。
どうも、ラモンです。

長くなった割に微妙な第１１話でした。
もうね、余計なチャレンジ精神を出した結果がこれだよ！
ご覧の有様だよ！　って感じですねぇ。
ホント、最近なんかマジでスランプ臭いです。

ギンガルートで、ティアナの感じが原作と違う理由を簡単に説明しようとしたんですが……うん、余計なことしなきゃ良かった。
つーか、どう見てもハヅキが主人公です、本当にありがとうございました。
ハヤト？　なにそれおいしいの？

閑話休題。
えー、何でこんな話を挟んだかと言いますと、いわゆる「魔王降臨」事件のフラグは共通ルートで潰しましたが、今回はその前段階……つまり「ホテル・アグスタ」でのティアナ失敗フラグを潰してみよう、と思ったからなんです。
んで、そのフラグを叩き折ろうと思うと、タイミング的にココか出張任務あたりしか無いんですよね。
で、出張任務はハヤギンの新婚旅行（笑）にしたいので、今回書いてみたという訳ですね。言い訳乙。

さて、そんな言い訳は置いといて。
次回からはサウンドステージ１巻、出張任務編……いや、ハヤギン新婚旅行編に突入しようと思ってます。

いくぞ読者諸君、砂糖の貯蔵は十全か？

それではまた、次の話で。

ex12話　『出張任務　その1』

「「出張任務？」」

執務室に、俺とギンガの重なった声が響いた。
俺達の声を聞いたハラオウン執務官は、微笑みながら頷いて口を開く。

「うん。私やなのは、はやてが小さい頃一緒に過ごした地球……第97管理外世界で、ロストロギアが発見されたって連絡が聖王教会からあってね？　それで、私達機動六課に出動要請が出たんだ」

「それに俺達も同行って事ですか？」

「そうだね。はやての話だと、そんなに危険度は高くないみたいだから、2人とも半分はお休みって思ってくれていいよ」

なるほど。そういう事なら断る理由も無い。
つーか、よく考えたら上司からの命令な訳だし、正当な理由もなしに断れる訳もないわな。
ま。休み半分で良いってんなら、そのつもりでのんびりさせて貰うとしましょう。

「いつごろ出発の予定ですか？　フェイトさん」

「明後日の予定だよ。用意する物とかは、後で連絡が行くからね」

「了解です」

「それじゃ、私はちょっと他に用事があるから。また後でね」

「「はい」」

ハラオウン執務官はそう言いながら、俺達に手を振って執務室から出て行った。

あの人も大概忙しい人だよなぁ。殆ど毎日ああやってあっちこっち出かけてるし。だからこそ、俺やギンガで書類仕事を手伝っているわけなんだけども。

でも、ホント凄い人だよハラオウン執務官は。その上美人で巨乳で胸も大きくてビッグバストときたもんだ。いやはや、世の中不公平だよな。胸まで筋肉な奴もいるってのに。

「……ハヤト君。その哀れみの視線は何？」

「世の中の不条理に涙しているところだ。おお、あわれあわれ」

「殴られたいのね？　殴られたいんだよね？」

「おお、こわいこわい」

拳を握ってデビルスマイル（恐怖付加）を浮かべるギンガを、肩を竦めながらせせら笑う。

殴られるのが分かっていても、リアクションが面白いからついやっちゃうんだ。仕方ないね。

「はぁ……もういいよ。ハヤト君の相手を真面目にやっても、疲れるだけだもん。
それより、楽しみだね。出張任務」

「休み半分のつもりでって話だしな。第９７管理外世界っていや、母さんのご先祖が住んでた世界だし、確かに楽しみだ。土産は何がいいだろうか」

「ああ、そういえばウチのお父さんのご先祖様も、第９７管理外世界の出身だったっけ。
もしかしたら、私とハヤト君のご先祖様って、同じ人だったりして」

「勘弁してくださいギンガさん。ホント勘弁してください」

「……うん。私も自分で言っておいてなんだけど、勘弁して欲しいよ。
少しだけでもハヤト君と血が繋がってるなんて思うと、凄く情けなくなってくる」

大分失礼な奴だなこの脳筋は……まぁいい。今回は見逃してやろう。
とりあえずギンガへの報復は後回しにするとして、第９７管理外世界か……うん、楽しみだ。
後で父さんと母さんに連絡して、土産は何がいいか聞いておかな

いとな。姉ちゃんにも。

「あ、そういえばハヤト君？」

「ん？　なんだよ」

「多分向こうでは制服を着れないだろうから、私服を着ると思うんだけど……私服、ある？」

「馬鹿にしてんのかお前は。ジャージなら何種類も持ってるっつーの！」

ドヤァ……という効果音つきで胸を張ると、何故か可哀想な子を見る目で見られた。

なんだよ、俺のジャージコレクションに何の文句があるって言うんだ！？

「ハヤト君。私がお金出すから、ちゃんとした服を買いに行こう？ね？」

「何その哀れみの目！？」

「年頃の男の子がジャージだけって……」

「ジャージの何が悪いってんだ！　機能的で素晴らしい服じゃないか！」

「おお、あわれあわれ」

筋肉で出来た胸を張って、ギンガが俺を見下ろしながら鼻で笑う。

くそっ、何だか知らんが無性に悔しい……ジャージを馬鹿にすんじゃねーよ！

ジャージこそ、どんな場所にでも対応できる素晴らしい服なんだぞ！！

「てゆーか、前に買ってあげた服はどうしたの？　確か一緒に2，3着買ったよね？」

「あぁ、アレな。サイズ小さくなったから、もう着れねぇんだよ」

「そうなの？　確か結構余裕あるサイズにしたと思うけどなぁ……」

「着れんもんは仕方なかろう。だからジャージでいいだろ？」

「それは駄目。私が恥ずかしいし」

「なんだそりゃ」

思わずツッコミを入れる俺であったが、どうやらギンガは何かを考えているらしく無視された。

ちくしょう、お笑いはスルーされるのが一番寂しいんだぞぅ……。

くっ、とりあえずこの哀しみは置いとこう。今は話題を逸らさねば。ギンガの事だ、どうせこのままの流れだと「明日の仕事の後にでも、一緒に服を買いにいこう」とか言い出すに決まってる。

ジャージがあるのに、わざわざ欲しくも無い服を買って所持金を減らす訳にはいかん。
なんせ、来月には新作ソフトを3本ほど購入する予定が入っている。資金は多いに越したことは無いってもんだ。そうだろう、ブラザー？

「じゃあ明日、仕事が終わったら一緒に――」

「そ、それよりもギンガ！　出張任務っていうなら、やっぱ泊まりなのかなぁ！？」

「どうだろうね。早く任務が終われば日帰りになるだろうけど、時間がかかるようなら向こうでホテルか何かに泊まるんじゃないかな。それと、そんなんじゃ誤魔化されません」

「ちくしょう」

どうやら、明日の仕事終わりに俺の財布が軽くなる事は確定事項らしい。
着たいジャージも着れないこんな世の中じゃ。ポイズンでござるよ。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ１２話　『出張任務　１』

それからあっという間に時間は過ぎて、２日後がやってきた。
第９７管理外世界に向かうのは、俺たち機動六課前線メンバー…
…隊長副隊長を含めたスターズ、ライトニングのメンバーと、医務官としてシャマル先生。
そして、八神部隊長とリインフォース曹長の計１３名。
部隊長まで出張っていいのか？　まぁ、大丈夫だから行くんだろうけど。

「皆、忘れ物はあらへん？」

「大丈夫だよはやて。さっきも確認したし」

「にゃはは。まぁ、忘れ物があっても、転送ポートで戻ってこれるしね」

高町一尉やハラオウン執務官、八神部隊長。
いつもは冷静で大人な雰囲気のある３人も、今日は少しだけテンションが高い。
３人からすれば、久しぶりの里帰りな訳だし、当然なのかもな。

「なのはさんの生まれ故郷かぁ～……楽しみだね、ティア！」

「あのね、今回は出張任務なんだから、そこ忘れないでよ？」

「ぶーぶー。ティアは真面目さんだな～」

「アンタと違って、仕事はきっちりやるタイプだもの」

高町一尉に憧れているスバルは言わずもがな、ティアナの声もどこか弾んでいる。

エリオとキャロのチビッ子コンビは、既にハラオウン執務官と手を繋いで満面の笑顔だ。

やれやれ、皆お子様だこと。困ったもんだぜ。

「……ねぇ、ハヤト君。それってツッコミ待ち？」

「何が？」

「荷物入れすぎてパンパンになったキャリーバッグ持って言う台詞じゃないよ？

てゆーか、むしろハヤト君が一番はしゃいでるじゃないの」

「いやいやそんな事ねーって。別に昨日の夜、楽しみすぎて寝れなかったとかじゃないって」

「……うん。そうだね、そんな事ないね」

何か知らんが、ギンガにとても慈愛に満ちた目で見られた。

やめろ、そんな目で俺を見るな。泣きたくなるだろう。

「さて、それじゃあ出発しよっか」

「そうだね。皆、準備はいい？」

『はい！』

高町一尉とハラオウン執務官の声に頷き、順番に転送ポートへと入る。

八神部隊長とヴィータ、シグナム両副隊長、そしてシャマル先生は、先に片付ける用事あるという事でここで一旦俺たちと別れるようだ。

おそらく、出張任務に関する手続きとかだろう。副隊長たちは部隊長の護衛、ってとこか。

なにはともあれ、特に問題も起きずに俺は無事転送ポートで目的地へと転送される。

転送魔法って本当に便利だよなぁ。俺もキャロに習って使えるようになりたいものだ。

転送装置から虹色の光が溢れ、光の壁となって俺たちの周りを円形に包む。

それから少しすると、光の向こう側に見えていた景色が白くなっていき、次第に見えなくなる。

けれどそれも僅かな時間の事で、次の瞬間には壁の向こうに見えていた景色が変わり、同時に俺たちを囲むように溢れていた光も消えていく。

転送の光が消えて目の前に広がったのは、一面に広がる綺麗な青

の湖に、緑に輝く森。
その先には、コテージらしき物も見える。何と言うか、金持ちの避暑地って感じそのままな場所だ。
目に映るその光景を見て、思わず溜息が漏れる。

「へぇ……こりゃ、すげぇや」

「ここが、なのはさん達の、故郷……」

「そうだよ。ミッドと殆ど変わらないでしょ？」

俺とスバルの呟きに、高町一尉が微笑みながら答えた。
確かに、管理外世界っていうから、もう少し荒れてるイメージがあったけど、この景色はミッドからちょっと外れた郊外でよく見る景色と殆ど一緒だ。
違う点があるとすれば、近くに高層ビルなんかが見えないぐらいか。

「空は青いし、太陽はひとつだし……」

「山と水と、自然の匂いもそっくりです！」

キャロがなんだか野生児みたいな事を言ってるが、まぁ仕方ないのか？
確か、キャロはこういう自然が多い世界の出身って話だし。エリオはやたらと興奮して、「うわー」という感嘆の声を上げまくって

るばかりだ。都会っ子かお前は……いや、都会っ子か。
そんな感じで俺達が子供みたいに感動していると、最初に我に返ったらしいティアナが辺りを見回しながら高町一尉に尋ねる。

「というか、ここは具体的にはどこなんでしょう？　なんか、湖畔のコテージって感じですが」

「いや、そりゃ見たまんまだろうよ」

「ハヤトさんうっさいです」

「ひどぉい……」

ツッコミを入れたら酷いことを言われた。

「現地協力者の人がお持ちの別荘なんです。今回の出張任務にあたって、捜査員待機所としての使用を、快く許諾していただけたのですよ～」

「現地協力者の方……ですか？」

「うん。私やなのは、はやての友達で、幼馴染なんだ」

そういえば、途中で見た資料に書いてあったな。
結構豪勢な建物なんだが、これが個人の持ち物とか……金持ちって妬ましい。

「あ、ハヤト君。あれ見て」

「んー？」

ギンガにそう言われ、指差している方に視線を向けてみる。

すると、湖を挟んだ反対側からエンジン音と共に一台の普通車が向かってきていた。

近くに他の建物がある訳じゃないし、おそらく現地協力者の人だろう。ふむ、別荘持ちの金持ちな割には意外と普通の自動車だな。

「自動車？　こっちの世界にもあるんだ」

「高町一尉たちの生まれ故郷だぞ？　一定基準の文化があって当然だろが」

「た、確かに。言われてみれば……」

「聞かれたら怒られるぞ」

真顔で頷くティアナに苦笑する。まぁ、ティアナはそんなに他の世界に行ったことないだろうし、仕方ないだろうな。実際、ミッドでの管理外世界に対するイメージは、未開の惑星……みたいなのが一般的だろうし。

それはそれとして、俺はこっちに向かってくる自動車に視線を戻す。

程なく自動車は俺達の近くに停車し、ドアが開いて1人の女性が中から出てきた。

「……おぉ」

その女性を見て、思わず俺は言葉を失ってしまう。
なんせ、出てきた女性は高町一尉やハラオウン執務官に負けず劣らずの美人だったからだ。
格好はジーパンにTシャツだけとラフな感じだが、シャマル先生と同じくらいに揃えられた金色の髪と勝気さを感じさせる瞳によく合っていて、一種の美術品みたいな印象を受ける。
しかも、かなり胸が大きくていらっしゃる。ここ重要ね。

「なのはっ！　フェイトっ！」

「アリサちゃん」

「アリサ」

女性は高町一尉とハラオウン執務官を見て表情を崩し、満面の笑みを浮かべて2人に抱きついた。
お互いにファーストネームで呼んでるあたり、2人とは随分親しいみたいだ。

「なによも～。ご無沙汰だったじゃない？」

「にゃははっ。ごめんごめん」

「いろいろ忙しくって」

「アタシだって忙しいわよ？大学生なんだから」

抱きついていた女性――アリサさんと話す高町一尉たちは、いつも俺達に見せる顔とは違う、年頃の少女みたいな笑顔を浮かべて言葉を交わしている。

そこで、リインフォース曹長もアリサさんに近づいて、可愛らしく頭を下げた。

「アリサさ～んっ。こんにちわですっ！」

「リイン！久しぶりっ！」

「は～いですっ！」

ちなみに、曹長は現在エリオたちと同じくらいの大きさになっていたりする。

リインフォース曹長ぐらいの大きさをした人間は、こっちの世界にはいないから……とヴィータ副隊長が説明していたが、ミッドにだってそうそういないと思う。

「あ、そうだ。皆、紹介するね」

そこで、ハラオウン執務官がこっちを振り返って口を開く。
どうやら、アリサさんに俺達を紹介してくれるらしい。
うむ、良かった良かった。このまま蚊帳の外で女の子トークを聞かされるのかと思ってたぜ。

「この人は私となのは、はやての友達で、幼馴染の――」

「アリサ・バニングスよ。よろしくね」

「「「「「よろしくお願いしますっ！」」」」」

「よろしくお願いします。ミス・バニングス」

弾けるような笑顔で挨拶をしてくれたバニングスさんに、ギンガ達が頭を下げる。
俺も挨拶をしながら、出来る限り爽やかなスマイルを浮かべてみた。こんな美人なんだもの、あわよくばなら連絡先の交換くらい……
……そう考えてしまうのは、生物として仕方ないだろう。

「アリサでいいわよ。くすぐったい。それと、その胡散臭い笑いはやめてね」

「おお！？　ハヤ兄の５つある最終奥義のひとつ、『爽やか青年スマイル』が効かなかった！」

「まぁ、アレが成功してるところを見たこと無いしねぇ」

「……何か、可哀想ですね。そこまでいくと」

スバルとギンガとティアナうるせー。

しかし、胡散臭いとは中々に冷淡なツッコミではないか。

なるほど。この人はツッコミ畑の住人か。くくく……これはボケ甲斐がある！

「えー……では改めまして。よろしくお願いします、バニングスさん」

「だからアリサでいいってば」

「あ、はい。わかりました――」

そこで、ふと思いついたボケを言ってみたくなった。

ツッコミ畑の人間ならば、きっと良いツッコミを返してくれる筈！

「――マリサさん」

「アリサよ！　誰がマスタースパークか！」

「すみません。噛みました」

「嘘でしょ！」

「噛みまみた」

「嘘じゃなかった！？」

「神はいた」

「アンタは何を見たのよ！？」

俺のボケにオーバーリアクションと共にツッコミを入れてくれるアリサさん。

こんなに素晴らしいツッコミストがいるとは、第９７管理外世界……侮れねぇな……。

「ハヤト君！　初対面の人に失礼でしょ！？」

「いだだだ！？　み、耳を引っ張るな糞ギンガ！　ちぎれるだろうが！！」

「すみませんバニングスさん。うちのハヤト君がご迷惑を……」

「ああ、気にしなくていいわよ。そういうのは、はやてで慣れてるから」

「にゃはは。中学の頃は、毎朝だったもんね～」

どうやら、アリサさんは笑いに寛容な人らしい。

美人で胸が大きくて、笑いにも理解があって素晴らしいツッコミスト。

……あれ？　普通に理想の嫁じゃね？

「アリサさん。結婚してください」

「1万回生まれ変わって出直してらっしゃいな」

「にょろ～ん……」

速攻で玉砕しました。グッバイマイラブ。

◇◇◇◇◇

「さて。じゃあ改めて、今回の任務を簡単に説明するよ」

あの後ギンガからこってり説教を受けた後、俺たちは場所をコテージの中へと移して、今回の出張任務内容の確認をしていた。

コテージの中にあるテーブルを囲むように座る俺達の前には、見慣れない地図……この近辺の地図が映ったモニタが開き、そこにいくつかの光点が示されている。

「捜索地域は……ここ。海鳴市の市内全域。反応があったのは、ここととここと、ここ」

その光点を順番に指しながら、高町一尉が説明していく。

反応があった地点は全部バラバラで、けれどどこか規則性を持っているようにも感じる。

ということは――

「移動、してますよね？」

「そう。誰かが持って移動しているか、独立して動いているのかは判らないけど。対象ロスト・ロギアの危険性は、今のところ確認されてない。仮にレリックだったとしても、この世界には魔力保有者が滅多にいないから。暴走の危険は、かなり薄いね」

一尉の説明に、なるほどと頷く俺達。

まぁ、魔力保有者が滅多にいない……という点については、高町一尉、八神部隊長という破格の魔力保有者が2人もこの近辺出身ということで、信用度が微妙なとこではあるんだが。

「けど、誰かが持っているかもしれないと言うことは、それが魔導師の可能性も否定できない。

全員、最悪の事態に備えて油断だけはしないで」

「そうだね。レリックでもそうでなくても、やっぱり相手はロストロギア。何が起こるかわからないし、場所も市街地。油断せずに、

しっかり捜索していこう」

『はいっ！』

確かにそうだ。ロストロギアは自然災害レベルの危険性を持っている代物が多い。

しかも捜索範囲が市街地って事は、最悪街中で暴走する可能性だってある。気を抜いて、いざって時に役に立ちませんでした、で許されることじゃないからな。

「じゃあ、副隊長たちには後で合流してもらうので、先行して出発しちゃおう。

あ、みんな一応私服でね？　市街地を捜索するわけだし」

「「「「はいっ！」」」」

「それと、ハヤト君とギンガはここに残ってロングアーチに合流してもらえるかな？

大丈夫だとは思うけど、はやてちゃん達がここに来るまで、アリサちゃんの護衛をして欲しいんだ」

「わかりました」

「了解っす」

アリサさんは魔力の無い一般人だから、妥当すぎる判断だよな。

高町一尉たちは本命と接触する可能性が高いからここには残れな

いし、スバル達だといざって時に少しばかり経験的に心許ないだろうし。

「それじゃあ、機動六課フォワード陣、出発！」

「「「「おーっ！」」」」

「頑張れー」

「ハヤト君も頑張るの！」

「へいへい」

まぁ、せっかくだし張り切ってみますかね。

良いところ見せたら、アリサさんが「素敵！　抱いて！」ってなるかもだし。

「……あり得ないと思うよ？」

ギンガ、マジでうっせー。

ｅｘ１２話　『出張任務　その１』（後書き）

なんか煩雑としすぎちゃったなぁ……。
どうも、ラモンです。

そんなこんなで出張任務編の開始です。
今回は出発から、アリサとの遭遇までをお届けしました。
アリサとハヤトのやり取りは、意外と書いてて楽しいです。ハヤト×アリサ……ふむ、悪くない。

そんな冗談はさておき。
今回甘さが足りなかったなー……と思ったそこの貴方！
安心するのはまだ早い。なにせ、今回はまだ試合開始のゴングが鳴った程度ですからね！

次回でジャブ、そして本命のストレートはその次を予定していますよ。
くくく……徐々に甘さを増していく展開に、砂糖を吐いて悶え苦しむがいい……ふはははは！　ごふぅっ（吐糖）
すいません、私はもう駄目なようです。

次回はちょっとオリジナル展開を入れてみようと思います。
まぁ、とはいっても大したことじゃないんですけどね。
あまり期待せず、他の作者さんの作品で糖分補給をしてお待ちくださいませ。

それではまた、次の話で。

ex13話　『出張任務　その2』

「はぁ、こういう時は男に生まれなきゃ良かったと思うな」

高町一尉たちが出発して1時間くらいが経った現在。
八神部隊長とシャマル先生、そして2人と一緒にやってきた月村すずかさん、エイミィ＝ハラオウンさん、そして高町美由希さんの3人と合流した俺は今、コテージの裏口で炭の入った袋を前に溜息を吐いていた。
そうしていると、キッチンの方から金網の束を持ってパタパタとギンガが走ってくる。

「ハヤト君、この金網も一緒に持っていってー」

「あぁ？　炭だけでもクソ重いのに、金網も一緒にとか無理だっつの」

「え～？　男の子なんだから、平気でしょー」

「脳筋のお前と一緒にすんなし」

「ほらー、2人とも口より手ぇ動かしやー。
なのはちゃん達が戻ってくるまで、時間あんまりあらへんでー」

「あっ、は～い」

「すんません、八神部隊長」

キッチンから聞こえてくる八神部隊長の声に答えながら、俺は炭の入った袋を持ち上げ、ギンガは着けていた水色のエプロンを揺らして慌てて立ち上がる。

ちなみに、俺達が何をしているのかといえば、今日の夜、前線メンバー全員で食べる晩飯の準備だ。

メニューはバーベキュー。こういう場所での定番メニューだな。量も用意できるからギンガやスバルといった人外的食欲の持ち主がいても対応できるし。

「それじゃあハヤト君。よろしくね？」

「えぇ～……」

「不満そうな顔しないの。ハヤト君のお仕事なんだから、ちゃんとしなさい。

だいたいハヤト君はそうやっていつもサボろうとしてぇ……」

「わーったわーった。わかりましたよ」

腰に手を当てて、本格的な説教モードに入ろうとしたギンガの声を遮り、炭を持った方とは逆側に金網の束を持ち上げて抱える。そうすると、案の定ずっしりとした重みが俺の両腕に圧し掛かってくる訳で。

思っていた以上の重さに、思わず「よっこいせ」と年寄りくさい声が出てしまった。

「もー、よろけてるけど大丈夫？」

「大丈夫だっつの。いちいちうっさいよ、お前は」

「何よ。せっかく心配してるのに」

「お前のは小言っつーんだよ」

「こーらー！　いつまでも夫婦喧嘩しとるんやないでー！」

ギンガと言い合っていたら、部隊長の声が聞こえてくる。

くそっ、またコイツのせいで怒られた。まったく、コイツといるとろくな目にあわん。

「あっと……それじゃ、お願いねハヤト君！」

「わーったよ」

部隊長の声を聞いて、ギンガは俺にそう言ってパタパタとキッチンの方へ駆けていく。

それを見送り、俺も両手に抱えた荷物を運んでしまおうと裏口を出た。くっそー、マジ重い。

「ぐぎぎぎ……」

頑張れ俺。頑張れば、きっと後で高町一尉やハラオウン執務官が誉めてくれるぞ。
むしろ頑張ったご褒美に胸を触らせてくれるかも知れん。おお！
そう思うとなんか力が出てきた！
よし、今の俺ならこの程度の重さ、屁でもねぇや！！

《　ハラオウン執務官は、特に関係ないと思うのですが　》

「うっさい。ブレイブハートうっさい」

《　申し訳ありません。マスターハヤト　》

「……いや、そうやって素直に謝られると困るんだがな」

ブレイブハートのツッコミで若干気勢を殺がれたが、とりあえず気を取り直して力を入れる。
頑張れ俺！　ハラオウン執務官のおっぱいの為に！！！

「ふんがー！」

「あら、頑張ってるわね。ハヤト君」

「ふが？　ああ、シャマル先生。どうもです」

妄想によって気合を入れて歩いていると、前の方から薄い緑色の

ワンピースを着た、美の女神も裸足で全力逃走しそうなくらいに綺麗なシャマル先生がやってきた。
おお、何と言う美しさ……俺、この部隊に入ってホント良かったよ。
ゲンヤさん。今度なんか送ります、俺の脳内で。

「凄い荷物ね～。重くない？」

「平気ですよ。これでも男ですから」

本当は投げ出したいくらいに重いが、そんな事はおくびにも表情には出さずにシャマル先生と話す。
こうして頼りになるというアピールをしておけば、俺の好感度も鰻上りって寸法よ！

「そっか。さすが男の子、頼もしいなぁ」

「いやいやそんな」

俺の両手に持った荷物を見てから、シャマル先生はそう言って朗らかに微笑む。
ふっ、やはり力がある男っていうのは、好感度を稼ぎやすいらしいな。くっくっく、計画通り。

「俺に惚れてくれても構いませんよ？　シャマル先生」

「ん～、残念。腕がプルプルしてなかったら、ちょっとときめいたんだけどね」

「ほわぁっ！？」

言われて自分の腕を見てみると、面白いくらいにぷるぷるしていた。

くっ、表情は取り繕えても、筋肉の悲鳴までは誤魔化せなかったか！　不覚！

畜生。ここは話題を切り替えて、俺の醜態を先生に忘れて貰うとしなければ。

「そういえば、先生はどうしてここに？　何か用事ですか？」

苦し紛れにそう尋ねてみると、先生は慌てて「そうだった！」と声を上げる。

「先生、はやてちゃん達のお手伝いに行く途中だったわ。じゃあね、ハヤト君！」

「うぃッス。先生の手料理、楽しみにしてますよー」

「シャマルにお任せっ！」

そう言って、先生は手を振りながら俺が歩いてきた裏口へと向かっていった。
シャマル先生の手料理か、楽しみだなぁ……先生、ホントに良い奥さんのイメージをそのまま具現化したような人だし、きっと料理もすっげー上手いだろう。
そういや俺、ギンガ以外の手料理を食うのって、17年生きてきた中で初めてだったりしねぇ？
……うん。深く考えるのはよそう、何か泣けてくる。

「さーて、さっさと運んじまうか」

《 そうですね。あまり遅れると、高町一尉たちが帰ってきてしまいます 》

いい加減両腕の感覚が無くなってきたので、小さく呟いて歩き出す。
うおー、早く持ってかないとマジで俺の腕が駄目になっちまうー。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ ～とある新人の日常～
ｅｘ１３話 『出張任務 その２』

side：―

ハヤトが向かう先、コテージの前の開けた場所には、アリサと3人の女性が忙しそうに働いていた。
アリサと同じくなのは達の幼馴染である、黒いロングヘアーの女性、月村すずか。
そして、フェイトの義兄であるクロノ＝ハラオウンの妻。茶色いショートヘアーを揺らし、快活そうな笑顔を浮かべている女性、エイミィ＝ハラオウン。
最後の1人はフェイトの使い魔である、赤いロングヘアーと犬耳、尻尾が特徴のアルフ。

アルフは少女のような外見をしているが、実際はフェイトと同い年。
使い魔はその主、つまりはフェイトの魔力によって維持される。彼女が体を小さくしているのは、フェイトにかかる魔力的な負担を減らすためだったりする。

「んー、炭と金網が遅いわねー」

「だねぇ。持ってくるのは、多分さっきの坊やだろ？　何してるんだか」

バーベキューの準備をあらかた終わらせ、コテージの方を見ながらアリサとアルフが呟く。
いや、いくら男だからと言って炭と金網、合わせて数キロはあるような代物を1人で運ばせるのは、さすがに酷というものだと思う

のだが。

「駄目だよアルフ、そんな言い方したら。焦らず、もうちょっと待とう？」

不満そうに口を尖らせるアルフを、すずかが諫める。

「まぁ、男の子とはいえ、結構な荷物だからねぇ。時間かかっちゃうのも仕方ないよ」

「そんなもんかい？　ザフィーラなら、あっという間に持ってくると思うんだけど」

「いや、ザフィーラと比べるのは流石にどうかと思うけど」

すずかに賛同したエイミィに対してアルフが首を傾げ、アリサが呆れた顔で溜息を吐きながらツッコミを入れた。そんな感じで４人が会話をしていると、コテージの向こうから両手一杯に炭の入った袋と金網とを抱えたハヤトが、歯を食いしばりながらヨロヨロとこちらに向かってくるのが見えた。

「あ、来た来た。おーい、こっちこっち！」

「りょ、了解です。ぬぎぎ……」

手を振ってエイミィがハヤトを呼ぶと、ハヤトはヨタヨタと頼りない足取りでエイミィ達のところへと歩いてくる。そして、４人の場所にたどり着くと両手に持っていた荷物を落として、息を吐く。

「はぁ、はぁ……」

「お疲れ様、ハヤト君」

「あ、いや。ぜんぜん平気ですよ、月村さん」

荒い呼吸を繰り返すハヤトにすずかが声をかけると、ハヤトは慌てて顔を起こし、例の最終奥義である『爽やか青年スマイル』を顔に浮かべ、それに答える。

まぁ、汗だくで両腕がプルプル震えているので、説得力もカッコよさも皆無ではあるが。

「そう？　やっぱり男の子だね」

「それ程でも無いですよ、はっはっは！」

しかし、すずかにはソレにわざわざツッコミを入れないだけの優しさがあった。

これが仮にアリサやアルフだったら、容赦なく震える彼の腕にツッコミを入れていただろう。

月村すずか。よく出来た女性である。

「ほら、そこの2人ー！　忙しいんだから、さっさと用意しなさいよー！」

「あ、うん。わかったー」

「了解ですアリサさん。その代わり、終わったら俺とデートを！」

「それはお断りー」

「悔しいのう、悔しいのう……」

そんな感じでワイワイ騒ぎながら、アリサ達5人はバーベキューの用意を進めていく。

ハヤトはヘトヘトに疲れながらも美女に囲まれ、幸せそうな笑みを浮かべて馬車馬のように働いていたのだった。下心が見え見えなので、他の女性陣は苦笑していたりするのだけれど。

◇◇◇◇◇

「そういえば」

「はい？」

一方その頃のキッチン。
ギンガとはやての2人がバーベキュー用の食材の下ごしらえをしていると、不意にはやてが思いついたとばかりにギンガに話しかける。
ちなみにシャマルは、はやての指示で別の場所にて野菜を切り分ける作業中だ。
本人は料理をしようと張り切っていたのだが、はやてに止められてしまった。

「ハヤト君とは、どういう関係なん？」

「ハヤト君と、ですか？」

後ろで暗いオーラを放つシャマルには構わず、はやてはギンガにそう尋ねる。
質問されたギンガは、動かしていた手を止めて不思議そうに首を傾げ、鸚鵡返しにはやての質問を繰り返し、そのまま顎に指をあてて考える仕草をしてから答えた。

「どうって……う～ん」

「フェイトちゃんから聞いたんやけど、付き合ったりはしてへんのやろ？」

「そうですね」

「でも、２人はなんだかんだでずっと一緒におるやん？　なんかこう、艶のある話はあらへんの？」

鼻息も荒く、はやては目を輝かせてギンガに詰め寄る。
部隊長という要職に就いているとはいえ、はやてもまだ１９歳。
他人の色恋沙汰に興味津々なお年頃なのだ。自分を含め、知り合いにそういった話題が少ないというのもあって、なおさらこういうこういう話題には敏感なのだろう。

「残念ですけど、そういうのは無いですよ」

「えー」

ギンガの言葉に、はやてが不満そうな声を上げた。
そんな彼女に苦笑しつつ、ギンガは「えーって……」と呟く。

「ハヤト君は、私にとっては手のかかる弟ですから」

「ふ～ん？　なら、ギンガはなんで恋人作らんの？
ゲンヤさんから聞いとるけど、結構モテとったんやろ？」

最後に「羨ましい」と付け加え尋ねるはやてに、ギンガは初耳だとばかりに目を開く。

「私は別にモテてませんよ？　お父さんの勘違いなんじゃないですか？」

「んなことあらへんやろー」

「そりゃ、何回かお付き合いしてくれって言われて、断ったりはしましたけど……」

「やっぱりあるやんか」

恥ずかしそうに頬を染めるギンガの脇腹を、ニヤニヤと笑いながら肘でつつく。はやて、それではまるでセクハラ親父のようだぞ。

「でも、それじゃあ何で断っちゃったの？」

「せやな。別にハヤト君とそういう関係やないなら、別に付き合うても良かったんちゃう？」

「そうそう」

「そんなこと無いと思うんですけど……」

いつの間にやら会話に入ってきたシャマルと共に、はやてが首を傾げる。

まぁ、ハヤトとそういう関係じゃないからといって、ギンガが他の誰かと付き合わなければいけないという義務などないのだから、断るのは何も不自然ではない。

けれど、そこに他の理由を邪推してしまうのは、コイバナ大好きな女の子の性というものか。

「ほらほら～、お姉さん達に言うてみ？　何か理由あるんやろ～？」

「先生も興味あるなぁ。ほぉらぁ、隠してないで話してよ～」

「あ、あの、はやてさんにシャマル先生？　顔が近いし、なんだか怖いですよ？」

妙な迫力のある笑顔で迫る2人に、冷や汗を流すギンガ。

しかしその程度で諦めるほど、コイバナに夢中な女の子――約一名、女の子と呼ぶには抵抗があるが――の追求欲は甘くない。

「ほれほれ～」

「ほらほら～」

「……もう、2人とも悪ノリしすぎですよ」

けれど、そこはこういった事態にはハヤトで慣れてしまっているギンガ。

腰に手を当てて溜息を吐き苦笑するだけで、特にうろたえるような事はしない。

「お断りしたのは、今は仕事が忙しくてそういうことをしてる暇が無いっていうだけです。
特にハヤト君に関係する理由とかはありません」

「え～」

「え～」

「え～って言われても、本当なんだから仕方ないじゃないですか」

子供のように口を尖らせる2人の大人を見て、ギンガは溜息を吐くしかない。
実際ギンガもお年頃、そういう事に興味が無い訳ではないのだが……。

「それに、せめてハヤト君が自分の面倒をみてくれる人とお付き合いをしてからじゃなきゃ、安心して誰かとお付き合いなんて出来ませんよ。ハヤト君、私がいなきゃ1人で朝起きれないし、その他のことも全然駄目なんですから。
ていうかハヤト君の世話を出来る人なんてそうそう居ないと思いますから、まだまだ私が一緒に居てあげなきゃいけませんけど。ホント、やる気になればちゃんとしてるのに、困った子ですよね。ハヤト君ってば……。
まぁ、最悪私が一生面倒見るのかなー……なんて思っちゃう時はありますけど」

「……ごふっ」

「……げふぅっ」

「えっ！？　ど、どうしたんですか、はやてさん、シャマル先生！？」

自分の言葉を聴いて、突然プルプルと震えて崩れ落ちたはやてとシャマルに慌てて駆け寄る。

しかし2人はそんな彼女には構わず、お互いの顔をみてげっそりとした表情で呟いた。

「こ、これは思った以上に重症やで……」

「駄目夫から離れられない妻の台詞、そのままですもんね」

「しかも本人は全くの無自覚……ありえへん、ありえへんて……」

「これが、幼馴染の魔力……っ！」

「え？　え？」

どことなく悔しそうな顔の2人に対し、ギンガはただ不思議そうな顔で声を漏らす。

なにせ本人には、自分がどれだけ凄いことを言っているのか、その自覚が無いのだから仕方ない。

結局はやてとシャマルはそれ以上突っ込んだ話をすることもなく、そそくさとそれぞれの作業に戻る。そしてギンガはそんな2人を見ながら、何があったんだろうと首を傾げるだけだった。

◇◇◇◇◇

「え？」

ギンガがはやて達に詰め寄られている頃。
コテージの前では、ハヤトがアリサ、エイミィ、アルフの３人に詰め寄られていた。

「だから、あのギンガって子とはどういう関係なんだい？」

「見た感じ凄く仲が良かったみたいだけど、恋人なの？」

「ほらほら、サクサク答えなさいよ」

「ちょ、ちょっと３人とも、さすがに失礼だよ」

はやて達と同じく目を爛々と輝かせるアリサ達を、すずかが何とか宥めようと声をかける。
けれど、やはりコイバナに夢中な女の子の情熱はその程度ではとまらず、３人はハヤトに「さぁさぁ」とワクワク感を隠そうともせず発言を促す。
すずかは一応止めようとはしているのだが、時々ハヤトの方を期

待した視線で見たりしている。

既婚者であるエイミィは野次馬根性なのだろうが、アリサとすずかは自分達の周りでそういう話題が少ない……というか皆無に等しいので、ゴシップに飢えているのだろう。

「はぁ？　俺とギンガですか？」

「そうそう」

「ンなの、幼馴染ですよ。だから親しく見えるだけですって」

「えぇ～？　幼馴染にしても、あんた達はちょっと仲良すぎだと思うけど？」

アリサは自分達が知っている唯一の男女の組み合わせな幼馴染、なのはとユーノを思い浮かべてハヤトの言葉を否定する。けれど、その2人はお互いに奥手すぎるだけなので、あまり比較対象としてはふさわしくないのだが。

まぁ、彼女達には他に比較できる対象も居ないので仕方ないだろう。

「そうですかねぇ？」

「そうだよぉ。それでそれで？　実はハヤト君はギンガちゃんが好きとか、そういうのは無いの！？」

「いや、ちょっと興奮しすぎですよ。ハラオウン提督婦人」

「男らしくないねぇ、さっさと答えなよ」

「男らしさと関係あるんですか、アルフさん？」

「いいから、さっさと答える！」

「何故に命令口調なんでしょう、アリサさん」

矢継ぎ早に答えろと迫ってくる３人に、ハヤトは苦笑するしかない。

まぁ、内心美人に詰め寄られて凄く喜んでいたりするのだが。

「えぇと、ハヤト君。私も実はちょっと聞きたいな、なんて……」

「喜んでお答えしましょう、月村さん」

アリサ達の願いにはツッコミしか返さなかったハヤトだが、恥ずかしそうに頬を染めたすずかの上目遣いもプラスされたお願いの前にはあっさりと陥落した。

そんな彼を見て、すずかが小さくピースサインをアリサ達に送っているのは言わぬが花だろう。

一番大人びているとはいえ、すずかもまだ１９歳。他人のコイバナは蜜の味なのだ。

「えー、ぶっちゃけますと――」
「ぶっちゃけますと？」
「別に恋人とか、そういう関係じゃないですよ。
ギンガは俺のこと、手のかかる弟程度にしか思ってないでしょうしね」
肩を竦めながら答えたハヤトに、アリサ達は揃って落胆の声を漏らす。
あからさまに落胆した４人に「だから言ったでしょ」と続けてから、ハヤトは愚痴を零していく。
「第一、あいつと恋人に、なんて考えたことも無いですよ。
口うるせーし、毎日人の迷惑も考えずに起こしにくるし、勝手に人の飯を作ろうとするし。
なにより、知ってます？　アイツこないだ「ハヤト君の相手が出来るのは、私くらいだね」とかクソ生意気な事言ったんですよ？
マジ許せんですわ～」
腕を組みながら、グチグチとギンガへの不平不満を漏らすハヤトだが、既にアリサ達４人は彼の話など聞いていない。少し離れた場所に固まって、ヒソヒソと小声でお互いに話し合っていた。
「ねぇ、これってノロケ？　あたし達、もしかしなくてもノロケられてる？」

「どう考えても、十分すぎる程にノロケられてるよねぇ」

「ほ、本人はそういうつもり無いみたいだけど……」

「やれやれ、最近の若い奴らは困ったもんだねぇ～」

苦笑と呆れとが混ざった、なんとも言えない表情をつき合わせ、ハヤトをこっそり振り返る４人。その視線の先では、ハヤトがまだグチグチとギンガに対する文句を呟いていた。

「大体ですねぇ。アイツの世話なんて、むしろ俺のほうが焼いてるんですよ？

アイツ、ちょっとでも興味があるとすぐに周りが見えなくなるから、そういう時はいつも俺がフォローしてやってますし。大体、アイツが料理上手くなったのだって、俺という毒味役がいたからこそな訳で。

そういうところを無視してお姉ちゃん面してんですよ。腹立ちません？

全く、最近少しばっか胸がでかくなったからって調子に乗りすぎなんですよ。それに……」

文句なのかノロケなのか判断に困る言葉を、ただひたすらに呟き続けるハヤト。

まぁ、どっちにしろコレだけ長い間喋ることが尽きない時点で何と言うか……という感じなのだが。

「……いいわ。色ボケは放っておいて準備しましょ」

「ア、アリサちゃん。自分達で振っておいて、それは酷いような……」

「じゃあすずかはアレ、延々と聞いていたい？」

「う……」

アリサの鋭い指摘に、すずかは眉を寄せ、他の2人は御免被ると首を横に振る。

コイバナは大好きな4人だが、流石にノロケを延々と聞かされるのは勘弁願いたい。というか、そんなのを聞いて喜ぶ人間なんて、そうそう居ないだろう。

4人は互いの顔を見て頷きあった後、言葉も無くそれぞれがバーベキューの準備を始めた。

（……もう2度と、あの2人の関係には触れないでおこう）

そんな教訓を、自分の胸に刻んで……。

「そりゃまぁ確かに顔は悪くないですけどねー。けどなんて言うんですか？　ぶっちゃけもう見慣れちまったっていうか、いや、美人じゃないとは言いませんよ？」

ちなみに。

ハヤトの不平不満だがノロケだか判別できない呟きは、この後フェイトたちが帰ってくるまで途切れることなく続き、サーチャーの設置から帰ってきたフェイト達が最初に見たのは、げっそりと憔悴したアリサ、すずか、エイミィ、アルフの姿であったという。

side：―　了

ｅｘ１３話　『出張任務　その２』（後書き）

俺はもう駄目だ！　ここは俺に任せて、先に行け！！　後で追いつく！

どうも、ラモンです。

あ……ありのままに、今起こったことを話すぜ。

「俺はバーベキューを皆でワイワイ準備している場面を書こうとしたら、いつの間にかハヤトとギンガの惚気合戦が始まっていた」！

ラヴコメとか、恋愛話とか、そんなチャチなもんじゃあ断じて無い。

もっと恐ろしいバカップルの片鱗を味わっ……げふぅっ。

ちなみにシャマルの料理の腕は、原作基準（基本は出来るけど、味付けが微妙）になっています。

なので、ポイズンクッキングにはなりません（笑）

まぁ、うん。このハヤトはどうせ、ギンガの手料理しか食べないんでしょうけど……死ねばいいのにネ☆（えー）

さて、今回はジャブをお送りしましたが、どうだったでしょうか？

少なくとも、私は恥ずかしくて悶死しそうです（笑）

ですが、私はこんなところでヘコたれていられません。

何せ次回はついに、ついに“あの”お風呂シーンに突入……する予定なんですよ。ええ。

つまりはジャブから繋がるストレート、もしくはアッパーのような、クソ甘ったるい展開になる予定なんですよ。私の脳内プロットによりますと。

……耐えられるのか私。書き上げられるのか私。

……頑張ろう、私。

それではまた、次の話で。

ｅｘ１４話　『出張任務　その３』（前書き）

※今回は長くなったので、ｅｘ１４，１５話の２つに分けています。

ex14話　『出張任務　その3』

「テメこらスバル！！　その肉は俺が手間暇かけて焼いた至高の一品だぞ！？」

「へへーん、さっさと食べないのが悪いんだもんねー」

「クソガキがぁぁっ！　ならば、その肉貰い受ける！！」

「あーっ！　あ、あたしのお肉ーっ！！」

「さっさと食べねぇのが悪いんだよぉっ！」

そこは、例えでも比喩でもなく、紛れも無い戦場だった。
金網の上に置かれた肉は、食べられる焼き加減になった途端に誰かの胃に消えていき、どれが自分の置いた肉かなど定かではない。
いや、むしろ他人の肉だろうと食べ尽くすのみだ。

「ふっ、甘いでぇスバル。バーベキューの網の上は常に戦場や！周囲を警戒し、尚かつ自分の領分をしっかり守る。それがバーベキューの基本中の基本やな」

「了解ですっ！　八神部隊長！」

「ヴィータ。お前も少し食べすぎだぞ？　……っ！　貴様っ！　私の焼いていた肉を全て取りおって！」

「ハッ、あめぇんだよシグナム。
はやても言ってただろ？　『バーベキューの網の上は常に戦場』だってな」

「ならばその肉、俺がもらったぁぁぁっっ！！」

「させっかよ！！」

俺が、スバルが、八神部隊長が、シグナム副隊長が、ヴィータ副隊長が。
まるで1週間ぶりの食事にありつく肉食獣よろしく、金網の上に転がる食材を次から次へとお互いに奪い合っていく。世紀末救世主も真っ青な光景がそこにあった。

「ほらほらハヤト君、それにスバルも。野菜も食べなきゃダメだよ？」

「適当に俺の皿に置いとけ！　後で食う！」

「あたしもっ！」

「もー。お肉ばっかりじゃ、体に悪いんだからね？」

「「わかってるっ！！」」

その横で、ギンガはせっせと用意された食材を金網の上に置く作業をしている。

そうしながらも、自分の食べる分は確保しているあたり、強かな女と言えるだろう。ちなみに、食材を焼く役目をギンガがやっているので、あいつの皿には誰も手を出さない。

手を出したら最後、ギンガの役目を自分が担うことになるとわかっているからだろう。

誰だって面倒臭いことは嫌なものだ。

「ハヤト君！　この場では無礼講や！　正々堂々、バーベキューを楽しむでぇっ！」

「了解ですよ部隊長！　しかしこの肉は渡さんっ！」

「おせぇよハヤト！！」

「ぐはぁぁっっ！？」

くそっ！　ヴィータ副隊長の動きが素早すぎる！！

まさかスバルとギンガ以外に、ここまで出来る人がいるとは……

さすが六課、恐るべし！！

「ハヤ兄！　そのお肉もらうよ！」

「やらせはせん！　やらせはせんぞぉぉっっ！！」

「ハヤト君、こっちのお肉焼けてるよ？」

「おうよ！　貰ったぁっ！！」

「あー！　ギン姉！　あたしには！？」
「はいはい。スバルはこっちね」
そんな戦場の只中にあって、ギンガだけはマイペースに肉や野菜を焼いている。
ちっ、空気の読めねー奴だぜまったく。こういうのは、皆ではしゃぐから楽しいってのによ！
「じゃあ、あんまり世話焼かせないでよ。ハヤト君とスバルがそんなだから、私がはしゃげないんだから」
「うっせー！　あ、くそっ！　お前のせいで肉取られたじゃねぇか！」
「私のせいじゃないですー。ハヤト君が鈍いんですー」
「くあああああムカつくぅぅっ！！」
しかし、そんなアホな事をやってる間にも、金網に置かれた肉は刻一刻と減っていく。
くそっ！　ギンガなんかを相手してる場合じゃなかった！！
「肉を……よこせぇぇっっ！！」

こうして食材が無くなるまでの間、肉争奪バトルロワイヤルは続いた。
結果？　……野菜、おいしゅうございました……いと悲し。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ１４話　『出張任務　その３』

嵐のような食事が終わり、後片付けも無事に完了。
まぁ、後片付けに関しては女性陣が大勢いたおかげで、俺は何もせずにそこらでボケーっとしていただけだが……べ、別にサボってた訳じゃないんだからねっ！
たまにはスバルにも花嫁修業させなきゃと思った、ただそれだけなんだからっ！

「ハヤトさん、キモイです」

「すいませんティアナさん」

男のツンデレは酷く不評だった。
で、ちょうど後片付けも終わり、全員がさてどうするかと思ったところで、八神部隊長が口を開く。

「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか」

「「「「はいっ！」」」」

部隊長の提案に、ギンガ、スバル、ティアナ、キャロの４人が嬉しそうに頷いた。

確かに結構汗もかいたし、ここで風呂に入っておきたいよな。女子としては。俺は別にいいけど。

だが、ここで少しばかり困った事実が判明した。アリサさんが言うには、このコテージは元々日帰りの避暑地として作られていたらしく、風呂が装備されてないらしい。

となれば、近場にある湖あたりで水浴びと……なるのだが、このあたりは少し肌寒く、さすがに水浴びは無理に思える。というか、俺らはともかく女性陣が嫌だろう。

「そうすると……」

「やっぱり」

「あそこですかね？」

「あそこでしょう」

どうしたものかと困っている俺達の横で、ハラオウン提督婦人や

すずかさん達が、お互いに顔を見合わせて頷きあっている。
けれど、当然ながら第97管理外世界が初体験な俺達には何を言っているのかわからず、俺は隣のギンガと顔を見合わせ、首を傾げた。何か他に代案でもあるってんだろうか？

「さて。機動六課一同。着替えを準備して、銭湯準備っ！これより、市内のスーパー銭湯に向かいます」

「スーパー……」

「セントウ……？」

高町一尉の言葉に、一斉に首をかしげる俺達。
説明を聞けば、スパリゾートみたいなもの……つまりは公衆浴場らしい。なるほど、それならミッドで何度か利用したことがあるからわかる。
しかも、こっちの公衆浴場は水着をつけないのが決まりごとと仰る。
……ふふっ、それは良いことを聞いた。

高町一尉たちが楽しそうに用意をしている中、俺はひっそりと微笑む。
アレだよね、こういう状況で男が考えることなんて……万国共通でひとつだけなんだよね。

◇◇◇◇◇

そんなこんなで数十分後。
やってきましたスーパー銭湯！　いやさ『全て遠き理想郷』と書いて『アヴァロン』！！

「は～い。いらっしゃいませ～。海鳴スパラクーアツーへようこ―団体様ですかぁ～？」

受付のお姉さんは俺達の人数を見て、一度驚いたように言葉を止め、けれどすぐに営業スマイルを浮かべて尋ねなおしてきた。さすが接客業、対応は完璧だな。

「えっとぉ……大人１４人、子供４人です」

「エリオと、キャロと……」

「わたしとアルフですっ」

「あの、ヴィータ副隊長は……？」

「あたしは大人だ」

そのまま、ロビーでさっさと受付けを済ませる。
ヴィータ副隊長、子供料金で安く入れるんですから子供でいいじ

ゃないですか。
つーか見た目的にはどう見ても子供……。

「なんか言ったか？」

「イイエナニモー」

とっても大人！　ヴィータ副隊長マジ大人の女！

「あ……良かった、男湯と女湯は別々なんだ」

「ん？　あぁそうだな。つーか、当たり前だろ」

隣ではエリオが男湯と女湯、入り口が別々になっているのを確認して随分と安心していた。
エリオとキャロはこういう場所が初めてなんだろう、興味深そうにあちこちを見回して、時に感嘆の声を漏らしている。

「広いお風呂だって。楽しみだね？エリオくんっ」

「あ、うん。そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

「……えっ？エリオくんは？」

「えっ！？ぼ、僕は、その、一応、男の子だし……」

キャロの提案に真っ赤になるエリオ。どうにもエリオは純情だなぁ。
俺だったら速攻で承諾して、我先にと女湯に行くってのに。

「うん……あ、でもほらっ。あれ見て？」

顔を赤くするエリオに笑いかけながら、キャロは入浴施設の利用規定を指差した。
そこにはいくつかの注意事項が書かれていて、一番下にはこう書いてある。

※女湯への男児入浴は、１１歳以下のお子様のみでお願いします。

なるほど。エリオは確か１０歳だったから、女湯に入っていい年齢スレスレって事か。
適当に周りを見てるだけだと思ったのに、中々どうして観察してるじゃないかキャロ。フルバックとしての将来が楽しみだ。

「あ、えぇと、でもその……」

「折角だし、一緒に入ろうよ。エリオ」

「フェ、フェイトさんまで！？」

わたわたと慌てるエリオに、ハラオウン執務官が笑顔で追い討ちをかける。
キャロも執務官も、どちらも特に悪気がある訳じゃないのが性質が悪いところで、エリオも断るに断れず、どうしようかと忙しなく視線を動かして、何とか言い訳を探そうとした。

「い、いいいや、あああのですね。
それはやっぱり、スバルさんとか隊長達とか、アリサさん達もいますしっ！」

「別にあたしはかまわないけど？」

「って言うか、前から頭洗ってあげようか～とか言ってるじゃない？」

「あたしらも良いわよ？　ね？」

「うんっ。」

「いいんじゃない？仲良く入れば。」

「そうだよ。エリオと一緒にお風呂は、久しぶりだし……。入りたいなぁ」

エリオが凄まじくモテモテである。とても妬ましい。
もしここで俺が「じゃあ俺が！」と言えば、即座にフルボッコになってしまうだろう。
……くそっ！　俺もあと7歳若ければ！！

「あ、あのっ！　お気持ちは非常に……なんですが……えっと、ほらっ！　そうすると、ハヤトさんが1人になっちゃいますし！」

おっ、遂に俺に頼るか。

しかしその判断は間違いだぞエリオ。何せ俺は、向こうでニヤニヤと笑っている八神部隊長と同じ領域で生きている人間……こんな状況で、お前の味方をする訳が無いじゃないか！

「俺は別に1人で平気だぞ？　気にせず行ってこいよ」

「えぇぇっ！？」

「女性の裸なんて、後になれば見たくても見れなくなるんだしさ。皆が良いって言ってるんだから、存分に見て差し上げるのが男の礼儀ってモンだ。

大体、これだけ大勢の美人の裸を見れる機会なんて、今回を逃したらそうそう無いぞ？

見れる時に沢山見ておけって。それはきっと、いつかお前の中で素晴らしい思い出になるから」

「そ、そんなぁ～……」

うん。今俺いいこと言った。凄くいいこと言った。

「あの顔は「俺いいこと言った」って思ってる顔ね」

「フェイトさんとキャロの事を思って言ってるのはわかるんですけど、内容が最低ですね」

「ハヤ兄は相変わらずえっちだなぁ……」

けれど、何故かギンガとティアナを始めとして、ハラオウン執務官とキャロ、八神部隊長の3人以外の女性陣からはとても冷たい視線を頂いた。

やめて！　俺そういう視線を受けて喜ぶ趣味はないから！

「と、とにかく！　僕はハヤトさんと男湯に行きますっ！」

「えっ、ちょっ、エリオ!?」

俺が氷点下の視線に悶えていると、顔を真っ赤にしたエリオはそう言って、ハラオウン執務官の声も聞かずに男湯へと走っていってしまう。

やれやれ、相変わらず初心な奴だよまったく。

とにかく俺も男湯に行くか。エリオを1人にする訳にもいかないしな。

「……と、そうだ。ギンガ」

「え？　どうしたの？」

「ブレイブハート、預かっててくれるか？」
「ブレイブハートを？　どうして？」
俺が自分の嵌めていた銀色の指輪を投げると、受け取ったギンガが不思議そうな顔で尋ねてくる。
「いや、ブレイブハートって女性人格じゃん？　流石に男湯に入れるのはどうかなと思ってよ」
「あ……そういえばそうだね。うん、わかったよ」
こっちの説明を聞いて、ギンガは自分の指にブレイブハートを嵌めた。
くくく……馬鹿め、俺の目的がそれだけだと思うあたり、まだまだ奴もヒヨっ子よ！
《　マスターハヤト。映像録画と写真記録、どちらを優先した方がよろしいでしょうか？　》
「え？」
「あっ、馬鹿！」

折角穏やかに終われると思った瞬間、ブレイブハートの言葉と共に空気が一変した。
言うまでもないが、最悪の空気に。

《　ですが、女性浴場の記録をしろと言われましたので……。
どちらを優先するのかを聞いておかないと、キチンとした記録が撮れません　》

「あー……うん。やっぱ記録はいい。お前も銭湯を楽しんでおけ」

《　よろしいのですか？　》

「よろしいのです」

《　了解しました。そのようにします　》

ブレイブハートに指示を出してから、俺は視線を上げ、高町一尉たちを見る。
うん。当然ながらもの凄くイイ笑顔を浮かべていらっしゃいます。
シグナム、ヴィータ副隊長のご両名に至っては、今すぐ殺しちゃうぞ☆　とでも言いたげな素晴らしい笑顔です。
……よし、ここは俺の最終奥義その3を使うしかない！

「な……」

『な？』

「なーんちゃって！　テヘペローッ！」

首を右斜め４５度に傾けて舌をちょっとだけ出し、片目を瞑って会心の笑みを浮かべる。

これぞ我が最終奥義その３！　可愛らしい謝罪ポーズ！！

これを見た相手は、その可愛らしさに思わず俺を許したくなっちゃう訳さ！！

「主はやて、判決は？」

「これは庇いきれへんな～」

「ですよねー」

その数秒後、俺は空を舞った。きりもみで。

◇◇◇◇◇

男湯は人が少なかった……っつーか、俺とエリオ以外には客の姿が無い。

時間が良かったのか、それともココがそんなに繁盛していないのかは判断しかねるとこだが、まぁいいさ。人がいない方が落ち着いて入ってられるしな。

「……しかし、酷い目にあった」

「当たり前といえば、当たり前の気がしますけど」

「うるせー。折角の特権を生かそうとしなかったエリオに、男の浪漫をとやかく言う権利なぞない！」

「浪漫というか、犯罪な気が……」

「知ってるかエリオ？　バレなきゃ犯罪じゃないんだぜ？」

「それは管理局員が言っていい台詞じゃないですよ！？」

もちろん冗談だが、エリオはいちいち反応が新鮮で面白いなぁ。やっぱ、からかい甲斐があっていいわ。こういう弟が欲しかった。

「それはともかく、ロッカーはこの硬貨を入れると施錠可能になるわけだ。

んで、鍵をかけた後に鍵をあければ……こうして硬貨は戻ってくるぞ。鍵はすっげー重要だから、このゴムを使って腕につけておけよ？　ああ、ちゃんと防水加工されてるから、水につけても大丈夫だぞ」

「あ、はい。わかりました」

エリオにロッカーの使い方を教えながら、俺は自分の服を脱いでロッカーの中に入れた。
隣でエリオも服を脱いでいるが、どうやら恥ずかしいらしく、なんだかモジモジしている。別に恥ずかしがる事ねぇだろうに。別に男同士なんだしさぁ。

「でもエリオ。実はやっぱり女湯に行きたいと密かに思ったりは……」

「し、してませんってば！」

「なんだよ、つまんねーの」

隣で着替えるエリオをからかいながら服を脱ぎ終え、タオルを腰に巻く。
流石にもろ出しで歩き回るのはなぁ……俺、別に露出狂じゃないし。

「は～い、それじゃあどうぞ」

「ありがとうございます」

「「……え？」」

その時、背後からドアの開く音とおばさんの声、そして良く聞いたことのある声が聞こえ、俺とエリオは“まさか”と思いつつ、同

時に振り返った。

「エリオ君っ！　ハヤトさん！」

「えー……」

案の定というか何と言うか、振り返った先には、女湯の番台をやっているらしいおばさんと、ちょっと長めのタオルに身を包んだキャロがこっちに向かって手を振りながら駆けてきていた。

なしてこっちに入って来てますのん。

「キャ、キャキャキャキャロっ、キャロ！？」

俺は呆れてるくらいだが、エリオは完全にパニック状態。

茹でられたタコみたいに顔を赤くして、両手を動かし、盛大に噛みながらキャロの名前を呼ぶ。

わからんでもないが、落ち着けエリオ。

「どうしたの？」

「ふ、ふふっ、服、服っ！」

「うん。女性用更衣室の方で脱いできたよ？　エヘッ。だからほら、タオルを――」

「見せなくていいから～～～っ！！」

「あ……えへへ、ごめんね」

開きかけたタオルを戻しつつ、可愛らしい笑顔でキャロが謝る。
しかし、この行動には俺も少しばかり驚いていた。１０歳だってのに、ちょっと異性に対して無防備すぎるだろ……いや、別にだからどうって訳でもないけど。

「あー、キャロ？　こっちは男用だけど、何で入ってこれたんだ？」

「女の子も、１１歳以下は男性用の方に入って良いみたいなんです。ちゃんと注意書きの方にも、そう書いてありました！」

俺の問いかけに、キャロは何故か嬉しそうにそう答えてくれた。
確認しようと注意書きを眺めれば、確かに下の方に小さくそう書いてある。けど、だからって普通入ってこようとしないだろー……。

「なぁキャロ。やっぱお前は女の子だし、女湯に戻った方が……」

「えへへ！　エリオ君、ハヤトさん、早く行きましょうっ！」

「うわっ！？　キャ、キャロ！　腕を引っ張らないでー！！」

さりげなく戻るように促したが、スルーされてしまった。

キャロに腕を引っ張られ、情けない声と共に浴場へと連れ去られたエリオを見送り、俺は小さく溜息を吐く。エリオどんまい、お前はやっぱりギャルゲー主人公体質なんだよ。

きっと、こういうイベントからは一生逃れられないんだよ……。

……あれ？　それってすっげー羨ましくねぇ？

◇◇◇◇◇

「わぁ～……すご～い。すっごく大きいね、ここのお風呂！」

「う、うん……そう、だね……」

「確かにデカいよな。ミッドで入ったことのあるスパリゾートも、ここまで広くは無かったわ」

入浴する前に、かけ湯を体にかけること。その後は自由とエリオとキャロに教えておいたが、ここで俺も予想していなかった展開が発生した。

キャロが、洗いっこをしようと言い出したのだ。

洗いっこと言えば、言わずもがな背中を洗い合うアレである。

当然、俺はエリオに対して言っているのだろうと思っていたんだ

が、実際はここにいる3人でしようと言っていたらしく、これには流石の俺も焦った。
いや、別に俺はいいんだけどね？　こういうのはギンガとかスバルで慣れてるし。
けど耐性の無いエリオにやらせるのは、流石に刺激が強すぎると思うんだ。

しかし、断るとキャロが途端に泣きそうな顔になるんだよ。しかも上目遣いで「ダメですか？」とか聞いてくるし。自分より年下の子供にそこまでされたら、流石に断れないじゃん？
結局断ることなど出来ず、俺とエリオは言われた通りの洗いっこをする事になった。

ちなみに、順番は俺、キャロ、エリオという順番だ。
なんでもこういうのに憧れていたらしい。ハラオウン執務官とやればいいのに。

「えへへー。ハヤトさんの背中、おっきいですね！」

「あー、そうだな。俺ぐらいの年になりゃ、誰でもこんなモンだろ」

「うぅぅぅ……」

「どこか痒いところはないですか？」

「特に無いぞー。あ、もうちょっと強く擦ってくれるといい感じだな」

「はーい」

まぁ、俺はもうここまできたら半分諦めているので、大人しくキャロに背中を洗ってもらう。
その後ろで、エリオは今にものぼせそうな位に顔を赤くして、陶器のように白いキャロの背中を洗っていた。あ、振り返ったからってキャロの前を見た訳じゃないぞ？
俺は巨乳至上主義者。ちっちゃいおっぱいには、これっぽっちも興味はないのだから。

「ハヤトさん、今、何か変なこと思いませんでした？」

「オモッテナイヨー」

「むぅ……何かとても不愉快な感じがしたんですが」

「キノセイダヨー。グリーンダヨー」

不穏な空気を発するキャロを何とか誤魔化し、無事に洗いっこを終えた俺達は、そのまま風呂につかって一息ついた。
この頃になるとエリオも流石に落ち着いてきたらしく、顔は赤いものの最初ほどは取り乱していない。

「後でまた、一緒に洗いっこしましょうね！」

「あー……そうだなー。機会があったらなー」

嬉しそうなキャロに答えながらも、俺は現状を打破する策を練っていた。
別に嫌な訳じゃないんだが、流石にちょっと落ち着かない。ハイテンションな子供に付き合うのって、思っている以上に体力使うんだよ、これが。

「……お」

そんな事を考えてあたりを見ていた俺の目に、『子供専用露天風呂』という立て札が見えた。
目を凝らすと、注意書きとして『12歳以上の男子立ち入り禁止』とある。つまり、俺はダメだがエリオとキャロならオッケーなのだ。
これを使わない手は無いだろう。

「キャロ、キャロ」

「はい？　どうしたんですか？」

「あっちに『子供露天風呂』ってのがあるぞ？　エリオと入ってきたらどうだ？」

「えええええっ！？」

エリオうっさい。ちょっと黙ってなさい。

「ホントですね。でも、そうするとハヤトさん、1人になっちゃいますよ？」

「平気平気。2人でゆっくりお湯につかって、親睦深めてこいよ。せっかくの同い年なんだしさ」

「……はいっ！　それじゃあ、行ってきますねハヤトさん！」

「えっ、ちょっ、えぇぇ～～～っ！！」

俺の提案に元気よく返事をしてから、キャロはエリオの手を取って子供露天風呂へと走っていた。

それを見送り、俺は溜息を吐いて浴室の縁に肘をつく。

まぁ、これで少しはあの2人の距離も縮まるだろ。たまにしか見てないけど、なんかあの2人はお互いに遠慮してるっつーか、妙な距離があるんだよなぁ。

男と女ってのもあるし、知り合って間もないってのもあるんだろうけどさ。

2人揃って変に大人ぶってるトコもあるから、普段は遠慮し合って言いたい事も言えないだろうし、こういう機会に好きなだけ話し合うのもアリだろうよ。

「さーって、俺も他の浴場行ってみるかね」

年寄り臭い考えを頭の外においやって、俺は浴室から出て軽くあ

たりを見回す。
お、普通の露天風呂もあんじゃん！　よっしゃ、次はそこに行ってみましょうかね。
そうして俺は、『露天風呂』という看板の置いてある扉に近づき、勢いよくそこを開けた。

ｅｘ１４話　『出張任務　その３』（後書き）

長くなってしまったので、ｅｘ１５話とは前後編という感じになっています。
どうも、ラモンです。

今回は、今まであまり出番の無かったエリキャロを出してみました。
この３人は、このまま兄貴と弟、妹という関係になればいいよ。
というか、書いててとても楽しかったです。特にキャロが（笑）

では、次は本番。
私が恥ずかしさで死にそうになりながら書いた、バカップル混浴編です。
そこそこに心の準備をしてからお読みくださいませ。

それではまた、次の話で。

ｅｘ１５話　『出張任務　その４』（前書き）

※今回は長くなったので、ｅｘ１４、ｅｘ１５話として２つに分けています。

ex15話　『出張任務　その4』

「ひゃっほう！　露天風呂だー！」

無駄にテンションを上げた状態で、そう叫びながら勢いよく露天風呂の扉を開ける。

どうせ男湯には俺とエリオ以外はいなかったんだ、多少行儀が悪くとも構うまい。

「きゃあっ！？」

「……きゃあ？」

しかし、そんな俺の耳に聞き逃せない声が聞こえてきた。

今のって、間違いなく女性の声だよな。しかも何か聞き覚えのある感じの。

「だ、誰ですかっ！？」

「そっちこそ誰だよ！？」

俺と謎の声の主が、同時にお互いが何者なのかを尋ねる。

湯気で良く見えないけど、うっすらと見えるシルエットは間違いなく女性。

あれ？　ここって男湯だよね？　何で女の人いるの？

そんな風に混乱していると、次第に湯気が薄くなり、シルエットだった女性の顔が見えてきた。

なんと、湯気の向こうにいたのは――

「げぇっ！　ギンガ！？」

「ハ、ハヤト君！？」

――タオルを体に巻いただけの、あられもない姿のギンガだった。

「な、何でハヤト君がここにいるの！？　ここ、女湯でしょ！？」

「は！？　ちょ、ちょっと待て！　ここは男湯だろうが！」

「だって私、女湯からこっちに来たんだよ！？」

「俺だって男湯からここに来たわい！」

「嘘！　ハヤト君のことだから覗きに来たんでしょ！！」

「何だその言いがかりは！！　お前こそ覗きだろ！？」

「ハヤト君じゃあるまいし！」

どうやら随分と混乱しているらしく、俺もギンガもギャーギャーとお互いに喚き散らして男湯だ女湯だと主張を繰り返す。
ひとしきりそうやって怒鳴りあった後、俺達はあるひとつの結論に辿り着いた。
というか、お互いの言い分が正しいなら、それ以外に結論なんて無いんだが。

「混浴だったか……」

「混浴だったのね……」

俺は男湯から、ギンガは女湯から入ってきた以上、つまりはそういう事なんだろう。
でなきゃ、男湯と女湯が同じ場所に繋がってる説明がつかないし。

「くそっ、どうせならハラオウン執務官かシグナム副隊長の方が……！」

こういうラッキースケベシーンなら、あっちの2人の方が需要あるだろうがよぉぉぉ！
なんで、よりにもよってギンガなんだ畜生……畜生……っ！！

「ハヤト君。もしかしなくても失礼なこと考えてるでしょ？」

「うん。何でお前なんだって思ってる」

「やっぱり……あのね、ハヤト君？　私だから、今ハヤト君は無事なんだよ？
　他の人だったら、叫ばれて物を投げられてても、文句言えないんだから」

　む、確かに言われてみればそうだな。
　大概こういうイベントだと、男側は何かしら酷い目にあうのがお約束だもんな。
　そう思えば、確かにギンガでラッキーだったのかも知れぬ。

「ほら、とりあえずお風呂入ろ？　このままじゃ、お互い風邪ひいちゃうよ」

「ん？　あぁ、そうだな」

　言われるまま、とりあえずギンガと一緒に湯船につかる。
　どうやら言い合いをしている間に思った以上に体が冷えていたらしく、じんわりとしたお湯の温かさが体に心地いい。

「ふぃ～……」

「はぁ～……」

　生き返るようなお湯の温かさに、思わず声が漏れてしまう。

親父臭いとわかっていても、この声だけは止められないんだよなぁ……。

「そういえばハヤト君」

「んー？」

「私の裸、見たでしょ～？」

「いや、見てないな。湯気越しにちらっと見えたかもしれんが、覚えてねぇ」

実際には大して見えてない。湯気越しに肌色がちょっと見えたくらいだし、なによりギンガは俺の声が聞こえてすぐにタオルを巻いただろうしな。

仮に見えてたとしたら、肩とかそんなとこだと思う。

ちなみに、ギンガは長い髪をタオルで纏めている。お湯に髪がつかないようにという配慮らしい。

「そうなんだ。残念、見られてたら後で何か奢って貰おうと思ったのに」

「何を黒いこと考えてやがんだよお前は」

「えぇ～？　だって、女の子の裸を見たら、それくらい当然じゃない？」

苦笑しながらギンガの頭を軽く小突き、ギンガはギンガで楽しそうに笑って俺の肩を叩く。
つか、お前はもう少し恥じらいを持ってもいいんじゃねーの？
幼馴染とはいえ、俺も男なんだぜ？

「だって、ハヤト君だしなぁ～」

「どういう意味だコラ」

「いひゃいいひゃい！」

失礼なことを言うギンガの頬を、思い切り抓ってやった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ１５話　『出張任務　その４』

それから数分後。俺とギンガは相変わらずまったりと湯船につかっていた。
俺は別に恥ずかしいって訳じゃねーし、ギンガが出て行かないのに俺が出てくってのも、逃げるみたいでなんか癪だしな。

「わぁ……このお風呂、空が見えるんだね」
「露天なんだから当たり前だろーがよ」
空を見上げて呟くギンガに、俺も空を見上げながらツッコミを入れておく。
けれど、夜空に感動しているらしいギンガは、俺の言葉をスルーして空を見上げ続けている。
「夜空なんてミッドでも見れるだろうに、物好きな奴」
「それはそうだけど、こういう場所だと雰囲気が違うじゃない？」
「雰囲気ぃ？　そんなモンかねぇ」
「わかんないならそれでいいと思うよ。ハヤト君は、そういうの疎そうだし」
「大概失礼だなお前は」
「事実ですー」
可愛いつもりなのか、口を尖らせてこっちを見るギンガ。
うーわー、マジムカつくんですけど。お前じゃなかったら胸のひとつでも揉んでるトコだぞ。
俺が紳士であったことを、海よりも深く感謝するがいい。

「それをやったら、単純にハヤト君が捕まるだけじゃない？」

「そうですね」

至極冷静に切り返されてしまった。解せぬ。

「……それにしても、気持ちいいねぇ」

「くっつくな。暑い」

「いいじゃない。別に減るものじゃないんだし」

人の右肩に頭を乗せてきたギンガに文句をつけるが、ギンガは悪びれる様子も無く、クスクスと笑いながら頬ずりしてくる。タオルに纏められた髪が少しだけ零れ、ギンガが頬ずりするのに合わせて俺の肩をくすぐり、そのむず痒さに俺は少しだけ身じろぎした。

「減るわ！　主に俺の古くなった角質が！」

「……それは別に減ってもいいんじゃない？　てゆーか体洗ってないの？」

「洗ったに決まってんだろ。何度ゲンヤさんと一緒に風呂入って怒られたと思ってんだ」

「そうだよね。昔一緒に入ってた時も、すっごく怒られてたし」

「ちゃんと綺麗に洗っといたから問題ない」

ゲンヤさんはやたらと風呂の掟に厳しくて、俺はガキの時分、風呂に入るたびに細かいことでよく怒られたもんだ。あの人の風呂に対する拘りは未だに健在なんだろうか？

最近は一緒にこういう場所に来る機会も無かったから、あんまりわからんのだけど。

まぁ、ゲンヤさんの性格を考えたらきっと今でもこだわってんだろう。

「じゃあ別にいいじゃない」

「だぁから、少しは恥じらいを持てっつーの」

「持ってるよ？　だから、こうしてタオルで体は隠してるじゃない」

「ちげーし。行動そのものに、もうちょっと恥じらいをだなー……はぁ、いいや別に。

わざとやってる奴にあーだこーだ言っても、俺が疲れるだけだわな」

諦めの溜息を盛大に吐いて、俺はギンガのしたいようにさせる事にした。

コイツは時々、こーやって何かしらんが無駄に甘えてくる時があ

る。大抵は母さんや姉ちゃんが相手してたんだが、どちらもいない時は俺がこうして相手をしていたから、まぁ慣れっこだ。

「ふふっ、ハヤト君の体熱いね」

「風呂入ってんだから、そりゃ熱いだろ。むしろ冷たかったら病気だ」

「確かにそうかも……ふふふっ」

「何が面白いんだお前は。あと、あんま顔動かすな。髪がくすぐったい」

「はーい」

返事をしてるくせに、ギンガは特にやめようとはしない。これもまぁ、ある意味この状態の時はいつもなので別に気にしないでおく。つーか、相手にするだけ無駄だ。

下手に相手にすると、喜んで調子に乗るんだもんコイツ。マジで性質悪いわ。

だからこういう時は、大人しく好きにさせるのが一番いい。

「んー……何か固くて面白くないなぁ。スバルやティアナは、もっと柔らかいのに」

「男に何を期待してんだお前は。そんなに女の子の肌が好きなら、女湯行けよ。

今なら美人どころがより取り見取りだろうが。つーかいい加減にしてくれ、本気でくすぐったい」

「ぶー。ハヤト君のけちんぼー」

「言ってろ」

駄目もとで抗議してみたら、思っていたよりもあっさりと離れてくれた。

ふぃ～。ようやく右肩のムズムズが無くなったぜ。

「あ、そういえばハヤト君。最近髪、切ってないでしょ？」

「そうだな。この半年ぐらいは切ってねーな、切りに行くの面倒で」

「駄目だよ？　こんなに前髪伸びちゃったら目が悪くなっちゃう」

「近い近い。あと前かがみになるな、見える」

離れたと思ったら、今度は人の前に来てお辞儀をするように腰を曲げて俺の前髪を弄ってくる。

一応タオルで隠れてはいるけど、流石に前かがみになると、色々と見えそうになるので、目を逸らしながら忠告しておく。見えたところで別にいいけど、誰かが入ってきて変な誤解された非常に困るし。

つか、誰にも見られてないよな？　恋人同士とか誤解されて、彼女出来なくなるとか嫌だぞ！？

「何よ。見えたら嬉しいくせに」

「誰がお前のなんか嬉しいもんか。ハラオウン執務官やシグナム副隊長ならともかく」

「そうかなぁ？　私も結構成長してると思うけど……」

「あの2人をメロンとするなら、お前はリンゴ。ドゥーユーアンダスタン？」

「失礼だよね？　殴っていいよね？」

「戦わなきゃ現実と！」

「ていやっ！」

「げふんっ！？」

励ましてやったら、思い切り首筋にチョップ入れられました。理不尽だろう。

こっちは幼馴染らしく励ましてやったと言うのに！！

「そんなだから、いつまで経っても彼女さんが出来ないんだよ。まったく、いくつになっても子供なんだから。エリオ君やキャロちゃんの方が、よっぽど大人だね」

「……カッチーン」

「カッチーンとか自分で言っちゃうし……」

この野郎、人が大人しくしてるからって調子に乗ってからに。

これは一度教育してやらんといかんな。ゲンヤさんだってきっとそう言うだろう。

「いいさ、なら俺が大人だって事を、その体に教えてやろう」

「ふ～ん？　出来るものならどうぞー」

「言ったな？　後悔すんなよ？」

「しないわよ別に。だって、ハヤト君は子供だも――って、え、ちょっ！？」

得意気な顔をするギンガを右手で押さえつけ、顔を寄せる。

そして、空いている左手で顎を持って、ギンガの顔を上に向けさせ……まぁ、わかりやすく言うならキスをする直前の体勢にさせたわけだ。

「ハ、ハヤト君！？　な、何するの！？」

「何だよ。後悔しないって言ったろ？」

「で、でもでもっ！　ここ、こういうのはまた違うんじゃないかな！？」

「別にいいだろ、減るモンじゃないし」

「減るよっ！　すっごく減るよ！？　私、初めてなんだよ！？」

「しらねぇなぁ……」

そのままギンガと自分の顔の距離を詰める。

元々近かった距離が更に縮まり、お互いの吐息が感じられるくらい近くなった。

「～～～～っ！！」

そろそろ逃げるかと思ったんだが、ギンガは混乱しているせいか目をギュッと閉じ、力を入れて身体全体を強張らせ、真っ赤な顔で俺にされるがままになっている。

何だ、抵抗しないのか……と少しばかり拍子抜けしながら、俺は近づけていた顔を離す。

だけど目を閉じているギンガはそれに気付かず、相変わらず目を閉じて顔を強張らせたまま、まったく動こうとしない。

ったく、こういうトコは相変わらず変に純情なんだよなぁ。

どっちが子供なんだか。

そんな事を思いながら苦笑して、肩と顎に置いていた手を離す。

そして、ギンガの頭をポンポンと軽く叩き、ニヤリと笑いながら口を開いた。

「なんてな」

「……え？」

すると、ギンガは驚いた顔をして目を開き、耳まで真っ赤になったまま俺のことを見上げた。

全く、その有様でよく人のことを子供だ何だと言えたもんだぜ。

「あんまり人をからかうんじゃねーぞ。こういう目に会いたく無かったらな」

「じょ、冗談だったの……？」

「当然だろ。今のはちょっとしたお仕置きだよ。お前があんまり人のことからかうモンだから、やりすぎると痛い目を見るっていうのを教えてやろうとしたワケだ。

よかったな、ひとつ賢くなったぞ！」

「……よ、良かったぁ～」

俺の言葉を聞いたギンガは、大げさに溜息を吐いてぶくぶくと口元までお湯の中に沈んでいく。

こんにゃろう、それはそれで失礼だろうが。どんだけ本気で安心

してんだっつの。
　くっそ、もう一回、今度は本気でキスしちまうぞ畜生め。

「ハ、ハヤト君！　こういう事、女の子にやっちゃ駄目なんだからねっ！？
　私じゃなかったら、ビンタされてても文句言えないんだよ！？」

「先に人のことをからかったのはお前だろーが。俺はやり返しただけだっつの」

「そういう事じゃなくてっ！　やり方があるでしょうっ！？
　あ、あんな風にしなくなって……その、ホントに驚いたんだからぁ！」

「はいはい、悪かった悪かった」

　ポカポカと人の胸板を叩いてくるギンガをあやしながら、苦笑しつつ適当に謝る。
　悪いのはどう考えてもコイツなんだが、まぁ確かに少しばかりやりすぎたかもしれねーな。

「うー、今度おば様にあったら言いつけてやるー！」

「はっ！　母さんは俺の味方だから、別に平気だっつーの！」

「じゃあ、おじ様に言いつけてやるーっ！」

「だぁから悪かったって。謝るからそんな怒るなよ」
「知らない知らない知らないっ！」

この後、拗ねるだけ拗ねたギンガの機嫌を直すのにかなりの時間を要した。
はぁ……結局最終的に謝るのは俺なんだよなぁ。やっぱ、ギンガをからかうのは程々にしておこう。
どうせ何があっても、こうやって最後は俺が折れるハメになるんだし。

そんな悟りたくも無い事実を悟り、ちょっとばかり欝になった俺であった。
……そういや、結局あの露天風呂には誰も来なかったなぁ。ハラオウン執務官や高町一尉たちが来るかもって、少しばかり期待してたんだが。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

ギンガとハヤトが夫婦喧嘩をしている頃。
なのはとアリサ、すずかの3人はこの海鳴スパラクーアの名物と名高い露天風呂――今まさにギンガとハヤトが喧嘩をしている場所

――に向かおうと、3人で話をしながら歩いていた。
と、3人が露天風呂近くまでやってきた時。風呂場の床に、3つの人影が倒れていた。

「っ!?　はやてちゃん!?」

「シャマルさん!?」

「リインちゃんも、どうしたんですか!?」

倒れていたのは、八神はやて、シャマル、リインの3人。
3人は口元を押さえ、ブルブルと身体を痙攣させながら青い顔をして床に倒れていたのだ。
何事かとなのは達は3人の名前を呼びながら駆け寄り、それぞれ倒れていた人物を抱き起こす。

「ど、どうしたの?　のぼせちゃったの!?」

「……」

「え?　何?」

なのはに助け起こされたはやては、口元を押さえたまま、消え入りそうな声で何かを呟く。
それはとても小さく、耳に届かなかったなのはは問い返しながら口元に耳を近づけた。

「あ、あかん……」

「あかん？　何が駄目なのはやてちゃん！？」

「そこの中を、覗いたら……あかん……」

「中！？　中に何があるの！？」

「バカップル滅べ……げふぅっ……」

「はやてちゃん！？　はやてちゃーんっ！！」

最後に謎の呪詛を言い残し、はやては口から白い粉を吐いて意識を失った。

同じタイミングでシャマルとリインも同じように白い粉を吐いてから、同時に意識を失う。

見たことの無い怪奇現象に戦々恐々とするなのは、アリサ、すずかの３人だったが、同時にはやて達がこうなった原因が気にかかった。

「この中を覗いたら駄目って言ってたけど……」

「つまり、この中にはやて達がこうなった原因が……？」

「ちょっと、覗いてみようか？」

「「……うん」」

嫌な予感は感じている。

しかし、怖いもの見たさという言葉があるように、はやてがこうなった原因をどうしても見て見たいという気持ちは大きく、３人はその誘惑に勝てなかった。

そしてなのはとアリサ、すずかはお互いの顔を見て頷きあい、『露天風呂』と書かれた看板の隣にある扉を少しだけ開き、そのまま縦に顔を重ねて中を覗き見る。

その結果は――

「な、なのは!?　アリサ、すずかも!?　ど、どうしたの!?」

「フェ、フェイトちゃ……げふぅっ」

「バカップル恐るべし……ごはっ」

「わ、私、もう駄目……へぶぅっ」

「あわわわ、だ、誰か！　誰か来てーーーーっ！」

この日以降、問題の露天風呂は混浴でなくなったとかなんとか。

お後がよろしいようで。

side: 了

ｅｘ１５話　『出張任務　その４』（後書き）

……げふぅっ。
ドウモ、ラモンＤＥＡＴＨ。

もうだめ、もう限界……。
これ以上恥ずかしい展開を書いたら、マジで思考回路がショートしちゃう。
というわけで、バカップル混浴編でした。
うん、とりあえず私の書ける最大級の恥ずかしい展開でした。
これ以上を書けと言われたら、私にはもうキスさせるくらいしか思いつきません。

実際、この場面は何度書き直してもハヤトとギンガがチューしちゃうんですよ。何なのこのバカップル。何で作者の言う事聞かないの？
もうさっさと結婚しろよ、そんで子供も５人くらい作っちゃえよ畜生（えー）

そんなこんなで次回で出張任務編は最後の予定です。
最後はあっさりと行く予定なんで、清涼剤みたいな爽やかな話にしたいですね。主に自分の為に（笑）

それではまた、次の話で。

ex16話　『出張任務　その5』

「ふひー、いい湯だった～。なぁ、エリオ？」

「ひ、酷いですよハヤトさん！　僕、あの後色々と大変だったんですよ！？」

「はっはっは。いいじゃないか、役得だと思っとけよ」

「役得じゃないですよぉ……」

露天でギンガと別れてから、俺はそのまま風呂を出た。

そして、ロッカーの前で身体とか髪を拭いていると、キャロと一緒に子供用露天風呂に行っていた筈のエリオが赤い顔をしながら戻ってきて、そして今、俺とエリオはお互いに服を着ながらこんな会話をしている。

話を聞くと、どうやら子供用露天風呂にはキャロから連絡を受けたハラオウン執務官もやってきたらしく、その後3人で背中の流しっこをやったらしい。

……それが役得じゃないとかなんなの、このギャルゲ主人公。

「妬ましい」

「な、何がですか？」

「ハラオウン執務官の裸を見たエリオが」

「は、はははは裸なんて見てませんっ！！」

そうやって必死に否定するって事は、多分見たな。

ハラオウン執務官、前にエリオとキャロは自分の子供みたいなものだから……って言ってたし、そういう羞恥心みたいなのは無いだろうし。

しかし、もう１０歳だってのにこの耐性の無さはちょっと問題だなぁ。

「エリオ。今度エロ本見せてやるからな」

「はいっ！？　何でですか！？　い、いいですっ、いらないですっ！てゆーかどうして持ってるんですかハヤトさんっ！？」

「グランセニック陸曹という、この手の事に非常に理解がある人が居てだな。

まぁつまり、こちらがいくらかの報酬を支払えばその見返りとして本とかＤＶＤとか……」

「うわぁっ！　何だか余り聞きたくない生々しい話がっ！？」

「何を言う。あの人は俺らの健全な発育の為に、わざわざ危ない橋を渡ってくれてるんじゃないか。

グランセニック陸曹マジ兄貴。対価がちょっとお高めなのが玉に瑕」

「聞いてないですよぉ……」

真っ赤になって非難してくるエリオをからかいつつ、入り口にかかっている布――たしか『のれん』とか言ったか？――をくぐって外に出る。

外に出て空を見上げると、まだギリギリ夕暮れではあるものの、星が見えるくらいには辺りは暗くなっていた。風呂に入って火照った身体に、夜風が心地いい。

女性陣はまだ出てきていないようで、外には俺とエリオしかいない。

まぁ、女の風呂は長くかかるって言うしな。

「あーあ、ＢＳＰ持ってくりゃ良かった」

「いや、一応仕事中ですし、それはどうかと……」

「なんだよー、エリオは真面目だなぁ。そんなんじゃ女にモテな……いや、お前は十分モテてるか。

もげてしまえばいいと思うんだ、俺は。割と切実に」

「何だか酷いこと言われてません!?」

ふむ、エリオはツッコミとしてはまだまだ未熟だなぁ。

八神部隊長ならば、ここでもうちょい発展的な笑いに繋がるツッコミをしてくれるだろうに。

まぁコイツの性格を考えると、流石にそれを期待するのは難しいのかも知れんが。

「それはそうと、湯冷めして風邪ひくなよ？」

「え？　あ、はい」

男とはいえ、まだまだガキだからなぁ。

体力だってまだティアナやスバルよりも無いだろうし、体調管理は気をつけてやらにゃ。

下手に風邪でもひけば、ハラオウン執務官だって心配するだろ。

看病イベントなんて絶対に阻止してやるからなっ！　妬ましいっ！！

もげてしまえばいいんだエリオなんてっ！

「あの、ハヤトさん？　考えてる事が口に出てますけど……」

「む？　すまんすまん、2割くらいは冗談だから気にするな」

「8割本当じゃないですか！？　気にします、それすっごく気にしますからっ！！」

「こまけぇことはいいんだよ！」

「細かくないですってば！」

必死になってツッコんでくるエリオをからかうのは、ギンガを弄ってるみたいで存外に面白く、俺はそのまま女性陣が女風呂から出てくるまでエリオを弄り続けたのであった。

からかいすぎてエリオが半泣きになってしまい、それがハラオウン執務官にバレてちょっとばかり怒られてしまったが、俺にしてみ

れば何の問題もない。
我々の業界ではご褒美です。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ１６話　『出張任務　その５』

「っ！」

全員が風呂からあがって、のんびりと今後について話していた時。
突然、キャロの持っているデバイス『ケリュケイオン』と、シャマル先生のデバイス『クラールヴィント』の２つから警告音が鳴り響いた。
多分今回の目標が、サーチャーに引っかかったんだろう。

ちっ、ロストロギアめ！　どうせなら風呂の最中に引っかかれよ！
そしたら、女性陣が慌てて裸のまま外に……みたいなハプニングがあったかも知れないのに！

「魔力反応……リインちゃん！」

「はいですっ！　エリアサーチ！」

シャマル先生の言葉に反応して、リインフォース曹長が周辺一帯をエリアサーチという魔法で一気に調べていく。この辺り一帯っつっても小さな街ひとつ分。とんでもない大きさだろう。

ちっちゃい身体に大きなパワー！　……売り文句としては悪くない。

「ロストロギア反応！　今回の目標です！」

「お仕事だね。みんな、頑張ってきて」

「フェイト、エリオ、キャロ、気をつけて行ってくるんだよ？」

「「はいっ！」」

ロストロギア反応、という言葉を聞いてハラオウン提督婦人とアルフさんが励ましの声をかけてきて、エリオとキャロは嬉しそうに顔を綻ばせ、元気良く答えを返した。

現地協力者は戦闘には参加できないので、アルフさんはここで待機という形になる。

個人的には参加して欲しいんだけどなぁ。ハラオウン執務官から、アルフさんはかなり強いって聞いてたし、その方が安心出来るんだが……規則なら仕方ないわな。

「じゃあティアナ。シャマル先生とリイン、はやて隊長にオプティックハイド、よろしくね」

「わかりました。任せてください」

高町一尉の指示に従って、ティアナが指示を出す人たちにオプティックハイド……つまりは光学迷彩魔法をかける。これで、もしロストロギアがどこかの魔導師の手にあっても、ロングアーチは大丈夫。

あとは隊長達と俺らで何とかしちまえばいい、って寸法だ。

「空に上がって広域結界を張るから、その中で捕まえてね」

『はいっ！』

シャマル先生の結界なら、強度は折り紙つきだろう。

さて、後はサクサクやっちまうとしますかね！

「ほんなら、スターズとライトニング、出動や！」

『了解！』

八神部隊長の号令で、俺達は反応のあった地点に向けて一斉に走り出した。

◇◇◇◇◇

『第一戦闘空間、河川敷グラウンドに固定』

『スターズF、ライトニングF、エンゲージっ！！』

目標となったロストロギアが発見された場所へは、それ程時間をかけずに辿り着けた。

そこには確かに、少なくとも魔法文明の無い世界には存在しない物体が存在していた……んだが。

ポヨョ～ン、ポヨ～ン、ボヨヨォ～ン……。

そこに居たのは、俺の身長と同じくらいのスライムが無数に蠢いていた。

何かこう、すっげー肩透かしくらった感じなんですが。ロストロギアって聞いてたから、なんつーかこう、もっと禍々しいのを想像してたんだけど、これは随分とまぁ……。

「ちょっと、可愛いかも……」

「そうだね。一個持って帰ったら駄目かな？」

「駄目に決まってんだろ」

スライムを見つめて、うっとりと頬を染めるキャロとギンガ。
あー……ギンガはこういう、訳わかんねーのが何故か好きなんだったっけ。つか持って帰ろうとすんなよ、ロストロギアだぞロストロギア。

「それはともかく、数が多すぎますね……」

「だな。八神部隊長、これ、全部が本体ッスか？」

『危険を感じると、複数に増殖してダミー体を作り出す能力みたいやな。
確かに数は多いけど、本体はひとつや』

「それじゃあ……」

「本体を封印すれば、ダミーも全部消えるです！」

俺とティアナの疑問に、部隊長と曹長の2人が答える。
なるほど、じゃあまずは本体を見つけ出さなきゃならないって訳か。
こーゆー時、ゲームなら簡単に見分けがつくんだが、流石に現実はそう甘くないって訳だ。

「放っておけば、増殖したダミーが街中に広がる恐れもある」

「あたしら空戦チームとハヤト、ギンガで広がったダミーの回収を

する。
本体の方は、リインのサポートでお前らがやってみろ！」
「素早く考えて、素早く動く！」
「練習どおりにやればいける筈だよ！」
「「「「はい！」」」」
ティアナ達に向かって、隊長達が次々と言葉をかけていく。
なるほど、あのロストロギアに危険性は無いみたいだし、ここらでティアナ達に場数を踏ませておこうって事か。実際、部隊で受ける任務の中には、こういう捕獲系のも結構あるしな。
何事も経験って訳だ。頑張れ若人たち。
「ハヤト君、親父臭いよ？」
「うっせぇ。俺も自分でそう思ってるよ」
いらんツッコミをしてくるギンガをあしらってから、俺は走り出す。
たまには年長者らしく、スバル達が全力で戦えるようにサポートしてやるとしますか。
ｓｉｄｅ：－

はやての号令でロストロギア捕獲作戦が始まった数分後、河川敷グラウンドから少し離れた川の下流付近で、ハヤトとギンガの2人は8体のスライムと対峙していた。
2人が受け持ったエリアはこの一角だけ。
陸戦である2人は、空戦であるなのは達よりも移動範囲が少ないからという理由だ。

「はあああっ！」

気合の声と共に、ウィングロードの上を駆けたギンガが、スピードを乗せた拳を目の前のスライムに向けて振り下ろす。
本来なら何十枚も重ねられた鉄板を貫くだけの威力を持ったその拳は、しかしスライムの身体に当たった瞬間、ぽよんっ、という可愛らしい音と共に弾かれた。

それを見たハヤトが、間髪居れずに魔力弾を撃ち出すが、それも拳と同じようにスライムの柔らかな身体を貫くことは叶わずに弾かれてしまう。
スバル達の方も同じ状況のようで、通信で彼女達の驚く声が聞こえてくる。

「ったく、直接攻撃が効かないのは見た目通りだけどよ。
まさか魔法攻撃まで無効とか、ゲームだったら糞ゲー乙ってレベルだぞ」

「もー、こんな時までそんな話してぇ」

「だぁってよぉ。攻撃してこねぇ、逃げる訳でもねぇ、防御だけは完璧って何よ？
はぐれメタルだって攻撃してくんだぞ？　根性見せろよ根性」

「いや、攻撃してきたら大変なんだからいいじゃない……」

杖の状態になったブレイブハートを肩に担ぎながら、ハヤトが溜息を吐く。
その隣に降りたギンガはスライムを見つめつつ、そんな彼に呆れた声を上げた。いまいち緊張感がないと思えるが、相手側には攻撃機能がないらしく、ずっと跳ねているだけなのだから仕方ない。

「危険を感じると増えるっつってたけど、本体だけで助かったぜ」

「そうだね。これ以上多くなると、流石に困っちゃうかも。
まぁ、殴り飛ばすのは簡単だから、そこは助かるけどっ！」

「さすが脳筋怪獣カイリキー！　頼りになるぜ！」

「ハヤト君っ！」

ワイワイと言い合いながらも、ハヤトとギンガはお互いの動きを先読みして次々と攻撃を繰り出し、８体のスライム達を一定ラインの向こうに押し込め続けている。
この辺りは、幼馴染らしい阿吽の呼吸というものだろうか。

「てやぁっ！」

「よいしょおっ！」

時にはハヤトが思い切りスライムを蹴飛ばし、ギンガが射撃魔法を飛ばす。

ダミー体であるスライムには、それぞれの意思というものは無いらしく、ポヨンポヨンと跳ねながらあちこちに向かって行こうとしている。

ハヤトが辺りを見張り、ギンガが彼の指示に従ってその迎撃に向かう。

「そっちいったよ！」

「もう向かってる！」

「さっすが！」

「当然ッ！」

時々その役目を入れ替わりつつ、２人は順調にスライムとの戦闘……と呼べるかどうかは微妙だが、スライムを防衛ラインの向こうに押し返す作業を続けていく。

そして、その時は唐突に訪れた。

「はああっ！」

ギンガが再び目の前のスライムを殴り飛ばそうと拳を振り上げて突撃した時、目標としていたスライムが突如として消え去ったのだ。

「って、えぇぇっっ！？」

「お、本体の封印成功したみたいだな」

ブレイブハートを遠くから見た状態で居るハヤトは、やっと終わったかという調子で呟くが、全力で突進していたギンガからしてみれば状況はまるで違う。

スライムに攻撃を当て、その反動を使って自分を止めるつもりで全力で突撃していたのに、突然その相手が消えてしまったのだ。しかも、目の前にはスライムの背景となっていた川が迫っている。

「あわわわわ！　ス、ストップ！　ストップ！！」

《　……不可能です　》

「嘘ぉぉっ！？」

慌てて足に装着しているブリッツキャリバーに停止の指示を出すが、当然ながらいくら魔法でも慣性の法則には逆らいきれるもので

はない。
　まぁ、実際には方向転換すれば良いのだが、突然の事態にパニックになってしまっている彼女には、それを考え付くだけの余裕は無く、ギンガは涙目になって悲鳴をあげながら、必死になって何とか止まろうとする。

「ちょっ、待って待って！　ホントに待って！！」

　けれど彼女の努力は実を結ばず、ギンガは高速で川に向かって突っ込んでいき――

「きゃあああああっっ！？」

「ったく、手間かけさせんなよ馬鹿ギンガ」

「ひゃんっ！」

　彼女の身体が川に突っ込もうとしたまさにその瞬間、ソニックムーブによって彼女に追いついたハヤトによって抱きしめられ、そのままの格好でウィングロードの上から救助された。

「よ……っと」

　ギンガを抱きかかえたまま、ハヤトは空中で姿勢を整えて近くの

草むらに着地する。
そして、自分の腕の中で驚いた顔で目を白黒させているギンガを見て、仕方ないなぁとばかりに苦笑して彼女の頭を撫で、口を開く。

「お前は相変わらず想定外の事態に弱ぇなぁ。
あんなの、ちょっとウィングロードの進路を変えれば良かっただけだろうが」

「だ、だってびっくりしちゃったんだもん」

「そーゆー時に冷静に対処できないでどうすんだよ。今だって、俺がいなきゃびしょ濡れだったぞ。
まぁ、慌てて悲鳴を上げてるお前を見るのは、結構楽しかったけどさ」

「うぅぅ……言わないでよぅ」

彼に頭を撫でられ、少しは落ち着いてきたのだろう。
ギンガは先ほどの自分を思い出し、恥ずかしそうに呻いてハヤトの胸に顔を押し付ける。

「助けてやった俺に、海よりも深く感謝しろよ？」

「ひ、人のこと散々からかっておいて、それを言うの？」

「そりゃ言うだろ。助けてやった訳だし」

「うー……」

自分の顔をハヤトの胸に押し付けつつ、目だけを器用にハヤトの顔に向けたギンガが唸る。

よほど恥ずかしいのか、耳まで赤いその顔を見て、ハヤトはもう一度苦笑してから自分の胸に顔を押し付けるギンガに向かって話しかけた。

「さて、そろそろ戻ろうぜ？　ハラオウン執務官たちも戻ってるだろうしよ」

「あっ、うん。そうだね」

ハヤトの言葉を聞いたギンガはパッと顔を上げ、身体を離して相槌を打つ。

そしてスバル達が居る河川敷グラウンドへ向かおうと後ろを向いてから、小さく「そうだ」と声を上げて再び振り返り、口を尖らせてハヤトへと詰め寄る。

「さっきのこと、誰にも言っちゃ駄目だからね？」

「あー、どうすっかなぁ？　部隊長あたりに話したら、絶対面白い事になりそうだし……」

「駄目ったら駄目なの！　言ったらもう起こしてあげないんだからっ！」

「別に困らんけどな」

「とにかく駄目なのっ！　わかった！？」

「はいはい。きっと多分言わねーから、沈没寸前の船に乗ったつもりで安心しろよ」

「私はその言葉のドコに安心すればいいのかなっ！？」

ハヤトはギンガをからかいつつ、河川敷グラウンドへと歩き出し、ギンガは真っ赤な顔で彼に追いすがりながら声を上げ続けた。

ｓｉｄｅ：―　了

◇◇◇◇◇

「そう、もう帰っちゃうんだ……」

「一晩くらい泊まっていけばいいのに……って、いう訳にもいかないかぁ」

「うん、ごめんね？　今度は、休暇の時に遊びに来るから」

第９７管理外世界の転送ポートの前で、アリサさん達と高町一尉たちが別れの言葉を交わしている。
アリサさん達の言葉の通り、夜も遅いのだが俺達はこちらに一泊することもなく、このまま機動六課隊舎へと戻る予定らしい。
封印したとはいえロストロギア、何があるかわからないからだろう。
個人的には、一泊していきたいんだけどね。

「次に来る時は、スバルちゃん達も是非一緒に遊びにきてね」

「はいっ！」

「その時は是非」

月村さんの誘いに、スバルとティアナは嬉しそうに頷いている。
確かにまた来たいよな。今度はゆっくりと。

「あぁ、ハヤトは別に来なくてもいいから」

「何故にですかアリサさんっ！」

「胸に手を当てて考えてみなさい」

「……なるほど、俺に惚れそうで怖いという訳ですね？」

「７億回くらい生まれ直してから、そういう言葉を言いなさいね？」

アリサさんのツッコミは、ガラスのハートを持つ俺には手厳しすぎるようだ。
言われなれてるのに涙が……くすん。

「はやてちゃん。転送ポートの準備、終わったですよ～」

「わかった～。それじゃあ皆、そろそろ帰ろか？」

『はいっ！』

こうして、六課が発足してから初めての出張任務は無事に終了した。
個人的には、もう少しお色気系のイベントが欲しかった気もするんだが、次回に期待するとしよう。
次回こそ、次回こそ女湯の盗さ……もとい撮影を！

「……」

「あっ嘘っ！　嘘ですから転送ポートから落とそうとしないでティアナさんっ！」

「……」

「お前も一緒になって押すなスバル！　お前の力は洒落にならんから！！」

「スバル、ティアナ～。落とすなら証拠は残さんようにな～」

「「了解です！」」

部隊長まで物騒なこと言わないでくださいよっ！

ちょっ、エリオ助けろ！　同じ男として助けてくれっ！！

「す、すみません。何か助けると僕まで巻き込まれそうなので……」

絶望した！　唯一の味方に裏切られて絶望したっ！！

「自業自得だね」

「ギンガはうっせーっ！」

ｅｘ１６話　『出張任務　その５』（後書き）

あっさりという意味を広辞苑で調べてきます（笑）
どうも、ラモンです。

音声作品を文章にするって、やっぱり大変ですね。
あっちだとトラックごとに場面を移動できるんですけど、文章だと中々そういうのが上手くいきません（汗）
今回はＶＳスライムの部分を細かく書きたかったんですが、あいつら別に攻撃してこないから書くことが無かったっていうね……。

そしてまたもやこっちの意向を無視して、勝手に動き出したバカップル。もういい加減にしろよっていう……お前らのイチャつきなんて、もう俺は見たくないんだよぉっ！！（泣）

さて、次回はオリジナルの話を１つか２つ挟んでから、ホテル・アグスタ編にいきたいと思います。
ティアナの失敗フラグをへし折ったので、どういう展開にしようか悩みますねぇ。個人的にですが、ハヤトとギンガは隊長達と一緒に内部警備にしたいなーと思います。
ギンガにドレスを着せたいだけです、ええ（笑）

それではまた、次の話で。

ｅｘ１７話　『ある日の風景』

「あ〜ー、つっかれたー」

「ふふっ、お疲れ様。ハヤト君」

ハラオウン執務官の執務室から続く廊下を歩きながら、背伸びをして肩を回す。

今日は整理する資料が多すぎて、かなり肩凝ったわー……こりゃちゃんとマッサージしとかないと、後でひでぇことになるなぁ。肩も首もすっげーゴキゴキ言ってるし。

これで服が弾け飛んだら、どこの世紀末救世主だって話だよ。

「肩すごいね、ハヤト君」

「まぁな。つーか、お前の分の資料整理も手伝ってやったせいで、余計に酷い気がするんだが。

後で肩のひとつでも揉んで、感謝の気持ちを表して欲しいもんだな？」

「謹んでお断りしますー」

「……よく考えたら、お前の力で揉まれたら肩が砕け散るな。やっぱいいわ」

「酷いっ！？」

ギンガをからかいつつ、休憩場所のあるロビーへと歩いていく。
とりあえず今日の仕事は大体終わらせたから、後はちょっと休憩して残りを片付けるだけ。うまくすれば、今日は早めにあがれそうだな。
そしたら後で街にでも出かけようかなぁ。
欲しいソフトも何本かあるし、中古になってるかどうかも見たいし……。

「あー、ハヤ兄にギン姉！　やっほー！」

「んぁ？」

「あら、スバルじゃない」

ホクホクと仕事が終わった後の事に思いを巡らせていると、休憩所のロビーからスバルの元気な声が聞こえてきた。
視線を動かしてそちらを見れば、ソファの上から身体を乗り出してこっちに向かって手を振っているスバルと、そんなスバルの隣で恥ずかしそうにしているティアナがいた。エリオとキャロは、その2人の向かい側にあるソファに座って、楽しそうに笑っている。
やれやれ、ティアナも大変だな。

「よう、お前らも休憩か？」

「うんっ！　ハヤ兄とギン姉も？」

「ええ。ちょうど仕事がひと段落ついたから、少し休憩しにきたの」
「お疲れ様です」
「ティアナもね」

ティアナに返事をしながらギンガはその隣に座り、俺は近くの自販機へと歩いていく。
よく考えたら、だいぶ喉渇いてたんだよ。ずーっと仕事してたわけだし。

「ギンガ、お前何にする？」
「コーヒーがいいかな。あ、砂糖多目でお願いね」
「あいよー」

コインを入れて、ギンガの分のコーヒーと自分用のコーヒーを買う。
最近ブラックコーヒーが旨いと感じるようになってきた。これが大人になるってことか。
ふっ、俺も年を取ったモンだぜ……。

「ハヤ兄～！　あたし、果汁１００％ピーチがいい～！」
「あぁ？　ったくしゃーねーなぁ」

「それじゃあ、私も同じのをお願いしますね、ハヤトさん」

「はぁ！？　ちょっ、オイ待てティアナ。何で俺がお前にまで……」

「この間、資料整理手伝いましたよね？」

「……はい」

借りは作るもんじゃないね。ちくしょう。

俺は涙を堪えながら再びコインを入れ、ティアナとスバルに注文されたジュースのボタンを押す。

おっと、そういえば。

「エリオとキャロは何にする？　奢ってやるぞ」

「え？　あ、ぼ、僕はいいですよ」

「私もいいです。ハヤトさんに悪いですし……」

「ガキんちょが遠慮してんな。奢るっつってんだから、大人しく奢ってもらっとけ。

ちなみに注文しない場合、このホットゲルルンジュースサバ缶味を飲ませる。一気で」

「「スバルさんと同じものでお願いしますっ！」」

この自販機最大のゲテモノジュースでお馴染みの代物を指差しながらそう言うと、エリオとキャロは慌てて声を上げた。やれやれ、この2人はちょっと物を奢るのも一苦労だぜ。
スバルのガキっぽさを少し分けてやりたいくらいだ。
いや待てよ？　スバルにこの2人の大人っぽさを分けた方が……。

「ハーヤーにーいー、まーだー？」

「はいはい、今行きますよーっと」

ソファの上で手足をジタバタさせているスバルに苦笑しながら、6個の缶を抱えてそちらに向かう。
家族サービスをする父親ってのは、こんな感じかなぁなんて思いながら。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ１７話　『ある日の風景』

「で、どうなんだお前ら？　最近の訓練の調子は」

缶ジュースや缶コーヒーでやっすい乾杯をした後、俺はコーヒー

を啜りながら尋ねてみた。
俺とギンガは時々しか訓練に参加しないから、あんまりスバル達の成長を直に見る機会が少ない。ハラオウン執務官から話は聞くけど、なんせ執務官も忙しいから俺らと同じく訓練には余り参加出来てないから、高町一尉からの又聞きという感じになる。
なので、少しばかり気になっていたりしたのだ。
……まだ抜かされてないよね？　俺、まだ先輩面できるよね？

「そうですね。結構いい感じだと思いますよ。エリオとキャロも、２人で連携が取れるようになってきましたし」

「あたしとティアもいい感じなんだよ、ハヤ兄。今日も、模擬戦してなのはさんに「凄く良くなった」って誉めてもらえたの」

「はいはいわかったわかった。だから抱きつくなスバル」

「ぶー。リアクションが薄いよハヤ兄！　ハヤ兄から話題を振ってきたくせにー」

「ハイハイソーデスカー」

人の腕にしがみついて頬を膨らませるスバルを引っぺがし、明後日のほうを向いて適当にあしらっておく。こいつはホント、いつになったらガキっぽさが抜けるんだか。
そんなんじゃ彼氏の１人も出来やしねーぞ。

「あれ？　ハヤトさん知らないんですか？
スバルって、コレで結構モテるんですよ？　訓練校でも、結構人気ありましたし」

「なぬっ!?　マジか!?」

「本当だよハヤト君。私も何度かスバルからそういう話、聞いたことあるもん」

「なん……だと……!?」

スバルがモテていた？
この食欲が服を着て歩いているような、お馬鹿犬っ子のスバルが!?
俺様がこの年まで1度たりともモテた事が無いのに、スバルが!?　あのスバルが!?

「いや、ハヤトさん。そんな3回も言わなくても」

「俺の妹分がこんなにモテるわけがない」

「……エリオ君、こんなハヤト君と一緒で疲れない？　大丈夫？」

「え？　だ、大丈夫ですけど」

「本当？　無理しなくていいんだからね？」

どや顔をしていたら、思い切りスルーされてしまった。
くそっ！　今のは結構上手いこと言ったと思っていたのに……！

「つかギンガ。お前それは流石に失礼だろう。
俺だって、そういつもいつもアホな事やっているワケじゃねーんだぜ？」

「えぇ～？　説得力ないよねー、キャロちゃん？」

「ふぇっ!?　わ、私ですか!?」

「ンなことねーよな？　俺は真面目キャラだよな？　な？」

「え、えぇと、えぇと……」

ギンガが失礼なことを言うので、キャロを味方に取り込もうと詰め寄る。
すると、ギンガの奴も対抗意識を燃やしたのか、俺と同じようにキャロへと顔を近づけた。しかも妙に迫力のある笑顔を浮かべながら。
やめろよギンガ。お前の凶悪な顔に、キャロが怯えてるじゃないか。

「違うでしょ。ハヤト君の顔が怖いんだよ」

「はぁ？　おめーの顔が怖いんだし」

「これだから自分の事がわかってない人は困るなぁ。ねぇ、キャロちゃん？」

「こっちの台詞だっつの。これだから脳筋は困るぜ、なぁキャロ？」

「あのあの……えとその……」

「なぁ？」

「ねぇ？」

「あうあうあう……」

「ふ、二人ともやめてください！　キャロが怖がってるじゃないですか！」

お互いに笑顔を浮かべながらキャロにジリジリと詰め寄っていると、突然ティアナが割って入ってきてキャロを自分の背後に隠してしまった。

「何だよティアナ。邪魔すんなって。別に怖がってる訳ねーだろ。見てみろ、ホラ、俺もギンガもこんなにイイ笑顔じゃねーか」

「そうよティアナ。ホラ、すっごくいい笑顔。だからキャロちゃん返して？　今めちゃくちゃ大事な話をしてるんだから」

「いやいやいや2人とも目が笑ってませんから！　怖いですから！」

ティアナが顔を引きつらせて叫ぶと、キャロもティアナの背後でうんうんと頷く。

失礼な。俺達が小さい子供を怖がらせるほど、分別の無い大人な訳ねーだろ！

「怖がらせてますよね！？　今まさに怖がらせてますよね！？」

「気のせいだよティアナ。だから、キャロをこっちに渡して？」

「なんにもしないから。大人しくキャロを離せよ、な？」

「駄目ですっ！　フォワードチームのリーダーとして、絶対に渡せません！」

いつの間に貴様がリーダーになったと言うのか。

ティアナはキャロを背中に庇ったまま、両手を大きく広げ、キリッという効果音が聞こえてきそうな顔をしてそう言いやがった。

しかもティアナのガードは中々固く、俺達がちょっとでも動けば即座に立ち位置を移動して、常にキャロが自分の背中に隠れ続けるようにしている。

……ふっ、やるじゃないかティアナ。

昔は簡単に俺に後ろを取られていたというのに、成長したモンだ。

「なのはさんに鍛えて貰ってますから。いくらハヤトさん、ギンガさんと言えどここは譲りません」

「上等だ。キャロを渡さないと言うなら……」

「力ずくになるけど、いいの？」

「構いませんよ。あたしだってもう昔とは違うってこと、2人に見せてあげます」

俺とギンガ、そしてティアナの間に緊張が走る。

まさに今からぶつかり合おうとしているような、そんな戦闘開始直前に感じる独特の緊張感。同時に、俺達3人はデバイスを起動してバリアジャケットを身に纏う。

そして、俺達が動き出そうと体重を前に傾けた、その瞬間――！

「ハヤ兄、ギン姉。いますぐ止めないと、おじさんとお父さんに「2人がちっちゃい子を虐めてた」って言いつけるよー？」

「「すいません今すぐやめます」」

「……え？」

スバルが放った一言を聞いて、即座にデバイスを待機状態に戻してスバルに向かって頭を下げた。

小さい子を虐めていたなんていうのは言いがかりだが、例え言い

がかりでも父さんやゲンヤさんがそんな事を聞いたら、説教一時間は固い。
父さんの説教もゲンヤさんの説教も、マジで心身共に堪えるから是が非でも回避しておきたい。
もうね、正座で一時間説教とか拷問以外の何でも無いわけですよ。

「え？　あの、え？」

「ごめんねティア。ハヤ兄とギン姉、変なところで子供だからさぁ」

「いや、それはいいんだけど……え？　何？　セットアップしたあたしの行動は全部無駄？」

「……うん。ハヤ兄とギン姉にうまく乗せられちゃったね」

「マジ？」

「マジ」

一方でティアナは、二丁拳銃の形態を持つクロスミラージュを構えたまま、目を白黒させている。
全く、もう俺やギンガとの付き合いも長いんだから、いい加減慣れておけよなっ！

「あたし、ハヤトさんとはそんなに付き合い長くないと思うんですけど？
ギンガさんやスバルとは、休みの時に結構会いましたけど、ハヤ

トさんとは六課に来るまでは顔見知りくらいだった気が……」

「頑張れ頑張れ！　できるできる！　絶対できる！
頑張れもっとやれるって！！　やれる！
気持ちの問題だ！　頑張れ頑張れ、そこだ！　そこだ！
あきらめんな！　絶対に頑張れ！　積極的にポジティブに頑張れ
頑張れ！」

「意味わかんないですよっ！」

俺の言葉に全力でツッコミを入れてくるティアナ。
いいねぇ、いいねぇ、そのツッコミ。やはりお前は最高のツッコミストだよ、ティアナ！！
お前さえよければ、俺が恋人になってやってもいいんだぜ？

「絶対嫌です」

「いや、そんな☆マークが出そうなくらいにいい笑顔で断られると、さすがに涙が出るんですが」

「絶対嫌です☆」

「……ぐすん」

大概の男を一発で惚れさせそうな、ティアナさんの弾ける笑顔の前に撃沈する俺。ちくしょう、何でなんだよ、何で俺はここまでモテないんだよ。

俺と同じエロ仲間のグランセニック陸曹には、アルト＝クラエッタ陸士という可愛くてプリチーな後輩が居て、なんだかんだで良い雰囲気だったりするというのに、何故俺には彼女の１人も出来んのだ。

世の中間違ってると思うのだが。

「ハヤト君がエロいからだと思う」

「ハヤ兄がえっちだからだよ、きっと」

「ハヤトさんがスケベだからじゃないですか？」

「お前ら嫌い」

一切合切なんの躊躇もなしに一刀両断してくるギンガ達を睨み付けておく。

これだから女は嫌なんだ。集団になると、途端に抜群のチームワークを発揮しやがる。こうなったら男の俺には対抗する術が無いから、一方的に弄られる側になるしかないのだ。

「あ、あの、ハヤトさん」

「ん？　なんだ、どうしたキャロ？」

ソファの上で膝を抱えていると、俺の前にキャロがやってきてこっちの顔を覗き込んできた。

何だ？　傷ついた俺のハートにトドメでも刺しに来たのか？　そんな風に警戒していると、キャロはおもむろに俺の手を取り、口を開く。

「私はハヤトさんのこと、好きですよ？」

「キャロ……」

「ハヤトさんとお話ししてると、凄く楽しいですっ！
お兄ちゃんがいたらこんな感じなのかなって、いつも思いますもん」

俺の顔をまっすぐに見つめて、恥ずかしそうに頬を染めながらそう言ってくれるキャロ。その優しい言葉に、思わず目頭が熱くなる。
なんてええ子なんや、マジでなんてええ子なんや……。
熱くなった目頭を押さえながら、キャロを抱きしめる。

「ひゃわっ！？」

「キャロは嫁にやらんぞぉっ！！」

「な、何の話ですかっ！？」

キャロの頭をぐりぐりと撫で回しながら、決意表明をする俺。
もうね、こんないい子を嫁に貰える奴は本気で幸せだと思うわけよ。そして、そんなキャロが不幸にならないように、俺がしっかり

と相手を見定めなきゃいけないとも思うワケだ。
シスコンじゃないっ！　年上としての義務だっ！
ちなみにスバルの結婚相手も、俺がちゃんと探してやるからなっ！

「うわぁ……」

「ハヤトさん、それって完璧にシスコンですよ？」

「違わいっ！　これは年長者として正しい行動なんだっ！
という訳でエリオ！　キャロが欲しかったら、俺の屍を越えていけっ！！」

「えぇっ！？　い、いや、僕は別にキャロとそういう関係なワケじゃないですよっ！？」

自分だけ安全圏でボーっとしていたエリオをビシッと指差してそう言うと、エリオは顔を真っ赤にして必死に否定した。おいおいエリオ、それじゃあ気になっていますと言っているようなモンだぞ？
まぁ、どの道キャロもスバルも嫁にはやらんがなっ！

「すみませんハヤトさん、ちょっといいですか？」

「うむ、なんだねティアナ君」

「あたしやギンガさんはいいんですか？」

「お前らは大人だからな。自分の相手くらい自分で見つけられんだ

ろ」

「むぅ……それはそれで、何か納得できないような……」

こっちの返答に口を尖らせるティアナ。

何だよ、人のこと散々シスコンだ何だと言っといて、実はかまって欲しかったんじゃねーか。

相変わらず素直じゃねーのな、仕方ねぇ奴。

「わかったわかった。ティアナの相手も、この俺様がちゃんと選んでやるからな」

「……そのドヤ顔やめてください。なんかムカつきます」

「またまた～、ホントは嬉しいくせしてそんな事言うなよ。ツンデレさんめ」

「ツンデレ言わないでください。言いがかりです」

そう言って顔を逸らすティアナ。ふむ、そういえばこうやってティアナをからかうのは、よく考えたら初めてかもしんねーな。いつもティアナはツッコミ入れるだけだったし。

同じチームとして親交を深めるために、これからはもっと積極的にからかうとしようか。

「駄目だよハヤト君。ティアナ、困ってるじゃない」

「あぁ？　ンなこたねーだろ。こんくらいコミュニケーションだってコミュニケーション」

「絶対違うと思うけどな」

「ギンガさんにはわからないだけではないでしょうか？　脳まで筋肉でいらっしゃるようですし」

「……喧嘩を売ってるんだね？　いいよ？　買うよ？」

ギンガは軽く挑発しただけで再びデバイスを起動し、リボルバーナックルを装備した左手を握りしめてこっちを見る。全く、そんな単純だから脳筋って言われるんだよ、主に俺に。

だがまぁ、そろそろどっちの立場が上なのかをハッキリさせておくのも悪くない。

最近ギンガの奴、更に口うるさくなってきやがったからな。ここらでひとつ教育してやろう。

「ブレイブハート、セットアップだ」

《　よろしいのですか？　隊舎での私闘は禁止されているのでは？　》

「そんな道理、私の無理でこじ開けるっ！！　という訳でセットアップだ」

《　？　よく分かりませんが、了解しました　》

ブレイブハートを無理やり納得させ、俺も再びバリアジャケットを纏う。
確かに私闘は禁止されているが、一瞬で終わらせれば問題ない。
ギンガ程度、デバイスさえ使えればものの1分もかからずに沈めてみせようぞ！

「ギンガ、小便は済ませたか？　お祈りは？　部屋の隅でガタガタ震えて謝罪する準備はＯＫ？」

「下品な事ばっかり言うんだから。これは、少し本気でお説教が必要だね」

「ちょっ、2人ともなんでいきなりそんな本気モードなんですか！？駄目ですってば！　普通に部隊長に怒られますよ！？」

「言っても無駄だと思うよティア～。
ハヤ兄もギン姉も、ああなったら力ずくじゃないと止まらないもん」

「のほほんとジュース飲んでないで、アンタも止めなさいよ！！」

「えー、無理ー」

ティアナとスバルのやり取りを聞きながら、俺とギンガはお互いにジリジリと距離を詰める。
お互いに手の内は全部知っている。更にお互いの得意とする距離

が、相手の苦手とする距離。ならば、勝負はまさに一瞬で決まるだろう。隙を見せた方が殺られる……っ！！

「エリオ、キャロ！　あんた達もちょっと手を貸しなさいっ！」

「わ、わかりました！　ハヤトさん、ギンガさん、やめてください！」

「はわわっ！　お二人とも、喧嘩は駄目ですよぅ！」

エリオとキャロまで総動員して、ティアナが必死に俺達を止めようとするが、いくらチビッ子たちの声があったとしても、今はギンガを躾るのが最優先事項なのだ。悪いが止めてくれるなお前ら！

「止めますから！　最終的に連帯責任になるんですから！」

「知ったこっちゃねぇぇっっ！！」

そう吼えながら、ギンガに向かって駆け出そうと地面を蹴った――その時。

「……お前達、何をしている？」

「っ！？」

突然背後から聞こえてきた声に、俺はギョッとして両足に力を込めて全力でブレーキをかけた。
そしてブレーキをかけた勢いそのまま後ろを振り返れば、そこには両腕を組んでその素晴らしいおっぱいを強調させているシグナム二尉が立っている。しかも、明らかに怒っていらっしゃると分かるぐらいにこめかみがピクピクしてる。
や、やべぇ、まさかもう見つかるとは。

「あ、シグナム副隊長。丁度いいところに」

「隊舎内で魔力反応が合ったからと来てみれば……これはどういう状況だ？」

ジロリと俺を睨み付けるシグナム二尉。
あれ？　もしかして俺が原因だと思われてません？

「むしろこの状況ではそれ以外思えんのだが？」

「いや、確かに俺も原因ですが、それはギンガも……ってギンガさん！？」

「ん？　なぁに、ハヤト君？」

死なば諸共とギンガの方を見たら、さっきまでバリアジャケットを着ていた筈のギンガは、いつの間にか制服姿に戻ってソファに座

りながら優雅にジュースを飲んでいやがった。
しかも、同じようにティアナ達もソファに座っている。お前らさっきまで必死に俺のこと止めようとしてたじゃん！？　何でソファに座って我関せずみたいな顔してんの！？
そんな感じで戸惑っている俺をよそに、ティアナはシグナム二尉に向かって現状の説明を始めた。

「話をしていたら、ハヤトさんがいきなりセットアップしたんです。あたし達も止めようとしたんですけど、全然聞いてもらえなくて」

「そうなんですよ～。ハヤ兄、いきなり怒り出してー」

「シグナム副隊長が来てくれなかったら、どうなっていたかわかりませんでしたね」

「……ほう？」

ティアナ、スバル、ギンガの淀みない嘘の説明を聞いて、二尉の視線が鋭くなる。
ちょ、ちょっと待ってくれ。なんだお前達のそのチームワークは！　完璧に俺のこと犯人に仕立て上げる気マンマンじゃねーか！

「何を言ってるのか分かりませんよハヤトさん？」

「そうだよハヤト君。私達は、ここでジュース飲んでただけだよ？」

「ハヤ兄、頭でも打ったの？」

くっ、こいつら揃いも揃ってすっとぼけやがって！
もういい！　エリオ、キャロ！　お前達から、悪いのは俺だけじゃないと言ってくれ！

「あ、えとその……」

「あわわ……」

２人はお互いに顔を見合わせ、それから俺のほうにすまなさそうな視線を向ける。
そして――

「ハヤトさんが悪いとも言えるというか、なんというか……」

「えぇと、今回のは、多分ハヤトさんが悪い気がします」

ついにチビッ子２人からも売られてしまいました。
どうやら俺にはもう、助かる道は残されていないようです。

「……なるほど、よく分かった。ロックウェル、少し付き合え」

「つ、付き合えとはどういう意味でしょうか？　男女のお付き合いということでしょうか？」

「戯言を」

「ちょ、ちょっと待ってくださいシグナム二尉！　悪いのは俺だけじゃないんです！
ギンガも原因っつーかむしろギンガが先に……！！」

「言い訳は後で聞いてやる。とにかく、さっさと来い」

必死の弁明も虚しく、俺はシグナム二尉に襟首を引っ張られ、ズルズルと引きずられる。
いやだーっ！　説教はいやだーーーっ！！

「頑張ってねハヤト君」

「頑張れハヤ兄～」

「頑張ってください、ハヤトさん」

「ハヤトさん、あの、ご、ごめんなさいっ」

「はわわ、頑張ってくだしゃい！」

「お前ら後で覚えてろよぉぉぉぉっっ！！！」

最後にそんな捨て台詞を残し、俺はロビーからズルズルと引きずられていき、そのまま別室にてありがたい説教をされる事になった。

まぁシグナム二尉も俺だけが悪いんじゃないと分かってくれていて、苦笑混じりに「あまりはしゃぎ過ぎるなよ？」と言われた程度だったけど。

それはそれとして、ギンガ達には、いつか靴の中に小石を入れて仕返しをしようと思いました。

ｅｘ１７話　『ある日の風景』（後書き）

なんというグダグダ……しかし私はこういうグダグダを書くのが大好きなのだ！（えー）
どうも、ラモンです。

今回は日常回。
スバティアルートでは、あまりこの６人でワイワイやっている描写を書けてなかったなーと思ったので、６人でワイワイやらせてみました。
でもやっぱり６人もいると大変ですね。中々全員を動かすことが出来ません。
どうしてもエリオとキャロの影が薄く……（汗）

ティアナが大分キャラ崩壊している気がして仕方ない……。大丈夫なのかなぁ？　ティアナファンに石投げられないかなぁ？　と現在ビクビクしております。
でもほら、１６歳くらいの女の子ってこんな感じじゃないですか！？
そうだと言ってよバーニィ！！

まぁ戯言はさておき。
次回からはホテル・アグスタ編に入ろうと思います。
ティアナの失敗フラグは叩き折ったつもりなので、ちょっと原作とは違う展開に出来たらいいなーと考えている次第ですね。
上手く行くかはわかりませんが、楽しんで貰える展開になるよう頑張ります。

それではまた、次の話で。

ex18話　『ホテル・アグスタ　その1』

出張任務から帰ってきて数日。
あれからは特に緊急出動なども無く、日々は平和に過ぎていった。
そんなある日、俺とギンガの元に108部隊長であるゲンヤさんからの通信が入る。

『よう、久しぶりだなハヤト、ギンガ。元気してるか？』

「お父さん！　どうしたの、いきなり？」

「久しぶりですゲンヤさん。
今日はどうしました？　ショーギかイゴの相手ならまた次の休日にでも……」

『ばぁか違ぇよ。お前らに、ちょっとやって欲しい事があってな』

空中に開いた通信用モニタの向こうで豪快に笑った後、ゲンヤさんが真面目な顔になった。
おお、これは仕事モードの時の顔じゃないか。ならこっちも、ちゃんと仕事用に気持ちを切り替えないとな。そう思いつつ、姿勢を正してゲンヤさんの言葉を待つ。

「やって欲しい事？　俺達に、ですか」

『そうだ。八神の嬢ちゃんから直々の依頼でな、密輸ルートの捜査

だそうだ』

「密輸ルートの捜査……わざわざ八神部隊長が？」

ゲンヤさんの言葉に、思わず聞き返す。

確かに１０８部隊は密輸捜査を専門としている部分はあるが、他にもっと適任な部隊ならいくつでもあるだろうに。わざわざ八神部隊長が頼みにくるもんか？

それこそ本局の方に頼めば、密輸ルートの捜査なんていくらでも出来ると思うんだが。

『一応本局の捜査員にも依頼してはいるらしいが、まぁそこは大人の事情ってヤツだ。そんでな、捜査主任がテスタロッサの嬢ちゃんらしいから、その補佐としてお前らにも捜査に参加してもらう。ちょうど同じ職場なんだし、その方が効率もいいだろう』

「なるほど……うん、わかったよ。お父さん」

「俺も了解です。で、具体的な資料とかは？」

『後でメールにして送っとく。ちゃんと目ぇ通しとけよ、特にハヤト』

「名指しはひでぇッスよ、ゲンヤさん。ちゃんと読んでおきますから、大丈夫ですって」

『おめぇの読んでおくっつーのは、ホントに軽く目を通すだけだろうが。

ギンガ、ちゃんとハヤトに資料を読ませておけよ』

「はーい」

ぐぬぬ、おのれゲンヤさん。こっちの行動を見越してギンガに監視役を任せるとは。

というか失敬な。俺だって資料くらいちゃんと読むわいっ！

「いや、ハヤト君の“読む”と私達の“読む”は認識が微妙に違うんだよ」

「はぁ？　どういう事だよ？」

「後で教えるね……それよりお父さん、連絡はそれだけ？」

『ああ。今回はそれだけだ、じゃあしっかり頼むぞ。

お前らはウチからの出向なんだから、ハラオウンの嬢ちゃんをフォローしてやんな』

「「了解」」

最後にお互いに敬礼を交わし、ゲンヤさんが通信を切る……と思いきや、何故か俺とギンガの顔を見比べてニヤニヤとからかうような笑みを浮かべている。

「まだ何か用事ッスか、ゲンヤさん？」

『いや何、相変わらず仲が良いなと思ってな。早いトコ結婚しちまえよおめぇら』

「はいはい」

「お父さん、変なこと言ってないでちゃんと仕事してね？」

『ちぇっ、なんでぇなんでぇ、少しは慌てるとかしろよ。可愛くねぇなぁ』

ゲンヤさんの相変わらずな言葉に溜息を吐きつつ、俺とギンガはそれぞれの席に戻る。

この人はどうして俺とギンガをくっ付けたがるのやら。どうせなら、年上の綺麗なお姉さんを紹介してくれた方がいいってのに。

『ま、いいさ。どの道結果はわかってるしな。それじゃあハヤト、今度休みを教えろよ。久しぶりに相手してもらうからな』

「りょーかいです。せいぜい負けないように、練習しときますよ」

『楽しみにしてるぜ。それじゃあな』

弾んだ声を残して、ゲンヤさんからの通信が終わる。

……久しぶりの捜査任務か、不謹慎だとは思うけど、なんかワクワクすんなぁ。

六課に来てからは、あんまそういう任務は無かったから、余計にそう思う。大概がハラオウン執務官とギンガでやっちまうモンだから、俺自身は資料整理とか証拠の裏づけとかばっかりやってたし。

うぅ、これでようやくティアナやスバルに、俺様の偉大さをこれでもかと思い知らせる事が出来る。

「ハヤト君、そんな不純な動機でやる気出さないでよ」

「別にいーじゃん、やる気出るならどっちでも」

「よくありません。ちゃんとした任務なのに、そんなことでどうするの」

「わーったわーった。キチンと仕事させてもらいますよ。お前に説教された日にゃ、それだけで日が暮れちまうからな」

「どーゆー意味!?」

「そーゆー意味」

ギンガをからかいながら、とりあえず手元の書類に視線を戻して思考を巡らす。

おそらく密輸ルートの捜査をするのは、それを通じてロストロギアなどが取引されているという証拠、ないしはそれに順ずる何かがあったのだろう。

そのロストロギアが何かと聞かれれば、恐らくはレリック。

地上部隊のこっちに頼むってことは、地上のルートで密輸が行われているという事だろうか。

やれやれ、密輸業者も少しは品を選べよ。
レリックとか危険度も高いんだし、下手に暴走したら自分達も吹っ飛ぶ危険性があるってのにな。
まぁ、だからこそ報酬もバカ高くなって、やる気出すのかも知れんが。

「やれやれ、面倒な事にならねーといいけどなぁ」

「ちょっとハヤト君！　さっきのはどーゆー意味なの！？」

「いーから仕事しろよ。後で怒られんぞ？」

「うぅ、そ、それはそうだけど……な、納得いかないっ！」

ぷんぷんと頬を膨らませつつ、ギンガも書類に視線を戻した。
こういう時、本当に真面目っ子は使いやすいと思う俺なのである。
さて、とりあえず今は目の前の仕事を片付けるとしますか。確か、近日中に出動があるってハラオウン執務官が言っていたしな。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ１８話　『ホテル・アグスタ　その１』

それから数日後、俺とギンガを含めた機動六課ＦＷ６名と、高町一尉、ハラオウン執務官、八神部隊長とリインフォース曹長、シャマル先生……つまりは六課の持てる全戦力に近いメンバーは、グランセニック陸曹の操縦するヘリに乗り込み、とある場所を目指していた。

「さて、もうすぐ現場のホテル・アグスタに着くんやけど……その前に、今までの流れと今回の任務のおさらいを軽くしておこか」

ヘリの座席に座る俺達を一望出来る場所で、部隊長が空中にモニタを開く。

モニタには俺とギンガはある意味よく見知った顔――紫色の髪と、切れ長の金の瞳を持った成年男性の顔写真が映っていた。

「これまで謎やったガジェットドローンの制作者、及びレリックの収集者は、現状ではこの男――違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者、ジェイル＝スカリエッティの線を中心に捜査を進める」

そう、俺やギンガがコイツの顔を知っているのは、広域指名手配半として顔写真を頭の中に叩き込まされたからなのだ。というか、管理局で働いている人間の大半は、コイツの顔を知っているだろう。

色々と悪さをしているくせに、未だに尻尾すら掴ませないその手腕は、犯罪者ながら凄いの一言だ。

まぁ、そこに痺れもしねーし憧れもしねーけどさ。

「こっちの捜査は、レリックの捜索と合わせて私とギンガ、ハヤトの3人でやっていくつもりだけど、一応みんなも頭の隅に入れておいてね」

「「「「はいっ！」」」」

今ハラオウン執務官が言った通り、ジェイル＝スカリエッティの捜査には俺とギンガの2人も補佐として参加することになっている。

やれやれ、密輸ルートの捜査やら手配犯の捜査やらレリックの捜索やら、最近はなんとも忙しくて困りますなぁ……俺はのんびりまったりが心情だってのに。

「で、次に今回の任務の説明や。今回私らが警備するのはここ、ホテル・アグスタ」

部隊長の言葉と共に、映っていた映像が眺めの良さそうなホテルに切り替わった。

テレビのCMとかで良く見かける映像だが、こうやって見ると何か違う雰囲気がある。

「骨董美術品オークションの会場警備と、人員警備。それが今回のお仕事ね」

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高

い、ということで私達が呼ばれたです」

「この手の大型取引だと、密輸の隠れ蓑になったりもするし、油断は禁物だよ」

高町一尉、リインフォース曹長、ハラオウン執務官の順に説明が続き、俺達はそれを聞いて頭の中で情報を取捨選択していく。

その間にも説明は続き、現場には昨夜からシグナム二尉、ヴィータ三尉の2人を始めとした局の魔導師が何人か詰めているということが説明された。

「私とフェイトちゃん、はやてちゃん、それからハヤト君とギンガの5人は中の警備に回るから、皆は副隊長達の指示に従って外の警備をお願いね」

「俺とギンガもですか？　それだと、外の方に手が足りないんじゃ？」

「それはそうなんだけどね。今回警備任務に借り出されたのは六課だけで、基本的に人員不足なの。

中の警備だけなら私達3人で十分なんだけど、流石に避難誘導までは手が回らなくて……だから、ハヤト君とギンガの2人にはそっちをお願いしたいんだ」

「避難誘導が早く終われば、私達も外の方へいけるしね」

「それに、外には副隊長たちが居てくれるから、戦力不足ってことは無いと思うし」

「ああ、なるほど」

言われてみれば、シグナム二尉もヴィータ三尉も一騎当千の実力者。

ガジェット程度なら、余程の数じゃない限りこの2人だけで十分だろ。ザフィーラは……戦力の程はよく分からんが、高町一尉たちがこう言うんだから凄い筈だし。

俺は部隊長たちの説明に腕を組み、1人うんうんを頷いて納得した。

惜しむらくは、何かあった時に外でシグナム二尉の戦闘を見れないことだろうか。あの素晴らしいおっぱいが揺れる様を見れないとは……じゃなくて、シグナム二尉の戦いは色々と参考になりそうなのに。

「あの、シャマル先生」

「なぁに？」

「さっきから気になってたんですけど、その箱って何ですか？」

説明がひと段落したところで、キャロがシャマル先生の座っている座席の下を指差した。

キャロの仕草につられて俺もそこを見ると、そこには衣装ケースが5個並べられている。何だろうか、5個という部分にとてつもない不安を感じる俺がいますよ？

「ああコレ？　うふふ、これはね……」

俺の感じる不安を他所に、シャマル先生はとても素晴らしい笑みを浮かべて視線を上げる。

そしてその可憐な口を開いて、こんなことを仰るのだった。

「隊長達とギンガ、それからハヤト君のお仕事着」

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「あはははははははっっっっっ！！」

六課の前線メンバーがホテル・アグスタに到着してから、３０分ほど経過した後。

警備開始まではまだまだ時間があるので、先に隊長達が着替えを済ませてから配置などを指示するからと、スバル達ＦＷメンバーは

警備員の待機所で待機していた。
そしてハヤトが一番最初に戻ってきたのだが、その数分後、待機所にスバルの大きな笑い声が響いた。

「あはははは！　あはははははははっ！！」

「ちょっ、スバル笑いすぎ……め、迷惑でしょ……ぷふっ」

お腹を抱えて笑うスバルをティアナが注意するものの、彼女も笑いを必死に堪えているのだから全く説得力というモノが無い。
ちなみにエリオとキャロのチビッ子コンビは、必死に『それ』から視線を逸らして肩を震わせている。
シャマルはニコニコと笑って「やっぱり私の見立てに間違いは無かったわね」とドヤ顔をし、ザフィーラは背を向けていた。まぁ、身体がフルフルと震えている時点で、どういう状況かは推して知るべしというところだろう。

「モノを食べるときはね、誰にも邪魔されず、自由で……。
なんというか、救われてなきゃあダメなんだ。独りで、静かで、豊かで……」

全力で笑い転げる妹分に対し、現状の原因となっている人物――ハヤトはどこか遠い目でそんなことをのたもうた。
彼は今、普段着ている六課の制服ではなく、黒いスーツを着ている。更に普段はボサボサになっている髪はワックスで綺麗に纏められ、何故か伊達眼鏡までかけていた。

格好だけを見れば、仕事の出来るエリートビジネスマンと言われても違和感が無い。
しかし、だがしかし――。

「あはは……はぁ～～……ハ、ハヤ兄、やめっ、そのカッコで変な事言わないで～！
ぶふぃっ……あはっ、あはははっっっっ！　お、お腹痛い～っっ！」

「そんな装備で大丈夫か？　大丈夫だ、問題ない」

「にゃはははっっ！　や、やめてハヤ兄ぃ！　わ、笑い死ぬぅぅぅっっ！！」

「焦るんじゃない、俺は腹が減っているだけなんだ」

確かに、見た目“は”かなりちゃんとしている。
普段の彼とは違い、『イケメン』に限りなく近い容姿になっているだろう。
けれど、そんな容姿からはかけ離れたアホな言動をハヤトが口走っているせいで、その外見とのギャップのせいで、スバルは大いに笑い転げていた。

「ス、スバル……笑っちゃ失礼だって言って――」

「このワザとらしいメロン味！」

「――ぶふぅっ！！」

今まで寸でのところで笑うのを我慢していたティアナだったが、キリッという効果音が聞こえてきそうな程に凛とした顔で呟かれたハヤトの言葉に、とうとう堪えきれず噴き出してしまった。

ティアナが笑うと、連鎖するようにエリオとキャロもクスクスと笑い出す。

ハヤト自身も別にそれで気を悪くするでもなく、むしろ余計に笑わせようとアレコレ言葉を口にする。

「2度もぶった！　親父にもぶたれたことないのにーっ！」

「ハ、ハヤトさんやめてくださ……くっ、あははっ！」

「まだだ！　まだ終わらんよ！」

「ひはっ、ひはっ……あはははっ！　ハヤ兄さいっこーっ！！」

「あえて言おう！　カスであると！！」

右手を握り締め、どこかで聞いたことのある台詞を語るハヤト。

そんな彼の台詞にスバル達は笑い転げ、目には涙さえ浮かんでいる。シャマルは別に笑っておらず、自分のコーディネートにご満悦で、ザフィーラはもはや隠しきれないぐらいに身体全体を震わせている。

「見える……私にも敵が見えるぞ！」

「にひゃはははははっっ！　似合わないっ！　すっごく似合わない！！」

「ハヤトさ……やめ、やめてくださ……はひっ、あはっ……息、くるし……あははっ！」

「俺はなぁ！　スペシャルで！　２０００回でぇ！　模擬戦なんだよぉ～っ！！」

「「「「あはははははっっ！！」」」」

ハヤトの言葉にスバル達が大爆笑しているところへ、この場に居なかった４人の女性達――なのは、フェイト、はやて、ギンガが少し遅れてやってきた。

「どうしたの皆？　なんだか、凄く楽しそうだけど」

「あ、ハヤトも着替え終わったんだ」

「お～、その格好やと随分かっこええよ。ハヤト君」

「えっと……何だか、凄いことになってませんか？」

４人もまた、着ているのは六課の制服ではない。

ハヤトがスーツ姿の時点である程度予測はつくだろうが、なのは

達もまた、ホテル・アグスタでのオークション会場に相応しい礼服――つまりはドレス姿になっているのだ。

なのはとはやての2人は、それぞれ桃色と白を基調とした肩紐のあるタイプの、スレンダーラインというロングドレスを。

フェイトは黒で統一された、やや胸元の開いた、裾が斜めになっているのが特徴のショートラインと呼ばれる種類のドレス。

そしてギンガは、裾の部分がゆったりと広がるマーメイドラインという種類で、フェイトと同じく肩紐が無く、やや胸元が開いたデザインの青いドレスを着ていた。

4人ともが違うデザインではあるが、それぞれが各人の魅力を十二分に引き立てている。更に4人とも薄くではあるが化粧をしているので、より大人っぽさが引き立ち、魅力を倍増させているのだ。

恐らく、彼女達がこのまま街を歩けば、十中八九ナンパされることだろう。

「あら、なのはちゃんたちも凄く似合ってるわね。

ふふっ、やっぱりシャマル先生の見立てに狂いは無かったわ！」

そんな4人を見て、シャマルはまた満足そうにうんうんと大きく頷く。

しかし彼女以外はハヤトのせいで未だに笑い続けており、とても4人の美貌に見とれるだけの余裕は無さそうだ。変わりに、スバル達を笑わせていたハヤトがそちらを振り返り、小さく「おお」と感嘆の溜息を漏らしてから、にこやかに笑って感想を述べる。

「よくお似合いですよ、高町一尉、ハラオウン執務官、八神部隊長」

「あ、ありがとうハヤト君」

「なんか、ちょっと恥ずかしいな……」

「あんがとなハヤト君」

感想を聞いて、なのはとフェイト、はやての3人が嬉しそうに微笑む。

社交辞令のようなものとわかってはいても、誉められれば悪い気はしないのが人情だ。

「あの、ハヤト君？」

そこで、一緒に居たのに触れて貰えなかったギンガが、やや短めのドレスの裾を気にしながら、恥ずかしそうにハヤトに声をかけた。

なにぶんギンガとしても初めてのドレス姿なので、色々と落ち着かないらしい。

「わ、私はどうかな？　変じゃない？」

「……ふむ」

「え？　え？　に、似合ってないかな？」

「いや、まぁ結構似合ってるぞ。馬子にも衣装だな」

「なにそれ誉めてるの！？」

「誉めてる誉めてる。可愛いぞギンガ」

「そ、そっか。ありがと」

実際にはギンガも十分以上に綺麗なのだが、そこは幼馴染ゆえの慣れというものなのか、ハヤトはギンガのドレス姿を見ても、それ程心動かされたりはしないらしい。

ハヤトはギンガをからかいつつ、その視線はドレス姿のなのは達から動かないまま。

どうやら今のうちに、普段は見れない3人の艶姿をしっかり目に焼き付けておこうという算段らしい。

「高町一尉と八神部隊長の清楚な感じもいいですけど、ハラオウン執務官の大胆な感じのデザインもいいですね。

なんていうか、大人の女性って感じです」

「そんなに言わないでよ、な、何か恥ずかしい……」

「そうですか？　凄く似合ってますから、もっと自信持っていいと思いますけど」

「はぅぅ……なんか、ハヤトがいつもと違うよぅ」

「格好とあいまってホストみたいやね」

「失敬な」

恥ずかしそうに笑うはやての感想に憮然とした表情をするハヤト。
そんな彼に、ギンガが再び声をかけた。

「ねぇねぇハヤト君。私はどんな感じかな？」

「お前はまだまだ服に着られてる感じだなぁ……もっと精進せよ！」

「くっ、悔しいけど何だか微妙に言い返せない！！」

悔しげに呟くギンガに笑いながら、ハヤトは気を取り直すように伊達眼鏡を持ち上げる。
意外とサマになっているので、なのは達が少しだけときめいたのは内緒だ。

「それでは着替えも終わったみたいですし、それぞれの持ち場に移動ですかね？
それとも、もう少しここで待機ですか？　時間的にはまだかなり余裕がありますけど」

「せやね……うん、時間にはまだ早いけど、先に持ち場に移動しとこか。
ハヤト君とギンガは、出入り口とロビーの警備。私となのは隊長、フェイト隊長の3人はオークション会場の中と外の警備。スバル達

はホテルの表側をお願いや。
　何か質問しておきたいことは……っていうか、スバル達はそれどこや無いみたいやね」

「す、すみませ……はひっ、わ、笑いすぎて息が……はひっ」

「頭が、クラクラします～……」

「げほっ……き、気持ち悪い……」

　真面目な顔ではやてが配置などを説明するのだが、ついさっきまで笑いまくっていたスバル達はまだ落ち着いておらず、それぞれが何とか息を整えているところだった。
　スバルに至っては未だに思い出し笑いを繰り返し、呼吸困難に陥っていたりする。

「もー、ハヤト君のせいやで？」

「すいません。でも、何かこう……笑って貰えるなら一生懸命ボケないといけない気がして。
　そういうのってありませんか、部隊長？」

「その気持ちは痛いほどわかるけどなぁ」

「「わかっちゃうの！？」」

　ハヤトの言葉にうんうんと頷くはやてに、なのはとフェイトが声

をそろえてツッコむ。
けれど、ハヤトもはやてもそれをスルーして会話を続ける。

「でも、ちゃんと後の事を考えて笑かさな、お笑いとしては二流やで」

「申し訳ねーです、師匠」

「お客さんに気持ちよく笑ってもらう。これが一流ってモンや！」

「流石です！　流石でございます師匠！！」

「もっと誉めてくれてええんやでー！」

「「何かお説教の論点がズレてる！」」

「「ナイスツッコミ！」」

「「ツッコミじゃなーいっ！！」」

そんなこんなで、はやてとハヤトのボケもあり、結局六課のメンバーがちゃんと配置についたのは、それから5分ほど経ってから。
当然ながら、原因となったハヤトとはやての2人は、「ふざけすぎだ」と揃ってフェイトとなのは、そしてギンガの3人に5分間たっぷりお説教を受け、ハヤトはギンガに、はやてはフェイト達に引きずられるようにして持ち場に向かったのだった。
スバル達は5分が経ってもまだ微妙に息が整っていないものの、何とかホテル表側外周へと向かう。

こうして緊張感をどこかに置き忘れつつ、ホテル・アグスタでの警備任務は開始したのである。

ex18話　『ホテル・アグスタ　その1』（後書き）

ホテル・アグスタ編、まずは警備開始前まで。
どうも、ラモンです。

今回はハヤト、ギンガが内部警備ということで、ドレスの描写とか色々やってみました。
ギン姉のドレスは、フェイトのドレスを全体的に青くした感じだと想像してくだされば分かりやすいかと。
しかしドレスって意外と種類あるんですね。描写する上で、資料にしようとググってみたら、かなり種類があってビックリしました。

そして、ハヤトはスーツが似合うという事にしました。似合わないかなと思ったんですが、まぁホラ、一応主人公ですし（笑）
似合っていても、言動で色々と台無しなんですけどね。

さて。次回はいよいよホテル・アグスタ編で一番盛り上がる、ガジェット襲撃の場面を書く予定です。
失敗フラグをへし折ったティアナやスバル達に活躍させたいなーと思っていたりしますが、どうなるかは私にも分かりません（汗）
あんまりつまらない展開にはしたくないと思いますが、期待はずれでも怒っちゃイヤです（えー）

それではまた、次の話で。

ex19話　『ホテル・アグスタ　その2』

様々なドレスやスーツを着た人たちが歩いているロビーを見回しながら、特に変わったことがないかと注意を払いつつ歩く。しかし、どうにもスーツってのは歩きにくい。

いつも着てる制服も、言ってしまえばスーツなんだが、こういう礼服とは違うからな。

しかも伊達眼鏡とか普段かけたことの無い物をかけてるせいで、鼻のあたりがムズムズして仕方ない。

「くそっ、誰だよ伊達眼鏡かけるとか言った奴！」

「ハヤト君でしょ。てゆーか、そんなに邪魔なら外せばいいのに」

「いやーでもよ、コレかけてると何か知能指数が上がった気がするんだ」

「気のせい気のせい。ハヤト君はいつも通りで十分だから」

「それはつまり、普段から俺は理知的でクールキャラ売りのイケメンだということか？」

「寝言は寝てる時に言うものなんだよ？　ハヤト君」

ギンガの野郎、サラッと酷いことを言いやがる。

しかし今は仕事中なので、ここでムキになって言い返す訳にもいかない。何せ警備任務だと気づかれないように、わざわざこんな変

装までしてるんだ。
　下手に騒いで注目を浴びたりしたら、後で部隊長に怒られるのが目に見えてるし。

「まぁそれはともかく、やっぱそこそこの規模のオークションだけあって、警備は厳重だな」

「そうだね。来ている人達が各企業の重役さん達ばかりだし、当たり前といえば当たり前だけど」

　確かに、言われてみれば当たり前なのだ。
　企業の重役ともなれば、こういうのに参加する時はお抱えのＳＰを連れてくるのが当たり前。そして、そういう人に雇われているＳＰってのは、基本的にかなり優秀だったりする。
　中には、対魔導師の訓練を受けていたりする人もいるらしいしな。

「入り口には厳重なシャッターもあるし、外は副隊長達とスバル達が固めてる。
　こりゃ、よっぽどの事が無い限り、俺たちの出番は無いだろうな」

「うん。スバル達も随分と頼もしくなってきたし……まぁ、何も無いのが一番だけどね」

「そりゃそうだ」

　肩を竦めながら、辺りを注視しつつロビーを歩く。

何かが起きる可能性は低いだろうし、何かが起きないのが一番だとは思う。
けれど、いくら低くとも可能性が０じゃないのなら、楽観視するわけにはいかない。下手に楽観視して失敗するなんてのは、愚の骨頂だ。それは１０８に居た時、ゲンヤさんから耳にタコが出来るほど聞かされている。

「とりあえず、何があっても動けるようにだけはしておこうぜ」

「うん、私達が迅速に避難誘導できれば、それだけスバル達の負担も減るもんね」

「そーゆー事だ。ま、お前は慣れないドレスなんだし、無茶はすんなよ？」

ギンガにそう軽く釘を刺しておく。
何せコイツの事だ、いざ何かが起きた時に「動くのに邪魔！」とか言って、今着ているドレスの裾を思いっきり破りそうだし。
シャマル先生が言ってたが、これはレンタルのドレスな上に結構な値段がするらしいから、絶対に破らせないようにしないとな。弁償だけで俺達の給料１年分とかになったら死ねる。

「うー、失礼だよハヤト君」

「ははっ、悪ぃ悪ぃ」

ドレス姿で化粧もしてるってのに、頬を膨らませるギンガは随分と子供っぽく見えて苦笑した。
と、そこでふとある事に気付き、俺はギンガの頭の後ろに手を伸ばす。

「コレ、ドレスの時ぐらい取れば良かったのに」

「え？　あ、リボンの事？」

「そーそー」

伸ばした手で触れたのは、ギンガの後頭部で揺れている青いリボン。
こいつのトレードマークとも言えるそれは、ガキの頃からつけてるせいで少し色あせ、ドレスと微妙に合っていない。それにやはりデザインが子供っぽいので、そのせいで全体的なバランスが悪くなっている気がする。
リボンを外せばかなり大人っぽくなって、もうちょいドレスに合うと思うんだが。

「そうかも知れないけど……ね」

「けど、何だよ？」

足を止め、リボンを触る俺の手の上から同じようにリボンを触りつつ、ギンガが苦笑した。

「コレは、私の宝物だから」

「……あっそ」

「うん。世界一大事な、私の宝物だよ」

「あーはいはいそうですか。わかったから、もういいって……」

嬉しそうに呟くギンガに、俺は何も言い返せなくなってしまう。
なにせそのリボンは、俺が子供の時にコイツの誕生日プレゼントとして贈った物で、しかもそれ自体は１０年近く前の話になる。それをここまで大事にされれば、そりゃ悪い気はしないだろうさ。
まぁ、それ以上に恥ずかしいってのもあるけど。
そんな嬉しそうな顔で「宝物」とか言うなっつーの。馬鹿か。

「えへへ、何だか照れるね。自分で言っておいてアレだけど」

「……まったくだぜ。言われた方の身にもなれっつの、恥ずかしくて死にそうだ」

「ごめんね、今のは聞かなかったって事でひとつ」

「そうした方がお互いの為だぁな。りょーかいりょーかい」

「ありがとハヤト君」

「うっせーよバァカ」

熱くなった顔をパタパタと手で仰ぎながら、俺は歩く速度を上げる。

後ろからギンガの「待ってよー」という声が聞こえるが、ぜってー待ってやらん。

くそ、ぜってー見慣れないドレスのせいだ、一時の気の迷いだ、嘘だと言ってよバーニィ！！

……この俺様が、ギンガ相手にときめくとかマジ不覚。

そんな風に思って溜息を吐いた、その時――

『来ましたっ！ガジェットドローン陸戦？型、機影３０，３５……』

『陸戦？型、機影２，３，４！』

「「！」」

ロビーを歩いていた俺達の耳に、ロングアーチからの緊急通信が届いた。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｅｘ１９話　『ホテル・アグスタ　その２』

side：―

「うわぁ……副隊長達とザフィーラ、すっごーい！」

ロングアーチから緊急の通信が届いた数分後。
スバルとティアナの2人は、いざという時の集合場所としていた、ホテル・アグスタ正面入り口付近に集まり、シャマルから直接戦況モニタを繋いだクロスミラージュを使い、ガジェットが襲撃してきた森の中を映している映像を見つめていた。
やや小さめのモニタの中では、シグナム、ヴィータ、ザフィーラの3人がガジェットを相手に、一騎当千の一方的な戦いを繰り広げている。
スバルが思わず感嘆の声を漏らしてしまうのも、仕方のない事だろう。

「これで能力リミッター付きなのよね……まったく、羨ましいわ」

目を輝かせるスバルの隣で、ティアナが苦笑しながら溜息を吐く。
けれど、その目はキチンとモニタに映る戦況を見ており、直ぐに動けるようにと僅かな戦況の変化も見逃さぬよう、鋭く光っている。

「この調子だと、副隊長たちだけで全部終わっちゃうかな？」

「そうね。ガジェット程度なら、戦力的にはお釣りがくるくらいだし」

「そっかぁ。じゃあ、あたし達はちょっと楽できるかもだ！」

「あのね……ハヤトさんじゃないんだから、そんな事思っても口に出さないの」

「あいたっ」

ホクホクした顔でハヤトのような事を言うスバルの額を軽く小突いてから、ティアナはもう一度モニタに視線を戻す。

モニタの中ではシグナム達が次々とガジェットを蹴散らしていく。

蹴散らす速度と、レーダーに映っているガジェットを示す赤い光点とを見比べれば、おそらくそれほど時間を要さずにガジェットは全滅できるだろう。

「アレが陽動って可能性もあるんだから、オークションが終わるまで気は抜かないこと。いい？」

「ふぁ～い。ティアは真面目だなぁ」

「アンタが楽観的すぎなのよ」

「え～？　そんなことないと思うけど」

ティアナに言われてスバルが口を尖らせたのと同時に、モニタから警報が鳴り響く。

『ケリュケイオンに反応っ！　誰かが召喚魔法を使ってます！』

『クラールヴィントにも反応。でも、この魔力反応は――』

『大きい、何コレ！？』

警報と平行して、キャロ、シャマル、シャーリーの声が通信を通して前線メンバーの耳に入る。

シャーリーの言葉通り、モニタに映る魔力反応の数値は大きく、最低でもＡランク以上の魔力が放出されていた。

『ティアナ、スバル！　エリオ君たちと合流して、防衛ラインをお願い！』

「「了解！」」

シャマルの指示とほぼ同時に、ティアナとスバルは駆け出していた。

エリオ達が居るのは２人が居た場所の直ぐ近く、合流自体は１分もかからずに行える。

（魔力反応は召喚系のモノ。ということは、相手に召喚士が居るっ

てことよね）

移動しながら、ティアナが状況を整理するように1人考えた。
召喚魔法を使える魔法使いは、同時に転送魔法のエキスパートでもある。
という事は、恐らく自分達の居る防衛ラインの間近に敵が現れる可能性も決して低くないのだ。建物の中まで転送できるかは分からないが、内部には隊長達3人が居るから問題は無い。
ハヤトとギンガの2人は、恐らく既に避難誘導を始めているだろうから、中に直接されてもそれほど問題は無いはずだ。しかしそれでも、自分達の防衛ラインが割られていい筈がない訳で。

（それくらい出来るって思われてる……そういう事よね）

ハッキリと言われた訳ではないが、そういう事なのだろうとティアナは考える。
もちろんシグナム達の手助けはあるだろう。けれど、自分達にもそれなりの期待はされているのだとティアナは考え、心地良い緊張感が身を包む。

「……よし」

気合を入れるように、誰にも聞こえない小さな声で呟いて自分の頬を叩く。
すると、それを合図としたように彼女だけに通信が入った。

『よう、ティアナ』

「ひゃっ!?　ハ、ハヤトさん?」

『召喚魔法の反応があったって聞いたけど、今んとこは大丈夫か?』

「あ、はい。というか、今はまだエリオ達と合流する為に移動中ですけど」

『そうか。召喚士が居るってことは、恐らく転送魔法も使ってくるだろ。
防衛ラインにいきなり転送してくる可能性もあるから、ちゃんと気をつけてろよ?
何かあったら防御に徹しろ、そうすりゃすぐに、副隊長達がフォローに来てくれるだろうからな。間違っても、変に攻め気を出して怪我なんかするんじゃねーぞ』

口調こそぶっきらぼうではあるが、話す内容はどれもティアナ達を心配するもの。
ハヤトらしいと言えばハヤトらしいその言葉に、走りながらティアナは思わず笑ってしまった。

「大丈夫です。こっちはちゃんとあたしが指揮しますから。
ハヤトさんこそ、変なことしてギンガさんに迷惑かけないでくださいよね」

『うっせー。ガキは余計な心配してねーで、自分のことだけちゃんとしてやがれ』

「ハヤトさんとあたしは、1つしか違いませんけど？」

『はっ、1つ違えば十分にガキだっつの』

楽しげな笑いを漏らした後、ハヤトはそのままの声で続ける。

『スバル達をよろしくな。頼りにしてるぜ、リーダー』

「……っ、はい！　任せてください！」

通信で届いた彼の言葉に、ティアナが嬉しそうに頷く。
それと同時にハヤトからの通信は切れ、ティアナとスバルの2人がエリオとキャロの待つ場所へと辿り着いた。

「はぁっ……エリオ、キャロ、何か動きは？」

全速力で走ってきたせいで少し乱れた息を整え、ティアナが尋ねる。
けれど、キャロがそれに答えるよりも早く、バリアジャケット姿のキャロが両手に着けているグローブ型のデバイス――ケリュケイオンの中心に輝く桃色の宝石が光った。

「遠隔召喚、来ます！」

「ったく、少しくらい休ませて欲しいわよね」

「ホントだよ～」

「ティアナさん、スバルさん、そんな事言ってる場合じゃないですよ」

自分達の目の前にある地面に浮かぶ、紫に光る４つの魔方陣。

それを見つめて愚痴を呟くティアナとスバルに、エリオが苦笑しながら槍型をした自分のデバイス、ストラーダを構えてそちらを見つめる。

そして、４人が見つめる前でその魔方陣から、縦長の楕円形をした１０体のガジェット?型と、球型のガジェット?型が１機現れ、辺りに展開していく。

「そうね、愚痴言ってても仕方ないわ。さて、それじゃあ全員準備はいい！？」

「「「了解っ！」」」

「慌てず急がず確実に！　迎撃、行くわよ！」

気合のかけ声と共に、ティアナは開戦の合図とばかりに目の前に展開したガジェットに照準を定め、自分の相棒であるクロスミラー

ジュの引き金を引いた。

◇◇◇◇◇

「っし、あとはこっちの避難誘導が終われば……」

そう言いながら、ハヤトは自分とギンガ、そして元々配置されていた警備員以外に人気の無くなったロビーをぐるっと見渡した。さっきまでロビーに溢れていた客達は、ハヤト達の誘導で全員がオークション会場内……つまり、なのは達が守る場所へと避難が完了している。

ハヤトの隣では、ドレス姿のギンガが警備員達と避難仕送れた人達が居ないかどうかを確認し合い、全員避難が完了したのを確認してから、ハヤトへと報告した。

「ハヤト君、確認完了だよ。招待客の人達は、全員オークション会場内に居るって」

「了解。悪いなギンガ、確認作業やってもらって」

「いえいえ、どういたしまして。それよりティアナ達は？　ケガとかしてなかった？」

「まだ敵とエンゲージもしてなかったっつーの。お前は心配しすぎ

だよ。
あいつらだってガキじゃねぇんだ、俺達がいなくなってちゃんとやれるさ」

「そ、それはそうかも知れないけど……ハヤト君は心配じゃないのっ！？」

「べっつにー」

落ち着かないのか、ギンガはドレス姿のまま両手を握って、ティアナ達がいる方向に視線を向けてうーうー唸っている。心配だというのは分かるのだが、流石に心配しすぎだろうとハヤトは笑う。
少し前に自分も通信で同じな事を言っていたのは、どうやら忘却の彼方らしい。

「あのなぁ、外に居るのはシグナム副隊長とヴィータ副隊長が居んだぞ？
2人は俺達なんかよりも遥かに経験豊富な人だ。ティアナ達のフォローも、俺達よりよっぽど上手くやってくれるさ。下手に心配して気ぃ逸らしてないで、今は目の前の仕事に集中しろ」

「だ、だけど、やっぱり私かハヤト君も合流したほうが……」

「職場放棄してんじゃねーよ」

いつもは抑える側である自分がギンガを諫めている現状に苦笑しつつ、ハヤトは彼女の肩を叩く。

「大丈夫だって。ティアナは元々俺やお前よりも指揮が上手いし、戦闘だって六課に来てからかなり良くなってる。スバルもエリオもキャロも、最近は随分と頼もしくなってきてるじゃねぇか。
それは、一緒に訓練してお前も十二分に分かってるだろ？」

「でも、でもねハヤト君……」

「いい加減にしろって。しつこいのは嫌われるぞ」

「うー……わかった」

そこまで言われて、ようやくギンガは渋々という感じに頷いた。
彼女が頷くのを見て、ハヤトは「偉いぞ」とギンガの頭を撫でてから入り口の方――ティアナ達が戦っているであろう場所に視線を動かす。
緊急時用のシャッターが下りているそこからは、外の様子を見ることは出来ない。
けれどハヤトは特に心配している様子も無く、そちらを見たまま呟くのだった。

「スーツは窮屈で動きにくいんだ。さっさと終わらせてくれよ、ティアナ？」

◇◇◇◇◇

ティアナ達が戦っている場所に、2発の銃声が響く。
それはクロスミラージュが魔力弾を撃ちだした音。そして、撃ち出された魔力弾は、正確に彼女の前に居た2体のガジェット?型へと命中する。
しかし、その魔力弾はガジェット?型を破壊することは叶わず、AMFというシールドに阻まれ、その装甲の表面に皹を入れるだけしか出来ない。

「まったく、動きが早くなってるだけじゃなく装甲まで堅いとか、何の冗談よ!」

それを見たティアナは小さく舌打ちし、それでも直ぐに気を取り直してスバルとエリオに指示を出す。

「スバル、エリオ! 2人で両側から近づいて同時に攻撃!」

「「了解!」」

2人はその指示に従い、ティアナの目の前にいたガジェット?型に狙いを定め、その1体を挟み込むように横から高速で迫る。それを知覚したらしい?型は、信じがたい程に俊敏な動きで2人からの攻撃を回避しようとした。

「逃がすわけないでしょ！」

だが、それよりも早くティアナが放った魔力弾がガジェット?型に命中。

相変わらず破壊することは叶わないが、それでも命中した衝撃で?型の体勢を大きく崩すことには成功した。そして体勢を崩した?型は、スバルとエリオの攻撃を回避することは出来ず、両側から拳と槍による攻撃をモロに受けることになる。

両側から受けた衝撃はそのまま両側から中心に向けて伝わり、楕円を描くその中心で結びつき、爆発的な衝撃となって、?型の内部機構を破壊し内から弾けるようにガジェットを破壊した。

「これで6機！　キャロ、残りのガジェットは！?」

「えっと、右3時方向に2機、正面に1機、左7時の方角に?型が1機です！」

「防衛ラインに一番近いのは！?」

「右のガジェットです、次に近いのが左の?型！」

キャロの報告を聞き、ティアナは僅かな時間を思考についやしてから、ガジェットの進行を止めようと動くスバルとエリオに向けて、再び声を上げる。

「スバル、エリオ！　右3時の方向にいる2機をお願い！
今と同じように、2対1で攻撃すること！　あたしとキャロは？
型を抑えるから、そっちの2機を終わらせたらこっちと合流すること、いいわね！？」

「「おうっ！」」

指示を出し終え、ティアナはそのまま？型がいる方向へとキャロと一緒に走り出す。
そんな彼女の耳にシャマルからの通信が響く。

『防衛ライン、もう少し持ちこたえて！　ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから！』

「了解！　副隊長が来るまで、キッチリ守ります！」

『お願いね、ティアナ』

「はいっ！」

通信を終えると同時に、ティアナとキャロの2人は？型が防衛ラインに向けて動いている前に辿り着いた。2人の接近に気付いた？型は、移動を止めて自分に向かってきているティアナへと狙いを定め、その太いアームを振るう。

「キャロ！　ブーストよろしく！」

「わかりました！」

伸びてきたアームに狙いを定め、ティアナはキャロによって威力を強化した魔力弾を４発放つ。

撃ち出されたオレンジ色の弾丸は、まるで吸い込まれるようにティアナ目掛けて迫っていた２本のアームに２発ずつ命中。壊せはしないまでも、大きくその軌道を逸らした。

ティアナはそのまま？型の中心へと銃口を向け、今度は５回引き金を引く。

次々と撃ち出された弾丸は、正確無比に？型の中心――その同じ場所へと命中する。

しかし強化された魔力弾を同じ場所に５度ぶつけても、強化されたＡＭＦを貫いて？型を破壊するには至らず、球型をした？型の表面に大きな皹を入れることしか出来なかった。

「ホント嫌になるわね、どんだけ堅いのよアンタはっ！」

軽口を叩きながら、弾かれた後に軌道修正して再び迫ってきたアームを回避し、魔力弾を当てて弾き飛ばす。その合間にも同じ場所を狙って引き金を引くが、やはり効果は薄い。

「スバル、エリオ！　まだかかりそう！？」

『今そっちに向かってるよ！』

『あと少しで、そっちに合流できます！』

「急いでよね。やっぱりあたし1人じゃ大変だわ！」

スバル達と通信をして、ティアナがそう声を上げた瞬間。

「ティアさん、後ろっ！」

「えっ……きゃあぁっ！？」

通信で意識が僅かながらも逸れてしまっていたのが災いした。

ティアナは、彼女の死角から迫っていたアームに気付くのが遅れ、キャロの言葉で振り返った瞬間にアームの直撃を受けてしまう。

直撃を受けたティアナの身体は地面に叩きつけられ、受身を取れなかった彼女の肺から空気が押し出され、かすれた苦悶の声が漏れる。

「やば……！」

「ティアさんっ！！」

そのティアナ目掛け、？型は容赦なく彼女の体よりも太いアームを振り下ろす。

地面に倒れていたティアナはそれを避ける事が出来ず、思わず目

を瞑ってしまった。
けれど――

「うっしゃおらぁぁあああっっっっ！！」

アームがティアナに届くよりも早く、空から急降下してきたヴィータが、そんな咆哮と共に急降下の加速と体重とを乗せた鉄槌――グラーフアイゼンを、？型の真横から叩き付けた。
魔力により威力を増幅され、更にスピードと彼女の体重もプラスされたその威力は計り知れず、？型の大きな球型をしたボディは大きく歪み、それだけでは飽き足らずその巨体がまるでボールかと思える程に凄まじい距離を、アグスタとは逆方向に吹き飛ばす。

ベコリと凹んだ？型の巨体は、吹き飛ばされながら大きく火花を散らし、地面に落ちると同時に爆発。空気を揺らす爆音と、真っ赤な爆炎を巻き上げた。

「はっ」

爆風にスカートと三つ編みを靡かせながら、ヴィータはグラーフアイゼンを肩に担いで鼻を鳴らす。

「人んトコの新人に手ぇ出してんじゃねぇよ、ばぁ～か」

残骸となった？型にそう言葉を投げてから、彼女は地面に倒れているティアナに手を伸ばして尋ねる。

「立てるか？」

「え？　あ……は、はひっ！」

ヒーローの如く現れたヴィータに思わず見惚れてしまっていたティアナは、彼女の声で我に返り、慌ててヴィータの手を取って立ち上がった。

「ケガは？」

「し、してません。ありがとうございました！」

「おー。つーかお前はセンターなのに、前衛なしでこんなのの相手すんじゃねーよ馬鹿。
あたしが間に合ったから良かったけど、あと少し遅けりゃ怪我してたぞ」

「すみません……」

眉を寄せたヴィータの言葉に、ティアナが俯いて声を落とす。
そんな彼女に背を向けて、「けどよ」とヴィータは言葉を続けた。

「そこ以外は良い判断だったぜ。及第点はくれてやってもいい」

「……っ！」

「そんじゃスバル達と合流したら、残りのガジェットを片付けて終わらせんぞ。
ティアナ、キャロ、あたしの後ろは任せたからなっ！」

「「はい！」」

嬉しそうに頷くティアナと気合十分という顔のキャロを見てから、ヴィータは2人を引き連れて駆け出す。「こいつら、随分と頼もしくなったじゃねぇか」と、小さく笑いながら。

ｓｉｄｅ：―　了

ｅｘ１９話　『ホテル・アグスタ　その２』（後書き）

ヴィータがおいしいとこ全部持ってっちゃった……（´・ω・、）
どうも、ラモンです。

今回はフォワードＶＳガジェット戦と、ハヤギンの夫婦模様をお送りしましたリア充滅べ。
ちょっと駆け足になった気もしますが、失敗フラグをへし折ったティアナには、こんな感じで頑張って貰いました。
あの子は冷静だったら、このくらいは出来ると思うんですよね。
最後にちょっとピンチにしたのは、ヴィータを登場させる場面を用意するためだったりします（笑）
まぁ、流石にキャロの援護があっても、？型と１対１はティアナには辛いかなーと思ったっていうのもあります。射撃型だと、奴の相手は辛いと思うので。ハヤトだったら瞬殺ですねｗ

しかしヴィータは、こういうヒーローみたいな登場が似合いますね。
流石『リリなの』で１，２を争う漢らしさを持つ人ですなｗ

ギンガのリボンのくだりですが、公式で特につけている理由などが明言されていなかった……と思ったので、捏造してみました。アレって、回想とかでギンスバが保護された時からつけてるんですよねぇ。何か特別な理由があったりするのかしらん。
アニメとかｗｉｋｉを見た限りでは、リボンには特に言及してなかったと思うのですが……リボンについて、何か公式の情報がありましたら教えてくださいませ。修正いたします。

さて、次回はアグスタ編のラスト。後片付けの辺りを書きたいと思っています。

失敗もしてないんで、明るく楽しく終わらせたいところ。
ユーノ君もちょっと出てくる……かも？

それではまた、次の話で。

ex20話　『ホテル・アグスタ　その3』

「あー、マジで疲れた」

俺はネクタイを緩めながらそうぼやく。

現在の時刻は、ガジェットの襲撃があってから大体2時間後ぐらい。

少し前までは人の溢れていたホテル・アグスタのロビーには、今はもう警備員と俺達以外の姿は殆ど見えない。周辺の安全が確保されたからって、ついさっきまで全員が我先にとこぞって帰っていったんだから当然なんだけどな。

「ハヤト君。まだ他の人達もいるんだから、そんな風にだらしなくしちゃ駄目でしょ」

「ぐおっ！？」

しかし、緩めたネクタイはギンガによって強制的に締め直されてしまう。

いいじゃねぇか、もう殆ど人なんていないんだし、こういう礼服のネクタイって締め慣れてないから、マジで落ち着かねーんだよ。

「それでも、撤収って言われるまでが任務です。お父さんに何度も言われたでしょ？」

「うるっせーなー、もー」

「うるさくもなるよ。ハヤト君たら、何度言っても聞かないんだもん」

「聞かないんじゃない。聞く気が無いだけだ」

「なおさら悪いです」

「いてっ」

ちょっとふざけたら頭を殴られた。

なんという馬鹿力、これは頭蓋骨が凹んだかも知れんね。もしそうだったら大変だから、俺はこのままシャマル先生のところにいって個人的な治療をお願いしよう、そうしよう。

優しいシャマル先生なら、ギンガみたいな暴力女とは違って優しく治療をしてくれる筈だ。

「誰が暴力女よ！」

「お前だろお前、違うっつーならその振りかぶった拳を下ろすんだな」

「うっ……」

俺に指摘され、ギンガはすごすごと振り上げた右拳を振り下ろした。

ふっ、そんなだから暴力女なんてあだ名を付けられるんだ。呼んでるの俺だけだけど。
つーかドレス姿なんだから、もう少しお淑やかにしろっての。そうすりゃ結構マシに見えるから。

「と、とにかく。撤収の合図があるまではちゃんとすること、いい？」

「何か見返りは？」

「ありません」

「なら断る」

「でも、断ったらフェイトさんに叱ってもらいます」

「我々の業界ではご褒美です」

「うわぁ……」

胸を張ってそう答えたら、ギンガにドン引きされた。
何でドン引きするんだか訳がわからんね、あんな美人と2人っきりでお説教とか、ご褒美以外の何物でも無いなんてことは、この世界が始まる前からの絶対的な法則だとわかりきっているだろうに。

「……ごめん。流石の私も、それは引くよ」

「これだから浪漫のわからん女は」

「わからなくていいです。本気でわからなくていいです」

何故か敬語で答えつつ俺と距離を離すギンガ。

ちくしょう、ちょっと泣きたくなってきたじゃねぇか……とかやってたら、2階のオークション会場に続く階段から執務官の制服に着替えたハラオウン執務官と、深緑のスーツを着た男性とがこっちに向かって歩いてくるのが見えた。

男性の方に見覚えはないが、随分と親しそうだ。

2人の様子から察するに、多分ハラオウン執務官の友人なんだろう。

「ハヤト、ギンガ、お疲れ様」

「お疲れ様です、フェイトさん」

「お疲れ様ですハラオウン執務官。そちらの方は？」

気になったら即質問、これ基本ね。

すると、執務官は「ああ」と頷いてから、隣に立つ男性を紹介してくれた。

「こちらはユーノ＝スクライア先生。

時空管理局のデータベース、無限書庫の司書長で、古代遺跡の発掘や研究の第一人者」

「お、おだてすぎだよフェイト」

「そして私となのは、はやてとは同い年で、幼馴染なんだ」

「へぇ～」

ハラオウン執務官の説明に頷きつつ、スクライア司書長に視線を移す。

身長は俺と同じか、少し高いだろうか。司書長というだけあって、全体的に理知的な雰囲気があるな。眼鏡とかも俺の伊達眼鏡とは違って、『頭がいい人』専用みたいな感じで凄く似合っている。

しかもこれがかなりのイケメンなんですよ。ええ。

なるほど、高町一尉やハラオウン執務官、八神部隊長に浮いた話が無いのは、こんなイケメンが幼馴染だからなのかもしれないな。

「ユーノ、この2人は私が今追ってる事件の捜査を手伝ってくれてる――」

「ギンガ＝ナカジマ陸曹です」

「同じく、ハヤト＝ロックウェル陸曹です。初めまして、スクライア司書長」

「そんなに堅くならないで。気軽にユーノって呼んでくれて構わないし」

執務官に紹介されて挨拶をすると、スクライア司書長は苦笑しながらそう言ってくれた。人が出来てるなぁこの人。凄くいい人そうだ。俺が女だったら、間違いなくこの笑顔に惚れてるよ。

……ん？　待てよ？　無限書庫っつったら、確かかなり凄い場所だよな。

高町一尉たちの幼馴染って事は、恐らくそんなに年も変わらない筈。

それなのにそんな凄い地位に就いてるってことは、この人もかなりのエリートなんだなぁ。

「それじゃあ私とユーノは外に行ってくるから、2人は引き続きロビーの警備をお願いね。

残骸とかの調査が終わり次第、撤収ってことになると思うから」

「「了解です」」

「うん。じゃあ、また後で」

俺とギンガに指示を出して、ハラオウン執務官はスクライア司書長と共に正面入り口から、外に向かって楽しそうに喋りながら歩いて行った。

アレかね、もしかして2人は付き合ってるのか？

そんな風に邪推しながら、俺はこっそりと小さく溜息を吐く。

「いいなぁスクライア司書長は。あんなに綺麗にな幼馴染が3人もいるとか。

なのに俺の幼馴染は怪力のギンガと、食欲魔人のスバルだけとか……マジ世の中って不公平」

「ていっ！」

「いってぇっ！？」

「そうやって失礼な事ばっかり言ってるから、女の子にモテないんだよ」

「お前はそうやって殴ってばかりだから、未だに彼氏がいねーんだよ」

「余計なお世話！」

お前こそ余計なお世話だと思ったが、とりあえず反論はしないでおいた。

下手に反論したら、今よりも更に面倒な事になるのは目に見えてるからな。俺はギンガと違って賢い良い子なので、無駄なことはしないのだ。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｅｘ２０話　『ホテル・アグスタ　その３』

現場の調査が終わり、俺達に撤退の合図が出たのは日が傾き始めてからの事。
ロングアーチからの通信を受けて、俺とギンガはそれぞれスーツとドレスから六課の制服へと着替え、グランセニック陸曹が操縦するヘリが待機しているヘリポートへと向かう。
いやー、ようやく堅苦しいスーツから開放されたぜ。

「またそんな事言って……でも、確かに私も疲れちゃったかな。ドレスなんて、殆ど着たことなかったし」

「お前の場合、ただ単純に暴れられなくて不完全燃焼ってだけじゃね？」

「違うっってば。ハヤト君しつこい」

「しつこいも何も、普段のお前を見てれば誰でもそう思うだろ」

「そんなことありませんー！」

人の肩をボコスカ殴ってくるギンガを放置して、俺は歩みを進める。
そうすると、ヘリポートに向かう途中の通路でたむろってるティアナ達を見つけた。
全員結構疲れてるみたいで、椅子に座って見事にだらけてる。まぁ、外は結構大変だったみたいだし、俺とギンガが居なくて人数が少なかったってのもあるんだし、当たり前か。

「おつかれー」

「皆お疲れさま～」

「あ～、ハヤ兄、ギン姉」

「お疲れ様です、ハヤトさん、ギンガさん」

軽く手を挙げながら声をかけると、ティアナとスバルは椅子の背もたれに身体を預け、ぐてーっとしながら、何とかという感じでこっちに答える。エリオとキャロに至っては「あうー」と意味不明な鳴き声を出すのが精一杯。どうやら、かなり疲れてるみたいだ。

「ダレてんなぁ、お前ら」

「いいじゃんかー。あたし達、ガジェットの殲滅、凄く頑張ったんだよ？」

「そりゃ知ってる。偉い偉い」

「えっへん」

誉めながらスバルの頭を撫でてやると、椅子に座ったまま得意気な顔で胸を張る。

頑張ったのはコイツ1人じゃないだろうに、何故そこまで偉そうなのか。

「そういえば、シャーリーさんから聞いたよ？　今回、ティアナが大活躍だったんだって？」

「うえっ！？」

「俺も聞いたぞ。すっげーなぁ、ティアナ」

「そ、そんなこと無いですよ！？　ガジェットだって、後半はヴィータ副隊長が殆ど片付けちゃってましたし」

ギンガに誉められたティアナは、顔を真っ赤にしてその言葉を否定した。

とはいえ、フィニーノ陸士から聞いた外での戦闘の経緯を聞く限り、なんだかんだで一番頑張っていたと思う。センターガードとして、かなり頑張ってたみたいだし。

「だ、だからそんなこと無いですってば！」

「あー、ティア照れてるー」

「スバルうっさい！」

「まぁまぁ、誉めてんだから素直に喜んどけって。俺が他人を誉めるなんて、１０００年に１度あるかないかってぐらいに貴重な事なんだぜ？　レアイベントだよ！」

「それはあんまり嬉しくないです」

いきなり冷静になって返された。

ティアナはこのイベントの重要さがわかっていないようだな、まったく。

見ろ！　重要さがわかってるスバルとギンガは、目を見開いて戦慄して――

「スバル、そんなに足を開いて座らないの」

「ふあ～い」

――ませんでした。お前ら嫌い。

「いや、あれが普通の反応だと思いますよ？」

「何だよティアナまで！　何？　お前俺のこと嫌い？」

「嫌いじゃないですけど、疲れてる時にいらないボケをかまされるのはちょっと」

「ですよねー」

ティアナの言い分がもっともなので、とりあえず一旦口を閉じて

黙る。
　まぁ、確かにティアナ達は久しぶりに４人だけでの実戦だった訳で、しかも全員かなり頑張ってたみたいだしなぁ。そりゃ疲れもするわ。

「しっかしまぁ、ティアナも頼もしくなったもんだ。
　少し前までは俺やギンガがいないと、寂しくて泣き出してたっていうのに」

「何ですかその捏造設定！？　泣いたことなんて無いですし、そもそもあたしとハヤトさん達は、ずっと別々の部隊でやってたじゃないですか！」

「バレたか」

「バレますよ！」

　冗談はともかく、ホントにティアナは随分と頼もしくなったと思う。
　今回の活躍を見る限り、もう俺やギンガのフォローが無くても大丈夫だろう。もちろん、一緒に行動する限りは全力でフォローするけどさ。

「それは置いとして、お前ら外で事後調査の手伝いしてたよな？」

「置いとくんですか。えぇ、してましたけど……」

「途中でさ、ハラオウン執務官が男の人連れてそっち行かなかったか？」

「男の人……あぁ、スクライア司書長の事ですね」

「そうそう」

「なになに？　何の話？」

スクライア司書長の話を出した途端、スバルが目を輝かせてこっちに混ざってきた。

なるほど、スバルも色気より食い気とはいえ女の子。俺がこれからしようとしている、この手の話題には中々どうして敏感らしい。

そんなスバルの女子らしい反応に妹分の成長を感じつつ、俺はとりあえず話を続ける。

「なんでもな、司書長とハラオウン執務官、あと高町一尉と八神部隊長は幼馴染らしいぜ」

「ああ、それは知ってます。シャーリーさんに聞きました」

「あたしも聞いた～。それでハヤ兄、それがどうかしたの？」

「うむ。高町一尉やハラオウン執務官、八神部隊長には浮いた噂が全く無いよな。

俺が思うに、それはやはりあの3人のうち誰かがスクライア司書長と『そういう仲』だ、というのが理由なのではないだろうか。スクライア司書長は男の俺から見てもカッコイイし、あの若さで司書

長ってことは仕事も出来る。
性格だって滅茶苦茶良い人だし、なにより幼馴染でお互いをよく知っている。
どう考えても、これ以上の好物件は中々無いだろ？」

「そ、そういう仲って……つまり、そういうことですよね」

「その通りだ……ってキャロ！？」

話しているうちに、いつの間にかキャロまで目を輝かせて参加していた。
さっきまで向こうでエリオと一緒にダレてた筈なのに、やはり小さくても女の子って事か。

「まぁ今はそれはどうでもいな。それで、だ。ぶっちゃけ、誰が本命だと思う？」

「んー……私は八神部隊長かな」

「あたしは、なのはさんだと思うなぁ」

「あたしもそう思います」

「私も、なのはさんだと思いますよ」

ん？　何か知らんがギンガ以外の女子3人は高町一尉で揃ってるんだな。

俺はハラオウン執務官と一緒に居るところしか見てないんだが、なにか根拠でもあるのか？

「外で見たんですけど、なのはさんとスクライア司書長、凄く仲良さそうでした。
アレは確実にそういう雰囲気でしたね。見た瞬間にピンときましたよ」

「そうそう。なんて言っても、なのはさんが凄く普通の女の子みたいな顔してたもん。
ハヤ兄もアレを見てたら、絶対なのはさんとユーノさんが付き合ってるって思うよきっと」

「へぇ～。そんなにいい感じだったんだ？　私も見てみたかったなぁ」

少し興奮気味に語るティアナとスバルに、ギンガは興味津々という感じで頷く。
確かに見てみたかったな、それは。高町一尉はいつでも凛々しい雰囲気……っつーのが俺達の印象だから、普通の女の子みたいな感じになっているというのは、中々のレアショットに違いない。

「でもでも、もしお二人がお付き合いしてるなら、そういう話を聞いてもいい筈ですよね？」

「あー……言われてみれば、確かにそうだな」

「ということは、八神部隊長っていう可能性もある訳だね！」

「否定は出来んな。つか、よく考えたらハラオウン執務官はあり得ないか。

もしスクライア司書長とそういう関係なら、エリオとキャロが聞いてない訳ないもんな」

「そうですね。私も、フェイトさんからそういう話を聞いたこと無いですし」

通路に備え付けの椅子に座って、あーでもないこーでもないと推論を言い合う俺達。

ちなみにエリオは話に入ってくる気はないようで、ちょっと離れた場所でフリードと一緒にボケーっとしているようだ。まぁエリオはこういう話題苦手みたいだし、仕方ないか。

対して女子４人はと言うと……。

「でもでも、実はフェイトさんもスクライア司書長に片思いで、でも高町一尉もスクライア司書長が気になっているから、そういう話題を出さない……っていう展開もいい感じだと思わない？」

「おお、そーゆー展開もアリだよね！」

「そこに八神部隊長も混じって、スクライア司書長を巡る四角関係……！」

「これは検証の価値アリです！」

うん、物凄く盛り上がってます。というか、話題を振った俺も置いてけぼりです。

こういう時、女子の妄想力ってのは男よりも逞しいんだなと思う。特にギンガはガキの頃から、この手の話題になると小一時間ぐらい妄想してたよなぁ。

しかも姉ちゃんとスバルも一緒になって、やたらと細かい部分まで妄想してた気がする。

なんかこう、下手な漫画顔負けの妄想とかあった気がするし。

「だけど、実際スクライア司書長はどうなんでしょうね？　さっき外で見た感じだと、なのはさんが本命っぽい気がしますけど」

「実はユーノさんは3人の気持ちに気付いてて、でも傷つけたく無いから何も言わないっていうのは？」

「きゃーっ！」

「きゃーっ！」

「……きゃーって、お前らいい加減にしとけって」

「それでさ、それでさ！」

流石に盛り上がりすぎてきたので、俺はいい加減いったん止めようと口を開く。

なんせ、もう直ぐ高町一尉たちも戻ってくる筈なのだ。こんな会話を聞かれたら、いくらなんでも気まずいってレベルじゃないから

なぁ。
しかしヒートアップしてる４人には俺の言葉は届いていないらしく、こっちの声を無視してペチャクチャとお喋りを続けている。やれやれ。
うるさい４人に溜息を吐きながら、なんとなく後ろを振り返る。
そして、俺は振り返ったその姿勢のまま、思い切り固まってしまった。
懸命な奴は、その理由は簡単に分かってくれるだろう。
「……うふふ」
「……あわあわ」
「……くふふ」
「あ」
そう。振り返った俺達の後ろには、見惚れるような笑みを浮かべた高町一尉と八神部隊長。それと、顔を真っ赤にしてオロオロしているハラオウン執務官が居らっしゃったのだ。
ああ、顔を真っ赤にしてるハラオウン執務官マジで可愛いなぁ、結婚して欲しい。
と、そんな風に俺が現実逃避をするのも仕方ないだろう。
「お、お前ら？　そろそろさ、その話題やめとかねーか？
ほら、高町一尉たちはそういう話題とか嫌いそうじゃん？　な？」

「えー？　だって、ハヤ兄からこの話題振ってきたんじゃんかー。何をいまさら」

「そうだよ、ハヤト君が最初に言い出したんでしょ」

「今更それを止めるなんておかしいですよ」

「そうです。それにここまで盛り上がったら、やっぱり結論を出すまで終われません！」

どうしたキャロ、君はそんな子じゃなかった筈だろ。

というか、４人揃って気付いてないのか？　結構真後ろに高町一尉たち居るんだけど。

「やっぱりアレだよね。なのはさんには耐え忍ぶ恋が似合うよね！」

「いえ！　それならフェイトさんの方が似合ってます！　だってフェイトさんですから！」

「キャロちゃん、ちょっと意味わかんない。でも、八神部隊長は自分からガツガツ行く感じよね」

「そうだねぇ。八神部隊長は、肉食系？　って感じだものね」

「いえあの４人とも？　いい加減終わりません？　そろそろ帰る時間ですし」

無駄だと思いつつも、もう一度とめてみる。
けど、今度は返事すらして貰えなかった。どうやら既に、俺が出来る事は無いようだ。
とりあえずエリオに助けを求めようと視線をやれば、エリオは既に帰る準備を整えて、ヘリの方に走っていっていた。あんにゃろう、逃げやがったな。

「楽しそうだね、みんな」

「「「「!?」」」」

そして俺の努力も虚しく、裁きの時間を知らせる声が高町一尉の口から飛び出した。

「そろそろ帰る時間だから、呼びに来たんだけど」

「なんや、すっごいおもろそうな話しとるなぁ?」

「えぇとあのその……え、えっちなのは関心しないよ?」

「こ、この声は……」

「もしかしなくても……」

ようやく3人に気付いたギンガ達が、頬を引き攣らせながらギギ

ギと音が響きそうな感じで、ゆっくりと後ろを振り返る。当然だが、そこには輝くような笑みを浮かべた高町一尉たち3人。

「今日は帰ったらそのまま解散しようかと思ったけど」

「皆、随分と元気が有り余っとるみたいやんなぁ？　なぁ、なのはちゃん？」

「うん。そうだねはやてちゃん」

威圧感が……威圧感が凄いです。ビリビリと肌に感じます。これが歴戦のエースが放つ威圧感なのかと、しみじみ感じています。

お父さんお母さん、先立つ不幸をお許しください。

「ど、どうしましょうスバルさん！？」

「あわわ……ど、どうしようティア！？」

「ど、どうしたらいいですかギンガさん！？」

「どどどどうしようハヤト君！？」

「……諦めって、時には大事なんだぜ？」

絶賛混乱中のギンガ達と、とっくに諦めた俺。

そんな5人に向かって、高町一尉はまぶしい笑顔で凄まじいプレッシャーを発しながら、とても素敵な一言をくださった。

「5人とも、帰ったら特別メニュー決定だね」

「それから提出する書類も、今日中にやってもらおか」

「「「「「ごめんなさいいいいいっっっっ！！！」」」」」

ホテル・アグスタの警備任務は、なんとも締まらない感じで終わりを迎えた。

ちなみに俺達は、流石に訓練とかは無かったものの、高町一尉からこってりとお説教され、ヘトヘトになって隊員寮へと戻ったのだった。

……教訓。人様の恋路に首を突っ込むのはやめましょう。

ex20話　『ホテル・アグスタ　その3』（後書き）

ユーノ君てマジ優良物件ですよね。
どうも、ラモンです。

今回はホテル・アグスタのその後。
ちょっと皆でワイワイさせてみました。何か方向性を見失った気がしないでもないですが（汗）
ユーノ君自身はちょっとしか出せませんでしたが、話題的には今回の中心ですね。女の子が夢中になるのはコイバナ、というイメージが凄いあったので。

……あれ？　あんまり今回は語ること無いなぁ。
では次回の話でも。
次回は日常回を挟んでみようと思います。本編で言うところの、ティアナ撃墜事件を丸々カットするので、その代わりにという感じで。
ボーイズサイドとガールズサイドで分けて、2話使ってやってみようかと思っています。
ガールズサイドの話は、今回みたいにコイバナオンリーになりそうですけど（笑）

それではまた、次の話で。

ｅｘ２１話　『ある日の風景２　ボーイズ編』（前書き）

※注意！　今回はややキャラ崩壊が見込まれます。
そういうのが嫌いな方は、注意して読むようにしてください。

ex21話　『ある日の風景2　ボーイズ編』

side：―

とある昼下がり。
ミッドチルダ首都クラナガンにある、それなりに人気のカフェ。
その中に4人の男の姿があった。
4人は全員管理局の人間なのだが、来ている服が制服ではなく私服なところを見ると、どうやら休暇か何かで街に出てきた、というところなのだろう。

「うだー……」

まず最初に口を開いたのは、椅子座って天井を見上げるヴァイス＝グランセニック。

「ちくしょー……」

次に口を開くのは、ヴァイスの対面で机に突っ伏しているハヤト＝ロックウェル。
そしてハヤトに続いて、彼の隣に座るもう1人、グリフィス＝ロウランが自分のコーヒーを飲みながら溜息を吐く。

「まさか、あんなに上手くいかないとは……」

「えっと……う、上手くいかなかったんですか？」

「うん。そうなんだよエリオ君」

溜息を吐いたグリフィスの横で、ちょっと戸惑った表情のエリオが呟いた。

エリオだけは、何故自分がここにいるのかイマイチ分かっていないらしい。恐らく、残りの3人に休日だからと無理やり連れてこられたのだろう。

「ったく、なんであんな上手くいかなかったんだ？」

天井を見上げていたヴァイスがポツリと漏らした疑問。それに対し、ハヤトが「そうッスよねぇ」と同意しながら首を捻る。

「お兄さん成分担当のグランセニック陸曹。知的成分担当のロウラン准陸尉。話術担当の俺。そんでもって保護欲刺激担当のエリオ。布陣としては、決して悪くない筈なんすけどねぇ。

自画自賛みたいだけど、俺もグランセニック陸曹も、ロウラン准陸尉も顔は悪くない……っつーかむしろ、准陸尉はガチでイケメンなはずなのに。エリオだって、まだ幼くてイケメンとは言えないけど、でも十分に将来有望っぽいと思うんだが」

ぶつぶつと呟きながら、ハヤトはしきりに首を傾げていた。
まぁ、そう言っている本人がジャージな時点で、原因は推して知るべしというモノだが。
しかしハヤトは本気で理由がわからないらしく暫くうんうん唸った後、何かに気付いたのか「ああ！」と声を上げて、それからヴァイスを指差して叫ぶ。

「思い返せば、原因はグランセニック陸曹の誘い文句が最悪なせいッスよ！！
なんだよ「そこのお嬢さん、今夜俺の操縦桿を握ってみない？」って！　親父か！」

「あぁん！？」

突然責任を押し付けられたヴァイスは、ふざけるなと立ち上がって反論を返す。

「ふっざけんな！　ナンパ行くっつってんのに、全身ジャージで来てる奴に言われたくねんだよ！」

「はぁ！？　このジャージ最高級品質で結構いい値段する、俺の勝負服ッスよ！？
しかもデザインとかもデビルかっこいいじゃないですか！　アンタが時代遅れなんだよ！！」

「はぁぁぁ！？　お前目ぇ腐ってんじゃねぇの！？」

「ふ、二人とも落ち着いて。周りの目がありますから！」

静かなカフェの店内でヒートアップするヴァイスとハヤトを諫めようとしたグリフィスだったが、そのせいで2人の怒りの矛先は、その声を発したグリフィスに向かってしまう。

いわゆる八つ当たりというヤツだ。

「お前もお前だよグリフィス！」

「えぇ！？」

「陸曹の言うとおりだ！　何でアンタ女の子の前に行くと、途端にどもるんだよ！？

いつもいつも、ロングアーチで女性陣に囲まれて平気な顔で喋ってるくせしやがって！！」

「ぼ、僕のせいだって言うんですか！」

「お前とハヤトのせいだって言ってんだよ！」

「絶対ちげーし！　陸曹と准陸尉のせいだし！」

「僕のせいじゃないでしょう！　ヴァイスさんとハヤト君のせいでしょうが！」

「「絶対違う！」」

カフェの店内だという事も忘れ、ナンパ失敗の責任を擦り付けあうハヤト、ヴァイス、グリフィス。

実に大人気なく、見る側の涙を誘う光景である。ちなみにエリオは、見苦しく喧嘩する大人3人のフォローとして、周りの客に必死になって頭を下げていたりする。

後にエリオはフェイトに対し、「あの時に僕の役割が決まったような気がします」と語ったという。

「だぁから！　あの時のお姉さんは俺に任せておけば良かったんスよ！

確実に俺にメロメロだったじゃねーですか、あの人は！」

「なにを夢みたいな事を言っているんだ君は！」

「そうだぞこのバカ！　あの子は間違いなく、この俺を見てたじゃねーか！」

「だからって「俺の操縦桿で君を乗りこなしたい」とか言います普通！？　アレのせいで、あのお姉さん逃げてっちゃったじゃねーですか！　まじ陸曹は黙っててくださいよ！！」

「ンだとこの野郎ぉぉぉぉっっ！！」

しかし、いくらエリオが周りに謝り続けたとしても、限界はあるもので。

「お客様」

「「「ああん！？」」」

これだけ騒いで平気なカフェなど、古今東西存在する訳も無く。

「出てけ」

「「「……はい」」」

「な、何で僕までぇ……」

最終的に４人は店から追い出されてしまうのだった。

エリオからすれば完全なとばっちりだが、まぁ彼も半分慣れているのだろう。溜息を吐いてはいるが、いまだに言い合っている３人の後を付いて行く足取りは、それ程重くは無かった。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅＳ　～とある新人の日常～

ｅｘ２１話　『ある日の風景２　ボーイズ編』

「それで、どうします？」

カフェから追い出された４人は、ブラブラと街を歩きながらダラダラしていた。
本人たち……というか、エリオ以外の３人の予定では、今頃はナンパに成功して綺麗な女の子たちとワイワイやっている筈だったので、昼食以降のことはノープランだったりする。
面子から考えて何故ナンパが成功すると思ったのか甚だ疑問だが、まぁそれは突っ込むまい。

「ゲーセンでも行きますか～」

「却下。ゲーセンなんてお前しか楽しくねーだろが」

「僕は別にいいですけど……」

「じゃあ陸曹はどこがいいんスか」

「あー……カラオケ？」

「先々週行ったじゃないスか……」

辺りを見回して、とりあえず目に入った店を見ながら呟いたヴァイスの提案にがっくりとハヤトが肩を落とす。どうやら意外と仲良しらしい。

「じゃあ六課に戻るか？　何かもうナンパするって雰囲気でもねーし」

「まぁ、確かにこの４人でどこかの店を見て回るのもアレですしね」
「エリオはどうする？　どっか行きたいとこあるなら付き合うけど」
「えっと、僕は大丈夫です。この間、フェイトさんと一緒に買い物に来ましたし」
「「「！！？」」」
はにかみながら呟くエリオ。
そんな彼の言葉に、残った男３人が一斉に目をむいてエリオを振り返る。
「フェイトさんと、一緒にお買い物？」
「キャッキャウフフの素敵なふわふわ時間？」
「ちょっとしたハプニングで２人の距離が急接近？」
「え？　え？」
何故か背中に黒いものを背負いつつ、ジリジリと自分との距離を詰めてくるハヤト達に、エリオは意味が分からないという顔で戸惑いながら同じくジリジリと後ずさる。
しかし、エリオにとって間が悪いことに彼の真後ろは壁。
数歩後ずさっただけで、エリオの背中は後ろの壁にぶつかってし

まう。

「あの、皆さんどうしたんですか？　か、顔が怖いですよ！？」

「俺達はたまの休日にナンパせねば、女の子と遊ぶのもままならんというのに……」

「エリオ君は、そうやって毎日勝ち組の気分を味わっているんだね……」

「よく考えりゃ、お前は時たまハラオウン執務官と風呂も一緒なんだよなぁ……？」

「ななな何ですか！？　どうして3人とも、そんな怖い顔で近づいてくるんですか！？」

もはや心底おびえて涙目になるエリオだが、ハヤトたち3人はそんな事は気にしない。

醜きは男の嫉妬というモノだろうか。

「フェイトさんとお風呂！？　ハヤト、それは確かな情報か！？」

「ヴェーダからの確定情報です」

「ヴェーダが何かは気になるけど、とりあえず置いといて。それは由々しき事態だね」

涙目になっているエリオに詰め寄りつつ、互いの顔を見合って頷きあう3人。
正直見苦しい以外の何物でもないが、本人達はいたって真面目なのだから性質が悪い。
まぁ、今回に限っては迂闊な事を呟いたエリオも悪いと言えば悪いのだが。

「グリフィス、ハヤト。判決は？」

「有罪」

「万死に値する」

「ですよねー」

「何でですか！？　ねぇ何でですか！？」

必死に逃げようと隙を探すエリオだが、ヴァイス、グリフィス、ハヤトの連携に隙は無く、哀れエリオは3人の魔の手によって酷い目に遭わされてしまう――かに見えた。

「……っ！！」

しかしその時、エリオに電流走る――！！

「そ、それなら！」

まさに自分の肩にハヤトの手が触れようとしたその瞬間、エリオはこの窮地を抜け出す為の最善策を見出したのだ。そう、つまり――

「ハヤトさんもこの間、ギンガさんと一緒に買い物に出かけてましたよね！！」

――自分とは違う生贄を差し出すという策を。

「何だと！？」

「それは本当かハヤト君！」

「え？　あぁはい、確かに行きましたけど？」

そして見事にその策は成功し、ヴァイスとグリフィスが凄まじい勢いでぐりんっ！　と首を動かして自分達の横に居るハヤトに憎悪さえ篭った視線を向ける。

「ギンガちゃんと2人っきりでか！？」

「まぁ、基本的に買出しの時は2人ですが何か？」

「いつもかい？」

「そうッスねぇ。買出しとか捜査とかで、結構行ってるとは思いますよ」

「嫉妬で人が殺せればいいのに」

「……なるほど、これが……殺意か……」

「は！？　ちょっ、なんで2人とも俺の肩掴んでるの！？　ねぇ何で！？」

訳が分からないと混乱するハヤトの肩をギリギリと掴みつつ、まずグリフィスがゆっくりと告げる。

「世の中にはねハヤト君。決して許してはいけない人種が居るんだ」

それに続いて、グリフィスとは逆の肩を掴んだヴァイスが唇に血を滲ませて呪詛を漏らす。

「ひとつは犯罪者。そしてもうひとつはリア充――お前みたいに、可愛い女の子と2人っきりでしょっちゅう買い物に行ったりする人間なんだよぉぉぉぉぉっっっっ！！！！！」

「痛い痛い痛い痛い！　やめて！　俺の肩が砕けちゃうからやめて

！　ら、らめぇぇ！！」

懇親の力を込めて、肩よ砕けよとばかりにハヤトの肩をギリギリと掴むヴァイスとグリフィス。ハヤトの肩の骨が悲鳴を上げ始め、ハヤトが堪らずに悲鳴を上げるが、勿論2人はそんな事は気にしない。むしろ嬉々として自分の手に力を込めていく。

ちなみにエリオは自分に被害が及ばなくなったのを確認し、こっそりと安堵の溜息を吐いている。

「いだだだ！　ぐ、そ、それを言うなら！　ロウラン准陸尉なんていつもロングアーチで綺麗ドコに囲まれてるじゃないですか！　そっちの方がリア充だろ！？」

「……！　そういえばそうだなぁ……？」

「なっ！？」

このままでは堪らないと、ハヤトもまたエリオと同じく自分以外の生贄を差し出す。

そして、差し出されたグリフィスが慌てて肩を掴んでいた手が緩んだ隙に、ハヤトはするりと2人の拘束から抜け出し、エリオの隣に並んで安堵の息を吐いた。

「グリフィス、てめぇよく考えたらこん中で一番いい思いしてんじゃねぇか……。

毎日毎日、八神部隊長を始めとした綺麗ドコに囲まれまくり……

しかも聞いた話じゃ、ルキノやシャーリーといい感じだそうじゃねぇの。
こりゃ許せねぇなぁ、許せねぇよ……思わず乱れ撃っちまいそうだ」

体中からどす黒いオーラを撒き散らしながら、ゆらりとグリフィスに近づくヴァイス。
今までの展開から考えるならば、このまま同じ展開になる――筈だったのだが。

「許せない？　それはこちらのセリフですよヴァイスさん」

「あぁん？」

しかし、グリフィスもまたどす黒いオーラを撒き散らしてヴァイスに向かい合う。

「確かに僕は毎日毎日綺麗な女性達と一緒に仕事をしていますよ？
ええ。
けどね、それはあくまで『一緒に仕事をしている』だけ。決して2人っきりで、という訳じゃあないんですよ。しかも女性陣は女性陣だけで固まりやすいから、僕は基本的に1人が多いですしね。
ルキノ達といい感じ？　はっ、そんなのあり得る訳ないじゃないですか！」

「おおぅ、おぉぉう……」

「グ、グリフィスさん、そんな泣かなくても……」

滂沱の涙を流し、拳を握り締めて語るグリフィス。その迫力に、ハヤトは同情するように涙を流してコクコクと何度も頷き、エリオは慰めようと声をかけた。

まぁ勿論エリオの声は届かず、グリフィスはヴァイスに掴みかからんばかりの勢いで喋り続ける。

「大体それを言うならヴァイスさんの方が羨ましいですよ！　いつだって殆どアルトと2人っきりでヘリの整備やら、ヘリの操縦訓練やら！　貴方にだけは言われたくない！！」

「はぁ！？　ふっざけんじゃねーよ！　毎日毎日ペタペタ引っ付かれて、それでも手を出せないこっちの身になって考えてみろ！！　磨り減るわ！　主に精神的な意味で！！」

「引っ付かれてるだと！？　何ソレ羨ましい！！」

「ハヤトさんは何でわざわざまた参加するんですか！？」

グリフィスに対して言い返したヴァイスの言葉に、一度自分から逃れたハヤトがわざわざ言い合いに復帰してまでヴァイスに詰め寄った。

そして案の定、3人の言い合いは殆ど鼻と鼻がくっつきそうな程に顔をよせ、男の嫉妬丸出しな醜い言い争いへと発展していく。

「クラエッタ陸士に引っ付かれるとか、もうそれだけで羨ましいわ死ね！」

「それを言ったら、おめーだってスバルやギンガちゃんに引っ付かれてるだろうが！」

「スバルとかギンガとか、訓練しまくりで筋肉ついてて柔らかくねーんですよ！　その辺り、クラエッタ陸士なら程よく柔らかくてマジ感触とかいいんでしょうが！　妬ましいな畜生滅びろ！」

「俺からしたら、お前の方が羨ましいっつーんだよこの野郎狙い撃つぞ！！」

「……僕はどっちも妬ましいですね。後ろから撃っていいですか」

「「やれるもんならやってみろやハーレム野郎！！」」

最終的には互いが互いに掴みかかり、殴り合いの喧嘩に発展する3人。

ここが街中で、日が高い今は結構人通りもあるという事など、既に忘却の彼方らしい。

そうすると、当然ながら道行く人々の視線は、街中で殴りあいをしている3人に嫌でも集まる訳で。エリオは先程のカフェと同じく、道行く人々にペコペコと頭を下げるハメになってしまう。

「すいません、すいません。あ、地上部隊に連絡は勘弁してください」

何だか、頭を下げる姿も様になってきている気がするのは何故だろうか。
しかしそんなエリオの苦労など露知らず、３人の喧嘩はどんどんヒートアップしていく。

「もーあったまきた！！　ブレイブハート、セットアップだ！
このリア充どもは生かしちゃおけねえ！！　２人まとめて吹っ飛ばしてやる！」

《　よろしいのですか？　》

「はっ！　デバイスに頼らなきゃ何もできねぇヒヨっ子が吼えるんじゃねぇよ！
こちとら元武装隊！　逆にお前らまとめてぶっ飛ばしてやらぁな！」

「ロングアーチだからといって舐めないで貰いたいですね！　一応護身程度の心得ならあるんですよ！
吠え面をかくのはそっちだという事を、その体に教えてあげましょう！！」

「聞いたかブレイブハート！？　遠慮はいらねぇ！　全力全開で殺っちまうぞ！！」

《　……Ｙｅｓ．　Ｍａｓｔｅｒ．　》

「なんでそんな物騒な話になってるんですかぁ！！　てゆーかブレ

イブハートも本気でセットアップしようとしないでよ！　危ないから！　本当に危ないから！！」

結局３人の喧嘩が終わったのはこれから３０分後。お互いがお互いの顔に綺麗なクロスカウンターを決め、ダブルＫＯならぬ、トリプルＫＯで倒れるまで続いたのだった。

その頃には一種の大道芸としてみなされ、３人が倒れた後、エリオはおひねりを沢山貰ったらしい。

エリオ本人は困惑しきりで、お金を持って途方にくれていたが。

◇◇◇◇◇

時間は流れて夕方。

ボロボロになったハヤト達と、使っていいのかわからない結構な額を持ったエリオの４人は、隊舎に戻る為に並んでゆっくりと道を歩いていた。

ゆっくり歩いているのは、ハヤト達が喧嘩をした時のダメージが抜けてないからだ。

それだけ本気の喧嘩だったのだろう。理由はくだらない事この上ないが。

「いてて……グランセニック陸曹、どんだけ本気で殴ってんスか。マジ痛いんすけど」

「うっせーよ、お前だって本気で魔力弾撃ってきやがって」

「あいたた……だからって関節技は無いでしょう関節技は、明日の仕事に差し障ったらどうしてくれるんですか。怒られるのは僕なんですよ」

「ハーレムリア充は怒られればいいよ」

「同感だ。お前は少し酷い目にあえ、グリフィス」

「……殴っていいですよね。答えは聞いてない」

「あっ、ちょっ！　本気で殴るな！　痛い痛い！」

こりもせず再び喧嘩を始める3人。

今までは止めていたエリオも、もう疲れたのは溜息を吐くだけで止めようとはしない。この3人は止めるだけ無駄だと学習したらしい。実際その通りだし。

「とりあえず、もう今日はやめときましょう。何か虚しくなってきた」

「だな。心の隙間を埋めに行ったってのに、逆に広げてきちまった」

「だれうま」

「……あ、お話はまとまりました？」

3人が疲れた声で頷きあうと、エリオが「やっと終わったか」という顔で3人を振り返る。
その顔には、どこか達観した表情が浮かんでいた。

「おお？　何かエリオが大人っぽくなってやがる」

「本当だなぁ。きっと、俺達大人組の様子を見て学習したんじゃねーの？」

「そうですね。あのくらいの年の子は、年上に憧れを抱くと言いますし」

「あらいやだ、俺に憧れるなんてエリオってば目があるね！」

「……そうですね。そういう事にしておいてください」

頭を掻いて照れるハヤト達に対し、エリオはただ微笑んで頷くだけ。
その微笑みは、なんというか哀愁やら達観やらが交じり合い、凄まじい大人の貫禄を漂わせていた。
けれど、それ以上に涙がこみ上げてくる表情であった。

「ま、今回は失敗だったけど、また次の休みにでもナンパしに行こうぜ。
次こそは成功させて、夢のばら色ホリデイを満喫だ！！」

「そうッスね。俺もいい加減彼女いない暦＝年齢を返上したいし！」

「僕も、次までに色々と情報を仕入れておきますよ」

「……僕は、次の休みは部屋の中に居たい気分です。絶対に」

４者４様の感想を漏らしながら歩く４人。ハヤト達はさっきまで喧嘩していたとは思えない程、楽しそうに笑って話している。エリオも言葉こそ拒絶しているような感じだが、その表情は楽しそうだ。

なんだかんだで、結局４人ともこうやって休日に出かける程度には仲が良く、エリオにしてみれば初めてに近い『友達』なのだ。こうしてバカをやって過ごす時間も、きっとエリオにとってはとても楽しい時間に違いない。

もっとも、グリフィスはともかくとして、ハヤトとヴァイスがそれを意識しているかは疑問が残るところではあるけれども。

「まぁまぁそう言うなって。エリオがいねーと、ショタ狙いのお姉さん方が捕まらねーだろ？

俺達の休日をバラ色にする為だと思って、大人しく付き合ってくれよー」

「それにお前も、綺麗なお姉さんと遊びたいだろー？」

「まぁナンパはともかく、また皆で遊びに行こう。次はエリオ君の行きたい場所にね」

「……はい！」

言葉を漏らしながらグリフィスに軽く頭を撫でられ、エリオが嬉しそうに頷く。

「あ！　准陸尉がなんかいいカッコしてる！」

「こらグリフィス！　そういう兄貴分的なセリフは俺のモンだろうが！　年齢的に！」

「言ったもの勝ちですよ」

グリフィスの言葉に反応して、即座にハヤトとヴァイスが声を上げる。

そんな2人を軽くあしらいながら、グリフィスは六課隊舎へと歩いていき、ハヤトとヴァイスはギャーギャー騒ぎながらそれを追いかけていく。

「……へへ」

足を止めたエリオの少し前の方で騒ぐ3人の姿を見ながら、エリオは撫でられた頭を押さえ、はにかみながら小さく笑う。

「おーい、エリオ何止まってんだよー」

「何かあったのかい？」

「何でもねーなら早くこいよ。さっさと帰ろうぜー」

自分達の後ろで止まっているエリオを振り返り、３人がそれぞれ彼を呼ぶ。

「はい！　今行きます！！」

エリオはその声に元気よく返事をし、ハヤト達の元へと駆け出すのだった。

ｓｉｄｅ：―　了

ｅｘ２１話　『ある日の風景２　ボーイズ編』（後書き）

あーつーいー。
どうも、ラモンです。

今回は日常回、ボーイズサイドをお送りしました。
この４人はこんな風に仲良くしてくれてるといいいなー、という私の妄想をそのまま形にした訳ですが、楽しめたでしょうか？

というかアレですよね。
ＳｔＳで出てくる名前のある男キャラって、殆ど全員が結構な勝ち組ですよね。彼女的に考えて。
グリフィス君はプチハーレムな職場だし、ヴァイスはアルトという可愛い後輩、エリオはキャロという嫁。ヴェロッサは綺麗な義姉と、同じく綺麗な姉貴分がいますし、クロノ君は嫁もち、ユーノ君は……まぁ恋愛は微妙ですが綺麗な幼馴染が沢山。
ゲンヤさんなんて、可愛い娘が最終的に６人ぐらいに増えますし。
スカリエッティなんて１２人の娘ですよ！？　しかもとびっきり美人の！！

畜生！　リア充なんて皆滅んじゃえばいいんだ！！
という感じに気持ちが荒んでいる私でした（笑）

次回はガールズ編……といきたいところですが、ネタが思い浮かばない場合は『六課の休日』編に行きたいと思います。
どちらになるかわ分かりませんが、どちらでも楽しんでいただけるように頑張っていきたいですね。

それではまた、次の話で。

ｅｘ２２話　『ある日の風景２　ガールズ編』

ｓｉｄｅ：ギンガ＝ナカジマ

「最近、胸がおっきくなってきたんだよ～」

最初は、そんなスバルの一言だった。
言われるまでは意識したことも無かったんだけど、確かにそう言われて見れば前に見たときよりも少し服を押し上げる胸の形が大きくなっている……ような。
まぁ、見ただけじゃ分からないけどね。ハヤト君じゃあるまいし。

「あら、そうなんだ」

「流石は成長期だね～」

一緒に食事していたアルトとシャーリーさんが、ちょっと意外そうな顔をして声を上げる。
スバルがそういう話題をするのが意外だったのかな？

「……よかったですね」

それに対して、キャロちゃんはちょっと俯いて呟くだけ。

あー……やっぱり、気にしてるんだ。キャロちゃんも女の子だもんね。

けど、スバルはそんなキャロちゃんには気付かず、ぐてーっと机に突っ伏して愚痴を零し続ける。お行儀悪いなぁ。話が終わったら、ちょっとお説教しなきゃ。

「良くないよぉ。肩こっちゃうし、格闘やる時なんか揺れちゃって痛いしさぁ」

「へぇ……そうなんですか」

「それに何より、ブラがきつくなっちゃってさ～」

キャロちゃんはニコニコと笑ってるけど、私には分かる。スバルを見つめるキャロちゃんの目が、欠片も笑ってない……というかむしろ殺気を放ってる事に。

このままじゃ駄目だよね。とりあえず話題逸らさなきゃ。

「ス、スバル。スバルは普段、どんなの付けてるの？」

「あたし？　あたしはスポーツブラだけだよ～」

「えぇっ！？　スバル、スポーツブラしか持ってないの！？」

きょとんとした顔で呟いたスバルの言葉に、シャーリーさんが大げさなくらいに驚いて声を上げた。確かに私もちょっと驚いたけど、

そんなに驚くことかなぁ？
いや、女の子として、スポーツブラしか持ってないのはどうかとは思うけど。

「だってアレしてると胸が揺れないから、丁度いいんですもん」

「駄目だよ駄目駄目！　アレは胸をつぶしちゃうから、胸の形崩れちゃうんだよ。
ちゃんとしたのを買わなきゃ駄目だってば！」

「え、えぇ～……別にいらないですよぉ。ねぇ、ティア？」

「あたしは前からちゃんとしたの買え、って言ってるでしょ」

「あーうー」

凄い剣幕でまくし立てるシャーリーさんの迫力に押され、隣に居るティアナに味方して貰うつもりだったスバルの言葉は、あっさりと却下されてしまった。
すると次は私に助けて貰おうと思ったのか、スバルが期待を込めた目で私を見る。
でも、ごめんねスバル。私もお姉ちゃんとして、そこはちゃんとして欲しいの。

「明日の午後はスバルも休みでしょ？　一緒に行ってあげるから、下着の専門店に行きましょ？」

「ギン姉の裏切りものー！」
「はいはい。裏切り者でいいから、大人しくついてくるのよ？」
「うー」
「いい子だから、ね？」
「わかったよぅ」

そう言ってスバルの頭を撫でてあげると、ようやく諦めたのかスバルは俯いて頷いた。
こういう所はまだまだ子供なんだよね。もう１５歳なのに。

「あ、ギンガさん。私も一緒に行っていいですか？　専門店って、行ったことなくて」
「ティアナも？　勿論いいわよ」
「それなら私も一緒に行こうかな。そろそろ新しいの欲しかったし」
「なら私もいいかな、ギンガ」
「はい、もちろんオッケーですよ」

スバルと２人で一緒に行こうと思っていたら、ティアナとシャーリーさん、アルトの３人が次々に声を上げて一緒に行きたいと言っ

てきた。
　そういえば、スバルやティアナ、ハヤト君と買い物に行くことはあっても、シャーリーさんやアルトと一緒に行くことは無かったなと思った私は、二つ返事でそれを承諾。

「それじゃあ明日……あ」

「……」

　そして明日どこで何時に待ち合わせをするかを相談しようとして、私の隣で下を向いて肩をプルプル震わせているキャロちゃんに気付く。
　あー……しまったなぁ。

「キャロちゃんも、一緒に行く？」

「いーですもん。私、ぶらじゃーなんて必要ないですもん。ぺったんこですもん」

「そ、そんな事言わずに一緒に行こう？　ね？」

「いいんですいいんです、そんなに気を遣ってくれなくても。どうせ私はぺったんこですから」

「キャロちゃぁん……」

結局渋るキャロちゃんを誘って、明日の午後に待ち合わせが出来たのは、なんだかんだで３０分もかかってしまった。キャロちゃん、本気で気にしてたんだなぁ。

ｓｉｄｅ：ギンガ＝ナカジマ　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ２２話　『ある日の風景２　ガールズ編』

ｓｉｄｅ：―

明けて翌日の午後。
ミッドチルダ首都クラナガンのとあるデパート内にある、世の女性達にはそこそこ人気な下着の専門店に、ギンガ達の姿があった。
ギンガ達はそれぞれ思い思いの下着を手に取り、交代で試着室に入ってお互いの下着姿を評論しあっている。

「これ、どうですか？」

「あっ！　いいんじゃない？　可愛いよ、ティアナ」

試着室のカーテンを開け、下着姿のティアナが顔を出す。
ティアナが着けているのは、フリルがあしらわれたオレンジ色の上下の下着。
二つにくくっている彼女の髪の色に近いそれは、彼女のやや強気な雰囲気に良く似合っていた。

「専門店なんて始めてでしたけど、凄いですね。同じカップでも色々種類があるんなんて知りませんでした。これなんて、今まで付けてたのよりもすっごいフィットしますよ」

「でしょ？　やっぱり、自分に合ったのを付けなきゃ」

「そうですねぇ、何か凄く納得しちゃいます。あっ、これ可愛い～」

「いいねそれ、私も新しいの買っちゃおうかなぁ」

２人は下着を手に取り、きゃいきゃいと話に花を咲かせている。
そして、少し離れた場所では、同じようにシャーリーとアルトの２人が下着を手にあれこれと言葉を交わしていた。

「さっすが専門店。デザインも種類も、かなり沢山あるね」

「こんなに多いと目移りしちゃうな。コレもいいけど、あっちもいいし……でも予算が心許ない」

「だよね。元々スバルの買い物に付き合うだけの予定だったから、

そんなに持ってきて無かったし。
迂闊だったなぁ……専門店舐めてたよ」

どうやら2人は財布の中身が殆ど留守にしているようで、両手に持った下着を見比べて同時に溜息を吐いた。ちなみに、下着にはそこそこのお値段が書かれている。

「あーでも、これ可愛いから今買わないと売り切れちゃいそうだなぁ」

「そうなんだよね。どうする、アルト？」

「うーん……」

「着替えましたーっ！」

「「おっ」」

そんな風に2人が悩んで首を捻った時、試着室からスバルの元気な声が店内に響く。店内には女性しかいないとはいえ、こういう場所で大声で叫ぶのは女の子としてどうなのだろうか。
ともあれ、その声に反応してギンガ達が一斉にスバルが入っている試着室を見る。
そのタイミングにあわせ、試着室のカーテンを勢い良く開けて、スバルが自分の体を皆の前に晒した。

「じゃーんっ！　どうだ！！」

自信満々でポーズをとっているスバルが着けているのは、シンプルで飾り気の無いデザインの青色をした上下の下着。ただ、ティアナよりもスバルの方が若干上のサイズが大きいようだ。

「おー。可愛い可愛い、良く似合ってるよスバル」

「スバルらしくていいんじゃないかな」

「えへへ。そうかなぁ？」

「ええ、凄く可愛いわよスバル」

シャーリーとアルト、そしてギンガに誉められて恥ずかしそうな、それでいて嬉しそうな何とも言えない表情で頬を染めるスバル。

しかしスバルは、直ぐに誤魔化すように「でも」と続けながら自分の胸を触る。

「コレ、すっごく着心地いいよ～」

「でしょ？」

「びっくりだよ。下着変えるだけで、こんなに違うんだね。前まで胸が凄く苦しかったけど、コレにしたら全然苦しくないもん」

「でしょ？　私も、ここで自分に合ったのを買ったら、大分違ったのよ」

新しくした下着の感想をギンガに報告しながら、自分の胸をもにもにと触るスバル。

そうすると、その手の動きに合わせてスバルの大きめな胸が形を変え、動くたびにぷるんと揺れる。

「……ねぇ、アルトにティアナ」

「……なんです？」

「……なんでしょう？」

それを見て、遠い目をして語り合う3人。

「何食べたら、あんなに大きくなるのかな」

「やっぱり沢山食べるんじゃないですか？　あの2人から考えるに」

「あぁ、それは止めたほうがいいですよ。アルト、シャーリーさん」

「「何で？」」

疑問の声を上げる2人に対し、ティアナは自嘲の笑みを浮かべてポツリと零した。
そう、2人に現実を叩きつける為に。

「アレはギンガさん達の血筋です。同じように食べても、増えるのは体重だけですよ」

「……そっか」

「血筋って羨ましいね」

ギンガとスバルの胸元を見つめ、3人は深々と溜息を吐く。
体質とは、時に何よりも残酷な結末を人に見せ付ける事があるのだ。そう、例えば3人が見つめる先の姉妹の胸元で揺れる、2組の大きな夢の塊とか。

それはともかく。
ティアナ達がアレコレと下着を見比べて騒いでいる時、下着売り場の片隅に1人の少女が居た。
言わずもがな、キャロ＝ル＝ルシエその人である。

「……はぅ」

キャロは近くにあったブラジャーを手に取り、服越しに自分の胸へとあてがってみる。
結果は言わずもがな、ぶかぶかではあったけれど。

「うぅぅ……ギンガさん達が羨ましいよぅ」

「あら、下着をお探しですかお客様？」

「ひゃいっ！？」

そんなキャロに近くを歩いていた女性店員が気付き、話しかける。突然話しかけられたキャロは、飛び上がる程に驚いて素っ頓狂な声を上げた。

「ちち、違うんですっ！　私は別に、下着が欲しいんじゃなくて！！」

「初めてのブラジャーは慎重に選ばないといけませんからね。どんなものがいいですか？」

「い、いやだから違くって！！」

キャロはわたわたと手を振って否定するも、そこはベテランの店員。分かっていますと言わんばかりの笑顔を浮かべ、慌てているキャロの手を取って、一番サイズの小さな物が置かれている場所へと移動。

どこからともなくメジャーを取り出し、それを使ってキャロに抵抗させる間もなく彼女の胸囲を測定。

測ったサイズに最も近い下着を手にとって、キャロの前に持って

きた。

「お客様ですと、この辺りのサイズになりますね～。ご試着なされますか？」

「い、いいんですいいんです！　私、谷間も何もないですから、必要ないですしっ！」

恥ずかしさと、自分で自分にトドメを刺して半泣きになってしまうキャロ。

「そんな事ありませんよ、お客様」

「ふぇ？」

「お客様、失礼ですがお年はいくつですか？」

「１０歳……ですけど」

「なら、これからどんどん大きくなりますよ。そうなる為にも、自分の体に合ったサイズの下着を早いうちから着けておかないと」

ベテラン女性店員の言葉を聞いて、キャロが顔を上げて涙を溜めた目で彼女を見る。

不安に揺れるキャロの目を真っ直ぐ見つめ、自信たっぷりに自分の胸を張り、「それに！」と言葉を続けながら胸を思い切りドン！

と叩く。

「メーカーの商品開発力は日進月歩！
今ではＡＡＡカップのお客様にも、谷間をお届け出来るようになっているんですよ！」

「た、谷間！？」

「更には胸に対して程よい刺激を与え、胸を大きくする作用付き！」

「おっぱいが大きくなるんですか！？」

「勿論です！　ＥでもＦでもそれ以上でも、お客様の望みのままに！！」

「ふぉぉおおお！！」

下着専門店の片隅で、密かにヒートアップしていくキャロと女性店員。
勿論段々と大声になっているので、店内の他の客（ギンガ達含む）から思い切り注目を集めているが、最早２人は気にならないらしい。

「どうでしょうお客様！？　試着なさいますか！」

「します！　是非します！　むしろさせてくださいっ！！」

「了解しました！　それではこちらの試着室へどうぞ！　プロの技、

お見せしますよっ！！」

「はいっ！」

最終的に、キャロは女性店員に促されて試着室へと入っていく。
それを見送ったギンガ達は、一度だけお互いに顔を見合わせて「どうする？」という視線を送り合う。

「……まぁ、危険は無いよね？」

「ですね。下着の試着だけですし」

「何かあっても、このお店はそんなに広くないから大丈夫だよ」

「じゃあ、私たちは私たちで探そっか」

「りょうか～い」

しかし、最終的には自分のショッピングが大事と判断したのだろう。５人はそれぞれ自分の下着を探す作業に戻っていく。その直後、試着室からキャロと女性店員の無駄に気合の入った咆哮が聞こえてきたのだが、５人はショッピングに夢中になって聞こえなかったことにした。

◇◇◇◇◇

それから数十分後。

「どうかな？」

「うん！　ギン姉可愛いよ～」

「……やっぱり大きなぁ」

「だねぇ……」

「何をどうしたら、あんな聞き分けの無い大きさに……」

自分達の分の下着を買い終えたティアナ達は、ギンガの試着に付き合っていた。

試着室から顔を出したギンガが着けているのは、肩紐の無いタイプの青と白の縞模様をした下着。どうやら肩紐があると胸が若干なりとも苦しいらしい。

そんな彼女の胸部にある2発の核ミサイルを見つめ、シャーリーとティアナ、アルトの3人はギリッと歯を鳴らして見つめていた。

「アレを貧乳って言うとか、ハヤトさん頭おかしいんじゃないですか」

「ホントだよ、ハヤト君マジ馬鹿」

「全国の普通くらいの大きさの女性を敵に回しましたよね、割とマジに」

「帰ったら殴りましょう」

「「そうしよう」」

本人のあずかり知らぬところで、八つ当たり気味に恨まれるハヤトであった。

その瞬間、キャロが入っていった試着室から、キャロの歓喜の悲鳴が店内に響き渡る。

「ひゃわあああああっ！！」

突然の悲鳴に、ギンガ達が一斉にそちらを向く。

それと同時に試着室のカーテンが開き、その中から満を持して、さくらんぼの柄がプリントされた可愛い感じの下着を着けたキャロが、興奮気味に飛び出してきた。

「凄いですっ！　凄すぎですっ！！」

「ええ、ええっ！　私も会心の仕事をしましたっ！！」

キャロに続いて、やり遂げた顔をした女性店員も現れる。
果たして彼女の言う会心の仕事とは何なのか。その会心の仕事の結果は、悲鳴を聞いて駆けつけてきたギンガ達の目の前で嬉しさに頬を緩めるキャロの胸元にあった。

「あーっ！」

「キャロちゃん、それ……」

「谷間っ！？」

そう。キャロの胸元には、小さいながらもしっかりと認識できる“谷間”が存在したのだ。
勿論ギンガ達に比べれば、影が出来てそう見えるという程度の物ではあるが、それでも確かにそこにはキャロが求め続けた“谷間”が存在した。

「ギンガさんっ、スバルさんっ、ティアさんっ、シャーリーさんっ、アルトさんっ！
凄いですっ！　下着の力は偉大ですっ！！　素晴らしいですっ！！！」

「あー、あのねキャロちゃ――」

「店員さんっ！　これ、買いますっ！　むしろ買わせてくださいっ！！」

「はい、毎度ありがとうございまーす」

興奮した声を上げたまま、キャロは着けていた下着をその場で脱ぎ、試着室の中にあった自分の服を着るのもそこそこにレジへと駆け出した。ギンガが途中でキャロに声をかけようとするも、そんな暇など無いくらいにキャロの行動は素早く、あっという間に小さな背中はレジの前に行ってしまう。

「……あーあ」

「後で慰めてあげなきゃね」

「まぁ、誰でも最初に通る道ですし」

「でも、ちょっと可哀想かも」

「仕方ないですよ。やっぱり、キャロちゃんも女の子ですもん」

レジの前で代金を支払っているキャロの背中を見つめながら、ギンガ達は懐かしい物を見るような表情で、それぞれ呟く。

……彼女達は知っているのだ。

先程見た、キャロの胸元に出来た小さな“谷間”。

それは――“熟練のプロの技”があるからこそ可能な、まさに奇跡の結晶であり、素人がどんなに頑張ったとしても決してアレと同じ谷間を生み出すことは出来ないのだ……という事を。

「「「「「どんまい、キャロ（ちゃん）」」」」」

帰った後に彼女を襲う絶望感を思い、５人はそっと呟くことしか出来なかった。

――後日。

シャワールームで泣き崩れるキャロと、困った顔で必死にキャロを慰めるフェイトとギンガ達の姿があったという。

ｓｉｄｅ：―　了

ｅｘ２２話　『ある日の風景２　ガールズ編』（後書き）

サービスタイム終了でござる。
どうも、ラモンです。

かなり難しかったですが、何とか書けましたガールズサイド。
今回は最初、感想で頂いた案で書き進めていたんですが、中々上手く書けずにこっちで妥協しました。
まぁ、個人的には面白く書けたと思うので満足です。

下着の描写があまり詳しくないのは、単純に私があんまり詳しくないからです。私、男ですし。
でも、もうガールズオンリーは書きたくないですねぇ。
書きづらいことこの上ない……（汗）　女の子同士の会話なんて、おっさんの私にはわからんですよ！　想像も出来やしねぇっ！！ｗ

それはともかく、次回は原作ストーリーに戻って『機動六課の休日』編に入っていこうと思います。
ギンガとハヤトは休日ではなく、原作どおり密輸関係の捜査に行くことになると思いますが……はてさてどうなるやら。
あ、予定ではありますがルールーも出てくると思われますよ。
ルールーファンはちょっとだけ楽しみにしていてくださいませ。

それではまた、次の話で。

ex23話　『事件の始まりと少女との出会い　1』

休日。それは何とも甘美な響き。
休日。それは何にも変えがたい素晴らしき日々。
休日。それは――

「ハヤト君うるさいよ。今調査してるんだから、邪魔しないで」

「だって、だってですよギンガの姉御……」

「姉御って……もう、いいからハヤト君はそっちの調査をしてて。邪魔しちゃ駄目だよ？」

「畜生、スバル達は休みだってのに何で俺は事件の調査なんだ。世の中不公平でござるよ」

「仕事だからでしょ、はぁ……」

愚痴を零しながら、俺はとりあえず目の前に転がっている残骸――どてっ腹に風穴を開けられた、ガジェット？型と、明らかに何かが入ってたと思われる、壊れた生体ポッドらしきもの――を見る。
生体ポッドは台座部分しか残っておらず、本来壁の部分となっている強化ガラスは破片となって辺り一体に散らばっていた。台座部分には鎖やケーブルといった、何ともきな臭いアイテムが見て取れる。どうやっても、真っ当な何かを運んでいたようには見えないよなぁ。

ちなみに場所はミッドチルダ首都クラナガンにある巨大ビルの地下駐車場。
結構広いその場所には、ぶっ壊れた運送車が横転している。

「運転手は？」

「今、他の捜査員の人が事情を聞いてくれてるよ。ただ、凄く錯乱しちゃってるから、ちゃんとした事情を聞きだせるのはもうちょと後かも」

「そっか……」

まぁ、ガジェットが居る辺りで犯人の目星はつくってものだ。
ただそれよりも今気になるのは――。

「生体ポッドのガラス、だよね？」

「人の考えを読むな……その通りだけどよ」

ギンガに先を越されたが、俺が気になっているのは生体ポッドの欠片。
最初ここに来てガジェットの残骸を見た時は、ガジェットに襲われてポッドのガラスがぶっ壊れたのかと思った訳だ。けれど、ガラスの欠片は台座部分の『外側』に散らばっていた。

「つまりは“中から壊された”って事になるワケだ」

「うん。ということは、このガジェットを倒したのは、きっとその生体ポッドに入っていた“何か”の可能性が高い……ってことだね」

「ご明察。ま、こんだけ状況証拠が残ってたら、脳筋でも分かるわなぁ」

「……帰ったら殴る」

「はいはい。それはともかく、生体ポッドは俺に任せて、お前はガジェットの調査してこいよ。
慌てず急いで正確に、ゲンヤさんに言われたとおりにな」

「ハヤト君にだけは言われたくなかった……！」

ぶつぶつ文句を言いながらも、ギンガは壊れたガジェットの元へと向かっていく。
それを見送ってから、俺はもう一度生体ポッドの残骸とその周辺を見回した。中に何かが入っていたのは、周りの地面を濡らす水を見れば確実だ。
乾ききっていないってことは、中に入っていた物が出てからまだ時間が経っていないという事。
そして、中に何が入っていたのか。

「生体ポッドなんて悪趣味なモンから連想できるのは、１つしか無ぇやな」

元々生体ポッドは、とある目的の為に作り出された機械だ。
そしてそれは現在犯罪と区分され、やろうとする馬鹿なんて居ない筈の技術。
人が神の領域に踏み入った、字の如く神をも恐れぬ行為。それがこの生体ポッドの中身。

「人造魔導師、か。胸糞悪ぃ……」

ったく、どこの馬鹿だよ。わざわざ犯罪行為やって、人の仕事増やす奴ぁ。
見つけたら我が究極奥義を喰らわしてやらなきゃ気がすまん。人様の休日を潰しやがってからに。
街に繰り出して綺麗なオネーサン達に囲まれていただろうに……って、今は置いとこう。

「この生体ポッドの中身、確認は取れました？」

「いえ。これは積荷のリストには載っていない物のようでして……」

「そうッスか。十中八九人造魔導師だとは思いますが、確認を急いでください」

「はっ！」

近くに居た捜査員に指示を出し、俺はまた思考する。

今言ったように、この生体ポッドの中身は人造魔導師……つまりは人間で間違いないだろう。
なら、肝心の中身はどこに行ったか。ガジェットに連れ去られたか、それとも逃げたのか。

「……こりゃ、ちっと急いだ方がいいかね」

ガジェットが持っていったならさすがにもう手遅れかも知れんが、自分の意思で逃げたのなら、恐らくそう遠くには行ってないだろう。
どういう事情があるかは分からんし、まず間違いなく厄介な事件に関わることになるが、面倒だと言ってられる状況でもない。他の捜査員にはこっちの調査を頼みたいから、俺とギンガで周辺を探して、見つけ次第保護……っていうのが無難なとこかね。

「あー面倒くせぇ」

言ってる状況じゃないけど、それでも言いたくなっちゃうんだ。
仕方ないね！

「こらー！　ハヤト君！！　ちゃんと真面目にやりなさーい！！」

「うるっせぇなーもう」

ギャーギャー騒いでるギンガにどう説明したものかと考えながら、

俺は重たい脚を動かしてギンガのほうへと向かうのだった。急がなきゃいけないんだろうけど……気が進まねーなぁ……。
ギンガなら、絶対妙に張り切ってあっちこっち探すだろうし。
あーあ、体力馬鹿に付き合わなきゃいけない俺ってばすっげー可哀相。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ２３話　『事件の始まりと少女との出会い　１』

「さて、と。外に出たはいいが、どこから探すかねぇ？」

人通りの多い街中を眺めながら呟く。
普通に考えりゃ、逃げる時は人ごみに紛れて逃げるのが常套手段だろう。木を隠すなら森の中。しかし生体ポッドに入っていた事を考えれば、恐らく対象は殆ど裸の状態。
そこそこに目立つだろうから、裏路地とかを中心に探していけば見つかる可能性はある。

「ガジェットに捕まってたら、流石に無理だけどね」

「そうじゃない事を祈るばかりだな」

「だね。それじゃあ、早速探しちゃおう！」

「まてまて、適当に探したって見つかる訳ねーだろ馬鹿。クラナガンの広さ舐めんな馬鹿。
とりあえずある程度目星をつけてから探しに行くぞ」

「ご、ごめん……てゆーかそんなに馬鹿馬鹿言わなくてもいいじゃない」

馬鹿に馬鹿と言ってなにが悪いというのか。
さておき、まずは生体ポッドの中身がどこら辺にいるのかを考えなければいけない。

「ポッドの大きさから逆算するに、中身の大きさは子供ぐらい。まぁエリオ達と同じくらいだろうな。
そうすると、足幅的に考えて行動範囲は精々あの場所から半径１～２キロが限界。あのビルの出入り口付近で裸の子供を見たって証言は無かったから、恐らくは下水道かなんかを通って移動してるんだろう。
つーことは、人目につかないように移動してるんだと思う訳だ。

なら、探すべきは路地裏……更に言うなら下水道から繋がってる路地裏だな。
あそこから半径１～２キロ以内でそれに該当する場所は、全部で３２箇所」

ギンガに説明しながら、俺は捜査員から借りてきたこの辺り一体

の地図に印をつけていく。
　３２箇所というとかなり多く感じるが、実際にはある程度固まっているので、調べるのは大きく分けて３つの区域に絞られる。まぁ、それでも結構遠いから大変っちゃ大変なんだけどね。

「とりあえず近場のここととここを別々に探して、それから最後の一区画……ここを探すとしよう。
　あんまり時間はないけど、捜査員の人達を動かすわけにもいかないしな」

「……」

「ん？　どうした、ギンガ？」

　一通りこれからの行動を指示、というか教えたところで、俺は隣にいるギンガに尋ねた。
　何でお前は、そんなびっくりした顔してる訳？　何か変なところあったか？

「う、ううん。全然変なとこは無かったよ？　むしろこれ以上無いってくらいに的確だと思う。ただ、普段のハヤト君とギャップが凄いから、驚いちゃうだけだよ。
　普段からこのくらい真面目で有能だと、私も色々助かるんだけどなぁ」

「喧嘩売ってんなら後で買ってやる。つーか俺はいつでも有能でイケメンだろうが」

「その冗談は面白くないよ、ハヤト君」

「すいませんでした」

ちくしょう、行く前になんでやる気を削がれなきゃならんのだ。

これだからギンガは嫌なんだ、的確に俺が嫌がる返事を平然と返してきやがる。いくら幼馴染だからって、遠慮がなさすぎだろ常識で考えて。俺様は人間が出来ているから平気だが、普通だったら聖王様でも助走をつけてぶん殴るレベルだぞ。

「知りません。じゃ、時間もないし私は行くね。サボっちゃ駄目だよ？

新作のゲームが出てても、買いに行っちゃ駄目だからね？　ゲーセンも勿論駄目」

「わかってるっつの。さっさと行けよ脳筋め。ちょっと胸がでかいからっていい気になるな！

俺の好みは、最低限ハラオウン執務官レベルになってからだ！！」

「……帰ったらお説教！　絶対にお説教だからね！」

ぷんすかと腹を立てながら走っていくギンガの背中を見送り、俺はそれとは逆方向に走り出す。

出来ることなら、さっさと保護してしまいたいところだ。これ以上面倒な事態になるのは、是が非でも避けたいところだしな。最近積みゲーが増えてこまってるんだよ。

「全く、面倒な事にならなきゃいいんだが」

呟きながら、何故か俺は絶対にそうはならないと確信していた。
こういう勘は外れたことがないから、多分面倒な事になるんだろう。個人的にそんな事態は土下座してでも回避したいところなので、仕方ないからそうならないように頑張るとしよう。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

様々な人が行き交うクラナガンの街中。
その雑踏の中に、酷く周りの雰囲気に不似合いな少女が居た。
紫色の腰まで届く長い髪を揺らし、美少女と言って差し支えの無い容貌には余りに不釣合いなボロボロの布を纏う少女は、周囲の訝しげな視線など気にもせずにてくてくと歩く。

しかし、彼女がこの人ごみの雰囲気に不似合いだと思わせるのは、その格好ではない。
少女はただひたすらに無表情なのだ。周りを歩く人間は、喜怒哀楽のうち何かしらの表情を浮かべている。だのに、少女の顔には何の表情も浮かんでいない。

それが少女に周りの雰囲気とのズレを生んでいる。

「……」

無表情な少女はてくてくと歩いてから、止まって辺りを見回す。
そして首を傾げてからもう一度歩き出し、暫く歩ってからまた止まって周りを見る。
何度かそれを繰り返した後、少女は再び首を傾げて呟いた。

「……ここ、どこだろ」

その言葉から推測するに、どうやら少女は迷子になっているらしい。
先ほどから歩いては止まって周りを見回すという行為は、自分の現在位置を把握していたのだろう。
まぁ、先の発言からすればその目的は達成されていないようだが。

「困ったな……」

言葉はそういっているが、彼女の表情は一切変わらぬまま。
本当に困っているのかと問い質したくなってしまう。

「……まぁ、いいか」

そんな風に呟いて、少女は再び歩を進める。
実際、少女にとって現在地がどこであろうと関係ないのだ。少女には、目的としている場所まで一足飛びで移動する手段がある。人目がある場所では使えないが、ちょっと裏路地に入ってその方法を使えば、目的地までは簡単にたどり着けるだろう。
彼女がこうして歩いているのは、ひとえに自分の足で目的地に行きたいという、一種の意地のようなものなのだ。

「ドクターは、場所の教え方が下手」

ここには居ない誰かに文句を言いつつ、少女はてくてくと道を歩く。だが、今回は先ほどまでと同じように一定の距離を歩くよりも早く、少女の歩みは止まっていまう。
彼女の意思ではなく、物陰から突然飛び出してきた1人の少年によって。

「あーくそっ！　次の場所遠すぎだろっ！」

少女の進行方向から飛び出してきた少年は、そのまま滑るように体を回転させ、狙っていたかのように少女の方へと突っ込んでくる。

「っ！？　うわったったっ！！」

「――きゃっ」

少年の方も少女を見つけ、慌てて自分の体を止めようとしたのだが、いかんせん全力で走ってきたのだろう。少年は自分の体を止めることが出来ず、ギリギリまで速度を落とした状態で少女を思い切りぶつかってしまう。

勢いが随分と殺されていたとはいえ、自分より遥かに大きい少年にぶつかられて少女は、小さな悲鳴を上げてその場に転んでしまった。

「悪ぃ！　大丈夫かチビっ子」

「……」

ｓｉｄｅ：―　了

やっべ、ちょっと急ぎすぎた。

そんな風に思いながら、俺は今自分がぶつかってしまったチビっ子に手を差し出す。

けど、チビっ子は転んだ体勢のまま、俺のことを睨むように下から覗き込んでくるだけで、一向に俺の手を取る気配がない。

「どうした？　どっか痛いのかチビっ子？」

「……い」

「え？　何だって？」

「チビじゃ、ない」

何で手を取らないのかと思っていたが、どうやらチビっ子呼ばわりがお気に召さなかったらしい。

俺の腰くらいまでしかないんだから、十分にチビっ子だと思うんだが。

「そうかい。分かったよチビっ子。とりあえずは立ってからにしようぜ？

怪我してるかもしれないしな、ほれ、さっさと立ちなチビっ子」

「……あなた、嫌い」

とはいえ俺も時間がある訳ではないので、チビっ子の意見は置いといて立つように急かす。

そうすると、相変わらず眉を寄せて不満そうな顔のままではあるが、チビっ子は俺の手を取って渋々という感じで立ち上がる。

「――っ」

けれど、小さく息を呑んでその場にへたり込んでしまう。
どうやら足でも挫いたらしく、チビっ子は自分の左足首あたりを押さえている。
……ああもう、何でこう急いでる時に限って色々と問題が起きるんだか。

「大丈夫か？」

「平気」

「平気じゃねーだろ、ちょっと見せてみ」

「イヤ」

「即答かい」

口では嫌がっているものの、俺が足首を見ようとしても特に抵抗はしない。
何このチビっ子、ツンデレ気取りかっ！　なんて事を思いつつ、チビっ子が押さえていた左の足首を軽く触ってみる。

「っ！」

「あー……ちょっと熱もってんなぁ」

触った部分は腫れてはいないが、少しだけ熱を持っていた。

医療には詳しくないけど、まぁこのくらいならちょっと冷やせばすぐに良くなるだろ。つっても、さすがに俺に責任がある以上、このまま放っていく訳にもいかないしなぁ……。

『ギンガ、ちょっといいか？』

『どうしたのハヤト君？　こっちは空振りだったけど、そっちで見つけたの？』

俺はため息をひとつ吐いてから、ギンガに念話を飛ばす。

『こっちも空振りだ。ただ、ちょっとトラブルがあってな。最後の一箇所には予定を変更して、先行してもらっていいか？すぐに追いつくから』

『トラブル？　……そんな事言ってゲーム見てるんじゃない？』

『なにその信用の無さ。ゲームじゃねーよ！　マジでトラブルだよ！』

『……嘘だよ。もし本当にゲーム見てるなら、合流してから言うもんね。何があったの？』

人のことを馬鹿にしておいてクスクスと笑うギンガ。

俺じゃなくてもイラッとしちゃうよね。合流したら覚えてろ。

『急ぎすぎて子供にぶつかっちまってさ、ちょっと捻挫してるみたいだから軽く手当てだけしてく。
だから、そんなに時間をかけずに合流出来る筈だ』

『そっか。もう、ハヤト君は相変わらずおっちょこちょいなんだから。そんなだから、私もハヤト君から目を離せないんだよ。走る時はちゃんと前を見てって、いつも言ってるでしょ？』

『あーあーはいはい俺が悪かったよ』

ったく、ギンガは隙があればすぐに説教だもんなぁ。まったく嫌になるぜ。

『じゃあ私は先行して3箇所目に行っておくから、ハヤト君もなるべく早く来てね？
何かあった時に、やっぱり私1人だと不安だからさ』

『あいよ、了解』

最後にひとつ返事をしてから念話を終える。
あんにゃろう、どんだけ人のこと信用してねーんだ。俺がゲームの為に仕事を放り出したのなんて、過去から数えても１００回程度しかないぞ！
まぁ、ちょっと多い気もするが。

「チビっ子、痛いだろうけどちょっと移動するぞ。冷やさねーと余計に腫れて痛くなるからな」

「別に、いい」

「よくねーよ。ほら、いいから行くぞ」

「ひゃっ……」

首を横に振るチビっ子を抱え、お姫様抱っこで近くのベンチに移動する。

途中で俺に何かされるとでも思ったチビっ子が暴れたが、まぁ大して強い力な訳でもないので特に問題なく運ぶことが出来た。

つーかこのチビっ子は自意識過剰だな。

俺が何かするとしたら、ハラオウン執務官かシグナム副隊長レベルの巨乳だけだってのに。

「よし、ちょっとここで待ってろよ。冷えピタ買ってくるから」

「……別に平気」

「ほぅ？　……てい」

「っ！！」

平気と強情を張るチビっ子の足首に手を当て、軽く押してみる。

すると案の定痛かったみたいで、チビっ子はビクッと体を強張ら

せて息を呑んだ。
　やれやれ、全く意地っ張りなチビっ子だ。ガキの頃の俺なら、遠慮なく大人の好意に付け込んで必要のない物まで買わせたというのに。

「痛いんだったら無理すんなチビっ子。いいから、ここで待ってろ」

「……酷い。意地悪」

「よく言われる。つーか捻挫舐めんな、後で今より痛くなるのは勘弁だろ？」

「……うん」

「素直でよろしい。んじゃ、俺の言うとおりそこで待ってろよチビっ子」

「チビじゃない」

「チビです」

　俺の言葉にチビっ子が頷くのを確認してから、冷えピタの売っていそうな店を探して歩き出す。
　確か近くにコンビニあったと思うんだよな。さっさと買って、あのチビっ子を治療してからギンガに合流しなきゃならん。変に遅れでもしたら、アイツに何言われるか分かったもんじゃねぇ。
　……それに、怪我でもされたら困るからな。

「あーあ、これだから毎日忙しいんだよな～。面倒見のいい俺ってば可哀想」

誰にとも無く呟き、辺りを見回しながら街中を歩く俺。

さて、コンビニはどこだったかな、と。

ex23話　『事件の始まりと少女との出会い　1』（後書き）

わー、いったいこのしょうじょはだれなんだー（棒）
どうも、ラモンです。

そんなこんなで『機動六課の休日』編に突入です。
今回は謎の美少女が出てきましたねー。
いったい彼女は誰なんでしょうか。その正体はもう少し先で明かされる予定です。ふふふ、誰だかわかるまい！（笑）

次回はこの少女とハヤトのちょっとした会話を書いて、ギンガに合流する辺りまでを書く予定です。
そしてその次からは下水道での戦いに突入する……といいなぁ。

それではまた、次の話で。

ｅｘ２４話　『事件の始まりと少女との出会い　２』

予想していた通り、チビっ子を座らせたベンチの近くにコンビニがあったので、自腹を切って冷えピタと固定用の包帯を購入。寂しくなった財布に涙を流しながらチビっ子のところへ戻る。
もしかしたらどっかに行っちまったかと思ったが、チビっ子は俺がコンビニに行った時と同じ場所で同じような格好のままちゃんと俺のことを待っていた。どうやら、意外と素直らしい。

「待たせたなチビっ子」

「……」

声をかけると、チビっ子は視線を俺に向ける。
やっぱりチビ呼ばわりは嫌なのか、眉を寄せてこっちを睨むような感じではあるが。
まあそんなの気にしないんですけどね！　チビっ子はチビっ子だし。

「ほれ、足出しな。冷えピタ貼ってやるから」

「……自分で、出来る」

「いいからいいから」

「……ぁ」

嫌がるチビっ子の反論は聞かず、チビっ子が痛くないように注意しながら左の足首を持って、買ってきた冷えピタを貼り、その上から包帯をぐるぐると巻いて固定した。うむ、我ながら中々の出来だな。流石俺様！　何でも出来て困っちゃうぜ。

「冷えピタが冷たくなくなったら貼り変えしろよ？　自分で出来ない時は、誰かにやってもらいな」

「……うん」

「連れの人はいるか？　居るんなら、そこまで運んでってやるけど」

「……大丈夫。歩ける」

俺の質問に首を振ってそう答え、チビっ子はベンチから降りる。どうやら言葉に嘘偽りはないようで、さっきとは違って辛そうな感じは見えない。つってもまぁ、このチビっ子表情変わんねーから、イマイチ分かり辛いんだけど。

「とりあえずは大丈夫そうだな。けど、あんま無理はすんなよ？　ほら、あんま無理しないで座っとけ。それと、明日になっても痛みが酷い時は、迷わずに病院に行っとけよ。あー……そうだな、病院行った時はここに連絡しな」

そう言ってチビっ子をベンチに座らせて、財布から名刺を取り出してチビっ子に渡す。
個人的にこれ以上の出費は痛すぎるが、診察代くらいは出さないとなぁ。

「……時空、管理局？」

「おうよ。正義の味方。市民の皆様の心の友、管理局員だ」

「貴方が？」

「当然。むしろ俺以外に誰がいると？」

「……嘘はだめ」

「嘘じゃねーよ。失礼なチビっ子だな貴様」

人の名刺を見て失礼なことを言ってくるチビっ子の頬を、おしおきの意味も込めて軽くつねる。
ふむ、ギンガやスバルと違ってもちもちした素晴らしい触感だ。
子供特有のもち肌というヤツだな。
むにむにむに、と……やだ、ちょっと癖になるじゃない。

「いたい」

「おしおきだおしおき。いいかチビっ子、初対面の人に失礼なことを言っちゃ駄目なんだぞ。

俺様が寛大だからこの程度ですんでるけど、悪い人だったらもっと酷いことされるかも知れねーし」

「……貴方も、十分に酷い」

「んなこたねーだろ。世間の厳しさを、チビっ子相手に優しく教えてあげてるんだ。俺以上に優しい人なんて、次元世界中を探しても1億人以上くらいしかいねーって」

「……すごく多い」

つねっていた頬から手を離して喋っていると、初めてチビっ子の口元が少しだけ綻んだ。

ずっと無表情だから少しだけ心配してたんだが、ちゃんと感情の起伏はあるらしい。ってよくよく考えてみれば、最初の方でも俺のこと睨んだりしてたか。

「ま、そんな訳で何かあったら連絡しな、正義の味方のオニーサンが助けに行ってやるよ」

「……」

「っと、結構時間経っちまったな」

ふと近くにあった時計を見ると、チビっ子とぶつかってから結構な時間が経っていた。

しまった、ちょっと時間かけすぎたな。これじゃあ俺が着くころ

には、ギンガの奴が最後の1箇所の調査終えてんじゃね？　うは…
…こりゃ説教覚悟だなぁ……欝だ。

「じゃ、じゃあ人を待たせてるから、俺はそろそろ行くわ。
酷い捻挫じゃねーから歩くのは平気だろうけど、飛んだり跳ねたりはやめとけ。それから、病院に行くならちゃんと連絡しな、今回は俺が悪いんだし、治療費とかちゃんと払うから。そんじゃなー！」

「あ……」

行きたくはないが行かないともっと酷い目に遭うので、俺は早口にチビっ子にそれだけ言うと、向こうの返事を聞かずに踵を返して走り出す。
一生懸命に走っていけば、もしかしたら情状酌量の余地があるかも知れんしな！
……まぁ十中八九無理だろうけどさ。

ｓｉｄｅ：－

「あ……」

走り去るハヤトの背中を見ながら、少女は小さく声を上げた。
けれど彼女の出した声はあまりに小さく、ハヤトに届く前に雑踏

の声に消されてしまう。

「……」

残された少女は、ハヤトから手渡された名刺に視線を落とす。
書かれているのは走り去ったハヤトの名前と、所属している部署名、そして携帯端末の番号。
それをしばらく眺めた後、少女は一度自分の左足首を触る。そこに感じるのは、ハヤトに手当てされた証である包帯の感触。

「ハヤト＝ロックウェル……か」

包帯を触りながら呟く少女の口元には、僅かな微笑みが浮かんでいた。
そして、少女はベンチから立ち上がると再び町の中を歩き出す。
先ほどまでと違うのは、その右手にハヤトから渡された冷えピタの箱と、彼の名刺があるくらいだろうか。

「……」

てくてくと歩きながら、少女はもう一度ハヤトの名刺に視線を落とす。

「――変な人、だった」

そこに書かれた名前を読みながら少女はもう一度、今度は更に小さく、彼女と長く付き合っている人間でさえ気づかない程かすかに笑うのだった。

ｓｉｄｅ：―　了

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ２４話　『事件の始まりと少女との出会い　２』

年中程よい暖かさが続くミッドチルダですが、今年は少し暑さが厳しいようです。
皆様いかがお過ごしでしょうか？　ちなみに俺ことハヤト＝ロックウェルは今――

「……」

「……えーと」

――目の前に居る修羅のご機嫌取りの真っ最中です。ええ。

「……」

「す、すみませんでしたギンガさん。ちょっと色々とあって遅れてしまいました。
決してゲームを見てたり、綺麗なお姉さんをナンパしてたとか、そういう訳じゃないんです。
信じてくださいお願いしますギンガさん」

現在、俺は両手を組んで仁王立ちしているギンガの前に正座させられている。
何でかって言うと、あのチビっ子に構いすぎたせいで結構な時間を使ってしまい、調査予定だった最後の1箇所に俺が着いた時には、調査はギンガが1人で終わらせてしまっていたのだ。
理由を考えれば確かに俺が悪い。悪い……んだが。

「……」

「な、何か言ってくれると嬉しいなー、なんて思っちゃう訳なんですけども」

ギンガが怖いんですよ。もの凄く怖いんですよ。
それこそちょっとチビっちゃう位に怖いんですっ！！　何も言わないってのは、ギンガが本気で怒ってる証拠ってのが分かってるから、それが余計に怖いんですよ。

ああ、俺今日生きて六課の部屋に帰れるかなぁ？

「……」

（ち、沈黙が痛ぇ……！）

針のように鋭いギンガの視線に晒されてちょっと逃げ出したくなるが、そんな事をしたら現状が更に悪化するのは目に見えている。なのでここは我慢して待機。

正座しすぎて足の感覚が無くなってきたけど我慢。

「ハヤト君。私たちは今、一般人に被害が出るかも知れない代物を追ってるんだよ？」

「……ああ、分かってる」

「3箇所全部が空振りだったから良かった……本当は良くないけど、もし私1人で抑えられなかったら、街の人たちが何人も犠牲になってたかも知れない」

「ん……そうだな」

「それを踏まえた上で、何か言いたいことは？」

「ねぇな。今回は完璧に俺が悪い、すまなかった」

言い訳はせず、ただそう言って頭を下げる。
実際、言い訳のしようも無いんだよな。ギンガが言っていたのは完璧に正論で、誰がどう見ても今回は俺が一方的に悪い。あのチビっ子の事を言い訳にする気も無いしな。
チビっ子との事だって、元を正せば俺が悪いんだし。

「……そっか」

「ああ」

俺の答えに、ギンガはため息を吐くだけだった。
こっちは一発ぶん殴られる程度の覚悟はしてたんだが、ちょっと拍子抜けだったな。
いや、まだ説教終わった訳じゃないから油断はできんけど。

「とりあえず何も無かったことだし、お説教はこのくらいにしておこうかな」

しかしどうやらギンガの説教はこれで終わりらしく、こっちに向ける視線を和らげて笑う。
もうちょい説教が続くかと思ったけど、反省してると分かってもらえたらしい。いや、ちゃんと反省はしてますよ？　俺のキャラじゃないが割とマジに。
ただ、ギンガにこれ以上そう思われるのも癪なので、俺は減らず口を言いながら立ち上がった。
うおー。思った以上に足の感覚がねー。

「やれやれ助かった。いい加減、足の感覚が無くなってヤバかった所だ」

「そのくらいは罰として当然でしょ？　今回は私、本気で怒ってたんだから」

「悪かった、ホント反省してる」

感覚の無くなった足を軽く叩きながら、ギンガに向かって苦笑する。

しかし、状況的には笑っている訳にもいかないので、俺は笑いを引っ込めてギンガに尋ねた。

「で？　こっちも空振りだったって言ってたけど……」

「あ、うん。この辺りを回って探してみたんだけど、それらしい痕跡は見当たらなかったの。

もしかしたら、まだ地下水路を移動中なのかも知れない」

「そうか……さて、困ったな」

「そうだね。見つからなかったってことは、ガジェットに連れて行かれたか、もしくは……」

「俺たちが遅かったか。どっちにしても、あんま歓迎すべき事態じゃねーな」

腕を組み、目を閉じて思考に耽る。
生体ポッドの大きさから、中に入っていたのは子供くらいの人造魔導士と勝手に決め付けてたが、もしかしたら同じ大きさの『人ではない何か』だったのかも知れない。
それなら俺たちが追いつけなかった事にも説明がつく。
仮に中に入っていたのが獣型の何かだとすれば、移動速度は人間の比じゃない。

「ったく、最近事務仕事ばっかで、俺様の金色の脳細胞もちっとボケてたか」

「誰の何が金色かはおいといて、確かにいつものハヤト君らしくないミスだね」

「人に頭脳労働押し付けてる、どっかの脳筋に言われたくねーよ」

「あら。女の子に肉体労働全般を押し付けてる、どこかの誰かさんには言われたくないなー」

「……」

「なーに？　何かあるのかなー？」

「ねぇよ畜生」

勝ち誇った顔のギンガが凄まじくムカつくが、今回はさっきのも

あって微妙に分が悪い。
　仕方ないから今回は引き下がり、脳筋の言わせたいようにしとくのがいいだろう。いや、俺の精神状態的には全く良くないというか、すっげー悪影響だけど。

「とりあえず、まずはハラオウン執務官に連絡しよう。逃げられたにしろ、ガジェットが連れて行ったにしろ、ここから先は俺たちだけで何とかできるモンじゃねぇ。
　最悪の場合、それこそ六課とかゲンヤさんに出動頼むかの知れないしな」

「了解。すぐに連絡するね」

　ギンガがそう言って携帯端末を取り出したところで、俺とギンガの2人に、同じタイミングでデバイスを通じた全体通信が入った。
　発信者の名前を見れば、そこにはエリオの名前。
　アイツ、今日は確か休日でキャロとデートしてたんじゃねーのか？

「ははーん、デートで失敗して俺たちに助けを求めてきたな？」

「いや、そんなハヤト君じゃあるまいし……」

「いいだろうエリオ。俺がお前に世間の厳しさというヤツを教えてやる！
　べ、別にデート出来て羨ましいとか、そういうんじゃないんだからねっ！！」

「エリオ君とキャロちゃんにまで嫉妬するとか、情けないよハヤト君」

「うっせー！　妬ましくないって言ってんだろ！！」

隣で盛大にため息を吐いてるギンガに怒鳴ってから、俺は通信に意識を戻す。

ちくしょうエリオめ。ただ休日ってだけでも羨ましいのに、更にデートとかもうね、リア充はもげてしまえばいいんだよ！　具体的にどこが、とは言わないけど！！

『こちら、ライトニング０４。緊急事態につき、現場状況を報告します！』

「緊急事態？」

「コールナンバーって事は、何か事件か？」

「私たちの探し物に関係してるかも」

「……かもな」

緊急事態という言葉に、俺とギンガの間に緊張が走る。

やれやれ、せっかく息抜きにリア充をからかって遊んでやろうと思った……りはせず、気持ちを切り替え、デバイスを通じて聞こえてくるエリオの声に耳をこらす。

『サード・アベニューＦ－２３路地裏にてレリックと思しきケースを発見。ケースを持っていたらしき小さな女の子を１人保護しました。見た限り、酷い怪我はしてないみたいです。
ただ、凄く衰弱しているみたいで、僕達のことを見つけた途端に気絶しちゃいました』

「「！！」」

聞こえてきた声に、俺とギンガは目を丸くして互いの顔を見る。

「ハヤト君、この女の子って……」

「ああ、十中八九生体ポッドの中身だろ」

このタイミングでレリックの入ってるケースを持った子供……あの生体ポッドとの関係なんざ、アホでも簡単に結び付けることが出来るってもんだ。

「ただ、ちょっと気になるな……」

Ｆ－２３の路地裏といえば、ギンガが担当して最初に向かった候補地だった筈だ。
ギンガが手を抜いて調査したとは思えない。

「ギンガ、見逃した可能性は？」

「ありえないかな。ブリッツキャリバーに広域スキャンもしてもらったし。
このくらい調査の基本だもの、それを忘れたりしないよ」

「なら、なんで――って、そういう事か」

頷きながら考えようとして、俺は疑問の答えを唐突に思いついて手を打った。
なるほど、考えるまでも無い簡単な事だったな。

「え？　なに、どういうこと？」

「簡単なことだって。単純にな、俺たちが速く動きすぎたんだ」

きょとんとした顔で事情の飲み込めていないギンガに解説するべく、俺は携帯端末に示した地図を見せながら解説を続ける。

「エリオが言ってた通り、生体ポッドの中身は人間の子供だった。
だから行動範囲自体は間違ってなかった。けど、俺らはその子が『普通の状態で』動く速度を元に、あっちこっち調査して回ってた訳だな？」

「うん、そうだね」

「けど実際には中身だった子供は『普通の状態』じゃなかった。
レリックの入ったケースを持っていたみたいだし、かなり衰弱していた……それこそ、エリオ達と会った瞬間に気絶するくらいに、だ。ということは、どういう事だ？」

「えーっと……あ、そういう事ね！」

流石にここまで説明すればわかったらしく、ギンガも手を打って声を上げた。

「この子の移動する速度は、私たちの予測していたよりもずっと遅かった」

「そうだ。つまり俺たちは先回りしすぎちまったから、見つけられなかったって事になる」

「なるほど……この子が意図的に私から隠れたんじゃなくて、私たちが急ぎすぎちゃったんだ」

もちろん意図的に隠れてたって可能性も０じゃないが、逃げる気があったならエリオ達に見つかった時点で逃げようとする筈だし、多分俺の予測で間違ってないだろう。
ギンガの調査から逃げられるとは到底思えん。

何せこの野郎、人様が大事に大事に保管しておいたエロ本を全て廃棄しやがったからな。

くそっ、俺がグランセニック陸曹からそこそこのお値段で買ったエロ本――しかも、絶対に見つからないように壁紙の裏に隠しておいたヤツ――を、ひとつ残らず見つけて捨てるとか……。
あ、ちょっと泣けてきた。

「ともかく、無事に保護できたみたいでよかったよ」

「うん。時間的に考えても、間違いなくこの子で決まりだろうしね」

エリオから届いた報せと現状と照らし合わせ、とりあえず一安心と息を吐く。
後は、保護されたその子供を病院で検査してもらって、人造魔導士かどうかを確かめるだけか。
……あー、気が滅入るな。そういう作業は。

「さて、と。まずはエリオ達と合流するか。
もし途中で部隊長からの指示がくれば、そっちに従う感じでいこう」

「了解。保護された子の様子も気になるし、ちょっと急ごう。ハヤト君」

「んな急がなくても平気だろ。恐らくシャマル先生だって向かってくれてるし、キャロが一緒なら簡単な治癒魔法程度はやってるだろうから」

「もう！　ハヤト君は心配じゃないの！？　小さい子供なんだよ！」

「いや、そりゃ心配だけどよ」

何か知らんが興奮気味に走り出すギンガを追いかけつつ、俺はやれやれと肩を落とす。

こいつは昔から、小さい子が相手だと変に張り切るんだよなぁ。

まぁ、スバルっつー妹がいつも一緒だったし、過保護な姉ちゃんを間近で見てきたのが原因なのは間違いないけど。

「ハヤト君遅いよ！　そんなんじゃ、向こうに着く頃には日が暮れちゃうんだから！」

「5，6キロの距離で日が暮れるかよ……」

あーもー、心配なのは分からんでもないけど、少し落ち着いて欲しいもんだ。

付き合わされる俺の身にもなれって話だ。どうせ言ったところで、「ハヤト君なら大丈夫だよ！」とか何とか言って聞いちゃくれねーんだろうけどよ。

だけど、実際少しペースを落とした方がいいな。ギンガのヤツ、ここまで結構走ってきただろうから、本人が自覚して無くても結構疲れてるだろうし。

問題はどうやってコイツの足を一旦止めるかだが……あ、ひとつ思いついた。めっちゃ実行したくないけど思いついちゃった。

「ところでギンガ」

「え、何!?」

心底嫌だが、現状これ以外の手も思いつかないので実行に移す。

まずはギンガの横に並んで、と……。

「お前、黒の下着とかいつ買ったの?」

「え?　この間ティアナ達と一緒に買い物に行った時……って、何で知ってるの!?」

「さっき説教されてる時に見えた」

「何で見たの!?」

「正座してる相手の前で仁王立ちすりゃ、見えて当然だろうが……」

こっちの思い通りに急ブレーキをかけて立ち止まり、顔を真っ赤にして詰め寄ってくるギンガ。

つーか気づいてなかったのかよ。俺はてっきり、コイツがそーゆー趣味に目覚めたんだとばっかり思ってたから、今日の仕事が終わったらそれとなく注意するつもりだったのに。

「わわわわ忘れて!　見たもの全部忘れて!　てゆーか忘れなさい!」

「言われなくても忘れるよ。別に見たくて見た訳じゃねーし」

「それはそれで何か腹が立つんだけど！？」

「じゃあどうしろと」

「うー。忘れて欲しいけど、そんなあっさり忘れるって言われるのも屈辱的だし……」

真っ赤な顔でオロオロしながらぶつぶつ呟くギンガを見て、とりあえず安心する。

ま、到着は少し遅れるだろうけど、これで簡単な休憩くらいにはなるだろ。ギンガは体力馬鹿だし、ちょっと休憩すりゃ、後はバリバリ頑張ってくれるから、俺も楽になるってもんだ。

ふっ、このハヤト＝ロックウェル。自分が楽をする為には手段など選ばん！！

選ばん――が。

「うわぁぁんっ！　見たのは忘れて！　全部忘れてーっ！！」

「だから、別に俺だって見たかった訳じゃねーし、すぐ忘れるっつってんだろ！」

「だけどもうちょっと悩んでくれてもいいじゃないーっ！！」

「どないせーっちゅーんじゃお前は！？」

「女の子のプライドの問題なのーーーーっ！！」

「意味わかんねーっ！！」

次からは、ちょっと手段選んじゃおうかなー……と。

そう思わずには居られない俺でありました。

ｅｘ２４話　『事件の始まりと少女との出会い　２』（後書き）

あ、結局謎の少女（笑）の正体明かしてないや……。
どうも、ラモンです。

そんな訳でいよいよヴィヴィオ登場です。
台詞があるのはもっと先になりますけどねｗ
そして結局名前を出してあげられなかった謎の少女（笑）。彼女とハヤトが関わったことで、この先の展開にどう影響が出てくるのか。
……それは私にも分かりません。
だって行き当たりばったりでストーリー考えてますからねぇ。

さて、次回はいよいよ下水道に突入です。
ギンガとハヤトは、エリオ達に合流させてからスタートか、原作と同じく別の場所からスタートかはまだ決めていません。
どちらにしても、楽しく読んでもらえるモノを書けるように頑張っていこうと思います。

それではまた、次の話で。

ｅｘ２５話　『下水道と不思議な再会　１』

『うん、バイタルは安定してるし、変な魔力反応も無い。とりあえずだけど、今のところは大丈夫そうね。このまま病院まで搬送できそう』

「……ふむ」

「よかったぁ。酷い怪我とかしてないみたいで」

全体通信で聞こえるシャマル先生の声に、俺は頷き、ギンガは安堵の息を漏らす。

ちなみに俺たち２人が居るのは、女の子が保護された場所から２キロほど離れている場所。途中でギンガをからかっていたせいで、まだシャマル先生やハラオウン執務官とは合流できていない。

もっとも、元々そのつもりだったから別にいいんだけどね。

「そうだ、シャマル先生。その子に、何かの魔法を使った痕跡はあります？」

『魔法の痕跡？』

「はい。出来れば、すぐに調べてもらいたいんですけど」

先生の診察がひと段落したと見た俺は、そこで気になっていた事を尋ねた。

さっきは俺たちが先回りしすぎて、保護された子を見つけられなかったという結論を出したが、よく考えれば女の子が何かしらの魔法を使って広域スキャンを誤魔化したとも考えられる。
仮にそうだとすれば、色々と警戒しなくちゃならないからな。

『了解、ちょっと待ってね。
えぇっと……うん、私が判別できる範囲では、そういう痕跡は見当たらないかな』

「そうですか。すいません、変なこと聞いて」

『いえいえ』

苦笑してるようなシャマル先生の声を聞きながら、俺はやれやれと息を吐く。
とりあえずではあるけど、どうやら俺の懸念は思い過ごしだったらしく、これ以上面倒ごとが増えることはないらしい。よかったよかった。

「……難しい顔してると思ったら、そんなこと考えてたんだ」

「まぁ、お前の相方を長年やってるからな。疑り深くなっちまってんだよ」

「それどーゆー意味!?」

どういう意味もなにも、当然のことだろうに。
ギンガは子供の頃から基本的に即決即断、その場の勢いとかで物事を決めることが多い。まぁそれでも殆どの場合、その判断が間違いじゃないから凄いとは思うんだが……そんな奴とコンビを組んでると、どうしても相方である俺は、色々と考えなきゃいけなくなる訳で。
長年そうしてきたせいか、最近じゃめっきり疑い深くなってしまった。

「まったく。ギンガには困ったもんだよ、露出狂だし」

「ろしゅっ……!?　ち、違うもんっ！　アレはハヤト君がスケベだっただけだもんっ！！」

「何をどうしたら俺のせいになるんだよ。見せてたのお前だろ」

「見せてた訳じゃないわよっ！」

「仁王立ちだったのに？」

「う〝っ……」

反論してくるギンガを一言で切り捨て、俺は全体通信に耳を済ませた。
保護された子供――つまり俺たちが追いかけていた子に危険性が無いのなら、とりあえず俺たちが今急いでやるべき事は無くなった事になるな。
事故現場のことはあっちにいる捜査員の人たちに任せておけばい

いだろう。
あの現場がある辺りは、元々俺らの管轄じゃなかったし。俺たちがあそこに行ったのは、ゲンヤさんに頼まれてた違法取引の捜査中に、あのトラックが引っ掛かったってだけだ。違法取引されていたのは、間違いなくあの生体ポッドで、その中に入っていた子供も保護できた。
とりあえず、一件落着ってところだろう。

「何を綺麗にまとめようとしてるわけ！？」

「うるっせーなぁ。通信聞こえないから黙っててくんねぇ？
レリックもあるって話だし、もしかしたらガジェットとか来るかもしんねーだろ」

「むきーっ！！」

通信の向こうでは、高町一尉がティアナ達に色々と指示を出している。
どうやら、保護した子供が持っていたレリックは1個だけだったのだが、もう1個持っていた形跡があったらしい。現場に居ないから本当かどうかはわからないが、もしそうなら早くそっちも確保しないといけないな。

『ケースとこの子はヘリで搬送するから、みんなは現場検証をお願い。
現場指揮はティアナ。それで、ハヤト君はいつも通りティアナの補佐をお願いできるかな？』

「了か……あー、いやちょっといいですか、高町一尉？」

『ん？　どうしたの？』

高町一尉の指示を聞いて、俺はちょっとした提案をしてみようと思った。

一尉はティアナに随分と期待してるみたいで、ちょくちょく俺たちだけに仕事を任せて、ティアナに現場指揮、補佐に俺を指名してくることがある。

おそらくはティアナに色々経験させておこうって事なんだろう。

姉ちゃんも、指揮は“習うより慣れろ”って言ってたし。

ただ、ずっと俺が補佐してるから、最近ティアナがちょっと俺を頼り過ぎになってる気がする。原因の半分は、俺が心配だからってアレコレ口出ししてるせいなんだけど。

まぁそんな訳で、そろそろ独り立ちの時期が来たという訳ですよ。

「今回は、俺は補佐しないでティアナに全権任せちゃってもいいですかね？」

『えぇぇっ！？』

『……あぁ、確かにそうかも。でも、一応理由を聞いてもいいかな、ハヤト君？』

「ぶっちゃけさっきまで走り回ったので、補佐とかマジ面倒くさいです」

『ちょっとぉっ!?　なに本音言っちゃってるんですかぁぁぁぁ!!!』

「もうアレだ。レリックとかあげちゃえばいんじゃね?」

『あげられる訳ないでしょうが!　あああもう、ちゃんとしてくださいよっ!!』

『そっか。じゃあしょうがないね』

『しょうがなくないですよ!?　なのはさんまで何言ってるんですか!?』

どうやら、なのはさんは俺の意図が通じたらしく、結構あっさりと許可をくれた。

ティアナには通じなかったみたいで、通信の向こうで必死に声を上げてるけど……やれやれ、ティアナにも困ったものだな。センターガードたるもの、この程度で動揺してどうするんだ。

なぁ、ギンガ?

「そうだね。ハヤト君とりあえず殴っていいかな?　いいよね?つーか殴らせろ」

「突然の暴力を振るう女性。これは社会問題に発展してもおかしくない。どうしてこうなった」

「ホントどうしてだろうねー原因が全く思い当たらないねー。よし、

殴る」

全力で殴られました。
俺はティアナの成長を願っての事なのに、意味分からん。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ２５話　『下水道と不思議な再会　１』

それから数分後。
俺とギンガは、揃ってバリアジャケットを展開した状態で下水道を走っていた。
理由は簡単。あの後すぐに、下水道に多数のガジェットの反応があった。つまり、レリックがもうひとつあるっていうのは本当で、それは下水道の中にあるって事が証明された事になる。
なので、俺とギンガを含めたフォワードの６人は下水道に入ってレリックを確保する事になった。

「ガジェットはティアナ達の方に行ってるみたいだね」

「ん……あぁ、そうだな」

「こっちには殆どいないみたいだし、急いで合流しなきゃ！」

同時に子供が保護された場所から結構離れた海上にもガジェットの反応があったらしい。
こっちは高町一尉とハラオウン執務官、そして丁度近くで陸士部隊の演習を手伝っていたヴィータ三尉とが対応する事になり、そして保護した子供とヘリの護衛はシャマル先生という事に。
ヘリがちょっと手薄な気もするが、そこは部隊長が何か考えがあるらしい。

「で、俺たちはこうして走っている訳なんですけども」

「けど、どうしたの？」

ブリッツキャリバーで俺の前を先行するギンガが、不思議そうにこっちを振り返る。
そして、後ろを向いた状態でも自分の前にある障害物はスイスイと避けて進んでいく。こればっかりは本気ですげぇと心底思う。
ちなみにブリッツキャリバーは足に装着するタイプの、ローラースケート型のデバイスだ。魔力によって加速する為、その速度はかなり速い。

「ちゃんと前見て走れよ。怪我してもしらねーぞ？」

「大丈夫大丈夫。昔からこういうのは得意だもん。ハヤト君もよく知ってるでしょ？」

「いや、そりゃそうだが……」

今は俺に合わせて速度を落としてるとはいえ、それでも何かにぶつかれば怪我をするかも知れないってのに、ギンガはこっちを向いたままスイスイと障害物を避けて行く。

ブリッツキャリバーがある程度補助してるんだろうけど、昔のただのローラーだったころも似たような事やってたし、元々こういう才能でもあったんだろう。

……けど、けどね。

それとは別に、ある意味コイツすげーって思わざるを得ない事もあるんですよ。

「つーか、そうじゃないんですよギンガさん」

「うん？」

「俺たちは今、地下に居るわけですよね？」

「そうだね。だって下水道だもん」

俺とギンガは、ティアナ達から離れた場所に居たので、あいつらとは別の場所から下水道に入り、合流場所を決めて途中で合流、それからレリックを探す手筈になっている。

ガジェットも動いてる訳だし、やっぱ別々だと心配だからな。

「あぁもう、回り道って面倒だなぁ～」

ただ、下水道は結構入り組んでいるので簡単に合流って訳にはいかない。

離れていたのは2キロくらいなんだが、実際には回り道しなきゃいけないから、3キロか4キロくらい走ることになるわけだ、普通なら。

そう――“普通”なら、だ。

「よいっ……しょおっ！！」

なんと、ギンガは掛け声と共に目の前の壁を殴りつけた。

綺麗な正拳突きを決められた壁は吹き飛び、ガラガラという音と砂煙を上げて崩れ落ちる。

当たり前っちゃ当たり前だ。ギンガが本気で殴ったら、コンクリなんてただの石の塊と一緒だ。それにこうやって壁壊すの、もう3回目だし。

「ねぇギンガさん」

「なぁに？　もう、急がないとティアナ達に追いつけないよ？」

再び走り出そうとしたギンガを呼び止め、走り出すのをやめさせる。

ギンガは納得いかないという顔でこっちを振り返り、腰に手を当

てて口を尖らせた。

「ここら辺って廃棄区画だから、色々脆くなってるって知ってる？」

「知ってるよ、そのくらい」

「あぁ、なんだ知ってたのか」

咎めるようなギンガの口調に、俺はホッと安堵の息を吐いた。
てっきり、何にも考えず適当にあっちこっちぶっ壊して進んでるのかと思ってたぜ。

「おかげで壊しやすいから助かってるもの。脆いっていいよね」

「……お前に期待した数秒前の自分をぶち殺してやりたい」

「え？　なんで？」

何故そこで不思議そうに首を傾げるんだお前は。

「脆くなってるんだから、適当に壊したら崩落すっかもしんねーだろ！？
なんなの！？　馬鹿なの！？　死ぬの！？」

「あぁ、そんなこと心配してたの？　大丈夫大丈夫」

「何が!?　ねぇ何が大丈夫なの!?」

自信満々という顔で胸を張るギンガ。だから見せ付けるなよ、その痴女みたいな格好で。

もうやだこの脳筋……と俺が嘆いている横で、ギンガは「いい？ハヤト君」と指を立てて説明し始めた。特に頼んでないのに。

「下水道っていうのは、元々崩落の危険が無いように基礎工事をしっかりやってるの。

だから、こうやって多少どこかが壊れたって平気なように出来てるんだよ？　ちゃんと壊す壁の枚数は最小限になるようなルートにしてるしね。私だって、何も考えてない訳じゃないんだから！」

「……」

「あ、あれ？　私、間違ったこと言った？」

「いや、言ってねぇけど」

驚いた。てっきり、適当にぶっ壊してるもんだとばかり……。

でも言われてみればそうだよな。いくら頭脳労働を俺が担当する機会が多いとはいえ、ギンガだって1人で捜査を担当したりするんだ。馬鹿じゃあやってらんないよな。

いかんいかん、ちょっとギンガを馬鹿にしすぎてた。

「すまんかったギン――」

「まぁ、実はさっきまでのは適当に壊しちゃってたんだけどね」

「――何なんだよもぉぉぉぉ！！　俺の反省返せよぉぉぉぉ！！」

謝ろうとした矢先にがっかり発言だよ！

もうなんなのこの子！？　見直そうとした自分が恥ずかしいわ！！

「いきなり騒がないでよ、うるさいなぁ。ほら行こう？　ティアナ達に怒られちゃうし。

あ、それにあの生体ポッドとかの話は八神部隊長にしておいた方がいいよね？　この件と関わりがあるかもしれないし。ハヤト君、そっちはお願いできるかな？」

「……うん、わかったよ。僕頑張る」

「？　変なハヤト君」

もうヤだコイツ。どんだけフリーダムなの？

ストライクフリーダムも真っ青だよ。あ、あれは元から青かったか。

ああもう、人が疲れてるのをいいことにアイツまた壁壊してるし……ちくしょう、結局俺は苦労するポジションなのか。こういうのは普通、主人公の悪友とかがやるポジションだろうに。

はいそこ、現実とギャルゲを一緒にするなとか言わない！

「おい待てってギンガ！　ガジェットが来るかもしれねーんだし、そんな1人で先行すんな！
それとブレイブハート、八神部隊長に通信繋いでくれ！」

《　了解しました　》

やることがてんこ盛りで嫌になるが、まずはギンガを止めるのが先だな。
面倒な事ばかりやらされて気分が重くなるのを感じながら、俺は八神部隊長に報告する為に通信を繋いぎつつギンガの後を追う

「あ、八神部隊長ですか？　ちょっと気になることがあるんで報告します……ってギンガ待て！　はえーってマジで！！　俺のこと置いてく気かよコラ！
あぁすいません、今ちょっとギンガの馬鹿がはりきってて――」

ティアナは楽なんだろうなぁ。スバルはともかく、エリオとキャロは素直ないい子だし。
ちくしょう、何で俺はコイツとコンビなんか組んでしまったんだ。
後悔先に立たずとはよく言ったもんだぜ。昔の俺に小一時間言い聞かせてやりたいよまったく！！

◇◇◇◇◇

side：―

ハヤトがため息を吐きながら四苦八苦している頃。廃棄区画の中にある、それなりの高さを持ったビルの屋上に立った電波塔の上に、1人の少女が腰掛けていた。

腰まで届く紫の髪が特徴的なその少女は、街中でハヤトと出会ったあの少女だった。

「……」

少女は電波塔に腰掛け、無表情なまま足をブラブラと揺らして、左手に持った冷えピタを眺めている。

その表情に変化はないのだが、その顔はどこかつまらなさそうにも見えた。

『お嬢様』

「……ん」

どのくらい時間が経っただろうか。退屈そうにしていた少女の顔の横に、不意に1人の女性が映ったモニタが開く。映っている女性は、少女よりも色素の薄い紫の髪と、切れ長の金色の瞳が特徴的な女性。

女性の声に、少女は視線をモニタに向ける。

「ウーノ。どうしたの？」

少女はモニタに映る女性の名を呼び、首を傾げた。
ウーノと呼ばれた女性は、少女を見てすまなさそうに眉尻を下げ、言葉を続ける。

『ヘリに確保されたケースとマテリアルは、妹達が回収します。
お手数ですが、地下にあるケースの回収をお願いしてもよろしいでしょうか？』

「うん……」

伺うようなウーノの言葉に、少女は小さく頷いて返す。

「ありがとうございます……あら？」

少女の言葉に軽く頭を下げたウーノは、そこで初めて少女の左足に巻かれている包帯に気づき、心配そうな表情で少女に尋ねる。

「お嬢様、お怪我を？」

「……ちょっと」

「でしたら、今回の事は他の妹に……」

「大丈夫だよ……痛く、ないから」

「ですが……」

少し慌てた様子のウーノに首を振って見せ、少女は彼女の言葉を拒否した。

ウーノは尚も言い募ろうとしたが、少女は何を言っても首を振るばかりで、彼女の言葉を聞き入れようとはしない。

何度かそのやり取りを繰り返した後、ウーノは諦めたようにため息を吐いた。

恐らく、これ以上は何を言っても無駄だと判断したのだろう。

「わかりました。それではお嬢様、お願いします」

「……ん」

少女が頷いた事に困ったような顔をしてから、ウーノはもうひとつ気になっていた事を尋ねる。

『お嬢様、騎士ゼストとアギト様は？』

「別行動」

『お一人、ですか？』

返ってきた答えに、ウーノは再び心配そうな顔をする。
足を怪我しているだけでも十分な不安材料なのに、更に1人だけでは流石にと思ったのだろう。
だが、少女はウーノの言葉に再び首を横に振ってみせた。

「一人じゃ、ないよ」

囁くようにそう告げて、右手を軽く前に出す。
すると、右手を覆っているグローブに着けられた紫の宝玉が煌めき、虚空に漆黒の“穴”が現れた。
少女はその穴に頬を寄せてから、微かに微笑んで呟く。

「私には……“ガリュー”がいるから」

その言葉が何を意味するのか、それをウーノは理解したのか「ああ」と声を上げ、それから謝罪を述べながら小さく頭を下げた。

『失礼しました。協力が必要でしたらお申し付け下さい。妹たちに、最優先で実行させますので』

「うん」

『それでは、お願いします。ルーテシアお嬢様』

少女の頷きを確認してから、ウーノの映るモニタが閉じる。

「……」

モニタが開いていた場所を少しの間眺めてから、少女――ルーテシアは自分が左手に持ったままの冷えピタの箱に視線を落とし、何かを考えるようにジッとそれを見つめた。

恐らく、もう必要の無くなったソレをどうするか……それを悩んでいるのだろう。

「……」

普段の彼女だったなら、すぐに捨てていた。

必要の無い物をいつまでも持っているのは無駄だからだ。

けれど――。

「……ガリュー。持ってて」

ルーテシアはそうせずに、虚空に浮かぶ穴の中に箱を放り込む。

彼女の行動に戸惑ったのか穴が何度か発光するが、ルーテシアは

気にする様子も無く、穴に向かって話しかけた。

「行こうか。ガリュー」

ルーテシアが放った言葉に答えは無く、代わりに少しの間を置いてから、虚空に開いた穴が淡く紫色に明滅した。妖しく輝くその光を見た彼女は薄く微笑んで、自分の足元に魔法陣を展開させた。

展開されたそれは、“転送魔法”と呼ばれる召喚士以外には使えない魔法。

つまり、彼女が召喚士である事の証。

「探し物を、見つけに」

呟きと共に紫の魔法陣が輝きを増し、転送魔法を発動するのに必要な魔力が集まっていく。

転送魔法が発動する時特有の感覚を感じながら、ルーテシアは全く関係の無い事を考えていた。

（もしかしたら、あの変な人が居るのかな）

ルーテシアの頭に浮かぶ問いに、もちろん答えは無い。

あの時出会った少年――ハヤトは、自分が管理局員だと名乗っただけなのだ。彼女がこれから行く場所にいるかどうかなど、恐らく神にしか分かるまい。

（……どっちでも、いいか）

転送魔法が発動する直前、ルーテシアはそう結論付ける。
しかし、そう結論付けた時に浮かぶ表情は、嬉しそうで不安そうな、そんな微妙なものであった。
そしてその数秒後、彼女の体は紫の光に包まれ、光が弾けるのと動じに掻き消えた。

ｓｉｄｅ：―　了

ｅｘ２５話　『下水道と不思議な再会　１』（後書き）

ちょっとギャグ多目になっちゃいました。
どうも、ラモンです。

ようやくここでネタバラシ。
実は謎の少女の正体はルーテシアだったんだよ！！（棒）
いや、まぁバレバレでしたよね、うん。
この辺りも３度目となると、流石にどういう展開にするか悩みます。
アギトとハヤトの漫才はやりたいので是が非でも入れるつもりですが、そこまではほぼ同じ展開なんで、文章とかを他のルートと似せないようにするのが意外と難しい……（汗）

今回も、もうちょっと色々書けたんじゃないかと今になって思っているところです。
実際これ以上は変になりそうなので書きませんが。

それはともかく、次回はルーテシアがハヤト達と会う辺りまでを書きたいと思います。
何というスピード再会！（笑）
ハヤトと事前にあわせた事を上手く使って、違う展開を書ければいいなと考えています……考えるだけですが。

それではまた、次の話で。

ｅｘ２６話　『下水道と不思議な再会　２』

「……はい。こっちからの報告は以上です、それでは」

「はああっ！！」

気合の入った声と共に繰り出された突きが、目の前から迫ってきていたガジェットの中心にめり込み、ギンガが引き抜いて後ろに跳躍すると共に爆発を起こした。

爆風に髪を靡かせて優雅に着地するギンガを眺めながら、俺は八神部隊長との通信を切る。

散発的な襲撃とはいえこれで３回目、それを１人で片付けるんだからすげぇよな。そこだけは素直に関心できるわ。

「ハヤト君、報告は終わった？　怪我してない？」

「ああ。お前がわざわざ壁を壊すなんて真似までして、敵の注意を引いててくれたお陰でな」

「あはは、バレちゃったか」

からかうようにそう言うと、ギンガは恥ずかしそうに笑う。

どうやら、本人は俺にバレてないつもりだったらしい。まったく、何年の付き合いだと思ってんだか。

そりゃ確かに最初は本気で考えなしに壁ぶっ壊してるんだと思ってたけど、いくらギンガが脳筋とはいえ、いつものコイツなら間違

いなくそんなことしねぇ。その位は分かってるだろうしな。
普段しない事を、しかも丁度俺が八神部隊長に報告し始めた途端に頻度を増してりゃ、嫌でも気づくってもんだ。

「お前、昔っから隠し事は下手だったもんなぁ」

「うー……せっかく、たまにはいいカッコしようと思ったのに」

「はっ、誰がお前にいいカッコなんてさせるかって話だよ」

「いたたた！　ちょっ、や、やめてよハヤト君！」

肩をすくめ、鼻で笑ってギンガの頬をつねる。
確かに俺は通信とかしながら動くのは苦手だけど、それでもガジェットの相手くらい平気だっていうのになぁ……ギンガの心配性には困ったもんだ。

「ひどいよハヤト君、女の子のほっぺたつねるなんて」

「はいはいごめんなさいね。さて、報告も終わったし、後は普通に進んでいいぞ。
ティアナ達もある程度ガジェット潰してるだろうし、残ってるのは多くても４，５機くらいだろ」

「あれ？　もうそんなに倒したんだ。もっと少ないと思ってた」

「まぁ、お前は殆ど流れ作業で壊してたしな。それこそものの数秒

で全滅させてたし」

正直ガジェットが可哀想に見えたくらいだ。
まさにちぎっては投げ、ちぎっては投げっていうのを地で行ってる感じ。

「いやはや、なんかもうお前1人でいんじゃね？」

「よくありません。そうやってすぐサボろうとするんだから」

「えー……だってホントなら俺は今日非番だったしー。部屋でゴロゴロしたいしー。
ぶっちゃけ走るのとか超絶面倒だしー」

「語尾を伸ばさない」

「はいはい」

「はい、は1回！」

「はいはい」

「もー！」

後ろでぷんすか怒っているギンガにひらひらと手を振りながら、俺はギンガの前を走り出す。
本人は気づかれない様にしてるつもりみたいだが、今まで殆ど1

人で戦ってたんせいか、少しだけ息が弾んでいる。対して俺は殆ど疲れちゃいない。
　このままギンガに前を任せたまま進んだら、流石に男としてどうよって思う訳で。

「ティアナが言ってきた合流地点はもうすぐだし、後は俺が先導するからお前は少し休憩しとけ。
　合流した時におまえだけ疲れてたら、あいつらに何言われるかわかんねーし」

「えっ……い、いいよ別に！　私はフロントなんだし、ちゃんと前を行くよ？」

「うっせー。この場の指揮官は俺様なの、だから俺の決定は絶対なの。はい論破」

「論破してないから！　って、ちょっと待ってよハヤト君！　ねぇってば！！」

　聞こえてくる反論には答えない。
　どうせアイツのことだ、ここで下手に答えればいつまでもしつこく食い下がってくるだろう。
　これからちょっとばかし張り切ろうとしてるのに、やる前からテンション下げられるのは勘弁して欲しいから、ここは答えないのが最善の選択肢。

「待ってってばハヤト君！　わ、私なら平気だから！」

「あんだけ張り切ったら流石に疲れてんだろ、いいから任せろって」
「大丈夫なんだってばぁ……」
まったく、責任感が強いのも場合によりけりだぜ。
昔からいつもいつも人の心配して、そのくせ自分のことは言われるまで気づかないもんだから、危なっかしくて仕方ない。
「もうっ！　私、ハヤト君よりも体力あるんだから大丈夫なんだよ？」
「そりゃそうだ。お前体力馬鹿じゃん」
「馬鹿じゃないわよっ！」
「はいはい馬鹿じゃない馬鹿じゃない」
「聞いてよぉっ！」
こうやって無理したがるのは、昔っから変わんねーよなコイツ。
ま、それがいいところだとは思うんだけどさ。
「合流したらまたお前が前衛やるんだから、今のうちに少し休んどけってだけだよ。
お前が怪我でもしたら、スバルが泣くわ騒ぐわで酷いし」

「そんなこと……うん、あるね」

「だろ？」

誰に似たんだか、スバルはかなりシスコンでブラコンだからなぁ。

……えーっと、うん。誰に似たのかはわからないけど、全然思い当たらないけど。

「それに、お前にばっかいいカッコさせるのは癪に障る。男としてはな」

「なにそれ。変なの」

「はっ、女にゃわからん男の意地ってヤツだよ」

「そっか……ありがと。ハヤト君」

「礼を言われる筋合いはねーよ。俺が勝手にやるだけだし」

とりあえずギンガが大人しくなったのを声で確認し、俺は後ろを振り向かずに走る。

いえぶっちゃけね？　馬鹿みたいにキザな台詞言ったせいで凄く恥ずかしいんですよ。ええ。

言わなきゃよかった。ちくしょう、ノリに流される俺の馬鹿！

「ハヤト君は優しいね」

「……うっせー。黙って走ってくださいお願いしますこんちくしょう」

「そして照れ屋さんだね」

「お願いだから黙ってくれ……恥ずかしくて死ぬる」

とまぁ、こんな感じでこの後ティアナ達と合流するまで、俺は酷い恥辱を味わうことになった。

数秒前に「男の意地」（キリッ）とか言ってた自分を殺したいです。割と切実に。

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｅｘ２６話　『下水道と不思議な再会　２』

「はい。そんなこんなで無事レリック反応のあった場所まで辿り着いた訳ですね」

「ハヤトさん？　誰に説明してるんですか？」

「画面の向こうの大きなお友達にだよ。ティアナくん」

「ギンガさーん。ハヤトさんがまた何かおかしな事言ってますー」
「放っておいてー。いつものことだからー」
「はーい」

ちょっと小粋なジョークを言ったら、まるで可哀想な子みたいな扱いを受けた。泣きたい。
それはさておき、俺とギンガ、そして途中で合流したティアナ達は今、レリックらしき反応のあった下水道の合流地点と思しき広い空間へと来ていた。
途中でガジェットの襲撃もあったんだが、もうね、可哀想なくらいに瞬殺でした。
出会って3分で全滅ってカップラーメンか！

「流石は脳筋ギンガと脳筋な仲間たち。戦闘能力パねぇ」
「ハヤトさん？　非殺傷設定の魔法でも、近距離だとかなり痛いんですよ？」
「すいません訂正します」

最近ティアナがとても怖いです。

「ていうかちゃんと探してくださいよ。見つからなかったら大変な

んですから」

「そりゃそうだが……大丈夫だろ。さっき反応があってから俺たちがここに着くまで大体5分。
そんな短時間でここに来てレリックを探して奪うんなんざ、そうそう出来ないって」

「かも知れませんけど、万が一を考えましょうよ」

「ティアナは真面目だなぁ」

「ハヤトさんが不真面目なんです」

そんな風にティアナとやり取りをしながら辺りを探す。
レリックは恐らくケースに入っているから、あるとしたら水の中。
そんでもって、俺とティアナ、ギンガ、スバルの4人は水かさの深い部分を、エリオとキャロはそんなに水が深くない場所を探している。
チビっ子2人が溺れでもしたら大変だしな。

「くっせー下水くっせー」

「言わないでくださいよ。気にしないようにしてるんですから」

「事実だもん仕方ねーじゃん」

「仕方なくありませんから」

ザブザブと水の中を進み、レリックらしき反応がないかを探る。
水の流れは緩やかだし、まさか流されちまったってことはないだろう……ない筈だ、あってたまるか。
もう誰でもいいから早く見つけてくださいお願いします。

「あ、ありましたー！」

俺の願いが天に通じたのか、少し離れた場所を探していたキャロのそんな声が聞こえた。
これ以上下水に浸かってるのは勘弁だと思っていたところなので、ナイスタイミングだキャロ。
帰ったら頭に火がつくぐらい思いっきり撫でてやろう。

「よかったよかった。これで俺も帰れるな」

「そうですね、とりあえず無事に確保できてよかったです」

「今回は指揮を全部ティアナに任せたから、報告書とかも俺はやらなくていいしなー」

「ちょっ！？　少しは手伝ってくださいよ！
スバルもエリオもキャロも書類仕事苦手だから、大変なんですよ！？」

「俺はな、お前に少しでも成長してもらいたいんだよ。それが先輩ってものだしな。

書類仕事とかマジしんどいし、お前に押し付けられるなら押し付けてしまいたいんだよ。だってただでさえ自分の方の仕事で書類多いんだもん。この上こっちの書類まで押し付けられたらマジ死ねる。

いやまぁ、最終的にはギンガに全部任せるから別にいいんですけどね」

「本音ダダ漏れです、最低です」

ティアナとそんな会話をしながらキャロの方へと向かう。

無事レリックも見つかって、書類仕事もティアナに押し付けられそうだ。後は報告とレリックの護送を終わらせて、今日はさっさとシャワーを浴びて寝よう。

――その時。

「あれ？　この音、なんでしょう？」

「ん……あぁ何か聞こえるな。何だコレ？」

まるで誰かが壁を蹴るような音が、断続的にあたりに響く。

当然ながら俺たちは全員歩いているか止まっているので、そんな音を立てる奴は居ない。

じゃあ他の誰かがいるのかと辺りを見回したが、それらしい影は見えなかった。

「一体なにが――っ！！」

繰り返すが、影は見えなかった。
けれど、俺はそれを見つけたのだ。何も無い空間に紫色の魔力が集まっていくのを。
そしてそれと同時に、集まった魔力の近くが人型に歪んでいくのを。

（狙いは……キャロか！）

射線を辿れば、その先にいるのはレリックを抱えているキャロ。
しかもまだキャロは気づいていないし、助けようにも俺たちは遠すぎる。
くそっ！！

「キャロ！」

「えっ……」

俺が叫ぶのと、溜まった魔力が撃ち出されるのがほぼ同時。
そしてキャロが俺の方に注意を向けるのと同時に、撃ち出された魔力がキャロの近くに着弾した。

「きゃあああっ！？」

魔力弾に気づけなかったキャロは、着弾した魔力弾が起こした爆風に踏ん張ることが出来ず、ふっ飛ばされてしまう。一番近くにいたエリオでさえ、その一連の出来事に反応できなかった。
攻撃の直前まで姿が見えなかったんだから、当然といえば当然だ。

『ギンガ！』

『わかってるよ、ハヤト君！』

念話で俺が呼ぶのと同時に、ギンガが走り出す。
まったく、以心伝心で頼りになる幼馴染だよまったく。普段は嬉しくないけどな！

「ティアナ、俺はキャロの方に行く。お前は待機して指示を頼むわ」

「わかりました」

手短にティアナに頼んでから、俺はキャロの方へと走る。
爆発による怪我はないだろうけど、どっかぶつけてるかも知れない。それでなくても、キャロは支援役だからダメージには弱いんだし。

「でやぁぁあああっ！！」

俺が動くのを待っていたのか、俺と同時にエリオが『何か』に向かって突撃していた。
いいタイミングだエリオ。やっぱ男は女を守ってナンボだよな。
そんな風に心の中でエリオを賞賛しながら、キャロの側に駆け寄る。

「キャロ、大丈夫か？　怪我は？」

「だ、大丈夫です……」

「そっか。なら良かった」

「あ……！　でも、ケースが……」

手を貸して立たせたキャロの言葉に辺りを見回せば、さっきまでキャロが持っていたケースは少し離れた場所に転がっていた。多分、さっき吹き飛ばされた時に落としたんだろう。
まぁ、アレの回収は後でいいか。
今はまず、いきなり攻撃してきた礼儀知らずの顔を――。

「……ん？」

そう思って視線を前に向けようとした時。
丁度俺の視線の先――つまりレリックのケースを挟んだ向こう側から、１人の少女が歩いてくるのが見えた。

「……あ」

向こうも俺達に気づいたみたいで、小さく声を上げて立ち止まる。
その顔を見て、俺は思わず声を上げてしまっていた。なぜなら。

「お前……あの時のチビっ子じゃん」

なぜなら、そいつは俺がぶつかっちまったあの時のチビっ子だったからだ。
あん時とは違ってボロボロのコートを着てないけど、無駄に無表情なのと腰まである長い紫色の髪という特徴は、そうそう忘れられるもんじゃねぇ。

「……チビじゃ、ない」

「チビだろ、どう見ても」

「……チビじゃ、ない」

うん。このやり取りからしても、間違いなくあの時のチビっ子だ。
何でこんなとこに……迷子じゃねーだろうし、つまりそういうことか。

「下水道を散歩する趣味でもあんのか、変なチビっ子だなお前」

「……」

「いや、冗談だからそんな睨むなよ」

ちょっと冗談を言ったら、ジト目で睨まれた。
何だよ、冗談の通じないチビっ子だなコイツはまったく。ギンガといい勝負だぜ。

「で？　本当は何しに来たんだ？」

冗談を言っている状況でもないから、俺はちょっと真面目に質問する。
まぁ、「何しに」なんて聞かなくてもある程度予測はつくけどさ。この状況で、この場所に居るんだ。予測できない方がおかしいだろ。

「……それ」

案の定、というか何というか。
チビっ子は暫く間を置いてから、俺とチビっ子のちょうど真ん中にあるレリックのケースを指差す。

「それを、取りに来た」
「取りに来た、ね。これが何なのか知ってるのか？」
「……ん」
「取りに来た理由は？」
「……いえない」
「俺たちに渡してくれるつもりは？」
「……無い」
「そうか」

やれやれ、面倒なことになりそうだ。子供の相手は、色々気ぃ使うから苦手なんだけどなぁ。
そんなことを思いつつ、俺はブレイブハートを構える。レリックを確保しつつ、チビっ子には怪我をさせないようにして保護。その後で事情を聞く……ってところか？

「チビっ子。さっきキャロの事を撃ったのは、お前の仲間か？」
「……ん。ガリュー」
「ガリューとか超カッコイイ名前だな。ま、そいつが手伝ってくれるとは思うなよ？

今、頼りになる俺の下僕たちと絶賛交戦中だろうしな」

「ハヤト君！　誰が下僕なの！？」

聞こえてんのかよ。どんだけ地獄耳なんだギンガの奴。
ま、まぁとりあえずあの地獄耳脳筋にさっき撃ってきた奴……ガリューっつったか。姿は見てないけどあいつはギンガ達が抑えてくれてるだろうから、介入の心配はない。
あーでもやりたくねーなぁ。子供相手ってすげーやり辛い。

「でも、やらなきゃいけないのが管理局員の辛いとこってね」

「……」

「チビっ子。それはすっげー危険なモンだ。
お前にも事情があるんだろうけど、だからってはいどうぞと渡せるモンじゃねぇ。つまり欲しいってんなら、不本意ながらお前を逮捕しなきゃなんねー。それでも、これが欲しいのか？」

「……うん」

まぁ言う事聞いてくれると思ってたワケじゃないが、なんとも頑固なことで。

「仕方ねぇ。これ以上あーだこーだ言っても無駄みたいだし、欲しけりゃ力ずくってこったな」

「わかった……」

「あ、手加減してくれていいのよ？　むしろわざと負けてくれてもいいのよ？」

「それは……無理、かも」

「ですよね」

あーやだやだ。何かしんねーけど、力ずくってなった瞬間にすっげー魔力反応なんですけどこのチビっ子さん。普通に俺より全然魔力が上ってどういう事だよ！　いじめか！

とかふざけてる場合でも無さそうだ。

別に魔力の差だけで勝敗が決まるとは言わねーが、それでも俺が不利なのは事実。

まともにやったら、怪我させないで保護とかちょっと難しいだろう。

ならば――！

「あーっ！　あんなところに空飛ぶ空戦魔導士が！！」

「え……？」

「もらったぁっ！」

チビっ子が俺の指差した方向に視線を動かすのと同時に、全力で駆け出してレリックの入っていたケースを奪う。そしてそのままチビっ子のところまで一気に移動して、ブレイブハートの切っ先をチビっ子の喉元に突きつけた。

おー。何か思っていた以上に上手くいったな。

つーか引っ掛かるなよ、空飛ぶ空戦魔導士とか当たり前だろ。

「ほい、チェックメイトっと」

「あ……」

「動かないようにな。俺のは杖だから別に切れたりはしねーけど、当たったら痛いし」

一応何か動きがあれば、すぐにアクセルシューターを撃つ準備は出来てる。

ただ、出来ればやりたくないんですよね。子供相手だし、この近距離だと非殺傷設定でもかなり痛いと思うし、下手したら怪我させちゃうし。

子供に怪我させたりしたら、流石に気分悪いし最低だろ。

「……ずるい」

「ずるくねーよ。あんなのに引っ掛かるお前が悪いんだっつーの。つーか今時あんな分かりやすいのに引っ掛かるか？」

「……」

「いや睨まれましても」

チビっ子は無表情なままなんだけど、視線は抗議するように鋭いものだ。

てゆーか力ずくだと勝てそうもないんだし、あれくらい普通だよね？　俺悪くないよね？

あれ、自分で言っててなんか自信無くなってきた……。

「まぁいいや。とりあえずこれ以上手荒な真似はしたくねーから、大人しくしてな。

この距離なら、お前が何かするよりも、俺が何かするほうが圧倒的に早いし」

「……」

「だからそんな睨むなよチビっ子。ちゃんとお前が事情を話して、それが納得のいくモンだったら責任持って俺が手伝ってやるからさ。だからとりあえず、今は大人しくしとけって」

「……いや」

何度俺がなだめてみても、チビっ子は頑なに首を横に振る。

こーゆー奴を説得するのってすっげー疲れるんだよなぁ……頑固モード入ったギンガを説得するのも、ほとんど1日作業になるし。

しかも姉ちゃんもスバルもゲンヤさんまで諦めるもんだから、最近その役目俺の専属だし。

ちくしょう、何か涙出てきた。

「……っ！」

なんて馬鹿なことを考えていた瞬間、突然俺を見ていたチビっ子の視線が動く。

俺もチビっ子の視線を追うために顔を動かそうとした。しかし――

《Ｃａｕｔｉｏｎ！！》

「は？」

「スターレンゲホイルッ！！」

――突然のブレイブハートからの警告。

チビっ子の視線にあわせて意識をそっちに向けていた俺はそれに反応することが出来ず、間抜けな声を出すだけだった。

直後、何かが炸裂した耳を劈く爆音と共に、俺の視界が白で埋め尽くされた。

ｅｘ２６話　『下水道と不思議な再会　２』（後書き）

もうネタがねぇ……ネタがねぇんだよ、とっつぁん。
どうも、ラモンです。

ガチでネタ切れの今回でした。
同じ場面を違う視点で、違う展開にする……文字にすると簡単なんですけどねぇ。
今回はハヤトとルーテシアを事前に会わせてましたから、そこら変を踏まえてこんな感じにした次第です。
ホントはもうちょっと漫才させたかったんですけどね。
そこは次回のアギトにお任せということで（笑）

あー、でも最近ハヤギンの夫婦漫才やってませんねぇ。
そろそろやりたい気がします。
六課の休日編が終わったら、日常回ってことでやりましょうか。
……うん。くそ甘ったるいのを書こう。
俺、六課の休日編を書き終えたら、夫婦漫才書くんだ……。

それではまた、次の話で。

ｅｘ２７話　『下水道と不思議な再会　３』

（――くそっ！）

強烈な光と空気を振るわせる爆音の中、耳を両手で押さえながら薄目を開け、目の前に居るチビっ子を観察する。チビっ子は落ち着いた様子で目を閉じ、しっかりと両手で耳を覆っている。
事前に視線を動かした事から考えて、多分この閃光弾はチビっ子の仲間が撃ったんだろう。
伏兵とかやるじゃねーのチビっ子。流石にそこまでは考えてなかったぜ。

「くっ……」

とはいえ、この状況でチビっ子を放っておくワケにはいかない。
閃光弾の音と光が収まってきたのを確認して、俺はチビっ子にもう一度ブレイブハートを向けようと手を動かした。

「ぐあっ！？」

だが、俺が手を動かすよりも先に動いた奴がいた。
そいつは一気に俺との距離を詰め、閃光弾の影響で動けない俺を蹴り飛ばす。
まだ視覚も聴覚も回復してない俺にそれを防ぐなんて出来ず、俺

はその蹴りをまともに受けて、チビっ子から随分と離れた場所まで蹴り飛ばされた。
まぁ、持っていたレリックのケースは掴んだままだけど。

「ぎゃーす！！」

蹴っ飛ばされた挙句、まだ目が上手く見えていない俺は空中で体勢を整えることが出来ずに、暫く宙を舞った後に地面に顔から激突。
そのまま暫くズリズリと地面を擦ってから俺の体はようやく停止した。

「いってーなちくしょうがっ！！」

その瞬間に跳ね起き、目を凝らしながらチビっ子が居る方向を睨みつける。
すると、霞んだ俺の視線の先で、チビっ子の隣に全身を黒い甲冑みたいな何かで包んだ、人間の形をした何か――恐らくあれがガリューっていう奴だろう――が立っているのが見えた。

そしてようやく視界が元に戻ってくるのと同時に、チビっ子とガリューの元に、もうひとつの人影が近づいてくるのを感じた。ただ、人影というには余りにも小さかったけどな。
ソレはチビっ子の顔の側までやってくると、こっちに注意を払う素振りすら見せずに、腰に手を当ててチビっ子に向かって口を開く。

「ったくもー。あたし達に黙って勝手に出かけちゃったりするから、こんな変な奴にからまれちまうんだぞ！　ルールーもガリューも」

「アギト……」

オイ待て。あのチビ助――アギトとか言うのか――人の事初対面で変な奴って言ったなコラ。

あからさまに人形サイズのお前に言われたくねんだよ！　いやそもそも変な奴じゃねーよ！

「ハヤト君、大丈夫！？」

アギトとか言う人形サイズのチビ助の言動に憤慨していると、閃光弾の影響から回復したギンガが一番に、そしてギンガに続く形でスバル達も俺の周りに集まってきた。

聞いてくれよギンガ。あのチビ助に『変な奴』とか言われたんだけど。

酷いと思わねー？　俺のどこが変な奴だってんだ畜生！

「うん、元気そうで何よりだよハヤト君」

「スルーすんなよ」

「それで、さっきの閃光弾を撃ったのは、あっちのリイン曹長と同じ大きさの子かな？」

「ねぇ」

「私たちは今ここに来たばっかりなんだけど、名前とかは分かる？」

「……ああ。名前はアギトって言うらしい」

くすん。いいもん、俺こんなことで泣かないもん。

姉ちゃんも「ハヤトはやれば出来る子だ」って言ってくれたもんよ。

……ちくしょう。帰ったらエロゲでこの心の傷を癒してやる。

「ホントに心配したんだからな、ルールー？」

「……ごめん」

「ん、まぁ反省してるんならいいさ！」

こっちを酷く傷つける発言をしておきながら、アギトは俺のほうなんて全く気にしていない。一応ガリューがこっちを向いて構えてるんだが、それだけだ。

ケースは俺が持ってるから、すぐに奪い返しに来るもんだとばかり思ってたけど、どうやらアギトとやらはチビっ子の心配をするので手一杯らしい。なんか、ギンガみたいな奴だな。

「んまっ！　もう大丈夫だぞルールー！　何しろこのあたし！　烈火の剣精！　アギト様が、来たんだからなっ！！」

腕を組み、チビっ子の顔の横あたりに浮かんでふんぞり返って胸を張るアギト。
あれだね。全力で腕を組んでるのに、谷間の“た”の字も出来ないとか、可哀想だよね。
キャロだって頑張れば谷間出来るっていうのにさ……頑張れば。
凄く頑張れば。

「さてと！　そんじゃあそこの変な奴！！
お前が持ってるそのケース、さっさと渡してもらおうかっ！！」

「嫌ですけど？」

「えっ」

「えっ？」

何を言ってるんだコイツは。
渡せと言われて渡せる代物なら、とっくにチビっ子に渡してるっつーの。
アレか。コイツ残念な子なのか？　頭が。

「おいスバル大変だ！　お前の仲間がいるぞ！」

「ハヤ兄、どういう意味！？」

「そのままの意味だ！　主に頭が残念的な意味で！！」

「怒るよ！」

「……まぁ、合ってるわよね」

「ティアまで！？」

「だ、大丈夫よスバル。私はそんな風に思ってないから」

「せめてこっち見て言ってよギン姉！！」

こんな緊迫した場面でも、相変わらずグダグダな俺たちであった。

まったく、それもこれもスバルが悪いんだぞ。

「９割ハヤ兄のせいだから！！　自覚してよ！！」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～

ｅｘ２７話　『下水道と不思議な再会　３』

冗談はさておいて、俺たちはいつでも動けるように構えながら、

チビっ子とアギト、ガリューの３人の動向を伺う。向こうも自分た

ちより人数の多いこっちを警戒しているのか、すぐに襲ってくる気はないようだ。
ここで考えなしに突っ込んできてくれたなら、迎撃も楽だったんだけどな。
仕方ない、とりあえず判断を仰ぐとするか。

「ティアナどうする？　1回やらかすか、逃げるか」

「こっちにケースがある以上、戦うのは得策じゃないです。ここは一旦退きましょう」

「あいあい、了解だ」

ティアナも随分と指揮官っぷりが板についてきたなぁ。
ま、個人的にはチビっ子を保護して話を聞いてやりたいんだが…
…そうも言ってらんない、か。向こうはレリックを狙ってるんだし、下手に一戦やらかして持っていかれでもしたら大変だ。
そうと決まれば……。

『ギンガ、アレやっからティアナ達に教えといてくれ』

『アレって……アレ？』

『おう』

『わかったよ。ティアナ達には、私が教えておくから。
それと、あんまり酷いこと言っちゃ駄目だよ？　女の子が相手な

んだから』

『前向きに検討したいと思います』

『うわー、そんな気さらさらないって顔だよ……』

念話でギンガと会話しながら、俺はティアナ達よりも一歩前に出る。

すると、チビっ子の側でフワフワ浮いていたアギトが、俺の行く手を遮ってチビっ子を守るように、チビっ子の前に出てきた。

「何だこの野郎！　やんのか！？」

おーおー、血気盛んな事で。

こっちに向かってガーガー大声を上げるアギトを見ながら、俺は思った以上に上手く行きそうだなと小さく笑う。今からやろうとしてるのは、相手が挑発に乗りやすい奴の方がやりやすい。

なんせ相手をわざと怒らせて、その隙に逃げ出そうってんだからな。

そういう意味じゃ、このアギトってのは格好の標的だ。

直接喋った訳ではないから断言は出来ないが、恐らく短気で子供っぽい性格なんだろう。言葉の端々から、そんな感じがヒシヒシと伝わってくる。

「いや、そんないきなりやる気で来られても困るんだけど。

こっちは一応話し合いしたいんと思うんだ。えーと……アギトでいいか？」

「気安く呼ぶな！　ルールーに近づいて何しようとしたんだよ、この変態め！」

「変態というのは別に否定せんが、俺は変態でも変態という名の紳士だ。

つーかチビっ子に何もする気はねぇよ。ロリコンじゃねーし。なによりペタンコな胸には一切興味が無い。そういう意味ではお前も安心しろ洗濯板」

「せっ……！　あ、あたしはこれからなんだよ！！」

「やめろよ、見てて痛々しいから、そういう強がりやめろよ……」

「何でお前が泣きそうな顔してんだよ！！」

案の定というか何というか。

こっちが軽くからかっただけで、アギトは顔を真っ赤にして怒鳴り返してくる。

ありがたいと言えばありがたいんだが、こうも扱い易い子だと心配になるなぁ……チビっ子もチビっ子で、クールそうな見た目とは裏腹に意外と騙されやすいし。

「チビっ子は答えてくれなかったんだけどさ。

何でレリックを集めてるんだ？　理由さえ話してくれりゃ、俺たちだって手伝うぞ？」

「はっ、だーれがお前たちなんかに教えるかよ！！」

「そう言わずに教えてくれよ、アルベルト」

「誰だよ！　“ア”しか合ってねぇじゃねーか！！」

「違ったっけ？　あ、そうだそうだ、アーダンだったな」

「留守番なんかしねーよ！！」

俺の発言にイチイチ両手を振り上げ、ギャーギャー怒鳴りながらツッコミを返してくるアギト。反応するから余計に俺にからかう隙を与えてるんだが、本人は気づいてないんだろう。

だからこそ、この作戦の標的に選んだ訳だしな。

「ところでその格好は自前なのか？」

「は？　あ、あぁそうだけど。それが何だよ！」

「いや、俺としてはビキニは巨乳が着るから嬉しいんであって、そんな寂しい胸を見せ付けるあたり、お前って実はドMなんじゃねーのと思ってみたり」

「人の気にしてること言ってんじゃねー！！　あたしはこれからだ！　これからなんだよ！！」

「うるさいなぁ。少し静かに出来ないのか？」

「誰のせいだ誰の！！」

「誰？」

「お前だよ！！」

アギトをからかいながら、隣にいるギンガを横目で見る。

俺の視線に気づいたギンガは、向こうに悟られない様にこっちを見返して、小さく頷く。どうやらティアナ達には伝え終わったようだ。

さて、後はどのタイミングで逃げるかだけど……。

「冗談だよ。ちゃんと名前は覚えてるって、ランカだろ？」

「何なんだおめーは！　もう文字数しか合ってねぇよ！　あとあたしは歌わねぇよ！！」

「嘘うそ、ホントは覚えてるよ。アギトだろ？　フレイム・オブ・ソードフェアリーの」

「烈火の剣精だよ！　勝手にンな変な二つ名にすんじゃねぇ！！」

「えー？　でも『烈火の剣精』ってのもどうよ？」

「人の正式な二つ名に文句つけてんじゃねー！！」

「個人的には『青の祓魔師』とかオススメだ」

「色々あぶねー発言してんじゃねー！！」

ホント、アギトを弄るのは楽しいなぁ。
ギンガよりもキレのいいツッコミ返してくるし、何より反応が楽しい。
……やべぇ、逃げるタイミング探すのやめて、コイツ弄るのに集中しちまいそうだ。

「あーもー！　いいからソレさっさと寄越しやがれ！
寄越さねーってんなら、お前らをぶっ飛ばすだけだけどな！」

「おお、こわいこわい」

「どんだけ棒読みなんだよ！！　お前本気でぶっ飛ばすぞ！？」

「はっはっは。巨乳なオネーサンならともかく、洗濯板に負ける俺様じゃねぇぜ！」

「くあぁぁぁぁ！　いっちいちムカツクなお前は！
もーいい！　とりあえず、まずはお前をぶっ飛ばしてからだ！！」

流石にそろそろ我慢の限界が来たらしく、アギトは頭を抱えてそう叫んだ後、自分の真上に大きな火球を作り出した。

「やれやれ、ホント扱い易い奴だこと」

こっちの思惑通りに動いてくれるアギトに苦笑しつつ、俺は腰を落としていつでも動けるような体勢を取り、ブレイブハートを構える。

そして狙いをアギトに定め、切っ先にひとつの魔力弾を生み出す。

もちろん、ただの魔力弾じゃねぇ。『逃げる時』の為だけに俺が編み出した、究極奥義のひとつだ。

「先手くらいは譲ってくれよ！　烈火の剣精さんよ！」

「いいぜ！　てめぇの攻撃くらい、屁でもねぇ！」

気持ちいいくらいに俺の思い通りの返事をしてくれるアギト。

だからこそ、俺も当初の予定通りに作り出した魔力弾を、空中で火球を作って止まっているアギト目掛けて撃ち出した。撃ち出された魔力弾は真っ直ぐにアギトに向かい――

「まぁ、嘘なんですけどね」

「は？」

俺の声を合図に、アギトの目の前で“ポンッ”と軽い音を立てて消え去った。

なんのことは無い。単純に、俺が撃った魔力弾は薄い外殻で形を整えただけの“空砲”だったって事。見た目でバレないように、訓

練校時代から色々研究したおかげで見た目は完璧。

迎撃しよう、もしくは受け止めようとした魔力弾が目の前で破裂したら、誰だって驚くだろ？

その隙にさっさと逃げられるよう、俺が開発した究極奥義って訳だ。

「よっしゃ！　トンズラするぞお前ら！」

「いつも思うけど、コレって本当セコい手だよねぇ」

「うっせー！」

作戦通り、呆気にとられた顔をしているアギトを尻目に、全員に合図を送って全力逃走。

ギンガが隣を走りながら溜息を漏らしたので黙らせておく。

いーんだよ、どんなセコい手を使ったって任務をちゃんと終わらせりゃ勝ちなんだから。

「……はっ！？　ま、待ちやがれコンニャロー！！　よくも騙しやがったなぁ！？」

「騙される方が悪いんですよーだ！　だっせーカッコわりーぷっふー！」

「ぶっ飛ばす！　もう空の彼方までぶっ飛ばす！！」

「ここは地下ですー！　空の彼方なんて無理ですー！　プーッ！　クスクス」

「～～～～～っっ！！」

チビっ子やアギトが居る場所とは反対側に全力疾走しながら、時折後ろを振り返って盛大にアギトを挑発してやる。怒れば怒るほど攻撃ってのは荒くなるから、こっちも逃げやすくなる。

「……でも、どう見てもコレってこっちが悪者ですよね」

「ティア、気にしたら負けだよ。あたしもギン姉も、もう慣れたから」

「そうそう。ハヤト君だから仕方ないよ」

「僕も最近慣れてきました。同じ部屋だからでしょうか……」

「大丈夫だよ、エリオ君！　エリオ君はもっとカッコイイから！」

ちゃんと上手いことやったのに、仲間には大不評でした。

いいじゃん！　俺そんな強くないもん！　弱い奴には弱い奴なりの生き延びるコツがあるんだよ！

文句あるならアイツらと真正面から戦ってくればいいじゃん！

「いや文句がある訳じゃないんですけど、他の手は無かったのかな

ーって」

「他に思いつく作戦っつったら、俺があのチビっ子のスカートをめくってその隙に……という作戦か、いきなりギンガが裸になって相手が驚いた隙に……という作戦の2択だな」

「何で私が巻き込まれてるの!?　ならないよ!?　ならないからね!?」

「てゆーかもう一個の作戦も最悪だよ、ハヤ兄」

「待てって言ってんだろこの野郎ぉぉぉ!!」

怒りに任せて撃ち出されたアギトの火球が雨あられと降り注ぐ中を駆け抜けつつ、俺たちはこんな感じで緊張感の無いやり取りをしていた。妙に緊張するよりはいいと思うが、なんとも締まらない。

まったく誰のせいでしょうね。こってり一時間くらい説教してやりたいよ。

「わかったよ。帰ったら1時間お説教だね、ハヤト君」

「えっ、なにそれこわい」

「……はぁ。もういいや、ハヤト君の相手をマトモにやってたら疲れるだけだもん。

アギトちゃんって言ったかな？　あの子も可哀想に……ハヤト君が本気でからかうと、ホント性質悪いよね。小さい頃、自分で自分のこと『口先の魔術師』って言ってたし」

「おいやめろ。人の黒歴史を晒すな、泣くぞ」

ギンガの事を軽く小突きながら、俺たちは走る先に並んで立っていた柱の影に隠れる。

元来た道を逃げたいところなんだが、そのルートはチビっ子が居る向こう側。そこから逃げるにはチビっ子達とぶつからなきゃならん。

折角逃げ出したのに、回り込まれるまでもなく自分から突っ込む程馬鹿じゃない。

「……さて、どうする？」

柱の影に隠れたところで、今回のチームリーダーであるティアナに尋ねた。

ここまでは俺が主体になっていたけど、実は俺のプランってここまでなんだよね。隙を見て逃げ出す、ただしその後はノープラン。この後どうするかは、ティアナにお任せだ。

「そう、ですね……任務はあくまでケースの確保ですし、ケースは確保できてますから、この後は無理に戦わないで、撤退しながら引き付けましょう」

「こっちに向かってるヴィータ副隊長とリイン曹長に上手く合流できれば、あの子達も止められるかも。……ってことだよね、ティア？」

「そういうこと」

「ふむ、なるほど……いんじゃね。ギンガはどう思う？」

「私もそれでいいと思うな。やっぱり、あの子の事情も聞いてあげたいし」

「あいよ、了解」

ティアナも最近、指揮が板についてきたなぁと関心した時。
俺達全員への通信で、聞きなれた声が響いてきた。

『よし。中々いいぞ、お前ら』

「ヴィータ副隊長！？」

『私も一緒ですよ～。ティアナ、状況をよく読んだナイス判断です！』

「リイン曹長も！」

聞こえてきたヴィータ三尉の声に、ギンガ達は嬉しそうな声を上げる。
かく言う俺もかなり安心していたりするんだけどな。勝てない相手じゃないとは思うけど、やっぱ実力者が一緒に居ると居ないとでは安心感が違う。

言葉で表すなら、『来た！　メインヴィータ三尉来た！　これで勝つる！』って感じか。

「っ！？　ルールルー、何か近づいてきてる！」

どうやら三尉たちは思った以上に近づいていたらしく、さっきまで激情に任せて火球を連発していたアギトも、近づいてくるヴィータ三尉とリインフォース曹長の魔力を感知し、焦った声を上げる。

けれど俺から言わせれば、そんなことを言っている間にアギトはさっさと逃げるべきだった。

なんせ……ここに向かっているのは、ちっちゃくても力持ちなヴィータ三尉なんだから。

「魔力反応……でけぇっ！？」

「うおりゃあああああああっっっっ！！」

アギトが驚いた声を上げるのと同時に、俺達の居る場所の真上から少しずれた天井を砕いて、下水道中に響き渡りそうな雄叫びを上げて、ヴィータ三尉とリイン曹長が突っ込んできた。

けどその姿が見えたのは一瞬で、すぐに2人の姿は壊された天井の破片が地面に落ちた土煙とかで見えなくなってしまう。ただ、そんなのは撹乱だってのはアホでも分かる。

その証拠に、姿が見えなくなった直後にリイン曹長が煙の中から飛び出してきた。

曹長は煙から飛び出すと、すぐにチビっ子とアギトに狙いを定める。

「捕らえよ、凍てつく足枷！」

呪文の詠唱と共にチビっ子達の足元から渦を巻くように風が巻き起こり、チビっ子の長い紫銀の髪がその風に靡く。足元からおきた風に戸惑うように、チビっ子とアギトが自分の足元を見る。

「フリーレン、フェッセルン！！」

その刹那、巻き起こった風は一瞬で凍りつき、２人を包むような氷の繭を作り出す。

うおぉ……リイン曹長が戦うのって初めて見たけど、やっぱすげぇな。あんなのやられたら、防ぐ手段とか思いつかねーわ。

「！」

そうしてチビっ子とアギトがリイン曹長の結界に捕らえられたのを見たガリューが、２人を助けようと地面を蹴る為に体を動かした。

けれどガリューが地面を蹴るよりも早く、曹長に続いて土煙から飛び出したヴィータ三尉が、振りかぶったギガントフォームになったアイゼンを、自分から意識を逸らしているガリュー目掛けて振り下ろす。

「ぶっ飛べえええええっっっっ！」

咆哮と共に振り下ろされた大槌を、ガリューは左腕で防ぐ。
あの一撃を受け止めただけでも驚きだが、三尉だってその程度は想定済みだったんだろう。特に驚く様子も無く、そのままギリギリと鍔迫り合いになる。

「ぐ……っ！」

「……っ！」

「こ……のぉっ！！」

押し込もうとする三尉と、押し返そうとするガリュー。
２人の力が一瞬拮抗するが、再び力を込めたヴィータに押し切られ、ガリューは再び吹き飛ばされて近くの柱を削って壁へと激突、崩れる瓦礫と巻き起こった煙の中へと飲み込まれた。

「……っし。おう、待たせたな」

「皆、無事で良かったです～」

それ以上ガリューが起き上がってこないのを確認して、ヴィータ

三尉はアイゼンを通常形態に戻し、俺達を振り返る。その隣には、ホッとしたような笑みを浮かべるリインがふわふわと浮いていた。
2人とも、今の攻防が何でもなかったかのような態度で、いつもと変わらぬ表情をしている。

「……俺。もうヴィータ三尉の前では仕事サボんねぇ」

「気持ちは分かるけど、普段からサボらないようにしてよ」

「ふ、副隊長達って、やっぱり凄かったんだ……あはは」

「笑うしかないわよねぇ……」

そんな三尉と曹長を見て、俺達はもう苦笑するしか出来なかった。
心強い味方っていうよりも、力強い味方（物理的に）だったか…
…チビっ子達、無事かなぁ？

ｅｘ２７話　『下水道と不思議な再会　３』（後書き）

ここにあったシリアスが逃げた。
どうも、ラモンです。

おっかしーなぁ……後半はある程度シリアスにしようとしたのに、気づいたらギャグだらけになってしまった。
それもこれも、ハヤトとアギトの漫才を書くのが楽しすぎるのがいけない。
書いていると、こいつ等私の頭の中で延々漫才してるんですよ。
天使と悪魔ならぬボケとツッコミで。

そんなこんなで『六課の休日』編も折り返し。
次回かその次くらいで終わりになりそうですね。そして、さっさとなんでもない日常編を書きたいです。
あ、でもその前にヴィヴィオも出さないと。
やることは山積みだなぁ……。

それではまた、次の話で。

ｅｘ２８話　『下水道と不思議な再会　４』

「……あれ？」

ヴィータ三尉とリインフォース曹長の２人と合流した後、ヴィータ三尉に吹っ飛ばされたガリューの元に向かったんだが、崩れた壁の中でノックダウンしてる筈のガリューの姿は無かった。
周りに壁を掘り抜いて逃げたような痕跡はない……つーことは、アイツ普通に走って逃げたのか。
なんだろ、想像すると地味にシュールだな。

「ちっ、逃げられたか」

「みたいですね」

「もうちっと強くやっときゃ良かったか？」

「いや、死にますってそれは」

そこそこに丈夫な壁をぶっ壊す勢いで吹き飛ばしたのに、アレ以上強く殴るとかもうね。
ガリューがどんだけ丈夫でも粉々に吹き飛んじゃいますよヴィータ三尉。丈夫さに定評のある俺でも、あの一撃貰ったら再起不能になりかねないってのに。

「しゃーねぇ。ま、あっちの子供は捕まえただろうし、そっちに事情を聞きゃいいか」

「そうっすね。あぁそうだ、チビっ子の扱いなら任せてください。この俺様の明晰な頭脳を持って、何でも喋らせてみせますから。事情聴取は任せろーバリバリ」

「すまん、ちょっとお前が何言ってんのかわかんねー」

「なにそれひどい」

「お前なー、寝言は寝てる時に言わなきゃダメなんだぞ？」

「なにそれ更にひどい」

俺の腰よりもちょっと上くらいまでの上司に酷いことを言われつつ、曹長が捕縛魔法で捕まえたチビっ子とアギトの方へと歩いていく。

まぁ冗談はともかくとして、ガキの扱いに自信があるのは本当だ。なんせ小さい頃、スバルの世話で随分と慣れさせられたからなぁ……ギンガも。

あのチビっ子はちょっと気難しい空気だったけど、何とかなるだろ。スバルも小さい頃は人見知り激しくて、なんだかんだで結構気難しい奴だったし。

そう！　俺の辞書に不可能という文字はあんまり無い！！

「逃げられた、ですよ～……」

「オゥフ」

そんな風に気合を入れて曹長のところへたどり着くと、リインフォース曹長が捕縛結界を解いて難しい顔をしながら呟いていた。
視線の先、ちょうどチビっ子達が居た場所の地面には大穴が開き、チビっ子達の姿は無い。
どうやら捕縛される前に、超スピードで穴を掘って逃げたようだ。
ゲッターのスピードを甘く見ちゃいけないって事だな。2は正直使いどころ無くて困るんだけどなぁ……地形適正が地上と地中とか、使いにくくていつもお蔵入りだったわ。……『真』にならなきゃ1も3も二軍だったけどな。

「リイン、追えそうか？」

「ちょっと難しいです。逃げるからには、徹底して痕跡消去とかもするでしょうし……」

「そうか……しゃーねー。とりあえずレリックは確保してんだ、まずはここから出るのが先だな」

俺がどうでもいい事を考えている間に、ヴィータ三尉は曹長の報告を聞きながら、デバイスのグラーフアイゼンを肩に担いで即決した。何という迷いの無さ、ヴィータ三尉がカッコ良すぎて濡れた。

「ハヤト、レリックのケースはちゃんと持ってんな？」

「大丈夫です。しっかり持ってますよ」

「ん。それじゃあ一旦上に――っ！　何だ！？」

三尉が俺の持っているレリックを確認して指示を出そうとした時、突然地面が大きく揺れる。

いや、地面がというよりはこの下水道全体が揺れている、と言った方がいいか。とにかくすげー勢いで下水道中に轟音が響き、俺達がよろめく位の振動が伝わってきていた。

「ギンガ！　お前が壁壊したせいじゃねーのコレ！？」

「ち、違うよっ！　私、崩れたりしないようにちゃんと考えてたもの！」

「じゃあ一体なんでこんな揺れが……」

転ばないようにバランスを取りつつ、原因を考えてみる。

とはいえ、確かにギンガは下水道が崩れないように考えて壁を壊してたし、ヴィータ三尉が突っ込んできた天井だってそこまで酷い損傷じゃない筈だ。けど実際問題として下水道は揺れていて、マジで崩落の危機にある。つまり……どういうことだってばよ。

「えっと、地上で大型召喚の反応がありました。多分、原因はそっちだと……」

「ホラ！　ホラ！！　原因は私じゃなかったでしょ！？　どう、ハヤト君！」

「はいはい悪かった悪かった。ヴィータ三尉、とりあえず脱出ですよね？」

「ああ、とにかくまずは脱出だ！　スバル！」

「はいっ！」

ヴィータ三尉の指示に従って、スバルが三尉が入ってきた天井から地上に向かって空いている穴目掛けてウィングロードを展開する。

いつも思うけど、これってマジ便利だよなぁ。

結構使うのにセンスが必要みたいで、俺やティアナがやろうとしても全然出来なかったけど。

今のとこ使えるのは、スバルとギンガ、あと俺の姉ちゃんくらいか。

「ギンガとスバルが先頭で行け！　あたしは最後に飛んでいく！」

「「了解！」」

返事をしてウィングロードを駆け上がっていくギンガとスバルの背中を見て、それを追いかけようとした俺は、ふと自分が持っているレリックのケースに視線を落とす。

「……んー」

多分だけど、この地震を起こしてるってあのチビっ子だろうな。
召喚士かどうかはわかんねーけど、このタイミング的に考えられるのアイツっきゃいねーし。
だとすれば、間違いなく狙いはこのレリックな訳で。このまま何の工夫も無しに持ってたら、万が一ってことも考えられる……ふむ。予防ついでにちょっとイタズラしておきたいところだな。
仮に奪われた時に、あのチビっ子とアギトをぎゃふんと言わせられるようなの。

そう考えた瞬間、俺の金メッキ色の脳細胞が一気に活性化。
こういう時には速攻で考えが浮かぶあたり、流石は俺ってところだろう。

「ティアナ、キャロ。ちょっといいか？」

「？　どうしたんですか？」

「……絶対、変なこと考えてますよね。巻き込まないで欲しいんですけど」

善は急げとこの作戦に必要な人員である2人を呼んだら、ティアナは思いっきり不審そうな顔になる。
馬鹿野郎！　俺はいつだって心から真面目に考えてるんだよ！

「だから余計に嫌なんですってば」
「ですよねー」

●魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～とある新人の日常～
ｅｘ２８話　『下水道と不思議な再会　４』

ｓｉｄｅ：―

ハヤト達が地上へ向けて走っている頃。ちょうどハヤト達がいる場所の真上に近い場所に、ルーテシアとアギト、そして巨大なカブトムシの様な姿をした召喚蟲が居た。
召喚蟲はその長い角の先端でバチバチと断続的に雷を起こし、その雷をエネルギーとして両脚から地面に向けて放出している。恐らくは、この蟲こそが地下に地震を起こしている原因なのだろう。

「だめだよルールー！　これはマズイって！！」

そこから近い場所にあるビルの上から、電撃を地面に向けて放っている蟲――地雷王を見下ろすルーテシアに、アギトが必死に訴え

ている。
地下が崩れれば、ハヤト達は必然的に生き埋めになり、ルーテシアが殺人を犯すことになってしまう。
アギトもハヤト……というか管理局を快くは思っていないが、だからといって殺してしまえと思うほど憎んでいる訳でもない。こうして止めるのも道理だろう。

「埋まった中からどうやってケースを探す？
あいつらだって、局員とはいえ潰れて死んじゃうかもなんだぞ！？」

思いつく限りの理由を並べ、何とか地雷王での地下崩落を止めさせようとするアギト。
だが、ルーテシアは表情を動かさず、じっと地雷王を見つめて呟く。

「あのレベルなら、多分これくらいじゃ死なない……」

「そうだろうけどさぁ、万が一ってのがあるだろ！？」

言いながら、しかしルーテシアは少しだけ眉根を寄せて自分の足元に視線を移した。
移動した視界に移るのは、白い包帯の巻かれた左の足首。それを見ながら、ルーテシアは小さく息を吐く。元々ハヤトが悪いとはいえ、足を治療して貰った事に感謝はしているし、彼女自身ハヤトという人間に少なくない興味はある。何せああいったタイプの人間と

会うこと自体初めてだったのだから。
けれど、ルーテシアにとってはそれよりもレリックを手に入れる方が大事なのだ。

「……もし死んじゃったとしても、私にはレリックが必要だから。それに、ケースはあとからセインやクアットロにお願いして探して貰えばいい」

その言葉に、アギトがさっきまでとは違った意味で血相を変えた。

「よくねーよルールー！　あの変態医師とかナンバーズ連中と関わっちゃ駄目だって！
ゼストの旦那も言ってたろ？　あいつら口ばっか上手いけど、実際のところあたし達の事なんてせいぜい実験動物くらいにしか思ってて――」

「……！」

アギトが何とかやめさせようと更に言葉を続けた時、それを遮るようにして何かが崩れるような大きな音が廃棄都市区画に響いた。
2人がそちらに視線を遣れば、地雷王の居る場所が地雷王を中心として円形に窪み、角の先端で瞬いていた雷が消えている。
地面全体が崩落したりはしなかったが、それはハヤト達が居る地下が崩れ落ちたという証拠。
つまり、アギトの説得は間に合わなかったという事になる。

「……あぁ、やっちまった。後で探すの面倒なんだぞ、ルールー」

地雷王を中心として円形に窪んだ地面を見ながら、アギトがそう呟いて項垂れる。

けれど、その声色にはそこまで絶望的なものは含まれていなかった。アギトは万が一のことを心配していただけで、彼女もハヤト達は無事に脱出し終えていると予測しているのだろう。

項垂れて溜息をこぼすアギトに「ごめんね」と短い謝罪をしてから、ルーテシアは自分の横に立つガリューへと視線を向けた。

「ガリュー……怪我、大丈夫？」

「……」

尋ねられたガリューは、左胸と右腕から血を流してはいるものの、さほどダメージがあるような様子は見せずに頷いた。ハヤトがルーテシアの相手をしている間、ギンガとスバル、エリオ、ティアナの４人の相手取っていたというのに大したダメージを受けていないあたりに、ガリューの実力が伺える。

ともあれ、地雷王によって地下を崩落させたのだから、これ以上彼に無理をさせることも無いと思ったのか、ルーテシアは小さく笑ってガリューに言葉を続けた。

「戻っていいよ。あとは、アギトが居てくれるから」

「……」

「アギトが居れば、大丈夫」

「そーだよガリュー。あたしが居れば全然へーきだって！」

ルーテシアの言葉にガリューは一度躊躇するような仕草をするが、自分の主であるルーテシアと、その主が信頼するアギトにに大丈夫と言われれば是非も無く、返事の代わりにと頭を下げた。

それと同時に、ガリューの体を紫色の光が包み、一度激しく輝いたかと思うとガリューの体は光の粒となって一点に収束、そのまま空気に溶けるようにして消えていく。

ガリューの身体が消えるのを見届け、ルーテシアは召喚したままの地雷王も送還しようとそちら側に視線を向ける。。

「地雷王も……っ！」

「戻っていいよ」と彼女が続けようとした瞬間、その地雷王の真下に桃色の魔法陣が浮かび上がり、そこから何本もの鎖が飛び出し地雷王に巻きついて地面へと縫い止めた。

「何だ！？」

「召喚……？」

自分と同じような召喚にルーテシアが眉を潜め、アギトが突然の事態に驚きの声を上げる。
２人ともハヤト達は既に脱出しているだろうとは思っていたが、まさかこんなにも短時間で移動の痕跡などを消してきた自分達の居場所を突き止められるとは思っていなかった。
このあたりは、ルーテシアたちの実戦経験の少なさからくるものなのだろう。

動揺するアギトとルーテシアが立つビルの屋上目掛けて、空色と青色、２本のウィングロードの上を走るスバルとギンガ、そして空を裂く様に飛ぶヴィータが迫る。

「っ！」

動き出そうとした２人の目に、向かい側のビルから自分達を狙うハヤトとティアナの姿が映った。

「狙い撃って乱れ撃つぜぇっ！」

「いや、どっちかにしてくださいよ」

遠すぎてルーテシアには聞こえないが、そんなアホらしいやり取りと共に、２人が構えたそれぞれのデバイスから赤と橙、２色の魔力弾が撃ちだされる。
撃ちだされた弾は正確にアギトとルーテシアへと迫り、２人は回避、または迎撃行動を取らざるを得なくなった。

「ちぃっ！」

「……っ」

風を切って迫る魔力弾を回避しながら、アギトが火炎弾を、ルーテシアが虚空より生み出したダガーを撃ちだす。しかしそれは牽制以上の意味を成さず、ティアナ達には避けられ、ヴィータ達の勢いを止めることは愚か勢いを殺すことすら叶わない。

それを見て困ったように眉を寄せながら、ルーテシアは近くの高架の手摺部分に着地、アギトはその近くへと飛んできた。

だが、彼女が着地するのとほぼ同時に、高速で移動したエリオがルーテシアの胸元にストラーダを突きつけ、アギトの周りにはリインフォースの生み出した氷で出来た無数のダガーが浮かぶ。

「なっ！？」

「……」

まるで自分達がこの場所に来ることが分かっていたかのようなエリオとリインの行動に、アギトとルーテシアは目を丸くして驚いた。

もちろん一連の攻防は全てハヤト達の思い通りであり、ルーテシアがあまり実戦慣れしていない事、自分達の居場所がこんな簡単に見つかる訳がないと思っていたことによる、僅かな油断などの様々な要素がもたらした結果とも言える。

「ここまでです、抵抗はしないで欲しいですよ」

「くっそ～！」

「……」

ルーテシアの横にやってきたリインがそう告げ、ルーテシアとアギトをしっかりとバインドする。

それを追うように、ティアナやスバル、ギンガやハヤトといった面々も彼女達の元へと集まってきた。

完全に囲まれ、逃げようがないと悟ったアギトは悔しそうにギリギリと歯を食いしばり、ルーテシアは黙したまま俯く。そんな2人を見ながら、ヴィータはグラーフアイゼンを肩に担いで一歩前に出た。

「子供を虐めてるみてーで、いい気分はしねーが。
市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他諸々で逮捕する」

そして、担いでいたグラーフアイゼンの切っ先をルーテシア達に突きつけながら、そう呟く。

「ヴィータ三尉とリインフォース曹長も似たような容姿じゃ……むしろ容姿だけで言うなら、ヴィータ三尉達の方がよっぽど年下に見え」

「ふんっ！」

「ぐはぁっ！？」

隣で彼女の呟きを聞いたハヤトがボソッと余計なことを言った瞬間、ヴィータは気合と共に思いっきりハヤトの右足の小指をかかとで踏みつける。

「それで、目的は何だ？　何でレリックを狙ってる？」

「ヴィ、ヴィータ三尉……質問の前に、俺の右足の小指踏んでるその可愛らしい足をどけてください。

痛ぇ痛ぇ！！　ちょっ、何で足を誉めたのに余計に足に体重かけるんスか！？　やめてどけて俺が悪かったです謝りますから！！　マジで小指が砕けちゃいますから！！」

「黙秘してもいいけどな、あんま良い結果にゃならねーぞ。そっちはまだ子供だ、ちゃんと事情を話せばある程度情状酌量してもらえっかもしんねー」

「無視！？　ねぇ無視なんですか！？　あぁすいませんすいません！だから全体重乗せてかかとをグリグリするのやめてぇぇ！」

思い切り小指を踏まれて痛みに悶えるハヤト。

だがヴィータはそんな彼には構わず、厳しい表情のままルーテシアへと言葉を掛け続ける。

その後ろでは、ギンガとティアナが呆れ返った表情で深い溜息を吐き、スバルとエリオ、キャロの3人は「また始まったー」と苦笑していた。ちなみに誰もハヤトを助けようとはしない。

一応止める立場であるリインはと言えば、「誰が子供ですかー！」と憤慨し、ハヤトの顔の周りを飛び回りながらぷんぷんと頭から湯気を立てていたりする。

何というか、とても犯人を捕まえた瞬間とは思えない緊張感の無さだ。

「……」

「……」

その証拠に、捕らえられている筈のルーテシアとアギトは目の前の何とも言えない光景に驚き、ポカンと口を開けていた。ギンガ達とは違い、こういうやり取りに慣れていないからだろう。

「ねぇだからヴィータ三尉！　俺が悪かったですから！　誠心誠意謝りますから！」

「うるせーぞハヤト。こっちは事情を聞いてんだ、少し黙って……ろっ！」

「ぴぎぃっ！？　そう言いながら更に体重をかけて思いっきりグリグリする三尉マジ外道！」

「だからうるせーっての。男なんだから、“こ・ど・も”の体重くれーなんてことねーだろが」

どうやら子供扱いされた事を相当根に持っているらしく、殊更『子供』という単語を強調させてハヤトの小指に乗せたかかとをグリグリと動かすヴィータ。

何気なしに言った発言だったが、冗談抜きで不用意だったとハヤトが後悔するが時既に遅し。

ついでに言うとリインフォースもハヤトの顔をぺちぺち叩いているけれど、痛みとしては小指から伝わるものに遥かに及ばないだろう。

『……ねぇ、アギト』

『な、何だ？　ルールー』

ハヤトを中心として緊張感をぶち壊しにしているやり取りを見ながら、ルーテシアは念話で隣に浮かんでいるアギトに尋ねる。

『……逃げられそう、だね』

『いや、さすがに逃げるのは……出来そうだよなぁ』

もちろん逃げようとすればヴィータ達がすぐに取り押さえにくるだろうが、目の前の光景を見る限りは逃げても気づかれ無さそうだ。

ともすれば、ハヤトが持っているレリックも奪えるかも知れない。
ルーテシアとアギトがそう思ってしまう程に、目の前で騒ぐハヤト達は無謀に見えた。

「……」

「っと、逃げようなんて思うなよ？　流石に逃がしてやる訳にはいかねーかんな」

「っ！」

もしかしたら……という期待と共に少しだけルーテシアが足を動かした瞬間、今の今までハヤトを見ていたヴィータの視線が、厳しい光と共にルーテシアの方を向く。
その眼光に、逃げようとしていたルーテシアはビクリと体を強張らせた。
どれだけ騒いでいようとも、そうそう隙を見せるほどヴィータは甘くないという事だ。

「今は騒いでるこの馬鹿もよ、逃げたりしたら容赦なく追いかけるぞ」

「……」

「ちっ……」

釘を刺すようにそう言われ、ルーテシアは再び俯いた。
それと、ほぼ同時にタイミングで、ある声が彼女の頭の中に響く。

『はぁ～い、ルーテシアお嬢様ぁ』

『……クアットロ？』

聞こえてきた声の主の名前を呼び、ルーテシアは俯いた顔を上げる。
だが、クアットロと呼ばれた女性の声が聞こえていないハヤト達は、誰一人としてそんな彼女の行動を気にしない。

『何やらピンチのようで。お邪魔でなければクアットロがお手伝い致しますぅ』

心底楽しそうな声でクアットロが提案する。
対してルーテシアは逡巡する様子を見せたが、すぐに『お願い』と短い答えを返した。

『了解で～す。ではお嬢様？　クアットロが言うとおりの言葉を、その赤い騎士に』

『うん』

クアットロの指示に従い、ルーテシアは目の前に居る赤い騎士―ヴィータを見つめる。

「ん？　何だよ、こっち見たりして」

彼女の行動の真意が分からぬヴィータが、不思議そうに首をかしげてルーテシアを見つめ返す。

じっと自分を見つめるヴィータの瞳を真正面から見返し、ルーテシアは念話で届いたクアットロの言葉を継げるため、そっと口を開くのだった。

ｓｉｄｅ：―　了

ｅｘ２８話　『下水道と不思議な再会　４』（後書き）

だからシリアスはどこに行ったのかと小一時間。
どうも、ラモンです。

今回は多少シリアス成分多目でお送りしました。
結局ハヤトのせいで、『ここにあったシリアスが逃げた』状態になりましたけど。
何でこの子自重しないんだろう。
こんなだから主人公（嘲笑）とか言われるんだ……。

そんな主人公（嘲笑）の愚痴はともかく、休日編は次回で最後になりそうです。早いところ終わらせて、ヴィヴィオとハヤトを絡ませたい。
この２人の絡みって、『とあ新』でも屈指の書きやすさなんですよ。
ちょっと最近忙しいので時間が掛かるかもですが、なるべく早く次回を書ければいいなーと思ってます。

それではまた、次の話で。

ｅｘ２９話　『下水道と不思議な再会　５』

ｓｉｄｅ：―

時間を少し遡り、場所をハヤト達が居る場所から少しだけ移す。

ハヤト達がルーテシアを拘束し、コントを繰り広げていたちょうどその頃。

ルーテシア達を拘束したハヤト達から２～３キロほど離れた、廃棄都市区画の中でも一際高いビルの屋上に２つの人影があった。

ひとつは眼鏡をかけてケープを羽織った、髪を二つ結びにしている女性の影。

もう片方は、ルーテシアが着けていたのと似たような、ボロボロのローブで身を包み、自分の身長ほどもある布に包まれた巨大な何かを持った、首の後ろで髪を一つに纏めている少女だ。

特徴的なのは、２人とも同じデザインの、青を基調としているボディスーツを着ていることだろうか。

それぞれの首の少し下、鎖骨の中心あたりには、それぞれ『？』と『？』という数字の刻印が入った半月型のプレートが光っている。

「んー……ディエチちゃ～ん。ちゃんと見えてるぅ？」

自分の目の前――何も無いようにしか見えない空を眺めながら、ビルの屋上入り口の上に腰掛けた、眼鏡をかけた方の女性が、見下

ろせる位置に居る少女の名を呼ぶ。
名を呼ばれた少女、ディエチは自分の名を呼んだ女性の方を見ることはせず、何も無い空をただじっと見つめたまま短くそれに答えを返す。

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる。……よく見える」

「あらそう。私には全然見えないのに、すごいわねぇ」

「当たり前だろ。私は、そういう風に出来てるんだから」

ディエチが見つめる視線の先。
そこには、エリオとキャロが保護した少女を乗せたヘリが飛んでいる。
ディエチとヘリの間にある距離はかなり離れており、肉眼では捉えることは――見えたとしても小さな点くらいだろう――不可能だ。
しかし、ディエチの視界は確かに空を飛ぶヘリを捉えていた。

関心したように呟くクアットロの言葉にも、ディエチは無機質な声を返すだけ。
どうやら、これから行うことに集中しているらしい。

「でも、いいのかクアットロ？　撃っちゃってさ。
ケースは平気だろうけど、“マテリアル”の方は破壊しちゃう事になる」

『破壊』という穏やかではない単語を含む内容を、さも何でもないことのように話すディエチ。
それを聞くクアットロも同じくどうでも良いことを喋るかのように、むしろ軽い笑いさえ漏らしつつ、彼女の問いに答えを返す。

「ふふ、ドクターとウーノ姉さま曰く。
あの“マテリアル”が当たりなら……本当に『聖王の器』なら、砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよぉ？」

「ふぅん……そっか」

気のない返事をしながら、ディエチが持っていた巨大な何かを覆っていた布を取り去る。すると、取り払われた布の中から、小柄な彼女には到底扱えると思えない程に巨大な、黒光りする砲身を持つ大砲が姿をあらわした。
ディエチはそのまま流れるような動作で、今までは立てていて天を向いていた銃口を横に……つまり、少女を乗せたヘリの方へと倒す。

「ディエチちゃ～ん。外したらダメよぉ？　お仕事はぁ、一発必中でお願いねぇ～」

「わかってる。照準にブレは無いし、銃身に歪みも無い。
風も無いし魔力的な乱れも無し……狙撃するにはこれ以上ない状況だよ」

「あっは、それは重畳。さぁて、それじゃさっそく――」

『クアットロ』

大砲を構えて狙いを定めるディエチを見下ろしながら、やや高い笑い声を漏らしてクアットロが砲撃を指示しようとした瞬間、彼女の言葉を遮るようにして、目の前に紫色のロングヘアーの女性が映るモニタが開いた。

「あらら、どうしました？　ウーノお姉様？」

『ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「あぁ～。そういえば、例のチビ騎士に捕まってましたねぇ」

『……知っていたの？』

ルーテシアが捕まったことを既に知りえていたクアットロに、ウーノは驚きに目を見開いて問うた。

彼女が捕まっていることは、ウーノさえつい先ほど知ったばかりの情報だ。それを既に知っていたのだから、驚くのも無理からぬことだろう。

「もっちろんですぅ。私ってば臆病者ですから、行動してる人たち全員の状況を知っていないと、怖くってとても作戦遂行なんてしてられませんもの。あははっ」

その問いに対し、クアットロは不遜な笑みを崩すことなく答える。
ケラケラと笑うクアットロに、ウーノは呆れと諦観を混ぜた何とも言えない表情で溜息を吐きながら、とりあえずといった感じで言葉を続けていく。

『今はセインが様子を窺っているけど、中々助ける隙は無さそうね』

「んー、それじゃあ私が少しフォローしますぅ？」

口元に指先とあて、考えるような声色でそう呟いたクアットロの目には、この状況を楽しんでいるような、それでいて剣呑な光が宿っていた。
けれどウーノは慣れた調子で頷き、口を開いて言葉を返す。

『そうね、手が空いているのならお願い出来るかしら』

「はぁ～い。了解ですぅ」

クアットロの返事にウーノが頷き、彼女が映るモニタが消えた。
それを横目に、クアットロは楽しくなってきたとばかりに笑みを深め、何も無い空中に向かって言葉を漏らす。それはもう、とてもとても楽しそうに。

「ヘリを撃ち落とすだけのつまらないお仕事だと思ったのに、面白

くなってきたわねぇ」

　呟いた彼女の表情は、楽しい玩具を手に入れた子供のように輝いていた。
　そのままクアットロは自分の右手を右耳に軽く当て、さっきの会話の中で名が挙がった人物――セインへと語りかける。

「あぁ、セインちゃん？　ちょ～っとお願いがあるんだけどぉ」

　向こうの声を聞きながら手早くセインにいくつかの指示を出し、耳に当てていた手を下ろす。
　そして、ディエチに向かって「お待たせ、ディエチちゃん」と笑いかけ、底冷えするような凄惨な笑みを浮かべながら、再び耳に手を当て、今度はルーテシアへと自分の声を飛ばした。
　短いやり取りの後、クアットロは楽しげに声を漏らす。

「逮捕は、いいけど――」

　その言葉が向けられる先は、この場にいる人間ではなく。
　ルーテシアの口を介して、彼女の前に居る鉄槌の騎士へと放たれた。

ｓｉｄｅ：―　了

「逮捕は、いいけど」

「あん？」

「は？」

ヴィータ三尉をジッと見つめていたチビっ子が小さく呟いた言葉に、俺と三尉の２人は揃って疑問の声を上げる。いきなり逮捕はいいけどとか、どういう心境の変化だ？

さっきまで、何とかして逃げようとしてたってのに。

そう俺が疑問に思っているうちにも、チビっ子は言葉を続ける。

「大事なヘリは、放っておいていいの？」

「……ヘリ？」

ヘリって言われて思いつくのは、シャマル先生がエリオとキャロが保護した子供が乗っていて、もう一個のレリックを運送している、

グランセニック陸曹が操縦している輸送ヘリだ。
けど、正直俺達からすればヘリを狙うなんて無理……だと思う訳よ。
乗っているのは基本的に非戦闘員なシャマル先生だが、それでもランクはニアＳの空戦魔導士。
確か防御とか補助魔法が得意だとは聞いてたけど、ガジェット程度なら何とでもなるだろう。
それにガジェットの大多数は、高町一尉やハラオウン執務官が引き受けてくれてる。仮にどっかに伏兵があったとしても、大した数は伏せておけないだろ。

「チビっ子、人の気を逸らすにしてもやり方ってモンがあってだな」
「そーだそーだ。あたしの気を逸らしたいんなら、この口だけは総合ＳＳランクなハヤトが常日頃言ってるぐれーの内容じゃねーとな」
「否定したいが全く出来ないのが恐ろしい」
「事実だもんね」
「ギンガはお黙れ。でだな、いいかチビっ子、人を騙す時の極意ってのは――」

そんな感じでチビっ子の言葉はこっちの気を逸らすための嘘だと考えた俺は、正しい嘘の吐き方１０ヶ条を教えてやろうと、溜息を吐きながらチビっ子に話しかけた。

『砲撃のチャージ確認！　物理破壊型、推定Ｓランク！』

「はぁ！？」

けど、その直後に聞こえてきたロングアーチの悲鳴じみた通信に、俺は思わず素っ頓狂な声を上げる。

そりゃそうだ。通信と同時にブレイブハートが感知した魔力反応の位置は、俺達から2キロ以上離れた場所で、しかもその魔力反応はチビっ子の言葉通り、ヘリを狙っていたんだから。

「チビっ子、お前……！」

どういう事なのかチビっ子を問い詰めようとしたが、チビっ子は俺ではなくヴィータ三尉の方をジッと見つめたまま、相変わらずの無表情でこう続ける。

「貴女は、また――」

そして。

「――守れないかもね」

最終宣告のように淡々と告げられたその言葉と同時に、オレンジ色の閃光が俺達の後ろで瞬いた。
少し遅れて空気を裂く甲高い音が聞こえ、更に遅れて辺り一体の空気を振るわせる程の爆音と、俺達の髪を揺らす爆風がこっちに届く。
俺達は――チビっ子とアギトを除いたこの場に居る全員が、爆風が届いた時点で後ろを振り返る。

「……嘘」

しかし見えたのは、ヘリがあっただろう空間にもうもうと舞い上がる煙だけだった。

◇◇◇◇◇

ｓｉｄｅ：―

「め、い、ちゅう～」

空中に漂う黒煙を見ながら、クアットロはケラケラと楽しげに笑う。
ディエチは砲身をヘリに向けたまま、煙が晴れるのを無言でジッ

と待っていた。

「あっははは！　ほぉんと、お馬鹿ちゃん達ばっかりぃ。
目の前の事に精一杯になって、ホントに守らなくちゃいけない物は疎かなんだもの」

クアットロとディエチ以外には誰も居ない廃棄ビルの屋上に、高笑いが響く。
けれど、砲身を構えたままのディエチは、自分が見ている光景に違和感を覚えた。

「……あ」

その違和感が何なのか、それについて考えを巡らせ――思い至る。

「破片が、落ちてこない……」

「あはは……ん？　何か言った？　ディエチちゃん」

ヘリが撃墜、爆散したなら破片が宙を舞って然るべきだ。
だが、彼女の視界が捕らえているのはあくまで“煙だけ”であり、そこにヘリの破片はひとつも見受けられない。
それはつまり――撃墜失敗ということ。

「クアットロ！　ヘリはまだ、落ちてない！！」

「えぇ！？」

苦い顔で叫んだディエチの声に、クアットロが目を見開いて煙の残る空中――ヘリが飛んでいた場所を凝視する。

「……あっら～」

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ……マジで？」

２人の視界の先――煙が晴れたその場所に居たのは、桃色の障壁を張ったエースオブエースこと、高町なのは。

彼女を過小評価していた訳ではない。こちらに向かってきているのも知っていたし、こちらの攻撃を防ぎきる事が可能だという事も知っていた。だが、それを考慮した上でこの作戦を練り、実行し、それでも尚こうしてこちらの予測を上回った彼女の力に、クアットロもディエチも呆気にとられてしまう。

「見つけた」

「「！」」

その２人の背後から、凛とした声が響く。

クアットロとディエチは咄嗟に振り返り、そこに立つ『金色の死神』の異名を持つ美女を見て、息を呑んだ。

「市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で……逮捕します」

金色の鎌を2人に突きつけ、彼女――フェイト＝T＝ハラオウンは静かな声でそう告げた。

そして、場面はヘリに砲撃した直後、ハヤト達の側へと移る。

side：― 了

◇◇◇◇◇

『砲撃……ヘリに、直撃……』

『そんな筈ない！　確認して！』

『ジャミングが酷い……精査できません！』

ロングアーチの声が、俺達の耳に響く。

ヴィータ副隊長も俺達も、遠い空に見える煙を見ながら全員が呆

然としてしまった。
　おいおい、まさか砲撃でヘリを撃墜とか流石に予想してなかったぞ。あんなんやったら、レリックも粉々になっちまってんじゃねーの？　馬鹿かコイツら。

「そんな……」

「ヴァイス陸曹と、シャマル先生が……」

「……っ！！　てめぇっ！！」

　呆然としている俺の隣で、同じようにヘリの方角を振り返っていたヴィータ三尉が、ティアナとエリオとの呟きを聞いた瞬間、まるで獣みたいな動きでチビっ子に掴み掛かる。
　それを見て俺も我にかえり、慌ててチビっ子の服を掴んでいる三尉の手を離す。

「三尉！」

「離せっ！！　くそっ、お前！　仲間はどこに居る！？　言え！！」

「ンな事聞いたって、普通言わないですって！！」

　けどヴィータ三尉は俺に押さえられているのも気にせず、チビっ子に向かってもの凄い剣幕で問いかけている。まぁ、シャマル先生はヴィータ三尉と家族な訳だし、その気持ちは痛いほど分かるが…

…ただ、激情に任せて聞いても有益な情報は聞き出せない。
ここは、まだ冷静な俺が聞くべきだろう。
俺はそう考えて、近くにいたギンガの名前を呼ぶ。

「ギンガ！　ちょっと変わってくれ！！」

「あ、うん！」

ヴィータ三尉を抑える役目をギンガに変わってもらい、チビっ子の近くまで歩いて行って、腰を落としてチビっ子と目線をあわせ、少しだけ厳しい口調で尋ねる。

「チビっ子。仲間が居るんだな？」

「……」

「居るんなら、教えた方がお前の為だぞ？　逮捕に協力したってんで、色々と融通利かせてやれるし。
それに何より、嘘吐くと胸が大きくならないって話だ。さぁ早く」

「……っ、……嘘は、ダメ」

「あー、うん。バレバレだよな。でも教えてくれれば融通利かせるってのはホントだ」

今一瞬喋りそうになったよなコイツ。やっぱ気にしてんのか。

やれやれ、普通チビっ子くらいの年なら、ペッタンコなのが普通なのになぁ……あ、ギンガはそうでもなかったっけ。

「つーかな、俺もやっぱちょっとはムカついてんだわ。だから正直なとこ、さっさとお前から仲間の場所を聞きだしてぶん殴りに行ってやりてーのよ」

これは、紛れも無い俺の本音だ。
馬鹿なコト言ってんのも、馬鹿なコト考えてんのも、全部自分のイラつきを誤魔化すため。
やっぱさ、同じ部隊の人らを攻撃されて平気な訳じゃないんだよねー。もちろん、流石にヴィータ三尉ほどではないけどさ。

「てな訳で教えてくれよ、チビっ子。な？」

「……ダメ」

「あのなぁ……」

けど、チビっ子は首を横に振る。
仲間思いなのは結構だけど、こういう時には困ったもんだ。
こういう奴から仲間の情報を聞き出すのって、かなり面倒なんだよなぁ。
さてどうしたモンかと頭を悩ませた時、突然後ろにいた筈のギンガが俺に向かって叫び声を上げた。

「ハヤト君、足元！！」

「は？」

その声に従い、視線を足元に視線を移す――よりも早く、俺の足元から『何か』が飛び出してきた。

飛び出してきた何かは俺の左手、つまりレリックを持っている手を刃物か何かで切り裂き、その痛みで思わずレリックのケースを手放した瞬間を見逃さず、ケースをかっさらって行く。

「いっただき！」

「んなっ……」

俺からケースを奪ったそいつは、水色ショートカットの胸が残念な女だった。

そいつは俺を見て悪戯っ子のような笑みを浮かべ、そのまま俺達から離れた地面へと、まるで水の中にでも入っていくかのように“沈んで”いく。

少し遅れて、その場所にティアナの魔力弾が飛んでいったが、結局当たらずに地面を削るだけだった。

「くそっ！」

「ハヤト君っ！」

俺からレリックを奪っていった奴が沈んだ場所に向かってティアナと三尉が走り出し、手の甲と切られた俺の方へギンガが駆け寄ってくる。
まさかまだ伏兵が居たとか、どんだけ友達多いんだよチビっ子。

「ハヤト君っ！　怪我は大丈夫!?　痛くない!?」

「痛ぇけど、今はほっとけ。それでチビっ子、今のも仲間か？」

「……ん」

切られた左手を持って、心配そうに聞いてくるギンガを一旦抑え、チビっ子に尋ねる。
すると、チビっ子はさっきまでとは打って変わって素直に頷いてみせた。多分、顔を見られたから否定する必要が無くなったんだろうか。
素直になったチビっ子の行動にそう予測をつけ、とりあえず俺はもう一度仲間の居場所を尋ねる為に口を開こうとした。

「……手」

「ぁん？」

「怪我、平気？」

「あ、あぁ……こんくらいはな」

「……そう」

けれど、それよりも先にチビっ子に手の心配をされ、尋ねるタイミングを失ってしまった。

心配してくれるあたり、やっぱこのチビっ子いい子なんだろうなぁ……保護したら、変なとこ放り込まれないようにしてやらにゃ。

……でも、妙だな。今のがチビっ子の仲間なら、なんでチビっ子を連れて行かなかった？

一瞬だったとはいえ、こっちは不意を突かれた訳だし、連れて逃げるのも距離的に全然可能だったろ。けど連れて行かなかった……見捨てたのか？　それともまだ他に伏兵でも……。

そこまで思考した時、再びあいつが地面から姿を見せる。

しかも今度はチビっ子と俺達の間、ちょうどチビっ子を抱きかかえられるような位置に。

「っ！？」

「しまった！」

俺が息を呑み、ギンガがチビっ子に向かって手を伸ばすのと、そいつがチビっ子とアギトを抱えたのが殆ど同じタイミング。そのまま2人を抱えたそいつは、さっきと同じように地面へと沈んでいった。

残されたのは手を伸ばした格好のギンガと、呆然としている俺達。
ヴィータ三尉もティアナも、この一瞬で起きた出来事についていけず、呆然とするしか出来ない。

「……やられたな」

暫くしてヴィータ三尉が、溜息と共に呟く。それには同感としか俺も言えない。
敵ながら鮮やか過ぎる手口だよ。一旦レリックだけを奪って、そっちに気が逸れた隙を見逃さず、チビっ子達を回収、そのまま一気に逃亡か。

「ロングアーチ、ヘリは無事か？」

俺達が意気消沈するなか、ヴィータ三尉がもう一度ロングアーチに通信を繋いだ。

ｓｉｄｅ：―

結果だけを先に言うならば、ヘリは無事だった。
ギリギリのタイミングだったが、なのはとレイジングハートの限定解除が完了。
飛行する速度を増したなのはが間一髪でヘリの防衛に成功した。

しかし、ヘリへの砲撃の主犯である2人――クアットロとディエチの捕獲は失敗。ルーテシア達にも逃げられ、手がかりは何一つ掴めないという結果だった。

更に言うならば、回数制限のあるなのは達隊長陣の限定解除も使う羽目になり、ある意味最悪の結果だったと言えるだろう。

「……逃げられたかぁ」

ロングアーチ、そしてリインフォースから、それぞれ対象反応のロストという報告を聞き、はやてが眉を顰めて呟く。はやてと通信を繋いでいたヴィータも、苦々しい表情でそれに続けた。

「ああ、こっちは最悪だ。
召喚士一味には逃げられ、ケースは持っていかれちまった。逃走経路もつかめねぇ。
せめてレリックだけでもと思ったんだが、逃げられちまった」

歯を食い縛り、悔しそうに報告するヴィータ。
だが、そんな彼女に対して、あっけらかんとした明るい声でハヤトが話しかける。

「ああ。レリックなら無事ッスよ、ヴィータ三尉」

「……はぁ？」

場違いな程あっけらかんとしたハヤトの報告に、ヴィータは思わず「馬鹿かコイツ？」といった表情で首を傾げた。

「そんな顔でこっち見ないでくださいよ。俺ドMじゃないで興奮しませんから」

「いいから、早く説明してくださいよハヤトさん」

「ちっ、ギャグのわからん奴め。まぁいいや、えーっと三尉、実はあのレリックにはちょっとした細工がしてあったんスよ。脚本俺、舞台演出ティアナの、舞台装置キャロで」

「舞台装置……」

苦笑いしながらそう言うハヤトと、溜息を吐くティアナ、そして舞台装置といわれてちょっと傷ついた顔をするキャロの3人に、ヴィータは訳がわからないとよりいっそう首を傾げるのだった。

◇◇◇◇◇

「……っ」

スカリエッティがアジトとしている地下施設。
その通路で、アギトとハヤトからレリックを奪った少女、そしてクアットロやディエチを始めとした数人の女性が、一点を見つめた格好で呆然としていた。

彼女達の前にはハヤトから奪ったレリックのケースが置かれ、開けられている。
しかしその中には目当てだったレリックは無く、変わりに一枚の写真が入っていたのだ。

入っていた写真は、白い歯を光らせ、何故か上半身裸でポージングを決めているハヤトの写真。
しかも、その写真は音声も記録できるタイプの物だったらしく、先ほどからずっと、とある言葉が繰り返し流れ続けている。

『レリックだと思った？　ラッキーだね！　超絶イケメンのハヤト君生写真でした！
こんな必死に奪ってくれるなんて……おにーさん感激だ！！』

まぁ、普通なら鼻で笑える程度のイタズラだ。しかし、流石にイタズラをする相手と、そのタイミングが今回は悪かった。
なにせクアットロとディエチの2人に関しては、なのはとフェイト、管理局でも最強クラスの2人を相手に必死の逃走劇を繰り広げた後だったのだから。

「……よし、コイツ殺そう」

「手伝うわよぉ、ディエチちゃん」

「トーレ姉、この写真いる？」

「誰がいるか！！　お前が持っていろセイン！」

「えー、あたしだっていらないよ。こんなキモイ写真」

「あのくそ野郎ぉぉぉぉ！！　とことん人の神経逆撫でしやがってぇぇぇぇ！！

もう許さねぇ！　次にあったらぜってー燃やして消し炭にしてどっかの市場で売ってやる！！」

ルーテシアを除く5人……ディエチ、クアットロ、セイン、紫色のショートヘアーの女性――トーレ、そしてアギトがハヤトの写真を前に歯軋りをして声を荒げる。

まぁどう考えてもムカつくので、当然といえば当然なのだが。

そんな中、ルーテシアだけはケースに刻印された『？』という数字を見て、一度落胆したような表情を浮かべた。しかしその後、何かを思い出したように小さな笑みを浮かべ、セインが持っているハヤトの写真に視線を移し、どこか楽しげに呟くのだった。

「……やっぱり、変な人」

◇◇◇◇◇

「とまぁ、そんな感じのやりとりが今頃繰り広げられているでしょう」

「……えー」

「えー……ですぅ」

得意満面のハヤトから説明を受け、ヴィータとリインは似たような反応を返した。

その隣では、スバル達も似たような反応を返している。ギンガは慣れているのか諦めているのか、特に反応を返すことはない。

「私は別に何も入れなくていいって言ったんですけど、ハヤトさんがどうしてもって」

「あぅ……あの写真、ちょっと恥ずかしかったです」

巻き込まれたティアナとキャロは、嫌々でしたとばかりに深い溜息を吐く。

けれど、ハヤトはそんな2人のリアクションなど気にせず、得意満面なままで鼻息荒くふんぞり返る。

「もっと誉めてくれていいですよ！　むしろ2階級特進させてくれても！」

「いや、それだとハヤト君死んでるから」

「むしろ懲罰ものだと思うんですけどね」

「おいおい、いくら俺の活躍が妬ましいからって、嫉妬は見苦しいぜセニョール」

「「……はぁ」」

自信満々に解説するハヤトと、付き合ってられないと溜息を吐くギンガとティアナ。

先ほどまでの沈鬱な空気を吹き飛ばすやり取りを前に、ヴィータは暫く頬を引き攣らせた後で、色々と諦めた顔でにっこりと微笑んだ。

「レリックが守れたから、いいやもう」

「ヴィータちゃん！　諦めないでくださいです！　ギンガとティアナが諦めちゃったから、もうツッコミ役はヴィータちゃんしかいないですよ！」

「……そこで頼りにされても困るっつーの」

疲れた声で呟かれたヴィータの言葉は、誰の耳にも届いてなかっ

たという。

side：了

ｅｘ２９話　『下水道と不思議な再会　５』（後書き）

ここは俺に任せて先に行け！
どうも、ラモンです。

こんな感じで『六課の休日』編は終了です。
今回のハヤトのイタズラは、ハヤト君の特製ブロマイド（音声付）でした。
まさに誰得ですね！

でも、今回は個人的にイマイチなんですよね。
もう違う展開とか、違う感じの文章が思い浮かんでこなくて、今までのから少しコピペしてきちゃいましたし……同じ場面３度目とかもう無理（泣）

さて、次回はヴィヴィオ登場のあたりを書こうと思います。
そしてその次からは、暫くオリジナル話を書きたいです。切実に。
まぁどうやってもハヤギンの夫婦漫才になるんでしょうけどね！ｗ

それではまた、次の話で。

ｅｘ３０話　『子供の扱いなら任せろー（バリバリ）』

「……眠い」

「また夜更かししたんでしょ？　自業自得なんだから、そんなの知りません」

「だって、逆鱗でねーんだもん」

「知りません」

眠気を我慢しながらポチポチとキーボードを叩く。
どうでもいい時にはポロッポロ出るくせに、何で欲しい時に限って全然出ねーんだよ。
お陰でほぼ完徹で頑張っちまったじゃないか。おのれ物欲センサー、許すまじ。

「その無駄な情熱を、少しでもお仕事に向ける気にはならないの？」

「仕事の先にハラオウン執務官からのご褒美があるなら、俺の人生を賭すことも厭わん」

「……はぁ。期待した私が馬鹿だったよ」

「何を今更のことを言ってんだお前は」

「いや、そこは否定してよハヤト君」

絶対にしてやらん。これだけ長い付き合いのくせに、俺の性格を掴めてない時点で否定のしようもないってモンだろ。俺を頑張らせたかったら、何か素晴らしいご褒美を用意するんだな！
どうだ！　くやしかったら何かご褒美を用意してみろギンガ！！

「えーと……じゃ、じゃあ、頑張ったら私がほっぺにチューしてあげるよ？」

「ハハハ、俺もう帰っていい？」

「なんでよ！？」

「お前にそんなんされたら、生きる気力が一瞬で失われる」

「しっ、失礼なっ！！　恥ずかしいのを堪えて頑張ったのに！！」

「知らんがな。色仕掛けなら何でも通用すると思ったら大間違いだぞ」

先日の事件の資料を纏めながら、反対側のデスクにいるギンガをからかう。
チビっ子の事とか色々気にはなるが、まぁ資料を見る限りじゃ現状で分かることは殆ど無いんだし、あんま気にしてても仕方ないか。
とりあえず、アギトは今度会った時にからかってやりたいな。あいつの反応はかなり良かったし。
あんだけいい反応する奴に出会ったのは、ギンガ以来始めてかも

しれん。

「あぁ、そうだギンガ。あん時保護した子供って、今はどうしてるんだ？」

「話を逸らすのばっかり上手いんだから、もう……。

あの子なら、確か聖王教会付属の病院に搬送された筈だよ。確か、午前中になのはさんとシグナム副隊長が様子を見に行ってたと思うけど」

「そうなん？　そうか、だから今日の朝とか高町一尉を見なかったのか」

「ていうか昨日フェイトさんが言ってたと思うけど？」

「はっはっは！　過去は振り返らないのが俺さ！」

「少しは振り返ろうよ」

過去を振り返らない方がいい男っぽいから絶対に振り返りません。

……っと、あぶね。この書類はハラオウン執務官に目ぇ通して貰ってからじゃないと駄目じゃん。

でもあれだよな、シグナム二尉とか子供苦手そうなのに、一緒に行ってよかったのか？　何かこう、泣いてる子供を見たらオロオロしちゃうイメージあるんだが。

しかも慰め方がわからなくて、「泣くな！」とか言っちゃって余計に泣かせるようなイメージも。

やだ、想像したら凄く萌える。

『ハヤト、ギンガ』

「あれ、フェイトさん？」

「どうしたんスか？　何か忘れ物でも？」

想像上のシグナム二尉に萌えていると、ハラオウン執務官からの通信が入った。

もう聖王教会の方に出発してるとばかり思ってたんだが、どうしたんだ？

『えぇと、２人とも子供の相手って得意かな？』

「へぇあ？」

「え？」

子供の相手が得意かを聞いてくるってことは、つまり子供が好きかどうかを尋ねられているわけで、何故そんな事を聞いてくるのかと考えれば、それはハラオウン執務官が子供を欲しがっていると考えられるよな、そして俺にそれを聞いてきたということは執務官は俺との子供が欲しいってことで、つまりこれは世間一般で言うところのプロポーズではなかろうか？　いやむしろそうだろう。しかしそれにしてはちょっと言い方が遠まわしだったような……ああそうか、照れてるんだな。んもう、ハラオウン執務官ってば恥ずかしが

り屋さんなんだから。
　ん？　待てよ、こうやってプロポーズされて、俺に否がありえない以上俺達は夫婦になる訳だよな。そうなるとハラオウン執務官っていう呼び方は、余りにも他人行儀過ぎる。やはりここはひとつ俺も勇気を出してフェイトと呼ぶことを始めないと。むしろ呼ぶべきだよな。フェイト、フェイト……よし、イメトレはこのくらいでいいだろう。（ここまで０．３秒）

『？　ハヤト、どうしたの？』

「わかりまし……いや、わかったよフェイト。式場は俺が調べておくから。
　サッカーチームが作れるくらい、たくさん子供をつくろうな」

『はい！？　な、何でそんな話になってるの！？　ていうか子供！？』

「……放っておいてくださいフェイトさん。後で私がキツく言っておきますから。
　それで、何でいきなりそんな事を？」

『あ、うん。えーとね……』

　そうだなぁ、仲人はゲンヤさんに頼むとして、式場は聖王教会でいいか？
　八神部隊長は聖王教会のお偉いさんと面識があるみたいだし、上手くすれば割引とかしてもらえるかもしんねーな。いやしかし、せっかくの晴れ舞台なんだからちゃんとしたほうがいいか？

まぁそれはそれとして、やっぱまずはフェイトのご両親に挨拶に行くのが先決だな。

うーん、やっぱスーツの方がいいのかなぁ？　それとも、ここは最近の若者っぽくラフな格好の方がいいのか？　とりあえず後でゲンヤさんに聞いてみよう。

「わかりました。じゃあ、すぐになのはさんの部屋に向かいます」

『お願い。急ぎの書類とかは無かったよね？』

「はい。それはもう終わらせてますから、そちらに行く前にフェイトさんのデスクに送っておきます」

『ありがとう、ギンガ』

「いえいえ」

あと結婚するとなれば、やっぱマイホームは欲しいよな。

でも今はちょっと貯金無いし、暫くはアパートかどっかを借りる形になるか。んー、でもやっぱ早めにマイホーム欲しいところだよなぁ。サッカーチームを作れるくらいってんだから、最低でも１１人。

１年で１人としても１１年計画だから、家とかも将来を見越して色々と貯蓄しねーとな。

うーん、でもそうなると今の給料じゃ心許ないな。八神部隊長に相談して、指揮官資格とかいろんな資格を取っておくべきか。頑張ってゲンヤさんと同じ……いやせめて尉官クラスにはならないと、流石に一家全員を食べさせていくには給料が足らん。

「ほらほらハヤト君、行くよー？」

「ちょっと待て、今フェイトのご両親への挨拶を考えてるんだ！」

「いつまでも夢見てないで、そっちの書類は……もう終わってるね。それじゃ行くよー」

「やっぱ第一印象って大事だから、菓子折りくらいは持っていくべきだよなぁ？」

「そうだねー」

「少なくとも1発か2発は殴られる覚悟しねーと。娘さんを嫁に貰うわけだし」

「そうだねー」

気の無い返事をするギンガに腹は立つが、今回ばかりは許してやろう。

だってこれから俺はリア充だもんね！　脳筋のギンガは行かず後家になってお局様とか呼ばれて、若い子にウザがられるといいよ！

はっはー、マジざまぁ！！

「うるさいなぁ……ていっ！」

「きゅっぷい！？」

現在、俺とギンガは高町一尉の部屋にやってきている。
俺の目の前には、高町一尉とハラオウン執務官、八神部隊長と、ティアナ達フォワードのメンバー。
そして、高町一尉に隠れるようにして、金髪ロングで左右違いの瞳を持ったチビっ子が居た。
……まぁそれはそれとして、ギンガ。

「何？」

「俺、ここ１０分くらいの記憶が無いんだが、なんかあったのか？
さっきから首のあたりがズキズキすっげー痛いし、何か高町一尉たちも可哀想な奴を見る目でこっちを見てるんですけど。すっげー心が痛い」

「やだなぁ、忘れちゃったの？　フェイトさんからの通信が来た時に、びっくりして椅子ごとひっくり返っちゃったんだよ。おっちょこちょいなんだから、ハヤト君ってば」

「うわ、マジかよ。はずかしー……ハラオウン執務官、もし見てた

んなら忘れてください」

「あはは……大丈夫だよ、ちゃんと忘れるから。可及的速やかに」

「すいません。何か変なところ見せちゃって」

なんでか執務官の頬が引き攣ってるけど、そんなに酷いコケ方したのか。

記憶が飛ぶくらいだし、そりゃそうだよなぁ……いてて。

「それはそれとして、フェイトさん。どうしてスバル達がここに？」

「あ、うん。最初はスバル達にこの子の面倒を見てもらおうと思ったんだけど……」

言い辛そうに苦笑八神部隊長を見て、俺とギンガはお互いの顔を見て「ああ」と得心がいったように頷いた。考えみりゃ、スバル達だけで大丈夫なら俺達の事は呼ばないよな。

「全然駄目だった、と」

「「「「うぅ……」」」」

俺の言葉に、スバル達が揃って小さくなって恥ずかしそうに俯いた。

仕方ないっちゃ仕方ないんだけどな。スバルもエリキャロもティアナも、こんだけ小さい子の相手をしたことは無いだろうし。
だけど、スバルとティアナあたりはもうちょっと頑張れよ。仮にも女の子なんだしさぁ。

「仮にもじゃないよ！　女の子だよ！」

「そうですよ！　失礼です！」

「お黙れ。そういう主張は、せめて子供の世話くらいちゃんとしてからにしなさい」

「「……すみませんでした」」

「わかればよろしい」

反論してきたスバルとティアナを静かにさせ、とりあえず高町一尉の後ろに隠れてる子供の側に屈む。
第一印象ってのは、誰が相手でも大事だからな。特に子供ってのは、人のことを第一印象で判断するって民明書房から出てた本に書いてあったし。

「よう、嬢ちゃん。名前は？」

「……ぁう」

「ンな怖がんなって。ほれ、名前は？」

「……」

高町一尉の後ろに隠れ、怯えた顔を半分だけだしてこっちを見ているチビ助に苦笑しつつ、俺はもう一度名前を尋ねる。

子供……しかも初対面のチビっ子相手に大事なのは、1にも2にも根気だ。

向こうは知らない大人に話しかけられてるから、どうしたって怯えちまう。そこでムキになって聞き出そうとしても逆効果。こーゆー時は、言葉は少なくして向こうからアクションを起こすのを待ってやるのが大事なんだよね。

スバルと初めて会った時も、名前を聞き出すまでに1時間とか掛かったよなぁ。

ガキだった俺も良く待ったもんだ。普通なら途中で投げ出してるぞ。

「……ヴィヴィオ、です」

「ん。良く出来ました」

恐る恐るという感じではあったけど、高町一尉の後ろから出てきて短く自分の名前を呟くチビ助……じゃなくてヴィヴィオ。うん、スバルよりも素直でいい子だ。

俺はヴィヴィオに笑いかけながら、いい子いい子と頭を撫でてやる。

子供がちゃんとできた時は、出し惜しみせずに誉めてあげるのが大事。ここテストに出るよ。

「えへへ……」

「ちなみに俺はハヤトってんだ。よろしくな、ヴィヴィオ」

「うんっ！」

「さて、自己紹介も終わったところで、高町一尉……あーいや、なのはさんが帰ってくるまで、今日は俺と遊ぼうな？　色々ゲームとかもあるぞ」

「げーむ？」

「そう、ゲーム。ギャルゲからパズルゲーまで何でもござれだ」

「わぁ……！　うん、やるーっ！」

ＢＳＰを目の前に出してやると、目を輝かせてぴょんぴょん跳ねて喜ぶヴィヴィオ。出会ってからここまで僅か3分、子供を篭絡するなぞ俺様にとっては息をするよりも簡単なことなのだよ！

この俺が本気で口説いて攻略できない子供なんぞ、この世にはいねぇ！！

「おまわりさんこっちです」

「通報しました」

「ロリコンは病気やで」

「何ですかティアナにスバルに八神部隊長まで」

子供の相手が得意という事をアピールしたら、何か警察呼ばれた。
いや管理局は警察も兼ねてる組織だから、警察呼ばれたって言い方はなんかおかしいけど。

「つーか、そろそろ行かなくていいんスか、部隊長？」

「んぁ？　……やばっ！　予定より１０分も遅れとるやん！？
なのはちゃん、フェイトちゃん、急がな！　ハヤト君、ギンガ、その子の面倒お願いやー！」

「あっ、ちょっ！　待ってよはやてちゃん！
ティアナ、今日の分の書類は後で私のデスクに送っておいてね！」

「あわわ……えぇと、それじゃあよろしくね、ハヤト、ギンガ。
エリオ達は、いつも通りの仕事に戻ってくれていいから。じゃあまた後で！
なのは、はやて、待ってー！」

時計を見た後、慌てた顔で早口に俺達にそれぞれ声をかけ、八神部隊長たちはパタパタと部屋を出て走っていってしまった。どうやらヴィヴィオの事に手一杯で、時間を気にするのを忘れてたらしい。
うむ。慌てて走っていく部隊長たち超可愛い、超萌える。
特にハラオウン執務官の慌てた表情はいいね。いつものキリッと

した顔とのギャップが凄い。

「そうは思わんかね、ヴィヴィオくん」

「ふえ？」

「子供……しかも女の子に何の共感を求めてるの、ハヤト君」

萌えの共有をしようとヴィヴィオに話しかけたら、ギンガに思い切り溜息を吐かれた。

まったく、これだから萌えを理解できない輩は困る。丁度いい、ヴィヴィオに萌えの何たるかを教えてやるから、お前もついでに聞いていけ。何、損はさせんよ。

ティアナ達も聞いてくか？

「いえ、あたし達は仕事があるので」

「また今度ゆっくり聞くね、ハヤ兄！」

「仕事しなきゃいけませんし！」

「失礼します～」

爽やか笑顔で振り返ると、ティアナ達はダラダラ冷や汗を流しながら、そそくさと高町一尉の部屋から出て行ってしまう。なんだつまらん、せっかく久しぶりに小一時間語りつくしてやろうと思った

のに。
　ティアナとスバルは去年語ったし、エリオもこないだ語ってやったけど、キャロはまだだったからいい機会だと思ったんだけどなぁ。

「だから逃げちゃったんでしょ。ハヤト君の小一時間って、下手したら1日になるじゃない」

「萌えってのは奥が深いんだよ……」

「早く仕事に戻って欲しかったんなら、そう言えばいいのに」

「別にそんなんじゃねーし」

「素直じゃないんだから、もう」

　人の考えを見透かしたように苦笑して、ギンガは俺とヴィヴィオの隣に近づいてくる。
　違うんだからねっ！　別にティアナ達に仕事させようなんて思ってないんだからっ！
　ただ、本当にあいつらに萌えの素晴らしさを語ろうと思っただけなんだからねっ！

「はいはい。ヴィヴィオちゃん、こんにちは」

「ひゃっ……」

「あらら」

近くにやってきたギンガが屈んで挨拶をすると、ヴィヴィオは驚いたように小さな悲鳴をあげ、俺の後ろに隠れた。どうやらこの子は結構人見知りするらしい。

まぁ、普通に考えりゃいきなり知らない人ばかりのところに要るんだし、怖がって当然だよなぁ。

これぱっかりは俺が言ってもどうしようも無いから、ギンガに自力で頑張ってもらおう。

つーか、俺が何もしなくてもギンガなら大丈夫だろうけどさ。

「あぅ……」

「あ、そっか。ごめんねヴィヴィオちゃん、まだ自己紹介してなかったよね？

私の名前はギンガって言うの。今日は私も一緒に遊びたいんだけど……いいかな？」

「……遊んで、くれるの？」

「うん、そうだよ。一緒にいっぱい遊ぼうね」

ヴィヴィオの頭を軽く撫でながらギンガが笑うと、俺の後ろに隠れていたヴィヴィオは嬉しそうに笑ってギンガに抱きついた。

うん、流石昔からスバルで慣れてるだけあって子供の扱いは超一級だな。

これで凶暴でさえなければ、そこそこにいい嫁になるだろうに。

「ちょっとハヤト君。失礼なこと考えないで」

「おいおい、憶測でモノを言うなよギンガ。今俺は、宇宙の真理について考えていたんだ」

「ハヤト君の考えてることくらい、顔を見ればわかりますー」

「……ちっ。ヴィヴィオ、こーゆー大人にはなるなよ、皆に嫌われるから」

「うゅ？」

「何でもないよー、ヴィヴィオちゃん。ホラ、お姉ちゃんとあっちでゲームしようねー」

「げーむ……うん！　げーむするー！」

人の抗議を華麗にスルーした挙句に俺のＢＳＰを持って、ギンガはヴィヴィオと一緒に高町一尉の部屋にあるソファに腰掛けた。くそっ、俺を無視するなんざいい度胸じゃねぇか！

いいだろうギンガ！　そろそろお前とは決着つけねーとと思ってたんだ！

「あれ？　えっと、コレってどうやってソフト入れるんだっけ？」

「おい馬鹿やめろ！　ソフト入れるとこを力ずくで開けようとすんな！」

「えーと……たしか、ここをこうやって……」

「お願いですやめてください！　ミリミリ言ってるからやめて！！
それって１０台限定の超プレミアＢＳＰなんだからーっ！！」

この後ＢＳＰを何とか救出した俺は、それ以上ギンガとやりあう気も起きず、そのままギンガとヴィヴィオの３人でのんびりゲームをしたのだった。
よかった、ＢＳＰが壊れなくてホント良かった……ギンガには二度とＢＳＰは貸さん。
何でゲーム限定で機械オンチなんだよ。嫌がらせか！

◇◇◇◇◇

「やーの！　何でヴィヴィオの通り道にバナナ置くの！？」

「勝負だからだよ。つかお前だって、さっきから俺にピンポイントで緑甲羅当ててんだろが！」

「だってしょーぶだもん！」

「なら俺のバナナ戦術にも文句言うんじゃねぇ！」

そんなこんなで数時間後。
俺とヴィヴィオは某ヒゲ親父が主役のレースゲームで絶賛対戦中。
使っている機種は、俺が部屋から持ってきたニソテントーVｉｉだ。
戦績は今のところ俺が勝ち越してる。もちろん本気を出せば全戦全勝できるけど、流石にそれをやると機嫌を損ねるだろうから、自重して適当にヴィヴィオにも勝たせてやってるぞ。
その程度の気遣いは出来るのだよ諸君。

「ほら、ハヤト君もヴィヴィオちゃんもテレビに近すぎ。もっと離れなさ～い」

「あー！　ギンガおねーちゃん離してー！　負けちゃうー！！」

「だ～め。目が悪くなったら困るでしょ？」

「うー……あ！　ハヤトずるい！　レースはちゅーしなの、ちゅーしー！！」

「勝負に卑怯もクソもねぇんだよ。運が無かった自分を恨むんだな！！」

「ハヤト君も離れなさい」

「あ〝ーっ！？　ばっかお前、今コントローラー奪うんじゃ……ぎゃー！　コースアウトォォ！？」

叫ぶ俺の目の前で、無残にも虹色のコースから外れて落ちていく亀の親玉。

そして、落ちていった俺を尻目に悠々とその場所を通過していく、ヴィヴィオが操作しているキノコの国のお姫様。ゴールが目の前だったこともあり、お姫様はそのままゴール。
せっかく勝っていたというのに、ギンガのせいで負けてしまった。

「くぉらヴィヴィオ！　こっちがコントローラー持ってない時に抜かすとか卑怯だぞ！」

「しょーぶにひきょーも何もないもん！　ハヤトが言ったんでしょ！？」

「もう、２人とも喧嘩しないの！」

「ギンガは黙ってろ！」

「ギンガおねーちゃんはだまってて！！」

止めようとしてくるギンガを２人で一喝し、睨みあう俺とヴィヴィオ。
卑怯な手を使って良いのは俺だけだ！　ヴィヴィオのクセに真似しようなんて１万とんで１秒早い！
ここは年長者として修正してやる！

「それじゃあ２人とも、さっき食堂から貰ってきたおやつはいらないのね？」

「ヴィヴィオ。俺が大人気なかったな、許してくれ」

「んーん、ヴィヴィオが悪かったの。ごめんねハヤト」

「わかればよろしい。はい、それじゃあ皆でおやつにしよっか」

「はーい！」

「のりしおは俺のモンな」

こうして俺達は高町一尉たちが帰ってくるまで、仲良く遊んだのであった。

ポテチはのりしおこそが至高。異論は一切認めん。

ｅｘ３０話　『子供の扱いなら任せろー（バリバリ）』（後書き）

殺人犯と同じ部屋になんて居られるか！　俺は自分の部屋に戻るぜ！
どうも、ラモンです。

ついにヴィヴィオ初登場。
あれですね、自分で書いてて思うんですが、私がヴィヴィオを書くと必要以上に幼くなってしまう気がします。
いや、私の従兄弟の子供で、よく遊んであげてる６歳の女の子がモデルなんですが、もうちょっと大人っぽい方がいいのかな？　と最近疑問に思ったり思わなかったり……。

そしてヴィヴィオとハヤギンを絡ませたら、どう見ても一家団欒にしか見えなくて困る件。なにこの新婚夫婦＋娘的な状況。
ハヤトはいい加減もげるべき。可及的速やかに。

さて、次回はオリジナル話で、ハヤギンの夫婦漫才をこれでもかとばかりにやれたらいいなぁ……と思っています。
私の体が持てばですけどね！（砂糖的な意味で）

それではまた、次の話で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0948j/

魔法少女リリカルなのはStrikerS　～とある新人の日常～

2011年10月7日03時08分発行